Masked Rider in Nanoha

MRZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍａｓｋｅｄ　Ｒｉｄｅｒ　ｉｎ　Ｎａｎｏｈａ

【Ｎコード】
Ｎ８０８１Ｏ

【作者名】
ＭＲＺ

【あらすじ】
五代雄介、津上翔一、城戸真司の三人の仮面ライダー。
彼らが突然なのは世界（Ａ'ｓの時代）へ飛ばされる。
そして、そこで五代と翔一は闇の書事件に、真司は後のレリック事件に関係していく。
時が過ぎ、舞台をミッドチルダに移すのと同時に、あの太陽の子が参戦する。全ては、闇を倒すそのために……
Ａｒｃａｄｉａに投稿しているものです。

一話（前書き）

これは、タイトルにもあるようになのは（A's）の世界にクウガ・アギト・龍騎が次元漂流者として現れるものです。

仮面ライダーの怪人は今のところ出てきません。ライダーが増える事もありえます（平成か昭和か分かりませんが）

基本的にネタですので話の作りは甘いです。そして、作者が映像でやって欲しかった事を好きに書いてるだけです。それでも良ければどうぞ。

後、ライダー無双ではないと思います。でも、魔法有利でもないです。

一話

「あれ？　ここ、どこ？」

確かに先程まで、自分は果てしない青空を見上げながら、砂浜を歩いていたはず。

（そういえば、突然目の前がパッと光ったな）

そう思い出し、青年は視線を動かす。どうも公園らしい。平和そのものといった雰囲気の中を、カップルが、家族連れが、老夫婦が歩いている。

それを眺め、笑顔を浮かべる青年。その鼻に、ふと海風が香る。

それに誘われるように足を動かしてみると、視界に広い海が広がった。

「……いい所だな、ここ」

穏やかで静かな光景。そして見上げれば気持ちのいい青空がある。

視線を戻せば、どこまでも続く大海原。それを見ていると、さっきまでの悩みも途端にちっぽけなものに見えて……。

「いや、見えないって」

つい自分の発想に突っ込んでしまう青年。そして何を思ったのか、とりあえず自分の頬を抓ってみた。

「っ！」

鋭い痛みが走った。どうやら夢ではないらしい。それを確認し、公園の外へ出てみる事にする。現在地を確認しようと思ったのだ。

雰囲気的には、日本のようだがまだ分からないと思い、青年は入口へ向かう。そこには、公園の名前だろう名前が刻まれていた。

それを見て、青年は安堵すると同時に途方に暮れる。

「海鳴……海浜公園……」

その名に聞き覚えもなく、先程まで自分のいた国から日本は、ありえない程の距離がある。

だから、彼はどうしてこうなったかを考えて、一つの可能性に行き着き、お腹の辺りに手を当てて困った顔で呟いた。

「……どうしてこうなったんだろ……？　……まさか、アマダムのせい？」

青年の名は五代雄介。戦士を意味する力を手にした優しき男。またの名を、仮面ライダークウガ。

平和な一軒家。そこから上機嫌な雰囲気を漂わせ、一人の青年が庭に顔を出す。彼はそのまま庭の一角に作った菜園に近付くと、雑草を抜き始めた。

その菜園は、今から半年前、彼がこの家に居候するようになってから作られたものだった。

彼のたっての希望により、実現されてからというもの、この家の家計を助けてはいるのだが、問題もある。

それは、彼は野菜しか育てないという事。そして、何故かそれが通常よりも大きくなるという事だった。

青年はどうやら菜園の手入れをしに来たようだった。そこで育てられているのは、青年が丹精込めて世話をする野菜達。味は保障される無農薬の一品だが……。

「よしっ」

「よし、じゃね～よ。いつになったらイチゴやメロン育ててくれんだ」

全ての雑草を抜き終え、満足そうに頷く青年に、Tシャツと半ズボンの少女が蹴りを入れつつ、文句を述べる。

それに青年は怒るでもなく、申し訳なさそうに表情を歪め、手を合わせた。

「ゴメン、ヴィータちゃん。今は野菜達で場所が埋まってるからさ。それに、今からじゃ今年は無理だから」

「それぐらいにしておけ、ヴィータ。何だかんだ言って、お前も野菜が美味しくなったと喜んでいたではないか」

「へっ、それはそれ。これはこれだ」

シグナムの指摘に、どこか照れながらヴィータは青年から顔を背けた。その仕草が可愛らしく、子供のように見える。

それを思い、シグナムと青年は笑顔を浮かべる。

「じゃ、約束するよ。来年からは、ちゃんと甘いものも育てるから」

「約束だかんな。嘘吐くなよ、翔一っ！」

ヴィータの言葉に笑みを浮かべて青年は頷く。それにヴィータも笑顔を返す。

彼の名は、津上翔一。人の新たな可能性に目覚めた男。またの名を、仮面ライダーアギト。

ジェイル・スカリエッティは戸惑っていた。天才科学者として名高い彼が戸惑うなど、珍しいのだが、今回ばかりはおそらく誰でもそうなるだろう。

何故なら、急に、何の前触れもなく人間が現れたのだ。それもただの人ではない。全身を鎧のようなもので覆った人物だったのだ。

人物と判断出来るのは、先程から色々喚いているからであり、そして動きが本当に人間くさい事もある。

「……まずは落ち着きたまえ。君は一体何者だい？」

「え？　おわっ！　誰だ、あんた!?」

どうやら、相手はジェイルに気付いてなかったらしい。声を掛けた途端、軽く飛び跳ね、ジェイルを警戒するように見つめてきた（ような気がした）

そんな相手の言葉に、それを聞きたいのはこちらの方だと思い、ジェイルは頭を押さえる。だが、ふとある事を疑問に思い尋ねた。

「君は……管理局員かい？」

「は？　管理局？　いや、ただの仮面ライダーだけど……」

「カメンライダー？」

「あ、そうか知らないよな。えっと……」

聞いた事のない名称にジェイルが疑問符を浮かべると、彼は何かに納得したようだ。

そう言うなり、鎧の人物はベルトのようなものに手を伸ばし、それからバックルらしきものを外した。

その途端、鎧が消えて一人の青年が現れた。どこか人懐っこい笑みを浮かべ、青年は告げた。

「俺は城戸真司。ＯＲＥジャーナルのジャーナリストやってます」

そういって名刺を慌てて取り出す真司。それを見つめ、ジェイルは久方ぶりの興奮と感動に打ち震えていた。

見た事も聞いた事もないシステム。そして、管理局を知らないという事は管理外の人間。つまり、それは何をしても管理局が動く事はないという事だった。

どこか不気味な雰囲気のジェイルに、真司は不安そうな視線を送る。

（だ、大丈夫か、この人。それに……何かここ、やな感じがするし……）

彼の名は城戸真司。戦いを止めるために戦いに身を投じた男。またの名は、仮面ライダー龍騎。

運命に導かれ、異世界に現れた三人の異なる仮面ライダー。

彼らが出会う事は何を意味するのか。

そして、何故彼らが呼ばれたのか。それは誰にも分からない……。

ーーー

思った以上に広がらなかった……。

時系列は一応同じ。アギトだけ若干先に来てたって事で。

……後出せるのは、平成は響鬼さんとキバがいます。

５５５や剣、カブトに電王は俺はほとんど知らないので無理。ディケイドはもう大変なので不可能。

二話

五代の目の前で展開されている光景。それは、自分が世話になっている少女の友達が空を飛び、赤い服の少女に襲われているというものだった。

しかも、その少女はその赤い服の少女によってビルへ向かって吹き飛ばされたのだ。何か胸騒ぎを感じ、散歩に出た先で起きた出来事。

周囲の色がまるで抜け落ちたようなものに変わり、驚いていたのも束の間、そんな光景を見たのだ。

そして、そんな時、五代が選ぶ事は一つ。

「なのはちゃんっ！」

走る。だが、追いつけるはずもない。届かない。〝今の自分〟では。だからこそ、五代は願う。助けたい。守りたいと。

もう二度と。そう思った力を、彼は再び使う事を決意する。それは、倒すための力ではない。それは、守るための力。

五代の想いに応えるように、彼の腹部にベルト状の装飾品が出現する。

「変身っ！」

五代の言葉が、アークルと呼ばれるベルトに息吹を吹き込む。中央にある宝石。アマダムと呼ばれる神秘の輝石が、五代の姿を変えていく。

赤い身体。赤い瞳。古代の戦士にして、現代に甦った英雄。その名は――――。

「っ！！」

――――クウガ。笑顔を守るために戦い抜いた、青空の如き心の勇者。

そして、その身体が飛び上がりながら赤から青へ変わり、ビルに激突しようとしていたなのはを受け止める。

その温もりになのはは目を開け、驚いた。だが、その瞬間聞こえた声にそれが別のものに変わる。

「大丈夫？　なのはちゃん」

「ふぇ？！　……その声、もしかして五代さん！？」

こうして、戦士と魔法は出会う。後に『闇の書事件』と呼ばれる戦い。その幕開けを兼ねて……。

「だ、第四号……」

翔一は、驚愕を隠す事もせずに目の前を見つめていた。はやてが寝付いた後、蒐集行為へ出かけたヴィータ達が心配になり、シャマルに頼んで連れていってもらったのだ。

そして、そこで見たものは、未確認生命体第四号がヴィータと戦っている光景だった。いや、正確には戦ってはいない。

まるでヴィータを止めるようにしか動いていない。その証拠に一度も第四号、クウガはその拳を振るっていないのだ。

「でも、このままじゃ……」

「シグナム、どうするの？」

「……介入するか。私があいつを「いえ、俺が行きます」……何？」

シャマルとシグナムが揃って翔一を見る。翔一は、何かを決意した眼差しでクウガを見つめる。

その眼差しの強さに、二人は何も言えなくなる。普段は大人しく優しい翔一が、そんな眼差しをするなど想像もつかなかったからだ。

しかも、その視線は紛れもなく戦士のもの。だからこそ、何も言わない。

そして、それを了承と取った翔一の腹部にベルトのようなものが出現する。オルタリングと呼ばれるそれは、彼がもう一つの姿になるためのもの。

それと同時に、翔一が左手を腰に、右手を前へとゆっくり動かしていく。

（な、何だあれは。いや、それよりもこの安心感は何故だ……？）

（デバイスではないわ。……まさか、翔一さんが私達を平然と受け入れたのも……）

「変身っ！」

その言葉と共に両手でオルタリングの側面を押す。それをキッカケに、翔一の身体を光が包む。

それは、人類に与えられし光の力。闇を払う誰もが持つ可能性の姿。金色の身体と真紅の瞳。その名は――。

「はっ！」

――アギト。全ての人間のために、全てのアギトのために戦い抜いた勇者。

アギトはヴィータとクウガの前へ降り立つと、ヴィータに対して視線を向けた。

「ヴィータちゃん。ここは俺に任せて逃げて」

「そ、その声……翔一なのかよ?!」

「え……? クウガに……似てる……?」

当然の乱入者に戸惑いを見せる二人。それに構わず、アギトはクウガへ視線を戻す。それに気付き、クウガもアギトを見つめる。

本来ならば出会う事のなかった二人の仮面ライダー。互いに何か思う事はあれど、守る者のためにその力を使うのは同じ。

だが今は、まだその力が重なり合う事はない。互いに互いを見つめ、呟く。

「「……何で戦うんだ……この人は……」」

ジェイルは久方振りの満足感を味わっていた。ライダーシステムと名付けた真司の変身能力。それの解析が一向に進まないからだ。

普通ならばそれに満足などしない。むしろ不満にさえ思うのだろう。だが、ジェイルは違う。自分の知識や技術が通用しない事に喜びを見出していたのだ。

「素晴らしい……。鏡の中へ……ミラーワールドだったかね?」

「そうそう。でも、ここにはモンスターいないみたいだ」

ジェイルの視線にいい加減に答える真司。その視線は出された食事に固定されている。

真司がジェイルのラボに来て数日。既に真司はここに馴染んでいた。

最初こそジェイルの性格や行動に戸惑ったが、話してみれば質問には答えてくれるし、住む場所や食事まで世話してくれるので今では変わり者の良い人と思っていた。

「で、真司さん。そのミラーワールドへ行く事が出来るのは、仮面ライダーだけなんですか？」

「いや、行くだけなら何とか出来るけど……は～、戻ってくる事が出来ないんだよ」

ウーノの問いかけに、真司は最後のジュースを飲み干して答えた。

それにジェイルが益々笑みを深くする。

それを見て、ウーノはやれやれとため息一つ。最近、真司が来てからジェイルが上機嫌なのはいいのだが、本来の研究を放り出しているのだ。

理由は簡単。ライダーシステムに魅入られているのだ。ま、流石に残りのナンバーズを仕上げる事は忘れていないが。

「失礼しまぁ～す」

「げ、クアットロ」

ウーノがどうやってジェイルに研究をさせるか思案し始めたとこ

ろに、ナンバー4ことクアットロが現れた。
ちなみに真司はクアットロが苦手である。初対面から事ある毎にからかわれ、真司はすっかりクアットロを、浅倉とは違った意味で厄介な相手だと認識していた。

「あっらぁ～、シンちゃんじゃなぁい。げっ、なんて酷いわねぇ。ウーノ姉様～、シンちゃんが私を嫌うんですぅ～」

「……当然でしょ、クアットロ。あまり真司さんをからかうんじゃないわ。……彼は、その気になったら誰にも手が出せなくなるのよ？」

嗜めるウーノ。だが、さり気無く近付き、後半をやや警告のように言うのを忘れない。それにクアットロも渋々頷き、視線を真司へと向ける。
真司は食事の片付けを始めており、それを見てクアットロは少し不満気味にため息を吐き、それを取り上げる。

「何だよ？」

「私が片付けておくから。シンちゃんは、チンクちゃんの相手、お願い出来る？」

「いいけど……貸しなんかにすんなよ？」

「はいはい。別にそんな事考えてないから」

「絶対だぞ～！」

そう行って真司は研究室を出て行く。それを確認し、クアットロ

は視線をジェイルへと向ける。
彼女がここに来た理由。それは、真司がいては邪魔だったからだ。

「……それで？」

「はい。ドクターの希望通り、ドゥーエ姉様から例のものが手に入った、と」

「それは良かった。で、ドゥーエは何と？」

「それが……シンちゃんの事を聞いて一度会ってみたいと」

「……戻ってくるつもりなの？」

ウーノのどこか呆れた表情と声にクアットロも同じ表情で頷いた。
それにジェイルは一人笑う。それは心からの笑い。
一番自分に近いドゥーエが、真司に会いたいと言った事が堪らなく嬉しかったのだ。変化していると。
何故なら、ドゥーエは一番冷酷で残忍な性格。それが与えられた任務を終えたとはいえ、自分から仕事ではなく帰還を選んだだけでも驚きなのだ。
ましてや、その理由が次元漂流者に会ってみたいとは。だからこそ、ジェイルは笑う。自分から離れ、独自の道を歩き出した存在に。

「いやぁ～、愉快だ。実に愉快だよ。……クックッ、真司は本当に私の興味を尽きさせないね」

「……ヘックシッ！」

「風邪か？」

「いや、多分違う。ジェイルさんが噂してんだ、きっと」

どこか心配そうに声を掛けるチンク。それに笑顔で答える真司。

既に、真司はナンバーズから一定の尊敬を受けている。

その理由の一つは、ジェイルと平然と会話している事。ちなみにジェイルは自分が犯罪者だと真司に告げた。だが、真司は――――。

「いやいや、ならどうして俺を助けたりすんのさ。犯罪者って、大抵酷い奴だし」

と言って、まったく信じなかったのだ。まぁ、後にそれが真実と知った時も真司は、ジェイルを悪人とは思えず、助けるのだが。

そして、もう一つはその力。戦闘用のナンバー3、トーレすら勝てないその能力にあった。

「じゃ、やろうか」

「頼む」

チンクの言葉に、真司は頷き、用意された鏡へと向き合う。そして、ケースのようなものを取り出し、それを鏡へ突き出す。

するとその鏡の自分の腰に、ベルトが装着される。そして、それは実際の真司も同様で、そのままケースを片手に――――。

「変身っ！」

叫ぶ。そして、そのケースをバックルの位置にはめ込む。すると、

その身体が鎧で覆われる。銀の鎧と銀の仮面。赤い身体に赤い瞳。
その姿こそ、人が手出しできない世界から襲い来る怪物を倒すため、戦い続ける戦士。その名は――――。

「っしゃあ!」

――龍騎。戦いを止めるべく戦う、龍の影を纏う勇者。

「さ、行くぞチンクちゃん」

「ああ……それと、何度も言うが、ちゃん付けはやめろ」

そういいながら、どこか嬉しそうなチンクであった。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一応続き。話が飛んでるのは、仕様です。

三話

「ちょっといいですか？」

突然掛けられた声に、クウガは戸惑う。今まで未確認と戦っていた時、相手からこんな風に話しかけられた事がなかったからだ。

故に若干戸惑うものの、クウガは出来るだけ柔らかい声で返した。

「……何かな」

「貴方は……第四号ですか」

「そう……呼ばれてるね」

クウガの答えに、アギトは内心驚いていた。本来自分がいた世界にいた存在。それが目の前にいる。そして、人の言葉を話している事に。

それはクウガも同じ。最初こそ未確認かと思ったが、どうやら違うらしい事は雰囲気で分かった。先程の少女に対して逃げろと言っていた事からも、それが窺える。

だからこそ、クウガは聞かねばならない。何故、少女がなのはを襲っていたのかを。

「今度は俺からいい？」

「……どうぞ」

「さっきの女の子。俺の知り合いの子を……えっと……」

襲っていた。そう言おうとしてクウガは躊躇う。目の前の相手が守ろうとした子。それが襲う事にした理由を聞かねばならない。

だが、少女の事を一方的に悪く言うように取られかねない言葉はどうかと、そう思ったのだ。

アギトはそんなクウガの沈黙の理由に気付かないが、それが言い出し難そうにしている事だけは理解した。

「もしかして……知り合いの子に迷惑を掛けたんですか？」

「……うん。どうしてかなって理由を聞いたんだけど、お前には関係ないって」

それを聞き、アギトは実にヴィータらしいと思った。でも、それが本当ならアギトとしても許せる事ではない。

はやてのために。そう聞いたからこそ、彼は蒐集行為を見逃した。でも、誰かに迷惑を掛けるのは、はやて自身が許さない事だ。

「そうだったんですか。すいません！　ちゃんと言っておきます」

「えっと……でも、さ。きっと……仕方ない理由があったんだよね。だから、あの子もどこか悲しい目をしてたんだろうし」

クウガは自分と対峙していた時のヴィータの目を思い出していた。まるで、したくない事をしなければならないと言っているような目を。

それは、クウガには良く分かる。かつての自分が、そうだったのだから。

だからこそ、理由が知りたかった。どうして望まない事をしなければならないのか。それを聞きたかったのだ。

もしかしたら、自分が力になれるかも知れない。そう思っていた

から。

「……四号さん」

そんなクウガの思いを感じ取ったのか、アギトはどこか感動したように呟いた。そう、そうなのだ。

ヴィータ達も蒐集なんてしたくない。だが、それをしなければはやてが死んでしまう。それを防ぐために、四人ははやてとの約束さえ破って行動しているのだ。

「四号さんは止めてくれるかな？　俺、クウガって言うんだ」

「あ、すいません。じゃ、俺はアギトって呼んでください」

「アギト？　それもかっこいいなぁ……でも、クウガが一番だな、うん」

どこか和やかな空気さえ感じさせる二人の仮面ライダー。だが、周囲はそうはいかないようで……。

「ちっ、やるな！」

「速い……そして強い」

空中では、なのはを助けるため現れたフェイトとシグナムが戦っており……。

「やるじゃないのさ！」

「……まだ甘いな。今度はこちらから行くぞぉ！」

アルフとザフィーラが激しい攻防を展開し……。

「くそ、厄介な奴だ」

「ユーノ君、気をつけて！」

「あの術式……まさかベルカ式？！」

デバイスを損傷したなのはを守るため、ユーノがヴィータをひきつける。その守りは、鉄槌の騎士さえ舌を巻いていた。

そんな周囲に気付き、クウガとアギトは共に空を見上げ、互いへ視線を送り――頷いた。

「っ！」

「はぁ！」

同時に飛び上がり、叫んだ。

「「止めてくださいっ！！」」

その声にフェイト達もシグナム達も動きを止める。その視線はクウガとアギトへ注がれ、シグナム達はともかく、フェイト達は完全に動揺していた。

二人は、近くのビルへと着地すると、そのまま両陣営へと呼びかけた。

「もうやめてください。なのはちゃんからも何とか言って」

「シグナムさん達もやめてください。人を襲ったなんて聞いたら、はやてちゃんが悲しみますよ」

二人の告げた言葉が両陣営へ動揺を生む。そして、クウガから指名されたなのはは、少し驚きながらもフェイト達へと念話を送った。クウガは敵ではなく、味方で自分を助けてくれた事。あの姿をしているが、本当は人間だとも。

一方、シグナム達も念話で相談していた。アギトとクウガが揃って戦闘する気がない事に疑問を抱きつつも、アギトの言った、はやてが悲しむとの言葉から、これ以上何かアギトが言う前に早期撤退するべしと結論付けた。

そんな風に落ち着いたのを見て、クウガとアギトは安堵した。どうやらもう戦う必要はない。全てが片付いた。そう思ったのだ。

だが、それが間違いだと二人は気付く。そう、二人だけは感付いたのだ。何者かがこちらを見ている事を。

それに感付いたクウガは、変身時と同じ構えを取った。そして、叫ぶ。

「超変身っ！」

「緑になった……」

ペガサスフォーム。時間制限こそあれ、全ての感覚が鋭敏になる姿。邪悪なる者あらば　その姿を彼方より知りて　疾風の如く射抜く戦士である。

それでクウガは、こちらを窺う仮面の男を確かに確認した。

「アギトさんっ！」

「はいっ！」

クウガが指差した方向へ向かってジャンプするアギト。そして、何をしているのか理解出来ないフェイト達へ向かって、身体を赤に戻し、クウガは叫ぶ。

「誰か射撃出来る道具持ってないですか？　ちょっと貸して欲しいんだ！」

「何に使うの？」

なのはの問いかけに、クウガは簡単に答える。

「こっちを監視してる相手がいるんだ。その人、かなり怪しいし、万が一に備えておきたいんだ！」

ジェイルは困っていた。それは、真司から聞いたとある事が原因だった。それは……。

「餌？」

「そ。え・さ」

真司はいつものように食事を平らげた後、思い出したと言ってそう切り出した。それは、自身が契約しているモンスターのついて。

ミラーモンスターは、定期的に餌を与えなければ最後は契約者を襲う。そして、そのまま本能のままに暴れる存在となるのだ。

それを聞き、何を食べるのかと尋ねた答えに、ジェイルは初めての絶望感を味わう事になる。

「ミラーモンスターかな？　あ、後は……」

何か言い出し辛そうな真司。だが、ジェイルの続きを促す視線に、どこか嫌そうに答えた。

「人間、だったはず」

「……それは困ったね」

「だろ？　どうしよ……」

無論、真司とジェイルの間には考えの違いがある。

真司は、純粋に人を餌になんて使えないと思っているのに対し、ジェイルはそうそう確保出来ないし、後始末が面倒との理由から困っているのである。

故に、今ジェイルは、ドラグレッターの餌をどうするかをその天才と呼ばれた頭脳をフルに活用し、考案中なのだ。

「……ドクター、真面目に仕事をしてくれないと困ります」

そんなジェイルを、秘書的な役割をしているウーノが呆れつつ見ていた。その手には数多くの書類が抱えられている。

全てジェイルが要求された最高評議会絡みの仕事のものだ。これをやらなければ、この生活もままならないのだが……。

「う～ん……下手に人工生命体を与えると真司が煩いだろうし……」

「ドクター？」

「そうだ……原生生物ならいいか。それも人に危害を加える程の凶暴なものなら生命力も強い……ああ！　それを真司に倒してもらってデータ取りにも使えるなぁ！　一石二鳥だ。これで行こう！」

ウーノを完全無視して呟き、いや、ただの狂言にも近い独り言を叫ぶジェイル。それを聞き、ウーノはため息一つ。

そして、視線をジェイルから天井へ移し、呟いた。

「ドクターの世話、クアットロに押し付けようかしら……？」

その頃、真司はと言えば……。

「空を飛べないくせに、中々しぶといな」

「馬鹿にすんなよ！　モンスターの中には空飛ぶ奴もいたっつ～の！」

訓練場でトーレと戦闘中。龍騎へと変身し、その手には剣が握られている。トーレは、そんな龍騎を空から見下ろしていた。

だが、その表情は言葉とは裏腹に嬉々としている。

「なら、見せてみろ。どうやって空の相手に対応するのかを……なっ！」

インヒューレントスキル。ＩＳと呼ばれる特殊能力を、ナンバー

ズは全員所持している。トーレのＩＳは”ライドインパルス”と呼ばれる高速移動。
その速度はかなりのものがあり、今の龍騎では完全に捉える事は出来ないのだが……。

「何度もやられるかっての！」

”ガードベント”

ドラグバイザーにカードを差し込む龍騎。それを読み込ませ、音声と共に龍騎の肩に盾が出現する。
それにトーレのブレードが叩き付けられるが――。

「何だとっ？！」

まったく傷付かない。それどころか強度の差か、ブレードの方が欠けてしまったのだ。
あまりの事に戸惑うトーレ。それを見逃す程、真司も素人ではない。即座に手にした剣で、欠けていない方のブレードを叩き折る。

「折れたぁ～！！」

「折れた、だと！」

自分の武器を失い、距離を取ろうとするトーレだったが、そこへ龍騎が手にした剣を投げつける。
それをかわすトーレだったが、そこで距離を取ったのが間違いだと気付いた。

”ストライクベント”

「はあぁぁぁぁぁ……」

剣を投げると同時に、カードを読み込ませ、龍の顔をした手甲のようなものを龍騎が構えていたからだ。

それは、トーレも知る攻撃。ドラゴンストライク、と彼女が名付けた龍騎の技の一つなのだ。

かわす事は出来る。だが、トーレにかわすという選択肢はない。何故ならば……。

（かわせば、次はアレが来るっ！）

そう、それは彼女の速度を持っても逃げ切れなかった龍騎の最大の技。それを出されれば、彼女に勝ち目はない。

だからこそ、この攻撃を凌ぎ、カウンターを仕掛ける以外に道はない。真司は、何だかんだで負けず嫌いで、熱くなりやすい。

故に、この一撃を避ける事は最後の手段へ移行させる事に繋がるのだ。

「はぁ！！」

「おぉぉぉぉっ！」

迫り来る火球とドラグレッダーを紙一重でかわしながら、龍騎へ肉迫するトーレ。完全に硬直している龍騎を見て、トーレは確信した。

（勝った！）

残されたブレードを龍騎の首元に突きつけるトーレ。だが、その

顔に浮かぶのは、どこか満足そうで悔しさを滲ませた笑み。

「……やるな」

「トーレこそ」

龍騎の首元に突きつけられたブレード。そして、トーレの後方で唸りを上げるドラグレッダー。

そう、龍騎は攻撃を繰り出した後、火球を避けてもドラグレッダーがトーレの後ろに回るようにしたのだ。

相打ち。だが、もしこれが実戦ならばトーレの敗北だ。なにしろ、突きつけたブレードは先が折れている。

そして、龍騎はまだ奥の手を出していないのだ。更なる姿。更なる力。それをまだ隠していると。

それを聞いた時、トーレ達は揃って驚愕したのだ。龍騎の可能性と強さに。だからこそ、トーレも真司を認めている。

戦士ではないのにも関わらず、ここまでの強さを身に付けた心を。だからこそ、戦って楽しいと思えるのだ。

「とりあえずさ……これ、降ろしてくれよ」

「……いいだろう」

静かにブレードを降ろすトーレ。それに応じるように龍騎も変身を解除する。

大きく息を吐き、トーレへ笑みを見せる真司。それに顔を背け、トーレは歩き出す。

「おい、何だよ。どうしたんだって」

「別に何でもない。私は洗浄に行く」

「あ、ズル～！　俺も風呂入りたい！」

並ぶように歩きながら、二人は言葉を交わす。素っ気無く返すトーレにどこか蓮を思い出す真司。

初めて戦闘してから、この二人はいいコンビとして、後のナンバーズの先生役をする事になるのだが、それはまだ先の話……。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

続き。クウガとアギトの会話がやりたかっただけ。

後、トーレは蓮だと思うんだ。

四話

クウガに教えられた場所に向かったアギト。その視界に確かに仮面の男が見えていた。あちらもアギトの接近に気付いたのか、まるで待ち構えるようにアギトを見つめていた。

それを見て、アギトは余計に警戒心を強くする。何故かその視線に敵意を感じていたのだ。

まるでその視線は、かつて戦った”黒い服の男”に近い何かがあった。だからこそ、アギトは警戒心と同時に不気味さも抱いた。

（一体、あの人は何者なんだ？）

そんな思いを抱きながら、アギトは男の前に降り立った。男はアギトを見つめ、何か戸惑うように告げた。

「貴様、何者だ」

「……何者、か」

アギトの脳裏に甦るのは、この世界に来る前に経験した発電所での戦い。その場所は、異常な空間になっていて、アギトはそこで過去のアギト達と出会ったのだ。

そして、彼らが名乗っていた名前を思い出したのだ。あの時、ついつられるように名乗ったその名を。

「俺はアギト！　仮面ライダーアギト！！」

「仮面ライダー……だと？」

「そうだ！　闇を打ち砕く正義の光だ！」

脳裏に甦る緑のアギトの言葉。悪魔と呼ぶべき”邪眼”に対し、彼が叫んだその言葉。その時の力強さを借りるように、アギトは言い切った。

その叫びに、男は何か可笑しいものがあったのか、低く笑い出す。

「ククク……闇を打ち砕く、だと？　ならば、何故貴様は蒐集行為を見逃した」

「!?　どうしてそれを」

「ふん……まぁいい。とんだ邪魔が入ったが、それもここまでだ」

その瞬間、アギトの体を光の輪が拘束した。バインドと呼ばれる拘束魔法だ。それを何とか打ち破ろうとアギトはもがくが、バインドはビクともしない。そして、そんなアギトへ男はゆっくりと手を向け、告げる。

「さらばだ。仮面ライダー……」

「くっ！」

男の手に恐ろしい程の魔力が集束していく。その攻撃は確実に自分を捉え、大ダメージを与えるようにアギトは感じた。それ故、何とか拘束を外そうと足掻くアギト。だが、無常にも男の手から魔法が放たれようとした瞬間。

何かがそれを阻止した。

「何っ?!」

「！　……今だっ！」

アギトを捕らえていたバインドが破壊されたのだ。目には見えない何かによって。しかも、その攻撃が今度は男へと襲い掛かる。何とかシールドを展開し、男は謎の攻撃を防ぐものの、その間にアギトが体勢を立て直し、片手でベルトの側面を叩く。

それにアギトの体が赤くなる。フレイムフォーム。剣を使うアギトの姿。腕力に優れ、攻撃力が高いその姿で、アギトはベルトの前へ手をまわす。それに呼応し、ベルトから一振りの剣が出現する。フレイムセイバー。フレイムフォームと、とある姿しか使えない専用装備である。

「はあっ！」

「ぬっ！」

謎の見えない攻撃を凌ぎ切った男へ、アギトが斬りかかる。それも先程と同じようにシールドで防ぐ男だったが……。

「ば、馬鹿な……っ！」

「はあぁぁぁぁ！」

アギトのフレイムセイバーがシールドにひびを入れていく。男の驚きを他所に、アギトはそのままフレイムセイバーを振り下ろす。

「はっ！」

「ぐあぁぁぁっ！」

その剣先が男の腕に掠り、押さえるように男はアギトから距離を取る。そして、アギトを睨むように見つめて吼えた。

「覚えていろ！　今度は……こうはいかんぞっ！」

その言葉をキッカケに、男は姿を消した。アギトは追い駆けようとするが、流石に魔法陣の中へ消えたものを追い駆ける事は出来ない。

周囲にもう怪しい気配がないのを確認し、アギトは後ろへと視線を戻す。先程の自分を助けた攻撃。あれはきっと……。

「クウガさん……」

アギトが男を見失った頃、クウガはビルから降り、手にしたペガサスボウガンをなのはへと返した。それを恐々受け取るなのは。そう、クウガが変化させたのはレイジングハート。

射撃という言葉に、なのはがレイジングハートを渡したのだ。損傷を受けているのでクウガも不安ではあったが、見事にレイジングハートはペガサスボウガンへと変化した。

クウガの物質変換能力は、原子レベルでおこなうもの。つまり、手にしたものがどんな状態でも関係なく、その姿に適したものであれば、応じた武器へと変化させるのだ。

「……本当に戻った」

”驚き……ました”

自分の手に乗った途端、普段の姿へ戻るレイジングハートを見て、なのはは手品を見たように呟く。
それに同調するように喋るレイジングハートだったが、損傷のため途切れ途切れだった。クウガはそれを見ながら、再び姿を赤へ戻す。それに今度は全員が驚いた。

「ありがとう、なのはちゃん。おかげでアギトさんを助けられたよ」

「えっと、その事で聞きたい事があるんだけど」

なのはへ改めて御礼を述べるクウガへ、ユーノが恐る恐る問いかける。なのはから人間と言われても、先程からのクウガを見ているとどうしても人間とは思えないのだ。
それをクウガも感じ取ったのだろう。頷いてユーノへ視線を向ける。だが、その姿が一瞬にして青年へと変わったのだ。

全員がそれに驚く中、五代だけはどこか気まずそうに表情を変え、周囲の面々に告げる。

「すいません。何か、驚かせてばっかりで……」

そこへアギトも戻ってきて同じような事をし、五代と翔一は揃って苦笑いを浮かべる事になるのだった……。

「嘘だ……」

「チンク、気持ちは分かるがこれは現実だ」

どこか憮然とするトーレと、唖然としているチンク。その二人の視線の先にいるのは……。

「っとと……あぶね～」

巨大なとかげの化物を相手に孤軍奮闘する龍騎の姿だった。ここは管理外にあるとある世界。三人はドラグレッダーの餌を確保するため、ここに来ていた。

本来ならば、三人で協力して倒すはずだったターゲット。それを龍騎は「俺だけでいけるって。二人は女の子なんだし、さ。任せてくれよ」と言ってこの状況だ。

二人が何故龍騎の戦いを見つめ、どこかやるせない気持ちになっているのには理由がある。それは、龍騎が相手をしているターゲットの強さ。管理外で原生生物なので、個体差があり絶対とはいえないが、魔導師ランクに換算すればＡＡは堅い。だが、それを龍騎は一人で相手をし、尚且つまだ余裕さえあるのだ。

「今度はこいつだ！」

”ストライクベント”

龍騎の右手に龍の顔をした手甲が装着される。そして、腕を引いてパンチの構えを取る。それを好機と見たのか巨大とかげは龍騎へ向かって突っ込んだ。

だが、それは悪手でしかなかった。龍騎はギリギリまで引き付けて、その拳を打ち出した。ドラゴンストライク。龍騎の技の一つが巨大とかげの巨体を吹き飛ばす。

「……私は、あれを喰らった事があるのだが……？」

「おそらく、加減してるんだろう……どこか信じられんがな」

その光景に背筋が凍る二人。既にドラゴンストライクを受けた事のある二人にとって、眼前の光景は恐怖でしかなかった。底が見えてきたと思っていた龍騎。その底が再び見えなくなったのだから。

（真司はどこまで力を隠しているのだ？　……もしや、全力を出せばSランクさえ凌駕するとでもいうのか!?）

（……真司の奴、まだ力を隠していたのか。まったく、私には全力を出せと言っているのに！　……帰ったら説教だ）

二人が思い思いに龍騎を見つめる中、勝負は決着の時を迎えようとしていた。先程の攻撃で巨大とかげは横たわっている。それを確認し、龍騎はおもむろに一枚のカードを手にする。そこに描かれているのは、龍騎のマーク。それを見て、二人は息を呑む。

そして、それをドラグバイザーへ読み込ませる龍騎。それが意味する事を知る二人に、緊張が走る。

”ファイナルベント”

「はあぁぁぁぁぁ……」

龍騎の周囲をドラグレッダーが巻き付くように動いていく。そして、それと呼応するように龍騎も腰を深く落とし……。

「はっ！」

ドラグレッダーと共に空へ跳んだ。空高く舞い上がり、その体を

ドラグレッダーが一瞬隠す。その瞬間龍騎は一回転捻りをし、蹴りの体勢へ入った。

それは、未だにトーレもチンクも破れない無敵の必殺技。今の龍騎の最大にして最強の攻撃。その名も……。

「うおぉぉぉぉぉっ！！」

――ドラゴンライダーキック。ドラグレッダーの火球を受け、その勢いを加えて突撃する荒業。だが、その破壊力と速度は凄まじく、トーレのライドインパルスさえ逃れる事は出来なかったのだ。

龍騎の蹴りが巨大とかげを完全に沈黙させる。そして、それを確認して龍騎をドラグレッダーを見上げた。

ドラグレッダーは龍騎の視線から何かを感じ取ったのか、巨大とかげへと近付き、それを食べ始めた。

それに安堵の息を吐く龍騎とトーレ達。もしこれで無理なら、やむを得ずジェイルの創る人工生命体を食べさせるしかなかったからだ。

「腹一杯食えよ。でも、確かにこんな奴が暴れたら大変だよな。いやぁ～、ジェイルさんってやっぱ良い人だよ。人を襲いかねない凶暴な生き物を退治して、それを餌に出来ないか？　な～んてさ。ホント良い人だな」

「……ああ」

「そうだな……」

ジェイルの言った言葉を本気で信じている龍騎。その実情を知っている二人としては、その言葉に何も言えなくなった。

こうして、懸念されたドラグレッダーの餌は解決した。だが、ここでジェイルの予想外の出来事が起こってしまう。それは……。

「データ、もう取れないよ」

龍騎が強すぎるため、現状の姿で十分相手出来てしまったのだ。本来期待していた龍騎のもう一つの姿。それをジェイルは期待していたのだが、それは結局出さずじまいとなったのだ。

龍騎が更なる力。”サバイブ”の力を使う事になるのは、これより遥か先の『レリック事件』まで待たねばならなかった……。

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

――――――――――――――

続き。アギトとクウガの変則的共闘?
クウガは最終回後。アギトはゲーム「正義の系譜」後。龍騎はＴＶの終盤近くからです。具体的には決めてないです。
今回やりたかったのはアギトの名乗りです。ゲーム内で仮面ライダーと名乗るシーンがあり、それに当時感激したため、絶対やってやると思って書きました。
……さて、クウガはペガサスで援護しました。アギトが名乗るのも、

もしかすると聞いていたかも知れませんね。

五話

「次元漂流者か……」

「あ、それシャマルさん達も言ってました」

あの後、五代と翔一が同じ世界から来たと分かり、シグナム達もクウガの力を見た以上、それからは逃げられないと悟ったのか、大人しくなのは達に事情を話す事になった。

というのも、翔一が言ったはやてちゃんという言葉を五代が覚えていたからだ。そして、運の悪い事に五代が世話になっているのは月村家。

そこの住人である月村すずかとはやては最近知り合った知人だったのだ。その話をすずかから聞いていた五代が、その事を翔一に尋ね、はやてが主である事が発覚したのだ。

そうなったのは、シグナム達が翔一に管理局の存在を知らせず、それに対しての対応を指示しておかなかったのも原因の一つだったのだ。

「それで……その子を助けるために……」

「はい。でも、はやてちゃんは何も知らないんです！　俺達だけが内緒で……」

五代の声に翔一はそう答えた。シグナム達も何も言わないが、否定しないという事はそういう事なのだろう。そう誰もが考え、悲痛な表情を浮かべた。

何の罪もない少女が死ななければならない。だが、それを避けるためには誰かを犠牲にしなければならない。それを聞いて、五代は

心が痛かった。

それは、形や状況さえ違えども、自分が未確認を倒してきたのと同じだったからだ。みんなの笑顔のために。そう思い拳を振るい続けた五代。でも、それは裏を返せば自分達のために未確認を犠牲にしていたとも言える。

無論、彼らは殺戮を目的としていたので、厳密に言えば生きるためではなく、楽しむためにしていたのだと五代も知っている。でも、した事だけを見れば自分も大差ないのではないか。そんな思いが五代に生まれる。

一方、翔一も改めて蒐集行為について考えていた。具体的には聞いていなかったが、リンカーコアと呼ばれるある意味での心臓を狙う行為。

しかも、下手をすれば蒐集対象は死んでしまうとの事。それを聞き、翔一は自責の念に駆られていた。何故もっとちゃんと聞かなかったのか。どうしてはやてが禁止した理由を考えなかったのか。

はやてのためにとした事が、かえってはやてを苦しめるのではないか。そんな事を思い、翔一は告げた。

「何とか……何とか誰にも迷惑を掛けずに蒐集する事は出来ないんですか！？」

「そんな方法が……「あります」……何？」

翔一の言葉に反応したシグナム。それに反論したのはユーノだった。ユーノは語る。手分けしてリンカーコアを持つ生物から蒐集すれば、おそらく時間は掛かるが、誰にも迷惑を掛ける事無く蒐集出来ると。そして、ユーノは最後にこう言った。

「それに、死なない程度に加減出来るなら……僕からも蒐集してください」

その言葉に全員が驚いた。そして、それを理解したなのはが意を決して告げる。

「私も……構わないです」

「本気で言っているのか?!」

流石にシグナムも、なのはまで言い出した事に驚きを隠せない。そして、その流れは止まらずに……。

「私も協力します」

「フェイトっ?!」

フェイトまでが言い出し、アルフが驚く。三人は口々に告げる。確かに蒐集行為はいけないだろう。でも、それでしか助けられない命があるなら助けたいと。

嘘を言っている顔にも見えないし、何よりもなのはを襲ったヴィータの目を見た五代も言い切ったのだ。したくない事をしている目だった、と。

それを聞き、余計に困惑したのはシグナム達だ。先程まで戦っていた相手。しかも管理局に関わっているフェイトさえ、蒐集してもいいと言い出すのは想像出来ない事だったからだ。

(本気でこの三人は蒐集を? ……主のため、か。私達がしていた事を……許すと、言うのか……)

（こいつら……本当にはやてのために？　死んじまうかも知れないって、分かってて言ってるんだよな……）

シグナムとヴィータが、なのは達が見も知らないはやてのために見せた決意に感じ入っていれば……。

（まさか、長い間蒐集行為をしてきたけど、こんな事は初めてよ。そう、か……私達はとんでもない勘違いをしていたのかもね）

（蒐集を禁止する主に出会ったかと思えば、主のために蒐集してくれという者と出会う、か。今回は本当に変わった事ばかりだ）

シャマルとザフィーラがその言葉に心を揺さぶられていた。そして、翔一と五代もまたそんななのは達に心打たれていた。

見知らずの相手のために、危険を承知で自分の命を賭ける。危険性は低いと分かっていても、中々出来る事ではない。だからこそ、二人は思うのだ。自分達に出来る事はなにかないのかと。子供達だけでなく、自分達も何かしなければと。

「「あの、何か出来る事はないですか？」」

だが、その言葉がキレイに重なる。それに全員が一瞬ポカンとなり、そして揃って笑い出す。そこに先程まであった緊迫感や焦燥感がすっかり消えてしまったのだ。

そんな笑い合うなのは達を見て、五代と翔一は互いに顔を見合わせ笑い合う。そう、分かり合えるのだ、と。話が出来るのなら、必ず分かり合える。そう改めて感じ、二人は笑う。

その笑い声が夜空に響く。敵も味方もない。ただ同じ思いを共有する者として、全員が笑い合う光景がそこにあった……。

ジェイルラボ　温水洗浄室。そこに、ウーノからチンクまでのナンバーズが揃っていた。そう、揃っているのだ。五人全員が。

「それで……どう？　感想は」

「う～ん、悪くはないわね。でも、あれが本当に強いとは思えないけど」

ウーノの言葉に反応したのは、ナンバー2ドゥーエだ。聖王教会への潜入任務を終え、彼女は一旦帰還したのだ。それもつい先程。そして、真司と初対面をし、その感想がそれ。だが、それには他の四人も異論はないようだが……。

「真司は、見た目からは分からないが確かに強い。それはこれまでのデータが証明している」

「それにぃ、シンちゃんってば、チンクちゃんやトーレ姉様を相手に加減までしてるみたいなんですぅ」

「……悔しいがクアットロの言う通りだ。私達は、未だにあいつの底が見えん」

トーレ、クアットロ、チンクとその意見を受け入れつつ、反論を述べる。それを聞き、ドゥーエはおかしそうに笑って言った。

「貴方達、随分とあの男に肩入れするのね？」

「ち、違う！　私は素直に思った事をだな……」

「……そうだぞ。真司の力は底知れん。ドクターすら、まだ解析出来た事は少ないのだ」

慌てるように答えるチンクと、冷静だがどこか顔が赤いトーレ。クアットロはそんな二人を見てニヤニヤと笑みを浮かべ、ウーノは微笑むようにそれを見る。

そして、ドゥーエは満足そうに頷き湯船から上がって断言した。

「なら、私があの男の力を出させてあげるわ」

その頃、真司はジェイルと共に、残りのナンバーズが入っている調整ポッドの前にいた。だが、その様子は落ち着かない。

それもそのはず。ナンバーズは全員女性で、ポッドの中には裸で入っている。

そのため、先程から真司はどこを見ていればいいのか分からず、挙動不審なのだ。

そんな真司とは対照的に、ジェイルは何の躊躇いもなく調整を行なっていた。現在集中的に行なっているのは、ナンバー６セインとナンバー１０ディエチだ。

真司との模擬戦を繰り返し、トーレとチンクが提案したのは、遠距離戦での龍騎の能力を測ろうというものだった。近距離や中距離では、未だに龍騎に勝てない二人。だからこそ、遠距離主体に戦える姉妹なら新しいデータが取れるかもしれないと言われ、現在ジェイルはその二人の調整に余念がない。

ちなみにセインは真司の「いや、姉妹ならちゃんと順番に出して

あげようよ」の言葉から調整している。

「……で、ドゥーエの印象はどうかね？」

「へ？　っ？！　……ああ、やっぱ美人だよな。ウーノさんやトーレもそうだけど、ドゥーエさんも綺麗だよ。モデルとか出来るな、あの人」

視線を床に向け、思考を裸から脱却させようとしていた真司だったが、ジェイルの声に視線を上げる。そして、再び目に入った裸体に視線を逸らし、天井へとそれを向ける。

ジェイルはそんな真司に気付かず、その答えに可笑しそうに笑う。真司は知らない。ウーノからクワットロまではジェイルの遺伝子を基にして創られた存在だと。

真司は、ナンバーズの事をジェイルからこう聞いている。複雑な事情から止むを得ず創る事になった人工生命体だと。そして、その開発責任者がジェイルであり、スポンサーはこの世界の治安維持組織だと教えられていた。

最初は人工生命体に否定的だった真司だったが、生まれてくる命に罪はないとジェイルに言われ、その考えを改めた。だからこそ、ナンバーズを人間として彼は認識している。

まぁ、それを聞く前から既に人間としか思っていなかったので、今更ではあったが。

「モデル、ね。まぁ、ドゥーエのＩＳを使えば確かにそれは一番簡単かもしれないねぇ」

「ＩＳかぁ。ドゥーエさんのＩＳって何なんだ？」

「ライアーズ・マスク。ま、簡単に言えば変装だよ。誰にも何にも分からない完璧な……ね」

その言葉を聞いて、真司は素直に感心した。まるでスパイ映画みたいだと言って笑ったぐらいだ。その言葉に、ジェイルは面白そうに「本当にスパイをしてるんだ」と言った。

その言葉に真司は驚き、その表情を不思議そうにした。その顔が何を聞きたいかを理解し、ジェイルは言い切る。

「何、偉そうな事ばかり言って、何も世界を変えようとしない連中だよ。宗教絡みだから余計にね」

「へぇ。こっちにも宗教とかあるんだ。どんな神様祭ってんの？」

「神様？　……ああ、君の世界では架空の神を祭ってるのか。こちらでは『聖王』と呼ばれた実在の人物を祭ってるのさ」

ジェイルの話を聞いて、真司は驚きながらも納得していた。キリスト教はまさにそれだったからだ。古に実在した人物を崇める宗教。本当は、キリスト教も神が存在し、それを崇めているのだが、真司にとって大切なのは自分の知るものと共通点があった事。

そして、その聖王がどんな存在かを聞き、真司は素直に感心していた。争いが絶えなかった時代を平和にしようと尽力した王。それは、真司がライダーバトルに参加したのと似ていたからだ。

誰かを殺す事を肯定したくない。でも、それをしなければ多くの人が死んでしまうという矛盾。それを感じながらも戦ったであろう聖王に、真司は共感を覚えた。

そんな真司の反応に、ジェイルは内心呆れながらも嘘偽り無く聖王伝説を語る。その間も手は調整を続けているところが、実に彼ら

しい。

「……で、古代ベルカは戦乱から解放されたのさ」

「……凄いな、聖王って。もしかして、今も子孫とか「残念ながら初代聖王の子孫はいないよ。ま、その遺物が教会には残されているがね」

どこか興奮したような真司の言葉を遮って、ジェイルがピシャリと言い切った。それに真司はどこか肩を落とし「な～んだ……」と呟いた。

その姿がどこか滑稽だったからか、ジェイルはついこう言ってしまう。

「でも、いつか会えるかもしれないよ」

「うっそ?!　どうして!?」

「あ、いや……！　教えて欲しかったら、龍騎のもう一つの姿を見せてくれ」

「え～、でもなぁ……会えるかも、だしな……」

真司がサバイブを見せるのに躊躇う理由は一つ。直感的に感じ取っているのだ。それは見せてはいけないと。仮面ライダーの力がどれ程危険で恐ろしいものかを理解しているのもある。

それに、ジェイルは確かに悪人ではないが、何より龍騎の力は”守るための力”と思っているからこそ、真司はおいそれと使う訳にはいかないのだ。

トーレ達との手合わせは、本人達が希望し、真司も元の世界に帰

った時に勘が鈍っていないようにするのも兼ねてしているだけ。

そして、そんな真司の渋る声にジェイルは計画を話してしまおうかとも考えていた。だが、それをした場合、下手をすれば真司を敵に回しかねないと思い、口を噤む事にした。

龍騎のもう一つの姿。それにも興味は尽きないが、それよりも計画の障害は出来る限り少ない方がいい。そう思い、ジェイルは真司と友好的な関係を築こうとしていたのだ。そう、まだこの頃は。

後に彼は知る。いつしかそれが計算ではなく、本心からの思いになっていた事を。

「……そうか。さて、もう少ししたらディエチとセインもロール…目覚める事が出来るよ」

ロールアウト。その言葉を言おうとした瞬間、真司の鋭い視線がジェイルを刺し、それにジェイルが軽く笑みさえ浮かべて言い直した。

「ディエチって……十番目って意味だっけ？　で、セインが……」

「六番目よ、真司君」

「おや？　どうしたんだいドゥーエ。ウーノ達と久しぶりに会って、会話を楽しんでると思ったんだが？」

真司の言葉に答えたのは、ジェイルではなくドゥーエだった。そして、どこか不思議そうなジェイルから視線を外し、真司へと視線を向ける。

その視線がどこかからかう時のクアットロに似ていて、真司は若干嫌そうな表情を浮かべた。

そして、その予感は現実のものとなる。何故なら……。

「お願いがあるのよ、真司君。私と戦ってくれないかしら？」

ドゥーエはまるで、お出かけしましょ、とでも言うように笑顔でそう告げてきたのだった……。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

地味に進展しないクウガ&アギト達。そして、ノンビリ&ほんわかの龍騎達。

今回は一応の決着をつけた感じです。今後も、いきなり話がある程度飛ぶかもです。

六話

「……いいでしょう。ですが、闇の書は大変危険なロストロギアです。蒐集を完了した際、起きる事については……」

「承知している。その時は我々も手を貸し。事態の収拾に努める」

「それに、四百ページを超えれば管制人格も覚醒します」

「なら、その人にも手伝ってもらえば、暴走も何とか出来るかも！」

「みんなで頑張りましょう！　ですね！」

リンディの結論にシグナムがはっきりと断言し、シャマルが補足するように告げる。それを聞き、翔一が希望が見えたというように続き、最後に五代がサムズアップで締め括った。

あの後、リンディ達管理局所属のアースラクルーにも、五代を始めなのは達による事情説明があり、大体の事情を把握したリンディは全員に対し、驚愕の事実を話した。

それは、蒐集を終えた闇の書が恐ろしい災害を引き起こすという事実。それを聞き、シグナム達は驚愕しながらも、どこかで納得していた。どうして自分達が蒐集を終えた時の事を覚えていなかったのかを理解したからだ。

そして、その事をリンディに告げると、リンディ達に微かに動揺が生まれた。闇の書の一部であるシグナム達が忘れていたという事実。それが持つ意味を考えたのだ。

そして、蒐集行為をなのは達から行うという事にも、リンディは

難色を示したが、なのは達の強い意志とシグナム達の決して死なせはしないとの言葉と眼差しに折れ、まずはなのはが蒐集される事となった。
安全を考慮し、家族には「フェイトが海鳴にやって来たので、今夜は泊まる」となのはが心苦しく思いながらも嘘を吐き、万全を喫した。

それと同時に、リンディ達は闇の書自体を詳しく調べる必要があると思い、無限書庫での調査を決断。それを聞いたユーノが、それなら自分が役に立てるかもと言い出し、クロノと共にその日の内に無限書庫へと向かった。
フェイトとアルフは五代達が撃退した仮面の男に備えるのと並行し、ヴィータ達と魔法生物からの蒐集活動の手助けをする事となり、五代と翔一もそれに同行する事で話は纏まった。

アースラ内、医務室。

「じゃあやるわね、なのはちゃん」

「はい」

シャマルが静かに闇の書へなのはのリンカーコアを蒐集させる。その行為の痛みに耐えるなのは。それを悲痛な表情で見つめるシャマル。そして、ページが十五程埋まったところで、蒐集を中止する。

「……もう、終わりですか？」

「当たり前よ。これ以上は……今の私には出来ない……」

（そうよ！　はやてちゃんと同い年の子から蔑集するだけでも心が痛いのに、ギリギリまでなんて出来る訳ないっ！）

シャマルの表情になのはは何かを察し、シャマルの手に自分の手を重ねた。それに驚くように顔を上げるシャマル。そんなシャマルになのはは微笑みを浮かべて告げた。

「シャマルさんの気持ち、伝わりましたから。だから、そんな顔しないでください。私まで……悲しくなっちゃうから」

「あっ……ああ……」

「シャマルさん……？」

「ごめんね！　ごめんね、なのはちゃん！　……ありがとうっ！」

「シャマルさん……だから……私も泣いちゃうから……っ！」

零れる涙を拭う事もせず、シャマルは泣いた。それになのはもつられるように涙を流す。しばらく医務室に、二人のすすり泣く声が響くのだった……。

その頃、フェイト達は今度の事を食堂で話し合っていた。フェイトの隣にアルフが座り、向かいにはシグナムにヴィータ、そしてザフィーラがいた。

その視線は険しいものの、敵意や怒りではなく、困難が予想される今後にそれぞれが思いを抱いての事である。

「まず、私とヴィータさんとアルフでＡチーム」

「別に呼び捨てでいいし、敬語もなくていい」

「あ、うん。分かりま……分かった」

ヴィータのどこか呆れるような声に、フェイトは意外そうな表情を浮かべて頷いた。それを同じような表情でシグナムとアルフが見つめている。

「んだよ？」

「いや……意外だなぁ～って」

「私もだ。認めたという事か……？」

シグナムの言葉にヴィータは顔を背けて「悪いかよ……」と告げた。その仕草にフェイトは一瞬驚くも、すぐに笑みを浮かべて頷いた。

「ありがとう、ヴィータ」

「礼はいいから、さっさと決める事だけ決めようぜ。はやてが寝てる間が一番動き易いんだ」

「そうだな。では、私とザフィーラがＢチームか」

「後、翔一って奴もだよ。雄介は、シャマルと二人で行動」

アルフの言葉にフェイト以外の三人が疑問を感じたのか、怪訝な顔を見せる。それにフェイトが笑みを浮かべて答えた。

雄介の力。クウガはアギトよりも汎用性が高いので、戦闘能力的には問題ないとの事。それに、なのはが回復すればなのはがそこに合流するので、心配はいらないとも。

その説明を聞き、三人も納得していた。よくよく考えてみれば、どのチームもバランス良く配置されている。おそらく、リンディの指示だろうが、その人選も流石だと三人は思った。

（高町を襲撃したヴィータをテスタロッサ達に組ませるのは、当然として……）

（翔一をシグナムとザフィーラに組ませるのは、翔一があたしらの中で一番信頼出来るから……）

（そして、シャマルは現在なのはと共に過ごしている。その干渉役にはあの男が適任、か……）

それぞれがリンディ采配の意図を考え、感心する中、フェイトはただ友人であるなのはの心配をしていた。

死ぬ事はないが、それでもしばらく魔法は使えない。その間、自分が頑張らないといけない。そう思い、フェイトは誓う。

（なのは、ゆっくり休んでて。その間、私が頑張るから）

一方、五代と翔一はアースラの休憩所で自分達の話をし合う内に、ある事に気付いていた。

「「えっ？」」

「翔一君、今何年って……？」

「えっと、２００４年ですけど」

自分達のいた時間が違う。それを知り、二人はどこか分かりかけていた共通点に疑問を感じた。

「五代さんは何年って……？」

「俺、２００１年だけど……」

その言葉に翔一も驚く。そして、二人して頭を悩ませる。どうしてこうなったのか。その理由を考えるために。

五代はアマダムのせいだと思っていた。だが、アマダムを持たない翔一は自分よりも先にこの世界へ来ている。では、一体どうして自分がここに来てしまったのだろう。そんな風に考えていた。

（桜子さんがいれば何か分かったかな？）

思い出すのは、未確認との戦いを知識面で支えてくれた女性。彼女の知恵があれば、現状も少しは変わったかもと五代は考える。

そんな五代と同じように翔一もある人物を思い出していた。

（先生なら何かいいアドバイスくれるかな？）

美杉教授。彼が長い間世話になった恩人である。彼も翔一にとっ

ては自分を支えてくれた者の一人。その人生論や何気ない一言は、翔一の大きな助けになっていた事もある。

「「う～ん……」」

二人して思うのは同じ。そして、揃ったように唸りを上げ、それに気付いて笑い出す。

そして、翔一に五代は右手を向けてサムズアップ。それに翔一はどこか不思議そうに視線を送った。

「大丈夫！　きっと何とかなるよ。リンディさん達も協力してくれるし、シグナムさん達もいるし」

「そうですね。で、五代さん……気になってたんですけど、それ何です？」

「これ？　サムズアップって言って、古代ローマで納得出来る、満足出来る事をした人に送られる仕草。俺、これが似合う人になりたくってさ」

「そうなんですか……」

「ま、色々大変だと思うし、辛い事もあるだろうけど……さ」

五代はそう言って、もう一度翔一に対してサムズアップする。それを見て、翔一も同じように五代へ返す。

「でも大丈夫！　だってアギトがいるんだし」

「はい！　絶対大丈夫です！　クウガがいますから」

互いに笑顔を見せあい、断言する二人。そして、その視線に宿る希望を感じ取り、更に笑みを深くする。二人の仮面ライダー。その優しき心が完全に繋がり合った瞬間だった。

ジェイルラボ　訓練場。

「さ、行くわよ真司君」

「……へ～い」

準備万端といった感じのドゥーエに対し、龍騎はやる気の欠片もなく声を返す。それをトーレが聞いていれば怒鳴っただろう。チンクなら呆れながら注意しただろう。

だが、ドゥーエは何も言わず、無言で走り出した。その手にしたピアッシングネイルを光らせ、龍騎へと突き立てようとするが……。

”ガードベント”

龍騎の手に現れた盾を見て、その狙いを龍騎の体ではなく、顔へと変えた。それに若干龍騎も慌てるものの、即座にかわし、距離を取る。

だが、そうはさせじとドゥーエが走る。その爪先を突き立てんと龍騎へと迫る。正直早く終わらせたい龍騎は、いっそわざと負けるかとも考え出していた。

そんな龍騎の思考を読んだのか、ドゥーエがこう告げた。

「もし、わざと負けたりしたら、トーレが煩いわよ？」

「げっ！」

脳裏に浮かぶトーレの怒り顔。そして、そのまま説教までされる自分を想像し、龍騎は一瞬身体を震えさせる。

その瞬間を狙い、ドゥーエは爪を龍騎に突き出し――――。

「よっと」

龍騎の手にした盾に弾き飛ばされた。防具である盾を、攻撃に使った事に一瞬思考が止まるドゥーエだったが、すぐに気を取り直し、龍騎から離れた。

だが、飛ばされたピアッシングネイルを取りに行くような事はしない。それに龍騎が軽く驚いた。

「……取りに行かないのかよ」

「あら、行ったら何かする気だったでしょ？」

「……バレてるか」

龍騎の手にしているのはストライクベント。そう、ドゥーエがピアッシングネイルを回収しに行ったところに、ドラゴンストライクを決めようと考えていたのだ。

その龍騎の行動をドゥーエは内心で誉めていた。単なるお人好しではなく、戦い慣れをしていると感じたからだ。先程の盾を使った攻撃もそう。

どこかで防御にしか使わないと思っているものを、攻撃に転用し、相手の思考を乱す。その僅かな隙を突ければ完璧なのだろうが、龍

騎はそこまで戦闘の達人という訳ではない。

（でも、厄介だわ。確かにこれはトーレでも手を焼くはずよ）

ドゥーエは知らない。先程の盾を使った攻撃の後、龍騎が敢えて何もしなかったのを。その気になれば、そこでドゥーエを倒せた事を。だが、それを龍騎がしなかったのには、理由がある。それは……。

（トーレもチンクちゃんも気の済むまでやらないと納得しないんだよな～。ドゥーエさんが同じとは思えないけど、不意打ちで倒してもう一回！
とか言われても嫌だし……）

というもの。意外と考えてないようで考え、それが裏目に出る龍騎だった。

勝負は龍騎の勝利で終わりを告げた。武器を失ったドゥーエに勝ち目があるはずもなく、元々戦闘用ではないドゥーエでは限界があったのだ。

そして、決着が着いた時、どこか清々していたドゥーエに真司はこう言った。

「ドゥーエさんさ、戦いに向いてないから、これから気をつけてよ」

「……どういう事？」

「いや、スパイとかってさ。時々襲われる事もあるし、ドゥーエさ

ん女性だから。もし戦いになりそうだったら、何がなんでも逃げて」
真司はそう心から心配して言った。それをドゥーエは笑い飛ばし、そんな事はないから大丈夫と告げた。そして、ドゥーエはそのまま真司に背を向け、歩き出す。
その背中を見つめ、真司はもう一度大声で告げる。
「絶対に戦ったりしたらダメだからな～！！」
その言葉を内心鬱陶しく思いながら、ドゥーエは手を振った。何故かその真司の言葉を記憶の片隅に留めて。そして、翌日彼女は管理局への潜入任務へと向かった。

彼女が、この時の真司の言葉を思い出し、窮地を逃れる事になるのは先の話……。

――

続き。やりたかったのは、サムズアップを翔一へ教える。これ、後で恐ろしい感染度を見せます。
これでクウガ&アギト組は動き出します。龍騎はしばらくこんな雰囲気が続く……？

七話

時空管理局内　無限書庫

「どうだ。何とかなりそうか？」

「……検索魔法があるからね。ただ、色々と整理されてないせいで、時間はかかりそうだよ」

無重力空間の書庫内で、クロノとユーノは闇の書に関する情報を得ようとしていた。ただ、無限書庫は長年放置されてきたにも等しい状態だったため、ユーノから言わせてもらえば「宝の持ち腐れ」状態。

有益な情報があるにも関わらず、碌に整理もしないせいで必要な情報が見つからないのだ。

「出来るだけ早目に頼む。なのはが復帰する頃には、フェイトが動けなくなるからな」

「……先に僕って考えてたけど、ここの進行具合じゃその方がいいかもね」

「ああ。だが……まったく三人揃って何を考えているんだ」

「人助け、かな」

「……それで蒐集させるのか。君達は本当にお人好しだな」

呆れるようなクロノの言葉に、ユーノは静かに穏やかに告げる。

「……五代さんが、あの人が言ったんだ。みんなが出来るだけの無理をすれば、きっと何とかなるって」

ユーノのどこか憧れるような声にクロノは黙る。それは、クロノもその言葉に込められた想いを感じたから。きっと、五代はそれがどういう事か知っている。

でも、だからこそ言ったのだろう。それが現状を解決する一番の方法なのだと。それはクロノの口癖にもなりつつある言葉に、どこか反論しているようだった。

――いつも世界は、こんなはずじゃなかった事ばかりだ。

それを五代が聞けば「そうだね。でも……だからって悪い事ばかりでもないよ」と笑顔で言っただろう。こんなはずじゃない事は、良くない予想にも適応出来るのだから。

だが、ここに五代はいない。クロノの抱く想いを変える笑顔は、ここにはない。だが、ユーノの口を通じて言われた五代の言葉は、確実にクロノの心に届いていた。

（……五代雄介、か。冒険家と言っていたが、彼は彼なりに多くの不条理を見てきたんだろうか……）

「クロ助～」

そんな風に思考を止めていたクロノだったが、突然聞こえた声に戦慄する。そして、声のした方へ視線を向け、それが間違いではなかった事を確認した。

そこにいたのは、猫型の使い魔。そして、彼にとっては忘れる事の出来ない相手の一人。主に戦闘術を教えてもらった師匠の一人。

「……ロッテか。一体どうしてここに？」

「ん～、まぁ、お父様に言われてお手伝い。リンディ艦長の方にはアリアが行ってるよ。闇の書絡み、なんだろ？」

「……ああ。そうか、グレアム提督が……」

最後のロッテの囁きに、クロノは神妙に頷く。そして、ある人物の協力を聞かされ、クロノに驚きと喜びが浮かぶ。自分の恩人でもあり、父親の最後を看取った人物。それが、ギル・グレアムだ。

クロノにとっては、もう一人の父と呼んでもいいぐらいの関係でもある。

「クロノ、その人は？」

「お、何か獲物っぽいの発見……」

そんな二人が気になったのか、ユーノが近付き、ロッテにロックオンされる。それを感じ取り、クロノがすかさず止めに入った。

「それで、何を手伝ってくれるんだ」

「ちぇっ……何って検索だよ。人手がいるだろ？」

「そうか。なら頼む。僕は一度アースラに戻って話し合う事があるから」

クロノの言葉にユーノは疑問を感じたのか、不思議そうに問いかけた。そして、その答えにユーノではなくロッテが反応するのだが。

「何を話し合うって言うんだ」

「仮面の男への対応だ。奴の目的がはっきりしない。それを探る事もしなきゃならない」

クロノの言葉にロッテはどこか驚き、訝しむような表情を浮かべた。それを見て、クロノが何かを思い出したように告げた。

仮面の男とは、守護騎士達を監視していた存在で、何故か蒐集活動を見逃していた魔導師の事だと。民間協力者によって撃退されたが、その行動目的が不明なので、要警戒の相手である。

そのクロノの説明を聞いて、ロッテは納得し「気をつけなよ」とクロノに軽く笑いながら言った。それを同じように笑みを浮かべてクロノも応じる。

そして、クロノが去った後、ユーノとロッテは闇の書についての文献を探し出す。

（クロ助の奴、いつの間にかクライドに似てきたね。でも……）

どこか不敵に笑うロッテ。それに気付かず、ユーノは検索魔法を使って文献をどんどん分別していく。それと並行し、闇の書関連の文献を探す。その表情は、まさしく真剣な男の顔だった……。

「よく来てくれたわね。本当に助かるわ」

「いえ、私はお父様に言われただけですから」

アースラ　艦長室。そこには、リンディと猫型の使い魔で、クロノの魔法の師匠であったリーゼアリアがいた。二人は、久方ぶりの再会を喜んだのも束の間、早速本題である闇の書事件へと話を進める。

だが、その前にリンディは気になっている事があった。それは、アリアの腕の包帯である。その事をリンディが指摘すると、アリアはどこか苦笑いを浮かべた。

「実は……ロッテとの模擬戦で少し」

「あら、相変わらずね」

「どうにも接近戦はロッテに勝てなくて」

そこから話は事件の今後の動きへと変わっていく。リンディから告げられた守護騎士達の投降と協力に、アリアは驚きを隠せなかったようだが、すぐにそれも切り替えたか、リンディからの説明を聞き、納得はしたようだった。

話は更に進み、完成した闇の書に対する対応へと及んだところで……。

「艦長、今戻りました」

「ご苦労さまです」

「クロノ、久しぶり」

敬礼し合う二人。それが終わるのを待って、アリアがクロノへ微笑みかける。それにクロノも笑みを浮かべて応える。

そして、無限書庫で会ったロッテの話をし、リンディはグレアム

の配慮に感謝していた。グレアム自身も優秀な人物だが、傍にいる二人の使い魔リーゼアリアとリーゼロッテもかなり優秀な人材だったからだ。

その二人を惜しげもなく協力させてくれる事に、リンディはグレアムの闇の書への強いこだわりを感じていた。

（グレアム提督も、やはりまだあの人の事を引きずっているのね……）

十一年前、闇の書を輸送していた次元航行艦の艦長をしていたのが、リンディの夫であるクライド・ハラオウンであった。その時、艦隊の指揮を執っていたのがグレアム。

その輸送の最中、闇の書が謎の暴走を始め、クライドは艦のクルーを全て脱出させた後、自分ごと艦を撃たせたのだ。闇の書の暴走によって、艦の制御を乗っ取られ、それによる攻撃からグレアム達を助けるために。

その事を、自分と同じようにまだどこかでグレアムも引きずっている。そうリンディは思った。

「それで艦長、お話があります」

「何でしょう？」

「仮面の男についてです」

その言葉にアリアが若干表情を曇らせる。それにクロノもリンディも気付かぬように会話を進める。目的がはっきりしない事や守護騎士達を監視していたらしい事などから、敵かもしくは何かの犯罪組織の手の者かもしれないと、クロノは告げた。

それにリンディも同意し、情報を得ると共にその出方も警戒したほうがいいと改めて考え、その旨をフェイト達に告げると言った。

（そうか、クロノ達は闇の書を完成させて破壊するつもりか。それならそれで……）

クロノ達の話を聞きながら、アリアは密かに笑う。彼女達の目的。それを果たす意味でも、クロノ達の行動は歓迎すべき事だった。

だが、そこにある人物が現れた事で、アリアの表情が一変する。

「すいません。そろそろ俺達、はやてちゃん家に戻りたいんですけど」

「っ？！」

「あら、翔一さん。もうそんな時間？」

部屋に現れたのは、どこか疲れた翔一だった。と言うのも、五代と話していたらついつい話し込んでしまい、そこにやってきたエイミィから現時刻を聞いて、食堂へ行き、そこからここへ走って来たからだ。

ヴィータ達は蒐集へ向かうと言っていたが、それを今日は色々あったから休もうと説得し、なのはへの謝罪は寝てしまったため、後日すると五代に伝えてもらう事にしたのだ。

そして、リンディに転送ポートの使用と許可、それと帰りの挨拶をしにきたのだった。

「ええ。俺達も早く動きたいんですけど……今日は色々あって疲れましたし」

「そうだな。確かに貴方達は一度帰ってくれて構わない。ただ……」

「はい、蒐集をする時は必ず皆さんに連絡します。それと勝手にはしません。また明日も来ます」

クロノの言いたい事を察し、翔一はそう強く言い切った。その声と視線にリンディもクロノも安堵の表情で頷いた。

（やはり、彼なら信頼出来るな）

（まだどこか信用出来ない騎士達も、彼がいれば大丈夫そうね）

そんな二人とは違い、アリアだけはどこか翔一を睨むように見つめていた。その視線を感じ、翔一はアリアへ視線を移す。

初めて見る人物から睨まれる事に戸惑う翔一だったが、その理由を思い当たったのか、申し訳なさそうに頭を下げた。

「ごめんなさい！　初めまして。俺、津上翔一って言います」

「え？　あ、私こそ初めまして。リーゼアリアよ」

その翔一の態度にどこか驚くアリア。翔一は初対面にも関わらず、自己紹介をしなかった事にアリアが怒っていると考えたのだ。

一方のアリアは、そんな翔一の態度に戸惑うも、毒気を抜かれたのか比較的優しく言葉を返した。

その後、簡単に事情を聞き、翔一はアリア達の協力に感謝を述べ、アリアに苦笑された。そして、翔一は三人に礼と挨拶をし、そのまま部屋を後にした。

（でも、アリアさん腕に怪我してたけど……あれ、何かひっかかるなぁ……）

転送ポートへ向かう途中、翔一は何故かアリアの腕の包帯が気になっていた。彼は知らない。その答えが、この事件に大きく関わる事だとは。

一方、翔一がリンディ達と会話している頃、五代はと言えば……。

「そうですか。なのはちゃん、そんな事を……」

「本当に……私達、取り返しのつかない事をしようとしてたんだって……気付きました」

医務室の前でシャマルと話していた。なのはから言われた一言で、完全に目が覚めたと。誰かを不幸にしてはやてを助けても、はやてが喜ぶはずはなかった。その事に気付かせてもらったのだと、シャマルは真っ赤な目で語った。

それに五代は優しく笑顔を見せる。何をするにも、何に気付くのも、遅いって事はない。そう言ってシャマルを慰めた。

「だって、シャマルさん達はこれで気付いたじゃないですか。はやてちゃんを笑顔にするには、誰にも迷惑を掛けないで蒐集するしかないって。

そして、その方法はあって、リンディさん達管理局の人も手伝ってくれる。闇の書の暴走も、みんなでやればきっと何とか出来ます」

「五代さん……」

「大丈夫！　必ずみんな笑顔になれます！」

サムズアップ。それと共に見せる五代の笑顔。それにシャマルも笑顔を返す。心からそう思える。そんな不思議な力が五代の笑顔にはある。

そんな事を考え、シャマルは告げた。自分と数日は二人で蒐集に当たる事になるが、自分は戦闘向きではない。だから五代の負担が大きくなると。

そんなシャマルの言葉に、五代は少し考えて答えた。

「う～ん……その魔法生物っていうのがどんなのか分からないですけど……多分いけます」

「本当に……大丈夫ですか？」

「はい。だって俺、クウガですから」

その言葉とサムズアップ。それだけでシャマルは安心した。そう、きっと大丈夫、と。だからシャマルも笑顔を返す。そして、こう言い切る。

「分かりました。なら、サポートは任せてください。私、湖の騎士ですから」

サムズアップ。それに五代は少し驚くも、その顔は笑みを浮かべている。向け合う親指。それは、互いの気持ちを向け合うようだった。

こうして、この日は終わる。静かに穏やかに”本来の流れ”を変えて……。

「で、相談なんだけど……」

「……何です？」

「ドクターに仕事するよう言ってくれないかしら？」

ここはラボ内にある真司の部屋。そこのベッドに腰掛け、ウーノはどこか疲れたようにそう切り出した。

その発言に真司はやや驚きを見せるも、そのまま考え込む。ウーノから相談があると聞いた時、真司は何事かと思った。ナンバー1、ウーノはジェイルの秘書であり、姉妹の頂点に立っている。

更に、真司の面倒もさり気無く見てくれる優しい美人。それが真司の印象。だからこそ、そんなウーノが弱くなっているのが、真司には驚きだった。

（ウーノさんって、完璧人間だと思ったんだけど……あ、玲子さんと同じか）

元いた世界での上司に当たる関係だった女性。その彼女も自分からは欠点がないように見えたが、その内実は繊細で複雑だった事を真司は思い出した。

出来る女性程、ストレスを溜め易いのかもしれない。そう考え、真司はウーノを少しでも楽にさせようと立ち上がって断言した。

「分かった！　俺がジェイルさんを仕事するようにしてみせる」

「……よろしく頼むわ」

そう答えるウーノは、どこか投げやりな声だった……。

「……で、君がいるのか」

「そうだ！　ジェイルさんさ、ちゃんと仕事してくれよ。ウーノさんだけじゃなく、クワットロにまで頼まれるなんてよっぽどだぞ」

ジェイルの研究室。そこには、ややうんざり顔のジェイルと、やる気満々の真司がいた。ウーノに頼まれ、研究室へ向かっている途中、クアットロに遭遇した真司だったが、ウーノから頼まれた事を話すといつもの間延び口調ではなく、割かし本気で言われたのだ。

ジェイルに真面目に仕事させてくれたら、前々から言っていた調理器具を何とかしてやると。真司の現状での不満は料理。何せ、栄養さえ取れればいいとジェイル達が考えているため、美味しくないのだ。

故に真司は得意の料理を作り、全員に美味しいものを食べる喜びを教えたいと常々思っているのだ。そのために、まずは道具が欲しいとウーノやクアットロに言っていて、それを叶えてくれるとの発言に、真司は凄まじいやる気を出していたのだ。

「私はちゃんと仕事しているよ。ま、残りの娘達と君のシステム解析に時間は取られているけど」

「それが問題なんだって！　せめてライダーの方は中止してさ、元からの仕事してくれよ」

「嫌だ。私は私のやりたい事をやる。いくら君でも、それだけは譲らないよ」

どこか勝ち誇ったように笑みを浮かべるジェイル。それに真司は頭を抱えそうになるが、ふと良い事を思いついたといった顔でジェイルにこう言った。

「仕事片付けてくれたら、サバイブ見せてもいいよ」

「本当かいっ？！」

真司の発言にジェイルは子供のように身を乗り出した。それにどこか驚くも、真司は首を振ってそれを肯定する。

そして、ジェイルに対してこう言い切った。ただし、完全に仕事を片付けたとならないと見せてやらない、と。

それを聞き、ジェイルはそれまでののんびりが嘘だったかのように、凄まじい速度でコンソールに向かって指を動かし出した。もう、真司が目に入っていないかのように。

それを確認し、真司は満足そうに頷いて部屋を出た。そこに何故か立っていたウーノ達四人にVサインを見せる真司。それをそれぞれが安堵の表情を浮かべた。

こうしてジェイルの仕事が滞る事はなくなったのだが……。

「なぁウーノ。もう仕事は片付いたと思うんだけど……」

「ええ。こちらの分は、ですね。まだ追加分がありますのでこちら

も」

そう、ジェイルの仕事が完全に片付く事などないのだ。真司が、それを理由にサバイブを見せなかったのも当然。全ては、ジェイルに仕事をさせるための作戦。

ジェイルが真司の目論見に気付いた時には、もう遅かった。ウーノやクアットロから入れ知恵された真司は「仕事をサボったら二度と見せない」と告げて、ジェイルの逃げ道を塞いだのだ。

だけど、そう言われた後もジェイルはどこか上機嫌だった。

(真司に一杯食わされるとは……ね。中々強かだね、彼も)

そう思い、ジェイルは楽しそうに笑う。それは、軽い悪戯をされた事に気付いた者が、どこか憎めずにする表情にも見えた。

――

続き。やりたかったのは”だって俺、クウガだし”です。

これがあっての五代。そして、静かに広がるサムズアップ。いつか、これをアギトと一緒にやるかなぁ……。

八話

あの日から五代達の蒐集活動は始まった。それぞれが分担し、毎日蒐集を行なう事で少ないページ数でありながらも、着実に蒐集は進んでいった。それと並行する形で、なのはとフェイトのはやてとの交流も始まり、ヴィータとシャマルが仲介役となり、はやてにとっても新しい友人を得た事は喜ばしい事だった。

そして、なのは達がすずかとも友人と分かり、はやては一気に友人との輪が広がった事に心からの笑顔を見せた。

「ほんなら、これからよろしくな。なのはちゃん、フェイトちゃん」

「うん。また遊ぼうね、はやてちゃん」

「またね、はやて」

少女達の繋がり。結ばれる笑顔と笑顔。だが、その裏側では……。

「五代さん、気をつけて！」

「来んぞ！」

「はいっ！」

シャマルの援護を受け、ヴィータと共に雄介が……。

「来るぞ、翔一！」

「気をつけろ！」

「分かりましたっ！」

シグナムとザフィーラと共に翔一が……。

「「変身っ！」」

そんな少女達の笑顔のために戦っていた。その身に宿した”力”と”想い”を振るって……。

五代達が蒐集活動を始めて、既に一ヶ月以上が経過した。なのはとフェイトの蒐集も終わり、二人も完全に現場に復帰していた。ユーノも無限書庫での検索を一区切りつけ、やっと蒐集を受ける事となり、三人だけで約四十ページも稼いだ。

残りのページも半分を過ぎ、管制人格の覚醒まで後五十ページを切った。そして、現在持ち上がった難題は、はやてへの事情説明と、闇の書の暴走をどう対処するかであった。

管制人格の起動には、主の承認が不可欠。そのため、そろそろはやてへ蒐集している事を説明しなければならない。それと現在、闇の書が完成する事で分かっているのは、恐ろしい災害を招き、下手をすれば地球だけでなく、他の次元世界まで消滅させてしまうだろうとの事。

それをどうにかする術はないのか。それをリンディ達は守護騎士達に聞いているのだが、記憶からその暴走自体が抜け落ちていたため、シグナム達にも有効な手立てが見つからないとの事。

しかも、ユーノが見つけた文献によれば、闇の書は元々『夜天の魔導書』と呼ばれ、その目的もあらゆる魔法を記録する図鑑に近い

ものだった事が判明した。そして、それと同時にシグナム達も思い出した事があった。

「転生か……」

「ああ。だから単に破壊するのではダメだ」

転生機能。それを聞き、リンディ達も思い出したのだ。十一年前にアルカンシェルにて破壊された闇の書が、何故元通りに再生していたのか。

そう、その機能を根本から破壊するか、もしくは修正するしかないというのがユーノが出した結論だった。

というのも、闇の書とよばれるキッカケは、何代目かの主が改竄した結果によるバグだったのだ。それを聞き、リンディ達も守護騎士達が蒐集完了後の事を記憶していなかったのも、バグによる影響と結論付けた。

「はやてちゃんを助けて、夜天の書を元に戻す手段があればいいんですけど……」

「そうだね。それが……一番だね」

翔一の言葉に五代も頷く。そしてそれは、その場にいる全員の総意でもあった。だが、その方法が思いつかない。リンディ達もシグナム達も何も言わない。

何が原因で闇の書と呼ばれるようになったのかは分かった。しかし、それに対しての有効的な手段が見つからないのだ。現在、アースラの艦長室で行なわれている会議に参加しているのは、守護騎士達と翔一、リンディとクロノ、エイミィ、そして五代という面々。

なのは達はアリアとロッテの二人に頼み込んで、現在訓練中なの

だ。

「……そういえば、少し思いついた事があるんですけど……」

五代が呟いた言葉に全員の視線が向く。それに五代は、どこか自分でもまだ分からないという風に告げた。

「封印って事なら……クウガの力で何とかなるかもしれない」

「どういう意味か教えてくれますか？」

不思議そうなリンディの言葉に、五代は記憶を呼び覚ましながら話し出した。

「クウガの敵……っていうか戦った相手を倒す時、必ず浮かび上がる文字があって」

「文字？」

クロノの言葉に五代は頷き、昔桜子に尋ねた事を話し出す。クウガが未確認を倒す時、相手に必ず浮かび上がる文字の意味を。

それは、鎮めるという意味だそうで、おそらく古代のクウガが未確認を長きに渡り封じ込めていた事からも、クウガには邪悪を封印する力があるかもしれないと五代は語った。

それがもし闇の書にも効果があれば、封印を出来るかもしれない。そんな話を五代はしながら言った。可能性が少しでもあるなら、これに賭けさせてほしいと。

それを聞き、真っ先にそれに賛成したのは翔一だった。彼は語る。自分がいた世界で猛威を振るった未確認生命体を、たった一人で戦

い抜いたクウガ。その力は、絶対にどんな闇ですら封じ込めると。
そして……。

「それに、今は俺が……仮面ライダーアギトがいます！」

「仮面……ライダー……？」

「あ、それ初めて会った時、仮面の男に言ってたやつだよね！」

翔一の発言に全員が首を傾げる中、五代だけが思い出したように答えた。それに翔一も頷き、簡単にそう名乗る事になった経緯を話す。

その内容に驚き、そして誰もが言葉を失う。人知れず、平和のために怪物と戦い続けた男達。それが仮面ライダー。

翔一は、その名を過去のアギト達が名乗るのを聞き、自分も彼らのように”心強くありたい”と思って名乗る事にしたのだと。

（そうか……翔一の世界には、そんな生き方をした者達がいたのか……）

（あたしらよりもある意味過酷だったろうに……すげぇな）

（私達も修羅場と呼べる戦場を経験してきたけど……たった一人でなんて）

（騎士……いや、戦士と呼ぶに相応しい”漢”達なのだろうな。願わくば、一度会って話を聞いてみたかったものだ……）

シグナムを始めとする守護騎士達は、長きに渡る戦乱を生きてきたが故に、その生き様に敬意を払い……。

（人外の力……姿……その哀しみを噛み締めて、たった独り、人々のために戦う。私達管理局も見習いたいわね、その強い心を……）

（強大な力に溺れず、それを誰かを守るために使う、か。本当にヒーローそのものじゃないか……）

（何も知らない人が聞いたら笑うんだろうな。でも、あたしは笑わない。五代さんや津上さんがいるんだから……ね）

平和を守る事に携わるリンディ達にとって、その選択がどれ程厳しいかを想い、密かに尊敬の念を抱き……。

（他にも未確認みたいなのがいたんだ。そして、それを倒していたクウガみたいな人達がいた。戦う事を決意したのは、きっと……）

（アンノウンも、もしかしたらあいつらの生き残りだったのかもしれない。そして、あの人達が戦っていた理由は……そう……）

二人の仮面ライダーは、その自分達に近い存在に親近感と同時にある事を想う。

（（みんなの笑顔のために……））

その戦う理由。それは、おそらくそのためだと。誰にも知られず、戦い続けられる理由。その根底にあるものは、その原動力はきっと自分達と同じだったはず。

そう想い、五代も翔一も改めて誓う。この力を”笑顔”のために使う事を。自分達を人知れず守っていた存在に応えるために。

て。

――”仮面ライダー”として

いつものように食堂に集まるジェイル達。だが、そこに並んでいるのは、いつもの栄養食ではない。半透明の皮で包まれた餃子。それがスープに入ったものと、焼いたもの。そして、蒸したものが並んでいる。それとウーノに無理を言って手に入れてもらった白米。それを大盛りに盛った白いご飯。そして、卵を使った簡単な中華スープ。

スープ以外初めて見るもの料理に、全員がどう反応するべきか迷っていたが、それを急かすように真司が言った。

「ほら、早く食べてみなって！　本気で旨い……って思うから！」

その真司の言葉に真っ先に動いたのはチンク。手にしたフォークを焼き餃子へ突き刺し、真司特製のタレをつけて口へ入れた。それをどこか固唾を飲んで見守るジェイル達。真司はそんな反応にどこか心外だという表情。

やがて、焼き餃子を飲み込んだチンクが、静かにフォークを置き、立ち上がって真司に向けて頭を下げた。

「すまん……私が悪かった。一瞬でもこれを、不味いかもしれんと疑った私を許してくれ」

「チンク……？」

「旨いだろ？」

「ああ。これが”美味”という事なのだな」

「っよし！」

笑顔で告げたチンクの言葉に真司がガッツポーズ。それを聞いて、トーレもフォークを焼き餃子に突き刺し……。

「う、旨い……」

「驚いた……本当に真司さんって料理が得意なんですね」

「信じられないけど……美味しいわぁ」

「真司は凄いね。どうやってこれほどの腕を？」

次々と食べては称賛していくジェイル達。真司一番の自信作。それが餃子だった。その美味しさに、ジェイル達が驚愕と感激を表しながら、次々に餃子を食べていく。それを見つめて、真司は笑顔で告げた。

「さ、どんどん食べてくれよ！　まだ追加あるからさ」

こうして、真司の料理係が確定し、ジェイルを始めとした全員は、決まった時間に食事をする事にされ、箸を使う事も基本となる。

そして、その食事作法もいつしか真司に厳しく言われる事になる。

具体的には食べる前には「いただきます」と言い、食べ終わったら「ご馳走様」を言う事。それにジェイル達は段々と染まっていき、セインやディエチが加わる頃には、それは当たり前になっていたり

する。

そして、餃子はかなり大目に作ったにも関わらず、全て完食された。それに真司が満足そうに頷いて、残った食器を片付けようとして……。

「真司、片付けは私がやろう」

チンクにそう声を掛けられた。それに真司は少し驚きながらも振り返り、不思議そうに尋ねた。

「いや、それは嬉しいけど……何で？」

「何、美味しい物を作ってもらった礼だ」

「そっか。なら、手伝ってくれよ。俺一人でやるより、その方が早く終わるしさ」

「だから……はぁ、まぁいいか。そうだな、二人でやろう」

真司の言葉にチンクは一瞬何か反論しかけるが、それを思い留まり、やや呆れた表情を浮かべて頷いた。

「うし。じゃあ、俺が洗うから、チンクちゃんが拭いてくれ」

「ああ、了解だ」

そう言いながら、真司は食器を手にして歩き出す。それに笑みを浮かべて、同じように食器を手にしてついて行くチンク。それを眺め、クアットロが呟いた。

「なんか……あれじゃ兄妹ねぇ……」

「否定は出来ん。チンクは真司を慕っているからな」

「あら？　トーレは違うの？」

「……私は慕ってなどいない」

そう言い切って、トーレはそのまま歩き出す。そして、やや歩いたところで、ウーノ達に背を向けたままで告げる。

「……まぁ、認めてはいるがな」

そう言って、トーレは再び歩き出す。その去り行く背中を見ながら、ウーノとクアットロは笑みを浮かべる。その言葉がトーレの照れ隠しである事を理解しているからだ。

だからウーノの笑みはどこか微笑ましく、クアットロはどこかからかうように、それぞれ笑っている。だが、そんな風に笑う二人をジェイルは楽しそうに見ていた。

（やれやれ……いつの間にかウーノやクアットロまでこんな顔をするようになるとはね。真司の影響かな……？　困ったものだ。確かに生命の揺らぎは見ていて興味深いが、このままだと問題になるかも……ね）

そんな事を考えるジェイルだったが、その彼の表情もどこか嬉しくて堪らないという顔をしているのだった……。

「……これでラスト」

「そうか」

真司から手渡される皿をチンクは軽く背伸びをして受け取った。最初、真司は少し屈んでそれをしようとしたのだが、チンクが背丈の事を気にしている事を思い出し、皿をやや下に出す事で、チンクに配慮する事にした。それをチンクも分かっていたが、それでも僅かに届かず、背伸びをして受け取っていた。

拭き終わった皿を棚にしまうのは真司の役目。チンクは流石に届かないので、そこは真司に委ねた。だが、その顔はどこか悔しそうだったが。

「……真司、少しいいか？」

「ん？　どうしたの、チンクちゃん」

「だからちゃん付けは……いや、もういい。聞きたい事があるのだ」

真司の呼び方に異議を申し立てようとして、チンクは首を振った。それを言い出すと長くなり、尚且つ無駄に終わるからだ。

チンクはそう思い出し、真司へ本来の目的を話すべく、そう切り出した。それに真司は、不思議そうな顔をして頷いた。

「……いいけど……何？」

「どうしてお前は、仮面ライダーになったのだ？」

「どうしてって……」

チンクの疑問に真司は困ったような表情を浮かべる。それは、真司にとって答え難い質問だった。彼が仮面ライダーになったキッカケは、モンスターに襲われる人達を守るためだった。だが、戦いを続けていく内に真司は知ったのだ。仮面ライダーに課せられた悲しい宿命を。

それは、他の仮面ライダーを倒す事。それは、その見返りとして得る権利を求めているからだった。

何でも願いが叶う。それを理由に多くの者がライダーの力を手に入れた。真司は、最初それを止めようとしていた。だが、自分が初めて出会ったライダー、ナイトである蓮は、それを「無駄だ」と切って捨てた。誰かに言われて止めるようなら、最初から戦う事など選ばない、と。

（蓮だけじゃない。みんながみんな、戦う理由があった。ライダーになって、叶えたい願いが……）

それは愛する者を目覚めさせる事であったり、不治の病への対抗策であったり、あるいは終わらない戦いであったりする。真司も全てのライダー達の願いを知る訳でない。だが、己が命を賭けても叶えたい願いがある事は知っている。

だからこそ、チンクの質問に答え難いのだ。真司には、他のライダーを倒してでも叶えたい願いがなかったのだ。

（俺は……仮面ライダーになった気でいるだけで、ホントはまだなってないんじゃないか……？）

「どうした？　な、何か言い辛いのなら別に……」

真司が珍しく複雑な表情で考え込んだのを見て、チンクは慌てるようにそう言い出した。だが、それすら真司は聞いていなかった。

（俺の願い……俺の叶えたい事……それは……あっ！）

「俺がライダーになったのは、戦いを止めるためだ！」

「答えなくても……何？」

「誰も殺されない。誰も泣かない。そんな夢みたいな世界。そうだ……そうなんだよ！　俺の願いは、ライダー同士の戦いを止める事！」

「ど、どうしたんだ真司。何を言って「ありがとうチンクちゃん！　おかげで俺、分かったよ！」

突然興奮したように言い出した真司。その内容は、チンクにはあまり理解出来なかったが、それでも自分の問いかけが、真司の役に立ったらしい事は分かった。

喜び、自分の手を握る真司にどこか呆れながらも、チンクは、真司の言った仮面ライダーになった理由をきちんと聞いていた。

（戦いを止めるため、か。真司、それは……いつか私達と……いや、そうと決まった訳ではない！　そんな事あってなるものかっ！）

チンクの脳裏に龍騎と対峙する自分達の姿が浮かぶ。その想像を振り払うようにチンクは首を振った。それを見て、真司がやっと落ち着いたのか、不思議そうにチンクを見つめた。

「どうしたチンクちゃん。俺、何か嫌な事でもした？」

「いや、違う。それよりも、まだ聞きたい事がある。長くなるだろうから、ここでは何だし、私の部屋へ行こう」

「それはいいけど……チンクちゃんは女の子だし、部屋に男入れるのは不味いっしょ。だからさ、俺の部屋にしよう。あ、コーヒーとか淹れるよ。それと何かお菓子でも持ってさ」

子供のように笑う真司。それにチンクはやや苦笑するも、頷いて歩き出す。その後を追うように真司も歩き出し、慌てて元の場所へ戻り、棚から二人分のカップを取り出す。

それを見て、チンクは笑みを浮かべつつ「菓子はクッキーで頼む」と告げて、スタスタと行ってしまう。それを見て真司は「ちょっと！　俺、今両手塞がってるんだけど？」と言うが、チンクは「片手で二つ持てばいい」と告げて離れていく。そんな態度にも関わらず、真司はブツブツ文句を言いながら、棚から皿を出してクッキーを並べる。

そして、カップにコーヒーを淹れながら、横目で離れたチンクを見て呟いた。

「……クッキー、か。チンクちゃんも、やっぱ女の子だよなぁ」

ちなみに、チンクが真司に聞いた事は住んでいた世界の事だった。懐かしそうに話す真司を見て、チンクは微かに悲しみを滲ませながらも、微笑みを浮かべて聞いていた。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

続き。やりたかった事は”仮面ライダー”の持つ意味。そして、何故そう翔一が名乗るように思ったかを俺なりに考えました。

基本として、歴代ライダーは五代や翔一、真司と同じく戦いを止めるために、戦いへ身を投じたと思います。

その根底にあるものは、若干違うかもしれませんが、簡単に言えば”みんなの笑顔”のためと言えると思うので。

人によって、感じ方や考え方は違うかと思いますが、少なくとも昭和ライダー達は全員にそこへ行き着くかと、俺は考えてます。

九話

八神家　リビング。そこでは、シグナム達と翔一がはやてに現在の状況を説明していた。はやての体を闇の書――夜天の魔導書が浸食している事。それを止めるために管理局やなのは達が協力し、蒐集を行なっている事。そして、その夜天の書のバグを直せるかもしれない管制人格の起動を許可してほしい事。

それを全て話し終え、シグナム達ははやてを見つめた。はやては何も言わず、俯き黙って話を聞いていた。そして、小さく何か呟き顔を上げた。

「まず、何でわたしに教えてくれんかった」

「そ、それは……」

「それは何や？　わたしが禁止って言ったのを意識してやな？　わたしに気ぃつこうてそうしたんやろ。違うか？」

はやての言葉に誰も何も言わない。その通りだったからだ。その沈黙が答えと理解したのだろう。はやては瞳一杯に涙を浮かべ、大きな声でこう叫んだ。

「何でや！　どうして相談してくれんかった!?　わたしを大事に思っとるなら余計や！　わたしら、家族やなかったんかっ!!」

「はやてちゃん……」

その痛々しいはやての叫びに翔一は心が痛かった。誰よりも家族に憧れていた少女。翔一は思い出す。自分がはやてと出会った日の

事を。それは今から半年以上も前の事……

「本当に色々凄い戦いだったな……」

邪眼との戦いを終え、バイクで帰路を行く翔一。途中まではギルス――葦原涼もいたのだが、また旅を続けると言って先程別れた。一度、店の方にも顔を出すと言っていたので、また会えるだろうと翔一は思い、スピードを上げようとして――突然視界が真っ白になった。

（何だっ?!　この光は?!）

そして、光が収まった時、翔一の目の前には先程の景色ではなく、見も知らない景色が広がっていた。何しろ、先程までは無人の道路を走っていたのだ。それがいきなりどこかの街中だ。流石に翔一もこれは参ったようで、ヘルメットを取り、周囲を見渡す。

文字は日本語だし、周囲を歩いている人も日本人ばかりなので日本なのは間違いない。そう判断し、翔一はとりあえずバイクを置いておける場所を探して走り出した。

しばらく走り、ここが海鳴という町である事。そして、どうやら自分がいた世界とは違うという事が分かった。何しろ翔一が店へ電話をかけても繋がらないどころか、使われていないと返ってきたのだ。

次に翔一が訪れたのは図書館。そこで新聞を見て翔一は自分の予想が正しい事を知る。何しろアギトの事どころかアンノウンや未確認の事さえ記事には載っていなかったのだ。

（……これは……邪眼の仕業なんだろうか……？）

時空を歪ませ、現在と過去を繋いだ邪眼。もしや邪眼がまだ生きていて、自分を異世界に送り込んだのでは。そんな考えが翔一の中に生まれるが、そんな事はないと思い直し、翔一は思考を切り替えようとする。すると、視線の先に車椅子の少女がいた。少女は棚の上の方を見つめて動かない。

「あ……届かないんだ」

そう呟くや否や、翔一は少女が見つめる棚から本を取って少女に手渡した。それに驚く少女。翔一は笑顔でそれを見つめるが、何故か少女は中々本を取ろうとしない。

どうしてだろうと翔一が首を傾げると、少女が申し訳なさそうに「あの……私が取りたかったのはそれちゃうんです」と言った。それに翔一はしまったという顔をし、その本を戻す。

「……ごめん。どれか教えてくれる？」

「あ、ええっと……その右です。あ、それやなくてその……そう、それです」

「えっと……はい、これ。でも、図書館に来るなんて偉いね。お母さんと一緒に来たの？」

その何気ない翔一の一言に少女の顔が微かに曇る。それを感じ取り、翔一は少女が何か言う前に慌てて頭を下げる。

「ゴメン！　辛い事聞いたみたいだね」

「ええんです。それにしても……お兄さんは良く来るんですか？何や昔の新聞とか探しとったみたいやけど」

「あれ？　何で分かったの？」

「やって、来るなり係員の人に、ここ二、三年の新聞ありませんか言うてたから」

そう言って笑う少女。それに翔一も安堵し、笑みを浮かべる。

「あ、そや。ここで会ったのも何か縁や。わたし、八神はやて言います。お兄さんの名前は？」

「え、俺？　俺は津上翔一。よろしくはやてちゃん」

これが、翔一とはやての出会い。そして、はやては翔一が行く宛のない人間と知り、その話を詳しく聞いて決断する。翔一を自分の家に住まわせる事を。翔一はその申し出を有難がったが、流石にそれは色々と問題があると遠慮した。はやてはそんな翔一に、せめて一晩だけでもと言って中々退かなかった。

翔一は、それがはやての寂しさから来るものだと思い、なら一晩だけと受ける事にしたのだ。

そこからは、はやての孤独感を知った翔一の優しさが炸裂した。はやてに泊めてもらう礼と言って作った料理に、はやてが驚き、翔一が店で働いていたコックだと分かると、レストランの味やと嬉しそうに言って翔一を喜ばせた。

そして、はやてがたった一人で暮らしている事を知り、翔一は悩んだ。はやては、出来れば元の世界に戻るまでいて欲しいと懇願したからだ。

翔一にとってそれはとても有難い事だった。でも、はやてと何の関係もない自分が一緒に住む事が許される訳がない。そう思った時、翔一はかつての自分を思い出した。

記憶を失った自分を暖かく迎え入れてくれた真魚達。それとはやてが同じに思えたのだ。

（記憶を無くした時は、先生達。帰る道を無くした時は、はやてちゃんか。俺、本当に人に恵まれてるんだ）

こうして、翔一ははやての申し出を受ける事にした。その時はやてが言った言葉。それが――。

「なら、これで翔一さんはわたしの家族。そうやな……翔一さんやと他人過ぎるから、翔にぃでどうやろ？」

こうして翔一ははやての家族となった。それから少ししてシグナム達が現れ、八神家は一気に賑やかになったのだ。

そんな事を思い出す翔一。はやてにとって、自分達がどんな存在だったかを改めて感じ、心からの想いを込めて翔一は告げた。

「本当にごめん！　はやてちゃんに黙ってた事は確かにいけない事だった。でも、これだけは信じて欲しい。シグナムさん達は、はやてちゃんを家族だと思ってるからこそ、内緒にしたかったんだ。出来るならはやてちゃんが知らないまま終わらせたかったから」

「それでも、わたしは……わたしは……」

「ごめんね。俺達、はやてちゃんを助ける事ばかり考えて、肝心のはやてちゃんの気持ちを考えてなかった。本当に……ごめん」

「主、お許しを。我々が、間違っていました……っ！」

「はやてちゃんに、寂しい想いをさせてるって知ってたのに！　私達、それを……それを……っ！」

「はやて……ホントごめん。ごめんよぉ～！」

「主のためにと思ってした事が、苦しめる事になっていた事に気付けず……我らは家族失格です」

「翔にぃ……シグナム……シャマル……ヴィータ……ザフィーラ……ええよ、もうええ……もう、ええから」

そう言ってはやては翔一達へ手を伸ばす。それを翔一はしっかりと掴み、優しくはやてを抱き寄せた。それにはやては涙を流し、抱きしめる。それにヴィータも涙を流し、はやてにしがみついた。シャマルやシグナムも涙を流し、ザフィーラも静かに涙を流す。

黙っていた方がいいと判断した自分達の浅はかさを感じ、優しいはやてに辛い想いをさせていた事を痛感したのだ。

こうして、はやてへのシグナム達の隠し事は消えた。そして、それと同時に八神家に新しい家族が増える事になる……

翔一達がはやてに事情を説明している頃、五代はと言うと……

「それで明日も出かけるのか？」

「そう。ごめんねイレイン。中々ストンプ見せてやれなくて」

「べ、別にいいって言ってんだろ。それを楽しみにしてんのはファリン達だからな！」

そう言って顔を赤めるイレイン。彼女は、自動人形と呼ばれる存在。そして、そもそもは、ここ月村家を襲撃に来た刺客でもある。

五代が月村家で世話を受ける事になったのは、良くも悪くもイレインが原因なのだ。

簡単に言えば、偶々五代はイレイン達が月村家を襲撃していた時に近くを歩いていた。そして、それを止めるべくイレイン達と戦った。それだけ。そして、それがキッカケでイレインは月村家でメイドとして雇われ、五代は月村家に居候する事になった。

その際、五代とイレインが因縁めいた関係なのを面白がった忍が、五代専属メイドとして任命し、現在に至る。

確かに自動人形であるイレインの力は強かった。だが、五代はクウガである。そう、月村家の者達は、五代が普通の人間ではないと知っているのだ。

何せ、燃え盛る炎の中、クウガとイレインが戦うところを忍達は見ていたのだから。

「そっか～、でもイレインも見たいって思ってくれてるよね」

「ま……まぁな」

「そっか。よし、じゃぁ、早くこのお手伝い終わらせて、ストンプ

見せるから」

サムズアップ。それを見て、イレインはそっぽを向くが、その右手は同じようにサムズアップをしている。

それを五代は嬉しそうに見つめ、笑顔を深くするのだった……

「仮面ライダー……か」

「そう、異世界で怪物と戦ってた異形の存在……になった人間達だって」

アースラ艦内にある休憩所。そこに二人の使い魔がいた。リーゼアリアとリーゼロッテである。彼女達もリンディ達から翔一の話を聞き、感じる物があったのだ。聞けば、五代も翔一も望んでその力を手にした訳ではない。恐ろしい怪物を相手するため、仕方なくその力を手にしたと、そう二人は考えていた。

「……その人達からしたら……私達、何て言われるのかな……？」

「犠牲を出そうとしてる事を……かぁ。きっと、止めようとするんだろうね」

「でもそれじゃあ……」

「大丈夫」

ロッテの言葉に何か言いかけたアリアだったが、それを遮るようにロッテが言った言葉と仕草に、それが止まった。

ロッテのしたのはサムズアップ。その表情は笑顔。だが、それをロッテは自嘲気味に笑ってやめた。

「……って、あの五代って奴なら言うんだろうね。そして、きっと何とかしようとするんだ」

「何とかって……相手は闇の書よ」

「それでも……だよ。あいつら、仮面ライダーはそういう存在なんだろ、きっと」

「……闇を打ち砕く、正義の光……」

そう呟いてアリアとロッテは天井を見上げる。出会って一月と少し。五代達とも、蒐集活動やその手伝いで何度となく顔を合わせ、交流を深めた。そして知ったのは、五代達の想いと守護騎士達の想い。かつての自分達を悔いながら、罰を受けるのは自分達だけでいいと、はやてを助けようと必死に足掻く四人。それを支え、何とかはやてを助けようとする五代達。

それを間近で見て、感じ、二人は主人であるグレアムに伝える事を悩んでいた。このまま、五代達の計画を支援したいと思ってきている事を。

管制人格が起動すれば、否応無く蒐集完成後の話になる。完全封印を考えるグレアム達にとって、その完成の瞬間こそ一番狙う機会なのだ。

だが、もし五代の、クウガの力が本当に闇の書に効果があるのなら、それに賭けたい。誰も犠牲にせずにすむのなら、それが一番いいのを二人も理解しているのだ。

（お父様……私は……）

（お父様、あたしどうすればいいの。あいつらといると、覚悟がどんどん鈍ってくよ……）

そんな二人に答える者はいない。まるでその答えは、自分達の中から見つけ出せと言われたように……

ジェイルラボ　訓練室。そこに何故かやや元気のない龍騎と巨大な砲身を構えた少女がいた。その少女の前には、緑髪の活発そうな少女もいる。

「セイン、ディエチ、真司はあんな奴だが、意外と手強い。心してかかれ」

「うぃ～す」

「了解」

トーレの声にナンバー6、セインはどこか楽しそうに。ナンバー10、ディエチは無感情に近い声で答えた。活発な少女がセイン。砲身を構えているのがディエチである。

対する龍騎だったが、そんな二人とは対照的にやる気のやの字もなかった。

「真司、始めるぞ」

「……何で戦うのさ。俺、今日はトーレ達とやったからいいって言ったのに」

チンクの声に龍騎はそう不貞腐れるように返した。そう、龍騎はつい先程、トーレとの模擬戦を終えたばかりなのだ。しかも、チンクを交えての激しいものを。それが終わり、ゆっくり休みながら風呂にでも入ろうとしていた矢先、ジェイルが二人を連れてきた事に、今回は端を発する……

「じゃ、自己紹介をしなさい」

「は～い。あたし、セイン。ＩＳはディープダイバー。ま、簡単に言えばどこでも潜れますよ～ってとこ。よろしく真司兄」

「し、真司兄？」

「そ。だって、ウー姉達がさんとかちゃんで呼んでるみたいだし」

そうからからと笑うセイン。その明るさが今までいなかった性格だからか、真司も嬉しくなり笑顔を浮かべる。それに一人っ子だったため、真司は密かに兄弟に憧れていたのもあり、セインの呼び方も受け入れる事にした。

そのやり取りが落ち着くまで、もう一人の少女は大人しく待っていた。そんな少女に真司は意外な印象を受けた。何せ、ナンバーズは皆個性豊かで、自我が強い者達ばかりだったからだ。

「えっと……初めまして。あたし、ディエチです。ＩＳはヘビィバ

レル。簡単に言えば……砲撃、かな。よろしく真司兄さん」

「よろしく、セイン、ディエチ」

「……何故私はちゃん付けで、二人は呼び捨てなのだ」

笑顔で答える真司を見つめ、こっそりとチンクがそう呟いていた。その周囲からは負のオーラが出始めているが、生憎それに真司は気付かない。それを横目にしながら、トーレはジェイルへ問いかけた。用件はこれだけですか、と。それにジェイルがとても良い笑顔で告げたのだ。

「今から真司と二人に戦ってもらいたいんだ」

こうして、冒頭へと戻る。トーレとチンクの二人を相手に戦った真司は、それはもう疲れていた。そのため、本来なら余裕で戦えるはずのセインとディエチ相手に苦戦していた。

動きは散漫、注意は怠る。挙句にセインにストライクベントを奪われる始末。だが、全員が目を見張ったのはディエチが全力で放ったヘビィバレルの攻撃を、龍騎が耐え凌いだ事。

ガードベントで呼び出した盾を二つ、隙間なく地面に突き立て、それをしっかりと手と体で支えたのだ。さしものドラグシールドも壊れはしなかったものの、あちこちが溶けており、ディエチの攻撃力の高さを龍騎は思い知った。

だがそれでも、龍騎はあまり衝撃は受けなかった。何故なら……

（ま、北岡さんのファイナルベントよりマシだな）

龍騎の脳裏に甦るゾルダのファイナルベント”エンドオブワールド”。あの攻撃に比べれば、ディエチの攻撃は可愛いものだと龍騎は思い、一人頷く。

一方で衝撃を隠しきれないのはジェイル達だった。単純な攻撃力でいえば、今の一撃は現在のナンバーズでトップクラス。それを龍騎は防ぎ切ってしまったのだ。それが意味するものは、龍騎はSランク級の砲撃を単身で防ぎ切れるという事。

（いやぁ～、良い物を見せてもらった。でも……今でこれなら、一体サバイブはどれ程の力を持ってるんだろうねぇ……）

（これが真司の底力か……？　いや、まだ分からん。それにしても……あれ程戦闘中に気を抜くなと言っているのに！）

（あれを耐え切るか。真司の奴、流石だな。私のＩＳが通じないはずだ）

ジェイル達はこれまでの事も含め、色々と考えを抱き……

（嘘でしょ？　あれ喰らって無傷なんて……真司兄、カッコイイよ！）

（あたしの最大出力だったのに……でも、真司兄さんが無事で良かった……）

直接対峙した者達は、初めて見た龍騎の力を前に感動と安堵を覚えていた。

「……もうこれでいいだろ？　俺、風呂入りたいんだけど……」

そんな中、さっさと変身を解いて真司は告げた。その表情はかなり疲れていた……

おまけ

「は～……良い湯だな」

「おっ邪魔しま～す！」

「へ？」

「真司兄！　背中流したげるよ～」

「な、何でセインがここにっ？！」

「だ、だから止めようって言ったのに……」

「ディエチまで？！　てか、少しは隠せ！」

「あ、真司兄ってばスケベ。あたしの体そんなに見ないでよ～」

「だから……あたしは……」

「だ、誰かセインを止めてくれ～！！」

セインはその後やってきたチンクとトーレに鎮圧され、ディエチは軽いお叱りだけですみました。

真司？　……顔を真っ赤にしたトーレとチンクに何故か成敗されました。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

やりたかった事は、翔一とはやての出会いと五代が何故月村家で世話になっているかです。

え？　真司の風呂だろって？　……ソンナハズナイデスヨ？

しかし、さり気無く原作よりも早くセインとディエチが起動した事がどんな影響を与えるのか。

十話

「えっと……夜天の書やと呼び辛いから……リインフォースはどうや？」

「……管理者権限により、名称変更確認しました。はい、私はリインフォースですね、主」

「祝福の風、ね。良い名前だと思うわ、はやてさん」

「いや、そんなんでも……リンディさん達も呼び辛いやろ思て」

アースラ艦内　艦長室。はやてを加えた今回の関係者全員が見守る中、管制人格が起動し、はやての提案により名前が付けられる事となった。

そして、その命名により、リインフォースから夜天の書のバグについての説明がなされた。闇の書と呼ばれる事になった原因である防御プログラムは、リインフォースがはやての指示で少しではあるが手を出せるとの事。だが、はやての体の事等の根本的な解決には至らないので、一度完成させてから防御プログラムを完全破壊してほしいとの事。

万が一に備え、守護騎士システム等は切り離し、はやての元に残るようにするともリインフォースは言った。

それを聞いて、ユーノが疑問を浮かべた。それは、先程のリインフォースの話で触れられなかった部分。そう、管制人格であるリインフォースは、厳密には守護騎士ではない。ならば、防御プログラムを破壊した後、リインフォースはそうなるのかと。

「大丈夫だ。私なら何とでもなる」

「でも……貴方の存在を考えると何かまだある気がするんだ」

「何かって……何なの、ユーノ君」

どこか不安そうな表情のユーノに、なのはも言いようのない不安を感じてそう尋ねた。それにユーノは、あくまで予想だけどと前置いて言った。

「そんな簡単に事が終わるなら、とっくに闇の書なんて物は消えているはずなんだ。でも、何度も闇の書は現れては、恐ろしい災いを起こしている。

つまり、バグは簡単にどうにか出来るものじゃない。違いますか？」

ユーノの声にリインフォースは何も言わない。だが、そのどこか諦めたような表情が何よりの証拠だった。

それを見て、はやてが信じられないというように呟いた。

「……リインフォース」

「賢いな、少年。そうだ……おそらく私がいる限り、防御プログラムは再生する」

「？！　じゃあ……っ！」

「私を最終的には消滅さ「大丈夫！」……何？」

息を呑んだフェイトの言葉に、リインフォースが答えようとした

のを遮る声がした。その声の主に全員の視線が集まる。それは五代だった。いつものようにサムズアップを見せ、その表情は笑顔。だが、それに面食らっているのは、初対面のリインフォースとはやてのみ。

他の者達は、それにやはりといった顔をし、一部等は呆れつつ笑みを浮かべ、なのは達や翔一は同調するかのように笑みを見せる。

「リインさんは死にたくないですよね？」

「……それは……」

「死にたくないなら、死なせない。殺される理由なんてない。絶対、助けますから……俺達みんなで！」

「そうです。俺達が力を合わせれば、必ず何とかなります！」

「「だから大丈夫っ！」」

五代と翔一の二人が見せるサムズアップ。それに言葉を失うリインフォース。はやても同じように言葉を無くしたが、何かに驚いて周囲を見渡した。そう、二人以外にも……。

「な、なのはちゃん達まで……」

「にゃはは、これ五代さんといるとクセになっちゃって……」

「うん。でも、不思議とそう思えるんだ。大丈夫って……」

「きっと、五代さんがやるからだよ。大丈夫。その想いがこれに込められているんだ……」

なのは達三人の言葉にはやてが何故か納得している横では、リインフォースが同じ仕草をしているシグナム達に驚いていた。

「私達も同じだ。五代や翔一が、仮面ライダーがいる。それだけで……そう思えるのだ」

「ええ。決して何事にも負けない。そんな気持ちにね」

「あたし達もなのは達もいる。それに仮面ライダーが二人もいんだ。怖いもんなんかね～よ！」

「……ガラではないが、そういう事だ」

「お前達……そこまで……」

そう言いながらリインフォースも何故かそれを見ていると、心が不思議と穏やかになっていく印象を覚えていた。絶対の安心感。必ず、絶対上手くいく。そんな想いがそれから伝わってくるような感じを。

そんな二人と違った意味で驚いている者がいた。クロノである。彼はサムズアップをしていなかったが、エイミィやリンディはやっていた。それは彼も予想していた。そう、彼が驚いたのはそこではなく、ある二人までがそれをしていたからだ。

「まさか君達まで……」

「その……えっと……」

「ま、まぁ意思表明ってやつかな？」

アリアとロッテの二人は、何か戸惑いながらもその行為を止めようとはしない。ロッテの言葉を聞き、クロノ達はリインを助ける事と取ったが、実際は違う。二人は決意したのだ。犠牲を出さずにこの事件を終わらせる。そのために、グレアムが思い描いた計画とは違うものを支える事を。

サムズアップと笑顔で戦う男と、家族として全力ではやて達を助けようとする男。その二人の心に惹かれた故に……

（お父様……この罰は必ず受けます。だから……許してください。初めての我侭を！）

（信じてお父様。必ずこいつらなら……仮面ライダーならやってくれるよ！）

この瞬間、アースラにいる者達の想いは一つになった。本来ならば有り得ない流れ。

それがもたらすのは、果たして希望か絶望か……

その日、真司は困っていた。というのも、いつものように訓練をしてほしいとチンクにせがまれたのだが、同じようにセインが遊んで欲しいと言ってきたからだ。

真司としては、チンクの日課である訓練に付き合ってやりたいが、妹分の頼みを聞いてやりたいとも思い、悩んでいたのだ。

（チンクちゃんとの訓練に付き合ってあげるべきだよなぁ……いや、でも、セインは妹みたいなもんだし……）

そんな風に悩む真司を見て、チンクはセインへ視線を送る。それはどこか非難めいたもの。だが、それを受けてもセインは、どこ吹く風とばかりに視線を送り返す。

その視線は、別に何も悪い事していないと言わんばかり。そんな二人に気付かず、真司は未だに悩んでいた。だが、ふとその悩みに答えが出る。

「そうだ！　じゃ、訓練の方法を変えよう。模擬戦じゃなくて俺の世界の遊びにしてさ」

「遊びだと……？」

「真司兄、どんな遊び？」

「あのな……」

これが、ジェイルラボ始まって以来の大騒ぎとなるとは、この時誰も想像しなかった……

「何？　新しい訓練法？」

「そうだ。だが真司が言うには、人数が多くなければ訓練にならんらしくてな。トーレにも声を掛けてくれと」

トレーニングルームで軽く汗を流していたトーレ。そこへチンクが現れて告げた内容に、その表情が訝しむようなものへと変わる。真司の性格を知るトーレにしてみれば、何かあるとすぐに模擬戦をサボりたがる真司が、自ら訓練をするなど考えられなかったのだ。だが、それをチンクも良く知るはずと思い直し、まずは詳しく聞く必要があると尋ねるのだが……

「……どんなものだ？」

「詳しくはまだ知らん。だが、普段の模擬戦とは違う内容だ。セインはディエチを誘いに行った」

「……何か嫌な予感はするが……いいだろう。訓練場に行けばいいのか？」

「ああ。そこで待っていてほしい」

返ってきた言葉に一抹の不安を覚えるものの、チンクの言葉に頷き、トーレは訓練場へ向かって歩き出した。その背中を見送ってチンクは小さく呟いた。私は嘘は言ってないぞ、と……

「真司兄さんが？」

「そうなんだよ。楽しくて訓練にもなるんだってさ。ね、やろうよディエチ」

真司の洗濯物を干していたディエチだったが、セインの言葉にその手を止める。真司は、あまり訓練が好きではないとディエチは知

っているのだ。そんな真司が、本当に訓練になるようなものをしたがるだろうか。そう考えたのだ。
それをセインも理解しているからか、どこか楽しそうに笑みを浮かべて告げた。

「何かさ、ウー姉達も誘ってやるんだって。みんなでやるなんて面白そうじゃない？」

「……確かにそうだけど……」

「ね！　やろ～よ、ディエチ。きっと楽しいって！！」

ディエチの手を掴んで力説するセイン。それが何かおかしくてディエチは苦笑しながら頷いた。

「じゃ、洗濯終わったら訓練場ね。待ってるから」

「うん、分かった」

元気良く去って行くセインを見送り、ディエチは首を傾げる。一体大勢でやる訓練みたいな遊びって、何なんだろうと考えて……

「私達も？」

「参加ぁ？」

「そ！　どうせならみんなでやろうって。だってさ、姉妹だろ？たまにはみんなで何かしないと」

書類整理等の事務仕事を片付けていた二人の前に現れた真司は、新しい訓練法を検証してほしいと言って二人の参加を求めた。無論、二人は戦闘用に作られてはいないので、訓練などする必要はない。だが、真司の姉妹全員で何かという言葉には、確かに思う事もあるもので……

（真司さんの言う通り、今後の計画のためにも、妹達とは色々と意思疎通をする必要があるわね……でも……）

（シンちゃんの考案した訓練法ねぇ～……みんなでするってところにも興味はあるけど……どうしたものかしら……）

（やばいな。もう一押ししないと、この二人は動かせないぞ……うしっ！）

何かを悩んでいるように見える二人を動かすため、真司は奥の手を出す事にした。それは何かと言うと……

「訓練の勝者には、今日の晩飯注文権が！」

「「やるわ」」

即答だった。その二人の声に真司は隠れてガッツポーズ。そう、既にジェイル達は栄養食には満足出来ず、真司の料理を密かな楽しみにしているのだ。

しかも、その注文権などは、未だに食べた事のない料理を頼む絶好の機会。ま、ここのところの二人の密かな悩みは、体重増加だったりするのだが……

（最近運動不足だったし……丁度いいわね。そう、これは体のためよ。決して食事目当てではないわ……何頼もうかしら？）

（まぁ、私がやるからには勝利確実。少しは体も動かさないとねぇ。体調管理も重要だし……何食べるか決めておかないと）

こうしてウーノとクアットロも参加が決定して、真司は心から笑顔を見せる。そして、その視線をジェイルのいる部屋へ移し呟く。

――――後はジェイルさんだけだ……

それから五分後、訓練場にラボにいる全員が揃っていた。何故かやる気十分のジェイル、ウーノ、クアットロ。待ちきれないといった表情のセイン。どこか不安や疑問が晴れない感じのトーレとディエチ。そして、どこか嬉しそうな雰囲気のチンク。

ちなみに、ジェイルは言うまでもなく、サバイブを条件に参加しました。それと、こっそり注文権も。

そんな七人を前に、真司は嬉しそうな笑顔を浮かべて頷いた。

「じゃ、これからみんなでやるのは、鬼ごっこです」

「「「「「「「鬼ごっこ？」」」」」」」

真司の口から告げられた言葉に、七人の声が重なる。それに真司はやはりという顔をして、鬼ごっこの説明をした。誰か一人が鬼となり、残りの者は隠れたりして鬼から逃げるもの。鬼に体を触られたらその場で終わり。制限時間内に鬼は全員捕まえたら勝利。逃げる方は、時間内逃げ切れれば勝利となり、もし勝者が複数いれば、

日にちを分けて注文に応じると真司は告げた。

そして、決めたルールは変身とＩＳ禁止。後、攻撃もなしで、隠れていいのはラボの一部限定。制限時間は一時間。その間、ただ知恵と体力のみで勝利を目指す事となった。もし反則行為をした場合は、一週間栄養食と真司が告げると、七人それぞれに大小の戦慄が走った。

「じゃ、鬼はじゃんけんで決めよう」

「「「「「「「じゃんけん？」」」」」」」

「あ～、これもか……」

真司、じゃんけん説明中。全員が石が紙に負けるのは理解出来ないと言い出し、真司が説明に困り一時中断。結局、真司の世界では、それでみんな納得してるとごり押し、説明終了。

そしてじゃんけんの結果、鬼は真司となり、ジェイル達はそれぞれ隠れるために去って行く。律儀に目を閉じ、三十数える真司。そして、目を開け走り出す。

「絶対、見つけてやっからな」

それからはもう騒々しいにも程がある程だった。真司が最初に見つけたのはトーレ。隠れるのは性に合わんと真司を待っていたらしい。それを聞き、真司は肩透かしを食らった気分になったが、急いで追い駆ける。それを余裕を見せて逃げるトーレ。その逃走劇を遠目で眺め、チンクはどこか寂しい気持ちになり、真司の後ろから声

を掛けた。
それに気付き、目標をチンクへ変更する真司。だがチンクも素早く、中々追いつけない真司。そのままチンクは逃げ切り、真司は地面に大の字で転がった。

そうして数分後、真司はおもむろに起き上がると、狙いをトーレやチンクのような運動系から、ウーノやクワットロの事務系へと変更し、動き出す。
それを離れて見つめる人影二つ。

「これで終わりか。ったく、情けない……」

「……もう、私を追ってはこんか……」

そうどこか寂しげに呟くトーレとチンクであった……。

「こないね……真司兄」

「そうだね……」

一方セインとディエチは二人揃って入浴中。それというのも、セインの考えた作戦が原因。それは、真司に触られないようにすればいい。ならばどうするか。簡単だ。真司が体を直視出来ないようにしよう。
そして、入浴と相成った。ディエチが同伴しているのは、真司に見つかった際、セインを取り押さえるため。前回の騒ぎで真司がとばっちりを喰らったのを、ディエチは繰り返さぬようにと。どこまでも兄想いのディエチだった。

「ね、ディエチはさ、真司兄をどう思う？」

「え？　どうって……」

「あたしさ、真司兄に言われたんだよね。戦闘機人って言葉、あまり使わないでほしいって」

「セインもそうなんだ。あたしも言われた。戦うために生まれたんじゃない。みんな、幸せになるために生まれたんだからって」

セインもディエチもその言葉を言われた時、何かが自分の中で動いたのだ。それは、ある意味で自分の存在を否定する言葉。でも、それに込められたものは、紛れも無い真心。戦うために生きるのではなく、幸せになるために生きて欲しい。その言葉の意味を考えるたび、二人は何故か心が苦しくなるのだ。

自分達が生まれた訳、その理由。それらを理解しているからこそ、真司の言葉は痛い。創造主であるジェイルの目的。それを果たすための存在が自分達なのだ。

（真司兄に、計画の事は話すなってドクター達は言ってるけど……隠し事するのって何か嫌なんだよね）

（真司兄さんは何も知らずにドクターに手を貸してる。もし、あたし達がしようとしてる事を知ったら……嫌われるかな）

元々ナンバーズには血の繋がりはない。故にその絆は歪だったのだ、本来は。だが、真司がそれを補うようにいた。血の繋がりどころか何の繋がりもない存在。それが何故か、いつの間にかこのラボの中心にいた。

ジェイルやクワットロ等の気難しい者達とは、裏表ない言動や素直な性格で信頼を得て、トーレやチンクは、模擬戦や日常の他愛ない事で繋がりを作り、セインやディエチは兄と呼ばれたためか、熱心に世話を焼いてくれる。

そして、その真司がそれらの出来事を他の者達へ話す事で、それを話題に食事時は盛り上がる。本当の家族のような構図が出来上がっていたのだ。

「……ディエチ、あたし決めた事があるんだけど……聞いてくれる？」

「何？」

「……もし、真司兄がドクターと敵対するなら……あたし、真司兄の味方する」

「っ？！　それって……」

「だってさ！　真司兄は言ったんだ！　仮面ライダーになったのは、戦いを止めるためだって……あたし……真司兄と戦いたくないよぉ」

立ち上がり、セインは涙を浮かべながらそう言った。まだ起動してたった五日。それでも、セインは元来の性格故か真司に強く影響されていた。積極的に関わったせいもあるかもしれないが、それ以上にセインが少女だったのも関係している。そう……

（あたし、誰が何て言っても真司兄を助ける。お兄ちゃんだもんね、真司兄は）

それは兄妹愛なのだろう。だが、その裏には本人も知らない恋慕

がある。今はまだ影すら見せぬ想いなれど、それは確かにセインの中に息づいている。
　そんなセインをディエチは見つめ、驚愕と同時に羨望の眼差しを送っていた。

（セインは自分の道を決めたんだ。あたしは……そんな事出来ないよ……）

　ジェイル達を裏切る事は出来ない。でも、真司と戦いたくないのはディエチも同じ。訓練では誰よりも強く、家事を共にしたり、色々な話をしてくれる優しく頼れる存在。それがディエチにとっての真司。
　故に分かる。セインの気持ちは。だが、ディエチはそれと同じ決断は出来ない。姉妹を敵にする事など出来ないのだ。それをセインも分かっているのか、目元を拭いながらディエチへ言った。

「大丈夫だよ。時間は掛かるだろうけど、あたし達で、何とか真司兄とドクター達を敵対させないようにしよう」

「……出来るかな？」

「う～ん……まぁ確かにかなり厳しいとは思うけどさ……やるしかないでしょ」

「そうだ、ね。やるしかないね」

「あ、それとさっきの話は」

「分かってる。誰にも言わないから」

「えへへ、よろしく～」

そう言ってセインは浴槽へ入り直す。やや冷えた体に温水が心地良い。そう感じてセインは笑みを浮かべる。そんなセインにディエチも笑みを見せ、目を閉じて静かに思う。

いつか来るかもしれない最悪の事態。それを防ぐために、自分も出来る限りの事をしようと。

そんな風にゆったりする二人だったが、この後、衣服が脱衣所にあるのを真司に見つかり、呆気なく失格となった……

ジェイルの研究室。そこに真司はいた。彼は思いついたのだ。ここなら、ラボのどこに誰がいるか良く分かるのではと。

「えっと……確かこれで……お、出た出た」

モニターが複数表示され、その一つ一つに目を向ける真司。すると、その内の一つに、話し合うウーノとクアットロの姿があった。何を話しているのか気になった真司は、そのモニターをメインへ変更しようとして、コンソールを操作しようとしたのだが……

「あれ？　どれだっけ……？」

操作が分からない。いつもウーノやクアットロが手軽にやっていたので、自分にも簡単に出来るだろうと踏んでいたのだが、そこは素人の考え。適当にやれば出来るだろうと、真司が何かのボタンを押そうとした瞬間――何かがその手を止めた。

「それはダメだよ！」

「おわっ！？　ジェイルさんかぁ……びっくりした」

物陰に隠れていたジェイルが飛び出し、真司の手を押さえたのだ。それに驚く真司だが、相手がジェイルだと分かると安心し、自分が押そうとしていたボタンについて尋ねた。それにジェイルが答えたのは、それは万が一の時用の証拠隠滅システム。つまり自爆装置の起動スイッチだと言った。

「そ、そんなもん本当にあるんだ……」

「そりゃあそうさ。ここのデータを……悪用されたら不味いしね」

「なるほど」

どこか皮肉っぽく笑うジェイルに真司は何も疑わずに頷いた。そして、その瞬間何か思い出したようにジェイルの手を掴んで言った。

「ジェイルさん、失格だから」

「……今のは無しに……「無理」……だろうねぇ……」

容赦ない真司の言葉に、どこかがっかりしながらジェイルは肩を落とした。この後、ジェイルはウーノ達を捕まえに行った真司を見送り、トボトボと訓練場へと歩いていくのだった……

「……じゃ、私が勝ったらクアットロの料理も注文するわ」

「はい。なら、私はウーノお姉様のものを……」

そう、二人が話していたのは勝利後の取引。どちらが残れば互いの注文を頼める。そのため、いざという時にはより逃げられる可能性の高い方を逃がそうと。そんな話し合いをしていたのだ。

そして、取引成立と二人が不敵に笑う。この時、二人が安全を考慮して物陰に隠れていなければ、結末は変わっただろう。しかし、残念ながら今回はそれが裏目に出た。

二人の肩が同時に叩かれた。それに二人は何かと思い振り向いて――固まった。

「ウーノさんとクアットロ、失格」

「どうしてここが……」

「分かったの……」

信じられないとばかりに呟く二人。それに真司は先程の出来事を告げ、二人を驚かせた。確かにラボの施設の使用は禁止されていなかった。それを真司は思いつき、行動に移したのだ。その機転と発想に二人は改めて真司の凄さを知った。

（まさかそんな発想へ行き着くなんて……真司さんってたまに恐ろしいのよね……）

（まさかシンちゃんに知略面で負けるなんて……でもぉ、これで次回は私のか・ち……）

どこか感心したような二人に、真司は笑みを浮かべ「俺も中々やるだろ？」と尋ねた。それに二人は少し笑みを浮かべて頷いた。その反応に笑顔でガッツポーズを取る真司。そんな真司を二人は微笑ましいものを感じ、微かに笑う。

こうして、残りはトーレとチンクだけとなったのだが……

「え～、それでは結果を発表しま～す」

訓練場に響き渡る真司の疲れた声。その場にいる者達は、そんな真司にそれぞれ苦笑。結局真司はトーレとチンクに逃げ切られ、最後の最後までくたくたになるまで走り続けていたのだ。

その光景を五人は眺め、微笑んでいたりしたのだが。

「勝者、トーレとチンクちゃん。で、勝者のご褒美として、今日の晩飯注文権が与えられま～す」

「注文、か……何かあるか、お前達」

「ドクター、私は特にありませんので、どうぞご自由に」

チンクはセイン達へ、トーレはジェイルへとそう振ったが、そこにいた全員が揃って首を振った。それは二人の権利だから、二人が決めるべきだと真司も続けた。

それに二人は困り顔。だが、このままでは埒が明かないと思ったトーレが言った。

「なら、以前チンクが手伝ったアレだ」

「アレか。確かにアレならいいな」

どこか嬉しそうに頷くチンクを見て、不思議そうなセインとディエチ。そんな二人にウーノが笑みを浮かべて告げた。二人が起動する少し前、真司を手伝ってチンクが一緒になって作った料理の名を。

「実はね……」

その日、ジェイルラボに食欲をそそる香りが立ち込めた。香辛料をふんだんに使った本格的インドカレーと、家庭的な日本カレーの香りが。

そして、この日食べたカレーの美味しさに感激したセインが、一週間に一度はカレーがいいと言い出し、カレーのレギュラー化が決まる。

その後、カレーは後のナンバーズ達にも好まれ、セインは真司のお手伝いからカレーだけは任されるまでになるのだった……

――

やりたかった事は、それぞれの影響力の大きさ。知らず知らずで影響を与えるのが仮面ライダー達。

そして、それは必ず良い方向へと世界を動かす力と変わる。そんな

感じの話。

次回でクウガ・アギト組は大きな動きがあります。龍騎はいつもと同じかな？

十一話

「レイジングハート・エクセリオン」

「バルディッシュ・アサルト」

「「セットアップ！！」」

”” セットアップ””

その声に応え、待機状態から姿を変える二人のデバイス。そう、シグナム達のデバイスのように『カートリッジシステム』を搭載し、生まれ変わった愛機。それがレイジングハート・エクセリオンとバルディッシュ・アサルトである。

それを展開し終えたのを見て、はやてがリインフォースへ視線を送る。それに頷き、周囲に向かってリインフォースが告げる。

「では、そろそろ始めるぞ」

その声に全員が頷く。そして、シャマルが旅の扉と呼ばれる魔法を展開する。その相手はエイミィだ。

既に蒐集も終わりに近付き、残すは二頁と半分。それを埋めるため、エイミィが自分を蒐集させる事を申し出たのだ。それなら完成の時期を自分達で決められるからと。

それにクロノが猛反対した。いくら危険が少ないとは言え、何が起こるかわからない。それに、残りが少しなら魔法生物でも十分だとも。

そのクロノに全員が驚いていた。常に沈着冷静を心掛けるクロノ。

それがまるで感情をむき出しにして、エイミィに反論したのだ。それにエイミィも驚くも、何故か嬉しそうに笑みを浮かべて言い返した。

誰かが疲弊する事無く、蒐集する事が出来ないのは、防御プログラムと戦う際、致命傷になるかもしれない。だからこそ、大した魔法も使えない自分が適任なのだと。

それに尚も反論しようとするクロノへエイミィは念話で告げた。

【もういいよ。クロノ君の気持ちは伝わったからさ……ありがとう】

【……そんなんじゃない。僕達には君の管制が必要だからだ】

どこか照れるような拗ねるような答え。それを聞き、エイミィは心から笑みを浮かべるも、それを隠すように全員に告げた。

「あたしもみんなと一緒に戦うよ。隣じゃなく、このアースラからだけど。みんなの笑顔のために、ね！」

それに全員が頷き、笑顔とサムズアップを返す。クロノもやや憮然としながらも、同じようにサムズアップを返す。こうして、現在に至るのだ。

現在アースラはとある無人世界の衛星軌道にいる。そして、五代達はその無人世界で待機。作戦はこうだ。まず、エイミィから蒐集し、完成した闇の書をはやてがアクセスし、リインフォースと共に守護騎士プログラムなどを切り離す。そして、それと並行してなのは達により、防御プログラムへの攻撃を開始。はやてとリインフォースが闇の書から解放されるために、魔力ダメージで大ダメージを与える。

そして、解放されたはやてとリインフォースを加え、おそらく独立するであろう防御プログラムを撃破し、そして、とどめは防御プ

ログラムのコアをクウガが封印する。

その際、起きる可能性の高い大爆発を考慮し、五代が無人世界を希望したのだ。誰にも何にも被害を出さずに済む場所として。

それに応え、リンディ達が見つけ出したかつて資源採掘に使われた世界。今や住む者もなく、ただ荒れ地が広がるのみ。それを見て、五代は真剣な表情で頷いたのだ。

ここなら、思いっ切り戦える、と。

「そういえば、どうして翔一君はバイクを？」

「あ、これですか。きっと空中戦になると思って持ってきたんです。リンディさん達も同じような事聞いてきましたけど」

五代は隣にいる翔一にそう尋ねた。翔一の傍には、一台のバイクがある。この世界に来た時、乗っていたものだ。五代は翔一の答えに疑問を感じるものの、それを尋ねる事は出来なかった。

感じたのだ。何かが地の底から這い出るような悪寒を。

「これで……完成だ」

そうリインフォースが呟いた瞬間、闇の書が鈍く輝き出す。そして、リインフォースとはやてを包み込み、その足元にはベルカ式の魔法陣が浮かび上がる。

それを見て、五代と翔一は揃って構える。それは、彼らが戦う意志を表す動作。

「「変身っ！」」

二人の想いに呼応し、ベルトが光る。そして、二人の体を変えて

いく。それが終わった時、二人を見ていた全員が感じた。絶対に勝てると。その悲劇をここで終わらせるんだと。

そんな想いを与えた二人のヒーローは、リインフォースと同じ姿をした闇の書の闇とも呼ぶべき存在を見つめていた。

「いいか！　まずは相手に大ダメージを与える。サポート組は支援に徹し、前線組は攻撃に集中しろ！」

クロノが先陣を切るように手にしたデバイスを構える。そのデバイスの名は”デュランダル”。アリアとロッテがグレアムから与った、対闇の書用のデバイスだ。

グレアムはリーゼ姉妹から心変わりとその理由を聞かされ、何も言わずにデュランダルを渡した。その顔は何か憑き物が落ちたように清々しく、二人はそれを見て、改めて思ったのだ。

誰よりも犠牲を出す事を嫌っていたのは、グレアムだったのだと。

「ロッテ、頼んだわよ！」

「任せろって！　行くよ、翔一！」

「はいっ！」

ロッテに続けとアギトもバイクに跨る。それにバイクが姿を変え、マシントルネイダーと呼ばれるものへと変わった。それに周囲が驚き、防御プログラムさえ僅かに動揺していた。

更にそこからマシントルネイダーは形を変え、アギトが飛び上がると同時にスライダーモードと呼ばれる飛行形態へと変わる。

「嘘っ？！」

「空飛ぶバイクかよ！？」

目の前で見ていたリーゼ姉妹が声を上げる。アギトはそんな二人に構わず、視線をクウガへ向けた。それだけでクウガは何かを悟った。

「そうか！」

そう言ってアギトの後ろへ飛び乗るクウガ。それに頷き、アギトはマシントルネイダーを上昇させる。その速度は周囲が想像していたよりも早く、クウガだけでなく、その場にいる誰もが驚きと希望を抱いた。

「よし、超変身っ！」

クウガは今の姿のままでは戦いにくいと判断し、青いクウガへと変わった。

ドラゴンフォーム。跳躍力に優れ、俊敏さは全フォームの中でも断トツ。その反面、筋力は落ちるため、専用武器『ドラゴンロッド』を使い戦う。

長き物を手に、邪悪をなぎ払う水の心の戦士である。

「五代雄介っ！　これを使え！」

「っと、ありがとうクロノ君。これ、使わせてもらうよ」

そして、クウガにクロノが渡したのは、クロノの本来のデバイス”Ｓ２Ｕ”。それを待機状態から変化させると、その形状が青い棒へと変わる。

そして、その上下が伸びたのを見て、クウガは頷く。これで準備は整ったと。

視線を戻せば、シグナムとフェイトを中心になのはとヴィータが的確にダメージを与えている。

「五代さんっ！」

「分かったっ！」

だが、それでもまだ大きな一撃は加えられない。そこへクウガが虚を突いて飛び掛った。

「おりゃあ！！」

「ぐっ……」

スプラッシュドラゴンと呼ばれる一撃。突き当てられたロッド。それを離し、クウガは落下していくものの、即座にアギトがそれを助けに回る。だが、その間クウガの視線は防御プログラムへ注がれていた。

腹部を押さえている防御プログラム。そして、その手がゆっくり離される。そこには――――。

「……よし」

封印の文字が浮かび上がっていた。それを確認し、クウガは小さく頷く。更に防御プログラムはその文字に苦しんでいた。まるで何かに抗おうとするように。

それを見たユーノが叫ぶ。やはり防御プログラムは闇の存在にな

ったため、クウガの封印エネルギーに弱いのだろうと。それを聞き、全員に希望の光が灯る。本来ならば、きっと苦戦した相手。それが天敵とも呼べる存在がいる事で、絶望どころか希望さえ持てる。

「五代さん！　効いてますよ！」

「うん。なら、もう一度行くよ！」

「分かりました！　俺が必ず着地地点に回ります」

「お願い！」

そんな周囲の空気を感じながら、二人のライダーは互いのやるべき事を確認し合い、再び行動開始。それに負けるなとなのは達にも気合が入る。

「ディバイン……」

「サンダー……」

”バスター”

”スマッシャー”

桃色と黄色の輝きが防御プログラムの動きを止める。その隙を見逃す程、ベルカの騎士は甘くない。

「レヴァンテイン！」

”シュランゲフォーム”

「アイゼンっ！」

”了解”

連結刃と呼ばれる鞭のような形態へ変わるレヴァンテイン。それを駆使し、防御プログラムを拘束するシグナム。そこへ小さな鉄球を魔力でコーティングしたものを浴びせるヴィータ。

それを喰らい、ややよろめく防御プログラム。そこへ青い光のバインドと緑の光のバインドが現れ、その体を再び拘束した。

「逃がさん！」

「五代さん、今です！」

ザフィーラとユーノのバインドを何とか破壊しようとするも、異なる術式のバインドを同時に破壊するのは困難。だが、それも瞬く間に破壊した防御プログラムだったが、その僅かな時間さえ――。

「おりゃあぁぁ！」

「かはっ……」

クウガにとっては好機。三十メートルを一気に飛び上がる跳躍力を活かし、視界の下から突き上げるようにドラゴンロッドを突き立てる。

そして、そのまま勢いを殺さず、クウガは防御プログラムと共に上空へ。そして、そこに待っていたのはクロノ。

「喰らえ！」

”ブレイズキャノン”

得意の砲撃魔法を叩き込むクロノ。器用にクウガが離れた瞬間を逃さずに放つところに、彼の優秀さが光る。

それのダメージと封印エネルギーが防御プログラムを襲う。先程よりも文字が消えるのも遅い、その痛みに苦しむ防御プログラム。それを見て、誰もが内心で苦しんでいた。何せ外見はリインフォースなのだ。頭では割り切っていても、優しい彼女を苦しめているように見える光景に、クウガ達は心を痛めていた。

【なのはちゃん達、聞こえとるか！　こっちは終わった。早くこの子を止めたって！】

はやてからの作業完了の声。それに気持ちを入れ替えるなのは達。それを見て、クウガ達も状況を把握し、頷き合う。

『魔導師組はとどめに備えて準備！　騎士達と翔一さんで、雄介さんと共に彼女へ攻撃を続けて、もう一度だけ封印攻撃を仕掛けて！』

エイミィの指示でそれに全員が了解の意志を示す。なのはを始めとした魔導師達は、この後戦う事になるだろう防御プログラムへの対策のため、簡易的な打ち合わせ。クロノのデュランダルの氷結魔法で動きを止め、その間になのはとフェイトがそれぞれでダメージを与えつつ、大威力魔法の準備。ロッテは二人の護衛を務め、ユーノとアルフ、アリアの三人はシャマルと共に、クウガのとどめと手助けするための転送魔法を担当。

実はこれが今回の一番の要。というのは、クウガの目の前に転送するのではなく、クウガが放つ一撃へ当たるように転送するのだ。そのタイミングはシビアだが、再生能力が高いと思われるコアを叩

くには、刹那の間さえ惜しいのだ。

「いいな？　君達に掛かっているようなものだからな」

「分かってるよ。僕らだって、やる時はやる！」

「そうだよ、少しは信じな！」

「私達が絶対五代さんを、仮面ライダーを手助けします！」

三人の言葉に頷くクロノ。なのはとフェイトもそれを聞き、笑みを浮かべた。その視線の先では、クウガがもう一度スプラッシュドラゴンを炸裂させていた……

「どうだ？」

「やったか？」

ヴィータとシグナムが揃って防御プログラムへ視線を向ける。その途端、はやてが弾かれるように現れた。それに驚くシグナム達だったが、即座にアギトがそれを受け止め、安堵した。そして、ザフィーラが何かを見て叫んだ。

「見ろ！　奴の体を！！」

その声に全員の視線が防御プログラムへ向く。見れば、その周囲から紫のような色の暗いオーラが滲み出している。その原因がクウガの付けた文字である事は、誰も疑っていない。そう、防御プログ

ラムの腹部にはその文字がはっきりと浮かんでいたのだから。
だが、その光景に一番最初に違和感を抱いたのはクウガだった。

（何でリインさんのままなんだ……？）

本来であれば、未確認達は文字をきっかけに一様にひびを生じ、爆発していった。だが、今回はそれがない。それは彼らにあった装飾品がないからだと、クウガは知っている。
だが、リインフォースが解放されないのは不自然なのだ。文字は鮮明に浮かんでいる。でも、その後に続く事が起こる気配がない事に、クウガは一人言い知れぬ不安を抱いていた。
一方で、アギトもまた不安を抱いていた。それは、防御プログラムから滲み出しているオーラにある。そのオーラを、彼は見た事があったのだ。

（あれは……”邪眼”と同じものだ……）

そう、彼がこの世界に来る前に戦った邪眼。それが復活した際、全身から滲ませていたのがそれだった。

「おかしいんや！　リインが中に何かおるって言って、そいつがどうも切り離しを邪魔しとるんよ！」

そのはやての言葉に全員が戦慄する。視線の先では、依然防御プログラムが苦しんでいる。だが、その雰囲気からクウガとアギトは何かを感じ取っていた。

（（何かが……出ようとしてる……））

その予想は二人の想像を超える形で当たる。それは、本当の”闇”との戦いへの幕開け……

ついに始まった闇の書の闇との決戦。なのは達の協力やクウガの力により、防御プログラムを追い詰めたに見えたのだが、はやての言葉に不安を抱く二人の仮面ライダー。

果たして、闇の書の闇に潜むモノとは？　本当にリインフォースを助ける事が出来るのか？

いつものように流れる時間。穏やかな日々。それが永遠に続くと誰もが、いや彼だけはそう思っていた。これは、そんな頃の話……

「次に目覚めるのは、セッテだっけ？」

「そうだよ。七番目だからね。でも、どうもドクターがセッテとオットー、ディードはクア姉に任すんだって」

真司の言葉に笑って答えるセイン。だが、後半はどこか残念そうだった。それを聞いて、真司も同じように残念そうな表情を浮かべる。

きっと、クアットロが調整を行なう事になった以上、セッテ達の起動はおそらく遅くなるだろうと思ったからだ。クアットロは完璧主義者。自分の納得いくまで三人を起動させないだろう。

「……俺、少しクアットロに言ってみる」

「真司兄……」

「だってさ、やっぱ家族は多い方がいいって。楽しいし、賑やかだし。俺もセインやディエチみたいな妹が出来て嬉しかったしさ」

だから、早めに起こしてくれるよう頼んでみる。笑顔でそう言って、真司はセインへ手を振って走り出す。行き先は、ナンバーズの調整室。この時間なら、ジェイルかクアットロがいるはず。そう思って真司は走る。

その背中を見送って、セインは嬉しそうに小さく呟く。

――――やっぱりあたし、真司兄のそういうとこ好きだよ。

「セッテちゃんを早めに出して欲しい？」

「そう。何をするのか知らないけどさ、基本的な事はみんな同じなんだろ？　だったら――――」

「シンちゃ～ん……セッテちゃん達は、私がドクターに任されたの。つまりぃ～、私の好きにして、い・い・の」

「ふざけるなよ！　妹だろ!?　早く起こしてやりたいって思わないのかよ！」

そんなクアットロの言い方に、いつもなら真司は怒る事無く何か返すのだが、今回はその発言に珍しく怒りを見せた。声を荒げ、視線は確かな怒りを宿し、クアットロを睨みつけている。

その鋭い視線には、さしものクアットロも気圧され、一歩後ずさ

る。

その後も真司は叫んだ。確かにクアットロ達は普通の人間とは違う体だけど、それでも心があるのだから、早く起こしてやって世界を見せてやりたいと。楽しい事や嬉しい事、辛い事や泣きたい事も全部ひっくるめて、感じさせて、教えてやりたいんだ。そう真司は言い切って、クアットロに告げた。

「……少し言い過ぎたかもしれないけど、俺、この話に関しては絶対譲らないから」

そう告げて、真司は部屋を出ようと扉へと向かう。その後姿を黙って見つめるクアットロ。きっと、昔の自分ならば真司の言葉に反論していたか、認めた振りをして流していただろう。

だが、今彼女が考えているのは、そのどちらでもない。

（"人らしさ"なんて戦闘機人には不要。感情を削ぎ落とし、機械に近い存在にする……それが私のプラン。でも……）

視線は扉の前で何故か止まっている真司へと向けられている。

「だけど……クアットロがジェイルさんに任されたのも事実だし……俺、納得してもらうまでまた来るからな」

そう告げ、真司は部屋を出て行った。その言葉を理解し、クアットロはやや沈黙したものの、すぐに笑い出した。それは嘲笑うでも馬鹿にするのでもなく、本当に心から可笑しくてしょうがないというように。

（"心"……か。それが一番不要って思ってたのに、私が笑ってる

のもその”心”のおかげなのよね。もう、シンちゃんのせいよ、私が狂ったの）

そんな事を考え、クアットロは目元を拭う。どうやら笑い過ぎて涙が出てきたようだ。そう思い、クアットロは扉へ向かって告げる。

「いいわ。シンちゃんがそう言うなら、セッテちゃん達は心を大切にしてあげる。その代わり、貴方が責任持って教育してね？　シンちゃん……」

そう告げて、クアットロは調整へ手を加える。先程まで組み上げていたプランを白紙にし、出来うる限り手を加えず”妹”達をありのまま目覚めるようにと。

彼女は知らない。先程の涙が笑いから流れたものではなく、嬉しさから流れたものだと。妹達だけでなく、自分達全員を心から想った真司の気持ちに触れた事。それが彼女に流させた涙なのだという事を。

ナンバー4、クアットロ。本来一番狡猾であったはずの彼女が変わった。そう、それはまさしく彼女の言った通り、真司が狂わせたのだ。戦闘機人ではなく、人として機能するように……

この日から、クアットロは心無しか物腰が柔らかくなったと、セインとディエチは感じるようになる。それはチンクや真司も同じで、一体何があったのだろうと全員が首を傾げたが、クアットロはそれに悪戯っぽく笑うのみ。

後に、ナンバーズ後発組（7以降）の中で姉の評判が言われるようになり、トップはチンクだったが、なんと二位はクアットロとなる。理由は一つ。からかいなどをしてくるが、自分達をきちんと見

ており、的確なアドバイスやさり気無くフォロー等をしてくれる事だとか。

　また一つ、運命が変わる。誰にも知られず、誰も知らず、世界の平和のために動く者がいる。
　彼は知らない。自分がやがて来たる危機を未然に防いでいる事を。それを知る時、彼に待つのは別れか、それとも……

――

続き。そして、ここから完全なライダー的展開となります。
クウガ・アギト組はまさかの敵の出現&A' s終了まで突っ走る予定。龍騎は、いつもと同じですが、そろそろ動きも……
そして、予想を超えるような出来事が彼らを待ち受ける！　……予定。

十二話

周囲を覆う重苦しい空気。それは比喩ではない。本当に空気が重くなったのだ。いや、正確には重くなったのではなく、息苦しさを覚えるようになったと言うべきだろう。

その原因は、その場にいる全員の視線が注がれている相手にある。防御プログラム。またの名を闇の書の闇だ。それを見つめながら、アギトは腕の中の少女へ問いかけた。

「はやてちゃん、一体何が……」

「良く分かれへんけど、リインがわたしだけは言うて出してくれたんや！　このままやと乗っ取られるって」

「主、それは――――っ！？」

はやての言葉を詳しく聞きだそうとしたシグナムだったが、それは出来なかった。突如、恐ろしい程の魔力と威圧感が周囲に溢れたからだ。

それに視線を戻すと、防御プログラムは動きを止めていた。先程まで苦しんでいたにも関わらず、今は身動き一つしない。完全な無防備。しかし、誰も何もしようとはしなかった。クウガやアギトさえその異様さに黙って見つめるしか出来ない。

そして、ついに防御プログラムに動きがあった。一度痙攣したかのような動きを見せたと思った瞬間、リインが叫んだ。

「主！　皆！　逃げろっ！！」

その声をキッカケにリインから”何か”が出て行った。黒い塊のようなものが。それは地面へ落下し、轟音を立てる。舞い上がる土煙。それに視界が塞がれた瞬間、何か嫌な予感がしたクウガは叫んだ。

「超変身っ！」

ペガサスフォームへ変わり、その超感覚で誰もが見えない煙の向こうを見る。その時、クウガは有り得ない感覚を受ける。

（っ？！　これ……あの時と……っ！？）

それは未確認と戦っていた頃の事。五代は何故か誰かに見られているような感じを受け、クウガへと変身し、ビルの上から周囲を探った事があった。そして、その時も同じようにペガサスフォームへと変わり、超感覚でそれを察知しようとして、同じような強烈な威圧感と恐怖心を受けたのだ。

後にそれは、未確認の首領であり、究極の闇と呼ばれるダグバであったと五代は知った。今、クウガが受けている感覚は、それと同じものだった。

「っ！　超変身っ！」

急いで体を赤に戻す。あの時は慣れていなかった事もあり、気絶して二時間の変身不能まで陥ってしまったが、ダグバと戦い、それを克服した今のクウガはそれに打ち勝つ事が出来た。

マイティフォーム。格闘戦に優れたこの姿が、クウガの従来の姿となっている。

邪悪な者あらば、希望の霊石と共に、炎の如くそれを倒す戦士で

ある。

（見えなかったけど、アレは……不味い！）

「みんな、気をつけて！　アイツは……多分クウガと同じぐらいか、それ以上に強い！」

クウガの告げた言葉に全員の顔色が変わる。アギトでさえ、その発言には驚いていた。だが、彼もその理由に心当たりがあるのか、なのは達に比べればまだ軽いものだった。

そう、クウガがダクバと同じ感覚を感知していた時、アギトもまたある感覚を感知していたのだ。

（アンノウン……いや、あれは発電所で感じたものと同じだ）

それは忘れもしないあの邪眼との戦いの際、何度も感じたものと同じだったのだ。そして、クウガさえ予想出来ない相手の正体に、アギトは薄々だが検討をつけていた。だが、それは出来る事なら外れていて欲しいと思っている。

だからこそ、アギトは口に出さない。言えば、それが本当になりそうだったから。しかし、世界は残酷だった。

晴れていく土煙。そこに出来た巨大なクレーター。その中心に”奴”はいた。不気味な異形。だが、それはなのは達にもどこで見た事があるものだった。そう、それはまるで……

「仮面……ライダー……？」

誰ともなく呟く。確かに細部は違うが、その容姿は仮面ライダーに似ていなくもない。しかし、そんな感想が間違いだったと、奴が

顔を上げた瞬間誰もが思った。
触覚にも見えるアンテナをつけた奴は、目のようなものが一つだったのだ。その邪悪さと醜悪さになのは達が息を呑む中、やはりと言った声でアギトが叫んだ。

「どうして……どうしてお前が生きているんだ、邪眼っ！！」

「あの時の虫けらか。ふんっ、どうしてだと？　貴様ら虫けら共に追い詰められたあの瞬間、我は願った。死にたくないと。
その心の声が届いたのだろう……爆発する瞬間、次元の歪みが僅かにだが生じたのだ。それに何とか細胞を送る事が出来た。
だが、そこからが長かった。寄生した生物の中で我は復活の時を待った。そして、ついに来たのだ。その時がな！」

邪眼がリインフォースを指差し、嘲笑うように告げた。いつか分からぬ頃に蒐集した魔法生物の内の一匹。それが自分が寄生していた物だったのだと。そして、夜天の書の中でゆっくりと様々なモノを取り込み、その力や能力を自らの物へとした。そして、いつか復讐しようと誓ったのだ。
自らを滅ぼそうとした憎き仮面ライダーに。故に、それを模したこの姿へと変えたのだ。

邪眼は、そう忌々しげに吐き捨てるように告げると、視線をその後ろのクウガへ向ける。それに気付き、身構えるクウガ。

「貴様か……キングストーンを持っている者は」

「えっ……キングストーン？」

「それにしては、おかしな力を使うようだが……まぁいい。今度こ

そ我が創世王になるために、貴様のキングストーンを頂く！」

そう言い放ち、邪眼はそこから跳び上がった。その跳躍力は青のクウガに迫る勢いがあった。そして、迫り来る邪眼に対してクウガ達は――――。

「翔一君っ！」

「はいっ！」

「何だとっ！？」

マシントルネイダーを上昇させた。対抗するのではなく、距離を取る事を、いや相手が来れない空高くへと逃れた。これは相手を恐れてではない。クウガもアギトも理解していたのだ。あれを倒せるのは、自分達しかいないと。

故に体勢を整えるため、相手の出鼻を挫いたのだ。邪眼は届くと思った瞬間、急にクウガ達が離れたため、そのまま落下していく。それを追うようにクウガもマシントルネイダーから飛び降りた。

「クロノ君、これ一先ず返すね」

その途中、手にしたＳ２Ｕをクロノへ投げ返し、クウガは眼下を見つめた。着地する邪眼。その目の前にクウガも降り立つ。それを見つめ、邪眼が構える。クウガも構えるが、そこへアギトも降り立ち、共に構えて邪眼と対峙する。はやてはどうやらザフィーラに預けたようで、腕に抱かれながら、二人を見守っている。

降り立ち、構えるアギトとクウガを見て、クウガのベルトに視線をやり、邪眼が何かを感じ取ったかのように吐き捨てた。

「またも邪魔するか光の力め。そうか、貴様のキングストーンの変化もそれが原因か……どこまでも邪魔しよって！」

「光の……力……？」

「キングストーンって何だ！？　貴様は何を知っている！」

「貴様らは知らんだろうな。まぁいい。冥土の土産に教えてやる……」

クウガは邪眼の言った言葉に何か引っかかるものを感じ、アギトは聞き覚えのない言葉に対して問い掛ける。それを聞いて、邪眼は見下すように語り出す。

キングストーンは、古来地球外から齎された神秘の輝石。それに秘められた力は、万物の創造さえ可能とする大いなる力を秘めているのだと。そして、その力を完全に制御出来る存在こそ、創世王と呼ばれ、名が示す通り、世界を自分の意のままに創る事さえ可能になるのだと。

その話を聞いていたクウガが微かに動揺した。邪眼の言った言葉に思い当たる事があったからだ。それは、いつだったかクウガの力を研究していた科学警察研究所の榎田が、五代達に言った言葉。

アマダムはおそらく地球上の物質ではない。そう言っていたのだ。それだけではない。アマダムは、持ち主の意志に応じて力を発現させる。更に持ち主を仮死状態にし、そこから蘇生させる事さえやってのけるのだ。それは、邪眼の言う大いなる力に近いものがある。

そして、もう一つ。実は大いなる力という言葉で五代が真っ先に思い出した事がある。それは――

（凄まじき戦士……）

なってはならないと言われていたクウガの最後の姿。それこそ、邪眼の言った大いなる力に相当すると思ったのだ。後は、クウガの対になる存在ともいえるダグバ。彼はグロンギの王とも呼べる存在だったらしい。では、それと同じ存在へ変化させるアマダムは、王の石とも言えるような気が五代はしたのだ。

「……これはアマダムって言って、キングストーンじゃない」

「アマダムゥ？　……人間共はキングストーンをそう呼んだのか。だが、我には分かる。貴様が先程まで放っていた力！　あれは間違いなくキングストーンのものだ」

「まさかっ！？　じゃあ、あの時ＢＬＡＣＫさんを襲ってたのは……」

「そうよ。奴のキングストーンを奪うためだ。だが、貴様らのせいで失敗に終わったがな！」

忌々しいという感情を剥き出しに叫ぶ邪眼。そんな邪眼相手になのは達が動いた。先程のクウガへの強襲で、飛行能力がないのは分かった。だからこそ、空戦が可能なのは達にとって、邪眼は強敵かもしれないが、絶望するような相手ではないと踏んだのだ。

「レイジングハート！」

”分かりました”

「バルディッシュ！」

”心得ています”

二人の声に呼応するデバイス達。そして、二人は同時にその矛先を邪眼へ向けた。邪眼はクウガとアギトへ視線を向けており、二人には気付いていなかった。

それを確認し、二人は叫ぶ。必殺とまではいかないまでも、ダメージを与える事は出来るだろうと。

「ディバイィィィン……バスターっ！！」

「サンダー……スマッシャーっ！！」

二色の閃光が邪眼へ襲い掛かる。それにクウガ達も気付き、その攻撃の隙を突くべく構え直す。だが邪眼は、迫り来る閃光に対して片手をゆっくりと突き出しただけだった。

その行動に全員が疑問を感じる中、回復して体を動かせるようになったリインが叫ぶ。

「止めろ！　お前達の魔法は通じんっ！」

「「えっ！？」」

「遅いっ！」

その声と同時に邪眼の手に当たった二色の閃光は、急速に輝きを失い、漆黒に変わるとそのままなのは達へ向かって反射された。

それに驚く二人だったが、即座に防御魔法を展開するなのはと回避するフェイト。それを見ていたユーノは、リインの言葉から邪眼が何をしたかを予想し、愕然となった。

「ま、まさか……あいつは……」

「そうだ。奴は私から蒐集対象の魔法知識全てを持っていった。そして、おそらく防御プログラムを始めとする私の機能のほとんどもだ」

「どういう事や。それが一体何の――――」

「ここにいる者ほとんどの魔法が通用しない。あるいは先程のように利用されてしまうという事です、主」

リインの答えに愕然となるはやて。いや、それだけではない。シグナム達を始めとした前線メンバー全員でさえ、その表情は暗い。

蒐集されたのは、なのは、フェイト、ユーノの三人。それに騎士達はそもそもが夜天の書から生まれた存在。そして、主であるはやても同様にリンカーコアを夜天の書に内包されていた。ここにいる者で魔法が通用するのは、クロノとロッテ、アリア、アルフのみ。

それに気付いたからこそ、なのは達の絶望は深い。この中で攻撃力の高い者達が軒並み無力化された。この事実は、それだけ重い。

（このままじゃ……負けちゃうよ……）

なのはの不屈の心にも、絶望という名の闇が押し寄せる。だが、それを吹き飛ばすように大きな声がした。

「大丈夫っ！　俺達がいるから！」

「五代さん……」

「そうだよ！　俺達が頑張るから！　だから、援護をお願いします

っ！」

「翔にぃ……」

消えかけていた希望の灯。それが再び輝き出す。圧倒的に不利となっても、決して諦めない存在。例え相手が何であろうと、必ず最後には勝利すると信じさせる”何か”がある。

それを全員が感じ取り、その表情に生気が戻った。その反応に、邪眼が驚く。信じられないと言わんばかりに。

「ば、馬鹿な……何故だ。何故貴様らは抗える！？　何故絶望しないっ？！」

「俺達は、お前のような奴のために、誰かの涙は見たくない！」

胸に宿るは、あの日の誓い……

「そうだ！　全ての人達のため、全てのアギトのため、そしてみんなの笑顔のために……俺達は戦うと決めた！」

求めたモノは、平和な世界……

「ぬ……ぬぅぅぅぅ！　貴様らは……一体、何だと言うのだっ？！」

そんな二人の目に見えぬ”何か”に気圧されるように、じりじりと後ずさる邪眼。

その声に二人は互いを見やり――頷いてそれぞれの構えを取って叫ぶ。

「仮面ライダークウガっ！」

「仮面ライダーアギトっ！」

「「闇を打ち砕く！　正義の光だっ！！」」

その声に邪眼は恐れを抱き、なのは達は安心感を抱き、そして勝利を確信した。仮面ライダーの意味、その本質。それを間接的とは言え、知っているから。それを、五代と翔一が名乗った事がどういう事かを知っているから。

故に心に勇気と希望が甦る。不屈の想いが全員に宿る。みんなの笑顔のために。自分達も戦うのだと。

”仮面ライダー”と共に――。

いつものように流れる時間。穏やかな日々。それが永遠に続くと誰もが、いや彼だけはそう思っていた。これは、そんな頃の話……

「本気ですか？」

ウーノは告げられたジェイルの言葉に、どこか意外そうな声でそう言った。

「本気さ。ドゥーエは無理だけど、君達は可能だからね」

「……それはそうですが」

ジェイルがウーノに指示したのは、自分のコピー達の廃棄。正確には、ジェイルの受精卵の廃棄だった。

彼は万が一に備え、自分が死んだり計画を実行出来なくなった際の保険として、Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｆ．Ａ．Ｔ．Ｅの技術を使った自身のコピーをナンバーズ全員に仕込んでいたのだ。

だが、それをジェイルは稼働中のナンバーズだけでなく、調整中のナンバーズからも廃棄しろとウーノへ告げたのだ。

「くくっ……何、真司に言われたのではないよ。ただ、私は私しかいないと思ってね」

「？」

不思議そうな反応を返すウーノに、ジェイルは嬉しそうに語り出した。真司と関わるようになってから、強く思うようになった事があると。

それは、今を感謝して生きなければならないと。何のために生まれ、自分が何者なのか。それを知るために今まで生きてきたようなものだった。しかし、真司はそんな事を考えてさえいない。でも、いつも楽しそうに生きている。だから尋ねた。どうしていつも楽しそうなのかと。

それに真司はこう答えた。生きてるってだけで幸せだろ、と。それに、と続けてこう言い切った。

――――今はジェイルさん達もいるし。

そうあっけらかんと言って、真司は笑った。いつ元の世界に帰れるか分からないけど、それまではここが自分のいる場所だから。そ

う屈託のない笑顔で告げられ、ジェイルは思ったのだ。
自分が何者だとか、何のために生きるのか。そんな事を考えるよりも、今を楽しむ事から始めなければ。今を呪う者に未来などないのだ。

「……そう思った。そして、それは”今の私”しかない感情。これは紛れも無く、私が私だったからこその想い。故にだよ、ウーノ」

「……はぁ～……分かりました。では、そのように……」

「頼むよ」

ため息混じりのウーノ。そんな彼女にそう言ってジェイルは仕事を再開する。ウーノはジェイルを少し見つめて、軽く一礼して研究室を後にした。
ジェイルの答え。それを聞いて彼女も思う事があったのだ。それは、ジェイルの計画が既に変質しているという事。そして、その事が意味するものは……

（あの子達の心配事は無くなりそうね）

下の妹達。セインとディエチの懸案事項だった真司との対立は、どうやらせずにすみそうだと。それにウーノも安堵の表情を浮かべ、誰にでもなく呟いた。

――本当に……良かった。

ここに誰かいれば、きっとウーノに指摘したに違いない。瞳が潤んでいる事を。今にも涙が流れそうなぐらいになっていると。
だが、ここには誰もいない。それをウーノに伝える者はない。だ

からこそ、ウーノは自分の状況をこう判断した。

妹達を思うあまり、感情が昂ってしまったと。これも真司のせいだと呟いて、ウーノは目元を拭う。そして、そこにはいつものウーノがいた。彼女はしっかりとした足取りで、まずは調整室で作業しているだろうクアットロへジェイルの指示を伝えるべく、歩き出した。

それを終えたら、次はトーレ達を呼び出し、受精卵の摘出をしなければならない。きっと、それを聞いてセインは確実に喜ぶだろうとウーノは考え、小さく笑う。本当なら、それは怒らなければならない事。だが、不思議と今のウーノには、そんなセインの反応が微笑ましいものに思えたからだ。

（ドクターは私達の創造主。真司さん風に言えば父親。その子を産む事をしなくて済むとなれば、それは嬉しい事でしょうね）

そう考え、ウーノは思う。なら、自分達は誰の子を産むのだろうと。戦闘機人である自分達を愛し、女性として扱ってくれる男などいるのだろうか。そう考えた時、ウーノの脳裏に真っ先に浮かんだのは――――

（っ？！　何で真司さんなのよ！　もう……）

赤面しつつ、軽く俯きながらウーノは行く。すると、前から歩いて来る存在がいた。真司だ。真司はどうやらウーノに気付いたらしく、一度立ち止まって軽く手を挙げた。だが、下を向いているウーノは、それに気付かず早足で歩いている。

それに真司は妙な印象を受けるも、ならばと思って……

「ウーノさん」

「ひゃい！」

声を掛けた。それに驚き、背筋をピンっとさせるウーノ。それに真司もやや驚いたように体を反らせるが、気を取り直してウーノへ問いかける。一体どうしたのかと。普段のウーノらしくない。そう感じたからこその言葉だった。

それにウーノはどこか調子を狂わせながら答えた。ジェイルに頼まれた事があり、それについて考えていたら、つい思考に没頭してしまったと。それを聞いて真司も納得。どうせまた困った事を言い出したんだろうと言って、真司はしょうがないなと呟き、こう告げた。

「何なら、俺がまたジェイルさんに言ってきますよ」

「えっ……あ、いいのよ。今回は無理難題とかではないの。ただ、今までのドクターからは想像出来ない事だったものだから」

「そうなんだ。で、一体ど「あ～！　そろそろ調整室に行かないと！　ごめんなさいね、真司さん。急いでるから」

真司の問いかけを遮って、ウーノは捲くし立てるように言い放ち、早足で真司から離れていく。それを見送り、真司は疑問を浮かべた。

「ウーノさん……どうしちゃったんだ？」

そんな真司の呟きに答える者はいない。ただ、静寂だけがそこにあった……

ウーノの予想通り、セインはこの話を聞いて嬉しそうに笑った。
意外だったのは、トーレもどこか喜んでいた事。
　本人はセインが嬉しそうだったからだと言い張ったが、その場にいた全員がそれを内心で否定していた。
　真司だけは何も知らされず、ただウーノ達が以前にも増して明るくなったように感じ、嬉しそうに笑顔を見せるだけだった。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

続き。ついに名乗りが出来ました。もう、そこだけです。次でいよいよA's編は終戦です。
そして、それと共に龍騎組にもついに……
次回を待て！　……くれると嬉しいです。

十三話

邪眼相手に戦うクウガとアギト。初めこそ、二人の気迫に押されていた邪眼だったが、次第に立ち直り、今は二人を圧倒していた。
なのは達も援護を試みたのだが、下手な魔法は邪眼に利用され、クウガ達を苦しめてしまうため、大した魔法が使えなかった。一方のクロノ達は決め手に欠けていた。そもそも、クロノ以外はサポート役が多かったためか、強力な魔法がほとんどなく、更には邪眼自身も魔法を使える事が分かり、専らクウガ達の支援に回っていた。
そして、騎士達はシグナムやヴィータが直接攻撃に出ようとしたのだが、クウガ達の攻撃を軽々と受け止める邪眼相手では、それも厳しいと感じたため、中々手を出せずにいた。

「くうぅぅぅ……」

「くそっ、このままじゃ……」

「不味い、よね」

邪眼の一撃に吹き飛ばされるクウガ。それを見たアギトの言葉にクウガがそう続けた。格闘戦だけなら二人は人並み外れた経験がある。だがそこに、魔法を組み込まれると調子が狂うのだ。それだけではない。邪眼は電撃を手から放ち、それに魔法を加えて使ってくるのだ。
特にフェイトの魔法は相性がいいので、紫の電撃を纏ったフォトンランサー・ファランクスシフトなどは、アリアやアルフの援護がなければ、流石のクウガやアギトといえど大ダメージは必死だった。
だが、そろそろアルフ達にも疲労の色が出始めていた。魔力もそ

うだが、何より精神的な疲労が大きい。仮面ライダー二人を相手にしながら、邪眼は優位に立てる程の力を持っている。それと対峙するだけでも、精神が削られていくのだ。

それをクウガとアギトも理解している。故に焦っていたのだ。このままでは押し切られる。そう感じていたがために。

「こうなったら……俺が盾になるから、翔一君は攻撃に専念して」

「えっ……盾って、五代さん?!」

「超変身っ！」

動揺するアギトに構わず、クウガはその体を変化させる。赤い体は紫の鎧に変わり、目の色も同じ紫へ変わった。

タイタンフォーム。防御力に優れ、力は全フォーム一を誇る。邪悪なる者あらば、鋼の鎧を身に付け、地割れの如く邪悪を斬り裂く戦士である。

それを見て、アギトはクウガの意図を理解した。そして、内心で申し訳なく思いながら、彼もまた姿を変える。金色の体は青くなり、左腕が変化を遂げる。

ストームフォーム。俊敏性に優れ、風を司る姿である。そして、アギトはその手をベルトへ回すと、そこから一振りの武器――ストームハルバートと呼ばれる薙刀が出現した。

この姿と、とある姿でしか使えない専用武器である。

「ふんっ！　姿を変えただけで我を倒せるものか！」

クウガとアギトが姿を変えた事にやや驚く邪眼だったが、それもほんの一瞬で立ち直る。そして、すぐさま駆け寄り、その腕をクウ

ガへ振り下ろした。それをクウガは避けもせず、受け止めた。先程まで成す術なく吹き飛ばされていた相手が、急に自分の攻撃を受け止めた事に邪眼は流石に動揺を隠せなかった。

「はぁ！」

そこを見逃すアギトではない。素早い動きで邪眼の横に回りこむと、手にしたストームハルバートで邪眼に斬りかかる。その一撃は確かに僅かな反撃だった。だが、これが初めて邪眼に与えたダメージ。しかも……

「ぐあっ！」

（（効いたっ！！））

邪眼の口から初めて苦痛に呻く声が出た。それを聞き、二人のライダーも手応えを感じた。勝てる、と。決して無敵などではない。そう思ったクウガは受け止めていた腕を払い除け、呻く邪眼に渾身のパンチを叩き込む。

「おおりゃ！」

「ぐう！」

力自慢のタイタンフォームの一撃に邪眼も堪らず後ろへ下がる。そこへ更にアギトが追い打ちをかける。それを何とか防ぐ邪眼。そして、それに続けと動き出そうとしていたクウガへ電撃を放ち、後退させる。

しかし、クウガは後退すると同時にある事を思いつき、アギトへ声を掛けた。

「翔一君！　それ貸してくれない！」

「分かりました！」

クウガの提案を疑う事も尋ねる事もせず、アギトは手にしていたストームハルバートを手渡した。それをクウガが手にした途端、それが姿を変え、タイタンソードへと変化した。その刃先が伸びたのを確認し、クウガは立ち上がる。

薙刀は刀。つまり切り裂くものである。それ故に変化を起こし、タイタンソードへとなったのだ。そして、それを見たアギトもそれならばと再び姿を変える。

青い体が赤い体に。変化が左腕から右腕に変わり、先程と同じくベルトから一振りの武器が出現する。フレイムセイバーだ。

互いに武器を構えるクウガとアギト。だが、クウガはそれを静かに下ろし、一言。

「行くよ」

「はいっ！」

そして悠然と歩き出すクウガ。それと合わせるようにアギトもフレイムセイバーを下げ、歩き出す。それを見ていたなのは達は、正直不安で仕方ない。でも、どこかで信じている部分もある。仮面ライダーが負けるはずないと。

見れば、なのはだけでなく、全員が黙って見守っている。その目は諦めた目ではない。何か方法はないかと探る目だ。目の前で戦う二人のヒーロー。その勇姿に応えようと。

だからこそ、全員が見守っているのだ。僅かでも見逃さないよう

にと。

（頑張って！　仮面ライダー！）

そう心で叫んで、なのははレイジングハートを握り締める。先程までの無力感。それを吹き飛ばしてくれた二人の仮面ライダーに、自分も出来る事を探すのだと。

そう想いを新たにするなのはの視線の先では、邪眼が二人に向かって電撃を放つところだった……

目の前に迫る電撃。それをクウガは鎧に受け、僅かに後ずさるも、すぐに歩みを再開する。アギトは電撃をフレイムセイバーで切り払いながら歩き続ける。フレイムフォームは感覚が鋭くなっているため、アギトは電撃を落ち着いて対処する事が出来ていた。

だが、その要因にゆっくり歩いている事も影響している。走っていたのなら、さしものフレイムフォームもこの電撃に完全に対処する事は難しい。しかし、クウガに合わせてゆっくり歩いているため、それが可能となっていた。

勿論、クウガはこれを狙った訳ではない。しかし、奇しくもクウガの戦法がアギトのフレイムフォームにも良い効果をもたらしていたのだ。

これに驚いたのは邪眼である。通用していた攻撃が効果を無くし、しかも相手は悠然と近付いてくるのだ。どれだけ電撃を放っても、クウガは怯まず歩みを止めないし、アギトは全てを見事に切り払いながら進んでくる。

さながら邪眼の死刑執行人にも思えるような光景だ。最初は二十メートルはあった距離が、気付けば十メートル、五メートルと縮ま

っていき……

「ば、馬鹿な……」

気付けば眼前に二人のライダーがいた。それに電撃を放とうとする邪眼だったが、その電撃をアギトが切り払う。それに邪眼が怯んだ瞬間、クウガが手にしたタイタンソードを構えた。

そして、同時にアギトもその手にしたフレイムセイバーを構える。すると、その鍔が展開した。

「おりゃ！」

「はっ！」

クウガが右袈裟に、アギトが左袈裟に斬りつける。

「ぬがっ！」

「うおりゃあ！！」

「はあぁぁぁ！！」

そして、とどめとばかりにクウガがその切っ先を邪眼の体へ突き立てる。カラミティタイタンと呼ばれる一撃だ。

それを受け、邪眼は後ずさる。そこにアギトが真っ向に斬りつけた。セイバースラッシュと呼ばれる必殺の一撃。その二つの攻撃を受け、さしもの邪眼もこれまでかと思われたのだが……

「図に乗るなぁ！！」

両手から放たれた強力な電撃を浴び、二人は大きく吹き飛ばされた。そして、それを見ていたなのは達にも動揺が走る。邪眼が両手を掲げて何かの魔法を使おうとしていたからだ。
そして、それが何かを一番最初に理解したのはなのは。

「!?　レイジングハートっ!」

”ロード、カートリッジ”

なのはの声に合わせ、レイジングハートがカートリッジを排出する。その数、三つ。それを見ていたフェイトも、なのはの動きから邪眼の使おうとしている魔法の検討をつけ、その表情を変えた。
そして、自身も即座にバルディッシュへ同じ事を頼む。それを受け、カートリッジを排出するバルディッシュ。すると、その姿を鎌から巨大な剣に変えた。
そんな二人に周囲はまだ理解出来ないようだったが、ユーノは邪眼の周囲に魔力が集束していくのを見て確信した。

「スターライトを使うつもりだ!」

その言葉にクロノとアルフだけが驚愕する。他の者達はその魔法を知らない故に、いま一つユーノ達の焦りが分からないようだったが、少なくとも碌な事にはならないと感じたのだろう。
即座にそれぞれが動く。リインははやてを抱きしめ、ザフィーラとシャマルがその前に立ち、絶対死守の姿勢。シグナムとヴィータはアリアとロッテを下がらせ、自分達が防ぐと言わんばかりにデバイスを構え、アルフはクロノと共にユーノと三人で広範囲の防御魔法を展開する。
そして、なのはとフェイトはクウガとアギトの前に立ち、デバイスを邪眼へ向けた。

「なのはちゃん……」

「五代さん達はそこで休んでて。あれは私達が防ぐから！」

「フェイトちゃんも……」

「翔一さん達が私達の最後の希望。絶対に守ってみせる！」

そんな二人の驚くライダー達へ、なのはとフェイトが見せる仕草はサムズアップ。大丈夫。それを無言で告げ、二人の魔法少女は邪眼を睨む。

「ふんっ！　小娘如きに何が出来る！　喰らえっ！　ダークネス・ブレイカー！！」

「スターライトっ！」

「ジェットっ！」

迫り来る漆黒の砲撃。それがユーノ達の展開した防御魔法を突き破っていく。だが、それに僅かに勢いを落としたのを、なのは達は見逃さなかった。だからこそ、それに対して二人は怯まない。背中にいる二人のヒーロー。それがくれた勇気と希望を胸に、不屈の想いで叫んだ。

「ブレイカー！！」

「ザンバー！！」

二色の閃光が巨大な漆黒と衝突する。微かに、でも確実に二つの閃光が押されている。それでも二人は諦めない。顔を衝撃に歪ませながら、しっかりと大地に足をつけ、漆黒の砲撃を……その先にいるであろう邪眼を見据えていた。

それを上空で見ていたはやてが堪らなくなったのか、リインへ叫ぶ。

「リインっ！　わたしも……わたしも戦いたい！」

「主……」

「お願いや！　友達が家族のために頑張ってくれとるのに、わたしだけ見とるだけなんて嫌や！」

涙を浮かべ、リインへ告げるはやて。その切なる想いを受け、リインは――――頷いた。

そして、はやてに優しく笑いかけ、告げる。どこまでも私は貴方と共にあります、と。それに頷き、はやては決意の眼差しをリインへ向けた。それにリインも頷き返し、二人は声を合わせた。

「「ユニゾン・イン」」

はやての体にリインが入り、はやてに騎士甲冑と杖が出現する。それと同時に堕天使を思わせる羽が出現した。それを確認し、はやては押されつつあるなのは達の元へと向かう。

それをシャマルもザフィーラも止める事はしない。はやての決意や覚悟を知るからこそ、臣下ではなく、家族として取るべき行動は決まっていた。

「行くわよ、ザフィーラ」

「心得えている」

はやての後を追うように二人もなのは達の傍へ。それを見て、アリアとロッテがシグナムとヴィータに目配せで追うように告げた、それに二人も頷き合い、アリア達に目礼を返し、なのは達の元へ。

それをユーノは眺めながら、攻撃魔法を使えない自分を悔しく思っていた。だが、それを気付いたのかクロノが一言呟いた。

「そんな顔をするな。僕らだって十分役に立っている」

「そうさ。現になのは達が拮抗出来たのは、アタシらの魔法を突き破ったからだよ」

二人の言葉にユーノも頷き、視線をなのは達に向けた。そこでは、はやてが魔法を展開しようとしているところだった……

「「来よ、白銀の風！　天よりそそぐ矢羽となれ！」」

はやての姿に驚いたなのは達だったが、はやての一緒に戦うとの言葉に笑顔を浮かべ、クウガ達はその言葉にはやてもまた強い心の持ち主だと改めて感じていた。

そして、そのはやてが力強く紡ぐ言葉は闇を貫く光へ変わる。

「「フレース・ヴェルグ！！」」

はやてから放たれた魔法の輝きが加わり、三色の閃光となる。そ

れが押され始めていた状況を五分にまで押し戻した、

「な、何ぃ！」

邪眼の声に微かに驚きが混ざる。だが、そこから状況は再び膠着状態に陥る。それに邪眼が余裕を取り戻そうとした瞬間、そこにシャマルが降り立ち、クウガとアギトを癒し始めた。

そして、ザフィーラも同じ様に降り立つと、邪眼の足を狙ってバインドを放つ。だが、それは何故か妨害も無力化もされない。それにユーノ達が驚くが、どこか邪眼はしまったというような雰囲気を感じさせた。

「やはりか。貴様が魔法を無効化ないし利用する際、必ず手を使っていた。ならば、両手が塞がっている今は魔法を防ぐ事は出来んと踏んだが……どうやら当たりらしいな！」

「さすが盾の守護獣だ」

「良く見てるじゃねぇか！」

更にそこへシグナムとヴィータも到着し、そのデバイスを構えた。それと同時に排出されるカートリッジ。シグナムはレヴァンテインを鞘と繋げ、弓のようにし、ヴィータはグラーフアイゼンを空高く掲げた。

それは、彼らの最後の切り札。烈火の将と鉄槌の騎士のとっておき。

「翔けよ！　隼っ！！」

”シュツルムファルケン”

「轟天！　爆砕っ！！」

”ギガントクラーク”

互角だった衝突に、シグナムの一撃が加わり、ダメ押しとばかりにヴィータの一撃があろう事かその巨大な閃光を後ろから叩いた。それを受け、漆黒を飲み込むように進む巨大な閃光。それはそのまま勢いを止める事なく邪眼へ向かい……

「そ、そんな馬鹿なぁぁぁぁぁ！！」

その体を飲み込んだ。光が闇を消し去るが如く。そして、その輝きが消えた後には……

「終わった……？」

邪眼の姿はなかった。そこには、最初から何もいなかったように荒野が広がっている。ただ、残った大きなクレーターだけが、確かにここで激しい戦いがあった事を物語っていた。

しかし、誰も勝利したという想いを抱いていなかった。むしろ、これで終わりではない。そんな感じさえ受けた。そして、クウガとアギトはそんな空気を感じ取り、静かに立ち上がるとクウガは変身時の構えを取った。

「超変身っ！」

「どうして赤くなるの？」

クウガの行動に不思議がるなのはだったが、その横ではアギトが

ベルトの両側を叩いていた。

「よしっ！」

「翔にぃまで……」

アギトが取った姿はグランドフォーム。アギトの基本の姿だ。

「まだ終わってないよ……」

「うん。だから……」

そう言って二人の仮面ライダーは視線をさっきまで邪眼がいた位置へ向けた。それにつられるように全員の視線がそこへ向く。

そこにはもう何もない。だが、それでもクウガもアギトもそこから目を逸らさない。

「「出て来いっ！」」

構えるダブルライダー。それに呼応するようにその周囲の空気が蠢き出す。それを感じ、なのは達も身構える。そして、空間が歪み、そこから邪眼が再び姿を現した。それを見て、誰もが息を呑んだ。無傷だったのだ。あれだけの攻撃を受けたにも関わらず、その体には傷跡一つ残っていなかった。

それを見て、リインだけが気付いた。邪眼が無傷な理由を。そして、それが意味する事を悟り、リインは絶望にも似た想いを抱いてはやてに伝えた。

奴は、転生機能を備えてしまっている、と……

いつものように流れる時間。穏やかな日々。それが永遠に続くと誰もが、いや彼だけはそう思っていた。これは、そんな頃の話……

「これで良しっと」

「何かさ……変な気分だね」

持って来たケースを置き、セインは笑みを浮かべる。だが、ディエチはそのケースを見つめ、浮かない表情。二人が持ってきたのは、ジェイルのコピーの受精卵。全部で十一。ナンバー2であるドゥーエ以外全員のものが入っている。

それをラボの奥深くにある廃棄所へ捨てにきたのだ。本来なら焼却処分などをするのだろうが、それは何となく気がひけたのだ。曲がりなりにも命だと考えてしまったせいもある。

よって、こうしてラボの奥深くで永遠に眠ってもらおうという結論に達したのだ。

「う～……ま、仕方ないよ。あれもドクターと同じって考えると……ねぇ」

「そうだけど……何か嫌な予感がするんだ」

「え？　まさかあれが独りでに成長して襲ってくるとか？」

「そんなんじゃないけど……」

セインの言った内容にディエチは苦笑する。どこかのB級ホラーのようだったからだ。そんな事を考えたからだろう。先程までの浮かない気分は少しましになっていた。

セインが気を遣ってくれたんだと思い、ディエチは小さく笑う。それを見て、馬鹿にされたと思ったのか、セインはディエチに対してむくれた顔をする。

そんなセインにディエチはやや慌てながら弁解する。セインはそれを聞きながら、拗ねた顔を見せて歩き出す。姉としてちゃんと敬ってと言うセインに、ディエチは軽く困りながら姉として敬われるようになってと返した。

それにセインがショックだと叫んで走り出す。それにディエチも慌てて追い駆ける。そんな風に賑やかな二人だった。

この時、ディエチが抱いた不安。その予感が正しかったと二人が気付くには、ここから十年近い時間が必要だった……

「真司」

「ん？　何だよ、トーレか。訓練ならやんないぞ。もうチンクちゃんとしたからな」

トレーニングルームの掃除をしていた真司だったが、そこに現れたトーレに手を止める事無く、掃除を続けていた。そんな真司の反

応にトーレは内心苦笑するも、それを真司に見せないようにいつもの顔で告げた。
訓練ではなく、相談があるのだと。それに真司は手を止めて顔を上げた。その反応の違いにトーレは呆れたように笑うと、大した事ではないと前置いてこう言った。

「妹達の事だ」

それから十分後、真司とトーレは二人でトーレの部屋にいた。本当は真司の部屋にする予定だったのだが、真司の部屋は良くセインやディエチが訪ねてくるため、トーレの意見によってトーレの部屋となった。
真司はそれでも女の子の部屋だからと別の場所を提案したのだが、トーレの他に都合の良い場所などないとの言葉に切り捨てられ、この有様である。

「で、妹達の話って……セイン達？」

「違う。いや、厳密に言えばあの二人もか。まぁ、つまりセイン以降のセッテ達についてだ」

トーレは、残りのナンバースは戦闘用に特化した者が多くなるため、その訓練を自分やチンクだけでなく真司にも担当してほしいのだと告げた。
それを聞いた真司は微妙そうな表情を浮かべた。真司にとってはセイン達は妹分であり、可愛い女の子達なのだ。いくら戦闘用に作られたからといって、はいそうですねと扱える訳ではない。
だから彼はトーレの言い分に素直に頷く事が出来なかったのだ。

それをトーレも理解しているので、こう真司に告げた。妹達が起動したら、まず本人達に真司が尋ねて欲しいと。それは、戦闘機人として生きるのか、それとも別の生き方を選ぶのかを。

「それって……」

「私の独断ではない。ドクターもお許しになった」

「そっか。ジェイルさんもね……ん？　ドク「あ～、それともう一つあってな。　セッテとオットー、ディードの三人はお前が教育しろと言っていた」

真司の言葉を遮り、トーレは早口でそう告げた。それを聞いて、真司は首を傾げた。何故自分が教育するのだと。それを聞いて、トーレはやや呆れながら、クアットロがお前にそう伝えて欲しいと言っていたと教えた。

それを聞いて真司はやや考えたが、その意味を理解し、ガッツポーズ。それは、クアットロが担当になった妹達を真司に委ねると決めたと分かったからだ。つまり、三人をちゃんと妹として扱うと断言してくれたのだと。

良かった良かったと頷く真司。それを眺め、笑みを浮かべるトーレ。気が付けば、真司が来てから様々な事が変わった。まず変化したのは、チンク。食生活にジェイルの考え方。クアットロの物腰にウーノの接し方も変わった。

そして何より……

（私自身、か……）

戦う事だけが生き甲斐であり、生まれた意味。そう思っていた。

だが、それを真司は柔らかくゆっくりと否定していった。ほとんど笑う事などなかった自分。それを見て、真司は笑った方がいいと事ある毎に言っていた。

それを最初はうっとおしいとしか感じてなかったのが、うるさい奴に変わり……相変わらずだなに変わり……今ではたまに笑みを見せ合うようになっていた。

訓練終わりにする他愛ない会話。洗浄と表現する自分に対し、風呂って言えよと繰り返す真司。そんなやり取りなどを思い返し、トーレは思う。このまま妹達や真司と静かに暮らすのも悪くないと。

（もうドクターも計画に興味を無くし始めているしな……）

つい先日、ウーノが姉妹を集めて話した事が事実なら、ジェイルは計画を変更して、管理局を相手にした反乱ではなく、最高評議会を利用してのんびりライダーシステムの研究やその発展系を考えていきたいと考えているらしい。

そのため、もうジェイルは”ゆりかご”をただの研究施設に改造し、今後に備えようとも考えているらしいとの事。

そんな事を思い出し、トーレは真司を見つめる。真司は、どうやったら三人をちゃんとした女性に出来るかを必死に考えているようだ。表情を険しいものにして、あ～でもないこ～でもないと言っている。

そんな真司を見て、トーレは小さく呟く。

――――このバカめ。

その声には、紛れも無い嬉しさと愛おしさが込められていた……

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

続き。やはり終わらなかった……。次こそクウガ達を決着させてみせます。

そして、龍騎はいよいよ次回でクウガ達とある意味連動する事に……？

次回、Ａ’ｓ編最終決戦終了！

十四話

はやての口から語られた事実。それを聞き、なのは達に愕然となった。転生機能。それを邪眼が得ている。それはもう邪眼を倒す事は出来ないと告げられたようなものだったからだ。

しかし、もうそれで絶望するなのは達ではない。そう、いるのだ。不可能を可能に変える存在が。その証拠に、彼らはそれを聞いても諦めたようには欠片も見えない。

「倒せないのなら、倒せるまでやるだけだ！」

「そう。みんなで力を合わせれば、絶対に大丈夫！」

アギトの言葉にクウガが続いて断言する。両者共、邪眼から視線を外さず、サムズアップをなのは達へ向ける。それに全員がそれを返す。その表情は皆凛々しい。

その雰囲気に邪眼は苛立ちを隠せない。誰も不安や恐れを抱かない。自分が再生したのにも関わらず、それを意にも介さないクウガ達。絶望を叩きつけても尚、希望の灯を消さない仮面ライダーという存在へ。

「おのれおのれおのれぇぇぇぇ！！」

有らん限りの声で周囲を威嚇する邪眼。それに対し、全員が構える。恐れはしないと。全員の姿勢が、瞳が物語る。決して闇に屈したりしない。その想いをありったけ込めた心が、その全身から希望という名の光を放つ。

「転生するのなら、封印すればいい！」

「そうよ。ロッテが言う通りだわ。クウガの力なら……絶対に！」

「そうだな。仮面ライダー、援護する。必ず邪眼を封じてくれ！」

ロッテ、アリア、クロノの三人が邪眼に啖呵を切るように声を掛ければ……

「翔一、お前の援護は我らに任せろ」

「おう！　しっかり助けてやっからな！」

「安心して戦って」

「ヴォルケンリッターの名に賭け、勝利への道を切り開く！」

シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラがアギトを励まし……

「アタシらがついてるから、しっかりやんなよ、雄介！」

「僕らも全力で支えます！」

アルフ、ユーノがクウガへと言葉を掛け……

「翔にぃ……五代さん……絶対、絶対勝つって信じとるから！」

「うん。私達も出来る限りの無理をします！」

「だから、頑張って！　仮面ライダーっ！！」

はやて、フェイト、なのはが二人に向かって想いを託す。

そして、それを受け取り、クウガとアギトは力強く頷いた。その手に見せるはサムズアップ。絶対の安心感と信頼を与える仕草。それを見て、全員が動き出す。邪眼への対応は、既に分かった。だが、うかつに手を出せない事には変わりない。

だから、なのは達がやや慎重に邪眼の周囲に展開した。電撃を考慮し、いつでも避けたり逃げたり出来る距離。それをそれぞれが測っていた。

そんななのは達と違い、クウガとアギトは邪眼に対し、攻撃を開始した。格闘戦を挑むものの、地力ではやはり邪眼にやや分があるようだが、それを二人も分かっている。

だからこそ、邪眼を挟み込むようにして対峙していた。クウガが正面に、アギトが背面に回り、邪眼に攻撃を仕掛けていたのだ。

クウガの蹴りを受け止める邪眼。だが、その直後にアギトが足払いをかける。それに邪眼が体勢を崩しかけたところで、クウガが残った左足で蹴りを放つ。その衝撃で邪眼がややよろめいたのを見て、アギトが跳び上がり、右足で蹴りを叩き込む。

それでクウガが更に攻撃を仕掛けようとしたところで、邪眼が手を突き出し電撃を放った。それをまともに喰らい飛ばされるクウガ。

「五代さんっ！」

「貴様もだ！」

そんなクウガへアギトが一瞬意識を向けたのを見逃さず、邪眼がアギトへも電撃を放つ。それを同じようにまともに受け、アギトも大きく飛ばされる。更に追撃をかけようとする邪眼だったが、そこ

へ青い閃光が走る。
それを受け、僅かに体を揺らす邪眼。そして、その攻撃が来た方へ視線を向けると、クロノがデュランダルを手にしていた。ブレイズキャノンを使ったようで、その顔には険しさが見える。

「大丈夫か、津上翔一っ！」

「助かったよ、クロノ君！」

邪眼がクロノへ注意を向けた隙を突いて、アギトは体勢を立て直し、邪眼と距離を取っていた。それに邪眼が気付いた瞬間、クウガが再び立ち向かった。飛び掛りながらのパンチが邪眼に当たり、そこから更に左、右と腹部へ拳と打ちつける。
そんな中、ユーノはずっとある事を考えていた。邪眼が使った魔法である。邪眼は、何故かプラズマランサーではなく、フォトンランサーを使っていた。今のフェイトはプラズマランサーを使っているにも関わらずだ。

（何故だ？　どうして威力の低い魔法を……待てよ？　そうか！　そういう事かっ！）

ユーノが気付いたのは、思考の死角。勝手に思い込んでいた発想。それに気付き、ユーノは叫んだ。それが現状の打破に繋がると信じて。

「なのは！　フェイト！　邪眼は蒐集以後の魔法は使えないっ！」

「え？」

「どういう事、ユーノ君」

「つまり、蒐集された後から使えるようになった魔法には、対応していないんだ！
プラズマランサーやアクセルシューターを使ってこなかったのがその証拠だよ！」

それを聞いて、なのはとフェイトに変化が現れた。先程までは牽制や支援ばかりを考えて動いていたのが、途端に攻撃に移ったのだ。
言われた通り、アクセルシューターやプラズマランサーを主体に、邪眼を攻撃する二人。それを邪眼は受け止めもせず、電撃で相殺したり、かわしたりするだけだった。

（本当だ！）

（これなら……やれる！）

それと同時になのはは思い出す。それは、まだフレームが完璧ではないから使ってはいけないと言われたもの。その名は、エクセリオンモード。最大出力を出す事が出来るが、制御に失敗すれば、現状ではレイジングハートが壊れてしまうというもの。
だが、そんななのはの心を読み取ったのか、レイジングハートはこう言い放つ。

”マスター”

「どうしたの」

”エクセリオンモードを使ってください”

驚くなのはにレイジングハートは告げる。確かに制御は難しいが、

なのはならやれると。そして、自分を信じて欲しいとも。そう言われても、まだ決意を決められないなのはだったが、そこにレイジングハートがこう断言した。

”信じてください、マスター。私を、そして貴方自身を！”

「レイジングハート……うんっ！」

なのははその言葉に感謝し、力強く告げた。

「エクセリオンモード、ドライブ！」

それに呼応し、形を変えるレイジングハート。そして、更になのはは続けて告げる。

「エクセリオンモードＡＣＳ、ドライブっ！！」

”ドライブ・イグニッション”

ストライクフレームが展開し、その先端になのはの魔力光が刃を成す。そして、周囲に光の羽を展開し、なのはは邪眼目掛けて突撃する。

それを見て、フェイトもザンバーを振り上げ、それに続く。そして、その途中でバリアジャケットを薄くしていく。元々高くない防御力。それを極力下げる事で速度を求めたフェイトの決戦用の姿。その名も――。

「ソニックフォームでなら……バルディッシュ！」

”ソニックムーブ”

音速の名を冠する姿。それは確かにフェイトに従来以上の速度を与える。更に高速移動魔法を使い、突撃するなのはへ追いつき、一瞬だけ互いを見やり――――頷いた。

「ぬ？」

そんな二人に気付いた邪眼だったが、既になのはもフェイトもその懐に入り込んでおり、そのままなのはは……

「エクセリオォォォン……」

「な、何ぃ？！」

ストライクフレームを邪眼に突き刺すなのは。フェイトはそんななのはの上に行き、ザンバーを両手で振り上げた。自分の知らない攻撃に動揺する邪眼。そこへフェイトの声も響く。

「プラズマ！」

それに邪眼が視線を上げれば、ザンバーを大上段に構えたフェイトの姿がある。それを迎撃しようとする邪眼だったが、その体が動かない。見れば、全身隈なくバインドで拘束されていた。その色は二色の異なる緑。シャマルとユーノの魔力光だった。

「させません！」

「二人共、今だ！」

その言葉に頷くように二人の声が大きく響く。

「バスタァァァ！！」

「ザンバァァァ！！」

二つの魔法が重なり合い、邪眼を襲う。その間に、クウガとアギトはそれぞれ邪眼を封印すべく動いていた。アギトが必殺の蹴りを放つので、そこへクウガが封印エネルギーを込めた一撃を叩き込む事を決め、二人はそれぞれ散開する。

なのは達の攻撃で邪眼が弱ったのを確認したからだ。そして、まずアギトが動く。角が展開し、その足元にアギトの紋章が浮かび上がる。そこから前段階の構えを取り、その紋章がアギトの足へ集束されていく。それを感じ取り、アギトはその場から高く跳び上がり――――。

「はぁっ！！」

ライダーキックを放つ。幾多の悪を倒してきた必殺技だ。それが二人の魔法で大ダメージを負った邪眼へ追い打ちをかける。堪らず大きく後退し、膝をつく邪眼と着地するアギト。それを見て、クウガが構えて走り出す。地面を踏み締める度に、その右足が熱を増す。一心不乱に邪眼目指して走る。走る。走る。

「っ！」

そして、その勢いを持ったまま両足で大地を力強く蹴り跳び上がる。空中で一回転し、そのまま――――。

「おりゃあぁぁぁっ！！」

マイティキックを放つ。しかも、ズ・ザイン・ダを倒した際の強化型。それが片膝をついていた邪眼を更に蹴り飛ばし、その体を大地に横たわらせる。地面に着地するクウガ。その右足から煙を出しながら、視線は邪眼へと注がれる。何とか立ち上がる邪眼。その体に浮かび上がる封印の文字。

それに全員の期待が注がれる。苦しむ邪眼。クウガもアギトもそれを見守りながら、まだ気を抜いていない。

「ふぬっ！！」

「「「「「「「「「「「「っ？！」」」」」」」」」」」」

だが邪眼が気合を入れた瞬間、文字が完全に消えた。全員がそれに驚愕し動きを止める中、それに即座に反応した者がいた。クウガだ。再び構え、走り出す。それを見ていたアギトだったが、何かを思いついたようにマシントルネイダーへと走る。

それと同時にクウガが跳び上がり、邪眼へ蹴りを放った。それを邪眼は叩き落した。その光景を見て全員に戦慄が走る。クウガの全力の蹴りを受けて尚、邪眼が封印されなかった事に。そして、あれだけのダメージを受けても邪眼がクウガを相手出来る事にも驚きを隠せなかった。

しかし、その時クロノがデュランダルを掲げて告げる。

「悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて、永遠の眠りを与えよ……凍てつけ！」

”エターナルコフィン”

その唱えられた魔法は、邪眼だけを完全に氷の中に閉じ込めた。

それを見てクウガはクロノへ視線を送る。そこには疲れた表情のクロノがいた。魔力のほとんどを今ので消費したためだ。だが、それを知らないクウガでさえ、そんな様子に申し訳なく思うも、クロノが見せたサムズアップにやや驚きながらもそれを返した。

「だが、これもおそらく長くは持たない。何か手はないのか」

「……フェイトちゃん、俺に魔法を当ててくれないかな」

「え？」

「電気が……いるんだ」

実は先程の一撃でクウガは金の力を使うつもりだった。だが、何故か金の力が発動しなかったのだ。クウガは知らない。それは、無意識で自身がそれをどこかで迷っていたためだと。邪眼が弱っていたため、もしかしたら恐ろしい金の力を使わずとも勝てるのでは。そう思った事が原因だったのだ。

それを知らず、クウガはフェイトからプラズマランサーを受ける。その魔法の電撃は確かにクウガの中へ吸収された。それを見て全員が驚いたが、クウガは構わず氷付けになった邪眼を見据えた。

「五代さん！」

「翔一君？　どうしたの」

声に反応して振り向けば、そこにはスライダーモードのマシントルネイダーに乗ったアギトがいた。アギトは言った。これに乗って加速をつけ、その勢いのまま蹴りつければ、更に威力が出ると。

更にクウガと同時に自分も蹴りを放つ事で、今度こそ封印出来る

はすだ。そうアギトは語った。

「……そうだね。それでいこう！」

「はいっ！」

「でも、氷が少し壁になるかもしれない」

二人の立てた作戦を聞いて、ユーノは誰に言うでもなくそう呟いた。それを聞いてアギトがこう告げた。

「俺に任せてください！」

そう言ってアギトは普段とは違う構えを取る。それは、右手を前に出してそこに左手をバツを作るように重ねるもの。

「変身っ！」

その声でアギトの体が真っ赤に変わる。マイティフォームにも負けない程の赤。角も赤くなり、その体は先程よりも盛り上がっている。

バーニングフォーム。アギトの更なる力を秘めた姿だ。その名の通り、体は炎を纏っていて、力は全フォームの中で一番だ。

「俺もこれで蹴ります！　なら、きっと氷があっても……」

「貫ける……だね！」

その声に全員が頷いた。ここまで来た以上、頼れるのは二人の仮面ライダーしかいない。その想いを込めて、全員がクウガとアギト

を見つめる。希望と信頼、そして期待。その輝きを確かに感じ、二人は頷いた。そして、マシントルネイダーへ飛び乗るクウガ。それを確認し、アギトが上昇を開始させる。どんどん高く上がり、そしてある程度離れたところで、一気に加速をつけ、急降下させた。

その時、邪眼を閉じ込めていた氷が震動し始めた。それになのは達が振り向き、念話である事を伝え合う。そして、氷が砕けて邪眼が動き出そうとした。だが――。

「くっ！　何だと?!　体が……動かんっ！」

「残念でした！」

「いくら貴方でも！」

「これだけのバインドは破れまい！」

リーゼ姉妹とクロノが胴体を……

「観念しろ！」

「もう終わりだっ！」

「闇の書の悲劇も！」

「その過ちも全て！」

守護騎士達が両腕を……

「お前みたいなのがいるから！」

「こんな事件が起きるんだ！」

アルフとユーノが両足を……

「でも、今日ここで！」

「私達が終わらせる！」

「だから勝って！」

三人の魔法少女達が頭部を……

それぞれが邪眼の体を完全に封じる。そして、そんな邪眼の視線の先には、凄まじい勢いで向かってくる二人の仮面ライダーの姿が……

「「「仮面ライダーっ！！」」」

なのは達三人の少女の声が、二人に届く。それを受け、二人は眼下に見える邪眼を見据え――。

「行くよ、翔一君っ！」

「はい、五代さんっ！」

同時に跳び上がる二人。クウガはその最中、全身に電流を走らせ、体を変化させる。ライジングフォームと呼ばれるクウガの強化された姿。

金の力ともいい、これは全フォームを飛躍的に強化するものだ。

そして、その中でも一番強い力を誇るのが、赤の金のクウガ――

ライジングマイティなのだ。

空中で一回転するクウガとアギト。そして、その姿勢を同じくし、邪眼へ向かって突撃していく。その姿はまさしく、闇を焼き尽くす炎。

「うおりゃあっ！！」

「はあっ！！」

二人はそのまま邪眼を蹴り飛ばし、反動で空高く舞い上がり、大地に降り立つ。その先で邪眼は轟音を立て、地面に激突した。舞い上がる砂煙。静まり返る空間。そして、ややあってからその砂煙が晴れていくと、邪眼が立っていた。その胸を手で押さえ、ゆっくりとクウガ達へ向かって歩いてくる。

それを驚愕の表情で見つめるなのは達。そして、邪眼はゆっくりと残った手を構えた。電撃を放つつもりなのだ。

「残念だったが、我は不滅よ。これで……ぐぬっ？！」

だが、その時邪眼に変化が起きる。何か後ずさると、恐る恐る押さえていた手を離していく。するとそこには――。

「文字が……浮かんでる」

呆然とユーノが呟いた。そう、封印を意味する文字がくっきりと浮かんでいた。しかも、それに何故かアギトのマークも重なっている。

「ば、馬鹿な……こんな、こんな事が……」

信じられないと言ったような邪眼の声。それは明らかに今までとは違うものだ。それに誰もが確信した。これで勝ったと。転生機能があるとしても、もうおそらく再生出来ないだろうとも。

そう、文字を中心に邪眼の体にひびが生じていたからだ。それを見て、クウガは小さく心から呟いた。

「これで……クウガがいらなくなるといいけど」

「え……？」

「死なん！　我は死なんぞぉぉぉぉ！！」

それを聞いたのは、アギトだけ。すると、その呟きがキッカケのように邪眼が爆発していく。それになのは達は残った魔力を使い、防御魔法を展開する。そのまま爆発は周囲に広がり、灼熱の炎で包み込んだのだった……

やがて炎が消え、周囲に落ち着きが戻る。そこへアースラから通信が入った。どうも邪眼が現れてから今まで、一切の連絡が出来なかったらしく、エイミィが全員の無事を聞いて涙を流した。

「リイン、どうや？　あいつ、まだ生きとるか」

「……いえ、完全に消滅したようです。あの文字は奴の機能全てを封印、もしくは破壊したのでしょう」

「本当に……終わったんだ」

リインフォースの言葉にアリアがそう言ってその場に座り込む。
それをキッカケになのはやフェイトも地面に座り込んだ。全員、疲労困憊という状態だった。だが、その顔は揃って笑顔。その視線も同じ者達へ注がれている。

「つっ……かれた～」

「ですね～」

その相手、五代と翔一は地面に寝転がっていた。その顔は疲れは見えるものの、どこか嬉しそうだった。そんな二人を見て、全員が笑う。先程までとは大違いの雰囲気だったからだ。だが、それこそ二人らしいと思い、なのは達は笑う。

そんな笑い声に二人も笑みを浮かべ、体を起こして無言のサムズアップ。それに全員がサムズアップを返す。こうして、後に闇の書事件と呼ばれる戦いは幕を閉じた。だが、それは新たなる戦いの幕開けでもある。

そう……この戦いを、後に関係者はこう呼んだ。『第一次邪眼大戦』と……

ジェイルラボ　廃棄所。そこに置かれた一つのケース。その中に僅かに時空の歪みが生じて”何か”が入り込んだ。
それは、そのケースの中身を取り込み、いくつもあった中身は最初からそうだったかのように一つになった。
そして、それはそのまま静かに眠るように沈黙するのだった……

ジェイルラボ　研究室。そこに真司はいた。理由は一つ。今後目覚めるナンバースの事を相談するためだ。トーレに言われてから色々考えてはいるのだが、中々良い案が浮かばない。そのため、天才と自称するジェイルの意見を聞こうと思ったのだ。

「で、考えてきたんだけどさ」

そう言って真司が見せたのは『セッテ、オットー、ディード淑女計画』と日本語で書かれた紙。さり気無く淑女の淑が訂正されている痕跡がある。

ジェイルは既に日本語をある程度読めるようになっていた。というのも、真司が一向にミッド文字を覚えず、情報疎通に難があったためである。それにジェイルは目を通し、呟いた。

「……ふむ。淑女、ねぇ……」

「今、家にいるので近いのは、ウーノさんとディエチかな。チンクちゃんはそう言えない事もないけど、結構過激な部分もあるしさ」

真司は訓練の時に受けたチンクのＩＳ――ランブルデトネイターの事を思い出しながら言った。あの爆発を自在に操り、真司に勝とうと躍起になるチンクに、真司が内心人は見た目によらないと改めて感じたのは、ここだけの秘密。

ジェイルは真司の書いた内容を見つめ、やや何か考えてから一言呟く。

「無理だね」

「そうそう、無理……って、おい」

「いや、何せセッテ達も戦闘型だよ？　元々から支援を考えて生まれたウーノやディエチとは異なるんだ」

ジェイルは真司にも分かるように丁寧且つ簡単に説明していく。それは、三人のコンセプトと製作背景。更に、残りの九番や十一番に関しても話した。そう、残った少女達は皆戦闘機人の名に相応しい存在なのだと。

それを聞きながら、真司は余計彼女達を人として生きさせてやりたいと思っていた。戦うために創られた命。だが、その使い方や生き方を決めるのはその本人だ。だからこそ、真司は思う。様々な選択肢を教える事。それこそが自分がセッテ達にしてやれる唯一の事じゃないかと。

そんな風に真司が決意を新たにしている時、ジェイルはジェイルで思う事があった。自分は今まで誰かのために動かされてきた。だから自分のために世界を変えようと考えたのだ。しかし、真司と出会い、それが間違いだと気付いたのだ。

本当に変えるべきは世界ではなく、自分。自分が変われば世界が変わる。そう気付くとどうだ。嫌々していた仕事は、自分が好きな事をするための必要事項と思えるようになり、ただ体のためにと考えていた食事が、今では三度の楽しみに変わり、研究しかする事がなかった生活に、真司が持ち込んだ将棋（考えとルールのみで、実際はチェスで代用）を真司と指す事が加わり、趣味と呼べるものが出来た。

（世界を変革する力っていうものは、案外誰もが持っているんだろ

うね）

今を懸命に生き、楽しもうとする。その生きる事の原点ともいえる考え。それに気付く者こそ、世界を変えていくのではないか。そんな事を思いながら、ジェイルは笑う。それを真司は不思議そうに見つめる。今の話で笑うようなところはなかったからだ。

そんな真司の視線にジェイルは何でもないと言って、話を続ける。

「だから、三人を淑女には出来ないと思うよ。ま、不可能とは言わないけどね」

「そっか……じゃ、俺とりあえず頑張ってみるよ」

「……そう言うと思ったよ」

「ん？　何か言った？」

「いや、気のせいさ」

いつもの表情でジェイルが言うと、真司はどこか釈然としないものを感じているようだったが、頷いて部屋を後にした。その閉まったドアを眺め、ジェイルは呟く。

――――真司は、本当に見てて飽きないね……と。

そう呟くジェイルの顔には、心からの屈託のない笑みが浮かんでいた。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

A' s編最終決戦終了。だが、闇は消えず。ただ今は、静かに眠るのみ……

クウガとアギトは、このまま海鳴には残りません。どうなるかは、次回で……

A' s編完

アースラによる探査にも邪眼の反応がなかった事で、一同に安堵が訪れた。そして、喜びはそれだけではなく……

「何だと?!　それは本当か!?」

「……私自身信じられんが、どうも邪眼が私のユニゾン機能以外を奪っていったせいか、防御プログラムの再生は起きる気配がない」

シグナムの声に頷くリインフォース。そう、リインフォースの中にあったバグ。それが完全に消え去っていたのだ。だが、今はユニゾン出来るものの、それもいずれ出来なくなりそうだとリインフォースは語った。どうもユニゾン機能自体が破損しているらしく、それを修復すると防御プログラムも復元してしまう可能性があるとの事。

なのでリインフォースは、自分の代わりとなるユニゾンデバイスの製作を考えなければならないとはやてに告げた。

「それで、リインはずっとおるんやな?」

「はい。存在する事自体には影響はありません。その……これからもよろしくお願いします、主」

「リイン……うん、うん……これからもよろしくや」

涙ぐむはやてとリイン。それを見てなのは達にも笑顔と涙が。それを五代と翔一は微笑ましく見守っていた。そして、五代は何か思い出したような顔をして、なのはへ近付いた。

「なのはちゃん」

「ふぇ？　何、五代さん」

「あのさ、ちょっとお願いがあるんだ」

五代が話したのは、すずかの事。魔法の事を教えて上げてほしい。そう五代は言った。それに戸惑うなのは。どうしてそれを教えないといけないのだろうと思うなのはだったが、五代が告げた一言に驚くと同時に納得してしまう。

すずか達月村家の人々は五代がクウガである事を知っているのだと。だから、魔法を隠す必要ないよと。それを聞いてなのはもフェイトも、そしてはやても安心した。

「あ、それと……」

「まだ何かあるの？」

「俺、クウガだけどさ。その……怪物かな？」

五代の突然の言葉に驚くなのは達だったが、三人してそれを否定した。例えどんな姿になっても五代は五代だから、と。それを聞いて五代は何か嬉しそうに頷くと、サムズアップ。

ありがとう。その気持ち、絶対無くさないようにね。そう五代は笑顔で告げた。その言い方に不思議そうな表情のなのは達。三人は、この後知る。何故五代がこの時そんな事を言ったのか。何故、自分を例えに出しておきながら、どこか誰かを思いやるような言葉だったかを。

そのやり取りが終わったのを見計らって、アリアとロッテが周囲に話があると言った。それに誰もが不思議そうにする中、アリアが魔法を使った。そして、その姿を仮面の男へと変える。

それを見て言葉を失うなのは達。だが、翔一はそれで納得した。あの日、アリアの腕の怪我は自分が負わせたものだったのだと。

「ごめんなさい！　まさかアリアさんなんて……」

「えっ？！　いえ、謝るのは私の方だから！」

「でも、女の人を傷付けるなんて……」

心から謝る翔一に、アリアはむしろ逆に申し訳ない気持ちになっていく。そんな二人を他所に、ロッテは今回の事で自分達が考えていた事を全て話した。グレアム達が考えていた完全封印。だが、それも完全ではなく、穴がある。しかもはやてを犠牲にする事が前提の話。

それを計画したのが、足長おじさんと思って慕っていたグレアムだと分かったはやてだったが、その優しい気持ちは偽りではなく、本物だったと信じているからと告げた。

そして、こう言ったのだ。

「それに、アリアさんもロッテさんもこうやって協力してくれた。なら、それでええ。おじさんもデュランダル渡してくれたという事は、二人と同じ気持ちなんやろし……わたしは許すよ、おじさんもアリアさんもロッテさんも」

――――ほんまにおおきに。

笑顔でそう言ったはやて。それを聞き、涙を流すアリアとロッテ。

シグナム達はそんな二人に対し、複雑な心境だったが、最後の戦いで二人がいなければどうなっていたか分からないと思ってもいた。だからこそ、四人も何も言わない事にした。自分達が太古に犯した罪。その大きさを考えれば、二人の決断に口を出す事等出来なかったからだ。

そうして、色々と落ち着き、みんなでアースラに戻ろうとなった時だった。突然、五代の脳裏に声が聞こえたのだ。

”若者よ……”

「え……？」

突然起きたあまりの事に五代は足を止めた。それに気付き、翔一が振り返る。五代が何か不思議そうな顔をしていたからだ。

「どうしたんです？」

「いや、今さ、声聞こえなかった？」

「声、ですか？　いや、何も……」

「だよねぇ……」

気のせいかな。そう言いながら再び歩き出す五代。それに翔一はこれ以上気にしないように、疲れたからですよ、と告げた。それに五代も苦笑し、そうだねと頷いた。だが、その瞬間、また同じ声が聞こえた。しかも、先程よりもはっきりと。

”若者よ、まだ闇は消えていない”

（誰……？）

声に出さず、尋ねる五代。それに返ってきた答えに、彼は言葉を無くす。

”我は、アマダムと呼ばれしモノ”

（嘘……）

アマダムは語る。五代が受けた魔力の雷。それにより、失われていた自我が目覚めたのだと。それに疑問を浮かべる五代だったが、それを察し、アマダムはこう言った。古代戦ったクウガが、何故姿を変えられる事に気付けたかと。それは、自分が教えていたからだと。

それを聞き、五代は納得した。自分は理解したものは碑文などに書いてあったが、それは古代には無かったのだ。最初のクウガは、アマダム自身からそれを教わっていたと言われ、心から信じる事が出来た。そして、その自我が失われた原因は、長きに渡る封印の影響だった。

”あれにより、我はその力の大半を使う事になった。だが、完全には失ってはいなかったのだ。その証拠に、見ただろう”

（何を？）

”始まりの戦士の姿を”

（あ……）

九朗ヶ岳で見たイメージ。あれは、アマダム自身が、資質ある者のみに見せるものなのだそうだ。そして、アマダムは告げた。伝える力は弱ったが、後少しで完全復調するはずだったと。それを邪魔したのが、ダグバとの戦いで受けた傷。

あれのせいで、また機能が弱まったのだと。そして、その弱ったものを魔力が呼び覚ましたそうなのだ。

それだけ話すと、アマダムは五代にこう告げた。

”今のままでは、闇の力に飲み込まれかねない。もう一人の王の力を求めよ”

（今のままじゃダメ？　それに闇の力？　……もう一人の王って、一体誰？）

”それは、これより誘う場所に……”

そう聞こえた時、五代の体が光に包まれる。それに全員が気付き、振り向いたが――――。

「五代さんっ！」

間に合ったのは翔一のみ。何とか五代の手を掴もうとするが、掴んだと思った時には、翔一も光に飲み込まれていた。

そして、光は周囲へ広がり、その輝きに全員が目を閉じた。その光が収まった後には、もう二人の姿はなかった……

あまりの事に誰もが声を失う中、なのはとはやてが叫んだ。

「五代さぁぁぁぁんっ！！」

「翔にいいいいっ！！」

その悲痛な叫びに、答える者はいない。その場に残された翔一のバイク。それだけが、二人がいた証のように残されていた……

この後、アースラやなのは達による懸命な調査が行なわれるものの、二人の居場所どころか痕跡さえ掴めなかった。その一年後、はやては守護騎士達と共に管理局に入る。それは贖罪だけではなく、翔一達を捜すため。家族とそのために戦ってくれた恩人。その二人を見つけ出すために。

無論、はやてがそんな判断を下したように、なのはとフェイトも何もしなかった訳ではない。まず、はやてと共に月村家に行き、五代が旅に出たと誤魔化した。それを聞いた瞬間、イレインはその場を飛び出した。そして、そのまま五代の部屋へ行き、そこで思いっきり叫んだのだ。

「早く終わらせてストンプ見せんじゃね～のか！　この、馬鹿やろおぉおぉおっ！！」

早く終わらせてストンプを見せる。その約束を覚えているから、イレインはなのは達が嘘をついている事を悟った。故に叫ぶ。どうしてだと。ここにはいない五代に向かって。その目から、光るものを流しながら……

そしてなのは達は、親友のすずかとアリサに魔法の事を話し、理解を得ようとした。だが、三人は理解を得ると同時に、すずかの秘密も聞かされた。

『夜の一族』と呼ばれる吸血一族。それを聞いた時、なのは達は五代とのやり取りを思い出した。怪物と尋ねられた際、五代は五代と否定したその言葉。その気持ちを無くさないで。その意味を、想いを思い出して、三人はすずかはすずかだと心から言い切った。それを聞いて涙ぐむすずかに、三人は言った。五代がそう教えてくれたのだと。それを聞き、すずかは声を上げて泣き出した。

約束していたのだ。五代は、いつかすずかが自分の秘密をなのは達に話せるようになる。そのために、自分の出来る範囲で手を打ってみせると。

すずかの口から零れる五代を呼ぶ声。それを聞きながら、なのは達は改めて誓う。必ず見つけ出して、すずかと再会させるのだと。その気持ちを胸に、二人もまたはやてと同じく管理局に入る。そして、そこで様々な出会いや力、想いを得ていくのだ。

やがて三人の少女は大人へなっていく。思い出すのは、みんなの笑顔のために戦った二人の事。

そんな中、三人の知らぬ所で青年達は戻ってくる。それもまた、人知れず人を助ける事になる。

物語は、これから数年後、ミッドチルダにて再開する……

ただ木々が覆い茂る無人の道路。そこを一台のバイクが走って行く。彼は、仲間達に別れを告げ、世界を守るために旅に出たところ

だった。
　だが、彼が乗るそれは、赤い目のようなライトとアンテナがついた独特のもので、全身は青で染め上げられている。その車体には、おそらく何かの文字なのだろう。それが大きくペイントされている。
　そして何より特徴的なのは、その彼自身。黒いボディに真っ赤な目をした異形の存在。それが彼の姿。彼もまた、世界を救ったヒーローの一人。

「……ん？」

　その赤い目が何かを見つけた。時速にして、おそらく五百以上のスピードは出していたバイクが、実に意外な程あっさり減速して停止する。そこから分かるのは、このバイクが既存の技術で創られてはいない事。そして、バイクから降り立つ異形の存在。その視線が見つめる先にいたのは――。

「人か……でも、どうしてこんなところに……？」

　それは、気を失い倒れる五代雄介だった……

　古代の戦士は、こうしてまた新たな出会いを果たす。それは、甦るだろう邪悪な闇を打ち倒すための出会い。
　そして、その戦いに勝利した時、戦士の戦いは終わる。ただ、その雄姿と笑顔を残して……

ジェイルラボ　廃棄所。龍騎は大きなケースを運んでいた。中身はいらなくなった機械の数々。ジェイル曰く、もう必要ないからだそうで、名前すらないらしい。仕方ないので、真司は勝手にジェイルの作ったオモチャと言う意味で『トイ』と呼ぶ事にした。

一つ目のロボットで、最初はこれを相手にデータ取りしたなと龍騎が思い出していると、ふと何か目に付くものがあった。それは、龍騎が運んでいたものよりは小さいが、人一人くらいは入る事が出来るようなものだった。

そこに入っていたのは、何かよく分からないが生物らしきもの。その気味悪さに、龍騎はきっとジェイルの実験生物だろうと思った。

「ったく、こういう事するなら創るなよな……」

そう文句を言って龍騎は去って行く。龍騎は知らない。それがジェイルのコピー受精卵を入れていたものだと。そして、その気味の悪い生物こそ、自身の嫌う戦いを生み出すものだと。この時の龍騎は知らなかった……

「ね、真司兄。今日の晩御飯、何？」

「そろそろ寒くなってきたからさ。今日は鳥団子鍋だ」

「鍋？　どういう事？」

真司の横で言われるままに野菜を切っていたディエチ。その質問に真司は笑って説明する。鍋というのは、色々な具材を用意して、出汁や鍋汁を張った鍋でことこと煮るものだと。

野菜や肉、魚を主に使い、他にも色々な食べ方や楽しみ方があるんだと真司は自慢げに語った。それを聞き、目を輝かすセイン。そして真司に早く鍋食べたいとせっつく。それを見て苦笑するディエチ。真司はセインに、なら手伝えと言ってエプロンを渡す。

「へ～い……」

「じゃ、セインはこれを丸めて団子にしてくれ。ディエチはそれ終わったら、今度は大根の方頼む」

「うん」

「さ、今日も美味い飯作るぞ！」

「お～！」

「お～」

真司の号令にノリノリのセインと少し恥ずかしそうなディエチ。だが、二人共に気持ちは同じ。こんな時間が楽しくて仕方ないのだ。

セインは団子を上手に作り、真司に誉められ得意顔。ディエチも大根をきちんと面取りし、真司が感心した顔をしてセインが対抗心を燃やす。そんな三人のやり取りを聞きながら、チンクとトーレ、クアットロは微笑んでいた。

ちなみに、セッテの起動にはまだ時間がかかりそうで、早くても年明けになるのだ。原因は、固定武装の開発の遅れ。龍騎から得たデータを基に材質から改良しているため、時間が掛かっているのだ。

真司には、ジェイル自身が説明済み。どういう生き方を選ぶにしろ、身を守る術はあった方がいい。そして、出来るなら、それは負

ける事のないようにしておくべきだと。
故に、道具には万全を期したいとジェイルは語った。真司が納得したのは、ジェイルが最後に言った一言。
――大事な娘達だからね。
その言葉に真司は頷いた。納得するまでやってくれと。女の子なんだから、身を守る方法はあるにこした事はないと強く言って。それにジェイルも感謝して、現在に至る。
で、クアットロがしている仕事は、それに関連するもの。本来なら調整室でやった方が色々都合がいいのだが、何故か最近は、こうして食事の時間近くになるとここに来るようになっていたのだ。
だからこそ、それにチンクが不思議そうに呟いた。
「それにしても、ここでやらなくても良かろうに」
「いいじゃない。私の勝手でしょ」
「……素直に調整室で一人は嫌だと言ったらどうだ？」
トーレの言葉にクアットロの手が微かに止まるも、それを感じさせない速さで再開し、それを誤魔化す。だが、高速戦闘を得意としているトーレには、それすら見えていた。おそらくクアットロも承知の上だろう。それでも誤魔化すところに、滅多に見れない四女の可愛さを見つけた気がして、トーレは追求を止めた。
チンクもおそらく気付いているのだろうが、同じ気持ちなのか何も言おうとしない。そうしている間にも、キッチンの方から食欲をそそる出汁の香りが漂うのであった……

その頃、ウーノはジェイルと共に妹達の調整を手伝っていた。その手元には、ある姉妹の情報がある。ギンガ・ナカジマとスバル・ナカジマの二人の名前が書かれたものだ。

彼女達は、実はジェイルではない存在が作り出した戦闘機人。そのため、ジェイルは彼女達を『タイプゼロ』と呼んでいた。以前は、この二人を自分の下へ連れてこようとも考えていたジェイル。しかし、現在彼がこの二人の情報を求めるのは――――。

「ふむ、異常はないようだね」

「はい。局にも優秀な人材はいると言う事でしょう」

二人の状態確認だ。既に二人の事を、ジェイルはこう思っている。ナンバーズの親戚、あるいは腹違いの姉妹と。故にこうして定期的に情報を送ってもらい、その体に異変はないかを調べているのだ。

まぁ、少しはデータ取りの意味もあるのだが……

ウーノの答えに頷き、ジェイルは視線を書類からモニターへと移す。そこに表示されているのは、色褪せたような龍騎の姿。そう、ブランク体と呼ばれるものだ。

真司の話では、ライダーは最初この姿だと聞き、ジェイルは早速とばかりにデータ取りをさせてもらったのだ。そして、その甲斐はあった。現在の龍騎のスペックはとてもではないが再現出来ない。しかし、このブランク体なら、どうにか再現可能なレベルだったのだ。

「……もし、これを量産出来れば、戦闘機人なんていらないねぇ」

「ドクター？」

「いや、少し……ね。真司に嘘を吐いているような気がしてね」

「ドクター……」

ジェイルはウーノの声に小さく笑って呟いた。全てのナンバーズの起動が終わって、研究が一段落したら、真司に全てを打ち明けると。

それを聞いて、ウーノは驚きも怒りもしなかった。ただ、静かに笑みを浮かべて頷いて告げた。それがいいと思います。その声は、優しさと喜びに満ちたものだった……

「「「「「「「「「「いただきます」」」」」」」」」」

全員揃っての食卓。大きな鍋を囲み、それぞれが箸を伸ばす。肉ばかり取ってウーノに注意されるセイン。野菜をあまり取らないジェイルへ無理矢理野菜をよそう真司。チンクは肉団子の熱さに驚きながらも、その肉汁と微かに香る柚子の香りに表情を緩め、トーレは大根を口にし、その染み出す味に頷いている。クアットロとディエチは豆腐をすくい、箸でそれを四等分し、冷ましていた。

そんな賑やかで楽しい食事。初めての鍋に全員が満足し、最後の締めは、溶き卵を流して少し蒸らした雑炊。全ての旨味が凝縮されたそれは、取り合いになる程の美味しさだった。

ジャンケンで取り合おうと主張する真司とセイン。年功序列と言うジェイルとウーノ。運動をしている者が優先と言い出すトーレとチンク。そして、そんな六人の目を掠めて、密かに食べようとする

クアットロを止めるディエチ。

「だ、ダメだよクア姉」

「もぅ、ディエチちゃんは黙ってなさい。私は頭脳労働してるから権利があるの」

だが、そんな悪巧みは露見するもので……

「「「「「「あ～っ！！」」」」」」

「ほら！　見つかったじゃない！」

六人が一斉に声を上げ、クアットロを指差した。それにしまったという表情を浮かべ、クアットロは逃げ出した。それを追う六人。そして、取り残されるディエチ――だったのだが。

「……冷めたら美味しくないよね？」

誰に尋ねる訳でもなく、そう言い聞かせるように呟いて、残った雑炊を自分のお椀へ入れるディエチ。そして、それを一口含み、後ろへ視線を向けて一言。

――幸せ、だな……

その視線の先では、七人がギャイギャイと言い合っているのだった……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

A's編エピローグ。そして、新章までの空白期に入ります。

五代が出会う相手。それが最後のライダーです。一方、翔一の方は次回以降で。

真司は完全ほのぼのです。ちゃっかりディエチは、みんなに許してもらえます。そう、ディエチなら仕方ないって。

空白期1

焚き火を囲み、向き合う二人の青年。片方はご存知五代雄介。今も焚き火に手を当て、暖かさを感じて笑顔を受かべている。問題は、その向かい。

彼は白い上着を着ており、五代とは違う意味での好青年だった。気を失っていた五代を助けてくれた恩人。彼の名は――。

「光太郎さんも旅をしてるんですか」

――南光太郎。黒い太陽の名を与えられた者。またの名を、仮面ライダーＢＬＡＣＫ　ＲＸ。

「ええ。自分の出来る範囲で、自然を守っていこうと思って。もっと、人間が自然と共存して暮らせるようにって」

「……いいですね、それ」

光太郎の語った言葉は、五代にとっては嬉しい言葉だった。冒険家である自身とは違うが、どこかそれは、亡くなった父に似た感じがしたのだ。

戦場カメラマンであった五代の父。戦争の悲惨さや凄惨さを伝える事で、みんながいつか争いを止めてくれるようにと。そして、たまに大自然を撮影し、その写真でみんなが心和ませてくれるといいな。そう言っていた事を思い出したのだ。

「それにしても、どうして五代さんはあんな処で？」

「えっと、何て言ったらいいのか……」

「あ、言いにくいなら別に……」

「……すいません」

それで互いに黙ってしまう。だが、五代としては、ここが海鳴でない事は確認した。そして、どうも自分がいた世界とも違うようだと。

何せ、光太郎に何年かを聞いて驚いたのだ。まだ平成になったばかり。それを聞いた瞬間、五代はキョトンとした顔をし、光太郎に不思議がられたのだから。

なので、こうして光太郎から五代はやや不思議がられているのだが、それを向こうが追求してこないのには、ちゃんとした理由がある。

五代は冒険家なので、久しぶりに日本に帰ってきたと言ったのだ。それに光太郎は納得した。年号が変わった事を知らないのは、そのせいですねと。

五代はそう思い、安心していた。一方、光太郎はまだ五代をどこか怪しんでいた。不審人物としてではない。何かある気がする。その勘とも言える部分が、そう彼に告げていたのだ。

だからだろう。光太郎は、ある事を尋ねてみた。それは、おそらく世界中の人々が知っているであろう出来事。

「でも、良かったですね。二年近く前だったら、ゴルゴムに占拠されてましたし」

「え？」

「……知らないんですか？」

光太郎の視線がやや鋭さを帯びる。それを感じ取り、五代は迷った。自分の事を話すか否か。アマダムは何故か何も言ってこないため、五代はどうすればいいのか判断がつかなかったのだ。

アマダムが言ったもう一人の王。それがこの世界にいるのは間違いない。でも、一体どんな相手でどういう姿か分からない以上、捜し様がない。それに、光太郎が五代から何か感じ取ったように、五代もまた同じように感じ取っていた。相手にも、何かあると。

「……ゴルゴム、ですか？」

「ええ。怪人を使い、この日本を一時期占拠した悪魔の軍団です」

「怪人……」

「仮面ライダーＢＬＡＣＫがゴルゴムを倒し、今は存在しませんけど」

光太郎の告げた名前に、五代は表情を変えた。それに光太郎も気付き、五代を見つめた。

五代は思い出していたのだ。邪眼との会話で、翔一が挙げた名前。そう、ＢＬＡＣＫさん。そして、キングストーンを持っていたと邪眼は言っていた事も。

きっと、もう一人の王はその人だ。そう思い、五代は光太郎へ尋ねた。そのＢＬＡＣＫって人はどんな人ですか、と。その問いかけに光太郎は驚くも、五代の眼差しに込められた輝きに何かを感じ、静かに語り出した。自分も伝え聞いただけだけど、と前置いて。

それは、思わず五代でさえ聞き入ってしまう程の物語。聞き入りすぎて、疑問を忘れてしまう程の、悲しく、辛く、そして救いのない物語。

たった一人、強大な悪へ立ち向かったヒーロー。そう言えば、聞こえは良い。しかし、その異形の力と姿は、そのゴルゴムによるものだという。それでも、彼は自分のような犠牲者を出さないため、ゴルゴムへ孤独な戦いを挑んだ。

多くの怪人を倒し、時に傷付きながらも、最後まで戦い抜いた仮面ライダー。ゴルゴムを倒した彼は、人知れず姿を消した。

「……じゃ、今ＢＬＡＣＫさんは……」

「今は、ＢＬＡＣＫ　ＲＸと名乗ってます。つい最近までクライシス帝国と戦ってました。他の先輩ライダー達と共に」

「え？　ＲＸ？　先輩ライダー？」

「名前の方は、詳しくは知らないですけど、姿が変わったから変えたみたいです。きっと、クライシスのせいだと思います」

光太郎は疑問符を浮かべる五代に苦笑しつつ、また語り出す。先輩ライダーというのは、人知れず世界を守り、悪と戦い続けていた仮面ライダー達なのだと。

クライシスは異世界からやってきた侵略集団。一度はＢＬＡＣＫを倒したらしいが、彼がＲＸとなって復活した後、その強さに勢いを弱められ、最後は町一つを消し飛ばす程の爆弾を内臓した怪人や、幹部を改造した怪人を使ってＲＸを苦しめたが、先輩ライダー達や仲間達の協力を得たＲＸはそれらを全て倒し、クライシスを撃破し無事地球を守り抜いた。

そして、その怪人の爆弾により、首都圏は復興の真っ最中で、ＲＸを始め、仮面ライダー達は、世界の各地で現れるかもしれない悪と戦うために、散り散りになったらしい。

「……て、とこですね」

「そうなんだ……じゃ、翔一君はここの生まれ？」

「翔一君？」

「あ、知り合いです。仮面ライダーやＢＬＡＣＫさんの事を教えてくれたんですよ」

五代の言葉に引っかかるものを感じ、光太郎は尋ねた。その名前をどうしてその人は知っているのに、何故五代はゴルゴムの事を知らないのかと。それに、五代はやや考えたものの、これはきっと大丈夫だと思って答えた。

彼は、前にＢＬＡＣＫさんと発電所で会っただけだからと。そう笑顔と一緒に告げた。だが、それを聞いた光太郎が驚愕の表情を浮かべた。

発電所。そして、彼が知らない名前。それが意味する事は、光太郎の中で一つしかなかったからだ。あの頃は知らない存在だった先輩達や未来の仮面ライダーと出会った戦い。そして、先輩達の名前を知った今、彼の名を知り、発電所で出会った相手は一人しかいない。

だからこそ、光太郎は五代に尋ねた。その彼は、何故貴方に仮面ライダーの事を教えたのかと。それに五代は困ったような顔をした。しかし、その瞬間、光太郎の脳裏にある声がした。

”光太郎……”

（キングストーン？）

”この者は、お前と似た力を持っている……”

（何っ！？）

急に黙った光太郎に五代は不思議そうな表情。だが、その五代にもある声が聞こえてきた。しかも、それは予想だにしなかった声。

＜五代さん……＞

＜えっ？　光太郎、さん？＞

光太郎の声。だが、目の前の光太郎は口を開いていない。それから導かれる答えは一つだった。

＜まさか、ＲＸって……＞

＜……俺の事です。でも、教えてください五代さん。何故、貴方にキングストーンがあるのかを＞

＜……分かりました。俺、アマダムっていう石が体に入ってるんです。それが、どうもそれと同じらしくって＞

五代は邪眼が言っていた事を光太郎へ語った。光太郎は、邪眼という名前に驚いたものの、五代と翔一が倒した事を聞き、安堵した。

そして、五代からクウガになった時から今までの話を聞き、彼もまた、未来の仮面ライダーだったのだと感じていた。彼の時は、先輩達や自分が現れなかったらしいが、それを五代は、他の国にも同じようなのが出ていたのかもしれないと、光太郎達を擁護した。

最後に、アギトの名を聞いた時、光太郎はやはりと頷いた。あの

異様な空間。そこで共に悪と戦った仲間。あれ以来出会う事はなかったが、自分の事を覚えていてくれた事には、光太郎も嬉しさを感じた。

全てを話し終え、五代と光太郎はそれぞれ息を吐いた。五代はアマダムからもう一人の王を捜せと言われたらしい。それは、シャドームーンがいない今、自分の事だろうと光太郎は思った。

キングストーンを邪眼が未だに狙っていた。それだけでも驚きなのに、それを違う形で持つ仮面ライダーがいた事にも驚いた。それに、どうもまだ邪眼は完全に倒せていないらしい。そう光太郎も五代も結論付けた。

だが、そこで問題になったのは、どうやって邪眼がいる場所まで行くかだ。五代の話では、おそらく邪眼は魔法世界にいる。だが、そこへ五代は偶然移動させられた。つまり、行き方が分からないのだ。

異なる世界。その考え方を聞いて、光太郎にある可能性が浮かんだ。

「五代さん、行けるかもしれない！」

「えっ？」

「俺の仲間に、怪魔界という場所へ行ける力を持つ奴がいるんだ。それを上手く使えば、もしかしたら……」

そう告げる光太郎に、五代が力強く頷き、サムズアップ。

「大丈夫です！　必ず行けます！」

その言葉と仕草。それに込められたものを感じ取り、光太郎は笑みを浮かべる。やはり、彼もまたライダーなのだと。そう、希望を与える何か。それが五代からも感じられるのだ。

光太郎はそう思い、サムズアップを返す。だが、その顔は笑顔ではなく真剣なもの。それに五代はやや驚くが、次の瞬間、光太郎が笑顔になる。その変化にまた驚く五代だったが、頷いて笑顔を返す。

こうして、五代は光太郎と出会った。そして、それは新たな戦いの幕開けでもあった……

巨大なクワガタを模したようなオブジェ。それが大きな存在感を出している。そして、それに繋がれた幾多もの配線。それらは全て計測用の機械へと繋がれていた。

ここは、科学警察研究所。通称科警研である。そして、このオブジェのようなものは、クウガの頼れる仲間の一人である『ゴウラム』と呼ばれる存在なのだ。

そんなゴウラムを前に、一人の女性が首を傾げていた。榎田ひかり。ここで未確認関連の研究をしていた女性だ。彼女は、何やら呟きながら、ゴウラムを調べている計器へ視線を向ける。そこには、何も変化がない。

それを改めて確認して、榎田は頷いてまた視線をゴウラムへ戻す。

「……っかしなぁ～。確かに動いたはずなんだけど」

そう、五代がいなくなってから、まったく動かなかったゴウラム。それが、つい先程微かだが計器に反応があったのだ。それに偶然気

付いた榎田は、こうして久方ぶりの徹夜をし、ゴウラムに付きっきりなのだ。

愛する息子には、ちゃんと許可を貰った。四号に関する事と告げると、息子も納得したように頑張ってと言ってくれたのだ。

「でも、これじゃあねぇ……」

無駄骨か。そう思って視線を外した瞬間だった。何かが落下する音がした。しかも、ゴウラムの上に。その音に視線を戻す榎田。そこにいたのは――――。

「人？　……しかも、何もない場所から……？」

ゴウラムの上に寝そべるように、倒れている津上翔一の姿だった……

こうして、人の新たな可能性は、戦士の友と出会う。それは、今は相棒を得ていない戦士を助ける事になる。

そして、彼に託される願いと想い、その全てを戦士に伝える事は、彼にも新しい道を開く……

ジェイルラボ　調整室。そこに真司はいた。呼ばれたのだ、クワットロに。そう、ナンバー7、セッテが目覚めるとそう言われて。なので、喜び勇んで来てみたのだが、既にセッテは起動を終えていて、全身タイツのようなボディースーツを着ていた。目覚める瞬間に立ち会えなかったと落ち込む真司だったが、それを見てセッテが告げた一言に真司は驚く事になる。

「兄上、そんな落ち込まないでください」

「あ、兄上ぇ？！」

「何か問題が？　真司兄上と呼ぶと堅っ苦しいと思われる。そうクワットロ姉上に言われたので」

そう言って不思議そうに首を傾げるセッテ。その仕草が真司には、長身でモデル体型のセッテにはどこか不釣合いだったが、それ故に可愛く見えた。言葉遣いはともかく、自分はやはり兄なんだなぁと感じつつ、真司は気を取り直して自己紹介。

「ま、それでいいや。俺は、城戸真司。よろしくな、セッテ」

「はい、兄上。私は、ナンバー7、セッテ。ＩＳはスローターアームズ。簡単に言えば、ブレードを自在に操る事です。よろしくお願いします」

笑顔の真司に微かな笑みを返すセッテ。それを見て、クワットロはうんうんと頷くと、早速とばかりに真司へ告げた。セッテの初訓練をしてやってほしいと。それに真司はやや躊躇うも、セッテの「私とでは……不服でしょうか？」の一言に慌てて了承し、歩き出した。その後をついて行くセッテ。

クワットロは、そんな二人を見送り、小さく笑う。真司が教育を担当する相手は、まだ最低でも二人いるのだ。オットーとディードの双子。真司は、オットーとディードが双子と聞き、凄く楽しみだと言った。

（でもぉ……おそらく起動は、オットーよりも先にノーヴェかしら

ね？　ドクターったら、ライダーシステムと並行している割に、仕事速いんだから）

そう思ってクワットロはため息を吐く。中々順番通りに事が進まないと。だが、その割に彼女はどこか楽しそうだった。

「さてさて、シンちゃんは驚くでしょうね。何せ、セッテちゃんったら……ふふっ」

訓練場から響く爆音。セッテはトーレと同じく空戦型。しかも高速戦闘にも対応するという、まさに改良型なのだ。それだけでも厄介なのに、更に固有武装である『ブーメランブレード』は、材質が改良され、龍騎の使っている金属に近い強度を持っていた。それを自在に操り、セッテは龍騎を追い詰めていたのだ。

「兄上、私に気を遣って頂かなくても……」

セッテは、先程から龍騎が回避しかしていないので、そう言ったのだが……

「そんなつもりないから！　セッテが凄いだけだからっ！」

変幻自在に飛び回るブレードをかわし、龍騎はそう大声で返した。実際、セッテは見事だった。トーレ達からのデータ共有を受け、龍騎の動きや武器を把握し、そこから予測した場所へブレードを動かしているのだ。

龍騎としては、何とか避けるだけで精一杯なのだ。更に、ガードベントを使って防ごうにも、デッキに手を伸ばす隙を与えないよう

に、セッテが強襲してくるのだ。おかげで、現在まで龍騎は何もカードを使っていない。

（このままじゃ……兄貴として情けなさ過ぎるだろ！）

そう思っている龍騎だったが、セッテはむしろそんな龍騎を尊敬していた。

（さすが兄上。これだけの攻撃を全てかわし切るとは……それに……）

視線を龍騎の手に向けるセッテ。龍騎はまだ何かするつもりなのか、デッキに手を回し、何かカードを取ろうとしていた。

（まだ諦めていないようだ。なら、私も最後まで気を抜けないっ！）

ＩＳで龍騎へ襲い掛かるセッテ。そして、自身も速度を上げ、龍騎へ攻撃を仕掛ける。それに対して龍騎が取ったのは、やはりベントカードの使用。だが、その手がデッキに伸びた瞬間、一つのブレードがその手を狙う。それを龍騎は――――読んでいたかのように叩き落した。

「なっ！？」

「今だっ！」

あまりの光景に驚くセッテに、龍騎はここぞとばかりにカードを引き抜いた。龍騎は、セッテがカードを使わせないようにしている事を逆手に取り、敢えてカードへ自分から手を回す事で、ブレードを誘導したのだ。そして、時間差で残りのブレードが襲いくるも、

それも蹴り飛ばし、手にしたカードをドラグバイザーへ差し込む。

”ソードベント”

「っと、まだまだ！」

上空から現れるドラグソードを手にし、龍騎はそれを左手に持ち替え、更にカードを取り出して差し込む。

”ストライクベント”

そして、右手に装備されるドラグクロー。セッテは何とかブレードを手元に戻し、龍騎と対峙する。龍騎は空中のセッテ目掛け、ドラグクローを向けて告げた。

「上手く避けろよ！」

その声と共にドラグクローから勢い良く炎が放射される。ドラグファイヤーと呼ばれる龍騎の攻撃方法の一つ。その超高熱火炎に、セッテは慌てて回避する。だが、上空を逃げ回るセッテの視界を遮るように、炎は執拗に追い駆ける。

だが、その最中セッテは気付いた。龍騎は炎を自分に向けているが、その速度は遅い。炎でやや視界が悪いだけで、そこまで恐れる攻撃ではないと。そう、反撃に出るなら今だと。

その手にしたブーメランブレードを、もう一度投げ放ち、龍騎の後ろを取ればいい。そう考え、セッテがブーメランブレードを手にした瞬間、下から何かがセッテの方へ飛んできた。それを反射的に叩き落すセッテ。それは、ドラグクロー。

（そんなっ！？）

その叩き落した先にいたのは龍騎。ソードを手にし、セッテへ向かって跳び上がる。しかし、炎は未だにセッテを追い駆けている。

そう思い、セッテは龍騎の攻撃を受け止める。そこへ炎が近付き、セッテは僅かに熱に意識を取られた。そして、見たのだ。ドラグレッダーが炎を自分に向けて吐いているのを。

「アドベント！？」

「あったり！」

セッテの視界をドラグファイヤーで悪くした龍騎は、ソードを一旦地面に突き立て、アドベントを使い、ドラグレッダーに炎を吐かせ、自分が如何にも炎を放射し続けているように偽装したのだ。

そして龍騎は、微かに動揺するセッテへ向かって炎を吐くドラグレッダーに視線を送り、カードを手にして差し込んだ。

”ガードベント”

龍騎の肩に一枚。そして、左手に一枚盾が出現し、龍騎はセッテへ向かってもう一度跳び上がる。その肩についた盾をセッテへ向けて。ショルダータックルのような攻撃に、セッテは回避をしようとするが、それが出来ない。ドラグレッダーが炎を吐いて退路を絶っていたのだ。

それが先程の目配せによるものだと理解し、セッテは悟る。もう、勝負はついたと。このまま粘ればセッテは勝てるかもしれない。だが、それは本当の勝利ではない。龍騎が空を飛べるなら、セッテは完全に負けているのだ。それに……

今もセッテが何度も攻撃を防いでも、龍騎はまだソードとシール

ドだけで戦っている。セッテは知っている。龍騎には、空中にいるトーレさえ倒す攻撃があるのを。

そして、それを使わないのは、加減が難しくて怪我をさせてしまう事を龍騎が恐れているからだ。

（やはり優しいのだな、兄上は）

そう思い、セッテは両手を上げる。降参と言って龍騎の前へ降りて行ったのだ。龍騎もそれを受けて首を傾げながらも、変身を解いた。

そして、真司はセッテへ何故降参したのかを尋ねた。それにセッテはこう答えた。試合に勝って、勝負に負けました、と。そう告げたセッテは、嬉しそうな笑みを浮かべていた……

おまけ

風呂場へ向かって歩いている真司。先程の訓練で汗も掻いたし、さっぱりしたいと思ったのだ。前回のような事を防ぐため、セッテには先に行ってもらい、一時間経過してから行くという徹底振りだ。

「さてと、脱衣所には……うん。服とかないな」

確認終了とばかりに頷き、真司は裸になって風呂場へ入る。マナーとして前はタオルで隠している。だが、そこには……

「お待ちしていました、兄上」

「えぇぇぇぇぇっ！？」

全裸のセッテがいた。タオルは持っているものの、自分の体を隠す事無く、ただ手に持っているだけ。それに真司は慌てて視線を外し、背中を向けた。

「中々来ないので、少々待ちくたびれました」

「い、いやいや……何でいるのさ？　ってか、隠せってセッテ」

「妹は背中を流すものだそうです。それと、隠す必要はありません。相手は兄上ですから」

「関係ないから！　それとせめて湯船に入れよ！」

「何故です？　背中を流すのに、浴槽では出来ませんが……？」

「あ～！　また俺、チンクちゃん達に怒られる～っ！！」

そして、真司の予想通り、いつまで経ってもセッテが戻ってこないのを不思議に思ったクワットロが、まさかと思い風呂場へ現れ、この事が発覚したのでした。

真司は、今回はそこまで酷い目には合わなかったものの、それでも結構痛かったとか。

ちなみにセッテですが、服はわざわざ戸棚に隠し、真司が来るまでひたすら待ち続けていたとか。

それと、セッテが真司を待ち伏せたのは、途中で会ったセインの入れ知恵と分かり、セインはウーノに手酷く怒られたのでした……

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

続き。五代と光太郎の出会いと理解。今後は、どうやってなのは達の世界に戻るかが鍵。

翔一は、まさかの世界。だって、クウガだけバイクないですから。

真司は、セッテ起床により、色々と大変です。セッテの性格は、真司に敬意を払う感じになりましたが、どうでしょう？

今後、真司はゆっくりナンバーズ起床の流れですね。ほのぼのはここが担当です

空白期2

五代は驚いていた。なのは達の世界で魔法を見た時も驚いたが、今はそれ以上に驚いていた。何せ、その仲間を呼ぶ事になった瞬間、光太郎が突然左腕を腰に当て、右腕を高々と上げたと思ったら、ある言葉を発したからだ。

「変身っ！」

その腕を真下へ下げ、腹辺りで横へ動かす。それを受け、腰の左腕を一度右へ動かしてから、左へ戻す。その瞬間、拳を握って。

それがキッカケで光太郎の体が変化する。始めに光があり、その後爆発するかのように体を輝きが包む。体は鉄を思わせる鎧に、瞳は太陽の如き真っ赤なものへ。それは、クウガの凄まじき戦士を思い出させるものがあった。

しかし、五代はそれを見て思った。これは、なってはいけない姿じゃない。これは、クウガと同じく必要とされてはいけない力なのだと。

変身を終えたRXは、どこか呆然とする五代に一度だけ視線を向けると、左腕を顔の近くへ動かし叫んだ。

「ライドロンっ！」

それを聞いて何が起きるのだろうと五代は思った。まさか、呼んだだけで来るのだろうかと。そんな事を考えて数秒後、地鳴りのような音と共に地面から赤い車のようなものが姿を見せた。

「おおっ！？」

「来てくれたか、ライドロン」

「嘘……ホントに来た……」

嬉しそうにライドロンを触るＲＸ。それを見て、五代は自分のゴウラムと似たような存在だろうと推測した。そして、ふと思う。今頃ゴウラムはどうしてるのだろうかと。ゴウラムがいれば、空中戦にも対応出来るだろうに。そんな事を考えたからだ。

そんな五代へＲＸが声を掛けた。乗ってくれと。それに頷き、五代は何かに気付いたのか動きを止めた。それを不思議に思うＲＸだったが、五代の言葉にその理由を悟る。

――本当にいいんですか？

それが意味するものを、ＲＸは瞬時に理解した。仮に魔法世界に行けたとしても、またここに帰ってこれるという保障はない。それを五代は心配しているのだ。それを感じ取り、ＲＸは思う。五代は優しい男だと。自分も同じなのにも関わらず、こちらの事を心配してくれるなんて。

そう思ったからこそ、ＲＸは力強く頷いた。大丈夫と。

「きっと帰れるさ。俺も、君も！」

「……はいっ！」

ＲＸの言葉に五代が頷き返す。そこに込められたのは、互いの帰還を信じる気持ち。それぞれがそれぞれの世界に帰れる。そう強く希望を信じるからこそ、仮面ライダーは仮面ライダーたりえるのだ。

五代はそれを理解している訳ではない。だが、ＲＸが自分の気持

ちを知り、そう返してくれた事だけは分かった。しかし、乗り込もうとした時、ＲＸが待ったをかけた。

「君も変身した方がいい。どうなるか分からないから」

「そうですね。分かりました」

その意見ももっともだと思い、五代は両手を腹にかざす。すると、そこにアークルが出現した。それにＲＸも驚くが、そのベルトがどこか昔の自分のものに近いように思え、懐かしさも感じていた。

そんなＲＸの目の前で、五代はゆっくり構えた右腕を横に動かしていく。そして、それがある一定の位置にきた瞬間。

「変身っ！」

叫んだ。その右手を左手の位置へ動かし、ベルトの側面にあるスイッチのようなものを押した。それをキッカケに五代の体が変わる。ＲＸ程速くはないが、それでも常人には速いと感じるものだろう。

体は赤く、瞳も赤く、炎を思わせるような外見。それを見てＲＸは頷いた。その外見も、そして五代の在り方もまさしく仮面ライダーだと実感したからだ。

「良しっ！　行こう！」

「はいっ！」

今度こそ互いにライドロンに乗り込むＲＸとクウガ。すると、その横に一台のバイクが近付いてくる。アクロバッターと呼ばれるＲＸの専用バイクだ。生体メカともいえる存在で、幾度となくＲＸのピンチに駆けつけた心強い味方である。

そう、彼はＢＬＡＣＫの頃から支え続けたまさしく戦友なのだ。
それを見て、ＲＸは気付いた。アクロバッターもついて来たいのだと。その気持ちを感じ、ＲＸは頷き告げた。

「一緒に行こう、アクロバッター！」

「アア。イコウ、ライダー」

「バイクが……喋った？」

（あ、でもゴウラムも何か喋ったもんな。それと同じだ。でも……ゴウラム、来てくれないかなぁ……）

アクロバッターが喋るのを聞いて、クウガは魔法というならこちらの方じゃないかと思った。だが、考えたらゴウラムも喋るので、似た様なものだと一人納得した。そして、ふと思ったこの事が、もう一人のライダーを呼び戻すキッカケとなるのだ。
一方、ＲＸはそんなクウガの反応に小さく笑い声を漏らし、ライドロンに告げた。

「行くぞ、ライドロン！　異世界へ！」

「なのはちゃん達がいる世界へ！」

二人がそう告げると、双方のベルトから眩しい光が発せられた。
それが自分をここまで連れてきた光だとクウガは理解すると、戸惑うＲＸへそう伝えた。その瞬間、ライドロンとアクロバッターが走り出した。
やや驚く二人だったが、見れば前方に何か穴のようなものが生じている。それがきっと道なのだろうと二台は感じたのだ。そして、

その穴へ飛び込むライドロンとアクロバッター。そして、それが完全に穴に入りきると、それは何事もなかったように閉じ、そこには元の静かな空間が広がった。

共に神秘の輝石を持つライダー。それが向かった先は、闇が巣食う魔法世界。

だが、彼らは知らない。闇が想像だにしない力を持って甦る事を……

「五代君の知り合い！？」

「……はい。と言うか、ここどこですか？」

科警研にある休憩スペース。深夜のため、ここにいる者は少ない。そのため、榎田が上げた大声に文句を言う者もおらず、翔一は少し耳を押さえながらそう尋ねた。

いきなり目を覚ましたら、白衣を着た女性が立っていて、自分は大きなクワガタの上で寝転んでいたのだ。しかも、目覚めて早々「貴方、誰？」と少々きつめに聞かれ、名前を名乗り、五代はどこだろうと訪ねたらこれなのだ。

「科警研って言えば分かる？」

「科警研……警察の施設って事ですか」

「そ。ちなみに、私はここで研究主任をしている榎田ひかり。よろしく」

告げられた名前を何度か呟く翔一。その翔一を榎田はやや怪しむように見つめた。そう、ゴウラムが反応していたのだ。翔一が触れている間中、ずっと。それは、五代が触った時とは違い、活性化というよりは、共鳴しているようなものだった。まるで、翔一の何かがゴウラムに作用しているように。

「あの……さっきのおっきなクワガタは？」

「ゴウラム。五代君の頼れる相棒ってとこ。えっと、馬の鎧とも言うんだって」

「馬の鎧？」

「ま、クウガの乗り物の事。古代には馬ぐらいしかなかったんでしょう」

榎田の適切な表現と説明に、翔一は何度も頷きながら、差し出されたコーヒーを飲む。そして、それを飲み干して周囲を見回し、ふと気付く。

人がいない。厳密に言えば人の気配がないのだ。明かりも必要最低限しかついていない。そこから翔一はやっと自分がいる場所が深夜なのだと気付いたのだ。

そんな翔一を見ながら、榎田は奇妙な感覚を覚えていた。まるで、五代に似ているのだ。持っている雰囲気や空気が。そう考えたところで、大事な事を榎田は思い出した。五代の事だ。翔一によれば、五代は光に包まれて、それを掴んで翔一はここに来たのだと言うのだ。

「ね、話してくれる。どうして君が五代君と会ったか。そして、どうやってここまで来たのか」

「いいですけど……信じられないと思います」

「大丈夫よ。私も五代君の仲間なのよ。もう生半可な事じゃ驚かないって」

「はぁ……じゃ……」

笑顔で言い切った榎田を見て、翔一はどこか心配するものの、ゆっくりと語り出す。五代との出会いやここに来た経緯を。

全てを話し終えた翔一。そして、榎田は頭を抱える事無く、冷静に状況を分析していた。勿論、アギトや魔法の話を聞いた時はさすがに驚きはしたが、詳しく話を聞く限りでは、彼もクウガに近い存在だし、魔法は進歩した科学のように榎田は感じていた。

それも、警察がもっとも欲しい相手を殺さず確保出来る攻撃法。それを使って治安維持をしている点から見ても、その世界はファンタジーではなく、むしろＳＦだと感じたのだ。

そして、今彼女が考えているのは、翔一をどうやって元の世界へ戻すか。そう、魔法世界に。本人を見れば分かる。翔一も五代と一緒なのだろう。だからこそ、みんなの笑顔のために異世界でも戦ったのだ。

（何とかして五代君の力にならなきゃ……そうだ！）

「翔一君、バイク乗れる？」

「え？　はい。乗れますよ」

「良しっ！　じゃ、変身して」

「変身、ですか？」

「そう。私の勘が当たれば、どうして五代君じゃなく、翔一君が来たのかを説明出来る」

戸惑う翔一に、榎田はそう言って歩き出す。ついて来てと言いながら。それに慌ててついて行く翔一。そして、その歩みが一枚のシャッターの前で止まる。それに合わせて翔一もそこで歩みを止めた。すると、榎田が何かスイッチを押したのか、シャッターが動き出す。そして、その先にあったのは……

「バイク？」

「そう。ビートチェイサー。正式にはＢＴＣＳって言って、クウガ。つまり五代君のために開発された専用マシンよ」

榎田の説明に頷く翔一。そして、その外観を見て納得したのだ。雰囲気がクウガに合うような気がしたから。

だが、そんな事を考える翔一に、榎田ははっきりと告げた。

「これを五代君に届けて」

「え？」

「聞けば、魔法で空を飛んだりするんでしょう？　じゃ、せめて陸

上の速度だけでも確保しなきゃ」

そう笑いながら言って、榎田は一転してこう告げた。それに、これを使わないと戻る事は出来ないかもしれないから、と。

それに驚く翔一。その視線は説明を求めるもの。榎田はそれを感じ、ビートチェイサーを運んで欲しいと言った。それに頷き、翔一はそれを動かそうとして、止まった。

何せ、ハンドルが片方ない。それにエンジンもかけられない。どうすればいいのかと戸惑っていると、榎田がごめ～んと言いながら走ってきた。そしえ、ビートチェイサーの横にあるトランクからハンドルのようなものを取り出し、それを欠けている場所へと差し込んだ。

そして、何か中央にあるパネルのダイヤルを操作した。すると、途端に色が変わり、黒を基調としたものへとなったのだ。

「凄い……」

「ま、これも機能の一つ。これで動かせるから」

そう言って榎田はスタスタと歩き出す。それを見つめ、翔一はビートチェイサーに跨ろうとして思い出す。これは、クウガのために作られた専用バイク。つまり、普通の人間じゃちゃんと使いこなせないかもしれないと。

それに、榎田も変身しろと言っていた。それは、その事を考えてだろうと。そう考え、翔一はいつもの構えを取る。丁度その時、翔一が全然来る気配がなかったので、榎田が振り向いた。

「変身っ！」

翔一の体がアギトへ変わる。それを見て、榎田は何故か確信する。

翔一も五代と同じで、その力を正しい事に使える者だと。その理由は、他でもないアギトの目。クウガと同じ赤い目。そして、外見も似ている。

それに……

（この安心感……やっぱ彼も、アギトも人の味方ね）

そんな風に目を細めて笑みを浮かべる榎田の視線の先では、ビートチェイサーにアギトが跨っていた。それが意外にも違和感なく、榎田は感心した。そして告げた。ゴウラムがいる場所まで行ってと。それに頷き、アギトは走り出す。

クウガが乗る事を前提に作られたマシン。それをアギトは完全に乗りこなしていた。その腕前に惚れ惚れする榎田を置いて、アギトはゴウラムの元へ向かうのであった……

アギトがついて数分後、榎田が少し慌てて現れた。それを見て、アギトはゆっくりと榎田に近付いた。

「遅かったですね。何かあったんですか？」

「ん。ちょっと連絡してたのよ」

「連絡？」

「そう。五代君への伝言を頼もうと思って、ね」

榎田はそう言って笑顔を見せると、アギトに絶対に伝えて欲しいと念を押した。それをアギトはしっかりと頷き、約束した。榎田が

それにサムズアップを見せ、アギトも返す。
　こうして、アギトへ榎田は伝言を伝えた。その数、三つ。本当は後一人いるんだけど、時間が時間だし、翌日の仕事もあって電話をかけられなかったと榎田は悔しそうに告げた。
　アギトはその相手が誰かを訪ね、榎田に教えてもらう。その相手を聞き、アギトも確かに残念に思った。きっと、その三人に負けないぐらい想いを伝えたい人だろうと思ったからだ。

「……じゃ、よろしく」

「はい！」

「アギト、だっけ？」

「はい」

「……かっこいいわね、君も」

「ありがとうございます！」

　アギトの声に榎田は笑みを見せる。だが、そんな和やかな雰囲気もそこまで。また科学者の顔に戻るとアギトへこう言った。

「じゃ、ゴウラムに触って」

「触ればいいんですか？」

　言われるまま、アギトはゴウラムに触る。その瞬間、ゴウラムの霊石が反応を示す。それを見て、榎田は自分の考えが間違っていなかった事を実感した。

何故クウガではなく、アギトがここに来たのか。それは、ゴウラムを使ってクウガの元に行かせるためだ。そう、クウガが来ては世界や次元の壁は超えられない。だが、互いが別にいるのなら、そしてそれを誘発出来る存在ならば。

アギトはクウガの元にゴウラムを連れて行くための案内役なのだ。故に、榎田はビートチェイサーを託した。未だに第四号への特別措置は生きている。先程連絡した内の一人である彼も、今回の事が上に知られた際、何とか出来るように以前のチームの面々と相談すると言ってくれた。

（突拍子もなかったのに、ホント、息ピッタリなのは変わらないんだから）

彼は榎田が告げた内容に驚きを見せたが、すぐにこう答えたのだ。

――五代は、無いなら無いでどうにかするはずです。なので、送れる物は全て送ってください。

それは、無い事で無理をしないように、との配慮なのだろう。責任は私が取りますとさえ言ってのけたのだから。

「翔一君、願って！　五代君の元に行きたいってっ！」

「分かりましたっ！」

言われるままに強くアギトは願う。五代の元へ、はやての元へ行きたいと。その瞬間、ゴウラムが急に動き出した。そして、ビートチェイサーへ合体する。その光景を見て一瞬呆然とするアギトだったが、榎田の視線が急げと言っているように思え、ビートチェイサーへ駆け寄る。

ゴウラムが鎧となって装着されたビートチェイサー、いやビートゴウラムへ跨り、アギトはそのハンドルを掴んだ。その瞬間、周囲に風が起こり、榎田はそれに少し後ずさりながらもアギトにサムズアップを向けた。

「五代君によろしく！」

「はい！」

「それと、君も体に気をつけてっ！」

「はいっ！」

榎田にサムズアップを返し、アギトがそう力強く返事をすると、強い輝きがアギトを中心に発生する。それに榎田が目を閉じ、開けた時には、アギトもビートゴウラムもいなくなっていた。

ただ、彼女のずり落ちた眼鏡が、何かあった事だけを証明していた……

戦士の導きにより、彼もまた世界を渡る。だが、それは即ち彼の力も必要という事。仮面ライダー、それに託された想いや祈りは、重い。

こうして、クウガもアギトも共に新たな力を連れて戻ってくる。甦るだろう闇。それを完全に打ち倒すために……

ジェイルラボ　セッテの部屋。そこでセイン、セッテ、ディエチの妹組（セイン決定）が揃っていた。話題は一つ。真司の事だ。

ジェイルが現在ナンバー９であるノーヴェを、クアットロがナンバー８であるオットーを調整しているのだが、真司はその手伝いをしていて、最近セイン達と遊んでくれないのだ。

訓練はトーレが煩く言うのでだろうがしてくれるので、完全に相手をしない訳ではないのだが、やはり以前に比べて三人に割く時間が減ったのは事実だった。

「ね、寂しくないの？　セッテもディエチも」

「それは……」

「まぁ……」

実際、セインの思っている事は二人も同様に思っていた。セインは普段の他愛ないからかい合い。セッテは、真司から聞く御伽噺。ディエチは料理などのコツ。それぞれが真司に教えて欲しい事やしたい事などがある。

そして、何故ここにチンクやクアットロがいないかと言えば……

「大体さ、チンク姉達がいけないんだよ。真司兄が折角作った時間を訓練や相談で潰しちゃうんだから」

そう、チンクやトーレは訓練相手に、クアットロやウーノは相談相手にと真司を指名するのだ。それが実は彼女達なりの思惑があるとは三人は知らない。だが、それが自分達から真司との時間を奪っている事は理解している。

故に、決意したのだ。姉達から真司を取り返す事を。未だ目覚めない妹達は許す事にする。何せ、自分達も似た様なものだったのだ。

そこは仕方ないと割り切れるセインだった。

「で、何か考えある？」

「セイン姉上、そこはまず姉上から」

「そうだよ。だからセインは、お姉ちゃんに思えないんだって」

「あ～っ！　言ったな、言ったな～。気にしてるのにぃ」

ディエチの指摘にそうやって喚き出すセイン。それを見つめ、ため息を吐くセッテとやや苦笑するディエチ。結局、話し合いの末、ある考えが導き出される。それを聞いたディエチはやや難色を示したが、セインの真司は喜んでくれるとの力説に、渋々承知した。

「不味いね」

「不味いですね」

ジェイルとウーノは揃ってある情報を見て悩んでいた。それはミッドの新聞で、大きく見出しには『期待の新人、高町なのは大手柄！』となっている。ある任務を終えた高町なのはは、帰還途中に謎の機械に襲撃されたものの、それを何とか撃退し、回収する事に成功したとの事。

そう、彼女は本来なら、この相手に撃墜させられるはずだった。それは、無理矢理蒐集行為を受け、その状態でスターライトを撃つという事をした事に端を発する。更に、闇の書事件の際、カートリッジを使い、守護騎士達と戦闘し、闇の書の闇との戦いでも、スタ

ーライトやエクセリオンを使用し、その体に無理を強いる――はずだった。

だが、思い出して欲しい。まず、最初の戦闘時、彼女はスターライトを撃つ必要がなくなった。そう、クウガとアギトによって。その後も修復されたレイジングハートを使いはしたが、カートリッジを使うような相手は、魔法生物にはそうそうおらず、しかもチームで行動していたため、更に彼女の負担は減っていた。

後、付け加えるなら、事件の起きる時期もある。まだ早いのだ、本来の流れから考えれば。つまり、本来なら撃墜されるはずが、むしろ完璧に近い動きで謎の相手を撃破したのだ。そして、彼女が撃破した機械というのは……

「あの時、逃げ出したのかなぁ……」

「やはり真司さんが全て掃除したと言った時、確認すべきでしたね」

それは、ジェイルが研究した”ゆりかご”と呼ばれるロストロギアの内部にあった機械だったのだ。

以前、龍騎がジェイルに頼まれ、ゆりかごの中にいる『トイ』の原型を全て駆逐した事があった。その際、全部片付けたと龍騎は言ったのだが、その時取った方法はサバイブでのファイナルベント。おそらくその時に撃ち漏らしたのがいたのだろう。

そうジェイルは考えた。ちなみに、作業を終えた龍騎からサバイブを使ったと聞いて、ジェイルは何故教えてくれなかったのかと本気で激怒した。

記事によれば、管理局がこの機械を調査し、出所を突き止めようとしているらしい。だからこそ、二人は悩んでいるのだ。もし、万

が一それがゆりこごのものだと判明すれば、このラボ周辺に局員が現れるようになる。そうなれば、何の拍子で発見されるか分からない。

簡単に出所が分かるはずはないが、それでも用心に越した事はないのだ。故に、ジェイルが考え出した方法は。

「良し。代わりの研究所をでっち上げよう」

「は？」

「そこで作ってましたという情報を流して、管理局を騙そう。確かもう使ってない所が何箇所かあったろう？」

「……分かりました。手配しておきます。最高評議会へはどう伝えます？」

「適当に、試作した機械が逃げ出したとでもしておいてくれ。後、データはトイのを改変したので頼むよ」

その投げやりな言い方に、ウーノもため息を吐いて出て行った。この時、ジェイルが取った行動も本来起きるであろう状況を、未然に防いでしまう事になる。その違法研究施設へ乗り込んだ首都防衛隊、通称ゼスト隊はもぬけの殻の施設と申し訳程度のデータを手に入れ、一人の負傷者も出さずに任務を終える事となるのだった……

「へぇ、この子達はノーヴェの親戚なんだ」

「そ。ちなみにノーヴェちゃんの調整がクセ者なのは、そのタイプ

セカンド。スバルちゃん、だったかしら？　その子の魔法をＩＳにしようとしてるからですって」

クアットロの話を聞きながら、真司は手元の書類に乗っている二人。ギンガとスバルの写真を見つめた。聞けば、二人は戦闘機人でありながら、心ある人に拾われ、人間として暮らしているらしい。

それを真司は聞いた時、嬉しそうに頷いたのだ。やはりそう考える人もいるんだと。生まれに拘らず、ちゃんと人として考え、接してくれる人が。

「じゃ、オットーは？」

「この子は、シンちゃんがディードちゃんと一緒に出して欲しいって言ったからよ？　まさか、忘れてないわよねぇ」

そう、双子ならやはり一緒にと真司が言ったので、クアットロはこうして二人分の調整をせざるを得ないのだ。正直、オットーだけならば今年中に終わらせる自信がある。だが、二人一緒となると、事情が変わってくるのだ。ディードは戦闘型で前線タイプ。オットーは戦闘型だが、指揮系なのだ。その異なる仕様の二人を同時に仕上げるのは、中々手間といえた。

それでも、真司の願い通りにしようとする辺り、クアットロも大分真司に毒されたようだ。今も真司がいるからこそ、この調整室にいるようなもので、既にチンクやトーレを始め、ナンバーズは真司を部屋に入れたりする事に何の問題も抱いていない。

真司だけは、まだどこか抵抗があるようだが、なし崩し的にそれぞれの部屋へ入ったりさせられている。

「忘れてなんかないって。感謝してるよ、クアットロ」

「……ま、まぁ私も好きでやってるところもあるし。シンちゃんのためだけって訳じゃないからね」

「それでもありがとさん。いやぁ～、ホント最近みんなが優しくなったよな。ウーノさんもどっかあったトゲみたいな感じが消えたし、トーレも訓練じゃない事で俺を呼ぶようになったし、チンクちゃんは良く家事手伝ってくれるようになったし」

「私はからかう事が減ったし」

「そうそう……って、自分で言うなよ」

真司のノリツッコミに笑みを浮かべるクアットロ。対する真司も笑顔だ。このまま穏やかな時間が過ぎる。そう感じて、クアットロは思った。

（やっぱりシンちゃんがいると進みが違うわ～……。調子が狂うというより、私らしくなくなるのが難点だけど、それもシンちゃんだ・か・ら、よね）

そんな風に考え、微笑むクアットロ。その笑みに真司は思い当たるものはないものの、その笑顔がとても優しいものだったので、頷いて笑みを見せる。そんな良い雰囲気のところへ……

「真司兄、見つけた！」

セインが現れたのだ。驚く真司とクアットロを他所に、セインは真司の腕を掴むとそのまま引きずり出した。あまりの事に、それを見送る事しか出来ないクアットロ。真司もそれに反抗する事無く連

れ出され、調整室に静寂が戻った。
だが、我に返ったクアットロは先程までの幸福感の反動か、その静けさがかなり寂しく思え、大きくため息。そして、セインが連れ出した理由に思考を巡らせ、またため息一つ。

おそらく真司に構ってほしいのだろうと予測したからだ。それに、セイン一人だけでなく、きっとセッテやディエチも参加しているだろうと考えたのだ。更にその目的も察しをつけ、軽く頭を押さえた。

「セインちゃん達ってば、お姉ちゃんの邪魔するなんて良い度胸ねぇ。このお礼はきっちりしてあげなきゃ……ふふっ」

そこに浮かぶは、狡猾冷酷状態のクアットロスマイル。しかし、その怒りが三人へ降り注ぐのは、まだ先の話。今は、双子の調整に力を注ぐクアットロだった……

セインに連れ出され、真司は今セインの部屋にいた。そこには、セッテとディエチもいる。一体何が始まるのか。そんな事を真司が考えていると、セインが真司にベッドに横になってほしいと言い出した。その理由が分からず、説明を求める真司。
だが、それに頑としてセインは答えず、横になれば分かるとしか言わない。仕方ないので、言う通りに横になる真司。その表情は渋々といいたものだ。

「じゃ、マッサージするね」

「へ？　マッサージ？」

「はい。兄上は最近お疲れですので」

「……真司兄さんが喜んでくれると嬉しいんだけど」

「もしかして、嫌かな？」

三人の言葉に真司は感動した。最近あまり構ってやれなくて、兄貴としてどうなんだろうと思う事もあった。だが、そんな自分を三人は怒るどころか労わってくれると言うのだ。これを喜ばずして、何に喜ぼう。そう思って、真司は満面の笑みで答えた。

「嬉しいに決まってんだろ！　んじゃ、お言葉に甘えるか」

そう言って真司は体の力を抜いた。それを見て、セインは頷き真司の上に乗った。そして、背中を押し始める。セッテは足の方へ移動し、そのままマッサージを始める。ディエチは真司の腕を揉み始める。

その心地良さに真司は疲れもあったのか、簡単に眠りに落ちる。それに気付き、三人は小さく笑うと、真司を起こさないように丁寧に優しくほぐしていく。想いを込めて、懸命に。

ディエチの「下手したら痛がったりする」という予想に反して、真司は起きる事なくそのままマッサージは終了したのだが……

「な、別に毎日してくれなくても……」

「ダ～メ！　真司兄は頑張りすぎなんだから」

「我々に任せてください」

「し、真司兄さんが嫌なら止めるよ」

そう、この日から三人が、毎日寝る前にマッサージをしにくるようになったのだ。真司としては有難いのだが、週に一度程度でいいと思っているのだ。それと、こうなってからと言うもの……

「どうせ、セイン達に癒してもらえるだろ」

そう言ってトーレは訓練の激しさが増したし……

「やはり、お前は大きい方がいいのか！」

チンクも同じく訓練の過激さが増し……

「シンちゃん、私も疲れるんだけど？」

クアットロは笑顔なのに、どこか笑っていない目でマッサージを要求し……

「真司さん。私、最近疲れ目で……」

ウーノはしだれかかるように、そう言ってくるので……

（結局、俺の負担減ってないよなぁ……）

そう思う真司だったが、三人が一所懸命体の疲れを取ろうとしてくれているのを感じ、小さく呟いた。

――ま、いっか。

誰かが自分のためにと想い、動いてくれる幸せを噛み締めつつ、

真司は目を閉じる。彼は知らない。それは、ジェイル達が自分にしてもらった事で感じている事なのだとは。
だが、それに気付かないからこその真司であり、愛すべき”バカ”なのである。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

空白期。短いですが、あくまで繋ぎですので。
なのは達に降り掛かる事件は、大きなものは変化し、無害になりました。起きる時期が早まったのも原因の一つですが。
空港はジェイルが利用するつもりないので、おそらく変化します。起きないのではなく、変化。残る三期で語られる事件が、どちらかの帰還と重なります。

空白期3

新暦７１年　ミッドチルダ北部臨海第八空港。本来なら、大勢の人で賑わうここは、今は見る影もない程人がいない。それもそのはず、灼熱の火炎で一面覆われていたからだ。

原因は、ここに運び込まれたレリックと呼ばれるロストロギア。最高評議会がジェイルへ研究用として手配したもの。それが、ふとしたキッカケで暴走、爆発したのだ。無論、ジェイルはレリックの輸送を断った。必要ない。そうはっきりと。

しかし、それを良く思わなかったのか、最高評議会は無理矢理レリックを送りつける事にしたのだ。何だかんだ言っても、ジェイルは『無限の欲望』と名付けられた存在。レリックが手元に来れば、嫌でも研究せずにはいられなくなると踏んで。

だが、実際に今のジェイルはそんなものに興味は無かった。ライダーシステムの実用化。それにやっとメドがつき出したこの頃、彼はロストロギアなどに一切の興味など感じなかったのだ。

話を戻そう。空港は無残に焼け落ち、到る場所で火の手が上がっている。そんな中、一人の少女が泣きながら歩いていた。少女の名は、スバル・ナカジマ。彼女は両親が揃って休みになる事を利用し、姉と共にこの空港に来ていた。だが、活発な性格故、姉とはぐれてしまい、その姉を捜していたら、この惨状に巻き込まれたのだ。

「ヒックっ……お姉ちゃん……どこぉ～……」

煤にまみれた顔や手。転んだのだろう。腕や足には擦り傷もある。だが、一番注意するべきは、この空港内の温度にある。何せ、救助活動を行なっている魔導師達がバリアジャケット無しでは活動出来

ないような場所となっているのだ。
そこを何も無しで動く事が出来る彼女は、戦闘機人と呼ばれる存在。普通の人とは違う体を、望まずに持った者なのだ。

だが、そんな彼女もそろそろ疲れが出たのか、大きな石像がある広場まで来たところで座り込んだ。こんな事なら、母からちゃんと魔法を教えてもらうんだった。そんな事を考えたからだろうか、少女の脳裏に家族の顔が浮かんできた。
会いたい。そんな事を思い、少女は上を見上げた。空が見えれば、少しは気が紛れるかもしれない。そんな淡い気持ちの行動だった。

「え……？」

その目に映ったのは、倒れてくる石像。それが、何故かやたらとゆっくりに見えて――――少女は目を閉じ、心の中で叫んだ。

――――誰か助けてっ！

その声は、普通ならば届かないのだろう。その声にならない叫びは、本当ならば聞こえないのだろう。だが、そんな声を聞き、風よりも速く駆けつける者達がいる事を、我々は知っている。
そう、彼らの名は――――っ！

「危ないっ！」

赤い何かが石像を支える。その声に少女は目を見開いた。そこにいたのは、赤い体の怪物。でも、何故か少女には怪物とは思えなかった。だって、その背中が……

（泣いてる……ような気がする……）

そう感じたのだ。だが、それも束の間。その赤い存在は石像を反対へ押しのけ、スバルへ駆け寄るとしゃがんで頭を優しく撫でた。それが父のようにも、兄のようにも思えて、スバルは思わず微笑みを浮かべた。助かった。そう心から思えたのだ。

相手もその笑顔に笑顔を返してくれた気が、スバルにはした。だが、そこで思い出したのだ。もう一人、ここにいるであろう存在を。

「お姉ちゃんが、ギンガお姉ちゃんがまだっ！」

「大丈夫！」

「え？」

「きっと、大丈夫。俺の仲間が、先輩がいるから！」

サムズアップ。生憎スバルはその意味を知らない。だが、それを見てると何故か安心出来るのだ。絶対大丈夫。そんな根拠のない自信が心を満たしてくれる。そんな気が……

「あ、そうだ」

そこでスバルは気付いた。まだ大事な事を聞いてないと。故に尋ねる。純粋に、素直に。心から知りたいと思ったから。自分を助けてくれた恩人を、自分にとってのヒーローを。

「あたし、スバル。スバル・ナカジマって言います。えっと、貴方の名前は？」

その問いかけに赤い存在は、躊躇う事無く告げた。

「クウガ。仮面ライダー、クウガ」

「仮面ライダークウガ？」

これが、クウガとスバルとの出会い。それは奇しくも、イレインと同じく炎の中というもの。

後にクウガは知る。この時出会った少女も、イレイン達と同じような存在だと。

そして、これが新たな戦いの序章。クウガはこの後、成長した少女達と再会する。だが、それはある意味で悲しみの再会となる……

少女は必死で妹を捜していた。こんな炎の中に長時間動いていられる程、妹は鍛えていない。自分は陸士になるため、母から様々な事を教わり、こうして妹を捜しながら逃げ遅れた人達を救助しているが、魔力も体力も無尽蔵ではない。

現に今も気を抜いたら倒れそうなぐらい消耗している。そんな彼女だったが、その目だけは強い輝きを持っていた。

（待っててスバルっ！）

たった一人の妹。自分とは色々な意味で姉妹。その妹を見つけ出せずに倒れる訳にはいかない。その思いが彼女を、ギンガ・ナカジマを支えていた。

そして、その足が爆発の衝撃で脆くなった階段へ乗った瞬間、ギンガは浮遊感を感じた。階段が崩れて落ちている。それを認識した時、ギンガはパニックになった。もし、彼女が飛行魔法を使えれば

そうはならなかったかもしれない。もしくは、彼女がウイングロードと呼ばれる魔法を行使すれば良かったのだろう。

だが、まだ陸士としての訓練さえまともに受けていない少女に、突発的な状況で冷静な判断を求めるのは酷である。しかし、ギンガが無意識にこう叫ぶ事が出来たのは、妹と違い、まだ少し彼女の方が強かったのだろう。

「助けてぇぇぇぇ！！」

その叫びに、何かが動いた。それは、傍目からは動く液体に見えただろう。それが落下するギンガへ猛スピードで近付き、その体を優しく抱き抱え、崩れていなかった場所へ運んだ。

「……え……」

何が起きたのか分からないと言わんばかりに、ギンガは周囲を見渡した。すると、液体のようなものが人型になり、青い人間のようになった。そんな光景にギンガは不思議と恐怖を感じなかった。むしろ、安心感さえある。

そんな風にギンガが見つめていると、青い存在が光ったかと思うと、黒い体に変わっていた。それに驚くギンガ。そんな彼女に黒い存在はゆっくり近付き、しゃがみ込んでギンガの頭を撫でた。

「大丈夫かい」

「あ、えっと、ありがとうございます」

「どう致しまして。それで、君はギンガちゃんって名前かな？」

見も知らない相手に名前を呼ばれ、動揺するギンガだったが、彼

の仲間が助けた相手から姉を助けて欲しいと言われた事を伝えると、その事に納得した。同時に妹の無事も確認でき、彼女としては心から安堵出来た。

そんなギンガを見て、黒い存在は立ち上がる。それを見て、ギンガは慌てて尋ねた。貴方は誰ですかと。

「俺は、太陽の子。仮面ライダーＢＬＡＣＫ……ＲＸ」

「ＲＸさん……。私は、ギンガ。ギンガ・ナカジマです。この恩は、絶対忘れません」

これが、ＲＸとギンガの出会い。こうして、黒い太陽も哀しい体を持った少女と出会う。

彼女達が秘める哀しみ。それを、彼は払う光となり得るのだろうか……

新暦７１年　ミッドチルダ首都クラナガン。クウガ達が現れた時から三日後。仮面ライダー達が現れた事による影響は、様々なところに現れていた。そして、それは本来起きる事件がなくなったり、事件の内容が変化したりと様々だ。

そう、ある執務官を目指した青年にも、それは起きていたのだ。彼は、念願の職に就いて働いていたのだが、その運命が今終わろうとしていた……

（くそ……ドジったな……）

ティーダはそう思いながら、薄れ行く思考の中である事を考えた。

それは妹の事。唯一彼に残された肉親だ。

（ティアナ……ごめんな。兄ちゃん、ヘマしちまったよ……）

簡単な任務のはずだった。近くにいたので協力した、逃走中の犯罪者の逮捕。執務官として名前が売れ出した自分ならば、これぐらいは余裕だと。その気持ちが油断を生んだのかもしれない。後もう一歩まで追い詰めながら、ふとしたミスで相手が隠し持っていた質量兵器――拳銃で撃たれたのだ。甘かった。相手が何の罪状で追われているのかを、ちゃんと考えて行動するべきだったのだ。質量兵器の違法所持とその密輸。

咄嗟に全力の防御魔法を展開したが、バリアジャケットも貫通し、デバイスを損傷、おかげで飛行魔法に回す魔力が無くなって、このままでは落下して墜落死は確定だ。男を見てみれば、そのままティーダが落ちるとこを見ていこうとしているのだろう。その場に留まっていた。

相手も悟っている。もう逃げ切れないと。だからこそ、最後にティーダの死に様だけでも見てやろうというのだ。

（ちくしょう……情けないだろ、これじゃあさ。せめてあいつだけは……）

――俺の手で捕まえたいっ！

その想いを聞き届けたのだろうか。気付けばティーダは、落下が止まっていたのだ。そして、それと同時に感じる感触。まるで暖かい金属にでも乗っているかのような感覚。

それに気付いてティーダは自分の下を見た。そこには、緑色の大き目の石がある昆虫らしきものがいた。そして、それの丁度真下に一台のバイクとそれに跨る金色の存在がいた。

「ゴウラムさん、その人をお願いします！」

その声に頷くように、ゴウラムと呼ばれたそれは、ティーダを乗せてゆっくり降下していく。それを横目にし、金色の存在はバイクから降り、戸惑う男へ静かに近付いた。その手にした銃で攻撃する男。だが、それを金色の存在は避けもせず、ただゆっくりと近付いていく。

そして、男の目の前に立ちはだかり、その手にした銃を奪い取る。それを遠くへ投げ、金色の存在は男を捕まえ、ティーダの元へ。

ティーダは男を突き出し、自分を見ている存在に不思議な感覚を覚えるものの、怯え竦む男にバインドをかけ、息を吐いた。それに応じるように金色の存在も頷いて、ティーダへ尋ねた。

「あの……」

「……何だ？」

やや戸惑うが、怪しくても命の恩人だと思い、ティーダは務めて落ち着いた声で話しかけた。それに相手は躊躇いがちにこう言ったのだ。

「ここ、どこです？　貴方は魔導師なんですか？」

「はぁ？」

これが、ティーダとアギトの出会い。そして、彼はもう一人出会う者がいる。かつて世話になった少女。それをどこか思わせるよう

な相手に。
三人の仮面ライダーはそれぞれ魔法世界へ辿り着く。しかし、彼らが出会うには、まだ時間が必要だった……

新暦６７年　とある研究所。そこでジェイルはある者達を待っていた。あの日知られてしまったトイの原型。その情報を操作し、もう一年以上になる。それは、戦闘機人を調べ、動いている部隊を相手にしてもうそれだけと言う事だ。
これで犠牲にした施設は四つ目。最初の施設だけでは満足出来なかったのか、その僅か数ヵ月後、ジェイルの耳に密かに調査している部隊があると情報が入った。それが、ゼスト隊と呼ばれる陸の守護神と評されている精鋭部隊だと分かった時には、ジェイルは思わず顔を覆った。

ベルカの騎士としてオーバーSの力を持つゼスト・グランガイツ。それを隊長に、幾多もの事件を解決し、治安維持に貢献している部隊だったからだ。早目に見切りをつけて欲しいと思い、二つ目の場所はトイのデータをそのまま残し、相手を満足させたと思ったのだ。
しかし、また数ヵ月後、同じような情報が入る。どうも、かえって簡単に事が運ぶので怪しんでいるらしい。だから仕方なく、真司が廃棄したトイを数台持って来てもらい、襲撃させたのだが、それを簡単に返り討ちにし、ゼスト隊は何かあると踏んだらしく、今回もまた現れたのだ。しかし、今回は今までと違う点がある。一つは、トイの情報も何もない事。そして、現在稼動しているナンバーズ七人が全員来ている事。最後に……

『お～い、こっちは準備完了だぞ～』

「分かった。なら、そのまま真司はそこで待機してくれ」

龍騎がいる事だろう。そう、ジェイルは今回ではっきりと終わらせるつもりだったのだ。広域次元犯罪者ジェイル・スカリエッティとしての自分を。きっと管理局は信じないだろうが、それでもだ。

自分はもう違法行為に手を染める事はしない。その決意を持っていた。真司と出会い、そして知った。自分の気に食わない世界だから変えるのではない。自分が変わり、その不自由さえ楽しめばいいのだと。

「……もし、真司にもっと早く会っていたら……どうなっていたんだろうねぇ」

感慨深く呟くジェイル。そこへモニターが出現した。相手はウーノ。その表情から、ジェイルは時が来たのだと気付いた。

『ドクター、予定通りゼスト隊が現れました』

「分かった。くれぐれも動かないように頼むよ」

ジェイルの言葉にやや躊躇いがちではあるが、頷くウーノ。そう、ジェイルがいるのは研究施設の入口。たった一人でそこに立っていたのだ。

勿論、周囲には龍騎達が控えている。だが、それもジェイルが危険に晒されない限り動かないよう言いつけられている。龍騎は、ジェイルからこう言われているのだ。以前やった事に対するけじめをつけるのだと。

それがどんな事かは分からないが、ジェイルの真剣な眼差しに龍騎は折れ、こうして他のナンバーズと共にクアットロのＩＳで隠れているのだ。

クアットロのＩＳはシルバーカーテン。幻影を作り出したり、姿を隠す事も出来る便利なものだ。そして、周囲の状況はウーノのＩＳ、フローレス・セレクタリーと呼ばれる力によって把握され、こうして万全の体勢を整えていた。

やがて、前方から三人の局員が現れた。先頭に立つのは、ベルカの騎士であるゼスト・グランガイツ。そして、その脇に控えるのは近代ベルカの使い手であるクイント・ナカジマと、召喚魔導師であるメガーヌ・アルビーノだ。

他の隊員達は、どうも三人の後ろで待機しているらしく、いつ動き出してもいいように、ウーノが目を光らせている。

「やぁ。こんばんは」

「……ジェイル・スカリエッティ、だと？」

「そんなっ？！」

「まさか……本人……？」

想像にしない展開に、三人の表情にも動揺が見える。それもそのはず。確かにこの謎の機械に関わっていると思われていた相手ではあったが、それがわざわざ施設の奥ではなく、入口で待ち構えているなどと誰が考えようか。

そんな戸惑う三人へ、ジェイルは聞いて欲しい事があると切り出した。それに反応して動こうとしたクイントをゼストが止める。その行為が理解出来ず、疑問を感じるクイントだったが、ゼストの視線を追って気付いた。

ジェイルの目が澄んでいたのだ。犯罪者特有の濁りのあるもので

はなく、どこか信じられるようなものだった。

「……私を捕まえたいのは分かるが、せめて話ぐらい聞いてくれないかな？」

「いいだろう。ただし、それの内容によって罪が軽くなる事も重くなる事もある。慎重にな」

「……ご忠告どうも」

ゼストの言葉にジェイルは苦笑しながら、語り出した。それは、ゼスト達からすれば信じられない事だった。ジェイルはもう二度と違法行為に手を出さないと告げ、そしてこれまでやってきた事の全てを収めたディスクを提示した。

そこには、自分に戦闘機人を始め、様々な違法行為を指示した者達のデータが入っている。そう言ったのだ。そして、そのディスクを渡す代わりに、一つだけ頼みがあると告げた。その頼みとは……

「見逃せ、と？」

「この場は、でいいよ。何も今後ずっとなんて言わないさ」

ジェイルの言葉にゼストは少し考え、頷いた。

「隊長？！」

「いいんですか？！」

まさかのゼストの判断に、クイントとメガーヌが驚愕の表情を浮かべる。それにゼストは頷いて、ジェイルを見つめたまま告げた。

何か罠を張っているのなら、見逃せなどとは言わないだろうし、もしその気なら周囲に隠れている手勢に襲わせていると。それに龍騎達は少し驚く。気付かれていたとは思っていなかったからだ。

尚もゼストは続けた。それに、今後もではなく今回はと言っている事からも、相手も本気で交渉している。何故そう考えたかは知らないが、気が変わらない内に情報を得るべきだろうと。

「……だが、最後に聞きたい」

「何かな？」

「どうして広域次元犯罪者の貴様が、こんな真似を……」

ゼストの言葉に龍騎は驚いた。犯罪者。確かにそう言ったのだ。あの隊長と呼ばれた男は。そして思い出したのだ。初めて会った際、ジェイルが自分に言った事を。自分は犯罪者。それが本当だったと知り、龍騎は悩んだ。

仮面ライダーの力を、ジェイルはもう少しではあるが形にしている。そう、セッテ達の武器の材質などだ。それを教えたのは自分。もし、ジェイルが犯罪者で、それを悪用したのなら。そこまで考え、龍騎は思い出す。

（でも、ジェイルさんは……イイ人なんだよな。娘想いの、ちょっと変わったとこもあるけど、俺の恩人なんだ）

見も知らない自分を受け入れ、食事や部屋などを与え、今は妹分までいる。それに、龍騎は知っているのだ。ジェイルが元の世界に戻れる方法も考えてくれている事を。しかも、ただ戻るだけでなく、こちらと行き来出来るように。

それをウーノから教えてもらった時、龍騎は嬉しかったのだ。た

だ帰すのではなく、また会えるようにと。それは、自分と会えなくなるのを避けていると分かったから。自分がジェイル達と会えなくなるのが嫌なように、ジェイルもまたそう思ってくれている。それが、堪らなく嬉しかったのだ。

そんな事を考えていた龍騎だったが、ふと視線をジェイル達へ戻した。どうも話し合いは終わったらしく、ジェイルが手にしていたディスクをゼストへ投げ渡した。それを受け取り、すぐに確認して真偽を確かめるゼスト。

メガーヌはディスクが本物だと分かり、やや驚きながらもゼストへ視線を向けた。それにゼストも頷いて、ジェイルに一言告げて去って行く。次は無い。その言葉にジェイルは苦笑しつつ頷いた。分かってる。そのやり取りは、とても敵対する者同士のものには聞こえなかった。

「……ウーノ」

『はい、撤収したようです。しかし、よろしいのですか？』

「こんな事をして、老人達に文句を言われるからかい？　別に関係ないよ。言いたいのなら言わせればいい。私は私のやりたい事をする。それだけさ」

ジェイルはそうはっきり言い切って周囲へ大声で告げた。

「さ、帰ろうじゃないか！　私達の家に！」

その言葉をキッカケに、クアットロのＩＳが解除され、全員が頷いた。ただ一人、変身を解いた真司だけは頷かず、ジェイルへ視線を向けて尋ねた。

「本当に……犯罪者だったんだ」

「……ああ。そう言ったはずだよ」

「……だよな。うん、そっか。なら悪いのは……」

真司の次の言葉に、その場にいた全員が声を失った。それだけ、真司の発言は驚くべき内容だったのだ。

――ジェイルさんに悪い事を止めろって言う人がいなかったからだ。

そう笑顔で言って真司は歩き出す。呆然としているジェイル達を見て、真司は大きく宣言した。これからは、自分がジェイルの悪事を止めるからと。もう悪い事はさせないからな。そう告げて真司は歩いて行く。その後ろ姿を見送り、ジェイルは楽しそうに笑い出す。それに感化されたのか、ウーノ達も笑う。

そう、真司が言った事は、とっくに実現されているのだ。あの日、真司がジェイルと出会った時から、それは始まっていたのだ。ジェイルが本来考えていた計画。それを真司は大きく変化させ、今の形にしたのだ。

ライダーシステムを実用化し、管理局へ譲渡する。その見返りとして自分達への不干渉とどこかのどかな世界での生活を送る事。それが、今のジェイル達の計画。それに……

（真司のいた世界への帰還方法とその行き来の模索と確立だね）

次元漂流者だが、どうも話を聞く限りでは真司は更に複雑な事情

がある。彼のいた世界自体は、簡単に突き止められた。管理外である地球。そこなのは、もう真司自体にも確認を取ってある。

しかし、そこには真司の言ったモノがないのだ。それは建物の名前だったり、人の名だったりと様々だが、それが何一つとして存在していなかった。そこから導き出されたのが、真司は地球の並行世界出身ではないか。そういう結論だ。

そのため、今もジェイルはライダーシステムの実用化と並行し、少しずつではあるがそれを調べている。実は、それがあるために未だにノーヴェの目覚めが遅れているのだ。今起動しているナンバーズは、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、チンク、セイン、セッテ、ディエチの八人。

残りの四人が目覚めるのは、おそらく後二年ぐらいかかるだろうとジェイルは予測している。それには、その事以外にも理由があり……

（真司を驚かせてやりたいからね）

クアットロと話し合い、残る四人を同時に目覚めさせようとしているのだ。そのため、クアットロはジェイルの分も引き受け、現在四人の調整を行なっているのだ。それを文句も言わずにやっているクアットロを見て、真司が感心したぐらいだ。

ちなみに真司はクアットロが四人分の調整を行なっているのは、ジェイルがライダーシステムへ掛かりきりだからと思っている。

「さぁ、我々も行こう。お腹も空いた事だしね」

「そうですね」

「今日のご飯は何かしら～？」

「オムライスと言っていたが？」

「おおっ！　チンク姉の好物だね」

「……わざわざ言わんでいい」

「セッテも好きだよね」

「ええ。ディエチは違うのですか」

ワイワイ言いながら歩いて行く七人。その視線の先では、真司がジェイル達を眺めて笑っている。そしてセインやセッテに向かってこう告げた。ここから向こうの大きな木まで競争しようと。

それに意気込んで応えるセイン。静かに、だがしっかりと頷くセッテ。微笑みを浮かべながら参加する意志を見せるチンク。どこか呆れながらも加わるトーレ。ディエチはセインに呼ばれ、少し躊躇いながらも参加し、クアットロとウーノはそんな姉妹達に楽しそうに笑みを浮かべる。

そんな光景を見つめ、ジェイルは真司へ告げた。自分が合図を出すと。それに真司も頷いて、それぞれが位置につき……

「それじゃ……スタート！」

その声で一斉に走り出す真司達。必死で走る真司を、トーレが、セッテが、チンクが、セインが、終いにはディエチさえ抜いていく。それに負けるかと頑張る真司だったが、龍騎ならともかく彼女達にそのままで勝てるはずもなく、結局最下位で終わった。

そんな真司を慰めるディエチとチンク。誇らしげに笑うセインと

セッテ。へたり込んだ真司を呆れたように見つめるトーレ。後から歩きながら、真司を讃えるウーノとクアットロ。そして、その光景を嬉しそうに眺めるジェイル。

「あ～！　今度は絶対負けないかんな！」

真司のその言葉に、全員が笑う。体の事を知りながら、それを言い訳にしない。その真司の気持ちが嬉しいのだ。

　こうして、本来であれば悲劇となったゼスト隊の運命は、一人の男によって回避された。それもまた、後に起こる戦いを助ける事になるのだ……

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

続き。空白期はこんな感じです。真司だけ時間がずれているのは、彼は戻る必要がないため、残り続けています。

次回で、真司がどうして残っているのか。そして、この世界に来たキッカケの一端が明らかになるかも……？

空白期4

ＲＸがギンガを助けた頃、クウガは言葉を失っていた。呼びかけられただけではない。その声に聞き覚えがあっただけでもない。振り向いた先にいた相手が、自分の知る姿ではなかったからだ。

白いバリアジャケット。赤い宝石のついた杖。そして二つに纏めた髪。それらはクウガの記憶と完全に一致している。だが、その肝心の相手の見かけがまったく違う。

「な……なのは、ちゃん……？」

「うん。そう、だよ、五代さん……」

対するなのはは涙目だ。クウガにとってはつい先程の別れでも、彼女にすればもう五年以上前なのだ。

（五代さん……帰ってきたんだ。帰ってきてくれたんだ！）

喜びを噛み締めるも、なのははクウガの傍にいる少女を見て、表情を引き締める。今は感慨に耽っている場合じゃない。この数年間で成長を遂げたなのはは、局員としての顔に戻ると、クウガへ声を掛ける。

「五代さん、その子は私が連れて行きます」

「……あ、うん。お願い」

なのはの申し出にクウガは意識を切り替え、スバルを抱き上げるクウガ。それに少し驚くも、スバルはなのはの腕に移され、その温

もりに笑みを見せる。それになのはも笑顔を返し、上を見上げて何かに気付く。

そして、クウガへ済まなさそうにこう言った。道を作るので、もう一度この子を抱いててもらっていいですか、と。そんななのはにクウガは自分の知るなのはの面影を感じ、嬉しそうに頷くとスバルを預かる。

「行くよ、レイジングハート」

”いつでもどうぞ”

「ディバイィィィン……バスターっ！」

なのはの言葉に呼応し、レイジングハートはカートリッジを排出する。そして、放たれた閃光は天井を貫き、道を作り出す。それを魅入られたように見つめるスバル。クウガは最後に見た頃よりも若干強力になったように感じ、なのはの成長を実感した。

だが、同時に思うのは自分がほんの半日を過ごした間に、こちらではどれだけの時間が経過したのかという疑問。しかし、今はそれを聞き出す暇はない。クウガはなのはヘスバルを渡して、告げた。

「実は、ここに俺の先輩がいるんだ。俺、その人と一緒に脱出するから」

「先輩？　翔一さんじゃないんですか？」

なのはの言葉にクウガはやや躊躇いながらも頷く。それに思う事があったのだろうが、なのははそれを言わずに、頷き返した。

「……分かりました。五代さん、後で色々聞かせたい事と聞きたい

事があります」

「うん。必ず会いに行くから」

なのはの言いたい事を理解し、クウガはサムズアップを見せる。それになのはも笑顔でそれを返し、スバルと共に炎の中から出て行った。それを見送り、クウガはＲＸへ連絡をした。アマダムとキングストーンの共鳴を使った通信能力だ。

先程ＲＸへギンガの事を伝えたのも、これによるもの。クウガはその意識をＲＸへ向ける。

＜先輩、五代です＞

＜クウガか。こっちは無事救出した＞

ＲＸの話を聞き、クウガは驚いた。何と、ＲＸはフェイトと出会ったそうだ。そして、仮面ライダーだと告げると驚き、クウガの事を話すと更に驚いて涙を見せたらしい。それを聞き、やはりなのはと同じでフェイトも本質は変わっていない事を理解し、クウガは喜んだ。

ＲＸはギンガをフェイトに預けてこちらを目指しているらしい。残りの救助者もライドロンやアクロバッターが助け出し、もう残っている者はいないそうだ。

＜じゃ、俺達も＞

＜ああ、脱出しよう。彼女が言うには、見られると問題があるからと落ち合う場所を教わった＞

＜そうか。なら、そこへ行きましょう＞

そう答えてクウガは動き出す。ＲＸから聞いた場所を目指して。同じようにＲＸもそこへ移動を開始する。だが、ＲＸはある事を考えていた。それは助け出したギンガの事だ。

そう、ＲＸの目には見えていたのだ。ギンガの体が普通ではない事が。改造人間である自分にどこか似た体をしていた事。機械を組み込まれたその体に、ＲＸは悲しみと怒り、そして喜びといった複雑な想いを抱いたのだ。

（あの体を受け入れ、あんな風に優しく強く生きている。だが、あの技術を使い、いたいけな少女を改造した存在がいる。それは、絶対に許さんっ！）

そんな決意を抱き、ＲＸは空港を脱出した。見れば、クウガも離れた場所にいる。そこへ向かうＲＸ．。その後ろから二台も姿を見せ、後を追う。

こうして、空港火災は、本来よりも犠牲者を出さずにその幕を降ろす。その影に、二人のヒーローと二台のマシンの活躍を隠して。

火災の鎮火を終えたはやては、疲れる体を物ともせず、引継ぎやその他の雑務を指揮官として現れてくれたゲンヤ・ナカジマに任せ、親友二人が教えてくれた場所に向かって急いでいた。

共にいたユニゾンデバイスであるリインフォースツヴァイが、驚いて置いていかれる程の慌しさで。ちなみにゲンヤは押し付けられたのではなく、はやてが何か落ち着かないのを察し、始めの方を指揮してくれた礼だと言ってくれたのだ。

それにはやては心から感謝し、現在に至る。

（五代さんが……仮面ライダーが帰ってきてくれた！　翔にぃの事も何か分かるかもしれん！）

やがて、視線の先に見覚えのある青年の顔と親友二人。それに見知らぬ男が見えてくる。そこに、翔一はいない。はやては湧き上がる不安を押し殺し、徐々に速度を落とした。

そして、五代達の目の前で止まり、その顔を確認する。五代は、急いできたはやてにどこか驚きながらも、視線を向けると笑顔を浮かべてくれた。それにはやては嬉しさを感じた。あの闇の書事件解決の立役者の一人である五代。その彼は、何も変わっていないと感じたからだ。

だが、そこではやては違和感に気付く。五代がまったく変わっていないのだ。内面ではなく、外見が。あれから五年以上経過したにも関わらず、五代はあの頃と同じままなのだ。

それにはやてが戸惑いを感じた時、なのはがやや躊躇いがちに告げた。五代は、あれからたった半日しか経過してないと思っていたらしいと。それにはやては愕然となった。次元世界同士の行き来でも、僅かな時間の誤差は生じる。だが、それはあくまでも僅かでしかない。五年以上も誤差が生まれるなど聞いた事もない。

「ほんまなんですか……？」

「……うん。だから、最初なのはちゃんに会った時は驚いたんだ。俺は半日ぐらいだと思ってたら、五年以上も経ってたなんて……」

きっと、五代も自分と同じ気持ちなんだろう。再会出来て嬉しいのだが、経過時間に差があり過ぎて、どこか素直に喜べないのだろうと。

「で、そちらの方は？」

「あ、こちらは俺の先輩で……」

「初めまして。南光太郎です」

「こちらこそ初めまして。八神はやて言います」

互いに挨拶を交わす二人。そして、それを見届けてから五代は、なのは達に話した。光太郎の事、自分に起こった事、そして翔一とはぐれた事を。それを聞いて、はやては崩れ落ちそうになった。だが、それをなのはとフェイトが支える。

五代は慌ててはやてにこう続けた。翔一とはぐれはしたが、自分が戻ったように、きっと翔一も戻ってくるはずだと。その根拠は――。

「だって、翔一君も仮面ライダーだから」

その言葉にはやては顔を上げる。その言葉に込められた想いを気付いたからだ。五代は真剣な声でそう告げた。つまり、まだ世界は仮面ライダーを必要としている。それを感じ取っているからこそ、五代はそう言ったのだろう。そんな気がしたからだ。

見れば、光太郎も同じように頷いている。彼も五代達と同じく仮面ライダーなのだそうで、しかも翔一が言っていた”仮面ライダー”を名乗っていた存在。それを聞き、はやて達にも五代の言葉を信じる事が出来た。

「それで、これからの事なんだけど……」

三人が事情を理解し、はやてが立ち直ったのを見て、光太郎がそ

う切り出した。彼は、三人にライドロンやアクロバッターの置き場所を頼んだのだ。二台は、普通の車やバイクへの偽装能力を持たない。そのため、このままでは色々と問題が起きる。

そう言って、光太郎がその名を呼ぶと、二台はゆっくりと建物の影から姿を現した。その外観を見て、三人はその言葉に納得し、はやてがどこか貸し倉庫でも借りて対処すると告げると、光太郎は感謝すると共に申し訳なさそうに頭を下げた。

そして、今度は五代へ三人から質問が浴びせられたのだが、そこへ遅れて来た者がいた。

「はやてちゃ～ん、ヒドイですぅ～」

「え？　リインさん……？」

リインフォースに似ている。そう思った五代だったが、それになのはが説明をした。一方、ツヴァイはそんな五代と光太郎を見て首を傾げた。

「このお二人はどちら様ですか？」

「こっちは光太郎さん。そして、驚くんやないでリイン。そっちがあの五代さんや」

「え～っ！？　あのお姉ちゃんを助けてくれた仮面ライダーさんですかっ？！」

突然の大声に驚く五代と光太郎。なのはとフェイトはやっぱりといった表情だ。ツヴァイは目を輝かせて五代の前へ行き、敬礼をする。自分の肩書きを述べるツヴァイに、五代はどこか微笑ましいも

のを感じ、笑みを浮かべる。
そして、ツヴァイへ自分の懐からある物を取り出した。それは名刺。そこに書かれている文字を眺め、ツヴァイが不思議そうに読み上げる。

「夢を追う男……二千の技を持つ男……」

「お、ええなリイン。わたしも欲しいわ」

「あ、じゃあ上げるよ」

はやての言葉に五代はもう一枚名刺を差し出す。それを見てなのはとフェイトも欲しがり、五代は笑顔でそれを渡す。光太郎はそんな光景を見て、笑みを浮かべる。自分も五代と出会った際、同じように名刺を貰った事を思い出していたのだ。
そんな風に五代と三人は再会する。その後、二人は行く当てもないため、はやて達三人の判断により、海鳴へ一度行く事となった。それは、三人の誓いの一つでもある事を実現するためでもある。

こうして、五代と光太郎は翌日フェイトの手を借り、海鳴の地を踏む事になる。そこで待つのは、五代に会いたがっていた少女と女性。そして、光太郎には信じられない事を知るキッカケにもなる。
自分が助けた少女。それと同じ存在がそこにもいる。そして、彼女達の真実を聞き、ＲＸは思い知る。人間の業の深さとその愚かさ、そして優しさを……

「……そうですか。ここがミッドチルダ……」

「ああ。それで、あんたは一体何者なんだ？」

あの後、ティーダはアギトにゴウラムと共に隠れてもらい、犯罪者を陸士へ引き渡した後、こうして路地裏で話していた。ちなみにゴウラムはもういない。アギトが言うには、まるで何かに呼ばれるように飛んでいったとの事。

それを聞いて、ティーダが内心で「あちこちで騒ぎになりませんように」と願ったのは言うまでもない。

「えっと、仮面ライダーアギトっていいます」

「仮面ライダーアギト？　変わった名前だな」

「それと……津上翔一とも言います。好きに呼んで下さい」

話している途中、アギトの体が光ったかと思うと、そこには人の良さそうな青年がいた。ティーダはあまりの出来事に目を見開いて驚いた。だが、執務官として様々な事件などに関わってきた彼は、すぐに冷静になって考えた。きっと、レアスキルのようなものだ。そう結論付け、ティーダは翔一へ頭を下げた。助けてくれた礼を述べて。

それに翔一はやや慌てて手を振った。当然の事をしたまでだからと。ティーダはどこかで翔一を恐怖していたのだが、それがその言葉で大分払拭された。そして、もう一度頭を下げた。今度は、翔一を恐怖した事に対して。

「すまない。俺は、あんたをどこかで怖がった。同じ人間だって思えなかった……最低だ」

「えっと、仕方ないですよ。俺だって、逆だったら少し戸惑います

し。ティーダさんの気持ち、分かります」

「……すまない。そう言ってくれると助かる」

翔一の心からの言葉に、ティーダは噛み締めるように言葉を返す。執務官として、差別などしてはいけない。どんな相手にも平等且つ公正に対処すべし。そう考えていたティーダだったが、翔一にはそれが出来なかった。それを恥じ、彼は心から謝ったのだ。

それに翔一はどこか困ったような表情を浮かべるも、何か思い出したのかティーダへ尋ねた。

「そうだ。ティーダさんは執務官なんですよね？」

「ああ」

「同じ執務官で、クロノって子知りません？」

翔一から出たクロノの名前にティーダは首を傾げた。執務官にクロノという者はいなかったのだ。そう、この頃クロノは昇進し、アースラの艦長をしていた。役職も提督になり、執務官を退いていたのだ。

それを知らず、ティーダは翔一に俺が知る限りはいないと答えた。それに翔一は驚きを見せるが、落胆したように「そうですか……」と呟いた。もし、ここで翔一がはやての名前を出していれば、展開はまた違っただろう。だが、彼ははやてが管理局に入った事を知らない。故に、有名人となっていたはやて達の名前を出す事はなかったのだ。

一方、ティーダは落ち込む翔一を見て、事情を尋ねた。それに翔一はこう答えたのだ。自分はある人にこのバイクと伝言を伝えなけ

ればならないと。その人がどこにいるかは分からないが、必ず捜し出してみせるのだと、そう告げたのだ。

それを聞いて、ティーダは自分が力になると言った。助けてもらった礼もあるし、何よりも翔一には当てがないだろう。自分ならば、局の情報や伝手を使って色々と分かるだろうからと言って、翔一を見つめた。

それに翔一は嬉しそうに笑みを見せるが、本当にいいのかと尋ねた。それにティーダが悪戯めいた笑みを浮かべ、寝床などはどうするんだと返すと、翔一は答えに詰まった。

通貨も文字も違う場所での生活は色々大変だぞとティーダに言われると、翔一は困り顔をし、ティーダを見つめた。それにティーダは笑みを見せて遠慮するなと告げたのだ。命の恩人を放っておけないから。そう言って。

「……分かりました。それじゃ、お世話になります」

「ああ。でも、俺は仕事上家を空ける事が多いんだ」

「そうなんですか。じゃ、俺は留守番してれば？」

「いや、妹がいるんだ。ティアナって言うんだけどな」

ティーダの話を聞き、翔一は相槌を打ちながら考えた。記憶を失ってから今まで、世話になる所には、必ず年下の女の子がいるなぁと。そんな事を思いながら、翔一はビートチェイサーを押しながら歩き出す。

ティーダの後をついていき、翔一はその少女――ティアナの事を考える。思い出すのは、ティアナと歳の近かった真魚の事。

（上手くやっていけるかなぁ？　真魚ちゃんとも色々あったし、女の子って難しいからな……）

こうして、翔一はミッドチルダに滞在する事となる。そして、彼の存在が本来あるべき未来を変える。寂しがりやで劣等感を持つはずだった少女。その心を大きく変える存在へと。それもまた、人知れず人を助ける事……

ゼスト隊との交渉から一年以上が経過し、真司は相変わらずの生活を送っていた。訓練や家事をし、妹分のセイン達と遊んだり、ウーノ達とは生活環境向上などを話し合ったりと忙しい。

そんな真司だったが、このところ変な事が起きるようになったのだ。それは、極稀に見る夢。そこでは、彼は同じミラーモンスターの大群と戦っていて、それをサバイブで片付けるのだが、元の世界に戻った後、何故か力尽きて倒れるのだ。

車にもたれかかるように眠る自分。それに必死の形相で声を掛ける蓮。そんな光景を見るのだ。そして必ず最後に、連が何かを決意したようにそこから去って行くところで目が覚める。

「……また、か」

今日もその夢を見た真司は、全身から汗を掻いて目を覚ました。じっとりとした何とも言えない不快感に顔を歪め、真司は着ていたシャツを脱ぐ。その汗に濡れたシャツを床に置き、真司は代わりのシャツを着て立ち上がる。

そして、部屋を出て洗面所で顔を洗う。水の冷たさが心地良く感じ、真司は顔を拭いて鏡を見る。

「うしっ！」

気合を入れ直す真司。鏡に映るのは、いつもの自分の顔。”ここに来た頃と変わらぬ顔”がそこにはあった。真司はそれに疑問さえ抱かず、普段通り動き出す。

「今日は朝食どうするかなぁ。昨日はチンクちゃんのリクエストだったし、今日はクアットロにでも聞いてみるか」

そう言ってキッチンへ向かう真司。こうして今日も一日が始まる。彼の望んだ、平和で穏やかな日々が……

「チンクちゃん、それ取って」

「これだな？」

「セイン、そっちはもういいぞ」

「は～い」

「ディエチ、これ並べてくれるか？」

「分かった」

賑やかなキッチン。エプロンを着けた真司を司令塔に、チンク、セイン、ディエチが助手として動いている。元々キッチンはそこまで広くなかったため、現在は多少手狭になってきていた。そのため、中々作業が辛い。と言っても、三人は自分から率先してやっている

ので、不満はない。
真司は、この状況と今後の人数が増える事を考え、キッチンの厨房化を頼んでいたりする。これはジェイルも納得し、現在真司がウーノと相談し、調理器具の置き場所からコンロの位置まで、入念に話し合っている。

そんなキッチンの声を聞きながら、トーレはセッテと将棋を指していた。元々はチェスしかなかったのだが、地球へ例の調査をしに行ったクアットロが土産として買ってきたのだ。
後は、真司が頼んだ煎餅などのお菓子類だったのだが、それは開封僅か十数分で全員の胃の中へ消えた。以来、その味を気に入ったのか、ラボには煎餅やあられなどが常備される事となった。

「……王手」

「むっ……」

セッテの角がトーレの王将を捉えた。王手銀取り。中々の手だ。それを見てトーレに焦りの色が浮かぶ。対するセッテはどこか嬉しそう。そんな二人を眺め、口元に微笑みを浮かべるクアットロ。だがその手は、止まる事無く動いている。
彼女がしているのは、残りの姉妹の調整ではない。厳密にはそれに当たるのだろうが、彼女の中ではその感覚は薄いのだ。クアットロがしているのは、チンクやトーレの武装改良案。トーレはブレードの材質強化を完了し、もうする事はないと本人は思っているのだろうが、クアットロから見ればまだ改良するべき点はある。

（トーレ姉様もチンクちゃんも前線に立つだろうし、出来るだけの事はしたいものね）

そして、チンクはそのコート。高い防御力を持ったそれは『シェルコート』と呼ばれているのだが、クアットロはその強化を考えていた。龍騎のデータを解析し、ジェイルはその一部を実用化した。武器の強度を近付け、今はボディースーツの改良に取り掛かっている。龍騎と同じとまではいかないが、それに近付けるようにとしているのだ。

「おはよう、みんな」

「おはよう」

クアットロがそう考え、視線を画面へ戻そうとした時、食堂にジェイルとウーノが現れた。それを見て、そこにいた三人が時間を確認し、同じ事を思った。もうそんな時間か、と。

ジェイル達はこのところ決まって同じ時間に現れるようになっていた。それを合図に真司達が料理を並べ始めるぐらいに。今もフレンチトーストを並べていたディエチが、二人に挨拶を返し、やや急いでキッチンへ戻って行った。

「おはようございます、ドクター」

「おはようございます、ウーノ姉上」

「おはようございま～す」

それぞれ挨拶を返し、二人が席についたところで真司達が料理を持って現れる。今日はクアットロの注文で、どこか優雅さを感じるものになった。まぁ、真司がそれにどこまで応えられるかをクアットロは楽しみにしていたのだが、出てきた料理に真司らしいと全員が頷いた。

まずトマトサラダ。ほうれん草とベーコンを混ぜて炒め、その上に目玉焼きを乗せたポパイエッグ。そして、人参と玉葱、キャベツを入れた野菜スープ。とどめにハムステーキである。それにフレンチトーストとミルクという洋食式だ。

並べ終えた真司達も席についたところで、真司がいつも通り手を合わせて――。

「いただきます」

「「「「「「「「「「いただきます」」」」」」」」」」

と告げる。それに残り八人も続いて食べ始める。やや甘味を抑え目にしたフレンチトーストの味に、チンクは満足そうに頷いて、セインがスープの美味しさに顔をほころばせれば、同じようにウーノもその味に笑みを浮かべる。

セッテとトーレがポパイエッグの卵を最初から崩すか崩さないかで少し揉める横で、クアットロはサラダをディエチに取り分けてもらって礼を述べれば、ジェイルは真司の方がハムが大きいと文句を言って真司が反論する。

そんな賑やかで和やかな時間。そして、食事時の定番といえば雑談。最近の話題は、もっぱらキッチンを含めたラボ全体の改造案。真司が要望したのは、実はキッチンだけではない。

そう、風呂もそこには含まれていたのだ。ジェイルはそもそも自分以外の男性がここに来る事を想定していなかった。そのため、風呂に関してはあまり考えていなかったのだが、真司としては現在のままでは気兼ねなく風呂に入れないと文句を言っていたのだ。

その背後には、未だにふざけて入浴しようとするセインの存在があった。しかし、真司はそれを誰にも言っていない。それは、セイ

ンがいつも真司に懇願するからだ。姉達に知られたら自分だけでなく真司も怒られるし、何より自分は真司の背中を流したいだけなのだと。

それ故に真司はセインの事を黙っていた。まぁ、さすがに真司が一度本気で「女の子なんだから、もっと自分の体を大切にしろ！」と怒った後は、水着を着てくるようにはなったが。

「で、どうなんですぅ？　シンちゃん用のお風呂」

「それなんだけど……本当にあれでいいのかい？」

「いいの。俺が一人で手足伸ばして入れるぐらいで」

そう、ジェイルは何度も真司に確認しているのだ。その広さが真司とジェイルが入るだけで一杯一杯なので、もっと広くしたらと何度も言っているのだが、何故か真司は首を縦に振らない。その理由は言うまでもないだろう。

セインの乱入をさせないためである。しかし、真司は肝心な事に気付いていないのだ。例え浴槽が狭くても、セインには関係ない。そう、むしろ好都合でさえあるのだ。遠慮なく密着出来るのだから。

（まぁ……さすがにあたしでもそこまで出来ないけど、ね）

セインはジェイルと真司の話を聞く度、そう考えていた。兄と呼んでいる真司だが、この頃からセインは、どこかで別の呼び方にしたいと思い始めていた。そう、兄ではなく男。

自分の愛する男性。そう呼びたいと。そう意識しだしたのは、やはりあの競争での一言。どうやっても普通の人間じゃ勝てないにも関わらず、真司は次は勝ってみせると言った。あの瞬間、セインは

真司の考え方を再確認し、そして思ったのだ。

（あたし達を”普通の女性”として見てくれるのは、真司兄しかいない……）

そう考え出したら、後はもう坂道を転がるようにセインは急速に真司を意識していった。例の風呂の一件も、真司が怒ったからだけではなく、セイン自身も恥じらいが芽生えたため、水着を着ただけ。そう、真司の一言はセインの女性としての自覚を促したのだ。もし、真司がセインをちゃんと女性として普段から見ているのなら、彼女が二人っきりでいる時、少し頬を赤くしているのが分かったはずだ。

「あ、そういえばノーヴェって、起きるのいつ頃になりそうなんだ？」

セインが気が付けば、話題は妹達の事になっていた。真司の言葉に声を掛けられたクアットロが少し考え、その口に入れていたハムを咀嚼してから答えた。

「……まぁ、来年にはならないわ」

「そっか。つまり今年中か」

「そうよ～。あ、でももぉ、もしかすると少し遅れるかもしれないから、確定って訳じゃないわよ？」

嬉しそうに頷く真司へ、念のために釘を刺すクアットロ。だが、それを聞いて真司以外がどこか笑みを浮かべる。そう、知っているのだ。クアットロが真司を誤魔化し、驚かそうとしている事は。

だが、真司はそれに少しだけ残念に思いながらも、クアットロへ信じてるからなと告げた。その言葉に少し嬉しそうにするクアットロ。それを見たジェイルが何か思い出したように呟いた。

「……ドゥーエ、呼び戻した方がいいかね？」

「くしゅんっ！」

クラナガンにある地上本部の廊下。そこで一人の女性がくしゃみをした。幸い、その姿を誰も見ていなかったが、彼女は周囲を見回し、安堵の息を吐く。彼女は、ナンバー2ことドゥーエ。ＩＳで姿を変え、ここに潜伏中なのだ。

一応、レジアス中将の秘書として働いている彼女は、知的なクールビューティーとして通っている。そのため、先程の姿を見られたのではないかと思ったのだ。

「……ドクターかウーノ辺りでも噂したのかしら……？」

小さく首を傾げ、彼女は歩き出す。彼女は知らない。自分がいなくなった後、ラボがどんどん明るく賑やかで、そして暖かい雰囲気になっている事を。彼女がそれを知り、少し不貞腐れるのはこれから大分先の話である……

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――

真司は今回である程度予想出来るでしょうか？　でも、これが実際あった事なのかはまだ……

翔一はニアミス。まだ彼だけは再会できず。一方五代はあの二人と再会です。光太郎は、少しシリアスかもしれないです。

翔一のチェイサー関連の描写は、次回以降にでも……あくまで予定です。

空白期5

久しぶりに踏む海鳴の地。とは言っても、五代にとってはつい二日前ぐらいの感覚なのだが。転送ポートとして使っている月村家の庭。そこに降り立った五代と光太郎は、とりあえず歩き出した。五代に説明をされながら、光太郎は広い庭を持つ月村家にやや圧倒されていた。

そして、しばらく歩いた先に一人の少女がいた。紫色の綺麗な髪。それを見て、最初五代は忍かと思った。だが、背丈が若干違う事に気付き、思い出す。自分は五年以上後の時代に来てしまったのだと。つまり、目の前の女性は――――。

「すずかちゃんっ！」

その声に女性は一瞬震え、ゆっくりと五代の方へ振り向いた。そこには、何ら変わらない笑顔の五代がいた。

それを見つめるのは、もう子供らしさを少ししか感じさせないすずか。光太郎は、すずかの表情と瞳から事情を察し、五代から少し距離を取る。

「……五代さんっ！！」

走った。叫ぶように名前を呼んで。すずかはその勢いをつけたまま五代へ抱きついた。それを受け止めるも、勢いを殺しきれずに五代はそのまま後ろへと倒れる。

だが、すずかはそれに構わず五代に抱きついて泣いていた。そのすずかのすすり泣く声に気付き、五代は優しくすずかの頭を撫でた。

「えっと、ごめんね。帰るの、遅くなって」

「……いいんです。こうして……帰ってきてくれたから！」

五代の声に顔を上げ、すずかは笑顔でそう言い切った。その目からは、涙が流れている。それを見た五代は、慌ててハンカチを取り出し、それを拭く。そんな光景を見ながら、光太郎も微笑みを浮かべる。

そうしてしばらく、三人は時を過ごすのだった……

「そうなんだ。忍さん、結婚してドイツに……」

「うん。相手はなのはちゃんのお兄さんの恭也さん」

「ノエルさんは二人と？」

「そう。あ、後で電話して。お姉ちゃんもノエルもきっと喜ぶから」

庭から歩きながら話す二人。光太郎はそんな二人の後ろを歩きながら、庭を見渡していた。だが、その目はどこか鋭い。

（……トラップが仕掛けられている。それだけじゃない。監視カメラや赤外線センサーまで……）

月村家の庭中に設置された仕掛けに気付いた光太郎だったが、どうしてそんな物を仕掛ける必要があるのかが、理解出来ないでいた。確かに、月村家は裕福なのだろう。だが、これは警備と呼ぶには行き過ぎていると光太郎は思った。

中には、相手を殺しかねないぐらいの物もある。まだ光太郎は知

らない。月村家は吸血一族で、その命や技術を狙ってくる者がいる事を。

光太郎がそうやってトラップに意識を向けていると、すずかが五代に問いかけた。

「それで、あの人は？」

「南光太郎さんって言って、俺と同じ仮面ライダーの先輩なんだ」

「仮面ライダー？」

五代の言った聞きなれない言葉に、すずかは小さく首を傾げる。それに五代がクウガと同じような存在と説明すると、すずかは驚いたが、納得はしたようで、意を決したように光太郎の方を向き直って声を掛けた。

それに光太郎もすずかの方を向き、何か用ですかと笑みを見せた。すずかはそれにどこか言いにくそうではあったが、はっきり告げた。

「実は、私、吸血鬼みたいな存在なんです」

「……そうなんだ。じゃ、ここのトラップはそれに関連して？」

「……分かるんですか？」

光太郎の言葉に感心したように声を上げるすずか。五代もびっくりしている。何せ、五代も忍やノエルから聞いて初めてその存在を知ったのだから。そんな二人の反応に、光太郎は少し悲しそうな声で「うん」と言うと、手を叩いて明るく告げた。

すずかが少し人と違うのは分かった。でも、自分は気にしない。

すずかはすずかだから。そう光太郎は言い切った。それが五代やなのは達と同じ言葉だったものだから、すずかは嬉しくて涙を流して頷いた。

その笑顔は、まるで絵画のような美しさがあった……

屋敷へ案内され、五代はまた再会を果たしていた。相手の名はフアリン。月村家で、イレインと共に五代を慕っていた女性である。

「ホント～に、心配したんですからっ！」

「ごめんね。俺もすぐ帰ってくるつもりだったんだけど……」

まるで妹と兄のように見え、光太郎は笑みを浮かべる。その隣ですずかも同じように笑みを浮かべるが、ふと光太郎へ視線を向けた。光太郎は、笑みを浮かべてはいる。だが、その笑みに影があるのをすずかは感じ取った。

何かを思い出し、その辛さを堪えているかのような目。そんな風に光太郎の目が見えたのだ。

（杏子ちゃんも、あんな感じだったな。俺達がラグビーで怪我したりすると、よく怒られたっけ……）

思い出すのは、幼馴染の男とその妹。その二人は、今はもう自分の傍にはいない。五代に詰め寄り、文句を言いながらも嬉しそうなファリンに、光太郎は過ぎし日の思い出を重ねていたのだ。

その哀しげな瞳に、すずかは言葉を失う。五代とは違う哀しみ。それを光太郎は持っている。そんな風に見えたのだ。その哀しげで

どこか懐かしそうな横顔。それに、すずかは見入る。
先程聞いた話では、光太郎も五代と同じような力を持っているらしい。つまり、変身するという事。それは、人に言えない秘密を抱え、孤独と戦ってきたという証。すずかは、そう考えて静かに光太郎の傍へ行き、その手を握る。
それに気付いた光太郎に、すずかは小さく、だがはっきりと告げた。
――貴方は、一人ぼっちじゃないです。
その言葉に光太郎は黙った。それにすずかは続けて言った。どこかで貴方を待っている人がいます。私にもいたんですから、とそう言って。
それに光太郎は心から笑顔を見せ、その手を握り返す。その暖かさに感謝して。その優しさに感謝して。ここは自分が守った世界ではない。でも、きっと自分が守った世界にも、すずかのような心の持ち主が沢山いる。
そう思い、光太郎は誓う。決して哀しまないと。どこかで、自分を愛し、信じてくれる者がいる。求めている者がいる。なら、それに応えて戦い続けようと。仮面ライダーは、その気持ちで今日まで世界を守り続けてきたのだから。
そう、固く信じて。すずかの手の温もり。これを自分達は守るのだと、光太郎は思った。その時、誰かが玄関を開けて帰ってきた。大きな音がし、何者かがこちらに向かって歩いてくる。
「イレインが帰ってきたんだ」
「イレイン？」

すずかの言葉に光太郎は聞き返す。それを説明しようとした時、リビングのドアが開いた。そこには、買い物袋を両手に提げたメイド姿の女性がいた。

「今帰った……」

「イレイン、ごめん！　遅くなったけど、もうストンプ見せられるからっ！」

五代の姿を確認し、硬直するイレイン。そんな彼女に、五代は手を合わせて申し訳なさそうに言葉を掛ける。最後には笑顔でサムズアップを忘れずに。それにイレインは呆然としながら小刻みに震え出す。

そんなイレインに気付き、五代は不思議そうな顔をした瞬間――。

「っ！！」

「おわっ！」

イレインが荷物を放して五代に抱きついた。それに感嘆の声を上げるファリン。光太郎とすずかは揃って驚き、苦笑する。イレインは泣きながら、ただ力無く五代を叩いている。そして五代は、そんなイレインに笑顔を浮かべ、静かにただいまと言った。

それにイレインもおかえりと返すも、涙混じりの声で遅いんだよと付け加えるのを忘れなかった。

そんな光景が、たっぷり三分。そして、立ち直ったイレインが照れ隠しに五代を（割と）本気で殴り飛ばして、三人が慌てる事で五

代の再会は終わりを向かえるのだった……

月村家　すずかの部屋。時刻は午後十時を過ぎ、空には月が昇っている。あの後、五代は全員の前でストンプを披露。その見事さに全員が拍手をし、五代は嬉しそうにそれに応えていた。そんな光景を思い出しながら月を見上げ、すずかは視線を月から目の前の相手へと向けた。そこにいるのは、真剣な表情の光太郎。

ファリンやイレインの力などを知った光太郎は、夕食が終わった後、すずかに尋ねたのだ。二人も同族なのかと。それにすずかは違うと返し、自動人形の説明をした。すると、それを聞いた光太郎は表情を険しくし、すずかに話があると言った。

そのため、今の状況になっているのだ。その眼光は鋭く、一切の虚偽を許さないと告げているようだ。

「……それで、話って何ですか？」

「自動人形と言ったけど、彼女達は改造されてああなったのかな」

「改造？　いえ、ファリン達は元々そういう風に作られたって聞きました」

すずかは以前姉の忍から聞いた自動人形の話をしていく。彼女達は、機械ではない。生物と呼んでいい存在で、ちゃんと生きている。心もあるし、感情だって見せる。人間を改造してなんかいないと。

光太郎はそれを聞いて、意を決して尋ねた。誰かがその技術を使って悪用したりしていないか。もしくは、ミッドチルダにその技術を教えていないかと。

「……どういう事ですか？」

「……いたんだ。ファリンちゃん達のような体の少女が」

「ミッドに、ですか？」

すずかの問いに、光太郎は無言で頷く。その顔は嘘を吐いているものではなかった。それを知り、すずかは愕然となった。夜の一族しか知らないはずの自動人形。その技術を応用したのか、それともたまたまなのか知らないが、それを使った者がいる。

これを姉が知れば、烈火の如く怒るだろう。それと同時に、きっとこう聞くはずだ。その子達は平和に暮らしているのかと。

（ノエルを連れて行ったのだって、ノエルが希望したからだったし……）

本来なら、忍はノエルを残していくつもりだった。だが、ノエルが忍と共にいたいと言ったので、忍は仕方なくノエルを連れていったのだ。その表情は、とても嬉しそうだったが。

すずかがそんな事を思い出していると、光太郎は自動人形の事を詳しく教えて欲しいと告げた。それにすずかは自分が分かる範囲で、と前置いて話し出した。

元々は夜の一族が長命で、孤独なのを嫌がって作られた存在。しかし、時が進むにつれ、夜の一族を狙う相手が頻繁に現れ、それに対する対抗手段になってしまい、気が付けば、後期型は呼び名も変化してしまったらしい。

その名も……

「戦闘機人、と呼ばれたそうです」

「……そうか」

光太郎はその話を聞いて、複雑な想いを抱いていた。自分の周囲に誰もいなくなる。そんな孤独を避けるために作り出された存在。それは、きっと話し相手が欲しかったんだろう。一人ではない。その証明が欲しかった。そのために、自分勝手ではあるが、命を作り出した。

だが、時代と共にそれが変わり、ただの護衛や戦いの道具のように扱われる事になってしまった。家族として望まれた者達を、自分達の都合で戦闘機械へ変えてしまう。

（どこでも……同じなのか……）

そう考え、光太郎は首を振る。違う。そうじゃないと。すずか達のように同じ人間として考え、家族として愛している者達もいる。人は愚かで、醜いのかもしれない。だからこそ、賢く、美しくなろうとするのかもしれない。

そう思い直し、光太郎はすずかを見る。すずかはどこか不安そうな眼差しをしていたが、光太郎が笑みを見せると、その顔に明るさが戻った。

「ファリンちゃん達が、どういう存在かは分かった。でも、すずかちゃんみたいな子なら心配ないね」

「はい。ファリンもイレインも大切な家族です」

「うん。俺は、もう一度ミッドに行って、その子達を捜してみるよ。もしかしたら、すずかちゃんの親戚がいるのかもしれない」

「そうですね。でも、光太郎さん」

「何？」

話が終わったと思って立ち去ろうとする光太郎だったが、それをすずかが引き止めた。不思議そうに振り向く光太郎へ、すずかはこう言った。もし、親戚だったとしても、何も言わないでください。幸せに暮らしているなら、そのままそっとしておいて欲しいんです。

そうすずかは告げた。それに光太郎も笑顔で頷き、約束すると答えた。そして、そのまま光太郎は部屋を後にし、割り当てられた部屋へと歩いて行った。

その遠ざかる足音を聞き、すずかは思う。光太郎が言った言葉。人間を改造してというのは、もしかしたら光太郎の世界で見た事なのかもしれない、と。だからあんなにも怖い顔をしていたんだろう。そう感じたのだ。

すずかは知らない。それは、光太郎自身の事を指している事を。だが、すずかはどこかで察していた。光太郎の哀しみ。それは、その事が大きく関わっているのだろうと。

翌日、光太郎は単身ミッドへ向かう。すずかが連絡し、来てくれたフェイトと共に。五代へは、すずか達と色々と話をした方がいいと告げて。

そして、光太郎は出会うのだ。あの姉妹と。そして、その体の秘密を知りながらも、我が子として愛情を注ぐ夫婦に……

ミッドチルダにある、そう大きくはない一軒家。そこの小さな庭で、バイクを磨いている男が一人。翔一だ。彼は、ビートチェイサーを丁寧に磨き上げて、その出来映えを眺めて頷いた。

「よし」

だが、その視線がハンドルへと移動すると、その表情が少し変わる。

「……あの時は気にしなかったけど、これガードチェイサーと一緒だよな……」

そう、かつて自分が乗ったG3－Xのバイク。それとビートチェイサーには共通点が多いのだ。名前やハンドル、更には警察が開発した物だという事まで。

そして、そこまで考えて翔一は思い出す。G3はそもそも第四号、つまりクウガをモチーフにして作られたと聞いた事があったのだ。そう考えると、翔一の中にはある仮説が浮かび上がった。

（榎田さんがクウガを研究してて、小沢さんはそのデータを使ってG3を作ったのかも。だからバイクの名前もチェイサーなのかな）

本当は違うのだが、生憎翔一はそれを知らない。G3を始めとする一連の開発は、全て小沢だけの発案。榎田は一切関わっていないのだ。考えれば分かるはずだ。榎田はクウガの協力者。つまり、五代がどんな気持ちで戦っていたかを知る人物だ。それが、いくら防衛のためとはいえ、恐ろしい力を生み出す事に賛成するだろうか。神経断裂弾さえ、どこか嫌がっていたというのに。

翔一がビートチェイサーを前に色々考えていると、後ろから何者かが静かに近付いてくる。そして、考え込んでいる翔一へ声を掛けた。

「何してるの、翔一さん」

「あ、ティアナちゃん。……洗濯物は？」

「もう干し終わったけど？」

ティアナはそう言って空になった洗濯籠を見せる。それに翔一も頷いて、動き出す。最初、翔一を見た時ティアナはどこか不思議な感じを受けたのだ。優しそうな雰囲気と何故か心穏やかになる空気。

そして、ティアナがたった一日でここまで翔一を受け入れたのは、やはりティーダの命の恩人だからだろう。聞けば、翔一がいなければ確実に死んでいたそうだ。それを聞いた瞬間、ティアナの中で翔一は兄に次ぐ重要人物になったのは言うまでもない。

ティーダは今日も仕事で家にはいない。ティアナは翔一と留守番なのだが、今までと違い誰かいるというのは、ティアナにとっては大きな変化だった。まず、家事。翔一は家事を率先してやってくれるのだ。ティアナも出来ない訳ではないが、翔一の方が手馴れているので、内心少しショックを受けた。

料理もそう。ティーダも言っていたのだが、まるでお店の味なのだ。翔一はそれを聞いて、レストランで働いていたと答え、二人は納得した。

「ね、翔一さん」

「ん？　どうしたの」

「アタシ、将来なりたいものが決まったって言ったよね」

「えっと、執務官補だよね？」

翔一の言葉にティアナは頷く。兄を支える仕事がしたい。そうティアナは言った。それは、昨夜の夕食後の事。翔一の料理に大満足し、ティーダが汗を流しにいった時、ティアナは翔一に言ったのだ。

――今日みたいな事がないように、アタシがお兄ちゃんを支えたい。

そう、ティーダは特定の執務官補がいない。それは、ティーダ自身のこだわり。事件毎に適したパートナーを選びたい。それは、暗に自分と合う相手がいないと言っているのだ。

それを知るからこそ、ティアナは執務官補になり、ティーダを支えたいと思ったのだ。

「来年には、アタシ陸士の訓練校へ行こうと思ってるんだ」

「そうなんだ」

「でね、そうなったら翔一さん一人になっちゃうんだけど」

「どうして？」

翔一の質問にティアナは答えた。全寮制なのだ、と。訓練校は完全寮生活になり、訓練生は、休みにでもならない限り家には帰れないのだと。だから、来年には翔一一人を残す事になってしまう。

そうティアナはどこか申し訳なさそうに告げた。自分もこの数年

寂しいと感じる事が多かった。でも、翔一は自分以上のはず。そうティアナは思った。翔一は次元漂流者に近いらしく、知り合いがミッドにはいない。

管理外にはいるらしいのだが、簡単にそこへ送ってやれる程、ティーダも暇がない。それに、翔一は人を捜しているらしく、そのための情報をティーダが得るため、管理外にはいけないのだ。

「……そっか。でも、学校は？」

「勉強もいいけど、やっぱりアタシは……お兄ちゃんの手助けがしたい」

「……うん。なら、ティアナちゃんの好きなようにすればいいよ。俺、応援するから！」

ティアナの強い眼差しを見て、納得した翔一。浮かべる笑顔とサムズアップ。それにティアナも笑みを返すが、その仕草に引っかかるものを感じ、問いかける。昨日からそれを良くやるけど、一体何の意味があるのかと。

それに翔一は五代から聞いた事を教える。その意味を聞いて感心するティアナ。そして、笑みを浮かべて言ったのだ。翔一さんには、似合ってるかも、と。それに翔一が嬉しそうに笑い、ティアナも似合うようになれると告げた。

「そういえば、翔一さんが捜してる人って何て名前？」

「えっと、五代雄介さん。あ、それかクウガ」

「クウガ？　あだ名か何か？」

「う～ん……そんな感じかな」

翔一の答えに何か妙なものを感じるティアナだったが、とりあえずその名を覚えておく事にした。自分も出来る限りで翔一の手助けをしたいと思ったから。兄を助けてくれた相手。その恩に応えるために。

ティアナは、こうして翔一と日々を過ごす。その彼が世話になってきた人達の話を聞き、ティアナは思うのだ。本当の強さとは、誰かの笑顔のためにと思い、行動する事。それを翔一は五代から教えてもらったのだ。

その事も含めて翔一はティアナへ告げる。ティーダを支えたいと思った優しさを忘れないようにと。そう翔一が言うと、ティアナは笑みを浮かべて、力強く頷いた。

この後、ティアナは宣言通りに陸士の訓練校へ入校する。そこで出会うルームメイトの少女。その少女との日々さえ、本来と違う形に変わる。

そして、そこで彼女は知る。その少女を助けた存在。それこそが翔一が捜している相手なのだと……

ジェイルラボ　訓練場。そこに四人の少女がいた。その視線は全て目の前の存在へと注がれている。その相手は、先程四人を見せられ大声を出し、今もどこか落ち着かない様子だった。

そう、彼は……

「えっと、俺は城戸真司。よろしく」

「僕はナンバー8、オットーです。ＩＳはレイストーム。簡単に言えば光線による多連装攻撃です。よろしくお願いします、真司兄様」

「アタシはナンバー9、ノーヴェ。ＩＳ、ブレイクライナー。簡単にいやぁ……空中に道が作れるって事。よろしく、兄貴」

「アタシはナンバー11、ウェンディッス。ＩＳはエリアルレイブって言って、この板を浮かす事ッスかね。よろしくお願いするッス、にぃにぃ」

「私はナンバー12、ディードです。ＩＳはツインブレイズと言いまして、双剣使いです。よろしくお願いします、真司お兄様」

四人は後発組であり、最後のナンバーズである。真司はもう慣れたのか、呼び方への反応はしなかった。ただ、感覚的にウェンディはセインと似た匂いがすると思い、警戒していたが。

ちなみに、各員の表情は、以下の通り。オットーは穏やかな笑み。ノーヴェはぶっきらぼうではあるが、どこか嬉しそう。ウェンディは楽しそうに笑い、ディードは柔らかな笑顔。

そして、全員の自己紹介が終わったところで、ジェイルが手を叩いた。それに真司がやや身構える。これまでの経験上、この後の展開が分かっているからだ。そんな真司に目もくれず、ジェイルは四人へ告げた。

それは、これからトーレ、チンク、セッテの三人を相手に模擬戦をしてもらうというもの。それに頷く四人と肩透かしを喰らい、蹴躓く真司。そんな光景を見て、笑みを浮かべるセインとディエチ。

トーレ達三人は、既に戦闘態勢。クアットロとウーノは訓練場の再点検。

「じゃ、準備をしてくれるかい」

「「「「了解（ッス）」」」」

それぞれ配置につく四人。対するトーレ達は適度に力を抜いているようで、少し緊張気味の四人を見て笑みさえ浮かべている。無理も無い。四人は、データ共有があるとはいえ、まだ目覚めたばかり。対してトーレ達は何度も実戦を経験した者達なのだから。

そう、ドラグレッダーの餌を得るためだ。龍騎は最初の戦い以降、トーレやチンクに言われ、余程でない限り手を出さないように言われたのだ。そのため、トーレやチンクは原生生物相手ではあるが、実戦を経験している。

セッテもセインやディエチなどと共に餌取りに参加し、命がけの戦いを経験している。ま、彼女達は揃って一度龍騎の助けを受けているのだが。

そして始まる模擬戦。それを眺め、真司は唸る。トーレ達に翻弄されながらも、それでも何とか喰らいつこうとする四人に。どうやらそれは、セインも同じようで、拳を握り声を出している。ディエチも四人へ声援を送っている。

心情的には、やはり姉よりも妹側だからだろう。すると、二人の声援が始まってから四人の動きが良くなった。それにトーレ達も気付き、少しだが動揺した。

その僅かな隙を四人は見逃さない。即興で見事な連携を組み上げたのだ。

「ディード！」

「ええ！」

「しまったっ！」

オットーのレイストームがトーレの退路を絶ち、すかさずディードが攻め込めば……

「セッテ姉ぇ！」

「なっ……馬鹿な！？」

トーレを援護しようとしたブレードを、エアライナーで弾き飛ばすようにしながら、ノーヴェがセッテへ強襲し……

「させないッス！！」

「ちぃ！」

ライディングボードをウィリーさせ、チンクへ向かっていくウェンディ。その狙いは、チンクの二人への支援妨害。

そんな光景を見て、クアットロとウーノは軽い驚きを覚えた。三人の中で要になっているトーレ。それを確実に潰すべく、二人で事に当たらせる決断。そして、それをより確実にするため、セッテとチンクの足止めをしに行く行動。

それらを、四人は一瞬で実行に移したのだ。そして、それを見て感心するジェイル。真司はもうどちらでもなく声を出して応援している。

結局、四人は敗北した。トーレを追い詰めたのは良かったのだが、ディードだけでは足りず、オットーも援護したのだが、高速機動に持ち込まれては二人でも分が悪かった。更に、オットーという司令塔兼砲撃手がいなくなった事で、拮抗していたノーヴェやウェンディも押し返され、本気になった三人の前に敗北を喫したのだ。

「良く頑張ったよ、四人共さ。俺、途中からトーレ達負けるんじゃないかって思ったし」

どこか落ち込む四人に、真司はそう声を掛ける。そう、本当に真司は心から思ったのだ。四人が勝つんじゃないかと。大健闘。その言葉に相応しい程のいい勝負だった。だから、真司はオットーの頭を優しく撫でた。次にノーヴェ、ウェンディ、ディードと良く頑張ったと想いを込めて撫でていく。

それにどこかくすぐったそうにしながら、四人は笑みを見せる。それに真司は頷いて、今日の夕食は久しぶりにアレを作ると宣言した。それに首を傾げる四人だったが、ジェイル達は上機嫌で笑みを見せた。

そう、真司が言ったアレとは餃子。実は、真司はナンバーズが目覚める度に、餃子を振舞っていたのだ。真司が特別な料理と言っていて、滅多に作らないのだ。なので、久々の餃子にジェイル達は喜びを隠せないのだ。

「じゃ、セインとディエチは餡を作る手伝いをしてくれ。クアットロとウーノさんは皮で包むのをやってもらうから」

そう言って真司は歩き出す。ジェイルは呆気に取られている四人に、頑張ったね、汗を流しておいでと告げてその後を追う。トーレ

達三人がそれに続くように歩き出し、四人にこの調子でなと声を掛けて去って行く。
ウーノとクアットロも四人に良く頑張ったと誉めて歩いて行く。
最後に、セインとディエチが悔しいだろうけど、次勝てるように頑張ろうと励まし、その手を掴んで立ち上がらせる。

「ま、まずお風呂に行って汗とか流してきな」

「トーレ姉達も待ってるだろうし、早めにね」

「……セイン姉様、ディエチ姉様」

オットーがそう言うと、ディエチはやや照れくさそうにしながら、言った。自分は確かに稼動時間で言ったら姉かもしれないが、呼び捨てでいいと。自分はただ、とある事情があって早く目覚めただけだから。
それに、とディエチは言ってこう告げた。

「あたしはみんなを名前で呼び捨てにするから。オットーやディードも呼び捨てでいいよ」

「あ～、あたしはお姉ちゃんって呼んで欲しいかな」

笑顔で告げるディエチと苦笑気味で告げるセイン。それに四人は顔を見合わせ、笑みを浮かべて頷いた。

「分かったよ、ディエチ。それとセイン姉様」

「これからよろしくな、ディエチ。それとセイン姉」

「よろしくッス、ディエチ。それとセイン姉」
「よろしくディエチ。それとセインお姉様」
「あたしはついでみたいに言うな～～っ！！」
そんな絶叫が訓練場に響き渡るのだった……

おまけ

「いい湯だ～」

真司は男湯でノンビリしていた。結局広さは希望通りではなく、大人五人ぐらいが入れるものになってしまったが、これぐらいならいいかと真司は納得した。ジェイルとも共に入り、ここで語り合った事も何度かあった。

「真司兄、いる～？」

「？　セインか。何だ～？」

突然外からセインの声が聞こえてきた。それにいつもの背中流しかと思いながら、用件を尋ねる真司。それにセインは背中を流しに来たと答え、真司は納得。少し待てと声を掛けた。
仕方ないなと思いつつ、湯船から出てタオルを前につけ直し、いいぞと言って呼び入れたのだが……

「お、お邪魔します、真司兄様……」

「あ、兄貴……背中、流すから」

「あっれ～、にぃにぃ、結構貧弱ッスね～」

「あの、お兄様……どうかされたんですか？」

入って来たのは、オットー達四人。セインはどこにもいない。しかも、四人はタオルで隠してはいるが、ノーヴェやディードなどはある意味隠れきってない。オットーは何とか。ウェンディは隠す気が無いのか、大胆にもタオルを頭に乗せている。

真司はそんな光景にふるふると震え、拳を握る。それに不思議そうな表情のディード。オットーやノーヴェもその声に気付き、真司を見つめる。ウェンディは何となく察しがついたのか、耳を塞いでいる。

「セイ～～ンっ！！」

「やっぱそうなるよね！」

真司の怒声を聞いて、セインは慌てて逃げ出した。それを追おうとする真司だったが、その腕をウェンディとノーヴェが掴む。

「まぁ、いいじゃないッスか」

「背中……流すから」

四人には、セインがこう言ったのだ。自分を含め、真司が来てから起動した者は、誠意を込めて背中を流すのが通例だと。無論、それは嘘なのだが、念のためにセッテに聞いたところ、確かにセッテ

も背中を流したらしい。
　よって、四人は大なり小なり恥ずかしがりながら、ここに来たのだ。まぁ、ウェンディ辺りは気付いているようにも見えるが。

「結局こうなるのか……」

　そう呟く真司。その背中をノーヴェが、両腕をオットーとディードが、ウェンディが頭を洗うという事態になったとさ。
　最早言うまでもなく、セインは姉妹全員からお仕置きを受ける。肉体的ではなく、精神的なものを。そう、一週間栄養食の刑。
　それは、目覚めてからずっと真司の食事を食べていたセインにとって、まさしく地獄だった……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

続き。四人の中で、唯一改造人間の悲哀を持つ光太郎。自動人形は、彼にとっては複雑な存在でしょう。

一方、翔一の癒しに擦れていないティアナも色々と感化され、原作通りの進路を決めます。

真司は、やっと全員お目覚め。今後は、人数多くて大変です。空白期も後少しかな?

空白期6

「ありがとう。後は自分で何とかするから」

「でも……」

「フェイトちゃんにも仕事があるんだろ？　俺の事は気にしなくていいから」

光太郎の言葉にフェイトは少し申し訳なさそうに頭を下げ、自分の電話番号を書いた紙を渡した。困ったり、何かあった時はここに連絡してほしいと告げて。それに光太郎は嬉しそうに頷いて、それを大事そうに懐にしまう。

そしてフェイトに別れを告げ、光太郎は一人ミッドの街へと歩いて行く。捜すのは、フェイトから教えてもらって住所。自分が助けた少女の事で確認したい事がある。そう言って調べてもらったのだ。

そしてそれは比較的簡単に分かった。少女達の親が管理局員で、しかもあの現場の指揮をしてくれた者の娘だったからだ。こうして、光太郎は一路ナカジマ家を目指すのだった。

（もし、本当に彼女達の両親がすずかちゃんと同じ一族なら、色々と話がし易いんだが）

光太郎はそう考えながらミッドを歩いていく。ミッド西部、エルセア。そこで待つのは、新たな出会いと戦いのキッカケ……

光太郎がミッドで動き出した頃、五代は翠屋で働いていた。そう、

以前から、彼はただ月村家で世話になるのが嫌で、こうしてたまに翠屋を手伝うバイトでもあったのだ。再会した士郎や桃子は、五代が以前とまったく変わらない事にさして驚きもせず、帰ってきた事をただ喜んでくれた。
それに五代も喜び、美由希にはファリン達をあまり泣かさないようにとからかわれ、五代はそれに苦笑した。

「士郎さん、五番さんにブルマンとキリマンを一つずつです」

「分かった」

「桃子さん、三番さんがショコラ追加です」

「は～い」

現在、忙しなく働く五代の姿が翠屋にあった。そんな忙しさの中でも、五代に浮かぶのは笑顔。だが、それもたまに何かを思い出すような表情に変わるのだが。

（おやっさんとか奈々ちゃんとか、今どうしてるんだろ？　元気…だよなぁ～）

オリエンタルな味と香りが自慢のポレポレ。そこのマスターで、飄々としている飾玉三郎の姿と、その姪の朝比奈奈々の二人の笑顔を思い出し、五代は一人納得しながら頷く。
そして、再び意識を仕事へ戻す。そこへ来店を告げるベルの音が聞こえ、五代は入口の方へ振り向いて大きな声で言った。

「いらっしゃいませ～！」

道行く人に尋ねながら、光太郎はやっとナカジマ家に到着した。一見すると日本家屋にも近い雰囲気がある建物で、何でもここの主人が管理外である地球出身の子孫らしく、この家もその先祖の故郷の住宅をイメージしているとか。

この辺じゃ有名だと道を聞いた婦人は笑って教えてくれたのだ。

光太郎は気を取り直し、呼び鈴を押す。歩いてみて気付いたのだが、ミッドもあまり地球と光景に大差がなかったのだ。技術面ではかなり先を歩いているようだが、生活面などは光太郎が知る範囲のものばかりだった。

その地球との違いや共通点などを感じながら歩いた事で、光太郎としては少しではあるが、ミッドに親しみを感じていた。

『はい？』

「あ、すみません。俺、南光太郎と言います」

聞こえてきた声は比較的若い女性の声。それに光太郎はギンガの姉辺りかもしれないと思い、思い切ってこう切り出した。

自動人形の事で話がある、と。それを聞いた瞬間、声の主が息を呑んだのが分かった。だが、光太郎はこう続けた。

「俺は敵じゃありません。ギンガちゃん達をどうこうしたい訳ではないです」

『……ギンガの名前まで知ってるのね。分かりました、どうぞ』

声の主は光太郎の言葉に感じるものがあったのか、そう言って切

った。光太郎は警戒心を与える事になっても、後悔はしていなかった。自動人形という言葉に反応したという事は、相手はやはり夜の一族である可能性が高いからだ。

それならば、きっと詳しい話が聞ける。すずか達ではどこか曖昧だった自動人形の成り立ち。その技術を使って何をしようとしているのか。それを確かめなければならない。

（……行くか）

「お邪魔します」

真剣な表情でナカジマ家の玄関のノブを掴む光太郎。だが、そこで一度深呼吸すると、比較的明るい声で中へ入る。そこには、ギンガと同じ色の髪をした女性が立っていた。その隣には、この家の主人と思わしき男性がいる。女性の名はクイント・ナカジマ。男性の名はゲンヤ・ナカジマ。

そんな二人の視線はどこか険しい。それを感じ取り、光太郎は小さく頭を下げる。それにゲンヤは光太郎に対する印象を少し変えたのか、やや表情を和らげる。

「……ま、上がってくれや」

「はい。お邪魔します」

「……どうぞ」

ゲンヤの言葉に光太郎が返事を返し、クイントがそんな光太郎をリビングへ案内する。そこには二人の少女がいた。その一人を見て、光太郎は表情を少しだけ綻ばせる。ギンガが妹であるスバルとお菓子を食べながら話していたからだ。

そんな光太郎の表情に気付き、夫婦は共に光太郎に対する認識をもう一度改める。そこで二人に光太郎は簡単に自己紹介をした。自分はゲンヤに世話になった者だと言って。それにゲンヤ達は頷いた。そして、クイントがスバル達にこれから大切な話をするから、そこで大人しく遊んでなさいと告げると、それに揃って返事を返し、二人は三人から離れていく、

そんな二人の素直さに笑みを見せる三人。そして、ゲンヤが光太郎へ声を掛け、テーブルに着く。

「……で、自動人形って言ったわね」

「はい。実は、俺の知り合いにいるんです。そう呼ばれる人が」

光太郎の発言に夫婦は揃って驚いた。それを見て、光太郎は月村家の事を話す。無論、吸血一族という辺りの話はせずに。彼らの先祖が自動人形を作り、その残りが今もその家で暮らしている。そこで、彼らは家族として、人として平和に過ごしているのだ。

そう言って光太郎は視線を少し鋭くし、二人を見つめる。それに微かだが二人に緊張が走る。光太郎は抑え目の声で尋ねた。あの子達の体が普通ではない事を知っているのか。そして、それを知っているとして貴方達はどう思っているのか。それを答えて欲しいと告げた。

その言葉を聞き、二人は光太郎がどんな思いでここに来たのかを悟った。彼はスバル達の事を心から心配しているのだ。ちゃんと人として扱ってもらっているのか。またそう思ってもらえているのか。

それは、光太郎がどうギンガ達の事を考えているのかが良く分かる言葉だった。故に二人はまず揃って謝った。気を悪くさせてすまなかったと。

ギンガ達を利用もしくは奪いに来た犯罪者の一人かと思った。そ

う二人は言った。それに光太郎は少し慌てた。二人はそんな彼に自分達が管理局員で、二人の親として暮らしている事を告げた。更にクイントもゲンヤも、二人を本当の娘だと思っていると断言したのだ。

「……つまり貴方達は、偶然ギンガちゃん達と知り合ったと」

「ええ。だからあの子達を作った存在は、未だにどこかに」

そして、話は出会いへと移り、クイントの告げた言葉に光太郎はその拳を握り締める。今もどこかにギンガ達を作り出した存在がいる。もしかしたら、またギンガ達のような苦しみを背負った命を生み出しているかもしれない。そう思ったのだ。

「……分かりました。俺はその存在を追ってみます」

「ちょっと、私達でもまだ……」

光太郎に反論しようとするクイントをゲンヤが止め、視線を光太郎へ向ける。その目は光太郎に聞きたい事があると告げていた。

「お前さん、どうしてギンガが自動人形だって分かった。それに、いつどこで会ったんだ」

ゲンヤの問いかけはもっともだった。さっき光太郎と出会った際、ギンガは知っている相手を見た様子ではなかった。とすれば、光太郎がどこでギンガと出会い、またどこでその異常性に気付けたのか。それを知りたかったのだ。

そのゲンヤの質問に、光太郎は言いよどむ。だが、それでも言わねばならない。そう決意し、光太郎は告げた。

「俺も……実は、少し普通じゃないんです。会ったのは昨日。そこでギンガちゃんがそういう存在だって分かったんです」

光太郎の答えに不思議そうな表情を浮かべる二人。それを見て、光太郎はこう続けた。仮面ライダーと言う名を聞いて下さい。その名をギンガに尋ねてみれば分かると。その言葉に驚愕の表情を浮かべる二人。

実は二人は、娘達から仮面ライダーの話を聞かされていた。それぞれを助けてくれた異形の存在。その話を二人は信じる事にしたのだ。娘達が嘘をつく事など滅多にない。故に信じたのだ。そんな二人を置いて、光太郎は逃げ出すようにナカジマ家を後にした。

光太郎の告げた一言の衝撃。それから脱したクイントが光太郎を追い駆けたが、既に光太郎の姿はどこにも見えなくなっていた。

一方、ゲンヤはリビングに残ってお茶を飲んでいた。その視線は、未だに仲良く話している二人へ向けられている。光太郎の言った自動人形。それは戦闘機人を追い駆けている最中に出てきた名称だったのだ。

戦闘機人が過去に呼ばれていた名称。故に二人は光太郎と会う気になったのだ。そして、会ってみて分かった事実。戦闘機人は地球で生まれた可能性があるとの事。それを考えると、その地球出身の子孫である自分が、二人の親をしているこの現状に、奇妙な縁みたいなものをゲンヤは感じていた。

「……まさか俺の先祖がその一族って事はねえよな」

考えて馬鹿らしいと笑うゲンヤ。そこへギンガとスバルが歩いてきた。どうやら話が終わったのを理解し、こちらに来たようだった。

「ね、お父さん。さっきの人とどんなお話してたの？」

「してたの？」

「うん？　そうだなぁ……」

二人の娘の問いかけにゲンヤは少し考え、小さく笑みを見せてこう言った。

――あの兄ちゃんは正義のヒーローでな。かなり悪い奴がいるんだって話してたのさ。

ナカジマ夫妻から話を聞いた光太郎は、フェイトへ早速連絡し、アクロバッター達がどこにいるかを聞きだした。

彼はそれからミッドの街を駆け抜ける疾風となる。そしてこの日から、ミッドの裏社会に一つの噂話が囁かれるようになった。

次々と裏組織を潰しながら、とある事を聞いて回る青いバイクの黒い怪物がいると。

その名は、仮面ライダー。

ティアナは翔一の背にしがみ付きながら、全身に感じる風を心地良く思っていた。そう、今ティアナは、翔一が運転するビートチェ

イサーに乗せてもらっているのだ。
キッカケは、ティアナがビートチェイサーを動かしてみたいと言った事。だが、免許のないティアナに動かさせる訳にはいかないと翔一が言って、こうなったのだ。

「どう？　ティアナちゃん」

「最高っ！　速いのね、バイクって」

「うん。でも、これはもっとスピード出るだろうなぁ」

翔一の問いかけに嬉しそうに答えるティアナ。それを聞いて翔一も頷くのだが、彼は感覚でビートチェイサーの全速力は、こんなものではないと思っていた。だが、それを出すためには変身しなければ無理だとも思っている。
だから翔一は後半は小さな声で言ったのだ。ティアナは何を言ったかは分からなかったが、何か言った事だけは聞こえたのだろう。翔一に大きな声でこう尋ねた。

「何か言った～？」

「何でもない。さ、もう少し飛ばすから、しっかり掴まって！」

「オッケー！」

翔一の声に反応し、ティアナはより強く翔一の腰に回した腕に力を込める。それを感じ、翔一はアクセルを解き放つ。それに応え、ビートチェイサーは速度を上げる。こうして、二人の初めての遠出は始まった……

「う〜ん……初めてだったけど、バイクっていいなぁ」

「気持ちは分かるなぁ。俺も、初めて乗った時の事忘れてないから」

二人がいるのは、ちょっとした公園。といっても街中ではなく、郊外の人気があまりない場所だ。エルセアの端の方。そんな表現がぴったりくるような所だったから。

そこで二人は一度休憩を兼ねて飲み物を飲んでいた。自販機で買った物で、ティアナの奢りである。まぁ、翔一がミッドの通貨を持っていないので当然と言えば当然だが。

「決めた。アタシ、バイクの免許取る」

「そっか。じゃ、取れたら教えてよ。一緒にツーリング行こう」

「勿論！　あ、じゃそうなったらアタシもそれ乗っていい？」

ティアナの言葉に翔一は頷きそうになるが、少し考えた。そして、やや申し訳なさそうに告げる。五代が見つかってこれを返したら無理だから、その時は諦めて欲しいと。

それにティアナは分かってると頷いて、ビートチェイサーを眺める。黒い車体に赤いライト。そして、ヘッド部分に描かれたクウガのマーク。どこからどう見ても、個人の趣味にしては仰々しい気がするのだ。

翔一はティアナが眺める様子を見て、苦笑した。自分も最初同じようなものだったのだ。出来れば、最初のような色に変えたいのだが、残念ながら翔一はその操作を覚えてなかったのだ。

故に、今も本来のままのビートチェイサーだったりする。まぁ、これがミッドでも有名なバイクになるのはもっと先の話なので、今はこのままでも大して問題にはならない。

ちなみに、有名になった後、ミッドのバイクメーカーは三台のバイクに影響を受ける。黒いボディのもの、金と赤を基調としたもの、青いボディのものの三つに。

「にしても……五代さんって凄い人なのね」

「ん？」

「だって、翔一さんだってアタシからすれば十分凄いのに、その翔一さんが凄いって言うんだから」

「俺、凄いかなぁ……？」

ティアナの言う自分の凄さがあまり実感出来ず、首を傾げる翔一。それにティアナは少し楽しそうに笑って、凄いのは翔一のそういう所だと告げた。いくらミッドとかの知識があるとはいえ、自分がいた世界と違う場所に来て、自然体でいられる。それが凄い事だと。

それを聞いて、翔一は納得した。言われて確かにそうなのかもしれないと思ったのだ。そして、それはきっと自分のこれまでが関係していると判断していた。

記憶喪失してから今まで、行く先行く先知らない事だらけだったのだ。そんな環境でも、自分を支えてくれる人達と出会い、こうして生きていける。それがきっと自分がどこでもいつでも自然体でいられる要因。

そう翔一は思い、ティアナへそう告げた。それを聞き、ティアナは余計笑いながら答えた。そういうところなんだと、心から嬉しそ

うに。

「ふふっ……あ～、翔一さんって凄いよね。アタシ、翔一さんみたいに考えられるようにしてみるわ」

「別に、ティアナちゃんはティアナちゃんの考え方をしてくれれば」

「だから、アタシが、アタシなりの、翔一さんみたいな考え方を目指すの」

――分かった？

そう言ってティアナは笑みを見せる。それに翔一も頷き、手にした空き缶をゴミ箱へ向かって投げる。それが綺麗に入り、ティアナが感心したような声を出す。そして、負けじと残りを飲み干し、ゴミ箱へ空き缶を投げたのだが、少し逸れてしまい、外れてしまった。

それを悔しそうに見つめ、ティアナは空き缶を取りに行き、もう一度翔一の隣へ戻ってくる。それに首を傾げる翔一だったが、ティアナがもう一度ゴミ箱へそれを投げるのを見て、苦笑した。

今度は見事に入り、思わずガッツポーズのティアナ。それに微笑みを浮かべ翔一がサムズアップ。それに気付き、やや照れながらも、ティアナもサムズアップを返す。

「じゃあ、そろそろ行こうか」

「そうね」

二人して笑顔を浮かべ、ヘルメットを被る。そして、翔一の背にもたれかかるようにし、腰にしっかりと腕を回すティアナ。

それを確認し、翔一はエンジンを始動させるボタンを押す。唸りを上げるエンジン音を聞き、翔一はアクセルを開ける。その独特の駆動音を響かせながら、ビートチェイサーは走り出す。

こうして、二人は日が暮れるまで走り回り、楽しい一日を過ごす。これがキッカケで、ティアナは訓練校卒業と同時にバイクの免許を取るのだ。

ちなみに、この事を後に知った某部隊長が、翔一へ浮気者と怒鳴ったとか怒鳴らなかったとか……

横たわる蓮。手渡されるナイトのデッキ。それを受け取り、意を決して変身する自分。サバイブを使い、ファイナルベントを発動させ、そのまま戦いの元凶へと向かっていく自分。そして……

「……この夢か……久しぶりだな……」

真司は誰にもなくそう呟く。極稀に見る夢。その複数ある内の一つ。それがこれだった。残りもあまり良い物ではないが、一つだけ共通しているのは、結末に救いがない事だけだ。

戦いを止めようとして戦い、結局無事に戦いを止められた事がない。いや、夢の中にあるにはあった。でも、それが真司の望んだ平和かと問われれば違うと真司は言うだろう。

（何でだ？　何でこんな夢見るんだ、俺）

未だに分からない事がある。そもそも真司には、”どうしてここにいた”のか分からないのだ。そう、何が原因でここに来たのかも。ジェイルに聞かれた際、真司はこう答えたのだ。

――――気がついたらここにいた。

それは紛れもない事実。だが、と真司は考える。何故自分はここに来たのだろう。そして、ライダーバトルの事を考えると、どうしても頭が痛くなるのだ。ライダー達それぞれを思い出せそうで思い出せない。ナイトやゾルダなどの係わり合いが多かった相手は思い出せる。でも、金色の鳥のような格好のライダーだけどうしてもおぼろげにしか覚えていない。そんな風に記憶が混乱しているのだ。

「駄目だ。顔洗って頭をすっきりさせるか」

そう呟いて、真司は部屋を後にする。彼が寝ていたベッドの枕には、不思議な事に髪の毛一本として落ちていなかった……

改装が終わったラボ。そのキッチンで忙しく動き回るのは、チンクとディエチ、それにノーヴェ。それと違ってのんびりとしているのがセインとウェンディだ。そこから離れた場所では、真司がディードに米の研ぎ方のコツを教えている。

真司が来て五年以上が経ち、ラボも大分様変わりした。まず居住性の向上、次に食生活の変化、最後に規則正しい時間の過ごし方。その全てに真司の影響がある。

居住性は今回の改装が一番の例だし、食生活の変化も語るまでもない。そして、規則正しい時間の過ごし方は、遅くとも朝七時には

起床。三十分までに洗面などを終え、食卓へ。そして、当番制で決まっている割り当てに沿って各自が洗濯や掃除などをする。

正午になったら食卓に着き、昼食を取る。そして、三時にはおやつを用意して真司が食堂で待っているので、食べたい者はそこへ来る事。夕食は七時に取り、事情があって遅くなったり食べれない場合は、事前に真司へ言うと夜食が差し入れられる。

そして、就寝は遅くとも日付が変わるまでにする事。仕事などで夜更かしする場合、真司に言えば簡単な差し入れが期待出来るので、お早めに。

そんな感じなのだ。ちなみに、夜食はおにぎりと味噌汁という定番中の定番。具は梅干かおかかで、ジェイルは梅干派でウーノとクアットロはおかか派だったりする。

「よし……。ノーヴェ、ウェンディ、それを並べてくれ」

「「了解（ッス）」」

「セイン、こっちは終わったよ」

「オッケー！」

真司から食事を任されるまでになった二人の指示で動くお手伝い三人。全員色違いのエプロンを着けているのが微笑ましい。真司がディードに米を研がせているのは、今日の夕食用の準備だったりする。

今日は、少々米が多くいるのだ。何せ今日の夕食は、真司が教えたある物を全員で食べるからだ。

「で、水を切って……のの字を書くように……」

「こう……ですか？」

「そうそう。ディードは筋が良いなぁ。ディエチもだけど良いお嫁さんになるよ」

「お嫁さん……私が……」

真司の言葉に少し驚いたような反応を見せるディードだったが、すぐに微笑みを浮かべる。そしてその視線を真司へ向け、尋ねる。本当になれるでしょうかと。それに真司も力強く頷いて太鼓判を押す。

この調子で覚えていけば、貰い手が多すぎて困るぐらいになると。それにディードは嬉しそうに笑い、こう言った。

「でも私は、一人から必要とされればいいのです」

「そっか。確かに好きな人は一人だよな」

真司の言葉にやや照れるように小さく頷くディード。そんなディードの反応に真司は微笑ましいものを感じ、笑顔を見せる。そんなやり取りを遠目から眺め、不満そうな表情をする者が三人。

セイン、チンク、ディエチだ。まぁ、ディエチはあからさまではなく少しだが、残りの二人は違う。その表情は不機嫌そのもの。料理を並べて帰って来た二人が思わず声を掛けるのを躊躇うぐらいに。

（真司兄、あたしにそう言ってくれた事ないよね？　何でさ！）

（真司、お前は私にはそう言わなかったぞ。どういう事だ！）

（真司兄さん……やっぱり優しいな。でも、最近私には教えてくれなくなったよね……）

思い思いに考え、真司達に視線を送る三人を見て、ノーヴェとウェンディは互いに顔を見合わせる。

「どうするッス？」

「いや、どうするって言ったって……」

指示がもらえなくなった二人は、仕方なく残りの料理も運ぶ事にし、キッチンを後にする。その後も真司はディードへ熱心に指導し、三人の心を乱しに乱すのだった……

楽しい食事。それが四人が目覚めてからは余計に賑やかになった。ウェンディが一番の原因だろうが、ノーヴェがそれに噛み付くから更にだろう。オットーやディードは騒ぎこそしないが、雰囲気的にはディエチに近いのだろうか、そんな二人を諌めたりする事が多い。

話題を作るもしくは振るのはセイン、ウェンディ、真司。話題を広げるまたは変えるのがウーノ、クアットロ、チンク。相槌を打つ或いは完全に無視するのがトーレ、セッテ、ジェイル。基本静観だが、場合によって口を出すのがオットー、ディエチ、ディード。そして、それら全ての要素を発揮するのがノーヴェである。

この日の話題は、食事中にも関わらず夕食に関係する事だった。というのも、そのためにこの後買い物へ出かける事になっていたからだ。しかも、全員で。ジェイルは変装するが、おそらく見つからないだろうから必要ないと言っていた。

理由は固定概念によるもの。広域次元犯罪者である自分が、堂々と昼間のミッドを歩いているなんて思わないだろうし、もし見つかってもジェイルは構わないと言ってのけた。どうせ、自分は捕まったとしても逃がされるだろうからと。

その意味が分かる者はウーノとクアットロだけ。残りの者はどこか納得出来ない表情を浮かべていた。

「にしても、この機会に服とかを買いたいとはねぇ」

「俺のじゃないぞ。みんなだよ、みんな。女の子なのに洋服も持ってないなんて可哀想だろ」

そう、買うのは夕食用の食材だけではない。ナンバーズ全員の普段着を買う事も兼ねているのだ。女性でありながら着る物が全身タイツのような物しかない。ウーノはまたスーツのようなものがあるが、それだけだ。

真司としても、もっとみんなに女性らしい格好をして欲しかった。トーレは嫌がったが、真司が絶対似合うからと力説し、参加させる事に成功したのだから。

「それにアクセサリーとかも見せてやりたいし、そもそも街を知らないんだからさ」

「分かった分かった。で、今更なんだが……」

ジェイルの口調に疑問符を浮かべる真司。一体何が今更なのか分からないからだ。ジェイルはそんな真司にこう尋ねた。ミッドに行く彼女達の服装はどうするのかと言う事。それに真司はしばらく硬直し、こう叫んだ。

「忘れてたぁぁぁぁっ！！」

ちなみにその辺りは、ジェイルが前もって用意させていた潜入用（実際は必要ないと考えていたが）のTシャツやジーンズで何とかする事になった。真司はそれを聞いて安堵の息を吐いたが、全員からもう少し考えろと言われ、少し凹んだのはここだけの話。

こうして、総勢十三名の団体行動となったのだが、ほとんどが初めての大都会に視線をキョロキョロし、お上りさん状態。真司は想像していたよりも、ミッドの規模が大きくやや面食らったが、東京の進化版と思い直し、何とか平静を取り戻した。

ウーノやジェイルは普段通り。トーレやクアットロはやや人の多さに閉口していたが、チンクが妹達の抑え役として苦戦しているのに気付き、そのフォローへ回った。

セインはウェンディと二人であれこれを指差し楽しそうだし、セッテはディエチと高層ビルばかりの街並みに感心し、オットーとディードは行き交う人の数に驚き、大都会というものを感じていたし、ノーヴェはチンクにどういう服を買えばいいかを聞いて困らせていた。

そんな真司達に声を掛ける者がいた。それに全員が視線を向ける。そこにいたのは、管理局の制服を着た女性。だが、その顔に真司は見覚えがあった。

「ドゥーエさん？」

「そう。久しぶりね、真司君。後、ドクター達も元気そうで」

「本当に来れたの？」

ウーノの驚いたような言葉にドゥーエは頷き、無理矢理に休みを取ったと悪戯めいた笑みを浮かべる。そう、ウーノが連絡しておいたのだ。全員でミッドに出かけると。どうも、それを聞いて、本当に休みを取って会いに来たらしい。

そんなドゥーエにウーノやクアットロが相変わらずだと言って笑う。トーレやチンクも笑みを見せ、ジェイルは嬉しそうに笑っていた。

だが、セイン以下の妹達はどこか居場所がなさそうだった。それに気付いた真司が全員に説明した。ドゥーエはナンバー2で、お姉さんに当たる存在だと。それを聞いてやっとセイン達も理解したようで、笑顔を浮かべてドゥーエに近付いた。

「ドゥーエさん、こいつがセインです。で、セッテ、オットー、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ、ディードです」

真司の紹介に合わせ、それぞれが簡単に頭を下げ笑みを見せる。それを眺め、ドゥーエも嬉しそうに笑顔を見せた。そして、当初の計画と違い、この時点で妹達が全員稼動している事に疑問を浮かべた。

それに気付き、ジェイルが簡単に事情を話し、ドゥーエはそれに唖然となった。真司と関わり、ジェイルは計画を大幅に変更し、管理局へのクーデター紛いの襲撃を止め、どこかで平和に暮らそうと考えたと。

ドゥーエの潜入も最早あまり意味がないから、戻って来てくれても構わない。そう言ってのけたのだから。

「……どうしてもっと早く教えてくれなかったんですか」

「いや、ごめんごめん。つい、ね……」

「ついって……は～、もういいです。じゃ、私もラボに戻ろうかしら」

ジェイルの能天気さに呆れながらも、ドゥーエはどこか楽しそうに言った。それにウーノやクアットロも嬉しそうに頷き、歓迎した。一方、真司達はある程度の人数に分かれて行動するべきと結論を出していた。

このままでは多すぎて色々と不便だし、何より目立つ。だから精々三人程度で行動する方がいいとの意見が多かったのだ。

「じゃ、ウーノさん、ドゥーエさん、クアットロ、チンクちゃんがそれぞれの纏め役って事で」

「そうだな。私よりもクアットロやチンクの方が適任だろう」

真司の人選にトーレも納得した。服を選んだり意見を述べたりなどは、自分よりも妹の方が向いていると思ったのだ。

ジェイルは真司と共に日用品関係を見に行く事になり、こうしてナンバーズは三人ずつで分かれた。ウーノは、トーレ、セッテと。ドゥーエは、オットー、ディードと。クアットロは、セイン、ディエチと。チンクは、ノーヴェ、ウェンディと。

「じゃ、二時間後にここで集合だね」

ジャイルの言葉に全員が頷き、それぞれ行動を開始する。向かう先はバラバラ。ウーノやドゥーエは大人な雰囲気漂う服が多めの店へ。クアットロはお手軽な感じの雰囲気の店。チンクは、やや可愛い系の店へと。

真司はそんな四組を眺め、個性が出るなぁと感じながらジェイルと共に調理器具などを見るべく、歩いていくのだった……

衣服の買い物は、それなりに時間は掛かったが、十二人共それなりに気に入った物を買えた。トーレやチンクといった者達は、似合わないと言って拒否した事もあったが、それも含めて楽しい時間を過ごしていた。

問題は、その後。そう、下着である。サイズに関して、チンクが妹二人に圧倒的戦力差で敗北すれば、楽しげに試着するクアットロに、妹二人はやや呆れ気味。ドゥーエが選ぶ際どい物を、どこか躊躇いながらも着けるディードと、それを見て、どこか寂しそうに自分の胸を触るオットー。

ウーノは、トーレとセッテがあまりに色気が無さ過ぎる物を選ぶので、無理矢理派手な物を何点か買わせるといった強権発動するなど、色々な出来事があった。

女性陣がそんな風に賑やかにしている頃、真司はジェイルと待ち合わせ場所近くの喫茶店でのんびりしていた。色々と欲しい物も買い、真司としては大満足なのだが、まだ買い物は終わっていないのだ。

そう、最後に夕食用の買い物が残っている。それを終わらせなければ、今日の目的は果たせないのだ。

「ねぇ真司」

「ん？」

夕食用に買う物を考えていた真司だったが、ジェイルの問いかけ

に意識を切り替える。ジェイルはそんな真司を見ず、外の景色をただ眺めている。その目は、気のせいかどこか遠くを見ているようにも見えた。

「このまま僕らと一緒に暮らさないかい？」

「……ジェイルさん」

「君のいた世界がどこかはまだ分からない。でも、君がそこに戻ればまた戦う事になる。君の嫌うライダーバトルを……」

真司はジェイルの言葉に黙った。確かに自分が元居た世界へ戻る事は、そういう事だ。モンスターではなく、ライダー同士の戦い。それは、言うなれば殺し合いだ。たった一人になるまで戦う。

それがもたらすものは、何でも願いを叶える力。真司にそれは必要ない。欲がない訳ではない。でも、真司は誰かを犠牲にしてでも叶えたい願いなどないのだ。いや、違う。誰かを犠牲にして叶える願いなど間違っていると真司は考えている。

「ありがとう、ジェイルさん。でも俺さ、決めたんだ。ライダー同士の戦いを止めさせるって。そのために、俺は……戦うよ。ライダーとじゃない……そのライダーバトルそのものと」

「真司……君は……」

「分かってる。それがどれだけ無理な事かなんて。でも、決めたんだ。俺は、仮面ライダーとして、ライダーと戦うんじゃない。仮面ライダーとして、ライダーを戦わせる全てと戦うんだ」

真司の言葉にジェイルは言葉を失った。それは、真司の発言がい

つもからは想像もつかない程、穏やかで力強く、そして希望に溢れたものだったからだ。そして真司は呆然となるジェイルに、こう言い切った。

――ライダー同士で殺し合うなんて悪夢は、俺が終わらせる。

その言葉に、ジェイルは真司の強さを見た気がした。どう考えても、不可能に近い事。それを真司は躊躇う事無くやってみせると断言した。誰かじゃなく、自分が悪夢(いま)を変える。それは、ジェイルが気付いた事に通じるものがあった。

不可能であろうと、躊躇わない勇気。それが真司にはある。絶望しか待っていない道だとしても、きっと真司は望みを捨てないだろうと。そうジェイルは確信した。

希望は、生命ある者に与えられた力。つまりは、いのちそのものだ。真司は、それを悟らせる人間だ。そうジェイルは思ったのだ。

（私のような名を与えるなら、彼は……アンリミテッド・ライフかな？）

そんな事を考え、ジェイルは決心する。もう必要ないと放棄していた龍騎のための力。それを完成させようと。戦いに赴く真司に、少しでも役に立ててもらえるように。

そんな決意を聞かされたジェイルは、これから一層ライダーシステムの解析や開発へと専念する。それが完成した時、龍騎は新たな力を手に入れるのだ……

ナンバーズと合流し、食料品を買い込んで意気揚々と帰宅した真司達。ドゥーエは色々と手続きなどがあるので、一端別れたが、夕

食時には戻ってくると言っていたので、真司としては期せずしてお祝いとなって喜んでいた。

というのも、今日の夕食は……

「さ、じゃあみんな手伝ってくれよ！」

真司の号令でそれぞれが動き出す。買ってきた魚や貝などを下拵えする真司。その手伝いをディエチとディードが。厚焼き玉子を任され、チンクとセインは真剣な表情。酢飯作りを任されたのは、クアットロにノーヴェとセッテ、そしてトーレ。酢の匂いに多少むせながらも、二人一組になって、懸命に与えられた仕事をこなそうとする四人。

残されたウーノ、オットー、ウェンディは場所のセッティング。真司から広い場所にしないと食べ辛いと言われたのだ。ジェイルは一人研究室で仕事をしていた。本当なら皆と同じように手伝いたかったのだが、仕事を片付ける方が先と真司に言われ、仕方なくそうしていた。

やがて準備も終わりそうなところで、ドゥーエが現れた。管理局を止め、痕跡も綺麗に消してきたそうで、今後はずっとここにいると告げると、妹達から嬉しそうな声が上がった。

真司も嬉しそうに頷き、今日はドゥーエの帰宅記念のお祝いだからと告げた。それに疑問符を浮かべるドゥーエだったが、それは食堂へ案内されて払拭された。

「今日は、手巻き寿司でパーティーだ。あ、でもあまり多く載せるなよ。零れたり崩れたりするからな」

そして、真司がお手本と言って海苔に適度な量の酢飯を盛り、そこにきゅうりやマグロといった物を載せて巻く。そして、それに醤

油を少量たらし、口に入れた。
それを見て、セインやウェンディ、ノーヴェなどがマネして作り始める。負けじとチンクやクアットロも動き出し、オットーやディード、ディエチも一緒になって作り始める。トーレとセッテはやや苦笑しつつ、海苔を片手にあれこれ載せるものを物色する。
そんな光景を見て、ドゥーエは呆然となるが、ウーノとジェイルが近付き微笑みながら告げた。これが今の自分達だと。

「……そうですか。私がいない間に大きく変わったのね」

「気に入らない？」

「どうして？　妹達があんなに楽しそうなのに。私も楽しむ事にするわ」

そうウインクと共に告げ、ドゥーエは真司の傍へと向かい、何が一番美味しいかを尋ね始める。そんなドゥーエを見て、ジェイルとウーノは小さく笑う。真司に感化されるのに、時間は関係ないのかと思ったからだ。
現に、ドゥーエも楽しそうに妹達と食事を楽しんでいる。その顔は正真正銘の笑顔。そして、そんな二人も賑やかにしている真司達の輪の中へと入っていく。

「これ、これ美味しいよチンク姉！」

「そうか？　なら……」

「いや、こっちッス！」

「おい、チンク姉が困るだろ。セイン姉もウェンディも程々にしろ

よ」

「シンちゃ～ん、これは何？」

「あ、それは穴子って言うんだって。きゅうりと一緒が美味しいらしいよ」

「そうですか。ならディエチ、これは何ですか？」

「セッテ、お前はどれだけ試す気だ……」

「ドゥーエ姉様、これはいかがです？」

「……うん。美味しいわ、ありがとうオットー」

「ドクター、少し載せ過ぎです……」

「いやいや、まだいけるさ」

「いけるか！　ああ、もう。だから載せ過ぎるなって言ったのに……」

「真司お兄様、これを使ってください」

楽しくも騒がしい夕食。ついに全員揃ったナンバーズ。運命はまたも変化した。そして、真司にジェイルが付けたアンリミテッド・ライフと言う名の意味。

”果てなき希望”

それが意味する通り、彼はそうなり得るのか…

…それとも……

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

続き。五代は海鳴に滞在し、光太郎は一人悪を追う影となります。
翔一はティアナとバイクでデート？です。ティアナのバイク免許は、こうして取得に至る。
真司は、仮面ライダーとしての決意と覚悟。戦いを止めるために戦う。その意志を表明する事が今回のメインでした。
まさかのドゥーエ帰宅。呼び戻すのではなく、普通に買い物に付き合い、そのまま辞職。……でも、まだジェイルさんは忘れてる事があるんですよねぇ……

空白期7

翠屋での仕事を終わらせ、五代は士郎達に別れの挨拶をし、四人分のシュークリームを購入して月村家への帰路に着いた。

海鳴の町を歩きながら、ふと五代はある事を思い出し、寄り道をした。その行き先は八神家。無論、五代ははやて達がもう海鳴にいないのを知っている。しかし、翔一との話で聞いたある事を気にしたのだ。

「……やっぱり、誰も住んでないんだ」

明かりのない元八神家。五代は来た事がなかったが、翔一やヴィータからの話で、どれだけ賑やかで明るい場所だったかは良く知っている。

外観を一しきり眺めて、五代は視線を家からある場所に移した。それは……

「……枯れ始めてる……か」

翔一の作った家庭菜園。そこには、おそらく引っ越す前まで世話をし、処分する事が出来なかったであろう、僅かに残った何かが枯れ始めていた。五代はそれを確認するために小声でお邪魔しますと呟き、庭へと入った。

ゆっくりと近付き、それを確かめる五代。それは、いちごだった。翔一が約束のために用意した物を、ヴィータが苦労しながら育てた物の名残。そう、ヴィータは翔一がいつ戻ってきてもいいように、家庭菜園の世話をしていたのだ。

それを五代は知らない。だが、何となくその枯れたいちごが寂しそうに見えたので、五代は誰にもなく告げた。

「ゴメン。抜かせてもらうね」

そう言うと、五代はその枯れたいちごを抜き、その菜園の土の中へ埋めた。この家の思い出は、もうはやて達が持って行った。なら、これははやて達は知らない物だ。だから、枯れたまま朽ちていくのはさせたくない。

そう思ったからこそ、五代は土に埋めたのだ。ヴィータもそうだった。翔一との思い出残る家を離れる際、この菜園を処分する事が出来ず、泣く泣く処分したのだが、このいちごは種が零れ勝手にここまで育ったのだ。

「……翔一君、どこにいるかな」

そう呟く五代。彼のその呟きは、皐月の空へ消えた……

食事を終え、五代が買ってきたシュークリームをお茶菓子に、食後のティータイムを四人で過ごしていると、ふとすずかがこう言い出した。アリサにも会って欲しいと。もう高校生になり、美人になってますよと付け加えて。

それに五代は苦笑するが、確かにアリサなら美人になっているだろうと思い、肯定の意味で頷いた。更にファリンが学校で一番人気なんですよと言うと、五代は軽く驚いた。ミス聖祥なんだと五代が言うと、すずかが苦笑しつつ頷いた。

「本人はどうでもいいって言ってますけどね」

「アリサちゃんらしいなぁ」

「で、すずかちゃんが惜しくも二番です」

「ま、性格的には一番人気だろうがな……」

ファリンとイレインがそう言うと、すずかはやや照れながら紅茶を飲み出した。五代はそんなすずかの反応に笑みを見せる。それに気付き、すずかは益々恥ずかしそうにするのだった。

そして、その流れで五代がいなかった間の話になり、それを五代は楽しく聞いていたのだが、ふとイレインが思い出したように尋ねたのだ。五代の昔話を聞いてみたいと。それにすずかやファリンも興味があったようで、話してくれるように頼んだ。

「……そうだね。俺、四人家族だったんだけど……」

そこから始まる五代の話。小学生の楽しい時期に父を亡くした辛い思い出と、恩師との約束やサムズアップの意味などの出来事。そこから中学や高校などの話をし、大学の話へ移り、五代は冒険話になった途端目が一番輝き出した。

外国での話や訪れた場所に関する知識や思い出。それらを臨場感溢れるように語る五代。それに三人も引き込まれていたのだが、ふと五代の顔が曇った。それは、何度目かの冒険を一休みし、一旦日本へ戻ったと言った瞬間だった。

まるで、それまで流暢に話していたとは思えない程、五代はぽつりぽつりと話していく。空港で迷子と出会った事や大学に忍び込んで友人の女性に冷たくあしらわれた事などは、まだ幾分か良かった。だが、話が長野の遺跡に行った辺りから、五代はまるで躊躇うかのような表情を見せた。

「……ここからは、クウガの話なんだ」

五代がそう言うと、三人はそれだけで大体を察した。クウガの話。それは、あの力を使わなければならない状況になったという事。それは、絶対に楽しい事ではない。五代が躊躇う理由はそこにあると、誰もが思った。

でも、それを止める事はしない。それを決めるのは五代だから。そう三人は考えていた。それを五代も悟ったのだろう。意を決したように話し出す。ただ、残酷な話や聞くに堪えないだろう部分は、意図的にぼかし、一条達を始めとしたクウガになったからこそ出会えた人達との話を中心にして。

自分に戦う必要はないと告げ、五代が戦う意思を明確に打ち出すようになった後は、全力でそれを支えてくれた一条薫。自分の体を検査し、常に警告と心配をしてくれた五代唯一のかかりつけ医師、椿秀一。クウガや未確認の研究をし、裏で支えてくれた科警研の榎田ひかり。

自分を未確認として撃った事を謝り、一条に負けない理解者になってくれた杉田守道。同じくクウガを仲間と認め、どこか憧れてさえくれた桜井剛志。中盤からは、誘導や作戦指示などで助けてくれた合同捜査本部の紅一点、笹山望見。

最後に、ビートチェイサーをクウガへ与える事を上層部に具申し、いつも寛大な配慮と思慮深い決断を下してくれた松倉貞雄。

それだけではない多くの人達との絆や協力があったから、五代は、クウガは未確認に勝てたと言い切った。自分一人では、守り切れずに死なせてしまったかもしれない人達がいただろうと、そう続けて。

「……俺、良かったと思ってるんだ……クウガになって」

「どうして？　だって、五代さんは戦う事は嫌いなんでしょ？」

「……うん。でも、誰かがやらないといけなかった。それに俺が選ばれた。嫌な事もあったし、辛い事もあった。……でもね、だからこそ良かったって、思えるんだ」

――――一条さん達に会えたから。

五代はそう言って、黙った。それにすずか達も黙る。静寂が訪れる室内。秒針が刻む音だけが響き渡る……。そして、五代ははっきりとすずか達を見つめて告げた。

――――それに、あんな思いをするのが、俺だけで良かったって。

クウガにもし自分がならなかったら。もし、他の誰かがクウガになっていたのなら。そう考えると、五代は今でも怖くなる。決してうぬぼれではない。自分が一番クウガに相応しいなど考えた事もない。だが、唯一、唯一五代が断言出来る事がある。

それは、タグバとの決戦。あの時、凄まじき戦士でなければダグバには勝てなかった。自分は、憎しみではなく、みんなの笑顔を守る事だけを考えて変身出来た。それがあの力を制御したんだと、今でも思う。だからこそ、五代は思うのだ。自分で良かったと。

あんな想いを、感触を、苦しみを、痛みを、哀しみを、空しさを、誰かに押し付ける事なく自分が終わりに出来て。

得た物は多く、失った物は少ない。でも、五代はクウガの力をもう使いたくはなかった。”変身”。それを二度としないですむようにと、心から願っていたのだから。

だが、まだ邪眼を倒し切れてない以上、クウガの力は必要とされ

る。翔一のアギトの力もまた同様に。戦っても、倒しても、どこからか悪は現れる。そう五代の話を聞いた光太郎は悲しそうに言った。それでも、戦い続けるのが仮面ライダーなのだと。

五代がそれを聞き、尋ねた事がある。それは、光太郎よりも昔から戦っていた先輩ライダーの事。

終わる事のない戦い。変わらない世界。助けた命が、明日には消えるかもしれない。そんな状況で、自分以外の十一人は諦めずに戦い続けた。戦うためだけの生物兵器。そんな体にされても尚、彼らは人のために戦った。

五代は光太郎から簡単にではあったが、歴代ライダーの事を聞いた。改造人間。人でありながら、人でなくなった者。それが、仮面ライダーだと言われた瞬間、五代は言葉を失った。

クウガと同じだと思っていた。何か特殊な力で変身しているのだと。だが、違った。それが本当の彼らの姿なのだ。彼らの多くは望んでいないのに、その力を与えられ、異形の姿に変えられた。理不尽に人を捨てさせられた。

しかし光太郎は、言葉を失い、悲痛な表情の五代へこう言った。どこまで戦っても変わらないかもしれない。そう思った事もあった。だが、光太郎がある時そんな弱音を漏らすと、最初の仮面ライダー、本郷猛はこう言っていたと。

――例え未来を変えられなくても、見過ごせない今を救えるのなら……俺は、戦うと決めた。

それを聞き、光太郎は改めて思ったのだ。仮面ライダーとは、今を救い、未来を守る者だと。例え、未来が変わらないとしても、いつかそれが変わると信じて戦おう。そう心に誓ったのだと。

五代はそう聞いた時、自分にはそれは無理だと思いかけた。だが、その言葉をよく考えた途端、無理と言えなくなった。

それは、自分の父が手紙の結びに必ず書いた言葉と、自分の信念に反する事になるからだ。いつか、世界中の人達が笑顔になれますように。それを思い出し、五代は光太郎達がそれを願って戦っている者達だと思い直した。

そして、自分も仮面ライダーを名乗った以上、簡単に投げ出す事はしたくない。そう、自分は何度も言ってきたのだ。自分はクウガなのだ。なら、必要とされる限り、やってやろう。自分だけが辛い訳じゃない。そう思えるから。どこかで自分と同じように哀しみながらも、拳を振るっている仮面ライダーがいる。そう、今の五代は思えるから。

「……さてと、じゃあそろそろ時間も遅いし、すずかちゃん達もお風呂入って寝た方がいいよ」

「うん。……五代さん」

「何？」

「クウガの五代さんも好きだけど、私はいつもの五代さんが一番好きだから」

そう言ってすずかははにかむと、少し早足で去って行く。それを呆然と見送る五代とイレイン。ファリンはどこか驚いている。そして、そこから立ち直り五代は小さく呟いた。

「奈々ちゃんと同じ、じゃないよなぁ……」

それにイレインが反応し、奈々の事を根掘り葉掘り聞かれる事になった五代。ファリンとイレインの二人に詰問されながら、五代は困った顔を浮かべるのだった……

様々な魔力光が飛び交う空間。それは全て同じ相手へと向かっていく。本来、魔法は全て非殺傷と呼ばれる状態になっていて、それを解除し殺傷設定と呼ばれるものにすると、同じ罪でも途端に罪状が重くなる。

それ故、余程凶悪な犯罪者でもない限り、設定を変更したりはしないのだが、この魔力弾は全てその殺傷設定であった。数十は軽く超えるそれを、避けもせず、その相手はそれを叩き落し、蹴り飛ばし、それを放つ者達の意識を奪っていく。

「な、何なんだ……一体、お前は何なんだ!?」

ついに自分一人となった男の問いかけに、眼前の相手は立ち止まり答えた。

「俺は、太陽の子。仮面ライダーＢＬＡＣＫＲＸ」

「か、仮面ライダー？　ま、まさか……あの仮面ライダーか!?」

「答えろ。戦闘機人を作り、その技術を知っている者はどこにいる！」

ＲＸの問いかけに男は首を横に振る。知らない。自分はその技術を欲しがってはいたが、手に入れてはないと。それが嘘の類ではないと判断し、ＲＸは分かったと頷いた。

そして、近くに落ちているデバイスを拾い上げ、強くある女性の事を思い描きながら告げる。

【フェイトちゃん、ここは完全に制圧した。後の事を頼む】

【分かりました。光太郎さんは一度戻ってください。今後の事も含めて話をしましょう】

ＲＸは念話を使えない。なので、こうして相手がもっているデバイスを使い、別の場所で待機しているフェイトに連絡するのが常だった。あの後、フェイトに連絡したＲＸは、アクロバッター達の居場所だけでなく、フェイトの情報も頼りに、戦闘機人に関係ありそうな組織を片っ端から調べていた。

フェイトでは踏み込む事が出来ない状態でも、ＲＸは関係なく踏み込み、こうして情報を聞き出す。そして、暴れた現場に調査中だったフェイトが気付いたように装い、逮捕する。そんな事を始めて、もう二週間になる。

フェイト達が来る前に、ＲＸは素早く男を気絶させると、急いで現場を離れる。外に停めてあったアクロバッターに跨り、フェイトが用意してくれている仮住まいに向かう。途中で、貸し倉庫に寄ってアクロバッターを隠し、変身を解くのを忘れずに。

それは二台を隠してある貸し倉庫からそう離れていない場所にあるデイリーアパート。日雇い労働者用のそこを、フェイトは光太郎のために借りてくれたのだ。

「また情報無しか」

そう呟いて光太郎は部屋のドアを開けると、そこには一人の女性がいた。眼鏡が特徴の女性で、フェイトの補佐をしているシャリオ・

フィニーノだ。

「お帰りなさい光太郎さん。フェイトさんは後十分程で来るそうです」

「そっか。で、シャリオちゃんはそれを伝えるためにわざわざ？」

「そうですよ。本当なら現場に行くはずだったんですけど、フェイトさんがここで念のために待っててって。光太郎さんが、良く念話を途中で切っちゃうからです。でも、意外と物がないですね。驚きました」

シャーリィはそう言って部屋を見渡す。それに光太郎は苦笑するしかない。何せ、ここには寝に帰るぐらいなのだ。部屋にあるのは、備え付けのベッドと小さな冷蔵庫ぐらい。それも、フェイトがベッドだけじゃ……と言って買ってくれた物。

しかも、ミッドの通貨を持たない光太郎は、それにいれる物も買えないので、中身の飲み物等もフェイトが用意してくれた物だったりする。光太郎はそこまでしてもらう訳にはと断ったのだが、フェイト達は頑として聞いてくれなかった。

調査が難航しかねないものを、光太郎は次々と解決に導いてくれているのだからと。そう言われては光太郎も何も言い返せないのだ。

「それで、どうかな。そっちの情報の方は」

「それがあまり。怪しい相手がいるにはいるんですが……」

「ジェイル・スカリエッティ……だね？」

光太郎の言葉にシャーリィは無言で頷く。広域次元犯罪者で、フ

ェイトが追いかけている相手。おそらく戦闘機人にも関わっている可能性が高いとフェイトは考えていて、光太郎も何度か犯罪者相手に聞いた事があったが、一切情報が入らないのだ。
無理もないのだ。ジェイルは真司と出会ってからほとんど犯罪行為から手を引いていて、ゼスト隊に情報を渡した後は、最高評議会からの依頼も出来うる限り断っているのだから。

それを知らない光太郎達は、ジェイルの事を情報隠蔽に長けた相手だと思っていた。そして、少しシャーリィと話していた光太郎だったが、何かフェイトから連絡があったのか、シャーリィが急に立ち上がり、部屋を後にすると言い出した。

「どうしたの？」

「いえ、私は私で色々あるんです。フェイトさん、もう着てるので待っててください」

じゃあ、また。そう言ってシャーリィは出て行った。それを見送り、光太郎は腑に落ちないものを感じるも、フェイトから今後の事を含めた話を聞かなければと思い、その姿を待った。
すると、外からフェイトとシャーリィの話し声が聞こえてきた。本人達は聞こえないと思っているのだろうが、改造人間である光太郎の聴覚はそれをはっきりと捉えていたのだ。

「じゃ、後はお二人で」

「しゃ、シャーリィ。いつも言ってるけど、私と光太郎さんはそういう関係じゃないって……」

「ええ。だからこそ二人でどうぞ」

「シャーリィ！」

「私は今日の報告書を作成しますから」

そう笑って言いながら、シャーリィはフェイトに手を振って去っていく。ご丁寧にフェイトが乗って来た車を使って。これで、フェイトは必然的に光太郎に送ってもらうしかなくなると考えて。

シャーリィに車を降りて、歩いて行けとフェイトが言えるはずもなく、それを止めずにただ困ったようにそれを見送った。そして、ため息を吐いて光太郎のいる部屋を目指した。そこまで聞いて光太郎は苦笑し、冷蔵庫から缶ジュースを二本取り出す。

「お待たせしました」

そう言って入ってきたフェイトへ、缶ジュースが投げられる。咄嗟にそれを受け取るフェイト。それを見て、ナイスキャッチと笑顔で誉める光太郎。その笑顔をフェイトは少し嬉しく思いながら、光太郎の前に座った。

そして、部屋を軽く見回し、どこか苦笑するように呟く。相変わらず殺風景ですねと。それに光太郎も同じような表情で同意し、頷いた。

「まず、今回も無事に終わった事に」

「乾杯……ですね」

カツンと缶同士を合わせ、音を立てる二人。これも最近の決まり事。無事に終わった事を喜び、祝う。そんな二人だけのささやかな祝宴。

プルタブを開け、互いに口をつけて飲み始める。フェイトはコーヒー。光太郎はスポーツドリンクだ。基本冷蔵庫に補充されるのは、この二種類。光太郎の好みを知らないフェイトは、自分の義理の兄であるクロノを参考にした。

故のチョイス。クロノは基本コーヒー。スポーツドリンクは訓練などで失った水分を補充するための物で、クロノが好きという訳ではないのだが、光太郎としてはスポーツドリンクは有難かった。手軽に水分が補充出来るのは、変身して戦う自分にとってはうってつけだったからだ。

「……で、どうしようか」

「……他の管理世界にも怪しい組織はあります。でも、さすがに」

「俺は構わないよ」

「駄目です。今だって、光太郎さんに頼ってばかりですし……」

「でも……」

「それに！　……それに、仮面ライダーの力は、本当は人間同士の事に使う物じゃないはずですから」

フェイトのその言葉に光太郎は何も言えなかった。ただ、フェイトの思いは嬉しかった。簡単に人外の力に頼るのではなく、自分達で何とかしようと考える。それは、とても尊い想い。仮面ライダーに頼るのではなく、自分達で何とかしようとする心。

それを人が失わない限り、仮面ライダー達も諦める事なく戦えるだろう。人と自然が調和する世界。真の平和、それが訪れる日まで。

それからフェイトは光太郎にある事を頼んだ。それは、自分が保護する少年の事。自分は仕事であまり会えないので、有力な情報が手に入るまで、光太郎にその子の相手をして欲しいのだと。

それを光太郎は喜んで引き受けた。こうして、光太郎はミッドにあるハラオウン家へ居候する事になる。

そこで出会う少年、エリオ・モンディアル。その出生の秘密とフェイトの生まれが密接に関わっている事を彼が知るのは、これから半年後。とある研究施設へ乗り込む事になった時だった……

「なぁ、翔一さん。あんたの言ってたクロノって、クロノ・ハラオウンか？」

ある昼下がり。完全オフのティーダは、翔一が作ったナスの油炒めを食べながらそう問いかけた。他にもナスの味噌汁に、マーボーナス。ナスのおひたしが並んでいる。

その言葉に翔一はそれまでしていた掃除の手を止め、ティーダが告げた名前に、目を見開いて頷いた。

「そうそう！　そうです！　クロノ・ハラオウンです」

「……やっぱりか。あんた、一体いつ頃に知り合ったんだ？」

「どういう事です？」

ティーダは翔一へ説明した。クロノはもう一年以上も前から提督に昇進している。故に今まで時間が掛かったのだ。ティーダが念のためと過去の執務官まで当たったおかげで、それが判明したのだから。

そして、こう続けた。そんな事は知り合いならとっくに知ってるはずだと。そう言われ、翔一は驚いた。自分が知る限り、クロノは執務官だったはずだからだ。そして、何か嫌な予感したのだ。

それは、五代が自分よりも後から海鳴に現れたのに、自分よりも以前の時代からやってきていた事を思い出したから。だから、クロノの年齢を教えて欲しいと翔一は言った。それに妙なものを感じるものの、ティーダは答えた。

「確か……今二十一歳ぐらいだったか」

「そんな……俺が出会った時は十四歳でした」

「どういう事だ？」

「……信じられないですけど、俺、未来に来たみたいです」

翔一はそれからティーダに自分がクロノ達と出会った時の事を話した。それを聞いて、ティーダは驚愕する。局で知らない者はいない有名人の名前ばかり出てきたからだ。高町なのは、フェイト・テスタロッサ、八神はやて。更に守護騎士達の名前も三人程ではないが、有名だ。

もしかしたら、自分はとんでもない人間と繋がりを持ったのではないかとティーダは思った。だが、翔一の話を信じれば、彼は異世界に行き、そこから戻った際、五年以上の時を超えた事になる。

それは次元世界の法則から見ても異常としか言えないものだった。ティーダから今のはやて達の事を教えられ、現に翔一はどこか呆然としている。無理もないとティーダは思った。少女だと思っていた相手が、もう知らぬ間に大人に近くなっていた。そう考えれば、やるせない気持ちにもなる。そうティーダは思っていた。

「……ティーダさん。ホントに、はやてちゃんが、捜査官をしてるんですね？」

「……ああ」

「ホントに局で働いてるんですね？」

「あ、ああ……」

そこでティーダは気付いた。翔一の声が沈んでいない事に。それどころかむしろ嬉しそうにさえ聞こえる。気のせいか。そうティーダが思った瞬間だった。

「そっかぁ～、はやてちゃん歩けるようになったんだ。良かったぁ～！」

翔一はそう噛み締めるように言った。その顔はとても良い笑顔。その言葉を聞いて、ティーダは思い出した。八神はやては入局当初、車椅子のため自由に動く事が出来ず、苦労した事があるという話を。

つまり、翔一ははやてが第一線で活躍していると聞いて、はやてが自由に歩けるようになった事を察したのだろう。だからあそこまで聞いてきたのだ。本当にはやてなのかと。そんな厳しい職場で働いているのが、自分の知る少女なのかと。

（ったく、やっぱ翔一さんはどこかすげぇな）

現状に苦しむのではなく、現状を受け入れてありのまま動く。それを翔一は自然にやってのける。今だって、普通なら動揺し、困惑してしまうだろう。それを、翔一ははやての現状を想像し、心から喜んでいる。自分が逆の立場ならとてもではないが、真似出来ない。

そう考え、ティーダは翔一に告げた。伝手を使ってその誰かに連絡をつけるから、再会は近いと。それに喜ぶ翔一だったが、ふとその顔が曇った。その理由がティーダには分からない。

「どうした？」

「いえ……ティアナちゃんの事を考えて」

「……そういう事か」

翔一がランスター家に居候してから、ティアナは翔一の事をもう一人の兄と呼べる程に慕っている。訓練校へ入校した今も、最初の休みを使って翔一に会いに帰って来たぐらいだ。

そんな翔一がいなくなる。それを聞けば、ティアナが落ち込む事は確実だ。故に翔一は悩んでいた。自分を受け入れ、純粋に慕ってくれたティアナ。それがこれまで寂しい想いをしてきた事は、それとなく翔一も気付いている。

（ティアナちゃんに寂しい想いはさせたくないし、かと言ってはやてちゃん達にも無事を伝えたいし……どうすればいいんだ）

そう翔一が悩んでいると、ティーダが気楽に告げた。悩む必要はないと。ティアナには自分から説明しとく。だからあんたは会いに行けと。

その言葉に翔一は少し考えたが、頷いて感謝を込めて頭を下げた。それに苦笑するティーダ。感謝するのは自分だと。今まで家事やティアナの事なんかを面倒見てもらったんだからと。

それに、自分が手間取ったせいで、一年近くも時間が掛かったのだから。そう告げて。それに翔一は首を横に振る。自分がちゃんと名前を教えていればもっと早く分かった事だからと。

「たく、あんたも大概だな」

「すみません」

「いいさ。ただ、一つ頼みを聞いてくれないか？」

「何です？」

「たまにでいい。ティアナに会いに行ってやってくれ」

そうティーダはどこか照れくさそうに告げると、視線を外へ移す。翔一はそんなティーダに笑顔を見せると、頷いてサムズアップを送った。それを横目で見て、ティーダも小さくそれを返す。

次の日、ティーダに連れられて翔一は管理局本局を訪れる。そこで青年になったクロノと再会し、そこからはやて達と引き合わせられる。はやては涙を溢れさせ、翔一の面倒を見ていてくれたティーダに何度も感謝の言葉を掛けた。

魔法世界帰還から一年弱。やっと出会えた翔一とはやて。こうして翔一は少女達と再会を果たす。

そして、ついに戦士に渡される想いと力。今はただ、その喜びのみを誰もが噛み締める事になる……

ジェイルラボ　廃棄所。ドゥーエは小さなケースを手にそこを訪

れていた。目的は一つ。自分の手にしたケースを捨てるためだ。中身はジェイルの受精卵。他の姉妹達同様に、彼女もそれを廃棄する事になったのだ。

そして、ケースを安置し、来た道を戻ろうとする。だが、その視線がふと止まる。それはある一つのケースへ注がれている。中にあるのは、不気味な生物。人型だが、どこか醜悪だ。

「ドクターの研究素体のなれの果てかしら？　まぁ、いいか。あまり気持ちの良い物でもないし」

そう言ってドゥーエは興味を無くし、歩き出す。そして、ふとある事を思い出すのだ。ウーノ達の廃棄した受精卵。それを入れたケースはどこにあったのだろうと。だが、それをどうこうしたい訳でもないので、すぐに意識からそれは消えた。

ドゥーエの足音が遠ざかる。それと同時に先程の生物が微かに動き、その腕らしき物から触手が伸びる。それがドゥーエが置いたケースへ入り込み、中の受精卵を取り込んだ。

それに呼応するように生物が痙攣する。そして、低く不気味な声が誰もいないはずの空間に響く。

――――これで揃った……

その声を聞く者はいない。それは、蠢き始めた闇の産声。今しばらく続く平穏。その裏で、静かに悪が目覚めようとしていた……

ドゥーエが戻り、数日が経過した。この間に、変化した場所であるキッチンや男湯などを見て、ドゥーエが告げた感想は一言。

――ここ、研究施設でしたよね？

それに真司は頷いたが、ジェイルがそれを否定した。ここはもう研究施設ではなく、自宅だと。それに真司はやや意外そうにしながらも、嬉しそうな笑みを見せた。ドゥーエはそんなジェイルと真司の反応に苦笑し、改めてジェイルへ告げた。

何でもっと早くに戻してくれなかったのかと。それにジェイルは本当に申し訳なさそうに謝った。真司も何となく空気を読んで頭を下げた。それにドゥーエは内心微笑みながらも、表面上は渋々といった感じで許した。

そして、時刻は夜。夕食も終わり、後片付けも終えたナンバーズは姉妹揃って入浴中。総勢十二名の大所帯だが、それを許容出来るぐらいに女湯（温水洗浄室とはもう呼ばない）は広くされていた。

これも真司の提案。一度に全員が入れて、尚且つ洗い場もそれを考慮してやるべきだと。まぁ、真司の監修が入った時点で、どこか銭湯のような作りと雰囲気になったのは否めない。しかし、それを指摘出来る者は、ここにはいなかった。

「にしても、兄貴ってやっぱ強いんだな」

「そうッスね～。アタシとノーヴェの二人でやっとッスから」

「当たり前だ。真司は私とトーレを相手に引き分けるのだぞ？」

湯船に浸かりながら言い合うノーウェ（二人は良く一緒にいるのでこう略される）コンビの言葉に、チンクがどこか誇るようにそう言った。そう、今日は真司との訓練を二人が担当したのだ。

その前日はオットーとディード。真司の強さをデータでしか知ら

ない妹達に、実際の強さを知ってもらおうとジェイルが企画した。結果は当然龍騎の勝利。だが、それは内容的にであって、実際は引き分けている。

セッテの時と同じで、真司はファイナルベントを封印したままで二人を相手に引き分けているのだ。それは真司が成長しているのもある。トーレやチンク、セッテやディエチとの戦いで真司自身も経験を積み、少しずつではあるが、その思考や技術を磨いていたのだ。

「それに、真司は未だに一度も見せた事のない姿を持っている」

「あ、サバイブだよね。あたしも見た事ないな」

トーレのどこか悔しそうな言葉に、セインが同じように悔しそうに応じる。その悔しさの質が、二人はまったく違う所が実にそれらしい。

「一度、ゆりかごの中で使ったって聞いたけど？」

「うん。でも、それは誰も見てないんだ。真司兄さん、自分一人で片付けちゃって」

ドゥーエの声にディエチがそう返した。今でも思い出せるのだ。それを聞いた時のジェイルの必死さを。何せ、真司を冗談抜きに絞め殺しかけていたのだから。もう少しトーレ達が来るのが遅れたら、真司は死んでいたかもしれない。

そんな事を思い出し、ディエチは苦笑した。

「でもぉ～、シンちゃんが言うには、サバイブは強力すぎてあまり使いたくないそうですよ～」

「それに、真司さんは本当なら変身もあまりしたくないらしいわ。あれは、誰かを守るための力だからって」

共に体を洗いながら、クアットロとウーノが告げる。彼女達二人は、真司の事情をそれなりに聞き出し、出身世界の特定などをしていた関係から、真司の内面的な事も他の姉妹に比べると詳しいのだ。

そんな二人の言葉に、どこか感心したように頷いている者がいた。セッテだ。

「さすが兄上。力は誇示するものではなく、他者のために使うものと言っているのですね」

「真司兄様……優しいですからね」

「そう言えば、お兄様が言っていたわ。本当の強さは、誰を傷付けるものじゃないって」

セッテの言葉に続き、双子がそう告げる。この三人は、真司が教育担当となっているため、接している時間が他の姉妹に比べると多い。そのため、起動して真司の影響を受けるまでが非常に早かった。

セッテは真司から掃除を、オットーは洗濯を、ディードは炊事をそれぞれ教え込まれていて、良く暇さえ見つけるとラボの家事をしている。最近では真司よりも家事をするようになり、真司は三人のおかげで幾分か楽が出来るようになっていた。

「……ホント、真司君って凄いのね」

口々に真司を誉めるような事を言っていく姉妹達を見て、ドゥーエはどこか呆れたようにそう呟くのだった……

「っくし！」

「……押さえてくれないかね」

「仕方ないだろ。生理現象なんだから」

同じ頃、真司達も男湯にいた。中々男二人だけで話す事が出来ないので、風呂は貴重な男だけの空間だった。ここで二人は他愛もない事や割と真剣な事まで色々話していた。

ちなみに今日は、ナンバーズの今後の事。ジェイルの計画が成功すれば、元から犯罪者であるジェイルはともかく、ナンバーズはほぼ何の罪もなく、世間に出て行けるだろう。その後の事を二人は話し合っていた。

「で、何だっけ？」

「体の事をどうするかだよ。中々理解され辛いだろうしね」

「だよなぁ。でも、男ってさ。俺もそうだけど、美人に弱いから気にしないと思うけど……」

真司の言葉にジェイルはどこか楽しそうに笑い、頷いた。確かに真司は単純そうだ。そう言って。それに真司は少し憮然とするも、自分で言った手前何も言い返せないまま黙る。

そして、そんな真司にジェイルは嬉しそうにこう告げた。そんな考えをしてくれる相手が、きっとどこかにいるだろうと。その相手と巡り合い、愛し合う事を祈るのみだ。そうジェイルは笑って言った。

その父親らしい発言に真司が感動。俺もそれを心から願うと力強く告げる。すると、ジェイルがそんな真司を見つめて一言。

――意外と近くにいると思うんだけどねぇ……

その言葉に真司は不思議そうな顔をするが、何か自分の中で納得出来るものがあったのか。真剣な表情で頷いてこう言った。

――そうだな、近所で出会った人に一目惚れってあるもんな。

その答えにジェイルは呆然。真司は尚も続ける。社会に出て初めて出会った相手に恋する事は有り得る。意外と自分の運命の人って、近くにいるものかもしれない。そう言った。

そんな真司の言葉を聞きながら、ジェイルは誰にでもなく小さく呟いた。これは相当手を焼くだろうな、と……

湯上りのナンバーズ。それぞれが寝間着に着替えるのだが、ここにも個性が出ていた。ドゥーエとクアットロはネグリジェ。ウーノとトーレは無地のパジャマ。チンクは三毛猫がプリントされた可愛らしいパジャマ。セインとウェンディはTシャツにハーフパンツ。ノーヴェはそんな二人をどこか嫌そうに横目で見ながらも同じ格好。

セッテはデフォルメされた犬の絵のパジャマ。オットーとディードは揃いの絵柄で、星や月がプリントされたパジャマと、それぞれ良く性格や思考が出ていた。

それに全員着替えると、揃って向かうのは食堂。水分補給をするためだ。そして、目的はそれだけではなく……

「で、ミサイルとかビームが一斉にさ」

「……それで良く無事でいられたね」

真司とジェイルが共にパジャマで話している。その手元にはスポーツドリンクが握られていた。そう、風呂上りに真司はジェイルと食堂で熱を冷ますためにこうして雑談するのだが、その内容はライダーバトルの事が多いのだ。

今もどうやらそれを話しているらしく、ジェイルがやや引きつった表情をしていた。ちなみに真司が話していたのは、ゾルダと呼ばれるライダーの話。その重火力を想像し、ジェイルは軽く眩暈を感じていた。

キッカケは、ディエチのＩＳ強化案。現状、チャージ等で時間が掛かるため、もっと別の方法や強化法はないか。そう聞かれた真司が、砲撃でゾルダを思い出して話していたのだ。まぁ、途中からはディエチの事そっちのけで、ジェイルが色々と質問していたが。

「にぃにぃ、アタシらにも聞かせて欲しいッス」

「おっ、何だ。みんなも熱冷まし？」

「ええ。だから私達にも話を聞かせて頂戴」

ドゥーエがそう言うと、セインやウェンディが首を縦に振る。セッテやノーヴェなども同じようで、話して欲しそうに真司を見つめていた。それに真司は少し嬉しく思い、咳払いをしてから話し出す。それは、真司が小さい頃読んだマンガの話。

人に創られた存在のヒーローが、生みの親である博士の娘などと共に、世界征服を企む悪の科学者と戦うストーリー。だが、ヒーローは完全機械だった故に、良心回路と呼ばれる心みたいな物を組み込まれた。しかし、それは未完成で不完全な物だったのだ。

そのため、ヒーローは幾度となく苦しむ。良心の呵責とでもいうのか。悪い事と善い事。その区別があまりに曖昧で、時には善が悪になり、悪が善となる事もある。そんな人間の世の不思議さに翻弄されながら、ヒーローは成長していく。

生みの親の博士を非情な相手に利用され、敵の中に人質として使われたり、やっとの思いで倒したはずの悪の科学者が生きていて、それに対抗するようにヒーローの兄が眠りから目覚めるなど。真司は幼い頃の記憶を辿りながら話していく。

それを聞きながら、ジェイル達はその世界へ引き込まれていく。機械の体。でも、心は人間と同じで、迷い悩み苦しむ。兄弟とも言える相手を、敵として倒さねばならない現実。それは、まるで道を間違えた自分達にも近いものがあるように感じたのだ。

そして、話はいよいよ終盤。ヒーローが仲間や兄弟を人質に取られ、絶対絶命の危機となった。だが、そこで真司はそれまでの熱が消え失せる事を告げた。

「……でも、この後どうなるか知らないんだよ。俺、何故かそこで読むのやめちゃって」

それに全員が大ブーイング。続きが気になるとセインが言えば、眠れなくなるッスとウェンディが続く。きっと救出して大団円ですよねとオットーが尋ねれば、誰かまたヒーローの危機を助ける存在が来るんですとディードが告げる。

ノーヴェは頭を掻き毟るようにしているので、どうもイライラし

ているようだ。チンクはそんなノーヴェを宥めると共に、必ず報われるからと諭している。セッテはトーレに良心とは具体的に何だと聞いて困らせ、ディエチはクアットロと自分達がそうなったら嫌だと言い合っているし、ウーノはジェイルに、決してもう悪事に手を出さないようにと改めて言い聞かせている。

「……それ、救いがなかったんじゃない？」

そんな中、ドゥーエが告げた一言に全員が止まった。多くの者がそんな事言うなと言いたそうな視線を向けるが、真司はその言葉にどこか考え、そうかもしれないと肯定した。

「それも一つの結末かも。でも、でもさ」

「何？」

「救いがないとしても、それでもヒーローは戦ったはずだ。だって、何もしないで終わる事が一番嫌だから、さ」

真司はそう自分の手をじっと見つめて言い切った。その何ともいえない雰囲気にジェイルを除いた全員が見入った。それを知ってか知らずか、更に真司はこう続けた。

――それに……やらなきゃ、何も変わらないから……

その自分に言い聞かせるような言葉は、普段の真司にはない力強さがあった。誰もが言葉を失う中、ジェイルだけはそれに頷いて、周囲に告げた。

「さ、そろそろ寝ようか。あまり体が冷えると風邪を引くしね」

その言葉にもっともだと全員が動き出す。口々に就寝前の挨拶を交わし、それぞれの部屋へ戻っていく。それを見送り、真司も部屋へ戻っていく。ジェイルも真司を見送って、自室へと戻る。そして、ジェイルはベッドに座ると、小さく呟いた。

――変えられる力、それを必ず君に渡してみせるよ。友人として、ね。

救いがないとしても、変わると信じて戦うと告げる男。それを聞いて、その力を授けると誓う男。

本来ならば交わるはずのない道が交錯する時、龍は炎だけではなく、爪を得る。友と言う名の強き力を……

――

空白期も、後僅か。ＳｔＳ編は、ある意味怒涛の展開かと。

ＳｔＳは、龍騎が活躍予定。ＲＸは言うまでもないです。クウガとアギトは……未定。

機動六課は、かなり凄い事になります。

空白期8

月村家　中庭。そこに置かれたテーブルに着き、すずかと五代、そしてアリサの三人は紅茶を楽しんでいた。既に五代達が帰還して三日が経った。すずか達の言った通り、アリサは美人になっていて、五代は最初見た時別人かと思ったぐらいだ。

アリサは五代がクウガである事を知らなかったが、なのは達が魔法を教えた際にすずかからそれを教えられた経緯があり、五代と再会した瞬間こう言ったのだ。

――――何でアタシに隠してたの！

アリサが五代と出会ったのは、なのはとフェイトが二人で隠し事をしていると思った頃。すずかと話し合うために訪れた月村家で、ジャグリングの練習をしている五代を見つけたのが始まり。

初対面にも関らずどこか人懐っこい五代に、アリサは好印象を抱き、兄のように慕った。なのは達の事も当然相談した。これがあったおかげで、五代はすずかとアリサに打ち明けて欲しいと言い出す事が出来たのだ。

「ったく、アタシが隠し事嫌いだって知ってて言わないんだから」

「ゴメンね。俺がクウガって事、あまり人に言わない方がいいからさ」

「それもそっか。……にしても、雄介さんが戻って来たなんてね。すずかが上機嫌になる訳だわ」

アリサは五代を名前で呼ぶ。苗字呼びはあまり好きではないらし

く、五代自身も構わなかったためそうなった。ただ、目上である事を考えて”さん”付けではあったが。

「アリサちゃんも喜んでるよ」

互いに笑みを見せ合っている二人。それに五代も笑顔を浮かべる。五年経った今も変わらず仲が良い二人を見て、嬉しかったのだ。その成長を傍で見る事が出来なかったのは残念だが、それでもこうしてその姿を見る事が出来るだけで、五代は満足していた。

なのは達は遠く異世界にいるが、連絡は欠かしていないらしい。毎日メールや電話をしているらしく、五代は驚いたものだ。ミッドにも地球製の携帯電話が通じるのかと。それにすずかとアリサも頷いて、最初同じ事を思ったと答えた。

その後もそうやって話していた三人だったが、ふと五代の脳裏に声が聞こえた気がした。だが、それはアマダムの声ではない。それ以前に聞いた気がするものだ。

そう考えて、五代は思い出したように立ち上がり、空を見上げた。それに疑問符を浮かべる二人だったが、五代の見つめる先へ視線を動かし、固まった。

そこにいたのは、大きなクワガタ。それがまっすぐこちら目指して飛んでくるのだ。それに気付いて逃げようとするアリサだったが、五代がそれに嬉しそうな表情をしている事に気付き、思い留まった。

「ゴウラム！　ホントに来てくれたのかぁ～」

「「ゴウラム？」」

五代の言葉に揃ってそう尋ねる二人。その瞬間、ゴウラムは五代

の前に降り立った。それに五代は近付き、懐かしがるようにその体を触っていく。その表情は輝くような笑顔。

そんな五代と違って、二人は何とも微妙な表情。昆虫は嫌いではないが、さすがにゴウラムぐらい大きなものは別だ。怖いとか不気味とかいう以前の問題。そう、どう反応していいのか分からないのだ。

そんな二人に、五代はゴウラムを撫でながら説明を始めた。自分がクウガとして未確認と戦っていた頃、共に戦ってくれた仲間の一人だと。その一人という表現に頭を傾げる二人。それに五代は苦笑しながら、光太郎のバイクであるアクロバッターを例に出した。喋り、自分の意志を持つ存在。なら、それは人と呼んでもおかしくないと。

それを聞いてアリサがある事を思った。その光太郎という人の事もだが、ゴウラムは喋るのかと。それに五代は頷くも、自分しか聞こえないし、何を言ってるのかは感覚的にしか分からないと。

「はぁ……何か色々凄いわね、仮面ライダーって」

「そうだね。何でも出来そうな気がするよ」

「う～ん……光太郎さんの話だと、宇宙空間でも活動出来る人や、空を自由に飛べる人もいるらしいよ」

「……その技術って、絶対地球だけのもんじゃないわ」

アリサのどこか恐れるような言葉に、二人が揃って視線をアリサに向けた。それを理解し、アリサは言った。今のミッドにだってそんな技術はないはずだ。なら、その仮面ライダー達が使う技術は魔法世界よりも先を行っている。

つまり、その仮面ライダーを作り出した相手は、少なくとも地球外の存在もしくはその技術を知っている。そして、そんな存在が企てるものは決まっている。それに気付いたからこそ、アリサは怖かったのだ。

（でも、仮面ライダーは別の世界の存在で、しかも、もう悪い奴を倒してくれたんだから大丈夫よ。うん、きっと大丈夫！）

自分を鼓舞するように心の中でそう言い聞かせ、アリサは気を取り直して考える。その横ですずかが五代へある事を確認した。

「ね、クウガは古代の存在なんだよね？」

「う、うん。桜子さんもそう言ってた」

「……もしかしたら、ムー大陸とかアトランティス大陸なんかの話は本当だったのかも」

「すずかも？　アタシもそう考えたとこよ」

二人揃って深刻そうな表情を浮かべていた。それに五代は何か不思議な感じを受けるが、どこかその二人が桜子の碑文を解読している時に似ていて、懐かしさを覚えると同時に嫌な予感もしていた。

そんな五代へ、二人は推論だけれどと前置いて話し出した。クウガが古代の存在ならば、少なくとも五代がいた世界には、それを実現させる技術があった。それは、もしかしたら超技術を持っていたと言われるインカやマヤにアステカ、更にはアトランティスやムー等の滅んでしまったと思われた者達の技術が関わっていたのかもしれないと。

更に、仮面ライダーはそれらの技術すら超えた技術で作られた可能性が高いだろうと、二人は言った。そして、それを補足する材料としてすずかが語ったのは、光太郎から聞いた人体改造の話。

それを聞いた瞬間、五代が明らかに反応した事で、すずかは確信した。仮面ライダーとは、本来人を改造した存在だったのだと。

（つまり……光太郎さんは……）

光太郎の秘密に気付いてしまったすずか。だが、アリサは生憎光太郎と出会っていないため、そのすずかの変化の理由に気付けない。しかし、五代の表情を見て、それに光太郎と呼ばれる者が関わっていると判断した。

「……ま、信じられない話だけど、侵略者がいたって事よ。少なくとも、仮面ライダーがいた世界には」

「目的は、地球侵略……かな？」

「映画じゃあるまいしって言いたいけど、魔法も十分それだったし。地球侵略を考えるヤツラが来ても、不思議じゃないわ」

どこか呆然となる五代を置いて、二人はそう結論付けた。そして、そこまで考えて心から安堵し、同時に尊敬した。

おそらく知られる事無き敵を相手に、たった一人で立ち向かって行ったライダー。その勝利と生き方に。一人の人間として、アリサもすずかも感じ入ったのだ。

（勇敢に戦った人もいた……雄々しく戦った人もいた……。きっと、それは……愛する人や世界を守るために）

五代を知り、光太郎を知るすずかは、そう他の仮面ライダー達を判断した。どれだけ辛かったのだろう。どれだけ悲しかったのだろう。自らの正体を隠し、一人強大な相手と戦う。物語としてはいいのだろう。だが、それを現実として考えれば、すずかは居た堪れない気持ちになった。

何か代償を求める事無く、ただ守るために戦う。そんな並の者なら挫けてしまうだろう地獄。それを戦い抜けたのは、きっと彼らが――。

（仮面ライダー、だったからだよね）

そう思う。それにこうも思うのだ。彼らも一人ではなかったのではないかと。五代もそうだったのだ。未確認と戦っていた時、それを支える者達がいた。そんな存在が他の仮面ライダー達にもいたはずだと。

みんな、それがあったから戦い抜けたのだ。勝利したのは、仮面ライダーの力だけではない。五代が言ったように、みんなの力が合わさったからだ。

すずかがそう考え、静かに涙する横で、アリサもまた仮面ライダーと呼ばれる存在へ思いを馳せていた。

（正義の味方……作り話や空想の中しかいないと思ってた。でも、居たんだ……本当に）

五代の事を聞いて、ゴウラムを見た今なら心から信じられる。恐ろしい相手と戦い、世界を守り抜いた存在がいる事を。

誰も知らないその影で、人では倒す事が厳しい者達を相手に、人ならざる姿と力を、とても人間らしい心で振るうヒーローが。それを誰にも知らさないのは、人がそこまで強くないのを知っているか

らだろう。そして、人を愛するからだろう。
誰が喜ぶ。自分達の生活が脅かされていると聞いて。それを守るために戦う存在がいる事を聞けば、希望となり得るだろう。だが、それは希望と同時に絶望への光でもある。

（だから、知られないように戦ったんだ。知らないままで終わるなら、それがいいって）

そこまで思い、アリサは呆れた。正気の沙汰じゃない。どう考えても絶望だ。自分が倒れればそこで終わり。助けも期待出来ない。そんな状況で命を賭けて戦うなんて馬鹿げている。そう考えた。
でも、それを心から否定出来る程、アリサは捻くれていない。分かるのだ。その気持ちが、その考えが。自分がもしそうなったら、きっと自分はなのは達を頼らない。知られないようにするだろう。巻き込みたくないから。

「……ねぇ、雄介さん」

「何？」

だから、聞きたくなったのだ。目の前にいる仮面ライダーに。自分達の絆を深め、なのは達を助けてくれたヒーローに。

「雄介さんなら、どうするの？」

クウガならどうするのか。いや、五代雄介ならばどうするのか。彼の戦いを聞いたすずかは、どこか息を呑んで見守っていた。そんな二人に五代はあっさり答えた。

「話してみる」

「「え？」」

「言葉は通じるし、元は同じ人間だし、それに同じ体になった仲間だからさ」

五代は知らない。歴代のライダー達が戦った相手のほとんどは、脳改造を施され組織に忠誠を誓わされている事を。しかし、それでも彼はそうしただろう。意思疎通が出来るのなら、分かり合う事は可能だと信じて。

そう、五代は知らないが、過去にいたのだ。悪の怪人でありながら正義の心に目覚め、ライダーと共に戦った者達が。闇より生まれし存在。だからこそ、彼らは光を目指す。かつて、仮面ライダー――本郷猛はそう言ったのだから。

「それでも無理な時は……戦う、しかない……かな」

自分の手をもう一つの手で包むようにしながら、五代はそう言った。まだ拳を振るう事に嫌悪感がない訳ではない。それは、決して恥ずかしい事ではない。むしろ誇る事なのだ。誰かに力を振るう事に、何の疑問を抱かなくなっては、仮面ライダーはライダーではなく、単なる生物兵器に成り下がってしまうのだから。

五代がそう答えると、すずかもアリサも揃って謝った。五代の気持ちを考えず、そんな事を尋ねた事を。それに五代は気にしなくていいと笑った。別に二人は軽い気持ちで聞いた訳じゃないし、例えそうだったとしても、こうして謝る事の出来る心の持ち主なのだからと。

そして、ゴウラムはこの日から月村家に生息するようになった。生息というのは、科警研と違うからかゴウラムが庭を動き回ってい

るからだ。ちなみに、餌は何だとイレインに聞かれ、五代が金属と答えると、昆虫図鑑を読んで備えていたファリンがかなり残念がっていた。

「どうだい？」

「凄く高いです！　こんなに違うんですね、眺めって」

光太郎の肩に乗り、エリオは目を輝かせて答えた。ここ、ハラオウン家に光太郎が来てまだ一週間。それでも、光太郎はリンディやアルフの手助け、それにたまに顔を見せるフェイトの助言などもあり、エリオとこうして良好な関係を築く事が出来た。

それには、光太郎の性格やエリオの素直さ、それに数少ない同性というのも大きく関わっている。ハラオウン家の男性はクロノしかいなかった。だが、彼は次元航行艦の艦長をしているため、長期に渡り、家にいない。つまり、エリオは基本的に遊び相手がアルフしかいなかった。そこに光太郎という兄のような存在が現れ、状況が激変したのだ。

「よ～し、次は少し走ってみるからな」

「えっ？　走るって――――っ！？」

エリオが問いかけようとした瞬間、光太郎はエリオを肩車したまま庭を走り出す。それに驚き、光太郎にしがみつくエリオだったが、徐々にその速度や状況に慣れたのか、閉じていた目を開けて目の前の光景を見てみた。

景色が飛ぶように流れていく。それを見てエリオは驚いた。光太

郎は魔法が使えないと聞いていた。その証拠に念話さえ出来ない。でも、フェイトは光太郎をこうエリオに紹介した。

――――きっと、ミッドでも五本の指に入るぐらい強い人だよ。

それを今エリオは実感していた。そして、同時に思う。魔法が使えなくても、こんなに速く動く事が出来る人がいる。なら、自分も頑張れば光太郎ぐらいになれるんじゃ。何せ、自分は魔法が使える。それと一緒に体も鍛えれば光太郎ぐらいにも、それを超える事も出来るかもしれない。

そんな風にエリオは考えた。そして、光太郎が速度を落として止まったのを確認してから、こう切り出した。

「光太郎さん」

「どうしたの？　やっぱり怖かったかな？」

「いえ……あ、確かに最初は怖かったです。でも、光太郎さんがしっかり足を持ってくれたの、分かりましたから」

エリオがそう言うと、光太郎は嬉しそうに笑みを返す。それにエリオも笑みを返すが、すぐにそれを消してあるお願いを告げた。

「それで、お願いがあるんです」

「お願い？」

エリオはどこか不思議そうな光太郎に、意を決して言った。自分も光太郎のように強くなりたい。だから、色々と教えて欲しい。そうはっきり告げた。それに光太郎は驚きを見せるも、エリオの顔を

見て少し悩んだ。
　自分の身体能力は、改造されたための物。決して努力で身につけたものではない。それを話すべきか否か。そう、このままではいつかエリオの期待を裏切る事になる。かといって教えれば、それはそれでエリオの折角の決意に水を差してしまう。

（どうすればいい。どうすればエリオ君の気持ちを裏切らず、無駄にせずに済む……）

　光太郎がそんな風に思い悩むのを見て、エリオの顔に不安の色が出始める。自分の頼みが光太郎を困らせてしまった。そう思ったからだ。故にエリオはエリオでどうしようか考える。何とか光太郎に頷いて欲しい。でも、あまり無理を言い過ぎて嫌われたくない。
　そんな感じで二人して思い悩んだ結果、先に答えを出したのは光太郎だった。光太郎は一旦エリオを肩から下ろし、しゃがんで視線を合わせた。

「エリオ君は、どうして強くなりたいんだい？」

「……えっと、僕、もう少し大きくなったらフェイトさんのお手伝いがしたいんです」

「それで？」

「だから強くなって……フェイトさんを守りたいんです。アルフやリンディさん達も。大切なみんなを守れるようになりたいっ！」

　エリオはそう言い切った。その眼差しはどこまでも真っ直ぐで、曇りのないものだった。その瞳と想いを聞いて、光太郎は嬉しそうに頷くと、エリオにこう言った。自分が教えられる事は教えるけれ

ど、それで必ず自分のようになれる訳じゃない。それだけは忘れないで欲しいと。

それにエリオは力強く頷き、光太郎はそれに頷き返した。そして、次の日から光太郎はエリオと簡単なトレーニングを開始した。魔法は知らないし、良く分からないので何も言わなかったが、安易にそれに頼る事はしないようにと言い聞かせた。

どんな時でも、最後に自分を助けるのは力ではなく、諦めない気持ちだ。そう光太郎はエリオに何度も言った。それにエリオも頷き、トレーニングに励んだ。腕立てや腹筋などを、光太郎は子供でも無理なく出来る程度のレベルでやらせた。

勿論、そればかりではなく、休憩や休みの日も設け、その際はエリオと疲れてクタクタになるまで遊んだ。そして、色々な話も聞かせた。フェイトを守る事は、必ずしも管理局に入る事だけではない。そう思った光太郎は、自分がやっていたヘリパイロットなどの様々な職業の話も、その一環として聞かせた。

そして、光太郎にとってこのハラオウン家は、ある事を思い出させるには十分な程暖かかった。

（……おじさん達の家を思い出すな、ここは。茂君やひとみちゃんは元気にしてるかな……）

ゴルゴムを倒した後、身を寄せた暖かい家庭。そこの記憶が光太郎に楽しかった思い出と、悲しく辛い思い出を同時に思い出させる。

世話になった佐原夫妻は、クライシスの最後の怪人であるジャークミドラによって殺され、帰らぬ人となった。残された茂とひとみは、光太郎の仲間の一人である的場響子に引き取られ、今もどこか平和に暮らしているだろうと、光太郎は信じている。

そんな光太郎の目の前では、アルフが美味しそうに肉を食べ、エリオはリンディに今日の事を聞かれ、笑みを浮かべながら答えている。そんな団欒を見て、光太郎は思った。

これを守るためにエリオは強くなりたいと思ったのだと。それは、とても尊い気持ち。誰かのために強くなりたい。それは、自分達仮面ライダーにも言える事だ。そう思った光太郎は、内心誓う。

（今度は、前回のようにはならないぞ邪眼。必ず俺が倒してみせる。仮面ライダーＢＬＡＣＫＲＸが！）

決してこの平和を壊させはしないと。未だ居場所分からぬ邪眼。その復活がいつかは分からないが、必ず倒してみせる。今後こそ二度と復活出来ないように。そう強く誓って。

「光太郎さん、お代わりはどうです？」

「あ、すみません」

「結構食べるよねぇ、光太郎ってさ」

「そういうアルフもだと思うよ？」

そこから始まるアルフとエリオのじゃれ合い。それを見て、楽しそうに笑う光太郎とリンディ。こうして、今日もハラオウン家の夜は過ぎていくのだった……

涙を浮かべ、立ち尽くす赤髪の少女。同じように立ち尽くす桃色の髪の女性と金髪の女性。そして、銀髪が美しい女性もまた、同じ

ように呆然と立ち尽くしていた。ツヴァイはそんな四人の様子に驚きを感じていた。ただ一人、屈強な男性だけが目の前の少女と男性に声を掛けた。

「遅かったな、翔一」

「ただいま。ザフィーラさんも元気そうでよかった」

「し、翔一――――っ！！」

翔一の声を聞いた瞬間、溜めていた涙を流してヴィータが飛びついた。それをびっくりしながらも受け止める翔一。それを契機にシグナムが、シャマルが、そしてリインが動き出す。はやてとツヴァイはそんな四人に笑顔を見せている。

ティーダによって再会を果たしたはやては、家族全員に何としても今日の夜は家に帰る事と厳命した。それがどういう意味かは分からず、疑問を感じながら帰宅した守護騎士達だったが、リビングに来て見つけた翔一の姿にしばし呆然となったのだ。

ヴィータは泣きつきながら翔一の胸を叩き続け、シグナムとシャマルは涙を拭いながら、無事で良かったと言った後、軽く文句と共にこついたり抓ったりしている。リインは涙を浮かべて会って礼を言いたかったと告げ、一言助けてくれてありがとうと言って静かにそれを流した。ザフィーラははやての傍へ行き、信じて待った甲斐があったと言っている。

それに頷き、はやては翔一達を見つめながら思い出す。自分がクロノに呼ばれて、ツヴァイと共にアースラの艦長室を訪れた瞬間を。

（ほんま、頭が真っ白になったんは、翔にぃがいなくなった時以来やったからな……）

居なくなった時受けた衝撃。それと同じ衝撃を持って翔一は帰ってきたのだ。それを内心思い出し、はやてははっきりともう一度告げた。

「お帰りなさい、翔にぃ！」

「……ただいま、はやてちゃん。それに、ヴィータちゃん、シグナムさん、シャマルさん、ザフィーラさん、アインさん」

「リインもいるですよ！」

自分だけ呼ばれなかった事に、ツヴァイがそう怒って言うと、翔一は両手を合わせて謝り、ツヴァイの名も呼んだ。それに満足そうに頷くのを見て、はやて達は笑い声を上げるのだった……

少々遅いが、久しぶりの翔一の料理にはやて達は懐かしさを感じていた。唯一ツヴァイだけは初めて味わう事になったが、その美味しさに感激した。それにはやてが、翔一がレストランで働いていた事を教えるとツヴァイは納得した。

その後も翔一がいない間の話をしながら、はやてが翔一のバイクもちゃんとこの家にあると告げると、翔一は嬉しそうに笑ったが、それである事を思い出した。

「あ、そうだ。クロノ君から聞いたけど五代さんも戻って来てるんだよね」

「そうや。今は海鳴におるよ」

「俺、五代さんに渡す物があるんだ。それ、渡しに行きたいんだけど」

翔一の言葉に全員が不思議そうな表情を浮かべて、視線を翔一へ向けた。それに翔一は自分がティーダの世話になる前の話、つまり科警研での話をすると、はやて達の表情が変わる。

それに翔一が戸惑っていると、はやてがこう切り出した。実は、五代もここに帰ってくる前に別の世界へ行っているのだと。しかも、そこで過ごしたのは一日にも満たないのに、こちらでは五年以上が経過していたのだという。

それを聞いて翔一は自分と同じだと思った。そして共通しているのは、二人共に新たな力を連れて来ている事。それは、五代の言葉を借りるなら闇の力に対抗するため。それを聞き、翔一の表情が険しくなる。

「それって……まさかっ!?」

「……五代さんも光太郎さんも、邪眼の事や言うとった」

「あたしらもそう考えてる」

「闇の書の闇さえ飲み込んだ相手だ。そう簡単には死なんという事らしい」

「私達も、色々と調べてはいるんだけど……」

「手掛かり一つ見つからん」

はやての言葉をキッカケに、ヴィータが、シグナムが、シャマルが、ザフィーラがそう告げていく。そんなどこか辛気くさい空気を変えるべく、ツヴァイが明るく言った。

「大丈夫です！　リイン達には、仮面ライダーが三人もいるですよ！」

「そうだな。ツヴァイの言う通りだ。主も翔一も元気を出して。皆も暗い顔をするな」

そう言ってリインは笑ってある仕草をする。それに全員が笑顔を浮かべ、それを返す。それは、サムズアップ。希望を与える彼らの合図。どんな状況でも諦めず、必ず勝利をもたらす”魔法”。

そして、翔一ははやてに尋ねた。仮面ライダーが三人と言っていたが、どういう事かと。それにはやてが嬉しそうに笑みを見せると、こう言った。五代が連れてきた光太郎という男も、仮面ライダーなのだと。しかも、その名は翔一も知っている存在だ。そうはやては告げて笑う。

「その名は……」

「「「「「「仮面ライダーＢＬＡＣＫＲＸ」」」」」」

はやての区切った意味を理解し、六人はそう続けた。その響きを聞いて、翔一は驚きと同時に喜んだ。自分が出会った仮面ライダー。それが、手助けに来てくれたと、そう思ったからだ。しかも、ＲＸはキングストーンを持った存在。つまり、クウガと同じく邪眼を封印出来る可能性を持っている事も考えられる。

そこまで考え、翔一は確信した。自分が戻った理由。それは、二

人の支援をするためだと。邪眼が狙うキングストーン。それを持つクウガとＲＸ・彼らの支えになる。それがアギトの役目なのだろう。そう感じたからだ。

それともう一つ。この八神家の者達に会うためだとも思った。突然の別れではなく、今度別れる事があればきちんと言葉を交わして別れるために。

（絶対に、今度こそ邪眼を倒してみせるんだ。仮面ライダーとして、必ず！）

ジェイルラボ　研究室。そこでジェイルは一心不乱にあるデータを調整していた。しかし、その画面に”Ｅｒｒｏｒ”と表示される。それにもめげず、ジェイルは再び打ち込みを開始するも、また同じ事が起きる。

それは、ジェイルが龍騎に渡したい力。そのための作業なのだが、それは一向に進まない。その原因というか、理由は把握している。

「やはり無理なのか……ベントカードの製作は」

ジェイルが創ろうとしているのは、新しいベントカード。それを決意したのは、真司に聞いたサバイブの力の一端。龍騎だけではなく、ドラグレッダーも強化されて、別の姿に変わるのだと真司は教えた。それを受け、ジェイルは色々と考えた結果、龍騎の強化はその体ではなく、使う力にしようと思ったのだ。

そして、今ベントカードを新しく作ろうとしているのだが、中々上手くいかないのだ。実際のベントカードのデータを使い、それを変化もしくは強化しようとしているのだが、それが成功しないのだ。

ちなみに、目指しているのは真司があったらいいなと言った他のライダーの物。トリックやスティール等である。だが、それを真司の抽象的な説明だけで再現するのは難しく、現状で可能だと思うのは現在ある物のコピーが精一杯だとジェイルは考えている。

それと、ブランク体の再現は未だに実現していないが、既にある程度は終わっている。一番の問題はその装着プロセスをどうするかだ。即ち変身方法である。瞬間的にしようとすれば、バリアジャケットとなり魔力が必要になる。それでは意味が無いのだ。

（元々魔力無しの人間用にと考えているからねぇ）

未だにどうしても変身だけが壁になっているのだ。現状は完全にバリアジャケット。その強度が従来より二割ほど高いだけ。どうしてもそれが限界なのだ。それ以上を望むと、再現が不可能になる。ただ、これを実際に装着する事に変えると解決出来る。ただ、その分重量や持ち運び等で改善点はある。しかし、それならば強度は実現可能な段階にあるのだ。

そこまでを考え、ジェイルはため息を吐いた。簡単に行くと思っていた事が、中々行かない。だが、それにイラつく事はない。真司が自分の世界に帰る日はまだ遠い。それまでに完成させればいい。そう思っているからだ。

まぁ、ライダーシステム自体の解析は順調に進んでいるし、最高評議会もジェイルが仕事を選別しているのを知って以降は、興味を持ちそうな物を送ってきている。だが、それも今のジェイルにしてはそこまで興味をそそるものではなかったが。

「前途多難だねぇ……」

そう呟くジェイルは、どこか楽しそうに笑っていた……

その日、ラボに珍しく、いや初めて客人がやってきた。その名は、トレディア・グラーゼ。ジェイルの考えていた計画の同志だ。彼がここに来たのは、ある事実を確かめる事だった。

「……では、本当にクーデターは中止と？」

「ええ。もうドクターには、いえ私達にはそんな気持ちはありません」

「それどころかぁ、マリアージュは私達の敵ですねぇ」

「貴方の考えも分からないではありません。しかし、我々は平和に暮らそうと決めたのです」

信じられないといった表情のトレディアに、ウーノが、クアットロが、トーレが告げる。その後ろには微妙な表情の姉妹達がいる。真司もそこにいたが、彼はトレディアを知らないため、疑問を感じてばかりいた。

何故ここにジェイル達以外がやってくるのか。そして、クーデターを起こして欲しいと言わんばかりの言い方や、雰囲気が真司にはどこか嫌悪感を感じさせた。真司は、管理局の事を簡単ではあるが教えてもらっている。

次元世界の治安維持をし、その犯罪者達を逮捕したり、裁いたりする組織。つまりは警察みたいなものだと。そして、ジェイルに戦闘機人を作るように言ってきたのはそこだとも。

真司はそれを聞いて驚いたものだ。警察が犯罪者に協力を頼み、

しかも内容が人体改造のようなものだと。それについて感じた事を真司が告げると、ジェイルは呆れるように言ったのだ。

どこでもある事だと。完全真っ白な正義なんてない。どこかで汚れていても、それに気付きもしないのが”正義の味方”の正体だ。そう嘲笑うかのようにジェイルは真司へ答えたのだ。

「……そうか。それでどうするんだね？」

「貴方を止めるべきなのかもしれませんが……」

トレディアにそう言って、ウーノは視線を彼から逸らす。そして、そのまま視線を真司へ向けた。それに真司は少し驚くも、何となくウーノは自分の意見を求めているような気がした。

そう思い、真司は小さく頷いてみせると、ウーノが微かに笑みを見せる。そして、真司はその場から歩き出し、ウーノの隣へ向かう。トレディアは真司の存在にやや驚いたようだったが、その視線を鋭くしてその顔を見つめた。

「初めまして。俺、城戸真司って言います」

「……トレディア・グラーゼだ」

やや緊張した面持ちの真司。それに対し、威圧感を放つトレディア。そんな二人を見つめるナンバーズ。

「何でクーデターを起こしたいかは知らないですけど、それで何が起きるか考えた事があるんですか？」

「何？」

「革命って、確かに俺のいた世界でも何度かあった。でも、それで亡くなった人が沢山いる。その頃は、言論の自由とか表現の自由とか無かったから、仕方なかったのかもしれない……。でも、ここは違う」

真司はそう言ってトレディアを見据える。それにトレディアも強い視線を返す。その眼力に負けないと心で強く思い直し、真司は続けた。

言葉で変えられる事が出来る。思いをぶつける事で分かり合う事は出来る。犠牲を出さずに、誰かを死なせずに世界を動かす事は出来る。理想論でしかない。でも、真司はそれを心から信じている。

誰だって死にたくないし、親しい相手が死ぬのも嫌だ。それを考えれば、どうして犠牲を出そうとするのか。そう真司は問いかけた。

「綺麗事で世界は変わらん。現に、今も私がいた世界は内戦の真っ只中だ」

「それでも！　それでも俺は殺しあうべきじゃないと……思う。だって……」

その真司の言葉に全員が視線を向ける。それを受け、真司は何かを決意したように息を軽く吐いて言い切った。

「憎しみは、憎しみと空しさしか生まないから」

真司は心からそう告げた。何故かは分からないが、記憶のどこかで復讐を誓い戦っていたライダーがいた気がした。その姿と最後をおぼろげに思い出して、真司はそう告げた。

拳を振り上げる前に、言葉を尽くそう。振り下ろす前に、相手の言葉を聞こう。最後の最後まで分かり合う気持ちを無くさないよう

に。真司はそう思ってトレディアに語った。自分がジャーナリストをしていた事を含めて。

決して言葉は無力じゃない。力を振るうのなら、それはいつでも誰かではなく、みんなのために。そう真司は告げた。

「……甘い。そして青臭い考えだ」

「……だけど、それが一番良いって誰だって思ってる」

違いますか。そう真司はトレディアへ言い切った。その目を見て、トレディアは一瞬だがその迫力に気圧された。真司は言った事は正論。しかし、それが現実を知らず、見た事もない者が言っている理想論であったのなら、トレディアは一笑の下に伏しただろう。

だが、真司の目はそういう物を見て、感じてきた者の目だった。そんな悲劇や苦痛を知りながらも、まだ希望を捨てない者の目。それは、トレディアには眩しく恐れるものだった。

（そうか……スカリエッティが心変わりをしたのは、この男が原因か。希望を、この者が与えてしまった。混乱による改革ではなく、対話による改革という、そんな夢物語を……）

トレディアは知らない。そもそもジェイルは彼の思想に共感などしていなかった。だが、都合よく利用するために話を合わせただけに過ぎなかったのだ。

真司の言葉にトレディアはジェイル達の説得を断念。そして、彼は真司へこう言って去って行った。

――君の考えがどこで変わるか楽しみだ。

その言葉に真司は反論しなかった。トレディアはそんな真司に逆

に違和感を感じたが、何も言わずにそれで去って行った。この後、本来ならトレディアは発見したマリアージュを起動させた時、それに襲われ死ぬ事になる。

しかし、それを防ぐ者がいた。そう、龍騎とナンバーズである。彼らはジェイルが密かにトレディアに着けていた発信機を使い、位置を特定。マリアージュの危険性を知ったためそれを破壊するべく、後を追っていたのだ。

自分の危機を救ってくれた龍騎達に、トレディアは呆然となりながらも問いかけた。どうしてここにと。それに、龍騎ははっきり答えた。

――理不尽から命を守るのが、仮面ライダーだから。

それは、時に新暦七十三年の出来事だった……

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

続き。次回で空白期は終わろうと思います。五代と翔一の再会。光太郎が知るプロジェクトＦａｔｅ。真司は、いつも通りのほのぼの予定。

ゴウラムは、五代達が帰還して三日後にいなくなったので、やっと再会です。時間軸がバラバラのため、混乱させせて申し訳なかったです

空白期9

五代が海鳴に戻って一年が経った。その間も特に大きな事件もなく、五代達は平和な時間を過ごしていた。なのは達は仕事が忙しいらしく、中々海鳴に戻ってくる事はなかったが、それでも三ヶ月に一度ぐらいは顔を見せに来た。

そして、この日もそうだった。はやてが会いに来ると聞いて、五代はすずかとアリサと共に出迎えたのだが、そこに予想外の人物が一緒に現れたのだ。

「翔一君っ!?」

「お久しぶりです、五代さん!」

はやてと共に現れたのは、事もあろうか翔一だった。しかも更に驚いたのは翔一が押して来たバイクだ。そう、それは五代にとってもう見る事はないと思っていた存在。

それを翔一は笑顔で五代へ見せた。それを確認し、五代は心から驚いたと言った表情を見せ、大声で叫んだ。

「これ、ビートチェイサーだよね?!」

「はい。榎田さんから渡してくれって」

「榎田さん?! ちょ、ちょっと待って翔一君。それ、どういう事?」

驚きの連続に五代はそう言って翔一を見つめた。それにはやてと翔一は苦笑し、すずかは五代の口から出た名前に記憶を呼び起こす。

アリサは一人置いていかれたようにしており、それをはやてが気付いて事情説明。
それと同じくして翔一は五代へ説明をした。自分があの光で飛ばされた先の話を。そして、そこで託された物を全て。それを聞いて五代は納得し、同時に感謝した。

「そっか……そういう事なんだ」

「はい。あ、それで榎田さんから伝言を預かってるんです」

「伝言？」

「はい。ええと……」

翔一はそう言って一枚の紙を取り出した。それは、伝言をメモした物だ。そして、それを読みながら榎田から言われたまま、五代へそれを告げていく。

――何か大変な事になってるらしいけど、負けないでね。あ、それとお土産よろしく。

それは榎田だと五代はすぐ分かった。簡単だが、あの人らしい。そう思って五代は苦笑した。それに翔一は次の伝言を伝えた。

――まったく、本当に完治したかどうか分からないのに変身したらしいな。しかし、山か海かと思ったら魔法の国か……ホントに冒険してるじゃないか。帰って来たらまた体診てやるから。……あまり無理すんじゃないぞ。

それを聞いて、五代は笑みを浮かべる。それが誰かもすぐに分か

った。相変わらずの言い方だが、やはり自分の身を案じてくれる所は変わっていない。それが五代には嬉しかった。その笑顔を見て、翔一は次の伝言を告げる。

――どうも君は寄り道に縁があるらしいな。そちらの戦い、俺は助けてやれないがこちらの事は心配するな。……そちらの冒険が終わったら、ちゃんと椿に体を診てもらえ。

その言葉も五代には誰からかすぐに分かった。そして、同時に心配するなの意味も。きっと、彼はビートチェイサーやゴウラムの事を言っているであろう事を。故に、五代は先程と同じように笑みを浮かべた。翔一はそれに頷いて最後の伝言を伝える。

「えっと、たった一言なんです」

「えっ？」

「……窓の鍵、開けとくから」

その翔一の言葉に五代以外の全員が疑問符を浮かべた。今まではどれも五代を励ましたりする内容だったのが、急にまったく関係ないものに変わったからだ。でも、五代だけはその言葉に心から嬉しそうに笑顔を見せる。

それを見て翔一達は益々疑問を深める。どこが五代を笑顔にさせたのかまったく分からなかったからだ。

「そっ……か。……うん、そうなんだ……」

五代はその一言だけで嬉しかった。彼は知らない。あの雨の中、彼女がそれを消え入るような声で告げていたのを。あの時伝えられ

なかったであろう想い。それをそこに込めて彼女は五代へ伝えたのだ。

それは、自分をクウガとして支えてくれた者達と違い、クウガになる前から支えてくれた存在。その相手からの何にも負けない励ましと信頼。それがその言葉だと五代は知っているから。

そんな五代に色々と聞きたい気持ちになる翔一達だったが、それを聞ける程彼らは雰囲気を読めない訳ではない。結局五代にその言葉の意味を聞けず終いだった。

「あ、それと……妹さんだけは、時間が深夜だったから電話出来なかったって榎田さんが……」

「そっか。みのりはそうだね」

妹の伝言が無かった訳にすぐに理解を示し、五代は少し寂びそうに頷いた。でも、五代は次にはもう笑顔を見せてこう言い切った。

――大丈夫。みのりもきっと榎田さん達と同じ事思ってるから。帰った時、会いに行って安心させるよ。

その言葉とサムズアップに笑顔の翔一。だが、すずか達はその言葉に素直に笑う事が出来ないのだった……

その後、五代ははやてと翔一の三人で話があると言われ、月村家の一室にて話をしていた。それは、はやてからの今後の事を踏まえての話。あの空港火災等の大災害が起きても、管理局は陸や海、空と各部署のしがらみやプライドなどが邪魔して中々動きが取れない。

しかも、横の繋がりは弱い癖に縦の繋がりはきつく、下の者達の意見や要望は中々通らないのが現実だった。陸には陸の、海には海の、空には空の苦労があり、色々と部署や管轄によって不満があるのだ。

「……でも、それを全て知っとる人は少ない。陸の大半は海や空に不満を持っとるし、海や空も不満持ち。互いの苦労や現状。それをちゃんと知って物を言っとる人は、残念ながら上層部どころか全体にもほとんどおらん」

「……つまり、はやてちゃん達はそれをどうにかしたいんだ」

「そうなんよ。せめて下の方だけでも横の繋がりを思てな。都合良くなのはちゃんは空の所属。フェイトちゃんは基本海や。で、わたしが陸を中心に動いとるし」

「で、どうにかしてそれらの問題を解決……とまでいきませんけど、改善出来るようにしたいなって、はやてちゃん達は考えてるんです」

はやてと翔一の話を聞いて五代は頷いた。どこでも同じような話はある。国だったり、警察だったり、組織と呼ばれるものには付き物の話だ。そしてはやてが五代に頼んだのは、邪眼退治だけではなく、災害などの際に救助活動を手伝ってもらいたいという事だった。

クウガの力なら、普通なら諦めるしかない状況からでも救える命がある。翔一もアギトの力でそれをしてくれると言ってくれた。その言葉に五代は考えた。クウガの力は確かに守るための力だ。でも、五代はそれをあまり大っぴらに使ってこなかった。

その理由はクウガの異常性。だが、海鳴はともかくミッドならそれもあまり考えなくて済むらしい。どうも、仮面ライダーはバリアジャケットかそれに準ずる物と考えられているらしく、何より光太

郎がＲＸとして人助けをしていて知名度が徐々に高まっているらしい。

「……光太郎さんはそれを何て言ってるの？」

「苦笑いしながら、ミッドの人達は心が広い言うとる」

「魔法生物とかいますから。少し異形なだけじゃそこまで驚かないみたいですね」

翔一の言葉に五代も以前戦った魔法生物を思い出し、納得。確かにクウガやアギトの方が姿形なら人間に近いからだ。

「……そうだね。で、もしそうなら俺ははやてちゃんと？」

「あ、それなんやけどな、どうしようか迷っとるんよ。どっちかって言うと、フェイトちゃんの方がええかなとも思うし」

はやてはそれからこう告げた。現在、フェイトは光太郎と協力し、戦闘機人と呼ばれる存在を作り出した相手とその技術を持つ者を捜していて、人手が欲しいらしい。はやての方は翔一だけでも十分な程人手もいる。

それにフェイトの方は相手が相手だけに仮面ライダーの方が都合がいいだろうと。それを聞いて五代は頷いた。いざという時、魔法ではなく肉弾戦で戦えるライダーなら、状況などに左右されない。そう判断したからだ。

「それに、災害時はフェイトちゃんの傍の方が色々融通利くんよ」

「えっと、執務官だから？」

「そう。わたしは結局どこかの部隊付きになるからな。自由には動けないんや」

はやてはそう苦笑し、小さくため息を吐く。そして、静かに語り出す。おそらく五代は、どちらともつかない状態になる可能性が高い。住居はこのまま月村家で構わない。ここの転送ポートから、フェイトからの情報や光太郎の勘、自分の頼みなどで動いて欲しいと。転送魔法は、完全フリーとなっているリインがやる事になった。リインは現在八神家の家事を担当していて、局員にはなっていない。

その理由は、リインの現状にある。はやてのユニゾンデバイスはツヴァイであり、リイン自身は魔法使用自体は問題ないが、邪眼のせいか魔力量が低くなったため、満足に前線で戦う事が出来ないからだった。そのため、はやてがリインに家事を仕込み、仕事を与えたのだった。

ちなみに光太郎は恐ろしい程の勘で、事故などを未然に防いだり被害を食い止めたりしていた。それを聞いて、五代達は揃って驚き、光太郎の勘は良く当たるとフェイト達は頼りにしている程だった。

こうして五代は再びミッドを訪れる事にする。それは、光太郎にその話をするためであった。そこで再会した光太郎やフェイト、アルフに笑顔を見せると同時に、アルフの子供化に驚いた。エリオにもすぐに懐かれ、結婚式以来となるクロノとエイミィには微笑ましいものを感じ、リンディの変わりのない姿に驚いたりもした。

そして、何かあればリインが来てくれ、光太郎と共にバイクでミッドを駆ける。それは今までと違い、誰かを助けるためだけの戦い。暴力を振るうのではなく、困っている人達を守り、助けるだけの変身。

日常ではすずか達の荷物持ちとして働いたり、イレイン達と屋敷

の掃除をしたり、更に翠屋の手伝いも継続して行なうという頑張りを見せていた。

一方、翔一ははやて達と共に様々な場所へ行き、聖王教会のカリム・グラシアや修道騎士でその秘書をしているシャッハ・ヌエラ、更にはカリムの義弟で査察官のヴェロッサ・アコースとも面識を得て、その交友関係を広げていく。それと、ティーダと同じく翔一の面倒を見ていたティアナにも、はやてが礼を言いたいと言って共に会いに行き、それが縁ではやてとティアナは面識を得る事となる。

更にその頃、ティアナはスバルからクウガの話を聞き、それを翔一に教えて意外な所で縁が生まれていた事に驚いたりと、こちらもこちらで変化が生まれていた。

そして、彼もまた時にバイクで街を駆ける。人に知られる事無い事件から、大きく知られる事件まで関わりながら。

こうして、クウガとアギトも魔法世界に顔が売れ始める。出会う者達との絆や思い出。

そして思いもよらない縁などを経験しながら、五代と翔一は更に時を過ごす。

そして、運命の時は来る。新暦七十五年　四月　機動六課設立。

その日、ついに事態が動き出す……

フェイトから来た久々の情報。それを頼りに光太郎は、一人ミッドの郊外にある寂れた廃屋へとやって来た。フェイトが言うには、この廃屋は偽装で、その地下には秘密裏に何かの研究が行なわれているらしい。

だが、その証拠が掴めず、フェイトは仕方なく光太郎へ連絡した

のだ。それを聞いて、光太郎は嫌な予感を感じ、ＲＸに変身してアクロバッターを駆り現場へ急行した。

（……何だここは……。何か不穏な気配がする）

廃墟となった工場跡地。そこを一人歩きながら、ＲＸはそう思った。かつてゴルゴムと戦っていた頃、嫌と言う程感じた嫌悪感。それがここから感じられたのだ。

工場内のトラップを掻い潜り、地下への通路を発見したＲＸは階段を下りて地下へ向かう。そして、そこでＲＸが目にする物は、信じられない光景だった。

「これは……っ！」

薄暗い通路を歩き、時に出会う研究員や警備員を避け、時に気絶させ進んだ先。その大きな空間にあったのは、人が入ったいくつものケース。それも、中に入っている者は全員同じ顔をしていたのだ。

「培養されて……いるのか」

ＲＸがそう呟いてケースに触れた瞬間、突如警報が鳴り響く。それと共に現れる大勢の魔導師と武装した警備員。それを見て、ＲＸは理解した。ここで行なわれている事は、命の尊厳を踏み躙る行為だと。そして、この者達はそれを知りながら加担する者達なのだと。

ＲＸはこみ上げる怒りを拳に宿す。同じ命ある者でありながら、どうしてそれを道具のように扱えるのか。そう思う気持ちが、ＲＸの拳を揺らす。それに誰かが気付いたのか、ＲＸへ攻撃を開始した。飛び交う魔力弾。そして、実弾の数々。だが、それをＲＸは全て受けながらゆっくりと歩き出す。

「お前達は何も感じないのか。命は全て平等なんだ。それを弄ぶ権利は、誰にもないっ！」

そう言ってRXは地を蹴り跳び上がる。それを撃ち落とそうとするが、RXはその攻撃をものともせず、地面に降り立つと同時にそこにいた魔導師達を蹴散らす。意識を刈り取り、怯えて逃げる者達は追わず、抵抗する者だけを気絶させていく。

その間、たった一分。それで三十名程いた者達は全員沈黙或いは逃走した。しかし、逃げた者も今頃はフェイトによって捕まえられているだろうと思い、RXは視線を動かす。その先に見えるのはこの制御をしているだろうコントロールパネル。

「何か役立つデータがあればいいが……」

そう言ってRXはその体を変化させる。機械の体。高熱に強いロボライダーだ。ロボライダーは、その能力の一つであるハイパーリンクを使い、ここのデータを全て洗い出す。

その中に、ロボライダーは気になる物を見つけた。それは、プロジェクトF．A．T．Eと銘打たれた物。自分の世話をしてくれている少女の名前と同じ響きに、何か感じるものがあったロボライダーは、それを詳しく調べた。そして、愕然となった。

（そんな……ここにいる者達は完全なコピーだと言うのか?！　そして、これを完成させた人物の名に、どうして……どうしてフェイトちゃんと同じ苗字が入っているんだ!?）

その内容。それは、記憶や外見などをそっくりそのまま写した存在を作り出す事が出来るというものだった。そして、その理論を完成させた者の名も、そこには記載されていた。

その名も、プレシア・テスタロッサ。ここまで来て偶然と言える

程、ロボライダーは鈍感ではない。フェイトの名前の由来。それがこれだとしたら、フェイトは……

「彼女も……誰かのコピーだと言うのか……」

そう呟き、ロボライダーは残りのデータに何か他にも気になる物がないか調べ、全て調べ終わったのを確認して体をＲＸに戻した。ＲＸは自分が見てしまった内容に、強い衝撃を覚えていた。

改造人間とは違う哀しみ。それをフェイトも背負っている。そして、それだけに留まらない事もここのデータには残っていた。それは、ここの研究内容。そう、ここでは秘密裏に死んだ者の蘇生を謳い、多額の金と引き換えで死者のコピーを作っていたのだ。その中には、ＲＸが良く知る者の名があった。

（エリオ君も……そうだったのか……）

エリオと仲良くなったある時、光太郎は彼の昔話を聞いた事があったのだ。エリオが、とても荒れていた頃があった事を。エリオはそれを話してどこか悲しそうに笑っていた。そんな自分をフェイトが助けてくれたのだと。

その意味、そしてフェイトがエリオを引き取った理由。それをＲＸは完全に理解していた。フェイトもエリオの真実を知っていたのだろうと。それ故にその哀しみを理解し、救ってやりたかったのだ。

そこまで考え、ＲＸは拳を握り締める。戦闘機人だけではなかった。この魔法世界には、命の尊厳を踏み躙る物が沢山ある。それは、ゴルゴムやクライシスとは違い、完全に人間が自らの手でやっている事だ。

（どこまでも……人間は愚かにしか生きて行けないのか……）

そんな時、誰かが近付いて来る気配を感じ、ＲＸは意識をそちらへ向けた。そして、現れたのは……

「良かった。無事だったんですね」

「……フェイトちゃん」

やや慌てた表情のフェイトだった。しかし、ＲＸの姿を見て安堵したように息を吐いた。それを見てＲＸは思い出した。いつものようにデバイスで連絡するのを忘れていたと。

あまりにも時間が掛かったため、フェイトが心配してやってきたのだ。そう理解し、ＲＸは謝った。少し考え事をしていたら連絡するのを忘れてしまったと。それにフェイトは軽く笑った。

「だと思いました。でも、心配したんですよ？」

「ゴメン。……逃げて行った人達は？」

「全員確保しました。研究員も同様です」

「……そうか」

そう答えるＲＸだったが、どこかいつもと違う事にフェイトは気付いた。そして、どこかそれは悲しんでいるように感じ、フェイトはその理由を考えようとして、周囲に気付いて言葉を失った。

それをＲＸは見ても何も言わない。フェイトは周囲のケースを見て何か小さく呟くと、ＲＸへ問いかけた。知られたんですね、と。

それにＲＸは確かに頷いた。

「……そうですか。もしかして、エリオの事も？」

「ここに……名前が残っていたよ」

「そう、ですか。私の……本当の母さんが、プロジェクトを完成させたんです」

そこからフェイトはぽつりぽつりと語り出す。自身の出生の理由や生い立ち。なのは達との出会いまでとエリオとの出会い。それら全てを語り、フェイトは告げた。その基礎を築いた存在がジェイル・スカリエッティなのだと。

それを聞いてＲＸは納得していた。何故フェイトがジェイルを追い駆けるのか。その原動力は自身の存在にあったのだ。自分のような創られた命。それを生み出す技術を世に広めようとしたジェイル。それを捕らえ、罪を償わせるのがフェイトの生き甲斐の一つなのかもしれない。そう考えたのだ。

だが、同時にＲＸはフェイトへ伝える事があった。それは、自身の事。そう、自分もまた普通の人ではない。その事を告げなければと思ったのだ。フェイトの出生を聞かされた今、自分だけ黙っている訳にはいかないと。

自分の辛い過去を話してくれた事に対する応えとして、自身の事を話そうと。それが少しでもフェイトの励みになれば。改造人間の哀しみを乗り越え、強く生きている先輩ライダー達の事を思い出し、ＲＸはフェイトへ語りかけた。

「フェイトちゃん。聞いて欲しい事がある」

ＲＸは静かに語った。確かにフェイトの生まれた理由は辛いものがある。だが、それでもフェイトはフェイトとして生きていけばい

い。仮面ライダー達も、自分の体を本来とは違う物に変えられても尚、そう強く思って生きているのだと。

改造人間。生まれ持った体を切り刻まれ、作り変えられた存在。自分はそういう存在だとＲＸは告げた。フェイトはそれに言葉を失った。五代や翔一を知る彼女は、Ｒｘも同じように人が不思議な力で変身した者だと考えていたのだ。

そして、同時にＲＸの優しさと強さに心打たれた。そんな哀しく苦しい事を教えてくれたのは、自分に対する励ましと気付いたからだ。それと同時に、そこに含まれたものは同情や哀れみではないと気付いた。

（私を私と言ってくれた。なのはと同じだ……）

自分の最初の友人であり、親友である少女。それが自分が打ちのめされた時言ってくれた言葉。それをＲＸも、光太郎も言ってくれた。コピーではない。フェイトはフェイトなのだと断言してくれた存在。

自分とは違う自身の秘密に苦しみ、悩み、哀しみながらも強く生きようとする存在。それが同じ事を言ってくれたのは嬉しかった。自分も強く生きていける。そう言ってもらえた気がしたのだ。

「……とりあえず、ここを出よう」

「……そうですね。あ、その前にデータを手に入れて行きます」

「なら、少し待ってくれ。俺がそれをやろう」

そう言ってＲＸは再びロボライダーへと姿を変える。それに驚くフェイト。だが、それに構わずロボライダーはフェイトから渡されたディスクを手にし、それを差し込むとハイパーリンクでデータを

瞬時にコピーする。
そして、そのディスクを取り出し、フェイトへ手渡す。それと同時にＲＸへと戻るロボライダー。それを眺め、フェイトはやや呆気に取られていたが、小さく苦笑して歩き出す。

「どうかした？」

「いえ、凄いなぁって」

「そうかな？」

「ええ。でも、それだって望んだ力じゃない。便利とかそんな風に考えちゃいけないんですよね……」

「そうだね。……ありがとう、フェイトちゃん」

（そうだ。そうやって考えてくれる人がいるのなら、俺は人間のために戦い続けられる）

自身が抱き掛けた人への絶望。それをフェイトの言葉が払い除けてくれた。それを込めて、ＲＸは心から礼を述べた。それにフェイトはやや照れたように笑みを浮かべた。
静かに歩く二人。黒い仮面の勇者と黒い魔法少女。その背はまるで寄り添うように並んでいた。共に、人に言えぬ悲哀を湛えて……

これをキッカケに、二人は益々連携を強めて絆を深めていく。仕事では情報提供役と戦闘役として。家庭では助言役や仲介役として。
エリオの事を相談するフェイトには男の立場で助言を与え、エリオの事を相談する光太郎には魔導師として助言を与え合う。

更には、フェイトが新たに保護したキャロ・ル・ルシエとエリオの出会い。それらを見て、光太郎は益々ハラオウン家に佐原家の面影を見る事になる。

そして、彼もまた機動六課へエリオとキャロと共に参加する事となる……

ジェイルラボ　女湯。そこを掃除する真司の姿があった。トレディアの計画は、彼がマリアージュの危険性を自身の身を持って経験した事により破棄された。残ったマリアージュは龍騎とナンバーズによって一体残らず倒された。

一番強いと思われた軍団長も、龍騎を苦しめたが、ファイナルベントの前には無力だったのか、何も出来ないまま散った。そのデータだけは、ジェイルが何かに利用出来るかもと分析していたが。

――君のような存在がいつか世界を変えるかもしれないな……

トレディアはそう告げて真司達の前から去った。簡単に武力に頼るのではなく、もう一度だけ誠心誠意心をぶつけて行動してみよう。そう言い残して。それを真司は嬉しく思い、自分も出来る限りの事をすると誓ったのだ。

それから既に一年以上。真司は合間を見てこの魔法世界が抱える問題を洗い出し、記事を書き始めていた。決してどこかに媚びるのでも、否定するでもなく、今をもっと良くするにはどうするべきか。それを自分なりに持てるだけの力でやってみせようと。

「これ終わったら、また続き書かなきゃ」

唯一問題点があるとすれば、既にそれは記事ではなく本のレベルになり始めているぐらいだろうか。真司は問題を書いていくだけでは飽き足らず、それに対する自分の考えや感想。更にはこのジェイル達との日々さえ書き綴っていたのだ。

それを知る者はいない。ただ、真司が何か自室で書いている事だけは、ぼんやりと知っている程度である。

そうして真司が鼻歌交じりで掃除をしていると、そこへ誰かが走る音が聞こえてきた。それに顔を上げて視線を向ける真司。すると、現れたのはウェンディだった。

「にぃにぃ、手伝うッス！」

「お、そうか。じゃ……」

笑顔で手伝いを申し出るウェンディに、真司は嬉しそうに仕事を言いつけようとするが、そこへもう一人走り込んでくる者がいた。

「兄貴っ！　その……アタシも、手伝う……」

「ノーヴェもか！　でも……もう粗方終わりだしなぁ……」

真司がそう考え出した瞬間、ウェンディとノーヴェが互いに囁き合うように会話を始めた。そう、二人は純粋に真司の手伝いに来たのではなく、トーレの訓練から逃げてきたのだ。というのも、二人はセイン達三人が毎晩真司にマッサージをしていると知り、自分達もと思って昨日のお昼にしたのだ。だがそれをトーレに見られていて、今日の訓練はその憂さ晴らしの意味合いが強い事を察知し、こうして逃げてきたという訳だ。

「……今頃、代わりに双子がやられてるのか」

「そッス。後でオットーやディードに謝った方がいいッスね……」

そしてここに逃げてくる途中、二人は洗濯を終えた双子を見つけ、訓練場へ行って急用が出来たとトーレに伝えて欲しいと頼んできたのだ。素直な二人はそれに頷き、仲良く訓練場へ向かって行ったのだ。

それを思い出し、揃って手を合わせるノーヴェとウェンディ。それを気付かず、真司はやっと良い事を思いついたと言わんばかりに二人へ告げた。

「じゃ、二人は男湯の掃除を頼む。俺、やる事あるから」

「りょ～かいッス」

「分かった」

「頼んだぞ～」

真司の指示に従い、二人は隣の男湯へ向かう。そして、まずノーヴェが脱衣所を、ウェンディが浴室を掃除する事にして動き出したのだった……

ジェイルラボ　訓練場。トーレはオットーとディードが倒れ伏しているのを眺めて、少し申し訳ないように思い、その傍へ近寄った。そう、二人はついさっきまで、トーレに無理矢理訓練に付き合わされていたのだ。ノーヴェとウェンディに頼まれたためトーレに伝言

を伝えると、何故かそのまま訓練へなだれ込んだのだ。
二人はする事もなかったので構わなかったのだが、いつも以上にトーレが厳しい訓練を強いてきたのでへばってしまったのだ。さすがにトーレも悪い事をしてしまったと思い、二人へ謝りを入れた。

「すまんな、オットー、ディード。私とした事がついやりすぎてしまった」

「いえ……僕らがまだ未熟なだけです……」

「はい。トーレお姉様が気にする必要はありません」

横たわりながら二人はそう答えた。その表情はそれが本心からの言葉だと物語っている。それに余計トーレは心苦しいものを感じ、少し待っていろと告げてＩＳを使ってその場から去った。それに疑問を浮かべる二人だったが、言われた通りそこで待っていた。
すると、トーレが手にタオルとドリンクを二人分持って戻ってきた。そしてタオルを手渡し、汗を拭かせてタオルを回収するのと引き換えにドリンクを手渡した。

「……ありがとうございます、姉様」

「わざわざこんな事までしてもらって……」

「いや、これは私なりの詫びだ。だから気にするな」

そう言ってトーレは苦笑した。そして、お前達は少し真司みたいに肩の力を抜いた方がいいなと続けた。その言葉に二人は互いに見つめ合い、その言葉を理解して苦笑した。
真司は肩の力を抜いた状態というより、常に力を抜いたようにし

か見えないのだ。だからこそ、苦笑い。あれは真司だからこそ出来る事だろうと思ったからだ。その二人の考えを察したのか、トーレも笑う。

「ま、適度に脱力しろという事だ。いつも全力というのもいいが、時と場合を考えて力を入れるようにな」

「「はい、分かりました」」

「……意外とお前達はそのままの方がいいかもしれんな」

笑みを浮かべて返事をする二人を見て、トーレはやや力を抜いた姿を想像し、そう微笑んで呟いた……

そして時間は夕食時になり、最早厨房となったキッチンでリーダーシップを発揮しているのは、チンクでもディエチでも、ましてや真司でもなかった。

「チンクはシチューの仕上げをお願いね。ディエチ、パンは焼けたら適度な大きさに切って頂戴。セイン、セッティングは終わった？」

「終わったよ、ドゥーエ姉」

そう、次女であるドゥーエが一手に取り仕切るようになっていた。真司はドゥーエが戻ってきてからというもの、男子厨房に入らずとばかりに料理から遠ざけられていた。まぁ、真司はレシピ自体をドゥーエやディエチに伝え、とっておきの餃子さえ既にチンクへ伝授していた。

そして、それ以来キッチンはドゥーエを中心にチンク、ディエチ、ディードが料理番をしていて、セインやノーヴェにウェンディがお手伝いとなっていたのだ。

そんなキッチンの喧騒を聞きながら、真司は真剣な表情でキーボードを叩いていた。それを横から眺めるウーノやクアットロ。セッテは後ろに立って見つめ、更にオットーやジェイルがその横から見つめる。唯一トーレだけは、興味はないとばかりに無視していたが、その視線がチラチラと真司を見ている。

そんな視線を気にも留めず、真司は文章を綴っていく。今真司が書いているのは、ジェイル・スカリエッティの悲劇とその原因と銘打たれた章だ。如何にしてジェイルが犯罪者となってしまったのか。何故そうなる事になったのかを真司なりに考え、実際の触れ合いを通じて思った事や感じた事などを書き記していた。

「……だ～！　駄目だ！　これじゃ……ちゃんと書き出せてない」

突然上げる大声に視線を向けていたジェイル達が一斉に驚いた。丁度それを合図にしたかの如く、料理を持ったノーヴェ達が現れる。その匂いに真司は意識をそちらへ向け、嬉しそうに笑った。

「お～、今日はシチューか」

「そうッス。きのこと野菜のクリームシチューッスよ～」

「あ、後ディエチとディードが焼いたパンもあるから。よければシチューをつけてどうぞってさ」

テーブルにシチューが入った皿とパンを置きながら二人がそう言うと、それをキッカケにジェイル達も席に着く。そして残りの皿を

持ってドゥーエ達が現れ、いよいよ待ちに待った食事の時間となった。
　全員が席に着いたのを確認し、真司は手を合わせる。それに全員が続いて……

「「「「「「「「「「「「いただきます（ッス）」」」」」」」」」」」」

　そして始まる楽しく賑やかな食事。ノーヴェがかっ込むように食べれば、セインとウェンディはそれを見て女の子らしくないとからかい、それと対照的に淑女のようなディードとドゥーエ、ウーノは静かにシチューを口に運ぶ。
　クアットロはジェイルと今後の活動について話し合いながら、香ばしいパンを手に取り、ディエチはオットーからパンの味を誉められ照れ笑い。トーレは魚か肉が欲しいと呟き、チンクが同じ事をセインが言っていたぞと苦笑混じりに告げる。セッテはシチューにパンをつけて食べ、その熱さに軽く息を吐きながらも笑みを見せる。そんな平和な光景。だが、それに真司のふとした言葉が波紋を起こす。

「旨いな、今日の飯も。もう、俺がいなくても大丈夫だな」

　その瞬間、一切の音が消えた。先程まで聞こえていた会話などが全て止まり、全員の視線が真司へ向いていたのだ。

「え……何？　どうしたんだよ」

「真司兄……どっかいっちゃうの？」

　突然の状況に訳が分からずうろたえる真司だったが、涙目で告げ

たセインの言葉にようやく理解した。周囲が自分の言った考え無しの一言を気にしている事を。自分はただ冗談のつもりに近い気持ちで言った言葉。それをジェイル達は真剣に受け取ってしまったと。

そして、その意味を悟り真司は嬉しく思うと同時に申し訳ない気持ちになった。安易に言っていい言葉じゃなかった。自分がどういうキッカケでここへ現れたかを考えれば、迂闊な事は言わない方がいいと、そう思った。

「ゴメンっ！　俺、そういうつもりじゃなかったんだ！　ホントにゴメン！！」

「……いや、いいんだ真司。私達も少し過剰に反応し過ぎたね」

「ジェイルさん……」

「みんな分かっているよ。君がここからいなくなろうとなんて考えていないと」

そう言ってジェイルは周囲を見回す。それに反応し、全員が力強く頷いた。その光景に真司はこみ上げるものを覚えた。それは感動。たった一言で呼んでしまうと、あまりにも簡単な印象を受けるが、激しく強く真司の心を揺らす感情の波。

感謝と感激、そして歓喜。自分をそこまで思い、慕ってくれる事。それを思い、真司は不覚にも涙を見せてしまった。それに全員が気付き、小さく驚く。

「真司さん……」

「まったく、意外と涙もろいのね、真司君は」

「……男だろう。そんな簡単に泣く奴があるか」

「あらあら……シンちゃんってば、弱虫ぃ～」

「だが、それもまた真司らしさだ」

上の姉五人は真司に対し、どこか微笑みさえ浮かべてそう告げて……

「真司兄、泣かないでよ。あたしまで泣きたくなるからさ」

「兄上、気になさらず。私は兄上を信じています」

「兄様、これを使ってください」

「な、泣くなよ、兄貴。ほ、ほらアタシらも気にしてないから……そんな顔、すんなよ」

「兄さん……兄さんが泣くとみんな悲しくなっちゃうから……」

「照れるなんて、ノーヴェも可愛いとこあるッスね。あ、アタシも同じッスよ、だからいつものにぃにぃでいて欲しいッス」

「そうです。みんなお兄様の笑顔が好きなんですから」

妹達は真司を励ますように声を掛ける。

「やれやれ……これじゃ、私は完全蚊帳の外だね」

そしてそんな光景を見つめ、ジェイルはどこか嬉しそうに呟いた。

こうして、この日の夕食はちょっとした騒動を起こしたが、それによって余計真司はジェイル達の暖かさに触れ、ジェイル達は真司の一面に触れる結果となった。時に、新暦七十五年二月の事であった……

おまけ

「あ～、情けないとこ見せたな～」

風呂に浸かり、真司は一人そう呟いていた。ジェイルは先程上がっていった。今日も実験をするそうで、真司に夜食の注文をしていった。

ちなみに希望は梅入り焼きおにぎりとただの澄まし汁。おにぎりを一つは普通に食べ、残りを澄まし汁に入れて突き崩して食べるのが、最近のジェイルのお気に入りなのだ。

「……俺、愛されてるんだな」

改めてそう感じる事が出来た今日の出来事。あの後、真司は涙を拭っていつも以上に笑って見せた。それに全員が嬉しそうな雰囲気に戻り、それを感じ取って真司も嬉しくなったのだから。

「……今日はジェイルさんの夜食を作らなきゃなんないし、早めに出ようかな？」

「あら？　もう少しぐらいいいじゃない」

突然、真司の後ろから声がした。その声に真司は一瞬硬直し、静かに視線を声のした方へ動かそうとした所で、嫌な予感がけたたましい音を立てて鳴り響き、真司は思い止まった。

そう、ここは風呂場。ならば、下手をすればこれまでの結末を辿る事になると。そう判断した真司に、声の主はどこか楽しそうに笑う。

「……何の用ですか、ドゥーエさん」

「釣れないわね。何ってお風呂に入りに来たのよ」

「ここ、男湯です」

「あら？　でもセインは何度か入ったでしょ？」

その言葉にギクリという音が聞こえそうなぐらい真司は動揺した。その顔には、何故知っているのかという疑問がありありと浮かんでいた。それを見ずともドゥーエは真司へこう告げた。セインは良くて自分はどうして駄目なのかと。

それに真司が答えようとするが、それを遮る声がした。そしてその声が一つではなかった事に、真司は驚愕を通り越し呆然となった。何故なら……

「ドゥーエ姉様、抜け駆け禁止です」

「そうよドゥーエ。大体真司さんを励まそうと提案したのは私でしょ」

「な、なぁ、別に風呂でなくても良いのではないか……？」

「チンク、もう無理だ。こうなれば覚悟を決めるしかあるまい」

クアットロを先頭に、ウーノ、チンク、トーレが現れたのだ。真司は幸か不幸か背を向けているため確認出来ないが、声からおそらく裸であろう事は理解した。チンクとトーレの声にかなり恥じらいを感じる事が出来たし、ウーノやクアットロもどこか恥ずかしがっているようだったからだ。

しかし、真司はウーノの言った励ましの部分に疑問を感じ、それを尋ねた。すると、それにウーノ達がこう答えた。妹達は真司を直接励ましたが、自分達はそうしてやれなかったと。姉として妹さえした事をしない訳にはいかないと。

「い、いやいや！　気持ちは嬉しいし、分からないでもないけど、別に風呂じゃなくても……」

「……だって、妹達とは入ったじゃないですか」

真司の答えにウーノは小さく呟く。それを聞き、ドゥーエは微笑み、クアットロは頷き、チンクとトーレは微かにだが頷いた。無論、真司がその反応を見る事が出来るはずもなく、ただどうして何も言わないのかと聞き返すだけだった。

この後、真司は強制的に五人によって具体的に励まされる事はなく、ただからかわれたり悪戯されたりとむしろいじめられる。そして、最後には……

「じゃ、私が頭を」

「なら、私は右腕」

「……左腕だ」

「じゃあ……背中？」

「わ、私の担当がないぞ！」

「あら、チンクは前でいいじゃない」

「「っ？！」」

「も～、シンちゃんも期待し・な・い・の」

と言ったように前回以上の精神的拷問を受けるのでした。ちなみに、チンクはクアットロと共に背中を洗いましたとさ。

ジェイルラボ　廃棄所。そこに置いてあるトイが入ったケースへ、あの謎の生物の触手が伸びる。それは次々にトイへ刺さっては、また別のトイへと刺さっていく。そして、それらを全てのトイへ指し終えた生物は、触手を自分の手に戻した。

――――当面の駒は得た……。後は……

誰も近寄らない空間。そこに響く不気味な声。静かに育まれる闇の胎動。その覚醒は近い……

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

空白期最後。次回からＳｔＳ編開始。これまでと違い、最初はメイ
ンが龍騎となります。一話での他のライダーの出番はまだ未定。

……真司はこれでオマケ最後。……終わりったら終わり。

空白期最終回＆ＳｔＳ編序章

入念に準備運動をしている二人の少女。一人はオレンジ髪のツーテール。もう一人は青い髪のショートカット。ティアナ・ランスターとスバル・ナカジマの二人だ。共に自身のデバイスを点検し、体もほぐしたとばかりに互いに見つめ頷き合う。

「ティア、頑張ろうね」

「当然。ま、でも気張り過ぎずに行きましょ。これが駄目でも次があるから」

「分かってるよ。でもさ、出来る事なら……」

「「一発合格」」

そう言い合って笑みを見せ合う二人。訓練校で出会ったルームメイト。自分の力が上手く使えず、困っていたスバルだったが、それをティアナは少し苦笑しながら矯正していった。ないよりもあった方がいいし、いつか調節出来るようになるでしょ。

そう言って、じっくりゆっくりスバルの力を導いたティアナ。苦労は絶えなかったが、不思議と嫌ではなかった。スバルの飲み込みは早く、少し気を付けるだけでどんどん成長していった事も関係していただろう。

対するティアナもスバルから色々と得たものもある。使いこなせない力は危険でしかない。自分の出来る事を正しく理解し、適切に使う。それこそが強さだと。そして、スバルの人懐っこい性格もティアナには好ましかった。

翔一のように自然体でと心掛けるティアナ。命を助けてくれたクウガとなのはへ憧れを抱き、それを追い駆けるスバル。そんな二人が強く結びついたキッカケは、ある一つの仕草。

「どんな苦労も必ず実る」

「だから、絶対諦めない」

「「それを忘れないなら、大丈夫！」」

サムズアップ。これを二人が共通の仕草と知ったのは、スバルが進路希望を書いていた時。スバルがそれにティアナとのコンビを希望すると書いていたのを見て、叶わなかったらどうするのかと尋ねた際に返した事がキッカケ。

笑顔でサムズアップと共に大丈夫と告げるスバルに、ティアナはどこか翔一を重ね合わせ、尋ねたのだ。それは、癖かと。それにスバルは少し照れながら答えたのだ。

自分を助けてくれた人が励ましでやってくれて以来、ついやってしまうのだと。それに翔一からの話を思い出し、ティアナが「その人って、五代雄介って名前？」と聞いたのだが、スバルは違うと答えてこう返した。

――仮面ライダークウガだよ。

それを聞いたティアナはしばし呆然。それに不思議そうな顔したスバルだったが、どこで会ったのかを聞かれ、空港火災の話をした。それにティアナは納得したものの、結局その後の消息は分からず、手掛かりは『エース・オブ・エース』の高町なのはがその五代と呼んでいたという事だけ。

スバルはなのはに抱えられて見た夜空とその暖かさにも憧れ、いつか自分も、災害で困ったり苦しんでいる人を助ける仕事に就くと決めたのだ。

そして、その後はティアナが翔一から聞いた話をし、スバルと二人で意外な所で縁があったのかと笑い合ったのだ。それ以来、二人は互いの励ましとしてこれをやるようになった。大丈夫や絶対出来ると意味を込めて。

勿論、成功した際の納得出来るや満足出来るといった本来の意味でも使っていたが。そして、訓練校を卒業した後も、二人は共に同じ部隊に配属され、今に至るのだ。

「Bランク、かぁ。早かったよね、ここまで」

「そうね。でも、いつも実力的には当然って言われてたでしょ？」

「そうだけど……ティアがいるからここまでこれた気がする」

「はいはい。なら、アタシはあんたがいなきゃ来れなかったわ」

「ティア～」

少し苦笑するようにティアナが言うと、スバルが嬉しそうに抱きついた。それに照れくさいものは感じるが、スキンシップが好きな性格だと知っているのか、ティアナは苦笑い。だが、何かに気付いたのかスバルをやや強く引き離す。

それに不満顔のスバルだが、ティアナがため息と共に指を指した方向を見て、軽く顔に焦りの色が出る。

「仲が良いのは結構ですが、試験会場だという事を忘れちゃ駄目で

す」

「す、すみません！」

「すみません！」

そこには空間モニターが出現していて、銀髪の可愛らしい少女が映っていた。ツヴァイはスバルへそう注意すると、言われた彼女は慌てて頭を下げた。ちゃんとティアナも謝り、ツヴァイは名乗りと共に二人の確認をする。それにはっきりとした声で答える二人に、ツヴァイは笑みと共に頷いて試験の説明を開始する。

そんな様子を上空のヘリから見つめる者達がいた。八神はやて、フェイト・T・ハラオウン、そして……

「ティアナちゃん、合格するかな？」

津上翔一。その視線を眼下でツヴァイの説明を聞いている少女へ向けている。それにはやてとフェイトは少し苦笑する。実力的に申し分ないと二人は知っているからだ。

「大丈夫や翔にぃ。ティアナはここまで試験一発で合格しとるし」

「それに、スバルとのコンビはもう十分前線で通用するレベル。きっと合格しますよ」

フェイトはスバルと顔見知りである。というのも、光太郎がスバルとギンガが戦闘機人だと教えたのだ。フェイトも人に言えぬ苦しみと悲しみを知っている。だから、決して二人に変な事を思わないと理解したから。

そして、それを聞いたフェイトはナカジマ夫妻に接触した。戦闘機人事件を追い駆けている最中に名前を報告書で見たからと、そう言って。それから情報を共有し、何度かギンガやスバルとも顔を合わせた。

特にギンガとはあの時の救助の関係もあり、慕われていたりした。RXについて聞かれる事があったものの、自分もどこにいるかは知らないとかわしたりしながら。

「心配はいらないっすよ、翔一さん。大丈夫、て奴ですよ」

二人の言葉に翔一が頷いたものの、どこかまだ不安そうなのを見て、操縦席から声がした。ヴァイス・グランセニック。彼はヘリパイロットとしてこれから発足される機動六課に配属される者だ。

今回も本当なら光太郎が担当するはずだったのだが、フェイトの希望とエリオとキャロの方へ行き、その意志を最終確認してきてほしいと頼まれたため、ヴァイスに操縦席を譲ったのだ。

「……そうですね！」

「ちょ、わたしらには不安が残ったのに……」

「サムズアップは、絶対です」

翔一の反応を見て軽く拗ねるはやて。それにフェイトは苦笑しながらそう答えた。そんな二人の視線の先では、説明が終わってティアナとスバルが動き出した所だった……

かなりの好スタートを切った二人を見つめるサイドポニーの女性。

その首元には紅い宝石が光っている。視線はずっと空間モニターの二人へと向けられていた。

「……あの時の子が、こんなに成長したんだね」

”もう四年近くになりますから”

「そうだね」

感慨深く呟いた一言に対する、大切な相棒の味気ない答えに、女性は苦笑して答えた。そして、視線をモニターから外して周囲を見回す。すると、やっと通路の奥側から見慣れた顔が姿を見せた。それに笑顔を見せて、女性は手招きする。

「始まってますよ、五代さん」

「ゴメン。ちょっと迷っちゃって」

そう五代はなのはへ手を合わせて謝った。それになのはは小さく笑い、視線をモニターへ戻す。丁度、スバルがティアナと合流した所だった。

その動きを眺め、五代もなのはも感嘆の声を上げる。見るからに分かる。気張っていないのだ。緊張し過ぎでも、抜き過ぎでもない。適度な緊張。それをしていると、二人には見えたからだ。

その後も危なげなく次々に進んでいく二人。それを見て、なのはは五代へ尋ねた。どうですかと。五代もそれにやや考えて、頷いた。聞いてた通り、元気でいいねと笑顔とサムズアップ。

それになのはも笑って返す。もうすぐ動き出す機動六課。その前線メンバーとして、ティアナとスバルは選ばれているのだ。そこに

は、確かにはやて達隊長陣の考えや、光太郎と翔一の希望もある。だが、それを抜いても二人には可能性と才能があると、教導官として名を馳せているなのはは断言出来る。

（でも、ホントに凄い部隊だよね……）

遺失物管理の部署として設立される機動六課だが、その戦力は正直異常なのだ。部隊長に総合とはいえSSランクのはやて。スターズとライトニングという小隊の隊長に、オーバーSランクのなのはとフェイト。更にそこの補佐にヴィータとシグナム。

これだけでも、かなりの陣容だ。そこに、民間協力者として五代、翔一、光太郎の三人が加わる。そう、隊長陣しか知らないが仮面ライダーが三人もいるのだ。しかも、なのは達は魔力保有制限の兼ね合いで、本来の力を出す事が出来ないが、三人は魔力を持たないし使う必要もないため、その力は制限されないのだ。

（でも、あの邪眼を相手にするならそれぐらいしないと……）

なのはの脳裏に甦る不気味な姿。あの当時の自分達にクウガとアギトを揃えてやっと勝てたのだ。それを思い出せば、この戦力でも不安は残る。だが、あの時よりも希望も大きい。それは、ＲＸの存在。

五代曰くクウガよりも強い存在であるＲＸ。それが協力してくれれば、ユーノやクロノ、アルフにリーゼ姉妹がいなくても、戦力的には負けてない。そう思い直し、なのはは視線をモニターへ戻した。

それを待っていたかのように、五代がしみじみと告げる。

「もう、あれから四年も経つんだね」

「はい。五代さんも翔一さんもあまり変わらなかったですね」

「そうなんだよ。だからさ、同じ事、ずっとすずかちゃんやアリサちゃんにも言われて……」

まいっちゃうよ。そう言って五代は苦笑する。翔一や光太郎もそうなのにと、どこか腑に落ちないとばかりに呟いて。そんな五代になのはは内心同情するも、親友二人の意見も良く分かるので、敢えて告げた。

外見が変わらないって、この年頃になると色々羨ましくなるんですよと。それに五代は納得した――ような顔してからやはり納得出来ないと腕を組んだ。

”マスター、そろそろです”

「あ、そうだね。……行きますよ、五代さん」

レイジングハートの声にモニターへ視線を一度向け、なのはは頷いた。そろそろ試験も終わりが見えてきたからだ。なので、未だにぶつぶつ言っている五代へ声を掛け、その腕を掴んで歩き出す。

それに軽く引っ張られるように五代も動き出す。この後、二人をはやて達が正式に六課へ誘いを掛けるのだが、その前にスバルへ、サプライズをしようとはやては考えていたのだ。

そう、憧れのなのはとの再会と、スバルは知らないだろうがもう一人の憧れであるクウガにも会わせようと。だが、なのはも五代もそれを知らない。ただ、軽い顔合わせに近いとだけ言われていたのだ。

しかし、はやてとの付き合いが長いなのはと五代がそれに気付かないはずもなく……

――とりあえず、クウガは秘密かな？

――そうですね。いずれ機会を見てという事で。

しっかりとはやての狙いは見抜かれている。だが、二人は知らない。翔一のせいで、その二人はクウガの正体を知っているなどと……

「時間も少し残して、ゴールか。いい感じだったわね」

「うんっ！　最後の大型だけ厄介だったけど」

ゴール地点で笑顔を見せあう二人。途中さして危ない所もなく、無事に試験を合格出来たと思える内容で、心から喜びに浸る二人だったが、そこへ空間モニターが出現し、ツヴァイがそんな二人へ声を掛けた。

「これで試験終了。お疲れ様でした」

「「お疲れ様です！」」

「結果は、言うまでもないですね。正式にはまだですが、合格ですよ～！」

ツヴァイの言葉に二人は密かに喜び手を叩き合う。だが、それを勿論ツヴァイも気付いている。しかし、それを注意するような彼女ではない。むしろそんな二人に笑顔さえ向け、こう告げた。

試験合格のお祝いに、ちょっとしたご褒美があると。それに疑問

符を浮かべる二人だったが、その次の瞬間、上空から耳に響くヘリの駆動音が聞こえてきた。

そして、その巻き起こす風に煽られながら、二人はそこから降りてきた人物に揃って驚いた表情を見せた。

「フェイトさん!?」

「翔一さんにはやてさん!?」

「久しぶりだね、スバル。凄かったよ」

「ティアナちゃん、合格おめでとう!」

「いや、中々ええ動きしとったよ」

予想しない人物達と言葉に、二人は嬉しいやら照れくさいやら。そんな二人を他所にヘリがそこから離れていく。そして、それと入れ替わりに空から現れる人影が二つ。といっても、一つはちゃんと空を飛び、もう一つはそれに掴まってる状態だったが。

それに気付き、ティアナとスバルは視線を上げて言葉を失った。そこにいたのは、二人が良く知る人物だったからだ。しかし、それは内の一人であって、もう一人は初めて会う相手。

「っと、着きましたよ五代さん」

「ありがと、なのはちゃん。不思議な感じだね、空を飛ぶって」

その名前に、二人は驚愕。なのはの名前は良く知っている。局員で知らない者はいない程の有名人だ。だが、今二人に強烈な衝撃を

与えたのは、そのなのはに掴まって降りてきた男性が原因だった。
五代は、そんな自分を見て硬直している二人に気付き、不思議そうな顔を向ける。しかし、何かに気付いたのか笑顔に変わって大声で言った。

「合格おめでとう！　頑張ったね！」

サムズアップ。それを見て完全に二人は理解した。目の前にいる者が、自分達が会いたいと思っていた五代雄介なのだと。そして、同時にスバルを炎の中から助け出したクウガなのだと。
それを悟った途端、スバルは涙を流して頭を下げた。それに戸惑う五代となのはだったが、すぐにその理由が分かる。

――あの時は、本当にありがとうございましたっ！

それがあの時の空港火災を言っていると二人は理解し、同時に五代達はスバルがクウガ＝五代を知っている事も理解した。でも、どうしてと五代達が戸惑う中、ティアナが翔一さえ戸惑っているのを見て、ため息を大きく吐いて告げた。

――翔一さんが言ったんでしょ。五代さんがクウガって……

それに五代が驚き、翔一へ視線を向けた。翔一はティアナの言葉に一瞬不思議そうな顔をして、それに彼女が最初の朝にサムズアップの意味とかの話と言うと、やっと翔一は思いだしたようだ。
だが、同時にすまなさそうに手を合わせて五代に謝った。それに五代だけでなく、はやて達も苦笑した。一人スバルだけは、そんな事お構いなく五代となのはへ涙で輝く視線を向けていた。

（やっと、やっと会えた……やっと言えた……）

なのはもクウガもスバルに取っては命の恩人。燃え盛る炎の中、自分を助けてくれた赤いヒーロー、クウガ。その中から安全な場所まで一直線で連れ出してくれた、なのは。

その二人にもう一度会ってちゃんとお礼が言いたい。それがスバルの一つの目標だったのだ。それがまさか一気に二人と再会でき、叶えられるとは思わなかったのだ。

「ま、翔一君らしくていいんじゃないかな？　じゃ、軽く自己紹介」

スバルが感動している間に、五代達は翔一のうっかり話を終えたようで、五代がスバルとティアナへ懐から名刺を取り出し、手渡した。

それを反射的に受け取る二人。そこに書かれている日本語が読めず首を傾げる二人を見て、なのはが苦笑して読み上げた。夢を追う男、二千の技を持つ男。

「で、ここに五代雄介って書いてあるんだよ」

「夢を追う男……」

「二千の技を持つ男……」

スバルとティアナはその大袈裟な文句を感心して聞いていた。五代の話を翔一やはやてから聞いていたティアナは、それが嘘ではないと知っているし、スバルはクウガそのものを見た故に、それを聞いてどこか納得したぐらいだ。

その後、五代やなのはに何度もお礼を言うスバルを、ティアナが呆れながら突っ込んだ所で試験は完全終了となった……

第六十一管理世界　スプールス。自然が多いこの世界は、それを保っていくための自然保護隊がある。主に、密猟者対策と生態系の把握と保持を目的としている。他の陸士隊に比べれば、平和な時間が多い場所である。

そこに、桃色の髪をした少女と赤髪の少年がいた。キャロ・ル・ルシエとエリオ・モンディアルである。彼らはここ自然保護隊の所属でとして働いていたのだが、近々異動する事になっていて、今日はその最後の打ち合わせがあった。

「それで、二人はフェイトちゃんの小隊員になるみたいなんだ」

「そうですか……」

「じゃ、光太郎さんも？」

キャロの言葉に光太郎は苦笑して首を横に振った。光太郎は予備ヘリパイロットとして、基本整備員達と同じような仕事をするのだ。それを聞いて二人はどこか残念そう。光太郎が一緒なら心強かったと揃って呟き、光太郎を困らせた。

二人がここまで仲が良くなるのは、本来なら六課発足した後なのだが、光太郎という存在がいた事がそれを早めた。

本来彼ら二人を会わせる事を、フェイトとしては時期を見てと考えるのだが、光太郎に相談した際、同年代と早めに繋がりを持たせてやった方がいいと言われたので、出会いが早まったのだ。

――は、初めまして……キャロ・ル・ルシエです。こっちは、大切な家族のフリードリヒ。

そして、初めてキャロと出会った時、光太郎はその雰囲気から寂しさを感じた。目はどこか怯えを隠していて、更に表情は相手のものを窺っているもの。どうも、それをエリオも感じ取ったらしく、その紹介を受けて声を少し抑え、明るさをやや強めて告げた。

――初めまして。僕はエリオ・モンディアルって言うんだ。よろしく、キャロ。そして、フリードリヒ。

どうも、そのフリードにまで挨拶したのが、キャロには予想外だったのか軽く驚きを見せた。しかし、エリオにフリードが軽く懐いたのを見て、嬉しそうに笑みを見せて自分はフリードと呼んでいると告げ、笑顔を見せた。

それに光太郎もエリオも喜びを抱き、笑顔で頷いたのだ。それからエリオとキャロ、フリードが仲良く三人で話を始めたのを見て、光太郎は嬉しそうに頷いた。

それから三ヶ月の間、キャロは驚きの連続だった。同い年の自分と似た境遇のエリオ。そして、人見知りする彼女の友達であるドラゴンのフリードがすぐに懐いた光太郎。その二人に加え、自分を助けてくれたフェイトの優しさに。

初めはどこか遠慮があったキャロだったが、光太郎やエリオの性格に触れ、暖かみを感じる事で徐々にそれも無くなっていった。特にエリオとは互いの境遇を話し、共に涙を見せ合った事で強い繋がりを得たのだから。

そして、キャロが局員になっているのを聞いて、エリオは自分も局員になると言い出してフェイトと光太郎は困った。しかし、説得しようとしたフェイトにエリオはこう言った。キャロとフリードが大人の中に入り、孤立してしまう可能性がある。自分は、そんな事

にさせたくない。だからキャロ達と共に居たいのだと。

――僕だけ光太郎さん達と一緒にいて、キャロ達は孤独なんてさせたくない。

その言葉にフェイトが感動して涙。光太郎はそんなフェイトを宥めながら、エリオへ生半可な気持ちじゃただの同情だと告げた。それにエリオは頷いて、自分はキャロと支え合うためにいくのだと答えた。

その眼差しが、鍛えて欲しいと頼んできた時と同じ輝きを宿しているのを感じ、光太郎は小さく頷き、フェイトへさせてやってほしいと頼んだ。フェイトはそれにやや迷ったが、エリオと光太郎の二人に頼まれ苦渋の決断で許可を出した。

それからエリオは、その魔力変換能力や資質の高さから訓練を一部免除され、光太郎とのトレーニングで身に付けた力を発揮。同年代以上の身体能力を見せる事で、キャロの異動に遅れる事半年で自然保護隊に配属となった。

それから、ずっと二人はコンビとして支え合っていた。エリオは前線として、未熟ながらも光太郎との訓練やフェイトの助言で成長し、キャロはそんなエリオの姿を見て、自分も少しでも力になれるようにと自身の能力を少しずつ高めようと、頑張ってフリードの制御を出来るように努力した。

「で、本当にいいんだね？」

「はい。エリオ君と話し合って……」

「もう決めましたから」

そう二人は笑みを浮かべて互いを見つめる。その様子に、確認をした光太郎は少し苦笑して頷いた。ハラオウン家で二人の面倒を光太郎が見たのは、たった三ヶ月。と言うのも、キャロは既に局員となっていて、次の配属先が決まるまでの期間しか入れなかったからだ。

「……よし！　じゃ、フェイトちゃんには俺から言っておくよ。二人は、ミッドに行く準備をしておいてくれ」

「「はいっ！」」

光太郎の言葉に二人は笑顔で頷いた。それに光太郎も笑顔を返す。そして、二人は定期巡回の時間だからとその場から離れていく。それを見送り、気をつけてと声を掛ける光太郎。その後ろから、二人分の気配が近付いてくるのを感じ、光太郎は振り向いた。

「相変わらず元気ですね、光太郎さんが来ると」

「話は終わりました？」

「はい。すみませんが、もう少しだけ二人をよろしくお願いします」

自然保護隊で二人の面倒を見てくれているタントとミラだ。優しい印象の男性のタント。面倒見の良さそうな女性のミラ。この二人と光太郎は何度か顔を合わせている。

忙しいフェイトと違い、光太郎は基本時間が自由に使える。そのため、よく二人の様子を見に行かせられたのだ。対するエリオとキャロも、光太郎が会いに来る度に喜んでいたので、本人としても不満はなかったのだが。

その後、二人と今後の事を少しだけ話し合い、六課が解散した後の事はエリオ達に一任する事で決まっていると告げると、二人はどこか嬉しそうに笑った。エリオもキャロも優秀な魔導師。今はまだ経験や年齢のためそこまでではないが、それを埋めれば凄い人材になる。

だが、タント達はそれだけではない。二人の性格と、何より弟と妹のように思ってくれているからだと、光太郎は知っている。だから、こう告げたのだ。

「きっと、二人はまたここへ戻ってきますよ。この仕事が好きみたいだし、何より、お二人がいますから」

「光太郎さん……」

「そうですか。なら、僕達はそれを願って送り出します」

光太郎の言葉に少し目を潤ませるミラ。タントはそんな彼女を見て、優しく肩に手を置いた。そして、自分達に言い聞かせるように、力強く言い切った。その言葉に光太郎はもう一度二人の事を頼み、その場を後にする。

その背中を見送りながら、二人は思い出す。初めて光太郎が来た時、偶然密猟者達がやって来たのだ。しかし、そこへタント達が到着する前に彼らは沈黙させられた。光太郎一人によって。

その時の事を思い出し、タントとミラは不思議に思うのだ。何故、そんな力を持つ光太郎を局員にフェイトはしないのだろうと。自然保護隊に誘った事もあるのだが、振られてしまった。

だが、そんな光太郎を六課は加えた。その理由と、光太郎が協力を決めた原因。それがどうしても二人には分からなかった。

その頃、二人はフリードと共に歩きながら六課の事を話し合っていた。フェイトや光太郎の事だけではなく、二人が久しぶりに会いたい者がいるため、今はその相手の話をしていた。

「五代さんも来るんだね」

「楽しみだね。フリード、またジャグリング見せてもらえるよ」

「キュク～」

キャロが五代に会ったのは六回だけ。その内三回も五代がジャグリングを見せたため、フリードと共にキャロのお気に入りとなっていた。ちなみにストンプも披露した時、キャロは楽しんだ。だが、フリードは音が色々と鳴る事に少しだけ嫌がる素振りを見せたので、以来ストンプをする事を五代は躊躇いを見せ、一度だけの技となっている。

「キャロ、遊びに行く訳じゃないよ」

「分かってるけど、お休みとかならいいかなって」

「キュクキュク」

キャロの答えに賛同するように声を出すフリード。それにエリオとキャロは笑みを見せる。実は、フリードの本当の姿は巨大な翼竜。しかし、キャロが制御しないと恐ろしい力になってしまうため、普段は力を抑えた小さい姿をしている。

「そうだ。六課に行く前にフリードの制御、もう一度だけ練習しておこうか」

「そうだね。せめて興奮する事がない時ぐらいは、制御出来るようになりたいな」

「キュク？」

楽しげに話す二人。それに首を傾げるフリード。自然に囲まれた中で、幼い男女は優しさと強さを磨いていく……

ジェイルラボ　研究室。そこでジェイルはある物の最終調整を行なっていた。

「……これで……どうかな？」

慎重に押されるＥｎｔｅｒキー。そして、画面に映った文字は”Ｃｏｍｐｌｅｔｅ”。それは、実験の成功を意味していた。ジェイルはそれに満足そうな表情を浮かべ、小さく頷いた。

彼が行なっていたのは、ベントカードの製作。従来考えていた現状にはない物を作り出すのではなく、現状の物を複製する事に力を注いだ結果、ついにソードベントを作り出す事に成功したのだ。

そして、それが意味するのは、龍騎の持っているガードベントやストライクベントも同じように作り出せるという事。だが、肝心のファイナルベントだけは、その威力のためなのか、それともモンスターの力を使うからなのか知らないが、未だに再現出来ないのだ。

ジェイルの手元に現れるベントカード。そこには、確かに剣の絵が描かれている。ただ、ドラグセイバーではなく、ただの剣だった。ブランク体が使う物である。しかし、それでもジェイルに取っては

大きな進歩。

（これで、やっと先へ進めるね……）

真司に渡したい力。それへの道がまた一歩進んだ事に喜びを感じつつ、ジェイルは時計へ目をやった。時刻はそろそろ夕食開始の午後七時近く。それにジェイルは慌てて、今完成したばかりのデータを保存して部屋を出て行く。

誰もいなくなる研究室。そこに不気味に現れる巨大な目玉。それは、ジェイルの操作していたコンソールへ近付き、消えた。それと同時に先程のデータが表示され、更に多くのデータが次々と表示されていく。

そして、それら全てが一瞬で消える。消去ではない。複製されたのだ。そう、邪眼によって。闇の書の機能のほとんどを取り込んだ事による蒐集。それを、魔法ではなくデータへと切り替えて。

――これで力も得た。残るは……

徐々に力を取り戻し、そして増しつつある闇。その目覚め、それが訪れる時はもうそこまで迫っていた……

「へぇ、姉妹で局員か」

「ああ。まぁ、私は会う事は難しいが、あの子達なら何ら問題ないからね。いつか、会わせてみたいものだよ」

夕食も終わって風呂に浸かり、ジェイルと話す真司。今の話題は

ナンバーズの親戚であるナカジマ姉妹。ジェイルは、彼女達に近々ナンバーズを接触させようと考えていた。それは、姉妹の存在を知った後発組が会ってみたいと言い出したため。

特にノーヴェは、自分と双子と呼んでもいいスバルの存在に親近感を抱き、是非会ってみたいと強く言っているのだ。他の者達も質こそ違え、二人に会いたいと思っている。

そのため、ジェイルとしてはそのタイミングを計るために姉妹の色々を把握しているのだ。出来れば、局員としてではなく個人として行動している時がいいと考えて。

「今、どこで働いてんの？」

「姉のギンガは陸士隊の１０８という所だ。父親が部隊長をしている。妹のスバルは今は陸士隊の３８６だが、近々異動する話が出ているね」

「異動？　どこへ？」

ジェイルが何故そんな情報をと思う真司だったが、彼が管理局と独自の繋がりを持っている事を思い出し、それを聞く事はしなかった。

そんな真司にジェイルは思い出すように告げた。そのスバルが異動する予定の部隊名を。それが、後に自分と深い関わりを持つとは知らずに。

――試験運用のための部隊でねぇ。名前は……機動六課だよ。

恒例の熱冷まし雑談タイム。全員で真司が色々と話を聞かせる憩

いの時間。それぞれ寝間着に着替え、その手にはカップを持っている。中身は、ディードが淹れたハーブティー。

寝る前にこれを飲むのが、ここ二ヶ月前から定番になっていた。だが、最近は真司が話を聞かせるというより、話を聞いているという方が正しいかもしれない。

「で、最高評議会が依頼してきたんだよな」

「そうそう。でも、発案者はレジアス・ゲイズだよ。戦闘機人を欲しがったのは、ね」

真司が執筆中の本。それに関する確認となっていた。後は、それぞれにインタビューまでしていて、自分の生まれに関する意見。そして、感想などを答えてもらい、真司はそれをメモして最後に載せるつもりでいるのだ。

今日は、戦闘機人を生み出す事になった経緯。それをジェイルの口から聞いていた。無論、それを知っているウーノやドゥーエでも良いのだが、やはり当事者で開発者であるジェイルが話すのが一番だと、誰もが思っていた。

そして、そんな話をセイン達も聞き、改めて色々と考えたりするのだ。自分達の生まれた表向きの理由。それが意味する事や問題点などについて。一方、ウーノ達も知らなかった情報が時々ジェイルから告げられ、考える事もあった。

そんな感心と驚きに満ちた時間も終わりを告げ、後は寝るだけとなったのだが、ジェイルが全員へある事を提案した。それは、研究が一段落したのでみんなでどこかに出かけようというもの。それを聞いて喜びに沸く真司達。

「どこに行くッスか？」

「あ、あたし旅行がいいな！　泊りとかしてさ！」

ウェンディとセインが真っ先に反応を示せば……

「山にハイキングとかかな？」

「海辺でリゾートと言うのもいいかもしれません」

ディエチの言葉にディードが笑みと共にそう返す。

「行楽地で遊ぶのがいいのでは？」

「遊園地ねぇ……私はあまり気乗りしないわぁ」

「でもクア姉、行ったら結構楽しみそうな気がする……」

オットーの提案にクアットロがそう言えば、それを聞いてノーヴェがぼそりと呟いて……

「映画とかどうだ？」

「あら、いいわね」

「なら、その後はショッピングかしら？」

チンクの意見にドゥーエが賛成し、ウーノが笑顔でその後の予定を告げる。

「……ラボでのんびり」

「お前はたまに真司のような事を言うな……」

「どういう意味だっ！」

セッテが肩身が狭そうに告げた言葉に、トーレがそう呆れつつ返す。それに真司がやや怒り気味に突っ込んだ。

「まぁ、とにかく近い内に……」

そんな風にそれぞれで騒ぎ出す真司達を見て、ジェイルは苦笑気味に止めようとした。だが、その次の瞬間、ラボ全体に警報が鳴り響いた。

それを聞いて、ジェイルだけが驚愕の表情を浮かべる。そう、それは有り得ない事なのだ。鳴り響く警報の意味。それは、ラボのシステムにハッキングを掛けられているという事。

即座にジェイルはウーノへＩＳを使い、システムチェックを指示。更に、万が一に備え全員に戦闘態勢を告げた。ハッキングを仕掛けた相手が、それだけで終わるとは思えない。

そう判断したジェイルは、急いで自室へと戻る。もしものための緊急手段。それを使わなければならないと。そして、真司のために研究しているデータだけでも守るために。

そんなジェイルを見て、真司はトーレとチンクへジェイルを追うように告げた。何があるか分からない以上、誰かが傍にいた方がいいと。それに二人も頷き、更にセッテとウェンディもトーレとチンクに呼ばれてついて行った。

残った真司達は、セインがＩＳを使い全員のボディースーツを取りに行き、トーレ達へ届けてから戻ってくる事になった。クアット

ロとオットーはウーノの補佐を。ノーヴェとディエチ、ディードはいつ何が起きてもいいように周囲へ警戒をし始め、ドゥーエは念のために真司へ変身するように告げてコンパクトを取り出した。

「この中で一番強いのは真司君なんだから」

「……分かった！」

距離を取り、全身が映るようにして真司はデッキをかざす。そして――――。

「変身っ！」

掛け声と共にそれを出現したベルトへ装着させる。瞬時に変わる真司の姿。

「っしゃあ！」

変身完了し、周囲へ視線を向ける龍騎。だが、怪しい気配はしない。それでも警戒は怠る訳にはいかないと、龍騎は真剣な雰囲気のままその場に立ち尽くす。

すると、ウーノが信じられないという声で驚愕の事実を告げた。既に謎の存在によってラボのシステムはほぼ掌握されていて、ウーノがそれに対抗しようとしているのだが、相手の方がその速度よりも早くプロテクトを破ってくるのだ。

クアットロとオットーも、その速度には驚くしかないと悔しげに言いながら、その手を止めようとはしない。そこへセインが大慌てで戻ってきた。その手にしたボディースーツを手渡し、セインは告げた。

「おかしいよ！　トイが何でか動いてて、あたし達を攻撃してきてる！」

「何ですって！？」

「ドクター達はもう対応を始めてる。トーレ姉達がドクターの作業が終わるまで退路を確保してるよ！」

着替えをしようとしていたドゥーエだったが、その発言にさすがに動揺を隠せない。既に起動する事のないようにされたトイ。それが、勝手に動くだけでも変なのに、こちらに攻撃をしてきたとくれば、それはもう異常を通り越して非常事態だ。

戸惑う妹達へドゥーエは鋭い声で早く着替えるように指示を出す。ウーノも今は着替えた方がいいと告げて、着替えを手渡す。丁度、ジェイルの方でも動き出したようで、その僅かな隙にウーノ達も着替えるべく動く。

龍騎はそれを見ないようにし、ただ耳を澄ませた。すると、どこからか何かが近付いてくる音が聞こえ、龍騎はデッキへ手を伸ばしてソードベントを取り出した。

”ソードベント”

「ノーヴェ、ディエチ、ディード。こっちは俺が戦うから、お前達は別方向を頼む」

手にしたドラグセイバーを振り払い、龍騎は見えてきたトイ三体へ向かって走る。だが、三人は龍騎の事が心配なのか、そちらしか見ていない。それを見て、クアットロが叫んだ。

「何ボサっとしてるの！　あっちはシンちゃんに任せて、貴方達は別方向に備えなさいっ！」

「「「り、了解！」」」

初めて聞くクアットロの大声に、驚きながらも三人は返事を返して視線を龍騎から外す。それに笑みを見せるクアットロ。ウーノとドゥーエは三人とは違う意味で驚き、オットーとセインは三人と同じ意味で驚いていた。

その間も謎の存在によるハッキングは続いた。それに対しウーノ達が抵抗する中、龍騎達は襲い来るトイ達を相手にしながら、その異常性を実感していた。それは……

「こいつら……硬いっ！」

「嘘だろ!?　アタシの全力でようやくかよ！」

簡易砲撃を受けても止まらないトイにディエチがそう言えば、ノーヴェは自身の全力で動きを止めたトイに驚きを隠せない。ディードも、手にしたツインブレイズで軽く切り裂けるはずの相手の変化に戸惑っていた。

龍騎もそれは感じていた。以前に戦った時よりも強度が増している。しかも、攻撃速度も上がり、厄介さが格段に上昇していたのだ。

それでも、龍騎達は戦い続けた。しかし、おかしな事に倒しても倒してもトイが減らない。襲ってくる数自体は少ないため大した事ないのだが、切れ目なく襲ってくるため、気の休まる暇がないのだ。

ウーノ達もおかしな雰囲気を感じていた。システムを掌握出来るはずなのに、何故かそれが目前まで来ると不気味なぐらい動きが止

まるのだ。まるで何かを待っているようなその反応に、ウーノもクアットロもオットーさえも嫌な感覚しか覚えない。

『ウーノ、チンクだ』

「どうしたの？」

突然現れた空間モニターに驚きつつ、ウーノは勤めて冷静に問いかけた。チンクはやや焦りながらではあるが、ジェイルが今緊急時の自爆装置を起動させた事を伝えた。止められるのは、ジェイルのみなので後十分で脱出しなければならない。

現在、ジェイル達は龍騎達の方へ向かっていて、合流次第ラボから脱出し放棄すると告げた。それに一瞬だが、全員が息を呑む。見れば、チンクも悔しそうに表情を歪めていた。

「それって……」

「あたし達の家……捨てるの？」

「チンク姉、冗談だよな？」

『……事実だ。ドクターさえ手を付けられんらしい』

チンクの告げた内容に、ディエチは信じられないといった表情をモニターへ向けた。それに続くように告げられた二人の言葉。その声に込められた嘘だと言って欲しいという思いに、チンクは苦しそうに答えた。

「嘘……ドクターでも手を付けられないって……」

「ラボを放棄……そんな……」

「……分かりました。では、お待ちしていますチンク姉様……」

「どうかご無事で……」

ドゥーエとウーノさえその事実に言葉がない。天才であるジェイル。それが構築したシステムやプロテクトを簡単に掌握出来、ジェイルよりも一歩先んじるような芸当が出来る相手など、いるはずがないと思っていたからだ。

そんな暗くなる二人と違い、オットーとディードは比較的冷静に考えてそれに同意した。だが、その声には明らかに悲しみと悔しさが混ざっている。このラボで家事を積極的にしていた二人にとって、まさしく我が家を失う事は耐え難い。

それでも、姉達も同じ気持ちであると思う事で、それを必死に飲み込んだのだ。既にウーノの補佐を離れ、オットーとディードは二人で龍騎の援護していたのもある。

何故なら、チンクの言葉を聞いた時から龍騎は無言で戦い続けているのだ。疑問も怒りも悲しみも。一切の感情を見せず、ひたすらトイを倒し続けている。それを見ていた二人には、自分達が怒り等を出す訳にはいかないと思ったのだ。

誰よりも悔しく、辛いのは、自分達の目の前にいる人物だと、そう思っているから。故に抑え込む。湧き上がる思いを必死になって。

「……っ」

龍騎の一撃がまた一機トイを倒す。それを見下ろし、龍騎は拳を強く握り締める。痛感する無力感。ライダーでありながら、ジェイル達の暮らしを守る事さえ出来ない。そう感じ、龍騎は手にしたド

ラグセイバーを振り払う。
それが接近していたトイのレーザー部分を破壊し、そのまま沈黙させる。それを蹴り飛ばし、龍騎は大きく息を吸って吐いた。

「……っ！」

また向かってくるトイ達へ、龍騎は挑む。それを支援するべく動くオットーとディード。それを眺め、クアットロは思う。それは、先程ウーノの補佐をしていた時に見た光景について。
一瞬しか見えなかったが、とても忘れる事の出来ない光景。それは、廃棄所に映っていたある物。それを思い出して、クアットロは呟いた。
「あれ、何だったのかしら……」

――不気味な大きい目玉が浮んでいるように見えたのだけど……

――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――

空白期最終回。そして、ＳｔＳ編序章。
ついに動き出した機動六課。原作とは違う関係を築き、良い方向へと向かっている六課の面々。

それとは逆に、動き始めた邪眼。悪い方向へ向かっている真司達。
最初からクライマックスな展開です

果てしない戦いの炎の中へ

試験が終わった後、スバルとティアナの二人は、場所を試験会場から近くの陸士隊隊舎に移して、はやて達三人に五代と翔一を加えた五人からある提案をされていた。

「機動……」

「六課？」

「せや。わたしらが立ち上げる部隊。そこに前線メンバーとして来て欲しいんよ」

はやての言葉を聞いて、二人は互いの顔を見合わせた。Bランクへ昇進が決まった直後、いきなりの異動話。しかも、誘ってくれたのは局内でも有名な魔導師三人組。更に自分達が憧れる者達が希望してくれたと聞けば、気分が高揚するというもの。

しかも、そこではなのはが小隊長だけでなく、教導までしてくれるとなれば尚の事。そんな振って湧いた有り得ない話に動揺しつつ、その言い合う内容はどちらも喜びと嬉しさを滲ませていた。念話を使わないのは、それだけ興奮しているのと、ここにいる者達には、そういう気遣いはいらないと言われているのもある。それに五人は苦笑。はやてが即答しなくてもいいと言った瞬間、二人は首を横に振って答えた。

「「いえ、是非参加させてください！」」

その答えに五人は笑みを浮かべ、はやてが頷いた。確かに受理したからと。近々正式な異動通知がいくからとの言葉に、二人は笑顔

を見せ合い、サムズアップ。それを見て五代は軽く笑い、二人へ告げた。

これからもそれが似合う人であってくれと。それに二人は少し驚いたが、力強く頷いた。それを見ていて、なのはがややからかうように五代へ尋ねた。自分達は似合う人ではないのかと。

「そんな事ないよ。なのはちゃん達も似合ってるから。これからもそのままのなのはちゃん達でいてね」

「何や、どこかおざなりな感じやな～」

「そうだね～。確かにそんな感じだったかも」

「な、なのはもはやてもやめようよ。五代さんが困ってるから」

はやてとなのはのからかう言葉に五代が苦笑する。それを見て、フェイトが二人へそう言って諫めるのだが、それを見つめてスバルとティアナはやや驚いていた。自分達が知る高町なのはは、仕事が出来、凄い実力者。エース・オブ・エースの異名を持つ若い局員の憧れなのだ。

そんななのはが、こんな風に歳相応の顔を見せている事に、抱いていたイメージを崩されていた。そんな二人を見て、翔一はどこか不思議そうに思いながら、どうしたのかと尋ねた。

それに二人は思った事を伝えると、翔一は成程と納得した。そして、こう告げた。自分が知り合った頃から、なのは達はこんな風な性格だったと。軽く意外そうな顔をする二人へ、翔一は何でもないように言った。

「なのはちゃん達だって、同じ人間だから。完璧な人なんていない

よ」

そのあっけらかんとした言い方に、スバルは驚き、ティアナは苦笑。翔一のらしさを知らないスバルは感心し、ティアナは納得。完璧な存在などいない。そんな事言われなくても当然だったと、ティアナは思い出していた。

自然体であろうと思っていたが、どこかで考えに変な思い込みが入っていた。なのはも自分と同じただの人。どこまでいっても、それは変わらない。そんな当然の事を気付かなかった事に、自分もまだまだだなとティアナは感じた。

（翔一さんには、やっぱまだ及ばないわ）

視線の先では、スバルにレストランで働いていたと言って、是非一度ご飯を作って欲しいと懇願されている翔一の姿があった……

「凄かったねぇ」

「……そうね。まさか翔一さん達も参加するとは思わなかったわ」

はやて達と別れ、二人は先程までの話を思い出しながら歩いていた。五代と翔一は何でも基本は食堂で働くらしく、前線をする訳ではないと教えられた。スバルもティアナも翔一の料理が食べられる事に喜びを感じていたが、それよりも今は食べてみたい物が出来ていた。

それは、その話に関連してなのはが絶賛したとある食べ物。翔一やはやても、その味にはサムズアップをせずにはいられない料理。その名も……

「早く食べてみたいな～、ポレポレカレー」

「一体何の意味かしら。ポレポレって」

「う～……六課に行けば分かるよ。その時、五代さんに聞こう」

「そうね。さて、じゃあ宿舎帰ったら、荷物纏め始めるとしますか」

「お～！」

元気一杯答えるスバル。それに苦笑しながらティアナは歩く。やや前を行くスバルが昼食をどうするかと聞き、ティアナは時計を見つめる。時刻は既に昼になっていて、どこも忙しい時間となっているだろうと予測し、ティアナは苦い顔。

スバルはそれに気付いて、同じく苦い顔しながらどこか近くで探そうかと続けた。それにティアナも頷き、出来れば安くて美味しい空いてる所がいいと呟いた。それを聞き取り、スバルがそんな所は早々ないと苦笑。

そんな風に二人は会話しながら、クラナガンの街を歩いて行くのだった……

一方、五代達はと言えば五人で食事をしていた。とは言っても、店などではなくその陸士隊の食堂だ。ティアナ達も誘ったのだが、試験で疲れたのと突然の話で驚いたのもあり、今日は遠慮させて欲しいと言われたのだ。

「それにしても、クウガが知られてるとはなぁ……」

「ティアナちゃんとスバルちゃんが出会ったのは、ある意味運命だったのかな？」

はやての言葉に五代は何か不思議なものを感じ、そう誰ともなく問いかけた。それになのはとはやてが腕を組み、自分達もそうだったようなものだと思い、互いに視線を送り合って苦笑した。

フェイトはそんな二人のやり取りに笑みを見せるが、何か思い出したのかやや不安そうに視線を五代へ向けた。

「エリオは知らないですよね？」

「だと思うよ。変身した事もないし、クウガで会った事ないから。あ、でもＲＸはどうだろう。後で光太郎さんにも聞いてみたら？」

「エリオ君と、キャロちゃん……でしたっけ。俺、エリオ君は会った事あるんですけど、キャロちゃんはないんですよね」

「あ～、翔にぃは基本わたしらと一緒におったからなぁ」

「キャロは優しい家庭的な感じの子ですよ」

なのはの言葉に五代も頷いた。一緒に小さい竜がいるんだと、嬉しそうに告げて。それに翔一が軽く驚き、フェイトへ視線を向けた。フェイトはそれに頷いて、フリードと呼ばれていると言いながら、執務官服の内ポケットから一枚の写真を取り出した。

そこには、フェイトと手を繋いで微笑むキャロと、光太郎に肩車されてどこか照れているエリオが写っていた。それを見て、翔一は頷いた。確かに優しそうな感じだと笑って。

しかし、その写真を見たはやてが軽くからかうように笑みを見せる。それに気付いたフェイトがどうかしたのかと尋ねた瞬間、それを待ってましたと言わんばかりにこう言った。

――――いや、まるで親子やと思ってな。

その一言にフェイトが思考停止し、ややあってから再起動。顔を赤くしながらそんなのではないと反論した。それにはやてが面白がって色々と返す中、五代と翔一は写真を見て笑顔を浮かべていた。

とてもエリオもキャロも嬉しそうに見えたからだ。何かいいよねと五代が言えば、和みますねと翔一が返す。そんな二人の会話を聞きながら、なのはは頬を掻いて呟いた。

「こっちとこっちで別空間です……」

隣では、フェイトがあまりにもムキになって反論するので、はやてが苦笑しながら謝っていて、反対では五代と翔一が光太郎との再会に思いを馳せ、会話に花を咲かせていた……

エリオ達と別れた光太郎は、転送ポートにやって来ていた。そこには、銀髪の女性が立っていて、光太郎を確認すると柔らかく笑みを浮かべて手を振った。それに光太郎も手を振り返し、女性に近付いた。

「お待たせしました、アインさん」

「いや、こちらもついさっき来たところだ。それで……もう帰るの

か？」

リインはそう言って光太郎へ視線を送る。その視線を受けて光太郎は笑顔で頷いた。もう二人の意志はちゃんと確認出来たからと。それにリインも頷いて、転送魔法を展開した。

向かう先は、ミッドチルダの転送ポート。そして、そこから八神家へ向かう事になっている。そう、今日は六課発足前に結束式を兼ねたパーティーをする事になっていて、リインと光太郎はその準備のため、これから買い物等をしなければならない。

故に、一度八神家へ行き、そこで必要な物を確認してから車で買出しに行く事になっている。光太郎が選ばれたのは、そこが理由。翔一はバイクの免許はあるのだが、車がない。五代ははやてが是非来て欲しいと言われ、除外。結局、動ける者で車が運転出来る者は光太郎しかいなかったのだ。

「あ、お邪魔してるよアイン。光太郎さんもお久しぶりです」

「やあユーノ君。元気そうだね」

「もう来ていたのか、ユーノ。仕事はいいのか？」

八神家に着いた二人を出迎えたのは、無限書庫の司書長になったユーノだった。光太郎がユーノと出会ったのは、彼がミッドにあるハラオウン家に世話になってからすぐだった。

戦闘機人は、もしかしたら地球ではなく魔法世界で生まれたのかもしれない。そう考えた光太郎は、そのための情報を得る方法をフェイトへ相談した。それでフェイトが紹介したのが無限書庫。そして、司書長をしていたユーノだった。

ユーノは光太郎から夜の一族の事を聞き、戦闘機人と自動人形の併せて三点で検索をかけて、情報を探してくれたのだ。結局見つかった情報は、かつて次元世界のどこかに夜の一族らしき種族がいたという事だけで、明確なものは見つからなかった。

だが、それ以来ユーノは光太郎と縁が生まれ、なのは絡みで意見を尋ねる事にしたのだ。というのも、光太郎は五代や翔一と違い、色恋にも敏感そうに見えたため。

光太郎はそんな事はないと言ったのだが、現実として、ユーノから見れば五代と翔一は誰とは言わないが、女性から好意を向けられている。それにも関らず、それに反応さえ示していないのだ。

そんな二人を見て、ユーノがなのはを重ね合わせたのは言うまでもない。光太郎にその事を話すと、光太郎も五代達に関しては同意してくれたのだから。

「うん。今日は、もう僕がいなくてもいいような案件ばかりだしね」

「大変だね、司書の仕事もさ」

「仮面ライダーに比べれば、僕らの仕事は楽ですよ」

苦笑する光太郎にユーノはそう苦笑して返す。リインはそんな二人のやり取りを聞きながら、家の鍵を開ける。そして、靴を脱いで中へ入っていく。それをユーノと光太郎は見送り、玄関で話し始める。

話題は、当然だが今日の事。ユーノへなのはに告白するべきだと光太郎が言うのだが、ユーノはそれに難色を示す。今の状態で言っても、なのはは自分を異性として意識していないから無理だと。

「だから意識させるんだ。なのはちゃんは、きっと自分の気持ちが

分かってないんだと思う」

「どういう事です？」

「多分、近い距離に居過ぎて、ユーノ君を家族に近い風に捉えてしまっているんだ」

そう言って、光太郎は杏子の事を思い出していた。自分もまさにそうだったのだ。家族同然に過ごした相手。でも、杏子は自分を異性として見ていたと、光太郎は気付いていた。しかし、それに答える前に、光太郎はそれが出来ない体になってしまった。

故に、光太郎はユーノとなのはを応援していた。その姿が在りし日の自分達と重なって見えたから。自分と杏子が手に入れる事の出来なかった結末。それを二人には送ってもらいたいと。

「……分かりました。僕、言ってみます！　今日、この気持ちをなのはへ……」

「それがいいよ。なのはちゃんも、きっとユーノ君の事を好きなはずさ。俺が保障するよ」

そんな会話が終わったのを見計らったように、リインが買い物メモと籠を手にリビングから姿を見せるのだった……

賑やかな雰囲気が漂う八神家。テーブルには様々な料理が並び、それらは全て翔一とはやて、リインによって作られた物。そして、そのパーティー会場となったリビングには、八神家と翔一、フェイトや光太郎、なのはにユーノ、五代だけでなく、もう二人参加して

いる者がいた。

「グレアムおじさんも来て欲しかったんやけど……」

「ごめんなさい。どうしても今日は無理だったの」

「でも、お父様行きたがっていたからさ。ホントだよ？」

リーゼアリアとリーゼロッテ。あの戦いの際、邪眼を相手に戦った仲間であった。二人は六課後見人の一人であるグレアムの代理として、コノパーティーに参加していた。

邪眼との戦いの後、グレアムははやてを犠牲にしようとした事を悔い、局を辞めようとした。だが、それを二人とクロノが止めたのだ。二人の仮面ライダーが守ろうとしたものを、無駄にするつもりかと。そう、はやてとグレアムが笑い合えるように。闇の書の悲劇を乗り越えるために、仮面ライダーは戦っていたのだからと。

みんなの笑顔のために。それを目指して戦ったクウガとアギトの事を三人は告げた。グレアムがここで局を辞めたら、その気持ちを踏み躙る事になる。そう三人は強く断言した。

それを受け、グレアムは考えた。仮面ライダーが戦う理由、その決意。それを三人から聞かされ、局員としてあるべき姿をそこに感じたのだ。故に思った。許されぬ罪を犯したと思うのなら、局員として戦って償うしかない。自分の命を賭けて、全ての笑顔のために戦おうとした仮面ライダーに応えるには、それしかないと。

そして、グレアムは今まで局員として戦い続けているのだ。部署毎のいざこざや軋轢。しがらみや偏見、誤解などを取り除こうと。局員同士が共に手を取り合って、笑顔のためにと動けるように。

安易に強大な力に頼るのではなく、小さくても全員の力を合わせてやれる事をやっていこうと。グレアムはそう言って陸や海、空の者達へ訴えているのだ。

「そうやな。おじさんも頑張ってくれとるから、今のわたし達がおる」

「そ～ゆ～事。六課設立にも、お父様の力が関わってるんだから」

はやてが嬉しそうに言った言葉にロッテがそう軽い感じで答えた。その内容が偉そうに聞こえ、アリアが軽くロッテの頭を小突く。

「もう、そんな言い方しないの」

「あはは、ええよええよ。わたしもそう思うし、軽い冗談な感じの言い方やったから。気にしとらんわ」

「ロッテさん、相変わらずアリアさんに頭上がらないんですね」

そんな二人のやり取りを見ていた翔一が、笑みを浮かべながらそう言った。それにアリアが笑い、ロッテは苦い顔をした。

二人が翔一と再会したのは、彼がはやてと再会して一週間後。グレアムとの顔合わせに際し、予期せず再会を果たしたのだ。だが、それははやてによる二人へのサプライズ。グレアムはそれを知っていて、二人には何も言わなかった。

そして、翔一と再会したリーゼ姉妹はしばらく言葉がなかったが、翔一が笑顔でサムズアップしたのを見て、涙を流して喜んだのだ。そんな二人だったが、五代との再会は比較的早かった。

五代が魔法世界に帰還して、たった一週間。リインに連れられ、訪れたグレアムの執務室。グレアムが五代へ直接会って礼を言いたいと言ったためである。そこで、二人も五代への再会を果たした。

前もって聞いていた事もあり、二人はそこまで驚かなかったが、それでも涙は止める事が出来ず、五代はそんな二人に困りながらも嬉しそうに答えたのだ。ただいま、と。

そんな事を思い出しているリーゼ姉妹の横では、ユーノが五代と会話中。話題はすずかとアリサ。ユーノの事を最初はフェレットだと思っていた二人は、五代から人間の男だと聞いて驚いたのだ。

そして、五代を通じてこう伝えたのだ。このスケベと。それがいつかの温泉の事を言っている事を理解し、ユーノは休みを取って地球へ赴き、二人へ謝罪をしたのだ。おかげで五代との感動の再会は、どこかケチがついた形となり、ユーノとしてはどこか悲しいものが残った事件となった。

「で、アリサちゃんが良い人がいないって最近よく言うんだよ」

「こっちの人でよければ紹介するって伝えてください」

「う～ん……そうだね。言うだけ言ってみるよ」

ユーノの苦笑混じりの言葉に、五代も同じように苦笑して答えた。光太郎と違い、五代や翔一は中々ユーノと話す機会がない。無限書庫へ行く用事がないのもあるし、そもそも接点がないのだ。

唯一、五代は冒険家だったので、ユーノが考古学者として動く時には共について行きたがるぐらいだ。実際、何度か五代は次元世界を旅した事がある。すずか達に断りを入れ、翠屋の手伝いを休み、リインに送り迎えだけ頼んで。

行き先はユーノが教えた遺跡の数々。既に調査などが終わっていて、見学などが出来る物に限ったが、それでも五代には満足出来る内容だった。何せ、冒険が終わると脇目も振らずユーノへ礼を言いに来たぐらいだったのだ。

まぁ、その際次もよろしくと頼まれた時は、さすがにユーノも苦笑いを浮かべたが……

「でも、ユーノ君って、いつの間にか光太郎さんとも知り合ってたんだね」

「ええ。フェイト経由ですけど」

「あ、ユーノ君。ちょっといい？」

五代と光太郎の話をしようとしたユーノだったが、それを遮るようになのはの声が響く。それに五代が笑みを浮かべ、ユーノを促す。それにユーノが申し訳なさそうに軽く頭を下げ、なのはの方へ向かって歩き出す。

すると、光太郎が五代の横へ苦笑しながらやってきた。どうも、シグナムから一度手合わせをしてくれと頼まれたようで、六課が始動したら自分達を相手に模擬戦をする気だと光太郎が告げると、五代も苦笑して困りましたねと告げる。

そんな時だった。二人に長らく聞こえなかった声が聞こえてきたのは。

”若者よ”

（アマダム？）

”光太郎”

（キングストーン！？）

”” 闇が目覚めた。心せよ、此度の闇は深い……””

そこで声は消えた。だが、五代と光太郎は互いを見合うと、その表情と雰囲気だけで同じ事を聞いたと理解した。

「聞こえました？」

「ああ。最後には警告まで受けた」

それだけで二人は内容が一致する事を認識。だが、今はまだそれを告げる時ではないと思っていた。せめて、このパーティーが終わるまでは。この時間だけは幸せに浸らせてやりたいと。しかし、フェイトがそんな光太郎達の僅かな変化に気が付いた。

（光太郎さんに五代さん……何かあったかな？　少し雰囲気が暗いような……）

「二人してどうしたんですか？　何か楽しんでないように見えますけど」

「そんな事ないよ。ただ、この時間も後少しで終わるんだって思ったら……ね」

「そうそう。俺もそう思ったんだよ。六課が始まったら忙しくなるからさ」

フェイトのやや窺うような言葉に二人は戸惑うも、五代がそれらしい事を言って答えれば、光太郎もそれを受けて笑顔で続ける。それを聞いて、フェイトは納得したように頷いたのを見て、五代は飲み物を取りにそこを離れた。

光太郎もそれについて行こうとしたのだが、その腕をフェイトが軽く掴んだ。それに光太郎が振り返ろうとすると、フェイトが周囲に聞こえない程度の声で告げた。

――後で、聞かせてくださいね。

それに光太郎が軽く驚きを見せるも、フェイトは既に光太郎から離れていて、もうシグナム達の方へ歩き出していた。しかし、その背中がどこか悲しそうに見えて、光太郎は心の中で謝った。

（ゴメン、フェイトちゃん。ちゃんと話すよ。この時間が終わったら、必ず……）

邪眼が目覚めた。それを聞けば、この楽しい時間に影を作る。ならば、せめてこの時間の終わりに告げよう。厳しく激しい戦いの日々。その始まりを、自分達の言葉が告げるのだ。そう考え、光太郎は拳を握り締める。

どこにいるか分からぬ邪眼。それを必ず見つけ出し、この手で倒すのだと。あの時、自分と共に戦ってくれた先輩達はいない。だが、その意志は、魂は確かにここにあると思って。

――異世界に破壊と混乱をもたらす邪眼。俺は、絶対に貴様を許さんっ！

そう心に改めて誓う光太郎だったが、その頬に何か冷たい感触が当たり、意識をそちらへ戻す。そこには、二人分の飲み物を手にし

た五代と、料理を手にした翔一がいた。その笑顔に光太郎は笑みを返す。

そうだ。今の自分にも心強い仲間がいる。仮面ライダーの仲間が。そう思い直し、光太郎は手渡された飲み物と料理を受け取る。その時、光太郎の脳裏にいつかキングストーンが光太郎に言った言葉が思い出される。

自分の力を秘密にし、孤独に生きろ。そうしなければ、人はその力を妬み、自分を恐れるだろうと。その言葉に対し、今の光太郎はこう断言出来る。決して孤独などになる必要はない。異なる世界、異なる時代の者達でも受け入れてくれる者はいる。ならば、本当に恐れるのは人ではなく……

（人を信じる事の出来ない心、か。きっと、それこそが一番の敵なんだ）

そう思う光太郎の目の前で、五代が翔一の皿から一つ揚げ物をもらって口に入れた。

「これ、美味しいね翔一君」

「あ、それはアインさんが作ったんです。これがはやてちゃんで、こっちが俺です」

「へぇ……おおっ！　こっちも美味しいね！」

次ははやての作った物を口に入れ、五代はサムズアップ。翔一も嬉しそうに頷いた。そんな光景を見て、光太郎も笑みを浮かべて自分の持つ皿にある翔一が作った物を口に入れた。

すると、そんな光太郎を翔一がどこか真剣な眼差しで見つめてい

る。それに苦笑し、光太郎は感想を言った。美味いと。それに翔一は笑顔で喜び。五代も同じ物を食べて頷いた。

「うん。翔一君のも美味しいよ」

「ああ。さすがコックさんだよな」

「喜んでもらえて嬉しいです。六課でも、俺、頑張ります」

そんな風に盛り上がる三人。それを眺め、フェイトとはやては少し寂しそうな視線を送っていた。

「……あんな光景を、いつまでも見ていたいわ」

「そうだね……」

「邪眼倒したら、やっぱり……」

「……止めよ。この話は、もう何度もしたじゃない」

フェイトの聞きたくないとばかりの声に、はやても黙った。二人だけではない。この話はなのはやすずか、アリサさえ交えてした事がある。倒すべき恐ろしい相手。それを倒すために遣わされた存在、仮面ライダー。

故に、それを倒した時、彼らは彼らのいるべき世界へと帰る。それは、きっと二度と会えぬ別れ。なのはとアリサは、兄にも似た五代との別れを惜しみ、すずかは淡い想いを寄せる五代へ、はやては翔一、そしてフェイトは……

「……皮肉なもんや。出会わせてくれた神様には、お礼と恨みを言

いたなるわ」

「……そう、だね」

会わせてくれた感謝と、二度と会えぬ別れをもたらす事への恨み。三人のいた世界が共に地球である事は分かっている。だが、当然だが彼女達の地球に、ゴルゴムもクライシスも未確認もアンノウンもいない。いた事さえない。

つまり、三人は地球の並行世界出身。それは、いかな管理局といえど行き来出来るものではない。故に、今度別れる時が今生の別れとなるのは必然。そうなのは達は考えているのだから。

そんな事を思いながら、二人は目の前で楽しげに会話する五代達を見つめるのだった……

「……ユーノ君、今、何て……」

「なのはが好きだ。異性として、女性として。もっと分かり易く言うなら……愛してる」

ユーノから話があると言われ、こうして別室で話をしていたなのはだったが、突然の事に頭が真っ白になっていた。ユーノは回りくどい言葉は使わず、最初から想いをぶつけたのだから。

なのはは好きと言われた時、何で今更と思ったのだ。自分もユーノを好きだと知っているはずなのにと。だが、それに続いてユーノが言った『世界中の誰よりも』の言葉に声を失ったのだ。

何とか搾り出した問いかけに、ユーノは駄目押しの言葉を返した。

愛している。これが意味する事を、なのはとて理解している。そして、それを理解した瞬間、なのはの視界がぼやけ出す。

ユーノはそんななのはの反応を見て拒絶かと慌てるが、なのははそうじゃないと首を横に振って否定した。言われて気付いたのだと。自分もユーノを異性として見ていた事に。

「嬉しくなっちゃったの。ユーノ君が、私の事そこまで思ってくれてるんだって」

「なのは……」

「それで、ね。一つお願いがあるんだけど……」

「何？」

なのはのどこか躊躇うような、そして恥らうような表情に、ユーノは不思議そうな表情を返す。それになのはは、やや緊張した面持ちで告げた。もう一度、最初の言葉を言って欲しいと。それを聞いて、自分の答えを言いたいからと。

ユーノは、そんななのはの言葉に顔を真っ赤にして頷いた。一大決心の末告げた言葉。それをもう一度と言われたのだ。正直無理と言いたかった。だが、ここでそれをしなければ掴みかけたものが逃げてしまう。

そう実感し、ユーノは大きく深呼吸。それを見てなのはは小さく苦笑。

「……僕は、なのはの事を愛してる。世界中の、ううん次元世界の誰よりも……」

「ユーノ君……」

最初と同じでありながら、更に想いを込めて告げられた言葉。飾り気はない純粋な気持ちが、そこにはあった。先程止まったはずの涙がまた流れ出す。だが、ユーノはもう慌てない。静かに、優しくそれを見つめてなのはの答えを待つ。

「……私も、ユーノ君の事が好き。この気持ちに気付かせてくれて……ありがとう」

「……なのは」

ゆっくりと近付くユーノ。それになのはは少し驚くも、すぐに何かに気付きじっとした。互いの呼吸を感じる距離。ゆっくりと回されるユーノの腕。それを感じて、なのはもユーノへ腕を回す。

そして、互いの視線を絡ませて、笑みを見せ合う。それはどこかおかしいといった感じのもの。自分達らしくないが、どこか自分達らしい空気感。それを感じて二人は苦笑した。

「こんなに近くでユーノ君の顔見るの、初めてかも」

「僕もだよ」

「……ドキドキするね」

「このまま心臓が破裂するって言われても、今の僕は信じるよ」

「にゃはは。それ、困るなぁ」

「うん。僕も嫌だ」

そして、ユーノが回した腕に力を込めた。それを感じてなのはも目を閉じた。ゆっくりと近付いていく二人の顔。そして、唇が重なりそうになった瞬間、ユーノの眼鏡がなのはに当たり、音を立てる。

そのせいで、何となくだが失敗したような感じを受け、ユーノとなのはは揃って苦笑い。だが、ユーノがなのはから腕を放そうとした瞬間、なのはの腕はユーノを余計抱きしめた。

「なのは？」

「眼鏡……取って」

「……取ったよ」

「言葉だけじゃなくて、今のももう一度……」

「えっと、今のって？」

「……う～、女の子に全部言わせるつもっ？！」

なのはの言葉を遮るように、ユーノの口がそれを塞ぐ。それに驚いて目を見開くなのはだったが、嬉しそうに目をゆっくりと閉じていく。その裏で、パーティーは終わりを迎えようとしていた……

ベルカ自治区にある聖王教会。そこの一角にあるカリムの自室。そこでカリムは、自身のレアスキル”プロフェーティン・シュリフテン”から導き出された予言を書き記した物を見つめていた。

「焼け墜ちる法の船。死者の列。闇の覚醒。冥府を司りし者。甦る

王。そして……悪しき世を創ろうとする眼」

その単語が意味する事を考え、カリムは大きくため息を吐く。機動六課後見人である彼女。その背景には、この予言が大きく関わっていた。管理局体制の瓦解。それを予言は暗示していたのだ。

しかし、この予言を陸は信じる事をせず、海と空もそこまで関心を見せなかった。だが、何かあってはいけないとグレアムやリンディ、更に伝説の三提督と呼ばれる存在の力添えを受け、出来た部隊。それが機動六課なのだ。

「でも、どうしてはやてはこの予言を聞いて、あそこまで強気でいられるのかしら？」

そう、はやてはこの予言を聞いてから、一度として不安を見せた事はないのだ。それは、予言の最後にある一文が原因。

――仮面で哀しみを隠す戦士。太陽と進化の輝き合わさりし時、龍騎士の咆哮が聖なる泉を呼び戻す……

クウガとＲＸに告げられた邪眼復活の報。それに含まれた警告を聞き、内心不安を抱く二人。

それを知らず、結ばれる絆がある。それを知らず、抱く悲しみがある。幾多の想いが、事態の始まりを告げる。

もたされし予言。それが意味する物とは……

何度目か分からないトイの襲撃を退け、チンク達はやっと龍騎達へ合流した。そこから全員で脱出を開始した。道中会話はない。先頭をトーレとセッテ。最後尾を龍騎が守っていた。

トイの襲撃は絶え間なく行なわれたが、全員揃ったナンバーズの前には、多少強度が上がっただけのトイは敵ではなかった。そして、やっと出口に近付いた時、その場所に何者かが立っていた。

そして、それを見てトーレとセッテが動きを止める。ジェイル達も同様に。唯一龍騎だけはそれが見えず、彼らの間を割るようにしてその相手を見た。

「な、何だって……」

「ふむ、貴様が龍騎か」

「どうしてジェイルさんがいるんだ!?」

そこにいたのは、ジェイルだった。しかし、頭髪の色が違う。ジェイルが紫に対し、目の前の相手は漆黒。だが、その外見はそれさえ除けばジェイルそのものだったのだ。

その謎の相手は龍騎達を一通り眺め、頷いた。手駒には丁度良いと。それを聞いた瞬間、龍騎は嫌な予感がした。それと同時にウーノが叫んだ。

「ドクターっ!」

「どうしたんだい!?」

「囲まれてる、な……」

「……これ、クア姉のＩＳだよ」

周囲に出現するトイ達。その光景を見て、苦い顔になるチンク。そして、どこか呆然とした表情でセインが呟く。トイが何もない空間から現れたのを見て、誰もが声を失った。先程まではまったく無かった能力。だとすれば、それを使ったのは目の前の相手しかいない。

そう思い、ジェイルは問いかけた。君は一体何者だと。それに、謎の相手は無表情で答えた。創世王と。

その言葉をキッカケに動き出すトイ達。だが、数が多く周囲を囲むようにしているため、トーレ達も苦戦を強いられる。龍騎もそれを援護したいのだが、創世王と名乗った相手から感じる威圧感が、自分の中にある何かと似ている気がして、動く事を躊躇っていた。

しかも、逃げようにも出口を相手が塞いでいるので、それも出来ない。トイは次々と補充がかけられ、囲みを突破する事も難しい。そんなまさに絶体絶命の状況に、龍騎はある決意をする。

「ジェイルさん、後どれぐらいで爆発するかな」

「……後五分弱だよ」

「じゃ、俺がアイツをどかすから、その間に逃げて」

龍騎のその言葉に全員が視線を向けた。トイを牽制、或いは倒しながら、ナンバーズは龍騎を見つめる。そして、創世王へ向かっていく龍騎。だが、それを見た創世王は、自分の体を瞬時に変化させる。

不気味な一つ目の巨体。邪眼完全体と呼ばれる姿へ。その不気味さに嫌悪感を抱いて息を呑む一同だが、それでも龍騎は戦った。手

にしたドラグセイバーを振りかざし、斬りつける。それを止めもせずに邪眼は受けた。

　すると、ドラグセイバーが完全に止まっていた。傷をつける事さえ出来ずに。それに驚く龍騎達。そこへ邪眼が電撃を至近距離で放った。それを喰らい、吹き飛ばされる龍騎。更に邪眼は追い打ちをかけ、龍騎の体へ電撃が流れる。

　龍騎の苦戦、それに全員に戦慄が走る。今まで誰よりも強い存在であった龍騎。それを簡単にあしらい、苦しめる存在に。だが、苦しみながらも龍騎は何とか体勢を整える。邪眼はそんな龍騎へ嘲笑うように告げた。

「貴様では我は倒せん。いや、傷をつける事さえ叶わぬ」

「……やってみなきゃ、分からないだろ」

　その挑戦的な言葉に、龍騎は一枚のカードを手に取った。それは、翼の絵が描かれた物。そして、そのカードを龍騎がかざした瞬間、周囲を炎が包み込む。そのカードこそ、ジェイル達が見たがっていた”サバイブ～烈火～”である。

　次の瞬間、ドラグバイザーが変化し、銃のような姿のドラグバイザーツバイとなった。それを見て、龍騎は手にしたカードをドラグバイザーツバイへ差し込んだ。

”サバイブ”

　その炎に影響されるように、龍騎の体が変わっていく。その体を包む鎧は、銀から真紅へ。燃え盛る炎に照らし出され、龍騎は敢然と邪眼を睨みつけた。

「これが……サバイブ……」

ジェイルはその姿に見とれ、心から喜びに打ち震えていた。望んで止まなかった龍騎の隠された力。まさしく、全てを焼き尽くす炎の化身。その風貌に、その威容に、その力強さにジェイルだけでなく、ナンバーズ達も目を奪われていた。

邪眼さえ、その状況に身動き一つしない。自身がデータで知る龍騎。それには、そんな姿は無かったからだ。自身が密かに見ていた中にも、それはない。未知なる姿、未知なる力。それに邪眼は恐れを抱いていた。

（奴も……仮面ライダー共と同じか？！）

自身を追い詰めた存在であるクウガとアギト。それらが自分を怯ませたフォームチェンジ。その一種と感じ、邪眼は微かにだが恐怖を抱いたのだ。そんな恐怖とは対照的に、揃って希望を感じているのがナンバーズ達だ。

龍騎から感じる力。その姿。それら全てが先程まであった不安を、絶望を焼き尽くす。希望と言う名の、紅い炎が。

「何？　この安心感……」

「決まってるでしょ？　真司君は仮面ライダーだからよ」

「炎が……真司へ宿っていく……」

「綺麗……」

「……見せてもらうぞ、真司。その力を！」

「すごい……凄いよ！　真司兄！」

「これなら……きっと」

「兄様……信じています」

「これがサバイブ……兄貴の奥の手」

「勝てる……絶対勝てる」

「にぃにぃに負けてらんないッス！」

「こちらは、私達に任せてください！」

炎を越えて襲い来るトイ達を迎撃しながら、十二人の視線が、想いが龍騎へ注がれる。やがて、周囲の炎が消えて、龍騎は静かにファイナルベントを取り出した。それを見て、ジェイルが我に返る。

龍騎が自分に言った事を思い出したからだ。逃げ道を切り開く。そのために龍騎は奥の手を出したのだから。だからナンバーズへ向かって叫んだ。

「みんな、一度でいい！　この囲みを突破するんだ！　そして、真司が確保してくれる出口から脱出する！」

「「「「「「「「「「「「了解っ！」」」」」」」」」」」」」

その声と同時に、龍騎は手にしたベントカードをドラグバイザーツバイへ挿入した。

”ファイナルベント”

それに呼応して現れる烈火龍ドラグランザー。ドラグレッダーが強化された姿だ。以前にも増して強靭に、力強くなったその姿に邪眼は怯んだ。なまじ情報がある分、それが覆ったために動揺が走る。

そして、ドラグランザーの姿がバイクへ変形し、龍騎はそれに乗り込んだ。目指すは邪眼が塞ぐ出口。そこへ向かってウィリーしながら走り出すドラグランザー。その口の部分から恐ろしい温度の火球を連続発射しながら、加速していく。

ドラゴンファイヤーストームと呼ばれる、サバイブ後の龍騎最後の切り札だ。その威力を前にしても、邪眼は立ち向かおうとするが、龍騎はそれを吹き飛ばす勢いのまま突撃を敢行した。

それと正面衝突する邪眼。その突進を体で止め、邪眼は勝利を確信した。だが、龍騎はそれさえ予想していたのか、その手には一枚のベントカードがある。

”ソードベント”

「っしゃあっ！！」

「な、なんだとぉぉぉっ！！」

掴んでいた手に変化したドラグバイザーツバイが傷を付けた。ドラグブレード。カタール状のその刃を片手に直撃させられ、邪眼がドラグランザーを抑えていた力が弱まった。その瞬間、再び加速するドラグランザー。そして、そのまま邪眼を押し出すように外へ運んでいく。

そして、完全に外へ出た所で、残った邪眼の手を狙って龍騎がドラグブレードをもう一度振るい、それで最後の片手を離させた。それを見て、ドラグランザーが停止する。

勢いで遠くへ飛ばされた邪眼を見て、龍騎はストレンジベントを取り出す。それは、状況に応じてランダムに姿を変える特殊なカード。

「これで……止めだ！」

”ストレンジベント”

そして、変わる物はただ一つ……

「うおぉぉぉぉ！！」

再びウィリー状態で動き出すドラグランザー。そう、変化したのはファイナルベント。ドラゴンファイヤーストームの連続使用という、まさに勝利の布陣となった。邪眼が体勢を立て直す間すら与えず、そのまま龍騎はその邪悪な姿を踏み潰す。

断末魔さえ上げる事が出来ずに爆発する邪眼。それと同時にジェイル達もそこに合流した。残り時間は三分を切った。そのため、龍騎達はそのまま急いでラボから距離を取る事になり、必死で走り去る。

そして、ジェイル達はベルカ自治区の夜の闇へと消えて行った……

ジェイルラボ　研究室。そこにあるモニターに表示されているタイマー。それが残り一分を切った所で停止する。そう、ジェイルしか停止出来ないはずの物を解除した者がいたのだ。それは、黒い髪のジェイル。龍騎が倒したはずの邪眼だった。

「一つ散ったか。まぁいい。龍騎のデータは得た」
　そう呟き、邪眼はコンソールを操作する。次々と表示されていくデータ。それは、トイの改良案とナンバーズのデータであった。そこに加えて表示されるプロジェクトＦａｔｅの文字とマリアージュのデータ。
　更に邪眼が操作して表示させたのは、ジェイルが当初企てていた計画の予定。それを見て、邪眼は笑う。心底嬉しそうに、楽しそうに、そして嘲笑うかのように。
――――我が代わりにやろう。貴様達が考えた玩具を使って、この遊戯をな。
　そう呟く邪眼の後ろには、同じように笑う存在が十人いるのだった……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――
一話。平和なクウガ達と違い、クライマックスな龍騎。そしてついにお目見えのサバイブ。龍騎が戦ったのは完全体とはいえ、たった一人で邪眼を撃破するのは、サバイブだからこそ。
次回は機動六課始動の日をお届け。龍騎達は、この直後からスタート。

動き出す運命の戦士達

機動六課始動前日。ミッドに一組の男女がやって来た。とはいっても、少年少女という表現がぴったりの年頃ではあったが。

「フリードは大丈夫？」

「うん。もう少しすれば自由にさせられるから」

共に下りのエスカレーターに乗り、エリオは両手に鞄を持ち、キャロは両腕にフリードを抱えていた。六課への異動となった二人は、スプールスからミッドへとやって来たのだ。

そして、この場所で迎えが来ているので、二人は周囲を見渡した。すると、待合所のような場所に二人の良く知る人物がいた。

「エリオ君、キャロちゃん、こっち！」

「「五代さん！」」

五代は片手を大きく振って、二人へ呼びかける。それに気付き、二人は笑顔で五代の傍へと走り出した。だが、そんな五代の横に、キャロが知らない人物がいた。翔一だ。キャロが来ると聞いて、翔一は対面を済ませておきたいと考えた。なので、二人の迎えを五代と共に引き受け、ここにいたのだ。

そんな翔一へエリオはお久しぶりですと言葉を掛けたが、キャロは初めて会う翔一にやや戸惑いを見せる。そんなキャロに五代は簡単に翔一の事を話した。エリオも前に話した事のある人だと補足した。

「ほら、すごく料理が上手くて、レストランで働いてたって教えた人だよ」

「……あ～、ご飯がすごく美味しいってエリオ君が言ってた」

「初めまして。俺、津上翔一って言います」

「あ、初めまして。私はキャロ・ル・ルシエです」

キャロが理解したのを見て、翔一はキャロと視線を合わせるべく、しゃがんでそう笑顔で告げた。それにキャロは嬉しそうに笑顔を返し、自己紹介。そして、それと共に腕の中にいたフリードが一声鳴いた。

それに翔一は軽く驚きを見せたが、前もって聞いていたので、そこまで動揺せずにいる事が出来た。それどころか、フリードの頭を軽く撫でる事さえやってのけたのだから。

それにキャロは驚き、エリオと五代は笑みを見せる。フリードは翔一に対して何も警戒する事無く、その手を受け入れ、頭を優しく撫でられていた。それが心から嬉しそうに見えて、五代もフリードへ手を伸ばして喉元を軽く触る。

それに翔一が猫じゃないですよと言えば、いや、意外といけるかもと五代が返す。そのやり取りを聞きながら、エリオがキャロへ苦笑しながら言った。

「ね、五代さんとどこか似てるでしょ」

「そうだね。少し驚きかも……」

二人の視線の先では、フリードを二人して撫で続ける五代と翔一

の姿があった……

ミッドの湾岸地区。どこか海鳴にも似た雰囲気を漂わせる場所。そこに機動六課の隊舎や宿舎はあった。五代達は、そこへ二人を案内したのだ。荷物をそれぞれのあてがわれた部屋に置かせるために。

実は、もう五代と翔一、そして光太郎は手荷物を宿舎へ運んでいた。三人は正規の局員達とは違い、あくまで協力者。そのため、本来ならば局員用の宿舎を使う事は出来ないのだが、そこははやてが部隊長権限で認可を出した。

ちなみに、五代と翔一は相部屋で、光太郎とエリオも相部屋となっている。ザフィーラもと翔一は誘ったのだが、はやてが念のための用心棒として、どうしても自分達の部屋にと言って聞かなかったのだ。

それを聞いた時、ザフィーラがどこか苦渋の決断をするかのように、苦悶の表情を浮かべていたのが翔一には印象的だった。

「キャロちゃんはフェイトちゃんと相部屋だから」

「あれ？　なのはさんと一緒じゃないんですか？」

翔一が言った一言に、エリオは不思議に思ってそう尋ねた。てっきりそうだと思っていたのだ。親友で仲が良い二人であるなのはとフェイト。一部からは怪しげな噂さえ言われる二人なら、きっと相部屋だろうと思っていたから。

それに五代が苦笑し、翔一を見る。翔一もそれに苦笑を返して頷いた。そんな二人の反応にエリオとキャロは揃って顔を見合わせた。

「実はね……」

「なのはちゃん、恋人が出来たんだ。それで、一人で部屋を使った方がいいってフェイトちゃんが言ったんだよ」

翔一の言葉に続くように五代が説明。エリオとキャロはその恋人が出来たとの話に、驚くのと同時に笑顔を見せた。フェイトから話を何度も聞いた相手であるなのは。エリオは何度か会った事もあるし、キャロも会った事は僅かだが、その時の事は鮮明に思い出せるぐらいだ。

強く優しい人。それが、なのはへの二人の共通見解。そんななのはに恋人が出来た。それは、二人にとっても喜ばしい事だった。何故なら、二人はフェイトが光太郎と結婚してくれればいいのにと考えていたからだ。

なのはがそういう風に幸せになってくれれば、フェイトも自分もそうなろうとしてくれるかもしれない。その時、自分達が光太郎とそうなって欲しいと告げれば、フェイトも自分の気持ちをはっきりしてくれるだろう。

エリオもキャロも知っているのだ。フェイトが光太郎を意識しているのは。それが異性としてかどうかまでは定かではないが、それでも他の男性とは違う事は確かだと思っている。

「……で、荷物をとりあえず部屋に置いて来ればいいよ」

「はい」

「でも、私達だけいいんですか？」

キャロはどこか申し訳なさそうに言った。他の者達はまだなのに、

自分達だけ先んじていいのかと。それに五代と翔一は小さく笑みを見せて語り出す。実は、荷物の運び込みだけはほとんどの者が終わらせているのだ。

それは、持ち運びに時間がかかるものだったり、大きな物だったりと様々だ。つまり、当日ではとても間に合わない物は許されていた。それを知る五代と翔一は、二人へこう言ったのだ。

心配しなくても、皆荷物を多かれ少なかれ運び入れているから。二人も気にせず置きに行っていいのだと。

「それが終わったら、リンディさん達に会いに行こう。そこで光太郎さんも待ってるから」

「光太郎さんが？」

「待ってるんですか？」

二人の言葉に五代は頷き、行動を促す。早くしないと遊ぶ時間が無くなると言って。翔一はキャロを案内するために女子寮へ。五代はエリオと共に男子寮へと入っていく。手にした荷物を翔一と五代が持って、二人は嬉しそうに笑みを見せる。

互いに歩きながら、近況を話し合う五代とエリオ。逆に、接点が無かったために色々な事を話して理解を深める翔一とキャロ。そんな会話が無人の宿舎内に響くのだった……

「……なので、ここでの経験を生かして、それぞれがそれぞれの道を歩いていくために、成長出来る場所になる事を切に願ってます」

新暦七十五年　四月。ついに機動六課は動き出した。はやては部隊長として、六課の人間全員に自分の思いを語り、それを締め括ったとこｒだった。はやての横には、なのは達隊長陣と五代達協力者三人が立っていた。

対して、はやて達の向かい側には、スバルやティアナだけでなくエリオとキャロ。それに、寮母として参加するアインの姿まであった。

はやてが話し終えたのを感じ、全員がこれで式は終わったと思った。だが、はやてはどこか楽しそうに笑みを見せると、視線を五代達へ向けた。

「さて、気付いた方もいると思いますが、こちらにいる三名は民間協力者として、私達と共に働いてくれる人達です。皆さんから向かって右側から、食堂で働く五代雄介さん。同じく津上翔一さん。そして、整備員兼予備ヘリパイロットの南光太郎さんです」

突然紹介され、若干戸惑う三人だったが、それぞれ笑顔で全員へ挨拶をした。五代は明るく、翔一は元気良く、光太郎は爽やかに。それに全員が好印象を受けたのを見て、はやては小さく頷き、こう締め括った。

彼らは次元漂流者でありながら、この次元世界のために力を貸そうとしてくれる優しい者達。だからこそ、全員気兼ねなく色々と話をしたりして交流を図ってみて欲しいと。

「きっと、皆さんにとって大きな助けになってくれるはずです」

はやての言葉に、五代達は苦笑する。言われた方は、真面目に受け取っている者もいれば、どこか疑うような感じの者もいたからだ。

「はやてちゃん、少し気を遣い過ぎたのかな？」

「いえ、多分俺達を少しからかいたいんだと」

「彼女らしいな……」

「お前達、まだ式は終わっていないぞ」

ぼそぼそと話す三人へ、どこか呆れるようにザフィーラがそう呟くのだった……

式も終わり、同じ前線メンバーとして、スバルとティアナはエリオとキャロと顔合わせをする事になった。自己紹介を終えて、互いの事を簡単に話し、話題は四人に共通する事に変わる。

そう、五代達の事だ。ティアナは翔一、スバルは五代、エリオとキャロは光太郎と、それぞれ関わりが深い相手が異なり、それ故に意外な話や納得の話などをし合っていた。

ティアナとスバルは光太郎の情報がほとんどなく、エリオとキャロは五代と翔一がそこまでない。そのため、どちらかと言えば、自分達よりも三人の情報交換になっていた。

だが、それもあってかすぐに四人は打ち解けた。敬語を使おうとするエリオとキャロに、ティアナとスバルは普通に話して欲しいと告げた。これからは背中を預け合う仲間になるのだし、共に気楽に笑い合っていたいと言って。

「ま、馴れ馴れしくしろとは言わないわ。でも、アタシ達は固い喋り方されるよりはそっちに近い方がいいの」

「そういう事」

「……分かりました。なら、これからよろしくお願いします。えっと、スバルさん……ティアナさん」

エリオの呼び方にティアナは笑みを見せ、ティアでいいと返す。親しい者やそう呼んでもらいたい相手には、そう呼ばせているからと付け加えて。それにエリオは少し驚くが、嬉しそうに頷いた。

「私もよろしくお願いします。スバルさん、ティアさん」

「キュク～」

そうやって、四人と一匹が楽しげに会話しているのを見て、なのはは安堵した。思ったよりも早く打ち解けたようだと。そして、何となくだがその原因が五代達にあると思い、一人小さく苦笑。

どこまでも影響を与える人達だと、そう思いながらなのはティアナ達へ近付く。そう、他の者達はオリエンテーションなのだが、フォワードである四人はこれから即訓練なのだ。

「……もう、話は終わった？」

「あ、はい」

「自己紹介とポジション、それと……」

「光太郎さん達の話を、少し」

ティアナがやや苦笑したのを受け、エリオがそう続けた。それに

なのはは笑みを見せて、詳しい話は夜に休憩室でしなさいと軽く注意する。そして、そのまま四人を連れて訓練場へと向かうのだった……

格納庫に置いてある四台のバイク。一台はヴァイスの私物。赤色を基調とした物だ。だが、その隣に置いてあるのは、青が基調。そう、アクロバッターだ。更にその隣はビートチェイサー。その横が翔一のバイクである。

それを眺め、ヴァイスは光太郎へ視線を向ける。光太郎は、自分も乗る事になるヘリを眺め、その整備をしている。ヴァイスは光太郎の事をあまり知らない。先輩であるシグナムから聞いた僅かな情報と、今日出会った時に交わした会話だけだ。

それでも、光太郎が好ましい相手だとは思ったし、ヴァイス自身はとても話が分かる同僚だと思ったぐらいだ。先程もバイクの話やヘリの話などをして、盛り上がったのだ。

民間とはいえ、光太郎もヘリパイロット。その話は局員としてしかヘリに乗った事のないヴァイスには、とても興味深かった。危険な状況へ向かう局員とは違い、楽しい空の旅を安全に送ってもらうために操縦する民間。その違いと、光太郎が話した世話をしてくれた社長夫妻の事は、ヴァイスにとっては色々と思う事もある話だった。

（でも、どうしてあんなに悲しそうな目をしたのかねぇ……）

思い出話をしている時、光太郎はどこか悲しい目をした。それにヴァイスは気付いていたが、敢えてそれに触れずにいた。自分も聞かれたくない事や言いたくない事の一つぐらいはある。

光太郎の目にそれを感じ取ったため、ヴァイスは何も言わなかったのだ。何故ならそれは、自分が取り返しのつかない失敗をしてしまったような目に見えたからだ。

「ヴァイスさん、これは何です？」

「あ～、今そっち行きますわ」

気が付けば、光太郎は整備を外から中へと移していた。そのため、内部機器が分からない光太郎は助けを求めた。光太郎がいた時代は、平成元年。ミッドの技術はそこから遥かに先をいっている。だから、光太郎には分からない物ばかりだったのだ。

ヴァイスから機器の説明を受ける光太郎。それは、光太郎が始めてヘリに乗った時に似ていて、懐かしさを感じさせた。何も分からない自分に、優しく丁寧に教えてくれた佐原俊吉。自分がゴルゴムとの戦いを終え、心身共にボロボロになっていた際、それを助け再び生きる希望を与えてくれた光太郎の恩人。

（……おじさん、いつかおじさんは俺に言ってくれましたね。生きる意味を見つけろって。生まれる命には、必ず意味があるんだ。そう、信彦をこの手にかけた俺に言ってくれた事、今でも覚えてます）

幼馴染で兄弟のように育った相手。それを自身の手で止めねばならなかった。そんな苦しみと悔恨の日々。それを俊吉は払い除けたのだ。事情は知らぬでも、自分の親戚である光太郎が悩んでいた事には気付き、それに何とか力になってやりたいと動いたのだ。

その姿と優しさに光太郎は立ち上がる力をもらったのだ。その際、言われた言葉を思い出し、光太郎は心で告げた。生きる意味、見つけましたと。二度と俊吉達のような犠牲者を出さないために、ＲＸとして戦うと。

そんな事を思いながら、光太郎はヴァイスの説明に相槌を返すのだった……

「じゃ、今日はここまで」

なのはの声が響く。その視線の先には、疲れ果てた姿の四人の姿があった。なのはの訓練は想像以上に厳しく、四人はついていくだけで精一杯。結局、何にも良い所を見せられないまま、訓練は終了した。

地面に突っ伏している四人を見て、なのはは苦笑し、こう告げた。思っていたよりも動けていると。この調子で頑張ってくれるなら、必ずそれが報われるようにしてみせると断言した。

「とりあえず、明日からは早朝訓練も始まるからね。今日はこれだけかな」

「あ、ありがとうございました……」

「「「ありがとうございました……」」」

笑みを浮かべるなのはへ、ティアナが何とかそう言うと、スバル達もそれに続いて声を出す。それが少し面白く感じ、なのはは小さく笑う。するとそこへ、空間モニターが現れる。それは、六課中に出現していて、映っているのは五代と翔一。

その格好は、共にエプロンを付けている。そののどかさに二人を良く知る者達は笑みを見せ、知らない者達はやや呆気に取られていた。そんな空気を無視するように、五代が小さく「せ～の……」と

声を掛けて……

「「本日より、レストランＡＧＩＴＯとオリエンタルな味と香りの喫茶ポレポレが開店です！」」

そう大声で言った。どうやら食堂の宣伝のようで、二人はおすすめや一押しなどを次々と告げていく。それを聞きながら、なのはは思う。これで六課の人間にも、確実に影響が出ると。ここで働く者で食堂に行かない者はいない。

となれば、否応なく五代と翔一とは関わる事になる。そうなれば、絶対に少なからず影響はある。何せ、五代も翔一も天然の人誑しなのだから。

（でも、レストランＡＧＩＴＯって……翔一さんらしいなぁ……）

自分のもう一つの名前を隠すどころか堂々と使用する所に、翔一らしさを感じるなのは。しかし、翔一がアギトだと知っているのは、闇の書事件関係者以外では、光太郎とツヴァイのみ。

故に、きっとこの名の意味を理解する事は出来ないだろうと思い直し、なのはは意識をモニターへ戻した。どうやらもう宣伝は終わりのようで、二人は互いに何かないかと聞き合っていた。

『まだ何かあった気がするんだけどなぁ……』

『あ、五代さん。あれですよあれ。週一回の！』

『あ～！　そうそう。それだ』

盛り上がる二人だが、その後ろには苦笑するはやてと頭を抱えるグリフィスが映り込んでいる。そう、二人がいるのは食堂ではなく、

何と指揮所、つまり司令室である。
そこをおそらく頼み込んで使わせてもらっているのだろうが、どうもそれを段々忘れ始めているようだ。その証拠に、二人は画面さえ見ずに話し出していたのだから。

『週に一度、おれの技から何か一つを見せようとしてたんだよ。室内で出来る物にしようとは思うけど……外じゃないと駄目なのもあるからなぁ』

『なら、その時はこうやって中継ですかね？』

『あ、そっか。その手が……』

『あ～、五代さんも翔にぃもそこまでや。わたしはいつまでも見ていたいし、聞いてたいけどな。仕事、戻ってくれるか？』

どこか突っ込みのない漫才のような様相を呈してきたのを察し、はやてがそう苦笑しながら止めに入り、モニターが消えた。訪れる静寂。しかし、その瞬間、どこからか笑い声が聞こえてきた。
それは、隊舎全体。二人のやり取りで性格は理解され、はやての冷静な締め方に面白さを感じたのだろう。なのはも確かに笑いを堪えるのが辛かった。

見れば、ティアナ達も笑っている。その笑顔を見て、なのはは思う。この笑顔を守るために、六課はあるのだと。なのはとフェイトは六課の設立理由は邪眼対策だと聞かされている。それも勿論あるのだが、はやてはまだなのは達に伝えていないのだ。
それは、カリムの予言。はやて自身もまだどこか不安に思う部分はある。だが、それを考えても仮面ライダーが三人いる事に、大きな希望を感じていたのだ。故に、カリムからは不安がないように見

えるのだから。

（私達も、五代さん達もあの頃とは違う。邪眼がどれだけ強くなっても、絶対負けないっ！）

不屈の心に燃える希望の灯。それを確かに感じながら、なのはは誓う。スバル達をあの頃の自分達よりも強くしてみせると。あのパーティーの後、五代と光太郎から語られた邪眼復活の事実。それに対し、その場にいた全員が決意を新たにしたのだから。

今度こそ完全に倒す。その時の思いを思い出し、なのはは四人へ立ち上がるように言った。そして、お昼にはポレポレカレーが食べられるからと告げて笑顔を見せた。

なのははそれに頷く四人を見て、先に戻っていると告げて走り出す。キャロだけが意外そうな表情。ティアナ達はそんなキャロの反応に苦笑し、歩き出した。歩きながら話すのは、昼食の事。カレーを知らないスバルに対し、翔一経由で食した事のあるティアナと、地球の日本通ハラオウン家にいたエリオとキャロはそれを知っている。

「どんなの？」

「何も先入観無しで食べなさい」

「でも、美味しいですよ」

「私は甘い方が好きですけど」

ティアナは何も言わず、エリオは美味しいと保障をし、キャロは下手な情報を与え、スバルは混乱する。そんな会話をしながら、四人もなのはに続けと隊舎へ急ぎ出す。視線の先には、真新しい隊舎

があった……

クラナガンにある時空管理局地上本部。そこの一室であるレジアスの執務室に、グレアムがいた。共に向かい合うように椅子に座り、レジアスの秘書をしている娘のオーリスは、そんな二人から少し離れた位置でそれを見つめていた。

グレアムは本局の立場でありながら、レジアス達地上を擁護し、支援をしている数少ない陸所属ではない友人。そうなったのはここ数年だが、その関係はそれほど悪いものではない。互いに局が発祥した世界を守る事が出来なければ、他の世界を守る事は出来ないと意見は一致しているのもある。

「それで、六課へはあまり干渉するなと？」

「いや、大目に見てくれと言ったのだゲイズ中将。あの部隊は単なる実験部隊でない事は知っているだろう」

「例の聖王教会の小娘の予言とやらか。あんなものに振り回されて……」

レジアスがそうグレアムへ反論しようとした時だった。グレアムは静かにある写真を見せた。それを見て、レジアスの表情が変わる。そこに写っていたのは、ヴィータと協力して崩れた瓦礫から男性を助け出しているアギト。

その異形を見て言葉を失うレジアスへ、グレアムは告げた。彼らは仮面ライダー。邪悪を倒すために異世界より来た者達だと。その異世界という言葉にレジアスは訝しむような視線を見せる。

それを受け、グレアムは簡単に説明をした。闇の書事件の真相を。そして、機動六課の本当の相手は、その際現れた不気味な存在だと。信じられないとレジアスは思った。並行世界を渡り、自分達と何の関係もない世界のために戦う者達などを。

しかし、それにグレアムは小さく言った。それは、局員のあるべき姿と同じではないかと。それにレジアスは言葉が無かった。自分達と何の関係もない世界のために戦う。それは、確かに全ての局員に言える気持ちだった。

「彼らは、人知れず恐ろしい怪物達と戦っていたそうだ。自分達の力は、全ての生きる者達の笑顔を守るためにあるのだと、そう思って」

グレアムは、どこか眩しいものを見つめるかのような視線をレジアスへ向けた。レジアスはその視線に何も言えない。自分がもっと地上に人と資金をと叫んでいるのは、地上での被害を減らしたいからだ。その根底には、仮面ライダーと同じく全ての者達の幸せを、暮らしを守りたいとの思いがある。

（馬鹿な……こんな存在が本当にいると言うのか。噂は本当だったのか……）

ここ数年ミッドで囁かれるようになった噂。仮面ライダーを名乗る異形達が、災害現場や事件現場に現れ、局員や一般市民達を助けているというものだ。実際に目撃した者達もいて、その存在は今や局員達の中では有名だった。

よく目撃されるＲＸ。それに次いでアギトが多い。クウガは少なくないが、二人に比べるとどうしても目撃回数は少ない。そして、三人に共通するのはただ一つ。仮面ライダーを名乗り、決して人に危害を加えない事。

「ゲイズ中将、少し耳を貸してもらえないか」

「……分かった」

グレアムの表情が真剣なものなのを見て、レジアスはきっとこの話絡みだと認識した。互いに身を乗り出し、グレアムはレジアスへこう囁いた。

――――六課には、その仮面ライダーが有事に備えて協力している。

その言葉にレジアスは表情を一変させた。グレアムはそう言って再び姿勢を戻す。更に、どこか戸惑うレジアスへ、こう言った。その内の一人は戦闘機人関係者を追いかけているのだと。それが自分に向けて言われた物と気付き、レジアスはゆっくり視線を上げる。

そう、光太郎とフェイトは管理局内部に関係者がいるのではと思い、既に調査をしていた。そこには、クイントからの情報が大いに役に立った。ジェイルから渡されたデータ。そこには、戦闘機人関係も当然あった。レジアス・ゲイズの名は、戦闘機人をジェイルへ依頼した者として名前が上がっていたのだから。

「……何が言いたいグレアム提督」

「私は何もない。ただ、伝言を預かっているのだよ、その仮面ライダーから。君は地上の人間だ。なら、もしかすればその事件の関係者を捕まえる事もあるだろう。その相手に、こう言って欲しいそうだ」

そう言うと、グレアムは一度目を閉じて息を吐く。そして、目を開くと静かに感情も込めずに告げた。

「人の命の重みを知るのなら、それを踏み躙る行為に手を出してはいけない。誰かを悲しませて残りを笑顔にしても、今度はその誰かが悲しみを生む。それを考えずに命を弄ぶのなら、容赦はしない」

「……そうか」

「それと、最後にこう言ってくれと。人ならざる哀しみと苦しみは、自分達だけで沢山だ……と」

それだけ伝えると、グレアムは立ち上がった。もう用件は済ませたとばかりに。オーリスはそれを見てレジアスへ視線を向けた。レジアスは何も言わず、最後の言葉の意味を考えているようだった。そして、グレアムが部屋を出ようとした瞬間、その背に向かって言い切った。

「グレアム提督、そのライダーとやらに伝えてくれ。その言葉、確かに伝えておく、と」

「……分かった」

「助かる」

「……レジアス」

グレアムは一度振り返り、公人としてではなく、私人として言葉を掛けた。それにレジアスが視線だけで応じる。

「私も君も、ライダーには感謝しなければならんな」

「……その話、今度家で飲む時にでも聞かせてくれ」

グレアムの声から何かかかってあったのだろうと気付き、レジアスはそう返した。その言葉にグレアムは頷いて、部屋を出た。それを見届けて、レジアスは息を吐いた。オーリスはそんな父の姿を見て、軽く驚いた。

普段とは違い、どこか昔の姿に見えたのだ。ゼストと夜遅くまで飲み明かし、母を困らせていた頃に。だがオーリスがそんな事を思い出している間に、レジアスはいつもの雰囲気へと戻っていた。

その後、レジアスは六課への干渉を最小限へする事を決め、自身は無視する形を取った。何か問題を起こさぬ限り、一切の手出しをしない。そうオーリスへ厳命した。

こうして、誰も知らない場所で六課を守るために動く者がいる。ライダーに救われた者が、また誰かを救う。その輪が繋がり、やがて大きな力となる。きっとそれが、世界を守る力に変わる……

夜の森を歩く真司達。あの後、何も起きない事に真司は疑問を持ったが、ジェイルやクアットロ辺りはそれに納得していた。そう、ジェイルを模していた事から、一つの仮定を立てていたのだ。

それは、あれがジェイルの受精卵を使っているという事。それならば、その数は十二いるはずだと。それを実証するように、起きるはずだったロボの爆発はなかった。

「……で、これからどうする？」

とりあえずオットーやディエチが枝を集めて、自身のＩＳを使って起こした焚き火に当たりながら、真司はそう全員へ尋ねた。ジェ

イルはそれに困り顔で答える。残っている施設などへ行けばいいのだが、それを相手も知っている。つまり、自分達が知る場所へは行けないと。

なので、今はウーノがＩＳで周辺の探査を行なっている。それまでは全員で焚き火を囲みながら、しばらく話し合いとなった。話題は、ジェイルを模した創世王を名乗った怪物。

不気味だったと誰かが言えば、どうやってラボに潜入したのかと疑問が上がる。更に一番の問題は、最後に見たＩＳらしき能力。クアットロの物と同質の効果を持つ能力を使った事に、誰も言葉がなかった。

もし、あれが本当にＩＳならば、相手は全員のＩＳを使える可能性があるのだ。それを思えば、嫌にもなる。自分達の力が、よりにもよってその自分達を困らせる事になるのだから。

「……ドクター、ここからそう遠くない位置に建造物があります」

「そうか。なら、そこへ行ってみよう。今は例え局員でもいいから会いたい気分だよ」

ジェイルの笑えない言葉に、真司は頷いて返す。そして、冗談めかして、これから行く場所が悪い事をしてる奴らの隠れ家だったらいいのにと言った。それにセインが乗っかり、それで自分達がそれを捕まえて感謝されようと言えば、ウェンディがいっそそこを乗っ取って第二の家にと告げる。

そんないつもの空気に、誰もが先程まであった寂寥感を感じなくなっていく。真司とセイン、ウェンディがいつものような話をするだけで、全員に笑みが戻る。ついさっき住み家を失ったとは思えない程、明るく楽しげに話す真司達。

焚き火を消し、ぞろぞろとウーノが見つけた場所へ向かって歩き出す。雰囲気が明るくなれば、話題も変わる。今は完全にサバイブの話へとなっていたのだ。

セインがかっこよかったと言ったのを皮切りに、口々にその強さと姿に賞賛と感謝を告げていく。真司がいなければ、あのままどうなっていたか分からない。その思いが全員にはあったのだから。

その後も話は続く。今の現状を旅だと思えばとセインが言って、真司がなら今日は野宿かと返し、野宿は嫌だとクアットロが文句を言う。もう一度風呂に入りたいとセッテが言えば、我慢しろとトーレが応じる。せめて衣服をいくつか持ってきたかったとディードが呟けば、オットーがそれに頷いた。

そんな姉妹達を見て、ディエチが嬉しそうに笑みを見せれば、チンクも同じような笑みを浮かべていた。ウェンディはノーヴェとやや先行する形で前を行きながら、何かを話しているし、ウーノとドゥーエは、思った程妹達が悲しんでいない事に驚きを感じていた。

「それにしても、夜の森は冷えるねぇ」

「あ、見えたぞ」

ジェイルが手を白衣のポケットに入れながら呟いたのと同じくして、ノーヴェが前方を指差した。渓谷の谷間にひっそりとある建物。それを見て、全員が同じ事を考えていた。きっと、まともな場所ではない、と……

真司が冗談で言った事が的中した。そこは違法研究施設だったのだ。何せ、ジェイル達を確認するや否や問答無用で襲い掛かってき

たのだ。仕方なくトーレ達が応戦。殺さぬように気を付け、加減をしながら施設の奥へと進んでいく。
そして、その奥に彼女はいた。小さい妖精のような存在。それを初めに見つけたのはセッテ。拘束されているその体を見て、痛々しい気持ちになったセッテは、細心の注意を払ってその拘束を取り除いた。

「……ぇ？」

「大丈夫か、妖精さん」

真司からおとぎ話を良く聞いていたセッテは、目の前の相手がその中に出てきた妖精だと思い、密かに感動していた。一方の相手は、突然見も知らない相手から心配され、状況が分からなかった。
一先ず礼を述べ、セッテは優しく彼女を手に乗せた。そこへ施設の制圧が終わったため、のんびりと歩いて真司とジェイルが現れた。セッテが手にした者を見て、ジェイルが反応を見せた。

「ほぅ……融合騎だね」

「「融合騎？」」

ジェイルの言葉に真司とセッテの声が重なった。ジェイルはそれに苦笑しながら、ゆっくりと説明を始めた。古代ベルカ時代、騎士を助けるために生み出された存在。それが融合騎。
それぞれに適正の高い主がいて、それ以外とは融合出来なかったり、出来ても真価を発揮出来なかったりと欠点はあるものの、自分と合った騎士と融合すれば、その力はかなりの物になる。

「……でも、今は全滅したと思っていたんだけどね。そうか、ここ

は彼女を研究していたのか」

「ドクター、この子は助かりますか？」

セッテの悲しそうな表情に、ジェイルは静かに視線をその手に向ける。弱ってはいるが、十分に回復出来るだろうと思い、ジェイルは頷いた。まずは、食事と休息が最優先と言って。

それにセッテは頷き、手にした融合騎を真司へ託し、急いで施設内部の探索に加わったのだった……

「烈火の剣精……」

「それが彼女の識別名みたいだね」

施設の設備を使って、ジェイルはセッテが助けた融合騎を調べていた。そこに載っていた言葉を聞いて、真司は妙な親近感を感じていた。烈火とは、龍騎のサバイブカードの名であるからだ。

しかし、その後ジェイルはこう言った。識別名はあっても、名称はないと。つまり、彼女には名がないのだ。通り名しかない。それを聞いて、真司はなら名前を付けてやろうと決心するのは、当然と言えた。

「うし！　なら、俺が何か名前考えてやるか」

そう言って真司は手に乗っている小さな命を見つめ、色々と考える。

「……紅蓮」

「う……何か怖い……」

「なら……真紅」

「あ、ちょっといいかも……」

「じゃあ……焔」

「……少し遠くなった気がする」

真司の挙げる火から連想する言葉に、融合騎は反応を返す。そのやり取りを聞きながら、ジェイルは今後の事を考えていた。とりあえず、今日はこの施設で過ごす事になる。ここに残っている食料などを拝借し、その後どこへ向かうかを考えなければならない。

しかし、真司やナンバーズはともかく、自分は犯罪者。中々当てなどあるはずもなく、ジェイルは頭を悩ませる。その後ろでは、未だに真司による名前挙げが続いていた。

「う～ん……龍火」

「……微妙」

三国志に出てくる英雄と同じ響きを持たせたにも関らず、酷評を返され、真司は軽く落ち込んだ。だが、龍に対してではないと思い、再び考え出す。龍に拘ったのは、彼女が真司の挙げた龍華の名前に反応し、龍が気に入ったようだったからだ。

真司はその後、龍を生かした名前を何とか挙げるのだが、どれも真司自身もどこかしっくりこないと思っていた。そこで、真司は龍そのものを使うのではなく、その特徴になる物を挙げようと思った。

「……よし、アギトはどうだ？」

「あ、それ。それいいかも」

「うっし！　これで決まったな」

「うん」

龍の顎門。炎を吐く口の別名。真司はそこから名付けたのだ。それに彼女――アギトも気に入り、こうして名前はアギトとなった……

真司達が出会った融合騎。その名は、烈火の剣精アギト。龍騎士と出会えし、古の力。

共に烈火を持つ二人の出会いが、また一つ闇に対する力と変わる……

――

機動六課始動。そして、動き出す運命。真司達はルー達代わりにアギト救出。これで、役者は揃いました。

残る役者はどちらも物語の鍵。予言にも出てきた存在です。

過ぎ行く日々はＯｎｅ&ａｍｐ;ＯｎｌｙＯｎｅ&ａｍｐ;Ｏｎｌｙ

機動六課始動から一週間。特に何か動きがある訳でもなく、スバル達は訓練と書類仕事だけで過ぎる日々。なのは達も指導や書類仕事ばかり。五代と翔一は食堂で大忙しで働いていた。光太郎はヴァイスと理解を深め、彼の後輩であるアルトからも慕われる事になる。

ロングアーチと呼ばれる部署の所属であるアルトは、フェイトの補佐でもあるシャーリィと、アースラで事務官をしていたルキノと並んで三人娘と影で言われていた。

ちなみに、五代が初披露したのは折り紙。動物や乗り物などを紙で作り上げ、食堂の一角に飾ったのだ。それが女性達に大人気となり、五代が作った折り紙は瞬く間に無くなってしまったのだ。

翔一の作る料理は職員達の胃袋を完全に掴み、五代のコーヒーは一部の者に大変気に入られた。リインはそんな二人を補佐しながら、寮母としても精力的に働いていた。男子寮はリインが、女子寮はアイナが責任者となっていて、夜はアイナがいないため、リインが両方の責任者となる。

食堂で影響を与える五代と翔一に対し、光太郎は至る所で影響を与えていた。持ち前の勘で探し物を見つけたり、見かけ以上に怪力だったりと色々な面で頼りにされていたのだ。

ティアナは、なのはの教導が基礎固めばかりしかやらない事に疑問を持って、その意図を尋ねに行くなど自然と疑問を解決するべく動き、スバルは、光太郎がかつて一度会った事のある相手と思い出して、奇妙な縁を感じながらも関係を深めていた。

エリオは、五代が長物の扱いが上手いと聞き、それを少し教わったりしながら軽く中国拳法（五代曰くほとんど自己流に近い）も教わった。キャロは、翔一から簡単で美味しいレシピを教わって、い

つかミラとタントに食べさせると意気込んでいた。

訓練ばかりの日々。それでも、四人は文句も不満もなく過ごしていく。焦りそうになると、五代が、翔一が、光太郎がさり気無くそれを薄れさせ、迷った時には、なのはやフェイト、はやてが言葉や経験などを踏まえて意見をくれる。

ヴィータやシグナムはあまり口を出さないが、それでも聞けば答えるし、シャマルは優しく相談に乗ってやる頼れるカウンセラーとして、四人に認知された。ザフィーラは、早朝起きた時に光太郎と手合わせしている光景を目撃され、その強さに四人は認識を改める事になった。

たった一週間。その間に四人は、様々な事を知り、また少し成長していくのだった……

「……じゃ、今日はここまで」

夕方の訓練を終了し、なのはは座り込む四人へ笑顔でそう告げた。今日はシュートイノベーション。制限時間内になのはへ一撃入れるか、彼女の射撃を時間内避け続ける事が、今日の訓練。

何とかティアナとキャロが援護に徹し、スバルが突進力を生かして道を切り開き、エリオが加速力でその道を突き抜けるという戦法で、合格を掴み取ったのだ。

「「「「ありがとうございました」」」」

「うん、すぐに返事は出来るようになってきたね」

体力がついてきた事を確認し、なのははそう言って笑う。その言葉にスバル達は苦笑しか出来ない。そして、なのはが歩き出したのを見て、スバル達も立ち上がって後を追おうとしたのだが、その時エリオが何かに気付いた。

「スバルさん、それ煙出てますよ」

「え？　うわっ！？　ホントだ！」

「ティアさんのデバイスも……」

「……みたいね。あ～、今日かなり酷使したからなぁ」

自作である二人のデバイス。長年使ってきた上に、今日の訓練でかなり無茶をしたために、その寿命を全うしようとしていた。完全に沈黙した自分達の相棒を悲痛な面持ちで見つめ、スバルとティアナは言葉がない。

エリオとキャロもそんな二人を見て、どう声を掛ければいいのか迷っていた。しかし、なのはがそれに少し悲しみを込めた声で告げた。

「……悲しいけど、その子達は立派に生きて眠ったから本望のはずだよ。二人がどんな思いで使って、そして大事にしてたかは、その子達が一番良く知ってる」

「……なのはさん」

「そう、ですね」

「だから、今はゆっくり眠らせてあげて。その思いを受け継ぐデバ

イスを、準備しなきゃいけないし……」

その手にしたデバイス、ローラーブーツとアンカーガンを指して命と評したなのは。その思いが嬉しくてスバルは瞳を潤ませ、ティアナは頷いた。そして、なのはの告げた思いを受け継ぐとの言葉に、二人だけではなく、エリオとキャロも反応を返す。

その四人の不思議そうな視線を受け、なのはは小さく笑みを浮かべて、ついてきなさいとばかりに歩き出す。それを追い、四人も歩く。向かう先はデバイスルーム。そこでは、目覚めの時を待つ力と想いがあった……

夕食の時間となり、再び忙しさを増す食堂。五代は自作のクウガのマークが入ったエプロンをつけ、コーヒーにカレーにと動き回り、翔一も自作のアギトのマーク入りのエプロンをつけ、特製アギト御膳（ご飯、味噌汁、漬物、旬の物を使った和風のおかずが二品）やアギトセット（パン、季節のスープ、旬の物を使った洋風のおかずが二品）の調理に大忙し。無論、喫茶ポレポレとレストランＡＧＩＴＯには他のメニューもあるが、人気はその二つ。

リインはそんな翔一の補佐と五代のサポート、更にそれ以外の雑務をこなす八面六臂の活躍を見せていた。ちなみに、リインがつけているのはクウガのマークにアギトのマークが重なったエプロン。邪眼を倒した際のものを五代が表現した唯一無二の物だ。

「五代、私とザフィーラにナポリタンを頼む」

「あたしはアギト御膳だかんな」

「私は……はやてちゃんどうする？」

「わたしはセットにするわ。リインもそれでええな？」

「はいです！」

八神家五人の注文を受け、五代と翔一は無言でサムズアップ。リインはそんな二人に苦笑し、お盆を準備。まず出来上がったのは、ナポリタン。それを手にしてシグナムとザフィーラは先にテーブルへ。

ザフィーラは狼の姿でいる事が多いのだが、食事時や鍛錬時はこうして人の姿をする事となっていた。それは、翔一が望んだもの。ザフィーラをペットではなく人と思っているため、狼の姿での食事は禁止と告げたのだ。

二人が席につき、少ししてセットが完成。はやてとシャマル、ツヴァイが動き出し、ヴィータはそれを眺めて不満顔。翔一へ早くしろと急かし出す。それに翔一は苦笑しながら、御膳を完成させてお盆をヴィータへ差し出す。

「お～、やっぱ美味そうだな」

「お昼にシグナムが食べとるの見て、ずっと言うとったもんなぁ」

「リインは少しもらったです」

「私も迷ったけど、夜あまり食べると太るから」

「なら、夜に甘い物は取るなよ」

「湯上りの甘味が一番いかんと聞いたが？」

賑やかなはやて達。それを見て、笑みを浮かべる五代達。更にそこへ外回りを終えたフェイトが顔を出す。その隣には光太郎がいる。車を預けるついでに、連れ立って歩いてきたのだ。

「お、今は空いてるかな」

「みたいですね」

「いらっしゃいませ」

「独創的な味と料理のレストランアギトか、オリエンタルな味と香りのポレポレ。どちらのご利用ですか」

翔一が笑顔で迎えれば、五代がそれにやや畏まった口調で問いかける。それに二人は苦笑を返し、何を食べるかと話し合う。その間に五代達は返ってきた食器を洗ったり、この後の状況を予想しながら準備を始める。

やがて、二人の意見が決まったのか。フェイトと光太郎が笑顔でポレポレカレーを注文。それに五代が言った言葉に、軽く周囲が言葉を失う。

「カレー二つね。注文、どうもありが豆板醤は四川の決め手」

その言葉に光太郎もフェイトも苦笑するしかない。五代の言葉で食堂にいた全員が視線を彼へ向けたからだ。そして、その五代の言葉に翔一が頷き、小さく今度自分も何か言わないとと呟くのを聞いて、リインが軽く頭を抱えていた。

そんな中、即座に用意されるポレポレカレー。二人がこれを頼んだのは、時間が早いのも理由の一つ。それと、これを頼むと五代が

必ずサービスとして、五代ブレンドのコーヒーをつけてくれるのだ。

「はい、これはサービス」

「ありがとうございます」

「いつも思うけど、これでいいのかい？」

採算などを考えてない五代のやり方に、光太郎がそう尋ねるが、五代はそれに笑みを返して頷いた。損して得取れですから。そう言って五代はサムズアップ。自身で納得出来る行為と思っている。そう光太郎へ告げたのだ。

それを聞いていたはやてが、にやりと笑みを浮かべてその分五代の給料から引かせてもらうと言うと、途端にその笑顔が崩れた。それに笑いながら冗談だと返すはやて。その言葉に安堵の息を吐く五代を見て、全員が笑みを浮かべた。

五代が笑いを取る時は大抵人が絡んでの事が多い。翔一の場合は自身で取り、それとは違う形となる。そんな風に和やかな雰囲気に包まれる食堂。だが、五代と翔一は揃って小さく首を傾げていた。

「……遅いね」

「遅いですね」

いつもなら元気良くお腹を空かせたスバルとエリオが現れ、それに続く形でティアナとキャロがフリードと共にやってくる時間なのだ。

「何かあったかな？」

「訓練が長引いてるのかもしれないですね」

「ティアナちゃんが反省会してるとか」

「あ、じゃあ、スバルちゃんがお腹空きすぎて動けないとかはどうです？」

「……五代はともかく、翔一の意見はどうかと思うぞ」

来ない理由を予想し合う二人に、リインはそうどこか笑いを堪えるように告げるのだった……

五代と翔一が四人の事を考えていた頃、その本人達は、なのはから教えられたデバイスの事で頭が一杯だった。スバルとティアナは完全新型。エリオとキャロは、自分達のデバイスを本格的な物へとするために、機能を解除する事となった。エリオは槍型のストラーダを、キャロは手袋型のケリュケイオンをデバイスマイスターでもあるシャーリィに預けてきたのだ。

「でも、まさかねぇ……」

「アタシ達に専用のインテリジェントなんて……」

スバルとティアナは先程聞かされた話を思い出し、そう言い合った。スバルはローラーブーツに代わる”マッハキャリバー”を、ティアナはアンカーガンに代わる”クロスミラージュ”をそれぞれ与えられる事になっていた。

それを明日には渡され、訓練に使用する事になる。そう考えると、不謹慎だが心が弾むのだ。未知なる力を秘めた新型デバイス。それを使いこなす事が出来れば、また一歩強くなれる。

「とりあえず、食堂に急ぎましょう」

「五代さん達は待っててくれますけど、早く行ってお仕事終わりにして欲しいですから」

「そうね」

「も～、お腹ぺこぺこだよ～」

スバルの言葉に三人が笑って同意した。少し急ぎ気味に歩きながら何を食べるかと話し合う四人。その光景は、既に以前からそうだったような印象さえあった……

「あ～、生き返るな～」

「ですね～」

「やっぱり広い風呂はいいよなぁ」

男子寮の風呂に浸かり、表情を緩める三人の男。五代と翔一、そして光太郎だ。エリオもそんな三人と同じように力の抜けた顔をしている。ヴァイスとザフィーラは揃って頭を洗っていて、グリフィスは眼鏡が曇るために何度もレンズを拭いている。

先程までは整備員達や他の者達もいたのだが、五代達が現れるの

と入れ替わりで風呂から出ていった。部隊長がはやてである事もあって、六課は日本色が強い。この大浴場もその一つ。

「温泉に行きたいですね」

「あ、いいね。六課の慰安旅行とか」

「はやてちゃんは賛成するだろうけど、無理だろうね」

「僕、銭湯って所でもいいです」

三人の言葉を聞いたエリオが、そう笑顔で告げた。光太郎から色々な話を聞いたエリオ。その中には、そういう暮らしの中の話もあった。五代達もエリオの言葉に頷いて、それぞれ語り出す。

風呂上りの牛乳が美味いと五代が言えば、ラムネもいいですよと翔一が言う。光太郎はコーヒー牛乳も捨て難いと言って、二人に頷かれていた。そんな話に置いていかれた形になり、エリオは完全聞き役に徹していた。

やがてヴァイスやグリフィスもその会話へ参加し、ザフィーラはその話を聞きながら海鳴にあるスーパー銭湯の話を出した。その思い出話に翔一も懐かしそうに応じ、五代も聞いた事はあると返して、そこからヴァイスやグリフィスも巻き込んだ銭湯話へと発展した。

「女湯と声が筒抜け？！」

「マジかよっ？！」

「そうなんだよ。壁の上が繋がっててさ。石鹸の貸し借りとか、先に上がるよなんて伝えたりね」

「そうそう。俺はよく上がるのが早いって言われたなぁ……」

グリフィスとヴァイスが反応した事に、五代はそう説明し、光太郎は懐かしむように言って遠い目をする。翔一は最近の銭湯はそうじゃないと返し、ザフィーラがそれを肯定する。エリオは、五代達の話に人の繋がりを感じていたので、その良さが無くなった事実に軽くがっかりしていた。

ヴァイスは別の意味で残念がっていたが、グリフィスがそれに呆れたような視線を向けた。覗きをする気ですかと鋭く突っ込み、ヴァイスがそれに何が悪いと反論した。

そんなヴァイスを見て、ザフィーラがエリオへ静かに告げた。あんな男にはなるなと。それにエリオが真剣に頷いたのを見て、五代達三人は苦笑するのだった……

同じ頃、女子寮の大浴場でも……

「お風呂にそんなに種類を作るなんて……」

「面白そうですね！」

「うん。機会があったら一度連れて行ってあげたいけど……無理かなぁ」

なのはがティアナとスバルへ同じく銭湯の話をしていた。キッカケは、スバルの湯上りのスポーツドリンクが美味しいとの発言。それに、その場にいたはやてがフルーツ牛乳だと返したところから、

この話題は始まったのだ。
ヴィータがコーヒー牛乳が一番と言うと、それにフェイトが同意し、シグナムは普通の牛乳が至高と断言。それを聞いて、シャマルとリインが揃って頷き、ツヴァイとキャロは話についていけず、そんな会話に聞き入るのみ。
なのはは、スバルとティアナに地元のスーパー銭湯の内容を話し、それに二人は感心するやら呆れるやら。本来なら、スバル達となのは達隊長陣が共に入浴する事は稀である。訓練終わりに汗を流しに来るスバル達とは違い、なのは達は簡単な書類仕事等を片付け、それから入浴となるからだ。

しかし、今日はデバイスを見に行った事に付随し、食事が遅くなった事も影響したので、このようになのは達と出くわしたという訳だった。そして、もう一つ。
なのはが本来ならば夜遅くまで掛けて組み上げる訓練プログラム。それを精密に神経質とまで言えるような程、作りこんでいないためでもある。理由の一つは、なのはが撃墜されていないため。そして、もう一つは五代の存在。

それは、最初の夜になのはが作業していた時の事。何となしに夜の散歩をしていた五代がなのはを見かけたのだ。夜も更け、日付が変わるまで二時間もないにも関らず、訓練場の設定をしているのを見て、五代はなのはへ聞いたのだ。何故そこまでしているのかと。
それになのはは自分が長期間の教導をした事がない事を話し、スバル達のために出来るだけの事をしたいと思っているからだと、そう語ったのだ。それを聞いて、五代は理解したと頷いたが、こう告げたのだ。

――なのはちゃんが考えている程、人って弱くないよ。

その言葉の意味を判りかねているなのはへ、五代は笑みを浮かべて言った。何から何まで完璧にしなければいけない。そう思うのはいい。でも、それが必ずしも相手のためになるとは限らないと。

時には、どこか至らない場所があってもいい。それもいい経験として力に変えるのが人なのだ。五代はそう言って、なのはを見た。いい加減にやれとは言わない。でも、あまりにも根を詰めるのは良くないからと、そう告げて。

「訓練前に疲れてたら、意味ないよ」

「……そうです、ね。なら、これぐらいにします。細かい調整とかは……それが必要になったらで」

「うん。それでいいよ」

笑い合う五代となのは。そして、揃って歩きながら会話する。なのはが少し冗談で、何かミスをしたらどうしようと言うと、五代は少し考えてこう告げた。

「大丈夫。失敗しても、後悔しても、悩んでも、困っても、それでもみんな、前に進んでいくんだから」

サムズアップ。それになのはもサムズアップ。自分がどこか迷った時、道を示してくれる笑顔がそこにある。なのははそう考え、思い出す。自分はエースと呼ばれる存在。優れた空戦魔導師に与えられる称号。それに対し、優れた陸戦魔導師にはストライカーという称号がある。

どちらも状況を一変させる存在という意味合いが込められているが、五代達仮面ライダーはまさにそれだ。だが、エースもストライカーも彼らには相応しくないと思ったのだ。

そう、言うなればヒーロー。状況を一変させるではない。いるだけで勝てると思う存在。不可能さえ可能にするであろう者。それがあの戦いでなのは達が感じた感覚。絶望を払い、希望を灯す。いるだけ絶対大丈夫と断言出来る何かを持つ者。それが、仮面ライダーなのだから。

なのはがそんな事を思い出している横で、はやて達を見つめる者がいた。ルキノである。

「……い、意外とはやてさん達って庶民的なんだ」

「ルキノ、気持ちは分かるけどさ、はやてさん達もあたし達と同じようなもんだって。月給聞いたら、そこまで大差あるって訳でもないし」

「そうそう。仕事が忙しくなる割に見返り少ないんだよ。それに、フェイトさん何でもお仕事請けちゃうし……」

そんな盛り上がるはやて達から離れた位置で、アルト達が会話していた。視線の先では、はやて達が既に話題を湯上りの飲み物から五代達三人へと変えていて、シグナムが光太郎は模擬戦をしてくれんとぼやいていた。

「仕方ないわよ。光太郎さんも五代さんも基本戦う事が嫌いだし」

「だな。翔一だってどうしてもって言ってやっとだろ」

「……一度でいいと言っているのだが」

「あ～、無理無理。五代さんも光太郎さんも平和主義者や。力を使う事は最後の手段やからな」

はやての言葉にフェイトが頷いた。それを見て、シグナムは心の底から残念そうに項垂れる。リインは、そんなシグナムへ苦笑すると同時に大袈裟だなと告げた。それにツヴァイが同意する。だが、キャロはどうしてシグナムが、そこまで光太郎や五代との模擬戦に拘るのかが分からなかった。

（光太郎さんも五代さんも、そこまで強いとは思えないんだけど違うのかな……？　魔法使えないし、シグナムさんよりは弱いような……）

二人が仮面ライダーだと知らないキャロにとって、二人は一般の魔法を使えない者達よりは強い程度の認識。勿論光太郎がザフィーラと手合わせしたのを見たので、かなり凄いとは思っているが、バインドなどを使われれば勝てないと思っているのだ。

そんな風に考えるキャロ。その後ろではスバルとティアナがこの後の事を話していた。休憩室を使って談笑しつつ、お菓子を食べる事は決まっているのだが、話題を何にするかを決めかねていたのだ。

「やっぱり仮面ライダーについてかな？」

「う～ん……でも、噂程度しか話せないでしょ」

「じゃ、なのはさん達も誘ってみようか」

「……時々アンタの素直な思考が羨ましくなるわ」

上司に当たり、しかも仕事などで忙しいなのは。それを誘い、貴

重な時間を使わせる事を躊躇いもせずに提案するスバルに、ティアナはやや呆れながらそう答えた。
それを聞いていたのか、なのはが少し嬉しそうに笑みを浮かべて二人へ視線を向ける。そして、念話でフェイトとはやてに声を掛けた。内容は、一度スバル達にライダー達の事を話しておこうというもの。

なのはは、今後戦う事になる相手の事だけではなく、共に戦う仮面ライダーについても情報を与えておくべきだと考えた。いざという時に驚いたり、心乱す事がないようにと。そう告げるとフェイトとはやても少し迷ったが、確かにそうしておくべきだと判断した。
何せ、五代も翔一も光太郎も、変身の必要があれば躊躇う事無くすると知っているから。真実を教える必要はない。ただ、事実を教えて心構えだけでもしておいてもらおうと。

【それにスバルとティアナは、五代さんがクウガって知ってるんだよ。なら、レアスキルや特別製のバリアジャケットとかで通じる気がする】

【ま、確かにキャロ達にもある程度の情報は知らせとくべきか】

【……いいよ。でも、極力光太郎さん達の詳しい話はしない方向で】

こうして、なのははその場にいた全員に話したい事があると告げ、風呂上りに五代達も含めて話す事になった。それに不思議そうな反応を見せるスバル達へ、なのはは少し真剣な声で告げた。話は五代達についてだ、と……

六課の男子寮と女子寮は、渡り廊下で繋がっている。そのため、行き来は簡単に出来るのだが、消灯時間になるとその渡り廊下が施錠され、行き来出来なくなるのだ。

寮母であるリインに言えば開けてもらう事は可能だが、余程の理由がない限り不可能。そして、憩いの場所である休憩室は、男子寮側の渡り廊下からすぐの所にあった。

「……で、俺はスバルちゃんと会ったんだ」

「はい。私の忘れられない思い出の一つです」

六課の主だった人間が勢揃いで休憩室にいる異常な光景。寛いでいる格好だが、雰囲気はどこかそうではない。エリオを通じて休憩室へ呼び出された五代達は、なのは達が仮面ライダーの事を教えたいという話に初めこそ戸惑ったが、邪眼がいつ現れるか分からない以上、いつまでも黙っておくのも不味いと思い、了解した。

そして、まずはクウガの話。事情を知らない者達へ、なのはは五代達をレアスキル持ちと告げた。それは、自身の体を強靭な鎧で覆い、危険な状況に対応させる事の出来る能力だと。

それを聞いてスバルもティアナも納得していた。クウガの姿を実際見たスバルとそれを聞いていたティアナからすれば、その説明は実にしっくりくるものだったのだ。

そして、二人以外にもエリオやキャロなども理解すると同時に、納得していた。どうして何の力もない五代達を六課に誘ったのか。その理由を聞いたと思ったからだ。五代も翔一も光太郎も同じ能力を持つ者達。

だが、それはあまり頻繁に使うものではない。そうはやてが告げると、五代達もそれに頷いた。出来る事なら使わないままでいたい

と五代が言うと、光太郎がそれに無言で頷き、翔一はそうですねと同意した。

「じゃ、次はアギトの話？」

「そうや。翔にぃの話やな」

そのままはやてが語るアギトの話。様々な場所で救助活動をしていた時の事を話し、ヴィータやシャマル等が補足などをしながら懐かしむ。ティアナは、自分が知らない所で翔一が災害と戦っていたと知り、その事を自慢もしない所に密かに感心していた。

エリオ達も翔一が人知れずしていた内容に、素直に尊敬の念を抱いていた。普段明るくどこか抜けているような雰囲気さえ漂わせる翔一が、危険な場所へ赴き、命を助けていたのは、驚きと共に敬意を払う行為だからだ。

「……という訳で、翔にぃも立派な災害救助者や」

「でも、俺だけじゃ出来ない事ばかりだったから。はやてちゃんやシャマルさん達がいてくれて、助ける事が出来たと思うよ」

はやての誇るような言い方に、翔一はそう柔らかく否定するように告げた。自分一人では出来ない事ばかり。はやて達が支えてくれたからこその結果だと、そう強く言い切って。

それに照れくさくなるヴィータを見て、シグナムが小さく笑みを見せる。シャマルとリインは微笑み、ザフィーラは無言。はやては胸を張ってツヴァイはそれの真似をする。

「最後はＲＸだね。私と光太郎さんは、ミッド限定だけど一緒に捜査をしていたんだ」

フェイトが一つ一つ思い出すように話し出す。それは出会いの空港火災から始まって、つい最近までの事件にも及んだ。それを語っている時のフェイトは、どこか懐かしむような目をし、声には喜びと感謝が滲んでいた。

光太郎と出会ったからこそ、今の自分やエリオ達がいる。そうフェイトが言うと、エリオとキャロが頷いて返す。兄のように思っているとエリオが言えば、キャロも同じように感じていると告げた。

そこに込められたのは、親愛。光太郎をただの兄代わりなどではなく、心から慕っているという想い。そして、同時に二人はフェイトへも想いを伝える。フェイトが自分達を引き取ってくれたから、こうして笑い合っていられるのだと。

そこには救われた感謝と出会えた喜びが込められていた。笑顔でありがとうと告げる二人に、フェイトは一瞬言葉を忘れ、その後瞳に涙を浮かべた。それを見て、光太郎がそっとハンカチを差し出す。その二人を見つめ、誰もが思った。フェイトと光太郎にも、特別な絆が出来ていると。

仮面ライダーを知り、その正体を知ったスバル達。だが、それは事実であって真実ではない。彼らが背負った使命。その重さと苦しさは、まだ欠片さえ見せられていない。何故ならば、それを完全に知る者は、六課にはいないからだ。

フェイトも光太郎の事情を知りはしたが、五代と翔一の事情を完全には知らない。三人が持つ”人”ならざる痛みと哀しみの記憶。それをなのは達が完全に知る時、六課の戦いは終局を迎えるのかもしれない。

「でも、これで話は終わりじゃないんだ」

「……六課に五代さん達が協力してくれている理由。それを話さないとね」

「闇の書事件。その真相と結末を、話そか……」

なのはの言葉に、フェイトとはやてが続く。その真剣な表情と雰囲気にスバル達は揃って息を呑む。闇の書事件自体は、局内でも有名な事件だからだ。その真相と結末。光太郎も知ってはいるが、詳しい話をもう一度と思い、黙って三人を見つめていた。

そして、はやてが静かに語り出すのだ。全ての始まりと、ここに至る流れを……

「真司、これは？」

「それはラー油。辛いけど、それを使うと美味いんだ」

アギトの質問に真司は笑顔で答える。現在、真司達はあの施設を使って昼食中。メニューは、真司の希望で餃子。アギトと出会った事を祝うためにだ。チンクが陣頭指揮を執り、真司監修の下餃子は完成し、現在凄まじい勢いでそれが無くなっていた。

小麦粉から皮を作ったため、かなりの重労働になったが、全員の協力で何とか昼食に間に合う事が出来た汗と努力の結晶なのだ。材料も何とか施設にあったので、無事に餃子を作る事に成功した。

「……辛っ！　けど……美味しい……これ、美味しいよ」

真司へ驚きながらも笑みを見せるアギト。名前を付けたためか、アギトは真司を気に入り、その傍にいるようになった。セッテも助

けてくれたため、アギトは気に入っていて、昨夜は共に寝たぐらいだ。結局あの後、施設を使って真司達は眠り、中にいた者達は一室へ閉じ込めた。

そして、その扱いや今後を踏まえ、食事終わりにジェイルが結論を伝える事になっている。いつまでもここにいる訳にもいかないし、違法行為をしていた者達を放置するのも気が引ける。

そのため、ジェイルは一大決心をしていた。それを決めた理由はただ一つ。あの平和で楽しい時間を取り戻すためだ。邪眼が未だに自分達の家を占拠している事は明白。故に、それを駆逐しなければならない。しかし、今のジェイル達だけでは戦力が足りないだろうと考え、ある事を決断したのだ。

「……さて、食事も終わったようだし、今後の事を話そうと思う」

ジェイルの言葉に全員が真剣な面持ちで、その顔を見つめた。アギトも簡易的にではあるが、ジェイル達の素性とここに来た経緯を聞いた。犯罪者と言われたが、真司達の性格や接し方などから、アギトは彼らを悪人とは思っていなかった。

きっと何か事情があったのだろうと、そう考えていたのだ。それに真司達は、実験動物にされていた自分を助けてくれた恩人である。その恩に応えずに、融合騎は名乗れない。そう思ってさえいたのだから。

（創世王だが何だか知らないけど、真司達の家を取り戻すためにアタシも手伝わないと……）

アギトは融合騎。騎士とユニゾンする事でその真価を発揮するのだが、残念ながらその適正が高い者がいなかったのだ。真司は全員からかなり期待されたのだが、融合係数は低く、アギトは結局ロー

ドを見つける事が出来なかった。
それでも、簡単な魔法は使える。微々たる力でも、何かの役には立つだろうとアギトは思っているのだから。

「まず……ここを管理局に教える」

そのジェイルの言葉にほぼ全員が納得した。ここは違法施設。詳しく調べれば、色々な事が分かるだろう。そして、ここの者達の処分も局に任せるのが妥当と言えたからだ。
しかし、そんな納得が出来る内容から一転、誰も予想しなかった事をジェイルは告げた。それは……

「そして、伝える相手はゼスト隊だ」

それに、全員が声を失った。真司達ゼスト隊を知る者は絶句。オットー以降の四人は知らない故の戸惑い。アギトは、そんな周囲の様子に困惑していた。その状況を見て、ジェイルは静かに語り出す。
自分達が対峙した相手。邪眼がもし想像通りの相手ならば、ラボを使って何をするか予測が出来ない。なら、これは既に自分達の手に負える範囲を超えていると。だから、自分達と接点のあるゼスト隊を頼り、管理局と共にそれと対峙すると。

「でも、兄貴が倒したじゃんか！　なら、今度も……」

「ノーヴェ、君の言う事はもっともだ。でも、真司がサバイブを使って何とか一体だよ？　同時に三体も四体も襲われれば……どうだい？」

「負けるだろうな。我々が手を貸しても無理だろう。ベントカードは一度の変身で一度きりしか使えん」

「……ファイナルを使ってしまえば、真司君もあいつを倒す手がない、って事ね」

「かといって、その都度変身し直す時間をくれるとも思えんしな。……ＩＳも使ってくるとしたら、次回は今回のようにはいかないかもしれん」

ノーヴェの言葉を遮り、ジェイルが告げた言葉。それにチンクが、ドゥーエが、トーレが返す言葉。それに全員が悔しい思いをしていた。龍騎が強化した力を使ってでしか倒せない相手。真司は自分達と違い、ただの人。戦闘機人であるにも関らず、その真司に助けられるしかない自分達。それに、不甲斐無さをそれぞれが感じていた。

だが、アギトがここで抱いた疑問をぶつけた。それは、彼女以外には当然の事として話されていたある単語。

「ね、変身って何？」

その言葉に真司が自分のカードデッキを見せる。そして、仮面ライダーの説明をするのだが、それがサバイブにまで及んだ時、聞いていたアギトが何か思いついたように表情を輝かす。

「ね、ね！　その烈火ってカード使ってみせてよ。アタシの通り名と同じだし、見てみたいんだ」

「……まぁ、もう隠す必要ないしなぁ」

アギトの興味深々という目に、真司はどこか照れくさいような感覚を覚えるが、既にサバイブを見せる事への抵抗はない。子供のようなアギトの目と、純粋に見たいと言われ、真司は小さい頃の自分

を思い出していたのだ。
幼い頃見ていた架空の存在。正義の味方のショーなどでその姿に憧れた事もある真司としては、アギトの言葉はその頃の自分と同じに思えたのだ。

こうして、真司はアギトへサバイブを見せる事にした。変身を見てアギトは興奮し、更にサバイブカードの影響で周囲に炎が走った時などは。本当に子供のようにはしゃいだ。
だが、サバイブとなったその姿を見て、アギトは呆然となりながらも呟いた。

――――アタシの……理想のロードだ……

紅蓮の炎を纏うような龍騎の姿。真紅の鎧に身を包み、焔を想像させるその威容。アギトはそれを見て心から思ったのだ。自分の仕える騎士は、龍騎しかいないと。
そして、無意識にアギトは龍騎へと近付いていく。龍騎はそんなアギトに気付き、どうしたのかと尋ねるのだが、それに返ってきた言葉は、たった一言。

「ユニゾン・インって、言って」

「え？　ユニゾン・イン？」

その瞬間、龍騎に吸い込まれるようにアギトが消える。そして、龍騎の鎧の背後から炎の翼が出現した。その変化に驚く龍騎とジェイル達。融合係数が低いはずの龍騎。それが、完璧な程にユニゾンしていたのだ。
ジェイルは事情を聞こうと、龍騎の中にいるアギトへと呼びかけた。すると、龍騎が少し理解出来ていないという感じで答えた。ど

うも、真司の時は融合係数が低いのだが、変身してサバイブになった途端、それが著しく変化したのだそうだ。

その理由は分からないが、ジェイルはおそらくサバイブの影響だろうと結論付けた。龍騎の体を変化させるサバイブ。それはきっと、体の構造を作り変えるに近い効果があるのだろうと。

融合係数ももしかしたら、その影響を受けて変化したのかもしれない。それを聞いて、龍騎はなるほどと頷いた。一方でアギトは龍騎とのユニゾンに感無量だった。

（すごい……すごいよ、この感じ！　間違いない……真司がアタシのロードだっ！）

全身で感じる一体感。力が溢れ出すかのような感覚に、アギトは気分が高揚していくのを感じていた。一方の龍騎も龍騎で驚いた事がある。それは、魔法が使えるようになっていた事。正確には、魔法の影響を受けるようになったのだ。

背中に翼が出現したのを見て、試しにと飛行魔法をアギトが使ってみた。すると、龍騎が空を飛んだのだ。そして、それを見てトーレとセッテが揃って笑みを見せた。空戦だけが龍騎の不得意な戦場。それを良く知る二人だからこそ、その光景は嬉しく思う物でしかない。

（これなら奴が私のＩＳを使おうと……）

（例え空戦に持ち込まれても……）

（（負けないっ！））

龍騎の弱点が克服された事。それは喜ばしい以外の何物でもない。

相手がサバイブの情報を得た今、龍騎とアギトのユニゾンは何よりの切り札となり得る。相手の情報を逆手に取り、翻弄し困惑させる。

龍騎が地上戦も空戦も出来るのなら、戦術の幅も大きく広がる。そう考え、トーレは視線をウーノとクアットロへ向けた。どうやら二人も同じ事を考えていたようで、トーレの視線に笑みを返してみせたのだ。

そして、龍騎が変身を解除するのと同時に、アギトも強制的にユニゾンを解除された。だが、その表情は笑顔。少し疲れた真司へ向かって、アギトは嬉しそうに言った。

――――真司、アタシはアンタをロードに決めた！

その言葉に全員が小さく驚きを見せるが、先程の光景を見れば確かにそれは納得がいくと真司以外は頷いた。真司はどこか自分には相応しくないと言ったのだが、アギトがあまりに熱心にロードになってくれと言うので、条件付きでそれを承諾する。

条件は一つ。自分と違い、普段からアギトとユニゾン出来る高い適正の相手を見つけたら、そちらへ声を掛ける事。ただし、いくら適正が高くてもアギトが気に入らない相手なら、その限りではないとは言ったが。

「ベルカの騎士って、まだいるんだろ？　きっと、その内見つかるって」

「でもなぁ……真司以上の相手はいないだろうし」

「そうか？」

「あんなに相性いい相手なんてそうそういないって」

そんな風に話す二人。真司の肩に乗っかり、満面の笑みを見せるアギト。そんな笑みに真司もどこか嬉しそうな笑みを返す。それを見て、セインがやや拗ねたように口を尖らせ、真司へ文句。

会ったばかりなのに仲が良い事に腹を立てながら、真司の腕を掴むセイン。ちゃっかり胸を押し当て、真司が少しびっくりする。それを見てウェンディが便乗し、更に混沌と化す真司の両脇。

それを見つめ、苦笑のジェイルとドゥーエ。微笑ましく見つめるは、ウーノとクアットロ。何とも言えない表情を浮かべるチンクとトーレ。どこか悔しそうなセッテとノーヴェ。ディエチとディード、オットーは純粋に羨ましがっていた。

アギトは、そんなセインとウェンディの行動に不思議そうな顔をしたものの、真司が動揺しているのが面白く、笑い声を上げていた。こうして、ジェイル達は行動を開始する。全ては、あの楽しく穏やかな時間を取り戻すために……

――

六課は仮面ライダーの正体暴露。とはいえ、その成り立ちや真実は本人達以外は知らないため、真相は明かされず。

ジェイル達は、龍騎が新たなる力獲得。しかし、それでもまだ邪眼と対峙するには足らず。

交わるキッカケは出来ました。ゆっくりですがライダー達の合流も近いかも……

解明される幾多の謎

「光太郎さん」

「ん？」

六課男子寮。はやて達の話を聞き終え、エリオは光太郎と部屋に戻り、眠りにつこうとした。しかし、どうしても気になる事があったのだ。それはＲＸの事。レアスキルと言われたが、何故かエリオには、そんなものではないような気がしていたのだ。

明確な理由も根拠もない。だからこそ、聞きたいと思った。光太郎の口からその事を。どうして、そんな力を手に入れたのか。それだけがどうしても知りたかったのだ。キャロも竜召喚というレアスキルを持っている。だが、それはキャロが望んで得たものではない。それを本人から聞いていたエリオとしては、光太郎達の変身も何か理由があったのだろうと考えたから。

「どうして、変身出来るようになったんですか？」

「……それが、俺の運命だから……かな」

「運命？」

「ああ。ライダーとして、多くの命を助け守る。そのために、俺はきっと……生まれたんだと思う」

光太郎の言葉にエリオは黙った。光太郎の声からどこか悲壮な印象を受けたのもある。だが、それ以上に感じ取ったのだ。自分の生まれた意味を見出し、それを強く信じる光太郎の強さを。

それは、自分が憧れ追い求める男の姿。力に自惚れる事無く、ただ真っ直ぐにその全てを誰かのために使おうとする心。優しく、頼もしく、そして強い在り方がそこにはある。

「……分かりました。答えてくれてありがとうございます」

「エリオ君の疑問が晴れたのならいいさ。じゃ、寝よう。おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

共に笑みを見せ合って二人はベッドに横になった。目を閉じ、エリオは思う。いつか自分も光太郎のように、自分の生まれた意味を見つけたいと。そして、エリオ・モンディアルだけの生き方を歩いて行くのだと、そう強く決意する。

エリオは知らない。光太郎が告げた言葉。それは、彼にもう一度生きる力を与えてくれた言葉に対する答えだったとは……

同じ頃、五代と翔一はある事を確認し合っていた。それは……

「え？　ゴルゴムとクライシスを知ってる？」

「はい。だって、一時期大変だったじゃないですか。俺は小さかったですけど、それでも名前ぐらいは」

今日の思い出話を聞いて、五代は光太郎から聞いた組織の事を思い出し、翔一へ尋ねてみたのだ。そして、返ってきた答えは五代の予想外のもの。翔一は光太郎の語った組織を知っていたのだ。

それを聞いて、五代は一つの結論を導き出した。それは、自分と

翔一や光太郎のいた世界は違うという事。そして、それに伴い翔一が知っているクウガは自分ではない事が分かった。

五代はゴルゴムもクライシスも知らない。にも関らず、翔一はそれを知っている。つまり、五代のいた地球と翔一のいた地球は別世界なのだ。翔一の世界で未確認と戦ったクウガは、五代ではない誰かがなったクウガなのだろう。

そこまで考えて五代は、何故未確認が出た時光太郎達が日本へ現れなかったのか理解した。いなかったのだ。五代がいた世界に仮面ライダーは。クウガが最初の仮面ライダーで、最後の仮面ライダーだったのだ。

（……じゃ、クウガのアマダムがキングストーンっていうのも……）

並行世界。そんな言葉が五代の頭の中をよぎる。きっと、五代と翔一達の世界は、出発地点は同じ。ただ、細かな部分が違うのだ。一つは、ゴルゴムなどの怪人組織の有無。次は仮面ライダーの有無。それが違うため、どちらも無いのが五代の地球。どちらもあるのが翔一達の世界。そして、アマダムをキングストーンとして精製し、使ったのがＢＬＡＣＫ。原石のまま使ったのがクウガ。そう結論付けた。

「翔一君、そっちのクウガって最後どうなったの？」

「えっと……確か未確認がいきなり大量に現れて……それを操ってた親玉みたいなのを倒したって聞きました」

「大量に現れた？」

「はい。そういえば、その時クウガと一緒に未確認と戦った奴もい

たとか」

翔一の語る話に五代は困惑した。自分が戦ったダグバはそんな事をしなかったからだ。もしかすると、ダグバにはそういう力もあったのだろうかと考え、それを五代は否定した。未確認の目的は殺人をゲームとして行なう事。それを一人でするのが未確認のルール。だとすれば、大量の未確認を操って戦わせるのは、ルールに反すると考えたのだ。

そして、そうなると残る可能性は一つしかない。だからこそ、最後の確認をしたかった。故に、五代は翔一へ問いかける。

「……翔一君」

「はい？」

「その親玉みたいな奴って、四本角？」

「……いえ、違いますね。そんな特徴は聞いた事ないです」

その答えで五代は確信した。翔一の世界の未確認と自分の世界の未確認は違う存在だと。そして、同時に思うのだ。自分が苦しみ、悩み、嫌気を感じながら続けた戦い。それを同じようにやる事になった者がいた事を。

そのもう一人のクウガに五代は思いを馳せる。きっと、そのクウガもみんなの笑顔のために戦っていたのだろうと。そこまで考え、五代はそのクウガに心からのサムズアップを送りたいと思った。

しかし、その時翔一が何かを思いだしたように呟いた。どうして、アンノウンとの戦いの時には、クウガが現れてくれなかったのだろ

うと。それに五代は考える。翔一は五代の話から、薄々自分の世界と五代の世界が違う事を把握したようで、故の疑問だったのだ。

すると、五代が搾り出すように答えた。アギトがいたからだろうと。それに翔一は不思議そうな表情を返すが、五代はそれにどこか遠い目をして続けた。

きっと、そのクウガは最初こそアンノウンと戦おうとしたはずだ。だが、見てしまったのだろう。アギトの姿を、その雄姿を。そして、こう思ってしまったのだろう。

「日本はアギトがいれば大丈夫って。だから、自分は他の場所で現れるかもしれない奴らに備えようって」

「……海外、ですか？」

「もしかしたら、他のライダー達に会ったのかもしれない。だから、日本をアギトに託して自分はアギトのいない場所を守るんだ……って感じかな」

「それ、五代さんならそうするって事ですか？」

「……うん。俺は、俺しかいないなら。そう思ってクウガやってた。でも……」

「でも？」

「光太郎さんに会って、先輩ライダー達の話を聞いて分かったんだ。俺しかいないならじゃない。俺が俺だから戦うんだって。クウガじゃないとしても、俺はきっと、未確認をどうにか出来るならどうにかしたいって思ったはずなんだ。だって……」

そこで五代は一旦言葉を切った。そして、深呼吸をした。翔一はそれを見て、やや不思議そうな表情をする。五代が何を言うのか分からなかっただけではない。どうしてそれを告げるのに、仕切り直したのかが分からなかったのだ。

翔一は知らない。五代が言おうとしているのは、ただの答えではない。それは、これからの自分の決意。今までも変わる事の無かった覚悟。彼が戦士となると自覚するに至った明確な意思表明。

――こんな奴らのために、誰かの涙は見たくないって、そう思うだろうから……

その言葉に込められた想い。それは、五代の全て。みんなの笑顔のために。それを目指して戦い、自分の笑顔をすり減らしながらも勝利を掴み取った男の心が、そこにはある。翔一もそれを感じ取り、黙り込んだ。

自分はアンノウンと戦う時、五代程の決意があっただろうか。ここまで誰かのためにと思ってアギトになったのか。そんな事を考えた。だが、その思った事を五代に伝えると、それに彼は笑顔でこう告げた。

「大丈夫！　翔一君だって、アギトとして戦ったのは誰かのためだったはずだよ」

「えっ？」

「真魚ちゃん、だよね。それに太一君に先生。ほら、三人もいる」

五代は言った。自分だって、いきなりみんなを守ろうなんて思わなかったのだ。最初は、父を失い涙する少女を見て、それを二度と

繰り返させたくなくて、クウガとして戦う決意をしたのだから。
始まりは一人の笑顔でもいい。大切なのは、それを守りたいと決意した初心を失わずにいれるかどうか。聖なる泉を枯らす事無く、戦える事。それが五代の中での絶対条件なのだ。

こうして、五代と翔一は互いの戦いの記憶や思い出を語り合い、夜明けまで寝ずに過ごしてしまう。翌朝、仕込みに現れない事を不思議に思ったリインが起こしに行くまで、二人は死んだように眠るのだった……

一方、女子寮のスバルとティアナの部屋では……

「まさか翔一さんが仮面ライダーだったなんて」

「驚きだよね。私達が目標にしてた人達が、二人してライダーだったんだもん」

二段ベッドに横になりながら、そう話す二人。自分達が災害担当魔導師として現場で働き出した頃、流れ出した噂。仮面ライダーを名乗る異形が災害や事件現場へ現れ、局員や市民を助けているという話。それがまさか、こんな身近にいた者達のやっていた事だとは夢にも思わなかったのだ。
特にティアナは翔一がそんな事をしていたとは思わず、一番驚いていたのだから。スバルは五代がクウガなので、むしろ納得していた。自分の時と同じように人を助けるクウガを想像し、一人嬉しく思っていたぐらいなのだ。

「……お兄ちゃんは知ってたのかしら？」

「あ～……どうだろ。でも、可能性は高いんじゃない？　だって、ティアのお兄さんを助けて、翔一さんはティアの家に来たんでしょ？」

「……お兄ちゃんめ、知ってたな」

スバルの言葉でティアナは真実を導き出した。あの兄が知らない訳がない。そう、いくら命の恩人だからといって、家に連れて来て面倒を見るなんて考えてみれば妙なのだ。きっと、翔一がライダーと知っていてから、それを隠す意味もあっての居候だったのだろうと。

今度会ったら、色々と言う事が出来たと思い、ティアナは邪悪な笑みを見せる。それをスバルは見る事が出来ないものの、何故か悪寒を感じて掛け布団に隠れるように体を入れる。

その後、ティアナも目を閉じて眠りにつく。色々な事を聞いたが、二人にとっては五代と翔一の話が占める度合いが大きく、そこまで不安要素はなかったのだ。そう、邪眼の話を聞いても……

ダブルサイズのベット。それに横になるフェイトとキャロ。普段であれば、体を寄り添わす事はあっても密着する事はないのだが、今日は違った。キャロがフェイトにしがみつくようにしているのだ。

原因は、はやてが語った邪眼の話。その恐ろしさとおぞましさにキャロは恐怖を覚えたのだ。いくら五代達が一度勝ったと聞いても、その時の戦力を考えれば、不安になるのも仕方ないとフェイトも思っていた。

高ランクの自分達三人。そこに制限無しの守護騎士達。更にユーノとクロノ。アルフとリーゼ姉妹を加えた中にクウガとアギトでやっとだったのだ。今は、ユーノとクロノ、アルフにリーゼ姉妹が抜けて、代わりにスバルやティアナ、エリオとキャロ、そして光太郎がいる。

しかし、自分達はリミッターがあり、下手をすればあの頃よりも戦力減といえる。有事の際はそれを解除出来るが、それでも中々厳しい戦いになるだろうと思っていた。

（キャロ達は、まだ発展途上だから……ね）

既に戦力として完成していたクロノ達。それと比べ、スバル達はまだ経験が圧倒的に足りない。今の状態で邪眼に出会えば、怯え竦んでもおかしくないのだ。実際、アルフ達でも邪眼を相手取った時、精神疲労が大きかったのだから。

今のままでは、スバル達は戦うどころか動く事も辛いだろうと考え、フェイトはキャロの頭を優しく撫でる。いざとなったら、キャロ達を戦わせる事無く、邪眼を倒してみせると思いながら。

「フェイトさんは怖くないんですか？」

そんな時、ふとキャロから問われた質問。それにフェイトは柔らかい笑みを見せて頷いた。

「怖いよ」

「じゃ……」

「でも、でもねキャロ。私は、戦わないでキャロ達が危険になる方がもっと怖いんだ。だから、戦うんだよ」

キャロの言葉を遮るようにフェイトはそう言い聞かせる。あの頃の自分にはない強さ。それがキャロ達の存在。今なら分かるのだ。何故五代達があれ程まで強かったのか。守りたいモノがある。失いたくない者がいる。それだけで、人は強くなれるのだと。

そして、もう一つあの頃のフェイトにはない強さの要因がある。それは……

（今は、光太郎さんが……ＲＸがいる）

自身が共にこの数年間顔を合わせて来た頼れる相手。どんな状況からでも必ず生還する存在。エリオとキャロの兄のような存在で、自分にとっては背中を支えてくれる大きな存在。

「フェイトさん、私、どうしたら……」

「大丈夫」

サムズアップ。それだけでキャロの顔から不安が薄れる。それにフェイトも笑みを浮かべながら、優しく諭すように語り掛ける。

「焦る事はないよ。ゆっくりでもいい。キャロはキャロらしく歩いて行けばいい。いつか、キャロも自分だけの強さに出会えるから」

「私だけの……強さ」

フェイトは光太郎だったらどう言うだろうと考えながら、キャロへ告げた。自分に大きな影響を与えた光太郎。いつも、どんな時でも希望を与えてくれた男。哀しい秘密を語りながらも、それでも強く生きていけると自分へ告げたＲＸ。

その心強さにフェイトは感銘を受けたのだ。人ならざるモノになったとしても、心さえ人ならばそれは人なのだ。そう、フェイトは強く思う事が出来るようになったのだから。

そんな事を考えながら、フェイトは気付いた。キャロがいつの間にか眠っている事に。その寝顔が安らかなものである事を確認し、フェイトは微笑んだ。フェイトの言った言葉を考えている間に、眠気が来て寝たのだろう。

恐怖も不安もそれで忘れる事が出来たのだ。そう判断し、フェイトも目を閉じた。キャロには言っていない言葉。それは、光太郎がいるから怖くないというもの。フェイトにとってはクウガやアギトよりも身近になった仮面ライダー。

（……大丈夫。絶対ＲＸが、ライダーがいてくれれば……）

赤と金、そして黒のヒーロー。その姿が並び立つのを想像し、フェイトは眠りについた。その表情は、キャロに負けない程安らかな寝顔だった……

『そう、休みはしばらくないんだ……』

「ゴメンね、ユーノ君。スバル達の教導を優先しちゃって」

自室でモンターを使ってユーノと会話するなのは。あの日以来、こうして夜には必ずその日の事を話すようになっていたのだ。申し訳なさそうななのはに対し、ユーノは別にそこまで悲しみはない表情を浮かべていた。苦笑しているので、なのはらしいと感じているのだろう。

そんな風に話すなのはは寝間着姿。それに、ユーノはどこか嬉しく思っていたのもある。今までもなのはと夜会話する事はあった。だが、そういう時、なのはは必ず部屋着か制服だったのだ。

それが今は寝間着姿。つまり、それだけ自分に気を許してくれたという事。そう思い、ユーノはなのはの休暇がしばらくない事にも悲しみは少なかったのだ。

『いや、いいよ。……邪眼の相手をするなら、彼女達を鍛えておいた方がいいからね』

「ユーノ君……」

『何も戦力としてじゃない。遭遇した時、彼女達が無事に生き残れるようにだよ。だからなのは……』

「うん。ちゃんと心も鍛えるよ。体だけじゃない。……大切なのは、挫けない気持ちだからね」

ユーノの言いたい事を理解し、なのはは笑顔で断言する。自分達が邪眼と対峙した時、挫けそうな気持ちを支えてくれたクウガとアギト。その時、なのはは思ったのだ。いつか、自分も二人のようになりたいと。誰かを励まし、心を支えるような人に。

教導官になったのは、それがキッカケ。自分の感じた全てを言葉に、行動に込めて伝える。それで少しでも誰かの助けになれたらと、そう思って。

そして、今はそのライダー達と共にスバル達を育てる事が出来る。いつか、なのはは五代達にもスバル達の教導に参加してもらいたいと思っている。それがいつになるかは決めていないが、絶対に実現させてみせると。

自分が抱いた不安や恐怖と言った負の気持ち。それをスバル達が感じる事がないように、心を鍛えてみせる。そう改めて決意して。

『……えっと、でもなのは』

「ふぇ？」

『出来るだけ……時間を作って欲しいかなって。ほら、デートとか行きたいし、さ』

ユーノの言葉になのはは顔を赤くする。しかし、それに黙っている訳ではない。頷いて、笑みを返す。自分もユーノと同じように、二人の時間を作りたいと思っている。そう言葉を添えて。

そして、二人は少し他愛のない会話をして、就寝の挨拶を交わした。その通信を切る間際、ユーノがさり気無くなのはへ向かってこう告げた。

――おやすみなのは。愛してるよ。

その言葉に、なのはも同じようにおやすみと言葉を返そうとして固まった。そして、立ち直った時にはモニターは何も移さず、ユーノの姿は消えていた。

「……もう、あんなの反則だよ」

そう怒るように呟くなのは。だが、少しも表情に怒りはない。そして、もう何も移さないモニターに向かって小さく告げる。

――おやすみユーノ君。私も愛してるから。

その声には、心からの想いが込められていた……

「しかし……改めて考えると、凄いなぁ」

「クウガにアギト、ＲＸだもんな。しかも、ＲＸって翔一が言ってたＢＬＡＣＫの進化したものだっけか？」

「ヴィータ、少し言い方が悪いぞ。進化した姿、だ」

はやての言葉にヴィータが指折り数えるが、そのもの扱いにシグナムが苦言を呈する。はやて達の部屋は大人数のため、特別仕様。はやて、シグナム、シャマル、ヴィータ、リインと五人もの女性がいて、更にツヴァイとザフィーラまでいるのだ。

だからこそ翔一はザフィーラを自分達と同じ部屋へと言ったのだ。何せ、現状ではザフィーラは完全にペット扱い。共有スペースで狼状態になり、犬のような姿勢で眠っているのだから。

「でも、ＢＬＡＣＫの頃でも強かったなら、ＲＸはもっと強いだろうから安心ね」

「五代が言うには、クウガの真なる姿の変化した姿ではないかとの事だ」

「凄まじき戦士、だったか。なってはならない姿だと言っていたな」

「じゃあＲＸは、そのなってはならない姿って事ですかぁ？」

シャマルの言葉に続いてリインが言った内容に、ザフィーラが補

足をする。それを聞き、ツヴァイがどこか疑問に感じた事を告げた。それに全員が少し考え、揃って首を横に振った。

ツヴァイの言葉は当たっているようで、違うと感じたのだ。ＲＸはなってはならない姿ではなく、あってはならない姿。そんな気がしたからだ。クウガと同じキングストーンを持つＢＬＡＣＫ。それがとある要因を受けて変化したのがＲＸ。

それを知る者は光太郎しかいない。だが、それを知らぬはやて達でも気付く事がある。それは、ＲＸの異常性。フェイトから聞いた話によれば、ＲＸは機械の体と液体のような体になる力を持っているのだ。それは、クウガにはない。つまり、ＲＸは独自の進化を遂げた存在という事。

その結論をはやてが告げると、全員が揃って納得し、同時に思ったのだ。もし仮にＲＸがクウガの真なる姿の変化だとすれば、クウガの真ある姿はどれ程の力を秘めているのだろうと。

五代が、もう二度と使いたくないとまで断言する力。五代曰く”黒の四本角”は、クウガであってクウガでない。もし、それでしか邪眼を倒す事が出来ないとでもならない限り、五代は使う事を決意しないだろう。

（……何故なら、究極の闇をもたらす存在らしいからな）

リインは五代から聞いた言葉を思い出す。あの再会の後、五代はふとリインに告げたのだ。クウガが闇の書を封印出来るかもしれないと言った裏には、クウガの秘められた姿の別名も関係しているのだと。

究極の闇と呼ばれる力を秘めているクウガなら、同じ闇の存在を何とか出来るかもしれない。そう密かに考えたと五代はリインに語ったのだ。それを思い出しながら、リインは考える。邪眼が闇だとするのなら、クウガも闇。しかし、何故かクウガの力は邪眼を倒す

事が出来た。

「……主、少しいいでしょうか」

「ん？」

「クウガの本質は闇だと五代は言っていました。にも関らず、どうして邪眼を倒せたのでしょう？」

リインの問いかけに全員が驚いた。五代が告げたクウガの本質にも然る事ながら、リインの言った事を事実とすれば、確かに納得が出来ないものがあったからだ。邪眼と同じく闇の力を持つクウガ。それが何故同質の存在を倒すに至ったのだろうと。

「……待て。確か奴を倒した際、クウガの文字以外に浮かんでいたものがあったはずだ」

そうシグナムが告げると、ツヴァイを除く全員がはっとなった。確かに邪眼が爆発する時、その体には封印を意味する文字以外に浮かんでいたマークがあった。それは、アギトのマーク。そこまで思い出し、シャマルが理解したように告げた。

それは、アギトの秘めた姿を知ればこそ。光を思わせるような姿だと、翔一は語ったのだ。それをシャマルが聞いたのは、ふとした偶然。あの戦いの際、アギトが見せたバーニングフォーム。それの話をシャマルがした時、翔一がどこか自慢するように言ったのだ。実は、あれからもう一つの姿になれるのだと。その姿を翔一が光輝くようなものと言った事を思い出し、はやて達へ伝えたのだ。

「……では、クウガの闇の力が邪眼の闇を相殺し……」

「アギトの光がとどめを刺した、か。そう考えるのなら……確かに納得は出来る」

「相反する力を持ったライダー。それが偶然揃ったというのか……？」

リインの言葉をザフィーラが引き継ぎ、シグナムが更なる疑問を告げる。それにはやては頷いて答えた。

「偶然やないやろな。わたしがカリムと出会う前から、二人が現れる事をどこかで暗示する予言が出とったらしいわ」

そう、それはカリムとはやてが出会った頃の事。カリムが自身のレアスキルについて教えてくれたのだが、その際こんな事を聞かれたのだ。

――はやて、貴女に仮面を付けた知り合いはいる？

それに、はやては一瞬何を言っているのだろうと思った。だが、カリムはそのはやての反応に真剣な表情で答えたのだ。実は、闇の書事件が起きる前に、カリムは予言を導き出していたのだが、それには簡潔に纏めるとこうあった。

――狂いし魔導書、闇を生む。そを封じる相克する仮面の戦士来たりて、これを退ける。しかし、油断するなかれ。闇、消える事無く潜むなり。

その狂いし魔導書を、カリムは夜天の書と考え、はやてに尋ねたのだ。そう言われ、はやてが真っ先に思い出したのは、翔一と五代の事。故にはやてはいたと答えたのだ。今はいなくなってしまった

のだと。
　それにカリムは沈んだ顔をしたものの、予言が当たった事にある種の安堵をしていた。そして、それに不思議がるはやてにこう告げたのだ。闇の書事件が終わった瞬間、本来なら発動するはずのない予言が起動したと。

「……それにあったのよ。きっと仮面の戦士を意味するだろう記述が」

「ホンマか?!」

　それにカリムは頷き、予言を語ったのだ。はやてはその内容を聞いて希望を見つけた顔になった。

――――戦士、太陽を連れて帰還する時、進化の光、戦士に導かれその友と降り立つ。闇を討ち倒すそのために……

　そう、これを聞いていたからこそ、はやては五代と再会した際、翔一の事を聞けると思ったのだ。しかし、結果は不発。何故ならば、翔一はクウガの導きで戻るだけであり、共に戻る訳ではなかったからだ。
　そんな事を思い出し、はやてはその話を全員へ語った。そして、こう締め括った。カリムのレアスキルは年に一度しか使えないもの。それが勝手に発動し、告げたのがライダーの帰還。とすれば、神というモノが存在し、邪眼を倒すためにクウガとアギトを呼び寄せた可能性がない訳ではないと。

「……全部、わたしの推測やけどな」

　そう言うはやてだったが、誰もそれを笑いはしなかった。神と呼

ばれる存在がいるとしたら、まさしくライダーは神に遣われし救世主。しかも、五代も翔一も異なる時代から現れている。とすれば、もうこれは運命だったとしかいえない。

本来出会う事がなかった二人の仮面ライダー。更にクウガが連れて来たもう一人の仮面ライダー。それこそがアギトが仮面ライダーを名乗るキッカケとなった相手の一人。ここまで揃えば、もう何者かの意志が働いているとしか思えないのだから。

（でも……だとすると龍騎士ちゅうのは誰やろ？　エリオは龍連れとる訳やないし、キャロは騎士やない。まさか……四人目の仮面ライダーがおるんやろか……）

カリムがつい最近出した予言の最後の一説。それを思い出し、はやては考える。戦士はクウガの別名。太陽はＲＸの異名。進化の光は、おそらくアギト。ならば、最後の龍騎士もライダーなのかもしれない。そう思い、はやてはより希望を大きくする。

仮面ライダーが三人でも心強いのに、そこにまだ見ぬライダーが加わる。それは、まさに鬼に金棒だと。予言が当たるのはもう実証されている。ならば、後はその龍騎士を見つけ出すだけだ。そう考え、はやては上機嫌で全員へ告げる。

「ま、今日は遅いしもう寝よか。この話は、また機会を見て全員でしよ」

その言葉にシグナム達も同意し、それぞれが部屋へ入っていく。最後にリインが、その場に残るザフィーラへどこか済まさそうに視線を送り、告げた。

――すまないな、ザフィーラ。

――気にするな、リイン。もう……慣れた。

その声には、どこか哀愁が感じられた……

はやては忘れていた。その予言には、不吉な部分があった事を。

そう、それは、最後の一文の前。

闇深く、甦る王を包まんとす。戦士、それに立ち向かいそを救わん。

だが、それこそ闇の始まりなり。

ゼスト達は、通報を受けてやって来た場所にいたジェイル達に言葉を失っていた。犯罪者であり、次はないと告げた相手。それがよりにもよって違法研究所の場所を通報してきたのだ。しかもご丁寧に自分達を出迎えてまで。

「……どういうつもりだ」

「まずはこの研究施設の関係者の事をお願いしたくてね。それと、君達に頼みがあるんだ」

ジェイルの言葉にゼスト達は無言で続きを促す。それにジェイルが苦笑し、告げた。

「実は、私のコピーに近い怪物が現れてね。それが性質の悪い事に私達の家を乗っ取ってしまったんだよ」

ジェイルはそこから簡潔に邪眼の事を話した。自分のコピー受精

卵を使って生まれた不気味な怪物。恐ろしい程強く、ランクは確実Sランクオーバー。それが残り十一体もいる。それを聞いて、クイントとメガーヌは何を馬鹿なと思ったのだが、それでも嘘だと言い切る事はしなかった。以前出会った時、ジェイルが渡したデータは本物だった事もあり、二人にとってジェイルは犯罪者としてどこか異質な存在だったのだ。

それに、ジェイルが話す間、真司達が真剣な面持ちでゼスト達を見つめていたのだ。そして、ジェイルが全てを話し終わると、ゼストはしばらく黙って考え込み、こう尋ねた。

「それで、俺達にどうしろと」

「……奴は、私達がとうに捨てたトイを使ってきた。あれはＡＭＦが搭載してある。君達管理局には脅威だろう」

「そんなっ?!　ベルカ式の使い手だってＡＭＦには手を焼かされるのに！」

「それだけじゃない。大抵のミッド式魔導師はその対処もままならないわ」

ジェイルの告げた内容に、クイントとメガーヌがそう答えた。ＡＭＦ――アンチマギリングフィールドの略称である。その効果空間内では魔力結合が阻まれるため、そのほとんどを魔法に頼るミッド式には天敵ともいえる。ベルカ式にとっても、身体強化などが出来なくなるため、天敵とまでいかないものの、かなりの厄介さを誇る事に変わりはない。

「私が作った物だ。その対策も設備と時間さえ与えてくれるのなら可能にしてみせる」

「……つまり、こちらに手を貸すからそちらにも貸せという事か」

ゼストの言葉にジェイルは頷いた。犯罪者との取引自体は珍しい事ではない。だが、それはあくまでも事件の容疑者や実行犯として捕らえた後での処置。おそらく、ジェイルが望むのは逮捕された後ではなく、現状のままでの取引だろうとゼストは思った。

それと同時に、何故ジェイル達が自分達を選んだのかも悟ったのだ。以前、データを渡した際に本当に約束を守った事を評価していると。だからこそ、今回も理解を示してくれるのではないか。ゼストはそう思われていると判断した。

このジェイルの話を信じる証拠はない。そして信じてやる理由もない。だが、ゼストは信じたく思っていた。これが何らかの罠だとしても、ジェイル達にメリットは無いのだ。もし、ゼスト達をどうにかする気ならば、あの時に手を出しているのだから。

そして、何よりもゼストがジェイルを信じたい理由。それは、本人達の目。濁りのない澄んだ目をしているのだ。

「……詳しい話は隊舎に戻ってから聞かせてもらうぞ」

「隊長……」

「いいんですか？」

「これが嘘でも構わないだろう。ジェイル・スカリエッティを確保出来るのだ。そして、これが本当だとすれば、手を打たねば局員だけでなく多くの市民達が危険に晒される」

ゼストはそう二人へ告げ、部下たちへ指示を出した。一班は施設

内の関係者を確保し、護送。二班は施設内の調査となった。クイントは一班の班長として動き、メガーヌは二班の班長として動く事となった。

ゼストはジェイル達を連れて、先に隊舎へと戻る事にし、二人と別れて歩き出す。それに真司がさすがに待ったをかけた。念のため、せめて一人ぐらい部下をつけるべきだと。それにゼストだけでなく、クイントやメガーヌは苦笑した。

「貴方、それ本気で言ってる？」

「隊長、彼は信用しても大丈夫そうですよ」

「そうだな」

「え？　え？」

「……真司、それって普通向こうが言い出す言葉だぞ？」

アギトの指摘にジェイル達が一斉に頷き、ゼスト達はどこか楽しそうに笑みを見せる。真司はそれを聞いて、やっと何故苦笑されたのか理解した。そう、真司があまりにも心からゼストを心配して言ったものだから、周囲は面食らったのだ。

ジェイル達は真司を良く知るからこそ、そこまで何か言わないものの、ゼスト達は真司のお人好しに好ましいものを感じていた。こうして、真司は出会って早々に、ゼスト達からもお人好しの称号を付けられる事になるのだった……

ゼスト隊の隊舎に着き、ジェイルは早速とばかりにゼストへ詳し

い話を始めた。それは、真司との出会いからナンバーズ誕生なども含めた全て。それを聞き、ゼストはおぼろげではあるが、ジェイルの変化を感じ取っていた。

至って普通の真司がジェイル達と接する事で変わり出した生活。それがジェイル達から歪みを無くしていった。当たり前の事が当たり前でなかったジェイル達。それを真司がゆっくりと自然に正していったのだ。

（もしや……あの男、大物かもしれん）

ジェイルの話を聞きながら、ゼストはふとそんな風に思って真司へ視線を向けた。そこには、紫色の髪の少女と楽しげに話す真司とアギトがいた。少女の名は、ルーテシア・アルピーノ。メガーヌの娘だ。今日は魔法学校が休みのため、こうして隊舎で母親を待っていた。

彼女も将来を有望視されている魔導師見習い。召喚を得意とする母親同様、その道の才能があり、優しく読書が好きな少女である。

「融合騎……ホントにいたんだ」

「うん。にしても、ルーテシアは物知りだな」

「ルーテシアちゃんは、将来局員になるの？」

「……うん。お母さんのお手伝い出来たらいいなって」

そう言ってルーテシアは柔らかく笑う。その可憐さに真司とアギトは感嘆の声を上げる。まさに美少女といった感じの笑みだったのだ。そして、同時に健気な性格も感じ取り、二人は感心したのだから。

一方、そんな三人を見つめるナンバーズ達は揃って微笑みを浮かべていた。仲の良い兄妹のように見える真司とルーテシア。さっき会ったばかりにも関らず、真司の人懐っこさでルーテシアもすぐに打ち解けたのもある。しかし、一番の原因はやはりアギト。

アギトの明るさと存在は二人の良い会話の潤滑剤となっているのだ。助け出された当初こそ、衰弱と実験の影響でどこか物怖じしていたアギトだったが、元気になり、サバイブとユニゾンした後からは、元来持っていたと思われる快活さを発揮。

今ではセイン、ウェンディに告ぐムードメーカーとなっていて、真司と共にジェイル達の家族認定を受けつつある。今もルーテシアと話しながら笑顔を見せていた。

「……上層部には……」

「何も言わない方がいいだろうね。何も私達の保身のためじゃない。余計な問題を起こすだけだろう」

「……だろうな」

ジェイルの言葉にゼストはどこか苦い顔で答えた。その後、ジェイルとゼストは今後のために様々な事を話し合った。まず、ジェイルがＡＭＦ対策をするための設備について。これは、クイントが個人的に懇意にしている本局技師に頼み、何とか出来るようにする事になった。

次はナンバーズと真司の扱いについて。これは先程の件から派生し、クイントの伝手を使い、優秀な執務官を通して無事に事を運んでもらう事になった。その人物の名を聞いて、ジェイルは一瞬だが懐かしいようで申し訳なさそうな目をした。

「……と、大まかにはこれぐらいだな」

「そうだね。一応、私達の家の場所は教えておくよ。ただ、迂闊な事はしないでくれ」

「分かっている。今は、相手を刺激するのは危険が大きいようだ」

そこまで話し合ってジェイルはそっとゼストへ右手を差し出した。それを見て、ゼストは何をジェイルがしたいのか理解出来なかった。すると、ジェイルが苦笑しながら、こう言った。事情はどうであれ、協力し合うのだから握手をしようじゃないかと。

それにゼストは微かに呆気に取られるが、すぐに小さな笑みを浮かべて頷いた。そして、その右手を差し出す。繋がれる両者の手と手。その感触を確かめ、ゼストは思った。違う。今目の前にいるのは、犯罪者などではないと。

それは、平穏を望む一人の人間だと、心から思ったのだ。故に誓う。ベルカの騎士として、局員として、そして人としてこの想いに応えようと。

（広域次元犯罪者、か。それだけの事をやってきた者をここまで変えた存在、城戸真司……大した男だ）

余程局員よりも局員らしいと思いながら、ゼストはもう一度視線を真司へと向けた。そこでは、真司達とルーテシアが和気藹々と自己紹介をしているのだった……

――――――――――――――――――――――――――――――――

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

六課は前回の話を受けてのそれぞれの反応。ついに明らかになった五代と翔一達の世界の違い。そして、翔一が語ったクウガを最後手助けしたのは勿論……

一方、真司達は因縁のゼスト隊と再会。そして、真司のおかげで主要の三人の警戒心を薄れさせる事に。そして、ルーテシア登場です

波乱の初戦闘

「緊張するね」

「……まあね」

六課所属のヘリに揺られながら、スバルとティアナはそう言い合った。その互いの手には、つい先程手渡された新型デバイスが握られている。レリックと呼ばれるロストロギア。それが六課が追いかける邪眼に関わるだろう鍵。その裏には聖王教会が関わっているらしいと、噂話としてアルトが二人に言っていたが、そんな事は二人にとってはどうでもよかった。

何故なら、今回四人は、本来ならばそれぞれのデバイスの試運転を兼ねた訓練をするはずだった。だが、それをしようとした矢先に六課に警報が鳴り響いたのだ。レリックを輸送中の列車が、謎の機械に襲撃されているという情報が入ったのは、その直後。

即座に前線メンバー四人となのはに出動命令が下され、こうしてヘリで現場に向かっていた。後でフェイトも合流予定だが、もしかするとそれが遅れる可能性もあるため、四人には大小の緊張があった。

「訓練通りやれば、大丈夫だから」

「……そうですね」

「キャロ、心配ないよ。なのはさんもいるし、フリードや僕もいる。スバルさんもティアさんだって」

そんな四人の緊張を何とかしようとなのはが声を掛けるが、キャロはそれでも表情にやや緊張が見える。それに気付き、エリオがその手に自分の手を重ねてそう断言して周囲を見渡す。スバルもティアナもそれに頷いて返す事で、エリオの思いに応えた。

最後にフリードが一声鳴いて、キャロを励ました。そんな周囲の暖かさにキャロも嬉しく思い、同時に心強くなった。そんな四人を見て、なのはは苦笑。やはり、上司の自分よりも同僚でパートナーであるエリオの方が、キャロの励まし方を知っていると感じたのだ。

「とにかく、頑張ろう！　これが六課での初任務なんだからさ！」

「そうね！」

「はいっ！」

「……はい！」

スバルの掛け声にティアナが、エリオが、キャロが応えて行く。それを聞きながら、なのはは笑みを見せた。実は、なのは達には内緒でもう一人今回の出動に参加している者がいるのだ。

その者は、なのは達が安心して任務を遂行出来るようにと後ろに控えている。ちなみに、その者がヘリを追跡している手段を誰も知らない。何せ、隊長であるなのはさえ、その者がこの任務に参加しているとは思っていなかったから。

「よし、じゃ……」

「なのはさん、どうやら飛行型もいるみたいっす！」

気分が盛り上がった四人を鼓舞しようとした瞬間、ヴァイスがや

や上ずった声でそれを遮った。それになのはも少し表情を険しくし、頷いた。この中で空戦が出来るのは、自分とスバル。だが、現状ではスバルを空戦に当てる訳にはいかない。

何故ならば、車両の安全を確保するために四人で事に当たって欲しいからだ。それに、相手の戦力が未知数な状況で新人を投入する程、なのはは愚かでも厳しくもない。

「ヴァイス君、ハッチ開けて」

「うす。頼みます、なのはさん」

「私が空は抑える。四人は、無理をしない程度でレリックの確保を目指して」

「「「「はい！」」」」

なのはの言葉に四人は凛々しい顔で答えてみせる。それになのはは微笑むと、大きく頷き開いたハッチ向かって走り出す。そして、そこから飛び出すと同時にその胸元から紅い宝玉が姿を見せる。

それは、なのはの大切な相棒にして、かけがえのない友人。レイジングハートを手にし、なのはは高らかに叫ぶ。

「レイジングハート、セェェェット、アップッ！」

”スタンバイレディ。セットアップ”

眩い光に包まれ、なのははその身を白いバリアジャケットに包む。そして、即座に展開されるアクセル・フィンと呼ばれる飛行魔法。管理局にその名を轟かすエースの姿がそこにはあった。

「スターズ1、高町なのは……行きます！」

前方に見える飛行型の機械を見つめ、なのはは何やら妙な感覚を覚えた。そう、どこかで似たような物を相手にした事があるような気がしたのだ。だが、それを考えたのも一瞬。すぐさま様子見のアクセルシューターを放つ。

その誘導性を完全発揮するには、なのはといえどもその動きを止めねばならない。だが、その精度を度外視すれば動きながらでも放つ事は出来る。しかし、それでも誘導性は高い。本来ならば、それをもって相手をあっと言う間に撃破出来る程に。だが……

「シュート！」

そんななのはのシューターを、相手は避けてみせた。それも際どくなのではない。余裕さえ見えるぐらいにだ。それになのはは内心驚愕する。絶対の自信があった一撃ではない。それでも、そんな風にかわされるとは思わないものだった。

故になのはは相手の戦力を冷静に分析する。今のままでは撃破は難しい。かといって動きを止めればやられかねない。と、そこまで考えた時だった。一体の飛行型が突然破壊されたのだ。

何が起きたか分からないなのはだったが、レイジングハートがその理由を教えた。そう、かなりの遠距離から正確な射撃を行なった者がいたのだ。

”マスター、あれを”

「……あれって……クウガとゴウラム！？」

そこには、ゴウラムに乗ったクウガの姿があった。なのはは月村

家を訪れた際、五代に紹介されたゴウラムの存在に驚きを隠せなかった。だが今は、それよりもゴウラムが次元世界の壁を超えて来た事に驚いていたのだが。

一方クウガは緑の体。ペガサスフォームになり、なのはを援護してくれたのだろう。なのはがクウガに気付いたように、クウガもまたなのはヘサムズアップ。それと同時に姿が緑から赤に変わる。

そして、手にしていたペガサスボウガンがストレージデバイスへ戻った。そう、なのは達を追っていたのはクウガ。万が一に備え、はやての要望に応えてゴウラムを呼び、その背に乗ってヘリを追尾していたのだ。

クウガはゴウラムで飛行型を蹴散らすようになのはヘ接近し、声を掛けた。

「なのはちゃん、大丈夫？」

「はいっ！」

「フェイトちゃんは遅くなるって光太郎さんから聞いたから。ここはしばらく、俺とゴウラム、なのはちゃんとレイジングハートで頑張ろう！」

そういうと、クウガは再びその姿を変えるべく、構えた。

「超変身！」

その体を今度は青に変え、クウガはデバイスを振り回す。その瞬間、それがドラゴンロッドへ変化した。そして、それを見てなのはも再び意識を切り替える。クウガは空戦に対応しただけで、得意でない事に変わりはないのだ。

だから自分が攻撃の起点となってクウガを援護しようと思い、な

のはは再びシューターを放つ。だが、それは先程と違い、相手を翻弄するような軌道は描かない。そう、それは相手を倒すための攻撃ではなく……

「おりゃ！」

クウガの攻撃を当てるための攻撃。なのはの攻撃をかわす事を利用し、クウガがその回避した瞬間を叩く。それで撃破出来るのは、たった一機にすぎない。だが、一機は撃破出来る。だとすれば、この戦いに勝利するのは勿論……

「次、行きますよ！」

「分かった！」

彼ら二人である。空を自由に翔けるなのはが相手の動きを読み、誘導し、クウガがそれを理解し叩く。その内、相手はなのはが自分達を誘導していると理解したのか、その攻撃をある程度かわさなくなった。それに、シューターに当たった飛行型が大したダメージを受けなかったのもある。ＡＭＦのためだ。よって、クウガの一撃の方が警戒すべきと思ったのだろう。

しかし、それさえなのはにとっては予想内。一機、なのはのシューターを避けもせず強引に突破しようとして、その機体がシューターに当たった瞬間、そのボディが破壊された。

「残念でした。それは、多層コーティング弾だよ」

”撒餌に食いつきましたね”

ＡＭＦさえ貫ける魔力弾。それをなのはは数ある中にいくつか配

置したのだ。ＡＭＦを装備していた事に驚いたなのはだったが、それで何も出来なくなる程、彼女は弱くはなかった。
　クウガにばかり気を取られた時のための手段として、ＡＭＦに対する手段を講じたのだから。これに相手は混乱を見せる。クウガを警戒すれば、なのはに。なのはを警戒すればクウガに倒される。
　そう、もう彼らに勝ち目はなかったのだ。そして、クウガは数いる飛行型を片付けるべく、再び姿を変えた。それは緑。そして、手にしたロッドがボウガンへ変化し、更に体に電流が走る。

「これで……っ！」

　ライジングペガサスとなったクウガは、その威力を持って一気に仕留めようと考えたのだ。なのはもそんなクウガの狙いを悟り、敢えて相手の中心へ行き、囮を買って出る。そして、なのはとクウガは互いの心の中でタイミングを図る。
　互いに一番良き時を狙い、時期を見計らう。そして、ついにその瞬間が来た。なのはを全方位から取り囲むように相手が一斉に襲い掛かったのだ。それを見て二人が同時に叫んだ。

「「今っ！」」

　放たれるライジングブラストペガサス。三発の電流を纏った空気弾がそれぞれ中央にいた相手を打ち抜いていく。それと同時になのははフラッシュ・ムーブを使いその場を離脱。それを待っていたかのように爆発する飛行型。それに巻き込まれるように誘爆していく機体がいる中、何体かはそれを逃れてクウガへ殺到する。しかし、クウガはそれを見ても何も動こうとはしなかった。

”ディバイン……”

「バスタァァァ！」

それをなのはが狙っていたからだ。こうして残っていた機体も綺麗に片付けられ、二人は互いにサムズアップ。しかし、それも束の間。なのはへ通信が入る。それはロングアーチからの第二波接近中の知らせ。それを聞き、なのはに少しだけ焦りの色が出る。

出来る事ならスバル達の方へ向かいたい。しかし、クウガ一人では相手の大群を相手にすると辛いとも分かっている。自分の局員としての気持ちは、このままここでクウガと制空権を抑えるべしと告げている。しかし、個人としては、スバル達の援護に向かいたい。そんな風に考えた時、なのはにある言葉が思い出される。

――――なのはちゃんが思っている程、人って弱くないよ。

（そうだ……スバル達は弱くない。私が思っているよりも、ずっと強い。なら……っ！）

「五代さん、もう少し助けてもらっていいですか？」

自分がすべきは、ここで空の敵を食い止める事。フェイトさえ合流すれば、クウガにスバル達の援護に向かってもらえる。そう考え、なのははレイジングハートを構えた。

「いいよ。フェイトちゃんが来るまで、だね」

”そういう事です”

共に軽く拳を合わせ、迫り来る相手に備える。クウガはその体を再び青に変え、手にしたボウガンがロッドへ変化する。ここから先へは行かせない。そんな思いが二人からは感じられた……

なのはが去った後、四人は問題の列車の上空へと到達していた。
もうその顔に不安はない。何故なら、なのはの元にクウガがいると通信で聞いたからだ。今も自分達のために空の敵を食い止めているらしい。それを聞き、四人は気持ちを引き締めたのだ。
戦う事が嫌いな五代。それが、自分達のためにその戦いをしてくれている。それを聞いて、どうして気持ちが昂らずにいられようか。仮面ライダーが戦ってくれている。それも、自分達のために。なら、それに応えようと思ったのだ。

「スターズ3、スバル・ナカジマ！」

「スターズ4、ティアナ・ランスター！」

「ライトニング3、エリオ・モンディアル！」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！」

「キュクル～！」

「「「「行きますっ！」」」」

ヘリから飛び降りる四人。スターズとライトニングはそれぞれ別の場所向かって降りていく。そして、全員が互いへ笑みを見せ合い、それをキッカケにその手にした相棒が反応を見せた。

起動する四つのデバイス。そして、四色の光が四人を包みこみ、その身にバリアジャケットを纏わせる。スターズのそれは、なのは

の物を意識したバリアジャケット。対するライトニングはフェイトの物を意識したバリアジャケット。そして、それを個人用に合わせた特別製。

そして、四人は無事に車両の上に降り立つ。スバルは、ローラーブーツの代わりとなったマッハキャリバーを。ティアナは、アンカーガンの代わりになったクロスミラージュを見た。その新しい相棒へ何か思う前に二人へトイが襲い掛かる。

なのはからの報告で、ＡＭＦを使っている事は知っている。だが、スバルにはそんな事は関係ない。持ち前の力を乗せたリボルバーナックルでそれを叩き伏せる。その一撃に沈黙するトイ。しかし、その感触にスバルはどこか言い様のない違和感を感じた。

（何でだろ……あれだけ力入れたのにこれだけしか壊れないなんて……）

予想ではかなりひしゃげると思っていた。だが、それに反してトイは沈黙はしたものの、派手に壊れはしなかったのだ。その事に意識を向けていたスバルだったが、そこへ再びトイが襲い掛かる。

それをオレンジの魔力弾が迎え撃つ。その衝撃にトイの動きが僅かに止まるかに見えた。だが、ＡＭＦによってそれが無効化される。しかし、それでもティアナに少しの焦りも不安もない。

「うおぉぉぉぉ！！」

それは相手を倒すためでもなければ、止めるためでもない。スバルへ気付かせるためのものだったのだ。マッハキャリバーを加速させ、その攻撃をかわし、切り返すと同時に加速を乗せた拳を打ち込むスバル。それに耐え切れず、トイは爆発四散した。

やっと満足の行く結果が得られたスバルは、内心ガッツポーズ。

だが、そのマッハキャリバーの凄まじい加速力に若干戸惑いも感じていた。それを制御し、ティアナへ視線を向けると、彼女は既に視意識を次の車両へ向けていた。

「……まだ沢山いるみたいね。行くわよ、スバル。相手は魔法効き難い分、アンタの力が頼りなんだから」

「うんっ！」

こうして、二人はレリックのある貨物室目指して進んで行く。その頃、反対側の車両でも……

「これで……！」

「ラストっ！」

トイを相手にエリオ達が奮戦していた。ＡＭＦに苦戦を強いられたが、キャロのブースト魔法の加護を受け、エリオがストラーダの加速力を使った突進攻撃でトイを確実に一機ずつ仕留めていったのだ。

光太郎に言われた安易に魔法に頼るなとの教え。それがあればこそ、エリオはＡＭＦ相手でも何の不安もなく立ち向かったのだ。魔法での攻撃が通用しにくいのなら、通常攻撃の威力を上げればいい。そう考え、その場で発動する魔法ではなく、効果範囲外からの高速移動魔法による加速力を加えた攻撃を選んだのだから。

「……エリオ君、凄いね」

「キャロが色々と底上げしてくれたからだよ。でも……」

そう言ってエリオは沈黙したトイ達を見つめた。その強度に、エリオは驚いたのだ。何せ、最初ストラーダがまったく傷一つ付けられなかったのだから。故に自身の売りであるスピードを乗せる事で破壊力を増した。それだけではない。万が一を考え、キャロに切れ味や増した速度を更に強化してもらったのだ。

それに加えて狙った部分は、攻撃にも使っていた目のような部分。そこが一番脆いと踏んだからだ。それが通用した事に内心安堵しつつ、エリオはキャロへ視線を向けてこう言った。

――フリード、本来の姿にする事を考えた方がいいかもね。

それが意味する事を察し、キャロはどこか不安そうな表情を浮かべる。だが、それを見たエリオがその手を握り、優しく告げる。キャロなら出来ると。きっと制御して、みんなを守るためにフリードを使役出来るはず。そう想いを込めて。

それを感じ取り、キャロも小さくだが確かに頷いてみせた。いざとなったら、フリードを本来の姿にしてみせるとの思いがそこに込められていた。それにエリオは嬉しそうに頷き、ＡＭＦの効果範囲外へ行く必要があるから、機会を見計らおうとも告げる。

こうして、エリオとキャロも車両内へと足を踏み入れていく。中で待つ多くのトイ、それを警戒しながら……

なのは達が出動する一時間前。フェイトはゼスト隊の隊舎を訪れていた。少し前にクイントから頼みたい事があると言われ、やっと何とか時間を作って会いに来る事が出来たのだ。その隣には光太郎

もいる。
　運転手として連れて来たのだが、実はギンガへ会わせるためでもある。そう、今日クイントへ会いに行くと教えると、彼女からギンガが来るので光太郎を連れて来て欲しいと言われたのだ。原因は、スバルがギンガへ光太郎がＲＸだと教えたため。確かに関係者以外には言ってはいけないと言ったのだ。だが、スバルからすればギンガは立派な関係者。共にあの空港火災でライダーに出会った者。

（……でも、六課関係者じゃないんだけどなぁ……）

　そう思い、フェイトは苦笑。そこまで詳しく言わないでも分かってくれるだろうと思っていたのだ。しかし、スバルの過大解釈の相手がギンガで良かったとも思ってはいた。事実、ゲンヤやクイントもギンガに光太郎の事を教えようと考えていたのだから。
　二人が光太郎がＲＸだと知っているとフェイトが聞いたのは、二人と出会った時。光太郎経由で知り合ったため、フェイトがＲＸを知っていると聞いた途端、二人から言われたのだ。光太郎は元気にしているかと。

「……何か、こう考えると光太郎さんも翔一さんと同じような気がするなぁ」

「何か言ったかい？」

　フェイトの呟きを聞き、光太郎がそう尋ねる、それにフェイトは何でもないと返して隊舎の中へ入っていく。光太郎は当然フェイトの呟きを聞いていたが、それでも敢えてそう聞いたのだ。翔一と自分の何が同じなのかまでは分からなかったからでもある。
　そんな二人をギンガが出迎えた。彼女は本来ゼスト隊ではなく、陸士隊の１０８所属。しかし、今日はここへとある捜査の手伝いと

して呼ばれていたのだ。そう、それはあの違法施設の件。
だが、それは建前で、本当は光太郎に会わせるためにクイントが夫へ無理を言って実現させただけ。そのための理由としてあの事件を使っただけなのだ。

「……もう、どうして教えてくれなかったんです」

「ゴメン。でも、何となく理由は分かるでしょ？」

ギンガの言葉にフェイトはそう答えた。その声に込められたものに気付き、ギンガは一瞬あっと声を漏らす。しかし、すぐに気を取り直し、フェイトへ謝った。軽率だったと。それにフェイトは気持ちは分かるから気にしなくてもいいと返す。
光太郎はその間、何も言わず二人の会話を聞いているのみ。フェイトから、最初は自分が話すので、それまでは何も口出ししないで欲しいと言われていたのだ。

その後も二人はＲＸの事について話す。ギンガはあの時見た姿を忘れられず、バリアジャケットの色を黒にしようとも思った事があると語り、フェイトが苦笑した。何せ、自分は彼と出会う前から黒いバリアジャケットなのだ。
光太郎はその話を聞いてどこか照れくさそうだ。まさか自分がそこまで思われていたとは思っていなかったのだ。そして、そんな話をしている間に三人はクイント達の待つ部屋と到着した。ギンガは、ここまで案内したら戻ってくるようにとクイントに言われていたため、そこで二人と別れた。

「……大人数、だね」

「ですね……」

中から感じる気配。フェイトはそれを基に光太郎の言葉に返事をしたが、光太郎はそれだけではなく呼吸音等からも正確な人数を割り出していた。その数、十六人。しかも、どうやらほとんどが女性である事まで光太郎は把握していた。

このまま外で話していても仕方ないと思い、二人は部屋の中へ入った。そこには、予想通り大勢の人間がいた。だが、その中の一人を見て二人は言葉を失う。

「ジェイル……スカリエッティ」

「……初めまして、フェイト・テスタロッサ。おっと、今はハラオウンがいるね。しかし、母親にどことなく似ている……」

表情を険しくするフェイトに対し、ジェイルはどこか懐かしむように告げた。それを見て、光太郎は違和感を感じた。広域次元犯罪者として名高いジェイル。そんな極悪人の浮かべる表情にしては、それは穏やか過ぎる気がしたのだ。

それだけではない。その身にまとう雰囲気もどこか優しいように感じられたのだ。そんな風に窺うように見つめる光太郎へ、ジェイルが視線をフェイトから移した。その目を見て、光太郎は確信した。何があったか知らないが、ここにいるジェイルは決して悪人ではないと。

「……フェイトちゃん、まずは話を聞こう」

「……ええ。ゼスト部隊長、これは一体どういう事ですか？」

フェイトは光太郎の言葉に頷き、視線をジェイルからその隣にいるゼストへと向けた。そのフェイトの視線を受け、ゼストはジェイ

ルから聞いた話を語る。その内容に、フェイトと光太郎の表情が一変した。

邪眼の居場所が、まさかこんなにも早く分かるとは思っていなかったのだ。しかも、ジェイル達は邪眼と既に一戦交え、今後も邪眼と対峙すると決めている。そのため、その協力に対して便宜を図って欲しいとゼストは告げた。

「……邪眼を倒したのは、誰かな？」

「お、俺ですけど……？」

フェイトがゼストの提案を考える間、光太郎は気になった事を尋ねた。自分が出会った時、苦戦を強いられた邪眼。それを倒した者を知りたかったのだ。そして、おずおずと真司が手を挙げると、光太郎はその姿を見て何か不思議な印象を受けた。

五代や翔一とも違う穏やかな空気感。優しさと雄々しさを兼ね備えた雰囲気を感じ取ったのだ。だが、それだけではない何かが真司にはある。そんなような気が光太郎にはした。

「……どうやって倒したのか教えてもらってもいいかな。俺も以前奴と遭遇した事があってね。その時は、俺一人じゃ手も足も出なかったんだ」

「えっと……それは……」

ライダーの事を話して良い物かと迷う真司。だが、そんな様子から光太郎は何かを悟り、待ったを掛けた。無理に話さなくてもいい。言いにくい事や教えられない事情もあるだろうと。その光太郎の心遣いに真司は嬉しく思うも、話す事は避けるべきかと結論し、謝罪と共に頭を下げるだけ。

その横では、フェイトがゼストと今後の事を話し合っていた。ジェイルは犯罪者。それを見過ごす事は出来ない。だが、真司達は何の罪もない者達。故に、そちらについては手を打ってみせると。

それを聞いて、ウーノ達はやや不満そうな表情を浮かべる。しかし、フェイトの言う事が一般論と理解しているため、それを口には出さなかった。だが、そんな事はお構いなしとばかりに待ったと掛けた者がいた。真司である。

「ちょっと待って。ジェイルさんは、確かに悪い事をしてたかもしれない。でも！」

その真司の声に、フェイトもゼストも光太郎さえ黙って続きを待った。

「……でも、今は違う。もう二度と悪い事はしないと誓ってくれた。平和に暮らしていこうとしてた。そして、あの化物を倒すために力を貸そうとしてる。それに……ジェイルさんは、俺にとっては凄い大恩人なんだ。この世界に来て、ずっと面倒を見てくれた人なんだよ。だから……」

「……本当の事ですか？」

「ああ！　もし、今ジェイルさんを裁くって言うのなら、俺にも一緒に罪を償わせてくれ！　俺がもっと早くジェイルさんを止める事が出来なかったのも悪いんだしさ」

フェイトの訝しむような視線に対して、真司は目を逸らさず言い切った。その視線の真っ直ぐさと力強さにフェイトは息を呑んだ。それは、操られて言わされているものではない。本当に心からそう思っている目だった。

自分が知っていたジェイル・スカリエッティとは違う顔を、真司は知っている。そして、ジェイルが犯罪を犯していた事も知っている。にも関らず、自分にもその責任の一端があるとして、真司は一緒に罰して欲しいとまで言ったのだ。これには、フェイトも言葉が無かった。

（精神操作の類でもなければ、暗示の類でもない。この人は、本心からこう考えている）

今までひたすら追い駆けていた存在。それが、ここにきて擁護する存在が現れた。しかも、聞けばジェイルはもう犯罪をしないと決めていたらしく、現在ゼスト達に協力しているのも罪滅ぼしも兼ねた彼なりの償い。

そして、ジェイルは真司の言葉に嬉しく思いながら、フェイトへこう告げた。全てが終わった後、法の裁きを受けると。その代わり、真司達には何の罪もないので、その未来だけは守って欲しい。そうフェイトへはっきりと言ったのだから。

その発言にフェイトは完全に言葉を失う。それが裏を感じさせるものであれば、きっと彼女は内心でやはりと思い、軽蔑しただろう。それが計算であれば、怒りにその身を焦がしただろう。

だが、ジェイルは本当にそう考えていた。確かに戦闘機人はあってはならない存在なのかもしれないが、生まれてきた命に罪はない。罪を負うのは、それを作り出した自分と望んだ世界だ。その言葉に光太郎もフェイトも返す言葉が無かった。それは、自分達にも言われているような内容だったから。

（この男……本当に犯罪者だったのか……？　いや、きっと変わったんだ。おそらく彼が、真司君がいたから……）

（まさかこの男にそんな事を言われるなんて……。でも、どうして？　どうしてこんなにも心が暖かいのだろう……）

そんな事を考えながら、二人はジェイル達の今後を踏まえた話し合いを開始した。邪眼に対し、有効な手段を模索していたジェイル達にとって、六課の目的と状況はかなり魅力的だった。

フェイトとしても、ナンバーズの力は正直欲しいものがあった。光太郎は真司の隠している力に対し、ある程度予測を付けたのか、せめて真司だけでも六課に手を貸して欲しいと頼んでいた。

そうして、両者の話し合いが進んできた時だ。フェイト達の目の前にモニターが出現した。映っていたのは、ロングアーチのシャーリィ。

『フェイトさん、大変です！』

「どうしたの？」

『レリックを輸送中の列車を、謎の機械が襲撃したんです。今、なのはさん達が向かってるんですが、どうも嫌な予感がするって部隊長が仰ってて……。それで、五代さんが念のために後を追ってくれたんですが……』

「謎の機械……まさか……」

シャーリィの告げた言葉に、小さくジェイルが呟いた。そして、それを聞いて光太郎とフェイトは互いを見やり、同時に頷いた。

「その映像出せる？」

『はい』

そして、モニターに表示された映像を見て、ジェイル達がやはりと頷いた。そこに映っていたのはトイだったのだ。しかも、従来のものだけではなく、空戦にも対応したタイプまでいる。

それにジェイルがフェイト達へ言った。あれはＡＭＦを装備していると。それにフェイトの表情が一変した。即座にすぐに現場へ急行すると告げ、部屋を後にしたのだ。それと同時に、光太郎は五代へ通信を試みた。

＜聞こえるか、クウガ＞

＜光太郎さん？＞

＜今、フェイトちゃんがそっちに向かった。だが、時間がかなりかかるだろうからそれまで頼む！＞

＜分かりました！＞

頼もしい返事を聞き、光太郎も立ち上がる。すると、その背に向かってゼストが告げた。

「気をつけてな」

「……ありがとうございます」

そう笑みと共に返し、光太郎も部屋を後にした。その姿が見えなくなった瞬間、チンクが呟いた。

――――どういう事だ。あの男の体も普通じゃないだと……？

その言葉に反応したのは、ナンバーズだけ。そう、彼女達は全員見えてしまっていた。光太郎の体の事が。その構造が普通ではない事に気付いてしまったのだ。

だが、何故かそれを大っぴらに言うのは気が引けた。そう、思い出していたのだ。光太郎が真司へ言った言葉を。自分も以前邪眼と遭遇した事がある。そして、手も足も出なかった。にも関らず、光太郎が生きている事。それが意味する事を考え、彼女達は一抹の不安を抱く。

それは、光太郎が邪眼の関係者ではないかという事。しかし、そんな不安を払うように真司が言った。それは、ナンバーズの不安を察してではない。勿論、彼女達が光太郎の異常性を気付いたと知ったためでもない。

ただ、正直に感じた事を言っただけ。しかし、それが不思議な程不安を減らす内容だったのだ。それは、こんな一言。

――あの人も、邪眼を倒したいって思ってるんだな……

それは、光太郎と面と向かって話した真司だからこそ分かるもの。光太郎の瞳に宿る邪眼への怒りや決意。その一端を微かにだが感じ取れたからこその呟きだったのだ。こうして真司の感想が、ナンバーズの不安を軽減させる事となる。

光太郎が出て行って少しすると、ギンガが顔を出す。全員分のお茶を二つのお盆に載せて持っているのだが、それがやや危なげに見え、真司がその一つを受け取りに行く。

「おっと……」

「あ、ありがとうございます」

ギンガは、真司達の事を詳しくは聞いていない。だが、ジェイルの事は知っている。広域次元犯罪者。そんな極悪人だと。しかし、ギンガからすれば、ジェイルはとてもではないがそうは見えなかった。

現に、今もゼストとどこか親しげに話しているのだ。それに、母であるクイントさえ、ジェイルについては一概に悪人とは言えないと言っているのだから。

「あれ？　フェイトさん達は？」

いると思っていたはずの相手がいない事に気付き、ギンガは不思議そうに首を傾げた。

「何か大変な事になっているようだ。二人して急いで出て行ったぞ」

「ギンガ、残念だったね」

チンクとセインがそう言ってギンガの疑問に答えた。もうギンガはナンバーズとの自己紹介を終えていた。自分と同じ体の十二人。それを聞いて、ギンガはジェイルへ怒りを抱きかけたのだが、それを彼女達自身が払拭した。

ジェイルがいたから今の自分達がいる。そう告げたのだ。そう告げる彼女達の表情は、全員心からそう思っているというもの。故にギンガはジェイルへ怒りを抱く事が出来なかった。

そして、ギンガはナンバーズと良好な関係を築き出していた。人懐っこいセインやウェンディは言うに及ばず、チンクやディエチなどの大人しい者達とも楽しく会話が出来るぐらいに。ただ、ウーノやドゥーエといった上の姉達とは、まだどこか隔たりがあるように

ギンガは感じていたが。
それでも、その言葉をキッカケにギンガと話し出すナンバーズ。
その楽しくも騒々しい光景を見つめ、ゼストとジェイルが笑みを浮かべた。

「……良い娘達だな」

「だろう？　私の自慢の娘達さ」

「レジアスにも……見せてやる必要があるな」

「……戦うための機械ではなく、生きている人間だと知ってもらうために、だね」

ジェイルの言葉にゼストは無言で頷いた。自分の親友。それが望んだ存在が、こういうものだと教えたい。そうゼストは考えていた。治安維持のためにと、それだけのために命に手を加える。それは、決して許される事ではない。
そう思うから。何よりもこの光景を見てしまったゼストには、戦闘機人という呼び方は出来なかった。そこにいるのは、歳相応の少女達なのだから。

穏やかに笑みを見せるゼスト。だが、その隣でジェイルは先程見たトイの事を考え、真剣な眼差しをしていた。そう、あれは自分がかつて考えた改良案の一つだったのだから。
そして、それが意味する事を考えて、ジェイルは確信した。邪眼が何をしようとしているのかを。とうにジェイルが破棄した計画。それを実行に移すつもりなのだと。そこまで考えてジェイルは恐怖した。ラボにあったデータ。それを使って邪眼が行動しているのなら、まだ姿を見せていないものがいくつもあるのだ。

（……これは、早急に手を打つ必要があるね）

そう思いながら、ジェイルは視線を静かに天井へと向ける。本来自分がいるべき場所にいるであろう邪眼。それに対し、密かに告げた。

――私の考えた物を使って動くというのなら、受けて立とう。あの時は遅れを取ったが、今後はそうはいかないよ……

機動六課　食堂。翔一は一人厨房で仕込みをしていた。五代は、はやてに呼ばれていない。リインは、そんな五代の代わりにカレーなどの仕込みをし、今はテーブルなどのセッティングをしている。

（今日はなのはちゃん達が初仕事らしいから、気合入れて料理作ろう。帰ってきた時、とびっきり美味しいご飯を食べさせないと……）

そんな事を考えながら、翔一が仕込みをしていた時だ。ふと、誰かに見られているような気がして、翔一は顔を上げた。すると、そこには信じられない人物が立っていたのだ。

「お前は……あの時の……」

「アギト……いや、人よ。貴方から黒い太陽に伝えて欲しい事があります」

そう言うと、黒服の男は翔一へ無表情で告げる。

———影の月が……踏み躙られる、と。

ついに繋がった縁。だが、まだ重なり合うまでには至らない。本来よりも手強くなったトイを相手に奮戦する六課の面々。

そして、フェイトとジェイルの確執に変化が起き、これからの流れを変えていく。

そんな中、突如として現れた黒服の青年。彼が言う影の月とは何か？　踏み躙られるとは一体？　物語は、また次の局面を見せ始める……

旧き結晶を使い、悪しき世を創ろうとする眼。そが操るは死者の列と物言わぬモノ。闇の覚醒がもたらすその力の前に、焼け墜ちる法の船。

その予言を変える力は、仮面の戦士達と彼らと心通わせた者達……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

原作でいう所のファーストアラートです。しかし、ＡＭＦを使う存在だと知らぬため、なのは達はやや戸惑いながらも撃破します。

レリックを追い駆けるのは、その危険性を指摘されているため。それと、予言の一説にある旧き結晶。これがレリックではと予想して

いるからです。

その辺りは、次回以降で……

見え出した闇

「ロングアーチ、飛行許可をお願い！」

『了解です！　ライトニング１、飛行許可申請を受理しました。どうぞ！』

「了解っ！」

シャーリィの声にフェイトは力強く返事を返し、懐から信頼する相棒を取り出した。

「バルディッシュ・アサルト……セェェェェット、アップ！」

”イェッサー”

慣れ親しんだ声を聞きながら、フェイトはその身にバリアジャケットを纏う。漆黒のバリアジャケット。今や信頼するライダーと揃いの色となったそれを翻し、フェイトは雷光のような速度で空へ飛び上がる。

「ライトニング１、フェイト・Ｔ・ハラオウン……行きます！」

目指すは、親友とクウガが守る空。一刻も早く現場へ到着せねばならない。そう思い、フェイトは急ぐ。仮面ライダーがいるというのに、何故か不安感が消えないのがその裏にはある。理由もなく、根拠もない。それでも、フェイトはその感覚を信じる事にした。

それに隊舎を出た時、後を追ってきた光太郎から告げられたのだ。嫌な予感がすると。それは、フェイトの中では絶対に近いもの。良

い事も悪い事も恐ろしい程の確率で当ててきた光太郎。その言葉と感覚には、重きを置いて然るべき。

（待っててなのは！　私が行くまで頼みます、五代さんっ！）

澄み渡る青空を飛びながら、フェイトはそう願って速度を上げるのだった……

「ＡＭＦか……」

はやてはフェイトから聞いた報告に、苦い表情で呟いた。並みの魔導師にとって、恐ろしい装備であるＡＭＦ。新人達にとってもそれは同じだが、はやてが苦い顔になっているのはそれが理由ではない。

なのはから教えを受けている四人ならば、ＡＭＦが相手でも何とかする術を身に着けている。問題は、その戦闘をどれだけの時間続けなければならないか不明だからだ。

（いくらスバルとエリオの体力が新人離れしてるとはいえ、長時間魔法無しで戦うんは……）

なのはかクウガが援護に行けば問題はないのだが、現在フェイトが着くまで二人は制空権を抑えるために奮戦中。そのフェイトは先程飛行許可を求めてきたので、それを受理した。おそらくは最大速度で現場へ急行しているだろう。

光太郎は、フェイトの車を隊舎まで運んだ後、本人の希望で念のため現場へ向かう事になっている。翔一にも向かってもらう事も考えたのだが、はやてとしては、ライダーを全員出動させるのはさす

がに行き過ぎていると思ったのだ。

ロングアーチもＡＭＦの事を聞いた瞬間こそ焦りが生まれたが、それと同時にクウガの姿を見てその安心感を実感し、その不安がキレイに消えたのだ。はやてにとっては、クウガの姿を見るのは久しぶりだったが、やはりその姿には安心感を覚えた。

更に緑の金の姿を見る事が出来、不謹慎かもしれないが喜びさえ感じていたのだ。話によれば、四つの色全てに金の力（五代曰くミレニアム特別バージョン）があり、はやてだけでなく、なのはやフェイト達でさえ密かに見たいと思っている事の一つ。

「八神部隊長、ライトニング１がスターズ１とクウガに合流しました」

「よし、ならクウガには新人達のフォローをお願いしよか」

アルトの報告を受け、はやては待っていたとばかりにそう告げた。それに反応し、ルキノがモンター越しにクウガへそれを伝える。その異形を目の当たりにしても、ルキノには微塵も恐怖などはない。

それは、クウガが恐ろしい形相ではないのもあるが、一番はそれが五代だからだろう。今もあの明るい声でルキノに答えている。

『分かった。スバルちゃん達の方へ向かえばいいんだね？』

「はい。お願いします五代さん」

『了解っ！』

サムズアップ。それにルキノもついつられてそれを返し、無意識に笑顔まで浮かべる。五代がいつもそれをする時、必ず笑顔だから

だ。心なしか、それにクウガも笑顔を返してくれた気がして、ルキノはそんな事を考えた自分に笑みを深くした。

それを両隣のシャーリィとアルトが気付くも、何も言わない。代わりに二人はルキノへサムズアップを示し、笑顔を見せる。それを見つめ、はやてとグリフィスも笑みを浮かべる。状況は好転した。何より、自分達にはライダーがいる。その安心感をはやてとシャーリィ以外の三人も知る事が出来た。それだけでも収穫といえる。はやてはそう考え、表情を再び引き締める。

「さ、油断せんといこか。まだ、何が起こるか分からんからな」

「「「「了解」」」」

いい返事だ。そう思って、はやては視線をメインモニターへ向ける。そこには、次々と飛行型を撃墜するフェイトとなのはの姿があった……

「……もうそろそろだね」

「そうね。次が貨物室のはず……」

疲れた様子で座り込むスバルの声に、ティアナはそう答え、視線を車両からスバルへと移す。

「……どう？　まだいけそう？」

「う、うん。何とか……」

いける。そう言おうとした時だ。ティアナが呆れたようにため息を吐いた。その表情と反応を見て、スバルは内心苦笑した。読まれていると感じたのだ。自分がまだ動けそうにない事を。

「ったく、アンタは……。何時も言ってるけど、無理は出来る限りしないようにする。それがアタシ達の約束でしょ？　いいからもう少し休んでなさい」

「でも……」

「そ・れ・に！　なのはさんも言ったでしょ。無理しない程度にって。今は、暴走し出しているこの列車を止めて、レリックを確保出来るように最善を尽くす。いい？　最善を尽くすの。決して最高を目指せって訳じゃないんだから」

そう言ってティアナは頬を掻く。欲を言えば、自分達だけで確保まで持って行きたいが、無理をして何かあってからでは遅い。そう考え、ティアナは少し休息を取る事を選んだ。何せ、ここまでスバルに頼りっぱなしだったのだ。

ＡＭＦの前では、今の自分の射撃は牽制にもならない。なので、幻術を使い相手を撹乱する事しか出来なかった。それは魔力を多く消費するためあまり多用こそ出来なかったのだが、それでもスバルの頑張りに応えたいと思った故の行動だった。

（アタシが今出来るのは、スバルの支援。それも攻撃面じゃなくて行動面。何とか頭使って少しでも疲労を最小限にしないと……）

精一杯自分の出来る事を。そう考え、ティアナは周囲を見渡した。そこには先程までスバルと戦っていたトイの残骸が転がっている。しかし、奇妙な事があった。それは、状態にむらがある事。

半壊しているものや全壊しているものがある中、ほとんど形を残しているものがあるのだ。しかも、数を数えるとそちらの方が多いようにティアナは感じた。

（どういう事？　スバルの攻撃力は少しだけど訓練を通して上がったはず……。なら、どうして破壊出来てない方が多いのよ……？）

そんな事を考えているティアナを見て、スバルは何を考えているのかを悟った。その視線が向いているものを見たからだ。

「……私も変だと思ったんだ。それ、やけに硬いんだよ」

「……アンタでそう思うなら、エリオ達はどうやって対処して……ああ、そうか」

スバルの言葉に何か言いかけるティアナだったが、何かに気付いて納得した、スバルはそれに不思議顔。

「あの子は槍使いでしょ？　それの強度を上げて、持ち前のスピードを生かして攻撃力高めてるんだわ。それにキャロの得意はブースト魔法だし、ＡＭＦの効果範囲外から使えば問題ないわよ」

「なるほど！　私が壊した方法と同じ事をやってるんだ！」

自分がトイを完全破壊した時の事を思い出し、スバルは理解出来たとばかりに手を叩いた。それにティアナは頷いて、視線を最初の位置へ戻した。そう、貨物室へ。

「……行くわよ」

「うんっ！」

もう気合十分とばかりに立ち上がるスバル。それに頼もしいものを感じ、ティアナは笑みを見せてある仕草を贈る。それに気付き、スバルもそれを返す。それはサムズアップ。大丈夫との思いと気持ちを込めての仕草。

そして、二人は貨物室へと足を踏み入れる。そこに待っている恐ろしい相手に気付かずに……

最後のトイの攻撃をかわし、エリオはストラーダをその目のような部分へ突き立てる。それにトイが若干怯んだようになったのを確認し、即座に距離を取る。そして、すかさず高速移動魔法を展開し、もう一度同じ場所へストラーダを突き当てる。

「はあぁぁぁぁ！！」

その一撃をかわそうにも、既にエリオが動き出した瞬間にトイの命運は尽きていた。音速の矢と化したエリオの前に、トイは為す術も無く破壊される。それを見届け、キャロは小さく安堵の息を漏らす。

スバル達が貨物室前で僅かな休息を取っていた頃、二人はそれよりやや遅れる事二車両の位置にいた。何もしなくてもトイを何とか沈黙させる事が出来るスバルと違い、エリオは出来る限り加速をつけなければ、今一つ決定力に欠けるためだ。

故に、スバルよりも慎重にトイに対処しながらここまで来たのだ。キャロのブースト魔法による疲弊も考慮し、最初の一車両目以外はエリオだけの力で戦った事も関係している。出来る事ならキャロの

魔法は、自分だけの力で倒せない相手に使うために残しておこうと考えたからだ。

「エリオ君お疲れ様。少し休もうか」

「……そうだね。さっきと同じで一分休んで次に行こう」

「キュク～」

そう言ってエリオとキャロは共に床に座った。そう、こうして必ず一つ突破する毎に小休憩を挟んでいる事も関係している。最初こそしっかり休んでいたが、トイとの戦いにも慣れた現在は、その時間を減らし、呼吸を整えるためだけにしていた。

初めはトイの軍団相手にエリオとキャロも戸惑いと緊張を隠せなかったが、それも最初だけ。次第にその対処と方法を構築し、二人は互いに支え合って切り抜けたのだ。エリオがトイを食い止め、キャロがバインドで僅かにでも動きを止めるか、もしくは鈍らせる。そして、その稼いだ時間を使いエリオがとどめを刺す。それを軸にしていた。

「……もうスバルさん達は貨物室かな？」

「そうだと思う。僕らも出来るだけ急ごう」

休憩は終わりとばかりに立ち上がるエリオ。キャロもそれに頷いて立ち上がり、動き出す。残る車両は二つ。それを超えれば目的の場所だ。そう思い、二人は歩く。丁度その時、その貨物室から大きな音が聞こえた。

それは爆発音。しかも、かなりのものだ。それに二人は同時に互いを見やり、同じ事を考えたと理解した。スバル達の方で何か起き

ている。それも、あまり良くない事が。

「……急ぐよキャロっ！」

「うんっ！」

「キュク！」

答えると同時にキャロはブースト魔法をエリオに掛ける。それに頷いて、エリオは高速移動魔法の準備を始めながら次の車両へと向かう。もう悠長に構えていられない。そう感じ取ったが故の行動。

細かい事を伝えずとも通じ合う二人。そこには、これまでで培った絆の深さが見える。こうして、エリオとキャロも貨物室へと急ぐ。そこに待つ恐ろしい相手。それに苦戦しているだろうスバルとティアナを支えるために……

貨物室に足を踏み入れたスバルとティアナを待っていたのは、どこか冷たい感じのする少女だった。その姿は、髪の色を除けばセインそのもの。しかし、セインを知らぬ二人がそれに気付けるはずもなく、ただその場違いな存在に警戒心を抱く。

「女の子……？」

「どうしてここに人が……」

「あ～、やっと来たのか。持ちくたびれたよ」

少女はそう言って笑う。それは笑顔。だが、どこか薄ら寒いもの

を二人は感じた。顔は笑っていても心は笑っていない。いや、本当に笑っているのか分からない。そんな印象を受け、二人は微かに身構える。

それに気付き、少女は笑顔から楽しそうに口元を歪めて笑みを作る。それは、相手の出方が面白くて仕方ないといったものだ。そのどこか不気味ささえある笑みに、二人は益々警戒心を強めた。

「……アンタ、何者よ」

ティアナの問いかけに、少女は鼻で笑うように呟いた。

――何者、か。ホント、人は愚かだね。そんな事も分からないなんて……

それを二人は聞いて、表情に不快感をあらわにした。だが、少女はそれを見て楽しそうに笑い出す。その笑い声は完全に二人を嘲笑うもの。

「何がおかしいんだ！」

「あはは……いいよ、教えてやる。あたしの名は、ゼクス。創世王様に創って頂いた僕さ」

ゼクスはそう名乗り、あっけらかんと告げた。それを聞いて、二人は何となくだが嫌なものを感じた。自分の事を僕などと言い切る事もそうだが、その中に出てきた創世王という響きに、何か引っかかるものを感じたからだ。

そんな二人の反応に構わず、ゼクスはさらりと告げた。自分は、ここでレリックを取りに来る相手に伝言を伝えるためにいるのだと。それは、一言。

――邪魔するのなら、その身をもって知れ。創造主たる我に逆らう愚か者共よ……

一切の感情を持たず、どこまでも平坦に、どこまでも無表情に告げられる言葉。それに二人は背筋が凍るような感覚を覚えた。

（な、何?!　この感じ……怖いっ！）

（足が……竦むっ！?）

そんな内から沸き起こる恐怖に戸惑い、怯える二人を見てゼクスは愉しそうに嗤う。

「いいね、その表情。確かに伝えてね、お前達の仲間に。あ……後、”仮面ライダー”を名乗る虫けらにも、ね」

「「っ！?」」

「さて、じゃあ……あたしはレリックもらって帰るから。バイバイ、弱虫さん」

その言葉に二人の表情を変える。先程までの恐怖は消えた。代わりに沸き起こるのは、ここに来るはずの飛行型を食い止めているある男の事。その事を思い出し、二人はゼクスを睨む。

その変化にゼクスも気付き、面白くなさそうな表情を浮かべた。弱いはずの存在が強がっているその光景がではない。その目に先程まであった恐怖が欠片として残っていないのだ。それが、彼女には堪らなく嫌だった。

（嫌な顔。さっきまでの方が見てて愉しかったのにさ……）

そんな事を考えるゼクスに対し、二人は互いに告げる。

「なら、アンタにも伝えてもらおうじゃないの！」

「お前達のやる事は、絶対私達が止めてみせる！」

「「仮面ライダーと機動六課がっ！！」」

それは誓い。それは願い。それは、確信。共に仮面ライダーと接した事があるからこそ、そう言い切れる。五代ならば、翔一ならばこう言い切ってくれると。決して誰にも屈せず、その想いを、生き方を貫いてくれる。

そして、それに自分達は憧れた。それを目指した。故に、ここで黙っている訳にはいかない。怯え、震え、守ってもらうだけの自分はもういない。彼らの背中に守られるだけでなく、その背中を少しでも支える事が出来る。今の自分達は、そんな存在になったのだから。

（五代さんのように……誰かを笑顔にしたい……）

（翔一さんのように……何事にも動じないように……）

（（だから、ここは行かせないっ！　絶対に！））

決して、自分達が強いなどと思わない。でも、何もしないままで見逃す事は出来ない。まだ震えが消えた訳ではない。それでも、今はそれを上回るだけの何かがある。故に、立ち向かう。己の全てを以って。

「……そう。なら見せてやるよ。あたしの本当の姿を……創世王様から頂いた、この力をっ！」

そうゼクスが叫ぶと、その体が変わっていく。可憐な少女は、それとは似ても似つかない醜悪な姿へと変化していく。それを見て、二人は無くなりかけていた恐怖心が、再び息を吹き返すのを感じていた。

生理的嫌悪感。それを全身から漂わせる姿。それだけではない。人の姿をしたモノが奇怪な化物となるのを見せられるのは、それだけでも精神的にくるものがある。

やがて、その変化は終わり、ゼクスはその本来の姿を見せた。それは、もぐら。だが、牙を剥き出しにして凶暴な形相をするそれは、誰もがイメージするもぐらのものではない。眼はつり上がり、鋭く二人を見据えている。手には触れただけで斬れそうな爪が生え、足にも同様の爪がある。

スバルとティアナも何とかそれに身構えるが、その体は小刻みに震えていた。それでも、何とかゼクスを睨むように見つめ返している。それをゼクスは面白くないとばかりに舌打ちし、動いた。

「っ？！」

「速いっ！？」

その動きにスバルは言葉を出す事も無く吹き飛ばされる。ティアナは、どこか鈍重な印象さえ受けるその姿とは正反対の動きに驚きを隠せない。そして、スバルは痛む体でウイングロードを展開し、何とか落下は免れるものの、そのダメージはかなりのものがあった。

「っ……危なかった……」

「スバルっ！」

「……しぶといね。このあたしの手をあんまり掛けさせないで欲しいんだけど」

相棒の無事に安堵しつつ、ティアナは後ろから聞こえた声に咄嗟に反応する。振り向くのではなく、その場から急いで走り出す。その瞬間、ティアナの後頭部に風が起きる。ゼクスの手が薙いだのだ。ティアナの髪の毛が数本風に乗って散る。それを感じながら、ティアナはスバルがいる場所目指して跳んだ。スバルもそれを理解していたのか、ティアナが届く位置までウイングロードを伸ばした。着地と同時にティアナはスバルの元まで走る。

ウイングロードはすぐに縮められて、ゼクスとの距離が開く。それをゼクスは見つめ、実にあっさりとその場から跳んだ。スバルとティアナがそれに驚く。飛行魔法でも使わないと届かないであろう距離。それを単純に助走も付けずに跳んだだけで届かせてみせたのだ。

「……で？」

「嘘、でしょ……」

「あの距離……私でも無理だよ」

見せ付けられた自分達との違い。その異常さに二人はなけなしの戦意が萎えていくのを感じる。それは、かつて邪眼と対峙した時、なのは達も感じた絶望という闇。人外の力と姿、そして邪悪さ。それに対し、無力感を抱かぬ者はいない。

それでも、それでも二人は諦めない。震える足に鞭打って、逃げ出そうとする気持ちを奮い立たせ、それぞれに思い出す。それは、己への誓い。

スバルは、あの火災の際に出会った赤いヒーローのようになりたいと。ティアナは、兄を助け、自分を変えてくれた者のようになりたいと。それぞれが誓ったものがある。そして、その者達は決して諦めないと知っているから。

「ティア……」

「何よ……」

「援護、よろしく」

スバルの言葉にティアナは驚くでもなく、ただ苦笑混じりに答えた。

「援護？　馬鹿言わないで。……アタシが倒すんだから」

ティアナの言葉にスバルも驚くでもなく、ただ嬉しそうに頷いた。

共に相手に勝てるとは思っていない。それでも、逃げない。逃げたら、自分達の目指す者達に、何よりあの日の自分自身に合わせる顔がないと知っているから。

「安心しな。殺しはしないよ。ただ、手足の一、二本は諦めてもらうけど」

そんな脅しにも、二人は反応を示さない。それに、ゼクスは不機

嫌さを増していく。

「行くよ、マッハキャリバー」

”了解、相棒”

その返事にスバルは心強さを覚える。自分にいるティアナ以外の味方の存在に。

「頼むわね、クロスミラージュ」

”お任せを”

その一言にティアナは笑みを見せる。スバルと共に自分と戦ってくれる存在がいる。それが嬉しくて。

「「アタック！」」

その声をキッカケに二人は動き出す。恐ろしい怪人相手に……

貨物室に着いたエリオとキャロが見た物は、壁に大きく開いた穴と、もうかなり後ろになってしまった場所で、怪物と戦うスバルとティアナの姿だった。

「エリオ君、どうしよう……」

「……キャロ、フリードを本当の姿に。それで、レリックを持ってフェイトさん達と合流して」

状況を考え、エリオはまずレリックの確保を優先した。非情かもしれないが、自分達が援護に行っても二人の助けになるとは思えなかったのだ。そして、何よりフリードが先程から怯えているのだ。他でもないあの怪物を見てから。

だからキャロをまず逃がす。だが、素直に逃げろと言えばキャロは反対する。だから、エリオはキャロへレリックの護送を頼むと告げる事にした。キャロはそれにエリオの思いを感じ取り、申し訳なく思いながらそれに感謝し、フリードを宥めてレリックの入ったケースを抱える。

「竜魂召喚！」

キャロの声に呼応し、穴から外に出ていたフリードはその姿を巨大な翼竜へと変えた。それこそがフリードの本当の姿。白銀の飛竜と呼ばれる所以がそこから感じられる。それを見て、キャロは心から安堵した。落ち着いている時でもまだ完全な自信はないのだが、今回はフリードがやや怯えている事もあり、成功するか不安だったのだ。

しかし、キャロの手をエリオがずっと握っていてくれた事もあり、キャロはその制御に成功した。無論、それだけではなく、キャロが六課入隊前から少しずつ制御を可能にするために努力していたのも大きい。

「……キャロ、フェイトさん達と合流したら……」

「戻ってくるから」

エリオの言葉を遮り、キャロははっきりそう言い切った。それにエリオは思わず言葉を失う。

「絶対、戻ってくるから！　だから……エリオ君も無理しないでっ！」

「……キャロ」

目に涙を浮かべ、そう告げるキャロ。それにエリオは嬉しく思い、力強く頷いた。それは、キャロを安心させるものであり、自分に対する戒めでもあった。キャロを逃がす。それは、キャロを本当に思っての事ではなかったと気付いたのだ。

キャロを本当に思うのなら、その判断をキャロに委ねるべきだった。そう、キャロは戦う力があまりない。それ故にどこかで戦闘から遠ざけようとしていたと気付いたのだ。

（……僕は、キャロと共に支え合うために局員になったはずじゃないか。なら、この戦いも一緒だ。僕が、キャロを守るだけじゃない。キャロも僕を守ってくれているんだ！）

「分かった。キャロが戻ってくるまで、絶対無理しないよ」

「約束だよ？　約束だからね！」

キャロの言葉にエリオが向けたのは、サムズアップ。それにキャロも頷いた。そして、フリードを飛び出させて列車から離れていく。それを見送り、エリオは後方を見つめる。もう、かなり離れてしまったが、それでもまだ何とか出来る距離だと思った。

だから、エリオは疲れた体に喝を入れて走り出す。目指すは列車の最後尾。そこからストラーダの加速力と自分の魔法を使った跳躍で、何とか二人が戦っている場所まで行かねばならない。

そんな時だ。エリオの前に巨大なトイが出現する。それは、従来よりも大きな球体型のトイ。しかし、エリオはその存在が厄介な相手だと即座に気付いた。

「こいつ……ＡＭＦの範囲が広い！」

まるで鞭のような長いアームを捌きながら、エリオは魔法が完全に発動しない事を確認した。先程までは出来ていたソニックムーブ。それが同じ距離を取っても使えなかったのだ。それは、今までの戦い方が使えないという事。

疲弊した体。魔力も体力も減ってきたところに現れた厄介な敵。エリオはそれを相手取り、己の未熟さと至らなさを痛感していた。せめて、周囲の安全を確認してからキャロを送り出すべきだったと。

「でも……まだ負けてない！」

反省をしながら、エリオはストラーダを握る手に力を込める。魔法に頼る事が出来ない事は、先程から変わらない。ならば、何も困る事はないのだ。自分の持てる全てを使い、挫ける事無く戦うのみ。何故なら、最後に自分を助けるのは力ではなく……

「自分を助けるのは……諦めない気持ちだっ！！」

自分が憧れ、目指す男が教えてくれた言葉。それを思い出し、エリオは吼えた。それと同時に思いっきり床を蹴って跳び上がる。それと同時にストラーダが火を噴いた。その勢いを乗せ、エリオはそのまま車両を飛び出し、上空へ。

そこでエリオは真下に見えるトイを見据えて、魔力を使う。それは、自分を救い出してくれた女性が使っているものと同じ電撃。そう、ＡＭＦの効果範囲外なら魔法は使える。しかも、効果そのもの

は無効化出来ない事はエリオ自身、ここまでの戦いで身を以って知っている。

「行くぞ、ストラーダ！」

”どうぞ”

「はぁぁぁぁっ！」

魔力を電撃に変えて、ストラーダに纏わせる。今、エリオが思いつく限りの最大の攻撃。それが魔力を武器に込めて、高速で突撃するもの。例え電撃を無力化されても、エリオにとってはどうでもいい事だった。

まず、目の前の障害を突破する。話はそれからなのだ。故に迷いはない。魔力の電撃は消せないはず。自分の全てを込めた一撃で、勝負するのだ。

排出されるカートリッジ。その数二つ。その影響を受け、エリオは一筋の閃光となる。それを迎え撃とうとするトイだったが、そのアームがエリオを捉える瞬間、その体が更に加速する。長いアームの射程が仇となったのだ。

エリオがＡＭＦの範囲内に入る前にアームが届いてしまったがための、些細な、だが致命的な失態。エリオはソニックムーブを使い、加速すると同時にその手にしたストラーダをトイに突き刺した。そして、車両の床に着けた両足に力を入れ、そのままその刃を持ち上げる。

「あぁぁぁぁぁ……っ！！」

振り抜いた瞬間、トイは爆発した。だが、それを見届ける事無く、

エリオは振り抜いたまま疲れから意識を失った。そして、その体は爆風に流されるように開いていた穴へ行き、そこから静かに谷底へと落下していく。だが、その体が地面と激突する事はなかった。

何故ならば、彼を支える存在がそこへ戻って来ていたからだ。

「だめぇぇぇぇぇっ！」

その声にエリオは失っていた意識を微かに取り戻す。目を開けた先には、見慣れた桃色の髪の少女がいた。

「キャ……ロ？」

「エリオ君！」

フリードの背に乗ったキャロが、エリオの体を抱きしめる。その温もりに自分が助かったのだとエリオは実感した。だが、それと同時に思い出す事があった。

「キャロ……どうしてここに？　それに……レリックは……」

そのエリオの言葉に、キャロは少しだが驚きを見せる。しかし、微かに苦笑して答えた。レリックはもう預けてきたと。そしてスバル達には、心強い援軍が向かったと告げる。キャロは、あの後フェイト達に合流するためにフリードを急がせていたのだが、その途中で見たのだ。

そう、巨大なクワガタに乗った異形の姿を。それにキャロが驚きを見せると、その相手はキャロへサムズアップ。それだけでキャロはそれがクウガだと理解出来た。そして、そのすぐ後にヘリと合流し、ヴァイスにケースを預けて全速力で戻ってきたのだ。

「……五代さんが、仮面ライダーが行ってくれたから」

「……そっか。なら、安心……だ」

緊張の糸が切れたように、エリオは再び目を閉じた。それを見て、キャロはその体をもう一度抱きしめた。自分との約束を守ろうとした槍騎士に感謝を込めて。

（……スバルさん達の手助けに行きたいけど、エリオ君の事もあるし……）

一度フェイト達の指示を仰ごう。そう決断し、キャロは静かにフリードをフェイト達がいるだろう場所へ向かわせる。その際、少しだけスバル達がいる方向へ視線を向け、心から願う。無事でありますようにと。

そして、自分もすぐに向かうと心の中で告げ、キャロはフリードと共にその場を離れた。丁度その頃、なのはとフェイトも完全に飛行型を駆逐し、列車へと向かって動き出していた……

ゼクスの爪が唸りを上げる。それをスバルは何とか魔法で防ぎ、その硬直を狙ってティアナの射撃が襲うも、それをゼクスは避ける事もせず、ただスバルを押し込んでいく。

ティアナの魔法は、ゼクスにはそよ風にも近い程度のダメージしかない。故に、警戒するのは自分を傷付ける事が出来るだろうスバルのみ。

「ぐぅぅぅぅ！」

「へぇ、中々粘るね。さすがは機械仕込み」

「っ！？」

「どうして、アンタがスバルの事を……」

ゼクスが呟いた一言にスバルが動揺し、ティアナは驚愕。その反応に、ゼクスは嘲笑うような声で告げた。自分達の創造主である創世王は、スバルだけでなく、姉のギンガの事さえ知っていると。

「出来損ないの改造人間。いや、戦闘機人だったっけ？　どちらにしろ同じ出来損ないミスクリエーションには変わり無いか」

「だったらアンタは……何だって言うのよ……っ！」

「あたし”達”はそれを超えた改造機人。ま、でも創世王様が言うには、怪人って表現が正しいんだってさ」

「……怪人」

ゼクスの言葉を聞いて、スバルは噛み締めるように呟いた。何故だか、その響きに言い様のない恐怖を抱いたのだ。改造人間との単語もスバルには気になる。それは、戦闘機人を言い得ているような言葉だったのだ。

しかし、そんなスバルと違い、ティアナはゼクスの言葉に得体の知れないものを感じていた。それは、戦闘機人を出来損ないと言い切る事。普通に考えてもスバルやギンガのような力を持つ事は、下手をしたら周囲に恐ろしい結果をもたらす。それにも関らず、それを超えた力に対しゼクスは少しも何かを感じる事がないのだ。

それは、自分の体に対して恐怖も嫌悪感も無く、その力を振るう事に何の躊躇いもないと言う事を意味している。それが良い事に使われるのならいい。しかし、どう見てもゼクスはそんな事に使うような相手ではない。

「さて、じゃぁ……っ！」

「きゃあぁぁぁぁっ！」

ゼクスが少し力を込めた瞬間、スバルの口から悲鳴が上がる。先程までは拮抗していたはずの力関係が、あっさりと覆った。それを見て、ティアナは悟る。遊ばれていたのだと。自分達が必死に足掻くのを見て、こいつは楽しんでいたのだ。

そう考えた途端、ティアナは怒りを抱いた。必死に足掻くものを嘲笑うような態度に。懸命に生きようとする者を馬鹿にするその言動に。残った魔力を全て使ってでも、この相手には少しでもいいから傷を負わせたかった。

「ファントムブレイザァァァッ！！」

自身が誇る最大魔法。ティアナはそれをゼクス目掛けて放つ。オレンジの魔力光がゼクスへ殺到し、それに少しだがゼクスの意識が逸れた。それを感じ取り、スバルも動く。ティアナが狙ったのは、自分の攻撃でのダメージだけではない。一撃の破壊力に秀でるスバルを、少しでもいいから動けるようにする事も視野に入れていたのだ。

（頼むわよ、スバル！）

そんなティアナの思いに応えるように、スバルは素早くその右手

をゼクスの腹部に押し当てる。同時に排出されるカートリッジ。その数、三つ。そして、集束する青い魔力光。それこそ、スバルの取っておきにして最大の攻撃。

かつて見た魔法。それを自分なりに身に着けたもの。憧れた女性が放った砲撃。それを模した彼女の自慢の一撃。

「一撃！　必倒っ！」

「何を……」

ゼクスの眼前に迫るティアナの魔法。しかし、自分の間近くで発動しようとする魔法にも意識を向けなければならない。そんなゼクスへ、スバルはその声を掻き消す声で叫ぶ。

「ディバイィィィン……バスタァァァァッ！！」

零距離で放たれる青い砲撃にも似た攻撃。そして、それとタイミングを合わせたかのように飛来し、威力を加えるオレンジの魔力光。ゼクスを飲み込んだそれを見つめ、ティアナもスバルも手応えを感じた。

それが消えた時、二人の目の前には、もう誰もいなかったのだから。それに安堵の息を吐く二人。もう戦うだけの魔力も体力も残っていなかったのだ。文字通り全てを出し切った。それ故の安堵。

「……もう、何も出来ないよ～」

「同感。レリックはエリオ達に任せましょ……」

「寄り添うように座り込む二人。その表情はどこか明るい。やり遂げたという達成感が体の中にあった。そして、そのままの雰囲気で

帰った後の事を話し出そうとした所で、現実が二人に襲い掛かる。

――――いやぁ、さっきのは中々驚いたよ。

聞こえるはずのない声。それが何故かすぐ近くから聞こえ、二人は表情を強張らせる。周囲にはゼクスの姿はない。しかし、声はすぐ近くで聞こえる。その矛盾。すると、その声の出所にティアナが気付いて愕然となった。

ゼクスがいた場所。それは、ウイングロードの下。そう、ティアナ達が座っている真下に爪を使い張り付いていたのだ。それに気付いても、ティアナとスバルは動く事が出来なかった。

「ＩＳ、ディープダイバー。それを使ってあの攻撃を隠れ蓑にね、お前達の下に回りこんだって訳」

恐怖と脱力感から何も言葉が出ない二人を見て、ゼクスは嬉しそうにそう言った。そして、器用に爪でウイングロードを移動しながら、再び二人の前へと現れた。その姿は、確かに多少ダメージは負っているものの、痛手にはなっているようには見えなかった。

それも二人にとっては、恐怖を増す材料にしかならない。自分達の全力を持ってしても、少しダメージを与えるだけが精一杯と言われたのだから。

「あれ？　もう言葉もないのか。な～んだ。もう少し愉しめるかと思ったのに……」

（どうしよう……もう、立てないよ……）

（何か手は……ないわよね。嫌……死にたくない……）

ケラケラと嗤うゼクス。それを聞きながら、二人の目から希望が失われていく。なまじ気を抜いてしまった分、その絶望と言う名の毒は深く早く浸透していく。それを感じ取り、ゼクスは心から嗤った。それが二人の恐怖を加速させていき、それが益々ゼクスの喜びへと変わっていく。

（父さん……母さん……ギン姉……）

（兄さん……）

脳裏に浮かぶは、家族の顔。そして、もう一つ。互いに最後に思い出すは、自分達を変えるキッカケをくれた相手。それが浮かび、二人は願った。なのは達から聞いた闇の書との最終決戦。その際、邪眼相手に五代と翔一が力強く名乗った、そのもう一つの名を心で叫んで。

（（助けて、仮面ライダーっ！））

「さ、じゃあこれで……」

その声と共にゼクスの爪が二人へ目掛け振り下ろされそうになった瞬間、何かがその爪を砕いた。

「な、何?!」

うろたえるゼクス。その周囲には何も見えない。だが、そこへ更に何かが飛んで来る。それは、圧縮された空気弾。またの名をブラストペガサス。そして、それを放った者と何かが飛来する音と共に、二人の目の前に誰かが降り立った。

それは、スバルにとっては二度目の。ティアナにとっては初めての出会い。赤い体の仮面の戦士。彼の名は……

「お、お前は確か……」

「クウガ。仮面ライダークウガ！」

その名乗りに、スバルとティアナは先程まで体を包んでいた闇が消えるのを感じた。希望がそこにいた。その背を見つめ、二人は不思議ともう恐怖を感じなくなっていた。どんな相手がいようとクウガがいれば、仮面ライダーがいれば大丈夫だと、心から思えた。

「大丈夫？　スバルちゃん、ティアナちゃん」

「「はいっ！」」

返事にも自然と力が戻る。それにクウガは頷いて、構えた。それにゼクスも構える。ここに、舞台は整った。これを以って、邪眼とライダー達の戦いの第二幕が上がる……

フェイトの車を隊舎へ戻し、光太郎は格納庫へ向かう。アクロバッターを使い、現場へ向かおうと考えたのだ。しかし、その時光太郎を呼び止める者がいた。翔一だ。

「光太郎さん！」

「翔一君？　どうしたんだ」

何か妙な表情をしている翔一に、光太郎は変な感じを受けた。まるで、何かに戸惑っているように見えたからだ。

「あの……黒い太陽に伝えてくれって」

「何だってっ!?」

「影の月が踏み躙られるって。それと、自分に出来るだけの事はしたから、後は頼むとも」

翔一の言葉に光太郎は表情を険しくした。黒い太陽とは、自分にゴルゴムが付けた名前。それを知る者はもう自分しかいないはずだったからだ。それに影の月とは、おそらくかつての宿敵の事を意味していると考え、光太郎は翔一へ尋ねた。それは誰が言ってきたのかと。

それに翔一は、よくは知らないが普通の人間ではないと断言した。以前、自分がアンノウンと戦っていた時に現れた、ボスのようなものだから。そう、締め括って。

「……分かった。翔一君、ありがとう」

「いえ。光太郎さん、気をつけてください。後、ティアナちゃん達を頼みます」

翔一の言葉に頷き、光太郎は走り出す。格納庫にいたはずのアクロバッターがそこへ向かって来るのを見て、翔一は驚きを抱くと同時に食堂へ戻るために背を向け、走り出す。今の自分が出来る事は、疲れて帰ってくる五代達に、心安らぐような食事を食べさせるだけと思ったのだ。

共に反対の方向へ走る翔一と光太郎。アクロバッターに飛び乗り、

光太郎はアクセルを解き放つ。その音を聞き、翔一は一度だけ後ろを見た。光太郎の体が遠くへ走り去るのを見て、翔一は頷いた。大丈夫だと、心から思って……

（シャドームーンが、甦るとでも言うのか。信彦はもう、眠ったはずだ……）

思い出すのは幼い子供二人を助け、眠りについた銀の体の戦士。自分の親友であり、幼馴染。悪に身を堕としながらも、最後にはきっと、きっと優しい心を取り戻したに違いない、もう一人の仮面ライダー。

だが、その命は既に尽き果て、光太郎しか知らぬ場所で眠りについたのだ。そう思い直し、アクロバッターは走る。青い疾風となって、ミッドの街を駆け抜ける。

（それにしても……城戸真司。彼も、もしかしたら……）

脳裏に思い出すのは、先程出会った青年の事。邪眼と戦い、勝利した男。ＢＬＡＣＫだった自分が手も足も出なかった相手。それを倒したというその男も、もしかしたら未来の仮面ライダーかもしれないと、光太郎は考えていた。

（っ？！　まさか、自分に出来るだけの事とはこの状況か！？）

自分を含め、時代を超えた仮面ライダーが同じ場所に呼び寄せられている現状を考え、光太郎は翔一からの伝言をそう解釈した。しかも、相手はあの邪眼。甦るために時空を歪め、キングストーンにこだわり、自分とクウガを付け狙う相手。

それが仮面ライダーがいない世界にいた。そして、目覚めようとしていた事を察知した者が、仮面ライダーを呼び集めた。そこまで考え、光太郎は翔一から詳しい話を聞こうと決意する。それは、その伝言を伝えて来た相手との戦い。そこに、この事を説明もしくは解決する手掛かりがあると思ったのだ。

そう思い、光太郎はふと速度を落とした。何か嫌な予感がするのだ。既にそこはミッドの市街地を抜け、人気のない郊外へとなっていた。列車が走っている場所までもう少しとも言える距離。そこでアクロバッターを止め、周囲を窺うように見渡す光太郎。そして、その視線がある一点で止まる。

「……隠れても無駄だ。出て来いっ！」

「あら、意外と鋭いのねぇ。小物かと思ったのに……」

その声に反応し、光太郎の視線の先が歪む。そこから現れた相手に光太郎は違和感を感じた。そこにいたのは、クアットロそっくりの女性。ただ、髪の色が違う。

「お前は何者だ！」

「ふふっ……私の名はフィーア。改造機人よ」

「何っ？！」

フィーアの口から告げられた改造機人との言葉に、光太郎は直感で怪人かもしれないと考えた。そして、同時に思い出す。邪眼はジェイルの研究施設を乗っ取った事を。故に、目の前の相手がジェイルと共にいた者と同じ外見をしていても、納得が出来る。

そう考え、光太郎は同時に身構える。先手を取られる前に動かなければと、長きに渡る戦いの経験からそう判断し、フィーアへ攻撃を開始する。

「トゥア！」

「ふふっ、結構速いのねぇ～」

光太郎の蹴りをかわし、フィーアはそう上からの物言いで呟く。それを聞いても、光太郎は怒りも見せず冷静にもう一度蹴りを放つ。それをフィーアが受け止め、にやりと笑う。その見かけによらない怪力から、光太郎は確信した。

目の前の相手が怪人であると。いくら戦闘機人といえども、女性が今の自分を抑えつける事が出来るはずはないのだから。そう判断する光太郎を、フィーアは力任せに放り投げた。

「……っ！」

「……やるじゃないの」

地面へ激突するかに見えたが、光太郎は前転しながらその勢いを殺して事無きを得た。そんな光太郎を見て、フィーアもどこか違和感を感じたようだった。そのためか、フィーアの体が変化する。それは、カメレオン。どこまでも醜悪にされたその異形。おそらくクアットロが見たのなら、激怒する程の外見だ。だがそれと見て、光太郎も決意する。その正体を明かす事を。

「変身っ！」

今のままの自分では勝てないと悟り、告げる。それは、自身を変

える呪文。彼、いや彼らにだけ許された魔法。秘められた人外の力を存分に振るう事が出来る姿。それへの変化を起こす力ある言葉。

それを受け、光太郎の体が変わる。瞳の中に激しく光が瞬き、腹部の輝石が輝き出す。それを契機に姿が変わる。細胞に稲妻が走り、腕は巨人の剣に。脚は逞しい大樹になる。それは、黒い勇者。地球を二度守り抜いたヒーローの姿。

「俺は、太陽の子っ！　仮面ライダー……ＢＬＡＣＫっ！　ＲＸっ！！」

「ＲＸ、ですって？　でも、データにはそんなライダーはいないはずだけどぉ……」

フィーアは光太郎がその姿になった途端、そう呟きこう告げた。

――まぁ、いいわ。この姿になった私に勝てるはずないもの。

その言葉にＲＸは拳を握りしめる。命を弄ぶだけでは飽き足らず、更にそれを怪人へと改造した邪眼へ。そして、そんな体になった事に何の躊躇いも迷いも抱かぬ目の前の相手へ。怒りと哀しみを込めて、ＲＸは……

「俺は、貴様達に決して負けないっ！」

吼えた。それは心からの否定。悪に、闇に屈しないと言う確固たる決意。人ならざる痛みも苦しみも抱かぬ者に、負ける訳にはいかない。そう考えるからこそ、ＲＸは怪人ではなく仮面ライダーなのだ。

だが、フィーアは違う。自分を美化し、周囲を見下すだろうとＲＸは悟っていた。ならば、彼の答えは決まっていた。他者を見下す

者を、決して認めはしない。そんな独りよがりの生き方をする者を、彼は許しはしないのだから。

「命を弄び、蹂躙する事に躊躇いもない邪眼。それに組するお前を……俺は、絶対に許さん！」

告げる。それは、生命の守護者の宣言。歪められてしまった存在だからこその、強く尊い誓い。それを聞いて、フィーアは不愉快そうに吐き捨てた。

「許さない？　馬鹿言わないの。貴方の方こそ覚悟するのねぇ。何者であろうと、創世王様に逆らう者には、死あるのみよ」

それと共にフィーアから殺気が流れる。それを感じ取り、ＲＸもまた身構える。人知れず、ここでも戦いの幕が上がろうとしていた……

クウガやＲＸがそれぞれ怪人と対峙し始めた頃、ギンガとナンバーズは談笑を続けていた。そんな中、真司は一人ある事を考えていた。

（光太郎さんだっけ？　あの人、どうして邪眼と会った事があるんだ？）

突然現れた邪眼。だが、それと以前会った事があると告げた光太郎に、真司は違和感のような疑問を感じていた。邪眼がどこかで現れたとすれば、どこで現れたのか。そして、どうしてジェイルのラボに出現したのか。それを考えたのだ。

そんな時、真司達のいる部屋へクイントが現れた。何故かその表情にはやや険しさが見える。それにゼストが気付き、視線を向けた。

「どうした？」

「謎の機械を……トイを引き連れて湾岸地区に現れた者がいるそうです」

その言葉にその場の雰囲気が変わる。ゼストはそれに頷いて、部屋を出て行く。閉まるドアを見つめ、真司は立ち上がった。それに誰も何も言わない。分かっているのだ。真司が何をしようとしているのか。

だから、静かにジェイルを除く全員がそれに呼応するようについて行く。それをジェイルは苦笑で見送り、一言気をつけてと声を掛けるのみだ。ギンガも同じように苦笑しつつ、真司達を止めようとはしない。

「ゼストさん」

「……どうした、城戸」

「俺も、いや、俺達も手伝います」

向かった先は、ゼスト達が話し合っている廊下。そこには、クイントだけではなくメガーヌもいる。三人の視線を受け、真司は告げた。自分の力は誰かを守るためにある。だから、手伝わせて欲しい。そう、三人の目を見て言った。

それに三人は一度だけ互いを見つめ合い、クイントとメガーヌがゼストへ向かって頷いた。それにゼストが小さく苦笑し、頷いてみせる。それを見ていた真司達は、揃って笑みを見せる。

「頼めるか？」

「はい！」

ゼストの声に力強く頷いて、真司は走り出す。それにゼスト達が驚くが、真司は走りながらも後ろに向かって大声で告げた。

――俺、先に行ってます！

その言葉にゼスト達は苦笑。本来なら止めるところだが、真司の性格を知ってしまった以上、もう三人にそれを止めるつもりはなかった。そして、ゼストはギンガへ視線を向けて告げた。

「本来ならこちらが動かないとならんのだが、生憎まだ体勢を整えられん。すまないが、保護対象の次元漂流者が危険にならないように護衛を頼めるか、ナカジマ陸曹」

「はいっ！」

「貴方達も行っていいわよ。真司君、心配でしょ？」

メガーヌの言葉にトーレとチンクが頭を下げ、後を追って走り出す。それをキッカケに次々と感謝の言葉を述べながら、ナンバーズが走り去る。しかし、ウーノとドゥーエだけはその場に残る。

そして、ゼスト達に向かってこう言ったのだ。自分達は戦闘向きではないＩＳしか持たない。故に、管制などの支援をしたいのだと。それにクイントが頷いて、ゼストへ視線を向けた。ゼストもそれだけでクイントの言いたい事を理解し、小さく頷く。

「ついてきて」

クイントと二人が歩き出すのを見送り、メガーヌは小さく呟く。

――まるで、最初からこうだったような感じがしますね。

その言葉にゼストは言葉を返さない。しかし、その表情はどこか微笑みさえ浮かべていた。ジェイル達がこのゼスト隊に来て、まだ二週間にも満たない。それでも、真司を始めとする人懐っこい者達が先頭に立ち、隊の者達との交流をした結果、ゼスト隊に真司達を変な目で見る者はいなくなっていた。

食堂で真司やドゥーエ達が懸命に働いている姿を見たのもあるだろうし、隊舎内の掃除などをしているのも関係しているかもしれない。だが、一番はやはりその性格。皆、根本は優しく明るいのだ。

ノーヴェやクアットロのようにやや癖がある者もいるが、概ねそうなのだ。それに、ナンバーズは皆可愛い少女や美しい女性。故に、かつて真司が予想したように男性には、ナンバーズは評判がいい。元々ゼスト隊の構成員は男が多い。その男性局員には、それぞれに気にいる者さえ出始めている程なのだから。

「とにかく、俺達も行くぞ」

「はい」

今のナンバーズの扱いは、民間協力者。しかし、それはあくまでゼスト隊だけの認識。管理局自体では、未だにジェイルは指名手配中の相手。ナンバーズはいない事になっている。真司の事は、扱いを次元漂流者とするか否かを判断しかねているのだ。

それは、真司を見つけた場所と時期。嘘を吐く事はゼストは出来

ない。故に、虚偽報告をしないためには、ジェイルとの出会いから記さないといけないのだから。

そんな風に考えながら、ゼストはメガーヌと共に動き出す。目指すは、報告を受けた場所。ミッドの首都であるクラナガンではなく、郊外の湾岸地区。そこにある目ぼしい建物を考えるも、心当たりはない。

何故人気の無い場所に出現したのか。それだけがゼストの中で引っかかる。何か妙な感じを受けつつも、ゼストは歩く。この後、彼らは知る。人知れず恐ろしいモノと戦い続けていた者を。そして、自分達が対峙しなければならない相手を……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

ついに怪人登場。十二人の怪人。アイディアはデルザー軍団からです。

モチーフの動物や昆虫は予想出来るでしょうが、出来れば皆さんの心の中で留めておいてください。答え合わせは、今後ゆっくりと……

次回で初戦闘は終了です。……文章量が恐ろしい事になるかも……

ゼクスの爪が唸りを上げる。それをクウガは冷静に見つめ、その腕をかわすと同時に掴んだ。見れば、先程破壊したはずの爪が再生を始めている。それにクウガは気付き、自分が戦った未確認との相違点を見ていた。

一方、スバルとティアナは座った位置でクウガとゼクスの戦いを見ているしか出来なかった。体力は戻りつつあるが、魔力はそう簡単には戻らない。だが、一番の理由は見たかったのだ。クウガが、ライダーが不気味な怪人を倒してくれる場面を。

クウガに抑えられた腕とは逆方向の腕。そこの爪が完全に再生を完了する。それを見た瞬間、クウガはゼクスの腹に蹴りを放つ。

「おりゃ！」

「ぐぅ！」

たたらを踏むように後ずさるゼクス。だが、クウガはそれを見ても追撃をかけようとはしない。何となくだが気付いているのだ。迂闊に攻め込めば痛手を負うのは自分だと。それに、戦っている場所も問題だった。

（ここは、スバルちゃんの魔法の上。下手をしたら下に落ちる……）

ウイングロードでの戦い。それはクウガが格闘戦をやるには、やや不向きな場所だった。直線的な動きしか出来ないし、何よりこれではクウガの決め技が使い辛い。せめて下との距離が十五メートルならば、赤のクウガでも平気だ。しかし、一番の問題は下手に落ち

れば、ゼクスがスバル達を襲うだろうと考えられるからだ。
それに、どう見ても現在の位置はそれを超えている。青のクウガでも下からここまで戻れるか分からない。そこまで考えて、クウガは戦場を変える事を考え出す。そのためにゴウラムを使いたいのだが、肝心の物が無いためそれをどうするか迷っていた。

（ビートチェイサー……は六課だもんな。ゴウラム単体じゃ少し厳しいし……）

ビートチェイサーもゴウラムのように呼べば着てくれると良かったのに。そんな事を思うクウガ。その瞬間、脳裏に思い出すのはＲＸのバイク。

「そうかっ！　もしかしたら……」

自分とＲＸの共通点を思い出し、クウガは意を決して叫んだ。

「アクロバッターっ！」

その声は、確かにアクロバッターに届いた。いや、正確にはクウガのアマダムからの信号を感じ取ったのだ。それは、クウガのアークルに使われた石がＲＸの物と同質の物だという何よりの証。そう、太陽の石の原石という証拠でもある。
アクロバッターはその声に応じるように動き出す。クウガを知る以上、アクロバッターにとってもクウガは共に戦う仲間なのだから。それを視界に入れながらも、ＲＸは止める事はしない。クウガはアクロバッターを呼んだ後、ＲＸに通信を入れてきたのだ。

――先輩、アクロバッター貸してください！

それにＲＸは即座に了承の意を返した。自分が怪人と戦っているように、クウガもまた怪人と戦っているのだろうと予想したのだから。

（頼むぞ、アクロバッター！　クウガを助けてやってくれ！）

ゼクスの鋭い爪を何とかかわすクウガ。しかし、クウガは次第に追い詰められていた。理由は一つ。ゼクスがＩＳを駆使するようになったためである。このままではクウガに勝てないと思ったゼクスは、ＩＳを使ってクウガの下から攻撃をするようにしたのだ。

ウイングロードを壁にし、クウガの足元を執拗に狙う。クウガから攻撃を受けそうになるとその手を引っ込め、その攻撃をウイングロードへと向けさせる。

「あいつ……」

「これじゃ……クウガが戦えない」

その光景を見つめ、ティアナとスバルが悔しがる。その時だ。二人の耳にバイクのエンジン音が聞こえてきたのは。いち早くスバルが視線をそちらへ向けると、見た事のある青いバイクが無人でこちらへ走ってくるのが見えた。

それに驚きを隠せないスバルだったが、少し前クウガがその名を呼んでいた事を思い出し、咄嗟にウイングロードを伸ばした。それに呼応するようにアクロバッターが崖から勢い良く飛び出した。そして、見事にウイングロードへ着地し、クウガ目掛けて向かって行く。

「……どうなってんの？」

「分かんない。でも、きっとクウガが呼んだんだよ！」

その光景を見て、ティアナが信じられないと言うように声を漏らす。それにスバルも同意するも、視線の先で戦うクウガを見てどこか嬉しそうに告げる。

「な、何っ？！　バイク！？」

アクロバッターの乱入に、ゼクスの意識が一瞬逸れた。それを見逃さず、クウガはその腕を掴み引きずり出した。

「うおぉぉりゃっ！」

「しまったっ？！」

そして、即座にその腕を放す。ウイングロードへ着地するゼクス。それを待っていたかのように、そこをアクロバッターが掠めるように通過した。その衝撃でゼクスは体勢を崩す。そして、クウガがアクロバッターへ向かって走る。

それに応じるようにアクロバッターが向きを変えて動きを止めた。そしてクウガがアクロバッターに跨った瞬間、ゴウラムがそのボディに融合する。それを見て驚愕するスバルとティアナ。それに構わず、クウガはアクセルを解き放ち、ゼクス向かって走り出す。

「スバルちゃん！　この道、あの崖まで繋げて！」

「分かりました！」

その頼もしい返事を聞きながら、クウガはアクロゴウラムをゼクスへぶつける。そのカウル部分にゼクスを乗せて、クウガは一路陸地を目指す。伸びていくウイングロードを疾走するアクロゴウラム。

それから逃れようとゼクスはＩＳを使おうとして、何故かアクロゴウラムを透過出来ない事に気付いた。そう、ゴウラムもアクロバッターも生きている。ゼクスのＩＳでは生物を透過する事は出来ないのだ。だが、それをゼクスが知るはずもなく、ただ動揺するのみ。更にゼクスが下手な動きをしないように、クウガは速度を上げた。

「っ！」

強烈な加速度による重圧がゼクスを襲う。そして、そのままクウガはゼクスを自分が戦い易い場所へと運んで行くのだった……

クウガがゼクスを運搬し始めようとしていた頃、ＲＸはフィーアのＩＳに困惑していた。幻影を作り出し、視覚を欺くシルバーカーテン。しかも、その中の何体かは分身体なのだ。それは、かつて彼が戦ったカメレオン怪人と同じ能力。ゴルゴム怪人と同質の力をフィーアは有していた。更に本体は保護色に変わる事でＲＸの視界から消えてみせる。

勿論、ＲＸの目はそれを見破る事が出来る。しかし、それは落ち着いてその視覚に意識を集中しなければならない。幻影や分身達に紛れるように攻撃をしてくるフィーア相手に、動きを止めてその機能を使う事は出来なかった。

「ぐあっ！」

「ふふっ……どうしたの？　手も足も出ないのかしらぁ」

幻影と分身達が同じ動きをしながら、ＲＸを嘲笑う。それにＲＸは湧き上がる怒りを抑え、対応策を考える。幻影はただの幻だが、分身体は攻撃をしてくる。

しかも、どうやらフィーアがそれに紛れるように動いているらしく、その攻撃によるダメージは馬鹿に出来るものではない。実際、ＲＸの体は多少なりとも傷を負っているのだから。何とか現状を打開しなければ。そんな風に思い、ＲＸは考える。

（くそっ……何か、何か手はないか！　……そうだっ！）

ＲＸはそこで相手の視覚を一瞬でも奪おうと考えた。そのため、ＲＸは両腕をベルトに構えて、告げた。

「キングストーンフラッシュ！」

その強烈な光が、辺りを包む。それが幻影を消し、分身達を怯ませる。そして、フィーアの姿を出現させた。そう、強烈な光を浴びる事でフィーアはその同化能力を一時的に失ったのだ。それは、クウガと戦ったメ・ガルメ・レと同じ現象。

偶然にも、ＲＸの使った手段はフィーアにこれ以上ない効果をもたらしていた。目をやられ、フィーアが悶えるように地面に倒れ込む。それを見てＲＸは頷いて地面を蹴った。

「トゥア！」

「な、何？　何が起きてるの？！」

うっすらと視覚が戻った時、フィーアはＲＸを見失っていた。見渡す限り、周囲には誰もいない。分身達も自分と同じく視界を失っ

ていて、とてもではないが当てに出来そうにはなかった。しかし、ふと地面に出来た影を見て、フィーアは視線を上へ動かした。だが、もうその動きは手遅れだった。

「ＲＸ！　パンチっ！」

高々と空に跳び上がったＲＸは、その勢いのままフィーアへその拳を突き出した。キングストーンと太陽エネルギーを複合したハイブリットエネルギー。それが込められた拳。それを喰らい、吹き飛ばされるフィーア。そして、ＲＸは着地した瞬間、しゃがむように身を縮め、右手で地面を叩いた。

それを合図に再び空へ跳び上がる。それは、彼がＢＬＡＣＫだった頃の必勝の連携技。丁度その瞬間、クウガがアクロゴウラムに導かれるようにそこを通りかかった。視界の端に見えるＲＸと恐ろしい怪人の姿。クウガはそれを見て、アクロバッターが予想よりも早く現れた事の理由を悟った。そして、同時に怪人が一体ではなかったと知った。

「ＲＸっ！　キックっ！！」

後方宙返りから両足を捻らせて放たれるＲＸの蹴り。それを見て、クウガは驚いた。それは、自分がいつか放ったものを彷彿とさせたのだ。それは、ゴ・ガドル・バとの戦い。黒の金のクウガになった際、決め技として放った蹴り。

それを思い出し、クウガはＲＸにあの時の自分の姿を重ねた。そんなクウガの目の前で、ＲＸの蹴りがフィーアに炸裂する。堪らずかなりの距離を吹き飛ばされるフィーア。そして、何とか立ち上がるが、既にその体からは火花が出ている。ＲＸの攻撃で内部から崩壊が始まったのだ。

「う、嘘……こんな事が、こんな事が！」

うわ言のようにそう呟きながら首を横に振るフィーア。それを見ても、ＲＸは何も言わない。ただ、黙ってその姿を見つめ続けていた。

「創世王様ぁぁぁぁぁ！！」

その絶叫と共に後ろに倒れるフィーア。直後起きる爆発。ＲＸはそれを見て思った。またこうして怪人との戦いが始まるのだ、と。自分にとって、見慣れた感さえある光景。そして、邪眼が名乗っている創世王との名。

否応なく、ＲＸにゴルゴムとクライシスの事を思い出させる事ばかり。決して戦いが終わる事はない。人が自然を破壊し続ける限り、いずれ、第二第三の怪魔界が生まれる。そんなクライシス皇帝の言葉を思い出して、ＲＸは拳を強く握り締める。

（違う！　そんな事にはならない！　決してこの世界の人達は、自然を破壊し、自らの星を死に追いやったりはしないっ！）

脳裏に浮かぶのは、こちらで出会った者達の顔。優しく平和を願い、自然を愛する者達。更に、時代を超えて想いを同じくする二人の男を思い出し、ＲＸはもう一度心の中で告げる。

――もしそうだとしても、俺は決して絶望しない。この胸に、この心に彼らの笑顔がある限り……

そして、ＲＸはクウガが去った方向へ視線を向けて走り出す。万が一に備えて、手助けに入ろうと思って……

RXとフィーアが戦っていた場所からそう離れていない場所。そこへクウガはアクロゴウラムを停止させた。そのため、ゼクスは勢いをつけたまま地面へ投げ出される。そして、アクロゴウラムへクウガは視線をやった。

「大丈夫？　まだいけそう？」

「アア。ダイジョウブダ」

クウガの問いかけに平然と返すアクロバッター。それを聞いて、クウガは頷き、視線をゼクスへ戻す。どうも先程の衝撃が相当大きかったらしく、その体勢が安定していない。それを好機と思い、クウガはもう一度アクロゴウラムを発進させる。

その車体が加速していき、先端の角の部分に封印エネルギーが集束していく。そして、そのままクウガはゼクスへ突撃した。

「がはっ！」

最大時速八百キロ。その速度へ瞬時に到達し、加えたアクロゴウラムの突撃。アクロバッターはRXのハイブリットエネルギーを受け、アクロバットボーンと呼ばれる必殺技を放つ事が出来る。しかし、クウガにはハイブリットエネルギーはない。故に、その繰り出される一撃は、かつてバトルホッパーと呼ばれていた頃の技に近いものだろう。そう、ダイナミックスマッシュ改め、その名はダイナミックアタック。

それを受けて、ゼクスは軽く五十メートルは跳ばされた。その威力に起き上がる事も出来ず、ゼクスは叫んだ。

「嫌だ！　死にたくないよぉぉぉぉ！」

その叫びに、クウガはゼクスを見て思わず顔を逸らした。姿が戻っていたのだ。セインそっくりの少女の姿に。それを見て、クウガは心が痛くなった。いくら未確認と同じとはいえ、少女を自分が殺す事になる。そう思ってしまったから。

ゼクスの全身に浮かぶ封印を意味する巨大な文字。そして、そのエネルギーがゼクスの全身に駆け巡り、行き場を失った膨大なエネルギーが起こす事は……

「覚えてろ……クウガァァァ！！」

爆発。暴走したエネルギーに耐え切れず、ゼクスの体は爆散した。その断末魔の内容に、クウガは違和感を感じた。

「覚えてろって……どういう事だ……」

それが、地獄に落ちろなどの恨み言ならまだ納得出来た。だが、それはどこか死に際には相応しくない気がしていたのだ。まるで、仕返しをするとでも言っているように、クウガには聞こえた。その意味を考えていると、ＲＸが現れた。そして、クウガが乗っているアクロゴウラムを見て軽く戸惑いを見せる。

「やりました、先輩。ゴウラム合体アクロバッターボディアタックで」

「……長くないか、それは」

「えっ？」

ぼそりと告げられたＲＸの一言。それに一条とのやり取りを思い出し、クウガは思わず声を出した。それに構わず、ＲＸは少し考えて告げた。

「……ライダーアタックとかライダーブレイクはどうだ？」

「あ、それいいですね！　じゃ、ライダー……ブレイクで」

そのどこか気の抜けるような返事に、ＲＸは内心苦笑しながら頷いた。そして、視線をアクロゴウラムへ戻した。それにクウガも気付き、アクロゴウラムから降りた。すると、ゴウラムがアクロバッターから離れて戻る。ゴウラムが石にならない事に内心安堵しつつ、クウガはどこかで納得していた。

やはり、ゴウラムとアクロバッターは似ていると思ったのだ。共に己の主人とも言える存在の呼びかけに応え、現れる事。意志を持っている事。何より、ゴウラムが融合したにも関らず、アクロバッターにもゴウラムにも大きな異常も変化も無かったのだ。

どこか疑問が消えないＲＸに、クウガは簡単にゴウラムの事を話して聞かせて納得させた。そして、逆にＲＸもゴウラムを呼べるかもしれないとクウガは告げた。

「……そうか。ゴウラムは、君にとってのアクロバッターなんだな」

「多分そうです。言葉みたいなのも喋りますし」

「……やはり、ゴルゴムの技術は超古代のものが発祥なのか」

「そうかもしれませんね。もしくは、ゴルゴムが間違った道を歩い

た古代人で、クウガを生み出した古代人は、正しい道を歩いた古代人かも」

クウガの言葉にＲＸは不思議と納得した。怪人を使い、人間を支配しようとしたゴルゴム。それとは逆に、怪人を倒して人間を守ろうとしたリント。そう考え、ＲＸは思う。だからこそ、クウガの力は世紀王などと呼ばれる物ではないのだと。

それは、守るための力。決して支配などをするためではない。誰かを危険から守るためだけにある力なのだから。そう感じ、ＲＸはクウガと共に列車へ向かおうと告げる。それにクウガも頷き、二人はそれぞれの相棒と共に動き出すのだった……

二人の仮面ライダーが怪人と戦い出した頃、六課隊舎近くを歩く小さな少女の姿があった。しかし、その周囲にはトイが合計二十はいた。それを引き連れ、少女はゆっくりと六課隊舎を目指す。

「……あれが創世王様の障害、か」

そう呟いて、フュンフは憎々しげに視線を隊舎へ向けた。その姿は、やはり髪の色以外はチンクそのもの。フュンフは片手を静かに挙げると、それを隊舎へ向ける。そして、一言告げた。

――行け。

それに呼応し、トイが一斉に隊舎へ向かっていく。だが、それを阻む者がいた。その攻撃がＡＭＦを搭載しているトイを、軽々と貫いた。

「何者だ！？」

「烈火の将、シグナム」

「鉄槌の騎士、ヴィータ」

二人の騎士は、そう告げてフュンフの前に降り立った。二人は、隊舎に接近するトイの反応を感知したロングアーチの要請を受け、こうして待っていたのだ。だが、二人はフュンフを見て何か嫌な既視感を覚えていた。

（何だ……？　奴の気配、どこかで……）

（こいつ何かに似てるような……）

何故か悪寒がする感覚。そう、それが邪眼と対峙した時だと思い出し、二人は相手の外見に惑わされずに戦おうと気を引き締め直す。それをフュンフも感じ取り、歪んだ笑みを浮かべた。

それに僅かにだが二人の表情が険しさを増す。邪悪な笑み。決してチンクならば浮かべぬだろう笑み。それに嫌悪感を抱いたのだ。どこまでも他者を見下すような印象を与えるその表情。そして、雰囲気に。

「守護騎士か。貴様らのデータは必要ない。いるのはアギトのデータだ」

「翔一のだと！」

「お前、どうしてアギトを狙ってんだ！」

「答える義理はない。創世王様に逆らった愚か者共に天誅を下す。それが私に与えられた使命なのだ」

フュンフはそう言うと、手から何本もの糸を放つ。それは、特別製の鉄糸。フュンフのＩＳを生かすために作られた特殊装備。それをかわし、二人はフュンフへと迫る。だが、それにもフュンフは慌てる事もなく、むしろ嬉しそうに口の端を歪めた。

――――爆ぜろ。

その呟きで、鉄糸が爆発した。ＩＳ、ランブルデトネイター。金属にエネルギーを込め、爆発物に変える能力だ。鉄糸は二人の背後にも回っていて、その爆発に巻き込まれる形となった。しかし、それで終わるようなベルカの騎士ではない。

爆煙が晴れた先にいたのは、連結刃で身を守ったシグナムと、防御魔法を展開して事無きを得たヴィータの姿だった。それにフュンフは何の反応も示さず、再び鉄糸を放つ。だが、今度はそれをシグナムが連結刃で弾く。

そして、それと同時にヴィータがフュンフへ向かって魔力弾をぶつけるべく動く。手にしたグラーフアイゼンを振りかざし、前方に出現させた魔力弾を勢い良く叩き飛ばしたのだ。

それがフュンフへ殺到し、その体を煙が包む。それを見て二人は一旦距離を取った。何故だか切り込むのはしてはいけない気がしたのだ。まだ相手には何かある。そんな確信めいた予感があった。

【ヴィータ】

【ああ、分かってる。こいつはやべぇ】

「どうした？　もう終わりか……？」

煙の中から聞こえるフュンフの声。しかし、二人の前に現れた時、その姿は煙に包まれる前とは別人だった。それは蜘蛛。巨大な蜘蛛の怪物がそこにはいたのだから。二人はそれに息を呑む。

やはり邪眼の関係者だと思った事だけではない。その異様に、不気味さに、何よりもその邪悪さに嫌悪感が沸き起こったからだ。決してこの世界に存在していいものではない。そんな気持ちさえ抱く相手。

「舐めるなっ！」

「行くぞっ！」

騎士の誇りに賭け、この怪物を倒す。そう思って動く二人だったが、その攻撃をフュンフは避けようともしなかった。それに二人は違和感を感じ、その狙いに気付いた時にはもう遅かった。

二人の振り下ろされるデバイス。その先に、トイが盾のようにやってきたのだ。身代わりになって沈黙するトイ。だが、その瞬間を狙ってフュンフは口から糸を吐いた。それは、先程から使っていた鉄糸。それが二人を絡め取る。そして、即座に大気に触れ硬化した。

「どうだ。私の特製鉄糸は、大気に触れると瞬時に硬くなり、相手の動きを封じる」

「くっ……」

「駄目だ……動けねぇ……っ！」

フュンフの勝ち誇ったような声に、二人は悔しそうに足掻こうと

するものの、体を包む糸は微塵も解けそうにはなかった。それを見て、フュンフは嘲笑う。まるで芋虫のようだと。そして、その足でヴィータを足蹴にしようとした瞬間だった。

突如、フュンフの体を封じるように緑のバインドが出現した。それに驚くフュンフ。それと同時に二人を捕らえていた糸を断ち切るように青い魔力光で出来た棘のようなものが地面から突き出た。

「ちっ、残りの守護騎士か！」

フュンフの視線の先には、騎士甲冑に身を包んだシャマルとザフィーラの姿があった。

「シグナム、ヴィータちゃん、大丈夫？」

「してやられたようだな」

「ああ」

「悪い。助かった」

立ち上がり、二人はシャマルとザフィーラと並ぶように構えた。そして、告げる。相手の吐く糸に気をつけろと。それに頷いた時、シャマルのバインドを破壊したフュンフが動き出す。それに反応し、四人もそれぞれ動き出す。

シグナムとザフィーラが前線を。ヴィータがその援護を。シャマルは後方に位置取り、支援と指示を。フュンフの吐く糸に気をつけながら、四人はその連携を以って少しずつではあるがフュンフを追い詰め始める。

だが、それも終わりを迎える。そこへ厄介な存在が現れたのだ。

それは、フュンフを劣勢に追いやっているシグナム達へ凄まじい速度で接近。そしてそのまま、シャマルの体を斬りつけたのだ。

シグナムとザフィーラがそれに気付いた時にはもう遅かった。ヴィータがそれを防ごうとするものの、その刃がシャマルが展開した防御魔法をあっさりと切り裂いたのだ。

「きゃあぁぁぁぁっ！」

シャマルの腕から流れる鮮血。それを見て、シグナム達に怒りが浮かぶ。それでも即座に三人はシャマルの傍へ移動し、守るようにフュンフと突然現れた相手を睨み付けた。

「何を手間取っている、フュンフ」

「ドライか。何、少し遊んでいただけだ。もう終わらせようと思っていた」

「良く言う。苦戦していたではないか」

ドライは、その言葉を鼻で笑い、視線をシグナム達へと移した。何とかシャマルは自分で傷を癒しているものの、そのダメージは大きくこれ以上の戦闘は厳しいように見えた。

彼女もトーレと同じ姿をしながら、その髪はやはり黒い。そして、フュンフを一瞥するとその姿を変える。それは蟷螂。両手が鋭い刃となり、不気味な目でシグナム達を見つめた。

「不本意だが、創世王様のためだ。貴様に手を貸してやる」

「ふん！　お前が手を出したいのなら勝手にしろ」

ドライの手助けをまったく感謝もしないフュンフ。そして、苛立ちを隠そうとしないドライ。そのやり取りを聞き、シグナム達に焦りが生まれる。四人で息を合わせ、何とか一体を追い詰める事が出来た相手。それがもう一体増え、尚且つシャマルは負傷した。

その守りのためにザフィーラを後方に下げる以上、苦戦は必至。そう思い、四人は視線を互いへ向けた。そこに宿る光を見て、四人は揃って頷いて構える。

決して諦めない。守護騎士として、そして仮面ライダーと共に戦った者として、ここで退く訳にはいかない。そう思ったのだ。能力では劣るとしても、せめて気持ちだけはライダーと同じように強くありたい。

それが、彼らを支えていた。例え勝てない相手だとしても、自分達の後ろには守りたい者がいる。ならば、背を向ける事等出来るはずはないのだ。力の限り戦い、それを守る事。それこそが、彼ら守護騎士の役目なのだから。

「ヴィータ、あのカマキリは私がいく」

「分かった。あたしはあのクモだな」

「ザフィーラ、二人のフォローをお願い」

「心得ている。だが、お前を守る事が最優先だ」

どこか悲壮な雰囲気さえ漂わせる四人だったが、そこに二つの声が聞こえた。

――それは私が代わりにやろう。

――カマキリは俺がやります！

その声に四人の視線が動く。そこにいたのはリインと翔一だった。シグナム達の危機を知り、はやてがリインへ念話で救援を頼んだのだ。そして、翔一はそんなリインと共にこうして四人を助けるべく付いて来たのだから。

はやてはまだなのは達が任務中のため、ロングアーチを離れる訳にはいかなかった。それに、相手が怪人では、はやてはむしろ不向き。故にリインと翔一に頼ったのだ。

「「「「アイン！　それに翔一（さん）も！」」」」

自分達の家族が助けに来た事に喜び、四人に明るさが戻る。リインは素早くシャマルに近付くと、治療魔法を掛け始め、翔一は二体の怪人の前に立つように歩き出す。それを見て、二体の周囲に残ったトイが集まり出した。

「シグナムさんとザフィーラさんでクモを頼みます」

「ああ」

「任せろ」

頼もしい返事に翔一は頷き、視線をヴィータへ移す。その視線はどこか申し訳なさそうだ。

「ヴィータちゃんは、一人で残った機械を頼んでいいかな？」

「……それはいいけどよ、終わったらお前の助けに入ってやっからな」

やや照れくさそうにヴィータはそう言ってトイへ向かって動き出す。そして、シグナムとザフィーラがフュンフへ挑みかかり、翔一は構える。

「変身っ！」

一瞬にして体を変え、アギトはドライへ敢然と立ち向かう。それを見守るように見つめるシャマルとリイン。その頃、そこへ近付く多くの人影があった。それに真っ先に気付いたのは、ロングアーチ。

「はやて部隊長、隊舎近くに多くの人間が近付いて来ています！」

「何やて？」

「あ、待ってください。ゼスト隊から連絡が……彼らは民間協力者で、その中の一人だけは局員だそうです。所属は陸士１０８」

シャーリィの告げた言葉に、はやての表情が変わる。１０８は彼女の恩師とも言うべき男性が部隊長を務める部隊だったからだ。それを考え、はやては通信を開かせる。モニターに映るのは、はやても何度か会った事のある相手。ゲンヤの娘のギンガだった。

どうしてここにとはやてが問い質す前に、ギンガがはっきりと告げた。援軍に来た、と。そして、その周囲にいる者達を見て、はやては驚いた。そう、チンクとトーレの顔を見たからだ。

ウェンディのＩＳで飛行出来ないチンクとディエチは運ばれ、トーレのように空を飛べる者は飛行し、ギンガとノーヴェは共に真司の腕を抱えるようにして走っている。アギトはそんな真司の肩に乗っていた。ちなみにセインはＩＳで地面の中を移動中。

『ぎ、ギンガ、その子達は……』

「民間協力者です！　詳しい説明は後でします！　今は、手伝いの許可を！」

はやての言葉を遮ってギンガは切羽詰った声で告げる。視線の先では、トイを相手にやや苦戦するヴィータがいる。それをはやても気付き、躊躇う事無く頷いた。

『ギンガ陸曹、協力感謝します』

「いえ、ではまた後ほど……」

通信が切れた瞬間、今度は別のモニターが出現した。それにはウーノが映っている。

『トイを連れて現れた相手は、どうも私達のコピーから作られた怪物よ。今、六課の人間が戦ってるわ』

「成程、だからはやてさんがどこか驚いてたのか。了解。なら、真司さんはここで」

「ちょ、ちょっと待って。今降ろされたら……おわっ！」

ギンガはノーヴェへ目配せし、真司を放す。ノーヴェもそれに応じて腕を放し、真司は地面に尻餅をつく形で着地。そのままギンガは走り去り、ノーヴェもその後を追うように走り抜ける。更にウェンディ達が、トーレ達が通り過ぎて行く。

それを見送って、真司は小さくため息を吐いて立ち上がる。する

と、その足元からセインが現れた。そして、胸元からコンパクトを取り出すと、真司へ向けた。

「真司兄、ほら。これで変身していきなよ」

「セイン……」

「まだギンガは真司の力を知らないからな。でも、これで教えてやれよ。真司は、強くて優しい仮面ライダーだってさ」

そう言ってアギトとセインは照れくさそうに笑う。真司はそれに頷き、デッキを構えた。そして、出現したバックルにそれを装着する。

「変身っ！」

その体に鎧を纏う真司。それを見てアギトとセインも頷いた。

「っしゃあ！」

真司が龍騎へ変わったのを見て、セインは走り出す。そして、龍騎も負けしと後を追う。アギトは龍騎と並走するように飛び、戦場へと向かう。トイの相手はトーレ達に任せ、自分は怪物の相手をしなければ。そう思って、龍騎は急ぐ。そこで待つ異世界の仮面ライダーとの出会いを知らずに……

フュンフと戦うシグナムとザフィーラだったが、苦戦を強いられていた。吐き出す糸は身動きを封じるだけではなく、爆発して攻撃

にも転じる厄介なものだったからだ。先程まではそれを使わずにいた事を思い出し、二人はフュンフが言った遊んでいたと言葉はハッタリでは無かったと感じたのだ。

そんな時、シグナムの左腕が何かに当たった。それが硬質化した糸だと気付き、シグナムは即座に離れた。しかし、それを気付かぬフュンフではない。糸は爆発を起こし、シグナムへ少なくないダメージを与える。

「ちぃ」

「ここはもう私の巣だ。お前達に勝ち目はない」

”アドベント”

獲物を追い詰めたと言わんばかりのフュンフ。そこに何かの音声が響き、燃え盛る炎が押し寄せた。それに糸が次々と燃やされ消えていく。その光景に三人の視線が同じ場所へ向いた。そこには、赤い龍がいた。口から高温の炎を吐き、邪悪な巣を焼き払うドラグレッダーだ。

そして、その龍の隣には騎士がいた。手には剣を持ち、身を銀色の鎧で包んだ騎士が。それを見て、シグナムとザフィーラはどこかクウガ達と同質の安心感を感じた。

「龍騎か。貴様もここに来るとはな！」

「龍騎？」

「それが奴の名か」

忌々しげに吐き捨てるフュンフ。それにシグナムとザフィーラは

乱入者の名を知る。そして、龍騎はそんな言葉を聞いても何も反論せず、シグナム達へ視線を向けて一言。

「俺も手伝います！　こいつ、早くやっつけましょう！」

そう告げた。その雰囲気に二人は益々五代や翔一と似た印象を受ける。そして、互いに頷き合い、龍騎へ頷いてみせる。それに龍騎も頷いて、三人はフュンフへ対峙する。そして、シグナムの一撃が口火を切る。

「紫電一閃っ！」

放たれるシグナム自慢の一撃。それにフュンフも若干ではあるが怯み、そこを突く形で龍騎とザフィーラが動き出す。そんな龍騎とは対照的に、遅れてきたアギトはシグナムを見て驚いていた。燃え盛る炎。騎士然とした雰囲気。何よりも、直感で感じ取ったのだ。シグナムは自分と相性が良い相手だと。

烈火の名を持つアギト。同じくシグナムも烈火の名を持っている。しかし、アギトはそれを知らぬでも感じ取った。自分のロードになる資格をシグナムが有していると。その瞬間、真司との約束を思い出すアギト。真司と違い、普段から融合係数の高い相手を捜し、気に入ればそちらをロードにする事。そんな事を思い出し、アギトは軽く揺れた。

（アタシは真司をロードって決めた！　……でも、真司と約束したし……）

「そこだ！」

迷うアギトの前では、ザフィーラの魔法がフュンフの糸を防ぎ、

更にその手を固定していた。それを好機と捉え、シグナムがレヴァンテインを振り払う。それと同時に排出されるカートリッジ。

”シュランゲフォルム”

連結刃となったレヴァンテインを動かし、フュンフを攻撃するシグナム。それを糸で絡め取り、フュンフは攻撃を防いだ。かに見えたのだが……

「な、何っ！？」

糸はレヴァンテインの周囲を炎が包んだ事で燃やされ、消えた。シグナムの魔力変換は炎。自分の魔力でレヴァンテインを燃やして、糸を断ち切ったのだ。先程ドラグレッダーが炎を持って糸を焼き尽くしていた事を見て、シグナムは糸が高温の炎に弱い事を見抜き、最初からこれを狙っていたのだ。こうして、自由を取り戻したレヴァンテインは、そのままフュンフへと襲い掛かり……

「飛竜、一閃っ！」

その体を炎で包む。もがき苦しむフュンフ。それを見逃さず、ザフィーラがバインドを口にも出現させて、更に周囲を包囲するように魔法の棘を展開、完全にその場所へ体を縛り付ける。それを見て、龍騎は一枚のカードを取り出した。それは、龍騎のマークが描かれたもの。

”ファイナルベント”

「トドメは任せてくれ！」

龍騎はそう告げて、構える。それをシグナムとザフィーラが見つめ、トイを片付けたヴィータ達も固唾を飲んで見守った。龍騎の周囲を巻きつくように動くドラグレッダー。そして、龍騎はその場から大きく跳躍した。

それを見ていたセインなどは全員龍騎の勝利を確信し、シグナム達はその体勢から繰り出される技を想像し、同じような印象を受けた。そう、それは邪眼を倒したクウガとアギトの姿を思い出させるもの。赤い体のライダーが放つ必殺の一撃なのだから。

「うおぉぉぉっ！！」

「お、おのれぇぇぇぇ！！」

ドラゴンライダーキックがフュンフを蹴り飛ばす。その衝撃でバインドが壊れるものの、地面を二転三転しながらフュンフは断末魔と共に爆発し果てるのだった……

「ぐっ！」

「ふんっ！　その程度か、仮面ライダー！」

ドライの高速機動に翻弄されるアギト。トーレ以上の速度を出すその力の前に、アギトは大きく飛ばされる。しかし、距離を取れた事と思い、苦戦もここまでとばかりに、アギトがその姿を変えた。それは赤。フレイムフォームとなったアギトはベルトからフレイムセイバーを取り出し、構えた。

「はっ！　姿を変えたところで、私の動きは……」

「はぁ！」

超感覚を発揮するフレイムフォーム。それは、かつて邪眼の電撃を切り払ってみせた程。故に、その場で静かに佇めば、接近してくるドライを捉える事は造作もない事だった。

ドライの言葉を遮るように繰り出された一撃は、完全にその動きを捉えていて、その肩に浅くない傷を付ける。その痛みに表情を歪めるドライ。そのためか、僅かにだが速度が落ちる。そこを見逃さず、動く者がいた。

「ＩＳ、ライドインパルス！」

高速戦闘を得意とするトーレ。彼女はトイの相手を妹達に任せ、アギトの援護に来たのだ。理由は特にない。ただ、龍騎が六課の援護を受けていたから、自分がアギトの援護をしに来ただけだ。

その色合いがどこか龍騎を思わせるものがあったのも関係しているかもしれない。ともあれ、トーレのブレードの一撃がドライの肩にもう一つ傷を作る。

「ぎゃぁぁぁ！」

「私と同じ声で叫ぶな。気分が悪くなる」

不意打ちの一撃による痛みから、ドライが上げた絶叫。アギトの隣に降り立ったトーレは、それにそう嫌そうに告げる。アギトはその言葉にトーレとドライの声が同じ事に気付き、頷いていた。そして、思い出したように頭を下げる。

「ありがとうございます。助かりました」

「……礼はいい。ちっ、来るぞ！」

アギトの低姿勢にやや面食らいながらも、トーレは視界の隅で立ち直るドライを見て、鋭く告げる。そこへ二つのブーメランが飛来し、ドライの動きを止めた。それを見て、トーレは苦笑し、アギトは驚いた。

セッテは戻って来たブレードを腕に付け直し、ドライを睨んだ。敬愛する姉と同じでありながら、異形となった相手。そして、その醜い戦い方に怒りを燃やしていたのだ。

「トーレ姉上、私も助太刀します。それと……」

「あ、俺はアギトです。仮面ライダーアギト」

「「仮面ライダー！？」」

アギトの名乗りにトーレとセッテの声が重なる。龍騎から話を聞いている二人にとって、仮面ライダーとは龍騎と殺し合う存在なのだ。しかし、アギトはそんな二人の反応に驚く事もせず、何かに弾かれるように動いた。

「危ないっ！」

アギトのフレイムセイバーが、視線を逸らしていたトーレを狙い放たれたドライの鎌を防ぐ。それにトーレは我に返り、同時に思う。目の前の相手は誰かと殺し合うような性格ではないと。根拠はない。だが、その行動にトーレは、今は味方をしてもいい相手と思う事にした。

「セッテ、今はまずこの化物を倒すぞ」

「心得ました」

そう思い、トーレはセッテにその事を告げる。すると、セッテも同じような印象を抱いたのか、特に反論もなくそれに頷いてみせた。

「アギトと言ったな。後で少し聞きたい事がある」

「はいっ！」

「アギトとは……名前が同じですね」

「言ってる場合か。行くぞっ！」

三人はそれをキッカケにドライへ向かっていく。見れば、既に龍騎達の方も大詰めになっている。トーレはそれを感じ取り、セッテと一計を案じる事にした。アギトはそれを知らず、ドライの動きを見切ろうと神経を研ぎ澄ませる。

トーレとセッテは二人してドライの高速機動の要を見破っていた。それは、背中の羽。それがトーレ以上の速度を出させ、そして制御しているのだ。故に、それをどうにかしようと考え、トーレはセッテのＩＳを使って動きを制限させる事にした。

スロータアームズにより、二つのブレードが前後からドライを襲う。それをかわそうとするドライだったが、その瞬間左右からトーレとセッテが突っ込んだ。そして、その体に取り付き、動きを僅かにだが鈍らせる。

そして、後ろから迫るブレードが左羽を。前から迫るブレードが右羽を切り落とす。それを確認すると、二人はドライの体をアギト

の方へ向かって蹴り跳ばした。

「「後は頼む！」」

その声にアギトは頷くでも声を返すでもなく、手にしたフレイムセイバーの鍔を展開させる事で応えた。バランサーでもあった羽を失い、体勢を整える事が出来ないドライ。それをしっかりと見つめ、アギトはその手にしたフレイムセイバーを構えた。眼前に迫るドライ。それをアギトは……

「はあぁぁぁぁっ！」

「ぎゃあぁぁぁぁ！！」

一刀両断。セイバースラッシュがドライの体を切り裂いた。そして、その体は左右に分かれ、そのままアギトの横を通り過ぎ、後方で爆発した……

クウガが居なくなった後、スバルとティアナはやって来たなのはとフェイトに事情を説明し、二人を驚かせていた。怪人の存在もそうだが、それが人の姿をしていた事が恐ろしい意味を持っていたからだ。

そう、それは怪人が日常に紛れる事が可能だと言っているようなもの。しかし、彼女達は知らない。そもそも仮面ライダー達は、その日常に潜む闇を見つけ、影となって戦い続けていたのだから。

「……そう。それで、今は五代さんが怪人をね」

「はい。光太郎さんのバイクが走って来て、そしたら大きなクワガタがそれにくっついて……」

なのはの言葉にスバルが興奮気味に話し出す。その荒唐無稽な話を聞いてなのはもフェイトも軽い疑問を感じたが、ティアナがそれを肯定したので、それが事実だと信じる事にした。

ゴウラムの事を、ただクウガの仲間としか聞いていないなのはとフェイトとしては、また聞く事が出来たと思った。それとは逆に、アクロバッターが勝手に動く事はあの空港火災の際に知っているので、そちらには納得した。

するとそこへ、フェイトの指示でエリオをヘリに運び終えたキャロがフリードと共に現れた。そのフリードの姿にスバルとティアナは驚きを見せ、なのはとフェイトは驚きよりも笑みを見せた。

「列車の方は私達が何とかしよう、フェイトちゃん」

「そうだね。とりあえず、二人は疲れたでしょ？　キャロ、フリードに乗せてあげて」

「はい」

「ありがと」

「助かるわ」

フェイトの言葉に笑顔で頷き、それにスバルとティアナは疲れた顔で笑みを見せた。それを見ながら、なのはとフェイトは互いにスバルとティアナの心の強さを見せられ、嬉しそうに話していた。

【……まさか、怪人相手に立ち向かえるなんて】

【昔の私達よりも凄いよ。怪人相手に二人なんて、今でも少し不安だもん】

【そうだね。でも、もしそうしなきゃいけないってなったら……】

【うん。やってみせるよ。私とフェイトちゃんだけでも、倒してみせるから】

強がりではない何かが、そのなのはの声には宿っていた。フェイトもそれを感じ取り、頷いてみせる。自分も同じなのだ。決してあの頃と同じにはならない。いつまでも怯えるだけの自分達ではないのだ。

今度対峙する時には、毅然と立ち向かってみせよう。そう思って、フェイトは視線をキャロへ向けた。スバルとティアナをフリードに乗せて、キャロは頼もしい表情をしていた。出会った頃の脆そうな印象はまったくない。

（私を強くしてくれる支え。それが、今は沢山増えた。あの頃とは違うんだ……）

拳を握り、フェイトは力強く自分に言い聞かせる。もうライダーの背中を見つめるだけではない。その背を支える事が出来るようになってみせる。それだけの強さを手に入れたのだ。力ではなく、心を鍛えて。

なのはは、今はその柱にクウガとユーノを据え、フェイトは、ＲＸにエリオとキャロを据えた。二人は知らないが、はやては当然翔一と家族達を据えている。あの邪眼との戦いで三人の少女が得たのは、恐怖だけではなく決意と覚悟。そして、強い希望と可能性。仮

面ライダーの存在がもたらす奇跡。それを目の当たりにしたために、三人は強く願ったのだ。

――今度共に戦う事があるのなら、背中を見るだけではなく、その背を守りたい。

それは、守られる存在ではなく、共に歩む存在になりたいというもの。力は及ばずとも、せめて心だけは同じ場所にいたい。それは、仮面ライダーと共にあった者達が揃って抱く想い。魂だけは、魂ぐらいは共にありたい。

仮面ライダーになりたいとは、絶対思わない。それは、彼らに対する裏切りだ。望んで得た力ではない。それを、なのはもフェイトもはやても知っている。ならば、それを求めるなど論外。自分達は今のままで足掻く。

（（それが、ライダーと共にあるための最低条件……だよね））

そう想い、二人は何かに気付く。そう、それはバイクの駆動音とゴウラムの飛行音。どうやらキャロ達もそれに気付いたようで、視線をそちらに向けて笑顔を見せていた。それになのはとフェイトもその相手を理解し、笑顔を浮かべてそちらへ振り向いた。

そこには、列車と並走するように走るアクロバッターに乗ったRXと、ゴウラムに掴まるクウガの姿があった……

どこか異様な雰囲気に包まれる六課隊舎前。アギトと龍騎は互いに見つめ合い、何も言わない。それをシグナム達もナンバーズ達も見守るのみ。ギンガはそんな両者を見て、どこか居心地が悪かった。

「あんたも……ライダーなんだ」

「はい。貴方も仮面ライダーなんですか？」

「まぁ。で、俺と戦う？」

「……どうしてです？」

「だって、願いを叶えるにはそれしかないじゃん」

「えっと……願いって？」

どこか互いの認識が違うような受け答え。それを聞いて、周囲も疑問を浮かべた。

「真司、どうもこいつはお前の知っているようなライダーとは違うようだ」

「翔一、どうやらあいつはお前とは違う世界のライダーらしい」

チンクとシグナムの言葉に両者は変身を解除した。そして、それで真司は完全に翔一が自分とは異質のライダーだと悟る。カードデッキがないのだ。つまり、それは自分と違い、デッキの力で変身している訳ではない証拠。

そこまで考えて、真司は先程までの自分の発言を詫びた。挑発的だったからと。それに翔一も頭を下げた。ちゃんと事情を話すのが遅くなったせいで誤解を与えたんだからと。それに真司がそれは自分だと返し、二人は悪いのは自分だと言い始めそうになったのを感じ取り、翔一の事をシグナムが、真司の事をチンクが止め、この論

争は終わりとなった。

そこへロングアーチから解放されたはやてが現れ、全員に任務の成功と怪人が他にも現れていた事を告げた。列車の暴走はＲＸがロボライダーになり、ハイパーリンクを使い制御を奪い返して事無きを得た。そして、その二体も創世王の手下だったらしく、外見はセインとクアットロにそっくりだったと教えると、真司達から怒りが漂い出した。

「……ま、それもクウガとＲＸが倒してくれた。でも、気になる事をクウガが言うとってな」

「何？」

翔一の言葉にはやてはこう告げた。覚えてろと言い残して死んでいったと。それにモニターで参加していたウーノが答えた。きっと、邪眼はプロジェクトＦａｔｅを使って自分達のコピーを作り出しているのだろうと。

それを聞いて、はやての表情が変わる。そう、それは下手をすれば、今回の比ではない怪人軍団がいつ襲って来るか分からない事を意味していたのだ。故にはやては表情を真剣なものへ変えて考え出す。

「でも、おかしいよ」

「何がだ、セイン」

「だって、コピーを作れるのなら、今だって何体も送ってくれれば良いじゃん」

そのセインの言葉に全員が納得した。つまり、邪眼は何らかの理由で同じ人物のコピーは一体しか作れない。そう結論付けようとした。だが、それに異を唱える者がいた。シャマルだ。

「待って。もしかしたら、邪眼は遊んでいるのかもしれない」

「どういう事や？」

シャマルはフュンフの言っていた遊んでいたと言う言葉を出して、こう告げた。邪眼は一気にこちらを押し潰そうとするのではなく、遊んでいるのではないか。いつでも倒す事が出来る。だからこそ、少しずついたぶるような手段を選んでいる。

そう考えれば、色々と納得が出来る点も多い。まず、最初にジェイル達のラボを奪った時も、全員で襲い掛かれば龍騎達を倒す事が出来た。それにも関わらず、しなかった。次に、列車襲撃もそうだ。レリックを奪えたにも関らず、敢えて奪わず伝言を伝えるために残していた。最後に隊舎襲撃。これもそう。その気になれば、あの二人以外にも投入して攻め込み、翔一だけしかライダーがいないはずの六課を倒させる事が出来たはず。

シャマルが挙げていく内容を聞き、全員が邪眼への怒りを燃やしていた。侮られている。しかも、徹底的に。いつでも倒せると言わんばかりの対応をしている邪眼。だが、それを正直に吐き出し悔しがる程、自惚れてもいなかった。

確かに怪人を大量に送り込まれれば、現状では対処し切れないのは間違いないからだ。仮面ライダーがいかに強いとはいえ、人数は限られている。同時多発的に襲撃されれば、手が足りない場所がどうしても出てくるのだから。

「……奴は、我々を使ってゲームをしているとでも言うのか」

「それが一番近いでしょうね。悔しいけど、私達じゃ怪人を一人で倒す事は出来ないわ」

どこか怒りを秘めたようにシグナムが呟いた言葉に、シャマルが悔しそうに肯定してみせる。それを聞いて、翔一と真司以外の者達が一様に拳を握り締めた。

「でも！　兄貴やこいつがいるじゃないか！　それに、他にもライダーがいるんだろ？」

「ノーヴェ、いくら真司達が強くても、精々相手出来て二体が限度だ。しかも、奴等は私達のＩＳと素材となった生物の力を使ってくる。苦戦は免れんだろう」

トーレの諭すような言葉に、ノーヴェは悔しそうに唇を噛む。真司も翔一もそんなノーヴェに掛ける言葉がなかった。ノーヴェが感じている悔しさは、自分達の悔しさでもあるのだ。無力感。それを二人はライダーであるが故に、余計に感じていた。

そんな時、そこへ遅れてきたゼスト達が現れた。真司達がそれに気付き、はやて達はどうしてと思って話を聞く。そして、ゼスト達が真司達を保護していた事を聞き、納得。そして、同時に頼み込んだのだ。

それは、真司達を六課で預からせて欲しいとの内容。それにゼスト達は困惑するが、はやてがロングアーチに言って出現させたモニターを見て、言葉を失った。そこには、醜悪な怪物が映っていて、それと戦うアギトや龍騎の姿があったのだ。

「これが仮面ライダー……そして、これが六課の敵」

「不気味……なんてものじゃないわ。これは具現化した恐怖そのものよ」

息を呑むようなメガーヌとクイントの言葉を聞き、はやては静かに頷いた。

「どうですか、ゼスト部隊長。彼らの力、預けてくれませんか？」

「それを決めるのは俺ではないぞ、八神部隊長。彼ら自身に聞いてくれ」

ゼストはそう言って真司達を見る。ナンバーズはそれに少し戸惑いを見せるが、真司は翔一へ向かって力強く告げた。

――俺、戦うよ。仮面ライダーとして。あんた達と……翔一さんと一緒に。

――ありがとうございます。邪眼を倒して、平和を取り戻しましょう！　真司さん！

笑顔を見せ合う二人。それを見て、ナンバーズも意を決した。ゼスト隊でも邪眼とは戦えるだろう。だが、六課は邪眼対策の部署としての意味合いが強い。つまり、ゼスト隊よりも邪眼に関する情報や戦いは多い。

それは、自分達の家を取り戻すための力が手に入るという事でもある。その最終目的を果たすため、六課に協力するのも悪くない。そう判断したのだ。それに、真司とは違う世界の仮面ライダーに興味を抱いたのも大きい。

「……どうやら決まったようだ」

「感謝します、ゼスト部隊長。それに、皆さん」

「自己紹介は後でするとして、まずは五代達の帰りを待つか」

「あ、俺食堂戻るよ。料理の仕込み、途中だった！」

「待て翔一、私も行く。では主、また」

シグナムの五代との名前で、翔一はそう思い出したように言って隊舎内へ走り出す。リインもそれを追うように走って行く。それを聞いていた真司が何故か腕まくりをして、告げた。

「よし、じゃあ俺達も手伝うぞ。行くぞディード、ディエチ、チンクちゃん」

「はい」

「うん」

「まったく、お前と言う奴は……」

そう言って四人も翔一達を追い駆けるように隊舎へと向かって走り出す。

「……アタシらも行くか」

「そうッスね。手伝いは多い方がいいッス」

「あ、あたしも行く！」

ノーヴェとウェンディが走り出せば、セインが置いていくなとばかりにそう言って走る。

「トーレ姉上、クアットロ姉上、私達も」

「……まぁ、世話になるのだしな」

「そうねぇ。初めが肝心とも言うし……」

セッテが歩き出すのをキッカケに、トーレとクアットロもそれに続く。

「ウーノ姉様とドゥーエ姉様はどうするのですか？」

『ドクターと一緒にそちらへ行くわ』

『ゼスト部隊長、いいですよね』

そしてオットーの言葉にドゥーエがそう答え、ウーノが許可を求める。それにゼストが頷いて、モニターが消える。そして、オットーが動き出そうとした瞬間、それを聞いていたヴィータが呟いた。

――お前ら、馴染むの早そうだな……

その言葉にアギトが笑みと共に告げた。

――真司がいるからさ。

　その言葉に何故か全員が心から納得した。そして、笑みを浮かべてオットーについていくアギト。それに続くようにはやて達も歩き出し、ゼスト達もそれについていく。ジェイル達の事を話す必要もあるし、何より怪人を見た以上、この事件は他人事ではないからだ。
　こうして、六課の初任務は終わりを迎える。ついに揃った四人の仮面ライダー。対する邪眼が擁するは、ナンバーズの力を持った怪人達。

　しかし、彼らは知らない。まだ邪眼には、恐ろしい手駒がある事を。それは、ミッドを炎で包む邪悪な存在。
死者の列は群を成し、死人を喰らいて増え続ける。冥府を司る者求め、彼らは行く……

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

戦闘が雑だったかもしれません。怪人は使い捨てではなく、何度も甦ります。再生ではなく、新生ですので以前より弱体化するというお約束はなしです。
そして、アギトとアギトの区別が……書いてて一瞬自分の中でも混乱したのはここだけの話。
次回は、再び戦闘無し話へ……

平穏、その影で……

六課に戻った五代達を待っていたのは、翔一達と見知らぬ者達だった。しかし、それは五代とスターズ、それとライトニングの二人だけ。フェイトと光太郎は揃ってそこにいた者達へ驚きを見せた。

食堂で忙しそうに働く者達。それは、言うまでもなく真司達だ。更にゼスト達の姿もある。それに疑問を浮かべるフェイトと光太郎。すると、それに相手も気付いたのか、光太郎達へ手を振って笑顔を見せる。

「あ、さっきはどうも」

「城戸さん……どうして」

「それに……君達まで」

フェイトが不思議そうに声を出すと、光太郎もそれに続いてナンバーズを見つめてそう告げた。しかし、それに真司達が答える前にスバルとティアナがセインを見て言葉を失う。

「あ、アンタ……」

「あの時の怪人?!」

「あ～……そうなんだ。あたしのコピーと会ったんだね、あんた達」

二人の言葉にセインは苦笑。そして、それを説明すべく翔一達が隊舎前の出来事を話し、五代達も納得した。そこへ、転送魔法が展開され、メガーヌと共に三人の人物が現れた。それに、真司達が嬉

しそうな表情を見せた。
そう、そこにいたのはウーノとドゥーエ、それに……
「ジェイル……スカリエッティ……」
「それが普通の反応だね。安心してくれ。何もしないし、する気もないよ。邪眼だったか……あれに対する恨みや怒りについては、君達以上に私は深いつもりだしね」
はやての驚きと戸惑いが混ざった反応に、ジェイルは変に飾る事もせずにそう返してから、周囲に宣言するように告げた。それに、まだどこか信頼出来ないという反応を見せる六課の者達が一斉に注目した。
その視線を受け止め、ジェイルは真剣な眼差しで断言する。それは、何の打算も計算もない言葉。彼の素直な想い。
「私は奴から私達の家を、思い出を取り返したい。例え相手がどれ程凶悪で強力だったとしてもだ」
それに真司達は頷き、五代達は呆気に取られた。フェイトはジェイルの言葉に嘘がないと感じ、すぐにそんなはずはないと思い返し悩んでいた。そんなフェイトの反応を見て、ジェイルは自嘲気味に笑みを浮かべた。
六課の他の者達も同じような気持ちだろうと判断したからだ。だからこそ、これだけは言っておかねばならない。そう思い、ジェイルははやてを見つめて告げた。
「……信じてくれなくても構わない。ただ、私はともかく真司達は信じてくれないだろうか。私の大切な娘達と大切な友人だけは……」

「……ええやろ」

そんなジェイルの言葉にはやては戸惑いを隠せなかったが、その発言に込められた思いを感じ取り、頷いた。それに真司達は先程の戦いでの功績もある。そちらに関しては六課の中でも疑う者はいないのだから。そう考え、はやてはジェイルの事をどうするかを相談すべく、早急に後援者の一人であるカリムへ会う必要があると判断した。

既に状況はかなり急激な変化を起こしている。予言に出てきた龍騎士。それが龍騎だと判断した今、その事についても話し合う事がある。それに、ゼストとジェイルが約束したＡＭＦへの対抗策も手を打ってもらう必要がある。

そこまで考え、はやてはやる事が多いと思った。一気に戦力が増えたのは良かったが、その反面問題も増えたのだから。しかし、邪眼の居場所が分かった以上、こちらから打って出る事も出来る。そう考えて、悪い事だけではないと思い直す。

「さあ！　難しい話は終わったし、食事にしましょう！　今日は、いつも以上に気合入れて作りましたから！」

「そうだよな……。あ、俺も手伝ったんで、どうか食べてみてください！」

その場の空気を変えようと翔一が一際大きな声でそう言うと、真司もそれに続けと声を出す。それに五代も乗っかって周囲へ声を掛けた。

「まずはみんなで食事にしましょう！　これからの事はこれから考える。これまでの事はもうここで終わり。切り替えていきましょう

！」

サムズアップ。それにその場の空気が幾分が和らいだ。五代の、翔一の、真司の笑顔が見ている者達を和ませる。そして、まずはスバルとエリオの大喰らいが空腹に耐えかねてテーブルに着き、それに反応しティアナとキャロも座りだせば、なのはがフェイトへ声を掛けてテーブルへと動き出す。光太郎はそれに頷いて、ふと見つめられていると察して振り向いた。

すると、その相手はナンバーズだった。視線が問いかけているものを悟り、光太郎は少し真剣な表情で尋ねた。

「何か用かな？」

「……お前達の体は……どうなっている」

光太郎だけではなく、五代にも翔一にも体に人らしからぬものがある。それを視る事が出来たナンバーズ。そして、そんな全員を代表して告げたチンクの言葉に、光太郎はさして驚く事もなく真剣な表情でこう答えた。

――それは、今夜にでも話そう。翔一君達と真司君やスカリエッティも交えて。

それに全員が揃って頷いて、ナンバーズはそれぞれに動き出す。それを眺め、光太郎は話す時が来たのかもしれないと思った。それは、改造人間の事。戦闘機人であるナンバーズ。それを知れば、否応無くスバルやギンガの事にも話が及ぶ。

二人が、自分と親戚とも言える相手だけにその話をさせるとは思えなかったのだ。故に、光太郎は自身の体についても話すべきかと決心していた。それは、戦闘機人よりも異形である自分を知らせる

事で、六課の者達がスバル達に抱く恐怖を自分へ向けさせるため。

（彼女達は、全員可憐な少女達だ。例えその体が人と異なるとしても、心は紛れも無く人間。そう考えてもらえるのなら、俺は……）

その決意の視線の先では、真司作の餃子に翔一とはやてが驚愕し、レシピをせがんでいる光景が展開されているのだった……

モニターが六課中に出現し、はやての口からジェイル達を六課で預かり、協力して事に当たると告げられると、予想通りにあちこちでざわめきが生まれた。しかし、それをはやては鎮めようとはしない。代わりに、はやては真司を手招きした。それに不思議そうに自分を指差しながら、歩き出す真司。

そして、はやては真司へこう頼んだ。この中で本当のジェイルを知っているのは真司だけ。故に、それを六課の者達に伝えて欲しいのだと。そこには、はやて自身の気持ちも込められていた。

広域次元犯罪者であるジェイル。それをすぐ信頼する事など局員ならば出来るはずもない。だからこそ、一般人である真司に語って欲しかったのだ。怪人と戦い、六課を守った仮面ライダー。その彼ならば、自分が言うよりも信憑性がある。そうはやては考えたのだ。

そして、真司ははやてに言われるまま、意を決して話し出す。

「……えっと、俺は城戸真司って言います。地球の日本生まれで、ミッドへは気がついたら来てました」

突然の見知らぬ人物にざわめきが少しだが小さくなる。その相手を見極めようとしている。そう感じながら、真司はそう言って簡潔

に自分とジェイルとの出会いを話した。そして、真司は言った。悪いのはジェイルだけじゃない。ジェイルに悪い事を悪いと言ってやる者がいなかったのがいけなかったのだと。それどころか、ジェイルへ悪事を強要する存在さえいた事を告げた。

しかし、その名を真司が言おうとした瞬間、ゼストとジェイルが揃って止めに入った。それにはやて達が疑問を浮かべた。真司も同様に。すると、ゼストがモニターへ向かって告げた。

――――それを知る事は……君達の危険に繋がる。

それだけで、全員が何となくだが理解した。理解してしまった。ジェイルに悪事をさせていた相手。それが何なのか。はやてもフェイトも仕事柄そういう噂に触れる機会は多いためか、周囲よりもその表情は暗い。

一方の真司は、ジェイルから軽く指摘を受けていた。無闇にその事を話しては駄目だと。それは、管理局員達に与える影響が大きいため。そして、下手をすれば、それを知るだけで命を狙われる事にもなりかねないと。

「最高評議会っていうのは、それだけ用心深いんだよ」

「……そっか。知らない方がいい事もあるもんな」

ジェイルの言葉に真司はジャーナリストとして納得した。情報を知る事は危険にも近付く事になる可能性がある。その事を思い出したのだ。知る事は必ずしも良い事だけではない。知らない方が良い事もある。

それを真司は聞かされたのだ。編集長や玲子に。報道に携わるのなら、知る勇気と危険を身に付けろ。そんな感じの事を言われたのだから。

真司がそんな事を思い出している横で、五代と翔一は元々ジェイルの事をそこまで知らないからこそ、思う事があった。それは、根っからの悪人はいないという事。真司と出会う前のジェイルは、本当に犯罪者だったのだろう。しかし、真司と知り合い、触れ合った事でその心が変化していった。それは、ジェイルが悪人ではなかったからだ。

真司が言ったように、悪い事を悪いと言う存在がいなかったからだろう。純粋だったのだ。自分のしたい事をしていたジェイル。それをちゃんと正し、修正する人間がいてさえやれば、ジェイルも今のような優しい心の持ち主になれるのだから。

「……真司君も仮面ライダーだね」

「そうですね。俺達も負けないようにしないと」

二人は揃って知り合いに警察の者達がいる。故に、犯罪者という者達の中には、なりたくてなった者達だけではない事も聞いていた。そして、複雑な境遇にいる事が多いのは、何となく理解していた。

「五代さんと翔一さんは……信じるんですか？」

「なのはちゃんは無理？」

平然とジェイル達を信じるような発言をしている二人に、なのははやや戸惑うようにそう声を掛けた。だが、それに対して五代が返した言葉になのはは即答出来なかった。それは、なのはも真司の言葉を信じたいと思っている証拠。

ただ、局員としての部分がどうしてもそれを素直に頷かせてくれない。見ればフェイトもはやても同じような表情だ。真司の言葉を

信じたい。でも、それを責任ある立場で、尚且つ影響力を与える存在である自分達があっさりと示す訳にはいかない。

――――……疑っていたら、敵は見つけられるかもしれない。でも、信じなければ仲間は見つからない。

そんな中、その言葉が響いた。それに全員の視線が集まる。それを言ったのは、光太郎だった。

「俺の先輩の一人。仮面ライダーＶ３が教えてくれた言葉だ。これを、先輩はある人に言われて思い出したそうだ。仮面ライダーとしてだけじゃなく、人として大切なのは、相手を信じる事だと」

「……それを言った人もライダーなんですか？」

光太郎の言葉に痛い所を突かれて、その重要性を噛み締めるはやて達。それを横目に翔一がそう問い返す。それに光太郎は首を横に振って告げた。

――――その人は、ライダーじゃない。でも、誰よりも仮面ライダーらしい人だったと聞いた……

その言葉に誰もが疑問を浮かべた。光太郎も聞いた話のため、詳しい事は知らない。だが、光太郎にその男の話をしてくれたＶ３やＺＸは確かにそう言った。ライダーよりもライダーだった男だと。

名前までは聞けなかったが、その男の話は先輩ライダー全員が知っていた。そして、全員が口を揃えて言ったのだ。仮面ライダー０号と呼ぶべき男。変身能力がなくても、人類の平和と自由のために命がけで戦える男。故に、仮面ライダーの原点であり理想なのだと。

光太郎がその話をすると、それを聞いて五代も翔一もある者を思い出す。五代は、一条の事を。翔一は、氷川の事を。それぞれ変身能力はない。それでも怪人が現れれば、誰かの暮らしを、命を守るために命がけで戦っていた。

その姿を思い出し、二人は光太郎の告げた話に感じ入った。自分達も知っていたと。仮面ライダーよりも仮面ライダーらしい者達を。そして、真司は光太郎の話に強く心を打たれていた。仮面ライダーの意味がまったく違うだけではない。その在り様も正反対だったのだから。

（他の世界のライダーは、自分のためにじゃなく、誰かのために戦っていたんだ。それだけじゃない。ライダーじゃない人だって、命がけで……）

そう思うと、真司は心から悲しくなった。異世界では、人を守り助ける存在であるライダー。それが、何故自分の世界では殺し合う存在なのだろうと。全てのライダーが手を取り合い、モンスターと戦う。そんな事にどうしてならないのだろうか。そんな風に思い、真司は強く拳を握り締める。

「ジェイルさん……俺、決めたよ。元の世界に戻ったら蓮や北岡さん達に、俺の世界のライダーにこの話を聞かせる。笑われたって、馬鹿にされたっていい。仮面ライダーは、こうあるべきだって言い続けるよ」

「真司……」

「ライダーは、いつでもみんなのために戦うんだ。自分のためじゃなく、みんなのために」

真司はそう言い切って五代達へ視線を向けた。それは、その言葉が合っているかと尋ねる目。それを感じて、五代達三人は揃って頷いてサムズアップ。それを見て、真司は心から嬉しそうに頷いてサムズアップを返す。

そして、そんな四人を見てスバル達が意を決してナンバーズ向かって歩き出す。それにやや困惑しながらも四人を見つめるナンバーズ。

「……私、スバル。スバル・ナカジマ。まだ全部受け入れる事は出来ないけど、それでもこれだけは言える。私は、貴方達を信じたい。だから、これからお互いの事を知っていこう」

「アタシはティアナ・ランスターよ。ティアナでいいわ。アタシもスバルと一緒。まだ完全に信頼は出来ない。でも、それはそっちもだろうし……ま、互いに信じ合えるようになりましょ」

「僕はエリオです。エリオ・モンディアル。僕は、貴方達を仲間って思いたい。だから、僕も貴方達に仲間って思われるように頑張ります」

「私はキャロ・ル・ルシエです。こっちは大切な家族のフリード。貴方達は六課を助けてくれた。なら、次は私達が貴方達の家を助ける番です。私の力は小さいけど、この恩は絶対にお返しします」

そう言って、四人は揃って笑顔で告げた。これからよろしくと。それにナンバーズ全員がやや呆気に取られるが、小さく笑みを見せて答えていく。

「……私はウーノよ」

「ドゥーエ。よろしく」

「……トーレだ」

「クアットロ」

「チンクだ」

「あたしはセインだよ」

「セッテと言う」

「オットーです」

「……ノーヴェ」

「あたしはディエチ。よろしくね」

「ウェンディッス」

「ディードと申します」

それを見つめ、はやて達は苦笑した。ゼスト達などは微笑みさえ浮かべている。ジェイルと真司は二人で笑みを見せ合っていた。五代と翔一、光太郎はその雰囲気から和やかなものを感じ取り、頷いた。

そして、それをキッカケにアルトが、ルキノが、シャーリィがナンバーズ達へ自己紹介を始めた。それを見て、はやては改めて光太郎達の影響力を感じていた。先程までは、真司の話を聞いて迷って

いるだけだった六課の者達。それが、光太郎達の会話を聞いただけで、こうしてジェイル達を信じてみようと動き出したからだ。

そんな風にはやてがどこか嬉しそうにその光景を眺めていると、ゼストがそれにこう言った。

「俺の隊よりも早いな」

「……仮面ライダーがいますから」

そのはやての答えにゼストは頷き、視線をクイントとメガーヌへ向けた。二人は揃って真司とジェイルへ注意をしていた。それは、先程の事だけではない。六課であまり勝手な行動はしないようにと、母親のような事を言っているのだ。

「真司君、スカリエッティが犯罪者って言うのは事実なんだからね。だから、ちゃんと周囲に今は違うって理解してもらえるように頑張って」

「はい。ありがとうございます、メガーヌさん」

「いいのよ。またルーテシアと遊んでくれると嬉しいわ。アギトちゃんも一緒に、ね」

「おう。ルーがそう望むって言うならいつでも行くさ」

メガーヌの言葉にアギトはそう応じて笑みを見せる。ルーテシアだと長くて呼び辛い。そうアギトが漏らすと、ルーテシアはその呼び名を提案したのだ。真司もそれに習い、ルーちゃんと呼ぶ事にしたのは言うまでもない。

そんな真司とアギトの横では、ジェイルがクイントからある事を頼まれていた。

「……スバルを、私の娘の事を頼むわ。あの子、ノーヴェ達の事に気付いているだろうから」

「分かっているよ。それに戦闘機人なんて呼称は、私ももう聞きたくないしね」

「そう……。貴方も、色々あったのね」

「ほとんどが真司が来てからさ。でも……悪くない事ばかりだったよ」

そう言って笑うジェイル。それにクイントも小さく笑みを返し、和やかな空気がそこから感じられる。フェイトとなのはは、そんなゼスト隊とジェイルと真司の関係を見て、心から驚いていた。

ゼスト隊の名は、空と海で動いていた二人であっても知っている。陸の番人とまで言われる精鋭部隊。それが、ジェイル達を受け入れ、更にどう見てもその関係は、局員と犯罪者のそれではなかった。

そんな事を考え、戸惑う二人にはやてが静かに近付いて告げた。

「信用はまだ出来ん。でも、信頼はしてみよ。少なくても、真司さんだけは私は信じられる」

「……そうだね。私も城戸さんと、あの子達も信じる」

「私は……真司さん達全員を信じてみる。五代さん達のように……」

なのはの言葉に二人は軽く驚きを見せるものの、その影響を受けた人間を思い出して苦笑しつつ納得。なのはに強い影響を与えたのは、五代。ならば、誰かを疑って痛い目を見ないより、誰かを信じて痛い目を見る事を選ぶだろう。そう思ったのだ。

そして、自己紹介も終わりが近付き、残るは隊長陣だけとなった。シグナムやシャマルなどが自己紹介をする中、ジェイルがふと視線をフェイトへと向けた。それにフェイトも気付くものの、何か反応を返すかどうか迷い、何か動く事はなかった。

「……次、フェイトちゃんだよ」

「あ、うん」

なのはの声で意識を切り替え、フェイトは真司達へもう一度自己紹介。そして、それが終わり、はやてが締め括りとばかりに自分の紹介を終えて、その場は解散となった。だが、ジェイルははやてとフェイトの二人が話があると部隊長室へ連れて行かれ、ナンバーズはリインが宿舎の場所と部屋を割り当てなければと、全員を連れて外へ。真司とアギトは食堂に残り、五代達と話しながら片付けなどをする事になった。

ゼスト達はジェイル達に別れを告げたが、何かあればいつでも手を貸すと言って真司を喜ばせた。ギンガもどこか後ろ髪を引かれる思いだったが、ゼスト達と共に去って行った。

こうして、波乱を呼んだ初任務は終わりを迎え、六課は新しい力と絆を得る。そして、それに伴い知らされる事実もある。それは、この日の夜の事……

日も落ち、シフトも夜勤に切り替わり始めた頃、六課隊舎の食堂には大勢の人影があった。

「……まずは、集まってくれてありがとう」

光太郎がそう告げると、周囲から苦笑が浮かぶ。別にそんな畏まらなくてもと、そう思う者が多かったからだ。食堂にいるのは、以前のライダーの話をした際と同じ顔ぶれ。それにジェイル達が加わったものだ。

光太郎ははやてに告げたのだ。自分がこの状況について気付いた事に関して意見が欲しい。だから、出来るだけ主だった者を集めてくれないかと。それにはやては応え、この状況になったのだ。

「今日、集まってもらったのは、この状況にある程度の予想が立ったからなんだ。それについて意見を聞こうと思って」

「……あいつの事も含めて、ですか？」

翔一の言葉に光太郎は頷いた。だが、周囲はそれに疑問を浮かべる事しか出来ない。それを察してか、光太郎が話し出す。

「まずは、俺と翔一君が戦った発電所の話をしよう。邪眼と戦い、先輩達と出会った時の話を……」

共に何か嫌な気配を感じ、訪れた発電所。そこは、時空が歪められていて、過去と未来が繋がった状態となっていた。そのため、過去で行なった行動が未来へ影響し、逆に未来でした事が過去に影響を与える。そんな空間と化していたのだ。

そんな光太郎の切り出しに誰もが言葉を失った。しかし、それを

疑う者はいない。それを話しているのは光太郎。更に思い出して頷く翔一を見たからだ。

そして、そこで二人が知った事は、五万年前に死んだはずの世紀王――邪眼が滅んだはずの悪の組織を使って、自分の体を復活させようとしているという恐ろしい計画だった。しかし、その発電所に作られた秘密基地にあった通信設備が、過去や未来と繋がっていたのだ。それを使い四人の異なる時代のライダーが繋がりを持つ事が出来たため、四人はそれぞれがそれぞれの時代の悪を倒す事で一致団結した。

そして、それぞれの時代で怪人達を倒し、世界征服の企みを阻止しながら、二人は一号やV3と共に邪眼を追い詰めていった。最後には、その空間の性質を活かし、まだ復活前の邪眼の体を一番過去にいた一号が破壊し、全てを終えたと思った時だ。

そこからは、翔一が話し出した。自分達は、邪眼の体が生成されていた部屋に行き、一号の起こした事が影響を及ぼしていく事を確認したのだが、翔一の時代だけはもう既に体が無かった。つまり、一号が破壊して影響を及ぼす前に、もう邪眼は復活を果たしてしまったのだ。

「俺は急いで通信室へ戻った。そして、その事を話すと光太郎さん……BLACKさんだけ連絡が無かったんだ」

「俺は、通信室へ戻ると不意を突かれて地下にある空洞へと落とされた。そこで見たんだ。復活した邪眼の姿を」

再び光太郎が話を引き受け、語る。邪眼の力は凄まじく、危機に陥ったものの、様々な要因が重なり過去と未来からアギト達が救援に現れてくれたのだと、そう光太郎が話すとスバルが目を輝かせた。

同じように、なのは達もその話に完全に引き込まれていた。ライダーの武勇伝。そうとも言える話だが、それはそんな簡単なものではない。いくつもの時代を超え、人知れず悪と戦い、平和を守る戦いなのだから。

そして、話は終盤へと移る。四人の力を一人に集め、邪眼に対抗しようと一号が提案し、その役目を負ったのはアギト。三人のアギトの光を貰ったんだと、翔一はそう語って話を続けた。三人の力を受けたアギトは、苦戦しながらも邪眼に膝をつかせた。だが、その時邪眼が再び時空を超えて逃げようと動き出した。それを察した四人は全ての力と想いを込めたライダーキックを放ち、邪眼を完全に倒したのだ。

「……そこで翔一君や先輩達に時間が来ちゃってね」

「時間？」

「うん。俺達は別の時代の存在だから、空間が戻る時に元の時代に戻されたんだよ」

四人は手を重ね合わせ、互いの姿と助けを決して忘れまいと誓い合うように言葉を交わした。それを光太郎と翔一が感慨深く語る。そして、話を終えた光太郎と翔一を見て、ジェイルが呟いた。

――仮面ライダーとは……そんな生き方が出来る者達なんだね。

それに全員がジェイルへと視線を向けた。ジェイルはそれに小さく笑みを見せ、悲しそうにこう続けた。

「もし、もし昔の私が君達と出会ったのなら、その体を調べさせて

くれとしか言えないだろう。でも、今の私はそんな事は思わない。それは、君達の生き方を聞いて、感動してしまったからだ。他者のために人知れず戦う。何て馬鹿らしく、何て偽善的で……何て気高く強い生き方なんだろうね、それは」

「ジェイルさん……」

真司はジェイルの言葉から底知れない憧れを感じた。ジェイルは、自分とは違う仮面ライダーの生き方を聞いて、心を打たれたのだろう。そして、そんな風に自分も生きる事が出来たら。そんな風に思ったからこそ、先程のような事を言ったのだ。

真司はそう考えた。そして、ジェイルの感想は誰もが思った事だった。なのは達は以前リンディ達から聞いた話で知ってはいた。だが、こうして改めて聞き、思ったのだ。何て優しく強い者達なのだろうと。

（光太郎さん達の名乗りを聞いて、翔一さんがどうして”仮面ライダー”を名乗りたいと思ったか、今なら分かる……）

（翔一さんは、憧れたんだ。人知れず悪と戦い、みんなの笑顔を守り続けていた仮面ライダーに……）

（自分も、そうでありたい。アギトの力を、そう使い続ける事が出来る者でありたい。そう考えたんやな、翔にぃは）

三人はそう思い、同時に自分達ももし同じ力を得ていたのならそう考えると思って、納得した。一方、初めてライダーの戦いの記憶の一端に触れたスバル達は……

（クウガだけじゃなく、仮面ライダーは昔からみんなを助けてたん

だ。例え、それを誰も知らないとしても……）

（声無き声。それに呼ばれて戦う……か。作り話みたいでも、信じる事が出来る。クウガとＲＸの姿を見た今なら！）

（決して力に溺れず、恐ろしい怪人相手に戦い続ける。それがどれだけ凄い事なのか、今の僕は知っている……）

（怖くて、嫌で、逃げ出したい。でも、それをしなかったのは……それを誰かに押し付けたくなかったから）

彼らは知っている。五代や翔一、光太郎と関わった故に彼らがどんな人間かを。決して争いを好まない。だからこそ、そんな三人が怪人相手に戦い続けたのは優しさだと思った。誰かを悲しませたくない。怪人を知って怖がったり、恐れたりしながら生きる事にならないように。

そんな思いで三人は戦ったのだろうと。だが、四人は知らない。その思いも空しく、未確認もアンノウンも、果てはゴルゴムやクライシスさえ人々の知るところとなってしまったのだから。

そして、ライダーと触れ合っていた四人とは違い、真司しかライダーを知らず、更に仮面ライダーが自分の願いを叶えるために戦う者だと思っていたナンバーズ。そんな彼女達が受けた衝撃は、スバル達以上だった。

（自分を犠牲にしてでも、他者のために戦う……真司さんと一緒だわ）

（そう……異世界のライダーと真司君は同じだったのね。怪物の犠牲になる人を出さないために変身する。そんな優しい存在……）

（その体は異形。だが、心は人のまま。本来仮面ライダーとは……戦士でありながら戦いを否定する存在か）

（シンちゃん……嬉しいでしょうねぇ。自分の選んだ道が、異世界の仮面ライダーと同じだったんですもの）

（人ならざる力、か……。それを、自分のためでなく誰かのためにとは。私達も……そうなれるだろうか？）

（カッコイイ……カッコイイけど……何か悲しいよ。こんなに優しい人達なのに……どうして戦わないといけなくなるのさ！）

（真の強さ。それを彼らは知っている。いや、知らずとも身に着けている。私も……彼らのように強くありたい）

（見てるだけの自分は嫌だった。助ける力があるのなら、それを使う事を躊躇わない。例え、それで人々から疎外されたとしても……）

（邪眼と戦って、倒して、また戦って……かよ。それをあいつらは、誰かに頼まれた訳でもねえのにしなきゃなんないなんて……やり切れねぇよ！）

（光太郎さん達も真司兄さんと同じなんだね。ライダーの力は守るために使う。絶対に自分のためには使わないんだ……）

（いや、何か凄い話を聞いたッス。でも、あの二人は邪眼と戦ったらしいッスけど、五代って人は何で戦ってないんッスかね……？）

（あの方達は、傷付く事を恐れず、戦う人になる事を選んだ。自分

の住む町を、世界を悪に渡さぬそのために……）

ナンバーズが揃って神妙な表情を浮かべる横で、真司は強く心を動かしていた。自分と違い、望んでライダーになった訳ではない者達。それでも、それを誰かのために使う事を選んだ男達。それを知り、余計に自分の世界のライダー同士の戦いを止めたいと思ったのだ。

誰かを不幸にして、犠牲にして手に入れたい願い。それは間違っているのだと、心から叫びたい。何故ならそれは、自分の抱いた悲しみや怒り、悔しさを、その犠牲にした誰かに押し付ける事になるからだ。負の連鎖を断ち切る希望。それを、真司は光太郎達の姿からも貰った気がした。

（俺達の世界でのライダー。それは、願いを叶えるために戦う奴でしかなかった。でも、これからはそうじゃない。俺が変えてみせる。みんなのためにって戦う奴が仮面ライダーだって、そう教えてくれたから。そう信じさせてくれる人達に出会ったから！）

蓮は、もしかしたら理解を示してくれるかもしれない。そう思い、真司はふと小さく笑う。龍騎とナイトの二人でモンスターを倒し、誰かを助け守る日々。その想像がとても笑えるものだったのだ。

そう、自分の動きや行動に不満や文句を述べる蓮。それに納得しながらも反論する自分。そんな凸凹ダブルライダーの図しか浮かばなかった。とてもではないが、光太郎達のようにはならないだろうと思ったのだ。

そして、邪眼との話の余韻がやや残る中、更に光太郎は話を続けた。それは、自分までの仮面ライダーについての話。そう、未だに五代とフェイト以外は知らない話をするためだ。

改造人間。その話を聞いて、大きく反応したのはスバル達だ。ゼ

クスがそう言っていた事を思い出しただけではない。何故その言葉を光太郎が知っているのかと思ったからでもある。

「五代さんや翔一君と違って、俺や先輩達は人間を改造し、生まれた改造人間。それが元々の仮面ライダーだったんだ」

フェイトと五代は何故光太郎がここでその話をしたのか、理由を何となくだが察していた。

（光太郎さん……スバル達の事を話しやすくするために）

（そっか……あの子達は戦闘機人なんだっけ）

光太郎の話を聞いて、一同は言葉を失っていた。それを感じ取り、五代とフェイトは無理もないと思った。自分達でさえ聞いた当初は信じられない気持ちになったのだ。人を改造し、異形の存在へと変える。それを聞いて、スバルやナンバーズ達は揃って表情を変えた。

光太郎は自分ではなく、先輩の事を含めて話した。突然組織に誘拐され、五体を切り刻まれ、骨を鋼に変えられた。筋を、脈を、肉を、毛皮を強靭なものに造り変えられ、その体は兵器と成り果てた……と。

だが、それでも残されたものがある。そう光太郎は続けて、こう言い切った。それは……

「それでも、先輩達には魂が残った。人としての、気高い魂が。例え機械の体になったとしても、心さえ、心さえ人であれば、決して生物兵器ではないと、そう信じて戦ってきたんだ」

それを聞き、五代とフェイトは頷いた。そして、翔一も頷いた。

仮面ライダーになった五代や翔一。仮面ライダーの本来の姿を教えてもらっていたフェイト。三人はそれ故に光太郎の言葉に納得し、理解した。そんな三人に遅れる事数瞬、スバルとティアナが頷いた。

戦闘機人であるスバル。その秘密を本人から聞いたティアナは、光太郎の言った言葉の根底に流れるものこそ、スバルとギンガの気持ちだと思った。故にその言葉は自分が言いたい事の代弁でもあった。

「……私、それ分かります。だって、私も同じようなものだから」

「スバルっ！？」

ざわつく食堂内。ティアナはスバルの言おうとしている事を察し、それを止めようとするが、それにスバルは笑みを見せて首を横に振った。

「いいんだよティア。私、光太郎さんみたいに変身は出来ないですけど、普通の人じゃないんです。戦闘機人って言うんですけど……」

その言葉にナンバーズ達と真司が驚いた。知らなかったからではない。まさか自分から話し出すとは思わなかったからだ。そこで語られるスバルの簡単な生い立ち。それに言葉がないエリオ達。しかし、その場を覆う雰囲気は重苦しいものではない。

それは光太郎の話を聞いたから。そう、誰もが感じ入ったのだ。仮面ライダーの生き方とその気持ちに。人ならざる力と姿、その哀しみを乗り越えて、独り戦い続けるその覚悟と決意。それを聞いて尚、戦闘機人に差別的な思考を抱く者はいない。更に、スバルを見て接した以上、その言葉の意味を余計に感じるのだから。

スバルの告白が終わり、それにエリオが意を決して何かを言い出

そうとした瞬間、光太郎がそれを阻止するように声を出した。

「スバルちゃん達は、俺達とは違うよ。君達は始めからそういう存在として生まれてきたんだ。それは、一つの人種だ。人として生きていた者達を捕らえて改造する改造人間とは違うんだ」

それを聞いて、エリオは何故かそれが自分にも言われているような気がした。始めからそういう風に生まれた以上、それがどんなに普通の人と違う境遇だとしても、その者は人なのだと、光太郎が言ったように思ったのだ。

（光太郎さんは……僕の事を知ってるのかもしれない……）

そう思い、エリオは一瞬目を閉じた。そして、誓う。自分の生まれを決して卑下しないと。胸を張って生きよう。エリオ・モンディアルとしてではなく、他でもない”自分”として。その想いを込めた眼差しをエリオは光太郎へ向けた。

それに光太郎は嬉しそうな表情を返し、頷いた。エリオもそれに笑顔で頷き返し、同時に思う。光太郎に自分が鍛えて欲しいと言った時、どうして戸惑ったのか。そして、どうして自分のようにはなれない可能性があるとしか言わなかったのか。その理由を悟ったのだ。

光太郎は否定しなかったのだ。エリオが改造人間である自分と同じぐらいの力を身に付ける可能性を。望みがないにも等しいそれを、光太郎は否定しなかった。エリオは知らない。それは、エリオのためだけではない。光太郎自身の気持ちにも繋がっているのだ。

絶対、人類は平和を築いてみせる。必ず、人と自然が調和する世界になる。そんな未来を光太郎は否定したくないから。だから、僅かな可能性を否定したくなかったのだ。それが、どれだけ馬鹿げて

いるとしても。

「……翔一君、あの男との戦いを話してくれないか？」

「分かりました」

周囲の雰囲気が落ち着いたのを見計らい、光太郎は翔一にそう尋ねた。それに翔一が頷いて話をすべく、光太郎と位置を交代する。

「あの男って誰の事や？」

「この状況を作り出した存在さ」

はやての問いかけに光太郎はそう答え、翔一へ視線を向けた。それに頷き、翔一は話し出す。

「実は……ある男が光太郎さんへの伝言を俺に頼んできたんだ。出来る限りの事をしたから、後は頼むって。そいつは、俺が元いた世界で戦っていたアンノウンって言う怪人達を操ってた奴なんだけど……」

翔一は簡単にアンノウンの説明と、それらと黒の青年を交えた最終決戦の話を始めた。Ｇ３－Ｘやギルスと三人で戦った最初で最後の戦い。その内容も先程の邪眼戦と見劣りしないもの。故に聞いている者達にも再び熱が生まれていく。

翔一は告げた。その黒の青年は、自分達に対してこう言い切った。人間の運命は自分が握っているのだと。その証拠に、その頃翔一達の世界では謎の自殺者が後を絶たなかった。それを聞き、全員が驚きを見せた。

無論、翔一達はその存在に対し敢然と立ち向かい、これに勝利した。そして、最後に翔一はこう締め括った。

「……それ以来、謎の自殺者はいなくなって、もうアンノウンも現れなくなったんだ」

「……やはりか。神、とでも言うべきかもしれないな、その相手は」

光太郎の呟きに全員何も言わなかった。同じような感想を抱いたのだ。人間を死へ誘い、異形の存在を意のままに操る存在。それは、神という表現がぴったりきたのだから。それだけではない。はやて達八神家の者達は、以前の推測を思い出して言葉を失っていたのだ。

まさか本当に神と呼べそうな存在がいて、それと翔一が戦ったと聞けば余計に。不自然な予言とライダー関連の内容。その全てを納得させる事の出来る事実がこんなところから出てくるとは、誰も思わなかったのだから。

と、そこでスバルが手を挙げて五代へ問いかけた。それは、彼女が一番クウガが好きだからこその質問。だが、それは五代にとっては一番思い出したくない事に繋がるもの。

――五代さんは、最後どんな奴と戦ったんです？

純粋な疑問。そこに他意はない。興奮していたのもあるのだろう。光太郎も翔一も、自分達の戦いを語る事に少しも嫌悪感を示さなかったのも、それに拍車を掛けたのかもしれない。しかし、五代は二人とは違う。

ゴルゴムもクライシスもアンノウンも多くの犠牲者を出した訳ではない。確かに犠牲になった者達もいる。だが、それが世間として大きく取り上げるレベルになったのは、かなり時間が経過してから

だった。だが、彼が戦った未確認生命体はすぐに世間に知れ渡り、その恐怖は日本中を襲ったのだ。そう、彼らは明確に殺人をゲームとして行なっていたのだから。

スバルの問いかけを、五代は誤魔化す事が出来た。しかし、それを良しとしなかったのだろう。搾り出すような声でたった一言だけ告げた。

「……未確認の王様みたいな奴だったかな」

思い出すのは、たった一人で三万人もの人間を殺した第０号の事。そして、あの吹雪の中での殴り合い。嫌な感触を感じながら、拳を振るったあの時。どこまでも嗤いながら暴力を振るっていた第０号。それに対し、涙を流しながら暴力を振るった五代。

まさに誰も知らない世界の命運を賭けた殺し合いだった。そう、殺し合いだ。決して戦いなどと五代は表現しない。彼にとって、クウガになって戦う事はそういう意味なのだから。

人間のために怪人を殺す。歴代の仮面ライダー達も、どこかで戦いに嫌悪感を感じていた。だが、それを持ち前の正義感と優しさで抑え込み、拳を振るい続けたのだ。しかし、それが心の負担となっていたのは言うまでもない。五代は、それがもっとも大きかった。

誰よりも暴力を振るう事を嫌う五代。クウガになって戦う事は、彼から笑顔を奪う事だった。勿論、彼だけではない。争う哀しみを仮面に隠し、ライダーは戦い続けたのだから。光太郎や翔一が自らの戦いを語る事に嫌悪感がないのは、彼らの相手が最初から異形の怪物だったためだろう。五代が相手にした未確認は、元々人類と同じ存在だった。故に、余計に五代に殺人を意識させる事に繋がったのだから。

そんな五代の声から何かを感じ取ったのか、スバルは何も言えなくなった。それだけではない。先程まで周囲にあった熱気が一気に冷めたのだ。五代は、ムードメーカーである。いつも笑顔を絶やさず、太陽のような存在。それが、初めてなのは達の前で見せる影。

それに誰もが驚き、そして同時に悟ったのだ。五代にとって、クウガとしての記憶は思い出したいものではないのだと。

「……ごめんなさい」

「ううん、いいんだよ。気になるよね、こういうのって。俺も、好きなドラマの最終回とか見逃すと気になるから。分かるよ、スバルちゃんの気持ち」

五代は申し訳なさそうなスバルの声に、明るくそう答えた。それが五代の気遣いだと誰もが気付く。それでも、誰もそれを口にしない。そんな気まずい雰囲気を感じ取り、何とかそれを変えたいと五代は思って動き出す。

そして、厨房からボウルやコップなどを持ってきて、それをお手玉の要領で動かし始めた。ジャグリング。五代の技の一つだ。その光景にキャロとエリオは懐かしさを感じ、スバル達はその突然の行動に呆気に取られるものの、その見事さにそのまま見つめた。

しばらくその曲芸は続き、誰もが感動はしないものの感心はしていた。いや、ツヴァイやアギトなどは感嘆の声を上げていた。やがて、それを器用に近くにいたスバルやティアナ達へと投げ渡し、五代は笑顔で締め括った。

「これが、俺の二千の技の一つ。ジャグリングです」

それにツヴァイとアギト、それにキャロとエリオが拍手をした。

それに呼応するようにスバルやティアナ達も拍手をし、食堂を拍手の音が包んだ。それに五代は嬉しそうに笑みを見せて、一礼した。

そこには、先程の気まずさはなかった。だが、まだぎこちなさが残っている。そう、ジェイル達と六課の間にある壁のようなものだ。先程も拍手をしたのは、六課の者達に加えてセインやウェンディ、アギトなど限られた者だけだったのだから。それを感じて五代はある話をする事にした。それは、五代が感動した恩師の教え。そして、その後の彼を、五代雄介を五代雄介たらしめる事になった思い出。

――五代雄介……こういうのを知ってるか。

「真司君達は……これ、知ってるかな？」

脳裏に思い出すのは、恩師である神崎昭二の言葉と姿。一方、スバル達は、突然五代が話し出した事に呆気に取られた。それはそうだろう。彼が聞いているそれは、彼が広めたとも言える仕草なのだから。

――古代ローマで、満足出来る、納得出来る行動をした者にだけ与えられる仕草だ。お前も、これに相応しい男になれ。

「古代ローマで、満足出来る、納得出来る行動をした人にだけ与えられる仕草なんだ。みんなも、これに相応しい人になって欲しい」

しかし、徐々にだが誰もが気付いていく。それは、五代が誰かに言われた事を再現しているのだと。そう、五代がしているのは、彼の代名詞とも言えるサムズアップなのだ。

そして五代の話す姿を見て、誰もがぼんやりとだが別の人物の影を見ていた。学校を知る者は教師を、知らぬ者でも誰かに物を教える者を想像した。

――お父さんが亡くなって、確かに悲しいだろう。でも、そんな時こそ、お母さんや妹の笑顔のために頑張れる男になれ。

「家が無くなって、確かに悲しいと思う。でも、そんな時こそ、大切な人や家族の笑顔のために頑張れる人になって」

恩師が自分へ語りかけてくれたその言葉を、想いを噛み締めるように思い出しながら、五代は語る。あの時の自分が受けた感銘。それを、この場にいる者達にも感じて欲しい。これから待ち受けるだろう過酷な戦い。それを、全員が生き残れるように。

――いつでも誰かの笑顔のために頑張れるって、凄く素敵な事だと思わないか。

「いつでも誰かの笑顔のために頑張れるって、凄く素敵な事だと思うから」

その言葉に、誰もが五代の原点を知った。これが五代を今のような男にしたのだと。

「五代さん……今のって……」

ジェイル達が何とも言えない気持ちになっている中、真司が何かを確かめるように声を発した。それに五代も何を言おうとしたのか気付いたのだろう。小さく頷いて、話し出した。

「これ、俺が小学校六年生の時に、先生から教えてもらった言葉を少し変えたものなんだ。俺さ、これにすっ……ごく感動して。絶対、これに相応しい男になるんだ！　……って思ったんだ」

その五代の懐かしむような声に、なのは達は心打たれていた。話を聞いて感動したり、憧れる事はあるだろう。だが、それを時間と共に忘れてしまうのが普通だ。しかし、五代は忘れなかった。いつまでもその時の想いを、感動を失う事なく今日まで生きている。

それがどれ程尊敬に値するのか知らぬスバルではない。いや、スバルだけではなく、誰もが改めて五代の凄さを感じていた。それがただ信念としてだけではなく、行動として出来ているのが五代の凄さなのだから。

そんな五代は、何事もなかったかのようにスバル達に渡したボウルなどを回収して厨房へと向かう。そして、五代が戻ってきたのを見て、ジェイルが声を発した。

「……私も話をしてもいいかな？」

ジェイルの窺うような声に、はやてがどうぞと頷いた。それにジェイルは頷き、立ち上がって五代のいた位置へ歩き出す。

「じゃあ、私の話も聞いて欲しい。何、彼らと違い私自身の話ではないよ。邪眼がこれから取りうるだろう動きについてさ」

それに六課の者達と真司の表情が変わる。一方ナンバーズは、上の姉六人とディエチはどこか納得したように頷き、下の五人は真司と同じように驚きを見せていた。

「奴は、私の作った物を利用して動いている。おそらくだが、それは私が真司と出会った頃まで思い描いていた計画を基にしている」

ジェイルは、そこから語り出す。それは、本来ならば真司へ新た

な力を託す際に教えるはずだった過去の話。管理局転覆にも近い犯罪。その一部始終だった。そして、ジェイルはマリアージュにも言及した。そう、軍団長のデータを使って怪人を作る可能性もあると予想したのだ。

そして、マリアージュの厄介さと凶悪さを聞き、誰もが言葉を失った。死者を喰らい、自身とする増殖機能。死ぬ際は恐ろしい程の爆発を起こし、火災の原因にもなりかねない特徴。それら全てが危険物でしかなかった。

「……最終的には、聖王のゆりかごを使うだろうね。それで、ミッドチルダを攻撃するつもりだ」

「聖王のゆりかご……名前から察するに、恐ろしいもん持っとったんやな」

「だが、それを使うためにはある者が必要不可欠だ。そう、聖王家の一族だよ」

ジェイルがそう語った時、真司が勢い良く椅子から立ち上がる。思い出したのだ。かつて聖王の話を聞いた時、ジェイルから会えるかもしれないと言われた事を。

「まさかっ！？　あの時会えるかもって言ったのは……」

「覚えてたんだね。そうさ。私は聖王の血を、正確にはその遺伝子を手に入れていたんだよ」

「……そして、それを使ってコピーを作った」

フェイトがやや怒りを滲ませて告げる。それをしっかりと受け止

めてジェイルは頷いた。

「……そうだよ。今なら決してやろうとも考えないだろうね。ともかく、それを邪眼も手に入れようとするだろう。だが、そちらに関しては下手に動かなくてもいい」

「どうしてです？」

五代の質問にジェイルは少しだけ苦笑して告げた。その作られた聖王のコピーは、ある者達がそれと知らずに時期が来るまで培養し、自分のラボへ運ぶ手筈になっている。自分の下でそれをしなかったのは、設備が埋まっていたから。ナンバーズとトイだけで手一杯だったのもある。

そのため、ジェイルさえどこでそれをしているかは知らないのだ。それは、万が一のため。下手に監視などをして勘付かれ、調べられて聖王のコピーと分かれば相手に利用されかねないと考えたのだ。

故に、ジェイルはとある実験用の素体と言って彼女を預けたのだから。それを聞いてはやて達も納得はした。だが、すぐにとある問題に気付く。

「ちょっと待って。それじゃ、いつか邪眼のところにその子は運ばれるんですか？！」

なのはの言葉にジェイルは真剣な表情で答えた。

「そうなるが、心配はいらないよ。それを知っているのは私だけ。それ自体は会話のみで、データは残っていないし、邪眼は精々聖王のコピーがいるとしか知らない。別のコピーを作りたくても、もう遺伝子はないしね。そして輸送ルートは予測出来るし、後はそこで待ち受ければいいだけさ。時期は、確か予定通りだとおそらく……

後一月半から二月後ぐらいだね」

「その間に私がＩＳを使い、培養しているだろう施設に当たりをつけます。それと同時に、万が一に備えてもおきますので」

ウーノがそう締め括ると、なのはも理解はしたのか少し安堵の表情を見せた。そして、ジェイルは更に全員へ告げた。

「後、先程話に出たマリアージュだが、それを生成する存在の居場所も突き止めるべく動こうと思う。邪眼が知る事はないが、マリアージュを作り出せば、嫌でもその個体が話すだろうからね。時間は多少掛かるだろうが、必ず公開意見陳述会までには見つけてみせるさ」

「……公開意見陳述会、か。やはりそれを狙っていたのだな」

「確かに、次元世界中に管理局の敗北を見せ付けるにはうってつけの舞台だわ」

シグナムとシャマルがジェイルの口から出た期限に、そう告げた。はやてもフェイトもなのはも同じ気持ちだった。多くの報道機関が詰めかけ、一般の人々の目に触れる機会だ。その警備は厳重極まりない、それを少数で突破し、痛手を負わせたとなれば管理局の権威失墜は大きい。

ジェイルの狙いは、実に単純。故に効果は大きい。邪眼が同じ舞台を選ばないはずはないだろうと誰もが思った。邪眼が遊んでいるとすれば、そこそが遊びの最後を飾るだろうと考えたのだ。

仮面ライダーとその協力者達。更に次元世界を守る管理局までも無力化して見せる事で、多くの者達に絶望という名の闇を与えるそ

のために。

「そんな事、絶対させない！」

「そうです！　俺達が力を合わせれば、邪眼なんて！」

真司と翔一が邪眼の企みに対し、強い怒りを見せる。それに周囲も同調していく。

「わざわざ待つ必要もないよ。あいつらの居場所は分かっているんだ！」

「そうだ！　アタシ達全員で攻めれば、邪眼共を驚かしてそのまま勝てるぜ！」

セインとノーヴェがそう言えば……

「ノーヴェの言う通りッス！　向こうはアタシらを舐めてるッスから、そこを突けば……」

「油断している今が好機とも言えます。奴も、我々がいきなり総攻撃をかけてくるとまでは思わないでしょう」

ウェンディが握りこぶしを作り、ディードも少し興奮気味にそう告げた。それにスバル達も賛同しようと立ち上がった瞬間だった。光太郎がそんな熱気を冷ますようにはっきりと告げた。

「……俺は、反対だな」

「俺も光太郎さんと同じだよ。まだ、邪眼の本拠地に行くのは早い

と思う」

更に五代までがそれに呼応する。見れば、ウーノ達上の姉達に、はやて達さえも同じような意見なのか冷静な表情をしている。

「俺は、数多くの怪人と戦ってきた。その経験から言わせてもらえば、未知の怪人と戦うのは危険が付き物だ」

「俺もそう。未確認も凄く恐ろしい力を持った奴ばかりだったんだ。でも、その力を警察の人達が分析したり、解明して対抗策を打ってくれたから勝ってこれたんだよ」

二人はＩＳの厄介さを直に感じたために、改造機人の恐ろしさをはっきりと告げた。きっと邪眼はまだ戦った事のない怪人を送り込んでくる。それらと戦い、情報を得てからでも攻めるのは遅くない。光太郎はそう考えていると周囲に説明した。

シグナム達もそうだった。フュンフのＩＳを応用した攻撃には苦しめられたのだ。しかし、翔一はドライのＩＳにそこまで苦しむ事が無かったために、そこまで脅威を感じる事が出来なかったし、真司は全員のＩＳを知っていた。そのため、二人は改造機人の恐ろしさをあまり感じる事が出来なかったのだから。

「……つまり、邪眼がこちらを侮っている間に情報を集め、各怪人への対抗策や手段を構築しておこうと？」

「そうだね。ライダーが四人いるのなら、怪人を最低でも四体相手出来る。向こうが同じ怪人を送ってくる事は当分ないだろうし……」

グリフィスの言葉に光太郎がそう応じた。しかし、その最後の部分にアギトが疑問を感じたのか、こう尋ねた。

「何でさ？」

「一度負けた相手を、すぐに送る程邪眼も馬鹿やないだろうって事や。つまり、こちらが知らん怪人を送って情報収集するはず」

「シグナムやヴィータがフュンフから聞いた話だと、邪眼は仮面ライダーのデータを欲しがってるみたいだし、ね」

その疑問には、はやてとフェイトが答えた。それを聞き、真司達は納得した。光太郎と五代は、邪眼がデータを集める事を利用し、逆に自分達が怪人のデータを得ようと考えているのだと。

しかし、光太郎はともかく五代は違った。彼は純粋に、なのは達が何も知らないまま怪人と戦う事は避けたかっただけ。魔法生物などはよかった。何故なら、魔法生物は元々管理世界にいた存在。しかも、クロノ達から聞いた管理局の常識では、子供であっても大人のように扱われるのが局員だ。それに、多くの情報や支援が確立している状況なら、例え子供のなのは達でも戦場に立たせる事にそこまで抵抗はなかった。

しかし、怪人は違う。あれは、例え大人であろうとも普通は人間が戦える相手ではない。一条達でも、様々な条件や武器を揃えて何とかだったのだ。いかになのは達が魔法を使えるからといって、その戦場に何も知らないまま立たせる事は出来ない。五代はそう考えていたのだから。

本音を言えば、五代は自分達ライダー以外を戦わせたくない。特にエリオやキャロといった子供達などは。だが、それを直接言う程、五代は管理世界の常識を知らない訳ではなかった。二人は、幼いながらも決意と覚悟を持って局員になったのだから。

（なら、一緒に戦うしかないよね。出来るだけ危険にならないように、俺達が頑張って）

決して守るなどとは言わない。エリオもキャロも自分にはない力を持った者。ならば、あの邪眼との戦いでのなのは達と同じだ。矢面に立ったのは自分達。それを後ろから支えてくれたのが、なのは達なのだから。

「とりあえず、当面は専守防衛や。それと、出来るだけライダー達が邪眼が知らん力や技は使わんですむよう、私らが援護するから」

はやての言葉に四人が頷いたのを見て、はやてとなのは達も頷きを返す。

「私やウーノはトイのＡＭＦを何とか出来るようにしよう。シャリオ君だったね？　設備だけでなく、手伝ってくれると助かるよ」

ジェイルは視線をウーノへ向けてから、シャーリィへそう告げた。それにシャーリィは少し考えるも、決意を固めて力強く頷いた。それを見て、もう話し合いは終わったと誰もが感じ取った瞬間だった。

「みんなで頑張りましょう！」

五代がそう締め括ってサムズアップをする。それに六課の者達は揃ってそれを返し、ジェイル達はやや困惑した。意味自体は先程の話で聞いたが、やはりまだ抵抗があるのだろう。

すると、五代は光太郎と翔一を呼んで何かを話した後、真司へ視線を向けた。それに気付き、真司が何かと思って視線を返す。それに五代は笑顔を見せて手招きした。

「……じゃ、行くよ？」

「っしゃあ！」

何かを五代から聞かされ、真司は気合十分とばかりにそう答えた。

そして……

「「「みんなで頑張ろうっ！」」」

四人の笑顔とサムズアップ。今度は真司が加わった事で、ジェイル達もそれを返す事が出来た。こうして全員がサムズアップを送り合って、この日は終わりを迎えた。

これが、機動六課の本当の戦いの日々の始まり。そして、後に語り継がれる事になる伝説の始まりでもあった……

―――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――

新生六課。四人のライダーとなのは達にジェイル達を加えたドリームチーム。

だが、邪眼の戦力は闇の書事件の比ではないのも事実。これだけ揃えてやっとの状況です。

次回は、完全日常編です。

朝日がカーテンの隙間から差し込む室内。そこでは、五代と翔一が二段ベッドで寝ている。そして、ソファベッドにも誰かが横たわっている。その人物は、窓から差し込む光に若干見じろきするが、起きる気配はない。

代わりに、二段ベッドに寝ていた五代が目を覚ました。上の段で寝ていたので、窓からの光が入ってきたのだ。翔一は下の段なのでその光があまり差し込まない。五代は静かに目を覚まし、伸びをする。そして、ゆっくり梯子を下り、窓のカーテンを完全に開け放つ。

「……翔一君、真司君、朝だよ」

その声にソファベッドに寝ていた人物――真司が目を覚ました。翔一も同じように目を開け、伸びをしようとして上のベッドに腕をぶつけた。その音に五代と真司が少しびっくりし、視線を翔一の方へ向けた。

「……すいません」

「またやったんだ」

「またって……いつもの事なんだ」

苦笑する翔一へ五代がそう言って笑う。それを聞いて真司がやや呆れるように笑みを見せると、翔一と五代が揃って苦笑しながら頷いた。そう、あの後真司は、五代と翔一と同じ部屋に割り当てられた。ジェイルと同じ部屋がいいのではと真司は思ったのだが、はやて達はそれを却下した。

理由はジェイル自身がそれを望まなかったからだ。ジェイルは、真司が五代達異世界のライダーから様々な話を聞いて、自分の糧にして欲しいと考えた。それに、ジェイルは一人で考えたい事もあるのだ。故に、彼ははやて達に一人の部屋にして欲しいと頼んだのだから。

こうして真司は五代達と同じ部屋となり、本来ザフィーラが使うはずだったソファベッドが真司の寝床になったのだ。

「……さ、じゃ顔とか洗って食堂の仕込みに行こうか」

「そうですね」

「はい」

五代の言葉に頷いて、二人も動き出す。それぞれ洗面所へ向かい、順番に顔を洗いながら他愛もない話をする。そして、三人揃って歯みがきをして、着替えてを終えてから部屋を出て行く。歩きながら互いの世界の話をし、三人は寮を出たところで光太郎と会った。

光太郎も三人を見て挨拶をした。彼はザフィーラと毎朝手合わせをしているのだ。真司はそれを聞いて、自分も何か鍛える事をした方がいいのかと質問した。それに光太郎は少し考えたが、軽く笑って答えた。

「真司君の好きにすればいいよ」

「好きに？」

「そう。俺だって最初から鍛えていた訳じゃない。でも、怪人と戦うなら体は鍛えた方がいいと考えたんだ。変身出来ない時やする前

に襲われた時、少しでも対抗出来るようにね」

光太郎の話を聞いて、真司だけでなく五代達も頷いていた。彼らも怪人と変身する前に戦闘するはめになった事がある。その際、確かにいいように翻弄されてしまったのだから。それを思い出し、五代と翔一は光太郎の意見から、実に多くの怪人と戦ってきたのかを理解した。

きっと、光太郎は自分達よりも変身する前を襲われる事があったのだろうと。だから、そのための対処法を必要としたのだろう。二人はそう判断し、同時に思う。自分達もこれからそういう機会があるかもしれない。ナンバーズと外見が似ている改造機人は、暮らしの中に入り込んでくる可能性もあるのだから。

「あ、ザフィーラさんは？」

「訓練場の方へ行ったよ。今日は彼女達の初訓練を兼ねた全員での模擬戦だからね。はやてちゃん達もいるはずだ」

翔一の言葉に光太郎はそう答えて視線を訓練場へと向けた。それにつられるように五代達も視線を動かした。

「……ちょっと見に行こうか？」

「あ、俺行きます」

「じゃあ……俺も。ティアナちゃんの頑張ってるところ、見てみたいし」

「……なら、俺も行こうかな」

五代の提案に真司が是非と賛同し、翔一もティアナの訓練風景を一度見てみたいと思い賛同した。光太郎は、ふと今後戦うであろう怪人戦を見越した助言を与えるべきかと考え、頷いた。

こうして四人は揃って訓練場へと向かって歩き出す。その間の話題は、真司の世界のライダーについて。個人が作り出したシステムにより変身すると聞いて、三人は驚きを浮かべた。更に、改造などしなくてもデッキがあれば変身出来るという話に、三人は感心すると共に少し暗い表情を見せた。

「……それ、極端な話、誰でもライダーになって、恐ろしい力を使えるって事だよね？」

五代の告げた言葉に真司は真剣な眼差しで頷いた。分かったのだ。何を三人が考えたのか。彼らと違い、ライダーになる事に条件も何もいらないとなれば、単純に子供でも極悪人でもなれるという事。それは、本来正義を、平和を守るための存在であるライダーをまったく逆の存在へと変える事になりかねない。

実際、真司は知っている。犯罪者である浅倉がライダーの力を手に入れ、欲望のままにそれを振るっている事を。だが、それを真司は五代達に言う事はしなかった。言えば、それが愚痴になる。更に、それから発展してライダーバトルの話になろうものなら、きっと五代達は何とかしたいと考えるだろう。

真司の世界を助けたいと。出来るのなら、そんな悲しく理不尽な戦いを止めたいと。それは、真司にとっては甘い毒。自分の力で自分の世界を変える。そう決意した以上、五代達の優しさに甘える事は出来ない。

（その気持ちだけで十分だ。俺は、五代さん達の姿と生き方から、戦う勇気と諦めない希望をもらったんだ。俺達の住む世界は、俺達

で守る。それは、決して忘れちゃいけない事なんだ）

だから、三人に心配や不安を抱かせる事はあまり言わないようにしよう。真司はそう考え、三人へ話したのは、どのライダーもミラーモンスターと契約しているので、定期的にミラーモンスターを倒さなければ、契約が維持できずに力を失ってしまう事だった。

それを聞き三人は、ならば永久にモンスターを倒し続けなければいけないのではと考えたが、真司はそれにこう告げた。必ず戦いを止める術はあるはずだからと。それをいつか見つけ出して戦いを止めてみせる。そう言い切ったのだ。

「……そっか、真司君も仮面ライダーだもんね」

「はい！　俺、仮面ライダー龍騎ですから」

五代の言葉に真司は笑顔で頷き、力強く言った。それを聞き、光太郎が少し考えて呟く。

「龍騎、か。中々迫力ある名前だね」

「え？　俺は光太郎さんの方が凄いと思いますよ。太陽の子なんて名乗るんですから」

名乗りが一番強そうなのはＲＸだと、そう翔一は告げた。それを聞いて真司が自分も何か考えようかなと言い出し、五代も翔一もそれに考えこむ。光太郎は、そんな三人に苦笑した。自分が名乗ったのは、生まれ変わったからこそのもの。以前は、ただ仮面ライダーＢＬＡＣＫとしか名乗っていなかったのだから。

それを光太郎が話そうとした時だ。前方から凄まじい爆音が響き

渡ったのは。

「……凄いな」

光太郎の呟きは、五代達の呟きでもあった。訓練場を舞台に、なのは達隊長陣とスバル達四人がチームとなり、ナンバーズを相手取ってした。数の上では勝るナンバーズだが、なのはとフェイトの二人が揃って主戦力たるトーレとチンク、セッテを抑え、シグナムがディードとオットーを、ヴィータがなのはとの戦闘経験を活かし、ディエチとウェンディを苦戦させていた。

スバルとノーヴェが一騎打ちの様相を呈すれば、ティアナはクアットロと幻術対決をしているし、エリオは素早い動きでドゥーエを撹乱している。キャロはフリードの背に乗り、上空からセインを攻撃していた。どうも、ＩＳによる奇襲を出来なくするためのようだ。

ウーノはそんな妹達を何とか支援しようと戦略を練るが、それを上回る速度でなのはやフェイト達隊長陣が戦術をかき乱すので、それが上手くいかない。

そんな光景を見ている四人に、やや離れて見ていたザフィーラが静かに近付いた。それに気付かず、真司は思った事を素直に呟いた。

「嘘だろ……トーレ達が完全に抑え込まれてる」

「フェイトちゃんは元々高速戦闘が得意だ。そしてなのはちゃんは、そんな彼女と幼い頃から模擬戦などを通じてその速さに慣れている」

「シグナムは、そんなフェイトやなのはが未だに苦戦する実力者だ。ヴィータはそのシグナムをして、守りに徹すれば勝つ事が出来ないと言わしめる相手だからな」

光太郎がなのはとフェイトの両隊長の説明を。ザフィーラは両副隊長の説明をし、真司がそれに頷いて納得の表情。

「スバルちゃんは、ノーヴェちゃんだっけ？　あの子と同じような戦い方だけど、お母さんやギンガちゃんから色々教わってるから」

「ティアナちゃんは、どうも相手を抑え込む事だけ狙ってるみたいだし、エリオ君やキャロちゃんも勝ちを狙ってないですね」

五代と翔一は揃ってスバル達四人の説明をした。それを聞いて真司は、やはり六課に来たのは間違っていなかったと感じていた。自分は集団戦をした事がない。つまり、ナンバーズは基本集団戦の経験を持つ者がいなかったのだ。

だから、今回はそれが差として出てしまった。いかにウーノが指示を出そうにも、それはなのは達からすれば簡単に理解出来る事なのだ。いくらデータ共有があるとはいえ、実際やってみなければ分からない事は往々にしてあるのだから。

そう、真司はナンバーズを数ではなく、実力で抑え込んでいるなのは達を見て、驚きを感じていた。そして光太郎達が告げる話を聞いて、その驚きに納得を与えていく。しかし、五代達はそんな風に感心する真司に対し、逆に自分達も感心している事を伝えた。

何せかなりの実力者であるなのは達を相手に、五分の戦いをしているのだ。特に、シグナムやヴィータは守護騎士として幾多もの戦いを経験している。それを相手にし、数がいくら多いとはいえ互角に渡り合うのなら大したものだと。

そう感じたからこそ、五代達もナンバーズへ賞賛を送る。そのまま実に五分以上も、ナンバーズはなのは達を相手に善戦を続けた。

しかし、セインがキャロが空から降りてこないと踏んで、苦戦する姉妹の応援へ向かったところからその膠着が崩れた。

そう、セインが動けばキャロも動ける。しかも、フリードのブレスは中々に厄介だ。上空から地上へ攻撃出来るのだから。セインが向かった相手も悪かった。ノーヴェの援護。それは、完全に陸戦だったからこその選択。

しかし、空を飛べない三人に対し、キャロは限定的ではあるが空戦の手段を有していた。つまり、スバルは空からの支援を受けて戦う事となった。セインがＩＳでスバルの不意を突こうとしても無駄だった。常にマッハキャリバーで動き回るスバルを捉えるのは、セインでは厳しかったのだ。

こうして、セインとノーヴェがスバルとキャロの前に敗北し、力の均衡が崩れた。そこからはまるでドミノ倒しのような展開となる。スバルがティアナの、キャロがエリオの援護へ向かい、それでやや押していたクアットロ達が苦しくなったのだから。

「……良くも悪くも経験になる展開だ。スバルちゃん達は、味方を信じて戦い続けて、その努力と辛抱が必ず報われるという事を知っただろう。逆に彼女達は、どれだけ相手を抑えていても、相手が一人増えるだけで簡単にそれを覆される事もあると思い知っただろう」

「そう、ですね」

光太郎のどこか満足そうな言葉に、翔一が頷く。これが訓練だからこそ、光太郎の言う言葉は正しかった。経験として積める時に積む。実戦では、これは危険に繋がるのだから。

「均衡って、崩れ出すと早いんだ……」

「あ～……こりゃ、後でセインがみんなから怒られるかな？」

五代は、初めて見る集団戦の怖さと凄さを象徴する光景に息を呑み、真司はそのキッカケを作った妹分へ苦笑いと同情の想いを送る。そうして、四人の見ている前で最後に残ったトーレがフェイトに負け、訓練は終了となった……

疲れ果てた十二人。しかし、見ればなのは達四人はともかく、スバル達四人も同じように疲れ果てていた。

「……凄いな。さすがはエースオブエースと言ったところか」

「あ～、やっぱりその呼び方を知ってるんだ」

チンクの言葉になのははそう苦笑い気味に答えた。それにチンクも苦笑を返し頷いた。知らない方が珍しいだろうと告げて。それになのはが小さく笑みを見せた。認めたくないが、そうだろうと思ったのだ。

チンクはそんななのはの笑みを見て、柔らかい笑みを浮かべた。やはりどれだけ凄いと言われていても、人の子なのだと感じたからだ。そうして、二人はそのまま笑みを見せ合う。

「騎士の名は伊達ではないと言う事ですね。感服しました」

「是非、また手ほどきを」

「いや、私は物を教える事は出来ん。しかし、確かお前達は双子だったか。見事な連携だった」

オットーとディードの言葉に、シグナムはやや苦笑したものの、二人の戦い方を思い出し心から誉めた。それに、二人は嬉しそうに笑みを見せる。シグナムはそんな二人に優しい笑みを浮かべ、頷いた。

仲の良い双子だと思っただけではない。見ていて、実に心が穏やかになる笑顔だったのだ。故に思う。こんな二人が戦いの中ではなく、平和な暮らしの中で生きられるようになって欲しいと。まるで姉のような表情で、シグナムは二人を見つめ続けるのだった。

「驚いたよ。まさか、私にここまでついてくるなんて」

「いや、私こそ同じ気持ちだ。さすがはライトニングの隊長なだけはある」

「お見事でした」

感心したようなフェイトの言葉に、トーレが同じように声を返し、セッテがそれを肯定して頷いた。そして、三人は同時に笑みを見せた。口に出さずとも分かる。いつかまたやろうと思っているのだ。高速戦闘に対処出来る者はいる。だが、高速戦闘が出来る者はそう多くない。

だから、こう思ってしまったのだ。楽しいと。全力で速さを追求し、動き、戦える。翻弄するのではなく、速度の限界を迎えてからが勝負となる感覚。それが堪らなく嬉しかったのだ。故に、無言ではあるが視線で約束する。またやろうと。

「中々やるじゃねぇか。実戦経験がないのに立派なもんだ」

「……それほどでも」

「いやぁ～、ヴィータさんこそさすがッス。ベルカの騎士は、二対一でも強いんスね～」

笑みさえ浮かべるヴィータ。それにディエチは小さく苦笑を返し、ウェンディは疲れた表情のままそう答えた。そんな二人にヴィータは満足そうに頷いた。そう、二人はヴィータが一番気にする身長に一切触れなかったのだ。それどころか、ちゃんと年上として敬意を払い、敬語さえ使っているのだから。

ヴィータは知らない。二人には、チンクという身長が低いが立派な姉がいる。故に、ヴィータへの態度はそこからの経験によるものだ。チンクも身長を気にしている。そう、二人はそれに触れる事が自分達にどういう結果をもたらすかを熟知しているのだから。

そんな風に隊長陣と戦っていた者達は比較的明るい雰囲気だったのだが、新人組と戦っていた者達はそれとは違う空気感を漂わせていた。

「……色々と似てるね、私とノーヴェ」

「……ああ」

「今度さ、ゆっくり手合わせしようよ。シューティングアーツ、教えるから」

「……考えとく」

スバルの申し出にノーヴェは嬉しく思うも素直に頷けず、そう返す事しか出来ない。自分のモデルとなった相手。そう知っているからこそ、ノーヴェはスバルにどう接していいか分からなかった。会

いたいと思っていた相手。クイントからある程度話を聞き、理解は深めたつもりだ。
だからこそ、余計に何を話したらいいのか分からない。でも、これだけは言っておこう。そう思い、ノーヴェはスバルの方を向いて告げた。

「あ、ありがとな……スバル」

「……うんっ！」

名前で呼んでもらえたのが嬉しかったのか、それともノーヴェが礼を告げたのが嬉しかったのか。どちらにしろ、スバルは心から笑顔を見せて頷いた。それにノーヴェはやや照れくさくなったのか、再び顔を背けるのだった。

「驚いたわぁ。まさか、魔法でＩＳに対抗するなんて」

「……かなり危なかったけどね。勝てたのは、運が良かっただけ。個人じゃ、貴方には勝てないわ」

どこか感心したようなクアットロに、ティアナはそう答え苦笑した。実際、あと少しでもスバルが来るのが遅れれば魔力が底を尽き、クアットロの幻影に飲み込まれていただろう。そう思うからこそ、ティアナは正直にクアットロの力を認めた。

「でも、貴方の力を上手く使えば、かなりみんなを助ける事が出来る。アタシなんか比べ物にならないぐらい精巧だもの」

「あら？　私は貴方の方こそ精巧だと思うわよ。何せ、かなり負担になる幻術をあそこまで緻密に作り上げているのだもの」

「……そう？」

「ええ。敵じゃなくて良かったって思うぐらい」

クアットロが笑みと共にそう告げると、ティアナはそれに嬉しそうに笑みを浮かべ、噛み締めるように何かを呟く。

それが先程自分が言った言葉だと気付き、クアットロは微笑みを浮かべた。そして、二人は互いの顔に笑みを浮かべて見せ合い、告げた。

――――アタシも同感よ、クアットロ。

――――同意が得られて嬉しいわ、ティアナ。

互いの名を呼び合い、二人は小さく笑う。敵じゃなくて良かったとの思い。それは裏を返せば味方だと思ったという事。故に二人は笑う。信じる事が出来る。互いに同じ思いを抱いたのだからと。

「やるじゃない坊や。まさか、勝てる勝負を捨てるとは思わなかったわ」

ドゥーエの言葉にエリオは不思議そうな視線を返す。

「……どういう事です？」

「その気になれば勝てたでしょ？　坊やのスピードに、私はまったくついていけなかったのだから」

「……本当にそうならそうしてます」

エリオは声にやや警戒するような気持ちを込めた。それにドゥーエは意外そうな顔をしたが、すぐに笑みを浮かべて頷いた。

「……気付いてたの」

「僕だって、ただ何も考えずに槍を振るっている訳じゃないんです。相手の動き、思考、そういう事を予想したり考えながら戦っているつもりです」

エリオはそう言って、ドゥーエへ尋ねた。自分がここぞと思った瞬間、必ず何か嫌な予感がしたのは何故なのかと。それにドゥーエは嬉しそうに笑う。まるで姉が弟を誉めるような優しい笑みで。

ドゥーエは、エリオの動きにはついていけなかった。だが、見えてはいた。だからこそ、エリオが勝負を着けに来た瞬間を狙おうとしていたのだ。その感覚をエリオは直感的に察知したのだろう。だから、いつも決め手を放つ事が出来なかったのだ。

「……て訳よ」

「やっぱりそうだったんですね。目線が僕を追ってたんで、もしかしたらと思ってました」

そんなドゥーエの狙いを聞いて、エリオはどこか納得したような表情を浮かべていた。

「ふ～ん……小さくても騎士って事かしら」

「そんなんじゃないです。でも、誉めてくれてありがとうございます」

エリオはドゥーエの妖艶な笑みと頭を撫でる手にドギマギしながら、そう答えるだけしか出来なかった。それにドゥーエが余計に可愛らしく思い、その体を軽く抱き寄せ囁く。

――ね、年上のお姉さんは嫌い？

それにエリオは赤面した。無論、それがからかいだと理解はしている。だが、理解していても間近に感じる女性特有の諸々が、エリオに与える影響は大きい。フェイトとは違う暖かさ。それは、親代わりを心掛けたフェイトとは違い、ドゥーエは長年姉をやってきたからだ。

同じようで違う心構え。それに、ドゥーエは弟を持った事はない。だからだろう。エリオの事を少し気に入ったのだ。素直で謙虚。実にからかい甲斐のある相手なのだから。

「クスッ、冗談よ。でも、好きだと嬉しいわ」

「……僕、ドゥーエさんみたいな人、苦手かもしれません」

エリオのどこか困ったような声に、ドゥーエは小さく微笑む。きっと、この子は好青年になるだろう。その時、隣にいる相手は幸せ者だ。そんな感想を抱き、ドゥーエはエリオへ告げた。なら、嫌われないように気をつけると。それにエリオは何とも言えない表情を浮かべるのだった。

「……えっと」

「いいんだよ。あたしが動いたせいで負けちゃったんだしね」

キャロは目の前で落ち込むセインに、何と言って声を掛ければいいか分からなかった。確かにこの結果を導いたのはセインの行動だったのだから。でも、キャロはセインが悪いとは思っていなかった。自分が逆の立場でも、あそこで動いたのだから。

状況を変えなければいけない。そう思い、行動したセイン。その気持ちも考えも分かる。だから、キャロは何とかセインを励ましたかった。勝負は時の運とも言う。今回こそセインの行いは悪手になったが、もしかすればそれがキッカケで、キャロ達が負けていたかもしれなかったのだ。

「違いますっ！」

「へ？」

だから、セインの言葉を否定したかった。悪い訳ではない。それが今回は良くない方向へ転がっただけなのだ。

「セインさんは、自分に出来る事を一生懸命にやっただけです！それが、たまたま良くない結果に繋がっただけで……行動自体は、良かったと思います！」

「……キャロ」

「だから、自分を責めないでください。私、セインさんが動いた時、少しだけ焦ったんです。セインさんのＩＳは、姿が見えなくなるから」

「でも、分かったんだよねぇ。……ん？　もしかして、見破った方法とかある？」

キャロの言った言葉に少しだけ嬉しくなり、セインは笑みを浮かべる。だが、改めてキャロが語った姿が見えないとの部分から、いかにして自分の位置を把握したのだろうと思った。その質問にキャロは少し申し訳なさそうな表情をし、視線を隣にいるフリードへと向けた。

それからセインは何かに気付き、まさかと思いつつ尋ねた。もしや、フリードが匂いか何かで見つけたのかと。それにキャロは小さく頷いた。セインが移動した際、キャロは一度フリードを地上へと降ろしたのだ。自分を危険に晒す事でセインをおびき出そうと。だが、セインがそれで姿を見せない事に焦りを感じたキャロは、フリードにセインのいる場所が分からないか聞いたのだ。

「……そしたら、フリードが顔を地面に近づけて、急にスバルさん達の方へ動き出したんです」

「それで、か。ははっ、動物の五感を甘くみちゃいけないって事だね」

セインはそう呆れるような感じで言って、キャロを見た。それにキャロが不思議に思い首を傾げる。

「何です？」

「……ん。さっきはありがとって。あたしさ、ああ言ってもらえて嬉しかったよ。優しいんだね、キャロはさ」

そう言って笑顔になるセイン。それにキャロはセインも優しい人だと言って嬉しそうに笑顔を返す。そんな風にそれぞれが互いに小さくではあるが、絆を結んでいくのを見て、ウーノははやてと共に苦笑いを浮かべていた。

「まさか、模擬戦一回でここまで良い方に転ぶなんて、ね」

「やね。でも、ウーノも凄かったと思うわ。一度傾いた流れ、何とか少し食い止めたやないの」

セインの動きから傾いたナンバーズ敗北への流れ。それをウーノは懸命に阻止しようとした。切り崩されたノーヴェ達をただ犠牲にするのではなく、そこへ奇襲としてセッテを送り込み、更に一時的にではあるが、それぞれの隊長陣の応援に向かおうとしていたスバル達へ、ディエチによる砲撃を行なわせ、四人を大いに苦しめたのだ。

「本当に少し、よ。結局それが原因でウェンディがヴィータさんに追い詰められ、ディエチの支援も間に合わず敗北。私が出来たのは、精々負けるのを先延ばししたに過ぎなかったわ」

「それでも、や。何せ、なのはちゃんやフェイトちゃんも、あれには結構ヒヤっとしたみたいやし」

「……ホント？」

「ほんまや。それに、頼もしいとわたしは感じた。さすが姉妹やな。息ピッタリやった」

はやての言葉にウーノは少し自慢げに笑みを浮かべ、断言した。

――――当然よ。私達はナンバーズなんだもの。

その言葉に聞こえていたのか、ナンバーズ全員が頷いてみせる。

そんな光景を見て、なのは達が小さく笑みを見せ、サムズアップを送る。それに一瞬驚くナンバーズだったが、同じような笑みを見せてそれを返した。

そんな心和む風景を見つめ、五代達は笑顔が絶えなかった。まだ少しぎこちないが、ナンバーズのサムズアップも良く似合うと思ったのだ。しかし、五代と翔一には気になった事があった。それは、ウーノの言ったナンバーズという表現。

「……真司君、ナンバーズってどういう意味？」

「えっと、確かジェイルさんが言ってたのは、昔アルハザードとか言う世界があったらしいんです。で、そこの言葉の数字とみんなの名前の響きが一緒だったはず」

「へぇ……だからナンバーズなんですね」

真司の思い出すような言葉に、五代と翔一が納得。しかし、それに五代がこう言った。

――でも、数字達ってあまりいい意味じゃないね。

それに翔一も頷いた。真司は言われてみれば確かにと思ったのか、やや意外そうな表情で考え出した。光太郎はそんな五代の発言に若干これからの展開を予想し、苦笑する。ザフィーラもどうやら同じ想像に至ったのか、苦笑いを浮かべている。

そして、五代が視線をナンバーズへと向け、大きな声で尋ねた。その内容に、光太郎やザフィーラだけでなく、なのは達さえ苦笑する事となる。

「ねえ！　ナンバーズじゃなくて、シスターズじゃ駄目かな～？」

「「「「「「「「「「「「は？」」」」」」」」」」」」

一斉に同じような声を返すナンバーズ。それに五代が今いる位置から走り出し、なのは達の近くへと動き出す。それに呼応し、翔一と真司も走り出す。光太郎はザフィーラと互いに苦笑しながら、その後を歩いて追う。

そして、ナンバーズ達の近くへ着いた五代は、自分の思った事を話し出した。数字達という意味はあまり良くない気がすると。だから、それに代わる総称を考えた方がいいのではないか。そう伝えると、ウーノ達は揃って困惑した。

今までそんな事を考えた事も無かったからだ。しかし、五代の言う事も一理あると思った。確かに数字達というのは、どこか実験対象や機械の管理などを連想させる。そこまで考え、ウェンディが手を挙げて五代へ尋ねた。

「なら、何か良い案ないッスか？」

「あれ？　さっきのは駄目？」

「駄目ッス」

「厳しいなぁ……」

容赦のないウェンディの返しに、五代はそう言って苦笑する。そこへ翔一と真司もやってきて、次々と思いついた名前を告げていく。女の子だからガールズはどうだと翔一が言えば、それにウーノが自分はもう少女という見かけじゃないと拒否。

ならばと真司が告げたのは、キャンディーズ。しかし、それに五

代と光太郎が揃ってセンスが古いと突っ込み、却下。そのやり取りの意味が分からないウーノ達へ、翔一が自分達の世界にいた昔のアイドルグループの名前だと告げ、それになのは達までが笑った。

結局良い案は出ず、ナンバーズのままでいくのかと思った時だ。当然翔一がこれだという顔をして、全員に言った。

「ヴァルキリーズはどうでしょう！」

「……戦乙女達、か。確かにそれはいいかもしれんな」

翔一の告げた言葉の意味を訳し、シグナムが意外そうな表情で頷いた。そして視線をウーノ達へ向け、意見を伺う。

「……いいと思うわ。最初ガールズと言った人とは思えないぐらい」

「そうね。少なくてもガールズよりはマシよ」

ウーノとドゥーエがそう言って翔一へからかいを込めた笑みを向ける。それに翔一は多少すまなそうに頬を掻いた。

「異論はない」

「いいんじゃない？　私は結構気に入ったわ」

「うむ、私もだ。私達を指すに相応しいような意味だしな」

トーレ、クアットロ、チンクは共に肯定し、見直したという視線を翔一へ送る。その視線を受け、翔一が嬉しそうな笑みを返した。

「カッコイイね。じゃ、あたしはヴァルキリー6ってとこか」

「スターズやライトニングと同じように呼称するのなら、そうですね。私はヴァルキリー7か」

互いに意見を言って、揃って自身の呼称を呟くセインとセッテ。それに五代が反応し、7って何かカッコイイねと告げて二人から理由を聞かれていた。

「……でも、戦乙女か。一体どういう存在なんだろう」

「知らねぇよ。聞いてみたらどうだ」

オットーの言葉にノーヴェはそう返し、視線を翔一へ向ける。だが、それを聞いていた光太郎が小さく笑みを浮かべて二人へ声を掛ける。地球の神話に出てくる存在との説明を始め、二人はそれに興味深そうに耳を傾けた。

「何か、思わぬ展開になったね」

「そうッスねぇ。でも、新しい呼び方に新しい家。新しい事づくめで嬉しいッス！」

「心機一転にはいいかもしれません。私達も六課の一員として、これから邪眼と戦うのですから」

それぞれの様子を見て、ディエチがそう言えばウェンディが頷きつつ、明るくそう告げた。ディードもそれに笑顔を浮かべ、頷き返す。そこへ真司が顔を出し、何を話しているのかと尋ねて、三人が先程の話を聞かせ出す。

そんな光景を見て、なのは達も微笑みを浮かべていた。本当なら戦っていたかもしれない存在。それとこうして笑い合う事が出来る。そのキッカケは、やはり仮面ライダーだったのだから。

真司がジェイル達と出会ったからこその現状。そして、それを比較的簡単に受け入れている自分達。それも五代や翔一、光太郎と出会えたから。そう、改めて思ったのだ。自分達の縁を強く深く繋いでいるのは、やはり仮面ライダー達なのだと。

「……勝てるよ、これなら」

なのはの呟きにフェイトとはやてだけではなく、シグナムやヴィータも視線を動かした。

「絶対勝てる。邪眼がどんなに強い怪人を送り込んできても……」

「そうだね。私達にスバル達、五代さん達仮面ライダーが四人……」

「もしもの時のリーゼ姉妹もおるし……」

「更にヴァルキリーズ、か。確かに戦力としては十分だ」

「それだけじゃねえ。ゴウラムにアクロバッター、ライドロンもいんだ。呼び出しゃ、ドラグレッダー……だったか。それまでいるんだしよ」

ヴィータの言葉に四人は揃って頷き、笑う。バイクであるアクロバッターや車のライドロン。それに巨大クワガタのゴウラムさえ、自分達は平然と仲間として受け入れている事に気付いたのだ。

意志を持つ三体の存在。更に、頼もしい赤龍に高性能バイクであ

るビートチェイサーもある。実に多彩な仲間達だ。そう考え、五人は視線を五代達へ向けた。そこでは、ヴァルキリーズやスバル達から仕込みはいいのかと言われ、五代と翔一、真司が揃って慌て出しているところだった。

それを見つめ、なのは達は心から願う。こんな平和な時間を、出来ればもっと長く過ごせるようにと……

六課の食堂は、密かに管理局内でも有数の充実振りを誇っている。翔一の料理に五代のカレー、そして真司が加わった事により、簡単な中華が出せるようにもなったためだ。まぁ、ほとんど注文されるのが餃子になるだろうが。

ともあれ、三人はエプロンをつけて忙しく動いている。リインは五代と翔一を補佐しながら、真司を補佐する新しく加わった存在へと目を向ける。そこには、五代作のクウガマーク入りエプロンをつけたセインとチンクがいた。二人は、真司の助手として食堂預かりとなったためだ。

「……手際がいいのだな」

そんな二人の動きを見て、リインは感心したように告げた。それにセインとチンクは笑みを返す。

「まぁ……」

「慣れているからな」

そう言いながらも、二人は手を止めはしない。餃子の餡を練って

いるのだ。真司は一人黙々とそれを皮に包んでいる。ちなみに、彼のエプロンもクウガマークだが、五代達と同じように龍騎のマークを入れた物を作ろうと密かに決意している真司だった。

そんな光景を見つめる者がいる。それはアギト。彼女は一応部屋割りとしてセッテとトーレと同じ部屋となったのだが、立場としては真司の融合騎。故に、真司の傍にいようとした。しかし、真司は料理中なので邪魔をしないようにと考え、こうして食堂のテーブルに文字通り座り、眺めているという訳だ。

「……暇だ～」

「なら、リインのお仕事を手伝って欲しいです」

アクビをし、告げた独り言。それに答えが返ってきたので、アギトは視線をそちらへ向けた。そこには、やや拗ねたようなツヴァイの姿があった。

「……何だ。リインか」

「何だじゃないです。アギトも少しは仕事してください。ロードの傍にいたいのは分かりますけど、お料理のお手伝いは、私達の大きさじゃ難しいです」

「う……それは……そうだけど」

「だから、リイン達はリイン達で出来る事をして、ロードのお役に立つです。さ」

そう言ってツヴァイはアギトの手を掴む。それにアギトは少し躊

躊いを見せるも、ツヴァイの言う事が正しいと判断したのか、それに抗う事もせず二人は揃って飛んでいく。それを見送り、リインは苦笑した。

妹の気持ちが良く分かったからだ。ツヴァイも翔一の手伝いがしたい。だが、それをするには色々と不便な事が多いのだ。故に、ツヴァイははやての傍でデスクワークをしている。アギトにも、同じように出来る事を与えたかったのだろう。

（同じような意識を抱いているのだろうな、ツヴァイは。アギトと良き友人となってくれる事を願うばかりだ）

リインはそう思い、視線を時計に向けた。そろそろ昼食の時間になる。そうなれば戦争だ。そう考え、リインは気持ちを切り替えて動き出す。

「……リインさん、ちょっと味を見て」

「分かった」

五代の言葉に頷き、リインは手渡された小皿を受け取る。そして、そのカレーを口に入れて頷いた。それに五代は小さく満足そうな声を出し、カレーの入った鍋に蓋をする。ちなみに、五代はリインさんとリインちゃんと呼び分ける事でアインとツヴァイとの区別をつけている。翔一はそれを聞いて、自分もそうすれば良かったと思った。

「五代、そろそろ……」

「あ、そうだね。もうお昼になるけど、翔一君、真司君、準備は？」

味見を終えたリインが時計を見て、五代へ声を掛ける。それに五代もリインの言おうとしている事を理解し、二人へ視線を向けた。

「大丈夫です！」

「……うし！　ＯＫです！」

二人の声に頷き、五代は視線を動かす。

「セインちゃんとチンクさんは？」

チンクをちゃん付けで呼ぼうとした五代だったが、そう呼んだ時チンクがどこか嫌そうな顔をしたため、こうしてさん付けに直した経緯がある。そう、チンクは誰にもちゃん付けをさせなかったのだ。真司以外には。

その理由はチンク本人にしか分からない。それでも、何となくだが六課女性陣は気付いていた。真司だけの呼び方にしたいのだろうと。五代や翔一はそうではなかったが、雰囲気からそれを感じ取ったのだ。

「いつでもいいよ！」

「ああ」

その二人の返事に笑顔を返し、五代は周囲に告げる。

「じゃ、頑張ろう！」

それに全員が声を返し、時刻が丁度昼となる。そして、ぞくぞくと現れる課員達で食堂は活気づくのだった……

五代達が食堂で忙しく働き出した頃、ロングアーチが働く指揮所ではグリフィス達の他に、クアットロとオットー、ディードの姿があった。クアットロはシャーリィの場所に座り、アルトやルキノと話しながらデスクワークをこなし、オットーはグリフィスと共に雑多な作業を処理していた。

ディードはそれぞれへコーヒーや紅茶を淹れ、雑用を担当している。シャーリィはジェイルやウーノと共にＡＭＦ関連の作業をしているため、ここにはいない。そのため、クアットロがその穴を埋めているのだ。

「で、シンちゃんが後始末する事になったのよ」

「あらら……」

「真司さんって、結構面倒見いいんですね」

クアットロの話す昔話を聞いて、アルトとルキノは揃って苦笑。昼近くなったので、キリのいい所で仕事を中断し、軽く雑談をしていたのだ。昼食は、シャーリィが戻って来てからと約束しているためだ。

そんな二人は、真司と会ってまだ二日目。だが、その話の中の真司が実に想像し易く、二人は思わず笑ってしまう事ばかりだったのだ。そして、さり気無く語られるジェイルの話も、二人には意外だった。特に、徹夜したため風呂で寝てしまい、風邪を引いて寝込んだ話などは笑い話かと思うぐらい面白かったのだから。

そんな給湯室のＯＬのような三人の後ろでは、グリフィスがオッ

トーと共に、ディードの淹れてくれたコーヒーと紅茶で一息吐いていた。

「……助かったよオットー。君が手伝ってくれたおかげで、普段の半分ぐらいの時間で済んだ」

「こんな事でよければ、いくらでも」

「グリフィスさんも大変ですね。部隊長補佐といえば、何かと責任も重いでしょうし」

コーヒーを飲み終え、グリフィスが告げた言葉にオットーは軽い笑みで答えた。それにグリフィスは嬉しそうに笑みを返し、再びコーヒーを口にする。ディードはそんなグリフィスを見つめ、労わるように声を掛けた。

それにグリフィスは苦笑しながら頷いて、でもやり甲斐はあると返した。そこから始まるグリフィスの仕官学校時代の話。それは、学校という物を知識でしか知らない二人にとっては、全てが驚きと感心に満ちたものだった。全寮制や多くの実習に研修。苦しくも楽しかったとグリフィスが締め括れば、二人もその言葉の意味を噛み締め、頷いた。

そして、それをはやてはぼんやりと眺め、視線を横へ移した。そこには、慣れないデスクワークに悪戦苦闘するアギトと、それを支えるツヴァイの姿がある。

「……これで……どうだ？」

「そうですね……うん！　大丈夫ですよ～」

「へへん、どんなもんだい」

「むっ、調子に乗るのはまだ早いですよ。リインだって、これぐらいはもう一人で出来るです」

ツヴァイのやや嗜めるような声に、アギトは少しだけイラっとしたのか、不機嫌そうな表情を浮かべる。そして、その視線をツヴァイへと向けた。

「あのなアタシは……」

「でも、初めてでミスなく出来たのは凄いです。お昼食べたら、次のお仕事を片付けるですよ～」

アギトの言葉を遮り、ツヴァイはそう誉めるように告げた。そう、彼女もはやてに同じような事を言われたのだ。初めは失敗して当然。だから、それをしなかったのなら、それは凄い事なのだと。故に、ツヴァイはアギトを誉めた。それに毒気を抜かれ、アギトはやや拍子抜けしたような表情を見せるものの、ツヴァイの笑顔に何も言わず頷いた。

（リインもすっかりお姉ちゃんやな。うんうん、ええ事や）

末っ子の成長を感じ取り、はやては満足そうに笑う。そして、席を立ちツヴァイとアギトへ声を掛けた。食堂に行こうと。それに二人が嬉しそうに返事を返したのは言うまでもない……

デバイスルームで速く正確な操作でキーボードを叩くジェイル。

その隣ではシャーリィが同じような事をしていて、ウーノはその後ろでＩＳを使い作業中。そして、その二人の手の動きが同時に停止する。

「……理論上はこれでいいはずだ」

「でも、逆転の発想ですよね、これ。まさかＡＭＦにＡＭＦをぶつけて相殺させるなんて……」

ジェイルの出した方法にシャーリィは感心したように呟いた。ジェイルの考えた方法。それは、機能として組み込まれているトイのＡＭＦを同じようなシステムを搭載したトイを使い、中和もしくは相殺するという物だった。

ＡＭＦは魔力結合を阻止するもの。だが、そのＡＭＦも本来魔力を使って発動する事の出来る防御魔法なのだ。ジェイルはそこに注目し、ＡＭＦを無効化するＡＭＦを作る事にしたのだ。それは、ＡＭＦにしか影響を与える事が出来ないが、故にトイにはこれ以上無い対抗手段となる。

「でも、これからが問題だよ。素材には、先日手に入れた比較的原型を留めている物を使うとして、肝心のＡＭＦＣ。アンチマギリングフィールドキャンセラーは、まだ理論さえないのだから」

「まったくの０から始めるのかぁ。何か燃えてきますね」

「そうだねぇ。これが平和に役立つものであり続けるように願うよ」

「……皮肉ですか、それ」

ジェイルの言った言葉が、管理局から犯罪者に技術が流れる事を

懸念しているように聞こえ、シャーリィは少しだけ怒ったように答えた。だが、それにジェイルは少し慌てて告げた。

「ああ、すまない。そう言うつもりじゃなかったんだが……いかんね。不快な気持ちにさせて悪かったよ、シャリオ君」

ジェイルが本当に申し訳なく思っていると感じ、シャーリィは小さく笑みを零しこう告げた。謝罪は言葉じゃなくて態度で示して欲しいと。だが、その声には優しさがあった。それにジェイルは頷き、手を再び動かし出す。それにシャーリィも応じるように手を動かし出した。

そんな二人を見つめ、ウーノはぽつりと一言。

――――……何かしら？　私のいるべきだった位置、取られているような……？

スバル達新人四人は揃ってデスクワークの真っ最中。昼になり、キリの良い所で中断したいのだが、ティアナはともかくスバルはこういった仕事は苦手。エリオとキャロは自然保護隊だったため、デスクワークとはほぼ縁のない環境のためにそれが遅い。

よって、三人は今もティアナに手伝ってもらいながら頑張っていた。いや、実はティアナだけではない。ドゥーエがそれを手伝っていた。ティアナがスバルを。ドゥーエはエリオとキャロをそれぞれ手助けしていた。

「……ここ、綴り間違ってるわよキャロ」

「え？　……あ、本当だ」

「で、エリオはここの数字が一桁多いわ」

「……凄い。よく分かりますね？」

「ま、地上本部で少し働いてたから、ね。分からない事あったら私に聞きなさい。全部教えてあげるから」

ドゥーエはなのは達隊長陣に、簡単にだが自分が過去に管理局に潜入していた事を話した。そして、その経歴を見込んで、なのはとフェイトがエリオとキャロのフォローを頼んだのだ。頼れるお姉さんといった感じで笑顔でそう告げるドゥーエ。それに二人は嬉しそうに返事を返す。

一方、そんな優しい雰囲気を見つめスバルはどこか羨ましい視線を送る。ティアナはそれに気付き、ため息を吐いて冷酷に告げた。

「いいのよ。アンタもドゥーエさんに教えてもらいなさい。アタシは、もう二度と手伝わないから」

「え……？　あ！　ち、違うんだよティア。私は……」

「言い訳しない。する暇あるなら手を動かす。さっさと終わらせないと、アタシ一人でご飯食べに行くわよ？」

その言葉にスバルは一心不乱に画面と睨めっこ。それを横で見て、ティアナは無言で何度も頷く。そんな光景をみて、なのは達は揃って微笑む。実にヴァルキリーズが馴染むのが早いと感じたのだ。

今朝の模擬戦が一番の要因だとは思う。だが、やはり大きな原因は真司だろうと思っていた。真司の優しさがヴァルキリーズを変え、それがこの状態に繋がっているのだから。しかし、それを差し引い

ても思うのは……

「……ドゥーエさん、エリオが可愛いんだろうね」

「……私としては、かなり複雑な気持ちです」

事ある毎にエリオへドゥーエがちょっかいを出すのだ。笑える事から少し笑えない事まで。キャロはそれにドキドキしているエリオを見て、少しだけドゥーエへ止めてくれるように頼んでいるが、そうすると今度はキャロがその標的にされる。

そんなじゃれ合いをしながらも、ちゃんと仕事を進ませてやっているので、誰も文句は言わない。シグナムなどは、文句を言わないからむしろ自分の分のデスクワークを代わって欲しいと考えているぐらいだ。

「でもよ、あれは姉ちゃんに遊んでもらってるようなもんだぜ」

「そうだな。まるで主や翔一と遊ぶ誰かのようだ」

その言葉にヴィータが一瞬口ごもり、睨むような視線をシグナムへ送る。それを平然と受け流し、シグナムは画面との戦いを再開する。そんな二人を見て、なのはとフェイトも苦笑。そして、四人は示し合わせたかのように、スバル達とほぼ同時期に仕事を中断するのだった……

六課の格納庫。そこには、アクロバッターだけでなく、ゴウラムとライドロンの姿もあった。光太郎と五代は相談し、今後の事を含めて二体を六課に常駐させる事にしたのだ。そのため、光太郎は海

中からライドロンを呼び出し、五代はゴウラムにここにずっと居て欲しいと声を掛けたのだ。
　ゴウラムはそれが伝わったのか、現状のように格納庫で大人しくしていた。アクロバッターが言うには、五代と翔一、光太郎の言う事には理解を示してくれるらしい。その理由まではゴウラム自身も理解していないようで、アクロバッターも良く分からないと伝えてきた。

「……これがライドロン」

「で、こっちがゴウラムッスか」

　作業服姿のディエチは、優しくライドロンの車体を触る。何故だが不思議と暖かい気がして、ディエチは小さく微笑んだ。同じ格好のウェンディもゴウラムを触り、同じような感想を抱いた。その横で一人トレーニングウェアのノーヴェは、アクロバッターを見つめて告げた。

「でも、アタシはこいつが一番驚きだ」

「ドウシテダ？」

「……いや、だってな」

「バルディッシュモハナス。ソレトオナジコトダ」

　その反論にノーヴェは返す言葉が無かった。確かにデバイスは話す。それとアクロバッターの違いなどそこまでない。だが、それでもノーヴェは光太郎から聞いた事を思い出すと、こう言わずにはいられなかった。

「でも、傷ついた場所が勝手に治るとかはねぇよ！」

「あー……それは確かに」

「ないッス……」

ノーヴェの指摘に二人も苦笑いで同意。光太郎とヴァイスはそんな三人の様子を見て、笑っていた。ちなみにヴァイスも初めてアクロバッターが喋った時、同じように驚いた。そして、ノーヴェが言われたような事を言い返され反論出来なかったのだ。

そのつい数時間前の出来事を思い出し、ヴァイスは苦笑して光太郎へ視線を向けた。光太郎は今も嬉しそうに、アクロバッターと話す三人を見つめている。その目が以前とは違い、心から嬉しそうに見えた事にヴァイスは一人安堵する。

（光太郎さんの体の事を聞いて、色々と思う事はあったが、やっぱこの人はすげぇ人だよ。あの時の悲しそうな目は、きっと昔の思い出とかに関係してんだろうな……。いつか、それを分かち合える相手、見つけてくださいよ……光太郎さん）

「お～い、そろそろお喋りは終わりにしろよ。昼飯食ったら、仕事の続きだ！　ディエチとウェンディは俺達の整備の手伝い。ノーヴェはザフィーラの旦那か光太郎さんと組み手だかんな」

「「「了解（ッス）」」」

それに三人は返事を返し、動き出す。三人は整備部の預かりとなっていた。ただし、ノーヴェは本人の希望で光太郎やザフィーラから手ほどきを受けるためだ。ディエチとウェンディは、ヴァルキリ

ーズの中で特殊装備を所持しているため、その整備法を更にしっかりと磨くようにと整備部配属となった。

ヴァイスを先頭に歩き出す整備員達。その一番後ろを歩きながら、光太郎はノーヴェ達と話していた。

「……お昼後は、変身して戦うから。怪人相手の生き残る方法を自分で見つけ出してくれ」

「了解。よろしく頼むな、光太郎……さん」

「あはは、呼び捨てでもいいよ。真司君が言ったのかな、年上は敬えって」

光太郎の言葉に頷くノーヴェ。それに光太郎は微笑ましいと感じ、笑顔のままで告げた。無理にそうしなくても構わない。本当の敬意は、言葉遣いじゃなく態度で示すものだと。ノーヴェ達はそれを聞いて少し意外そうな表情を返す。

それに光太郎が疑問を感じると、それを察したディエチがやや困ったように答えた。姉の一人に、呼び方から拘る者がいるのだと。それに光太郎は納得すると同時に誰だろうかと考え、何となくだが正解が分かった気がした。

（確かセインちゃんだったか。彼女、どこか真司君と似ているし、そういう事を言いそうだ）

そんな事を考える光太郎。すると、ノーヴェとウェンディが光太郎の表情を見てそれを悟ったのか、はっきり告げた。

「「ちなみに、それはセイン姉（ッス）」」

「……あー、そうなんだ」

どう反応するべきかと迷う光太郎。そこから始まる二人によるセインとの思い出話。それを聞きながら、光太郎もまた思う。やはりヴァルキリーズは人間だと。他愛もない事で喜び、怒り、哀しみ、楽しむ。感情を表し、実に様々な顔を見せるのだから。

今も二人の話にディエチが補足したり、或いは修正したりと賑やかに話している。それを聞いて光太郎は誓う。この少女達が笑顔でいられるような世界にしようと。自分に出来る事は小さいだろうが、それでも必ず成し遂げてみせるのだ。そう強く誓い、光太郎は歩く。その視線の先に、笑い合う三人の姿を映して……

訓練場の後片付けを終えて、トーレとセッテは、共にシャマルから簡単な手当てを受けながら空を見上げた。あの後、二人ははやてに断りを入れて、二人だけで訓練をしていたのだ。シャマルは、一応の監視役兼万一のための救護員としてはやてに頼まれ、ここにいた。

そんな二人の視界に映るのは、ラボに居た時はあまり見る事の無かった青空。それに何故か心洗われるような気がして、ふと二人は揃って笑顔を浮かべた。

「どうしたの？　空を見上げて笑ったりして」

「いや……良い天気だと思ってな」

「はい……」

その言葉にシャマルも視線を上に向け、空を見つめた。気持ちの良い青空が広がっていて、シャマルは確かに二人の言う通りだと思った。

「そうねぇ……でも、別にそこまで珍しいものじゃないわ。これからだって、いつでも見られるのよ」

その言葉に、二人は何故か何かこみ上げるものを感じた。嬉しさなのか、それとも悲しみなのかは分からない。しかし、シャマルの言葉は二人にとって大きな意味を持っていた。これからいつでも見られる。それは、シャマルが二人を普通の人と同じと思っていると言う事なのだから。

「……そうだ、な。確かにその気になればいつでも見られるか」

「ええ。邪眼を倒したら、はやてちゃんやフェイトちゃん達がスカリエッティの罪を少しは軽く出来るように動くし。そうしたら、みんなでお出かけすればいいわ。お弁当とか持って……ね」

シャマルの告げた言葉に、二人は少しだけ驚きを見せる。はやてやゼストがジェイルの罪の軽減をしてくれるだろうとは、どこかで予想していた。だが、まさかフェイトまでがそれをしてくれるとは思っていなかったのだ。

それをシャマルも察したのだろう。真剣な眼差しを二人へ向け、告げた。フェイト達はジェイルのために罪を軽減するのではない。真司とヴァルキリーズのためにそれをするのだ。心からジェイルの改心を信じる真司。そして、同じように改心したが故に人らしく生きるヴァルキリーズ。そんな両者のために、フェイトはジェイルを許す気になったのだと。

「これ、フェイトちゃんとスカリエッティには黙っていてね。本人は、まだどこか整理が出来てない部分もあるみたいだから」

「分かった。感謝する、先生」

「私からも礼を。それと、手当てありがとうございます」

トーレとセッテの言葉にシャマルは笑顔で頷き、立ち上がる。そろそろ昼だし、昼食にしようと告げて。それに二人も頷きを返して歩き出す。シャマルが翔一の料理の腕を自慢すると、セッテが負けじと真司の事を自慢する。トーレはそれを聞きながら、軽くため息を吐きつつ歩く。

この後、セッテはアギト御膳を。シャマルは特製餃子定食を食べて、互いの認識を改める。トーレは、そんな二人を他所にポレポレカレーを食べるのだった……

ベルカ自治区　ジェイルラボ。そこで、邪眼は今後の事をどうするかを考えていた。フィーアからの報告で聞いた名前。それは、彼にとって忘れる事の出来ないものだったからだ。クウガとＢＬＡＣＫ。共にキングストーンを持つ存在。そして、それが邪眼にとって意味するのは創世王への道が開けたという事に他ならない。

ドライ、フィーア、フュンフ、ゼクスを失ったが、四体は既に次のコピーの創造を開始している。新しい情報を得る事は叶わなかったが、それでも収穫がなかった訳ではない。龍騎達がクウガ達と合流し、手を組んだ事は分かったのだから。

これで、両者に注意を払う必要がなくなり、邪眼としては不安材料が減ったともいえるのだ。それに今は、二つのキングストーンを

手に入れる機会が生まれた事の方が邪眼にとっては大きい。

「予想外の邪魔者までいたようだが、かえって好都合よ。我が真の創世王になるために、必ずやキングストーンは手に入れる！」

「創世王様、それについて私に考えが」

邪眼の言葉に一人の女性が声を掛ける。それに邪眼が視線を動かす。そこにいたのは、ドゥーエそっくりな黒髪の女性。その名は……

「む、ツバイか。良かろう、申せ」

「はい。ただ倒すだけでは面白みがありません。内部から……というのはいかがでしょう。それも、信じていた者に裏切られたと思いながら」

そう告げて、ツバイは邪眼へと近付き何事かを伝えた。それを聞いて、その狙いと意味する事を理解し、邪眼は愉快と言わんばかりに嗤う。

「……良かろう。ならば行け！　奴らに絶望と恐怖を与えるのだ！」

「はっ！」

その言葉に頷き、ツバイはその場から立ち去る。その背を見送る事無く、邪眼は愉しそうに嗤い出す。自分を相手に決して絶望しなかった仮面ライダー。それに、今度こそ絶望を味わわせる事が出来る。そう思いながら。

放たれた闇の刺客。それは、偽りの仮面を使う相手。いつ、どこで、誰に成り代わるのか。それとも、未だに知らぬ相手に化けるのか。そして、それとは別に動くであろう怪人達。密かに、だが確実に、闇の足音がミッドチルダに近付きつつあった……

――――――――――――――――――――――――――――――――

登場キャラが多い。ので、気がついたらこんな量に……

長いと思われないかどうか不安です。もし、これでも短いといわれたら、それはそれで困るのですが……

次回、アグスタ編序章です。それが終わればサウンドステージへ突入です。

深まる理解　ちらつく不安

「じゃ、今日はここまで」

「「「「あ、ありがとうございました……」」」」

早朝の訓練場に響くしっかりとした声と疲れた声。それは、いつもならばなのはとスバル達のもの。だが、今日は違った。その声の主は、黒い体に真っ赤な目をしている者となのは達隊長陣のものだ。今朝は、ＲＸが隊長陣四人を相手に訓練をした。その発案者はシグナムだった。

怪人と戦うためには、それと戦い熟知した相手から実戦的な教えを請うべきだ。その主張には、なのは達も同意した。例えそれが、ＲＸと模擬戦をしたいシグナムの欲望から生まれた提案だったとしても。

光太郎はシグナムの考えに理解を示し、初めてなのは達は仮面ライダーとの模擬戦をする事となった。結果として、なのは達四人がかりでもＲＸには勝てない事が分かった。なのはの砲撃はロボライダーの装甲で耐え切られ、フェイトの高速移動にはバイオライダーのゲル化で対処され、シグナムにはリボルケインやバイオブレードを以って互角に渡り合い、ヴィータの強固な守りをＲＸキックが打ち破ったのだから。

「……スバルちゃん達、大丈夫？」

「はい……」

「な、何とか……」

「つ、強いですね、五代さん」

「色々と能力が変わってびっくりしました……」

「キュク～……」

そして、それとは離れた場所では、同じようにスバル達が揃って疲れ果てていた。隊長陣だけではなく、スバル達にも怪人戦を見越した経験を積ませるべきだと光太郎は考え、その相手を任された五代は、クウガとして四人の訓練を行なった。

本来ならば、クウガの力をスバル達に向けたくはない。だが、怪人と遭遇した際に自分との戦いから学んだ事が役に立つかもしれない。そう思い、五代は今回の事を引き受けた。全ては、四人を死なせないために。

スバル相手にはマイティの格闘で渡り合い、ティアナには、手にしていたクロスミラージュを片方奪う事でボウガンを作り、ペガサスでの超感覚を駆使しつつ、幻術を見破りながら精密射撃を、エリオにはタイタンの鎧を活かした肉を斬らせて骨を断つ戦法で立ち向かい、彼の欠点である一撃の威力の低さを突き、キャロには、そのままではフリードのいる高さへは届かないので、ビルの残骸を使ったドラゴンの跳躍力で翻弄した。

四つの能力をそれぞれに合わせて使い分け、主にその相性の良いものを基本に戦う。それは、五代が未確認に対してやってきた事の延長だ。相手の得意を上回るか、その苦手を突いて立ち向かう。その判断の妙こそが五代の力なのだから。

「じゃ、ここまでですね」

「そうだな。いや、それにしても姿がころころと変えられるとかって……アギトって凄いんだなぁ」

「そう言う龍騎もですよ。何もない場所から武器を出せるなんて……」

アギトと龍騎は、ヴァルキリーズを相手に訓練をしていた。流石に十二人を二人で相手するのは大変だったが、それでもドラグレッダーを加え、アギトのフォームチェンジなどを駆使し、何とか時間内を凌ぎ切ったのだ。龍騎はサバイブを使わず、アギトもバーニングやトリニティは使わなかったものの、それでも二人はヴァルキリーズを相手に奮闘したのだから。

「……三色の悪夢だったわ」

「ベルトから武器とはね。ドクターが聞いたら、絶対実現しようとするわ」

「赤い騎士が基本と思っていたが、まさか金が基本とはな。しかも青や赤への変化も一瞬。隙がない」

ウーノ、ドゥーエ、トーレは揃ってアギトの事を話す。その呼吸はやや乱れている。

「シンちゃんが厄介になったわ。一人だとただの隙だったのに、二人になった途端それをショウ君が補うもんだから」

「ああ。かえって手を出せん。迂闊に手を出せば、こちらがやられる」

「ＩＳも二人してほとんど無力化するか、対処してくるしね。あたし、何度地面の中で刺されると思ったか……」

クアットロ、チンク、セインは、ライダー二人が協力した時の恐ろしさと頼もしさを実感し、そうどこか複雑な表情で告げる。

「兄上はサバイブを使わずとも強いとは知っていたが、ドラグレッダーが協力するとあれ程までに手がつけられないとは……」

「まさか背に乗って、空中戦を限定的とはいえやってのけるとは思いませんでした」

「しかも、攻撃しようとするとあいつが炎吐きやがるし」

セッテ、オットー、ノーヴェは、龍騎が見せたドラグレッダーの意外な活用法について意見を述べ合う。

「真司兄さん、また強くなった気がする」

「あ、それアタシも思ったッス。何て言うか、こっちの動きを予想してる時があるような気がしたッス」

「きっと、私達の行動を記憶しているのです。ここぞという時は、大抵読まれていましたから」

ディエチ、ウェンディ、ディードは、龍騎の力量を測り直し、感心したように告げ合った。

そんな三箇所の様子を眺め、はやては隣にいるシャマル達へ声を掛けた。自分達も近い内に同じ事をしないといけないかもしれない。

そう思ったからだ。実際見た事のあるクウガ、アギトはそこまで驚く事は無かったが、ＲＸと龍騎の力は色々と驚きが多かったのもある。

それは、つまりは見知らぬ怪人と戦う時感じるであろう感覚と同じものだ。未知なる力や姿。それを見せられた時、大胆に行くにせよ慎重に行くにせよ、対処に困るのは事実なのだから。

「……な、シャマル達はどう思った？」

「正直に言えば、味方で良かった。そして、あの力を使うのが翔一さん達で良かった……という所」

「私も同意見です、主。幾多の騎士や魔導師を見てきましたが、あの四人のような力と心の持ち主は中々いません」

シャマルとザフィーラはやや真剣な表情でそう告げた。ただその能力だけではなく、その使い方にまで意識を向けているのは、流石歴戦の騎士といえる。強大な力を持った事に恐れながらも、それを待ちわびる者がいればどんな場所でも飛び込んで行く。

牙無き者の牙であり、盾無き者の盾となるその在り方は、まさしく守護者。人類を、生命を守るために遣わされし使者といえたのだから。

「リインは、純粋に嬉しいです。仮面ライダーが四人もいて、こんなに強いんですから！」

「アタシもリインと同じ気持ち。真司だけじゃなく、雄介も翔一も光太郎も頼もしいし！　特に翔一は真司と同じぐらい強いな！」

「お前達は……」

一方、ツヴァイとアギトは素直に四人の強さに喜びを感じていた。唯一の弱点でもある空中への対処も、四人はそれぞれ有している事も知った今、その心に不安は無かったのだから。

クウガはゴウラムとペガサスボウガンによる射撃。アギトはマシントルネイダーとストームハルバートによる竜巻。龍騎はドラグレッダーにストライクベントによるドラゴンストライク。ＲＸはその驚異的な跳躍力とボルティックシューター。その力を目の当たりにした事で、二人は確信したのだ。ライダーは負けないと。

そんな二人の無邪気さにリインは苦笑した。だが、その気持ちは良く分かるからか、その声には優しさが混ざっている。

ちなみに、アギトが翔一を絶賛するのは言わずとしれた名前のためだ。自分と同じ名前。それ故、アギトは翔一の事も気に入っていたのだから。

そんな意見を聞き、はやてもどこか苦笑しながら頷いた。そして、全員を呼び集める。明日の訓練は自分達も含めた大掛かりなものにする。そう告げるはやてに、全員が驚きを浮かべるも納得した。

怪人達は最低でも十二体。更にそこへマリアージュが加わればどれ程になるか予想も出来ない。そうなれば、部隊としては後方に控えていなければならないはやてやシャマル達も怪人へ挑まねばならない。その時に備え、戦える力を持つ者は出来うる限り経験を積んでおくべき。そんな考えを誰もが抱いていたのだ。

ちなみに、怪人の存在が明らかになった以降、早朝訓練は怪人戦を見越したものへ変わり、夕方の訓練は従来通りの連携や基礎固めのものとなった。なのは達としては、両方とも基礎固めにしたいのだが、怪人は魔導師戦とは違う部分が多く、自分達だけの教導では補えないと理解しているため、意見役として光太郎に手伝ってもら

っていた。

「……てな訳で、明日は私やシャマル達も入れて頼むな、光太郎さん」

「分かった。なら、その前にみんなに守ってもらいたい事がある」

光太郎の言葉に全員が疑問符を浮かべた。そんな事など何かあっただろうかと、そう思ったのだ。それを光太郎は気付いたのだろう。真剣な表情でこう告げたのだ。

――変身した後は、常にライダーとしての名前で呼んで欲しい。俺だけじゃなく、五代さん達もだ。

その言葉の意味が五代達は分からなかった。何故そうしなければならないのか。そんな事を聞こうとしたが、光太郎がはっきり言い切った。

「これは、周囲に俺達がライダーだと知られないためだ。俺達がライダーだと知ると、関わった人達へ邪眼の魔の手が及ぶ事もある。人質にされる事や知らず利用されるかもしれない」

「……光太郎さんは、そういう経験が？」

シャマルが聞き辛そうに尋ねた事に、光太郎は躊躇いなく頷いた。怪人達はライダーを倒すためならば何でもする。世話になっている家の子どもを人質に使ったり、街一つを破壊したりさえするのだと。それを聞き、全員が声を失う。いや、五代だけはそれに頷いていた。

彼が戦った未確認も、自分のゲームを成功させるために恐ろしい事を平気でやってのけたのだ。そう、怪人とは自分の笑顔のために

みんなの笑顔を犠牲にする者だと、五代はそう考えていた。

（だから光太郎さんは名前を隠そうとしてるんだ。邪眼が、俺達の事を知って、力の無いすずかちゃんやアリサちゃん達を狙わないように）

自分が世話になった少女達を思い出し、五代は拳を握り締める。何も知らず海鳴で暮らす者達は、五代だけではなくなのは達の関係者でもある。つまり、邪眼が六課を狙う限り、海鳴の者達に危険がない訳ではないのだ。

自分達の誰かが傍についてやりたいが、下手に動けば余計危険を招く事にもなりかねない。そう考え、五代はやりきれない気持ちになった。ライダーとしての力を持ちながら、守りたい者達を守れない。敵の狙いが分かっていても、事が起きるまで動く事が出来ないのがここまで辛い事だとは思わなかったのだ。

五代がそんなライダーとしてのジレンマを感じている中、翔一と真司は、光太郎達がどんな戦いをしてきたのかを何となくだが察し、改めて自分達との違いとその過酷さを痛感していた。

（アンノウン達もアギトを狙ってたけど、闇雲に人を巻き込まなかった。でも、怪人は違う。犠牲を出す事を躊躇わないんだっ！）

（ミラーモンスター達は、あくまで生きるために人を襲ってた。怪人は、ライダーを倒すためだけに、平気で人を襲うのかよっ！）

互いに戦っていた相手との違いを思い、同時に怪人への怒りを燃やす。罪もない人達を平気で踏み躙り、犠牲にする怪人。仮面ライダー達が戦い、倒してきた理由を感じ取り、二人は誓う。自分達も仮面ライダーとして、邪眼とその怪人達を絶対に打ち倒してみせる

と。

「……そか。分かりました。なら、今後変身後はクウガ、アギト、龍騎、ＲＸで統一します」

はやてがそう告げ、全員へ視線を送る。それになのは達も頷いて、この話はそれで終わりとなった。そして、明日の模擬戦の事を話し合う事になり、光太郎となのは、フェイトにはやてやウーノが中心となって意見を出し合う。

今日のように分かれて、ライダーをローテーションさせるのがいいとなのはとフェイトが言えば、ウーノはチーム分けを変えてそれぞれの連携を高めるべきだと意見する。はやてはそれに賛成をするも、スバル達四人のチームは連携だけで言えばヴァルキリーズよりも劣る。それをやや懸念し、せめてスバル達は四人で固定にしたいと告げた。

だが、光太郎はそんな四人の意見を聞いて、どこか意を決したように告げた。それは……

「それらもいいけど、明日はなのはちゃん達とクウガ、フェイトちゃん達と俺、はやてちゃんにシグナムさん達とアギト、ヴァルキリーズと龍騎で分かれて、その四つ巴の戦いはどうかな」

その提案にその場にいた者達が揃って驚いた。それは、つまり敵対する相手が三つもいるという状況。更に、それぞれにライダーが必ず一人いる。だが、そこまで考えて誰もか気付いた。光太郎が意識した狙いに。

「複数の怪人を相手取る事になった時のため、ね」

ウーノがそう言うと、光太郎は頷いた。チーム単位とは言え、異なる相手と戦う事になる。数の上では有利なヴァルキリーズでも、もし同時に三方から攻撃されれば苦戦は必死。そう、これは集団戦の経験と同時に数で勝る相手にどう戦うのか。また、力で及ばぬ相手にどう立ち向かうのかを学ぶため。

とりあえず光太郎の意見を基本にし、細かい部分を今夜決める事になり、その場は解散となった。

スバルはノーヴェやウェンディと楽しげにライダー達の能力について話し、ティアナはクアットロと今回の訓練について話し合いながら、互いに四人のライダーを支援するにはどうするべきかを考えていた。

エリオはドゥーエに絡まれるものの、それをウーノが嗜める。エリオはそんなウーノに感謝を述べて、同時に気になっていた龍騎の変身方法を尋ねていた。キャロは、セインとセッテにクウガのフォームチェンジの種類を教え、更にクウガがやってのけたデバイスの変化を不思議そうに伝えている。

なのはとフェイトはトーレへ、ＲＸの使った高速戦闘への対処を伝え、苦笑しながらもその有効性に納得し合って、援護と連携方法を考案すべく意見を出し合い、シグナムはディードへクウガとアギトだけではなく、ＲＸも剣を使うと伝えていた。それにディードは驚きを見せ、ベルトから出したのかと尋ねた。アギトと同じ原理ではと思ったのだ。それにシグナムが頷き、そこで二人はＲＸとアギトの共通点に気付き、不思議な印象を抱いていた。

ヴィータはディエチへＲＸの能力を簡単に伝え、その凄さと頼もしさに笑みを見せていた。ディエチはその内容に呆れるが、それでも話に聞くＲＸなら有り得るのだろうと思った。何せ、どんな傷も太陽の光があれば治してしまうのだから。

はやてはアギトへ明日の訓練の際、自分達の味方として参加して欲しいと告げた。理由は、真司達の人数が多いので、少しでも戦力差を埋めるためだ。シグナムとの相性が良さそうだと真司がはやてに告げていたため、一度シグナムとユニゾンをしてみて欲しいと考えたのもある。

それにアギトは少し戸惑いを感じるも、はやてがもしシグナムとも高いシンクロでユニゾン出来るのなら、戦力が強化されるだけではなく、戦術も増える事になると伝えた。アギトはそれに理解を示し、試しにやってみると返した。

「何か、もうみんな馴染んだなぁ……」

「お前が言うな」

そんな周囲の光景を眺め、真司が嬉しそうに呟くとチンクが軽く呆れながらそう言った。一番最初に馴染んだ存在である真司。そんな彼が意外そうに告げる事ではないと思ったのだ。視線を動かせば、オットーはザフィーラとシャマルから後方支援の助言を受けている。その表情から察するところ、指令系統の重要性と故の欠点を教えられているのだろう。しきりに感心したように頷いていた。

「でも、ホント昔から居たみたいな感じだよね」

「ですね～。リインもそんな気がするですよ」

五代の言葉にツヴァイはそう頷くように答え、笑みを見せた。それに翔一とリインも笑顔を見せる。同じ事を二人も感じていたからだ。たった数日。それで真司達は六課に凄まじい速度で馴染んでいた。

食堂にいる真司とチンク、セインは当然ながら課員達に親しみを持たれていたし、整備員達と関わるノーヴェやディエチ、ウェンディはそこからの繋がりで徐々に人気を得ていた。ウーノは人懐っこいシャーリィと仲良くなったので、彼女を通して友好を深めていたし、ドゥーエはエリオやキャロの面倒を見るだけではなく、他の雑務にも手を貸す事で、少しずつではあるが課員達からも頼られるようになっていた。

好戦的なトーレとセッテは、同じようなシグナムと良く手合わせをする事になったためか、交替部隊の者達と食事を共にしたりしていたし、クアットロやオットーとディードは、グリフィスとはやての手伝いとしてロングアーチで働いているため、アルト達と仲を深め合っていた。

アギトはツヴァイと行動を共にするようになり、多少言い争う事もあるが概ね楽しそうにしているため、課員達の癒しとなっていた。ジェイルは未だに六課に馴染み切ってはいないが、広域次元犯罪者という偏見の目で見られる事は減っていた。食堂での真司達との会話や仕事をしているシャーリィの証言などから、もう悪人ではなくなっているという事が周囲にも理解され始めたのだ。

そんな穏やかな雰囲気の中、翔一がいつもの明るい表情で告げた。

「早く邪眼を倒して、ライダーが必要ない世界になって欲しいですね」

その言葉に五代達ライダーとスバル達四人にヴァルキリーズは頷いたのだが、なのは達隊長陣とシャマルとザフィーラにアインはどこか素直に頷けない。それもそのはず。彼らは、五代達が邪眼を倒せば元の世界に帰ってしまうと知っているのだ。

故にその心境は複雑。邪眼は倒したい。だが、五代達とは別れた

くない。矛盾しているのは分かっている。それでも、なのは達はこう願うのだ。邪眼を倒した後も、五代達と過ごしたいと。彼らは知っている。五代達には、それぞれの世界にその帰りを待っている者達がいると。

だから、願う。出来るのなら、五代達の世界との行き来が可能になるようにと。今のなのはにとっての希望は、恋人のユーノが無限書庫で検索してくれている事と、ジェイルの研究している並行世界への行き来だ。

（ユーノ君がせめて五代さん達の世界への連絡方法とか見つけてくれれば……。それに、ジェイルさんの研究次第じゃ……）

フェイトやはやてにはまだ教えていないが、なのははジェイルと一度だけ話したのだ。それは、ジェイル達が来て翌日の夜。いつものように訓練のプログラムを組み上げ、自分も軽く体を動かしておこうとした時の事。

そこをジェイルが散歩していたため通りかかったのだ。そして、なのはの自主訓練を見学し、感心したのか拍手を送ったため、それになのはが気付いたという訳だった。

一人で犯罪者と話すなど、本当ならば有り得ない事。しかし、なのはにとってジェイルは犯罪者でありながら、共にライダーを支える者。だから、なのはは聞いてみたのだ。邪眼を倒したら、真司も五代達と同じで元の世界に戻されるかもしれない。それでもいいのかと。

それにジェイルはやや面食らったようだったが、どこか笑みを浮かべながらこう言った。

――もし仮にそうなっても、私は必ず真司のいる世界へ行ってみ

せるよ。

その言葉があまりにも自然すぎて、なのはは言葉を返す事が出来なかった。行けないとか行けるようにしてみせるではなく、行ってみせる。それは、自分が真司のいる世界へ行ける事をまったく疑っていない証拠。

声を失ったようななのはへ、ジェイルは更にこう告げた。諦めるなんて言葉は、今も昔も自分の中にはないと。為せば成る。為せねば成らぬ。そう真剣な表情でジェイルは言い切り、なのはへ視線を向けて軽く笑って問いかけた。

――君の世界の諺だったはずだが……違うかい？

それになのはは少し意外に感じながらもそうだと頷いた。ジェイルはそれに頷きを返し、こう告げた。

――私は真司と別れる事を止める事はしない。だが、そのままにはしないさ。どれだけ時間が掛かろうと、また会いに行く。……必ずだ。

それになのはジェイルの想いを見た。犯罪者から一人の人へ戻ったジェイルの心。それを感じ取り、なのははつい漏らしてしまったのだ。自分達の想いを。五代達と別れたままにはなりたくないと考えているのを。

その話を聞いて、ジェイルは無言。それになのははやや苦笑する。真司との再会を諦めず、今も足掻き続けるジェイルからすれば、自分達はどれ程情けないかを理解したのだ。

――でも……強いんですね、ジェイルさんは。私達は、それを諦めちゃってました……無理だろうって。

――そんな事はないさ。君達も十分強い。私が受け入れなかった事を受け入れようとした。それもまた強さだよ。

その答えになのははは目を見開いた。そして、ジェイルはそんななのはへ告げたのだ。五代達の世界へも行けるように頑張ってみせようと。それは、自分達の家を取り戻すために力を貸してくれた六課のため。そして、自分と同じように、ライダーとの永遠の別れを拒否したいなのは達のために。

そんなやり取りをして、なのはとジェイルは別れた。それを思い出し、なのははは思う。もしかしたら、自分もジェイルも根底にある想いは同じなのではないのかと。自分を変えてくれた存在へ、かけがえのない思い出をくれた存在へ何か恩返しをしたいと。それが、なのは達は早く帰れるように邪眼と戦う力を支える事で、ジェイルは真司の世界への道を繋ぐ事だったのではないか。

「……なんてね」

そう一人呟き、なのはは視線を集団の中心にいる男へ向けた。それは五代。今はツヴァイやアギトへストンプの話を聞かせている。どうも、今度の出し物はそれに決まりそうだ。何せ、ウェンディやセインも興味津々と言った表情で聞き入っているのだから。

「じゃ、今度はストンプを見せるよ！」

「「「やったぁ（ですぅ）！」」」

そんななのはの予想通りに五代が笑顔でそう告げると、アギトとツヴァイ、それにセインが嬉しそうに声を上げる。さり気無くノーヴェとスバルも喜んでいて、それをウェンディとティアナが見て苦

笑していた。一方、フェイトやはやては、揃って一度しか見た事のないストンプを思い出していた。

様々な物を使って音を出し、それをリズム良く演奏していく。それは一度しか見ていなくても記憶に焼きつく光景。五代が月村家のキッチンで披露したのは、実に見事だったのだから。

ちなみに、シグナム達は見た事がなかったりする。翔一も同様に。五代が二人へストンプを見せたのは、珍しくなのは達三人が揃って休みを取れ、すずか達と泊まりで遊んだ際だったのだから。

「……二千の技って言うのは本当なのね」

「そうだ。五代は実に様々な特技を持っている」

ウーノのやや呆れたような声に、シグナムが苦笑混じりで答えた。

「夢を追う男って言うのはどういう意味ですぅ？」

「えっと、いつか世界中のみんなが笑顔になれるようにって。それが五代さんの夢なの」

「それはまた……あの男らしい夢だ」

クアットロの問いかけにシャマルがそう返せば、トーレが納得して笑みさえ浮かべて頷いた。それにクアットロもシャマルも笑みを浮かべる。

「翔一さんの夢は何ですか？」

「俺？　俺は……自分の店を持つ事かな」

「それでレストランアギトかよ。お前らしいな」

オットーの質問に翔一はそう笑顔で告げた。それにヴィータがやっと名前の付け方に納得出来たのか、呆れながらも嬉しそうに言った。

「城戸、お前は何だ？」

「俺の夢……とりあえずは戦いを止める事かな？」

「ぶれないですね、城戸さんは」

「それが真司らしさでもあるからな」

ザフィーラの問いかけに、真司は自分に問いかけるように答え、それを聞きフェイトとチンクがそう笑顔で言い合う。

「光太郎さんは？」

「あ、僕も聞きたいです」

「私も」

そんなやり取りを聞いて、ディエチが光太郎へ尋ねた。エリオとキャロもそれに興味があるのか、視線を向ける。光太郎はそれに小さく笑うが、噛み締めるようにこう言った。

「人と自然が共存する世界だよ。いつか……きっといつか、人は本当の平和の意味に気付いてくれる。それまで、俺は平和を阻む全て

と戦う。仮面ライダーとして、南光太郎として」

その決意は、五代とどこか近いものがあった。五代の想いが希望なら、光太郎の想いは願望だ。みんながいつか笑顔になると信じる五代。きっと平和になると信じる光太郎。神秘の輝石を持つ二人のライダーは、共に人間を心から信じていた。

いや、その可能性を信じているのだ。少しでも昨日より今日を、今日より明日を良くしてくれる。そう願うから彼らは、仮面ライダーは人を守り続けるのだ。例え未来を変えられないとしても、今を救えば、その可能性はゼロではないと。

「……ティア」

「何よ？」

誰もが光太郎の遥かな夢と決意に眩しさを感じている中、スバルはティアナへ声を掛けた。

「私も戦うよ。局員としてだけじゃない。スバル・ナカジマとして、平和のために」

「……ったく、すぐに影響受けて。仕方ないから、アタシはティアナ・ランスターとして、それに付き合ってあげるわ」

「ティアナは相変わらず素直じゃないわね。でも、嫌いじゃないわ」

そんな二人の会話を聞いて、ドゥーエが笑みを浮かべてそう言った。ティアナの言動が、どこかクアットロを思わせるからだ。故に、つい微笑ましく思ってしまう。素直に自分も同じ気持ちだと言えばいいのにと、そんな風に考えドゥーエはティアナへ視線を向けた。

そんなドゥーエの視線に、ティアナは少しだけ照れくさそうに顔を背け、スバルがそれに苦笑する。

「……アタシも協力してやるよ」

「お、ならアタシもッス。ノーヴェだけじゃ少し心配ッスからね～」

それを見て、ノーヴェがややぶっきらぼうにそう言えば、ウェンディがそれに内心苦笑しながら明るく続く。スバルとティアナはその言葉に笑みを返し、サムズアップ。それに二人もサムズアップを返す。そんな光景を見て、五代が嬉しそうに頷いているのだった……

ベルカ自治区　聖王教会。そこにあるカリムの執務室では、クロノとロッサが彼女と三人である事について話し合っていた。はやてから報告のあった予言の龍騎士。龍騎の事に関連する諸々だ。神と思わしき相手と翔一が戦い、これに勝利した事などもそれには含まれていた。

無論、それをカリムとロッサは信じる事が出来なかった。だが、クロノは違う。クウガとアギトを実際その目で見、邪眼と戦ったためにその話を信じる事が出来たのだ。

「……では、はやての話を本当に信じると？」

「ええ。貴女とロッサは知らないでしょうが、仮面ライダーの生き方は、僕ら局員が……いや、人が目指す理想そのものです。例え神であろうと、それが生命を滅ぼし害を為すのなら、彼らは立ち向かい、勝利してみせるでしょう」

クロノはそう断言した。その一切の迷いも躊躇いもない声に、二人は互いの顔を見合わせる。クロノは嘘や偽りを言う者ではない。そう知っているからこそ、カリムもロッサもその報告を信じる事にした。何も、はやての報告をまったく信じていなかった訳ではない。だが、全てを信じる事は出来なかったのだ。特に、その神と思わしき相手と戦ったなどは。

「……分かりました。でも、まさか翔一さんがそんな凄い人だったなんて……」

「気持ちは分かるよカリム。僕だって同じさ。どこからどう見ても、お人好しの天然さんだったしね」

二人は翔一との出会いを思い返し、そう苦笑しながら言った。そう、あれは今から三年前の事だ。はやてが紹介したい人がいると言って、カリム達の前に連れて来た男。それが翔一だった。そして、はやてはカリム達へ告げた。翔一こそ仮面の戦士の一人なのだと。

その証拠に、翔一は変身してみせた。その異形を見て、カリム達は驚きを見せたが、不思議と恐怖は感じなかったのだ。シャッハもそれは同じだったらしく、珍しく身構える事もせずにアギトをまじまじと見つめていたのだから。

そして、はやてはこう告げた。翔一がいたからこそ、今の自分達があると。そして、これから起きるであろう事件にも、翔一が力を貸してくれるから。そう笑顔で告げるはやてに、カリム達は思わず苦笑してしまったのだ。

何故なら、隣のアギトが驚いたように反応し、聞いてないと言い出したのだから。そこから二人の話が始まり、カリム達はそのやり取りを聞きながら笑いを堪える事が出来なかった。少女と異形の存在が至って平然と会話していたのだ。それも、こんな会話を。

――何や。翔にぃは人助けしてくれんのか？

――いや、そうじゃなくて、どうして言ってくれなかったの？

――言わんでも頷いてくれる思った。

――まぁ、そうだけど……

――ならええな！

――え？　うん。

その光景を思い出し、カリムとロッサは揃って笑う。そう、あれだけで分かったのだ。例え姿形が変化しようとも、アギトは翔一なのだと。だが、カリムは仮面ライダーを知りながらも、はやて程の信頼感は持たなかった。故に、あの予言に不安を抱いていたのだから。

しかし、今回の話を聞いて、カリムははやての不安の無さに理解が出来た。神と戦い勝利してみせた仮面ライダー。その力を知っていたからだろうと。本当はそうではないのだが、カリムがそれを知る事は出来ない。

「……それにしても、ジェイル・スカリエッティと協力する事になるなんて。改心したとありますが……」

「確かに信じられない話でしょうね。しかし、彼も仮面ライダーといたとの事ですから、きっとその影響を受けたのでしょう」

カリムの言葉にクロノは頷き、五代や翔一を思い出してそう結論

付けた。何せ復讐を考えていたリーゼ姉妹さえ変えてしまった二人だ。きっと、そのジェイルといたライダーも同様の影響力を持っていたのだろう。そうクロノは考えていた。

ロッサはそんなクロノの考えが分かったのか、苦笑して頷いた。カリムはどこか楽しそうに微笑んでいる。そう、二人はクロノやはやてを見て、その言葉に説得力があると思ったのだ。

「クロノ君もはやてもその一人だもんね」

「確か……こう、でしたか？」

二人がクロノへ見せたのは、サムズアップ。今や五代と関わった者達共通の仕草だ。いや、それだけではない。なのはなどの影響を受けた者達が、静かにではあるが管理局に浸透させていた。そのためか、それは五代を知らぬ者達には、なのは達の代名詞にもなりつつあるのだから。

「……そんなに良くやるか？」

「うん」

「ええ」

「……そうか」

二人の笑顔の即答に、クロノはやや苦笑混じりに答えた。あの邪眼との戦いが終わった後、クロノは五代と翔一のようなあり方に憧れた。それは力を欲するのではなく、いつでも誰かのために戦おうとする姿勢だった。

自分も元々そういう事を目指していた。だが、具体的な目標を得

たクロノは、以前にも増して執務官として職務に励んだ。犯罪者であろうと、反省を示し更生しようとする者は、心から世話を焼き、例え上司であろうと差別や偏見を持つ者には、断固として立ち向かった。

いつか二人と再会出来た時、胸を張って会えるようにと。五代とは結婚式で再会が叶い、翔一とは期せずして再会した。その時、クロノは二人の凄さが改めて分かったのだ。二人は時間を超えてしまったにも関らず、自分と再会した時それをもう気にしていなかったのだ。

そんな状況にも関らず自然体でいられる二人に、クロノは内心で尊敬した。そして、自分も彼らのように誰に対しても、何に対してもそんな心構えでいたいと思ったのだから。

「そうそう。確か、近々ホテルアグスタでロストロギアオークションが行なわれるのです。それで、ロッサがユーノ司書長に同行するのだけど、そこへ六課を向かわせる事は出来ないかしら？」

突然カリムが告げた内容に、クロノは軽い疑問を感じたが、そこに出て来た名前からその理由を悟った。

「まぁ、六課は表向き遺失物関係の部署ですから、可能ですよ。ただ、公私混同はどうかと……」

「クロノ君は堅いなぁ。これはちゃんとした仕事だよ。それに、邪眼だっけ？　それがロストロギアを狙わないとも限らないでしょ。……レリックの事もあるし、ね」

最後のロッサの言葉にクロノはハッとなった。確かに予言には、旧き結晶という記述がある。それがロストロギアであるレリックで

ある事は、報告から間違いない。だが、もしも邪眼が他のロストロギアにも興味を示すとすれば、アグスタが危ないのだ。
そこで扱われるロストロギアは危険性がない物だが、邪眼がそんな事を知るはずもない。それに、もしかすると邪眼ならば危険性のないロストロギアさえ劇薬のような物へ変質させる事も出来るかもしれない。そんな風に考え、クロノは用心するに越した事はないと思った。

「……そうだな。念のため、六課にはアグスタへ向かってもらおう」

「そうそう。僕も久しぶりにはやてに会いたいしね」

「ロッサ。そういう事は口に出さないの」

カリムの軽く叱るような声に、ロッサは少しだけおどけてみせた。それに二人は呆れつつも楽しそうに笑みを浮かべる。そして、そのまま三人は今度の事を見据えた話を再開するのだった……

本局内　無限書庫。ユーノはそこでリーゼ姉妹にも手伝ってもらいながら、仕事と並行してある事を調べていた。それは、幼馴染であるはやてからの依頼。

「……聖王のゆりかご。二つの月の魔力を使い、凄まじい力を発揮する浮遊要塞か」

「恐ろしいわね。でも、決して……」

「無敵じゃないさ。ライダーがいるんだしね」

手に取った本を読んで、ユーノが呟いた言葉。それにアリアとロッテがそう応じた。二人は闇の書事件以後、前線から退き後進の育成へ力を尾注いでいた。クロノがそれを薦めたのだ。二人には、人材育成の方が向いていると。その裏には、グレアムとの時間を取れるようにという配慮がある事を二人は察していたが、敢えてそれを指摘する事はせず、二人は現在様々な訓練校へ赴き、その指導に当たっているのだ。

ユーノは二人の声に頷き、視線を本へ戻す。はやての依頼であるゆりかごの調査。資料自体は聖王関連ともありかなりの物があったが、ゆりかごはその中でもかなりの要素を占めていた。

曰く、古代ベルカの戦乱を収めるに至った要素の一つ。聖王さえ乗っていれば、二つの月の魔力を受け、無限にも等しい力を発揮する。攻守に渡り優れた力を持つその性能故に、聖王はそこで生まれ死んでいく事を選ぶだろうと言われた程だ。そのような意味合いからゆりかごと名付けられたらしい。

その記述を読み終え、ユーノは静かに息を吐く。詳しい話は聞いていないが、なのはが言うには邪眼はかつて仮面ライダーが倒してきた怪人を創り出し、送り込んでくるだろうとの事。それは、五代へ何度も戦いを強いる事になる。

ユーノはそう考え、何とも言えない気持ちになった。ユーノは五代と接し、共に次元世界の遺跡について話した事もある仲だ。その絆は、下手をすればなのはやすずか以上かもしれないとも言える。

（五代さんは、戦いを嫌っている。いや、クウガになる事自体もどこかで嫌がってる。でも、きっとクウガだから戦うって……そう、言うんだろうな……あの人は）

ユーノが思い出すのは、五代と過ごした夜の事。遺跡近くでキャンプを張り、二人で焚き火を囲んでした話。ユーノが五代へ尋ねた事がキッカケで始まった、忘れる事の出来なくなった話。

――五代さんの世界の古代人は、どんな暮らしをしてたんです？

考古学者として、純粋に気になったからのそれに、五代は桜子から聞いたおぼろげな知識を思い出し、何とか話してくれた。農耕民族で、争いを好まず平和で穏やかなリント。それが、自分達の先祖に当たる民族と五代が告げると、ユーノはそれに頷いたが同時に疑問も抱いた。ならば、何故クウガのような存在を生み出したのだろうと。

それに五代は簡単に未確認の話を聞かせた。残虐で残忍な戦闘民族グロンギ。アマダムと同質の石を持ち、その力を使い殺戮を楽しんでいたのだと。それにユーノは納得し、そのための自衛手段としてクウガが誕生したのだと結論付けた。

――と言う事は、その古代のクウガもグロンギと戦ったんですね。

――うん。それで、未確認を封じ込めたんだって。アマダムの力を使ってね。

五代の答えにユーノは違和感を感じた。何故古代のクウガは封印しか出来なかったのだろうと。どうして現代に甦ったクウガである五代は、封印ではなく倒す事が出来たのだろうと。それをユーノが五代へ問いかけると、五代も考えてもみなかったと告げ、腕を組んで考え出した。

焚き火の爆ぜる音だけが周囲に響く。そんな静寂。だが、五代がやがて苦い表情を浮かべた。それにユーノは気付き、どうしたのだろうと見つめた。すると、五代はユーノへ自分が思いついた推測を

告げた。

――俺がさ……未確認なんかいなくなれって思ったからじゃないかな。

その言葉がユーノは理解出来なかった。五代は、そんなユーノへアマダムの説明をした。持つ者の意思に応え、力を与えるアマダム。故に、古代のクウガはグロンギを倒すだけではなく、愛する者達を守りたいと考えた。殺すのではなく、護る。それに重きを置いた気持ちだったからグロンギを封じるしかなかったのではないか。

その推測にユーノは理解を示し、こう補足した。もしかすれば、リントの文化には”殺す”という概念自体が無かったのかもしれないと。だから、勝利してもグロンギが死ぬのではなく、破壊や殺戮が出来ないようにする事しか出来なかったのではないか。

それに五代は感心したように声を漏らし、何かを考えてそうかもしれないと肯定した。そして、桜子とユーノは話が合いそうだと思い、五代は笑顔で告げた。そこから始まる五代の思い出話。それをユーノは聞き、相槌を打ったり、質問したりとしていたのだが、やがて五代がふと呟いた。

――やっぱり……俺、冒険家でいたいなぁ……

それがユーノにはとても儚く聞こえた。何故ならば、五代はクウガとして戦う宿命を背負った。仮面ライダーとして人知れず闇と戦う事。ユーノはそれを考え、五代の呟きが秘めたものを感じ取ったのだ。

――……戻れますよ、絶対。

だからこそ、ユーノはそう言い切った。それは、五代が”クウガ”ではなく”五代雄介”として過ごせるようになると言ったのだ。五代はユーノの言葉の意味を気付き、驚きを見せた。そんな五代へユーノはこう続けた。

――冒険だけする五代さんに……必ず戻れます。クウガとしての寄り道は、きっとここで終わりますから。

その言葉に、五代は声を失った。ユーノが言った言葉が、あの吹雪の中での一条の言葉を思い出させたのだ。こんな寄り道はさせたくなかったとの言葉。故に、五代はユーノに一条の面影を重ねた。

そして、五代はその言葉を噛み締めて笑顔を返した。その笑顔と共にサムズアップを添えて。それにユーノもサムズアップを返す。

そんなとある夜の思い出だ。

「……スクライア司書長、またロウラン提督から資料請求依頼がきています」

そんな事を思い出していたユーノを、女性の声が現実へ引き戻した。その言葉にユーノは視線を声のした方へ向けた。そこにいたのは、やや鋭い目をした眼鏡の女性。つい最近無限書庫へ配属されたルネッサ・マグナスと言う名の司書だ。

「分かった。検索はこちらでやるから、後は君に任せていいかな、ルネ」

「はい。では……」

ルネッサはユーノの言葉に頷き、検索魔法で導き出された棚へ向かい、書庫内を移動していく。それを見つめ、リーゼ姉妹が感心し

たように呟いた。

「彼女、もうそこまで出来るのね」

「大したもんだ」

「まあね。事務能力も高いし、実際結構助かってるよ」

ユーノがそう言うと、二人はレティに感謝しないとと言って苦笑する。ユーノもその表情を見て同じように苦笑。何せ、その見返りで無限書庫への資料請求依頼が増えているからだ。リーゼ姉妹はそれを知らないが、その性格は知っているため予想出来たのだろう。

こうして、三人はゆりかごについて調べると同時に、並行世界関連の資料も探す。そして、近く行なわれるロストロギアオークションの話がここでもされるのだった……

地上本部　レジアスの執務室。オーリスは機動六課からの報告に頭を痛めていた。怪人を自称する謎の生命体が、隊舎を襲撃してきた。それを裏付ける映像と証言を前にしてだ。レジアスに報告する前に自分が軽く目を通そうと思ったのだが、見なければ良かったと思ったぐらいに、オーリスは後悔していた。

「……何なのよ、これは。一体、何だって言うのよっ！？」

化物としか表現出来ない怪人の姿。それと戦う異形の存在。しかも報告では、その化物は量産可能である可能性も示唆されていれば尚の事。

「……六課は、仮面ライダーはこんなのと戦うというの？」

父レジアスが唱える質量兵器の解禁。それをしたとしても、これには勝てないとオーリスは思った。中途半端な魔法も簡単な質量兵器も意味を成さない。そんな印象を与えるには、怪人の見た目と能力は十分だった。何せ、精鋭揃いで陸への侵略者と揶揄される六課でさえ、仮面ライダーがいなければ倒せなかっただろうと書かれていれば、余計に。

オーリスは、グレアムがレジアスへライダーの話をした後、独自でライダーの事を調べてみた。そして、そのほとんどが同じ意見だった。

――心から助かったと感じた。

みな、恐怖よりも頼もしさを感じていたのだ。その外見よりもその行動へ意識を向けて。そして、もう一つ分かったのは、彼らはミッドでしか目撃されていないという事。そして、三人が三人とも独自のバイクを駆り、颯爽と現れる事だ。

まるで、声にならない叫びに導かれるように。罪無き命を、失われそうな未来を救わんとするかの如く。市民だけではなく、局員達にまでその活躍と存在は広まっていて、風にその名を呼べばやってくると言った都市伝説さえ生まれる程に。

「……父さん、もしかしたら今は、陸だの海だの言ってる場合じゃないかもしれないわ」

今後起きるであろう怪人達の動きを予測したものを見つめ、オーリスは誰にでもなく呟いた。管理局が一丸となって事に当たらなければいけない。そんな風に感じさせる内容がそこにはあったのだか

ら。
それは、はやてが光太郎から教えてもらった歴代の組織が目指したもの。あくまでも、ライダーから聞いた情報として書かれたある言葉。

怪人達の目的は、世界征服である…

…と。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

アグスタ話ですが、既にティアナの無茶はなく、イベントとしてはなのは達のドレスぐらいです。

……原作準拠なら、ですが。それと、今後も今回に多少出ているような形で空白期であった過去話を描きます。海鳴に行った際は、クウガとイレイン戦を書こうかなと考えています。

初連携と決意の言霊

あの光太郎発案の模擬戦は、実に多くの課題を六課に理解させた。それは、ライダー達への支援や連携の難しさだ。結果はＲＸ率いるライトニングが勝利した。やはりＲＸの能力の高さと経験の多さが、ライダー戦にもチーム戦にも有利に働いたためだ。しかし、一番の要因はフェイトがＲＸと多くの時間を過ごしていた事。そう、結果として一番ライダーとの連携が取れていたのだから。

クウガとなのはもいい動きを見せていたのだが、やはり接近戦が出来るフェイトに比べ、なのはではクウガの援護はともかく、連携がやや不向き。はやてはアギトとの共闘自体が初めてで、ヴァルキリーズは龍騎との連携はそれなりだったものの、龍騎は必殺技が一度きりなのが響き、敗北。

ちなみにシグナムとアギトのユニゾンは高い融合係数を発揮。その力はユニゾン龍騎には及ばなかったものの、強烈な存在感を周囲に示した。アギト自身も本気で、真司と出会う前に会っていれば即決だったと思ったぐらいに。

しかし、まだやはり真司からロードを変更する気にはなれず、アギトはシグナムとは求められればユニゾンする相手に留めるのみだった。真司としてはもうロードにすればいいと思ったのだが、それを決めるのはアギト自身とも考えているのであまり強くは言わなかった。

こうして、それぞれが感じたのは、ライダーに無理に合わせるのではなく、自分達の出来る事を懸命にやろうとすればいいという事だった。実際、ＲＸとフェイトはそうだった。互いが互いの動きに合わせるのではなく、互いの最善を尽くす事に傾注していたのだから。

そして次の日から早朝訓練は、ＲＸがまずライダー達の戦力を底上げする事と互いの連携を高めるために、ライダー同士で二人一組となって訓練を開始。なのは達はスターズとライトニングの小隊としての連携を意識した訓練を。ヴァルキリーズは十二人での連携と並行し、どんな組み合わせでも高い連携を出来るように訓練を始めた。はやてはシャマルやザフィーラ、リインと共にそれぞれの訓練を見学したり時に参加したりしながら、意見や感想を言う役目を負っていた。

この日もそんな実りある訓練を終えて、通常業務をこなしていたのだが……

「ホテルアグスタの警備？」

『ああ。ロストロギアオークションが行なわれる事は知っているか？』

部隊長室で書類を片手に、はやては画面に映るクロノへそう反応した。クロノはその言葉に頷き、そう返す。はやてもそれは少し聞いていたのか頷いた。それにクロノが簡単な経緯を説明する。邪眼がロストロギアに興味を抱いたとすれば、そこを襲う可能性がない訳ではない。

そのため、念のため六課に出動依頼を出したいのだと。それを聞いてはやては理解を示した。邪眼の恐ろしさは管理局自体には知られていない。いや、知られないようにしたと言う方が正しいかもしれない。リンディを初め、誰もが思ったのだ。邪眼の存在を知れば、管理局全体に恐怖心を与える事になりかねないと。

闇の書の闇をも飲み込み、自分の力へと変えた邪眼。そんな存在

がいて、尚且つこのミッドを狙っているとなれば混乱は必死だ。何せ、歴戦の騎士であるヴォルケンリッターや幾多の現場を経験したクロノ達でさえ、それと対峙した時は神経をすり減らしたのだから。

　であれば、一般の管理局員がどうなるかなど簡単に予想出来る。だから、誰も邪眼の存在を知らせるつもりはなかったのだ。前もって心構えをしておける者はいい。だが、大半がそれに立ち向かう事が出来ずに恐怖に飲まれてしまうだろう。なのは達も、仮面ライダーがいたからこそ何とか立ち向かえた部分が大きいのだから。

「……分かった。なら、翔にぃ達も連れていくわ」

『そうしてくれ。ああ、それと念のため、そちらにも一人はライダーを残しておいた方がいい』

「そやな。なら、ヴァルキリーズと真司さんには残ってもらうわ」

『そうか。一度その城戸真司という男にも会ってみたいが……』

「今度カリムのとこ行く時、連れてくわ。なのはちゃん達と五代さん達も連れてこ思っとったし」

　はやてがそう言うとクロノは少し楽しみだと告げて、通信を切った。はやてはその最後の言葉に小さく笑みを浮かべ、なのは達へ部隊長室へ来るように連絡を入れるのだった……

　六課所有のヘリが空を行く。だが、そこにいるのは前線メンバーであるスバル達だけではない。シャマルやザフィーラと言った後方支援のはずの者達もいるのだ。しかし、その代わりになのは達隊長

達の姿がない。シグナム達副隊長はいるというのにだ。
その理由。というか、キッカケは今から遡る事一時間前までに遡る。

あの後、真司達に残ってもらう事になり、ヘリでアグスタまで向かう事になったのだが、五代と翔一が念のため自分達はバイクで向かう事を提案したのだ。それは、怪人戦になった時の事を見越しての事。はやて達もそれに納得し、二人はバイクでとなったのだが、光太郎がならば自分もアクロバッターでと言い出し、ライダー三人はヘリではなくツーリングの様相を呈する事になった。
すると、ティアナが何かを思い出したように五代への頼んだのだ。今度休みになった時、ビートチェイサーを貸して欲しい。それで翔一との約束だったツーリングをしたいからと。それにはやてが反応し、詳しく内容を聞き出したのだ。

そして、何を思ったのか、はやては自分も翔一のバイクで行くと言い出したのだ。ティアナが翔一のバイクの後ろに乗り、デートもどきをした事が悔しかったのだろう。それに周囲がやや困ったように反応を返す中、翔一は別に構わないと告げて一件落着。かに見えた。
しかし、今度はフェイトが自分も光太郎の後ろに乗って行きたいと告げた。それは、ホテルの場所を知っている者がいた方がいいだろうとの考え。確かにヘリを追走すればある程度の道は分かるが、念には念をとの事。だが、その裏には女性らしい思いが見え隠れしていた。

それを知るはずもない光太郎は、助かるとばかりに笑顔を浮かべ、フェイトへヘルメットを手渡した。それにどこか嬉しそうにフェイトが笑みを返すのを見て、なのはが自分も五代の後ろへと言い出したのは、もう流れとしか言いようがなかった。

仕事に向かうというのに、どこか遊びに行くかのような雰囲気の二人。それになのははお目付け役が必要だと感じたのだ。五代は、そんななのはの気持ちは分かったのだが、それはなのはもだと思った。故に、苦笑しながらなのはへ予備のヘルメットを渡し、こうして隊長三人はそれぞれライダーのバイクの後ろに乗って、アグスタを目指す事になったのだ。

「……私もビートチェイサー乗りたかった」

窓から下の道を走る三台のバイクを見つめ、スバルがそう呟く。それを聞いて、少しだけティアナが自慢するように心の中で呟いた。

（アタシは乗ったもんね。今度は自分で運転出来るから、楽しみだわ）

小さく笑顔になるティアナ。それに気付かず、スバルはずっと視線を下へ向けていた。それに苦笑しつつエリオとキャロは、自分達もいつかアクロバッターやライドロンに乗せてもらおうと思う。しかし、それは口に出さずにいようと思うのだった……

ヘリを追い駆けるように走る三台のバイク。先頭はアクロバッター、続いてビートチェイサー、翔一のバイクという順である。フェイトは光太郎からアクロバッターの前身であるバトルホッパーの事を聞いていたし、なのはは五代とアグスタにはユーノも来ていると楽しそうに話していた。

だが、はやてはずっと翔一へ恨み言のように言葉を投げかけ続けていた。それは、ティアナとの出来事を聞いたが故のもの。

「浮気もん！」

「だから、何度も言うけど浮気なんてしてないよ？」

「したんやっ！　無自覚なのが余計性質悪いわ！」

「ただティアナちゃんとバイクで出かけただけで……」

「それが浮気ちゅうんや！」

これである。はやては密かに翔一のバイクに乗せてもらう事を夢見ていた。翔一が帰ってくる事を信じて、休みの日にバイクを洗ったりしながら。そう一途に思い続け、彼女は翔一が帰ってきてすぐの休みにその夢を実現した。だが、それが自分が叶える前に別の女を乗せていたとなれば、怒り心頭というものだ。

確かに浮気ではないだろう。翔一とはやては少しも恋仲ではないのだから。それでも、はやてとしては許せる話ではなかった。今だけは部隊長ではなく、ただの女でいい。そんな風に思い、はやては翔一へ思いをぶつけていた。

そんな二人とは違い、どこか兄妹のような雰囲気さえ漂わせ、五代となのはは会話に花を咲かせていた。

「そっか。考古学者としてロストロギアの解説を……」

「はい。昨日話した時、ユーノ君が少し緊張するって言ってました」

「ははっ。ユーノ君らしいね」

「でも、まさか行く事になるなんて思わなかったです」

「きっと驚いて、すっごく喜ぶと思うよ、ユーノ君」

「はいっ！」

そう嬉しそうに言って、なのはは笑う。それを感じ取り、五代も笑う。共にユーノとは浅からぬ関係がある。それだけではない。なのはにとって、五代は自分の生き方に大きな影響を与えたもう一人の兄のような存在。

困った時や悩んだ時、迷った時にも五代の言葉やその考えが自分の道を導いてくれたのだ。みんなが出来る限りの無理をすれば、きっと上手くいく。いつでもみんなの笑顔のために。そんな言葉の数々が、なのはのこれまでを支えてきた。

教導隊に入った時もそう。自分がいつか人に教える事が出来るようになるのか、どうすれば自分の全てを伝える事が出来るのか。そんな事を考えた時、五代ならどう言うかと考えて、なのははこう結論付けたのだ。

自分を分かってもらう事も、他人を完全に理解する事も出来ない。そんな事は神様でもなければ無理。だから、少しでもいいから互いを思いやって、分かり合えるようにするしかない。そのために、自分がまず相手を思いやる事から始めようと。

（この人は何を言いたいんだろう。何を伝えたいんだろう。そんな風に考えるようになったら、いつの間にか自然と教導官になってたんだよね……）

人を理解しようと努力する。それが人に理解してもらう一番の方法。それをなのはは自然と体現していたのだ。教える事は押し付けではなく、伝える事。少しでも自分から何かを得てもらう事が出来

れば、それが教導なのだ。それがなのはの持論になっていたのだから。

そんな風になのはが今の自分の指針を思い返している前方では、フェイトが光太郎と既に話題を変え、少し真剣な話をしていた。

「……そうか。やはりジェイルさんも知らないと」

「はい。スバル達の技術を流用し、トーレ達を生み出したと言ってました」

「そうなると……一体どこに」

「分かりません。もしかすると、もうどこかで亡くなった可能性もあります」

「そうなら、それでもいいんだが……」

光太郎の搾り出すような呟き。フェイトはそれが聞こえないでも、何となく察したのだろう。同じように表情を歪ませていた。スバル達姉妹を作り出した存在。それは、未だに情報がないままだった。ジェイルから聞けたのは、彼に戦闘機人の技術を提供したのは、結果としてナカジマ姉妹だったという事だけ。

ジェイル自身もそれが誰の手によって作られたのかは知らないとの事だった。光太郎はそれを聞いて、残念に思う気持ちと同時にどこかで嬉しく思っていた。ジェイルが言ったのだ。自分以外で戦闘機人を作っている者はおそらくいないと。その証拠は、未だに戦闘機人を使った犯罪や事件が起きていない事だ。

（こうなると、戦闘機人の技術はあまり広まっていない可能性があ

る。このまま、埋もれていってくれればいいんだが……）

ジェイルをして、簡単に作り出す事は出来ないと言わしめる戦闘機人の技術。ジェイルはもう広めるつもりはないらしく、このまま闇に葬りたいと考えているらしい。光太郎としてはそれを聞いて、真司へ仮面ライダー十四号の名を贈りたくなった程だ。

真司がジェイルを変えたからこそ、戦闘機人の技術を世に広めずにいたのだから。そして、それの放棄と隠滅まで考えている。これは、仮面ライダーとしてはかなりの意味を持つ事だった。改造人間とどこか近いものがある戦闘機人。それを作り出す技術を捨てさせるという事は、将来改造人間を生み出す可能性を完全に絶つ事にもなるのだから。

そんな事を考えていると、視界の先に大きな建物が見えてきた。それがアグスタだと理解し、光太郎は後ろのフェイトへ声をかける。

「……そろそろホテルに着くよ」

「あ、本当ですね……」

光太郎に言われ、フェイトはどこか寂しそうに声を返す。その瞬間、光太郎は、自分へ回されていた腕の力が少しだけ強くなった気がした。まるでこの時間が終わるのが嫌だと言うような反応。そして、その底に秘められた感情を察して、光太郎は小さく嬉しそうに、だが悲しそうに笑みを零し、フェイトへ告げた。

「そんなに気に入ったなら、今度また休みにでもこうして乗せるよ」

「えっ？」

「いや、腕の力が強くなったからね。まだ乗っていたいのかなって。バイクには車とは違った魅力があるから、そこを気に入ったのかなって思ったんだ」

光太郎は敢えてフェイトの気持ちに気付いてないように、そう軽い感じで告げた。それにフェイトが小さくそうじゃないと呟くが、それでもすぐに笑顔で是非と返した。それに光太郎は頷き、少しだけ速度を上げた。

それはまるで、フェイトの気持ちを無視するしか出来ない自分へ怒りをぶつけるように、爆音を響かせるのだった……

その頃、六課で留守番を任された真司達はというと……

「……うし、これでいいかな」

「どれ？　……五代の味に近いが、やはりどこかお前の味だな。まぁ、それでも美味しいからいいが」

カレーの仕込みを終えた真司。身につけるエプロンは龍騎のマーク入りだ。つい最近、真司は自分用のエプロンを完成させたのだ。無論、チンクとセインが欲しがったのは言うまでもない。

その後ろからリインが味見とばかりに少しだけ小皿に取り、真司に対しそう評した。それに真司は喜べばいいのか落ち込めばいいのか分からず、反応に困る。それを見て、リインは楽しそうに笑う。

チンクとセインはそんな光景を見て苦笑。今日は五代も翔一もいないため、レストランアギトと喫茶ポレポレは休業となり、代わりに一日だけの営業という形で食事処花鶏あとりが開店するのだ。出来るだけ二人の味を再現しようと真司が奮起しているが、悉くリイ

ンの厳しい評論の前に撃沈しているのだ。

「真司兄、苦戦してるね」

「何、あまり堪えておらんさ」

そういう二人は、花鶏の一押しである餃子の仕込み中。しかも、今日は五代と翔一がいないために手伝いとして更に二人、ここに加わっている者がいた。

「はい。こっちは終わったわよ」

「チンク姉、後何すればいい？」

ドゥーエとノーヴェだ。それぞれ手伝う相手や組み手相手がいないため、手が空いている所を真司がスカウトしてきたのだから。その声にチンクが次の指示をリインへ求め、それに従いドゥーエ達が動き出す。

女性五人で和気藹々と食事の支度を進めていく隣では、真司がそんな五人とは違い、一人黙々とアギトセットとアギト御膳の再現に挑むのであった……

「シャーリィ、これはどうかな？」

「……凄い。これなら組み込みを開始出来ます！」

「そうかい。それは良かった」

ジェイルはシャーリィの言葉に笑みを返すと、視線をモニターへ戻した。今二人が取り組んでいるのは、ＡＭＦ対策ではなく、スバル達のデバイス強化だった。龍騎からのデータを使った材質強化や魔力弾の威力向上など、前線四人だけではなく隊長陣にもそれを組み込むために。無論、ＡＭＦ対策も並行して進めてはいる。だが、一向に進まぬ物よりも多少なりでも進む方へ意欲が向いても仕方ないだろう。

そして、ジェイルはシャーリィから愛称での呼びかけを許可された。というよりは、シャーリィがそれを求めたのだ。仲間であるのだから、余所余所しいのは嫌だと。それにジェイルは少し意外そうな表情を浮かべたが、有難く受け取ったという訳だ。

「ドクター、例の施設も外れです。こうなると、あの辺りが怪しいですね」

「そうか。意外と大胆だね、老人達は」

「のようです」

ウーノはＩＳを使い、聖王のコピーが培養されている施設を割り出していた。残った箇所も少なく、しかもそれはミッドの中心部に近い場所ばかりなのだ。故に、ジェイルは大胆と評し、ウーノもそれに同意したのだから。

そして、施設の割り出しが一段落してきたので、ウーノはそれと並行して進めている事がある。それは、ジェイルが関わっていた管理局関係者であるレジアス・ゲイズとのコンタクト。

理由は一つ。ジェイルが一番接触を持っていた相手だったから。邪眼が自分を装い、接触する事を懸念したジェイルは、ウーノへレジアスへの連絡を一番に命じた。そして、ジェイルはレジアスへ現

状を伝え、協力して一手打つ事にしたのだ。
　邪眼から接触があった場合、何も知らぬ風に応じて、意図的に地上本部の正しい内部情報を教えるのだ。おそらくそれを聞いて邪眼は裏を取り、確認するだろう。それを逆手に取るのだ。つまり、それが正しい情報であればある程、邪眼はそれを信じる。故に、その行動はそれに準じたものへと変わるだろう。

（それは、ドクターの手の内へ自ら嵌ってくれる事を意味する。そう、手薄だとしても、そこには局員ではない邪眼達の天敵を配置すればいいのだから）

　ウーノはそう考え、小さく笑う。ジェイルの立てた計画を使って動く以上、必ず公開意見陳述会で大きな行動を起こす。それを外して動く事も考慮しているが、ウーノは絶対にそうだと思っていた。
　ジェイルを基にして生まれた邪眼。その思考は、どこか昔のジェイルに引っ張られる部分があるはずだ。管理局の権威を失墜さえ、管理世界全体へ自らの存在を刻ませる。そして、世界を自分の思うままに動かしたい。そんな風に考えていたように、昔のジェイルは見えたのだ。

「あ、それでジェイルさんアレなんですけど……」

「やはり厳しいかい？」

「いえ、みんなのバリアジャケットに適応させる事は出来ます。ただ、デザインは変更出来ませんよ？」

　シャーリィの返答にジェイルは少しだけ残念そうに頷いた。アレとは、龍騎から得たデータを基にしたバリアジャケットタイプの強化装甲。ブランク体の強度を目指し作り出したものだ。それをジェ

イルは、なのは達へのバリアジャケットに流用する事を考えた。
その際、外見をあれと同じにする事で怪人達を驚かそうと考えていたのだが、シャーリィはそれを拒否したのだ。何せ、あまりにも無骨なのだ。六課の前線メンバーは女性が多い。それがあんな甲冑みたいな姿になるのは、正直シャーリィは見たくなかった。

「駄目かなぁ……アレ」

「「駄目です」」

それでもと思って呟かれたジェイルの言葉。それを即座にシャーリィとウーノが斬って捨てた。その容赦の無い言葉に、ジェイルは残念そうに肩を落とし、それを見て二人は静かに笑みを浮かべ合うのだった……

「……どこか落ち着かないですね」

「そうだね。でも、留守を任されたのは信頼されている証拠だよ」

主のいない席を見つめてオットーがそう言えば、グリフィスはそう苦笑しながら告げる。それにディードが同意するように頷いた。

「そうですね」

そんな三人の近くでは、ツヴァイとアギトが仲良くデスクに座って仕事中。のはずだったのだが……

「アギト、どうです？　出来そうですか？」

「う～……無理だぁ！　アタシには出来ね～！」

ツヴァイのどこかからかうような声に、アギトはそう叫んだ。ツヴァイの補助も無しで仕事が出来ると意気込んでいたアギトだが、まだ仕事を始めたのはつい最近。故に一人で出来るはずもなく、アギトは完全に手を上げた。それにロングアーチ全員が笑みを見せる。

「じゃ、あたしが手伝うよアギト」

「あ、なら私も」

「アルトもルキノも自分の分をやってくれ。リインさん、アギトの補佐を頼めますか？」

「はいです」

アギトの可愛らしさに笑みを浮かべながら、アルトとルキノが言い出した内容に、グリフィスは苦笑しながらそう指示を出す。それにツヴァイが頷いて、アギトの近くへ行ってその手伝いを始める。それにアルトとルキノが少し不満そうな表情を返すものの、グリフィスがそれに若干鋭い視線を返すと、黙って自分のコンソールへ視線を戻した。

「情けないわねぇ……」

「グリフィスさんの迫力勝ちですね」

クアットロはそれに苦笑し、オットーも同じように苦笑した。和やかな雰囲気もありつつ、やはりどこか厳しい雰囲気もある指揮所。

その独特な空気感を心地良く感じながら、彼らは仕事に励むのだった……

六課の格納庫。そこでウェンディとディエチは、自分達の武装を手入れしながら過ごしていた。その傍には、トーレとセッテがいる。二人はいつものように自主訓練を終え、何と無しに格納庫へ来たのだ。

そして、ライドロンやゴウラムを見つめながら不思議そうに何かを考えていた。意思を持つ生体メカ。それは、一つの生命体だ。そう、クウガとRXは龍騎と同じく意思を持つ相棒を有している。そう考え、二人が抱いた考え。それは……

「……共通点が必ずあるな」

「はい。必ずしも四人全員にではないですが、クウガとアギトやRXとクウガのように、それぞれの間には複数の共通点が見られます」

仮面ライダー達の共通点。それが、かなり似ているものが多いのだ。クウガとアギト、RXの別の姿への変化。アギトとRXの武器の出現位置など。細かな部分での類似点がよく見られる。龍騎はそこまでないが、そのとどめが蹴りである事は四人に共通する事だ。

しかも、聞けば仮面ライダー達は、ほとんどその蹴りによって怪人を打ち倒してきたらしい。それを光太郎経由で知った時、五代達は意外そうな表情をしたものの、自分が知らず歴代の仮面ライダーと同じ決め技を使っていた事に喜んだ。

とにかく、そういう事も含めて異世界の仮面ライダーである龍騎やクウガにも、人の未知なる可能性たるアギトでさえ、RX達従来

の仮面ライダーと似ている点が多いのだ。まるで、何者かが仮面ライダーという存在に対し、同じ要素を持たせたかのように。

神と呼ばれそうな相手と戦ったアギト。もし、その相手が仮面ライダーを作ったとなればそれも納得出来る。しかし、その可能性は低いだろうとトーレ達は思った。まず、最初の仮面ライダーは人体実験の末に誕生した。更に、彼らを改造した組織は揃って違う組織だ。

繋がりはあったのかもしれないが、だとしても妙だとトーレは考えた。何故、いつも仮面ライダーは生み出されたのだろうか。いや、正確には仮面ライダーと同じような外見と能力を有した存在を。しかも、それらが決まってその組織の敵となる。

光太郎にもしその疑問をぶつければ、彼はこう答えただろう。仮面ライダーは天敵なのだと。それは、病原菌を駆逐するために動く白血球のように、悪に対する自浄作用として現れるのだと。

だが、光太郎も知らない事がある。仮面ライダーが生み出された理由。それは、とある計画のためだったとは。一号からＺＸまでが協力し、打ち倒した大首領。そう、彼こそが仮面ライダーの基になった存在。だが、こうも言える。

仮面ライダーの基になったのは大首領だが、だからこそ大首領の天敵となりえたのだと。最後の者の名を冠するＺＸ。彼はその大首領からこう評された。９９％の同調、１％の拒絶と。だが、その１％こそが仮面ライダー達に共通する要素。そう、それは魂。いかに強力な力を持とうと、使う魂が歪んでいれば、それは決して強さにはならない。歴代の仮面ライダー達が性能面で劣るにも関らず、次々と現れた最新鋭の怪人を相手にして勝てたのは、まさにそれだったのだから。

「もしかしてさ、クウガとＲＸのキングストーンだけじゃなくて、

アギトや龍騎も含めた四人に共通する何かがあるのかもしれない」

「例えば何ッスか？」

ディエチの告げた言葉に、ウェンディが不思議そうな表情で問いかける。それにディエチは困った顔をし、何とか考えようとするが、中々いい考えが浮かばずに沈黙する。すると、それにトーレがどこか自分でも納得していないという声で告げた。

「……仮面ライダーの名を誇りにするＲＸ。仮面ライダーになろうとするクウガ。仮面ライダーであろうとするアギト。仮面ライダーを変えようとする龍騎。その在り方の変遷が影響し合っている事ぐらいしか浮かばん」

トーレの告げた言葉に、三人が考え込み頷いた。もしかすると、仮面ライダーという名の持つ意味と、その重さを見つめさせるために四人は出会ったのではないのか。そんな風に思えたのだ。

だが、それはきっと偶然だろうと四人はそれぞれで結論付け、話題を変える。それは、最近密かに白熱している討論。そう、四人のライダーの中で誰が一番強いかだ。キッカケは素朴な疑問。四人のライダーが全力で戦ったら、誰が勝つのだろうというもの。

それにスバルはクウガ一択。ティアナは心情としてはアギトだが、能力的にＲＸを推していて、エリオとキャロもそれに続く。ツヴァイはアギトを推し、アギトは龍騎。ウーノは冷静にクウガを選んだ。ＲＸは確かに強いだろうが、クウガには金の力と四つのフォームチェンジがあるのがその理由。

ドゥーエはアギト。まだ隠している能力があると聞いているのが理由。トーレ、チンクは龍騎。理由は敢えて書かない。クアットロはクウガ。理由はウーノと同じものに加え、クウガにもＲＸと同じ

石がある事を加味してのもの。

セインは龍騎。これも、理由は言うまでもない。セッテは悩んだ結果、ＲＸを選んだ。理由は剣を決め手として戦うからだった。しかし、ＲＸが使うリボルケインは剣のように見えて、本当は杖。それを彼女が知る事はないが、それでも彼女はＲＸを推しただろう。

オットーとディードは龍騎。唯一ユニゾンで空戦を可能とする事が大きな決め手になると考えたのだ。ノーヴェはクウガ。理由はどの距離にも適応出来るその力。ディエチもクウガ。理由は五代が恐れる力があるという事。それを使うと全てを壊してしまうようなものだろうと考えるからこそ、ディエチはクウガが最凶だと思ったのだから。ウェンディはアギト。理由は簡単。神に勝ったという一点のみ。

「だから、リボルケインなら例えサバイブでも……」

「いや、いかなＲＸもファイナルベントを無傷でとはいかん」

「チッチッチ、アギトが竜巻起こしてみんなまとめちゃうッス」

「……クウガならそれを紫の鎧で耐え切るんじゃないかな？」

自分の推すライダーの話をする四人。だが、この話をすると必ず最後に引き分けと言う結論で締め括られる。何故ならばそれは……

「「「「仮面ライダーは、みんな強いからな（ね）（ッス）」」」」

ホテルに着いたなのは達は、早速とばかりにシャマルからある物

を渡された。それは、綺麗なパーティードレス。仕事着とシャマルは笑っていたが、あながちそれも間違いではない。ホテルアグスタで行なわれるオークション。それは少し格調高い雰囲気が漂うものだからだ。

その会場へ管理局の制服で入るのは少し憚られる。故のドレスだった。ホテルの中はなのは達隊長三人に光太郎と翔一が担当。外は五代とスバル達四人、それに守護騎士達となった。

「しかし……」

「はい？」

並んでホテル内を歩く光太郎とフェイト。だが、光太郎がフェイトの格好を見て、どこか苦笑しながら告げた。

「分かってはいるけど、やっぱり何か違和感があるね」

「そうですね。少し恥ずかしいです」

「なら、俺もそれに合わせてタキシード辺りを着れば良かったかな」

「ふふっ、そうして欲しいかも」

黒のドレス姿のフェイト。それが微笑むのは実に様になっていた。光太郎はそう思いながら、視線をさり気無く周囲へ動かす。気配などにも怪しいものはない。ここは安全かと考え、フェイトへ視線を戻し笑みを向ける。

それにフェイトも笑みを返し、二人は再び歩き出す。他愛もない会話を交わしながら、周囲へ注意を払う事を忘れずに。しかし、フェイトにはどこか顔に朱が浮かんでいるのだった。

一方、はやては翔一と共にある人物と出会っていた。

「「ロッサ（さん）！？」」

「や。久しぶりだね、はやて。それと、翔一さんもお元気そうで……」

いつもの白いスーツ姿で、ロッサはにこやかに笑って二人へ声を掛けた。そして、はやてのドレス姿を見て一度軽く頷くと、視線を翔一へ向けた。

「翔一さんは、はやての格好をどう思います？」

「すごく可愛いって言ったんですよ。でも、はやてちゃんどこか不満があるみたいで……」

本音なのにと翔一が呟く。それにロッサは少し意外そうな表情をはやてへ向けた。それにはやては念話で先程までの経緯を話した。本当は嬉しいのだが、今は素直に喜べない。翔一が心から自分を誉めてくれているのも分かっている。

だが、それでも長年の自分の夢を裏切られていた事への怒りは、簡単に消えそうになかった。ロッサはそんなはやての心情を理解したのか、少しだけ苦笑すると翔一へ近付き、何かを耳打ちした。

「……じゃ、僕は僕で仕事があるから」

「そか。またな、ロッサ」

「アドバイスありがとうございます、ロッサさん」

二人へ手を振って、ロッサは去って行く。翔一の感謝を聞き、ロッサは改めてその姿勢を尊敬した。年上年下に関わらず、誰にでも敬意を持って接し、純粋に気持ちを伝えてくる。やろうと思っても中々出来ない事だ。それを翔一は意識もせずにやってのけているのだ。

（やっぱり翔一さんはすごいね。僕も、ああでありたいよ。それにしても……）

ある程度歩き、ロッサはちらりと後ろを見る。もうそこに二人の姿はない。翔一が自分のアドバイスに従い、別の場所へ連れて行ったからだ。それを確認し、一人笑みを浮かべるロッサ。

（どこか、昔のはやては罪悪感から少し生き急いでいるようにも見えたけど、翔一さんが戻ってきた後はそんな感じもしなくなった。それどころか……）

今は恋をしているイキイキとした女性だ。そう思い、ロッサは小さく誰もいない場所へ告げる。それは、はやての兄的立場を自称するからこその言葉。偽りない素直な気持ち。

――僕の方こそありがとうですよ、翔一さん。貴方が、はやてをただの女の子にしてくれた。

ロッサに教えてもらったサロンに来た二人。そこは少し落ち着いた雰囲気があり、どこか大人の場所といった感じさえある。しかも、折良く誰も居らず静かだった。それにはやては中々良い雰囲気と思

うも、隣の翔一がどうしてここへ連れて来たのかが理解出来なかった。

　すると、翔一がはやての方を向き直り、素直に頭を下げた。それにはやてがやや疑問を感じていると、翔一ははっきりと言った。

「ごめん！　俺、はやてちゃんへまず謝るべきだったね」

「……何でや？」

「俺が悪くないって思っても、はやてちゃんに嫌な思いさせてた事には変わりないから。だから、謝っておかなきゃって」

　ロッサが翔一へしたアドバイスはこれだけ。知らずに相手を怒らせる事もあるし、嫌な思いをさせる事もある。なら、それはちゃんと謝罪するべきとの事。翔一はそれに確かにと納得し、こうして謝った。

　そんな翔一の真っ直ぐさを見る事で、はやても自分の子供っぽさに気付いた。翔一はただティアナをバイクに乗せてやっただけ。そこに何も邪なものはない。それを自分は考えず、ただ翔一が自分よりも先に他の女性をバイクに乗せていた事だけを見ていた。純粋な好意からティアナをバイクに乗せてやりたかった翔一。その行いを自分はどうして受け止めてやる事が出来なかったのか。そう思い、はやてはある行動を取る。

「ごめんなさい」

「え？　はやてちゃん？」

　はやてが頭を下げた事に驚き、翔一は頭を上げた。

「わたしも翔にぃと同じや。わたしも翔にぃへ嫌な思いさせてしもうた。やから、謝る」

「……じゃ、これでおあいこって事だね」

笑顔で翔一がそう言うと、はやても頭を上げて笑顔を返す。そして、少しだけ休憩しようとなり、サロンで二人は一時を過ごすのだった……

一人廊下を歩くなのは。目的の場所は、オークション会場であるホール。フェイトが行くつもりだったのだが、ユーノがいる事を知った五代がなのはを行かせて欲しいと頼んだのだ。それになのはは内心で感謝し、こうしてそこへ向かっているという訳だ。

（ユーノ君、驚くかなぁ）

思い浮かべるは恋人の顔。あのパーティー以来直接会ってはいないが、毎晩話している相手。

「……あ、ここだ」

会場となっているホールの扉を見て、なのははその取っ手へ手をかけて静かに開ける。会場はまだ準備中らしく、閑散としている。だが、そこに自分が求めていた相手がいた。

「ユーノ君！」

あまり人がいないのをいい事に、なのはは大きめの声でユーノへ

呼びかけた。それにユーノは軽い驚きを見せ、視線をなのはへと向けた。そして、その存在を確認して笑顔を浮かべた。

「なのはっ！」

「えへへ……お仕事でだけど、来ちゃった」

互いの格好を見て、違和感を感じながらも嬉しそうにする二人。ユーノはなのはのドレス姿を誉め、お返しとばかりになのはがユーノの正装を誉める。久しぶりに出会えた事に喜ぶものの、互いに仕事で来ている事は忘れていない。

故に、その場所で話すのも何だと判断し、二人は連れ立って歩いて行く。目指す場所は特にない。とりあえず、静かな場所に行きたかった。そんな風に思いながらも、二人は他愛ない話ではなく、ある事について話し合っていた。

「……そう、やっぱりないんだね」

「うん。並行世界自体は実在すると言われ続けているけど、誰も行った事がない。どうも五代さん達のように来た人もいないみたいでね。だから文献もあまりなくて……」

「しかも、全員地球の並行世界」

「……それも直接繋がってるのは翔一さんと光太郎さんだけ。でも、時代が十年以上も違う。五代さんと……城戸さんだっけ。二人はそれぞれ違う世界だし、これはもう神様の仕業とかの話だよ」

ユーノが冗談めかして言った言葉に、なのはは思わず立ち止まる。何も知らないユーノでさえそう思うのであれば、やはり五代達を自

分達の世界へ呼んだのは、翔一が戦った相手なのだと改めて思ったのだ。

それは、ジェイルやユーノは神の域に挑もうとしている事を意味する。そう思い、なのはは不可能だと考えてしまった。人でありながら神の領域へ挑む。それは、下手をすれば恐ろしい結果をもたらすのではないかと。

ユーノはなのはが立ち止まった事に気付き、視線を後ろへ向けた。そして、なのはの表情から何かを察したのか、ゆっくり近付き、その肩に優しく手を乗せた。

「なのは……」

「ユーノ君？」

「大丈夫。僕は、絶対に五代さん達との絆を断ち切らせたりしないから。例え相手が神様でも、ね」

ユーノはなのはの目を見てはっきりと告げた。その言葉になのはは、ユーノとジェイルを重ねた。諦めないと感じさせる力強さ。どこまでも再会を、その縁を信じるその眼差しに、なのはは微笑んでみせた。

その笑みにユーノも頷き、その手を放そうとするが、その瞬間なのはがそんなユーノへ顔を近づける。そして、ユーノの頬になのはの唇が重なった。それに目を見開くユーノだったが、すぐになのはが離れた。

「な、なのは？」

「……ユーノ君がカッコイイ事言って励ましてくれたから、そのお

礼だよ」

顔を少し朱で染めて告げるなのはに、ユーノは同じような顔をして何も言い返せない。可愛いと思っただけではない。その行為が自分達が恋人になったのだと改めて感じさせてくれたからだ。

そんな風に互いを見つめ続ける二人。その眼差しは嬉しそうに笑顔を浮かべている。この後二人は、実に三分以上もそこにそうしているのだった……

ホテルの周囲で警戒に当たるスバル達四人。そして、五代。シグナム達はホテルからやや離れた場所で偵察や警戒を行なっている。五代が四人と共にいるのは、怪人が現れた場合の対処がまだ未熟なためだ。

それに、空戦が出来るシグナム達と違い、基本陸戦しか出来ない四人は、逃げるにも苦労するだろう事を懸念しているのもある。そのための五代との警戒任務だった。

「へぇ、ユーノさんってそんな人なんですか」

「そう。物知りで、なのはちゃんの恋人。無限書庫ってとこの司書長してるんだったかな。優しいけど、芯はしっかりしてるんだよ」

今、五代は四人へユーノの事を話していた。キッカケは五代がユーノに会いたかったなと呟いた事。それを聞いたスバルがユーノって誰ですかと聞いた事からこの話が始まったのだ。ユーノの容姿から始まり、出会いや共に過ごした思い出などを話し、最後に五代はそう締め括った。

警戒中ではあるが、何かあればシャマルが気付くし、光太郎の勘

が働くと思っているのもそんな風にリラックスしている理由。それに、五代も四人も話をしながらも注意は怠っていない。常に視線は周囲を見ているし、下手に場所を動かずに五人で固まっているのだから。

「なのはさんの恋人で無限書庫の司書長……」

「凄い人ですね～」

そんな人と五代が知り合いという事に、どこか意外そうな印象を受けているティアナ。それとは違い、普通に五代が誉めるから感心しているスバル。

「フェイトさんとも幼馴染ですよ」

「じゃ、はやてさんともそうだね」

ユーノの事を知るエリオは、そんな二人へ追加情報を与え、キャロはそこからはやてとの関係に気付き、そう告げた。

そんな風に任務中とはいえ、和やかな雰囲気が漂う五人。だが、そこへ密かに近付く存在があった。それはクラールヴィントの索敵からも逃れ、静かに五人へ迫っていた。だからこそ、その時五人以外にその存在に気付ける者がいたのは、まさに幸運としか言えなかった。

その存在であるフリードは、空中ではなく地面に降り立って、キャロの傍で横になって休んでいたのだが、その目が急に見開いたのだ。

「キュクル～！」

そして、突然フリードが叫えた。それに全員が意識をそちらへ向け、同時にフリードが叫えている方向へ視線を向けた。そこには、何の変哲もない大地が広がるのみ。だが、ヴァルキリーズと出会い、それぞれのＩＳを知った今、五人はそれだけで臨戦態勢へ入る。

「「「「セットアップっ！」」」」

「変身っ！」

戦闘態勢へと入る五人。そう、フリードが反応を示したのは地面。それは、セインと同じＩＳを使う相手であるゼクスの接近を意味していた。そう、フリードはあの初めての模擬戦で見せた嗅覚により気付く事が出来た。

ゼクスも五人が自分の存在に気付いたと知ったのか、地面から姿を見せた。それにティアナが頷いてスバルへ指示を出す。

「スバルっ！　ウイングロード！」

「そっか！」

ティアナの考えを即座に理解し、スバルはウイングロードを展開する。そして、それと同時にティアナがエリオとキャロへ叫んだ。

「アタシ達はウイングロードから援護！　クウガはそのまま怪人の相手をお願いします！」

「「「了解っ！」」」

相手のＩＳによって自分達が狙われる可能性を無くすために、テ

ィアナがウイングロードを使った事に気付き、三人はそれぞれ動き出す。ゼクスがそうはさせじと動く前に自ら掴みかかり、四人がウイングロードへ移動する間の時間稼ぎをするクウガ。

まだどこか怯えるフリードを宥めつつ、急いでウイングロードを駆け上がるキャロとその後ろを守るように走るエリオ。ティアナはスバルと共に、ウイングロードを地面から離して完全にゼクスのＩＳが意味を成さない位置に陣取り、クウガの援護をすべく動き出していた。

「アタシ達のするべき事は、クウガの援護。スバル、アンタは一撃離脱限定で接近戦。ただし、接近に使ったウイングロードはすぐに消す事！　エリオは苦手かもしれないけど、魔法主体で中距離戦よ。隙を見て接近してもいいけど、気をつけなさい。キャロはフリードを元に戻して、状況を見てブレス攻撃。アタシは副隊長達へ報告しながら幻術で援護する！」

「「「了解っ！」」」

ティアナの指示に頷きを返し、スバル達が動き出す。ティアナは念話でシャマル達へ連絡しつつ、クウガの援護すべく幻術を使い始める。

「な、何っ？！」

「これ……ティアナちゃんの」

突然クウガが増えた事に驚くゼクス。しかも、赤のクウガだけではなく青や緑、紫もいるという混成だ。クウガはそれがティアナの魔法だと気付き、一瞬だけ視線を上へやった。そこには、幻術を使い少し苦しそうな表情でサムズアップをするティアナがいた。

それにクウガは頷き、困惑するゼクスへ攻撃を開始する。赤のクウガよりも緑のクウガの方がゼクスには向いていると理解はしている。ＩＳを使われても、緑の超感覚ならば把握出来るからだ。だが、今は出来るだけ赤のままで戦おうとも思っていた。あまり邪眼側に自分の力を知られる訳にはいかない。あの戦いの時、邪眼の前で使った色は赤と紫の二色。青と緑は見せていないのだから。

（緑を使うならそれでしか駄目な時！）

クウガはそう思い、ゼクスとの格闘戦を再開する。先程まで戦っていたクウガが赤だった事を思い出し、ゼクスはそれに反撃を開始。それを受け止めるクウガ。そこへ凄まじい速度で接近するスバルの姿があった。

「やあぁぁぁっ！」

「ちっ！」

繰り出される飛び蹴り。それをかわすため、クウガから離れるゼクス。しかし、スバルはそのまま再び距離を取って離れていく。それに悔しげに舌打ちするゼクス。

「クウガ！　ティアの幻術の意味、考えて！」

「意味……？」

去り際にスバルが叫んだ内容。それに少し疑問を浮かべるクウガだったが、その色とりどりの幻影を見て何かを悟る。

「……そうかっ！」

「サンダーレイジっ！」

「小癪な！」

その声に呼応するように、ゼクスの周囲へ雷が降り注ぐ。エリオがゼクスの頭上で使った魔法によるものだ。それにゼクスがエリオへ攻撃を試みようとし、視線がクウガから外れる。それを見て、クウガは構えた。

「超変身っ！」

そして、色を赤から緑へ変える。緑に変えたのは、電撃に怯むゼクスを攻撃するため。接近せずにダメージを与える事を考えると、それしかなかったのだ。それを見た瞬間、ティアナが手にしていたクロスミラージュの片方をクウガへ投げた。そして、同時に幻術で作り出していた緑のクウガにも変化を与える。

本物と幻影が同時にペガサスボウガンを手にする。そう、ティアナが混成にしたのは、クウガが色を変える事で、本物をゼクスに分からなくするため。そのため、ティアナはスバル達に視線をクウガから外させるようにと、追加で指示を出していたのだ。

「くっ！　死ね、クウガ！」

雷を振り切り、近くにいた赤のクウガへ爪を突き刺すゼクス。しかし、それは幻。そして、同時に他の赤のクウガも消える。それにゼクスは驚きを隠せない。自分が戦っていたクウガは確かに赤だったのだ。すると、ゼクスが何かに気付く。緑のクウガが武器を手にしている事に。

だが、それに意識を向けて戸惑うゼクスへ、クウガがブラストペ

ガサスを放つ。それがゼクスの体を直撃。その衝撃で軽く飛ばされるゼクス。クウガはそれに姿を赤に戻す。そして、手にしてクロスミラージュをティアナへ投げ返し、とどめを放つべく構えた。まだ終わっていないと感じたからだ。

封印を意味する文字に苦しむゼクスだったが、クウガの予想通りそれも何とか耐え切って立ち上がった。だが、一体何が起きたのか理解出来ないという雰囲気のゼクス。何とか状況を理解しようとするが、そこへキャロの声が響く。

「フリード、ブラストフレア！」

本来の姿に戻ったフリードの口から放たれる火炎。キャロは、怯えるフリードへこう言って宥めた。ここで怯えているだけじゃ、誰も助けられないし、何も出来ない。一番嫌なのは、そのせいで誰かが傷付く事だから。だから、フリードの力を貸して欲しい。そのキャロの言葉にフリードは応えた。

フリードとキャロは精神面で繋がっている。故に、フリードの怯えはキャロの怯え。それを乗り越えた心を感じた事により、フリードもそれを克服する事が出来たのだ。二人の思いを込めた炎。それにゼクスがややたじろいたのを見て、クウガは走り出す。

それを見てティアナは魔力の全てを使い、ゼクスの全方向に赤のクウガを出現させる。それによって視界を塞ぎ、クウガの妨害を阻止するためだ。

そして、火炎を振り払ったゼクスが見たもの。それは、自分を取り囲むような大勢のクウガの姿。それが幻術とは理解しているが、どれかは本物かもしれないと思い、慌ててＩＳを使って逃げようとするゼクス。だが、それを読んでいたスバルが、マッハキャリバーで加速してその体に組み付いた。

「そうはさせないっ！」

「くっ！　放せ！」

セインから聞いたディープダイバーの欠点。それは、生物を透過出来ない事と、もう一点。自分以外もＩＳの効果で透過させる事が出来るが、バリアジャケットなどの不純物があると、それが出来ない事。

故にスバルは自分を使いＩＳを阻止していた。更にクウガへの援護も兼ねるために、最後の一押しをしようとその体を押さえ込もうとする。だが、それに対し、全力でスバルを振りほどこうとするゼクス。そこへキャロがブースト魔法をスバルへかけた。

「我が乞うは、巨人の腕。青き拳士に逞しき力を！」

”ブーストアップ・ストロンガー”

「キャロ、ありがとっ！」

「なっ！　振りほどけないっ！？」

腕力強化を受け、スバルはゼクスを押さえ込んだまま、上空へウイングロードで駆け上がる。戦闘機人だからこそ、ブースト魔法だけで怪人と拮抗する事が出来る。スバルはそう考え、自分の体に感謝した。そして、同時に思う。この体でしか出来ない事があるのだと。

忌まわしき体。だが、それがこうして役に立てる。仮面ライダー達と同じように、自分もこの体を誇りに思おう。気高い人の魂。それを失わず、どこまでも人として生きて行くために。

（それに……私にはみんなが、六課の仲間がいる！）

スバルの目に強い輝きが宿る。一人では出来ない事でも、協力し合えばその限りではない。そう考えてスバルは視線を少しだけ下へ向け頷いた。

「放せぇぇぇぇっ！」

「なら、放してあげるよっ！」

そして、ウイングロードを宙返りの状態にし、そこから希望通りその体を放した。完全に空中へ投げ出される形となったゼクス。そこへクウガが跳び上がっていた。

それは、スバルの動きから予想を立てたティアナが、クウガへこう告げたから。きっと空中に運ぶつもりだと。そう、空中ではゼクスのＩＳは無力。故に、もうゼクスにクウガの攻撃を防ぐ術も逃げる場所もない。

「次こそ、次こそ殺してやる！　仮面ライダーっ！！」

取るに足らないと思っていたスバル達に翻弄され、何も出来ぬまま”また”クウガに負ける事に悔しがりながら、ゼクスは叫ぶ。クウガはそれに構わず、ある事を思い出していた。それは、彼がＲＸの蹴りを見た事で感じた事から生まれた思いつき。

ライダーとして戦うＲＸのとどめとして叫ばれた言葉。それを意識して、自分も必殺技としての意味合いを込めた一撃。それは、五代は知らないが、歴代のライダー達がそう叫んで悪を倒してきた言霊。

「ライダー！　キックっ！」

叩き込まれるマイティキック。いや、ライダーキック。一号から綿々と受け継がれてきたライダーの決め技。それが、クウガにも受け継がれた瞬間だった。その想いを込められた一撃がそのままゼクスの体を大きく蹴り飛ばす。

そして、大地に叩き付けられると同時にゼクスが爆発した。それを見届け、スバル達に笑顔が浮かぶ。初めてみるライダーと怪人の戦いの決着。その派手さと安堵感から歓声が上がる。

しかし、クウガにはそれが聞こえていない。クウガとして勝利した時、必ず感じる空しさ。それを今日は強く感じたのだ。それは、ライダーキックと叫んだ事が原因。思ったのだ。他のライダー達は何度その技を叫び、こうして怪人を倒してきたのかと。

何度戦う空しさや心苦しさを感じていたのだろう。どれだけこの嫌な感触を味わい、それでも前を向いて歩いているのだろうかと。その心の強さに思いを馳せ、クウガは五代へと戻る。そして、後ろから聞こえるスバル達の声に振り向き、笑顔を見せる。それに四人がサムズアップを返す。五代もそれにサムズアップを返すが、どこかそれには普段はない何かがあった。

（先輩達……俺、決めました。クウガはライダーになって、ライダーを超えてみせます。貴方達とは違う世界で、仮面ライダーの在り方を俺が変えてみせます）

怪人と戦うのではなく、災害と戦う存在へ。いつかそうなってみせる。クウガの力を、仮面ライダーの力を戦闘ではなく救命に使う。それが、五代なりに見つけた仮面ライダーの在り方。自分の世界で他のライダーが生まれる可能性はないに等しい。だからこそ、自分の世界では自分が仮面ライダーの意味を決める事になる。

未確認のような存在がもう出ない事を五代は信じている。だからこそ、クウガは怪人からではなく災害から人を守る者になろう。人知れず守る事の出来ない相手の自然災害や人災。それを相手に戦う。それはきっと険しい道。だとしても、いつか理解されると思って歩こうと。冒険家として世界を巡りながら、自分の見える範囲で一つでも多くの命を、未来を守りながら。

そんな風に五代が新たな決意を抱く中、シグナム達がようやく合流する。どうも、そちらにはトイが襲撃してきたらしく、その撃退に少し時間を取られたらしい。

「……そうか。しかし、ゼクスとはな」

「意外だったよな。知らない奴をぶつけてくると思ったのによ」

ティアナの報告を聞き、シグナムが言った言葉にヴィータも同意するように返した。予想していた展開と違う相手の出方。それに今後の事をもう一度話し合う必要性を感じていた。そして、周囲への警戒を怠らないようにすると共に、はやて達へ怪人の襲撃があった事を報告する。

「もしかすると、邪眼も下手に自分の手札を見せずに、ライダーのデータを知ろうとしているのかも」

「その可能性はあるな。今後の出方次第では、こちらもまた考えなければならん」

シャマルの言葉にザフィーラがそう応じ、シグナムとヴィータも頷いた。そんな守護騎士達を見つめながら、スバルが五代へふと思った事を問いかけた。

「どうしてライダーキックって言ったんですか？」

自分が知る限り、クウガはそんな事を言ってなかったはずだ。スバルはそう思ったからこそ、五代へ聞いたのだから。それに五代は少し迷うような表情をするが、いつものように笑って言った。

「何かさ、トドメ！　って感じ、しない？」

「……そう言われると」

「確かにしますね」

成程といったスバルの声にエリオがそう続いた。何せ、聞いた瞬間思ったのだ。クウガが勝ったと。それだけの何かがあの叫びにはあった。そうスバルが言うと、五代は言霊について話し出した。日本の考え方であるそれ。言葉には魂がこもる。故に、言い続ければそれが現実になるとさえ言われる事もあるのだと。

五代はライダーキックという言葉にこれで終わって欲しいとの想いを込めたと語った。もう立ち上がる事がないようにと。そんな祈りにも似た気持ちがあった。それに一番理解を示したのはスバル。彼女も一撃必倒と叫んで攻撃する時がある。それは、まさにその言霊だと感じたからだ。

「私も確かに言うな」

「あたしもだ」

「私は……特にないなぁ……」

「私は叫び自体がそれだ」

そんな話を聞いて、シグナムが会話に参加すれば、ヴィータもそれに同意。シャマルは苦笑して、ザフィーラは小さく笑みを見せる。

こうして、ホテルアグスタでの戦いは幕を下ろす。だが彼らは知らない。ゼクスが倒された瞬間、一機のトイが密かにその場から離脱していた事を……

「ゼクスの奴め。勝手に出て行ってやられるとはな」

「でも、おかげでクウガの能力の一つは確認できました。どうも射撃が出来る姿のようです。詳しい事はまだ未知数ですが、きっとそれに即した能力を有しているはず」

「ふむ、視覚が優れるというところか」

「おそらく。向こうは見られていないと思っているでしょうが、私の目は誤魔化されません」

ジェイルラボで話す邪眼とアインス。創世されたゼクスは、邪眼の許可も取らずにクウガへの復讐を考えて出撃して行ったのだ。それに気付き、密かにアインスが妨害用と観察用のトイを送り込み、自身の特殊能力とＩＳを併用し、データを収集する事にしたのだった。

今、邪眼はライダーを完全に倒すための方法を模索していた。一斉に全ての怪人を送り込んでもいいのだが、それでは折角の遊戯がすぐに終わってしまう。故に、少しずつその力を知り、それが通用しない存在を作り出そうとしているのだ。全ては、仮面ライダーに

絶望を与えるために。

「……それで、人形の方はどうなっている」

「は、そちらは現在アハトに任せています。完成次第、まずあの世界に送り込みます」

「奴等の関係者が住んでいた世界に管理局はない。さて、どう対処するのだろうな」

そう言って笑う邪眼の視線の先には、なのは達の個人データが表示されていた。その一部には、当然ながらこうある。

出身世界、第九十七管理外世界『地球』と

……

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

アグスタ終了です。ゼクスは独自に動いたのですが、六課はそれを知りません。邪眼の考えが予想と異なったと思ったため、僅かにではありますが、混乱を招いています。

そして、次回はサウンドステージの話へ。ですが、本来と違い平和な話とは行きそうにありませんが……

久しぶりのやりたかった事は、クウガのライダーキック。後、ライダーはみんな強いから誰が最強なんて決められないです。

……自分は、決めちゃいけないと思うんです。異論は認めます。

「「ロストロギア関係の出張任務？」」

「そう。これが終わったらヘリポートに集合。留守番は……多分また真司さん達かな」

なのはの口から語られた言葉に、スバルとティアナは揃って不安そうな表情を返した。あのアグスタでの戦いから一度として怪人は動きを見せていない。それに対してなのは達が不安を抱く中、五代達は揃って不安は抱いていなかった。

特に光太郎はこう告げた。邪眼の目的が自分達のキングストーンとデータなら、下手に人を襲う事はしないはずだと。世間に怪人を知られる事なく時を待ち、最大の効果を狙える時期でそれを知らしめるはずだろうからと。

その言葉には、はやてもジェイルも納得した。下手に怪人を人々の前に見せ、それがライダーに敗北しようものなら、邪眼の与える絶望は薄れると思ったのだ。そう、例えライダーを敗北させても、ライダーが倒したという実績は消えない。

それはつまり、ライダーがいる事がそのまま希望へと繋がる可能性を持つのだから。だからこそ、邪眼が襲うとすれば周囲に気付かれない場所。そう結論を出し、六課は隊舎周辺とロストロギア関係の研究施設などを重点的に警戒していた。

「そうですか。なら、もし怪人が現れたら真司さん達が？」

「そうなるね。念のため、手が空き次第だけどアリアさんとロッテさんが応援に来てくれるから」

なのはの口から出た名前に二人が驚いた。その名は以前闇の書事件の話を聞いた時に出た名前だったからだ。

「確かその二人って……」

「邪眼と戦った人達ですね！」

「うん。真司さん達だけでも大丈夫だとは思うんだけど、一応ね」

そんな会話をしながら歩く三人。同じ頃、別の場所でも……

「やっぱり真司さん達は他の世界へ行けないんですか？」

「……そうだね。色々と難しいんだ。真司さん達は、少し扱いが特殊だから」

エリオの寂しそうな言葉にフェイトは同じような声で答える。それを聞いてキャロが残念そうに項垂れた。既にキャロはセインと仲を深めていて、その流れで真司ともよく話す。光太郎がしっかり者で優しい兄なら、真司はどこか頼りないけど楽しい兄。そんな風に思っている相手だけに、その同行がまた望めないのは悲しかった。

「真司さん達、少し可哀想です」

「キャロ、そんな事言っちゃ駄目だ。真司さん達は確かに制約が多いだろうけど、あの人達はそれを苦に思ってない。なら、それを可哀想って思うのはこっちの勝手な思い込みだから」

エリオのはっきりとした言葉。それにフェイトもキャロも驚きを

感じるが、その正しさに頷き、キャロは自分が間違ってたと言って少し申し訳なさそうな表情を浮かべた。それにエリオが笑顔でそんな事はないと言って、二人はそこからこの出張任務の事について話し出す。

それを眺め、フェイトは小さく微笑む。エリオの言った言葉。それはかつて光太郎がエリオへ告げたものと似ていたからだ。キャロの境遇に同情するように局員になろうと言い出したエリオ。それに光太郎は哀れんでいくのは駄目だと告げた。それにエリオは頷き、支え合うために局員になると答えたのだから。

（どこか光太郎さんらしくなってきたね、エリオ）

幼い槍騎士を見て、フェイトはそう思う。影響を受けただろう男の姿を、その背に幻視しながら……

ヘリポートに佇む光太郎。視線は空ではなく、遠くに見えるクラナガンの街を見つめている。

（……何事もなければいいが）

そう、何か嫌な予感がするのだ。それも、このミッドだけではなくこれから行くだろう場所に対しても。故に光太郎は迷っていた。自分がこちらに残るべきか否かを。既に五代と翔一がはやて達と同行する事は決まっている。こちらには真司とヴァルキリーズが残る事になっているが、それでも何か不安が消えないのだから。

そんな風に思い悩む光太郎を見つめ、五代と翔一は真司と共に不思議そうに首を傾げていた。

「何かあったのかな？」

「何かを……考え込んでるみたいですね」

「やっぱ、アクロバッターとかを置いて行きたくないんじゃないかな」

そんな感じで話す三人。真司は見送りをするためにやってきていた。本当は仕込みなどをしようと思っていたのだが、別の世界へ出かけると聞き、ならばと思ったのだ。前回と違い、別の世界へ行くとなれば何かあったら帰ってくるのも容易ではない。そう思ったからこそ、真司は見送りにきたのだ。

「到着！　って、真司さんも来るんですか？」

駆け足で現れたスバルは、視線の先にいた真司を見て不思議そうに問いかけた。それに真司が見送りに来たと告げると納得したが、どこか残念そうだった。ティアナはその後ろから現れ、そんなスバルに呆れる。真司がいなければ、誰がもしもの時怪人と先陣切って戦うのかと。

それにスバルが苦笑しつつ、分かっているけどもと答えた。そこへエリオとキャロも姿を見せ、真司を見てスバルと同じような反応を示して五代達が苦笑した。真司は二人にもスバルと同じ事を言っていたが、その表情は申し訳なさそうだ。

「……って訳。ごめんな。一緒に行ってやれなくて」

「いえ、分かってますから」

「もし出来たら、お土産買ってきます」

エリオとキャロの言葉に真司が軽く笑みを見せて、感謝と共にその頭を撫でる。それにくすぐったいやら嬉しいやらのキャロとエリオ。だが、エリオは視界の隅に見えた光太郎の方へ視線を向けた。

そして真司から離れて、その傍へと歩き出す。光太郎は一度も視線をクラナガンの街並みから逸らす事無く佇んでいた。

「……光太郎さん」

「ん？　エリオ君か」

「どうしたんですか？　何か悩んでるみたいに見えます」

エリオがそう言うと、光太郎は若干苦笑した。そんなに顔に出ていたのかと思ったのだ。しかし、エリオの表情がどこか不安そうなのに気付き、真剣な眼差しでその顔を見つめた。

「実はね、何か嫌な予感がするんだ」

「それって……」

「可能性がない訳じゃない。でも、必ずって訳でもない」

「それでも僕は信じます。光太郎さんの勘が外れた事、ないですから」

エリオの力強い肯定。それをどこか嬉しくも悲しく思い、光太郎はその肩に軽く手を置いた。自分の勘が外れた事はない。それは、決していい事ではない。何せ、大部分が悪い事に繋がるものばかり

なのだから。だが、それを必ず防ぐ。もしくは変えてくれるとエリオは信じているのだ。
故の信頼。それを受け、光太郎は頷いてみせる。丁度そこへなのは達が姿を見せた。それに気付き、光太郎ははやてへ開口一番こう告げた。

「はやてちゃん、俺は残るよ」

「えっ？！」

「どうしてです？」

突然の光太郎の言葉に心から驚きを見せるフェイト。はやてはそれに理由を尋ねる。光太郎はそれに自分が感じている嫌な予感を話し、念のために自分も残ると告げた。それに対して誰も反論出来なかった。この数年間、光太郎の勘は恐ろしい程の的中率を誇った。
更に、今回は邪眼絡みとなれば、それを無視する事は出来ない。だからフェイトは自分の気持ちを押し殺し、はやてへ視線を向けた。

「はやて、光太郎さんには残ってもらおう。ライダーが二人いれば、余程の事がない限り心配ないし」

「……ええんやな？」

はやての問いかけに秘められた思いに、フェイトは軽く笑みを返して頷いた。本当ならば一緒に連れて行きたい。いや、傍にいたい。だが、それはただのわがままだ。だからこそフェイトは、悲しみを振り切ってライトニングの隊長としての判断を下した。

「六課を……シャーリィ達を頼みますね、光太郎さん」

「ああ」

互いに見つめ合うフェイトと光太郎。それを見て、なのはとはやては複雑な心境だった。フェイトが光太郎へ想いを寄せているのは二人も知っている。だから、友人としては光太郎を同行させたい。しかし、局員としてそれが出来ない。

万が一邪眼が怪人を複数送り込んできた場合、龍騎だけでは守りきれない場合がある。もしくは、守りきれたとしてもその手の内をかなり明かしてしまう可能性があるのだ。

（もどかしいな。フェイトちゃんの事、応援するって決めたのに……）

（すずかちゃんもアリサちゃんも、久しぶりに光太郎さんに会いたいって言ってたんやけどなぁ……）

なのはは自分の誓いに対して、はやては先程連絡を入れた友人二人に対して申し訳なく思いながら、視線を周囲へと向ける。

「さ、なら行こか。六課はグリフィス君を初め、ＲＸと龍騎にヴァルキリーズが守ってくれる。それに、リーゼ姉妹も来てくれる事になっとるから心配いらん」

「じゃ、みんなヘリに乗って」

はやてとなのはの声に呼応し、スバル達がヘリへと乗り込んでいく。それを見送り、真司は隣へと歩いてきた光太郎へ視線を向けた。

「良いんですか？」

「当然だよ。俺達は邪眼を倒すためにここにいるんだ。それを忘れるフェイトちゃん達じゃないさ」

明るく答える光太郎。しかし、その声の奥底には悲しみがあるように真司には聞こえた。それを確かめようと思う真司だったが、それをヘリの轟音が阻止する。飛び上がっていくヘリ。それを見送る真司と光太郎。やがて遠くなったヘリを見て、光太郎は無言で隊舎内へ戻って行く。その後ろ姿がもの悲しげに見えて、真司は一人呟く。

――そんなに悲しいなら、何でそれを分かち合おうとしないんですか。

鈍感な自分でさえフェイトの光太郎への想いは気付いている。故に真司は不思議でしょうがないのだ。人とは違う光太郎の体。それを受け入れ、共に歩いてくれるだろうフェイト。その想いを知りながらも、それを敢えて無視するその姿勢が。

真司は知らない。光太郎が背負った悲哀。それこそが、元来仮面ライダーの持つ”人”ならざる悲しみだと……

「フェイトさん……」

キャロは先程から何も言わずに窓から外を見つめているフェイトに、言いようのない悲しさを感じていた。エリオもそうだった。光太郎はフェイトが好意を向けているのを知りながら、それを避けているようにも思っていたのだから。

（どうして光太郎さんはフェイトさんを避けるんだろう？　まるであまり仲良くなりたくないみたいだ……あっ！）

エリオはそこで気付いた。気付いてしまった。何故光太郎がフェイトの気持ちを無視するしかないのか。それは、彼が仮面ライダーだからだという事に。光太郎は言った。仮面ライダーは人知れず平和のために戦うと。それは、終わる事無い戦い。それを光太郎は夢にまで語った。

ならば、その道を自分以外に歩かせるはずはない。フェイトの想いを受け止める事が出来ないのは、そのためだと。別れが訪れた時、フェイトの悲しみが少しでも少なくすむように。決して自分などについてこないように。そう思っているからこそ、光太郎はフェイトと親密になるのを避けているのではないか。

そんな風にエリオがある意味で光太郎の心境を当てている横で、スバルとティアナはこれから行く場所をなのはから聞いて驚いていた。それはなのは達の故郷だったのだから。地球は日本、海鳴市。そんな、まるで誰かがなのは達をそこへ行かせようと図ったかのような場所。

「やっぱり魔法文化が無いんですか」

「うん。私やはやて部隊長みたいな人が稀なんだ」

ティアナの納得したような声になのはは頷いて答えた。ティアナは翔一との付き合いから地球がどういう場所かは大体聞いていた。魔法を使える者などほとんどいない。それどころが魔法そのものさえ知らないのだと。

スバルはむしろ納得していた。自分の父親であるゲンヤは地球出身者の子孫。故に魔力は無い。そんな事を知っているからこそ、ス

バルは笑顔で頷いていた。

「ですよね。うちのお父さんも魔力無くって」

「スバルさん、クイントさんそっくりですから」

「ギンガさんもですけど、本当に似てますよね」

キャロとエリオの言葉にスバルは嬉しそうに頷く。それを聞いて五代は少し複雑な表情を浮かべた。光太郎から聞いた話によれば、スバルとギンガはクイントの遺伝子を基に作られた戦闘機人。故にその関係は親子というよりは最早クローンに近い。

キャロとエリオはそんな事を知らない。それだからこそ心からスバル達が似た者親子だと感じているのだろう。その素直さに喜びを感じつつ、スバル達の生まれの重さに微かな悲しみを抱く五代だったが、その時ふと思い出す事があった。

（しかし、スバルちゃん達がイレインやファリンちゃんと同じだとは思わなかったなぁ。今日、すずかちゃんが二人を連れてくるとスバルちゃんに紹介出来るんだけど……）

自動人形と戦闘機人は同一の存在。そう知った時、五代は驚きと同時に納得していた。外見からは信じられない程の能力を発揮するスバルやイレイン。それが同じと言われ、心から頷けたのだ。そして、そのどちらも優しい心を持っている事にも。

五代はイレイン達がスバルやヴァルキリーズの事を知ったら、どんな反応をするのかと考えて一人笑う。そんな五代の横で、翔一ははやて達八神家の面々と会話に花を咲かせていた。リインはエリオやキャロぐらいの大きさになったツヴァイの格好を直し、笑みを浮かべていた。

ツヴァイはアウトフレーム――つまり外見をある程度まで操作する事が出来、最大まで大きくすると十歳児程度の身長になるのだ。地球には普段のツヴァイを受け入れるような土壌がない。故に、混乱や騒動を避けるためにその状態になる必要があった。

ちなみにリインが同行しているのははやての個人的な要望。だが、それを止める事は誰もしない。家族の同行を希望する気持ちは分からないでもない。それにリインがいるとツヴァイの笑顔が一際嬉しそうだったのもある。

「……よし。これでいいぞ、ツヴァイ」

「ありがとうです、お姉ちゃん」

「礼はいらない。姉として当たり前の事をしただけだからな」

「それでもです」

姉妹仲良く笑顔を見せ合う二人。それを横目にし、微笑みを浮かべるはやて達。ちなみに、ツヴァイの巨大化を見たスバル達は揃って軽い驚きを見せた。五代と翔一は以前に何度か見た事があるため平然としていた。そしてスバル達にそこまで驚く事じゃないと言っていたのだから。

だが、そんな二人も初めて見た時は同じような反応を見せたので、スバル達の事は言えない。その時の話をはやてがして、スバル達が五代と翔一へ軽く文句を言って場を和ます一幕もあった。

「ま、わたしらはちょう寄る所があって、別の転送ポートから海鳴入りや」

「すずかちゃん家の庭からだよね」

翔一の言葉にはやては頷いて、視線をなのは達へ向けた。

「そういう訳やから、わたしらは別行動や。後で合流はするけどな」

「了解。ヴィータ副隊長とシグナム副隊長もそっちと一緒だね？」

「ああ。私達はロングアーチからの直接指示で動く」

「ま、そういう事だ」

二人がそう答えたのを聞き、なのは達は揃って頷く。八神家は全員で行動し、なのは達はそれぞれで動く事で話し合いは終わり、こうして出張任務は始まったのだ……

湖畔のコテージ。普段人がほとんど寄り付かないような静かなそこへ、なのは達は現れた。ここは、現地の協力者がなのは達に貸し出してくれている待機所だ。その協力者は、今回の事をはやてから聞かされ、今ここへ向かっている最中だったりする。

「……ここが」

「海鳴……」

「綺麗な所ですね」

「いい景色……」

「キュク～」

スバル達四人が初めての海鳴に思い思いの反応を示し、それになのはとフェイトは笑みと共に頷いていた。五代はそんな六人とは違い、第二の故郷とも言える街に来た事を嬉しく思った。だから……

「は～るばる来たぜ、海鳴～！」

そんな風にはしゃぐのも仕方ないのだろう。そんな五代に全員が一瞬呆気に取られ、すぐに笑い出す。その笑い声に五代は嬉しそうに振り向き、照れたような笑みを見せる。そんな平和な雰囲気の中、聞こえてくる音があった。それは車の排気音。それに全員の視線が音の方へ向いた。

「なのはっ！　フェイトっ！　雄介さんっ！」

「「「アリサ（ちゃん）っ！」」」

車の窓を全開にして、アリサは自慢のブロンドを風になびかせて大声で呼びかけた。それに三人が嬉しそうな声を返し、走り出す。スバル達四人はそんな光景に苦笑。まるで遊びに来たような印象を受けたからだ。

だが、そんな風になってしまう気持ちも分かるため、それをとやかく言うつもりは四人にはない。それよりも今は現れた人物の事を教えてもらおうと思い、その後を追った。

車から降り、アリサは笑顔でなのはとフェイトの手を取った。こうして直接会うのは本当に久しぶりだったのだ。五代の方はそこまでもない。何せ、彼はこの四月まで海鳴で暮らしていて、アリサ

も顔を合わせる事はあったのだから。

「ったく、いきなり連絡してきたと思ったら、今日来るなんてね」

「にゃはは……」

「本当に急だったんだよ」

アリサのやや文句めいた声に二人は苦笑。五代はそんな三人のやり取りを見て笑顔を浮かべている。そこへスバル達が追いつき、五代へ尋ねた。あの女性は誰なのかと。それに五代は実にあっさりと答えた。

アリサ・バニングスと言って、なのは達隊長三人の幼馴染。少し素直じゃない所があるが、優しく綺麗な女性。五代がそんな風に説明するとそれを聞いていたのか、アリサが少し照れたように視線をスバル達へ向けた。

「えっと……ま、まぁそんなとこよ」

「否定しないの？」

フェイトのややからかうような声になのはが笑う。アリサはそれに少しだけ戸惑うが、開き直り何も間違っていないと言い切った。そんなアリサに全員が笑みを見せる。そして、サムズアップをアリサへ送り、それにアリサもサムズアップを返す。

だが、その直後やや苦笑しながら五代へ言った。

――――もうその子達にも伝染させたんですか？

その表現に五代が苦笑。だが、その表現もあながち間違っていな

いと感じたのか、それを否定はしなかった。そんな五代の反応に周囲が苦笑。

「とりあえず、今日はアタシとすずかで出かける約束してるの。だから、夕食は一緒にここで食べましょ」

「それは構わないけど……いいの？」

「当然！　仕事だけど、少しは息抜きも必要でしょ？」

アリサのウインクと共に告げられた言葉に、なのはとフェイトは嬉しそうに頷き返し、五代は笑顔を浮かべた。そして、アリサはすずかを迎えに行くと告げて車に戻って走り去って行った。それを見送り、なのはとフェイトは全員で手分けして探索魔法と併用し、街にサーチャーとセンサーの設置をすると告げ、動き出す。

今回はロストロギアの捜索のため、念のため調査は用心するようにと忠告して。なのはは五代と、スバルはティアナ、ライトニングは三人でそれぞれ歩き出す。一方その頃、別働隊の八神家は……

「そか。なら、夕方にまた会おな」

「うん。翔一さん達もまた」

久しぶりの再会を喜んだのも束の間、アリサがなのは達にしたのと同様の話をすずかははやてに聞かせた。なので、夕方にもう一度ゆっくり話そうとなり、これから仕事のはやて達と出かけるすずかはそう言い合って歩き出す。

すずかは迎えに来るアリサを待つために門前で待ち、はやて達は海鳴での指揮所になるコテージへ向かうため、月村家の車を借りた。道中の運転はシグナムが受け持ち、はやて達を送った後はそのままフェイト達と合流し、車で行動となる。ヴィータはそこから単独で飛行魔法によりセンサーを上空から散布する事になった。まぁ、その後はスターズに合流するのだが。

リインはファリンやイレインと共に、夕食のために色々な準備をする事になり、月村家に残る事にした。ツヴァイも手伝うと言ったのだが、身体的な面から却下となった。それよりもはやての手伝いを頼むと言われれば、ツヴァイも頷くしかなかったのだから。

「……にしても五代は別の場所、か」

「ああ。期待させてすまない」

「リインさんが気にする事じゃないですよ。それに、来てるなら後で会えますし」

イレインの残念そうな声にリインがそう申し訳なさそうに言うと、ファリンが笑みを浮かべて言葉を返した。まだ五代と離れて三ヶ月にもならないが、それでも二人にとっては長い時間だった。更に最近は、もう一人の家族でもあったゴウラムさえいなくなってしまったため、二人は五代を身近に感じる事が出来なくなっていたのだから。

だが、今日は久しぶりに会える。光太郎は来ないのが残念ではあったが、二人としては早く夕方にならないかと思うぐらい楽しみであった。

「さ、動き出しましょう。道具や調味料を運ばないといけませんか

ら」

「なら、私は車をガレージから出してくるな」

「では、私達は荷物を持ってこようか」

「ですね」

イレインが軽く小走りで去るのと同時に、リインとファリンは連れ立って屋敷の中へ向かう。互いに近況を話しながら、笑みを浮かべる二人。すると、リインの視線がふと何かに止まる。それは、綺麗な大広間の柱。正確には、その一部にある傷だ。

リインがそれに不思議そうに首を傾げると、それにファリンも気付き、視線を追って疑問の正体に気付いた。そして、リインへ向かって懐かしそうに声を掛けた。

「その傷は、思い出の傷なんです」

「思い出？」

「はい。あれは、まだ忍お嬢様とノエルお姉様が屋敷にいらした頃です……」

その時の光景を思い出すように、ファリンはゆっくり語り出した。それは、忘れる事の出来ない光景。燃え盛る炎の中、それに照らし出されるように戦う戦士の姿。それを思い出して……

その日、月村家に一人の男がやってきていた。名を月村安次郎。

忍とすずかの親戚に当たる男だ。しかし、彼はノエルとファリンを引き渡すようにと二人に言ってきた。その裏にある邪悪な企みに気付いていた忍はそれを拒否。そして、その日の夜。突如として月村家を巨大トレーラーが強襲。そこから現れたのがイレインだった。

彼女は安次郎が見つけ出した自動人形。しかも、イレインは自分と同型の意思を持たない自動人形を操る能力を有していた。そのため、ノエルとファリンが忍とすずかを守るために戦ったが、多勢に無勢。徐々に追い込まれていった。

最早ここまでかと誰もが思った時だ。イレインは勝ち誇る安次郎へ反旗を翻し、その顔を強打して意識を奪った。そう、イレインは従来の自動人形とは違い、主に対する加害制限が無かった。そのため、掛けられていたリミッターがあったのだが、解除条件が主を侮辱されるという曖昧な条件のため、既に忍の暴言によって解除されていたのだ。

――ありがとう、月村忍。あんたのおかげでもう芝居せずにすむ。

そう言ってイレインは驚く周囲に対して攻撃を再開しようとした。そこへノエルからの連絡を受けた恭也が参戦。挟み撃ちの形を取って形勢を立て直す事に成功する。しかし、そこまでだった。御神の剣士である恭也はまさに強者。だが、あくまでも生身の人間だ。傷付いても腕を無くそうとも止まる事無い自動人形の前では、その剣技も心理的な効果がなく、炎燃え盛る中で体力がいつまでも続く訳ではなかった。

そして、その動きが鈍った所を量産型のブレードが斬り裂こうとした時だった。何者かが量産型を突き飛ばしたのは。それに全員の視線が集まる。その人物は五代。

「……それで、五代さんは呆気に取られる恭也様へ大丈夫ですかっ

て言って、イレインへ向き直ったんです……」

五代はイレイン達へ向き直ると、尋ねた。何故こんな事をするんだと。それにイレインは答えようとせず、一体の量産型を五代へ差し向けた。それにノエルやファリンが動こうとするが間に合わない。恭也も神速を使おうとするも、体力低下のために出遅れてしまった。

誰もが五代の死を覚悟した。だが、五代は死ななかった。そのブレードが当たった瞬間、その部分が白い鎧に覆われていたのだ。それをキッカケに五代の体全体がその姿を変えていく。それは白のクウガ。グローイングフォームと呼ばれる戦士の力が弱った時やその覚悟が鈍い時になる姿だ。

その変化に恭也達は声が無かった。戸惑い、恐れ、躊躇い。幾多もの感情が渦巻き、誰も何も出来なかった。しかし、クウガは違った。その変わった己の手を見つめ、小さく呟いた。

――――……また、こうするしかないんだ。

そんな風にぽつりと呟き、クウガは量産型へ拳を振るった。その一撃に量産型は軽くよろめき、たたらを踏んだ。更にクウガは回し蹴りを放ち、その体を完全に外へと吹き飛ばした。それで沈黙する量産型の一体。

それに誰もが息を呑んだ。突然目の前に現れた存在。それが異形へと変化し、自動人形をたった二発で倒してしまったのだから。イレインはそれに怒りを燃やし、残る全てを一斉にクウガへ差し向けた。それにクウガは拳を一度だけ見つめ、どこか躊躇いながらも立ち向かった。

クウガは懸命に戦った。それに呼応し、恭也達も反撃を開始。クウガが多くの量産型を引き受けたため、恭也達が各個撃破でその援

護をし、形勢は逆転した。それに危機感を感じたイレインだったが、その力を使ってクウガへ襲い掛かった。

残った量産型を恭也達へあてがい、クウガと一対一で戦うイレイン。量産型と違い明確な意思を持つイレインには、クウガも苦戦を強いられた。そして、遂にその首をイレインの電磁鞭が捉えた。その電撃を受けて柱にもたれかかるようにクウガは倒れた。

そんなクウガの首元へブレードを突きつけ、イレインは勝ち誇ったように告げた。

――私はこいつらが邪魔だ。だから、私のためにこいつらを殺す。それが、こんな事をした理由だ！

その言葉を言い終わるのと同時に、イレインはブレードをクウガ目掛けて突き刺した。しかし、それをクウガは紙一重でよけ、イレインを殴り飛ばす。

「驚く私達を尻目に、五代さんはこう言ったんです。邪魔だからって……」

――邪魔だからって、そんな事のために誰かを殺させない。

そう断言し、クウガは構えた。それは、戦士が姿を変える際に取る構え。戦う意思を、その覚悟を示す、五代にとってはもう二度とする事のないはずだったもの。

――変身っ！

その声と共に白い体は、まるで周囲の炎を吸い込むように赤く変わっていく。そして、その頭部の角が立派な物へ変化したのを見て、

誰もが言葉を失った。イレインでさえこう思ったのだ。もう、目の前にいるのは先程までの存在とは別の相手だと。

クウガは炎を背負い、イレインへとゆっくりと歩き出す。それに恐怖を感じるも、イレインは何とかそれに立ち向かう。その電磁鞭をクウガ目掛け放つが、それをクウガは自らの手で受け止めて掴んだ。

流れる電撃を物ともせず、クウガはそれをキッカケにイレインを自分の前へ引っ張った。体勢を崩しながら自分の前へ来たイレインの首元へ、クウガは手刀を叩き込んだ。それで意識を刈り取られるイレイン。

それと同時に残っていた量産型の動きも止まる。それに安堵する恭也達。クウガはイレインの体を優しく抱き抱え、忍の傍へ近付いた。そして、戸惑う忍に対し、こう頼んだのだ。

「この子を許してやってくれないかって。きっと話せば分かってくれるはずだから。そんな風に五代さんは言ったんです」

「……そうか。それでは、この傷は……」

「はい。五代さんが変身するキッカケになった時のモノです」

そう言ってファリンは傷を優しくなぞる。この傷を残そうと言い出したのは、イレインだった。彼女は意識を取り戻すと、五代達から揃って怒られたのだ。それに戸惑い、状況を把握しかねているイレインへ五代が言ったのだ。

まずは思っている事や考えた事を話して欲しいと。それを聞かないと力になれないから。それにイレインが呆気に取られたが、何かに気付いたのだ。それは自分の調子がよくなっている事。そう、調整されていたのだ。それも完璧なまでに。

そして、イレインは自分の事を話した。人間のように好き勝手生きるために、自分の正体を知っている者達を全て消そうと思った事を。それに五代は、自動人形の事を知る知らないに関わらず、自分のために誰かを泣かせてはいけないのだと説いた。

でなければ、今度はその泣かせた誰かが誰かを泣かす。そうやって悲しみの連鎖が続くのだからと。イレインがそれに自分は関係ないと言おうとした瞬間、五代はこう言い切った。それは必ず最後には自分へ帰ってくると。

そんなやり取りを経て、イレインは月村家で生活する事になった。当初の理由は外で暮らしていくだけの資金も何もないからだった。それに世間の常識が無かったのもそれに拍車をかけた。五代は忍から恭也を助けてもらった礼と、イレインの事についての責任を取るという形で無理矢理居候となった。

それをファリンがリインへ語り終わった時だ。二人の背後から声がしたのは。

「その傷は、私の忘れちゃいけない記憶の証でもある」

それはイレインだった。その声に二人は視線を向けるが、その言葉にリインは何か理解したように頷き、視線を傷へと戻した。

「私は悪い事をした。それは、絶対に消える事のない事実。だから、それを忘れずに生きようって決めたのさ。五代の奴に恩返しするためにも、な」

「……そうか」

闇の書として多くの命を殺めてしまったリインにとって、そのイ

レインの言葉は良く分かるものだった。故に、リインは何も言わず、その決意と気持ちに思いを馳せた。ファリンは少し空気が妙なものになったのを感じ取り、明るく手を叩いて告げる。

「さあさあ、早くコテージに行きましょう。五代さん達を驚かせないと」

「そうだな。アイン、行こうぜ」

「ああ」

三人は傷から視線を外し、キッチン向かって歩いていく。その話題を今日の夕食時の事にして。楽しそうに、嬉しそうに、三人は話すのだった……

海鳴の街を歩きながら、五代となのははそれぞれ感慨に耽っていた。なのはにとってはかなりの、五代にとってはわずかの期間だが、共に慣れ親しんだ場所には変わり無いのだから。

「何か懐かしいです」

「そうだよね。俺でもそうなら、なのはちゃんはもっとだよね」

変化していない街並みを眺め、二人はそう話す。だが、なのはは少し苦笑気味にこう告げたが。

「でも、あれ？　お仕事中なのに帰ってきちゃったって感じしますけど」

「あ～、それは何か分かるなぁ」

そう話しながら歩く二人。そことは違う離れた場所では、スバルとティアナが海鳴の穏やかな空気を感じて落ち着きを感じながら、ミッドとの共通点に感心していた。

「何か和むね～」

「そうね。ミッドの田舎とかに近いかも」

「いいなぁ、こういう感じ」

「ま、アタシも嫌いじゃないわ」

そう言いながら歩く二人だったが、スバルが何かを見つけ足を止めた。それにティアナも気付き、視線をスバルの見ている方向へ向けた。そこにあったのは、移動式のアイスクリーム販売所だった。サンプルらしき物がいくつか並んでいて、見ているだけでも楽しめるのだが、ティアナは隣の相手が何を考えてそれを見つけたのかを薄々勘付いていた。

「……アイスクリーム屋ね」

「ね、ね、ティア」

予想通りのスバルの輝くような目を見て、ティアナはやはり買い食いを考えているのだと確信した。なので、一瞬注意でもしようかと思ったが、ある事に気付き、それを許してやる事にした。きっと、頭ごなしに注意するよりも、簡単にスバルが諦めるだろう事実を。

「買ってもいいけど、あんたこの世界のお金、持ってるの？」

「あっ……」

無情にも告げられたティアナの冷静な指摘に、スバルは沈黙。地球、それも日本の貨幣などスバルが持っているはずもない。故にスバルの買い食いは自然に阻止される。

そんな落ち込む子犬のようなスバルを見て、ティアナは軽くため息を吐く。そして、こう言ってスバルの立ち直りを促す。それは、念話でなのはに頼んでみればいいと。それにスバルは割かし本気で思い悩み、ティアナはそれに心から呆れとある種の尊敬の念を抱くのだった……

コテージに辿り着いたはやて達は、早速とばかりに指揮所としての準備を進める。ザフィーラと翔一は共に力仕事担当。シャマルはこの任務を依頼してきた聖王教会との連絡をしている。相手はシスターシャッハ。馴染みの深い相手だ。

シャマルがシャッハと、何か情報が入ったら連絡をお願いしますという打ち合わせをする横で、はやてはツヴァイと二人で光太郎の感じた予感に備えるべく、グリフィス達との連絡を密に取れるよう、通信機能の確認を行なっていた。

「……はい。では……」

「何かあったか？」

「捜索対象のロストロギアの持ち主が夕方までには特定出来そうだ

って。ただ、それよりも遅くなる可能性があるかもしれないから覚悟しておいて欲しいですって」

シャマルの告げた内容に全員から安堵と苦笑を浮かべる。そして早速とばかりに念話でなのは達へそれを教える。こうして、一先ず光太郎の予感が告げていたのは、ロストロギアの方ではないと考えた。となれば、残る可能性は少ない。

そのため、はやて達に微かな不安がよぎる。そう、この海鳴に邪眼の魔の手が迫っていると考えたのだ。そして、それが意味する事を考え、はやてがはっきりと周囲へ告げた。

「警戒は怠らんようにしよ。ロストロギアが危険でも、邪眼が来てもええように。でも、あまり緊張しすぎるのも駄目やからな。程々にしよか」

「そうだね。光太郎さんの予想が外れてよかったってなるかもしれないし」

翔一がそう言うと全員が笑顔で頷いた。そうなってくれるといいと、口々に言い合って。こうしてはやて達は不測の事態に備え、心構えをしておく事にした。それをなのは達へも伝えるのと同時に、すずか達との夕食をどうするかを悩んでいた。

もし邪眼が五代と翔一を狙ってくるとすれば、二人を巻き込みかねない。だからといって、離れているのも危険かもしれない。きっと、邪眼は自分達の事を調べあげているに違いない。

（ここは、多少危険があっても一緒に居てもらうべきやな。いざとなってもライダー二人にわたしらがおれば、安全や）

そう結論付け、はやては視線を空へ向けた。視界に広がる澄み渡

る青空。それに眩しさを感じるが、はやてはそれにこう思うのだ。
この空のように、何事もなく過ぎてくれればいいのにと……

三人で歩くチームライトニング。だが、その中核であるフェイトにはどこか影がある。本来ならここにいて、楽しく過ごす事が出来たはずの相手がいない。それがフェイトの心に影を落としていた。勿論、光太郎の判断が良いのは理解している。そして、それを支持した事も間違っていないと思っている。いるのだが、フェイトはどこかそれを非難していた。

（光太郎さんと一番上手く動けるのは私。なら、いっそ私も残って備えた方が良かったんじゃ……）

実際に怪人が現れた際、龍騎やヴァルキリーズではＲＸと上手く連携出来ないのではないか。そんな事から発展した発想は、知らずフェイトの醜い部分を浮き彫りにさせる結果となる。それは、フェイトへエリオが告げた言葉がキッカケ。

「フェイトさん」

「何？」

マルチタスクで一方で光太郎の事を考えながら、エリオへ対応するフェイト。だが、そんな彼女へエリオはきっぱりと告げた。

「真司さん達を信じてください」

それにフェイトは思考を停止した。どういう意味か分からなかっ

たからではない。嫌と言う程に理解したからこそ、フェイトは思考を停止してしまったのだから。自分は今何を考えていた。信じると決めた真司やヴァルキリーズをどこかで役不足と思っていなかったか。自分が一番ＲＸの傍にいるべきだと決め付けていなかったか。

そう思い、フェイトは自分の醜さに嫌悪感を感じた。これでは光太郎に合わせる顔がない。人の醜さを見ながらも、人の強さや優しさを信じようとする光太郎。そんな彼と共にあるためには、自分もそうでなくてはいけない。故に、フェイトはエリオへ心から感謝を込めて頷いた。

「……そうだね。信じるよ。真司さんもヴァルキリーズも、きっと光太郎さんと一緒に六課を守ってくれるって」

「はいっ！」

フェイトの表情がいつもものに戻った事に嬉しく思いながら、エリオは笑顔で頷いた。キャロはそんな二人のやり取りを聞きながら、服の中に隠しているフリードへ声を掛けた。

「今日のフェイトさんどこか変な感じだったけど、やっと戻ったよ。エリオ君って、凄いね」

「キュク」

頼もしく感じる槍騎士の姿に、キャロは微笑みを浮かべて視線を向ける。それにエリオは気付いて振り向くと笑顔を見せる。そこへ丁度車に乗ったシグナムがクラクションを鳴らし、その存在を教えるのだった……

道路を走る一台の車。アリサ運転のものだ。助手席にはすずかの姿がある。楽しげに会話をしているが、その話題は当然この後の夕食に終始している。

「やっぱ、バーベキューよね」

「そうだね。折角のコテージだし」

「ファリンさん達が調味料とかは用意してるんでしょ？」

「うん。リインさんも一緒に準備を手伝ってくれてるから、材料はこっちで用意しようかなって」

すずかの言葉にアリサはよし来たと言わんばかりに頷き、車の速度を少しだけ上げる。それがアリサの気分が上機嫌になってきた証拠だと思い、すずかは笑みを浮かべた。アリサはお祭り好きだ。だから、こういうイベント事には目が無い。

今もどうやってなのは達を驚かすか、または喜ばすかを真剣に考えているのだろう。そう思い、すずかはある人物の事を思い出して、少しだけ寂しそうな表情を見せる。それにアリサが気付き、不思議そうに首を傾げた。

「どうしたのよ？」

「光太郎さんと会えなかったのが、残念だなって」

その告げられた名前にアリサも同意するように頷いた。彼女もそれは残念に思っていたのだ。初めて会った時、不覚にもいい男だと思った相手。しかし、フェイトが光太郎を見る目に気付き、アリサ

は軽くため息を吐いたのだ。
どうしてこうも自分が少しいいなと思う相手には、戦う気を起こせない相手がいるのだろうと。そう、実はユーノもそうだった。初めて会った本当のユーノの姿。その好青年ぶりにアリサは少しいいなと思った。だが、ユーノと少し接している内に分かったのだ。

（ユーノはなのはの事が好きだって分かったのよねぇ。雄介さんはすずかが想いを寄せているし、翔一さんははやて。まったく、アタシにはどうしていい人がいないのよ？）

もういっそ多少性格に難があってもいい。唯我独尊を地でいくような男や、気弱で人前で自分の意見をはっきり言えないような男でも構わない。自分にもいい人が現れて欲しい。そんな風に心から思うアリサだった。
しかし、そんな彼女は意外と基準が厳しい。なので、いい人を見つける前にどこかで妥協出来る部分を作らねばならないと、この後相談を受けたはやて達から揃って同じ事を言われる事になる。

「確かにね。ま、またきっと会えるでしょ」

「そうだね」

そんな風に話す二人。その顔には当然ながら欠片の不安も無かった。今日はこのまま何事もなく楽しく過ぎていく。そんな風に思いながら……

時間も過ぎ、辺りを夕日が包みだした頃、なのは達スターズはヴィータも合流してロングアーチからの指示を待っていた。だが、そ

の五人の手にはアイスが握られている。あの後、スバルは散々悩み五代へ相談。それに苦笑した五代は、手持ちからいくばくかのお金を渡してスバルとティアナへアイスを買ってきて欲しいと頼んだ。

無論、それは自分の分だけを買うには多い。そう、五代は自分のお使いをしてもらう代わりに、お駄賃として二人にもアイスを買ってきていいと告げたのだ。そこへ狙ったようにヴィータが合流し、当然ながらアイス好きな彼女がそれに乗っからない訳がない。こうして、スバルが心から感謝して走り出し、ティアナはそれに呆れつつも五代へ頭を下げて、心なしかどこか嬉しそうにその後を追った結果だった。

「……ホント、五代さんに感謝しなさいよ」

「分かってるよ。でも、出来るならダブルが良かったなぁ」

「アンタ、本気で感謝してる？」

そんな会話をする隣では、なのはとヴィータが五代のした行為に微笑みを浮かべていた。立派な局員で上司でもある自分達が許可するには、少々問題がある買い食い。それを民間協力者である五代ならば、何の気兼ねもなく出来るからだ。

しかも、自分達の分も五代の善意からの物であれば断るのも気が引ける。そういう公明正大な言い訳を得て、なのはもヴィータもこうして二人と同じようにアイスを食べているのだから。

「ご馳走様です、五代さん」

「何かわりぃな」

「いいからいいから。何かさ、こういうのもいいよね。みんなで遊

びに来てるみたいで」

「お仕事なんですけど……」

「……じゃ、親睦を深めているって事で」

なのはの苦笑混じりの答えに五代はそう言って笑う。その屈託のない笑顔になのはも笑って頷いた。それならいいですと。それに二人は余計に笑みを深めた。そうして五人がアイスを食べ終わったのを見計らったように、なのはヘロングアーチからの念話が入る。

一旦全員コテージに帰還し、食事を兼ねた休息を取るように。そこには、ロストロギアも危険性がなく、後は広域探査の結果待ちとなった事も要因としてある。それになのはは了解と返し、即座にフェイトへ念話を送る。それはこれからどうするかと言う相談。

フェイト達はシグナムが車で動いていたので、その後はなのは達を迎えに行くと返した。それになのはは、感謝と共にある場所で待っているを告げてから念話を切った。

「……と言う訳で、私達は翠屋に行こうか」

「「翠屋？」」

「そうか。それはいいな」

「いいね。スバルちゃん達にも味わってもらおう。桃子さん自慢のケーキや士郎さん自慢のコーヒーなんかを」

なのはの挙げた名前に疑問を浮かべる二人に対し、ヴィータと五代は名案だと笑顔でサムズアップ。そして、翠屋の説明をしながら

五人は揃って歩き出す。向かう先はなのはと五代にとっては馴染みの喫茶店。その途中、なのはは携帯で母である桃子へ連絡を入れる。
急に行って驚かせる事のないようにと思ってのその配慮。それと同時にある程度の商品を用意してもらうのを頼み、更に五代もいると伝えるとスバル達にも聞こえる声で待っていると返事があった。
それに五代もなのはもヴィータさえも苦笑し、スバルとティアナは意外そうな表情を見せる。

「……五代さんって、なのはさんのご両親にも好かれてるんですか？」

「にゃはは、五代さんは六課に来るまでうちで働いてたんだよ？」

ティアナの言葉になのはは無理もないかと思いつつ、そう答える。
そして、そこから五代が翠屋での話を始めると、なのはとヴィータもその話に夢中になっていく。自分達が知らない時の五代の話は、とても面白く楽しいものだった。
そんな風に話しながら目的の場所に着き、そのドアをなのはが開ける。それと同時に三人の人物が一斉に声を掛けた。

「「「いらっしゃいませ」」」

「久しぶり、お父さん、お母さん、お姉ちゃん」

なのはの笑顔に三人が笑顔を返す。スバルとティアナはその桃子の姿を見て驚愕。いくら何でも若すぎると思ったのだ。なのはぐらいの年の子がいるとは思えないような容姿。それに、二人して同じ感想を抱いた。

（（お母さん、若っ！））

そんな二人とは違い、五代もなのはと同じように三人へ挨拶を始めた。だが、その視線が美由希へ移った時、五代の表情がどこか楽しそうなものへ変わった。

「ご無沙汰してます士郎さん、桃子さん。あれ？　こちらの方は女優さんかな？」

「も～、美由希ですよ五代さん」

「ああっ、美由希ちゃんか。いや、気付かなかった」

苦笑しつつ指摘する美由希。それに五代は一際驚いたように反応を返す。これも五代なりの挨拶。美由希は自分に彼氏が出来ないと五代にぼやいた事があり、その理由として自分が美人じゃないからと告げた。それ以来、こうして事ある毎に五代は美由希を誉めるのだ。

それは世辞ではない。言われる事で自覚する事もある。そう信じるからこそのもの。美由希もそれを知っているからこそ、そんな五代の気持ちが嬉しい。恭也はこんな事を言ってくれる相手ではなかった。故に美由希にとっても五代は頼れる兄に近い感覚があった。

そして、なのはがスバルとティアナの紹介をし、二人が礼儀良く挨拶をする。そして、フェイト達が来るまで店で待たせてもらう事になったのだが、五代が大人しく待っているはずはなく……

「はい、モンブランですね。飲み物は、アイスティー……っと、かしこまりました」

そこには、以前使っていたエプロンを付け、オーダーを受ける五

代の姿があった。既にピークは過ぎたものの、忙しいのは変わり無く、五代は進んで手伝いを買って出たのだ。なのは達はそんな五代に感心するも苦笑していた。

何せ、それは六課の五代をどこか彷彿とさせるのだから。だからだろう。なのはもスバル達へ待っているように告げ、その手伝いを始めたのは。こうして二人が働く姿を眺め、スバルとティアナは意外そうに呟いた。

「「なのはさんが店員してる……」」

「……小さい頃から偶にやってたぞ」

局の憧れであるエースオブエース。それが管理外世界の喫茶店でウェイトレスをしている光景は、どこか不思議な印象を二人に与えた。それにヴィータがどこか苦笑しながら呟く中、フェイト達が翠屋に現れて、忙しそうに働くなのは達の姿を見て軽く驚くのだった……

コテージ付近で腕を振るうははやてと翔一。更にリインもそれを補助するように動き、ファリンとイレインはテーブルのセッティングなどをしている。シャマルとザフィーラは六課との連絡中。未だに何の異常もないらしく、真司達はいつものように過ごしているらしい。

ただ、光太郎だけはやはりまだ気を抜いていないようで、なのは達が帰るまでは宿舎に帰らずに待っているとの事。それを聞き、二人は揃って警戒を強めた。

「そう、分かったわ。ありがとうアルト」

『いえ、もし何かあったら必ず連絡します』

「頼む」

そうザフィーラが告げると通信が切れた。それに互いに視線を送り合い頷く二人。ツヴァイはいつもは出来ない配膳の手伝いをして、リインから誉められ、ファリンとイレインからは微笑まれていた。

それを見て、シャマルは笑みを見せるもそれを消してはやてへ近付いた。今は鉄板で焼きそばを作っていて、食欲をそそる匂いが漂っている。それに顔が綻ぶのを感じながらも、何とか表情を崩さないようにしてシャマルははやてに耳打ちした。

それにはやては特に驚いた様子もなく頷き、翔一へ視線を向けた。翔一はアリサ達が買ってきてくれた材料を仕込み、串に刺していた。その二人は現在ツヴァイの可愛さに笑みを浮かべながら、テーブルでなのは達の帰りを待っていた。

「翔にぃ、光太郎さんはわたしらが帰るまで寝ないらしいわ」

「……そうなんだ。なら、俺達も気を抜きすぎないようにしないと」

その翔一のどこか納得した答えにはやては小さく頷き、シャマルへ視線を戻す。それにシャマルも軽く笑みを浮かべて頷き、ザフィーラの元へと戻っていく。張り詰めるのは良くないから、適度に気を抜こう。はやてと翔一の会話からそんな風に感じ取ったのだ。

そんな時、コテージ近くに車の排気音が聞こえてきた。それにすずか達が揃って反応を示す。はやてと翔一は、そんなすずか達の反応に気付かれない程度の笑みを浮かべて料理を続けた。

「いい匂い！」

「ですね！」

我先にと車から降りたスバルとエリオが、開口一番そう言い合えば……

「少しは我慢しなさいよ」

「でも、お腹空きました……」

後から降りてきたティアナがそんな二人にやや呆れ気味に言って、キャロがそんな二人を擁護するようにそう告げた。

「……良かった。シャマルは何も手を出してないようだ」

「マジか。それなら……飯は期待出来るな」

副隊長二人は家族の一員の家事不参加をどこか安堵したように言い合い、それを聞いた五代が苦笑していた。翔一から少し聞いたシャマルの失敗談。それの多くは料理関係だったのだから。そんな五代達を見つめ、なのはとフェイトは苦笑し合った。

「やっぱりどこか休暇みたいだね」

「そうだね。いつか本当にこんな風に六課みんなで来れたらいいな」

「真司さんやヴァルキリーズ……？」

「……スカリエッティも、ね。いないと真司さん達が気にするから」

なのはの窺うような視線に、フェイトはそう答えた。それになのはは、まだフェイトの中のわだかまりが消えてないのを感じた。だが、その声に嫌悪も憎悪もないのに気付き、少しだけ安心していた。

これなら、いつかフェイトとジェイルも分かり合えるのではないかと思えたからだ。既になのはは、ジェイルに対して犯罪者などという印象はない。だけど、それを周囲にも要求する気は無い。ジェイル自身も言っていたのだが、した事は消えないのだと。

（ジェイルさんは、フェイトちゃんに対してどこか引け目を感じてる。フェイトちゃんは、そんなジェイルさんの態度に引け目を感じてる。優しいんだね、二人共）

きっと二人は互いの気持ちを分かり合おうとしているのだろう。そう思い、なのはは笑う。それにフェイトは気付かず、ただなのはが何かに笑ったのだと思い、同じように笑うのだった……

大勢で賑わうテーブル。話題の中心が五代なのは仕方がないだろう。いつでもどこでもムードメーカーは五代なのだから。今もすずかやアリサだけではなく、ファリンやイレインにも話しかけられ、それを活かして五代はスバル達への橋渡し役をしているのだ。

すると、そこへ車の停止音が響き、全員が視線をそちらへ向けた。そこには美由希とアルフ、そしてエイミィの姿があった。それにスバルとティアナが見慣れない相手が二人いる事に首を傾げて、五代へ尋ねた。

「あの、美由希さんと一緒にいるのは誰です？」

「一人は使い魔みたいですけど……」

「あっちの女の人はエイミィさん。クロノ君の奥さんで、フェイトちゃんの義理のお姉さん。で、もう一人はフェイトちゃんの家族で、アルフさん」

五代の言葉に、名前を挙げられた二人が手を振って応じた。その気さくさにスバルもティアナも親しみ易さを感じて、笑顔を見せる。こうして食事を兼ねた紹介の時間が始まった。はやてが、まるで休暇の慰安旅行の様相を呈したと表現すると、それに周囲から同調するように笑いが起きる。

そして、乾杯の後始まるアリサを初めとする現地の者達の自己紹介。とはいえ、既に五代が簡単に紹介している者達がほとんどのため、実質はすずか達月村家だけのようなものだった。そして、アリサ達の次はスバル達四人の自己紹介が始まる。

「それで、私は五代さんやなのはさんみたいに、困ったり苦しんでいる誰かを安心させてあげられる人になろうと思ったんです」

「なので、アタシは翔一さんのような、誰にでも同じような態度で接する事の出来る人を目指しています」

「だから、僕は光太郎さんを目標に色々な鍛錬に励んでいます」

「いつか、真司さん達と一緒にここに来れたらと思います」

四人に共通するのは締めにライダーとの関わりを示す言葉を持ってきた事。それを聞き、アリサ達は揃って五代達の影響力を感じていた。真司だけは良く知らない。それでも、五代や翔一と同じような、いい意味で存在感のある人物だとは思った。

そして、四人の自己紹介が終われば、自然と話題はここにいない光太郎や会った事さえない真司の事になるのも、その存在感故の事。だが、そんな中、五代はスバルを手招きし、イレインやファリンと改めて引き合わせた。そして、三人へ互いの共通点を教えたのだ。

「……って事なんだ」

「そうですか。この子も」

「私らと同じなのか」

五代から聞かされたスバルの生まれ。それに二人はどこか嬉しそうに笑みを見せて、その頭を撫でた。スバルも急に聞かされた事に驚きはしたが、二人が自分達の姉にも当たる存在と思え、嬉しく思っていた。

ヴァルキリーズが大勢で仲良くしていたのを見ながら、どこかで羨ましく思っていたのだ。ギンガだけでなく、もっと自分にも姉妹がいれば。そんな時に出会ったファリンとイレイン。それにスバルは勝手ながら姉認定をした。

「あの……ファリンさん、イレインさん」

「はい？」

「ん？」

スバルの声に何か変な感じを覚え、二人は不思議そうに声を返す。それにスバルは意を決して告げる。

「お姉ちゃんって思ってもいいですか？」

「「……は？」」

「……駄目ですか？」

何を言われたのか一瞬理解出来なかった二人だったが、スバルはそれに構わずにそう問い直す。その子犬のような可愛さに、元々妹分であるイレインが反抗的な事もあったファリンが嬉しそうにその体を抱きしめた。

それにスバルが驚くものの、それが受け入れだと理解し、笑顔を見せる。イレインもそんなスバルに何か思うものがあったのか、ファリンとは逆からその体を抱きしめて笑った。

その光景を見て、五代は頷いていた。生まれが特殊な三人。だからこそ、その出会いに縁を感じたのだろう。魂の姉妹とでも言えばいいのだろうか。五代はそんな事を考え、三人にサムズアップ。それに三人も気付き、満面の笑みでサムズアップ。

一方、なのは達は幼馴染同士での会話に花を咲かせ、今はなのはとユーノの事を話題にしてなのはを困らせていた。何せ唯一の恋人持ちとなったなのはだ。それに対して四人はそれぞれに思う事もある。なので……

「で、単刀直入に聞くけど、どこまでいったの？」

「あ、アリサ……」

「さすがにそれは……」

直球な質問にフェイトとすずかが苦笑。だが、はやてはそれに同意するかのようになのはへ視線を向けてこう言った。

「キスぐらいはしたやろ？」

「ううっ……どうしても言わないと駄目？」

「「駄目（や）」」

「「よ、容赦無い……」」

軽く涙目ななのはに対し、アリサとはやては即答。そのあまりの速さに、フェイトとすずかはなのはに同情しつつ、やはり興味はあるのかそれを止めようとしないのだった。こうしてなのははユーノとの関係をある程度まで話す羽目になる。

とはいえ、まだキス止まりなので、別に話しても問題無かったのだが。ちなみに、それを聞いてはやてとアリサが軽くがっかりしたのを追記しておく。

エリオとキャロは、アルフやエイミィとの再会に喜びを見せ、楽しげに会話していた。エリオにとってもキャロにとっても、二人は人の優しさや温もりを教えてくれた存在。過ごした時間はそこまで多い訳ではないが、それでも思い出は沢山あるのだから。

「そうかい。光太郎は六課にね」

「はい……」

「一緒に来てくれるはずだったんですけど……」

「仕方ないさ。邪眼が動き出したなら、仮面ライダーはそれに備えて当然だ」

やや申し訳ないような二人を見て、エイミィはそう明るく言って気にしないようにと続けた。

「そうそう。会えなかったのは残念だけど、ま、その気になれば会えるしね」

アルフが少し笑みを浮かべてそう告げると、エリオとキャロは頷いた。いつか六課に遊びに来て欲しいとも付け加えて。それにアルフは嬉しそうに笑みを見せるも、何かを思い出してやや表情が曇る。見ればエイミィも同じような表情だ。

それに二人が疑問を浮かべるが、エイミィがそんな二人へ告げた。邪眼との戦いは、どうなっているのかと。それに二人も表情を引き締める。知り合ったヴァルキリーズを基にした怪人を創り出し、六課へ差し向けてきている。そう二人は言って、こう締め括った。

「「でも、ライダーがいるから大丈夫です」」

二人揃ってその手はサムズアップをしている。それにアルフもエイミィも頷いて、サムズアップを返す。互いに見せ合うは、信頼の笑顔。ライダー達の強さを知っているからこそ、その心に絶望はない。不安があろうとも、それを上回るだけの希望があるのだから。

そんな四人の傍ではティアナが美由希からなのはの昔話を聞かされ、驚くやら笑うやらと忙しく表情を動かしていた。実は運動音痴気味だとか、機械関係にやたらと強いなどの知らない話は、ティアナの中にあったなのはのイメージを大幅に変更させるだけのものがあった。

「……で、家のパソコンはなのはに一回全部バラバラにされてね」

「凄いですね」

「あたし達もビックリしたよ。いや、でもちゃんと組み立てたんだから大したもんだと思ったけどね。そのなのはカスタムは未だに現役だよ」

「なのはカスタムって……何か凄そうですね」

美由希の出した呼び方に苦笑しつつ、ティアナは視線を美由希から後方のなのはへ移した。それに美由希も視線を動かし、感慨深く笑った。

「そんななのはが今は先生してる。しかも、結構人気者なんだって？」

「はい。若い子の憧れですよ。エースオブエースって呼ばれてますし」

ティアナがそう楽しそうに言うと、美由希もそれに同じ笑みを返す。視線の先では、なのはがはやてとアリサからユーノといつ結婚するのかとからかわれている所だった。それに大弱りしているなのはを見て、二人は笑ったのだから。

ティアナの中に、もう完璧人間としてのなのはのイメージはない。誰であれ、どこかに欠点や弱点がある。それを補うだけの才能や技術が必ず誰にでも眠っている。なのははそれを目覚めさせたのだ。そう考えるからこそ、ティアナも思う。

（アタシも……いつかアタシだけの何かを見つけ出してみせる。他の誰にも負けないオンリーワンを！）

視線の先では、あまりのはやてとアリサのしつこさにフェイトへ助けを求めるなのはの姿があった……

「いいものだな」

「そうですね。アインさんがいるから、リインちゃんも嬉しそうですし」

「嬉しそうじゃなくて嬉しいですよ。お姉ちゃんがいると、心が暖かくなるです」

周囲がそれぞれに繋がりを持ったり、深めたりするのを見ながら翔一とリインは微笑み合い、ツヴァイはそんな二人の傍でニコニコと笑っていた。普段は中々仕事をしている場所の関係で共に過ごす事が出来ないリイン姉妹。だからだろう。こうして共に長い時間を過ごせるのは、ツヴァイにとっては嬉しくて仕方ないのだ。

そんな会話をしながら笑い合う三人を見つめ、シグナムが呆れるように笑みを浮かべていた。

「まったく、これは一応仕事なのだがな」

「シグナム、貴方も一応って言ってるわよ？」

「ま、きっと誰もが同じ気持ちだろうよ。どっか休暇みてぇな雰囲気だからな」

「それは否定せんが、気を抜きすぎるなよ」

守護騎士達はそんな三人を見ながら、笑顔でそんな話をする。こうして、ある程度の時間を過ごし、一同は汗を流しておく事になり、話し合いの結果近くのスーパー銭湯へ向かう事になる。無論、その話を聞いた瞬間、スバル達が揃ってあの話題になった場所だと気付き、小さく喜んだのは言うまでもない……

「はい、いらっしゃ……団体様ですか？」

「そうです。大人が……十八人と子供が四人です。あ、支払いはわたしがしとくから、みんなは先に行っててええよ」

突然の団体客に戸惑いを感じながらも愛想よく対応する店員。それにはやてが頷き、全員分の支払いをしておくと告げると、それになのは達が感謝しながら一足先に店内へと足を踏み入れていく。

和気藹々といった雰囲気の一同。まぁ、スバルがヴィータに対し大人料金にするのかと言って軽く睨まれたりはしていたが。そして、五代と翔一、ザフィーラとエリオは当然の如く男湯へ。キャロはエリオへ手を振ってフェイト達と共に女湯へ向かった。それにエリオは少しだけ安堵していた。

実は、キャロはどこか性別を気にしていない時がある。自然保護隊での日々での中に、同じような状況があった。その日、色々と疲れたエリオは浴室へ向かい、疲れを落とそうとした。時間は遅く、他の隊員達は既に入浴を終えた後だったのだが、そこへキャロが一緒に入ろうと現れたのだ。勿論裸で。

エリオはそれに慌てて背を向けたものの、今でも思い出そうとすれば容易に思い出せるぐらい、その光景は脳裏に焼きついてしまっ

たのだ。時にエリオとキャロが六課に来る二ヶ月前の出来事だ。

（良かった。キャロが男湯に来なくて。決まりを見たら、十一歳以上の男女はちゃんと分かれないといけないってあったから）

自分達は十歳。ぎりぎり決まりに抵触しない年齢だ。だが、キャロもエリオだけならともかく、五代達もいるので男湯に行こうとは思わなかったのだ。それは、エリオが寂しくないから。そう、あの時もエリオが一人なのを気の毒に思い、キャロは行動したのだから。

「エリオ君、湯上りには何を飲む？」

「あ、僕は……コーヒー牛乳でしたっけ。それで」

突然翔一から聞かれた事に少し考え、エリオは光太郎が言っていた物を答えた。それに五代が反応した。

「お、いいね。じゃ、俺はフルーツにしようかな」

「俺はラムネにしておきます」

「……入る前から出た後の話をするな」

楽しそうに話す五代と翔一を見て、ザフィーラはそう苦笑しながら指摘するのだった……

「いやぁ～、話に聞いた通りだね」

「そうね。で、どうする？」

以前聞いた通り、様々な風呂が存在する事に感心するスバルとティアナ。そしてそれらを見回し、行動を決めるべくスバルへティアナは意見を求めた。それにスバルはとりあえず一番大きな風呂へ向かおうと提案。それにティアナも頷いた。

そして、視線を遅れて現れた存在へ向ける。そこには、スバルと同じように周囲をキョロキョロと見ていた少女がいた。

「キャロもそれでいい？」

「はい。でも、その前に体洗ってもいいですか？」

「あ～、そうね。スバル、いいわね？」

「うん。じゃ、行こう」

キャロの言葉にティアナは失念していたという顔をし、スバルへ視線を向けた。スバルも年下のキャロから指摘された形になり、やや苦笑気味に頷いたのだから。こうして三人は体を洗うために歩き出す。そんな三人とは違い、なのは達は既に体を洗い始めていた。

五人の美女が揃って体を洗う光景は、やや銭湯の光景としては浮いたものがあるが、本人達にはそんな感じはしないため、平然と会話をしながら過ごしていた。

「やっぱなのはは体のバランスいいわね。これはユーノがいつか鼻血でも出すんじゃないかしら」

「あ、アリサちゃん、その話はもう止めてよ～」

なのはの整った全身を眺め、アリサは少し悔しそうに告げる。だが、後半はやはりからかう事を忘れないのがアリサクオリティだ。なのははそんな言い方に苦笑するも、いつかユーノの前でこの状態になるのかと考え、顔には赤みが差していた。

「フェイトちゃんは相変わらずお肌スベスベだよね」

「す、すずか、くすぐったいよ」

すずかの手がフェイトの体を優しく撫でる。それにフェイトはこそばゆいものを感じて、そう告げる。すると、それを見ていたはやてが何かを思いついたように頷き、フェイトとすずかの間へ移動した。

「そうやですずかちゃん。そないに軽く肌を触るからくすぐったいんや」

「「だからって胸に手をやらない」」

言葉と共に伸ばされたはやての手を二人して同時に止め、ぴしゃりとそう言い切った。そのままの姿勢ではやては二人から軽くお叱りを受ける。それを見て、なのはとアリサも呆れつつもはやてらしいと笑い、五人は思い出話をしながら笑う。

そんな感じで盛り上がるなのは達から離れ、熱めの檜風呂で表情を緩めているのは美由希、アルフ、エイミィ、それにファリンとイレインだ。四十三度という熱さだが、それも慣れてしまえば心地良い。五人はそんな中で聞こえてくるなのは達の会話に笑顔を見せていた。

「いや、あの頃と変わらないね。なのはちゃん達はさ」

「早々変わるもんでもないだろ。まぁ、外見はかなり変わったかもしれないけど」

「アルフ、それは当然だよ。あれからどれだけ経ったと思ってるの」

なのは達の関係が魔法と出会った頃と変わらない事に、三人は笑みを浮かべて頷き合った。

「五代が来て、もう十年近くになるんだな」

「そうですね。もう少し早く帰って来てくれれば、お嬢様やお姉様にも会ってもらえたのに」

恭也と忍は、つい最近ノエルを伴って日本へ遊びに来たのだ。無論、五代との再会自体はもう何年前に実現している。それでも、やはり外国暮らしの忍達とは中々会えないのも事実。五代も海鳴に戻ってから数える程しか忍達と会っていなかったのだから。

そこから話題は忍達の結婚式へ移る。そう、忍と恭也だけでなく、そこにいた者達全員の共通した思いは一つ。そこに五代がいなかった事を残念に思った事だ。エイミィは辛うじて五代だけは結婚式に参列してもらえたが、やはり翔一がいなかった。

「……恭ちゃんも忍さんも、五代さんにも見て欲しかったって言ってたもんね」

「そうだな。あの時の忍お嬢様は綺麗だった」

「恭也さんもです。とても凛々しかったですから」

「あたしも翔一さんがいなかった事、未だに少し気にするからねぇ」

「仕方ないさ。でも、二人共写真で見て本人達の前で言ってたじゃないか。この場にいれなかったのが残念だって」

そんな風に話し、五人は少しだけしんみりとした。そう、思い出してしまったのだ。五代達にもそういう思いをさせている相手がいる事を。それぞれの世界で彼らを待つ者達。それもその時の自分達と同じ気持ちを抱いているのではないか。

そう思い、五人は何も言わない。ただ、黙って湯の熱さを感じるだけ。しかし、何故か先程までは熱かったはずのそれが、今は少し冷たく感じるのだった……

一方男湯では五代達が体を洗い終わり、それぞれに思い思いの湯船へと浸かっていた。エリオは五代と共に行動し、翔一はザフィーラと昔来た時を思い出して楽しそうに会話をしていた。

「どう？　初めての銭湯は？」

「凄く面白いです。こんなに色々なお風呂があるんですね」

「だよね。俺も初めて来たけど楽しいもんなぁ。次、あれに入ろうか」

「はいっ！」

五代の指差したジャグジーに視線を向け、エリオは元気良く頷いた。頭の片隅には、仕事中だからあまりはしゃいではいけないとの

思いがあるが、それでも五代達の雰囲気に子供らしくなっていく事をエリオは止められなかった。

そして、五代と共に湯船を出ると、その横を歩きながら視界に入った打たせ湯に興味を抱き、質問をする。それに五代が話を始めてそれに聞き入る。そんな風にエリオは実に子供らしく過ごす。

それを別の場所から眺め、翔一とザフィーラは揃って笑顔。

「エリオ君、楽しんでますね」

「そうだな。本来なら注意の一つでもする所だが、あいつの場合は切り替えが出来るからな。大目に見よう」

「ですね。でも、何かいいですよね。こういうの」

「……まるで旅行だな」

ザフィーラの言葉に翔一はそれですと言わんばかりに頷いた。そして、いつかの話を実現したいと言い出した。六課での慰安旅行。今度は真司達も一緒に。そんな話をザフィーラは聞きながら、苦笑する。その話は邪眼を倒した事が前提になっているだけではない。

ジェイルの罪も無かった事のようにされていて、全員で海鳴温泉に行くのだ。そんな夢物語のような話をザフィーラは嬉しそうに、だがどこか悲しそうに聞き入るのだった……

念話で湯上りのタイミングを合わせ、全員はそれぞれに飲み物を手にしていた。そこでも少し揉め事のようなやり取りがあったが、それは敢えて詳しくは語らない。キッカケは牛乳は瓶の物か紙の物

かどちらが美味しいかだ。結果だけ言えば、瓶派のイレインが紙派のファリンを論破した。

その議論は聞いている五代達を納得させたり、驚かせたり、苦笑させたりと様々な反応を示させた事を記す。そんな楽しい時間を過ごし、待機所に戻ろうとした時だ。それぞれのデバイスに反応が現れたのは。

それになのは達が動き出す。五代と翔一は念のため、美由希達の傍で待機する事になった。変身したくても、海鳴では結界でも張らないとライダーの姿になる訳にはいかないからだ。それに、もし邪眼が手を出してくるのならすずか達が危険になる。そう判断したはやてにより、二人はそのまますずか達と共になのは達を待つ事になったのだから。

飛び去っていくなのは達と走り去るスバル達を見送り、五代と翔一は光太郎の嫌な予感が当たりつつあるような気がしていた。

「……一応、いざとなったらアタシやアインがフェイト達の所まで転送魔法を使うから」

「そういう事だ」

「ありがとうアルフさん」

「お願いします」

本来ならもう帰ろうと思っていたエイミィや美由希だったが、そんな五代と翔一の雰囲気からどうしようかと考え出す。下手に動いてそこを襲われでもしたら大変だと思ったのだ。それに気付き、イレインとファリンが全員で動けば大丈夫と言い出し、翠屋の方へ歩

き出す。
それに五代達も頷いて、どこか遠慮する美由希とエイミィへ笑顔を見せた。きっと、大丈夫だからと。

「……じゃ、俺はエイミィさんを送っていきます」

「うん。俺は美由希ちゃんを送るよ」

そして、翔一がリインと共にエイミィを、五代がアルフ達と共に美由希を送る事で分かれて歩き出す。丁度その頃、海鳴の街にある者達が現れた。彼らは一人を除き、全員が同じ存在だった。まったく同じ女性がバイザーのような物を装着している。
そんな彼女達に一人の女性が無機質な声で告げた。それは、たった一言。命令通りの相手を狙え。それにその女性達は頷いて動き出す。その遠ざかる背中を見つめ、そこに残った者が吐き捨てるように呟く。

――人形というのは中々どうして言い得ている。精々捨て駒に使わせてもらうとするか……

そう呟いて彼女――アハトはその場から転送魔法を使って消える。そして、消え去る瞬間、小さく呟く。他の奴らは上手くやっているだろうかと。そう、アハトは邪眼の指示でこの海鳴にとある物の実験を兼ねて襲撃を行なわせたのだ。
狙いは六課の関係者達。仮面ライダーの正体をある程度知った邪眼だったが、当然ながら彼らとの深い関係者は魔法世界にはいない。なので、なのは達の関係者を狙う事にしたのだから。

こうして海鳴に放たれる悪の魔の手。それが牙を剥くのは、本来なら力を持たぬはずの者達。しかし、忘れてはならない。彼らには

仮面ライダーがついているのだと……

「これで終わりね……」

「意外と面倒だったけど、何とかなったね」

やや疲れたようなティアナの声にスバルがそう明るく返す。ロストロギアはただ逃走するしか出来ない物だった。まぁ、分裂したようになって本体を分からないようにしてきたが、それだけだ。斬撃などを無効化したものの、ならばと魔法で足止めを決行。防御魔法を使用してきた事には若干驚いたが、それでミスをするような四人ではない。

結果として、相手の防御魔法をスバルとエリオが突破し、そこを突いてキャロが確保したのだ。今はキャロがシャマル達の監督の下、封印処理を行なっていた。

「……ふぅ、出来ました」

「お疲れキャロ」

初めての封印処理に息を吐くキャロに、エリオは笑顔で声を掛ける。短時間とはいえ、初めての四人での連携。それも見事なまでにやり遂げた事にティアナ達は達成感を感じていた。

なのは達も上空からその一連の流れを見て、満足そうに頷いていた。後は五代達と合流して帰るだけとなった時だ。フェイトの頭に念話が聞こえてきた。相手はアルフ。

【フェイト、大変だ！】

【アルフ？】

【敵だよ！　しかも複数。今、五代とファリン達が戦ってるんだ。女みたいなんだけど、どこか機械みたいって言うか……】

それだけでもう十分だった。フェイトは即座にアルフが言っている内容を口に出して周囲へ伝えた。それになのはが即座に反応。一路五代達がいるだろう場所へ向かっていく。だが、はやて達八神家は別の方向へ向かっていく。

悟ったのだ。翔一の方にも何か動きがあるだろうと。フェイトはそれに気付き、なのはと同じ方向へ向かう事にした。はやて達は数も多い。更に歴戦の騎士であるヴォルケンリッターがいる。ならば自分はなのはと共に五代の応援に向かおうと。

一方、前線四人組は隊長陣から聞いた内容に驚きつつ、翔一達の居る場所目指して走っていた。五代のいる場所よりもそちらの方が近いとシャマルから念話があったためだ。

「邪眼の仕業かな！」

「分からない！　でも、おそらくそうでしょうね！」

シャマルが展開した結界内を走りながら、スバルはティアナへ尋ねた。ティアナはエリオとキャロと共に本来の姿へ変わったフリードに乗っている。やがて視界の先にアギトとリイン、それにエイミィの姿が見えてくる。それだけではない。はやて達八神家が勢揃いし、襲い来る謎の女性達と対峙していたのだ。

「「「「八神部隊長！」」」」

「よっしゃ、これで攻めに転じる事が出来るな」

「そうだね。ティアナちゃん達はリインさんと協力してもらおう」

聞こえてきた頼もしい声。それに笑みを浮かべてはやてが呟けば、アギトも頷いて応じる。リインは魔法を長時間使う事が出来ない。しかも、強力な魔法は使用する事自体が厳しい。そのため、相手もエイミィを守るリインばかりを狙ってきていたため、アギト達は防戦をせざるを得なかったのだ。

しかし、スバル達がリインの援護についてくれれば攻撃に出る事が可能だ。そう判断し、アギト達は全員で視線を交わす。それだけで何を考えたかを理解し合い、七人は動く。

「行くぞ！」

「アイゼンっ！」

「レヴァンテイン！」

ザフィーラ、ヴィータ、シグナムが右方向を……

「はっ！」

「行くで、リイン！」

”はいです！”

「クラールヴィント！」

アギト、はやて、シャマルが左方向を引き受ける。リインはそんな六人を支援するためにバインドを使って、相手の動きを制限しようと試みる。そこへスバル達が駆けつけ、リインの前で構える。

「アインさん、私達は？」

「すまないが、私とエイミィの護衛を頼めるか。それと、倒した際のこいつらの爆発に気をつけろ」

「爆発？　……まさか、こいつら！？」

リインの口から告げられた単語にティアナが何かを思い出し、驚愕する。それにリインは頷いた。おそらくマリアージュだと……

「くっ！　倒した時が一番厄介ってのは嫌なもんだ！」

イレインは目の前で爆発したマリアージュを見て、そう吐き捨てる。美由希を送り、コテージに向かっている途中、突然現れた怪しい女性。自動人形であるファリンとイレインには、その異常性が即座に理解出来たため、不意を突かれる事は避けられたのが唯一の救いだろう。

五代は初めこそファリンとイレインに任せろと言われ、すずか達をかばうようにするしかなかったが、なのは達が向かっているとアルフから聞いて護衛役をアルフに任せ変身。クウガとなって今は先頭に立っていた。更に今はなのはとフェイトが加わり、状況としては有利になりつつある。

「きゃっ！　やりましたね！」

マリアージュの攻撃をかわすも、その一撃がメイド服を切り裂いた事に怒りを見せてファリンはブレードを構え直す。その後ろでは、すずかとアリサが揃ってクウガ達の雄姿を見守っていた。

突然現れた襲撃者。殺意も何もなく、ただ機械のようにこちらを殺そうとする無表情の相手。そんな異様な存在に最初こそ恐怖に飲まれた二人だったが、ファリンとイレインの奮闘、それにクウガの姿がそれをかき消した。

「頑張れ！　なのは！　フェイト！」

「ファリンもイレインも気をつけて！」

それに応援に駆けつけた親友二人もいれば、もう怖いものは無い。だが、戦う力はないため、今はせめて気持ちだけでもと思い、声援を送っている。親友と家族へ声援を送り、そしてその声を一番先頭で戦う優しい男へ向けた。

「「負けるな！　仮面ライダー！！」」

その声にクウガはマリアージュを蹴り飛ばして、サムズアップ。それだけではない。なのは達もそれぞれマリアージュを撃退し、サムズアップを返したのだから。その直後起きる爆発。それに二人もサムズアップを返し、笑顔を見せるのだった……

マリアージュを片付け終わり、はやては視線をアギトへ向けた。アギトは最後に相手したマリアージュのいた位置で立ち尽くしている。それに何か妙なものを感じ、はやてはその傍へ近付いた。

「どないした？」

「……うん。何か妙な感じがしたんだ」

「妙？」

返ってきた言葉にはやては首を傾げた。アギトは変身を解かず、そのまま視線を上へ向けた。それに続くようにはやても視線を上に向けた。そこには星空が広がるのみ。すると、アギトがこう言った。あまりにも手応えが無さすぎたと。そして、こう続けた。

「それに戦っている間中、あいつらは執拗にエイミィさんを狙ってた。まるで、目的は最初からエイミィさんだったみたいに」

「……六課関係者を狙った襲撃。そう言いたいんやな？」

はやての苦い声にアギトは頷いた。それを聞いていた守護騎士達も浮かない表情だ。光太郎が危惧していた状況。それをまさかこんな形で知る事になるとは思わなかったからだ。当のエイミィは、かつて管理局員だったためそこまで気にしていなかった。むしろ覚悟していたとまで言ったぐらいだ。だが、はやてはそうではない者達を知っている。

非日常との接点など自分達としか無いような大切な存在。それを思い出し、はやては一先ずシグナム達にエイミィを送っていくように頼んで、視線をスバル達へ向けた。

「一旦、待機所に戻ろか」

その声には、どこか疲れたような響きがあった……

その頃、なのは達も同じような結論に辿り着いていた。何せ、マリアージュは揃ってファリンやイレイン、そしてすずか達ばかりを狙ってきたのだから。

アルフは美由希がいなくて良かったと心から告げた。御神の剣士である美由希でも、武器を持たない状態でマリアージュと戦えるはずもなく、仮に倒せたとしても恐ろしい爆発を起こす相手には、きっと大怪我を負わされただろうと思ったのだ。

それにはなのはも同意し、視線をクウガへ向けた。クウガは念のためと言って緑に変わり、周囲の様子を窺っていた。その色が変わるのを見た時、すずか達は揃って驚きを見せていたのが、なのはには少し昔の自分を思い出させたのは言うまでもない。

しかし、そんな風に和んだのも一瞬。何故なら、今回の相手の狙いはこれまでと違うのだから。だからこそ、なのはだけではなく、フェイトさえその表情は暗い。

「……フェイトちゃん、今回の狙いは」

「間違いないよ。絶対すずか達だ。ファリンさんやイレインさんがいたから良かったけど、これがもし……」

そこで二人は揃って沈黙した。巻き込んでしまったと思ったのだ。しかも、これで終わりではないだろうとも。邪眼が自分達の関係者に目を付けたのなら、きっとまた何か動きを見せるはず。そして、その標的になるだろう親友や知人達へ打てる手は……驚く程少ない。

そう考えて気落ちする二人を見て、すずかとアリサが互いの顔を見合わせ、揃って頷いた。そして、そんなのはとフェイトへ近付

き、その手を優しく握る。

「そんなに気にしないで、なのはちゃん」

「すずかちゃん……」

「そうよ。雄介さんの話を聞いた時から、どこかで覚悟はしてたんだから」

「アリサ……」

そう、二人は五代を通じて聞いたライダーの話から、その敵がいるのならいつか自分達を狙う可能性があると予想していたのだ。何故なら、過去仮面ライダーが戦った相手はおそらく地球を侵略しようとした存在。ならば、その手段は卑劣極まりないもののはず。

そう考えた二人は、なのは達のせいではないとはっきりと言い切った。悪いのは六課ではなく、その敵。悪逆非道の限りを尽くす邪眼なのだと。

「アタシ達はアタシ達なりに用心するわ。それに、今回の事で敵も簡単には手出し出来ないって分かったでしょ」

「ファリンやイレインがいるし、アルフさんに美由希さんだっている。それに、私だって普通の人よりは強いって事、忘れないで」

そう言って二人は笑顔を浮かべる。なのはとフェイトを元気付け、周囲に安心を与える笑みを。ファリンとイレインもそんな二人の言葉に力強く頷き、サムズアップを見せる。それになのはとフェイトは感謝するように頷き、笑顔を返す。

五代は変身を解除し、そんな光景を見つめて拳を握り締めていた。

今までも何度か未確認との戦いでやるせなさを感じた事はある。だが、今回はそれとは質が違う。何せ襲われるだろうと分かっているのに守れないのだから。

（俺や翔一君、光太郎さんや真司君。ライダーを一人は海鳴にいるようにしたい。でも、それで戦力が減った所を邪眼が襲うとしたら。いや、もしかするとそうする事自体が海鳴へ怪人を送り込ませる原因になるかも……）

守る力を持つ自分達。だが、それが敵を呼び込む理由になりかねない。そう思うと、五代は悔しくて仕方ない。未確認との戦いで感じる事の無かった無力感。それを、今五代は強く感じていた。

そのジレンマこそ、歴代ライダーがどこかで感じていた感覚。守る力を持つ自分達がいる事が、その守るべき者達を危険に晒してしまうという矛盾。事件をクウガ抜きで起こしていた未確認相手では起きようのない事態に、五代は何とも言えない気持ちになった。

そんな五代に気付いたのか、アルフが声を掛けた。

「あんま気にすんなって。いざとなったら助けに来てくれるんだろ？」

「それは……うん」

「ならそれでいいよ。あんた達が来るまで絶対誰も死なせないし傷つけさせない。勿論、アタシもね」

アルフの言葉に五代は嬉しく思い、笑顔を返す。その手にはいつもの仕草がある。アルフもそれでこそ五代だと言って笑顔とそれを返す。こうして、最後の騒動は終わりを迎えた……

待機所の掃除等を終わらせ、はやてはすずか達へ別れを告げていた。その表情は心なしか明るい。そう、なのはとフェイトから二人の気持ちを聞かされたはやては、ならば自分が気にしていては二人に申し訳ないと決意。気持ちを入れ替え、絶対に守るのだと心に誓い、こうして立っていたのだ。

「じゃ、今度は休暇中に来るわ」

「そうしなさい。あ、その時は光太郎さん達も連れてきなさいよ」

「城戸さんって人にも会いたいし、ヴァルキリーズだっけ。ファリン達の親戚の子達にも会いたいからね」

「うん、絶対連れてくるよ」

「待ってて」

五人はそう言い合って笑顔を向け合う。その横ではスバルがファリンとイレインへ元気良く挨拶していた。

「今度は、ギン姉も連れてきます」

「楽しみにしてるからね」

「今度は泊まりで来い。色々と五代の話を聞かせてやる」

「はいっ！」

親戚の姉とも言える二人との出会い。しかもそれが自分達と同じぐらい幸せに暮らしている。それをギンガやノーヴェ達が聞けばどう思うだろう。そんな事を考えながら、スバルは笑顔を浮かべた。それに二人も笑顔を返す。

それを少し離れた場所で見つめ、ティアナ達は微笑んでいた。五代と翔一はなのはやスバル達の様子に笑顔を浮かべっぱなしだ。守護騎士達も心配していた再襲撃もなかった事に安堵し、リインは眠そうなツヴァイを抱き抱え、母のような笑みを見せていた。

やがて話も終わり、五代達は手を振ってすずか達と別れた。またねとそう告げ合って。こうして海鳴での出張任務は終わりを迎えた。だが、六課に戻った五代達が見たのは予想だにしなかった光太郎達の姿だった。

食堂で疲れ切ったように眠るヴァルキリーズと真司にアギト。グリフィス達は指揮所で仕事中らしいが、きっともう疲れて寝ているだろうと光太郎は苦笑した。そういう光太郎はまだ意識もしっかりしているが、それでもどこか疲れが見える。更に、そこにはいないはずの者達の姿までもあった。

「……ゼスト部隊長達にギンガまで」

「すまんな。少し寝かせてやって欲しい」

「何が……あったんですか？」

ゼストは光太郎と同じく起きてはいる。だが、やはり今にも気を抜いたら眠りそうだ。ギンガはクイントと共に寄り添うように眠っているし、メガーヌさえソファをベッドに眠っている。そんな光景を見て、はやてが息を呑んだ。

何せ、何もグリフィス達から報告や連絡が無かったからだ。しかし、この現状である。故に事情を聞こうとはやてが光太郎へ尋ねた時だ。

「それは……」

「あたし達が話すよ」

リーゼ姉妹が姿を見せ、その状態に一同に疑問が浮かぶ。彼女達だけはまだ元気そうだったのだ。

「それで、一体何が？」

「うん。まぁ、長い話になるからね」

「明日の朝にでも話すわ。光太郎さんもそれでいい？」

「ああ。とにかく、今日は疲れた。残って良かったと思ったぐらいにね」

その光太郎の言葉から全員が大体の事情を理解した。ここにも、邪眼の襲撃があったのだと。そうして、この日は終わる。五代達が海鳴で過ごしていた頃、何が六課であったのか。それは翌朝に語られる事になるのだった……

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

海鳴サイド終了。長丁場になりましたが、マリアージュは怪人ではありません。その理由も含めた話は次回へ。

やりたかった事は特になし。あるとすれば一斉爆発を背に全員がサムズアップという戦隊モノのようなノリぐらいです。

熱戦！　連戦！　超激戦！

五代達を見送った光太郎は、一人格納庫へとやってきていた。今回居残りを決めた時、フェイトが一瞬見せた悲しみ。それを見て光太郎は確信した。フェイトが自分へ異性として想いを寄せている事を。

アグスタでのやり取りでも薄っすらと感じていたが、それを完全に理解した瞬間、光太郎は何とも言えない気持ちになった。嬉しさはある。光太郎から見てもフェイトは十分美人だ。しかし、光太郎には隣を歩かせる訳には行かない理由が多くある。

一つは、彼が元々居た世界で想いを寄せてくれた女性である白鳥玲子への配慮。もう一つは、光太郎がこの世界の住人ではなく、本来の世界へ帰還すればおそらく二度とこちらには来れなくなるだろう事。

そして、最大の理由。それは、彼が仮面ライダーである事。人ならざる身体と、人知れず悪と戦い続ける宿命。それを背負う自分と寄り添う事は、誰にもさせたくないと光太郎は考えているからだ。

（フェイトちゃんの傍に長く居すぎたのか？　……いや、それだけじゃない。互いの秘密を知り合ったのも大きいだろう。そうか……ある意味で似た者同士と考えているのかもしれないな）

フェイトの好意のキッカケをそう結論付ける光太郎。確かにそれもあるだろう。フェイトの出生は、他者に軽々と話せるものではないのだから。しかし、それだけでフェイトが光太郎を愛する訳ではない。

一番の理由は、その心と在り方。内面的なものこそフェイトがもっとも重視する部分。故に、フェイトは光太郎へ惹かれていったの

だ。自然を愛し、平和を愛する光太郎。悪い事は許さず、誰が相手であってもそれを正そうと行動出来る男。そんな光太郎だからこそ、フェイトは心から惹かれたのだ。

「あれ？　光太郎さんは行かなかったの？」

「一緒に行くって思ってたッス」

光太郎が顔を見せた事に多少疑問を浮かべるディエチとウェンディ。それに光太郎は思考を切り替え、笑顔を浮かべて答えた。

「そうだったんだけどさ、ちょっとこっちでやる事が出来てね」

「そうなんだ」

「じゃ、忙しい感じッスか？」

「いや、まだ大丈夫だよ。どうして？」

「いやぁ、聞きたい事があるんスよ。ほら、光太郎さんの言う先輩ライダーって何人いて、どんな人達なのかって気になって」

ウェンディがそう言うと、ディエチも頷いた。自分も気になると告げて。それに整備員達の手伝いをしていたノーヴェも反応し、振り向いた。

「アタシも聞きたい！」

その声に光太郎は苦笑。それぞれの先輩ライダー達の名前と簡単な話だけならと前置き、話し出した。まずは一号。技の一号とも呼

ばれる程の多彩な必殺技を持ち、これまで多くの怪人と戦った事もあり、様々な状況や戦術にも対処出来る歴戦の強者。
ショッカーという悪魔の軍団を倒した後も、休む事無く怪人達と戦い続ける英雄。心・技・体の全てにおいて優れた頼れるライダー達のリーダーでもあるのだ。

次は二号。力の二号と異名されるだけあり、技にも豪快なものが多い。更に、一号と同じく多くの戦いを経験しているため、そこからくる助言や勘は信頼出来るものがある。
その戦いはまさに嵐。闇を蹴散らす旋風の如し。更に、その真紅の拳は怒りの紅。悲しみを砕き、悪を打ち倒すためのものなのだ。そして、一号と二号は、共に連携を取れば負ける事はないという伝説を持つ”ダブルライダー”。

「……はぁ～、凄いッスね」

「ダブルライダーって、今の光太郎さん達も二人になれば同じだよ？」

「そうじゃなくてね。先輩達の場合は、人数を意味するんじゃなく、一号と二号だからこその”ダブルライダー”なんだよ」

感覚の問題なんだと光太郎は笑って言った。それに何となくだがウェンディ達も納得。それを確認し、光太郎は続きを話す。

仮面ライダーＶ３。ダブルライダーの力と技を受け継ぐ最強の呼び声も高いライダー。二十六の秘密を持ち、その特殊能力を駆使すれば、ＲＸといえど勝つ事は難しいと思わされた存在。
ダブルタイフーンと呼ばれる命のベルトがもたらすエネルギーは、変身だけではなく攻撃にも転じる事が可能。その”逆ダブルタイフ

ーン”は強力な反面、一度使用すると二時間変身が出来なくなる諸刃の剣でもあると光太郎は告げた。

そしてライダーマン。様々なアタッチメントを使いこなす彼。Ｖ３が戦っていたデストロンの科学者であった彼は、最初こそ自身の復讐のためだけに戦っていたが、最後にはＶ３と協力し、自らの死も覚悟の上で命を賭けて東京を守った。その事でＶ３から仮面ライダー四号の名を贈られたのだ。

強く優しい男。故にどんな相手であろうと、弱者を踏み躙る者へは立ち向かい、その存在を許さない。自身が知らず犯してしまった過ちに苦しみながらも、それを償うために戦い続ける四号ライダーだ。

「一号と二号の力と技を……」

「二時間変身出来ない、か。使い所を間違えたら危ないけど、それだけ凄い威力なんだろうな」

「アタシとしてはＶ３よりもライダーマンッス。何で名前が一人だけ仮面ライダーで始まらないのかって思ったッスけど、これで納得ッス」

「ライダーマンは先輩達の中で一番頭脳戦が得意なんだ。色々な発明や発見をしたり、かつて敵組織の人間だった事を利用し、敢えて敵の中へ入り込む事で先輩達を助けた事もあるらしい。仰々しい特殊能力は無くても、知恵の使い方次第では戦局を動かす事が出来る事を示したライダーだよ」

光太郎の補足に三人は揃って頷いた。彼女達の長女であるウーノ。彼女もまさにそうなのだ。ＩＳは戦闘向きではない。それでも、そ

れを活用し戦術や戦略を練る事でヴァルキリーズの司令塔を担っているのだ。光太郎は、三人がそんな風に自分の話を理解してくれた事を確かめ、更に続ける。

仮面ライダーX。深海用の改造人間――カイゾーグとして生まれたため、海中の強さは他を圧倒する。更にライドルと呼ばれる特殊武器を所持、それを使った攻撃も強みの一つ。

光太郎は知らないが、実は、その体を改造したのは父親。それは、瀕死の息子を助けたい親の愛情故の措置。だから、Xはその思いを無駄にしないために戦っている。海を愛した父。そんな父の平和への叫びが波の音となって聞こえ続ける限り、今日もXライダーは行くのだから。

次はアマゾンライダー。野生的な動きや技で相手を翻弄し、決め技はキックよりも腕の鋭い刃を使った大切断を多用する。更にギギとガガの腕輪と言う古代インカの力を秘めた物を使えば、その力はおそらくライダーの中でトップクラスにもなる。

彼は自然と人をこよなく愛し、トモダチのためならどんな相手にも勝利してみせる。明日の世界を守るため、今日もどこかでアマゾンは戦っているはずだと、光太郎は言い切った。

「深海って、そんな所でも怪人は動けるの！？」

「凄いッス。でも、逆に考えれば当然ッスよね。世界征服するなら、どんな場所でも戦えないと話にならないッスから」

「アマゾンは古代の力か。クウガみたいだよな」

「確かに近いものはある。先輩もインカの秘術を受けてライダーになったらしい。もしかすると、小さな接点があるかもしれない」

光太郎の指摘に三人は軽く驚き、クウガと歴代ライダーの共通点に少し嬉しそうに笑った。五代に話せばきっと喜ぶだろうと思ったからだ。そんな三人の表情に光太郎も笑顔を浮かべ、話を続ける。

仮面ライダーストロンガー。電気人間と呼ばれるため、その技は電気を使う物が多い。しかも、チャージアップというフォームチェンジをする事で、時間制限はあるものの凄まじい力を発揮する事も出来る。

天が呼ぶ。地が呼ぶ。人が呼ぶ。悪を倒せと俺を呼ぶ。そんな口上が決め台詞の漢。正義の心をカッと燃やす熱い正義の戦士だ。

次はスカイライダー。名の通り唯一空を飛べるライダー。セイリングジャンプと言う飛行能力は、多くのライダーが苦手としていた空中戦を完全に自分のものとしたのだ。更に一号を凌ぐ技の数を誇る。

専用バイクでのライダーブレイクという攻撃で、壁や怪人を砕く事も出来、地上戦でもかなりの力を発揮出来る万能型の仮面ライダーなのだ。

「電気か。エリオやフェイトさんみたいな感じかな？」

「チャージアップってクウガの超変身と何が違うんだ？」

「角が銀色になって、全ての力が大幅に強化されるんだ。俺も見た事はないけど、そう先輩は教えてくれたよ」

「空中戦をものにした唯一のライダーッスか。残念ながら、龍騎がもうそれを名乗らせないッスよ」

ウェンディはそう言って不敵に笑みを浮かべた。ノーヴェとディエチはそれに頷き、光太郎は苦笑。実際、アギトとユニゾンしなければならない龍騎は、本当の意味ではスカイライダーに及んでいない。しかし、それを言い出すのは無粋とも思ったのだ。

何故ならヴァルキリーズは、別にライダーに優劣をつけているのではなく、単純に思った事を口にしていると分かっているからだ。故に光太郎はそれに構う事無く話を続けた。

仮面ライダースーパー1。宇宙開発を目的に生まれた改造人間。ファイブハンドと言う特殊装備を使いこなし、たった一人で二つの組織を相手に戦い抜いたライダー。唯一、本人が希望した平和利用の改造人間である事も他との相違点だ。

更に、二台のマシンを使い分け、状況に応じた使用法であらゆる場所を駆け抜ける事もあった。赤い正義の血を燃やし、銀の機械の腕を振るう金の心を持つ男。だからこそ、彼はＳ－１ではなく、仮面ライダースーパー1なのだから。

最後は仮面ライダーＺＸ。脳以外は全て機械というパーフェクトサイボーグ。そのため、全身に武器が内蔵してあり、その能力や戦い方から忍者ライダーとも言われる事もある。彼も最初は復讐心で戦っていたが、先輩ライダー達と触れ合った事で仮面ライダーとして目覚め、その名を名乗るようになったのだ。

悪の渦を、深い闇を裂く稲妻のような電撃。そんな激しさを兼ね備えた熱風のような色の存在。その名に込められた意味というのは、仮面ライダーとしての完成形と言う”最後の者”を示しているのかもしれない。そこまで告げ、光太郎は息を吐いた。

「……と、以上の十人が俺の先輩達。名前と能力はざっとこんな感じかな」

「忍者ライダー……ドロンって消えるんッスかね？」

「いや、見えないぐらい速いんだ。トーレ姉達が見失うぐらいにさ」

ウェンディとノーヴェがどこか楽しそうに話す横で、ディエチだけは雰囲気が違った。

「自分で望んで仮面ライダーになった人もいたんだ……」

ディエチが驚きを浮かべて告げた言葉。それに光太郎は首を静かに振った。スーパー1は、仮面ライダーになりたかった訳じゃないのだと。彼はただ、自分と両親の夢のために、そして人類の夢のために宇宙開発用の改造人間になる事を望んだのだ。

決して戦うために、仮面ライダーになるために改造されたのではないと、はっきりと告げた。それに三人は神妙な表情で黙った。自分達は生まれた時から普通の人とは違う身体だった。だが、中には夢のために敢えて普通とは違う身体になる者もいる。

それがとても不思議で、そしてどこか理解出来てしまったのだ。真司が自分達へ尋ねてきた戦闘機人として生きるか、人として生きるかを選ぶ事。それをスーパー1は、改造人間として生きる事を選んだのだ。それは、欲望のためではなく、自分と多くの者達の夢を叶えるために。つまり、みんなで幸せになるためにだ。

「……その人は、誰よりも人らしい心の持ち主だったんだね」

「そうだな。だから、夢のために自分を捧げる事が出来たんだ。きっと、それが多くの人の笑顔に繋がるって思ったから」

「でも、それを怪人との戦いに使うはめになった……辛かったはずッス」

光太郎は三人の言葉にこみ上げるものを感じていた。もしこれをスーパー1――沖一也が聞いたのならどう思うだろうと。少ない情報からその心境に思いを馳せる少女達へ、きっと一也は感謝と笑みを返すだろう。

更に、君達も人らしい心の持ち主だと、力強く告げたに違いない。そう考え、光太郎は嬉しく思った。一也だけではない。全てのライダー達が三人の言葉に同じ気持ちを抱くだろうと思ったからだ。

強大な力に憧れるのではなく、それを持たざるを得なかった事に対して思いを馳せる。そして、その使い道とその気持ちを思いやり、悲しみを抱く。これが本来の人間なのだ。決して他者を顧みず、自分だけを守ろうとするのではなく、自分と他者を大切に考え、その心を汲み取ろうとする。

そんな存在と思うからこそ、仮面ライダー達は人間を愛して守り続けるのだから。光太郎はそう改めて思い直し、手を叩いて動き出す。

「さ！　話はお終い。みんなで仕事に戻ろうか」

「「「了解（ッス）」」」

そして、三人は口々に光太郎へ話の礼を述べ、動き出した。それを見つめ、光太郎はこれだけでも残った甲斐があったと感じていた。

（先輩達、帰ったら是非聞かせたい事があります。俺達の戦いは決して無駄じゃないって事と、人を守る事は間違っていないって事を改めて思う事が出来る話を……）

絶対に戻って歴代ライダー達に聞かせるのだ。この魔法世界での

出来事を。明日を変える事が出来ると信じる力をくれる思い出。それを、他のライダーにもと、光太郎はそう強く誓うのだった……

「何かアインさんがいないと変な感じだね」

セインの言葉にチンクも頷いた。今までどんな時も食堂に居たリイン。それが今回に限りいない。その違和感はやはり拭えない。それでも、あのアグスタの時と同じようにドゥーエがいるし、更に今回はトーレとセッテが手伝いをしてくれる事になっている。

「そうだが、その分今日は手伝いも多い。ディードも出来たら来ると言っていたしな」

「そっか。でもセッテはともかく、トーレ姉はあまりやった事ないけど大丈夫かな？」

「……まぁ、セッテと共に簡単な事を任せよう」

セインの指摘にチンクもラボでの日々を思い出し、トーレが家事を手伝った事の少なさに至り、苦笑混じりにそう言った。セインは同じように苦笑し、視線を真司へと向けた。

真司は一人で、五代と翔一が朝やってくれた仕込みを引き継ぎ、食堂の準備を進めている。だが、何故かその表情が曇っているような気がしていたのだ。セインもチンクもそれを先程から感じている。見送りに行った時はいつも通りだったのに、帰って来た時はやや暗いように見えたのだから。

（何があったんだろう、真司兄）

（あの様子では自分から話し出す事はなさそうか。やれやれ、今度は何を抱えたのだ？）

二人して軽くため息さえ漏らし、それに気付き合って顔を見合わせ苦笑。そして、意を決してチンクが真司へ声を掛けた。

「真司」

「ん？　何さ？」

「見送りで何があった？」

真司相手に回りくどい聞き方は意味がないと知っているチンクは、そうはっきりと尋ねた。それに真司はどこか躊躇う感じだったが、何かを思いついたのか一度頷いて視線をチンク達へ向けて告げた。

光太郎が何故かフェイトと距離を置こうとしていると。それだけで二人は大体を察した。それは光太郎の気持ちだ。仮面ライダーである光太郎。その人生はきっと過酷なもの。故にその隣を歩かせる事はしたくないだろうと。そう、それはある者にも当てはまるのだから。

「……真司、それは私達が容易に口出し出来る問題ではない」

「そうなんだよな、やっぱ。俺なりに考えてみたんだけどさ、簡単に出来る事なら光太郎さんも受け入れてるはずだし」

「難しいよね、ライダーに恋するって」

「だなぁ……」

セインの複雑な想いを込めた言葉を、普通に頷く真司。それにチンクもセインも微かに笑みを浮かべるが、同時に小さく悲しみも浮かべた。

光太郎とは違った意味で仮面ライダーとして生きる真司。彼もまた同じような結論を出すのではないか。そう二人も思っている。願いを叶えるために殺し合う真司の世界のライダー。それを変えるもしくは止めるために戦う真司。彼の生き方もまた苛烈になるだろう事は想像に難くない。

優しい真司は光太郎とは違う反応を見せるかもしれないが、それでもきっと、その隣を歩く事をさせるようには思えなかった。チンクもセインも未だに真司へその胸の内を明かす事が出来ないのは、拒絶される事を恐れているから。この時間を、この雰囲気を失いたくないからの弱さ故に。

「でも、きっと光太郎さんも気付いてるはずさ。人は一人じゃ生きて行けない。それは仮面ライダーだって同じだって。どこかで誰かと支え合うから、ライダーもまた人なんだってさ」

「……そう、だな」

「真司兄が言うと説得力あるよ。何せ、仮面ライダーだし」

真司の告げた言葉。それが二人の中に希望を灯した。それは、もしかしたらとの淡いもの。真司ならば、この想いを受け止めて頷いてくれるのではないか。そんな風に思う事が出来たのだ。そんな事を思い笑顔を見せる二人を見て、真司も嬉しそうに笑顔を見せるのだった……

指揮所ではグリフィスがはやての代わりを務めるため、いつも以上のデスクワークに多少忙しそうに手を動かしていた。隣でオットーがそれを支えるために手伝いをするのも、もうここでは当たり前の光景になった。アルトとルキノはクアットロと三人でデスクワークをしているし、ディードはそれぞれに飲み物を用意し、デスクに置き終えたので食堂へ行こうとしていた。

「では、私は食堂の手伝いに行ってきます」

「頼むねディード。今日はアインさんもいないから」

「美味しい料理期待してるって、真司さんに言っておいて」

ルキノとアルトの言葉にディードは笑顔で頷き、指揮所を後にする。それを見送り、二人も視線を前に戻した。

「しかし、管理外への出張とは大変ですね」

「しかもぉ、行き先はなのはちゃん達の故郷でしょ？」

「何か妙だよな」

「ええ。だからこそ、光太郎さんはこちらに残ったのでしょう。これが邪眼の仕業かもしれないと考えて」

オットーの言葉にクアットロが続けて告げた言葉。そこに全員が感じているだろう事をアギトが代弁した。それにグリフィスはやや険しさを覗かせて答えた。彼自身どこかでこの任務は邪眼絡みでは

ないと思っているが、それでも現状の指揮官である自分が警戒していると周囲に思わせる事で、全体に緊張感を持ってもらおうと考えていた。

それを周囲も理解したのだろう。先程までとは違った空気が室内を満たす。それは適度な緊迫感。いつ何があってもいいようにとの心構えをした雰囲気だ。それにグリフィスは内心で笑みを浮かべる。やはりこの部隊はいい部隊だと思ったのだ。

（こうして上の者の雰囲気を感じ取ってくれる。そして、上は下の者達の気持ちや行動を支えてやれる。どこでもこうであって欲しいけど……）

それが中々厳しいのは彼もよく知っている。母であるレティからも多少なりと聞いている話。管理局全体のしがらみや管轄争い。そう、内輪揉めだ。特に顕著なのが陸と海の確執。もっと人と資金をと叫ぶ陸。担当する事件の内容のため、優秀な人材と資金は優先的に回して欲しいと考える海。どちらにも一理あり、故に難しい問題なのだ。

確かに海の事件は下手をすれば次元世界を危機に陥れるレベルのものが多い。対して陸はまだその世界で留まるレベルばかりなのは認めざるを得ない。だが、だからこそ陸を重視するのもグリフィスには分かるのだ。

（陸は治安の基本だ。そこが乱れれば、安全も何もない。特に、管理局発祥世界のこのミッドがそうなら余計に……）

だからといってレジアスのような過激な発想には至らない。質量兵器の限定的な解除。それが新たな火種になる気がグリフィスにはしているのだ。そこまで考え、グリフィスは小さく首を振った。今はそんな事を考えている場合ではないと思ったのだ。

今ははやての代わりに、部隊長としての責務を果たす事。それこそが自分に与えられた仕事なのだと。グリフィスはそう思い、少し鈍り出していた指の動きを戻す。それにオットーが気付いたのか、小さく笑みを浮かべた。

「こちらは終わりましたよ、ロウラン部隊長」

「……オットー、その呼び方は止めてくれないか？　でも、今はそれぐらいの責任感を感じた方がいいかな」

オットーの軽い冗談にグリフィスは苦笑混じりにそう応じる。はやての代わりだけではなく、一日だけでも自分なりの部隊運営をしてみようか。そんな風にさえ思い、グリフィスはそう告げたのだ。

しかし、そんな彼の反応にクアットロが楽しそうに振り向いた。その顔にはからかいの色が強く浮かんでいる。それを見てグリフィスは少しだけ嫌な予感がしていた。

「あら？　じゃ、どう呼んで欲しいのかしらぁ？」

「いや、別に呼び方は普通に……」

「部隊長補佐って言い難いし、長いもんなぁ。あ、なら司令代行ってどうかな？」

「何か余計偉くなった感じだよ、それ」

「あ！　ならさ、ニセ部隊長とかは？」

ある意味予想通りのクアットロの疑問にグリフィスが答えるものの、それを遮るようにアルトが言った内容にルキノが苦笑。そこへ

アギトが軽くふざけたように挙げた呼び名に二人が苦笑した。
それを聞いてクアットロが視線で意見を問えば、グリフィスは困ったように首を横に振る。オットーはそんなやり取りを笑みを浮かべながら聞き、さり気無くグリフィスのやりかけの仕事へ手を出し始めるのだった……

「これで……どうだ？」

「……あ～、駄目です。これじゃ対消滅は出来ないですよ。弱体化が精々です」

共にモニターを見つめるジェイルとシャーリィ。二人が先程から試しているのは、ＡＭＦＣだ。何とか理論は完成させ、シュミレーションを繰り返しているのだが、思うような効果が出せないのだ。原因はＡＭＦのみに効果を出させるための調整の難しさだ。
強ければＡＭＦと同じく他の魔法も無力化してしまうし、弱ければ効果がない。故に先程から微調整を繰り返し、何度と無く挑戦しているのだが、それが中々上手くいかない。

「しかし、やっと一定の効果を出せるレベルにはなったね」

「そうですね。これで二歩ぐらい前進でしょうか？」

「う～ん……まだ実装レベルではないし、調整は難航しそうだから……一歩だよ」

「ジェイルさん厳しいですね。でも、大きな一歩ですよ」

ジェイルの辛口感想にシャーリィは小さく笑みを浮かべるが、それでも進んだ事を喜んでそう笑顔で告げた。それにジェイルも頷き、視線をモニターへ戻す。

邪眼が自分の開発した物をいつまで使うかは分からない。だが、必ずそれを上回るようにしてみせる。少なくても、邪眼の一方的な展開にはさせないと。そのためにジェイルはＡＭＦＣだけではなく、ブランク体の再現を目指したバトルジャケットに、龍騎のためのベントカード作成を同時進行で進めていたのだ。

（バトルジャケットは私が実験してもいいんだが、生憎運動は苦手だし……誰かうってつけの人物はいないかね？）

総重量などを思い出し、ジェイルはとてもではないが自分には無理だと思った。実はバトルジャケット自体の製作は完了している。後はそれを着て実験するだけなのだが、生憎とそれを任せる事の出来る相手が六課にはいなかった。

前線メンバーは訓練で疲れているし、ヴァルキリーズも同様。ライダー達はそれぞれが忙しく働いているし、かと言って他の課員達を頼れる程の信頼関係がジェイルにはまだない。よって、バトルジャケットは未だ日の目を見る事なく、デバイスルームの片隅に眠っているのだ。

「でも、ライダーシステムを開発した人って凄いですよね。あれを独力でやったんですから」

「確かにね。でも、その使い道は間違っている。私が言えた義理ではないが、科学はみんなの笑顔のためにある物だよ」

ジェイルがそう真剣な表情で言うのを見て、シャーリィは声を失う。かつてその言葉と正反対の道を歩いていたジェイル。それが心

からそう言った事に驚いただけではない。その声に込められた気持ちに気付いたからだ。

それは、仮面ライダーに人殺しを強いた事への怒り。そして、更に真司へ望まぬ戦いを強いる事になったその物への激しい怒りだ。その静かな怒りを感じ取り、シャーリィは改めて真司のした事の大きさと、五代達の影響力を知った。

だが、それだけではない。そのジェイルの表情は実に漢らしかったのだ。いつものどこか飄々としたような雰囲気でもなければ、仕事中に見せる科学者としての顔でもない。一人の男がそこにはいた。

（ジェイルさんもやっぱり男の人なんだな。ううん、それだけじゃない。きっと、ジェイルさんも後悔してるんだ。自分がトイを作った事や……誰かの笑顔を壊す物しか作っていなかった頃の自分を）

ジェイルはシャーリィが何も言わなくなったのに気付き、ふと視線をそちらへ向けた。当然ながら二人は視線を合わせる。

「どうしたんだね、シャーリィ」

その瞬間、シャーリィが我に返る。そしてやや慌てたように手を振った。なんでもないと。それに若干の違和感を感じるジェイルだったが、まぁいいかと思ったのだろう。特に何も言わず視線をモニターへ戻した。

そして、再びＡＭＦＣの微調整を開始する。それを見つめ、シャーリィは気付かれないように息を吐く。そして、多少熱を持った自分の顔に手を当て、自分に問いかけるように小さく呟いた。

――どうしたんだろ？　まさか……私、ジェイルさんに惚れたとかないよね？

その問いかけを、シャーリィは自分の心の中で笑い飛ばす。そんな事はないと。ただ驚いただけなのだ。胸に当てた手が感じる鼓動が、やけに煩く鳴っているように感じるのもそのため。そう自分を納得させ、シャーリィもジェイルの補佐をすべく席に戻る。

ただ、その顔の熱はそこまで嫌じゃないとシャーリィは思うのだった……

訓練場でいつものように自主訓練を終えたトーレとセッテ。その足は揃って隊舎へと向かっているのだが、そこに普段ならいない存在がいた。

「で、例の施設は判明したのか？」

「ええ。もう行動まで把握済み。後は時間を待つだけよ」

ウーノはトーレの問いかけにそう答えた。今日はシャマルがいないため、普段備えている救護役をウーノが代わったのだ。そこには、もう彼女がやっていた仕事が落ち着いたのも関係している。

聖王のコピーを培養している施設の特定と監視。そして万が一のための備えなどをウーノはもう片付け、最近は専らレジアスとの連絡ばかりをしていた。どうもレジアスも怪人の脅威を目の当たりにし、手を打つ必要があると感じたらしく、ライダーへの秘密裏の協力さえ考えているのだから。

「ならば、残る問題は怪人達の能力ですね」

「それと、私とドゥーエが警戒しているのはスパイよ」

「……そうか。ライアーズ・マスクだな」

トーレの言葉にセッテが息を呑み、ウーノは苦々しい表情で頷いた。ドゥーエのコピーがいるのなら、そのＩＳを使わぬはずはない。誰に変装するかは分からないが、おそらく六課に近しい者達に化けるだろうとはウーノもドゥーエも考えている。

性質の悪い事にそれを見分ける方法は無いに等しいため、僅かな癖や些細な違和感を頼りにするしかない。そのため、ウーノはいざとなったら光太郎に頼ろうと考えていると告げた。

それに二人も納得。光太郎ならばその勘から本物と偽者の区別をしそうだと。それに流石のライアーズ・マスクも仮面ライダーへの変身までは不可能。ならば、ライダー達四人だけはいつでも頼る事が出来る。

そこまで考え、トーレもセッテも安堵した。正直に言えば、六課の誰かを疑うような事態にはなって欲しくない。もっと言えば、自分達の姉妹を疑う事にはさせたくないのだ。

「まぁ、心配はいらないわ。邪眼が誰に化けさせるかしらないけど、六課に潜入する事自体が命取りになるのだから」

「そうだな。南で駄目なら緑のクウガに頼もう」

「確かにそれも手ですね。きっとクウガならライアーズ・マスクであっても見破ってくれます」

「それに、五代さんがそういうやり方は許さないでしょうしね」

そのウーノの締め括りにトーレとセッテも頷くように笑う。人を

欺くような事を五代は決して許す事はないだろうと、そう心から思えたのだ。それが誰かを笑顔にするための事ならば見逃す事もあるだろうが、そうでないのなら絶対に見過ごす事はないだろうから。

そんな少し暗い話から始まった三人の会話も、五代の事を話し出したところから徐々に明るい内容に変わっていく。今は真司が食堂で頑張っているだろうとウーノが告げると、トーレとセッテが手伝う事を思い出し、対照的な表情を浮かべた。

セッテは久しぶりの家事手伝いに楽しみさえ感じているが、トーレは数える程しかない家事手伝いに不安しか感じていないからだ。それにウーノは小さく笑ってトーレへ告げた。

――花嫁修業とでも考えたら？

その言葉にトーレが顔を真っ赤にしながらも馬鹿な事を言うなと一蹴。それを聞いたセッテは、少し不思議そうに尋ねた。

――トーレ姉上はどこにも嫁がないつもりですか？

それにトーレは当然だと答えようとして、何故か躊躇う。そして、結局それが出来ず、捨て台詞のようにこう言うのが精一杯だった。

――答える必要はないっ！

そう告げるとトーレはやや早足で隊舎へと向かっていく。その背を見つめ、軽く首を傾げるセッテと小さく笑うウーノだった……

その頃、ゼスト隊の隊舎ではギンガが荷物を纏めていた。出向期

間の終了がきたためだ。あの違法施設の事件は適切に処理されたものの、ジェイル達の事は結局上層部へ報告する事は出来なかった。
　邪眼の存在を明かすのは、ゼスト達にもはばかられたのだ。信じるはずはないと思ったのもある。そして、同時に仮面ライダーの事も報告する事は躊躇われた。今は希望と絶望が混在する状況だ。それをもし何らかの形で世間が知れば、必ず希望よりも絶望へ目が向いてしまう。そう結論を出したゼスト達は、邪眼が動き出す前に一度ゼストが、個人的に繋がりのある陸の代表格であるレジアスと話し合う事になった。

　更にクイントはギンガと共に、夫のゲンヤと示し合わせていざという時に備える事を提案した。メガーヌは出来る限り陸だけでも横の連携を取れるようにと、関係各所への働きかけをする事に意欲を見せて、ここでも六課とは違う形で邪眼へ備え始めていたのだ。

「じゃ、母さん。またね」

「あの人によろしく。あ、その前にスバルによろしくね」

　そう、ギンガは今日は休暇扱い。なので、１０８へ戻る前に六課へ顔を出し、シャーリィとジェイルに頼んで簡単なデバイスチェックをしてもらうのと、スバルと久しぶりに食事をと考えていたのだ。

「真司君達へもね。ルーテシアと今度遊びに行くって伝えておいて」

「はい」

「八神三佐へは、有事の際、俺達だけでも協力すると伝言を頼む」

「分かりました」

二人の言葉に笑顔を返し、ギンガはゼスト達の前から立ち去った。
それを見送り、ゼスト達も業務に戻るのだった。

クラナガンの中心部から離れるように歩くギンガ。正直何か乗り物を使いたかったのだが、余計な出費を抑える事と体のために湾岸地区まで歩く事にしたのだ。

（スバルとティアナは頑張ってるかな？　フェイトさんや光太郎さんと話が出来るといいんだけど……）

嬉しさのあまり小さく笑みさえ浮かべ、ギンガはそう考えた。足取りも軽やかに、ギンガはクラナガンの街を歩く。やがてその周囲の風景が高層ビルから青空と海原だけになり、潮風が香るようになる。日も高くなり、昼近くなった頃、ギンガは六課隊舎近くに辿り着いていた。

視線の先に見える六課隊舎に、ギンガは逸る気持ちを抑える事なく走り出す。そして、丁度格納庫からノーヴェが出て来たのを見て大声を出した。

「ノーヴェ！！」

「え……？　……ギンガ？」

昼食を食べるため、ウェンディ達よりも先に行って場所を確保しようとしたノーヴェ。しかし、何故か外に出たらいないはずの相手がいて、こちらに大声で呼びかけてくる。そんな状況で、どうしてここにと言わんばかりの表情を見せるのは当然だ。

そんなノーヴェの顔が自分の愛しい妹と重なって見え、ギンガは笑顔を浮かべてこう告げた。

「遊びに来たよ！」

「……はぁ～？！」

予想だにしない答えに、ノーヴェは全力で疑問を浮かべた。そんなノーヴェへ、ギンガは走る勢いそのままに抱きついた。それを受け止めようとするも、やはり堪えきれずに倒れるノーヴェ。しかし、彼女がそのまま地面へぶつかる瞬間、それを支える者が現れた。

「っと、危ないよ二人共」

「ふぅ……助かったぜ、光兄」

光太郎の声に安堵の息を吐き、ノーヴェは体勢を立て直しながらそう返した。同じように体勢を立て直していたギンガだったが、その呼び方に軽い驚きを見せた。兄と呼んでいるのかと、そう思ったのだ。ギンガの疑問を察したのか、ノーヴェはやや戸惑いながらも仮面ライダーの話を聞かせた。

その間、光太郎は何も言わず黙ってギンガを見つめるのみ。そして簡単な仮面ライダーの話と光太郎の体の事を理解し、ギンガは少し考えていたようだったが、何かを結論付けたのか頷いて笑顔を向けた。

――確かに、親戚のお兄さんって感じです。私も光太郎兄さんって呼ぼうかな？

そんな明るいギンガの声に、光太郎は少し照れくさそうだが嬉し

そうに笑みを返した。だが同時にそれは勘弁して欲しいとも告げたのだが。そんなやり取りを聞いて、ノーヴェは笑みを見せてギンガへサムズアップ。ギンガは、それがスバルの癖となっている仕草と思い、やや不思議そうに感じながらもそれを返す。

　すると、そこへ仕事にけりをつけ、昼食を食べるために外で出て来たウェンディとディエチが現れる。そして、ギンガの姿に疑問を浮かべたので、先程と同じ答えをギンガがする事でその場は決着となった……

　賑やかな食堂。そこで忙しく働く戦乙女給仕隊。チンク、セイン、ドゥーエを中心とし、ディードにセッテとトーレを加えた六人だ。それぞれが龍騎マーク入りやクウガマーク入りといったエプロンを付け、動き回っている。

　真司は一人黙々と料理を作り続けていたのだが、それを見かねたウーノがリインのエプロンを借りて手伝いを買って出ていた。そんな、いつも以上に華やかな食堂の光景を見て、ヴァイスは苦笑。

　目に見えて男性課員達の反応が良いのだ。女性達は普段とあまり大差ないが、男性達の様子は明らかに違う。それぞれがノリの良いセインやドゥーエに声を掛けたり、懸命に働くチンクやディードへは進んで動く事でその負担を軽減させ、セッテやトーレには抱いていたイメージをやや覆されたのか、感心や意外そうな反応を見せていた。

（やれやれ……どいつもこいつも鼻の下伸ばしやがって）

　男ってのは、やはり皆同じようなものだなと内心で思いながら、ヴァイスは真司に向かって注文を告げた。

「おう、すまねぇが真司風ポレポレカレーを一つ頼むぜ」

「はい。盛りは普通でいいかしら？」

「あ、ああ……」

しかし答えたのはウーノ。エプロンを付け、普段とは違った家庭的な雰囲気を漂わせていた。その差にヴァイスは不覚にも少し視線を奪われた。これでは自分も周囲の事を言えないなと思いながら、ヴァイスは頬をかく。

そこへ光太郎達も姿を見せた。ギンガは初めて見る昼食時の六課食堂にやや驚きと楽しさを見せ、光太郎は忙しく働いている真司達に笑みを浮かべた。ノーヴェ達は姉や妹達の手伝いを簡単にしようと動き出す。

「チンク姉、アタシも手伝うよ」

「ノーヴェか。気持ちは嬉しいが、今はいい。そうだな……食事を終えたら、頼む」

ノーヴェの申し出に笑顔を返し、チンクはそう告げた。その言葉にノーヴェは頷きながらも、チンクの持っていた空のグラスなどを持って行ってしまう。それを少し苦笑しながらもチンクは嬉しそうな顔を見せた。

「じゃ、これは持ってくッス」

「ありがと、ウェンディ。助かるよ」

それとは違い、こちらは互いに笑みを向け合うセインとウェンディ。他者の気持ちを有難く受け取る性格がそこには如実に現れていた。

「……ホントにいいんだね？」

「ええ。久しぶりの家事ですし……」

「こうしているとあの頃を思い出せる。だから、手伝いは遠慮させて欲しい」

ディエチはディードとセッテの答えに何かを思ったのか、少し苦笑い。そして、了解と小さく告げて二人から離れていく。二人はオットーと共に真司から家事を教わり、よくしていた事を思い出したのだ。

だが、六課に来てからはそういう事をする事もなくなり、二人としては少し何かが溜っていたのかもしれない。そう考えたのだ。何せ、現に今の二人の表情は輝いているのだから。

そんな風に三人が動いている中、ギンガは光太郎に苦笑されていた。注文量がとても多かったからだ。一つは全てのメニューを注文したため。もう一つは、妹のスバルと同じくかなりの量を食べるためだ。

真司もウーノも、スバルやエリオの事を思い出したのか、やや呆れつつも料理に取り掛かる。その際、ウーノが何人かを呼び戻すのは当然。こうして、ホールにトーレ、セイン、セッテ。厨房にドゥーエ、チンク、ディードが常駐となる。ウーノは三人と入れ代わりにホールへと移動。

「……やっぱり姉妹だけあって食べる量も似てるね」

「そうなんですよ。おかげで食費が家計費を圧迫して、一時期大変だったんです」

そこから始まるギンガの笑えない話を聞いて、光太郎は呆気に取られた。ギンガが管理局入りを決意したのは、両親に影響されただけではなく、家計を助けたいとの思いもあったのだと。スバルは、空港火災に遭うまで管理局入りなど考えていなかったが、クウガやなのはとの出会いで純粋に局へ行く事を決めた。

そうギンガは言って、どこか楽しそうにこう締め括る。自分はどこか現実を見て、でもスバルは夢を見て局入りしたのだと。その分、スバルの方が自分よりも芯は強いはずだから。そう実に楽しそうに言い切ったのだ。

だがそれに光太郎は柔らかく反論した。例えそうだとしても、今もそれだけで局員をしている訳ではないだろうと。その言葉にギンガは若干驚きを見せたが、ゆっくりと頷いた。今の自分は、確かに明確な目標を持って局員として働いている。

あの空港火災での出来事。失われるはずだった自分の命。それを助けただけではなく、他の救助者も助け出していたＲＸ。そして、単身執務官でありながらも危険な場所まで救助活動をしていたフェイト。そんな二人の姿こそ、今のギンガが追いつこうとしている背中なのだ。

「……そうですね。今の私は明確な目標があります。仮面ライダーのように、失われる命や未来を守る人になる。それが私の目指す姿ですから」

「そうか。なら俺は、その目標にされた時のままで歩き続けるよ。一つでも多くの未来や命を守りながら」

光太郎の静かな決意。それを込めた言葉にギンガは嬉しく、そして憧れるような思いで頷いた。そこへノーヴェ達が戻ってきたので、全員で昼食を食べる事にし、五人はテーブルにつくのだった……

日も暮れ、夜勤シフトの者達が起き出した頃、光太郎は一人ヘリポートからクラナガンの街を眺めていた。先程聞いた話によれば、海鳴のロストロギアは無害に近い物らしく、今は広域魔法の結果待ちとなっているらしい。

光太郎はそれに安堵したが、同時にまだ何か嫌な予感が消えていない事に新たな不安を抱き、アルト達に伝言を頼んだのだ。それは、五代達が帰ってくるまでは寝ずに待っているという言葉。

そして、その後はこうして外を眺めていたのだ。何か起きるとすれば中ではなく外。当然そう考え、光太郎は見張りにも似た気持ちでここに佇んでいたのだから。

（何度でも甦る怪人、死者を喰らう古代の遺産、そして……強大な闇となった邪眼。決戦をする事になった時、必ず奴らは俺と五代さんを狙う。二つのキングストーンを、その手中にするために……）

それで創世王になる事が出来るとは光太郎自身は思っていないが、邪眼はそれを本気で信じているのだろうと考えてはいる。故に、最終決戦で注意するのはクウガと自分だとも思っている。

キングストーンもアマダムも奪われればそれぞれの命に関る。そのため、絶対に奪われていけないのだ。更に、光太郎が懸念するのは五代から聞いたクウガの最後の姿。究極の闇をもたらす姿の事だ。

それを聞いた時、光太郎は直感的に感じた事がある。それは、その姿こそが自分のかつての姿の原型ではないかと。聞けば、クウガと対になるような存在は、その体の色が白かったらしい。黒と白という対称的な存在。それは、ＢＬＡＣＫとその宿敵の名にも共通するものがあったのだ。

ブラックサンとシャドームーン。それは太陽の石と月の石という名のキングストーンを持つからこその名前。しかも、色合いは黒と銀。もしかしたら、月の石はゴルゴムの手を加えられたために、本来ならば変身後は白い色になるはずが変化してしまったのではないか。そんな風にさえ考えたのだ。

（凄まじき戦士はきっとＢＬＡＣＫの原型。だが、ゴルゴムはその安定性を増させるために、本来あった様々な能力を無くした。それがＲＸとなった時、覚醒と変化を起こした。アマダムは意志によって力を与える。悲しみや怒りの感情がキッカケで起きたロボライダーやバイオライダーへの変身は、まさにそれだ）

そう、ロボライダーは紫の特徴や緑の武器を継承し、バイオは青の姿と込められた意味を発展させたもの。そして、ＲＸへの変化は封じられていた凄まじき戦士への変身機能を太陽エネルギーが制御し、変化させたためではないか。

そんな推測を光太郎は立てていた。太陽は生命の源。故に、その輝きを強く浴びたため、その力を闇から光へ性質を変えたのではないのかと。

「何黄昏てるんすか」

「……ヴァイスさんか」

光太郎がそんな事を考えている所へ、軽い声が聞こえた。それに

光太郎は小さく笑みを浮かべて振り向いた。そこには、缶コーヒーを両手にしたヴァイスの姿があった。
ヴァイスはその片方を光太郎へ向かって投げた。それを光太郎が受け取ったのを見て、自分の分のプルタブを開ける。そして、そのまま光太郎の隣へと歩いてきて、軽く笑みを浮かべて尋ねた。

「自分が言った事で周囲に変な緊張を与えちまった。それを少し後悔してるって、そんなとこですかね？」

その言葉に光太郎は何も言わない。そうだろうとも思う。だが、そうでないとも思っている。故に答えるのが躊躇われたのだ。言えば、そこから話が変な方向になってしまうような気がして。
そんな光太郎の心境を察したのか、ヴァイスは少しバツが悪そうに頬を掻き、視線を光太郎が見つめていた方へ向けた。そして、噛み締めるように告げた。

「光太郎さんは、自分のした事を悔やむ時ってあるんすか？」

「……それがない人はいないと思うな」

光太郎の答えにヴァイスは違いないと苦笑。だが、その後すぐに真剣な表情になって言った。でも、心から悔やむような事はそうそうないと。それに光太郎は視線をヴァイスへ向けた。その横顔は遠くを見つめていた。

「俺はね、昔は武装隊ってとこにいたんす」

「……シグナムさんの後輩だったらしいね」

「聞いてたんすか。なら話は早い。俺はね、そこでそれなりには腕

に自信がある狙撃手だったんですよ」

そこからヴァイスは簡単に自分の過去を話しだす。何故自分が機動六課にいるのか。どうして武装隊を離れたのか。そのキッカケになったある事件を。それは、ある立てこもり事件。ヴァイスはそこで狙撃手として犯人を狙撃するように指示を受けた。

そして、狙撃場所へ移動し、そこからスコープで狙いを定めようとした時だった。犯人は人質を取っていて、そのための狙撃だったのだが、よりにもよってその相手が妹だったのだ。

それがヴァイスから集中力を奪った。外してしまったらどうするとの迷いや不安が、彼から冷静さを失わせたのだ。結果、魔力弾は何と妹の目を直撃。だが、それで動揺した犯人は武装隊員によって取り押さえられ、事件は解決した。

だが、ヴァイスはそれを最後に狙撃手を退いた。妹の目は非殺傷だったためにそこまで大きな悲劇にはならなかった。失明こそしたものの命に別状はなく、本人は気にしていなかったのだから。しかし、もうヴァイスにデバイスを持つ気はなかった。

「……要するに俺は弱かったんす。妹が捕まっていたのなら、余計自分で助けてやろうって思わないといけないんですがね……」

「いや、そんな事はないよ。どれだけ固い決意を抱いていても、親しい人間を使われる事で鈍る事はある。迷ってはいけないと思っても、非情になりきれないなんてざらです」

その光太郎の答えに、ヴァイスは視線を彼へ動かした。その言葉に実感が込められていただけではない。光太郎の苦い気持ちがそこから感じ取れたからだ。視線の先で光太郎は何かを思い出し、きつく唇を噛み締めていた。

光太郎は思い出していたのだ。かつてのシャドームーンとの戦いで、創世王が取った手段を。劣勢になったシャドームーンを助けるため、創生王は一度だけその姿を信彦へと戻したのだ。彼の自分を呼ぶ声に、ＢＬＡＣＫは戦いを放棄して傍へ駆け寄った。

（分かっていたはずだった。もう信彦ではないなんて事は。でもあの時、俺は信彦の姿と声にそれを忘れた。仮面ライダーＢＬＡＣＫではなく、南光太郎として動いてしまった。それが、一時的とはいえゴルゴムに日本を明け渡す事になってしまった……）

そう、その直後信彦はシャドームーンへと戻り、油断し切っていたＢＬＡＣＫをサタンサーベルで襲い、その命を結果的に絶った。だが、光太郎は知らない。シャドームーンも一時的に姿が戻った自分を見て、キングストーンを奪わずに撤退した事を。

その後、彼はクジラ怪人の助けを受けて復活。その時の迷いを振り切り、シャドームーンへトドメを刺し、見事創世王を打ち倒して、日本を、世界を守りぬいたのだ。

「……妹さんは、ヴァイスさんを恨んでいるんですか？」

「……そうだったら、幾分楽だったかもしれない」

「そんな事は言っちゃ駄目だ。ちゃんと向き合って、先に進めるのならそうした方がいい。会う事さえ出来なくなる前に」

「光太郎さん……あんたやっぱり……」

「……俺もね、妹みたいな子がいたんです。でも、俺はその子から大切な人を奪ってしまったんだ。恨んでるとか恨んでないじゃない。俺自身がその子に合わせる顔がない。それに、今その子がどこにい

るのかも俺は知らないんだ。でも、ヴァイスさんは違う。許してもらえるのなら、会って話す事が出来るのならそうするべきだ。したくても出来ない人だっているんだから」

光太郎がそう言うと、ヴァイスは少し迷っているような表情を見せる。そんな時だ。光太郎に嫌な感覚が走る。それは、あの発電所の戦いで感じた感覚。故に光太郎はすぐに視線を隊舎周辺に巡らせた。

すると、隊舎の方へ向かってくるトイの集団とヴァルキリーズに似た者達を見つけた。その顔を見て、光太郎はヴァイスへ告げた。

「ヴァイスさん、怪人の襲撃だ！　俺は先に迎撃するから、他のみんなに連絡を！」

「っ？！　りょ、了解っす！」

その返事を聞きながら、光太郎はヘリポートから飛び降りた。その最中、力ある言葉を叫ぶ。

「変身っ！」

ＲＸへと変わり、大地へと着地する。即座に視線を前に向け、その視覚を駆使し、見えていない場所に他の怪人が潜んでいないかを探るＲＸ。そんな彼にトイ達が襲い掛かる。その攻撃を掻い潜るように走り、ＲＸはその内の一体へ拳を繰り出す。

そして即座に跳び上がり、空中にいた二体へ両足を叩き込む。そのトイを足場に更に空高く舞い上がるＲＸ。そして、直後起きる爆発のためか、その姿を見失う地上のトイへ、その落下の勢いを乗せたまま、ＲＸは手刀を放つ。

「ＲＸ！　チョップっ！」

その攻撃に耐え切れるはずもなく、トイがまた一体散る。ＲＸはその残骸へ一度だけ視線をやり、距離を取った。すると、先程までＲＸがいた位置に糸のようなものが降り注ぐ。それはすぐに爆発を起こし、消える。

「……やはりそう簡単にはいかんか」

「当たり前でしょ。私を一度倒した相手なんだから」

「無駄話はそこまでにしろ。どうやら他のライダー共はいないようだな。なら、ここで貴様のデータを取らせてもらうぞ、ＲＸ！」

フュンフの言葉に馬鹿にするように答えるフィーア。そんな二人のやり取りへ吐き捨てるようにドライは告げ、視線をＲＸへ向けてそう言い放った。

「来るならこい！　俺は逃げも隠れもしないっ！」

威風堂々宣言するＲＸ。その迫力に三人も若干怯むが、その姿を本来のものへ変えた。蟷螂、カメレオン、蜘蛛といった姿を見て、ＲＸは構えた。かつてのゴルゴム怪人に近い雰囲気を感じ取ったのだ。

そこへ遅れて真司達が姿を見せた。そして、三体の姿を見て臨戦態勢を取るヴァルキリーズ。真司はウーノが出現させたモニターに映る自分の姿を使い変身する。

「変身っ！」

真司の体を覆うように出現する龍騎のシルエット。それが体に重なり、真司は龍騎へと変わる。

「っしゃあ！」

気合十分とばかりに構える龍騎。こうしてＲＸと龍騎の初共闘が実現した。ウーノは司令塔として後方に控え、直衛をドゥーエとオットーが引き受け、ディエチはその傍で支援砲撃をする。残りはウーノの指示により、ＲＸと龍騎へ分散するように援護へ入る。

「いい？　決して無理はしないで。私達はそれぞれの全力を出す事が出来ればいいの。後はＲＸと龍騎を信じましょう！」

「「「「「「「「「「「「了解（ッス）っ！」」」」」」」」」」」」」

ウーノの言葉に姉妹達が頷くように声を返し、動き出す。ＲＸはカメレオンと蜘蛛へ、龍騎は蟷螂へと向かっていく。それを受け、ＲＸの方へはクアットロ、チンク、セイン、ノーヴェが援護に向かう。そして、トーレ、セッテ、ウェンディ、ディードが龍騎の援護となった。

それを見守りながらもウーノは戦術を組み立て始める。オットーとディエチはＩＳを使い、的確な支援を可能とするべく、まずはトイを迎撃。ドゥーエはロングアーチへ怪人達のデータを取るように頼みつつ、周囲へ警戒を怠らない。

そこへ遅れるようにアギトが姿を見せた。龍騎の奥の手となったユニゾン。そのため、アギトは本来出番がない。だが、居ても立ってもいられなくなり、何か手伝える事はないかとここへやってきたのだ。

「アタシも！　アタシにも何か手伝わせてくれよ！」

「アギト……気持ちは嬉しいけど……」

そう答え、ドゥーエは視線で前方を示す。そこではそれぞれが怪人と激しい戦いを繰り広げている。そこにアギトが入れる余地はない。それを理解し、アギトはやや悔しそうな表情を見せるものの、何かに気付いたように顔を上げてドゥーエへ告げた。

「な、もう翔一達に連絡した？」

「したと思うけど？　ね、ロングアーチ」

『今やってるんだけど、次元世界との通信が妨害されてるみたいで……駄目だ！　繋がらない！』

アルトの声にアギトがやはりと言った表情で頷く。そして、疑問を浮かべるドゥーエにこう告げた。

「何かさ、身体がビリビリする気がするんだ。きっと、電波か何かで連絡出来なくしてる奴がいるんじゃないか」

「……そうか。どこかでデータ収集してる奴がいるって事ね」

アギトの指摘にドゥーエは納得した。いくらデータ収集すると言っても、戦いながらでは色々と見落としや正確なものは取れない可能性がある。故に、どこかでこの様子を見つめている怪人がいるのでは。

そう考えたドゥーエだったが、悔しそうに爪を噛んだ。それを見つけ出すための人手が足りないのだ。自分達の誰かを動かすにして

も、一人二人では怪人相手は辛い。だからと言ってここで複数を動かすのは不味い。

（相手に気付かれたら意味がないわ。どうにかして気付かれないように……そうだ！）

「ロングアーチ、ギンガは今どうしてる？」

『彼女なら、デバイスチェックが終わったから、そっちに行こうとしてるよ』

そんなドゥーエの問いかけに答えたのは新たに出現したモニターのジェイル。そのモニターには、リボルバーナックルを装着するギンガの姿があった。それを見てドゥーエは頷いて告げた。

「ギンガ、貴女に頼みたい事があるの」

その内容を聞き、ギンガは真剣な表情で頷いて走り出す。そして、ジェイルはそれを見送り、ドゥーエへこう伝えた。既に万が一に備えてゼスト達にも連絡がいっている。それに、ギンガには自分が新しい力を渡したからと。それにアギトもドゥーエも笑みを浮かべて頷いた。

戦力としてはこれで何とかなる。怪人がもう一体増えても何とか許容範囲だと。そして、ドゥーエとアギトは視線をウーノへ向けた。ウーノも話を聞いていたのか、その視線だけで何を二人が言いたいのかを理解し、力強く頷いた。

「三体はこちらで完全に引き受けましょう。その監視役はギンガとゼスト隊にお願いするわ」

「いざとなったら、アタシがそっちへ援護に行くよ」

「そうがいいかもしれません。あまり融合係数は高くないですが、ゼスト部隊長はユニソン出来ましたから」

アギトの提案の意味に気付き、オットーがそう告げると二人も納得し頷いた。そして、再び彼女達は目の前の戦闘に意識を集中する。自分達のすべき事を果たすために……

その頃、六課隊舎から離れたとある場所では、アインスが自身のISと特殊能力を併用して、データ収集と遠距離通信の妨害を行なっていた。全ての通信を妨害しなかったのは、それをするとデータ収集にも支障が出るため。あまりにも強力なため、邪眼のいるラボへのデータ送信さえも邪魔してしまうのだ。

だから、おそらく地球へ行ったであろう別働隊との連絡を妨害するしか出来なかったのだ。しかし、アインスは現状を観察して満足そうに笑みを浮かべていた。

「クウガとアギトがいつまで経っても出てこない。おそらく海鳴へ向かったのね」

今、海鳴にはアハトが完成したばかりのマリアージュを引きつれ、襲撃を行なっているはずなのだ。

「本当なら人形共も怪人にしたかったのだけれど……」

マリアージュが怪人に出来ない理由。それは、その体が起こす爆発だ。その厄介さが怪人にするための改造手術の妨害となったのだ。

何せ、全身を拘束した状態にしただけで自爆し、改造施設を破壊したのだから。

故に邪眼はマリアージュの怪人化を諦め、そのままの捨て駒として使う事にした。自爆兵器としても活用する事を考え始めていて、その手段を現在アハトが考案中だ。

そこまで考え、アインスはふと何かが接近する反応を察知した。そして、それは凄まじい速度でアインスの傍へと立ちはだかった。

「……タイプゼロ・ファーストですって？　どうしてここに……」

「違う！　私は、陸士隊１０８所属！　陸戦魔導師、ギンガ・ナカジマっ！」

アインスの呟きに、ギンガはそう返した。その宣言は、どこかＲＸを思わせるような雰囲気がある。そして、その足に装着されているのはマッハキャリバーの同型機でもある”ブリッツキャリバー”だ。ジェイルが与えた力とは、これの事。

スバルと戦い方が似ているギンガのために、彼はシャーリィからマッハキャリバーのデータを見せてもらい、独自に改良を加えたのだ。ギンガはそれをジェイルから渡された時、こう言われた。

――これをみんなの笑顔のために使って欲しい。

それがジェイルなりの贖罪の気持ちから出た言葉だとギンガは理解し、笑みと共に頷いて受け取ったのだ。その手にあるリボルバーナックル。それはかつては母であるクイントが使っていた物だ。だが、ギンガが局員になったのを祝うため、クイントがその片方を渡してくれた。

そして、スバルもまた同様に。その込められた思いは、常に自分

の思いは傍にいるとのもの。現在クイントは新しいリボルバーナックルをつけているが、その型は敢えて古い物と同じにしている。

「貴女が邪眼の手先ね。通信妨害とデータ収集、すぐに止めてもらうわ！」

「出来るかしら……戦闘機人でしかない貴女に」

その言葉と共にアインスの姿が変わる。それはフクロウ。森の賢者と呼ばれる鳥だが、怪人の素材となった時点でその面影はない。ギンガはかつて見た怪人の姿を思い出し、やはり邪悪さは同じだと改めて痛感。

その怯える気持ちを奮い立たせ、身構える。自分には、母とジェイルの思いを託されたデバイスがある。ならば、怖くはないと。そう思い、ギンガは小さく告げる。

「行くわよ、リボルバーナックル、ブリッツキャリバー」

”了解です”

ギンガはその返答に微かに笑みを浮かべると、意を決してアインスへと立ち向かった。自分のすべき事は怪人の妨害。ドゥーエから頼まれたのは、その一点のみ。故にギンガは無理をするつもりはなかった。

自分の出来る範囲で相手を牽制し、時間を稼ぐ。いつか来るライダーを、ヴァルキリーズを信じて。その思いでギンガはウイングロードを展開し、駆け抜ける。

「はあぁぁぁぁっ！」

（みんな、待ってるから！　それまで絶対にこいつは逃がさないっ！）

一方、ＲＸ達は一度戦った相手とはいえ、苦戦を強いられていた。原因はフィーアのＩＳによる他二体への支援。幻影を創り出して龍騎達を惑わすのだ。従来の仮面ライダーと違い、龍騎には視覚に特殊な能力はない。そのため、本物の見極めが出来ないのだ。

そして、それはヴァルキリーズにも同じ事が言える。確かに龍騎と違いセンサー機能は搭載されている。だが、それを以ってしても怪人となったフィーアのＩＳは見破れなかった。

ＲＸが以前と同じようにキングストーンフラッシュを使う事も考えたのだが、あの時と違い、周囲への事を考えると迂闊にそれが出来なかった。そう、念話の出来ないＲＸでは声に出さずに他の者達へ注意を促す事が出来ない。

故に、怪人達へ知られず、しかもこちらに影響を出さずにする事は不可能だった。更に、自分はフィーアとフュンフを相手にしている。クアットロ達の援護があるが、やはり決め手に欠けるのは否めない。

（何か、何か考えるんだ！　どうすればこの現状を打破出来る……？）

その時、ＲＸの視界に格納庫が入った。それを見て、ＲＸはある事を思いつく。そして、それを実行に移すために視線をクアットロに向けて告げた。

「クアットロ、俺の幻影を出すのと同時に、一度だけ俺の姿を隠し

てくれ」

「分かったわ」

「チンク達は、すまないがそのまま少しだけ足止めを頼む」

「「「了解！」」」

その声を合図にＲＸの幻影が出現し、ＲＸの姿がクアットロのＩＳにより消える。そして、そのままＲＸは格納庫へ向かって走り出す。ＲＸが戦闘から撤退したため、チンク達が若干押され始める。しかし、それでも彼女達は決して弱音は吐かない。

そこへウーノからクアットロへある作戦が提案された。それに頷き、クアットロは即座に念話でセインへ、口頭でチンクへ指示を出す。

「チンクちゃん！　煙幕っ！」

「了解だっ！　ＩＳ、ランブルデトネイター！」

クアットロの指示にチンクが応じ、手から放たれたスティンガーと呼ばれるナイフが次々と爆発を起こす。その煙にフィーアとフュンフが視界を塞がれ、僅かだが動きが鈍る。それを見てクアットロがセインへ視線をやり、頷いた。それに応じるようにセインはノーヴェへ声を掛ける。共に動くために。

「ノーヴェ！　掴まって！」

「おう！」

二人はそのままセインのＩＳで地面へと沈んでいく。そして、煙が晴れた時には二体の前からセインとノーヴェは消えていた。ただし、それは本物の話。クアットロは二人の幻影をそこに出現させたのだから。

「何がしたかったのだ？」

「ホントねぇ。ただの目眩ましかしら？」

しかし、それを聞いてクアットロとチンクは笑みを浮かべた。その反応から二体が揃って疑問を感じて、その意味に気付く。だが、それはもう遅かったのだ。二体の後方から跳び上がるように出現するノーヴェ。

それに二体の意識が向いた時、待っていたとばかりに二筋の閃光がその身体を直撃した。それは、オットーとディエチがクアットロとウーノの立てた戦術に応えた攻撃。横薙ぎに発射された射撃で本物を特定させる事が目的だったのだ。

それに体勢を崩す二体。それを待っていたかのように、そこをノーヴェの一撃が襲う。

「一撃！　粉砕っ！」

ジェットエッジがフィーアを、着地して放つガンナックルがフューンフを捉え、その身体を再度揺らす。そして、そのままノーヴェをセインが再びＩＳで回収し、撤退させる。その見事な連携にクアットロとチンクにも笑みが浮かぶ。

だが二体がそこから立ち直ると、その笑みも消える。中途半端に怒らせてしまったと感じたからだ。しかし、それでも自分達が相手から一本取った事には変わり無い。そう思い、先程とは違う不敵な笑みが二人に浮かぶ。

「チンクちゃん見た？　さっきのあいつらの無様さ」

「ああ。滑稽だったな」

「貴様らぁぁぁぁ！」

「調子に乗らないで！」

二人の嘲笑うような言葉に、二体は揃って怒りを見せる。それに内心冷や汗を掻きながらも、二人は笑みを深めて告げた。

「「弱い犬程よく吠えるな（わねぇ）」」

その直後、赤い風が怒りに燃える二体の前を横切った。それに吹き飛ばされるように地面を転がる二体。それはライドロンだった。そして、そこの運転席が解放され、そこからＲＸが降り立つ。だが、当然ながらその姿は誰にも見えない。

そのため、クアットロはＲＸの姿を見えるようにした。それを受け、ＲＸは周囲へ告げた。

「クアットロ達は、俺の後ろへ！　ライドロン、さっき言ったように動いてくれ！」

その声に応えるようにライドロンは龍騎達の方へ向かう。そして、それを見届けてＲＸは立ち上がる二体の方を向いて、叫んだ。

「キングストーンフラッシュ！」

あの時と同じ光がＲＸの前方を包む。消し払われる幻影。視覚を

封じられ、動けなくなる分身達。そして、同じように視覚を封じられた二体。それを見つめ、ＲＸは跳び上がった。それと同じくして地面からセインとノーヴェが姿を見せた。
　今までセインの指に仕込まれたヘリスコープ・アイで様子を窺っていたのだ。そんな時、ＲＸが告げた内容に嫌な予感を感じ取り、セインはそれを引っ込め、上に上がってきたのだった。

「セインちゃん、遅いわよ」

「ゴメン。何か嫌な予感がしてさ」

「話は後だ。一体はＲＸが倒してくれる。残りは私達でやるぞ！」

「チンク姉、アタシに考えがある。手を貸して！」

　ノーヴェが告げた言葉にチンクは頷き返し、その手にしたスティンガーをフュンフへ投げつけた。それが見事にフュンフの身体に突き刺さったのを見てノーヴェはエアライナーで走り出す。
　丁度ＲＸがその拳をフィーアへ叩き込んだのを見ながら、ノーヴェは勢い良く跳び上がった。同時にＲＸも再度空に舞う。そして、二人はその落下速度を加えたまま怪人へ蹴りを放つ。

「ＲＸっ！　キックっ！！」

「吹っ飛べぇぇぇぇっ！！」

　ＲＸの蹴りがフィーアを蹴り飛ばし、ノーヴェの蹴りがチンクのスティンガーをフュンフの体内へと入り込ませた。そして、二人は反動を利用し着地。その直後チンクがスティンガーを爆発させる。

「これで終わりだ！」

そう、自分の蹴りだけでは威力が足りないと考えたノーヴェは、チンクのＩＳを使い、体内から怪人を破壊する事を考えた。そのために自分の蹴りを使い、スティンガーを怪人の体内へと送り込ませた。どんな強い怪人でも身体の中までは鍛えられないと思ったのだ。

チンクの声をキッカケにフュンフは爆発。フィーアもそれを追うように散った。それを見届け、ＲＸ達は視線を龍騎達の方へ向ける事無く走り出す。目指すはギンガが戦っている場所。一刻も早く行かなくてはと、そう考えて。

（待っててくれギンガちゃん。油断するなよ、龍騎！）

「どうした！　アギトの方がまだ手強かったぞ！」

ドライの高速機動。それに龍騎は完全に翻弄されていた。改造人間であるＲＸや、超変身出来るクウガやアギトと違い、龍騎には感覚を鋭くする力はない。そして、それに対抗するような武器も無かった。トーレやセッテ、ディードが懸命にその動きを捉えようとしているが、幻影も多く、本物を見極める事さえ難しかったのだ。

ウェンディは射撃を使い幻影を消しているのだが、その度に幻影が再度出現し、いたちごっこの様相を呈していた。結果、龍騎達は完全にドライ一人に封じ込められていた。

「くそっ！　このままじゃ……って、うわっ！」

体勢を立て直し、アドベントを使おうとする龍騎。しかし、そこへドライの鋭い鎌が振り下ろされる。何とか回避するものの、僅か

に胸を掠り、火花が散る。それでも龍騎は怯む事無くその手に一枚のカードを手にした。

それはサバイブ。そう、もう自分はアギトとのユニゾン以外はデータを粗方取られている。故に、龍騎は迷わない。今は接近戦に適した状態よりも射撃戦に適応する方がいいと思ったのだ。

「これで！」

周囲を覆うように出現する炎。それに僅かだがドライが怯む。それを見逃さずトーレとディードが動いた。

「ＩＳ、ライドインパルス！」

「ＩＳ、ツインブレイズ！」

高速移動と瞬間加速。それを駆使し、二人はドライへダメージを与える事に成功する。しかし、その狙いは僅かに外した。二人が狙ったのはドライの羽。高速機動の要であるそれを切り落とせば、この戦いを有利に出来るはずだったのだ。

だが、ドライとてそれを熟知している。前回のようにはいかないとばかりにその腕で二人の攻撃を受けたのだから。そして、そんなドライの行動に悔しさを覗かせながらも、二人はその場から離脱した。

”サバイブ”

「俺はウェンディと射撃で援護する！　トーレ達はそのまま接近戦を続けてくれ！」

「「「「了解（ッス）！」」」」

龍騎の声に四人は気合を入れ直すように答え、ドライへと攻撃を再開する。龍騎はドラグバイザーツバイで射撃を行い、幻影を消す作業を始めた。二人の攻撃に幻影の数が少しずつだが減っていく。

しかし、ある一定まで減らすとまとめて数が戻った。それに舌打ちするウェンディと驚く龍騎。だが、それでも諦めずに龍騎は射撃を続けた。それにウェンディも感化されるように射撃を再開。

一方、トーレ達はドライの攻撃に防戦一方になりつつあった。やはり一番速度が速いトーレを凌ぐドライに、トーレだけではなくセッテやディードも自分の身を守るだけで精一杯になっていたのだ。

それでも、三人は諦める事無く立ち向かい続けた。一つは意地。そしてもう一つは、自分達を惑わす幻影を消し続ける存在がいるから。

（真司は我々を信じている……）

（兄上の期待に応えるためにも……）

（ここは退けない……）

追い詰められていく中でも、三人の目には静かな炎が燃えている。どんな些細な事でも見逃さず、好機に変えてみせるとばかりに。そんな中、龍騎達の側面を塞ぐようにライドロンが現れた。それに視線を向けた龍騎達だったが、その瞬間、ライドロンが自分を盾にするように車体を傾け、龍騎達の視界を塞いだ。

それに疑問を感じる龍騎達だったが、直後起きた閃光にドライが苦しんだのを見て、その訳を理解した。きっと、ＲＸが自分達の目を守るためにライドロンを遣わしてくれたのだと。

「幻影が消えたぞ！」

「今が好機です！」

トーレの声にディードが頷くように応じ、セッテは即座にブーメランブレードを投げ放つ。それが眩しさに苦しむドライの羽を綺麗に斬り落とす。

「兄上、ここはお任せを！」

「ウェンディ、トドメを託す！　行くぞ、ディードっ！」

「はいっ！」

セッテの声にトーレが即座に声を出し、動く。そして呼応するようにディードがそれに続く。ウェンディは言われた意味を正しく理解し、ランディングボードにエネルギーを集束させていく。

それを龍騎を黙って見つめる。信じる事にしたのだ。任せてくれと言われた事を。それでもいざという時のために、その手には一枚のカードが握られていたが。

トーレの攻撃が羽を失い苦しむドライの鎌を綺麗に切り落とし、更にディードがツインブレイズでその腹部を斬る。それが小さくはない傷を付け、更にそこへもう一度ブーメランブレードが襲い掛かった。それが完全にドライへの大きな傷を作る事となる。

痛みに叫び声を上げるドライ。それを聞きながらも、ウェンディは集束したエネルギーをそこへ放つべく、狙いを定める。そして、それが定まった瞬間、トドメを告げるように叫ぶ。

「エリアルキャノン、発射ッスっ！！」

なのはの砲撃を彷彿とさせる閃光がドライの傷を直撃。そこから閃光はドライの内部を破壊し、その身体を崩壊へと誘う。それが爆発を起こすまでを見届け、龍騎達もギンガのいる場所へ動き出そうとした時、ウーノの切羽詰った声が響く。

「トーレ！　そこから離れて！」

「なっ！？」

トーレを襲ったのは砲撃だった。それをＩＳを使い際どく回避するトーレ。

「今の……まさか……」

「あたしのＩＳ、だね。きっと、まだいるんだ」

その攻撃を見たオットーがやや警戒するように呟くと、ディエチが苦い顔をして答えた。それを聞き、トーレが舌打ちする。

「ちっ、ディエチのコピーを使った怪人か。遠距離からの精密砲撃とはやってくれる」

「どうしましょうか。下手には動けません」

「かと言ってここで留まればまた攻撃される。困ったわね」

ディードの言葉を受け、ドゥーエがそう告げると、ウーノが視線を砲撃があった方へ向けた。そして、何かを調べ頷く。

「相手の位置が分かったわ。ギンガが戦っている辺りよ」

「じゃ、下手したらギンガ達も危ないッス！」

「兄上、行ってください。六課は私達が守ります」

「姉様達は戦闘で疲れているでしょうから、僕が一緒に行きます」

オットーの言葉に龍騎は頷き、走り出す。それを追うようにオットーが動こうとしたのを見て、ディエチがそれを引き止めた。

「待って。あたしも行く」

「なら、アタシはギンガ達にこの事教えてくる！」

ディエチの申し出が自身のコピーと戦うためだと理解したオットーは、頷いてディエチを抱えるように飛んだ。アギトはそれに続くようにギンガがいる場所へ向かって行った。それを見送って、ウーノはトーレ達へ視線を送る。そこには苦笑が混ざっていた。その意味を問い質そうとしたトーレ達だったが、すぐにその意味に気付いた。

海上から飛行型のトイが集団で向かって来ているのを見たからだ。怪人との戦いを終えた直後だが、相手がトイならばまだ平気だ。そう思い、トーレ達は力強く笑みを見せた。

唯一ドゥーエだけは出番がないのを不満に思ったのか、不貞腐れるように視線を前に向けて呟いた。

――――私、いる意味あるのかしら？

「くっ！」

「どうしたの？　私のオリジナルが戦闘用じゃなかったからって油断したのかしら？」

アインスの言葉にギンガはそんな事はないと返そうとするが、そんな事をしても意味はないと思い、黙ってその飛んでくる羽をかわす。アインスはその翼の羽を飛ばし、攻撃に転用してくるのだ。既にギンガの身体のあちこちにはその羽がいくつか刺さっている。

厄介なのは、その羽が抜けない事と、そこから血が流れ出る事だ。おかげで時間をかければかける程、ギンガは意識が薄れていくのを感じている。そこから、相手は自分を殺す事ではなく捕まえる事を狙っているとギンガは悟っていた。

何故ならば、攻撃は先程から羽ばかりで、直接攻撃は数える程しかないのだ。意識を失い、倒れるのを待つ。そんな事を思わせる相手に、ギンガは戸惑いを感じながらも、その目的をこう推測していた。

（きっと私を怪人にして、光太郎さん達を苦しめるつもりなんだ。絶対、そんな事はさせない！）

消えかける意識を奮い立たせ、ギンガはウイングロードを走る。接近は危険だという事は最初の行動で知った。だが、ギンガには接近戦以外の戦い方がない。魔法も遠距離で有効性が高いものがないため、ギンガは打つ手無しの状態だった。

出来る事といえば、今のようにウイングロードを使い距離を取り続けるだけ。しかし、アインスは飛行能力を有しているため、それ

もあまり大きな効果を見せてはいない。

「さ、これでお終いよ！」

「そんなっ！？」

アインスの宣言と同時に放たれる羽。その数は、今までの比ではない。ギンガの視界全てを覆うようなそれを見て、彼女は今までのアインスの狙いを理解した。いつでも今のような攻撃は出来た。だが、敢えてギンガが弱るまでそれを温存し、どうあっても絶望するしかないタイミングを待っていたのだと。

だが、ギンガはそれでも諦めなかった。全てを防ぐ事が出来ないなら、せめて一矢報いようと。その左腕のリボルバーナックルがカートリッジを排出する。そして、その後回転を始めるリボルバーナックルを掲げ、ギンガは敢えて羽の中へ突入した。

それにアインスも予想していなかったのか、少し驚きを見せる。そして、全身に羽を突き刺しながらも、ギンガはその拳をアインスへ突き出した。

「一撃！　必勝っ！」

己のありったけを込めて、ギンガは叫ぶ。自分にはスバルのような憧れから生み出した魔法はない。だからこそ、自分がここで放つのは元からリボルバーナックルに備わっていた魔法。しかし、想いだけはそれに匹敵するだけの強さを込めて。

「リボルバァァァシュートッ！！」

ギンガの拳がアインスの翼を捉えた瞬間、それを打ち抜くように

魔力が解放された。そして、その威力が翼に穴を開ける。その痛みにアインスの痛みに喘ぐ声が響く。それを聞きながら、ギンガは嬉しそうに微笑み、そのままウイングロードから落ちていく。

（やったわ、これで少しはやり返す事が出来た。時間稼ぎ、出来たかな……）

もう身体が動かない。出血が多すぎたのか、それとも全身の羽が原因かは分からない。だが、もうギンガにそこから助かるだけの力は無かった。不思議と恐怖はない。ただ、与えられた事を最後までやり遂げる事が出来なかった事だけが悔しかった。

そんなギンガの視界に、ふと自分に似た姿が見えた。最後に幻覚でも見てるのかと思い、ギンガは小さく笑った。だが、するとその相手は一層速度を上げてギンガへ近付いた。

「親を置いて先に逝くなんて、させないわよ！」

クイントはギンガの身体を抱きとめるようにし、ウイングロードの上を駆け抜ける。その際、一瞬だけ苦しむアインスの姿を見て、ギンガが相手に何かをしてダメージを与えた事を理解して小さく笑みを見せるが、すぐに厳しい表情でギンガへ告げる。

「無茶は大目に見れても、無理は許さないって教えたでしょ！」

「……母さん」

クイントの表情から自分がかなりの心配をさせたと実感し、ギンガは小さく項垂れた。だが、そんなギンガへクイントは先程までの表情を一変させ、微笑んでみせた。

「分かってくれればいいの。それと、よくやったわギンガ。後は母さんに……ううん」

「どこを見ている！」

自分から完全に視線を逸らし、ギンガと話すクイントへアインスは怒り心頭といった雰囲気で襲い掛かる。だが、その攻撃を受け止める者がいた。

「ゼスト隊に任せておけ」

クイントの言葉を受け継ぐように、ゼストがデバイスでアインスの攻撃を受け止めながらそう言い切った。そして、その隣へメガーヌが転送魔法で現れ、ギンガの身体に簡単な治療魔法をかける。

「……これで大丈夫のはず。でも、油断は出来ないわ」

「ありがとうメガーヌ。なら、このままギンガを任せていい？」

「ええ。六課へ搬送したら、すぐに戻ってくるわ。隊長、いいですか？」

「構わん。急げっ！」

メガーヌの問いかけに答えつつ、ゼストはアインスを睨みつける。クイントはゼストを援護するべく動き出し、メガーヌはギンガを抱え、転送魔法でその場から離脱する。

それを見てアインスの表情が歪んだのを見て、ゼストはアインスがギンガを狙っていたと考え、その目的も先程のギンガと同様の結論を出した。そして、ゼストは静かに怒りを燃やし、手にした槍状

のデバイスを握り締める。

「部下の愛する娘を化物にさせる訳にはいかん……なっ！」

「なっ！？」

ゼストの全力で自分が少し押された事に軽く驚きを見せるアインス。そこへクイントが両手のリボルバーナックルを唸らせ襲いかかる。

「はぁ！」

それをかわし、一度距離を取るアインス。クイントはゼストの隣で止まり、視線をアインスへ向け続ける。その目には、確かな怒りが浮かんでいる。ギンガを殺しかけた相手。出来る事なら何も考えずにがむしゃらに戦いたい。だが、長年局員として生きてきた身体が、思考がそれを許さない。

それに、怒りに我を忘れてはいけないとクイントは思っている。何故なら、いついかなる時でも、優先するべきは相手を倒す事ではないからだ。そう、それはただ一つ。

（守るために戦う。決して勝つためじゃない。私達は、守るために戦うんだ）

そう思い、クイントは拳を握る。そして、視線をアインスの翼へ向けた。ギンガが開けただろう穴。それがゆっくりと塞がっているのだ。それが完治すればアインスは今以上の空戦能力を発揮してしまうだろう。

ならば、もう一度同じようなダメージを与えるだけだ。そう思い、クイントはゼストへ念話を使う。自分が相手の気を惹き付けるので、

ギンガが与えた傷を大きくして欲しいと。それにゼストが頷いたのを見て、クイントは走り出す。

アインスの羽に気をつけながら、その距離を詰める。ゼストはそれとは違う方向からアインスへ接近するべく動いている。

「ギンガの分、きっちりお返しさせてもらうんだから！」

「やれるものならやってみなさい！」

こうして、ゼスト隊と怪人の初戦闘が始まった。一方、その頃ＲＸ達はというと……

「くっ！　何て正確な射撃なんだ！」

「これはきっとディエチちゃんのＩＳよ」

「これじゃ……わっ！　ギンガの所に行けないよ！」

「セイン姉だけでも、ＩＳを使って先行すればいいんじゃ！」

そんなノーヴェの提案にチンクが苦い顔をした。

「いや、それは不味い。ちっ！　……奴は我々の生命反応を追って攻撃している。ＩＳといえどそれを消す事は出来ん」

「ならどうするってのさ！」

セインの声と共に再び砲撃が放たれる。それを何とかかわし、全員が視線を砲撃の来る方向へ向けた。しかし、何故か次の砲撃がこない。それにヴァルキリーズが警戒する中、ＲＸだけはその視覚を最大限に使い、射手のいる場所を見つめていた。

そして、そこで展開されている光景を見て、ＲＸは一人頷いた。それにクアットロ達は少し疑問を感じるが、すぐに何かを思い出したのか笑みを浮かべた。

「「「「龍騎ね（か）」」」」

「ああ。今オットーにディエチと三人で戦闘を開始した。しかし、龍騎が紅い鎧になっていたんだが」

「サバイブだ。そうか、龍騎は能力をほとんど邪眼に知られているのを逆手に取ったか」

ＲＸの告げた内容に、チンクはそう返した。それからＲＸは、サバイブというのが龍騎の超変身だろうと察しをつけ、頷いた。そして、ＲＸ達は走り出す。目指すはギンガがいる場所。そこで孤軍奮闘しているだろうギンガを助けるために。

その頃、アギトはやっとギンガのいた場所へ辿り着いていた。砲撃に苦しむＲＸ達を横目にし、申し訳なく思いながらも彼女は狙われない事を利用し、こうして先に目的の場所へ来れたのだが。

「ギンガ？　……じゃない！　ゼスト隊だ！」

視線の先で怪人相手に戦うのは、以前世話になったゼストとクイントだった。ギンガとメガーヌが見えない事から、アギトはきっとギンガが何らかの理由で戦場を離れたのだと理解した。きっとその付き添いでメガーヌがいないのだろうとも。

メガーヌは召喚魔導師。腕の良い召喚魔導師は、転送魔法のエキスパートでもあるのだ。だから、その撤退をメガーヌが受け持ったのだろうと思い、アギトは納得してゼストへ念話でここの近くにもう一体怪人がいる事と、そちらへ龍騎達が向かった事を伝えた。

【それと、アタシも協力するよ。ゼスト部隊長、ユニゾンして一気に攻めよう！】

【いいのか？　いや、分かった。協力感謝するぞ、アギト】

一瞬、アギトの矜持を考えて迷ったゼストだったが、アギト自身がそれを意識していない事に気付き、そう返した。その言葉にアギトは頷いて、ゼストの傍へと向かった。

そして、ゼストはアギトとユニゾンしてアインスへと立ち向かう。その外見が変化した事にアインスは僅かに疑問を感じたようだったが、大した問題ではないと判断したのか、特に何か言う事は無かった。

そこへギンガを搬送し終えたメガーヌが現れた。そして、ゼストの変化を見てアギトの協力を悟り、小さく笑みを浮かべると自身も手を貸すべく召喚を行なった。

「頼むわ、ガリュー！」

ガリューと呼ばれた人型昆虫のような存在は、メガーヌの声に頷きを返すとゼストの援護をするべくアインスへと向かって行く。それを見て、クイントも負けじと動き出し、アインスは四対一の状況に追い込まれた。

それでも羽を使い三人を怯ませようとしたのだが、アギトの魔法がそれを焼き払う事が出来たために、自身の最大の武器を封じられ

る形となった。それでもゼスト達は油断する事無くアインスと戦った。

羽を迎撃するのをゼストとアギトが引き受け、アインスへの攻撃をクイントが、その援護をガリューとメガーヌが受け持つ事で着実にアインスを追い詰めていく。

「こ、こんな……こんなはずは……」

自分が追い詰められている事に、アインスは信じられないと言わんばかりの声を出した。それを聞き、ゼストがはっきりと告げた。

――お前達の弱点はただ一つ。他者を見下す事だ。

その言葉にアギトは同意を示すように、ゼストのデバイスへ炎を纏わせた。クイントとメガーヌはそれを見て援護するべく動いた。ガリューもそれに続く。炎の槍を構え、ゼストはフルドライブと呼ばれるものを使うべく、準備を始める。

それは凄まじい加速と力を与える機能。しかし、その反動も凄まじいまさに諸刃の剣なのだ。故に外す事は許されない。一撃必殺が信条の攻撃なのだから。

「メガーヌ！」

「クイント！」

アインスの両側から二人はバインドを仕掛ける。それをアインスはかわそうとするが、その身体をガリューが取り押さえた。

「くっ！　おのれ！」

身体を拘束されるアインス。それを何とか破ろうとするが、それよりも早く……

「「隊長っ！」」

「フルドライブ！」

”行っけぇぇぇ！！”

身動き出来ないアインスを炎の槍が貫いた。そして、そこにトドメを刺すべくアギトが魔法を使う。それは、ユニゾンした相手と共に魔力を使う事で発動する強力なもの。その名は、轟炎。

ゼストとアギトの二人分の魔力を使い生まれた炎。それが槍を通してアインスを内側から焼き尽くす。それを見守り、ゼスト達は何も言わない。最後まで気を抜く訳にはいかないとの思いがそこからは見て取れる。

やがてアインスは焼き尽くされ、そこには灰だけが残った。それに安堵の息を吐くクイントとメガーヌ。ゼストはアギトとユニゾンを解除すると、やや疲れたような声で周囲に告げた。

「まだ終わってはいない。念のため、俺達もライダーと合流するぞ」

それにクイント達も頷いて動き出す。するとそこへＲＸ達が現れた。初めて見る本物の仮面ライダーの姿に興奮するクイント。それを少し呆れつつも諌めるメガーヌ。ゼストはＲＸから大体の状況を聞き、頷いていた。

アギトは怪人と戦った事をクアットロ達へ話し、無事で良かったと言われ、嬉しく思って笑みを返す。そして、それから数分後ＲＸ

が怪人を撃破する龍騎を確認。こうしてゼスト隊の怪人戦は終わりを告げるのだった……

クラナガンの街と湾岸地区の境目。その一角にあるちょっとした丘。そこでツェーンは砲撃を続けていた。最初は油断している龍騎達を狙った。だが、どうも距離があったせいで勘付かれて失敗した。そのため、今度はアインスの所へ向かおうとしていたRX達を狙ったのだ。

距離も近くなったので遠距離狙撃ではなく、中距離狙撃に切り替える事が出来たおかげもあり、連射速度が上げる事が出来たのも良かったのだろう。本当ならば、彼女はアインスなど援護したくないのだが、邪眼のためと思う事でそれを実行していた。

「……中々当たらないな。やっぱり多少狙いをつける方がいいかも」

そんな事を楽しそうに呟きながら、ツェーンは再度砲撃を放とうとして出来なかった。その視界に真紅の騎士と二人の少女が見えたからだ。

「……龍騎。それに出来損ないが二人、か」

「……ホントにディエチそっくりだ」

「兄様、騙されないでください」

「そうだよ。こいつは外見だけを真似した怪人なんだから」

初めて見る怪人の通常体に小さく驚きを見せる龍騎。それにオッ

トーとディエチが現実を告げ、構えた。それに龍騎も頷いて構える。
それにツェーンは無表情で背中にある砲身を向けた。
それにディエチが持ってきたイノーメスカノンを構えて対抗するべくチャージを開始。だが、相手の方が早く砲撃を放った。それをオットーがＩＳを使って食い止めようとする。微かに、だが確実に押されていくレイストーム。

「くっ……ディエチ、まだ……？」

「ゴメン。もう少し待って……」

「なら俺も！」

苦しそうなオットーの声にディエチは申し訳なく思うも、首を横に振った。それを見て龍騎はシュートベントを使おうとするが、それをオットーが止めた。まだ見せた事のない力は出来る限り使わないように。そうオットーは言って小さく苦しみながらも笑みを浮かべた。
こんな事ぐらいで負けない。そう告げてオットーは龍騎に笑みを見せた。それに龍騎が何も言えず戸惑う中、ディエチのチャージが完了した。

「お待たせ。あたしの全力、加減無く行くよ。ＩＳ、ヘビィバレル」

解き放たれるディエチの全力砲撃。それがレイストームと合わさり、ツェーンの砲撃を飲み込んだ。そしてそのままツェーンへ押し寄せる。眩い閃光が爆発を起こす。しかし、まだ誰も油断はしない。
ディエチは砲身の冷却時間を考え、少し距離を取り、オットーは周辺一帯をプリズナーボクスという結界で覆う。それは怪人を万が一にも周囲へ逃がさないためと、自分達の戦いを見られないように

するためだ。

やがて立ち上った煙が晴れると、そこには亀の姿をした怪人がいた。もし、その姿を一号や二号、もしくはＶ３が見ればある怪人を思い出しただろう。その外見は、それだけその怪人の姿に酷似していたのだ。

だが、その凶悪さと禍々しさは段違い。背にした巨大な砲身。吊り上がった目と鋭く尖った牙。それは、まさに名付けるのならカメバズーカ変異体とでも呼べるような姿だった。

「さっきのは中々良かったよ。でも、あれじゃあたしは殺せない」

「ディエチ、砲身が冷却出来るまでは僕の傍に。兄様は前線をお願いします！」

「しゃあ！」

返事と共に龍騎は手にしたソードベントを読み込ませ、ツェーンへ斬りかかった。だが、邪眼さえ怯ませたその一撃がツェーンには通用しなかった。刃は少しもその身体を傷付ける事無く、それを当然のようにツェーンは見つめていた。

戸惑う龍騎へツェーンは呆れたように告げた。自分の強度は邪眼を超えるのだと。大体硬そうなのは見た目からでも分かるだろうに。そんな事を言った後、ツェーンはドラグバイザーツバイを掴んで龍騎を殴り飛ばす。

それで龍騎はドラグバイザーツバイを放してしまった。そのまま地面を転がる龍騎。そこへ追撃をかけようとするツェーンだったが、その行動を止めるように幾多もの光線がその身体を襲う。

だが、それを察知したツェーンは背中をそちらへ向けて攻撃を無

力化した。それにオットーとディエチが驚きを見せるが、それでもオットーは攻撃を止めなかった。見えたのだ。龍騎がドラグバイザーツバイを取り戻そうと起き上がったのを。

「背中を向けたままでいいのですか？　こっちの行動が見えないでしょうに」

「関係ないよ。お前達が何をしようとあたしの甲羅は砕けない」

勝ち誇るようなツェーンの声に、オットーはいつかの邪眼を思い出しほくそ笑む。何故なら、そんな風に自信満々に言っていた邪眼は龍騎に負けたのだから。それに、今は自分達も力を貸せる。なら、負けるのは自分達ではなく相手の方だ。そう思ったが故の笑み。

「……チャージ完了。いつでもいけるよ、オットー」

そこへ聞こえるディエチの準備完了の言葉。それにオットーは静かに頷き、視線をツェーンから龍騎へ移す。龍騎はツェーンの視界から逃げるようにしながら、その距離を詰めていた。その狙いを理解しているオットーとディエチはそれを支援するべく、ある行動に出た。

龍騎が丁度ツェーンの真後ろに近付いたのを見て、オットーはレイストームによる攻撃を中断した。それにツェーンが気付いて振り向く。すると、その視界に真っ先に龍騎の姿が入る。それにツェーンが何か反応を見せる暇も与えず、ディエチが砲撃を放つ。

「喰らえっ！」

「何度やっても……」

無駄だと、そうツェーンが言おうとした時だった。背中を向けようとしたツェーンを、龍騎が後ろへ回り込んで抑えたのだ。そして、その腹部に砲撃が当たるようにした。きっと腹部は背中よりも柔らかいはず。そう考えた龍騎と、きっと龍騎ならそう考えくれると信じて動いたオットーとディエチ。

「くっ……放せ！」

「行けっ！」

龍騎の声と同時にディエチの全力の砲撃がツェーンの腹部に炸裂した。その衝撃が完全に殺せず、ツェーンから苦痛に呻く声が漏れる。そして龍騎は素早くドラグバイザーツバイを取り返すと、一枚のカードを取り出し、それへ読み込ませた。

”ストレンジベント”

その声と共にドラグランザーが出現し、龍騎のドラグバイザーツバイが示す場所へ火球を放つ。そう、変化したのはシュートベント。龍騎は邪眼がストレンジベントの効果を正しく理解していないと踏んで、使用したのだ。きっと、シュートベントに変化してくれると予想して。

狙いは当たり、龍騎が示したツェーンの腹部へドラグランザーはメテオバレットを吐き付ける。その威力にツェーンが堪らず後ろに退いたのを見て、オットーが叫んだ。

「兄様！　トドメをっ！」

ツェーンの身体を封じ込めるようにレイストームを使い、オットーは龍騎へトドメを託す。ディエチも同じような期待の眼差しを向

け、それに龍騎は頷いてファイナルベントを取り出した。

「行くぞ、怪人！」

”ファイナルベント”

バイクに変わったドラグランザーに乗り、龍騎はツェーンへ向かっていく。何とか背中を向けたツェーンだったが、そこへドラグランザーが火球を連発していく。更にそこへディエチの砲撃が加えられる。それは、冷却弾。

「真司兄さん、お願い！」

狙いは急激な温度差を利用した構造崩壊。全てはオットーの戦術だ。そして、そのまま龍騎は突撃を敢行し……

「打ち砕けっ！！」

「そんなぁぁぁ！？」

さしものツェーンの甲羅も温度差による構造崩壊には耐え切れるはずもなく、その強度を落としていた。そこへ加速をつけたドラグランザーの突進を受けては、耐える事は出来なかった。爆発四散するツェーン。それに安堵の表情を見せあうオットーとディエチ。

龍騎も変身を解除し、ほっと一息。怪人が全部で五体にもなる攻勢。それはかなり厳しい戦いになったと感じたのだ。しかし、これが自信になったのも事実だった。そう、クウガやアギトだけでなく、なのは達がいなくても五体の怪人を相手に勝利出来た。それが持つ意味は大きい。

「……とりあえず戻ろうぜ。さすがに疲れたよ、俺」

「そうですね」

「お疲れ様、真司兄さん」

こうして、海鳴組の裏側で起きた六課襲撃は完全に幕を下ろしたのだった……

「で、どこでアリアさん達が出てくるんですか？」

これまでの話を簡単に聞いて、スバルは全員の気持ちを代表して告げた。それにロッテが苦笑して答える。

「実はね、この後戦いの後始末とか何やらで、みんな慌しくなったんだよ」

「私達はその途中の方で六課に来たの。勿論手伝いはしたけど、もう粗方終わってるてね」

アリアの言葉に光太郎が頷いた。ロングアーチは様々な雑務に追われ、ヴァルキリーズは初めての連戦に披露困憊。アギトはゼストとのユニゾンと魔法使用のためダウン。真司も頑張ってはいたのだが、サバイブの長時間使用と食堂の後片付けのために疲れ果てた。

ギンガは先述の戦いによるダメージから眠り続け、メガーヌはそんなギンガのために懸命に治療魔法を使い続けたので、疲れから眠った。クイントはギンガの看病と初めての怪人戦の精神的疲労が祟って同じく眠ったと言う訳だった。

「……それで光太郎さんとゼスト部隊長以外寝とったんか」

「そういう事。でも、相手の怪人の新しい情報も入ったし、こちらの収穫は大きい。相手も多少は情報を得ただろうけど、それを活かせるとは思えないから大丈夫さ」

はやての言葉に光太郎はそう答え、笑ってみせた。それに翔一が不思議そうに尋ねた。

「どうしてです？」

「簡単さ。奴らは、それを活かせないから怪人でしかないんだ」

その光太郎の答えに五代が分かったとばかりに笑顔を浮かべて告げた。

「つまり、他者を見下すと痛い目を見るって事ですね！」

「そう。これを無くす事が出来るのなら、怪人は怪人じゃなくなる。だから言ったのさ。活かせないだろうって」

その結論に全員が納得。そして、同時に思う。邪眼側が本格的にライダーのデータを集めにきていると。そして、そのために取る方法が凶悪になりつつあるとも。そう感じたからこそ、はやてがゼスト達へ視線を向けた。

今回六課が無事で済んだのはゼスト隊の三人の協力があればこそだったからだ。それにギンガの訪問もそれに含まれる。だからこそ、はやては一度椅子から立ち上がり四人へ頭を下げた。

「ゼスト部隊長、それにクイントさん、メガーヌさん、ギンガもほんまにありがとうございます」

「気にするな八神部隊長。俺達は同じ局員だ。なら、願いは同じはず。違うか？」

その言葉にはやては嬉しく思い、力強く頷いた。それを見つめ、全員に笑顔が浮かぶ。だが、フェイトがふと思った事を口に出した。

「でも、これで邪眼が未だに見せてない怪人は……」

「ドゥーエさんのコピー、セッテのコピーにオットーのコピー。それと……」

「ノーヴェのコピーとウェンディのコピーに……」

「それと、ディードさんのコピーです」

なのはの挙げていく名前にそれぞれが指折り数える。そして、それをティアナとキャロが締め括る。それを考え、一体どんな怪人なのだろうと誰もが思考を巡らせる。今回戦った新しい怪人は、共に特殊能力が厄介極まりない相手だった。

出血を促し続ける羽。邪眼さえ怯ませた龍騎の剣を無効化する強度の甲羅。それは、ライダーであっても苦戦する事を意味するのだ。ならば、なのは達が苦しめられるのは言うまでもない。

「しかし……まだ半数も残っているんだねぇ」

ジェイルの何とも言えない言葉に、誰もが頷いた。

「ギンガ、貴女だけでも六課に協力する事は出来ないかしら？」

「あ、それいいね。で、ヴァルキリーズにおいでよ」

ウーノの告げた言葉にセインがそう続けた。それを聞いて、フェイトとはやてがそれぞれに視線を合わせて頷いた。

「ギンガさえ良ければ、私達がナカジマ三佐に掛け合ってみるよ」

「本当ですか？」

「勿論や。怪人と初めて遭遇して、痛手を負わせたなんて大したもんやし」

「どうするの、ギン姉？」

スバルの問いかけにギンガが真剣な表情で頷いたのは言うまでもない。こうして、ギンガはゼスト隊への出向を終えた翌日には、六課への出向が決まった。表向きは、先日の隊舎襲撃事件の関係者として捜査に協力する事となって。

ギンガを加え、六課の戦力は強化された。だが、それでもまだ不安は尽きない。その後ウーノとドゥーエから語られた懸念。ライアーズ・マスクを使ったスパイ。それに全員が驚愕し、同時に納得したのだ。そして、ゼスト達はゼスト達でそれらしい事があれば連絡するとなり、三人は六課を去って行った。

邪眼の襲撃を退けた六課。

しかし、まだ相手には見せていない手札がある事を思い出し、改めて気持ちを引き締める。

そんな中、加わる新たな力。その名はギンガ・ナカジマ。

彼女を加え、六課はその力を着実に増していく。全ては、邪眼を倒すそのために……

──────────────────────────────

──────────────────────────────

────────────────────

サウンドステージ裏側でした。かなりの分量となり、分割も考えたのですが、このまま投稿する事にしました。

出来るだけ全員に見せ場をと考えたら、こんな長さになってしまった……

次回は少しでも凝縮出来るよう、反省します。

六課の休日　前編

「よし、今日はここまでにしよう」

「はい！」

訓練場から離れた場所にある海岸。そこでＲＸは周囲へ特訓の終了を告げた。それにアギトが応じ、龍騎が少し疲れたように座りながら、相方を務めていたクウガへ視線を向けた。

「やっぱクウガはいいよなぁ。棒切れだって武器に変えるんだからさ」

「でも、龍騎みたいに自分で武器を好きに出せる訳じゃないからね。どっちもどっちだよ」

「そうですね。俺達それぞれの長所を活かして、連携出来るようにしないと」

「基本格闘だけで戦える俺達と違い、龍騎は武器が必要な事が多い。だが、それはクウガやアギトも超変身後は同じ事が言える。なら、緊急時は互いの武器を貸し合ったりする事も必要だろう」

そんなＲＸの言葉にアギトと龍騎が頷く中、クウガだけが少し申し訳なさそうに告げる。自分は手を離した瞬間、元の物へ戻ってしまう。そのため、貸したりする事は出来ないだろうと。その答えに三人は少し苦笑。

別にそこまで気にする事はないと考えていたからだ。故に告げる。気にしなくていいと。逆にクウガは、それぞれの姿に対応する物さ

えあればいいのだからある意味では武器に困らないだろうと。それにクウガも成程と手を打った。

そんな風にライダー達が話す横では、なのは達隊長陣四人がスバル達を集めて今日の訓練結果を話していた。

「……で、実は今日の訓練が新しい段階へのテストも兼ねてたんだけど」

「結果は……合格だね」

なのはとフェイトの言葉に四人が嬉しそうに笑みを見せ合う。怪人との戦い。ライダーからの教え。隊長達の指導。そこに、四人それぞれの努力も合わさり、スバル達は既に一線で活躍出来るような能力を身につけていた。

それでも、なのは達が合格と認めたのは、ただその力が向上しただけではない。その心の強さをしっかりと見極めたからこそだ。そして、それに伴い四人のデバイスも次の段階への機能を解放する事となった。それにスバル達が表情を引き締めた。

彼らからすれば、強力な力を持つという事はとても責任を伴う事なのだ。ライダー達を見ていたからこそ、新しい力を託される事の重さを知っている四人。故に、その顔に浮かぶは喜びではなく責任感だ。

「まぁ、お前達に言うまでもねぇが、力の善悪は使う奴の心で決まる」

「それに第二段階の力は、各自によって様々だ。その扱いには十分注意しろ」

「「「「はいっ！」」」」

ヴィータとシグナムの言葉に、四人は真剣な眼差しと声で応えた。それになのは達は笑みを浮かべる。そして、こう告げた。六課発足から今まで休暇らしい休暇はなかったので、明日は四人を完全休養にすると。それに四人がそれぞれ嬉しそうな笑顔を見せるも、すぐにそれが曇る。

「……でも、いつ邪眼が動き出すか分からないのに」

「休んでなんかいられません」

スバルとティアナの言葉にエリオとキャロも頷いた。自分達の力は微々たる物でしかないかもしれないが、それでもライダーを助ける事が出来る。なら、有事に備えておくべきではないかと。そう四人は考えた。

そんな四人の思いになのは達も頼もしさと嬉しさを感じるも、だからこそ休んで欲しいと告げた。もしもの時は呼び出すし、余程がない限りライダーが四人揃っている時点で心配はいらないと。

「それにね、休むのもお仕事の内だよ？」

「そうだ。身体をしっかりと休めて英気を養うのも重要だ」

「それにな、お前らが先に休まないとあたしらが休みを取れねぇだろうが」

「ま、まぁ、ヴィータ副隊長の言い方はともかく……みんなが休まないと私達も休めないのは分かるでしょ？」

なのは達の言葉に納得し、四人は苦笑した。そして、最後になのはの告げた、休む時は思いっきり休んでおいての一言に、四人は元気良く返事を返すのだった。

その頃、ヴァルキリーズはと言えば訓練場にいた。そこで、はやて達も一緒になって訓練を行なっていたのだ。訓練場に爆音と大声が響く。

「ヴァルキリー10！　それと11！　ちゃんと相手の動きを見とるか？　狙いが外れかかっとるで！」

「すみません！」

「気をつけるッス！」

トイへ牽制するための射撃を行なうディエチとウェンディ。その狙いが少しずつ甘くなっている事に気付き、はやての檄が飛ぶ。それに二人が反省すると同時に声を返し、再び射撃へ意識を集中する。そんな二人にはやては頷いて、魔法による援護砲撃を再開する。

その少し前方では、シャマルがクアットロとオットーへ注意をしていた。

「ヴァルキリー4！　それにヴァルキリー8！　貴方達はヴァルキリーズの第二の司令塔よ。だから、前線へあまり不用意に近付いちゃ駄目！」

「あら、いつの間に。下がりまぁす」

「前線が少し後退したのか。了解です」

トイだけとはいえ、二人が相手するにはやや分が悪い数がいる。そのため、シャマルは警戒をするよう呼びかけたのだ。クアットロとオットーはＩＳによる支援のためにその場を動いていなかったのだが、前線が少し押されたために後退していた。

それを気付かずにいたため、両者はシャマルの言葉に現状を正しく理解して後退を始めた。その前線では、ノーヴェがザフィーラと共にトイを相手に奮戦していた。

「ヴァルキリー９！　まだＩＳや武装に頼り過ぎだ。純粋な格闘だけでも切り抜けられるようにしろ！」

「くそ、了解だっ！」

魔法を極力使わずに戦うザフィーラを見て、ノーヴェは自分の未熟さを感じると共に、それを指摘されるまで気付かなかった事に悔しさを見せながら答えた。一方、そんな二人とは違う場所では、トーレ達がリインと共に遊撃隊として動いていた。

「ヴァルキリー３、７、１２。お前達は速度にやや重きを置き過ぎだ。状況によっては敢えて遅くした方が対応し辛い事もある。緩急をつけてみてくれ」

「「「了解」」」

その速度を活かして、苦戦する場所や奇襲への対応をしながら動く三人。その速度へ変化をつけて相手を撹乱した方がいいとリインが告げる。それに三人は意識をしていなかったという風に感心し、頷いて返す。

このようにはやて達四人を助言役として、指摘や注意を受けたり、または直接指導をされていた。彼女達が相手をしているのは、仮想敵として出現しているトイの集団。それと……

「おっと！　……やっぱり速いね」

「気を抜くなセイン！　後ろだ！」

「私が行くわ！　はあぁぁぁぁ！」

チンクの声にセインが振り向く前に、ギンガがドライへ向かっていく。そう、彼女達が更に相手をしているのは怪人のデータを基に再現した物。だが、さすがに何体も出現させるのは容量的にも厳しいため、こうして一体出すのが限度なのだが。

ちなみにドライが選ばれたのは、一番データ蓄積が多いため。遭遇した二回共に隊舎前で、しかも特殊能力も高速機動以外特にないと判断された。そのため、再現度も高く経験を積むには最適なのだ。

「ヴァルキリー2、ヴァルキリー0の支援に！」

「了解よ！」

ウーノの指示にドゥーエは応じ、ピアッシングネイルを構えて走る。ギンガの攻撃をドライがかわし、その背後を突こうとしたのを見て、ドゥーエはこのままでは間に合わないと判断。なので……

「このっ！」

そのピアッシングネイルを伸ばす。それがドライの背中を突くものの、深手とはいかない。それでも、ドゥーエの狙い通りの場所へ

爪は刺さった。それは、羽の付け根。そう、それはドライの高速機動の要でもある場所への攻撃。

故にドライの動きは僅かにだが鈍り、意識がギンガから僅かに逸れる。その間にギンガは体勢を整え、その場を離脱。そしてチンクがＩＳを使ってそれを援護。すかさずセインがＩＳを使い、ドゥーエの真下で待機する。

ドゥーエが棒立ちになっているのを見て、ドライが襲い掛かるが、それにドゥーエは余裕の笑みを浮かべて手を振った。直後、その場からその姿が消え、ドライは困惑した。その隙を突くようにギンガとチンクが動く。

「ヴァルキリー５、コンビネーションバースト、行くわよ！」

「了解だ！　ランブルデトネイター！」

チンクの放ったスティンガーがドライの身体に突き刺さる。そして、その内一つが当たった瞬間爆発する。それによろめくドライ。ギンガはウイングロードを疾走しながら、リボルバーナックルを回転させる。

狙うは一点。相手の身体に刺さったスティンガーのみ。そこへ全力の拳を叩き込むのだ。それは、ノーヴェがフュンフへ行なった攻撃の再現。あれをヴァルキリーズでは一種の怪人撃破攻撃として、ノーヴェとギンガ限定で行なうチンクとの連携技としたのだ。

「はあぁぁぁぁ……はぁっ！！」

スティンガーを身体の内部へ押し込むように、ギンガがその拳を叩き込む。更にそこへ零距離のリボルバーシュートを放ち、それをより確実のものとするのがギンガ流。

その衝撃で軽くギンガとドライの距離が開く。それを見て、ウーノは頷いた。

「今よ！」

ウーノの声と共にチンクがスティンガーを爆発させる。これでドライは何とか倒した。だが、休む間も無く新たに出現したフュンフを片付けるべく、ギンガ達は走り出す。トーレ達の援護を加えてそれを撃破した所でヴァルキリーズも訓練を終える。

そして、はやての口からヴァルキリーズに翌日の一日自由行動を告げられ、十三人は揃ってどう過ごすかを話し出す。セインなどの行動派はクラナガンの街に出るべきと言えば、オットーなどの温和派は宿舎でノンビリするのも悪くないと答える。

結局、それぞれが好きに過ごす事になり、街に行く者、六課で過ごす者、そして自主訓練に励む者と分かれる事になったのだった……

「じゃ、スバル達も明日はお休みなんだ」

「そうだよ。私はギン姉とチンク、ノーヴェにウェンディの五人で遊ぶ事にしたんだ」

時間は夕刻。既に午後の訓練も終わり、スバルはセインと共に湯船で汗を流していた。話題はやはり翌日の休みについて。既に姉と出かける事にしていたスバルは、更に加わった三人に嬉しさを感じてご機嫌だった。

「あたしはさ、クア姉やディエチと一緒に映画見に行くんだ。初め

てだから今から楽しみだよ」

「映画かぁ。私達はゲームセンターとかかな？」

そんな風に話す二人の近くでは、ティアナがクアットロにウェンディを交えて戦術を話し合っていた。とはいえ、内容は怪人対策ではなくライダーへの支援方法だったが。

「幻術だと一種の撹乱にはなるけど、所詮そこまでなのよ。手助けとは言い難いわ」

「それは私のＩＳもよ。ま、それでも無いよりはマシでしょ」

「あのカメレオンみたいに、分身を出せればいいッスけどねぇ」

ウェンディがフィーアの特殊能力を思い出し、そう告げる。それにティアナとクアットロが頷こうとして、同時に何かに気付いてハッとなった。それは、幻術とＩＳを合わせて出来るかもしれない事を考えたのだ。

そして、相手の表情からそれを向こうも思いついたと察し、不敵な笑みを見せ合った。

「ね、クアットロ。何を考えたの？」

「きっと貴女と同じよ、ティアナ」

そう言って、二人は呼吸を合わせるように頷き合う。視線を合わせ、同時に口を開いた。

「「本人のように動く幻影」」

その言葉で互いに笑みを深め、聞いていたウェンディがやや不思議そうに首を傾げた。今でもそういう事が出来るのではないのかと思ったからだ。実際、クアットロのＩＳはそういう事を実現しているのだから。

そんな風にウェンディが考えていると、それに気付いたのだろうティアナが苦笑混じりに説明を始めた。確かにシルバーカーテンは幻影を動かす事が出来る。しかし、それはあくまで簡単な動きだけ。複雑な動きは出来ないのだ。

だが、それをティアナが幻術を使い簡単に動きを与える。そこにＩＳを重ね、厚みを与えて動きの幅を増やしてやるのだ。まだ発想でしかないが、やってみる価値はある。そうティアナが締め括ると、クアットロも同じように考えているのか力強く頷いた。

そんな風に幻惑コンビが新たな着想を得ている横で、キャロがディエチと後衛としての苦労を語り合っていた。フルバックのキャロと同じように、最後衛として支援砲撃がポジションのディエチ。故に、抱く不安と目指す理想は似ているのだ。

「怖いのは前線を抜けてくるような怪人だね」

「それと、背後を取りそうな相手ですね」

具体例として二人が思い浮かべるのは、ドライやフィーアだ。接近戦が不得意な二人にとって、距離を詰められる事は致命的だからだ。なので、そうなる前にどう対処すればいいか。もしくはどう逃げればいいのかを述べ合う。

そんな二人が目指したいのは、緑のクウガだ。鋭い感覚で相手の接近や奇襲を察知し、正確な射撃でそれを打ち抜く。キャロはフリ

ードがいるので少し違うが、でも憧れる戦い方ではあるのだ。

「どうやったら、あれだけの感覚を身につけられるかな？」

「私達の場合は、訓練あるのみです。せめて近づけるようにって」

「……キャロは頑張り屋さんだね」

「ディエチさんもだと思いますよ」

互いに笑みを見せ合いながら、二人はその後ほのぼのと翌日の事を話すのだった……

スバル達が大浴場で寛いでいる頃、休憩室には、珍しい組み合わせが実現していた。

「……そっか。じゃ、定期的に緑になってみた方がいい？」

五代の言葉にウーノとドゥーエは苦笑して首を横に振った。そこまでしなくてもいいのだ。ただ、光太郎や誰かが周囲の者に何か違和感を覚えるような事があった時だけ、緑の力で観察してくれればいいのだから。

そう二人は五代へ告げた。その目的は敵のスパイを見つけ出す事ではなく、内部の疑心暗鬼を防ぐため。故に、必要がない限りそんな事をしてくれなくていいのだと、二人は口を揃えて言った。

あの出張任務の翌日に話し合った事の一つであったスパイ対策。結局は光太郎の恐ろしい程の勘に頼る事になったが、それとは別に

ウーノ達は五代にこうして頼んでいたのだ。
理由は一つ。緑のクウガは、欠点があるためだ。それは一定時間過ぎると二時間変身出来なくなる事。それを邪眼に知られる訳にはいかない。スパイを見つけ出すにしても、そのためにクウガの情報を与えるつもりはない。そうウーノ達は考えているからこそ、頻繁にクウガの力を使う事は望んでいなかったのだから。

「……だから、変身はこちらか光太郎さんが必要としたらでいいわ」

「クウガの力を頼るのは、光太郎さんの勘でも分からなかった時。つまり、最後の手段にするつもりなのよ」

「……分かった。じゃ、光太郎さんやウーノさん達に希望されたら緑になればいいんだね？」

「ええ」

五代の言葉にウーノが頷き、その話はそこで終わった。話題が終わったため、ドゥーエが五代へ翌日の休みの事を話し出す。ティアナ達も休みになるから、きっと翔一とバイクで出かけるだろうと。
それに五代が笑みを浮かべて、もう夕食時に翔一と約束していたと告げる。それにウーノが行動が早いと苦笑し、ドゥーエは行動的だと笑う。ちなみに明日は、本当なら五代と光太郎は六課に残って仕事をし、翔一と真司は休日としての扱いになる。

だが、実際には翔一を除いた三人は、明日の予定を入れられている。はやて達三人と共に聖王教会へ行く。それを、今日の昼食時にはやてから五代達は告げられていたのだから。

ちなみに、今度なのは達が休みになった時は、自分と光太郎が休

み扱いになる予定なのだと、五代は告げた。それにウーノとドゥーエが疑問を浮かべた。どうしてその組み合わせなのだろうと思ったのだ。それに気付き、五代は説明した。どうも、それを決めたのははやてだが、提案者はフェイトなのだと。

五代がその話を昼食後に聞かされた時、そうなのはが付け加えたのだ。その時のなのはが小さく笑っていたので、五代はきっと何かあったのだろうと思ったのだが、詳しく聞く事はしなかった。

（あの時のなのはちゃん、どこか楽しそうな笑顔だったもんなぁ）

フェイトがその隊長陣とクウガとＲＸの休みを合わせようと言い出した時、はやては反論したかった。それでは自分が翔一と出かける事が出来ないと思ったからだ。しかし、それをフェイトも分かっていたのだろう。どこか躊躇うはやてにこう告げたのだ。

――はやてはお休みだから、翔一さんと二人でレストランアギトを切り盛りすればいいんだよ。

最後に、リインと真司はポレポレを任せればいいと付け加えるのも忘れずに。こうして乙女なはやては、翔一との二人での料理という久しぶりどころの騒ぎではない状況を想像し、表面上は仕方ないとばかりに頷いたのだ。

勿論、内心で楽しみにしている事などなのはやフェイトには分かっていたのだが。それを口に出す程、二人は空気を読めない者では無かった。

「それで、ウーノさんとドゥーエさんはどうするの？」

「私はしばらく例の施設を監視しないといけないの。今週辺りに動く予定だから」

「私はエリオとキャロの保護者役よ。いらないだろうって思うんだけど、フェイトが念のためめってね」

ドゥーエのやや呆れた声に五代とウーノが苦笑した。ドゥーエがエリオとキャロへよくちょっかいを出している事に、フェイトはたまに注意をしてくるのだ。それが、こういう時には頼る。それは、ドゥーエの事を信頼している証拠のようなものだからだ。

「トーレさんやセッテちゃんはまた訓練？」

「多分ね」

「オットーとディードは、朝はアイナさんの手伝いをして、後は読書して過ごすらしいわ」

「そっかぁ～。双子だけあって、行動も似てるよね。オットーちゃんとディードちゃん」

そんな風に三人はしばらく他愛もない話を交わし、スバル達が現れたのをキッカケに互いに風呂へと向かうのだった……

『バトルジャケットだと？』

「魔力を持たない者のためのバリアジャケットとでも言えばいいのかな。勿論それだけじゃなく、攻撃面でも並の魔導師や騎士を超えるだけの力はあるよ」

六課内のデバイスルーム。そこでジェイルはレジアスと話していた。本来ならば、この話は自分達の生活を守るための交渉にするべきものだったが、状況を鑑みたジェイルは、今は少しでも怪人に対抗出来る手段を構築すべきだと判断。

そのため、レジアスへバトルジャケットのテストを頼もうと思ったのだ。魔力を持たずに実力で地上の中将まで上り詰めたレジアスならば、テストをしてもらうのにうってつけと思ったのもある。

『……それならばあの化物共と戦えるのか？』

「まあね。でも、現状では勝つ事は難しい。まぁ、データが蓄積されれば改良出来る。それに、今でも時間稼ぎや上手くすれば撃退ぐらいは可能だ」

『そうか……いつ受け取りに行けばいい』

「いつでも。ただ、明日はやて君達は外出するらしい。だから会わずにすむのは明日ぐらいだよ」

ジェイルの言葉にレジアスは小さく笑うと、はっきりと告げた。自分ははやて達と会ったところで何も躊躇する事はない。そう力強く言って、レジアスはただと続けてこう言った。

はやて達と自分が互いへあまり良い感情を抱いていないのも事実。故に自分が協力している事は伏せておきたいと。自分はあくまでも六課ではなくライダーに協力しているのだから。そうレジアスは語った。

それにジェイルは内心で苦笑しながらも頷いた。そして、バトルジャケットは明日の昼前に、レジアス本人が査察を兼ねて取りに来る事で決着した。

「色々と忙しいのではないのかい？」

『海との話し合いはグレアムとオーリスで進めている。それに、今はこの街を化物から守るための事が最優先だ』

レジアスの言葉にジェイルは納得し、モニターを切った。そして、小さく呟く。

――――陸も海もない管理局、か。彼も変わったね……

あの報告を見たレジアスは、怪人の脅威を認識した。娘であるオーリスからの意見もそれに拍車をかけた。今は陸だ海だと言い合っている場合ではないかもしれないと。その意見にレジアスは反論しようとしたが、目の当たりにした怪人の凶悪さや恐ろしさは、確かにそう思わせるには十分だった。

そのために彼は、リーゼ姉妹やクロノなどを通じて邪眼の恐ろしさを知っていたグレアムと協力し、地上と本局の長きに渡る確執を取り除こうと動き出していた。

無論、反発もあった。それをレジアスはこう一喝したのだ。互いの主張を押し付け続ける事が、本当に自分達の理想への道か。今は少しでも陸の安全と、そこに住む人々の暮らしを安定させるべきではないのか。どちらが重要かの主張などは後でも出来る。必要なのは、今を救う事だと。

怪人との戦いによる被害。それはまだ大きく出てはいない。しかし、あのレリック輸送事件の際に出た被害は、トイの仕業と認知されていた。その際、六課が提出した報告書に記載された”トイの目的はレリック”との事実。それをレジアスは持ち出し、こう告げた

のだ。
犯罪者が密かにレリックをミッドへ持ち込んだ場合、どうなるのか。それを狙うトイの出現。そして、それによるレリックの暴走。それが重なれば、どれだけの被害が出るか分からないのだから。

そこにはジェイル経由で、レリックが暴走すると恐ろしい事になるとレジアスが聞いた事も関係していた。あの空港火災。その原因がジェイルへ送られるはずだったレリックと聞いて、レジアスは絶句したのだから。
故に、今は海への不満や怒りを飲み込み、現状を少しでも改善する。有り得るかもしれない危機。それを未然に防ぐ事こそ、自分達に与えられた仕事ではないのか。その言葉にレジアスの支持者達も反論する事なく、従ったのだ。それは、レジアスが海に屈したのでも、志を折った訳でもないと分かったから。

レジアスは純粋に地上の平和を願い、少しでも要求を通して人々の暮らしを守ろうと考えていると、彼らには伝わったのだ。そこまで考え、ジェイルはふと何かに気付いた。

「……彼も償おうとしているのか？　戦闘機人を望み、少なからず怪人誕生へ加担してしまった事を」

そんなジェイルの呟きは、誰に聞かれる事無く消えた……

夜更けの部隊長室。そこになのは達三人の姿があった。

「聖王教会かぁ。行った事ないけど、どんな所？」

「う～ん……まぁ、想像通り教会や。ちょう規模が大きいけどな」

「騎士カリムだったよね。話自体はシグナムやクロノから何度か聞いた事があるけど、真司さんにも会いたいなんて」

それぞれ手に飲み物を持ち、している話題は翌日の外出に関してだった。色々とあったが、現状の報告とライダー達の紹介を兼ねて、一度六課の後見人であるカリムへ会いに行く事になったのだ。

本当ならばライダーが誰も六課にいない状態は好ましくない。だが、つい二日前に行なったジェイル達が所持していた施設の調査。そこでの戦いで、フュンフを初めとする怪人三体とマリアージュを撃破した事もあり、なのは達はこう予想した。またしばらく邪眼達の動きはないだろうと。

これまでの戦闘の起きた周期を鑑みて、その予想はかなり高確率で当たると思われた。それもあって、ライダー四人の外出が可能となったのだ。

「真司さんはクロノ君の希望や。ほんまは翔にぃも連れて行きたいんやけど……」

「ティアナのため、だね。はやてちゃん、おっとなぁ」

翔一といつか一緒にツーリングをしたい。そんな約束を交わしていたティアナ。それを叶えさせてやるため、はやては敢えて翔一を連れて行く事を止めた。そこには、自分だったらそうして欲しいと考えたのが影響している。

それに、自分にはあの幼い頃の日々と思い出がある。ならば、少しぐらいティアナへ翔一との思い出を作らせてやっても構わない。そんな風に思い、はやては少しだけ大人の女になる事にしたのだ。

実際は、未練たらたらだったが。

「そや。わたしは大人になったんや」

「はやて、若干無理してるような気が……」

「フェイトちゃん、それは……」

「……そういえばグリフィス君が、わたしらがおらんとデスクワークが大変や言うとったな。フェイトちゃんは、残ってその手伝いでもしてもらおか。なのはちゃんと光太郎さん達だけ連れてこ」

「は、はやて！？」

フェイトの言葉にややムッとした表情になり、はやては両目を閉じてそう冷酷に告げた。それにフェイトが若干慌てる。すると、それを聞いてはやては片目を開けた。そして、視線をフェイトへ向け、尋ねた。

「何や？」

「……ごめんなさい。謝るから私も連れて行ってください」

その申し訳なさそうな声にはやては満足そうに頷いた。なのはもそんなはやてを見て苦笑い。実にはやてらしいと思ったのだ。フェイトの気持ちを知りながら、それを応援しているにも関らずこういう手段を取る事が。

フェイトははやてが許してくれた事に安堵の表情だが、なのはには分かる。そこには、光太郎と離れる事を回避出来た事への安堵もあると。最近光太郎がフェイトと距離を置くようになったと、なの

はもはやても気付いている。その原因が何かは明確には知らない。しかし、確実に光太郎が改造人間である事が関っているのは間違いないと、そう二人して判断していた。

フェイトも光太郎が距離を置くようになったのは感じ取っていたが、それをどうこう言う事は無かった。最初は自分が何かしたのだろうかと悩んでいたが、エリオが何かをフェイトへ告げた後は、違う事で悩むようになったのだから。

今、フェイトはどうすれば光太郎との距離を縮める事が出来るかを、真剣に考えている。なのはも何度か相談を受けたのだ。その度に、結論として出たのは想いを伝えるしかないというものだったが。

（でも、フェイトちゃんはまだそこまでの踏ん切りがつかないんだよね……こう考えると、ユーノ君って凄い勇気を出してくれたんだ）

自分へ想いを伝えてくれた相手を思い出し、なのはは少しだけ頬を赤めた。それだけ自分を愛し、その気持ちを伝えようと決意してくれたのだと、改めて感じたからだ。幸せ者だなと思いつつ、なのははいつものような雰囲気に戻って話すフェイトとはやてを見て、嬉しそうに笑みを浮かべるのだった……

「へぇ、昔はライダーキックって言ってたんですか」

「ああ。ＢＬＡＣＫだった頃はそうだね。ＲＸになった時、蹴り方も変えたから名前も変えたんだよ」

風呂に浸かりながら光太郎から昔の話を聞く真司。決め技や戦った怪人の事など、実に多岐に渡る話をしてもらっていたのだ。それ

は、彼が書いている管理世界の本とは別の物を書くための取材。仮面ライダーの事をある程度書き綴り、自分の世界へ戻った際の説明材料などにしようと考えたのだ。

そんな話を横で聞きながら、翔一とエリオは興味深そうに頷いていた。

「なら俺も今度から蹴る時はそう言います。五代さんも、そう叫んで蹴ったら、心なしか威力が上がった気がするって言ってましたし」

「じゃ、俺もライダーキックって言おうかな。それにその方がこう、俺もライダーだって気持ちを強く持てそうだし」

「いいんじゃないかな。怪人を倒したい、みんなを守りたいと思う気持ちがそこに込めてあれば」

光太郎がそう締め括ると、エリオが何かを呟いてから三人へこんな事を問いかけた。

「なら、変身ってどんな気持ちで言ってるんですか？」

その質問に三人は揃って呆気に取られ、それから思い思いに悩み出す。実を言えば、そこまで深い考えや気持ちはない。いや、決まった気持ちはと言うべきだろう。ある時は怪人への怒り。ある時は戦う決意。またある時は誰かを守るためや助けたいとの思いなのだから。

そして、その質問に対して真っ先に答えたのは真司。基本的にモンスターを倒すためにしか変身しない彼にとって、龍騎になる時の気持ちは決まっているからだ。もう誰も犠牲にさせない。そんな思いで変身していると、真司は告げた。

それに翔一も続く。自分も今は、誰も悲しまずに済むようにと思って変身していると。アギトの力は守る力。全ての人を守り、助けるためにある。そう思っているから。そう翔一は言い切った。

しかし、光太郎だけは答えが出てこなかった。それは、ある意味当然とも言える。彼は二人と違い、ある意味では同胞とも言える相手と戦ってきた。確かに怪人や怪魔界の者達は人の心を持たぬ存在だ。怪物という表現がぴったりくる相手だったが、それだからこそ思うのだ。彼らは、脳改造までされた自分の成れの果てではないかと。

（俺も下手をすればシャドームーンのようになっていた。秋月の小父さんが助けてくれなかったら、俺も……）

幸運が重なって仮面ライダーとなった光太郎。変身とは、二人とは違い別の姿になるのではなく、自分の本当の姿へ変わる事を意味する。故に、そこに込める気持ちは複雑だ。光太郎自身は、今の姿こそ自分の本当の姿と思っている。しかし、こうも思うのだ。本当の南光太郎は、あの十九歳の誕生日の夜に死んでしまったのだとも。

あの夜、自分は南光太郎ではなく仮面ライダーＢＬＡＣＫへ生まれ変わった。だから、変身とは光太郎にとって決意でも覚悟でもなく、ライダーとして戦うとの宣言。そう、あの日クモ怪人達を前に自分の意志で変身をした時から、彼は誓ったのだ。人知れず人のために戦う事を。見つけたのだ。それが、俺の青春だと。

「……俺は、意思表示だね。ライダーへ変わるための」

「そうなんですか」

エリオのどこか意外そうな声に光太郎は頷き、少しだけ懐かしむように笑みを浮かべた。エリオはその笑みに悲しみと決意を見た気がして、何も言えなくなった。しかし、光太郎の隣へ静かに近付き、こう小さく告げた。

――僕は、大きくなったら光太郎さんを追い駆けます。例えどこかにいなくなっても、絶対捜してみせます。今は見つめる事しか出来なくても、平和のために戦うのを、仮面ライダーだけに任せませんから。

その言葉に光太郎は何かを言おうとして、止めた。エリオの人生はエリオが決めるべきだと思っただけではない。嬉しかったのだ。辛く険しく苦い道。それを追い駆けようとしてくれるその気持ちが。

実際に歩んでくれずともいい。そう思ってくれただけでも、光太郎には何にも負けない励まし。一人じゃないと、あの日すずかに言われた言葉を思い出し、光太郎は思う。

――この世界は優しい場所だ。どこにも愛が溢れている……

心からそう思い、光太郎は優しい笑みを見せるのだった……

翌日の宿舎前は、いつもとは違う賑わいを見せていた。スバルとウェンディが楽しげに談笑する横で、ギンガとチンクがそれを見つめ微笑んでいる。今はノーヴェを待っているのだ。彼女は寝坊したため、現在急いで身支度を整えている。そこから少し離れた場所では、ビートチェイサーに乗って、今か今かと翔一を待つティアナの姿がある。

翔一が自分のバイクの点検をしてからと言い出し、現在格納庫で

点検中のためだ。ビートチェイサーは、前もってティアナ自身が昨日の内にヴァイスや光太郎に手伝ってもらいながら整備などを終えていた。

エリオとキャロは、ドゥーエから互いの手を繋いで歩くようにと厳命されていた。クラナガンの街は人が多い。そのため、はぐれないよう気をつけなさいと。ドゥーエは二人の後ろをついていくように歩くが、あまり邪魔するつもりはないと告げ、エリオが多少慌てていた。

そんな光景を眺め、柔らかく微笑むなのはとフェイト。はやては今は部隊長室で仕事をある程度片付けて、グリフィス達への負担を少しでも軽くしようとしている頃だろう。二人も見送りが終わり次第、時間まで少しでもデスクワークを片付けるつもりだった。

「じゃあフェイト、行ってくるわ」

「うん。二人をよろしくね、ドゥーエ」

「行ってきます」

「お茶菓子でも買って帰りますから」

フェイトへ手を振る三人。そして、そのまま歩き出す。それと同時ぐらいで離れた所からバイクの排気音が聞こえてきた。

「……あ、やっと来た。翔一さん、おそ～いっ！」

格納庫から走ってくるバイクを見て、ティアナがどこか嬉しそうにそう叫ぶ。それを周囲が聞いて苦笑した。それに構わず、ティアナはヘルメットのバイザーを戻し、いつでも走り出せるようにした。

「ゴメン！　お詫びに今日のお昼は驕るから」

「当然。さ、じゃ行きましょ」

どこから聞いても恋人のようなやり取りにしか聞こえない会話だが、それを口に出す暇も与えず、二人はなのは達へ手を振ってそのままバイクで走り去る。目指す場所はあの時行った公園だ。それをスバル達が見送ったところでノーヴェが姿を見せた。

スバルの服を借り、上は赤いTシャツで下は白のハーフパンツという格好だ。そう、ヴァルキリーズは普段着を持っていなかったため、六課の者達から体型が近い者などから服をある程度貸してもらうしかないのだ。まあ、普段着を着る事などは滅多にないのでそこまで困らなかったが、今日は全員が休日のためにアルトやルキノなども彼女達へ適当な服を貸していた。

ちなみにスバルはある時を境に、赤の色を好むようになった。その原因は語るまでもないが、ノーヴェは髪の色が赤なので余計に似合う印象があった。

「悪い。遅くなった」

「気にしないでいいよ。ギン姉、ノーヴェが来たし、もう行こう」

「そうね」

なのは達へ手を振って、スバル達五人も動き出す。こうして宿舎前はいつもの静けさを取り戻した。それに一抹の寂しさを感じ、二人は隊舎向かって歩き出す。すると、フェイトがこんな事を言い出した。

「……何か、大家族みたいだね」

「にゃはは、それじゃ……長女は誰？」

「う～ん……ウーノかな」

「長男は光太郎さんかザフィーラだね」

「真司さんは？」

「エリオがいるし、末っ子ではないけど……」

互いに笑みを浮かべながら二人は歩く。せめて今日は何もなく平和で過ぎていきますようにと、そう心から願いながら……

その頃、スバル達よりも先に動き出していたセイン達は、到着した二度目のクラナガンの街を懐かしく眺めていた。

「いや、ある意味変わってないね」

「そうねぇ。でも、あの時はあの場所がブティックだったわよ？」

「そうなんだ。クア姉って記憶力いいね」

ディエチが感心したように告げると、クアットロが当然というように胸を張った。それにセインが小さく笑みを浮かべる。クアットロは普段姉らしく行動している。後発組から頼られる事も少なくな

いからなのだが、今日のような姉らしくある必要が少ない場合、このようなふざける一面が見れるのだ。
セインとしてはそんなクアットロが大好きなので、今日のような状況はとても嬉しかったりする。そんな和やかな雰囲気のまま、三人は映画館へ向かう。まだ上映時間には早いので、そこで上映されている物から何を見るかを決める事となったのだが……

「サスペンスホラーなんていいんじゃない？」

「あたしアクション！」

「……ら、ラブストーリーは駄目かな？」

と、見事に意見がバラバラだった。結局、上映時間を逆算し、最初にディエチの希望を叶えてからセイン、クアットロの順になった。実は効率を考えて無駄無く見るなら、クアットロの映画を最初に見る方が良かった。しかし、妹達の方を優先させてやろうと考えたクアットロが、順番を敢えてそうしたのだった。
無論、それをセインとディエチは知らない。クアットロが二人に先んじて提案したためである。こうして、上映時間まで三人は近くを適当に見て歩く事にするのだった……

光太郎運転の車で五代達はベルカ自治区にある聖王教会へやってきていた。真司や五代はその景観にやや感動していた。ヨーロッパなどにある大聖堂を思わせたからだ。歴史があるんだろうと五代が言えば、作りが地球の方と似てると真司がどこか嬉しそうに告げた。
そんな二人を見てはやては笑い、なのはとフェイトは聞いてはいたのか二人よりも感動は薄い。光太郎は周囲の人々を見て平和で穏

やかな雰囲気を感じ取り、笑みを浮かべていた。

少しの間外を眺めさせていたはやてだったが、時間もあるのでと五代達に告げて動き出す。そして、少し歩くと入口の扉の前で一人の女性が立っていた。

「お待ちしていました、騎士はやて。そして、皆さん」

「お久しぶりです、シスター。こちらはカリムの秘書もしてるシャッハ・ヌエラさんや」

はやての紹介にシャッハは軽く頭を下げる。それに五代達も会釈を返し、自己紹介。五代と真司だけは名刺を取り出して、シャッハに驚かれていたが。

「では、こちらへ。騎士カリムとクロノ提督がお待ちです」

先導するように歩き出すシャッハ。その後ろをついて行きながら、真司は五代へシャッハが挙げた名前の人物を尋ねた。五代はクロノは知っているものの、カリムは知らないため答えられないと申し訳なさそうに告げる。それは光太郎も同様に。

そんな三人へフェイトが笑みを浮かべて言った。六課でカリムの事を話せる程知っているのは、はやて達八神家だけだと。そんな話をしている間に、五代達は一つの扉の前で止まった。いや、正確にはシャッハが足を止めたのだ。

そして、扉をノックしてシャッハは中へ声をかける。

「騎士カリム、騎士はやてとご友人方をお連れしました」

「入ってもらって」

それに涼やかな声が返ってくる。それを聞いて真司が直感で美人だと思い、その旨を五代に告げる。それに五代もそうかもと応じ、光太郎が苦笑した。なのはとフェイトもそれを聞いて苦笑していたからだ。

一人はやては思わせぶりな笑みを見せて、どうだろうと告げる。そんな六人を見てシャッハはどこか意外そうな表情を浮かべていた。はやての事をよく知っているシャッハ。だが、なのはとフェイトに関しては世間一般と同じ程度の感覚しかない。

故に、二人が年相応に振舞っているのが新鮮に映った。それと、五代の雰囲気や真司の雰囲気にどこか翔一にも似たものを感じたため、余計にそう顔に出たのだ。

「ま、とりあえず入ろか」

「そうだね」

はやての言葉になのはが頷き、六人は部屋の中へと足を踏み入れる。シャッハはお茶の用意をするのでと告げると、一旦下がった。室内に入った五代達が見たのは、落ち着いた雰囲気の家具と美しい金髪の女性。そしてクロノの姿だった。

「ようこそ、聖王教会へ。私はカリム・グラシアと申します。以後、お見知りおきを」

カリムの自己紹介に五代達五人がそれぞれ自己紹介をして、視線を隣へ移す。クロノはそれに軽い笑みを浮かべて応えるが、真司だけは初対面のため、簡単な自己紹介をした。

そして、それぞれが席に着いて話し出そうとした瞬間、フェイトがクロノへ少しからかうように告げた。

「久しぶりだね、お義兄ちゃん」

「……その呼び方は止めてくれと言っただろ」

「あ、クロノ君照れてる」

「俺はいいと思うけどなぁ。何が嫌なの？」

クロノの恥ずかしがるような反応に、なのはと五代がそう返す。それとは別に、真司は光太郎からクロノとフェイトの関係を教えられ、納得していた。きっと、クロノが照れているのは呼ばれ慣れていないからだろうと。

自分も最初はセイン達から兄と呼ばれ戸惑ったが、今はもうそれが普通になっているのだから。その体験談を真司が話すと、クロノはやや驚いたようだったが、何かに気付いて頷いた。

「そうか。君も仮面ライダーだったな。五代や津上と同じか」

「え？　俺と五代さん達が同じ？」

クロノの言葉に疑問を浮かべる真司だったが、聞いていたなのは達はどこか納得したように声を漏らした。

「つまり、自然体だと言う事だ。変にキバったりせず、ありのままに受け止める事が出来るんだろう。いや、尊敬するよ」

「そんなんでもないと思うけど……誉めてもらえるのは嬉しいな」

「翔一さんもそんな感じでしたね。しかし……」

真司の反応に微笑みを浮かべるカリムだったが、改めて五代達三人を見つめて頷いた。そう、翔一と同じような空気感を感じるのだ。まるで同じような何かを秘めているような。

それは、きっと仮面ライダーとしての力だろうとカリムは結論付け、一人納得する。そして、はやてから現状を詳しく説明してもらう事にした。邪眼の目的とその手駒。狙っている行動時期とその理由。それら全てを語ってもらおうと。

しかし、その前にはやてはカリムへある事を頼んだ。それは、あの予言を五代達にも聞いてもらいたいとの提案。そこから自分達では分からない事も分かるかもしれないからと。それにカリムも頷き、視線でクロノへある事を頼む。

それは、カーテンを閉める事。予言の準備だ。とはいえ、もう今年の予言は行なわれているため、それを出現させる事しか出来ないのだが、それでも念には念をとの処置だった。

「……これがその予言です。良く当たる占い程度のはずですが、今回はどうやら確定と言っても良さそうですね」

カリムが見せたそれを見て、五代は呟いた。

「これ、古代ベルカ文字って奴ですよね？」

「はい。私のレアスキル”プロフェーティン・シュリフテン”は失われてしまった古代ベルカの力なのです」

五代はユーノとの付き合いで少しだけだがベルカの事も学んだ。

ミッド文字もベルカ文字も大元は同じだったようだが、ユーノ曰く細部が違うらしいのだ。しかし、五代にはその違いが今一つ分からなかったという苦めの思い出がある。

なのは達も少し睨むように見つめていたが、やはり読めるはずもなく断念。そこでカリムが翻訳した物を読み出した。それを聞いて、五代は声を失う事となる。

旧き結晶を使い、悪しき世を創ろうとする眼。そが操るは死者の列と物言わぬモノ。
闇の覚醒がもたらすその力の前に、焼け墜ちる法の船。
死者の列は群を成し、死人を喰らいて増え続ける。冥府を司る者求め、彼らは行く。
そして古の王甦り、影と闇を争わす。しかし闇深く、甦る王を包まんとす。戦士、それに立ち向かいそを救わん。だが、それこそ闇の始まりなり。
闇に汚れし仮面で哀しみを隠す戦士。太陽と進化の輝き合わさりし時、龍騎士の咆哮が聖なる泉を呼び戻す。

「……翻訳が完全ではない部分もありますが、こんな感じの文章になるはずです」

カリムがそう告げると、光太郎が真っ先に視線を五代に向けた。

「五代さん、これはあの姿を指してないか？」

「……多分、そうですね。そっか……そうなるのか、俺」

五代が何かを思い出し、何とも言えない表情になったのを見て、なのは達が不思議に思う。予言の何が五代を反応させたのかが、今一つ分からなかったのだ。そんななのは達へ、五代はゆっくりとある言葉を告げる。

それは、彼にとって忘れる事の出来ない言葉。そして、決してあってはならない状況。たった一度だけ、五代雄介が自分を見失った時になりかかった恐ろしい存在への警告。

「聖なる泉枯れ果てし時、凄まじき戦士雷の如く出で、太陽は……闇に、葬られん」

その言葉になのは達はハッとした。その冒頭の単語が予言にそのまま出てくるからだ。更に続けられた内容もあまり良い物ではない。はやては凄まじき戦士の事を聞いていたが、その聖なる泉との単語は知らない。

そのため、誰もが五代へその言葉の意味を教えて欲しいと視線で訴える。それに五代は静かに息を吐いて、語り出すのだ。あの黒の四本角のクウガの事を。究極の闇をもたらす忌わしき姿の事を……

ミッドチルダ某所　違法研究施設。そこから一台の車両がある場所目指して動き出した。その積荷には、幼い少女が入ったポッドと鎖で繋がれたケースが二つ混ざっていた。向かう先は、ベルカ自治区にあるジェイルラボ。

だが、その動きを監視する物がある。それは、その施設に備えつけてある監視カメラ。それをウーノがＩＳで制御下に置いていたのだ。即座に施設のコンピューターにハッキングをし、その車両が例の聖王のコピーを運んでいると分かるや否や、ウーノは残っていた

シグナム達へ連絡した。

だが、まだこの時は誰も知らなかった。既にその車両へトイが向かっていようとは……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

六課の休日前編でした。次回はあの少女の登場です。

そして、現時点での予言解禁。一部前述と違う部分もありますが、今回のが正式です

六課の休日　後編

異様な息苦しさか室内を覆っていた。その原因は五代の語った話。ゴ・ジャラジ・ダとの戦いで垣間見た黒い目のクウガ。そのキッカケの緑川高校の事件も語り、その内容になのは達だけでなく、ゴルゴムなどの非道な作戦を知っている光太郎さえ、その痛ましさには言葉を無くしていた。

語っている間、五代もその時の事を思い出したのかその拳を握り締めていた。多くの未確認と戦った五代が、唯一憎しみに囚われかかった戦い。それが、そのジャラジとの戦いだったのだから。

息苦しいと感じたからか、クロノが立ち上がってカーテンと共に窓を開けた。そこから入る風が全員の表情を少しだけ和らげる。

「……聖なる泉は優しい心って意味で、それが枯れるって事は、憎しみに心が支配されているって事なんだ」

五代が最後として告げた言葉に全員が頷いた。優しさを無くす時、クウガは仮面ライダーではなく怪人となってしまう。そういう意味だろうと誰もが納得した。そして、ややあってから真司がふと不思議に思った。

聖なる泉を取り戻すと予言ではなっている。しかも、それにはＲＸやアギトだけでなく龍騎士――つまり自分も要因の一つと考えた。となれば、まず疑問なのは五代が憎しみに囚われるのだろう理由。正直、真司には五代が誰かに憎しみを抱くなどとは思えなかったのだ。例え、邪眼がどれ程卑劣な事をしたとしても、五代は憎しみではなく、みんなの笑顔のために戦うだろうと。

「大丈夫！　五代さんが凄まじき戦士にならないように、私達が支

えます」

そんな事を真司が考えていると、なのはがはっきりとそう告げた。その表情はとても優しい笑顔。そして、見せるサムズアップ。なのはは告げる。力では及ばない自分達でも、心ならば五代達と並ぶ事が出来る。なのははそう言って、フェイトとはやてを見た。それに二人も頷き、笑顔を見せる。

決して憎しみに囚われないように、優しさを失わないようにしてみせると。どんな時でも、五代をいつもの五代でいられるように頑張るから。そんな風にフェイトとはやても力強く告げたのだ。

「五代、なのは達だけじゃない。僕やユーノ、アリアにロッテだっている。それに六課の仲間と仮面ライダーが三人もいるじゃないか。予言なんか気にするな。そんな忌まわしい宿命さだめの鎖から解き放ってみせるさ」

「クロノ提督の言う通りです。予言はあくまで予言。それを覆す事が出来るのは、少しでもよりよい結果を望む者です。私は、五代さんも皆さんもそういう思いの持ち主だと信じています」

更に告げられたクロノとカリムの励ましに、五代は心から嬉しく思い、全員へサムズアップを返す。それになのは達もサムズアップを返し、全員が笑顔になる。そこへシャッハがお茶の用意を整えて姿を見せるのだった……

「ウーノの報告ではこの辺りのはずだ」

「でもよ、それらしいのは少しも……」

ベルカ自治区へ続く道。その上空を飛行しながら、シグナムとヴィータは周囲を見回していた。ウーノから告げられた聖王のコピーを運んでいる車両。それを見つけ、確保するためだ。しかし、先程から一向にその姿が見えない。

それに二人は若干の焦りを見せていた。どこかで行き違ったのか。或いは別のルートを選んだのかもしれない。そんな不安を感じながら、二人はウーノの言葉を信じて捜し続けていた。

「トンネルか。ヴィータ、私が見てくる。お前は万が一に備えて待機していてくれ」

「おう」

その視界に見えたトンネル。何かトラブルが起きて停車している可能性もないとは言い切れない。そう判断したシグナムは、ヴィータへそう告げると一人トンネルへと降りていく。そして、そこでシグナムは見たのだ。横転するトラックと数機のトイを。

即座にレヴァンテインを構え、トイへ立ち向かうシグナム。同時に念話でヴィータを呼ぶのも忘れない。いくらトイが数機とはいえ、油断してはいけないと思ったからだ。ＡＭＦはベルカの騎士たるシグナムには、さして脅威ではない。それでも、獅子は兎を倒すにも全力を尽くすとばかりに、シグナムは念には念を入れたのだ。

「はぁぁぁっ！」

まずは手近な一機をその剣撃で沈黙させる。ジェイルによってその強度を上げられた事もあり、トイはそれだけで動かなくなる。残るトイが攻撃するも、それを危なげなくかわしてシグナムはトイへ肉迫する。

そして、駆け抜けるようにトイの間を走り抜け、反撃に備え体の向きを変える。だが、それはもう必要なかった。何故ならば……

「すまんな、ヴィータ。助かった」

ヴィータが残ったトイをグラーフアイゼンで叩き潰していたからだ。それに笑みを浮かべ、シグナムが礼を述べるとヴィータはやや照れたように顔を背けた。

「別に必要ね～とも思ったけどな。で、トラックの積荷は？」

「これからだ」

二人は横転するトラックの荷台の中を確認するべく近付いていく。そして、その中を見て言葉を失った。そこには割れたガラスのような破片とポッドがあるだけだったのだ。そこにいるはずの存在が綺麗にいなくなっていた。

それに二人は不味い事になったと理解。すぐにウーノとロングアーチへ連絡を入れつつ、その周囲を調べ始める。そして、ヴィータが見つけたのだ。それは、下水道への入口。そこへ何か硬い物を引き摺ったような後が続いていたのだ。

「……あたしはここから追い駆ける」

「分かった。私は、念のため付近の捜索を続ける」

頷き合って、二人は別れた。シグナムはロングアーチの指示を受けながら、ヴィータはウーノの案内を聞きながら動き出す。共に早く見つけないと危険だと判断しながら。そう、トイが襲撃した事から二人はある推測を立てていた。

それは、例のコピーがレリックを持っているのではないかという事。残っていた痕跡。あれがレリックの入ったケースか何かだとすれば、またトイがコピーを襲うかもしれない。そんな危機感を胸に、二人は捜索に乗り出すのだった……

「えへへ、やっぱこれだよ」

「そんなに乗せれる物なんだな、アイスって」

満面の笑みでアイスを手にするスバル。その数、何と六段。しかもそれを両手に持っているのだから大したものだ。ノーヴェはトリプルなのだが、それが可愛く見えるような光景だ。チンクとギンガはダブルで、ウェンディはダブルとシングルの両手持ち。

そこから考えても、スバルのアイスがいかに常識外れか分かろうというものだ。今五人は、まずはアイスとのスバルの提案に乗って、こうしてアイスを購入した訳なのだが、その後の行動を決めかねていた。

というのも、スバルとウェンディはゲームセンターで合意したのだが、ノーヴェは服を見たいと言っていたのだ。ギンガとチンクは別れて行動しようと告げたのだが、それには三人揃って拒否を示した。

折角の外出。初めての休日。それを五人で過ごす。それ自体はスバル達三人に共通する気持ちだったからだ。なので、とりあえずはアイスを食べながら考えるとなり、五人は揃って店先に用意されていた簡易椅子へ座った。

「いや、初めて二段重ねのアイスを食べるッスけど、不思議なもん

ッスね。落ちないかどうか不安になりながら食べるっていうのは」

「余程うっかりしない限りは大丈夫よ」

「しかし、色々な味があるのだな。少々驚いた」

笑みを浮かべながら告げるウェンディへ、ギンガはそう笑顔で答える。チンクはそれに笑みを見せて、先程の光景を思い出して微笑んだ。自分が知る味の倍を超える数の種類があり、それを見ているだけで正直楽しくなってしまったのだ。

故に、本来一つで済まそうと思ったアイスが二段になったのだから。そんなチンクの言葉を聞いて、ノーヴェが頷くように口を開く。自分も迷ったと。だから三段にしてしまった。上からストロベリー、ミルク、メロンという選択のノーヴェ。対するチンクはチョコミントにバニラだ。

「ね、この後だけどさ。まずは服を見に行こうか。で、その後にゲームセンターに行こう。ゲーム機は無くならないけど、服は無くなるから」

スバルが手にしたアイスを舐めながら、笑顔でそう提案した。それにノーヴェがやや嬉しそうに笑みを見せる。ウェンディはスバルの言葉にそれもそうかと納得し、ギンガとチンクは微笑みと共に同意した。

そして、決まったのなら善は急げとばかりにスバルが立ち上がり動き出す。それにやや慌てながら、ノーヴェが立ち上がって追い駆けるように歩き出す。ウェンディもそれに続けとばかりに動き出し、それにギンガとチンクが苦笑しながら立ち上がる。

「で、どこかお店は決まってるの？」

「いや、特にはない」

「アタシはスバルのオススメがあればそこがいいッス。あ、それと可愛い服のお店で頼むッスよ」

「こらお前達、あまりはしゃぐな」

「そうよ。広がって歩くのは止めなさい」

そんな風に話しながら歩く五人。その頃、別の場所ではエリオとキャロがドゥーエに案内されるように歩いていた。

「……で、ここは……前は喫茶店だったかしら」

「そうなんですか。でも、ドゥーエさんってクラナガンに詳しいんですね」

「昔住んでいたんでしたっけ？」

エリオの問いかけにドゥーエは頷いて笑う。もうあれからどれだけ経ったのかと思ったからだ。レジアスの秘書として潜入し、最高評議会への接触を窺っていたあの頃。もう、それがはるか昔の事に思え、ドゥーエは時の流れに思いを馳せる。

もし真司がいなければ、未だに自分は地上本部にいて、最悪六課の敵になっていただろうと。今は愛しい弟と妹のように接している二人にさえ、敵意や殺意を向けたかもしれない。そう考えて、ドゥーエは小さく苦笑した。

有り得なかった事を考えても仕方ないと思ったのだ。そんなドゥ

ーエの反応にエリオとキャロは不思議そうな表情を見せる。何を苦笑したのだろうと思ったからだ。すると、ドゥーエが少し馬鹿な事を考えたと言って、二人を押すように歩き出した。

そして歩きながら、ラボでの日々を話し出す。それにエリオもキャロも笑ったり驚いたりしながら笑みを見せる。そんな風に楽しく過ごしていた三人だったが、突然エリオが足を止めた。それにキャロが不思議そうに小さく首を傾げる。だが、ドゥーエはその意味に気付いて同じように足を止めていた。

「……ドゥーエさん」

「ええ、間違いないわ。下からね」

エリオは自然保護隊での日々で培った聴覚で、ドゥーエは戦闘機人としての能力で、それぞれ足元から聞こえる僅かな音を感じ取っていた。そして、それを念のため確認するようにエリオが耳を地面に当てる。

そして立ち上がると、エリオはドゥーエへ頷いた。それにドゥーエも頷き返しキャロへ視線を向けた。その視線の質が真剣なものだと分かるや否や、キャロも同じく真剣な表情を返す。そうして、三人は近くの下水道への入口を探し、そこの蓋をエリオとドゥーエが開けた。そして、すぐに降りようとしたのだが……

「えっ……」

「女の子……？」

「みたいね」

そこから幼い少女が姿を見せたのだ。着ている服はボロボロで、

体も衰弱しているように見える。すると、少女は三人の姿を見て安心したのだろうか気を失った。慌ててその少女を支えるドゥーエ。エリオとキャロはそんな痛ましい姿にやや悲しそうな顔を見せるも、その少女の足元に気付いて軽い驚きを見せた。

そこには、鎖で繋がれたケースが一つあり、更にそれが不自然な切れ方をしていたのだ。それは、まるでもう一つ同じようなケースが繋がっていたように。

「これ……もう一つあったみたいだけど、何のケースかな？」

「……分からない。ドゥーエさん、その子を頼んでいいですか？」

キャロの問いかけにエリオはそう答えると、視線をドゥーエへ向ける。それにドゥーエは少女から視線をエリオへ移し、鋭く告げた。

「待ちなさい。まずは連絡よ。それと、この子は三人で見るべきね」

その理由としてドゥーエが挙げたのは、一瞬だが見えた少女の瞳の色合い。そう、両目が異なる色をしていたのだ。それは、文献に残る聖王の特徴と同じ。更にその格好も現れた場所も尋常ではない。そのため、ドゥーエは下手をすると邪眼が動いている可能性もあると指摘。なので、今は下手に動かず待機するべきだと締め括った。

それにエリオも納得し、下水道の探索を中止する。直ちに六課へ連絡を入れて、ヘリと他の者の応援を待つと共に、残ったケースを慎重にキャロが調べた。結果、レリックが入っていると判明。そこへロングアーチからシグナム達が見つけたトラックの情報が入り、少女がやはり聖王のコピーである事が判明した。

そのまま待つ事数分。近くにいたスバル達が駆けつけた。トイが下水道から侵入してくる可能性がある。そのため、少女をそのまま

三人が守り、五人が残ったケースの探索とトイの撃破をする事になった。

デバイスを準備するスバルとギンガ。一方、素手でも戦えるノーヴェと違い、固有武装を主体にするウェンディは少し不安があった。ライディングボードがないからだ。そのため、ドゥーエはウェンディへ自分のピアッシングネイルを手渡した。

「何でドゥーエ姉は、これを持ってるんッスか？」

「街だと何があるか分からないでしょ？　そんな時に二人を守るためよ」

冗談めかしてウインクと共に告げるドゥーエ。それに全員が苦笑した。何も起きなくてよかったとエリオとキャロが言えば、スバル達もまったくだと頷いた。そして、五人は次々と下水道へ降りていく。それを見送り、キャロは五人の無事を、エリオはヘリが到着次第追い駆けようと準備をし、ドゥーエは抱き抱えた少女を見つめて思う。

（ここまで一人で頑張ったのね。……ごめんなさい。私が貴女を苦しめたようなものよ。だからせめて、これからは守り抜いてみせるわ。命に代えても、ね）

優しく前髪を撫で上げ、ドゥーエは視線を空へと向けた。遠くから聞こえてくるヘリの音。それに真剣な眼差しを向けながら……

「ちっ！　やっぱり当たりかよ！」

襲い来るトイを相手取り、ヴィータは舌打ちをした。あれからそれなりの距離を進んだ所で、別の道からやってきたトイと接触したのだ。しかし、その最中入った知らせによれば、目的の相手は既に保護されたとの事。

現在、六課のヘリがその搬送のために向かっていて、シグナムがその護衛に付くべく急いで向かっているとの事だった。ザフィーラは隊舎の守備のため動けずにいて、シャマルはそもそもそのヘリに同乗している。一応オットーとディード、それにトーレとセッテが六課に残っているので、万が一にもそう簡単に遅れは取らないだろうと思われていた。

「ウーノ、怪人の反応はどうだ？」

『特にないわね。どうやら、本当にトイがレリックに反応しただけみたいよ』

「了解だ。なら、さっさと全部黙らせてジェイルの実験用にしちまうか。アイゼンっ！」

”了解”

カートリッジを排出し、ヴィータはアイゼンを振りかざす。トイの攻撃を避けつつ、迫るヴィータ。そして、その一撃がトイを二機纏めて壁に向かって殴り飛ばす。更にヴィータはその場で体を回転させ、残るトイへと襲い掛かる。

ラケーテンシュラークと呼ばれる攻撃。それは高速回転しながら相手を攻撃する荒業だ。ヴィータはそれを以ってトイの体を打ち砕く。そのままヴィータはトイの集団を駆逐し、先を目指して進む。

現在、スバル達がレリックのケースを探索しながらトイを倒しているのだが、ウェンディはやや武装に不安があるので援護して欲しい

とウーノが告げたからだ。

（ったく、こうなるとあいつらの外出は色々と問題が多いな。ジェイルの奴、固有武装もデバイスみてぇに待機状態とか考えろよ）

そんな事を考えつつ、ヴィータは進む。一方、スバル達はトイの集団と遭遇し、戦闘を開始していた。スバルとギンガが最前線を張り、ノーヴェがウェンディとコンビで中衛を、チンクは全体の援護を行なっていた。

「これで……っ！」

「ラストォォォォ！！」

ナカジマ姉妹の拳が最後のトイを打ち砕く。それを見届け、安堵の息を吐くウェンディ。やはり自分には接近戦は向いていないと実感したのだ。トイ相手ならばまだ何とかなるが、それでも一人では辛い。

ノーヴェとチンクがいて何とかだったのだ。しかし、そんなウェンディへノーヴェは手を差し出した。それに疑問符を浮かべるウェンディ。そんな彼女へ、ノーヴェはこう言った。

――お疲れさん。慣れない割に頑張ったじゃね～か。

その笑みと共に告げられた言葉にウェンディが軽く喜び、ノーヴェの手を握って答えた。

――いやぁ～、お姉ちゃんが支えてくれたッスからね。

その姉が自分だと理解した瞬間、ノーヴェが恥ずかしそうに顔を

背けた。その反応にニヤニヤするウェンディ。スバル達はそんな二人に微笑み、周囲の警戒を始めた。だが何もそれらしい気配はなく、ロングアーチからの報告でも、もうトイはいないとの事。それに頷き、探索を再開する五人。

そして、そう時間は掛からずにレリックのケースは発見される。同時に、ヘリが到着して少女はシャマルとシグナムが責任を持って搬送する事になったのだった……

クラナガンでそんな事が起きている頃、ティアナは翔一とエルセアの道を走っていた。ビートチェイサーの速度はティアナが想像していたよりも速く、一度好奇心でアクセルを開け過ぎたら、そのあまりの速度に焦った程だ。何とか落ち着いて速度を落とし、今のような安定した状態にしたが、ティアナは帰ったら五代に聞く事が出来た。

（これ、一体何キロまで出せるんだろう？）

翔一から聞いた話では、このビートチェイサーはクウガのためのバイク。そこから考えれば、普通のバイクの速度など軽く超えているだろう。そう結論付けてはいた。だが、具体的にどれだけだせるのかはやはり気になるものだ。

「ティアナちゃん！　見えてきたよ！」

そんな時翔一の声が聞こえた。意識を前方へ向けると、あの頃と同じ景色が見えてきた。それにティアナも頷き、声を返す。

「本当だ。じゃ、休憩しましょ！」

「了解！」

二人揃って思い出の公園へとバイクを止める。そして、あの時と同じ場所へ歩き出す。勿論、自販機で飲み物を買うのを忘れずに。

「ティアナちゃん、何飲む？」

「そうね……じゃ、翔一さんと同じので」

「分かった」

そう笑顔で言葉を返し、翔一はボタンを押す。ティアナは周囲へ視線を向け、思いっきり体を伸ばす。ここまで結構な距離を走った。しかし、楽しい時間だった。正直に言うと、あの時のように翔一と同じバイクで走る方が嬉しさは強い。だが、今回のように自分で運転し、共に走るのは楽しさが強いと感じていたので、ティアナは笑みを浮かべた。

そんな風に景色を眺めているティアナの頬に、ふと冷たいものが押し当てられる。それに小さく驚きながらもティアナは嬉しそうに振り向いた。

「翔一さん、おどかさないでよ」

「ごめん。ちょっとやってみたくなって。はい、これティアナちゃんの分」

「もう……」

翔一の笑顔にティアナは苦笑しながら缶コーヒーを受け取った。
そして、互いにあの時と同じように隣り合って座る。吹き抜ける風。静かな空間。何もかもがあの時と同じだった。唯一違うとすれば、ティアナの心境ぐらいだろうか。
あの頃、自分は翔一を優しい居候ぐらいにしか思っていなかった。だが、今はもうそんな感覚ではない。もう一人の兄。いや、頼れる仮面ライダーにして憧れる相手だ。

出会った時から自分をどこか導いてくれた翔一。それは、訓練校に行った後も変わらなかった。はやてと再会した後も翔一は時折訓練校へやってきては、ティアナへいつも差し入れを渡してくれたのだ。まあ、それは半分以上スバルに食べられてしまうのも常だったのだが。
その時、ティアナが軽く悩みや迷いを話すと翔一はそれに一緒に考え、そして必ず意見をくれた。そして、最後にこう言ってくれたのだ。それは、ティアナの指針となっている言葉。

――どんな答えでも、今のティアナちゃんがそう決めたのなら、それが今のティアナちゃんにとっての正解だよ。

それは、今を悔やむ事無く生きる事。もし明日後悔する事になったとしても、その時の自分が決断したのならそれがその時の正解なのだと。振り向いてもいいが、立ち止まってはいけない。翔一はそう言ってくれたのではないか。そう思ってティアナは今も考えている。
自分のままで自分だけの道を行く。翔一がアギトと知った今だからこそ、余計に思うのだ。例え姿形が変わっても、それを人たらしめるか否かはその在り様なのだと。ティアナにとって、翔一達の変身とは自分のままで戦士に変わる事を意味するのだから。

（アタシだけのオンリーワン。それはまだ見つからないけど、焦る必要はないんだ。翔一さんを見てるとそう思える。いつかきっと見つかる。自分の出来る事を懸命にしていれば……絶対に）

そう思いながら翔一を見つめるティアナ。それに翔一も気付き、視線をティアナへ向けて笑みを浮かべた。それに少しだけ顔を赤めるも、ティアナも笑みを返す。自分が初めて兄以外で深く関った男性。その雰囲気や考え方は独特で、気がつけば自分へ大きく影響していた。

でも、それが少しも嫌ではなく、むしろどんどん自分もそうありたいと思えるような相手。尊敬出来、信頼も出来、そして共に歩きたいと思う人。それがティアナにとっての翔一。

「さて、今日のお昼は何を食べようかな～？」

「ティアナちゃんの好きなものでいいよ。俺、結構お金あるし」

六課での給料をほとんど使う事がない翔一。その管理自体ははやてがしているのだが、今日はそのはやてが翔一へ多めの資金を渡してくれたのだ。それが自分とティアナへの配慮だろうと理解した翔一は、はやてへお礼を述べると共に、絶対に何かお土産を買ってくると告げたのだ。

「へ～、そんな事言っちゃうんだ。なら、高そうな場所でもいいわね？」

「どうぞ」

「……ホント躊躇いがない。翔一さんはさすがだわ」

呆れつつも嬉しそうに笑い、ティアナはコーヒーを飲み干した。
そして、ゴミ箱を見つめて――狙い定めて缶を投げた。それは綺麗にゴミ箱に入り、ティアナは小さく笑みを見せる。翔一も同じように缶を投げて見事にゴミ箱へ入れる。
そのアッサリさにティアナは少しだけ苦笑。自分は狙っての成功に対し、翔一は何も考えずの成功だったからだ。まだ先は長いと思いながら、ティアナは立ち上がる。翔一も立ち上がり、二人は揃ってバイクへと向かって歩き出す。

行く店はティアナが知っているので、翔一はそれについていく形で並走する事に決まり、二人は共にヘルメットを被ってそれぞれのバイクに跨った。

「じゃ、行こう」

「ええ」

互いに笑顔で声を掛け合い、それを合図にバイクは走り出す。ティアナは風を感じながら、視線を少しだけ隣の翔一へ向ける。

（……こうしてずっと走っていたいな、翔一さんと）

少女の顔から、ほんの少しだけ大人の顔に変えて、ティアナは笑みを浮かべる。こんな時間がいつまでも続いて欲しいと願いながら……

警戒態勢が解除された事を受け、オットーとディードは揃って安堵の息を吐いた。今回はトイのレリックへの反応が原因で、怪人達

は動いていないと分かったからだ。トーレやセッテもどこか安堵している。

（やはりライダーがいない状態での怪人との戦闘は避けたいですからね）

トーレもセッテもライダーがいなくても怪人と戦うだろうが、そこに不安が尽きないとオットーは感じていた。自分達だけでも怪人と戦う事は出来る。しかし、やはり仮面ライダーがいるのといないのでは安心感が違う。

そこまで考えた所で、オットーは別の事へ意識を向けた。それは今からここへ運ばれてくるだろう少女の事。聖王のコピーであるその子が来れば、邪眼の襲撃はより一層激しさを増すだろうと思ったからだ。

「オットー、食堂で読書の続きをしましょう。あそこなら何かあった時、すぐに動けるわ」

「そうだね。そうしよう」

まだ気を抜ききる訳にはいかない。そんな風にも聞こえるディードの言葉に、オットーも同意して頷いた。部屋から本を取ってくるとディードが去るのを見送り、オットーは視線をトーレ達へ向けた。

どうやらトーレ達も自分達と同じような事を考えたらしく、自主訓練を終了して、このまま隊舎内で待機するようだ。そして、時間を見てセッテが何かに気付いてやや慌てるように動き出す。

「どうしたのですか、セッテ姉様」

「オットー、もうそろそろ昼食の時間だ。急がないと混み合ってし

まう」

「……今はアインしかいないからな。手伝うのだそうだ」

トーレの言葉にオットーは納得したように頷いて、ならば自分もと動き出す。そして同時にディードへその旨を伝え、読書は手伝いが終わったらと告げる。それにディードが納得して、自分も手伝いに行くと返すのは当然と言えた。

嬉しそうに話しながら立ち去る二人を見つめ、トーレはやや呆れながらため息を吐く。だが、自分だけになったのを認識すると、どこか迷うような表情になり、考えこんだ。

（私も……手伝った方が良いだろうか？）

リインとセッテ達が手伝うとしても、普段の人数にはまだ足りない。自分は料理など出来ないが、片付けや皿洗いぐらいなら出来る。そう考え、トーレは面白くて仕方ないといった風に笑い出す。

戦闘機人として生きると思っていたはずの自分が、いつの間にか人として生きる事を選んでいる事を思い出したからだ。その原因と理由を悟り、トーレは小さく呟く。

――――ーまったくあのバカめ。どこまで私を変えれば気が済むのだ。

そう呟くトーレの表情には、心からの笑みが浮かんでいるのだった……

「分かりました。では、気をつけて戻ってきてください」

グリフィスがそう言って通信を切ったのを聞いて、シャーリィが視線を向けた。今日はクアットロがいないため、ジェイルとの共同研究を中断してシャーリィは従来の仕事であるロングアーチにいたのだ。

「はやて部隊長は何だって？」

「とりあえず、現状では休暇の者には連絡を入れないようにって。下手に心配させる必要はないって事らしい。スバルやエリオ達は、また休暇状態へ戻すようにとの指示だ」

その答えに指揮所の誰もが笑みを見せた。光太郎が傍にいるはやてがそう告げたという事は、やはりこの襲撃がトイだけの単独と判断出来たからだ。ならば、無理に休暇中の者達を集める必要はない。そこまで考え、ふとアルトが問いかけた。

「五代さん達は？」

「もう話も終わるそうだから、じきに戻ってくるだろう。真司さんを途中でクラナガンに降ろして、それからあの人も休暇らしい」

「アギト、本当に良かったですか？　真司さん達と一緒にお出かけしなくて」

ツヴァイの言葉にアギトは躊躇う事無く頷いた。確かに最初は迷ったが、何も自分は決まった仕事がある訳ではない。ならば、好きな時に真司達と過ごす事が出来る。そう考えたため、アギトは同じような存在であるツヴァイの手伝いを取ったのだ。

「おう。それに、お前はアタシに仕事教えるって言ってくれたじゃ

ね～か。だから、アタシはそれに応えたい。休みはお前と同じ時でいいさ」

「アギト……分かったです！」

その笑顔で告げられた内容にツヴァイは嬉しそうな表情を見せる。ユニゾンデバイスと融合騎。似ている二人は既に友人となっていた。おそらく次元世界にも自分達以外いないであろう存在。故に、その絆は深く強い。

そんな風に友情を感じている二人を見て、グリフィス達も微笑む。そこへヘリからの通信が入り、ルキノがそれに応答する。そしてそれを終えると、ルキノはグリフィスへ視線を向けた。

「保護した少女は衰弱しているものの、命に別状はないそうです。シャマル先生が医務室の準備をして欲しいと」

「分かった。手の空いてる者に頼んでおく」

「あ、なら私がジェイルさんに頼んでおくわ。あの人、医療方面も詳しいだろうし」

シャーリィがそう応え、即座にデバイスルームのジェイルへ通信を入れる。それを見ながら、ふとアルトが呟いた。

「それにしても、邪眼がこの子の事を知ったらどう動くかな……？」

それに誰もが不安を感じた。邪眼が気付かぬままでいてくれるなどと、誰も思えなかったのだ。どこかからこの事を知り、少女を手にしようと動くだろうと。それは、今まで以上の激しさを伴った隊舎の襲撃。

ライダー四人と六課の総力をぶつけるだろう戦い。その事を考え、ルキノがはっきりと告げた。

「大丈夫だよ。何があっても六課は……ライダーは負けないっ！」

その手はサムズアップを作っていた。それに誰もが頷いて、同じ仕草を返す。希望を失う事無く戦う。それを可能にする魔法の仕草。その安心感を感じながら、全員が動き出す。今、自分達が出来る精一杯を行なうために……

時同じくして、六課隊舎に一台の車が現れた。そして、そこから降り立つのは大きなケースを手にした一人の男性。そう、レジアスだ。表向きは査察という体裁を取っているが、実際はバトルジャケットを受け取りに来ただけなのだ。

しかし、一応ポーズとして査察もするためにレジアスは事前連絡なしでやってきた。ゆっくりと隊舎へ向かって歩き出すレジアス。その後ろから本を手にしたディードが歩いてきて、そんなレジアスの姿に違和感を感じた。

（？　見た事のない方ですね。まさか、スパイでしょうか？）

姉達が言っていたライアーズ・マスクによるスパイ懸念を思い出し、ディードは小さく首を振った。何故なら、目の前の男性は六課関係者のようには見えなかったのだ。今も隊舎を見つめ何か呟いている。

「あの、何か御用でしょうか？」

その声にレジアスは振り向き、ディードの格好に違和感を覚えた。陸士の制服ではなかったからだ。しかし、非番の者かと考えてそれを指摘する事はしない。

「すまんが責任者を呼んでくれるか。査察官が来たとな」

「査察？　分かりました。では、こちらへ」

スパイではないだろうと思うディードだったが、査察との単語に不思議そうな表情を浮かべる。その反応にレジアスはどこか幼さを感じるも、無言でディードの後ろをついて行く。非番の者を働かせる事になるのは申し訳ないと思うが、今は少しでも時間が惜しい。

そのため、レジアスはディードへ連絡を頼んだのだ。ディードはレジアスをロビーへ案内し、一礼して指揮所へ向かった。その後ろ姿を見送り、レジアスは苦い顔をした。

（やはり、あのような年齢の者達を魔力あるなしで差別せざるを得ない現状は、どうにかせねばならん。魔力があろうとなかろうと、時代を作るのは若者なのだ）

幼い少年少女さえ、魔力を有しているだけで管理局は良い条件で勧誘する。その反面、大人であろうと魔力のない者は冷遇される。魔導師主義とでも言えばいいのだろうか。非殺傷が出来ない、万が一の際に身を守る術がないという事だけで、魔法の使えない者達はどうしても管理局では難色を示されるのだ。

それを何とかして改善し、誰でもその気持ち一つで平和のために働けるようにと、レジアスは動いているのだ。局員として大切なのは魔力ではなく、平和のために働きたいという気持ち。そう考えるからこそ、彼は多くの陸士達から慕われているのだ。

改めて管理局の抱える問題を見つめた気がしたレジアス。そこへディードが戻ってきた。グリフィス達はヘリの受け入れと念のための邪眼警戒のため、少し待って欲しいと告げたからだ。

ディードはそれを受け、オットーへ食堂の手伝いを出来ないかもしれないと告げていた。もし出来るのなら、自分がその査察官の相手をしようと思ったからだ。

「申し訳ありません。今立て込んでいるので、もう少しお待ち頂けますか？」

「そうか。なら構わん。簡単な案内を頼もうと思っただけだ。濃一人で勝手に見させてもらう」

「でしたら、私がご案内します」

レジアスの言葉にディードはそう笑顔で答えた。それにはレジアスの方が困惑した。非番だろうディードにこれ以上働かせるのは忍びない。そう告げると、ディードはレジアスの気持ちに笑みを見せてこう言った。

「お気になさらず。これは私が好きでやる事ですので」

「……そうか。では頼む」

中々出来た若者だと、そう思いながらレジアスはディードの案内で歩き出す。こうして二人は六課隊舎を見て回る。最後にデバイスルームを見たいと告げた時はさすがにディードが慌てたものの、レジアスは心配はいらないと告げた。

そう、彼はこう言ったのだ。ここにジェイルがいる事は知っていると。それについて何かするつもりもない。それを聞いてディード

は目の前の相手が誰かを何となく察した。六課にいるジェイルの存在を知り、査察官として来るような相手など、彼女には一人しか心当たりがなかったからだ。

それでも一応ジェイルへ確認を取り、その予想が正しいと理解してから、ディードはレジアスを部屋へと入れた。

「では、どうぞ……レジアス中将」

「すまんな。案内助かった」

ディードの言葉に軽く手を上げ、レジアスは室内へと入っていく。それを見送り、ディードは複雑な心境だった。案内している最中、軽く雑談をした。その時の印象は、とても戦闘機人を欲しがるような強硬派のものではなかったのだ。

（もしや、あの方もみんなの笑顔のためにと思っていたのでしょうか。戦闘機人の力で、誰かを守ろうと……）

生憎レジアスの本心をディードは理解出来なかったが、今まで抱いていたレジアスのイメージが大きく変わったのは事実だった。タカ派で強引な手法の人物。それが、本質は優しい人物なのではと思えるように。

ディードがそんな風にレジアスの印象に思い馳せている頃、室内ではジェイルとレジアスが始めての直接対面を果たしていた。

「これが……バトルジャケット」

「そうだよ。重量は出来る限り軽減したけど、今はそれでも三十キロはある。体を鍛えていない者では着るだけでトレーニングだよ」

その言葉をレジアスは鼻で笑った。

「濃を甘く見るな。今でもそこらの魔導師には体力面で負けはせん」

「なら結構。一度着てみるといい。君の体に合わせてはいるが、一応確認をしておいてくれ」

それに頷き、レジアスはバトルジャケットを着装するべく、それが置いてある棚へ近付く。そして、胴体部や脚部などを身に着けていき、最後に頭部を装着する。外見は完全にブランク体だが、その様子を翔一が見たのなら、きっとＧ３－Ｘを思い出しただろう。

レジアスは、確かに感じる重量感に若干の動きにくさを覚えるも、それでも想像した程ではないと思った。その要因は内部に設けられたジェネレーターだ。大気中の魔力を吸収し、それを使って僅かではあるが装着者の負担を軽減しているのだ。

「……どうだね？」

軽く動いているレジアスへジェイルは感想を尋ねた。それにレジアスは両手を握り締めて、ややぶっきらぼうに答える。

「まだ違和感はないとしか言えん。強度等は戻ってから確かめてみよう」

「そうしてくれ。データや要望はウーノへ頼むよ」

そのジェイルの言葉に頷いて、レジアスはバトルジャケットの頭部を外した。その顔には汗がはっきりと浮かんでいた。そして、レジアスはジェイルからバトルジャケットの機能説明を聞き、それを

簡単に書き記した物を受け取った。
　バトルジャケットはそのまま持ち出すのは色々と問題があるので、持参したケースへしまう事になった。そして、それを手にしてレジアスが部屋を後にしようとした時だ。ジェイルが彼へこう告げた。
――君を案内したのが、私の自慢の娘の一人だよ。
　それにレジアスは足を止めた。ジェイルに娘がいる訳はない。もしそんな風に呼ぶ相手がいるのなら、それはある者達しかいないのだ。それを理解したからこそ、レジアスは足を止めたのだ。
「……あれが戦闘機人だと言うのか」
「そうだよ。分かったかい？　私達は揃って勘違いをしていたんだ。戦闘機人なんて言っても、それはやはり人なんだ。戦うための機械じゃない。その意思や心は無くせないんだよ。結局私が出来たのは……あの子達に重い物を背負わせる事だけさ」
　ジェイルの悔いるような声にレジアスは何も言えない。何故ならば、それをジェイルにさせたのは元を辿れば自分なのだ。犯罪者だったジェイルに違法行為をさせる。以前であれば、それ自体に良心が痛む事は無かった。
　しかし、今のジェイルを見て良心が痛まぬレジアスではない。ジェイルが更生しようとしている事は、最高評議会を通じて何となくだが感じていたし、通信を通じて知ってはいた。だが、直接会って余計に悟ったのだ。自分がジェイルにさせた事の重みを。
（濃が考えていた戦闘機人の構想は、間違っていたのか……？　いや、そもそもの出発点がいけなかったのだ）

誰かを助け守るために、誰かに犠牲を強いる。それがもたらす結果を考えた時、レジアスはグレアムが伝えた仮面ライダーの言葉を思い出した。

――誰かを悲しませて残りを笑顔にしても、今度はその誰かが悲しみを生む。

その言葉がいかに正しい言葉だったかを今更ながらに痛感し、レジアスは両目を閉じて顔を上げた。決して自分が抱いた考えの基は間違っていない。しかし、結果を急ぎすぎるあまりに大切な事を見落としてしまった。

自分が誰かを守るために犠牲になるのなら問題は無かっただろう。しかし、その犠牲を他者に強いてしまった。例え一人を犠牲にして次元世界全てを守る事が出来るとしても、その一人の犠牲を最初から肯定してしまってはいけなかったのだ。そう結論を出し、レジアスはジェイルへ告げた。

「ならば、濃は貴様に重い物を一つ背負わせたのだな」

「……何、あの頃の私が好きでやった事さ。君が気にする事じゃない」

そのジェイルの言葉にレジアスは小さく驚きを浮かべた。

（……あの娘と同じ事を言いよって）

ディードが自分を案内する時に口にした言葉を思い出し、レジアスは何とも言えない気持ちになった。ジェイルの言葉が自分を気遣ったものだと理解したからだ。それに対し、レジアスは僅かにある事を言うべきか逡巡するが、何かを決意してジェイルへ告げる。

ただ、背を向けたままで、声には何の感情を込められていなかったが。

――それでもだ。それと気遣いはいらん。ただ、その気持ちには感謝してやる。

それにジェイルが呆然となる中、レジアスはそのまま部屋を後にした。沈黙が訪れるデバイスルーム。レジアスが去ったのを見届け、ジェイルはようやく我に返った。そして、扉へ向かって小さく告げる。

――してやる、か。やはり君は偉そうだね。

その声には、呆れと微かな笑いが混ざっていた……

無限書庫。そこでユーノは六課からの依頼をこなしていた。それは、マリアージュ関連の情報。ウーノをはやてから紹介され、二人で協力しながらある存在を調べていたのだ。それは、マリアージュを生成する事が出来る者。

冥王と呼ばれる存在。古代ベルカの王の一人、ガレアの王イクスヴェリアだ。そして、遂にその位置を特定する事が出来たのだ。ユーノが見つけ出した資料を基に、ウーノが足跡を丹念に辿った結果だ。

『これが少しでも邪眼への牽制になればいいのだけど』

「そうだね。こちらでも、もう少し邪眼対策になりそうな物を探してみるって伝えておいてくれ」

『了解です。はやて部隊長に伝えておきます』

「お願いするよ」

ウーノの答えにユーノも笑みを返し、そこでモニターは消えた。
それを待っていたかのように、ユーノへ近付く者がいた。

「スクライア司書長、探し物は見つかったのですか？」

「ルネか。うん、でも困った場所にあってね。ちょっと苦労しそうだよ」

ルネッサの問いかけにユーノは苦笑混じりで答えた。そう、彼女はユーノの助手としてこの事に関っていたのだ。最初は一人でやろうと思っていたユーノだったが、普段の仕事も多くあり、あまり負担を掛けるのはよくないとルネッサが提言し、手伝いを申し出たのだ。

それにユーノは申し訳なく思うも、ルネッサの告げた、もし疲れが見えでもしたら恋人が心配するとの一言の前に折れ、現状と相成った。ルネッサはユーノの手伝いをしながらも、ウーノとは接点を持とうとせずにいた。それをユーノがどうしてか聞くと、ルネッサはやや躊躇いがちに告げた。

――自分から人と接するのは苦手なので……

それにユーノは納得。確かにルネッサは、自分から誰かに話しかけるのは苦手だったのだ。いつも誰かが声を掛けないと喋らない。ユーノはそれを思い出し、更にウーノとの話を聞かれると不味い事も多いと考えて、それを正す事はしなかった。

「困った場所、ですか」

「そう。実はね……」

ユーノがルネッサへその場所を話すと、確かにと彼女は頷いた。そして、ユーノへこう告げた。では、すぐには探しにいけないですねと。それにユーノは少し笑みを見せて答えた。

――――どうだろうね？

六課隊舎内　医務室。そこでシャマルは一人の少女を見つめていた。その眼差しはやや険しさを含んでいる。

「……この子が聖王のコピー」

まだ小学生になるかならないかぐらいの外見にも関らず、背負う事になるだろう事実。その重さにシャマルは表情を辛そうに歪めた。それを敢えて教える必要はないが、ずっと黙っていていいものでもない。話す事になるのがいつかまだ分からないが、その時には邪眼がいなくなっている事をシャマルは願った。

（レリックの入ったケースをつけていたのも、それを使って聖王としての力を引き出させるため。ジェイルさんはそう教えてくれた……）

搬送するのと入れ代わりに部屋を出て行ったジェイルが、自分へ告げた言葉を思い出して、シャマルはため息を吐いた。邪眼がこの

少女の存在を知るだろう事は、シャマルだけでなく誰もが覚悟していた。

何せ、この少女はトイの襲撃を受けたために保護されたような部分もある。つまり、トイを通じて邪眼が今回の事の顛末を調べるだろうと。故に、今もロングアーチが例のトンネルを警備している陸士隊へ警戒を呼びかけているのだ。

「今後は、この子が戦いの鍵になるのかしら」

昏々と眠る少女を見つめ、シャマルはそう呟く。その声には、明らかな悲しみが込められていた。そこへ、ザフィーラが姿を見せた。それにシャマルは振り向くと、何かあったのかと思い視線で問いかける。ザフィーラはそれに軽い笑みで告げた。

「今主達が帰ってきた。もう、心配はいらん」

「……そう。良かった」

「それと、もう一つ朗報だ。ユーノと共同で調査を進めていたウーノが、先程マリアージュを生み出す存在の現在位置を特定した」

その言葉にシャマルが驚く。既にマリアージュとは何度か戦っているのだが、仮面ライダー達にしてもその存在は厄介だった。やはり、倒した際に起きる爆発がその原因。基本接近戦で戦うライダー達にとって、その爆発力は脅威なのだ。

故に、早めにマリアージュをどうにかしたいと考えていたのだから。なので、その報告はまさしく朗報だった。シャマルがそう思い笑みを見せると、ザフィーラも同じ笑みを返す。しかし、何かを思い出してその表情が曇る。

「どうしたの？」

「いや、その存在がいる場所が少々問題でな」

その言葉にシャマルは不思議に思った。どこに居るとしても、いけない場所はないと思ったからだ。だが、ザフィーラから告げられた言葉にシャマルは自分の考えがある意味で間違っていたと知る事になる。

――――海の中だそうだ。

ベルカ自治区　ジェイルラボ。そこで邪眼は、トイからの情報で聖王のコピーの居場所を把握していた。トイが六課の者達に破壊された事。そして、トイが追跡していた相手がレリックを所持していた事。それらから邪眼は、コピーを六課が保護し匿っていると判断したのだ。

「……ふむ、しばらくは動かないでいるか。奴らはこちらを警戒するだろうが、あくまでも我の目的はキングストーンだ」

そう自分を納得させるように呟く邪眼。確かにこの遊戯には多少面白みを感じているが、所詮戯れなのだ。自分にとって大切なのは、二つのキングストーンのみなのだから。しかし、そこへアハトがマリアージュを連れて現れた。そして、邪眼の前に跪く。

「創世王様、ご報告があります」

「何だ？」

「はっ、ツバイからの報告でマリアージュを生成する存在の居所が判明しました。六課もそこへ向かうようなので、それの確保を許可して頂きたいのです」

アハトは告げた。その存在を改造する事でマリアージュを操作する事が出来るかもしれない。そうなれば、自爆操作も改造も可能となる。そう出来ないとしても、今以上の速度でマリアージュを量産出来れば、ライダー達への攻撃には十分だと。

それを聞き、邪眼も頷き許可を出した。それにアハトが感謝を述べ、立ち去ろうとする。だが、それを邪眼が止めた。それにアハトが疑問符を浮かべると、邪眼はこう尋ねた。

――ツバイの方はどうなっている？

それにアハトはもう一度跪き答えた。既にある程度計画を変更したものの、進行している。後は時期を見て行動を起こすだけだと。それに邪眼は少し不満そうだったが、アハトが告げた変更内容を聞き納得した。

それならばライダーに絶望を与える事は出来なくとも、その心に影を作る事は出来るだろうと。故に邪眼は嗤う。その時が楽しみだと。その笑い声を聞いて、アハトも邪悪な笑みを浮かべた。

オットーと同じ顔が不気味に歪む。そして、邪眼へ一礼してアハトはマリアージュと共にその場を去った。六課が動く前に生成する存在を確保するために。

「ツバイの報告によれば、奴らもすぐに動き出す可能性があるらしいし……」

急がなくては。そう思い、アハトは歩く。計画の実行日は近い。それまでに、何とかして邪眼の期待に応えねばと。しかし、アハトは知らない。

邪眼が、そもそも彼女達に何も期待などしていない事を……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

後編。ついに登場の聖王様と冥王様。次回は戦闘回。そして、ＲＸのあの力が本領発揮するかも。

……これ、完全に本編と同じ話数（２６話）では終われなくなりました。申し訳ないです

感じる絆、深める絆

あの休暇騒動から明けて一日。医務室には、なのは達隊長陣と五代達ライダー四人の姿があった。当然、シャマルもそこにはいる。集まった理由は他でもない。先日保護した少女。それが目を覚ましたと聞いて会いに来たのだ。

少女は見知らぬ場所に戸惑い、困惑していたが、それをシャマルが落ち着かせた。その役に立ったのは、以前五代が作った折り紙。それをシャマルは少女に与え、気を逸らしたのだ。今も少女の手には折り紙で出来た鶴がある。

「……それで、この子の名前なんだけど」

「名乗ったらしいな。確か……ヴィヴィオだったか」

シグナムの言葉に頷きを返すシャマル。その名前を聞いて、シャマルは確信したのだ。聖王と呼ばれた存在。その名はオリヴィエだった。ならば、幼い頃に近いような名を名乗っていてもおかしくはないと。

ヴィヴィオは愛称のようなものだったのではないか。そう推論を告げるシャマル。それに誰も反論はしなかった。全員の視線は折り鶴を手にし、楽しそうにしているヴィヴィオへ向けられている。

「でも、確か最初はここから出ようとしてたって聞きましたよ？」

「ママやパパを捜す。そう言ってたんですよね？」

五代と翔一の言葉にシャマルは頷きながら、視線を全員へ向けた。

「どうする？　この子、無意識に親を求めてる。ううん、自分を守ってくれる相手を」

「子供だからなぁ。とりあえず俺達が面倒を見ないと」

「じゃあ、ヴァルキリーズの中で決まった仕事のないセッテちゃんかな」

真司の言葉を受け光太郎がそう告げると、全員がそれに納得した。セッテは面倒見がいい。アギトとの触れ合いからも分かるように、やや不器用ではあるが親しみをもたれるのだ。

こうして一先ずヴィヴィオの事はセッテに一任される事となったのだが、少し困った事が起きてしまう。それは、ヴィヴィオが手にしていた折り鶴を落としてしまった事から派生した。

「あっ……」

手から落ちた折り鶴は風に乗るようになのはの足元へ。それをすぐに拾い上げ、なのはは笑顔でヴィヴィオへ手渡した。

「はい、これ」

「ぁ……ありがとう」

「どういたしまして」

やや人見知りをするようなヴィヴィオの反応に、なのはは微笑ましいものを感じた。すると、ヴィヴィオがなのはをじっと見つめる。それに不思議に思うも、なのははそれに笑顔を返す。やがて、ヴィヴィオがなのはに尋ねた。

ママ達は見つかったのかと。それになのははは返す言葉を思いつかなかった。見つかる訳がない。その答えは既に分かっている。しかし、それを言えばこの少女の心を悲しみに満たしてしまうだろう。だが、嘘を吐く事も出来ない。その板ばさみにあい、なのははは助けを求めて視線を五代へ向けた。

「ヴィヴィオちゃん、だよね。ヴィヴィオちゃんのママやパパはまだ会えないけど、凄く遠くでヴィヴィオちゃんの事を思ってる。だから今は、会える日まで元気に笑顔でいてほしいんだ」

「今は会えないの？」

「そう。ごめんね。俺達も方法があれば頑張るけど、今はまだ会うのが難しいんだ」

五代の言った言葉は、嘘ではない。今は会えない。そう、ヴィヴィオの本当の両親は既に亡くなっている。だから五代はこう言ったのだ。”今は”会えないと。泣きそうになるヴィヴィオを励ますように、五代は笑顔でその頭を優しく撫でた。

なのは達はその五代の言動に驚きと尊敬を向けた。五代は妹の仕事の関係で幼い子供との触れ合いに慣れている。故に、どうすれば子供が納得してくれるかを理解していた。嘘を吐かないように、でも必要でないのなら悲しませる真実を教えないように。この繊細な心を守るように、純粋な想いを壊さぬように注意を払い、ちゃんと真摯に向き合う事。それが五代なりの答えだった。

五代の手の温もりにヴィヴィオは泣きかかった顔を笑みへと変えた。そして、五代はその笑顔にサムズアップ。それに不思議そうに首を傾げるヴィヴィオ。そんな光景に誰もが微笑んだ。心和む子供の無垢な笑顔に純粋な反応。

それが見る者全員へ優しさを与える。そして、ヴィヴィオは五代の事を気に入ったのかその腕をしっかりと掴んで離さなくなった。それに苦笑する五代。こうしてヴィヴィオは五代預かりで食堂を定位置とする事になり、セッテは五代の代わりに食堂勤務となるのだった……

「……完全に懐かれてますね」

場所は隊舎内の食堂。翔一は視線を隅にいる五代とヴィヴィオへ向けた。五代は現在ヴィヴィオへジャグリングを披露し、その顔を笑顔にしていた。

「だよな。保父さんってとこか」

「五代なら適任ではないか」

「だよねだよね。あたしもそう思う」

チンクの言葉にセインも同意し、笑顔で五代達を見る。セッテはリインと共にテーブルの設置などをしているが、その視線はやはりヴィヴィオへ向いている。彼女は実は世話好き。とはいえ、それが発覚したのはつい最近。

アギトやツヴァイの二人だけではなく、更にエリオやキャロの世話も買って出る程なのだ。それをトーレに言われて本人も自覚し、実際ヴィヴィオの事も相手をしたくてしょうがないのだ。

「……セッテ、もう後は私がやるから五代の手伝いをしてくれ」

「分かった」

リインのどこか呆れつつも微笑ましい声に、セッテは即座に頷いて歩き出す。その背中はどこか嬉しそうにリインには見えた。セッテは五代と何かを話した後、ヴィヴィオの隣に立ってその頭を優しく撫でて自己紹介。

セッテの柔らかい笑みにヴィヴィオも少し警戒心が薄れたのか、自分の名前を名乗る。そして、セッテは五代の横に移動する。そして視線で五代へ何か告げると、それに五代も頷いた。

何が起きるのだろうと思い、ヴィヴィオは五代とセッテを注視する。すると……

「はい！」

「……はっ、はっ、はっ」

五代の手から投げ渡されるお手玉。それをセッテは受け取り、そのままジャグリングへ移行する。五代がしていたジャグリングを引き継ぐように、セッテが見事にそれを披露すると、ヴィヴィオの目が輝いた。

同時に、それを何気なく見ていた翔一達も思わずその手を止めていた。まさかセッテがジャグリングを出来るようになっているとは思わなかったのだ。セッテがジャグリングを覚えようとしたのは、アギトがそれを気に入ったため。故に彼女は、密かに鹵獲したトイを使って練習していた。その見た目はかなりシュールだったが。

「……セッテの奴、いつの間に」

「うわぁ……普通に凄いよ」

妹の披露した隠し芸に姉二人は驚くやら呆れるやら。それは翔一と真司も同じ。だが、二人は純粋に感心していた。

「やりますね、セッテちゃん」

「ああ。俺も知らなかった。こうなるとオットーやディードも五代さんの技、何か覚えてたりして」

真司が思い浮かべるは、セッテと同じく自分が色々と教えた双子。姉妹の中でも家事を得意とし、既に指揮所の顔ぶれに加わった二人だ。ヴァルキリーズで仕事が決まっているのは、実は全員ではない。ウーノ、ドゥーエ、チンク、セイン、ディエチ、ウェンディ。たった半数しか所属部署を決められてはいないのだ。残りの者達は、実は自主的に仕事をしているだけに過ぎない。クアットロにオットーやディードはロングアーチの手伝いを。ノーヴェは整備班の手伝いで、トーレとセッテは基本訓練ばかりなのだから。

一方、ヴィヴィオはセッテと五代のジャグリングに拍手を送っていた。そう、今度はセッテから五代へお手玉が移動し、ジャグリングを継続していたのだ。そして、その間隔を短くする事で完全な大道芸の様相を呈していく。

それを最初は感心するように見ていたヴィヴィオだったが、次第に五代とセッテが楽しそうにしているのを見て、笑顔へと変わっていく。それに五代とセッテの笑顔が深くなり、それがまたヴィヴィオを笑顔にしていく。そんな笑顔の連鎖が始まっていた。

気が付けば、食堂を通りかかる者達さえ、その光景に足を止めていた。翔一達だけでなく、食堂の周囲がその二人が織り成す光景に心を奪われていたのだ。

「これで……」

「はい……終わりです」

最後は互いにお手玉を半分ずつ所持させ、ヴィヴィオへ一礼する。その瞬間、割れんばかりの拍手の音が鳴る。それに驚く五代とセッテだったが、周囲を見て納得。そう、それを見ていたリインが途中からはやてに告げ、モニターで中継させていたのだ。

仕事中にとはやても思ったが、邪眼や怪人との戦いで多少なりとも六課は緊張している。それを少しでも和らげる事が出来ればと思い、許可を出した。

鳴り止まぬ万雷の拍手に嬉しそうに笑顔を見せる五代。セッテはやや恥ずかしそうだったが、それでもどこか誇らしげに笑顔を浮かべていた。そして、五代はそんなセッテに視線を向けて頷きをみせる。その意味にセッテも気付き、頷き返す。

二人は揃ってもう一度両手を上げてから、ゆっくりと両手と頭を下げる。それにもう一度大きな拍手が起こり、そこでこのちょっとしたイベントは幕となった……

「凄かったね、五代さんとセッテ」

「そうね。息ピッタリだったわ」

スバルの言葉にティアナも同意を示す。二人はもう意識を仕事へと戻していた。先程は、デスクワークをしている最中、急に出現したモニターに視線を向ければ、五代とセッテがジャグリングをして

いて、それがお金を取れそうな内容だったのだから驚いた。
実際、六課の者達全員がそれを同じ気持ちで見つめていたのだ。
既にヴァルキリーズは六課の中に溶け込み、そのメンバー達もみな好意的に受け入れられている。更に、そこへギンガが加わった事もそれに拍車をかけた。

局員であり、ヴァルキリーズの表向きの隊長を任されたギンガ。
それが更に潤滑油となって、今一つ交流の少なかった者達とヴァルキリーズを繋いでいったのだ。具体的には、隊舎内で働きながらも、デスクワークなどを担当するバックヤードだ。
基本六課の書類仕事や通常業務に関われないヴァルキリーズ。それをギンガがいる事で接点を有した。ギンガがバックヤードと会う時に、必ず誰かを同行させたのだ。それは自分の親戚とも言える彼女達を紹介するために。

「あれがジャグリングよね。ストンプっていうのはどういうの？」

だから、ここにギンガがいる。スバルがデスクワークを苦手なため、ティアナと二人でその補佐をしているのだ。そんなギンガの問いかけに、向かいのエリオが答えた。

「簡単に言うと即興演奏です。その場にある物を使って音を奏でるんです」

「聞いてると楽しくなるんですよ。ただ、フリードは少し苦手みたいです」

「そうなんだ。私も一回聞いてみたいわ」

エリオとキャロの言葉にギンガは納得し、やや悔しそうにそう告

げる。そんな声にドゥーエは苦笑した。実は五代の週一回の技披露なのだが、リクエストはやはりストンプが圧倒的に多いのだ。五代としてはそれでもいいのだが、いつも厨房では面白くない。

そのため、いつかは格納庫を使ってやってみたいと告げていて、密かに整備班と相談中だったりする。まぁ、ここの整備班はみんなお祭り好きなので喜んで協力しているらしいと、ドゥーエはディエチから聞いていた。

「なら、五代さんに頼んでみたら？　食堂にあるリクエスト用紙を使えばいいし」

「そっか！　その手があったわね！」

ドゥーエの言葉に、ギンガは何故もっと早く気付かなかったのかとばかりに頷いた。その声になのは達が苦笑しつつ、視線を一斉にギンガへ向けた。

「ギンガ、気持ちは分かるけど駄目だよ。貴方は局員としての先輩なんだから、お仕事しないと」

「おう、お前がしっかりしないでどうすんだ」

「少しは落ち着け」

「え、えっと……そういう事です」

なのは、ヴィータ、シグナム、フェイトと四人から注意され、ギンガはそれに席を立ち何度も頭を下げる。そんなギンガを見つめ、スバル達は揃って苦笑する。正直な話、五代達が絡むと誰もがこういう風になるのだ。

それをなのは達も分かっているので、あまりきつい言い方をしない。自分達もそうなる可能性がない訳ではないからだ。そんな事を考えながら、スバル達はそれぞれデスクに意識を向ける。今日の午後は、スターズとライトニングが共同でヴァルキリーズと模擬戦を行なうのだ。正直最初の頃のヴァルキリーズならば、今のスバル達はどこかで勝てると思えただろう。しかし、今のヴァルキリーズにはギンガがいる。それに、それぞれの成長もある。

（どうなるか分からないけど、きっとギン姉とノーヴェが私を潰しに来るはず……）

（クアットロは最近中衛をしてるし、互いの援護は厄介と理解してる。またアタシとやりあうのかしら……）

（僕の相手にはおそらくセッテさんが来る。フェイトさんをトーレさんが抑えるつもりで）

（私の相手はディードさんかな？　きっと空戦の出来る人が割り当てられるだろうから、気をつけないと）

四人は仕事を片付けながら、模擬戦の事を考える。相手が誰か。またどんな手段や作戦を講じてくるか。そんな事を予想しながら……

「……これでこいつは終わりだな」

「そうですね。お疲れ様です、アギト」

息を吐いて制服の上を開けるアギト。それはツヴァイが身に着け

ている物と同じだ。そんな二人を見て、はやては思う。あのレジアスによる査察の結果、六課の業務に直接関る者は、民間協力者であろうと制服を着用するようにと告げられた。

つまり、ある意味で誰がライダーかを認識するためでもある。そう、実はこれに五代達は含まれないのだ。その理由。それはレジアスによる例外規定。管理外出身者はその限りではない。それを聞いた時、はやては理解したのだ。レジアスが何を目的にそんな事を言い出したのかを。

仮面ライダーが六課に協力している。それをレジアスが知っているのは、はやても理解している。グレアムを通じて、はやてはその事を聞いていたのだから。レジアスが違法行為に手を染めていた事も、真司の書いている本を見せてもらった時に知った。だから、はやてはレジアスをいつかのグレアムと同じように思っていた。

守りたいモノがあった。それを守るためには何かを犠牲にしなければならなかった。それが正しくないと知りつつ、それをしなければ多くの者達が不幸になると思い、許されざる道を歩き出した。

（おじさんと同じや。レジアス中将も、誰かの笑顔を守るために犠牲を肯定する道を選んだ。それが正しくないってどこかで思いながらも、それ以外手がないって思うたから）

そこまで考え、はやては息を吐く。初めてレジアスを知った時は、何て高圧的でいけ好かない相手と思った。地上のためというのは分かるが、そのために危険な質量兵器を解禁しようとしていたのだから。

はやてはその質量兵器が普通に存在し、使われている世界出身だ。故にその脅威を誰よりも理解していた。魔法にも殺傷設定があるが、非殺傷設定もある。だが、拳銃などはそもそも誰かを傷付ける事しか出来ないのだ。

しかし、陸の現状を理解している今は違う。そこまでしてでも人手を確保したいのだと分かる。多発する凶悪犯罪。それに陸士部隊は疲弊しているのだ。優秀な魔導師の多くは海や空に取られ、陸には高ランク魔導師などあまり居らず、慢性的な人手不足。

それは正直海や空もなのだが、陸は特にそれが酷い。だからこそレジアスは、魔法が使えなくても違法魔導師や凶悪犯罪者を捕まえる事が出来るようにと、簡易的な質量兵器の解禁を求めている。

（魔力のあるなしで差がつく今の管理局体制は、確かに問題かもしれん。でも、それを変えるのは、力やなくて言葉でないとあかん）

綺麗事で変えられるなら、それが一番いい。その言葉をはやては五代から言われた。そう、あれはいつかの災害救助後。アギトとクウガの二人が手を取り合って行なった火災現場の救助作業。アギトがストームフォームで風を操り、それを利用してはやてが氷結魔法で炎を消す中、クウガはタイタンフォームで崩れた瓦礫をどけながら、時折ペガサスフォームになっては、逃げ遅れた者達の場所を把握して救助するを繰り返した。

結局、現地の陸士隊の災害担当が現れた頃には、もう粗方救助は完了していて、はやてはその初動の遅さに内心苛立ちを感じながら後を託したのだ。そして、自分達以外誰もいなくなった所で、はやてはつい愚痴ってしまったのだ。

――どうしてもっと早く動けんのや！？　手続きなんかどうでもええ！　管轄も知らん！　そんな事しとる間に、誰かの大切な人が死んでしまうっていうのに……っ！

そんなはやての言葉を聞いて、五代も翔一も何も言わなかった。

そう、災害担当の陸士はこう苦い顔で言ったのだ。来るのが遅くなった理由は、現場が自分の部隊の管轄と、別の部隊の管轄の境界線だったためだと。互いの部隊長が色々と揉めた結果、遅くなったのだ。

それに、はやても五代と翔一も正直文句を言いそうになったが、それを何とか押し止めたのだった。故のはやての愚痴。そして、はやては真剣な表情でこう告げた。今から管轄問題で揉めた部隊の両隊長へ文句と共に多少圧力を掛けてくると。

――人の命よりも互いの面子とプライドを優先した馬鹿達や。こういう事はあまり好きやないけど、こうでもせんと死んだ人が浮かばれん。

そんなはやての言葉に、五代は何かを思い出したのか苦い顔をして、それでもそれを振り切るようにこう尋ねた。それで本当にいいのかと。そうはやてがしたとして、もしかしたらその相手が、今度は同じように別の誰かに圧力を掛けるかもしれない。

それを受けた人がそれをまた別の人にする。そんな風に続いていくかもしれないと。それにはやては反論に詰まるも、綺麗事だけでそういう相手は変えられないと悲しむように答えた。

――そうだよね。でも、綺麗事で変えようとしないと、はやてちゃんもいつかその人達と同じになっちゃうよ？

その言葉にはやては今度こそ言葉を失った。翔一はそんなはやてを見て、優しく告げる。

――俺は信じてるよ。はやてちゃんなら、今日の事を活かして次に繋げてくれる。また同じ事が起きても、今度はもっと犠牲を減らす事が出来るって。

それこそが亡くなった人達が望む事じゃないか。そんな風に翔一は締め括った。それに五代も頷いてはやてを見つめた。はやてはそんな二人の言葉に少し黙って考え込んでいたが、何かを決意して頷くと、視線を二人へ向けて力強く告げた。

――せやな。わたしがせなあかんのは、そんな人らの相手やなくて、亡くなった人達の犠牲を無駄にせん事やったわ。おおきにな、五代さん、翔にぃ。

そんな過去の記憶を思い出し、はやては密かに拳を握り締める。あの時の誓いは今も胸に残っている。だからこそ、邪眼の被害者を一人として出したくない。怪人やトイだけでなく、邪眼にも誰一人として殺させない。

それだけではない。邪眼を倒した後の六課は、あらゆる災害と戦うための部隊なのだ。要望があればどこにでも行き、失われそうな命を、未来を守る。それがはやてが作りたかった理想の部隊なのだから。

「今日のお昼は何にする？」

「私は……特製餃子定食」

「じゃ～、私はポレポレカレーにしようかしら？」

アルトの問いかけにルキノはやや考え、そう告げる。それにクアットロがならばと続き、視線をグリフィスへと向けた。それに彼は苦笑しながらルキノと同じく餃子定食と答えた。それにルキノが嬉しそうに笑みを浮かべた。

「美味しいですよね、あれ」

「そうだね。この前真司さんから教えてもらったんだけど、餃子を一つスープに入れて少し待つと、また違った美味しさが味わえるんだ」

「あ～、それ確かに美味しそう」

会話に花咲くグリフィスとルキノ。その雰囲気に、こそこそとアルトが席を離れ、クアットロの近くへ移動する。そして、横目で二人を見ながら小声で尋ねた。あの二人をどう思うかと。それにクアットロも同じように声を潜めて応じる。

最近良く楽しそうに話しているのを見ると。そんな風にひそひそと話す二人に気付かず、ルキノとグリフィスは楽しそうに会話を続ける。オットーとディードはそんな光景を眺め、小さく苦笑。見ればはやても苦笑している。

「……誰一人として仕事に意識を向けてくれませんね」

「ほんまや。困ったもんやね」

「ふふっ、でもこういうのも偶にはいいです」

「うん。ディードの言う通りだね。ただし、本当に偶にでお願いしたいけど」

オットーの締めにはやてとディードが苦笑いで頷く。そんな周囲にツヴァイとアギトは気付かず、ただ真面目に仕事に取り組んでいるのだった……

格納庫でライドロンを磨き上げる光太郎。それを手伝うのはディエチだ。そう、次の戦いの場になるだろう場所。そこへ向かうためにはライドロンの力が必要不可欠なのだ。そのため、光太郎はいつも以上に丹念に磨いている。

ディエチもライドロンが喜んでくれているような気がして、その手にも力が入っている。その隣ではウェンディが口笛混じりにビートチェイサーを磨いていて、ノーヴェはアクロバッターを担当していた。ライダーマシンの手入れは彼女達の大切な仕事なのだ。

「これ終わったら、アタシが翔一さんのバイク磨くッス」

「分かった。なら、アタシはヴァイスの奴な」

そして、ライダーマシンではないがヴァイスのバイクも手入れの対象。もっとも、これも見た目的には翔一のバイクと大差ないので、ノーヴェ達からすれば十分ライダーマシンの範疇だったりするのだが。

未だにアギトは彼女達の前でマシントルネイダーを使っていないため、その事をヴァルキリーズは知らない。そしてスバル達もまた同様に。聞けばきっと驚く事は確実だ。何せ、空を飛ぶ事の出来るバイクなのだから。

「光太郎さん、こっちは終わったよ」

「ありがとう。じゃ、ディエチちゃんはゴウラムを綺麗にしてやってくれ」

「了解。……ゴウラム、おいで」

光太郎の言葉にディエチは頷き、視線を上へと向けた。そこには、光太郎が作りあげた廃鋼材を使ったゴウラム用の待機場所がある。五代からゴウラムの食べ物を聞いたはやてが用意した物を、光太郎が使って作ったのだ。

ディエチの声にゴウラムは本来反応を示さないが、それでもそこから降りてくる。アクロバッターが呼んでいるからだ。ディエチの前に降り立つゴウラム。それにディエチは小さく笑みを浮かべると、手にした水拭きでその体を拭いていく。

そんな風にディエチがゴウラムを綺麗にし始めたのと入れ代わりで、ノーヴェがアクロバッターを磨き終わる。その仕上がりに満足そうに頷くノーヴェ。そんな彼女へアクロバッターは感謝を述べた。

「カンシャスル、ノーヴェ」

「いいって……それと、また今度乗せてくれな」

「アア、コンヤニデモクルトイイ」

その答えに嬉しそうに笑みを見せるノーヴェ。そう、彼女はあのアグスタへ向かう際、隊長陣がしたツーリングをスバルから聞いて、自分もバイクに乗ってみたくなったのだ。しかし、免許のない自分では運転は許されない。そんな風に思い途方に暮れていると、ある日ノーヴェの様子に気付いたアクロバッターが尋ねたのだ。最近元気がないがどうしたのかと。

主人と同じで優しい奴と思い、ノーヴェはその原因を伝えた。すると、アクロバッターが自分に乗ればいいと答えたのだ。それを聞いてノーヴェは一瞬呆気に取られたが、確かにそれなら問題ないと頷いた。

以来、ノーヴェは必ずアクロバッターの手入れを買って出る。光太郎さえ驚くぐらいの頻度でするものだから、彼がその理由を気になって調べるのは当然だ。そして、アクロバッターから理由を聞いて光太郎は微笑ましく思い、今も黙ってそれをさせている。

ウェンディはアクロバッターと仲良く話すノーヴェを見つめ、どこか苦笑するように息を吐いた。ノーヴェは周囲にそこまで気付かれていないと思っているのだが、実際かなりの者は密かにアクロバッターに乗っている事を知っている。

もっとも乗りたいと希望する者達は、ティアナのように自分で乗りたいという者が少なく、大抵が五代達と共に乗りたいという者ばかりのため、そこまで問題になっていないだけだ。

（ノーヴェはホントに可愛いッスね。一応お姉ッスけど、どこか妹みたいッス）

最後の一拭きをし、ビートチェイサーから少し距離を取って、ウェンディは仕上がりを確認。その見事さに惚れ惚れし、翔一のバイクへと向かう。その外見の凡庸さに少しため息を吐きながら、ウェンディはその車体を磨き始める。

「……いつになったら、お前とアタシは勝負出来るッスかねぇ……」

軽くだがウェンディはマシントルネイダーの事を聞いていた。というのも、ウェンディのＩＳを見た翔一が親近感を感じたためだ。自分のバイクにもそれと同じような事が出来るのだと。ウェンディはそれを聞いて、いつか勝負したいと申し出た。翔一もそれに頷いてくれたのだが、一向にその機会が来ない。

その原因を考え、ふとウェンディの脳裏を嫌な考えがよぎる。

――まさか翔一さん、忘れてるとかないッスよね……？

天然系の翔一の性格を思い出すも、ウェンディはさすがにそれはないかと自分を納得させた。きっとまだそんな余裕がないだけだと。しかし、このしばらく後、ウェンディがこの事をティアナに話した時、彼女は知る。

かつて翔一は、五代がクウガであると告げた事をティアナに指摘されるまで、綺麗さっぱり忘れていた前科があると……

デバイスルームに響くキータイプの音。勿論ジェイルとシャーリィが出しているものだ。今は作業を分担し、ジェイルはバトルジャケットの改良を、シャーリィがＡＭＦＣの微調整を行なっていた。

レジアスは昨日の今日で、既に多くの要望とデータを送りつけてきたのだ。ウーノからそれを渡され、ジェイルはそれを見て苦笑しつつも嬉しそうだった。何せ、レジアスはその最後にこう記していた。

――これは、人々の希望となる。

その言葉にジェイルは一瞬思考が止まったが、すぐに再起動して呟いた。

――私は……希望を作り出せるのか……？

かつては誰かを絶望させる物しか作れなかった自分。それが、あろう事か人々の希望を作り出す事が出来る。その事実にジェイルは

歓喜に打ち震えた。無限の欲望と名付けられた自分が、まさか希望を紡ぎ出す事になるなど、誰が予想出来ただろうか。

レジアスの何にも負けない励ましに、ジェイルは奮起した。だからこそ、彼はその持てる力を注ぎ、バトルジャケットの改良に勤しんでいるのだから。

そんなジェイルを見て、シャーリィは少し複雑な心境だった。つい一昨日までは、二人の共同作業で進めていたＡＭＦＣ。それが、今日からしばらく自分だけでやる事になってしまったのだ。

無論、ジェイルがやっている事が邪眼との戦いに役立つだろうとは思っている。それでも、一度として自分へ意識を向けずに作業するジェイルに悲しくなったのだ。

（ジェイルさん、真剣なのはいいんだけど……少し寂しいな。この前までは、色々話しながら仕事してくれたのに）

年上の元犯罪者。そんな相手だったはずのジェイル。それが今では、色々とためになる話なども交えつつ、自分へ指導までしてくれる頼もしいパートナーだ。最初はどこかで疑ってはいた。本当に改心したのかと。だが、共に仕事をするようになってからは、それを心から信じる事が出来るようになっていった。

それだけではなく、真司が言っていた言葉の意味も知る事が出来た。ジェイルは純粋だったのだ。ただ自分のやりたい事をしていた。それを止める者がいなかった事。その過ちを正し、注意してやる者がいなかった事が、ジェイルを犯罪者へとしていった原因の一つだと。

「……早くそれ、終わらせてくださいね」

真剣な表情で仕事に打ち込むジェイルへ、シャーリィは小さくそ

う告げると、その意識を割り振られた仕事へと向けた。その横顔は、やはりどこか寂しそうだった……

「そう、妹さんと今度会うから何か贈り物を……ね」

「ああ。悪いな、今手が空いてて、意見を参考に出来そうなのはあんたぐらいなんだ」

六課隊舎のロビー。そこの椅子に座ってウーノはヴァイスと話していた。ジェイルの仕事を手伝おうと思っていたウーノだったが、バトルジャケットでは自分が役に立てる事はないと思い、ならばと指揮所に向かおうとしていたところを、ヴァイスに呼び止められたのだ。

話がある。そう言われた時、ウーノは不思議にしか思えなかった。自分へヴァイスが話す事など心当たりがなかったからだ。故に多少疑問に感じつつ聞いて、納得していた。やや気まずい妹と会うためのプレゼントを買いたいのだが、男の自分では中々いい考えが浮かばないので意見が欲しいのだ。そう言われたのだから。

「ま、確かにアルトさんは手が空いてないでしょうしね」

「なっ……どうしてアルトの名前が……」

「だって、指揮所へ向かおうとしてたでしょ？　なら、貴方が頼りにしそうなのは彼女ぐらいだわ」

「……そんなに分かり易いか、俺」

「ええ」

ウーノの笑顔での断言に、ヴァイスは苦笑して頭を掻いた。自分ではそこまで単純ではないと思っていたのだが、どうも妹の事になるとそうでもないようだ。そう思い、ヴァイスは小さくため息を吐いた。それは、自分への呆れを込めたもの。

そんなヴァイスを見て、ウーノは何となくだが真司を重ねた。共に妹分には甘く、分かり易い行動を取る存在。そんな共通点を見出し、ウーノは微笑みを浮かべた。

「さて、じゃあ気を取り直して聞くか。何がいいと思う？」

「そうね……年齢にもよるけど、安全策でいくなら好きな食べ物かしら」

「食べ物ねぇ……他には？」

「小物はどう？　もしくは装飾品」

「成程。髪飾りとか何て良さそうだな」

「そうね。あ、後は……」

ヴァイスとウーノはそうやってしばらく話し合う。ヴァイスの妹であるラグナの事を聞き、ウーノは、その話にやや熱を帯びさせるヴァイスへ苦笑しつつ、最後まで話を聞いてやった。

真司も以前はセイン達の事を話す時そうだったのだ。それを思い出し、ウーノは妹を持つ男はみな同じなのだろうかと思った。そして、その想像に思わず笑ってしまい、それにヴァイスが不思議そうな表情を浮かべた。今の自分の話には、そんな笑う要素はなかった

はずだったからだ。

それを指摘するヴァイスへ、ウーノはややすまなさそうに少し考え事をしていたら、それがちょっと面白いものだったために笑ってしまったと答えた。その内容を聞きたがるヴァイスへ、ウーノは秘密の一点張りで退ける。

そこをザフィーラとの自主訓練を終えたトーレが通り、どこか楽しそうな二人の様子を見て意外そうな表情をみせる。そして、自分に気付かず話す二人へ、やや呆れたように告げた。

――こんな所で油を売っている暇があるとは羨ましいな。

その言葉に、ヴァイスとウーノが揃って時間を見て立ち上がる。ヴァイスはこんなに話し込むとは思っていなかったし、ウーノもここまで長引くとは考えていなかった。そのため、互いにする事を思い出して動き出す。

無論、互いに礼を述べ合って。話を聞いてくれた礼と話をしてくれた礼。そして、そんな二人を眺めトーレは苦笑した。ヴァイスの反応が真司を連想させたのだ。どこにも似たような奴はいるものだ。そんな風に感じ、トーレも歩き出す。向かう先はシャワールーム。汗を流すためだ。

「本当なら風呂がいいが、さすがに今は入れんしな」

つい不満を口にしてしまうトーレ。そうなのだ。宿舎は現在の時間は掃除中。それは大浴場も例外ではない。シャワーも悪くはないのだが、ラボでの生活で大きな湯船に浸かる事になれてしまった身としては、やはり広々とした場所で寛いでいたいのだ。

そんなトーレだが、これが真司と出会う前はシャワーの方が好きだったと聞けば、その変化が良く分かるだろう。というのも、真司

がトーレに教えたある事が原因なのだが。それは、風呂に入った方が体が適度に疲れよく眠れるというもの。それを聞いてから、トーレは自分で確かめたのだ。どちらが眠るまで時間がかかるかを。

結果として、当然シャワーよりも風呂に浸かった方になった。故にトーレは最初こそ睡眠時間のために風呂を選んでいた。今は、まったく違うのだが。

（いっそ夕方まで待つか？　……いや、やはりシャワーを浴びておこう）

昼になって食堂に行った時、真司に汗の匂いがすると言われては恥ずかしい。そう考え、トーレは歩く。その発想自体が既にどこかおかしい事を彼女は気付かない。ともあれ、トーレは一人シャワールーム目指して歩くのだった……

多くの者で賑わう食堂。だが、そこには昨日までいなかった顔がいる。

「どう？」

「おいし～」

なのはから感想を尋ねられ、ヴィヴィオは笑顔でそう答えた。ヴィヴィオが食べているのは翔一作のオムライス。アギトセットやアギト御膳という選択肢もあったのだが、翔一が小さな子供ならそちらの方がいいと思い作ってくれたのだ。

なのはが面倒を見ているのは、時期が重なったとしか言いようが

ない。彼女は早めに仕事を切り上げ、フェイト達の分の席を確保する事も視野に食堂へ来たのだが、そこで五代とセッテにヴィヴィオの事を託されたのだ。

――ごめん！　お昼休みの間だけヴィヴィオちゃん、お願い出来るかな？

――私達も手伝わないと大変ですので。

――あはは、いいですよ。お仕事頑張ってくださいね。

そんなやり取りを思い出し、なのはは微笑む。視線の先には口の端にケチャップをつけたヴィヴィオの顔がある。その幼さと可愛らしさになのはは笑みを浮かべると、そっとナプキンを手にしてヴィヴィオの口回りを拭いた。

「もぅ、口についてるよ？　……はい、取れた」

「ありがとう！」

朝とは打って変わって明るくなったヴィヴィオに、なのはは少々驚きを見せる。五代達との触れ合いが、その下地になっている。そう感じて、その明るさに心からの笑顔を返してその頭を撫でる。良く言えました。そんな風に思いながら。そこには、いつもよりもどこか大人になったなのはがいた。

母親らしさとでもいうのだろうか。それとも、幼いヴィヴィオと接しているからの大人らしさなのか。どちらにせよ、そんななのはを遅れて来たフェイトは見て、そう感じていた。

「？　フェイトちゃん、こっちこっち」

「う、うん」

やや意外そうに、食事の乗ったトレーを手にして立ち尽くすフェイトに気付き、なのはは笑顔で手招き。それに若干戸惑いながらもフェイトは動き出す。微笑むなのはと笑顔でオムライスを食べるヴィヴィオ。その光景はどう見ても親子だ。フェイトはそう感じながら、それを口にする事はしなかった。

何となくだが、そう言ってしまうとなのはが変な意識をしそうだと思ったのだ。ユーノと恋人となったなのは。十年越しの恋は、実った瞬間から一気に花どころか種までつけそうなぐらいなのだから。

（毎晩連絡してるらしいし、次の休みにはデートするつもりだもんね）

数ヶ月前から、なのはが服装に興味を持ち出した事をフェイトは知っている。その理由は自分もよく分かるのだ。好きな人に誉めて欲しい。可愛いと、綺麗と言って欲しい。そんな女の欲望。元々なのはもフェイトもそこまで服装にこだわる事はなかった。

化粧なども最低限で、装飾品などもあまり欲しいとは思わなかったのだから。しかし、フェイトは光太郎を意識するようになってから。なのははユーノと想いを通じ合わせた後から、それらに興味を抱いた。

昔から翔一という憧れがいたはやてや、大人びていたアリサやすずかに助言をもらいつつ、二人は少しずつではあるが女らしさを身に着けて言った。昔は読まなかったファッション誌が、月一度の購読書になるとは思わなかったのだから。

「なのははもう食べたの？」

「うん。ヴィヴィオにも少し分けたんだけど、ポレポレカレーをね」

「カレーもおいしいよ」

なのはの言葉にヴィヴィオは満面の笑みでそう答える。それになのはだけでなくフェイトも笑みを浮かべた。エリオやキャロは、出会った頃からどこか子供らしくない部分もあった。それはいい意味でなのだが、それでもフェイトとしては寂しく思う事もあったのだ。

だからヴィヴィオの反応や表情は心和ますものがある。歳相応の子供らしい言動。それはフェイトにとっては、どこかでエリオやキャロに望んでいた光景なのだ。

「ふふっ、そうだね。ポレポレカレーは美味しいよね」

「うんっ！」

「あっ、ヴィヴィオ～？　また口にケチャップついてるよ」

「え？　取って取って～」

すっかりヴィヴィオの母親役をしているなのはに、フェイトは小さく苦笑する。だからだろうか、ちょっとした思いつきのつもりでこんな事を念話で告げた。

――なのは、ヴィヴィオのお母さんみたいだね。引き取る事、考えてみたら？

その言葉になのはは思わずヴィヴィオの口を拭く手を止めた。そして、疑問符を浮かべるヴィヴィオに気付き、その手を再び動かし

出す。それと同時にフェイトへ先程の言葉の返事を返す。

――――そう……だね。一度、ユーノ君と相談してみるよ。

その声は、フェイトへの軽い注意も含まれていた。何せ、その表情はやや苦笑していたのだから。フェイトの言葉にどこか軽い物を感じたからこそ、なのはは真剣に返した。その答えにフェイトが小さく呻くのを聞いて、なのはは笑う。

そして、フェイトは少し軽率だったと謝った。なのはは次は気をつけてと返して笑みを浮かべる。そんな二人にヴィヴィオは小さく首を傾げるも、残ったオムライスを片付けるべく、スプーンを動かすのだった……

激しい音が響く訓練場。スターズ&ライトニングｖｓヴァルキリーズの戦いは、もう終盤を迎えていた。以前の教訓を活かして戦略を立てるウーノ。それを支えるクアットロとオットー。そして、そんな三人の指示や考えを理解して動くトーレ達。

そこには、以前の団体戦で敗北した彼女達の姿はなかった。見ているはやて達さえそう感じたのだから、直接相手をしているなのは達は余計にそう感じていた。怪人戦とライダーとの共闘、それらで培われた全てがヴァルキリーズにいい結果を与えている。そう思った。

一方、ヴァルキリーズもなのは達の、特にスバル達四人の成長をひしひしと感じていた。以前ならばそれぞれが一対一にされると、それに拮抗しようとしていたのだが、今はそうなると、どうにかして互いの連携を取れるよう動き出す。

あのアグスタで見せた連携。怪人を相手に勝つ事は出来なくても、

協力すれば翻弄する事が出来た。その事実は、四人に連携の大切さと強さを教える事となった。自分達四人でも、力を合わせれば強力な敵にも負けないと。

そんな前回以上の接線を展開するなのは達を見つめ、はやては参加しなかった事を悔やんでいた。何も模擬戦が好きな訳ではない。だが、見ていれば分かるのだ。なのは達が互いに戦う事で成長しているのを。ライダーと共にあるために、そして邪眼を倒すために少しでも強さを。そんな想いを両者からひしひしと感じる事が出来るのだから。

「……今度はこれにわたしらも加わって、ライダーを第三軍にしての模擬戦をやろか」

だからこそ、そんな事を考えた。そう、まだはやて達もライダー達も経験した事のない状況。それは、ライダー四人の連携対旧六課の全戦力を結集しての連携。そこから得られる事は、おそらく最後の決戦を勝ち残るための力になる。

そう判断し、はやては隣で模擬戦を見つめるリイン達へ告げた。それにリイン達も頷いてみせた。唯一ライダーの中で見学していた光太郎も、その言葉に賛同する。先輩ライダー達と違い、自分はあまり他のライダーとの連携を経験していない。しかも、そもそも五代は他のライダーとの連携自体未経験だったのだから。

（俺達四人が協力する戦い。それがきっと邪眼との最後の戦いになる。それに負ける事は許されない。今の内に少しでも、俺達も連携を考えていかないと……）

視線を空へ向ける光太郎。もう太陽は暮れ出して夕日へと変化している。その暖かくもどこか寂しい色合いに遠い目をし、光太郎は

告げる。

――――先輩達、見ていてください。俺達が邪眼を完全に倒すところを……

あの発電所で共に戦った一号とＶ３だけではなく、他の先輩ライダー達へも光太郎は誓う。きっと来れるのなら、ここへ現れ戦ってくれるだろう歴代ライダー達へ。今もどこかで悪と戦っているだろう仮面ライダー達。その魂を受け継ぐ者として、光太郎は決意を新たにする。

三度目はなくしてみせると。一度目は発電所、二度目は無人世界。そこで仮面ライダーに敗れた邪眼。しかし、どちらも逃げ延びて災いを起こそうとしている。だからこそ、次は必ず倒すのだ。

（貴様に教えてやるぞ、邪眼。悪ある限り、仮面ライダーは不滅だと。そして、正義の系譜に終わりはないと……）

夜の休憩室は賑やかだ。スバル達前線メンバーだけではなく、アルトやルキノなどもそこにはよく顔を出すのだ。そして、今はここにヴァルキリーズの後発組も常連化しているので、余計だろう。

「いや～、今日の模擬戦も色々とためになったね～」

スバルの言葉に周囲が頷きを返す。今の休憩室メンバーは、スバル達前線組四人とノーヴェにウェンディだ。おそらくもう少しすると、ギンガなども姿を見せるだろうと誰もが考えていた。

今はほとんどが大浴場で疲れと汗を流している頃だ。あの模擬戦は白熱し、結果は何とヴァルキリーズの勝利に終わった。敗因は、

健闘していたスバルが、ギンガとノーヴェの協力の前に敗北したため。そう、奇しくも前回と同じく、一人の敗北が全てを決めたのだ。

スバルと倒した二人は、それぞれキャロとティアナに襲い掛かった。ティアナにはギンガ、キャロにはノーヴェが攻撃に参加した事で、一気に情勢が変わった。なのは達は無論それを助けに行きたかったのだが、前回から経験を積み、データ共有でなのは達の動きなどを学んだトーレ達がそれを許さなかった。

そう、彼女達は揃ってなのは達の援護妨害だけに集中したのだ。それは前回エリオやキャロが狙った事。自分が勝つ事に拘るのではなく、全体の勝利を考えての行動。それにより、なのは達隊長陣は援護にも行けず、無理に突破する事も叶わなかった。

そして、さほど時間が掛からずティアナ達も敗れ、残った全戦力を結集し、包囲する形でなのは達をヴァルキリーズは攻撃。前方と後方、側面さえも押さえた猛攻に、さしものなのは達も追い詰められ、敗北したのだ。

そう、いかになのは達が強くてもその魔力も体力も無限ではない。故にウーノは考えた。最初から強い者を倒すのではなく、倒せる者から倒していこうと。自分達がなのは達に勝るモノは人数。それをもっと活かした戦術を組み立てるためには、相手の数を減らす必要があると。

「……私がギン姉に動きをほとんど読まれてたのが痛かったなぁ」

「そうね。でも、それを承知でアタシもあんたとギンガさんをぶつけたんだし、あんただけの責任じゃないわ」

「ノーヴェさんもスバルさんの動きを知ってたのも響きましたね」

ティアナの言葉にエリオはそう続いた。それにスバルとノーヴェが苦笑した。その理由はスバルがノーヴェに教えているシューティングアーツ。それを通じて、ノーヴェはスバルの動きを理解していたのだ。それはスバルも同様なのだが、ギンガがそれを上手くフォローするようにしていたので、そこを突く事が出来なかった。

「まぁ、アタシらはスバル達四人の中の誰かを倒せばいいって思ってたッスからね～」

「ああ。だからアタシとギンガは、一番戦い易いお前を選んだって訳」

その言葉にスバルは完全に苦笑い。ティアナはそこからヴァルキリーズの考えを読んだのか、悔しそうにしていた。何故、自分と対峙していたのがクアットロではなくウェンディだったのかを理解していたのだ。

自分と射撃対決に持ち込め、幻術を使ってもそれを射撃で判別出来る事。更に、いざとなればＩＳで逃走する事も可能な存在。ティアナはそれを警戒していた事を思い出して、苦笑。つまりウェンディは、自分がリーダーシップを発揮出来ないように差し向けられた相手だったのだ。

（きっとクアットロ辺りの差し金ね。アタシをそこまで重視してくれるのは嬉しいけど、まだまだアタシはリーダーなんてもんじゃないわ。ま、期待されてるようだし、やってやりましょ）

密かにライバル視しているクアットロ。それが自分を意識してくれている事に喜びを感じつつ、ティアナはそれに今は応える事が出来ない。故に、必ずそれに応えられるようになってやると、そうティアナは決意した。

そんなティアナの前では、キャロが遅れて現れたセイン達へ飲み物を手渡していた。それをセインは笑顔で受け取り、チンクはややすまなさそうに受け取る。

「はい、どうぞ」

「すまんな」

「ありがと、キャロ」

可愛らしいパジャマのチンク。実はそれは、フェイトが間違えて大きめを買ってしまった元キャロの物だったりする。セインが着ているのもパジャマなのだが、そちらはアルトの物で、多少可愛げはあるものの、チンクよりは幾分大人の雰囲気だ。

二人は飲み物を手に、空いている場所へ座った。そして、セインが盛り上がっているスバル達を見て、話題は何かをキャロへ尋ねた。

「で、何話してんの？」

「えっと、今日の模擬戦の事を話していたんです」

「成程な。確かに話題にはもってこいだ」

キャロの答えにチンクは少し微笑むと、視線をスバル達ではなく自分の後方へ向けた。気配を感じ取ったのだ。そこには、湯上りだろう翔一と真司がいた。手には差し入れだろう果物が載っている皿がある。

「五代さんがみんなで食べて欲しいって」

「どうもパフェ用に仕込んだみたいなんだけど、余っちゃったらしくてさ」

そこには缶詰のものだろう黄桃や蜜柑、そしてバナナと多少のサクランボがある。それに目を輝かすのはスバルとセイン。ウェンディとティアナは寝るだけにも関らず、それを食べて太りやしないかと考えている。

チンクは真司から皿を受け取り、五代はどうしたと聞いていた。キャロはエリオとケーキの材料みたいだと話して笑っている。翔一は休憩室の中を見渡し、他に誰かいないかを確認して頷いていた。

ちなみに、五代は風呂上りをヴィヴィオに捕まり、現在なのはの部屋で絵本を朗読中。なのははそれを見て、微笑ましく思っていたりするのだ。

「……そうか。ヴィヴィオにな」

「あの子、五代さんをパパみたいに思ってるのかな」

真司は今日一日のヴィヴィオと五代を思い出し、そんな風に告げる。確かにヴィヴィオは五代の後ろをよくついて行ったのだ。それに翔一が口を出した。

「感覚は近いかもしれないけど、パパではないはず。だってあの子、なのはちゃんはママって呼んだし」

その翔一の発言に真司にチンク、セインはその事を思い出し頷くが、それと同時にスバル達から驚きの声が響いた。そう、ヴィヴィオはあの食事終わりに、仕事へ戻るなのはを見送ってこう言ったのだ。

――ママ、いってらっしゃい。

それを食堂で働いている者達は揃って聞いて、驚いたのだから。なのはもその呼び方にはさすがに足を止めたものの、フェイトが何かを告げると少し戸惑いながらそれに手を振り返したのだ。

その一連の流れを話して、翔一は全員に告げた。もしかしたら、ヴィヴィオは父親よりも母親を強く求めているのではと。その言葉に真司は納得。人はみな母から生まれてくる。だからヴィヴィオも母親の方を強く捜していたのかもしれない。そう考えたのだ。

そして、そこから始まるのはなのはとユーノの事。結婚前に子供が出来たのは問題ではと、そうどこか楽しそうにセインが言えば、いや、それをキッカケに結婚に迫れるとウェンディが応じる。ティアナは翔一へ視線を向け、チンクは真司へ視線を向け、それぞれに意見を尋ねる。

表向きは男性の意見を聞きたいと言っていたが、事実は違う。ともあれ、二人もそれに真剣に考え込み、スバルは単純に関係ないと思っていた。エリオもキャロも同じだったが、セイン達の意見を聞きながら、フェイトと光太郎の事に役立てられないかと考えていたりする。

そんな風に賑やかになる休憩室。その一方で、格納庫前では光太郎とフェイトが夜の海を見ながら話し合っていた。

「……明日にでも光太郎さんと翔一さんで先行したい、ですか？」

「うん。今度の相手は海底遺跡にいる。なら、ライドロンじゃないと行くのは難しいだろう。本当はクウガを連れて行きたいが、あまり俺と一緒に行動はさせたくない」

フェイトの問いかけに光太郎はそう答えた。その意味を理解し、フェイトは頷いた。キングストーンとアマダム。それこそが邪眼が狙う本当の目的。だから、万が一に備えて二人は別々の場所にいる方がいい。

戦力が分散している状況で、二人が同じ場所にいるのは邪眼にとって好機でしかない。そう判断した光太郎とフェイト。なので、クウガと似た力を持つアギトを連れて行くのだと、フェイトは考えた。

「でも、いくらなんでも早すぎるんじゃ……」

「分かってる。でも、嫌な予感がするんだ」

「そんな……」

今度の場所は邪眼でもそう簡単には気付けないだろう場所。そうフェイトだけじゃなく、はやてもジェイルも考えていた。なので、入念に準備をして行こう。そんな風に今日話し合ったばかりなのだから。

しかし、どうも光太郎は早めに動くべきと考えているらしい。それが意味する可能性は二つある。一つは邪眼達もイクスの存在を調べていて、その居場所を見つけたという事。それともう一つ。それは……

（どこかで情報が漏れた。そういう事だね……）

今回の調査結果はかなり限られた者達しか知らない。まず、はやてと守護騎士達。自分となのはに光太郎。そしてジェイルとウーノにユーノだ。この中で情報を漏らす者がいるとは思えないが、それでもフェイトにはそれを心から否定出来る要素がなかった。

（まさか……もう六課にスパイが入り込んでいるの？）

ライアーズ・マスクを使い、邪眼の手先が六課の者に化けている。そう考え、フェイトはそれを即座に否定した。もしそうなら、光太郎が何も言わないはずはない。であれば、その可能性があるのはただ一人。

しかし、それをフェイトは否定したかった。もし仮にそうならば、なのはは毎晩、別人を最愛の男性と思って愛を告げている事になるのだ。それを伝える事は、フェイトには出来ない。

（ユーノが偽者かもしれないなんて、言えるはずがないっ！）

言えば、なのはとユーノの間に違和感が生まれる事は明白だ。そうなれば、二人の関係にも嫌な変化を与えかねない。それに、そこから相手に気づかれ本物のユーノが危険に晒される可能性もある。

そこまで想像し、フェイトは光太郎へ視線を向けた。光太郎はフェイトが黙ったのに気付き、その様子を窺っていた。そこで交差する互いの視線。フェイトの眼差しから何かを感じ取り、光太郎はフェイトの傍へ駆け寄った。

そして、小さく震えるフェイトの体をそっと抱き締めようとして、一瞬だが躊躇いを見せる光太郎。しかし、その躊躇いを振り切り、フェイトを励まそうと優しく抱き締める。

「フェイトちゃん、大丈夫だ。何が起きても、大丈夫だから」

「……光太郎、さん……」

「俺達がいるし、六課は負けない。最後には、必ずみんなで笑顔に

なれるさ」

光太郎の言葉に、五代の影を感じるフェイトだったが、それでもその温もりに考えていた嫌な想像が消えて行く。体を襲った不安も失せていき、フェイトは感謝を込めて光太郎の体を強く抱き締め返す。

だが、その瞬間、光太郎の体が軽く強張ったのをフェイトは感じ取った。それが意味する事を察して、フェイトは反射的に光太郎から体を離す。そして、どこか悲しそうな瞳で光太郎へ視線を送る。何故、と。どうして自分を拒絶するような反応を返すのかと。

「……フェイトちゃん、俺は……」

「関係ないっ！　改造人間とか仮面ライダーとか宿命とか関係ないっ！！」

光太郎の言葉を遮るようにフェイトは叫んだ。それは自分の本心。伝えるか伝えないかを迷い続けていた想い。それをここで告げる。その決断をフェイトは下した。でなければ、光太郎には届かないと思ったからだ。

光太郎の態度が自分を守るためだと、フェイトは薄々気付いていたし、エリオから聞いた推測もそれを肯定してくれた。故に、フェイトは決断した。ここで自分の偽らざる気持ちを伝えようと。

「光太郎さんは私に言ってくれた！　私は私だって！　なら、それは光太郎さんも同じでしょ？　改造人間でも、仮面ライダーでも、光太郎さんは光太郎さんです！！」

「フェイトちゃん……」

「光太郎さんの歩く道が厳しく辛い事なんて知ってます。私だって執務官をしているんです。平和のために戦う事がどんな事を意味するか。嫌って程知ってますっ！」

フェイトの涙ながらの言葉に、光太郎は何も言えなかった。自分がフェイトへ取った距離。どうもそれが、余計フェイトの心を苦しめてしまったと感じたからだ。完全に突き放す事でしか、もうフェイトを自分から離す事は出来ないのか。そんな風に考え、光太郎は天を仰いだ。

気付いたのだ。もう遅い事に。フェイトは既に自分を追い駆ける覚悟を決めているだろう。であれば、突き放したとしてもそれが自分を思いやっての事と気付いて、その気持ちを更に強めてしまうと。

だが、光太郎の予想に反してフェイトの答えは違った。

「……私、光太郎さんが好きです。この気持ちは……ずっと変わりませんから」

「フェイトちゃん……君は……」

フェイトの言い方に何かを感じ取り、光太郎は驚いたような声を出す。それにフェイトは微笑みを返した。

「光太郎さんが答えられないって分かってます。だから、せめて……好きなままでいさせてください」

その言葉と表情に光太郎は言葉を失った。フェイトは微笑みながらも泣いていたのだ。叶う事のない想い。それでもいい。光太郎が自分を嫌いでないのなら、ずっと好きでいよう。だから、この想いだけは覚えていてください。

そんな風にも聞こえるようなフェイトの笑み。その美しさに光太郎は黙って見つめ続ける。白鳥玲子とは違う形での愛情表現。それに光太郎は心から感謝と謝罪の念を抱いた。しかし、それを告げる事はしない。それはフェイトの望む事ではないからだ。だから、こう告げる。

――……俺、今夜の事は絶対に忘れないよ。例え、何があっても……

――光太郎さん……っ！

光太郎の告げた精一杯の答え。それにフェイトは大粒の涙を流した。それに光太郎は笑みを浮かべ、静かにフェイトへと近付いていく。そして、黙ってその隣に立ち、フェイトが泣き止むまで傍にいた。

その無言の優しさが嬉しくも切なくて、フェイトは泣き止んだ時、こう言った。泣き止ませたいのか、泣かせたいのか分かりませんと。それに光太郎はどこか嬉しそうに苦笑するのだった……

ベッドで眠るヴィヴィオ。その寝顔に揃って微笑む五代となのは。つい先程ヴィヴィオは眠り、五代は絵本朗読から解放されたのだ。

「……じゃ、俺は部屋に帰るね」

「はい。お休みなさい、五代さん」

「お休み、なのはちゃん」

手を振り合う二人。五代が出て行くのを見送り、なのはは視線を入口から別の方へと向けた。手元の端末を操作し、モニターを表示させる。すると、一分としない内にユーノがそこに映り出る。

「ごめんね、遅くなって」

『いいよ。にしても、どうして声を抑えてるの？』

なのはの声量が小さい事に気付き、ユーノは不思議そうに尋ねる。それになのはは苦笑しながらモニターから体を動かした。そこに見えるは安らかな寝顔で眠るヴィヴィオの姿。それにユーノは納得。そう、昨夜の話でヴィヴィオの存在自体は聞いていたのだ。

『成程ね、その子が原因なんだ』

「うん。それでね、ユーノ君。一つ聞いて欲しい事と相談があるんだけど……」

『何？』

なのはがどこか戸惑うような表情をしている事に疑問を感じるものの、ユーノは笑顔で尋ねる。それになのはがヴィヴィオからママと呼ばれている事を話し、軽い驚きを与える。しかしそれでも、ヴィヴィオが本能的に保護者を求めているとのシャマルの推測を聞くと、確かにと頷いた。

だが、それだけで終わるのではなく、ちゃんとなのはが優しく母性を感じさせたからだろうと告げるのを忘れない。それにやや照れるなのは。まだそんな歳じゃないと苦笑を返すが、やはりどこか嬉しそうにユーノには見えた。

その呼び方の話が少し落ち着いたのを見計らい、ユーノは相談の事を切り出した。一体何を相談したいのだろうと。それになのはは最初見せた戸惑いを見せる。だが、意を決してユーノへ告げた。

――ヴィヴィオを引き取ろうかなって……思ってるんだ。

その言葉にユーノは笑顔で応じようとして、一瞬表情を固まらせる。そして、一度深呼吸をするとなのはを見つめて告げた。

――分かってるの、なのは。その子を引き取る事は、かなり”重い”よ。

それはヴィヴィオの将来を案じるだけではなく、なのはの今後も案じるからこその言葉。それになのはも頷き、真剣に考えていると返した。それにユーノが小さく息を吐いて苦笑する。その表情になのはユーノが何を考えたかを悟り、同じように苦笑する。

『じゃ、とりあえず僕はいつでも引き取れるように、手続きの準備を進める事にするよ』

「ありがとうユーノ君」

やはり自分と同じで、下手に施設などに行かす事は出来ないと考えてくれた。そう思い、なのはは心からの笑顔でそう告げた。それにユーノは笑みを返し、やや照れるようにこう言った。

――どういたしまして。まぁ、将来僕の娘になる訳だしね。

――にゃはは、ユーノ君って……え？

そこでユーノが言った意味になのはは思わず言葉を止めた。視線の先には、真剣な表情のユーノがいる。その雰囲気からなのはは一つの予想を立てる。それは、彼女がどこかで待っているもの。だが、まだ先になるだろうと思っていたある言葉。

そんななのはの思いを感じたのか、ユーノは軽く息を吐くとはっきりと告げた。その時の事を、なのはは終生忘れる事が出来なくなる。

――結婚しよう、なのは。邪眼を倒して、平和になったその時に。

プロポーズ。まだデートさえしていないにも関らず、ユーノは求婚した。だが、考えてみれば、なのはとユーノはあのジュエルシード事件の頃から二人で行動する事が多かった。ならば、その絆と関係は深いといっても過言ではない。

現に、なのはもそんなユーノの言葉に驚きよりも喜びを強くしていたのだから。目は潤み、顔は赤い。だが涙は流さない。なのはは微笑みを浮かべると、ユーノへ答えた。

――幸せにしてね？

――勿論。ヴィヴィオも一緒に、ね。

どちらも邪眼が倒されないとは欠片も思っていない。四人の仮面ライダーがいる。それだけで、あの邪眼戦を経験した二人には勝利を確信出来るのだから。だから、ユーノの言葉になのはも頷いた。

最後は軽くおどけるように告げるユーノ。そんなユーノになのはは嬉しそうに笑うと、モニターへ近付いた。それに不思議そうな表情を浮かべるユーノだったが、なのはの顔が自分に近付いてくるのを見て、その行動理由を悟る。

そして、モニターのなのはが自分と完全に顔を重ねる。モニター越しのキスとでも言えばいいのだろうか。ともあれ、それにユーノは軽く思考停止する。そんな彼になのはは真っ赤な顔で締めの言葉を告げて通信を切った。

「信じてるからね、あなた。お休み」

そして静寂が訪れる司書長室。その中でユーノは最後のなのはの言葉を反芻し、喜びに打ち震えていた。勢いに近い形になったが、求婚して受け入れられた。しかも、最後には〝あなた〟発言だ。これを喜ばずに何を喜ぼう。これで今夜の徹夜も耐え切れる。そんな風に思うユーノ。
　その姿を密かに見つめる影がある。それは、ユーノとなのはの会話を聞いていて、邪悪な笑みを浮かべてそこから去った。これは使えると、そんな事を呟きながら影は消えるのだった……

目覚めた聖王。その心にあった不安の影を散らした五代と六課。穏やかに関係の変化を起こす者達がいる中、蠢く不気味な影がある。
　平穏の裏にある闇。それが牙を剥く日は……近い。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

初の幕間扱い。ヴィヴィオメインにしようと思って書いていたのに

……あれ？

五代がパパ扱いにならない理由は、いずれ。まぁ、原作中である意味解答は提示されているんですがね。

次回は、お待たせのイクス登場話の予定……

解禁！　ダブルアギトと光る杖

「海底遺跡かぁ……行ってみたかったなぁ」

食堂での仕込み中、五代は突然そんな事を呟いた。それに真司が視線を向けた。

「なら、どうして翔一さんに代わってもらわなかったんです？」

「いや、だって光太郎さんが残ってくれって言ったし。それとさ、俺が行ったら……調査しないで冒険しちゃうから」

五代の笑みと共に告げられた言葉に、真司も納得して苦笑。今、光太郎と翔一は、ライドロンを使ってミッド湾岸地区にある海底遺跡に調査に向かっている。更にアギトとツヴァイもそれに同行し、現地に到着次第、転送魔法の座標を送信するなどの連絡役をする事になっていた。

五代は真司と共に六課に留守番。ヴァルキリーズは、希望する者だけが海底遺跡の調査班に加われる事になっている。実は六課に残る事が確定しているのはスターズだけ。ライトニングは転送準備が出来次第、遺跡へ向かう事となっている。

そんな二人とは違い、チンクとセインはリインと共に忙しく働いている。とはいえ、それはいつもの仕込み。セッテはヴィヴィオの世話をしていて、どこか楽しそうだ。リインとチンクは互いに食材を刻んでいて、セインは五代の代わりにカレーの番だ。

あの休暇騒動から既に二日が経っている。もうヴィヴィオはすっかり明るくなり、今はここ食堂で、六課の新しいマスコットキャラとしての位置を確立しつつある。

「ね～、セッテはどうして五代さん達のお手伝いしないの？」

「ヴィヴィオが退屈しないように相手をするためだ」

「？　ヴィヴィオは、みんなが働いてるところを見てるだけで楽しいよ？」

「そうなのか？　なら、ここで大人しくしていてくれ」

「は～い」

ヴィヴィオの言葉に意外そうな表情を見せ、セッテは厨房の方へ歩いて行く。ヴィヴィオはその背中を見送り、にこにこと笑っている。ヴィヴィオはなのはの部屋を使う事になり、昼間は五代達の目の届く場所である食堂にいる事になった。

それに、もし外に行きたい時はザフィーラが相手をする事になっているので、ザフィーラも今日から食堂に常駐している。そんな彼の仕事はヴィヴィオの監督役だけではなく、必要に応じての力仕事だったりする。

セッテを加え、更に活気付く厨房。ヴィヴィオはそれを眺め、本当に嬉しそうに笑っている。そんな食堂へ、思わぬ客人が現れた。

「こんにちは」

「真司、久しぶり」

「メガーヌさん！　ルーちゃんも！」

アルビーノ親子の来訪。それに真司だけでなくチンク達も驚いた。五代やリイン達は、メガーヌはともかくルーテシアと会った事はないが、外見から娘である事は悟った。そして、二人は厨房へ近付いて笑みを見せる。

そして、メガーヌに促されてルーテシアが五代達に挨拶を兼ねた自己紹介をし、それに五代達も同じように返す。そこへザフィーラがヴィヴィオを連れて近付いた。それに全員の視線が向く。

ザフィーラは、ルーテシアとヴィヴィオが歳が近いので、友人になってもらおうと考えた。ヴィヴィオの周囲にはエリオとキャロぐらいしか幼い者がいない。しかし、二人はもう局員として働いているため、あまり子供らしくない部分が多い。なので、学生をしているルーテシアならばいい相手になると思ったのだ。

五代達もザフィーラの考えが何となく分かったのか、ルーテシアへヴィヴィオを紹介した。そして、それを受けてヴィヴィオが笑顔で元気良く名前を名乗り、それを聞いてルーテシアも微笑んだ。

「私はルーテシア。呼びにくかったら、ルーでいいよ。よろしくね、ヴィヴィオ」

「うん。よろしく、ルー」

微笑み合う二人。それを見て誰もが笑顔になる。と、そこへタイミングを計ったのかのようにエリオとキャロがやってきた。何でも、転送準備が整ったらしく、これから出発するのでセッテを呼びに来たのだ。

調査班に参加しているセッテ。留守番するのは基本的に戦闘に不向きな者達だが、ノーヴェとウェンディは残る事にしているし、ディエチも残る。そのため、ヴァルキリーズもそこまで戦力を失う訳ではなかった。

そして、当然ながらエリオとキャロもルーテシアと出会い、軽い自己紹介をする。特にキャロとルーテシアは共に召喚魔導師。その共通点に二人は喜び、機会があればゆっくり話をしようと約束し、セッテと共に食堂を後にする。

ルーテシアはそれを見送り、同い歳の友人を得た事を喜んでいた。それだけではない。キャロもエリオも局員。自分もその気になれば、今にでも局員になれるという事を確認させてくれる存在でもあったのだから。メガーヌはそれに気付いてやや困り顔をするも、ルーテシアはそれを分かっているのか、こう告げる。

「大丈夫。局員になるのはまだ先だから」

「まだって……もう、なる事は決まってるのね」

ルーテシアの言い方にメガーヌは苦笑する。同じように五代達も苦笑した。何故ルーテシアが局員を目指すかを知っている真司達。五代達はそれを知らないが、おおよその見当はついたのだ。

そう、母であるメガーヌに憧れてだろうと。どこでも子は親を見て育つのだなと、五代は思った。自分も父の背を見て冒険家になったような節がある。やはり血は争えないのだろう。知らず子は親の影響を受けるものなのだと。

そんな事を考えている五代。真司はルーテシアにアギトが今はいない事を伝えていた。それに少し残念そうな表情を見せるも、なら帰ってくるまで待っていると返し、ルーテシアはメガーヌへ視線を向ける。

それにメガーヌも笑みを見せて頷いた。ただし、はやての許可が下りなければ駄目だと告げて。それを聞いて、ルーテシアはなら問題ないと笑った。それに全員が不思議顔。だが、リインはその理由

を悟った。

「もう主に許可を取ったのか？」

「はい。始めは驚かれましたけど、お母さんの返事と同時に許しをもらいました」

「マルチタスク、か。ルーお嬢さんも大した物だ」

チンクの言葉にルーテシアは小さく笑い、真司が抜け目ないと言って笑った。こうして、アルビーノ親子は六課に滞在する事になり、ヴィヴィオはルーテシアから魔法学校の話などを聞いて、学校への興味を持つのだった……

いつものようにデスクワークを片付けるなのは達スターズ。しかし、そこにライトニングの姿は当然ながらない。スバルとティアナは空席となっている向かい側を見つめ、揃って同じ事を思っていた。

（確かに場所が場所だから、私達も六課を離れちゃ不味いって分かってるけど……）

（海底、か。何かあっても、もしかしたらすぐに援護に行けない可能性もあるし……）

ヴィヴィオという邪眼が狙うだろう存在。それがいる今、六課の防備は一層気を配らないといけない。その事は分かる。だが、やはり不安があるのだ。今回の戦場になるかもしれない場所には。スバルとティアナが不安を微かに抱く中、なのはとヴィータはそこまで

不安を抱いていなかった。
　その理由は当然信じているからだ。ＲＸを、アギトを、そしてライトニングの者達をだ。特になのはとヴィータは、自分達隊長陣四人を相手に五分以上の戦いをしたＲＸの力を知っている。故にそこまで不安はない。

「……いざとなったらリインかアギトがシグナムとユニゾン出来る。戦力的にはかなりマシだ」

「そうだね。それに、万が一の時には、ね」

　なのはの言い方にヴィータは何かを思い出したのか、どこか不安そうにではあるが頷いた。そう、今回アギトが参加する事になったのには訳がある。それは、翔一との関係での話。あの四つ巴の模擬戦で判明した事実。
　それがある種での翔一とアギトの奥の手。ただし、実戦で使った事はないため、未だにその力は未知数なのだ。そして、体に掛かる負担も同様に。故にヴィータには若干の不安がある。出来るならそれを使う事のない事を願うのみだ。

「ああ……でも、出来れば使わないで済んで欲しいけどな」

「ふふっ、翔一さんが心配なんだよね？　ヴィータちゃん」

「ばっ！？　ちげ～よ！」

　なのはの指摘に顔を真っ赤にして反論しようとするヴィータ。それをなのはは笑みを浮かべて聞いている。そんな二人を見て、スバルとティアナは揃って苦笑した。そして、一度だけ顔を見合わせると、小さく頷いて顔をなのは達へと向けた。

「「なのは隊長、ヴィータ副隊長、仕事してください」」

そのどこか事務的な声に二人は動きを止め、咳払いをすると何事も無かったかのようにデスクワークを再開した。それを見て起きそうになる笑いを殺して、スバルとティアナは努めて真面目な表情で仕事を続ける。

そんなどこか和やかな雰囲気の中、スターズは平和に過ごすのだった……

ミッドチルダの湾岸地区。そこのとある海底にそれはあった。古代遺跡。それはこれより少し先の時代に発見されるはずのもの。とはいえ、それはここでは語るまい。ライドロンはその強固な顎の部分を使い、そこの一部に穴を開ける。そこへその車体を入り込ませ、海水が浸入しないよう食い止めた。

そして、ＲＸとアギトがまず降り立ち、その環境が常人でも平気なものかを確認する。それを確かめ、続くようにツヴァイとアギトが現れた。四人は周囲を見渡し、崩壊の可能性がない事を確認すると、早速とばかりに転送魔法の準備に入る。前回遠距離通信が妨害された事を受け、今回は念のために通信手段を電波に頼らないものにした。それは……

＜アクロバッター、こちらは無事到着した。そう、ノーヴェちゃん達へ伝えてくれ＞

＜リョウカイダ＞

キングストーンを使った連絡。これならば大抵の妨害手段では邪

魔されない。格納庫には整備員達と共にノーヴェ達もいる。後はそこから報告してもらえばいいだけ。ＲＸが連絡を終えたと同時に光太郎へと戻る。それに呼応し、アギトも翔一へと戻った。

その間にも、ツヴァイとアギトが転送魔法の準備を進め、それを終えた。最初にここへ来るのはライトニングになっている。その後、ヴァルキリーズの希望者達となるのだ。

「凄いな……これ、本当に昔の人の手で作ったんですよね」

「ああ。ここの世界の人達も、古代には想像も出来ない超技術を有していたのかもしれない」

通路の壁に手を当て、翔一はしみじみと呟く。光太郎もその凄さに感じるものがあるのか、やや感動するように答える。すると、そんな二人へツヴァイがやや自慢げに胸を張って告げた。

「そうなのですよ。古代には、アルハザードと呼ばれる超技術の世界があったのです」

「何でも、下手すりゃ死人さえ生き返らせる事も出来たんじゃないかってな」

ツヴァイの言葉に続いて告げられたアギトの言葉に、翔一と光太郎が揃って息を呑んだ。人の蘇生。それは確かに超技術だ。だが、それは翔一には、あの神のような青年を思い起こさせるものがあったし、光太郎には、歴代ライダーから聞いた改造人間技術の大本を思い起こさせた。

どちらにも共通するのは、実在すれば人の手に余る技術だという事。そして、命の尊厳にも大きく関る事だと思った。簡単に死人が生き返る。それは、命の尊さを軽視する事になりかねない。命は一

つ。だからこそ、重く儚い故に守るのだ。

そんな風に考える二人に気付かず、ツヴァイはアルハザードが今は滅んでしまった事を話していた。アギトもある程度は知っているのか、それに相槌を返している。そこへ、転送魔法陣を使ってフェイト達ライトニングが現れた。

「到着、だね」

「ここが……海底遺跡」

「凄いです……」

「翔一、南、怪人の気配はあるか？」

軽く笑みを見せるフェイト。エリオとキャロはそれに頷くも、周囲の光景にやや驚きを見せる。シグナムはすぐにライダー二人へ敵の事を尋ね、それに二人が首を横に振った。しかし、その表情が緩む事はない。光太郎の勘が、翔一の何かが告げているのだ。

ここで何かが起きると。それを二人の表情から察し、シグナムも表情を引き締める。そして、後から来るヴァルキリーズと翔一、アギトが行動を共にし、ライトニングと光太郎、ツヴァイが共に行動する事で一致し、先に光太郎達が動き出す。

それを見送り、翔一とアギトは互いを見つめる。

「な、実は翔一に相談があるんだけど」

「何？」

アギトは翔一へある事を耳打ちする。それに翔一は頷いて、真剣な表情でその時はお願いすると告げた。それにアギトは嬉しそうに笑みを見える。そこへ丁度よくトーレ達が現れた。ヴァルキリーズの参加者は以下の通り。

ギンガ、ドゥーエ、トーレ、セッテ、オットー、ディードの六人だ。残りは六課に残り、有事に備えている。指揮官役のオットー、前線役のギンガにトーレとセッテ。護衛役のドゥーエとディードという考えの編成だ。

「翔一さんとアギトが私達とですか？」

「うん。よろしくね、ギンガちゃん」

ギンガの問いかけに頷く翔一。それを聞いて、セッテが少し困った顔をして告げる。

「……変身したら、ややこしいですね」

「そうだな。その時はどうする？　オットー」

その発言に苦笑しつつも、意見を聞こうとトーレは指揮官役の妹へ問いかけた。それにオットーは僅かに考え、名案とばかりに告げた。

「その際は、ライダーと呼びましょう。それなら、混乱せずにすみます」

「単純だけど、いい案だわ。それでいきましょ」

ドゥーエが誉めるようにオットーへ視線を向ける。それに恐縮で

すと返すオットー。翔一もそれにやや嬉しそうな笑みを浮かべた。ライダーと呼ばれる事を少しだけ誇りに思ったからだ。今の翔一にとって、仮面ライダーの名は憧れでもある。

名乗る事に躊躇いはないが、呼ばれる事はあまりない。故に、嬉しく思うも気持ちを引き締める。その名に恥じないようにしなければと。こうして翔一達も歩き出す。向かうは光太郎達とは逆方向。冥王イクスヴェリア。その存在を捜すために……

周囲に気を配りながら、慎重に歩く光太郎。古代の遺跡には、罠などがある可能性もある。そう考えての事だ。魔法などで探査する事も出来るが、何よりも確実なのは自分の感覚。そのため、光太郎は鋭い眼光で辺りを見回していた。

フェイト達もその後ろを歩きながら、なるべく下手な事をしないように壁から離れて歩いている。先程から会話はない。ツヴァイもシグナムの肩に乗りながら、真剣な表情で周囲を見渡していた。

「……妙だ」

そんな時、ふと光太郎が呟いた。それに全員が視線を向ける。光太郎は足を止め、フェイト達へ振り向く。

「さっきから風が流れているんだけど、ここにきて、それが俺達の来た方にじゃなく違う方向に流れている。どこかに通風孔があるのか……もしくは……」

「他の場所から侵入した者がいる。そう言いたいのか？」

シグナムの言葉に光太郎は無言で頷いた。それに全員の表情が険

しくなる。その可能性がある者はただ一つ。故に、先程よりも気を引き締めて歩き出す。風の流れる方向へと。しばらく進み、光太郎達は大きな広場のような場所へ出た。

そして、そこにはあるものがあった。それは、少女が入ったポッドらしきもの。それを見て、光太郎達は直感で悟る。それがイクスヴェリアだと。しかし、周囲にはそれを操作するような物さえなく、どうやって目覚めさせるかが分からなかった。

全員で隈なく周囲を調べるも、それらしい物は見つからず、光太郎達は困り果てた。無理矢理出そうとすればどうなるか分からない。しかし、グズグズしていたら怪人達がやってくる可能性もある。

どうしようと六人で考え始めたその時だ。遠くの方で爆発音らしきものが聞こえたのは。それに全員が頷き合い、戦闘態勢を取る。ここにも敵が来ると、そう感じたからだ。ポッドを守るようにその前に陣取り、フェイト達の視線が光太郎へ注がれる。

「変……身っ！」

ＲＸへ変わり、その能力を以って周囲を探る。そして、その聴覚が複数の足音を捉えた。しかも、その足音のほとんどは同じ存在の物だ。それが意味する事を理解し、ＲＸは告げる。マリアージュ達が来る、と。

それにツヴァイがシグナムとユニゾンする。怪人を相手する事になる可能性がある以上は、出来るだけ準備をしておくに越した事はない。それに、ツヴァイでは怪人達を相手にするには力不足が否めないのだから。

だが、その時ＲＸは妙な感覚を覚えた。それは、あの発電所で感じたもの。それが意味する事を考え、ＲＸはまさかと思いながらも、フェイト達へ呼びかける。

「みんな、気をつけるんだ。何か嫌な感じがする」

「分かった。前線はＲＸと私がする。エリオ、お前はキャロの護衛をしろ」

「了解ですっ！」

「キャロは支援をお願い。私はＲＸとシグナムの援護に回るから」

「はいっ！」

それぞれに勇ましく返事を返し、エリオもキャロも身構える。それに三人も頷き、視線を前方へと向けた。そして、そこへやがて複数の足音と共に複数のマリアージュと、フェイト達が予想だにしなかった相手が現れる。

唯一その存在を予想していたＲＸは、強く拳を握り締める。だが、フェイトとシグナムは息を呑み、エリオとキャロは表情を恐怖に染めた。そこにいたのは……

「まさか貴様が出てくるとはな、邪眼っ！」

「姿が変わったのは知っていたが、態度は変わらんようだな世紀王よ」

邪眼の言葉に、ＲＸは一歩だけ前に出る。そして、視線を少しだけシグナムへ向けた。その意味を理解し、シグナムは頷いてみせる。そしてそれを合図にＲＸは邪眼へと向かっていく。同時にシグナムもマリアージュ達へと向かって走り出す。

フェイトもそれに呼応し、マリアージュへ攻撃を開始。エリオは

邪眼の威圧感を振り払るように頭を振ると、キャロを守るように構え、シグナムやフェイトの攻撃を避けて向かってくるマリアージュを睨みつけた。キャロはまだ恐怖に飲まれていたが、エリオの様子やＲＸが邪眼と戦う姿を見て、何とか立ち直る。

「ハーケンセイバー！」

「はぁぁぁぁっ！」

フェイトの放つ魔力の刃をかわしたマリアージュの一体を、シグナムが胴薙ぎにした。即座に別のマリアージュへと向かうシグナム。それとほぼ同じくして起きる爆発。フェイトはそれを横目に、また別のマリアージュの相手をし始める。

エリオはキャロのブースト魔法を受けながら、マリアージュ相手に奮戦していた。シグナムとフェイトが大半を抑えてくれているので、エリオが相手するのは一体か二体で済んでいるのもあるが、やはり彼自身の成長もある。

「ストラーダ！」

”どうぞ”

マリアージュが身動き出来なくなると自爆する事を理解しているエリオは、その動きを制限するように動く。その狙いは、彼が守っている少女に理解されている。故に、キャロはそれを見て力強く告げる。

「そこっ！　アルケミックチェーン！」

バインドの一種であるそれが、エリオの相手をしていたマリアー

ジュの動きを完全に抑える。それが振り解けない事を悟り、マリアージュは自爆する。エリオはそれを察知し、高速移動魔法で即座に離脱し、もう一体へと槍を振るう。
マリアージュをライトニングが完全抑える横で、ＲＸは一人邪眼と戦っていた。あの発電所ではいいようにやられた相手。それを相手にＲＸはある確信を抱いていた。

（いける……ＲＸとなった今なら、俺だけでも邪眼を倒せる）

そう思うも、油断はしない。そう、警戒すべきは相手の強さではなく、その数。ジェイルが六課に告げた邪眼の復活方法に関る情報。それによれば、まだ邪眼は十一体いるのだから。
つまり、この邪眼さえ捨て駒に出来るのだ。おそらく本体となるのは、最後まで残った個体なのだろう。故に、この邪眼は自分のデータ取りに利用する可能性が高い。

「邪眼っ！　貴様が何を考え、何を企てようとしても無駄だ！　俺達仮面ライダーがいる限り……悪が、闇が栄える事はないっ！」

「ほざけ！」

互いの手を押さえ合っていたＲＸと邪眼だったが、その声をキッカケに離れる。その際、ＲＸへ邪眼が電撃を放つ。それをＲＸは間一髪避け、地を蹴った。そして邪眼の体を押さえるようにしながら、その巨体を投げる。
そして、更に追い打ちとして再び地を蹴り、立ち上がる邪眼へ勢い良く拳を繰り出す。そう、ＲＸパンチを。それは、これまで怪人を倒してきた流れだ。それに気付き、エリオ達三人には期待が浮かぶ。だが、フェイトとシグナムには不安しかない。

ユニゾンしているため、ツヴァイがそんなシグナムの反応に疑問を感じて問いかける。

”どうしたですか、シグナム。これでＲＸが勝ったですよ？”

「いや、おそらくあれでは終わらん」

「そう……あの時だって、私達にクウガやアギトが何度も攻撃を決めてやっとだったんだ」

シグナムの答えを聞いて、フェイトが噛み締めるようにそう続く。それを聞いて、エリオもキャロも信じられないという表情を浮かべた。丁度その時、ＲＸがその蹴りを邪眼へ叩き込むところだった。

捻りを加え、繰り出される両足によるライダーキック。ＲＸキックが邪眼に見事直撃する。それの衝撃に、邪眼は地面を滑るように飛ばされる。その勢いが終わると同時に、邪眼が膝を地面につけた。しかし、それだけだ。邪眼は何事も無かったように立ち上がったのだ。

それを見てエリオ達三人に戦慄が走る。一方、ＲＸ達はどこかでやはりと思っていた。だからだろう。ＲＸはもう一つの自分の必殺技を使うしかないと感じていた。それは、多くのクライシス怪人を倒してきたもの。破られた事はあるが、それでもＲＸが絶対の自信を持って使える技、

しかし、それを使う前に邪眼が再び攻撃を開始する。それにＲＸは対処するために動く。電撃を駆使しながら、接近されれば格闘戦もこなす邪眼に、ＲＸも中々それを使う隙を見出す事が出来ない。

シグナムとフェイトは残ったマリアージュを早く片付け、ＲＸの援護に向かいたかった。だが、焦りが大きな痛手を生じる可能性が

ある。それ故、二人は急ぎつつも冷静に対処しようと心掛けた。
エリオとキャロも、ＲＸの技が邪眼を倒せなかった事に受けた衝撃を何とか振り払い、フェイト達の援護にシフトしつつあった。一方、ＲＸは邪眼に苦戦しながらも、何とか隙を作り出そうとしていた。全ては、邪眼を倒すために……

光太郎達とは逆を進んでいた翔一達は、周囲に気を配りながら歩いていた。ヴァルキリーズは、戦闘機人としての能力を最大限活用しながら周囲を調査し、翔一はアギトを肩に乗せ警戒するように歩いている。すると、翔一が突然立ち止まった。アンノウンを察知する時と似た感覚。そう、発電所での感覚を感じたために。
そんな時、ディードが何かに気付いて足を止めた。そこにあったのは、巨大な蜘蛛の巣。正確には、大きな穴を糸で塞いでいるのだが。それを見て誰もが悟る。既に怪人がここへ侵入していると。そう、フュンフの糸だと思ったからだ。

「みんな、気をつけて！　ここには……」

翔一が自分の感じた事から警戒を呼びかけようとしたその時だ。何かが翔一達へ迫っていた。それをいち早く察知したのはオットー。彼女は全員が視線を穴へ向けている間も周囲の索敵などを怠らなかった。司令塔として常に現状を把握し、どんな事態にも対処する事が出来てこそ指揮と言える。そう彼は、シャマルやグリフィスから教わっていたのだ。

「ＩＳ、レイストーム！」

迫り来る閃光を同じ閃光で迎え撃つオットー。それを見て、全員

が身構える。翔一も即座に変身の構えを取り……

「変身！」

ライダーへと変わる。そして、視線を前方の相手――黒髪のオットーであるアハトへ向けた。やや押され気味だったレイストームを見て、ギンガがリボルバーシュートを加え、それを助ける。相殺される閃光と閃光。それに少しだけ視線を動かし、アハトは無機質に呟く。

「さすがに気付く……か。少しはダメージを与えたかったんだけど」

「オットーのコピーか。たった一人、ではないだろう。早くフュンフを呼んだらどうだ？」

トーレの言葉にアハトは呆れたような表情を見せる。それにライダー達が疑問を抱く。

「フュンフ？　ああ、その糸を見たからか。残念ながらあの役立たずはいないよ。二回も失敗したからね。今はラボで大人しくしているさ」

「何だと？　では、あの糸は一体……」

「セッテ、可能性は二つよ。一つは別の怪人がいて、そいつの能力。そしてもう一つは……」

そこでドゥーエは視線をアハトへ向ける。それにアハトが邪悪な笑みを返した。それに全員の緊張感が増す。

「そう、あれは僕がやったのさ。創世王様に頂いた……この姿で！」

アギト達の目の前でおぞましい姿へ変化するアハト。その変貌に誰もが嫌悪感を抱く。もう何度となく見てきた怪人達の姿。だが、それでもそれに対する生理的嫌悪感は消えない。むしろ、強くなるぐらいだ。生命を弄ぶかのような存在を作り出す邪眼や、その姿や力に対し何ら疑問も悲しみも抱かぬ怪人達に。

――――覚悟しろ。僕はフュンフのような失態はしない。

そこにいたのは蜘蛛の怪人。だが、それはフュンフとは違う。そう、猛毒で知られるタランチュラだ。かつてゴルゴム怪人にも、ハチ怪人とツルギバチ怪人という親戚関係の怪人がいた。邪眼は元々世紀王。故に、その事を知っていたのかもしれない。似た様なモチーフから生まれた怪人の事を。

とにかく、アハトはそのおぞましい顔にある口から何回も糸を吐く。それを回避するアギト達。糸は網のように展開し、接着した部分を軽く腐食させる。毒が混ざっているのだ。それを横目で確認し、警戒すると共に誰もが攻撃に移ろうとするのだが、アハトがその手足から閃光を放った。レイストームだ。

「チッ！」

「手足からね……でも！」

「……遅い」

トーレにドゥーエ、セッテは軽々とかわしてアハトへ視線を向け、反撃に転じようと動き出し……

「相殺する必要もないね……」

「ええ。これなら……」

「目を閉じてでも避けられるわ！」

オットーがその狙いの甘さを訝しむように告げる。それにディードも同じようにどこか疑問を抱きつつも同意し、ギンガははっきり断言してトーレ達に遅れるなと走り出す。

「おっと！」

「はっ！」

やや余裕さえ見せるアギト。それにライダーも続くようにそれをかわす。そんなアギト達を見つめ、アハトは何もしようとはしない。トーレ達が揃って攻撃に転じるのを見ても、だ。ただ悠然とそこに立っているだけ。それに気付いて、オットーとライダーは同時に嫌な感覚を覚える。

そして、オットーが何かに気付いたように表情を変え、後方を振り向いた。それにライダーもつられるように顔を動かし、言葉を失う。

「しまったっ！？　あの糸にはこういう使い方が……」

そう、あのアハトの閃光は先程放たれた糸が作り出した網に当たり、その角度を変えていたのだ。それらは計算されたかのように角度を変え、後方からライダー達を襲う。

その速度を初撃よりも速め、向かっていく閃光。それは完全にア

ハトへ攻撃しようとするトーレ達を狙っている。それを瞬時に悟り、オットーは振り向いて告げる。

「姉様達っ！　回避をっ！」

「もう遅い……」

オットーの叫びに重なるアハトの声。そしてその前方に同時に着弾する幾筋もの閃光。それらはアハトに攻撃しようとしていたトーレ達へ殺到し、轟音を響かせる。オットーにディード、それに二人のアギトは攻撃に転じようとしていなかったため、何とか回避出来た。しかし、それでも何とかだ。

おそらく攻撃しようとしていたトーレ達は、避ける事が出来なかっただろう。そう思い、ライダーは拳を握り締める。オットーも同じように拳を握り、自分が気付く事が出来なかった事を責めるように唇をかみ締める。だがその時、一瞬だが表情に驚きが浮かぶ。だがそれをすぐに消し、悔しそうなものへ戻す。

そんな二人とは違い、アギトは糸が相手なら自分の出番とばかりに、後方で網を作る糸へ向かった。

「アタシが全部焼き尽くしてやる！」

その声と共に生まれる炎が糸を包む。しかし……

「なっ！？」

「フュンフの物と同じ手段が通用するなんて思わない事だ。言ったはずだ。僕はフュンフとは違うと」

アハトの糸はアギトの炎では燃えなかった。それに衝撃を隠せないアギト。それを小馬鹿にするようにアハトはそう告げた。それに悔しそうに表情を歪めるアギトだったが、何を思いついてライダーの傍へと移動する。

それを見つめながら、アハトは攻撃しようとはしない。ただ、トーレ達がいた場所を踏みつけながら前に出る。そう、今アハトの前にライダーが立ちはだかっているのだ。下手に動けば痛手を受ける。レイストームを使っても、ライダーはそれを完全に見切り、反撃を繰り出す。しかも、反射させて当てるとしても、その時間だけでライダーには十分な時間となる。

そこまで分かっているからこそ、アハトは迂闊な動きはしない。自分は他の者達とは違うのだ。その思いから、アハトは比較的慎重に行動していた。しかし、そこへ閃光が襲い掛かる。オットーの攻撃だった。

オットーは冷静さを欠いたような表情でアハトへレイストームを放っていた。ディードはそれを止めようとしているが、聞く耳持たないとばかりにオットーは感情のままアハトへ攻撃を続けた。

「よくも姉様達をっ！」

「オットー、落ち着いて！」

そんなディードへオットーは微かにだが視線を向けた。それを見て、ディードは何かを悟る。だが、それを表情に出さぬように努め、必死にオットーを止めようとする。

「……ふん。怒り、というものか……くだらない」

そんな二人を見つめながら、攻撃を受け止めるアハトは吐き捨て

るように呟いた。それを見つめ、ライダーは攻撃に参加しようとして、アギトのある提案によってそれを止められた。

「な、ライダー。アレを試してみようぜ。アレなら……もしかしたら……」

アギトの告げる予想を聞き、ライダーは頷いた。そして、視線を一度だけオットー達へ向ける。すると、ディードが少しだけライダーへ視線を向けた。その視線にライダーは軽く驚くも、それに小さく頷き返し動き出す。

目指すは先程アギトが燃やせなかった糸の網。そしてその前に立つとライダーは片手でベルトの側面を叩く。それが体を赤く変える。炎を司るフレイムフォームだ。更に、二人のアギトは声を揃える。

「「ユニゾン・イン」」

「何だとっ?!」

アハトの動揺に、オットーはちらりと視線を相手から外し、その後方の瓦礫へ動かした。それをアハトに気付かれないように戻し、ディードへ目配せをした。それに互いしか分からないぐらいに頷きを返し、ディードは静かに時期を窺う。

ダブルアギトはユニゾンを成功させた。そう、あの模擬戦で彼女は感じ取ったのだ。フレイムフォームにも自分との適正があると。とはいえ、龍騎程の完璧さはない。だが、それでもシグナムと同程度の融合係数はある。フレイムフォームは炎を司る姿。更に、その姿は騎士。烈火の剣精であるアギトにとって、これまたとない相手といえたのだ。

ユニゾンしたライダーは、体の周囲に炎を猛らせながらベルトか

らフレイムセイバーを取り出す。

そして、それを手にした瞬間、その刀身が激しい炎で燃え盛る。アギトの炎熱魔法が火をつけたのだ。それを構え、網目掛けて振り下ろすライダー。その一撃が燃えなかった網を斬り裂き、燃やす。それに頷いて、ライダーは居合いのような構えを取る。

その鍔が展開すると同時に、フレイムセイバーの炎が一層激しくなったのを感じ、二人のアギトは声を揃える。

「轟火一閃っ！！」

”轟火一閃っ！！”

横薙ぎの剣閃は、そこにあった網を全て綺麗に焼き払う。それにアハトが驚愕して攻撃の勢いが弱まった。それを感じ取り、オットーはここぞとばかりにレイストームを最大にし、攻撃を相殺させて叫ぶ。

「今ですっ！」

「「「「「あぁぁぁぁっ！！」」」」」

声と同時に、アハトの後方の瓦礫を軽く吹き飛ばすように再びレイストームが放たれる。すると、そこからトーレ達が飛び出した。それと呼吸を合わせアハトへ立ち向かうディード。そう、あの瞬間オットーにギンガから念話が聞こえたのだ。全員何とか生きていると。だが、ダメージも酷いため、何とか反撃するために上の瓦礫をどうにかして欲しいと。

それを実行するため、オットーは賭けに出た。激情からレイストームを使ったように見せかけ、双子故の相互理解を利用してディー

ドにも協力してもらい、アハトが周囲に意識を向ける事のないようにしようと。そこに丁度良くアギト同士のユニゾンが起き、これ以上無い援護となったのだ。

後方と前方から同時に、しかも一方はもう倒せたと思った者達に襲われ、アハトは混乱した。そこへトーレ達の一撃が炸裂していく。

「もらったわ！」

ドゥーエの爪がアハトの足を一本斬り落とす。

「油断したな！」

トーレのブレードが更に二本斬り落とし……

「そこだっ！」

セッテのブレードが負けてなるかと二本を切り裂く。

「これでっ！」

ディードがツインブレイズで僅かとなった足を斬り……

「ラストっ！」

ギンガが最後の一本をその拳で打ち砕く。それを見届け、オットーが後を頼むとばかりにライダーへ視線を向けた。

「ライダー、トドメをっ！」

その声に応えるようにライダーはアギトとのユニゾンを解除し、グランドフォームへ変わって構えた。その角――グランドホーンが展開し、右足にその力が集約していく。それを感じ取り、ライダーは跳び上がった。そして、失った場所から火花を噴き出しているアハトへ、その必殺の蹴りを放つ。

「ライダーキィィィック！！」

その言葉と共に放たれた蹴りは、アハトの体を完全に捉えた。そして、その体を吹き飛ばす。アハトが地面に激突するのと同時にライダーは着地し、その展開した角を元に戻す。

「無駄じゃない……僕の死は……無駄じゃないっ！」

ライダーの新しい力。それを見る事が出来た。そう思って叫ぶアハト。そして、その叫びと共に爆発し散った。それに誰もが思った。確かに無駄ではないと。その込めた意味は、これでまた平和へ一歩近付いてみせるから。そんな強い想いだ。

だが、直後ライダーは翔一へ戻り倒れこんだ。それを咄嗟に支えるオットーとディード。おそらくユニゾンのせいだろうと誰もが結論付け、そのまましばらく待機する事にした。ギンガ達もダメージが酷く、救助のために六課へ連絡し、誰かに来てもらう事にして……

アギト達がアハトとの戦いを終えようとしていた頃、ＲＸはフェイト達と協力しながら邪眼と対峙していた。しかし、状況は劣勢といえた。その理由は、ＲＸ達の後方にあるポッド。邪眼はそれを射線上に入れて電撃を放つのだ。

ＲＸ達はそれからポッドを守るために動かざるを得なくなり、必

然的に防戦一方となっていた。更にエリオとキャロ、そしてツヴァイは邪眼の威圧感からその疲れが出始めていて、フェイトとシグナムはそれに軽い焦りを感じていた。

ＲＸも、それに改めて自分の奥の手を出すしかないと決意を固め、邪眼へ飛び掛る。それは邪眼の電撃を誘うためのもの。案の定邪眼はＲＸへ電撃を放ち、それを受けてその体は転がった。

「「「「ＲＸっ！」」」」

「どうやらここまでのようだな」

急いで駆け寄るフェイト達。それに余裕の言葉を発する邪眼。しかし、それに構わずＲＸは小声である事をフェイト達へ告げると、再び立ち上がる。そして、その右手を高く上げ、左手を腰に添えた。

その直後ＲＸから眩しい光が放たれる。それに目を逸らす邪眼。それをついてフェイト達が一斉にバインドを施す。狙いはその脚部。動きを封じるためだ。そしてそれを見届け、ＲＸは左手をベルトへ回す。

「リボルケインっ！」

ベルトから出現する輝く剣のようにも見える武器。それがＲＸの必殺武器、リボルケインだ。ＲＸはそれを回すようにして右手に持ち替えると、その場から跳び上がる。そして、目が眩み狙いがおぼつかない邪眼の攻撃をかわしながら、その体にリボルケインを突き立てた。

邪眼の体を貫くリボルケイン。それは邪眼の体から火花を噴き出させる。そのダメージに耐えながら、ＲＸへ電撃を放とうとする邪眼。しかし、その攻撃をＲＸは左腕で阻止して、更に残した右手で

強くリボルケインを押す。

「グオォォォッ！」

「邪眼、覚えておけ！　例え何度甦ろうと、俺達仮面ライダーがいる限り、平和の灯は消えんっ！」

「お、おのれぇぇぇぇっ！！」

そして、ＲＸは邪眼から離れると、リボルケインでその場にＲＸと書くように動く。その背後で全身から火花を散らしながら、邪眼は仰向けで倒れこんだ。その瞬間、ＲＸの動きが止まる。同時に起きる爆発。

こうしてＲＸ達も邪眼の襲撃を退けた。すると、ポッドが急に動き出した。そして、困惑するＲＸ達の前で一人の少女が目を覚ます。

――――……何でしょう？　何か暖かな光を浴びたような……？

少女――――イクスヴェリアはそう不思議そうに呟くと、すぐに悲しそうに目を伏せた。だが、周囲にいるＲＸ達に気付いて、その視線を向ける。そして、ＲＸの姿に驚くものの、そこから何かを感じ取ったのか特に何か言う事もなく、周囲を見渡してマリアージュの残骸を見たのか、こう尋ねた。

貴方達の目的もマリアージュなのか、と。それにＲＸ達は、心からの声でそれを止める手段を探していると告げ、詳しい話はここを出てからしたいと返した。それにイクスヴェリアも嘘ではないと感じたのか頷き、歩こうとした。だが、その体がふらついたのを見て、ＲＸがその体を抱き抱えた。

「申し訳ありません」

「気にしないでいい。さ、行こう」

静かに立ち去るＲＸ達。その後、翔一達とそれを助けにきたスターズと合流し、光太郎はライドロンで、残りは転送魔法で海底遺跡を後にする。隊舎に戻った光太郎達は、そこであった戦いを語り、邪眼自身も遂に動き出した事を知って、そろそろ決戦は近いと感じ取った。

故に、今後はより一層の激戦を覚悟しなければと誰もが思った。翔一はイクスヴェリアと共に精密検査のために医務室へ。ギンガ達も負傷が酷いため、念のためにジェイルがシャマルに協力する形で治療に参加する事になった。

アギトはルーテシアと久しぶりの再会を果たし、彼女へ友人として紹介されたツヴァイは、それに密かに喜んだ。ヴィヴィオは似たような境遇のイクスヴェリアとの出会いに、何か因縁めいたものを感じる。

一方、光太郎は邪眼の行動から、ある推測を立ててそれをはやて達へ伝えた。それは、あの決戦が予想される日の事。そう、邪眼は一体を残し、残る自身を全て投入する可能性があると。それに五代と真司は最悪一人でも邪眼と戦い、倒してみせると覚悟を決める。はやて達も決して挫けないと誓い、その心構えを固める。

こうして、六課はまた新たに決意する。複数の邪眼との戦いへの思いを固め、その心に火を灯す。希望という名の、強き火を……

見事邪眼とアハトを退けた六課。しかし、その代償としていくつかの情報を明かしてしまう事になってしまう。それでも、彼らに迷いはない。

イクスを守り抜き、邪眼の手に残る切っていない手札はもう多くはない。そんな有利な状況だが、楽観視する者はいない。
　運命の日である公開意見陳述会。その日が、もう近くまで迫ってきているのだから……

――

色々とやりたい事だらけだった今回の戦闘、いかがでしたでしょうか？
龍騎よりも先にお披露目のダブルアギト。でも、おそらく出番はこれっきり。なので、豪華（轟火）一閃なんです。
自分としては、これでやりたかった事の半分ぐらいを消化出来たかなと思います

運命の日、迫る

「しまった！？」

龍騎の手からドラグセイバーが弾き飛ばされる。それを見て即座にドラグセイバーを射撃で遠ざけるティアナ。そのため、取りに行こうとしていた龍騎の動きも止まる。更にそこへスバルとギンガが襲い掛かる。

その攻撃をかわす龍騎だったが、二人の息の合った連携に隙が中々見出せず、デッキへ手を伸ばす事が出来ない。そのすぐ横ではアギトが苦戦していた。相手はフェイトとトーレ、それにセッテだ。高速移動を主体に動かれ、フレイムフォームへの変身を阻止されているため、それに翻弄されていたのだ。

「不味い……このままじゃ……」

何とか動きは見えているので、致命傷は受けていない。だが、それでも徐々にダメージが蓄積されているのだ。何とかフォームチェンジをしようとするのだが、その度に魔法が、ブーメランブレードが、トーレが襲い掛かる。

そう、クウガと違い、超変身にベルトを叩く必要があるアギト。その欠点を三人は突いていたのだ。龍騎はベントカード、アギトはフォームチェンジと互いの特徴であり弱点とも言える部分を突かれている。これは今までの敵が狙ってこなかった事だ。それを執拗に攻められる事で、二人は自分達の弱点をもう一度再確認していた。

一方、そこから離れていない場所でもクウガが苦戦していた。

「くっ！　これじゃ……」

クウガは周囲に自分の武器となる物がない事に気付き、やや焦り気味に言った。彼の相手はシグナム達守護騎士四人とリインにアギト。更にエリオとキャロもいる。彼らは徹底してクウガの行動を制限していた。

超変身しても、その力を最大限発揮出来ないようにと。そう、何もないのだ。クウガの武器へ変えられる物が。あるのは石ころや瓦礫のみ。棒切れ一つ落ちていないのだ。これでは、ペガサスボウガンどころかドラゴンロッドもタイタンソードも生み出せない。

確かに超変身の特徴を活かして戦う事は出来る。だが、クウガは知っている。超変身はその専用武器があって初めてその真価を発揮する事を。今もタイタンでユニゾンしたシグナムの炎の剣撃やヴィータの鉄槌を防ぎ、時にはエリオの速度に惑わされながらもその攻撃を受け、シャマルやキャロのバインドをその力で無理矢理破壊している。

ザフィーラの格闘には素早くマイティへ戻り、対処する。リインの設置型のバインドは偶にペガサスになる事でそれを見抜いていた。だが、どこまでも防戦なのだ。現状を打開出来ない。そのため、クウガもまた自分の弱点を思い知らされていたのだ。

そして、そんな風にライダー三人が苦戦している頃、ＲＸは一人奮戦していた。そう、残った者達は全てＲＸへと攻撃していたのだから。

「ボルティックシューター！」

手にした銃から高エネルギーが放たれる。それをなのはの魔法が迎撃する。更に連射されるのを見てディエチが自分の砲撃を加え、押し返した。だが、その砲撃を受けてもロボライダーは軽く飛ばさ

れただけで立ち上がる。
　そこへディードが襲い掛かる。瞬間加速を使った攻撃に、ロボライダーはかわし切れずその体から火花が散る。それでも、ディードは追撃する事無く身を退いた。そこへ殺到する広範囲魔法の光。はやての魔法だ。ツヴァイとユニゾンし、その持てる力を発揮した状態の魔法。それは正確にロボライダーだけを襲った。

「くっ！　まだだっ！」

　その魔法の中をゆっくりとだが歩いてくるロボライダー。だが、そこへ追い打ちのようにウェンディのエリアルキャノンが火を噴いた。その衝撃にさしものロボライダーもたじろいた。それを待っていたかのようになのはとオットー、そしてディエチが息を合わせて攻撃を放つ。
　ディバインバスターとレイストームの輝きにイノーメスカノンの閃光が合わさり、ロボライダーを吹き飛ばす。そして起こる大きな爆発音。激しく地面に叩き付けられるロボライダー。その体からは煙が出ている。

　そこへノーヴェが走りこんでくる。とどめとばかりにガンナックルを構え、倒れるロボライダー目掛けて振り下ろす。その瞬間、その体が液状に変化し、その場から離れた。それを見たチンクとクアットロが周囲へ告げた。バイオライダーになったと。
　それにその場にいた全員が表情を険しくする。ＲＸの二段変身で、一番厄介な能力を有しているのがバイオライダーだったからだ。それを受け、即座にウーノが戦術の変更を指示する。ドゥーエはセインと共にバイオライダーのゲル化を何とかするべく動き、ディエチは冷凍弾の準備を開始。

　バイオライダーは自分へ的確な攻撃を考え、実行する周囲に感心

と頼もしさを感じていた。そう、もう彼は何度となく、自分の弱点や欠点を敵に突かれていた。そのため、それを思い知る事はない。逆にそれに気付き、対処しようとするなのは達へ敬意さえ抱いていた。

（俺の能力に慣れたのもあるんだろうが、それでも諦めずに戦う姿勢は大したものだ。これなら、どんな怪人相手でも臆する事無く戦える）

こうしてこの日の早朝訓練は過ぎていく。本来は旧六課対ヴァルキリーズ対ライダーだったのだが、それを光太郎の提言により六課対ライダーとなったのだ。それは、ライダー四人を邪眼や怪人に見て立てての事。

そのため、なのは達は協力し合って四人のライダー相手に戦っていた。各自の欠点を的確に突き、追い詰めていくなのは達。だが、それも分断出来ていればこそだった。クウガがドラゴンの跳躍力を駆使し、アギトと合流した所からライダー同士の連携が始まったのだ。

クウガとアギトはあの邪眼戦で一度連携を経験している。そのため、息を合わせる事が出来た。更に近くにいた龍騎もそれに加わった事で形勢が五分へと変化する。そして、三人はそれぞれの力を合わせ、現状を打開していく。

アギトがフォームチェンジする時間をクウガと龍騎が作り、アギトがストームフォームで竜巻を引き起こす。それを避け、フェイト達がやや距離を取ったのを見て、龍騎がクウガへドラグセイバーを拾って渡す。それを手にクウガはタイタンへ超変身。タイタンソードを手にし、竜巻を悠然と超えていく。

フェイト達が高速戦闘を仕掛けようとするも、龍騎がストライク

ベントを使い、炎を使ってそれを妨害。シグナム達へはアドベントで呼び出したドラグレッダーが向かい、そこへアギトも援護に入って奮戦。

クウガはフェイト達への対抗手段としてペガサスを使用し、龍騎からドラグクローを借りる。それがペガサスボウガンに変化したのを見て、クウガ以外が驚いた。ドラグクローは炎を打ち出す事が出来る。つまり射撃が出来るのだ。クウガはそれに一縷の望みを抱いたという訳だ。

その正確無比な射撃はフェイト達の動きを牽制する。そこを龍騎が元に戻ったドラグセイバーを手にし、攻撃開始。だが、それでも人数的な不利は覆せないと踏んだアギトは、遂にある姿を使用した。

それはストームとフレイム、グランドの力を兼ね備えた姿。トリニティフォームと呼ばれるものだ。初めて見るその姿に誰もが息を呑む。そう、両腕と体を見ただけで、それがどんな力を有しているのかを理解したのだ。

「行きますっ！」

アギトはそう告げると、手にしたストームハルバードとフレイムセイバーを同時に動かす。それが炎を纏った竜巻を生み出した。その勢いに言葉が無い一同。しかし、クウガと龍騎はすぐに我に返ると、それを好機と動き出す。

クウガは紫の金の力を発動し自分の防御力を高め、龍騎はサバイブしてからシュートベントでクウガを援護。そこへＲＸも合流し、四人は反撃を開始したのだが、結果は時間切れの引き分けに終わる。

しかし、四人の仮面ライダーが協力した力は凄まじく、誰もが恐ろしさを感じると同時に、その頼もしさに再び希望を強くしたのだった……

「おはよー、イクス～」

「おはようございます、ヴィヴィオ」

訓練場で参加者達が簡易的な反省会を終えた頃、ヴィヴィオは医務室にいた。イクスヴェリアに会うためだ。共にベルカ時代の存在である二人。だが、ヴィヴィオにはまだ教えられていないのに対し、イクスヴェリアには既にそれが伝えられていた。

だがイクスヴェリアは、ヴィヴィオを聖王とは呼ばないで欲しいとのなのは達の頼みを聞き、それを承諾。そして、ある意味では重要参考人ともいえるイクスヴェリアを、ただ保護するだけではいけないと思ったはやては、すぐに手続きを開始。彼女を自分が後見人をする事で、一人の人としての権利を所持させたのだ。

「ね、今日は遊べる？」

「そうですね……シャマル先生に聞いてみなければ分かりませんが、おそらく大丈夫です」

「ホント！？　じゃ、また五代さんにジャグリング教えてもらおー」

「ええ」

楽しげに笑うイクスヴェリア。ヴィヴィオも嬉しそうな笑みを返す。あの海底での戦いから既に三日。イクスヴェリアの容態は不思議な程に安定していた。本来目覚めるはずではなかった彼女。それが異常らしき異常を見せなかったのだ。その原因は定かではなかっ

たが、ジェイルはイクスヴェリアの話からある仮説を立てた。

それは、キングストーンの光。邪眼を怯ませる際に放ったそれを浴び、イクスヴェリアは結果的に目覚めた。その神秘の輝きがそれに一役買っているのではないかと。光太郎はその仮説にそうかもしれないと返す事しか出来なかった。過去に何度も不思議な事を起こしてきたキングストーン。それならば、確かにそういう事を引き起こしてもおかしくなかったからだ。

そんな事を知らない二人は、歳の近い友人として他愛もない雑談に花を咲かせていた。

「でも、イクスってどこか話し方が違うよね」

「そうでしょうか？」

「うん。ヴィヴィオと話す時ぐらいもっと楽にしてよ～」

「楽、ですか？　これでも普通に喋っているのですが……」

「え～、ホントにぃ？」

イクスヴェリアの言葉に嘘だといわんばかりに不満顔を見せるヴィヴィオ。それにイクスヴェリアがやや困り顔。ヴィヴィオが聖王と知っているため、どこかに敬う気持ちが生まれてしまうためとは言えない。

かと言って、丁寧な言葉遣いを止められる程イクスヴェリアは単純ではなかった。故に困る。だが、ヴィヴィオはそんなイクスヴェリアの反応を見て、これ以上言っても困らせるだけと理解したのだろう。小さくため息を吐いて、こう告げた。

「う〜、もういいよ。でも、もっと仲良くなったら考えてね」

「もっと仲良くですか……はい、分かりました」

「うん！」

今よりも親密になったら丁寧な口調を止めて欲しい。そう取ったイクスヴェリアはそれならばと頷いた。本人が強く希望している事もあるし、何よりもイクスヴェリアにとってヴィヴィオは初めて出来た友人なのだから。

その望みを叶えてやりたい。そう思ったのだ。こうして二人はそのまま会話をシャマルが戻って来るまで続けるのだった……

ジェイルは充実感を感じていた。レジアスから送られたデータを基に改良した改造バトルジャケット。それが遂に完成したのだ。外見についてはレジアスから希望があったため、従来とは違うものへと変わった。

大きな変更点はそのフェイス部分。ブランク体のものではなく、ある物をモチーフにしたデザインへ変更されたのだ。正直ジェイルはそれをどうかと思ったのだが、レジアスがそれを強く希望したため、そうしたのだ。更に全体的に仮面ライダーらしさも増し、鎧というより強化服のイメージに近くなったのも大きい。

今、ジェイルはそれをシャーリィと見つめ、無言だった。シャーリィはその外見にやや難色を示すものの、それが魔力を持たない者でも怪人と戦えるようにする装備と知っているため、特に何も言わない。

「……これで、ＡＭＦＣを手伝ってくれますか？」

「ああ。もう、これで私のやりたかった仕事は終わったからね。後は義務を果たすだけさ」

「私が頑張ってやってた事はついでですか？」

ジェイルの言い方に不満を表すシャーリィ。それにジェイルが少し苦笑し、謝った。

「すまない。そんな事はなかったんだ。許しておくれ、シャーリィ」

「……まぁ、いいです。じゃ、また今日からよろしくお願いしますね、ジェイルさん」

「こちらこそ」

笑顔で手を差し出すシャーリィ。それにジェイルも笑みを返してその手を握る。だが、シャーリィの頬は微かに赤みを帯びている。それにジェイルは気付くも、それを指摘する事はない。自分と久しぶりに仕事を出来るのが嬉しいのだろうと考えたからだ。

実際ジェイルもシャーリィと共に仕事を出来るのは嬉しかった。今までは一人でやるしかなかった研究。それについて意見や感想をくれる相手。それがシャーリィだったのだから。こうして、二人はまた以前と同じように様々な事を話しながら仕事を始める。

今の急務はＡＭＦの無力化の確立。現状では弱体化が精々なのだ。それを何とか無力化までもっていきたい。そう二人は思っているのだ。ある程度微調整を続ける二人。だが、やはりそう簡単に上手く

はいかない。
　そんな時、シャーリィが何気なく悔しそうに告げた一言がジェイルにある発想をもたらす。それは、何度目かの微調整失敗の時。シャーリィがその結果を見て呟いたのだ。

――あ～あ、この効果が二倍になればなぁ。

　それにそう単純にはいかないと答えようとして、ジェイルははたと気付いた。今まではトイ一機で無力化を成功させようとしていた。だから、出力調整に難航している。だが、今の弱体化の出力を二機で共鳴させる事が出来たらどうなるかと。
　そう考えた瞬間、ジェイルは即座に手を動かした。そして、その発想を仮定ではあるが入力し、シュミレーションする。その結果は……

「嘘……成功だ。成功ですよ、ジェイルさんっ！」

「……そうか。何も一機で相手のトイの無力化に挑む必要は無かったんだ。相手は一機一機で強力なＡＭＦを展開してるだけ。それを合わせる事で強化してる訳じゃない。なら、こちらは協力してそれに立ち向かえばいいんだ」

「成程……でも、これって私達らしくていいかも」

　シャーリィの呟きにジェイルも頷いた。邪眼達は連携を取らず、強力な個人で事を成そうとしている。それに対抗する自分達は、互いの力を合わせる事で立ち向かっているのだ。まさに、六課らしい発想と言える。そう考え、ジェイルは噛み締めるように言った。

――見せてやろうじゃないか……微々たる力でも、合わせる事で

巨人さえ倒す事が出来るとね。

それにシャーリィも頷き、二人はＡＭＦＣの共鳴システムの開発へ取り掛かる。その顔に浮かぶは希望の輝き。立ち込めていた暗雲。それを貫くような一筋の光明。それを見出した今、二人には力強い気持ちしかないのだから。

そのまま、二人は昼食時まで一心不乱に作業に没頭した。ちなみに、二人を現実に引き戻したのは、互いの空腹を告げる音だった事を追記しておく……

六課隊舎からすぐの格納庫。そこの前でヴィヴィオとイクスヴェリアが揃って、お手玉を手にジャグリングの練習をしていた。先生は五代のはずだったのだが、セッテがその代わりを引き受けていた。

そんな彼女は現在、二人の姿を見て口出ししようかまだ黙って見守るべきかと迷っている。あまり世話を焼きすぎると本人達のためにならない。そう五代にも真司にも言われたからだ。

そんな光景を見て、苦笑する光太郎とディエチ。ノーヴェとウェンディはやや呆れが混じっているが、笑顔だ。とてもかつて聖王と冥王と呼ばれた者達とは思えない光景がそこにある。だが、それでいいと光太郎は思った。

誰もが過去に縛られる事無く、歳相応の生き方を出来る事。それこそが平和なのだと、そう強く思ったのだ。更に、セッテ達は下手をしたら自分達と戦っていたかもしれない者達。それがこうして共に笑い、手を取り合っている事に、光太郎は希望を感じていた。

（ほんの些細な事で運命は変わる。なら、俺達はそれを信じて戦おう。俺達が助けた命が明日をよりよくしてくれると、そう強く願っ

て）

そう、一人一人が世界を守り支えていくヒーローなのだ。どんな小さな事でも、それが世界を変えていく。それを知るからこそ、光太郎はこの時間がどれだけ大きな意味を持っているかを考えた。

どんな相手とも分かり合える。それが心を持った相手ならば。いや、もしかすると、そうでない者でもそうなれるかもしれない。そんな事を考えながら、光太郎は笑う。目の前の光景に微笑んで。

「あ～、ヴィヴィオもイクスも落としちゃったね」

「結構イイ感じだったッスけどね～」

「イクスって、意外と不器用なんだな。何か見た目は器用そうに見えたんだけど」

お手玉を揃って地面に落とすヴィヴィオとイクスヴェリア。それに悔しそうな表情のヴィヴィオ。イクスヴェリアは、不思議そうに何故落としてしまうのかを考えている。セッテはもう我慢出来なくなったのか、二人へ近付きあれこれと助言を言い出した。

そして、実演も見せて二人から拍手をもらっている。セッテはそれに嬉しそうに笑みを見せ、ジャグリングを続けていく。それにノーヴェ達が揃ってため息を吐き、苦笑し出した。

「セッテがやっても意味ないッス」

「だよなぁ。ヴィヴィオ達に教えないといけないのにさ」

「駄目だ。あれ、完全に目的忘れてるよ」

そんな風に会話する三人。そこへやや呆れ気味の声が響く。

「で？　お前らはいつまで油売ってんだ？」

ヴァイスはそう言ってノーヴェ、ウェンディ、ディエチの順に軽く頭を叩く。それに三人が軽く謝って、それぞれ仕事に戻っていく。光太郎はそれに苦笑し、自分もと思って動こうとした。だが、そんな彼へヴァイスが小さく告げた。

「今度、休み取って妹に会いに行って来ますわ」

「……そっか。うん、きっと上手くいくと思います」

「ははっ、そうなるよう頑張りますよ」

そう言ってヴァイスも仕事へ戻る。光太郎もそんな彼の後に続くように歩き出す。今日も格納庫は平常運転だった……

デスクに向かい、滑らかに指を動かしていくティアナとギンガ。それに負けないようにエリオとキャロも動かしていく。ただ一人、スバルだけがやや鈍い動きだった。ドゥーエはエリオやキャロの手が掛からなくなったため、シグナムの補佐をしている。

それを見た新人達は、密かにデスクワークが苦手なシグナムを可愛いと思ったとか何とか。しかし、そこになのはとヴィータの姿がない。そう、今日は隊長陣の休みの日なのだ。とはいえ、前線を支える隊長を一気に全員休ませるのは色々と不味いため、今回はなのはとヴィータなのだ。

「今頃、高町はスクライアと会っている頃か。お前は休みになったらどうするつもりだ、テスタロッサ」

「光太郎さんにバイクを出してもらう事になってます。私もデートですよ」

「はぁ～、いいわね。私も今度真司君にでも頼もうかしら？」

ふと気になったのか、それとも今やっている仕事が複雑だったからなのか、シグナムが突然そう尋ねた。それにフェイトは笑みを浮かべ、そう答えた。その笑顔はとても自信に満ちている。想いに応えてはくれなかったが、受け止めてはくれた。

それがフェイトに女性としての美しさと自信を与えていた。それを感じ取り、ドゥーエは羨ましいといわんばかりにため息を吐くが、イイ事を思いついたとばかりにそう続けた。それにフェイトが何に乗るつもりと尋ねると、ドゥーエは冗談めかして答えた。

――――火を吐くバイクよ。

それが龍騎サバイブのファイナルベントだと察し、フェイトとシグナムが揃って笑った。そんな物でミッドを走るなとシグナムが言えば、フェイトが大騒ぎになりますと続ける。それにドゥーエが話題になって面白いと思うと返し、また三人が笑う。

そんな三人を眺め、スバル達は揃って小さく笑みを見せる。何となくこんな空気が堪らなく嬉しく思えたのだ。早く邪眼を倒し、こんな時間が当然となって欲しい。そんな風に思いながら、五人は手を動かしながら話し出す。

「次の休みが待ち遠しいねぇ、ティア」

「……アタシは別に」

「え？　どうして？」

ティアナの素っ気無い返事に疑問符を浮かべるギンガ。だが、それにティアナが答えるよりも早く、スバルが少し意地悪な笑みを浮かべて告げた。ティアナは、次の休みが翔一と一緒じゃない可能性があるから不機嫌なのだと。

そう言った瞬間、ティアナが無言でスバルを睨みつける。その眼光の鋭さに思わずスバルだけじゃなくギンガ達もたじろいた。しかし、ティアナはその険しさをすぐに消して、小さくため息を吐いた。

それに四人の表情が変わる。そう、この四人とティアナの明確な違い。それは異性として意識している相手がいるかいないかだ。なのでティアナとしては、自分の気持ちをここの四人は理解出来ないと思っている。

そう、翔一の事を異性として意識し出してしまった自分。食堂に行った時もつい翔一に視線がいってしまう。誰に対しても笑顔で接する翔一を見て、嬉しく思う反面少し怒りも感じるようになったのもそれが原因。

――――アタシだけに笑顔を見せて欲しい。

そんな想いを抱いてしまう程、今のティアナは完全に乙女になっていた。ティアナは知っている。はやてが自分と同じぐらいか、それ以上に翔一の事を想っている事を。あのアグスタに行く際の事。あの頃は別にそこまで気にもしなかった。

でも、今は分かるのだ。はやてが職務を忘れてあんな事を言い出した理由を。もし、自分が逆の立場なら確かにああ言い出していたと、そう分かってしまったからだ。

そんな事を考え、ティアナがややもの鬱げな表情を浮かべる中、スバルは視線をエリオとキャロへ向け、同じ事を聞いていた。

「ね、二人は今度の休みはどうするつもり？」

「はい、一度スプールスに行こうかと」

「お世話になった人達や動物達に会いたいなって」

笑みを浮かべてそう告げるエリオとキャロ。それにスバルとギンガが成程と納得。その時には邪眼を倒して平和になっているはずだから。そうエリオが言うとキャロもそれに頷いた。

ギンガはそんな二人に微笑み、自分も父親であるゲンヤに会いに行こうかと思った。クイントも自分もスバルも別の部隊。しかも、自分とスバルは寮生活。なので、二人には中々会う事が出来ないのだ。

「私は……一度家に帰ろうかな。父さんや母さんに元気な姿を見せないとね」

「あ、なら私もそうしよ。ついでに、久しぶりに母さんのご飯も食べたいし……」

「アンタの場合、そっちが本命でしょ」

スバルの言葉にティアナが的確に突っ込んだ。それにスバル以外が苦笑する。それを受け、スバルがやや照れながら……

――――バレたか……

と言ったところで全員が声を上げて笑った。それをフェイト達も微笑んで見つめるが、それも少しだ。揃って五人へ仕事をしなさいと注意し、自分達もまたデスクワークに戻る。ここでも、平和な時間が流れているのだった……

食堂では翔一と真司、それにリインやチンクにセインといったいつもの者達がいた。だが、五代の姿はない。彼もなのは達に会わせて休日となったため、外出しているのだ。

光太郎も本来ならば休みなのだが、ヴィヴィオとイクスヴェリアがいる今は、ライダーの数を減らす訳にもいかないと、自分の休みを別の日に変更してもらっていた。

ちなみに、なのはもヴィータも出かけていて、六課にいない。そして、五代の代わりに今日の食堂には……

「翔にぃ、アギトセット上がったで」

「了解。ありがとう、はやてちゃん」

はやてからアギトセットを受け取り、翔一は微笑んだ。それにはやても笑みを返し、再び調理へ戻る。以前フェイトが提案した翔一とのレストラン運営。それを今日はやては行なっていた。

なのはとヴィータだけではなく、今日ははやても休み。なのでこうして翔一と揃いのエプロンを着け、上機嫌で働いていた。リインはそんな二人を邪魔しないように見守っている。真司達はそんな二人を見て、微笑みを浮かべていた。

「何かはやてちゃん、機嫌がいいよな」

「まぁ、当然だろう」

「そうだよね。翔一さんと二人で頑張ってるってのがいいんだろうし」

真司の言葉に、恋する女性としてはやての気持ちが分かる二人がそれぞれ声を返す。それに真司はそういうものかと思い、頷いて手を動かしていく。チンクとセインはそんな真司の反応に苦笑し、何気なくを装ってそんな彼へ小さく告げる。

――――好きな相手と一緒に居れるだけで、女は嬉しいものだぞ。

――――そうだよ。例え、相手が自分の好意に気付いてなくてもね。

そう笑みと共に告げたチンクとセイン。その言葉に成程と納得する真司だったが、何故か二人が何かを匂わせるような言い方だった事に気付き、疑問を浮かべた。そんな風に考え込み始める真司を見て、チンクとセインは互いに視線を向け合って小さく笑う。

そんな風に色めいている者達を見て、リインはやや楽しそうに呟く。盛んな事だと。自分もそんな相手がいつか出来るだろうかと、そんな風に思いながらリインは苦笑する。自分も影響されていると気付いたのだ。

（恋愛、か。私には関係ない話だと思っていた。しかし、考えてみるのもいいかもしれんな。私もシグナム達も”人”なのだから）

優しい主や友人達。それが自分達をどう捉えているかは明確だ。人として生きて欲しい。そう、人らしさの意味を今のリインは知っ

ている。光太郎から聞いた仮面ライダー達。その在り様こそ、人らしさなのだと。

心さえ人らしくあるのなら、それは人なのだ。リインには心がある。はやてを愛し、守護騎士達を愛し、妹を愛している。それだけははっきり言えるのだから。なら、自分達も人なのだろうと。

「どうしたアイン？　何か嬉しそうだな」

そこへザフィーラが現れた。見ればヴィヴィオとイクスヴェリアを連れて、セッテも戻ってきている。それを見ながら、リインは軽く笑みを浮かべた。そして、少し悪戯めいた表情で答えた。

「ザフィーラか。何、恋でもしてみようかと思ってな」

その答えにザフィーラが一瞬声を失い、すぐに楽しそうに頷いた。それはいいな。そんな風に言って。それにリインは頷き返し、静かにザフィーラへ近付いた。そして、そんなリインの行動にやや戸惑うザフィーラへこう囁いた。

――相手も意外と近くにいるかもしれん。

それにザフィーラが驚いて目を見開くと、リインはクスクスと笑って厨房へと向かって歩き出す。その後ろ姿を見送り、ザフィーラは小さく笑う。

「アイン、今のお前を見ていると強く思う。翔一達と出会えて良かった、とな……」

おそらくだが、五代や翔一がいなければ助ける事が叶わなかったであろうリイン。もし邪眼がいなければ、それはそれで助ける事が

出来なかったと思う。しかし、邪眼だけがいたのなら自分達は勝つ事が出来なかった。

あの戦いを勝利出来た要因。それは二人の仮面ライダーがいればこそ。そう思うからこその声には、感謝にも似た感情が込められていた。そして、ザフィーラは小さく呟く。

――お前がもう悲しまずに済むよう、俺が必ず守り抜く。盾の守護獣の名に賭けて。そして、一人の人としてな……

偽装状態のビートチェイサーがクラナガンの街中を走る。そこを歩く内の何人かがその外観にクウガのバイクを見たのか、思わず振り返る。だが、その色合いが違うのを見て、きっとそれを模したのだろうと考え、興味を失くして視線を戻す。

そんな事に気付きもしないで走るビートチェイサー。向かう先はベルカ自治区。そう、五代は聖王教会へ行こうとしていたのだ。と言うのには訳がある。実は、はやてを通じてカリムが五代をクッキーパーティーに招待したのだ。

――冒険の話を聞いてみたいと思いますし、義弟のロッサやシャッハも五代さんとお話したいと言っていますので。

そうはやてから聞いた五代はならばと、休みの予定も無かった事もあってそれに応じる事にしたのだ。一度しか走った事のない道だが、それでも記憶に残る景色と照らし合わせながら、五代はビートチェイサーを走らせる。

都会然とした景色が徐々に少なくなっていき、ゆっくりと自然の比率が増えていく。そんな光景に心を和ませつつ、五代は思う。カリムが自分を呼んだ理由は、決して冒険の話だけが目的ではないだ

ろうと。黒の四本角のクウガ。その事を詳しく聞きたい。そんな事をどこかで思っているはずだと。

「俺だって、あの姿にはもうなりたくないし……」

それでも、光太郎が言うように邪眼が自分達へ複数で襲い掛かってくるのなら、最悪それさえ考えなければならない。五代にとって、あの姿はなってはいけない姿ではなくなっていた。だが、使ってはいけない力だとは思っている。

どうしてもそれでなければならない事態。そうでなければ使ってはいけないのだと。それは、クウガの力もそう。本当ならば仮面ライダーの力は使う必要などないものだ。それを使うためには、ある程度の条件が必要なのだから。命を、未来を守る。その力でなければ守れない相手から。

壊す者でありながら守る者。それが仮面ライダーだと五代は思っていた。闇を壊し、光を守る。その在り方を決して忘れてはならない。五代は光太郎から仮面ライダーの話を聞いてその想いを強くした。

いつでもその力は、戦いは、みんなの笑顔のために。それこそが自分達仮面ライダーの絶対条件なのだと。そう考えながら、五代は遠くに見えてきた教会に小さく笑みを浮かべ、速度を上げた。

（でも、とりあえずはクッキーを楽しみにしよう。後、ロッサさんってどんな人かも気になるし……）

どこまでも自分は自分。そんな風に思い、五代は一人笑顔を浮かべるのだった……

「はい、あ～ん」

「あ、あ～ん……」

「美味しい？」

「……うん、美味しいよ」

ここは本局は無限書庫。なのはは休みと相成ったのだが、ユーノがそれに合わせられるはずもなくデートは無理。結局、こうしてなのはが無限書庫を訪れる形となっていた。しかも、午前中は仕事の手伝いまでしていたのだ。

今は司書長室で昼食の真っ最中。食べているのはなのはの手作り弁当だ。色とりどりのサンドイッチに、唐揚げや卵焼きなどの基本的なおかずがそこには広がっている。軽い遠足みたいだとはユーノの談。

食べさせた方も食べた方も顔が真っ赤だ。他に人目がないとはいえ、やはり照れるものは照れる。しかし、どちらも視線を逸らしてはいない。そう、もう二人は婚約をしたようなものだからだ。

生憎ユーノはまだ婚約指輪を用意出来ていないが、出来るだけ早く用意しようと思っている。なのはに言い寄る者がいるとは思えないが、それでも念には念をと考えたからだ。それをなのはに告げたら、心配性だと苦笑されたユーノだった。

「でも、少し来ない間に新しい人が増えたんだね」

「ルネの事？　うん、六課が出来て少し後ぐらいにレティ提督が紹介してくれたんだ。何でも、元々は戦災孤児らしくてね……」

「そうなんだ。苦労してるんだね、あの子」

ユーノの告げた内容になのはは表情を曇らせる。管理世界は管理局が関っているため、ある程度の治安を維持している。だが、管理外世界の中には世界規模で内戦を続けている場所もある。それを知るからこそ、なのはは悔しく、そして辛く思った。自分達は管理外では何も出来ない。その存在を否定されていたり、拒否されていたりするからだ。

だが、そんななのはへユーノは小さく声を掛ける。決して無力なんかじゃないと。管理局体制が絶対正しいとは思わない。だが、それで助ける事が出来ている命もあるし、守れる明日があるのだから。そう告げるユーノの言葉になのはも頷く。

「そうだね。それに、もしかしたら、そんな世界にはライダーがいるかもしれないし」

「そうかもね。仮面ライダーはそういう理不尽がまかり通る場所でこそ戦うだろうし。僕らが知らないだけで、実は仮面ライダーはいつでもどこかで戦っているのかも……」

そんなユーノの声が思い詰めるものだと気付き、なのはは表情を笑顔に変えて告げた。

――大丈夫！　仮面ライダーは一人じゃないから！

――……そうだね。僕らと五代さん達のように、多くの人達が支えているはずだ。

互いにサムズアップを向け合う。その顔は笑顔だ。そして、落ち

着いてからユーノがぽつりと呟く。結婚式には五代達四人も居て欲しいと。それになのはも静かな声でそうだねと返すのだった……

海鳴　月村家。ファリンとイレインは庭仕事を終え、互いに庭先で寛いでいた。あの五代達が来た日以来、一度として邪眼による襲撃は行なわれず、平和そのものだった。それでも、未だに誰一人として気を抜いていない。

高町家の美由希と士郎だけではなく、ハラオウン家のエイミィやアルフ、リンディさえも、いつ何があってもいいように心構えだけはしている。すずかとアリサもそれは同じ。護身用にスタンガンなどを所持している。それがどこまで頼りになるかは分からないが、無いよりはマシと考えているのだ。

「……平和だよな」

「そうですね～、一応お姉様の方も何事もないようですし……」

あの事件があった後、ファリンはドイツにいる忍達へ警告した。マリアージュのような恐ろしい相手が、そちらにも現れるかもしれないからと。だが、そちらにも一度として襲撃は無かったのだ。

「でも、気を抜くなって士郎さんも言ってたしな」

「ええ。こうやって、私達の警戒心が緩んだところを狙ってくるかもしれませんからね」

「……五代の奴、元気でやってるよな？」

「当然です。だって、五代さんはクウガですよ！」

「そう、だよな。そうだった」

そう言ってイレインは笑う。ファリンも同じく。二人は視線を上へと向ける。そこには、気持ちのいい青空が広がっている。五代が好きな空。それを見上げ、二人は願う。五代の無事を。そして、また共に過ごせる事を……

その頃ヴィータはゼスト隊の隊舎にいた。休日なのだが、それをヴィータは邪眼対策に使う事にした。そう、公開意見陳述会。その日が刻一刻と迫っているためだ。今はゼスト達三人とその日の警備体制について話し合っていた。

ゼストはレジアスと会い、邪眼に対しての対策を求めた。だが、レジアスは公に事を荒立てる訳にはいかないと一蹴。しかし、グレアムとの話し合いの進行具合を教え、こう告げた。

――今は動けん。だが、奴が動いた時にはこちらも動く。奴らが絶望を振りまくのなら、濃らは希望を見せてやろう。

その言葉と共にレジアスはゼストへ、全てが終わったら話したい事があると告げ、会談はそこで終了となった。その時のレジアスの表情が自分の良く知る顔だった事を確認し、ゼストはレジアスの言葉を信じて待つ事にしたのだ。

希望を見せる。それがどういう事かは分からない。だが、それが邪眼達への反撃を意味するぐらいは分かる。故に、ゼストは六課とだけではなく、１０８とも連携し、有事に備える事にしたのだから。

「……だから、１０８にはあたしが教導に行って、マリアージュ対策と怪人戦をある程度意識した事を仕込んでくる」

「そうか。こちらもマリアージュ対策だけは練っておく」

「それと、他の陸士隊にもマリアージュ対策ぐらいは伝えておきましょう。それだけでも違うはずです」

ゼストの言葉にメガーヌがそう続く。それにヴィータは頷いた。怪人はやはり実際見ないと信じる事は出来ないが、マリアージュだけは別だ。あれはもう第一級危険ロストロギアに指定された。そう、幾度かに渡る戦闘の結果出た被害。それをマリアージュの仕業にして、上層部に報告したのだ。

なので、現在ならばマリアージュ対策だけならば納得させる事が簡単だ。しかも、それが地上の守護神と言われるゼスト隊からなら余計に。そう判断し、ヴィータは助かると告げた。ヴィータはちゃんと礼儀を弁える人物だ。どんな相手でも階級が上であれば、一定の敬語を使って接する。だが、今の彼女はゼスト達へそんな言葉遣いをしていない。

その理由は、たった一つ。ヴィータの言葉に対するゼストの言葉に、それはあった。

「気にするな、ヴィータ副隊長。俺達は共に邪眼と戦う仲間なのだからな」

仲間。それがあるからこそヴィータはゼスト達へ敬語を使わない。何故か。簡単だ。仲間に上も下もない。みんなが同じなのだ。立場も年齢も関係ない。共に悪を憎み、今日の笑顔を、明日の平和を願う者同士なのだから。

「……でも、ありがとうって言わせてくれ。正直、六課はどこか陸の部隊から疎まれてる部分があるしさ」

「そうなのよね。むしろ、六課はライダーと管理局を繋いでくれた部隊なのに」

「仕方ないわ。はやて部隊長を初め、主な構成員が海や空の人間だもの。でも、それがかえっていい方向に活きてる」

クイントの悔しそうな言葉。それを聞いてメガーヌも同じような声を返す。しかし、後半には噛み締めるような声に変わった。それに全員が頷いた。六課が他の陸士隊から疎まれたため、その隊舎はかなりクラナガンから離れた場所になった。

だからこそ、邪眼の襲撃の被害が最小限で済んでいる。更に、六課と係わり合いが多い陸士隊はゼスト隊ぐらいだ。よって他の陸士隊が邪眼による襲撃対象となる事もなく、今日まできたのだから。

「怪我の功名、と言うのだったか。それとも災い転じて福と成すだったか？」

「意味合い的には前者の方が近かった気が……？　今度あの人に聞いておきます」

「とにかく、もう一度か二度襲撃があると見て、問題はやはり……」

「ああ。絶対公開意見陳述会だ。あいつら、怪人が邪眼も合わせて全部で二十一体もいやがるしな」

ヴィータの言葉にゼスト達がやや疑問符を浮かべた。総数が足り

ないのだ。邪眼の残りは十体。ヴァルキリーズを基に生まれた怪人達が十二体。二十一体では一体足りない。そう思ったのをヴィータは気付いたのだろう。嫌悪感をむき出しにして告げた。

邪眼はおそらく自分を一体残し、保険にするはずだと。それにゼスト達も怒りと嫌悪感を露わにした。自分さえ捨て駒に考え、それに何の躊躇いもない邪眼に。命を何とも思っておらず、ただの消耗品のように使い捨てるその在り方へ、強い怒りを感じたのだ。

そこで話し合って決めたのは、邪眼の相手は基本ライダーに任せようという事。その理由は、ヴィータ達守護騎士さえ邪眼と対峙した時は、その神経を酷く疲れさせた事がある。あの海底遺跡で再戦したフェイトとシグナムさえそう告げたのだ。

やはり邪眼相手は色々と疲れると。現にあの後エリオとキャロ、ツヴァイは揃ってダウンした。六課隊舎に着いた瞬間緊張の糸が途切れて眠ったのだ。怪人相手にはもうスバル達もヴァルキリーズも慣れたが、邪眼だけはやはり別格なのだから。

「……総勢九体の邪眼。それに対し、こちらはライダーが四人」

「二体一の構図ね。しかも、下手をすれば誰か一人は三人相手に？」

「いや、光太郎が言うには、その一体はあたしらへ向かってくるんじゃね～かって。新人達やヴァルキリーズの末っ子辺りは結構耐えるのだけで精一杯だろうからさ」

「そこへ残った怪人が全部。しかも、まだ知らない怪人が何体かいる……」

六課だけで支え切れる数ではない。怪人だけも多いのに、そこへマリアージュも加わるのだろうから。そう、イクスヴェリアにはマ

リアージュを制御する力があった。だが、それは彼女が生み出したマリアージュに限るものだったのだ。

邪眼が生み出している個体に関しては、彼女は無力。だが、それを誰も責めなかった。むしろ、安心したのだ。イクスヴェリアを助ける事が出来た事に。利用されれば、今以上にマリアージュが増える。それは一番忌むべき事態へ繋がるのだから。

マリアージュによる自爆攻撃。それを展開されれば、事は地上本部だけに留まらない。クラナガン全体に広がる可能性もあったのだ。だが、現状でそれは可能性が低いと予想されていた。

それは邪眼の行動目的。その目的は世界征服よりも創世王になる事へ重点を置いているのだ。つまり、クラナガンを火の海にする事があるとすれば、それにはＲＸとクウガを倒すという状況が必要なのだ。

無論、これが楽観的な見方であると誰もが思っている。しかし、その可能性を強く否定出来ないのも事実なのだ。あの無人世界での戦いを経験した者達は特に。

「とにかく、決戦の時は近い。その際は、俺達ゼスト隊だけで怪人を最低でも一体は倒してみせる」

「頼む。あたしらも出来る限り怪人を倒してみせるから」

「そちらから提供されたデータを参考に、私達なりに対処法を確立させるわ」

「お互いに頑張りましょ！」

そう言ってクイントが見せたのはサムズアップ。それにヴィータ

も同じ仕草を返した。ゼストとメガーヌもそれに呼応し、サムズアップを見せる。ライダーを支え、助け合う者達共通の仕草がそこにはあった。そして、それと同時に笑顔もまたそこに……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

日常回。ゆっくりと変化していく互いの関係。深まる絆と繋がる笑顔。そんな感じの話でした。

次回はいよいよ”その日、機動六課”に突入します。前後編で収めようと思いますが……どうなるやら

その日、機動六課　前編

六課隊舎内のミーティングルーム。そこに主だった者達が全員集まっていた。理由は、明日に迫った公開意見陳述会のためだ。

「……とりあえず、隊舎にはアギトと龍騎を残す事にした」

「なら、俺と光太郎さんが地上本部へ？」

光太郎の告げた言葉に疑問符を浮かべ、五代が問いかけた。それは他の者達も同じだ。邪眼の目的を考えれば、クウガとＲＸが一緒にいるのは絶好の機会となってしまうからだ。

だが、光太郎はそんな五代の問いかけに頷き、はっきりと告げた。それは、ある種の宣戦布告。そして、周囲への決意表明。

「そう。俺と五代さんで邪眼を全て引き受けるつもりだ」

その言葉に全員が息を呑んだ。だが、五代はやや何かを考えて頷き、光太郎の目を見つめて応えた。

「分かりました。やりましょう。クウガとＲＸで邪眼を全部……」

「ああ、倒してみせよう。その代わり……」

光太郎が言いにくそうにしたのを受け、なのはが力強く宣言した。

「怪人達は、私達が引き受けます！」

「スターズとライトニングで最低四体は相手しますから！」

「ヴァルキリーズは合計で三体は倒してみせるさ！」

「ゼスト隊が一体はやってくれるし、何とかなるさ」

「アギトと龍騎がおるし、隊舎へ来る怪人達は心配ないわ」

強がりではない宣言。特にはやての言葉に翔一も真司も即座に頷いた。ヴィヴィオとイクスヴェリアがいる六課隊舎。おそらく怪人達はそれを奪取しに来るだろうと、そう考えて隊舎にもライダーを二人にヴァルキリーズの半数近くを残す事になった。

それにザフィーラとシャマル、それにリインも加わる。防衛戦力としても申し分ないだけのものがある。そう、ジェイルによって地上本部襲撃の段取りは説明されていた。そこでは、ヴィヴィオがもし六課に保護された場合の対応も想像し、話された。

ジェイルは六課が手薄になるのを見越し、隊舎へ少数精鋭でヴィヴィオの奪取を企てるだろうと。だが、邪眼達にはマリアージュがある。そのため、怪人を少なくても三体にそれが数体。なので、ウーノを始めとする支援を得意とする者を隊舎に残し、トーレ達戦闘を得意とする者達を地上本部へ向かわせる事になったのだ。

「トイのＡＭＦは、先日完成したばかりのＡＭＦＣで無力化出来るはずだ。ただし、まだ絶対ではない。あまり過剰な期待はしないでくれ」

「それと、準備出来たガジェットもそこまで多い訳じゃないんです。なので、あまり破壊されないように注意してください」

ジェイルとシャーリィが告げる言葉になのは達が頷く。ＡＭＦＣ

を搭載したトイは、ガジェットと呼称する事になった。区別を付けるためだ。ガジェットの制御は、ウーノやクアットロが受け持つ事となり、今回はクアットロがガジェットを制御して地上本部組に参加する事となっている。

こうして、全員による当日の打ち合わせが終わり、解散しようとした時だ。五代が全員へ呼びかけた。

「みんな、頑張ろうっ！」

サムズアップ。それに全員が笑顔でそれを返す。冷静に考えれば、戦力差は大きい。それでも、不安よりも希望が大きいのは、やはり誰もが信じているからだ。仮面ライダーを、そして自分達の事を。どれだけ強い敵が現れても、決して負けない。挫けはしない。

そんな強い心があるからこそ、六課の者に絶望はない。そして、なのは達スターズ&ライトニングは地上本部の警備へと向かい、ヴァルキリーズ参加組は明日の朝まで待機し、光太郎と共にヘリで地上本部へ向かう事となった。五代はビートチェイサーを使用する。

翔一と真司を始めとする留守番組は、ヴィヴィオとイクスヴェリアの護衛をリインが担当する。ザフィーラにシャマルは残るヴァルキリーズと共に怪人の迎撃をする事になっていた。怪人が大勢襲い来る事も考えたのだが、邪眼の行動を推測すると、やはりヴィヴィオやイクスヴェリアよりも創世王への執着の方が強いと予想されたのだ。

「アインさん、ヴィヴィオの事をよろしくお願いします」

「安心してくれ。お前の娘もイクスも必ず守り抜く」

なのはの言葉にリインはそう返し、優しく微笑む。ヴィヴィオとなのはの関係は、もう六課内では完全に親子と認識されていた。唯一ママと呼ばれ、ヴィヴィオから慕われているなのは。その姿は誰もが和む光景なのだから。

イクスヴェリアもはやてが夜天の主と聞いて、軽く驚きを見せた。実物を見た事はなかったが、夜天の魔導書の名を聞いた事はあったらしい。なので、自分と六課の繋がりに運命を感じたと思っていたのだ。

ヘリポートへ向かうため、ミーティングルームを出て歩き出すなのは達。それを外で待っていたヴィヴィオとイクスヴェリアが気付き、笑顔で出迎えた。

「ママ、もうお出かけ？」

「うん。ヴィヴィオ、アインさんの言う事をちゃんと守って留守番しててね」

「う～……五代さん達は明日だよね？」

「そうだよ。だから、そこまで寂しくないでしょ？」

なのはとヴィヴィオのやり取りに五代達が微笑む。一方、イクスヴェリアは自分の護衛を務めてくれるリインへ感謝を述べていた。

「申し訳ありませんが、よろしくお願いします」

「気にしないでくれ。イクスも私からすれば家族のようなものなのだから」

「家族、ですか？」

リインの表現に軽い驚きを浮かべるイクスヴェリア。それにリインが笑みを浮かべて頷いた。そこへはやても顔を出し、こう告げる。

「そや。イクスはもう六課の一員。それに、わたしが責任者やしな。ある意味八神家とも言えるし……」

「私が……八神家……」

「あ、別になれって訳やないよ。そうわたしらは考えとるってだけやから」

はやての少々慌てた声にイクスヴェリアは小さく微笑み、分かっていますと返す。そして、はやて達八神家の者達へ頭を下げた。それに若干面を喰らうはやて達。そんなはやて達へ、イクスヴェリアはそのままでこう告げた。

――――不束者ですが、よろしくお願い致します。

その言葉にその場の全員が言葉を失い、そして笑顔を浮かべた。はやてが嬉しそうに何度も頷き、ツヴァイは嬉しさのあまりアギトと手を繋いで騒ぎ出す。アギトはそんなツヴァイに苦笑しながらも、その嬉しさを理解してそれに付き合っていた。

シグナムとシャマルは互いに笑みを向け合い、ザフィーラとリインは微笑みながら何かを言い合っている。五代達はそんな八神家を祝福し、そしてヴィヴィオは友人が家族を得た事に喜びを見せ、笑顔を浮かべる。

決戦の前の小さな喜び。それに誰もが心を和ませ、そして改めて

誓う。決してこの幸せを失わせはしないと。そう、強く心に抱いて……

ヘリポートで見送りをする五代達とヴィヴィオにイクス。五代達が傍にいるとは言え、ヴィヴィオはどこか寂しそうな表情を見せていた。それになのはが苦笑するも、その目線の高さにしゃがんで笑いかける。

「ヴィヴィオ、ちゃんと帰ってくるから」

「うん……」

「約束」

なのははそう言って小指を差し出す。それが何を意味するのかを理解し、ヴィヴィオも小指を差し出して絡めた。指きりの歌を口ずさむ二人。それに周囲も微笑みを見せる。やがて歌も終わり、二人揃って指を離す。

「約束破ったら、針千本だからね」

「うん！」

「あ、それと……帰ってきたら話したい事があるから」

「お話？」

「そうだよ。ヴィヴィオにとっても、ママにとっても大事なお話」

なのはのその言葉からフェイトは何かを察して軽く驚き、そこから小さく笑みを浮かべた。そして、ヴィヴィオの肩に手を置いて優しく笑みを浮かべて告げた。楽しみにして良い子で待ってるようにと。それにヴィヴィオも頷き、笑顔を返した。

なのはもフェイトもそれに笑顔を返し、歩き出す。はやてはイクスからご武運をと言われ、やや苦笑していたが嬉しそうに頷いた。スバルはノーヴェと拳を軽く合わせて、また明日会おうと約束し、ティアナはウェンディやクアットロへ待っていると告げている。ギンガはチンクと微笑みを見せ合い、頷き合っていた。

エリオはドゥーエからからかいを受け、キャロはセインに気をつけるようにと言われ、頷いていた。ヴィータとシグナムはシャマルやザフィーラに隊舎の者達を託し、それぞれヘリへと向かって歩き出す。

それを全員が見送り、やがてヘリのハッチが閉まる。そしてゆっくりとそのローター部分が回転を始め、ヘリを浮かびあがらせていく。それにヴィヴィオや真司が大きく手を振り、五代達も手を振って送り出す。

遠ざかるヘリ。それが見えなくなるまで誰もそこから動こうとしなかった。どこかで感じているのだ。これが最後の戦いになると。故に、この見送りが持つ意味は大きい。勝利への出発。邪眼へ引導を渡す為の大事な一戦。

それが明日なのだ。なのは達地上本部組は、留守番組よりも激戦が予想されるのもある。そう、留守番組の者達はそれがあるからこそ、余計にこの見送りに込めた意味は強いのだから。

「……明日で全てが終わるんですね」

ぽつりと翔一が呟いた言葉。それに誰もが頷いた。あの無人世界での戦いからもう十年近く。その長きに渡る戦い。それがいよいよ幕を迎えようとしている。そう感じ、五代は特に思うものが強かった。

そして、それは翔一と光太郎も同様に。彼ら二人はある意味発電所から戦い続けているようなものだからだ。三人とは違い、真司は邪眼との因縁が長い訳ではない。だが、それでもその思いは三人に負けぬものがある。

彼は長年暮らしていた場所を奪われ、コピーとは言え自分が家族のように思っている少女達と戦わさせれた。その怒りや悲しみは、三人に匹敵する。

（明日でクウガとしての寄り道が終わる。だから、絶対に負けられない！）

（アギトとして……そして仮面ライダーとして、明日は負ける訳にはいかないんだ！）

（邪眼……あの発電所での借りを返す。そして、もう二度と復活出来ないようにしてみせるっ！）

（明日の戦いに勝って、そのままの勢いで俺達の家を取り戻す！絶対負けないかんなっ！）

静かに拳を握る五代と光太郎。表情を真剣なものに変え、ゆっくりと拳を握る翔一。そして、力強く拳を握り締める真司。それぞれに込めるは明日への決意と覚悟。仮面ライダーとして、そして一人の人として大切なものを守るために戦おう。その気持ちを新たにしたのだ。

そして、誰からともなくゆっくりと隊舎へと戻り始める。その足取りは重い。明日の戦いへの重圧や不安、それを感じながらもその表情は決して暗くはない。笑顔ではないが、沈んではいないのだ。誰もが信じている。勝利を、平和を。

「ノーヴェ、ウェンディ、明日は気をつけてね」

「おう。それはそっちもだかんな」

「そうッスよ。ディエチも気をつけて欲しいッス。接近されたら危ないッスからね」

参加組である二人へディエチが心配そうな声を掛ける。それにノーヴェもウェンディも明るい声を返す。それどころかディエチの方へ心配そうな声を返したのだから。それにディエチが苦笑。無言で頷き、それに応えた。

トーレはセッテと共に参加組。なので、留守番組のウーノとドゥーエへ万が一の際の事を相談していた。それは、予想に反して隊舎へ怪人が多かった場合だ。トーレとセッテは空戦専門。その移動速度もかなり速い。それを活かし、緊急時は地上本部から隊舎へ向かう事を話し合っていたのだ。

「では、その時は……」

「ええ。ディエチに信号弾を撃たせるか、私かロングアーチが連絡するわ」

「それと、二人一緒でなくてもいいわ。どちらかでも来てくれれば助かるから」

「了解だ。まぁ、願わくばない事を祈るがな」

トーレの締め括りに三人揃って頷いた。留守番組の戦力は、オットーにディエチとディードの三人。ウーノとドゥーエはどちらかと言えば支援型に近いからだ。そう、残るのはその五人。残りの七人が全て地上本部へ投入されるのだ。

これはヴァルキリーズ全員で話し合った結果。ギンガも含めた十三人で色々と加味し、出した結論。基本防衛戦になるだろう隊舎戦。ならば、自分から切り込む者より、支援に向いた者がいい。そう、ライダーを援護するのに適した者達だ。

チンクも候補に挙がったのだが、少しでも戦力を地上本部へ向かわせるべきだとなり、半分ずつではない振り分けとなったのだ。トーレ達四人が能力を知る怪人達への対処法を確認し合う横で、クアットロがチンクとセインの三人で真剣な表情を見せ合っていた。

「結局、スパイは来なかったわねぇ」

「そうだな。情報漏れも疑われたが、スクライア司書長だったか？彼の真偽も確かめられたしな」

あの海底遺跡の一件を受け、光太郎と五代がユーノへ面会しに行き確認したのだ。その結果、ユーノは白となり、あの一件は邪眼達も偶然辿り着いたとなった。

「でも、まだ能力の分からない怪人が六体、か」

セインがそう不安そうに呟くと、それを聞いたオットーが口を開いた。

「逆です、セイン姉様。もう六体しかいないんです」

「ええ。オットーの言う通りです。半数はもう能力もある程度分かっています。なら、警戒するに越した事はありませんが、恐れすぎる必要はありません」

その言葉にセインだけでなく、クアットロやチンクも軽い驚きを見せる。だが、すぐに笑みを浮かべて肯定するように頷いた。そうだ。例え能力が分からない怪人が相手だとしても、自分達のＩＳは知っている。それに姿からある程度の想像もつく事が多い。

そう思い、セイン達は視線をある者達へ向けた。そこには、既に笑みさえ浮かべて話す翔一と真司の姿がある。

「じゃ、いきなりその姿を？」

「はい。明日はもう最後だと思って、一気に片付けようと考えてるんで」

「そっか。なら、俺もそうしようかな？」

「いえ、城戸さんは最後の最後まで温存した方がいいです。邪眼との決着まで」

二人は明日の戦いに関して話し合っていたのだが、翔一がアギトの秘めた姿を解放する事を決意した事を聞いて、真司も自身もユニゾンを使おうかと迷った。しかし、翔一の言葉にそれを思い留まった。

邪眼との決着。それは言うまでもなくラボを取り返すための戦いだ。それが本当の意味での最終決戦。だから、翔一は真司へ告げたのだ。その時主力となるべきは龍騎だと。ラボで暮らし、ジェイル

達と共に思い出をそこに残してきた真司。そんな真司が決め手になるべきだ。そう翔一は思っていたのだから。

それを感じ取り、真司は力強く頷いた。邪眼の知らぬ自分の力。それを解禁するのは最後の最後まで取っておくと。そんな二人の会話を聞きながら、五代と光太郎もまた決意を新たにしていた。

「……光太郎さん、俺もいざとなったら」

「いや、五代さんそれは」

「分かってます。でも邪眼を大勢相手にするには……それしかないですよね？」

「……そう、だとしても……それ以外の可能性を諦めちゃいけない」

光太郎の答えに五代は思わず言葉を失う。そんな事を言われるとは思わなかったのだ。光太郎はそんな五代へ告げた。凄まじき戦士の力を使うのは、本当にそれ以外に打つ手が無くなった時だけだ。それまではどんなに絶望的でも足掻き続ける事。

自分も諦めず戦った結果、ＲＸからロボライダーやバイオライダーへの変身を得たのだと。それを聞き、五代もまた思い出した。自分も初めて超変身したのは、赤のままで足掻き続けての結果だったと。

（そっか。俺、気付かない内にどこかで甘く考えてたのかも。一度制御出来たから、今度も出来るって。まだ黒の金のクウガもあるし、他の色の金もある。それを全部使い切っても駄目だったら、その時が出番なんだ）

一度やってのけた事実。それが知らずどこかで、自分の中の凄まじき戦士への危険性を鈍らせていた。そう五代は思った。あれは簡単に使ってはいけない力なのだから。光太郎の方がそれを熟知していた。

それは光太郎がＲＸの力を恐れているから。太陽の光ある限り、無敵に近い力を持つＲＸ。それと同じだろう存在の凄まじき戦士。そう考えるからこそ、光太郎はその力を安易には使わないで欲しかったのだ。

（もし凄まじき戦士が暴走すれば、それは邪眼以上の脅威になる。そして、最悪の場合は……いや！　そんな事にはさせない！　俺が何としても阻止してみせるっ！）

脳裏に浮かんだ最悪のシナリオ。それを振り払い、光太郎は周囲へ告げた。絶対に最後まで諦めないで欲しいと。諦めなければ、必ず奇跡を起こせるから。そう力強く言い切った。それに全員が頷き、ヴィヴィオが手を上げて叫ぶ。

「諦めないぞ！　お～っ！」

それに誰もが笑みを浮かべ、声を返す。幼い命が告げる言葉。それに大きな勇気をもらって……

「父さん、本当にいいんですか？」

「ああ、もう迷いはない。皮肉なものだが、邪眼とやらのおかげで踏ん切りがついた」

地上本部　レジアスの執務室。そこでレジアスは娘のオーリスと明日に迫った公開意見陳述会の最終確認をしていた。そこで、レジアスはこれまでの質量兵器の解禁ではなく、まったく別の物の許可を得ようとしていたのだ。

それは、先日ジェイルから届いた改良型バトルジャケットだ。そのフェイスにオーリスは疑問を浮かべたが、レジアスはむしろそれに満足していた。希望通りだったからだ。そして、そこには初期のバトルジャケットも残されていた。

「でも、明日にあの化物が襲ってくると……」

「だからこそ、これを儂が使うのだ。そして、見せなくてならん。これこそが、魔導師にも騎士にもなれぬ者達の希望だと。魔法に並ぶ護るための力なのだと」

レジアスが噛み締めるように告げる言葉。それに込められた想いは強い。魔力がなくても戦える力。非殺傷を出来ずとも、相手を止める事が出来る防御力と制圧力。唯一の難点はその重量だが、それでも訓練すれば誰でも装備出来るようになる適応性。

全てにおいて、このバトルジャケットはレジアスの理想だった。質量兵器に該当する要素はないのも大きい。そう、これはあくまで鎧。剣でも銃でもないのだ。オプションで剣や盾を使う事は出来る。しかし、それにはベントカードが必要。しかも、一度きりの消耗品。ならば、それをきっちり管理すればいいだけだ。

確かにまだ色々と穴はあるかもしれないが、それでも製造技術は現在ジェイルのみが有している。犯罪者へ流れる事があったとしても、早々作り出せないようにする事も可能だろう。何せ、相手はアルハザードの申し子”アンリミテッド・デザイア”なのだから。

そう考え、レジアスは内心笑う。犯罪者だったジェイルをここま

で信頼している自分にだ。いかに改心したとはいえ、相手は広域次元犯罪者。それをここまで信頼するなど、以前の自分であれば有り得ないと。

（ふん、ゼストだけでなくスカリエッティまで感化されたか。グレアムが言った通り、仮面ライダーとやらは凄まじい影響力を持っているようだ。明日、奴らの力と姿を次元世界は知る事になるのだろうか……？　だとすれば、それについても何らかの対策を……いや、その時になってから考えれば良い）

もしかすれば、その姿を見せる事無く怪人達を倒してしまうかもしれない。そんな風に思い、レジアスは笑う。そんなレジアスを見て、オーリスは小さくため息を吐いた。

「……全ては、地上の平和のために、ですか？」

オーリスは呆れたように呟く。それにレジアスは即座に声を返す。そして、その後に続く言葉にオーリスは言葉を失う事となった。

――――いや、全ての者達の笑顔のために、だ。

無限書庫　司書長室。そこにユーノはある者から呼び出されていた。大事な話があって、あまり人目に付きたくないと。実は彼自身、本来ならばそれに応じたくなかった。何故ならば、今のユーノはその相手を警戒していたからだ。とは言え、表向きは違う。信頼し、頼りにしていた相手なのだから。

だが、光太郎や五代と久しぶりに会った際聞いた事がキッカケで、彼はその相手を探った。レティからの情報を入手し、更に詳しく相

手の個人情報を洗った。その結果は恐ろしいものがあったのだ。

「申し訳ありません、スクライア司書長。わざわざお呼び出しして」

「いいさ。で、何の用だい？」

そこでユーノは静かに深呼吸をした。

「……ルネ」

ユーノの目の前には司書であるルネッサ・マグナスが立っていた。ルネッサはその表情を少しも変える事無くユーノへ告げた。最近自分の事を調べているそうだが、どうしてかと。それにユーノは平然と返す。

司書全員の事を把握出来ないで司書長は名乗れない。そう親友であるクロノから言われたからだ。自分もそれに確かにと思い、悪いとは思ったがそれぞれの個人データを可能な限り閲覧させてもらったのだと。

「……そうですか」

「そう。気に障ったのなら謝るよ、ルネ」

「いえ、私は……」

ルネッサはユーノの言葉に気にしていないと返そうとしたのだろう。だが、それをユーノは遮るように告げた。

――ただし、君が本当にルネッサ・マグナスなら、ね。

その言葉にルネッサの表情が微かに変わる。どういう意味だ。そんな言葉が聞こえてきそうな視線をユーノへ向けていた。それにユーノは内心で軽い焦りを感じていた。万が一に備え、手はいくつか打ってはある。だが、それでも不安は尽きない。対策の中の一番有効なものは、いつ動くか分からなかったからだ。

それに、自分の調査結果が教えた答え。それが、目の前の相手がルネッサ・マグナスではない事を示していたからだ。それを、今から相手に突きつける。そう決意し、ユーノは口を開いた。

「君は本当に上手く誤魔化したよ。レティ提督でさえ信じ込むぐらい、精巧な個人データだった。でも、精巧すぎた。君は僕に何て言った？　戦災孤児だと、そう言ったよね？」

「……ええ」

「じゃ、どうして同じ個人データが二つあるんだろう？」

そこで初めて相手に驚きが浮かんだ。ユーノはそれに構わず、続ける。自分が調べたところ、ルネッサ・マグナスと言う人物はそれなりにいた。だが、戦災孤児でとなると途端に数を減らしていった。残ったのは、二つだけ。

もしかしたら戦災に合う前と合った後かもしれない。そうも考えた。だが、調べてみると両方とも完全に同じだったのだ。たった一つの違いを除いて。

「ミス？　いや、違う。そもそも戦災孤児のデータを二つ作る事が有り得ない。それに、何よりも唯一の違いがあった。現在地さ」

片方はヴァイセン。そしてもう片方は言うまでもなくミッドチル

ダ。そこまで知ったユーノは、即座にヴァイセンの方を本物だと決めた。その理由は特にない。だが、もう一方を偽者とする理由はある。それは……

――あの海底遺跡の場所を知っていたのは、六課関係者以外では僕ともう一人。そう、君だよルネ。いや、おそらくツバイとでも呼べばいいかな？

そうユーノが告げる。辺りを静寂が包む。ユーノは口の中が乾いていた。緊張と恐怖が体を襲う。だが、それをユーノは振り払うように全身に力を込める。そして、鋭く目の前を睨みつけた。

やがて、ルネッサは笑い出した。それはユーノの言葉が楽しくて仕方ないと言うように。それでも、ユーノは目を逸らさない。そして、ルネッサは笑うのを止めてユーノへ鋭い視線を向けた。

「戯れの穴として残しておいたけど、調べる事はないと思ってたわ。一度調べられた後にはね」

「ああ、本当ならそうだったよ。でも、さすがにあの海底遺跡は疑われる要素だ」

「ふふっ、お人好しばかりと思ったけど、無条件に信じてる訳じゃないのね？」

「そうしたいけど、ね。残念ながら邪眼のせいで疑う事をせざるを得なくなったんだよ」

ユーノがそう言うと、ルネッサは姿を変え黒髪のドゥーエそっくりに変化する。それにユーノが小さく呟く。

――本当は、最後まで信じていたかったんだ……

だが、その呟きを聞いたツバイは吐き捨てるように告げた。

――馬鹿ね！　この世で他人など信じられるものかっ！

その言葉にユーノは目を伏せた。そして、ゆっくり眼鏡を外す。そう、眼鏡は伊達。ユーノが眼鏡を掛けた理由は一つ。自分は学者として生きようと決めた際、それらしくなるようにと掛けただけだったのだから。

ツバイはそんなユーノに妙な迫力を感じ、やや警戒するように注視した。彼女の調査では、ユーノには戦闘能力は無いに等しい。だからこそ、こうして対峙する事になっても一欠片の不安も抱いていないのだ。

ユーノは眼鏡を外すと、それを静かに内ポケットへしまう。それは、ある決意。学者である自分ではなく、一人の男としての自分であると示すため。そして、彼はツバイへ向かって言葉を放つ。

「仮にそうだとしても……僕は、僕は……」

その声は震えていた。だが、それは決して恐れから来る震えではない。それは、別の感情から来る震えだ。それは怒り。ツバイの告げた言葉に対する抑えきれぬ怒りがユーノを動かしていたのだから。

「僕は、誰かを疑って生きる世の中なんてご免だっ！！」

故に吼えた。目を見開き、地を揺るがさんとばかりの大声で。それにツバイも無意識に一歩だけ後ずさった。仮面ライダーでも、エースでもない男の叫び。それが怪人をたった一歩でも退かせたのだ。

「なっ……」

「覚えておけ、怪人！　僕らは確かに、賢くも強くもない存在だろうさ。でも、お前達が思う程愚かでも弱くもないっ！！」

それは、人類を代表しての啖呵。仮面ライダーと関り、それを支える事が出来ぬ自分だからこそ、抱いた想い。愛する女性達と違い、傍で戦う事も出来ない。だからこそ、怪人に恐怖する訳にはいかなかった。魂だけは気高くあろう。彼もまた知らず、仮面ライダーと同じ心境に辿り着いていたのだから。

「ふんっ！　寝言は寝て言うのね……」

ツバイはそう告げると、その体を変えていく。それは、蠍。手の爪と尾からは液体を流し、床に穴を開けた。その周囲からは何やら害のありそうな煙が発生している。ユーノはそれを見て即座に動いた。それは入口の傍にあるスイッチを入れるため。

その狙いに気付き、ツバイは軽く感心したような声を出す。そう、ユーノが作動させたのは空調。換気をさせる事で有毒ガスを排出させたのだ。

「やるじゃない……」

「力が無いから知恵ぐらいは、ねっ！」

その声と共にユーノはバインドを展開する。チェーンバインド。彼が得意とする魔法となった一つだ。バインドなどの支援魔法。それをユーノは徹底的に磨いた。攻撃が出来ずとも、それで誰かの助けになる。それをあの無人世界での戦いで知ったのだ。

ツバイの動きを封じようとするチェーンバインド。それをツバイ

がかわしながら、ユーノへ迫る。それにユーノが慌てる事無く対処した。ツバイの爪がユーノを捉えようとする。その瞬間、ユーノの体が消える。それに驚くツバイ。そして同時に、前もってそこに設置されたバインドが発動する。

「なっ！？」

「それは僕が部屋に入った時に設置したものさ。そして、転送魔法は短距離なら今みたいに即興で出来る」

「味な真似をっ！」

「お褒めに預かりどうも。じゃ、お引取り願おうかっ！」

再び転送魔法を展開するユーノ。転送先はベルカ自治区はジェイルラボ。本当ならばここで倒したい。だが、自分にそんな力はない。故に危険がない場所へ転送する。座標自体は既にウーノから聞き出し済み。出来るなら六課へ転送し撃破してもらいたいが、打ち合わせを知られる可能性を考慮し、それは出来なかったのだ。

「おのれ！　雑魚の分勢でっ！」

転送魔法で消える瞬間、ツバイはその爪をユーノへ伸ばした。それがユーノの腹部を捉える。咄嗟に防御魔法を展開したユーノだったが、長距離転送中のため、その構造は雑になってしまう。

そのため、爪はあっさりとそれを貫く。それでもユーノは、咄嗟に身を引いて掠るぐらいに留める事が出来たのだが、その爪には強力な毒が……

「ぐっ！　て、転送っ！！」

傷口から毒が侵入し、それに苦しみながらもユーノはツバイを転送した。そして、それを見届けた瞬間倒れ込む。するとそこへ、勢い良く現れる者がいた。

「ユーノっ！？」

「や、やぁ遅いよクロノ」

それはクロノだった。彼は翌日に控えた公開意見陳述会のため、本局に一人戻り、海の人間としてグレアムと打ち合わせしていたのだ。それをユーノは知り、それが終わり次第、無限書庫へ来てくれるように念話で頼んでいた。それが、万が一に備えての手だった。

クロノは、倒れるユーノの顔を見て血相を変えた。見るからに良くないのだ。一応ユーノ自身も回復魔法を使っているが、効果は薄いらしく、顔色が優れない。それを確認しつつ、クロノは素早くユーノを支えるように抱え、即座に本局中への緊急回線を開いた。その内の一つに映る局員が、クロノの姿を見て不思議そうに問いかけた。

『どうされました、クロノ提督？』

「救護班を早くっ！　ユーノが、ユーノがっ！！」

「お、落ち着きなよクロノ。君らしくない……」

「喋るなっ！　毒にやられたらしい！　誰でもいいっ！　こいつを助けてくれっ！！」

『わ、分かりましたっ！　すぐに向かわせます！』

「急いでくれっ！」

通信中、クロノもあまり得意ではないが回復魔法を掛け続けていた。しかし、その視界が薄っすらと滲む。ユーノの顔色がどんどん酷くなっているからだ。それでも諦めないでクロノは魔法をかけ続ける。目の前で親友が弱っていくのを実感しながら、それでも懸命に。

どこかで無駄だと理性が告げる。だが、それを上回る声で諦めるなと叫ぶ意思がある。クロノは折れそうになる心を奮い立たせ、ユーノの手を強く握る。その手は軽く血で汚れていた。だが、それをまったく気にする事もなく、クロノはユーノへ呼びかける。

「しっかりしろ、ユーノっ！　お前はこんな事で死ぬような奴じゃないだろ！？」

「……クロノ、頼みがある」

「分かった！　体が治ったら何でも聞いてやる！」

「今じゃなきゃ……駄目なんだ」

クロノの手を握り返すユーノ。その力は弱いが、何故か不思議な強さがあった。それにクロノは何かを悟る。だが、それを顔に出す事無く頷いた。それにユーノは小さく感謝を告げ、ズボンのポケットの物をなのはに届けて欲しいと告げる。

それにクロノがズボンのポケットを探ると、そこから小箱が出てきた。それにクロノは完全に視界が滲んだ。開けるまでもなく、それが何か分かったのだ。何故なら、それは自分もかつてエイミィへ手渡した物だったのだから。

――この馬鹿、これはお前の手で渡さないと意味がないんだぞ……？

――勘違い、しない……でよ。それは、婚約指輪さ。結婚……指輪は……っ！　僕から、渡すよ……

その言葉にクロノは目を見開いた。今、ユーノは何と言ったと。そう、結婚指輪は自分で渡す。それが意味する事を理解し、クロノは涙を流しながら、悪態をついた。気弱になっていたのは、自分の方だと気付かせた事に対する皮肉も込めて。

「こいつめ、人を前座に使う気か。しかも、体が治ったらと言ったのにな。まぁいいさ、ちゃんと叶えてやる。だが、代わりに絶対死ぬなっ！！」

それにユーノは言葉を返さない。ただ、黙って静かに震える手である仕草を返した。それにクロノが泣きながら笑みを浮かべ、それを返す。それはサムズアップ。そして、そこへ大勢の局員が現れる。同時に担架などが運ばれた。彼らはクロノからユーノの治療を引き継ぎ、去っていく。

ただ一人残った者がクロノへやや躊躇うように問いかけた。付き添いますかと。それにクロノは首を横に振り、歩き出す。自分にはしなければならない事があると。その言葉に疑問を感じる彼に、クロノは振り向かずに告げた。

――親友から受けた頼まれ事がある。僕は、必ず応えると約束した。

それを無言で見送る局員。クロノはそのまま司書長室を出ようと

して、立ち止まる。そして、床の穴を詳しく調べてくれと言い残し、部屋を出た。ゆっくりと廊下を歩くクロノ。だが、その歩みが少し歩いたところで止まる。

そこで、いきなり壁へ拳を叩きつけた。更にその唇からは血が出ている。表情は憤怒を表していた。それをクロノを良く知る者が見たのなら、きっとこう言っただろう。こんなクロノは見た事がないと。

「初めてこんな気持ちになったな。あれをやった怪人は……絶対許さんっ！」

彼はそこから自分が艦長を勤めるクラウディアへ通信を入れる。その告げられる内容に混乱するクルー達。だが、クロノの表情と眼差しに誰もが黙り、やがて諦めたように笑みを浮かべ頷いた。それにクロノは感謝を告げ、通信を切った。

そして、黙って再び歩き出す。そこにいるのは、クロノ・ハラオウン提督ではなかった。それは、親友を傷付けられて怒りに燃える一人の男だった……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

その日、機動六課前編。まさかのユーノ&クロノ登場。後半は戦闘回。ですが、量によっては中編と後編に分けるかもしれません。

ユーノの出番はおそらくもう無いに等しいです。クロノはこれから

が本番になる予定。ＳｔＳだろうと、この二人が活躍出来ない訳がない

苦戦の末、黒い龍騎を倒し、ナイトと共に立つ龍騎。激戦を互いに制したにも関らず、まだその雰囲気は戦士のもの。その理由は、その見つめる視線の先にある。

二人の眼前に存在するは、同じミラーモンスターの大群。疲労が残る中でも、龍騎もナイトも諦めたようには見えない。どちらともなく、躊躇いを見せずに二人はそこへ向かっていく。そして……

「……この夢、か」

真司はそうぽつりと呟いて、ゆっくりと起き上がった。毎度の事ながら、これらの夢の後は信じられない程の汗を掻く。真司は、汗で張り付くシャツを脱ぎ、それを手にして動き出す。まだ寝ている二人を起こさないようにし、シャツを洗濯籠へ。

そして、引き返して三段ボックスの引き出しを開け、そこからシャツを取り出す。それが真司のタンス代わり。シャツを着て、真司は静かに窓へと歩いて行く。カーテンを少し動かし外を眺める真司だったが、その表情は困惑していた。

「何でこのタイミングで見るんだよ……」

悪夢にも等しい夢。それをよりにもよって、大事な決戦前に見る事に不安と苛立ちを感じたのだ。今日は公開意見陳述会。邪眼達が総攻撃をかけてくるだろう日なのだ。そこで見たのが同じミラーモンスターの大群との戦い。

それが真司には、マリアージュを連想させた。そして、黒い自分の姿。それは邪眼や怪人を思わせる。それに勝利出来るのはいい事だ。だが、その後がいただけない。あれでは、まるで自分とアギト

がマリアージュに押し潰されると暗示させるようだ。

そんな風に思い、真司は軽く首を振る。仮面ライダーが二人もいて、負けるなどはあるはずがない。そう言い聞かせるように、真司は頬を軽く叩いた。

「っしゃあ！」

気合は入れ直した。そんな風に声を出す真司。だが、その声で五代と翔一が揃って目を覚ますのだった……

「結局夜襲は無かったですね」

「ああ。もしかしたらマリアージュ辺りでも、散発的にけしかけてくるかと思ったんだけどな」

スバルの呟きにヴィータはそう返した。時刻は八時を指している。普段ならここから一日が始まると思うのだろうが、生憎今回は徹夜明けだ。それでも交代で仮眠を取り、出来る限り疲労を取ってはいるのだが。

六課の面々はある種の確信があるため、仮眠も普通に取れた。邪眼が狙うのは絶対に意見陳述会の最中。なので、六課とゼスト隊は仮眠を緊張する事無く取る事が出来たのだ。

「やはり全戦力を集中させるつもりなんでしょうか？」

ティアナは周囲に他の局員がいない事を確認し、そう尋ねた。邪眼の事は未だに伏せられている。マリアージュはその出現の詳しい

経緯を伏せられ、危険指定のロストロギアとしか伝えられていないのだ。
故に、全戦力という言葉は周囲には理解されないし、疑問を抱かれる事にもなりかねない。だからこそ、ティアナは周囲へ気を配ったのだ。

「多分な。だから本番まではあまり緊張すんな。後、絶対奇襲になるはずだから、うろたえんじゃね～ぞ」

「「はい！」」

ヴィータの言葉に返事を返す二人。その力強さにヴィータも満足そうに頷き、三人は視線を周囲へ向けた。現在、なのは達隊長三人とシグナムは地上本部内の警備をしている。中はデバイスの持ち込みが禁止されているので、本来は彼らは無力に近い。
だが、六課の者達は密かにデバイスを所持している。怪人の危険性を認識しているオーリスが、秘密裏にはやてへ告げたのだ。六課所属の者に限り、デバイス所持を見逃すと。

それを聞いたはやては、オーリスの処置に感謝した。怪人が地上本部内部に侵攻してくるのは明らかだったからだ。そのために内部にはライダーを行かせたかったのだが、それも中々困難だった。
非常時になれば入る事は可能だ。しかし、平時では民間協力者では入る事は不可能。故に、なのは達は出来るだけ、自分達で地上本部内は防衛したかったのだ。それ故に、デバイスの所持を見逃してもらえるのは有難かった。

「……本番までもう少しか」

【フェイトちゃん、そっちは？】

なのははは歩きながら、別の場所を見回っているフェイトへ念話を送る。一応念のために警戒をしているのだ。六課に対してのスパイが無かったため、地上本部襲撃に関っているのでは。そう判断したためだ。

はやてはその旨をオーリスへ伝え、警備の重要人物などを二人で密かに調査中。だが、そう簡単に判明するものではないと分かっているため、精々出来てある程度注意を払うぐらいだったが。

【こっちは問題ないよ。何となくだけど、疑い過ぎるのも良くないと思うし】

【どうして？】

【疑ってるとみんな敵に見えるけど、信じると仲間に見えるでしょ？】

それが光太郎の言った言葉の変化だと気付き、なのははは微かに笑う。フェイトは疑うよりも、信じていようとしているのだ。万が一裏切られても、動揺しないで対処すればいい。そう言いのけたようなものだ。

なので、なのはもそれに頷くように返事を返した。そして、同じ言葉をはやてにも伝える。

【成程な。うん、了解や。オーリスさんにもそう伝えとく】

【理想論だけどね】

【綺麗事で済むならそれがええ。そやろ？】

はやての言葉になのはは一瞬答えに詰まった。それがとても五代らしく聞こえたからだ。そんななのはの心境を理解したのか、はやてが少し悪戯っぽく告げる。これは五代から教えてもらった言葉だと。

その言葉になのはは納得。そして、心から賛成するように答えを返す。

――うん、そうだね。それが一番いいんだもん。

そう返すと同時に、なのはは立ち止まって窓を見る。そこからは、丁度六課隊舎がある方角を見る事が出来た。そこにいる五代とヴィヴィオへ意識を向け、なのはは小さく微笑む。絶対に勝ってみせる。何があっても。

そんな思いを強くし、なのはは一人頷いて再び歩き出す。その表情は、誰が見ても分かるぐらい自信に満ちていた……

「え？　ゴウラムは使わないんですか？」

「うん。アクロバッターが言うには、翔一君の言う事も理解してくれてるらしいし、こっちに戦力として残しておくよ」

五代はそう言ってゴウラムを撫でる。五代がゴウラムを必要とする時のほとんどは、金の力による被害を防ぐためだ。確かに空戦をするためにも呼ぶ事はあるかもしれないが、今の五代にはゴウラムよりも有効な対処法がある。

そのため、ゴウラムを翔一達に託しても構わなかった。いや、むしろ託したかった。少しでも隊舎を守る力を増やしたい。そんな想いが五代にはあったのだから。ヴィヴィオにイクスヴェリアという

幼い存在。それを守る事が出来るようにと。

「分かりました。じゃ、遠慮なく頼りにさせてもらいます」

「頼むね。俺も向こうで頑張るから」

「行ってらっしゃ～い」

「ご武運を」

そう言って五代はビートチェイサーへ乗るために歩き出す。翔一とヴィヴィオにイクスヴェリアだけがそれを見送る。同じ頃、残りの者達はヘリポートで光太郎達を見送っていた。

「真司君、もしかするとこちらにも邪眼が来る可能性もある。その時は……頼む」

「任せてください！　俺と翔一さんで返り討ちにしてやります！」

「アタシもいるしな！」

光太郎の不安を吹き飛ばす程の笑みを返す真司とアギト。それに光太郎も笑みを返し、頷いた。邪眼の残る数は十体。一体を本体として残すとすると、九体が自由に動ける計算になる。光太郎は、昨夜自分がもし相手ならばどうするかを考えた。

ライダーが四人。それを必ず分散させると読み、自分も半数程度に分かれて動くのではと。なので、ウーノと協議した結果、邪眼が隊舎にも現れる可能性が高いと予想。その対策をウーノはグリフィス達と練る事にした。

「トーレ、気をつけてね」

「ああ。万一の際は任せろ」

ウーノの言葉に頷くトーレ。攻撃の要となる役割を担うトーレ。おそらく、空から襲い来るだろうドライ達を相手にする事になる。そのため、トーレはセッテとコンビを組み、それに対応する事にしていた。

更には、万が一の際の助っ人としても期待されているため、その双肩にかかる責任は重い。だが、それが不思議と嬉しく思えているのだ。頼りにされる。それがトーレに無言の力を与えていたのだから。

「セッテ、エリオとキャロに怪我しないようにって言っておいてね」

「分かりました」

ドゥーエの言葉に笑みで答えるセッテ。エリオとキャロの二人とドゥーエの仲は誰もが知る限り、良好だ。エリオはややドゥーエを苦手としているが、キャロと共にフェイトとは違う意味で慕っている。

なので、そんなドゥーエからの言葉は二人に少なからず力になる。そう思うからこそ、セッテも確実に伝えるとの気持ちで頷いたのだ。

「ではな、ディエチ。留守を頼む」

「アタシ達も頑張るッスから」

「無理、すんなよ」

「うん。ありがとうノーヴェ。チンク姉とウェンディも気をつけて」

手を振り合うディエチとウェンディ。ノーヴェは少し照れくさそうにではあるが、手を振っている。チンクはそんな姿に微笑み、ディエチへ顔を向けて小さく頷いた。

地上本部では、三人はスターズと協力する形で動く事になっている。それは、ノーヴェとウェンディのコンビがスバルとティアナのコンビに近いからだ。つまり、なのはもヴィータもその動きや考えを理解し易く、指示を出す事が出来る。更に、コンビ同士の連携も出来るため、戦力的に見てもかなりのプラスになるのだ。

チンクは、ヴィータと同じくサブリーダー的な役割を期待されている。姉としてのフォローと実戦経験の多さから来る安定感で、スバル達を支えて欲しいと。ＩＳも支援向きになっている事もあり、怪人戦の決め手としても動けるので、かなり重要な位置づけではある。

「オットーちゃんにディードちゃん。シンちゃんの事、頼むわね」

「はい。クアットロ姉様もお気をつけて」

「ガジェットの制御が大変でしょうが、ご武運を」

ヘリの中に積まれた数機のガジェット。それを制御しながら、クアットロは戦わないといけないのだ。クアットロ自身は、ライトニングと協力する事になっているが、ガジェットはスターズとライトニングの双方へ向かわせないといけないのだ。

それによる複雑な行動を余儀なくされているため、クアットロの事が二人は心配だった。本来ならば、ウーノとオットーもそこに加わり、三人で分担する事で負担を軽減するのだが、今回はそれが出

来ない。かと言って、オットーが地上本部に行く事も出来ないのだ。

そんな二人の気持ちを理解してるのか、クアットロは自慢するように笑みを浮かべて言い切った。自分を誰だと思っているのかと。それだけでオットーもディードも笑みを返した。もうそれだけで言葉は要らなかった。

妹の気持ちを受け、姉は感謝しつつ励まし、それを受けた方は安堵と期待を返す。

「セイン、お前はややそそっかしい時がある。それに気をつけろ」

「は～い。リインさんは、ヴィヴィオとイクスの護衛頑張ってください」

「大丈夫よ。私やザフィーラもいるんだし」

「こちらは心配いらん。互いに全力を尽くせばいいだけだ」

守護騎士三人に声を掛けられるセイン。ヴァルキリーズの中で一番のムードメーカーである彼女は、その分そそっかしい。それを軽く嗜めるようなリイン。そんなリインにやや苦笑を浮かべ、セインは言葉を返す。

それにシャマルとザフィーラが微笑みを以って答えた。ザフィーラの告げた言葉。それは、周囲も同じ気持ちだった。だからこそ、その言葉に全員が頷いたのだから。

こうして地上本部組は出発した。残った者達は、来たるべき時に備えるために隊舎へと戻る。今日は長い一日になる。そんな風に誰もが感じていた……

同時刻、レジアスの執務室に思わぬ人物が訪れていた。

「……いいだろう。確かにそれもデータとして役に立つだろうからな」

「ご理解感謝します、レジアス中将」

「まさか、海の貴様が儂に頭を下げにくるとは思わなかったぞ……」

そう言って、レジアスはどこか楽しそうに笑みを浮かべた。

――クロノ提督。

クロノはその言葉に何も言わない。彼がここに来たのは、ある物をレジアスから借りるためだ。とは言え、それはもうレジアスが必要としていない物だった。故に、あっさりと許可も出た。

今の自分では怪人と戦う事は出来ても、倒す事が出来ない。そう判断したクロノは、即座に六課にいるグリフィスを頼った。何か怪人に対抗する手段や方法はないかを聞くためだ。相手をグリフィスにしたのは、なのは達と違い隊舎にいる事と、もう一つ。

――この事を誰にも言わないでくれ。

口が堅い事。そして、グリフィスはクロノの突然の質問に対して詮索もせず、黙ってバトルジャケットの事を話した。そして、それが今どこにあるのかをジェイルから聞き出してもくれた。その情報を頼りに、クロノはレジアスへ会うための行動を起こした。

半ば強引にはなったが、オーリスへ怪人の事で相談があると告げ

ると、通してもらう事に成功したのだ。クロノはレジアスにこう頼んだ。バトルジャケットを貸して欲しいと。しかも、局員としてではなく一個人として。

その理由をレジアスは聞く事はしなかった。元来、ハラオウン家は本局に幅を利かせているために嫌っていた。だが、仮面ライダーやグレアムとの接点を作った以上、クロノ達もまた平和を願っている事を知った今、かつて程の嫌悪感は無かった。

更に、いきなり頭を下げてきたのだ。駆け引きも何もなく、ただ真心だけをぶつけてきた。ならば、レジアスはそれを利用する事が出来なかった。もう陸と海の関係改善も進んでいる。ここでそれをこじらせる訳にもいかなかった。

「今日、奴らは行動を起こします。僕は、本来ならばそれに関る事は出来なかったのですが……」

「クラウディアは、現在艦長不在のまま任務に就いているらしいな。何でも艦長が急病だと聞いた」

「ええ。怒りに我を忘れています。なので、そんな者は次元航行艦の艦長失格です。事実上の失職ですよ」

「貴様、そんな性格だったのか。聞いていた印象と大分……」

レジアスはクロノの言葉に内心驚きを感じるも、どこか意外そうに言葉を返す。だが、それを言い終わる前にクロノがこう告げた。

「誰にでも、絶対に許せない事が一つはあります。それでも、自分を抑える事が出来るのが正しい局員なら……」

そこで、クロノは一旦言葉を切る。そして、レジアスを見据えたまま告げた。

――僕は、局員を辞めますよ。

その言葉に、表情にレジアスは一瞬息を呑んだ。だが、すぐに笑い出した。冷静沈着の優秀な人物。そんな風に聞いていたクロノが、自分へ言い放った啖呵。それに不覚にも感動してしまったのだ。

海にも骨のある奴がいたと。提督までなった者が、局員を辞めるとまで言ったのだ。しかも、ある意味で敵対する陸の代表格である自分へ。それが意味する事を考え、レジアスはクロノの評価を変える事にした。

「そうか。ならばもう何も言わん」

「……感謝します、中将」

そう告げて、クロノはバトルジャケットを入れたケースを手にし、退出しようとする。そんな彼にレジアスは一言だけ声を掛けた。

――儂の事を任すのは、お前にしたい。

――――……全てが終わった時に、その話は聞かせてください。

クロノはそう返し、部屋を後にした。その答えにレジアスは小さく笑みを浮かべる。クロノは自分の罪状を知っていると。それを悟り、レジアスは思った。オーリスの言うように、陸だの海だの言っている場合ではなくなったと。だが、そのおかげで知れた事もある。

海にも陸にも共通する思いがある。そして、それを抱く者は思ったよりも大勢いると。クロノはきっと地上も本局も差別しないだろ

う。そう思い、レジアスは悔しそうに呟く。もっと早くに気付くべきだったと。海にも自分と同じ理想を持ち、願う者達がいた事を。

（地上だけではなく、全ての世界の平和。それこそが局員の願い。こんな基本的な事を信じる事が出来なくなるとはな）

上層部はともかく、現場の者は決して互いを見下したりする者ばかりではない。そうもっと早く信じる事が出来れば良かった。そんな風に思い、レジアスは動き出す。間近に迫った運命の時刻。それに備えるために……

「……始まりましたね」

エリオが噛み締めるように告げた言葉に、光太郎達が頷いた。フェイトとシグナムは本部内部にいるので、現在のリーダーはクアットロが引き受けている。周囲に光太郎が怪しく思われないように、格好を陸士の制服にしているが不思議と違和感はあまりなかった。

ついに開始された公開意見陳述会。それを受けて、六課の者達は揃って警戒を始めた。光太郎は、出来る事なら変身したい。そうすればＲＸの能力を使い、万全の態勢で索敵などを出来るからだ。だが、今それをやってしまえば、無用の混乱を招きかねない。

故に、ヴァルキリーズがその能力を最大限に発揮する事で、索敵を行なっていた。クアットロとセインはライトニングと共にいるが、トーレとセッテはゼスト隊の傍にいる。スターズはヴィータとチンクを中心とし、警戒をしている。

五代はビートチェイサーに乗ったまま、地上本部近くで待機している。その理由は、ビートチェイサーの置き場に困ったのと、警備

をする陸士が一人バイクで来るのは、さすがに少し怪しまれるためだ。格好だけは陸士の制服なので、一応そこまで怪しまれてはいなかったが。

「……始まったんだ。じゃ、そろそろかな」

五代は一人聞こえてきた音声に呟き、周囲へ視線を向けた。警備自体はもっと本部に近い場所で行なわれている。五代は誰もいない事を確認し、変身の構えを取った。

「変身！」

緑のクウガへ最初から変身し、その感覚を使い周囲を探る。聞こえる様々な音や見える様々な景色。その中に怪人の姿やトイを捜す。そして、それをある程度行い、赤へ戻る。だが、少し時間を置いて再び緑へ超変身し、索敵を行なう。

光太郎のように、普段から鋭い感覚を発揮出来る訳ではない五代。そのため、こうするしか彼には敵への対処がなかったのだ。すると、その聴覚がある音を聞きつけた。独特の羽音。それが意味するものを理解し、クウガは即座に赤へ戻るとビートチェイサーの通信機能を使用した。

「みんな、あのカマキリが来るから気をつけて！」

ビートチェイサーの通信機能を改造し、簡易的なデバイスと同じにする事で得た擬似念話。これは六課関係者のデバイスへ伝わる。それを受けた者達が周囲へ連絡する。その瞬間、地上本部へ強力な砲撃が行なわれた。

「これは……カメ怪人のものか！」

「遠距離砲撃ねぇ。なら、ここは……クウガにお願いしてもいいかしら？」

クアットロはそう通信を送る。クウガはそれを聞き、クアットロの狙いを理解した。なので、すぐに近くにいた局員を見つけ、声を掛ける。

「あの、すみません！」

「何だっ！？　……え、あ、仮面ライダー……？」

「少しデバイス貸してください！　すぐに返しますから！」

砲撃に備え、身構えていた局員だったが、クウガに声を掛けられ驚いた。しかし、クウガが丁寧且つ真剣に頼んだ事にやや戸惑いながら、手にしたストレージデバイスを差し出した。クウガはそれを受け取ると緑へ変わる。

それに驚く局員を無視し、更に金の力を発動させる。相手の特徴は邪眼以上の強度。それに対抗するためには、金の力を使わざるを得ないと判断したのだ。倒した後の爆発を一瞬考えるクウガだったが、これまでの怪人の爆発を思い出し、場所によっては大丈夫と踏んだ。

（トイも一度金の力で倒した時、爆発が思ったよりも大きくなかった。なら、あの未確認の爆発は金の力が原因じゃないはず！）

ライジングペガサスとなったクウガは、その更に研ぎ澄まされた感覚を駆使し、高層ビルの屋上から砲撃を行なうツェーンを発見。手にしたライジングペガサスボウガンを構え、引き金を引いた。

放たれた三発の電撃を纏った空気弾がツェーンを直撃する。その内の一発は背中の砲台を破壊する。そう、クウガは倒せなかった時の事を考え、攻撃手段だけでも失わせようとしたのだ。

ツェーンはそのダメージにビルの屋上を転がるが、何とか立ち上がる。それを見届け、クウガは赤へ戻って頷いた。これで砲撃は阻止した。なので、そう全員へ連絡しようとしたのだが、その瞬間地上本部から爆発音が響いた。

「何だっ！？」

「おいっ！　どうしたんだっ！？　……駄目だ！　通信出来ないっ！」

クウガの声と同時に局員がそう告げる。それだけでクウガは内部で怪人が暴れていると察した。局員へデバイスを返し、クウガはビートチェイサーに跨り、地上本部の内部へ向かおうと走り出す。

通信が繋がらない事に気を取られていた局員だったが、そのクウガの行動理由に気付いたのだろう。離れていくその背中へ慌てて叫んだ。

「あっ！　裏の方に車両用の搬入口があるんだ！　そこからならバイクでも行けるっ！」

「ありがとうございますっ！」

後ろから聞こえる局員の声に大声で礼を返し、クウガは走る。その背中に局員が大声を掛ける。

――――頼んだぞ、仮面ライダーっ！

その声にクウガは背中越しのサムズアップを返し、そのまま地上本部搬入口へと向かって消えた……

クウガが内部へと向かい始めた頃、光太郎達はそれぞれの場所でトイとマリアージュ、そして怪人との戦闘を開始していた。他の陸士達もトイやマリアージュとの戦闘を開始している。トイのＡＭＦには苦労しているようだが、数があまり多くないためか、絶望的ではなかった。

ゼスト隊が率先してマリアージュを引き受け、１０８隊も対ＡＭＦ対策をゲンヤがはやてを通じて聞いていたため、トイを相手に善戦していた。

「ＡＭＦだろうが……」

「アタシらには関係ないッス！」

一方、その半数近くを向けられた六課。しかし、ノーヴェとウェンディがトイを主に相手取り、スバルとティアナがマリアージュを主に相手にする事でそれを凌いでいた。

「マリアージュも……」

「対処さえ分かればっ！」

動きを止めれば、勝手に自爆する。それを利用するティアナ。スバルはそれを援護しつつ、持ち前の力を使い撃破も行なう。だが、四人はそれらを相手にしながらも、厄介な存在にも気を配っていた。

「そこだっ！」

「やばっ！？」

「そうはさせないッス！」

フュンフの糸がティアナの足を捉えようとする。それをウェンディの放った攻撃が阻止する。エネルギー弾に当たった糸は、それに誘爆したように消える。ティアナはそれに安堵し、視線だけでウェンディへ礼を伝える。

それにウェンディはウインクを返し、その場を離れた。そこにもフュンフの糸が放たれたのだ。回避しつつ、その糸をエネルギー弾で除去するウェンディ。それと並行するようにある程度トイを片付けたノーヴェが、加速をつけて突撃する。

「おぉぉぉっ！」

「馬鹿がっ！　正面など……」

「馬鹿はそっちだよ！」

ノーヴェを迎撃しようとするフュンフ。すると、その背後からスバルが同じように迫る。ノーヴェへ対処すると背面からの攻撃に、スバルへ対処すると正面のノーヴェに攻撃される。

しかし、それでもフュンフは慌てなかった。その長い蜘蛛の手足を使い、両方へ攻撃を同時に行なったのだ。それが、そんな事も出来るのかと驚く二人を突き刺そうと迫る。それが二人に決して浅からぬ傷を作るはすだった。

「なっ！？」

「「行け（行くッス）っ！」」

それをティアナとウェンディの射撃が打ち砕く。スバルとノーヴェは加速をつけたまま、構える。そして、視線だけで語り合うとその勢いを乗せたままで拳をフュンフへ放つ。

「「クロスナックルッ！！」」

リボルバーナックルとガンナックルによる挟み撃ち。それが見事にフュンフを捉えた。その衝撃に体を揺らすフュンフ。更に、二人はそのまま同じ方向へ蹴り落とすように回し蹴りを放つ。

そこには、ティアナとウェンディが準備万端で待ち構えていた。ティアナはファントムブレイザーを、ウェンディはエリアルシュートをフュンフへ発射した。それを見届ける事無く、スバルとノーヴェはそれぞれ空への道を作り出し駆け上る。

「「これでっ！！」」

体勢を整えきる前にティアナとウェンディの攻撃がフュンフを撃ち落とす。そのダメージを受けても、まだフュンフは健在。口から糸を吐き、二人へ攻撃する。それを際どく回避する二人だったが、その後が続かない。

若干焦った表情を浮かべるティアナとウェンディ。そんな二人へフュンフはとどめの糸を吐き出そうとして、嫌な予感を感じてそこから離れた。それと同時にそこへスバルとノーヴェが蹴りの体勢で落ちてきた。

「惜しいっ！　気付かれたか」

「でも、いけるよティア」

「だな。でも、トイ共がまだ少し残ってるから……」

「アタシらが完全に排除しとくッス」

それぞれにフュンフから視線を外さず、言葉を交わす四人。ライダー無しでも怪人を相手出来る事を確かめ、闘志を燃やす。

一方、ヴィータもチンクと共に怪人を相手にしていた。しかも、トイとマリアージュはスバル達四人が相手にしてくれたため、完全にそれだけに集中出来るのだ。相手はこれが初となるノインだ。

黒髪のノーヴェ。つまり、完全近接型。しかし、それでも二人は油断しない。エアライナーを使い、地上戦と限定的空戦を行なう相手なのだから。チンクはノーヴェとは動きが違う事に気付き、ヴィータはその正体を現す前に出来るだけダメージを与えようとしていた。

「んなろぉぉぉぉっ！！」

「遅いんだよ！」

ヴィータの攻撃を余裕さえ感じさせるように避けるノイン。だが、そんな彼女へヴィータは馬鹿にしたような笑みを返す。それにノインが何かを言おうとした瞬間、そこへ数本のスティンガーが殺到する。

ヴィータは攻撃速度を調節する事で、ノインの回避先を誘導したのだ。それを理解し、チンクはそこへスティンガーを投げ放っていた。全ては、確実にダメージを与えるために。

「遅いんじゃねぇ。遅くしたんだ」

「そういう事だ」

それも分からず、目先の事にだけ反応したノイン。だからこそ、爆発の衝撃でエアライナーから落下するノインへ、二人はそう呆れたように告げる。ノインはその声に体勢を整え、無事に着地した。そして、二人へ鋭い視線を向ける。その表情は侮られた事に対する怒りを宿していた。

「そうかよ……なら、もう手加減はいらないな」

「「前置きはいいから、早くしろ」」

ヴィータとチンクは呆れたように同じ言葉を告げる。最初から本気で戦っている二人。手加減というのは、実戦でするものではない。そう思っているからこそ、二人はノインの言葉に心底呆れたのだ。

それに完全にノインがキレた。その姿をおぞましく変化させたのだ。その姿はアルマジロ。その姿から二人はある程度の能力を予想する。

(あの皮膚……下手すりゃかなり硬いな。無理は……アイゼンのためにも程々にすっか)

(丸まっての攻撃を得意とするのだろうか？　とすれば、その時はスティンガーが通らんな)

そう考え、二人は微かに互いへ視線を向ける。その眼差しから互いに注意する事が理解出来ていると踏み、小さな笑みと共に頷いた。

そこへノインのエアライナーが展開される。それを確認する前に、二人はその場を離れる。そこを凄まじい速度でノインが通り過ぎた。

チンクの予想通り、その体を丸めて。更に、エアライナーを上昇させる事でかなりの高度へ自分を運んだ。すると、そこから下に向かってエアライナーが展開される。しかも、一本ではなく複数を絡ませるように。

それにヴィータとチンクの表情が悔しげに変わる。そう、その道は入り組んでいて、どれがどこへ繋がるかがすぐには理解出来なかったのだ。これでは攻撃がし辛いし、下手な防御も出来ない。

「死ねぇぇぇぇっ！」

叫びと共にその入り組んだ道へ駆け下りてくるノイン。それを眺め、二人は小さく呟く。これは厄介な相手だと……

RXはクウガからの個人通信を受け、本部内部の方を任せると返した。そう、今彼の前には邪眼がいた。しかし、一体だけ。他の怪人達はエリオ達が相手にしている。他にも邪眼がいるのかと思い警戒しているのだが、一向に現れる気配がない。

それだけで、RXは嫌な予感がしていた。九体の内、半数が本部へ向かっているとして、一体しかここにいない。では、四体が三体は内部だ。だが、本当にそうかとどこかで訴えるものがあったのだ。

「くっ！」

邪眼の放つ電撃をかわし、RXは一番考えたくない想像をしていた。それは、こちらの予想を逆手に取り、一体だけをこちらへ差し

向けて残りを全部隊舎へ向かわせているのではと、そんな考えがちらついていた。
しかし、それだとしても今ここから動く訳にはいかない。そう、エリオ達が戦っている怪人の中には、初めて戦う相手もいるのだ。黒髪のウェンディそっくりの存在――エルフは、その正体を未だに明かす事無く戦っている。その手には、ライディングボードを所持しているのも、ウェンディと同じだった。

そう、怪人の数はたった二体。アインスとエルフだ。クアットロのＩＳで撹乱しつつ、エリオが高速移動で翻弄し、キャロがフリードのブレスでアインスの羽を迎撃。セインはＩＳで地面に潜み、相手に対し時折奇襲を掛けていた。
トイとマリアージュはどうも他の陸士達が相手をしてるためか、そこまでおらず、早々に片付ける事が出来ていた事だけが幸いだった。

「クア姉、そっち行った！」

「分かってるわよ！」

ガジェットの制御をしつつ、クアットロはＩＳも制御している。それを悟ったアインスがクアットロを先に仕留めようと動いていた。セインとキャロがそれを相手にしているのだが、中々厳しい状況なのだ。二人には強力な攻撃方法がない事がその一因。
今は、アインスの羽をキャロが、セインがＩＳでクアットロの移動と回避を補助していた。エリオはエルフがそちらへ手出し出来ないように、ひたすら足止めに徹していた。

「フリード、ブラストレイ！」

キャロはフリードに怪人達の牽制を任せ、自分はエリオへブースト魔法での援護を続けていた。バインドも試みてはいるのだが、相手の攻撃にも注意を払わなければいけない。そのため、的確なタイミングでの使用が出来ないでいた。

そんな風に苦戦するエリオ達。そこへ、剣閃と共に焔が駆け抜けた。剣閃はクアットロを狙っていたアインスを迎撃し、焔はエリオへエネルギー弾の連射をしていたエルフとRXと対峙する邪眼を襲った。

――すまん、遅くなった。

周囲へ希望を与えるようにシグナムはそう言って、アインスを弾き飛ばす。そして、全員へ聞こえるように告げた。

「内部の怪人は、なのは隊長と八神部隊長が中心となって戦っている。更に、確認はされていないがクウガも戦闘中らしい。私達は、ここを片付けた後、そちらへ援護に向かうぞ」

それにエリオ達が力強く頷き、一度体制を整えるため集合する。RXは邪眼をシグナム達から離すべきと考え、地を蹴った。それを見て、邪眼は後を追う。シグナム達はそれだけでRXが何を狙って動いたかを理解し、無言で頷く。

そして視線を怪人二人から逸らさず、睨むようにしていた。シグナムは念話で自分とセインでアインスを相手取り、エリオとキャロでエルフを相手にするように指示を出す。クアットロは両者の支援をしつつ、状況把握に努めるようにと締め括った。

「じゃ、僕が先陣を切ります。ストラーダッ！」

”ソニックムーブ”

エリオはエルフへ速度を活かし突撃する。キャロは、それに対して射撃を行なおうとするエルフを見て、そうはさせないとばかりにブースト魔法を使う。速度を増したエリオは、エルフの真横を通り抜けた。

それがエルフの脇腹に傷を作る。それを見て、エルフはどこか楽しそうに笑みを浮かべた。その反応にキャロは恐怖を感じるも、両足に力を込めてそれを耐え切る。

「中々やるじゃない。このままじゃ倒すのは面倒って事ね」

そう言ってエルフは姿を変える。それはヤマアラシ。背中に無数の棘を持つ動物だ。エルフはにやりと笑うと、持っていたライディングボードに乗り、突撃を敢行した。同時に背中の棘を射出する。それがエリオへ襲い掛かる。

それを回避するエリオ。避けきれないものはストラーダで弾きつつ、エルフを追い駆ける。キャロは自分へ迫り来るエルフを見て、迎撃ではなく退避を選択した。動きを止めたままでは危ないと考えたのだ。

「フリード、上昇して！」

「おっと、逃がさないよ」

ライディングボードを踏み台にして、エルフは高く跳び上がった。それはあっさりと、上昇を開始していたフリードを追い越す。キャロがそれに僅かに気を取られた瞬間、エルフはその鋭い爪を振り下ろした。

それがフリードへ直撃しそうになった時、下からエリオが飛び上がってきた。ストラーダの力を使い、ロケットのように垂直上昇を

敢行したのだ。そしてそのままストラーダでエルフの一撃を迎撃する。

「キャロ！　下に向かってブレスをっ！」

「えっ？！」

「早くっ！！」

エリオは落下を始めながら、キャロへそう指示を出す。エルフも同様に落下を始めていたので、攻撃する絶好の機会だとはキャロも理解している。だが、このままではエリオも巻き込んでしまう。そう思ったのだが、すぐにある事を思い出してキャロは告げる。

「フリード、ブラストフレア！」

「なっ？！」

エルフはまさか味方ごと攻撃すると思ってなかったのか、思わず声を発した。フリードの火炎が二人目掛けて放たれる。それが直撃する前に、エリオはストラーダを下に向け、先程と逆の事を行なう。

それにより加速度的に落下速度を上げるエリオ。だが、エルフにはそんな事は出来ない。何とか少しでも早く落下するようにするも、エリオ程の速度が出るはずもなく、火炎に少なからず当たってしまう。

エリオは体勢を何とか立て直し、火炎をくぐって落ちてくるエルフへ追い打ちの魔法を放つ。

「サンダーレイジっ！！」

それがエルフの体を直撃。電撃がエルフを駆け巡る。火炎と電撃の連続攻撃にエルフは軽くよろめくも、それでも膝をつくだけで立ち直り、ライディングボードを手にし、エリオへ向かってそれを向けた。

そこへキャロとフリードも戻り、完全に睨み合う形となる。エリオもキャロも戦って分かった事がある。それは、今の自分達なら怪人は絶対に倒せない相手ではないという事。だが、油断は出来ない。少しでも気を抜けば殺されかねない。それだけは何も変わっていないのだから。

「キャロ、援護はお願いするよ」

「うん。絶対支えるからね、エリオ君」

互いに小声で信頼を告げる。そして、再びエルフへと向かっていくエリオ。それを助けるべく、キャロも動き出す。

同じようにシグナム達もアインス相手に五分の戦いを展開していた。シグナムが羽の迎撃と前線をする横で、セインはクアットロの傍で護衛をしていた。クアットロが制御するガジェットが厄介と理解したアインスは、残ったトイを出来る限りクアットロへ差し向けたのだ。

故にセインがその撃退をしている。シグナムはクアットロのＩＳによる援護を受け、虚像を利用して戦っているが決め手に欠けると感じていた。

（やはりアギトかリインがいなければ辛いか？　リミッター状態では今一つ届かん）

先程から二度程自慢の剣技を叩き込んだのだが、それでもアインスは健在なのだ。弱っている感じはある。だが、それも二発叩き込んでだ。とどめを刺すためには、どれだけ同じ事を繰り返せばいいのか。そんな思いがシグナムの中に生まれる。

だが、そこでシグナムは小さく笑う。ならば何度でも叩き込めばいい。そんな事を思い出したのだ。あの無人世界での邪眼との戦い。あの時もそうだったのだからと。

「倒せるまでやるだけ、か」

手にしたレヴァンテインを握り直し、シグナムは悠然と構えた。そして刀身に炎を纏わせ、アインスへと向かっていく。放たれる羽をその刀身で焼き払い、斬りかかる。それをアインスは羽ばたいて上昇する事でかわす。

しかし、その頭部に何か大きな衝撃が走る。それにアインスが意識を取られる。視線を向けた先には、少し壊れたガジェットが一機いた。クアットロがアインスへと向かわせたのだ。回避行動を妨害するために。そして……

「ガラクタ風情でっ！」

「だが、貴重な隙を作った」

アインスがガジェットを破壊するが、その背後からシグナムの声がした。それにアインスが振り向く前に、その剣閃が煌いた。

――紫電っ！　一閃っ！！

これまでの二回よりも完璧な状態での一撃。それがアインスを完全に捉え、斬りつけた。その威力にアインスは落下していく。シグ

ナムはそこから素早くある物を使うために準備する。

「セインちゃん、私はいいからあいつを逃げられないようにして！」

「了解っ！」

ＩＳを使いセインは落下したアインスへ接近する。そして、その足を掴むと地面へ引き込んだ。完全に地面に埋まったようになるアインス。セインはそのままその場を離脱。それを察してクアットロは叫ぶ。

「今よ！」

「翔けよ！　隼っ！」

”シュツルムファルケン”

放たれるはシグナムの切り札。何とか地面を砕き、脱出しようとするアインス。だが、それも間に合わず、魔力の矢が身動きを取れなくなったアインスを直撃する。しかし、シグナム達はそれでも気を抜かない。

煙が晴れた先には、翼がボロボロになったアインスがいた。そのしぶとさに三人は気を引き締め直し、声を掛け合う。

「まだ立てるんだ。厄介だね」

「そうね。でも、かなり効いてるみたいよ」

「ああ。しかも、これで空を飛べまい。セイン、ここからは今まで以上に頼りにするぞ」

「了解！　頑張るからねっ！」

油断など欠片もせず、再び動き出す三人。アインスを完全に倒すために……

「……来た」

「ですね」

隊舎の外で待ち構えるようにしていた龍騎とアギトを始めとする者達。地上本部との連絡が途絶した瞬間から、留守番組は隊舎前で待ち構えていたのだ。

眼前に現れたのは、邪眼と怪人達。それに複数のトイとマリアージュだ。そちらは任せろとウーノ達が二人へ視線を送る。それに頷きを返し、二人のライダーは視線を邪眼へ向けた。

「やはり待っておったか、仮面ライダー共！」

「まずはキングストーンを持たぬ貴様らから始末してくれるわ！」

邪眼が二体揃って告げた言葉。それに二人はそれぞれに構え、告げる。仮面ライダーとして、闇に対する決意表明を。

「「俺達は絶対負けないっ！　仮面ライダーは、闇に屈しないんだ！！」」

それに呼応するようにウーノ達も戦闘態勢を見せる。隊舎では、

全ての課員達がその戦いを見守っている。リインはヴィヴィオとイクスヴェリアを抱き抱えるように見つめていた。

グリフィス達は少しでもアギト達を支えるべく、周辺の索敵や地上本部への連絡手段の模索を続けていた。ジェイルは、今も一人デバイスルームでトイのガジェット化を進めているのだが、今は別の事に取り掛かっていた……

「何とかして……何とかして間に合わせてみせる！」

龍騎へ渡すための力。それをこの戦いで渡すために。嫌な予感がするのだ。急がなければいけないような気が。それがジェイルを駆り立てていたのだから。

ジェイルが一人作業に没頭する中、隊舎前では戦闘が開始されていた。邪眼の相手をアギトと龍騎が一体ずつ引き受け、それぞれ引き離す。一方で、トイをディエチが迎撃し、マリアージュをシャマルとドゥーエが防ぐ。

ウーノは周囲からの増援がないかを警戒しながら、状況の把握に努める。ザフィーラはディードとオットー共に怪人の相手をしていた。相手は二体。フィーアと初めての相手。黒髪のディード――ツヴェルフだ。

「私のコピー……ですがっ！」

「遅いですよ」

激突する双剣と双剣。ザフィーラはフィーアが周囲へ同化する前に、手を打つ事にした。それは……

「うおぉぉぉぉ！」

「な……周囲を棘で囲んだ？」

「ああ。これで姿を消そうとも、抜け出す際は居場所を明らかにする事になるぞ」

ザフィーラは一人でフィーアを倒すなど考えていない。今一番防がないといけない事。それはフィーアが隊舎内に侵入する事なのだから。ヴィヴィオとイクスヴェリアの安全確保。それこそがザフィーラの第一目的だった。

オットーは、そんなザフィーラの狙いを理解している。故に、もしその一角が崩れた時は、即座にそこへレイストームを叩き込むつもりでいる。この戦闘は防衛戦。ならば勝利条件は敵の全滅ではなく、全員の生存とヴィヴィオとイクスヴェリアを守り切る事だ。

「この戦い……時間との戦いかもしれません」

そう小さく呟くと、オットーは視線をディードの方へ向けた。初めて戦う怪人。そのデータを得るためと、ディードを援護するためだ。ザフィーラは盾の守護獣の異名を持つ者。ならば、守りに徹すれば負ける事はないとオットーは信じているのだ。

そんな風にそれぞれが戦う中、ウーノは一人疑問を抱いていた。

――怪人の数が予想よりも少な過ぎるわ。これじゃ……ヴィヴィオ達を奪取する事なんて出来ないって分かるでしょうに……？

こうして、それぞれの場所で戦いが始まる。

ゼスト隊やトーレとセッテ、フェイトになのはとはやて、そしてクウガはどこで誰と戦っているのか。

そして、邪眼は本当に九体が襲撃に参加しているのか？　未だ姿を見せない怪人達はどこに？
　その答えは、まだ誰も知らない……

――

中編。やはり戦闘になると恐ろしい量になるので、分割。
次回は四人のライダーの邪眼戦とそれぞれの怪人戦をお届け。そして、クロノとレジアスも……

「シャッハさん！　相手の糸には毒が混ざってますから気をつけて！」

「了解ですっ！」

なのはの声に応じ、シャッハはアハトの吐く糸をかわし、接近する。ここは、地上本部は会議室前の廊下。そこでなのはとはやてはシャッハと共にアハトと戦っていた。公開意見陳述会開始と共に、なのははそちらへ向かって歩いていたのだ。

そうして少しした途端、爆発音がしたため、なのはは急いだ。フェイトは外の方へ向かうと告げていたので、なのはは内部を引き受ける事にしたのだ。六課の者ははやてとシグナムしか会場にいなかったからだ。

爆発音がした場所は地下の動力炉。そこには、クウガが向かってくれたのをフェイトから念話で聞いたなのはは、自分は陳述会出席者の安全を第一に考えたのだ。

「カリム、頼みがある！」

「リミッター解除ね」

廊下前で戦うなのはとシャッハ。それを後方で支えるのはツヴァイとユニゾンしたはやてだ。その後ろにはカリムの姿もあった。彼女は出席者の一人。故に、その護衛としてシャッハも同行していたので、こうして即席ではあるがチームが組めていたのだ。

怪人を初めて見た他の局員達へは、はやてが迂闊に手を出さない

ように注意して、今は周囲の警戒と防衛に集中してもらっている。ただ、レジアスだけは怪人が襲撃がしてきたのと同時に、何かを決意した表情で先程から何かを準備していた。

カリムが告げたリミッター。それは、はやてを始めとする隊長陣五人の魔力量を制限している処置だ。それを状況によって解除出来るのは、後見人のカリムとクロノだけ。はやてはこの状況に至り、制限を受けたままでは厳しいと判断。なので、全力を出させて欲しいと考えたのだ。

カリムもそれを理解したのだろう。すぐさま解除の手続きを始めるべく動き出す。はやてはその間もアハトの吐く糸を凍らせ、反射攻撃を阻止していた。既にある程度情報を得た相手だった事もあり、なのはもレイストームを放つ手足を重点的に狙っている。

「唸れ、ヴィンデルシャフト！」

シャッハのデバイスがアハトの手足を捉えようとする。だが、それを阻止しようとレイストームを放つアハト。しかし、その瞬間シャッハの姿が消えた。それにアハトが舌打ちをした。そして、すぐに後方へ視線を向けてレイストームを放とうとするのだが、そこへなのはの魔法が襲い掛かる。

「シュートっ！！」

アクセルシューターがアハトの手足を襲う。それはその部分を破壊する事は出来ないものの、それでも攻撃の射線を変える事に成功する。

「くっ！　小癪な！」

「それほどでもないよ！」

アハトが苛立ちを込めた声を放ち、なのはへもレイストームを放とうとする。だが、それを待っていたかのように手足の一本が砕かれた。それにうめき声を上げるアハト。シャッハはそれを聞きながら、再びなのはの前へ戻ってきた。

「お見事です、なのはさん」

「いえ、シャッハさんがいてくれればですから」

シャッハの得意魔法は移動系。それを活かし、アハトへ攻撃していたのだ。セインのディープダイバーと肩を並べる事が出来るそれは、予想以上に有効だった。アハトとしては、六課の前線メンバーでもないシャッハのデータなどあるはずもなく、その強さには驚くしかなかったのだ。

今回の襲撃で邪眼側の誤算は一つ。そう、彼らが得たデータは穴があった事。六課隊長陣のリミッター解除時のデータもなければ、シャッハやゼスト達などのデータもない。彼らは重きを仮面ライダーに置きすぎたために、それ以外の者達への警戒を怠ったのだ。

それは、仮面ライダーが戦ってきた組織に共通した驕り。彼らを支える者達のデータ。それこそが本当は、一番必要としなければならないものなのだから。

「さ、残りの手足も砕いていきましょう！」

「はい！」

ライダーがいなくても何とか出来る。そう自信を深めた二人。だ

が、そこへ嫌な笑い声が聞こえてきた。そう思ったのは、なのはは声に聞き覚えがあったため。シャッハはその声の雰囲気に嫌悪感を感じたため。

そこに現れたのは、蠍の怪人。ツバイだった。その姿に警戒を強めるなのは達。そんななのはを見て、ツバイは嘲笑うように高笑いを続けた。それに誰もが眉を顰めた。アハトさえ怪訝な雰囲気を隠さない。

「……何がおかしいんだ、ツバイ。正直、僕も苛立つんだけど」

「だって、笑えるんだもの。愛してるとか言って、こうして平然としていられるんだから」

そのツバイの言葉になのはだけが反応した。視線を向けられただけではない。愛してるとの言葉を言う相手がいるのは、自分だと思ったからだ。そんな風になのはが考えたのを悟ったのか、ツバイが不気味に笑みを見せた。

「あら……知らないの？　昨夜、私があの眼鏡男と戦った事を」

「っ！？　ユーノ君の事？！」

「ええ。私の爪が掠ったから、今頃大変でしょうねぇ。何せ、私の爪からは……」

「そうか。傷口から毒を入れたんだ。じゃ、もって数日か」

ツバイの言いたい事を理解したアハトの言葉に、なのはが愕然となった。体から力が抜けそうになり、意識が真っ白になっていく。絶望が押し寄せる。最愛の男性が残り数日で死んでしまう。今まで

感じた事のない程の喪失感。それがなのはの不屈の心へひびを入れていく。

それを眺め、ツバイは満足そうに嗤う。六課の柱であるなのは達。その心に絶望を与える。それが彼女の狙い。そのための手段を探るために入り込んだ無限書庫。そこで得たのはなのはとユーノの関係。それを利用し、絶望をと思っていたのだ。

「そんな……ユーノ君が……」

「傍についてなくていいの？　もう会えなくなるかもしれないのに」

「しかも、最後には骨さえ残らず消えるだろうしね。まぁ、行かせる気はないよ」

ツバイの言葉に無意識で走り出そうとしたなのはへ、アハトが告げた言葉が突き刺さる。シャッハは無理もないと思い、そんななのはから視線を外してヴィンデルシャフトを構えた。はやてもシャッハを援護しながら、なのはへ怒鳴り声を上げて注意する。

「なのはちゃんっ！　どこ行く気や！」

「はやてちゃん……」

「ユーノ君が心配なんは分かる！　でも、今行ってどうなるんや！！」

はやての言葉になのはは反論しようとしたが、その眼差しとある事を思い出して言葉を失う。はやてはかつて、家族と思っていた翔一と五年以上にも渡って引き離されていた。しかも、再会を果たせたとは言え、もしかすればそのまま二度と会えなかった可能性さえ

あった。
今、自分が抱いている想い。それに近い物さえ抱く事が出来ないまま翔一と別れたはやて。そんなはやてがした事は、翔一を捜してあちこちへ行くのではなく、ひたすら再会を信じて待ち続ける事だった。

（はやてちゃんだって、あの時こんな気持ちだったんだ。でも……私は……）

はやてと自分の状況の違いを思い出し、なのはは俯いた。

「はやてちゃん……ユーノ君はね、ユーノ君は、死んじゃうかもしれないんだよっ！！」

「っ！？」

なのはの涙ながらの答えにはやては表情を驚きに変えた。そこにはエースオブエースはいなかった。そこには、ただ恋人を思い弱気になっている一人の女性がいるだけだった。
そんななのはに見切りをつけたように、はやては視線を外した。だが、最後にこう告げた。

――なら、さっさとこいつら片付けよか。そしたら、なのはちゃんは会いに行ってええから。

――はやてちゃん……ありがとう。

邪眼との戦いを考えれば、なのはをこの後離脱させる訳にはいかない。それでも、はやては組織としてではなく、個人としての感情を優先した。それにカリムが小さくため息を吐くが、その表情は苦

笑している。
　シャッハはそんなやり取りを聞きながらどこか楽しそうな笑みを浮かべるも、すぐにそれを消してアハト達へ向かっていく。はやてはその動きを援護するように魔法を放つ。ただ、狭い廊下のため、どうにか外へ連れ出せないかを考えていた。
　なのはは先程よりも鋭い動きを見せる。だが、ツバイが増えたためにシャッハに掛かる負担が増した。故に、先程までとは違い、攻撃を行なう事が出来ない。しかし、それを打開するための手段が発動した。
「オールリミッター解除。リリースタイム、六時間」
　カリムの声と同時にはやてとなのはが動いた。なのははフラッシュムーブを使い、二体の背後へ。その動きに合わせ、シャッハが二体へ襲い掛かる。はやては周囲へ大声で謝りを入れながら、廊下の壁を吹き飛ばそうと魔法を放つ。
「ちょう壊しますけど堪忍してください！」
”行きますよっ！”
　壁へ向かって放たれるフレースベルグ。それが轟音を立てて大きな穴を作る。それに呼応するように、なのはがディバインバスターでツバイを穴へと吹き飛ばした。そして、それを追うようになのはが外へ行き、はやてはシャッハへ念話を送る。
【一人でも大丈夫です？】
【心配いりません。足止めぐらいならば出来ます！】

その力強い答えにはやては感謝を返し、なのはを追って外へ出た。
シャッハは、それを見送る事もなくアハトとの戦闘に集中する。はやてがいなくなったため、糸を防ぐ手立てがないからだ。
それでも、今は接近戦が得意ではないアハトを相手する方がマシと思い、シャッハは奮戦していた。しかし、その糸を使った反射攻撃をアハトが仕掛け出すと、形勢が不利になり始めた。他の局員達も援護しようとするのだが、ある者は怪人の力と姿に動けず、ある者は自分達では手出し出来ないと感じて悔しがっていた。カリムは少しでもシャッハの負担を減らそうと、少しずつ避難を呼びかける。

「くっ……聞いてはいましたが、厄介ですね」

反射されると速度や威力が上昇する。しかも、その糸はちょっとやそっとでは排除出来ない。シャッハがどうするかと思った瞬間、何かの電子音声が響き渡った。

”ソードベント”

「ふんっ！」

そして、アハトへ何者かが剣を投げつけた。シャッハはそれが自分を援護するための行動と判断し、誰がしたのかを確認する事無く、即座に動く。しかし、アハトはその相手を見て軽い驚きの声を出す。
何故ならば、その相手はバリアジャケットではない格好だった。仮面ライダーに近い印象を与える黒のボディースーツ。腰にはベルトがあり、中央にはブランク体のバックル。上半身を守るように装着されているプロテクター。腕には、龍騎と同じようなバイザーがある。そして何よりも特徴的なのはその顔。

「ドクロの仮面、だと……？　貴様、何者だ……」

「何者でもいいだろう。一つ言えるのは、人間の味方で怪人の敵。それだけだ」

アハトの声にそう答える髑髏男。それが、レジアスの気持ちを表していた。戦闘機人という違法行為に手を出した事。それだけではない汚い裏の所業。それらはどこかで犠牲を生んだ。ならば、自分は贖罪しなければならない。故の髑髏。亡き者達を弔い、自らも死人となって戦うとの意思表示なのだから。

思わぬ援軍の登場に戸惑うアハトの姿を見て、髑髏男は走り出す。拳を握り締め、その速度を加えたままアハトへ向かって繰り出した。その意外な速さにアハトは回避が遅れた。ただの人間が出せる速度ではなかったのだ。

その拳の威力も、アハトの想像を超えていた。その場から五メートル程飛ばされたのだ。それにアハトだけでなく、周囲も言葉を失う。中でもカリムとオーリスは余計に言葉がない。その髑髏男の正体。それを知っているだけではなく、その髑髏男がアハトへ告げた内容だ。

「レジアス中将……もしや貴方は……」

「父さん、やはり貴方も……」

仮面ライダーを知るからこそ、髑髏男が言い切った言葉はそれを彷彿とさせた。人類の味方。そして怪人の敵。それは仮面ライダーの在り方だったからだ。二人が呟く中、髑髏男とシャッハは共に協力し、アハトを追い詰めつつあった。

アハトが吐き出す糸。それを髑髏男が手にした盾で展開を阻止し、

シャッハが魔法を駆使してアハトを翻弄する。更に先程投げた剣を拾い、それを髑髏男へと投げ渡す。

「これをっ！」

「すまん！」

「ちっ！　人間風情がぁぁぁっ！！」

アハトがレイストームを放つ。それを髑髏男は手にした盾を投げ、自分の前方の閃光を防ぐ。それと同時に一枚のベントカードをバックルから取り出した。それは龍騎で言うファイナルベント。ジェイルが苦労の末に作り出した擬似的ファイナルベントだ。改良前にはなかった物で、レジアスの怪人を倒せる力をとの希望を叶えるべく、生み出された力。

その描かれたマークは”M”と”R”を組み合わせたマーク。仮面ライダーを意味するそれは、偶然にもライダーの父とも言える立花藤衛兵が描いた物に酷似していた。それをバイザーに挿入し、髑髏男は吼えた。魔力が無い者達を代表し、力無き者達に代わりその牙となるために。怪人に恐怖する全ての人々の怒りと悲しみを振り払うかのように。

”ファイナルベント”

「消えろ！　バケモノォォォォ！！」

周囲の魔力を体の一部に集め、攻撃力を増させて放つ事。それが、髑髏男のファイナルベント。その輝きが手にした剣に宿る。それにアハトが注意を向けたのを察し、シャッハもまた動く。背後から手にしたデバイスを唸らせ、叫ぶ。

「烈風っ！　一迅っ！！」

排出されるカートリッジ。振り下ろされるヴィンデルシャフト。それは完全にアハトを捉え、その体勢を崩す。それを好機とばかりに、髑髏男は床を蹴った。そして、その勢いを乗せたまま、その手にした剣を握り締めて思い切り振り抜いた。

その一撃はアハトを捉え、その体を後方へと吹き飛ばした。同時に着地し、構える髑髏男とシャッハ。その気配はまだ闘志に満ちている。ゆっくりと立ち上がるアハトが見た物。それは、再度自分へ向かって飛んでくる剣だった。

それがアハトの体に突き刺さる。そして、それがとどめだった。二人の攻撃と髑髏男の剣から体内に流れた魔力エネルギー、更に体を大きく傷付けられた事。それらがアハトの最後を演出した。

「この僕が……人間如きに……人間如きにぃぃぃぃ！」

断末魔を残し爆発するアハト。それを見て髑髏男は一人悲しそうに呟く。

――これが本来の戦闘機人の姿だったのかもしれんな……

アハトが散った頃、クウガは一人邪眼と戦っていた。

「ぐぅ！」

邪眼の豪腕がクウガの体を捉え、空中へ叩き上げる。それでも何

とか体勢を立て直し、クウガは着地と同時で即座に距離を取った。先程まで居た位置に電撃が放たれる。それを見ながら、クウガは周囲を軽く見渡す。

（駄目だ。武器に出来そうな物がない……）

そこにあるのは瓦礫ばかり。地下駐車場に置いてきたビートチェイサーまで戻れば、タイタンソードが確保出来る。だが、それは厳しい。邪眼を引き連れてそこまで戻る事は構わない。しかし、もしかすれば、そこには一般局員がいる可能性があるのだ。

その可能性がある以上、クウガにその選択肢はない。他者を巻き込む事を一番嫌うクウガ。故に、この場所で戦い続ける事を選んだのだから。

「一人では我には勝てんぞ」

「そんな事ない。俺だって、クウガだって……仮面ライダーだから！」

そう言ってクウガは構える。武器がないとしても、諦めないと。仮面ライダーとの名。それを名乗るだけで、不思議な力が湧いてくるのだ。自分以外の勇気ある者達。それが共にいてくれるような感覚を感じるのだから。

そんな事を思い、クウガは邪眼へ向かっていく。もう能力を隠す必要はない。いや、逆に言えばもうそんな余裕はない。自分の全能力を使い、凄まじき戦士にならずに邪眼を倒す。それが今のクウガの決意なのだ。

邪眼がその腕を振り下ろす。それを見てクウガは横に跳ぶ。それを叩き落すように腕を動かす邪眼。しかし、それは空振りに終わる。

「何ぃ！？」

クウガの体の色が青に変わったため、その跳躍力が変化していた。邪眼は初めて見るその姿に驚きを浮かべるが、クウガはそこから再び地を蹴り、邪眼の上へ跳び上がる。そして、そこから紫へ変化して蹴りの姿勢を取った。

そこへ邪眼が電撃を放って迎撃を試みる。だが、それは紫の鎧に緩和され姿勢を崩し切る事は出来ない。そのまま邪眼を蹴り飛ばすクウガ。その威力に邪眼が軽く後方へ下がる。

クウガはそれに小さく頷き、赤へ戻る。ＲＸの変化を利用しての攻撃を思い出してのものだったのだが、思ったよりも有効だと確信したのだ。しかし、やはり決定打に欠けるとも感じていた。

せめてどんな色のでも構わないので武器が欲しい。そんな事を考えるクウガ。すると、何かを思い出して視線を瓦礫へとやった。そして、それへ近付き手に取った。丁度邪眼がそこへ電撃を放つが、クウガはそれを鎧で受け流して瓦礫をその手で砕いた。

「無意味な事を……」

石礫をしてくるとでも考えたのか、邪眼は馬鹿にするように呟く。だが、クウガはそれに構わずに砕いた瓦礫を更に砕く。それを見て、邪眼は嫌な予感がしたのか動き出す。クウガはそれに気付き、急ぎ目で瓦礫から作った物を握り締めた。

それは急ごしらえの石器。いや、石で出来た刃だ。そう、クウガが思い出したのは武器を使う未確認の事。彼らは小さな装飾品を武器にしていた。つまり、どんな大きさでも武器に出来る要素さえあればいいのだと。

「おりゃ！」

「ぬぅ！」

手にした刃はタイタンソードへ変化し、クウガを攻撃しようと迫っていた邪眼を牽制した。更にクウガは一気呵成に攻めるべく、金の力を解放した。それに邪眼が驚きを浮かべたのを見ながら、ライジングタイタンとなったクウガは邪眼へ斬りかかった。

ライジングタイタンソードは、その間合いが変化している。それだけではなく、攻撃力も増加しているため、タイタンソードと同じ感覚でいた邪眼へ軽い動揺を与える事になった。

斬りつけられた場所に、封印を意味する文字が浮かんでは消える。だが、その都度邪眼が苦しんでいるのを見て、クウガは金の力なら倒せる事を確信した。しかし、クウガはここではとどめを刺す事が出来ないとも気付いていた。

あの無人世界での戦いで、最後邪眼が起こした爆発。それに近い爆発を起こすとも限らない。それを考えれば、ここでは危険だと。ここは地上本部の動力炉。それに誘爆でもしたらどうなるか分からないのだ。

（せめて外に出れば何とか出来るかもしれない。ダメージを与えながら、被害の少ない場所を探さないと……）

それでも弱らせる事は必要だと思い、クウガはそのまま邪眼を攻撃しつつ、ゆっくりとではあるが外へ追い出すようにしていくのだった……

高層ビル屋上に雷光が煌き、ツェーンを襲う。だがそれを物ともせず、ツェーンは背中の砲身から拡散弾のようなエネルギー弾を発射した。フェイトはそれを回避しつつ、プラズマランサーを放つ。最初は、爆発音が聞こえた場所へ向かっていたフェイトだったが、ビートチェイサーで搬入口からやってきたクウガと出会い、ツェーンの事を任されたのだ。

フェイトが来た時には砲身の修復が終わりかけていて、再び地上本部へ砲撃を開始しそうだった。それを阻止するため、速攻でザンバーを使って砲身にダメージを与えた。だが、それでは長距離砲撃を不可にしただけで砲撃自体は可能だったらしく、現状に至る。

「あいつを倒すのは、私じゃ厳しいね……」

”ですが、不可能ではありません”

「ありがとう、バルディッシュ」

長年の相棒からの断言に、フェイトは微笑みを浮かべて答える。だが、すぐに表情を引き締めて視線をツェーンへ向けた。砲身を自分へ向け、攻撃を続けるツェーン。以前は温度差を利用した構造崩壊に加えて龍騎のファイナルベントで撃破した。

フェイトはそれから考え、自分では背面の甲羅を突破するのは不可能だと結論付ける。唯一撃破の可能性があるとすれば、正面のまだ強度的に弱い部分。そこを狙うしかないだろうと考えて。

「落ちろっ！」

「っ！　当たる訳にはっ！」

”ソニックフォーム”

今必要なのは自身の自慢である速度。そう判断したフェイトの意を汲んで、バルディッシュがバリアジャケットを変化させる。防御力を下げる事で速度を上げるフェイトの決戦用の姿。それがこのソニックフォーム。

だが、それは無人世界での邪眼との戦いで見せた姿とは異なっていた。その時よりも更に防御力を下げ、更なる速度を出す事に特化した”真ソニックフォーム”なのだ。

フェイトは砲撃をかわしながら、ツェーンの隙を探す。しかし、砲撃は絶え間なく続き、フェイトへ反撃を許さない。何とか隙を見つけ攻撃しようと試みるも、そうなると相手が背中を向けるのだ。

フェイトはそれに表情を歪めながら、再び距離を取るしかない。そんな事を続けていると、ふと力が湧くような感覚をフェイトは感じた。それがリミッター解除だと察し、フェイトはバルディッシュを握る手に力を込める。

「今なら全力のザンバーが撃てる！」

意を決してフェイトは動いた。ツェーンの砲撃を正面から避けながらの吶喊。少しでも掠ればそこまでの行動に。それにツェーンは微かに疑問符を浮かべるが、好機とばかりにフェイトを迎撃した。威力よりも範囲や弾数を意識したそれを、フェイトは最低限の挙動で避けていく。

そして、ザンバーを突き出すように構えた瞬間、その体が稲妻となった。ソニックムーブを使い、加速したのだ。ツェーンがそれに目を見開く。次の瞬間には、ツェーンの腹部をザンバーが突き刺していた。だが……

「くっ……通らない！」

「残念だったね。これで終わりだ」

フェイト向かって砲身を向けるツェーン。それを見た時、フェイトにある考えが浮かぶ。それが有効か否かを考える前に、フェイトは動いた。砲撃を引き付け、土壇場でかわして上へ飛ぶ。だが、フェイトの攻撃力では自分を倒せないと踏んだツェーンは、それに余裕を見せる。

フェイトはそれに内心感謝し、手にしたザンバーを迷う事無く砲身へと突き入れた。そこで攻撃すれば、フェイトもツェーンもただでは済まない。それを理解し、ツェーンはフェイトへ問いかけようとした。

「何を……」

だが、それが言い終わる事は無かった。フェイトはツェーンの疑問に言葉ではなく、行動で答えた。

「トライデントッ！　スマッシャー！！」

ザンバーを通して流れる三対の電撃。それは砲身を通して、ツェーンの体へ流れる。そう、体の中へ。硬い甲羅を貫く事が出来ないのなら、最初から甲羅に覆われていない部分を使えばいい。そうフェイトは思いついたのだ。

最初にザンバーで砲身を攻撃した際、一切威力が軽減されていなかった事を思い出して、フェイトは砲身からなら自分の攻撃を直接叩き込めるのではないかと考えたのだ。その目論見は当たり、ツェーンは体の内部を駆け巡る電流に動けないでいた。

「お、おのれ……」

「バルディッシュ！」

”ロード、カートリッジ”

このままでは自分が負けると判断したツェーンは、せめてフェイトと共倒れになろうと砲撃を行なおうとする。それに気付き、フェイトは自分の相棒へ呼びかける。その意味を理解しバルディッシュはカートリッジを排出した。その数、二本。

そして、それを確認するやフェイトは手にしたザンバーを振り上げながら力強く叫ぶ。砲身の上の部分を切り裂いて、ツェーンの悲鳴を耳にしつつも凛々しく告げる。

――――プラズマァ！　ザンバァァァァッ！！

再度同じ場所へ叩き付けられるザンバー。それは砲身を完全に破壊しながらツェーンを襲う。その電撃と斬撃は内部からツェーンの崩壊を促していく。しかも、フェイトを狙って放とうとしていたエネルギーもそれに影響され、ツェーンは屋上から軽く吹き飛ばされながら爆発四散した。

それを見届け、フェイトはすぐさま動き出す。目指すは六課隊舎。そう、見えるのだ。隊舎付近から上がる煙が。地上本部はＲＸとクウガに多くの六課メンバーがいる。ならば、自分は速度を活かして隊舎の救援に向かおうと考えたのだ。

（待ってて、みんな。ここは頼みましたからね、ＲＸ！）

トーレとセッテはゼスト達と共に二体の怪人を相手にしていた。

自分達の方へ向かってきたトイやマリアージュを片付けながら、空から強襲してきたドライ達。それを迎撃していたのだ。

そこには、今まで戦った事のない者もいた。だが、ドライを引き受けてくれた者達がいたので、二人はそちらへ集中出来た事もあり、何とか対処出来ていた。

「やはり空戦タイプだったな」

「ええ」

トーレとセッテが相手にしているのは、黒髪のセッテ――ズィーベンだ。既に正体を表していて、その姿はコンドル。スローターアームズを利用し羽を自由に操るため、二人は苦戦を強いられていた。

アインスの羽の効果を思い出し当たる訳にはいかないと回避しているため、中々踏み込む事が出来ないでいたのだ。セッテがブーメランブレードを駆使し何とか対抗しているが、やはり有効打にはなり得ないのだ。

トーレがブーメランブレードが作った羽の穴を突いてズィーベンへ攻撃を仕掛けているのだが、すぐに羽を放たれるために踏み込む事が厳しい。トーレとセッテが苦戦する横では、ゼスト達がドライ相手に接戦を繰り広げていた。

「ちっ！　……まだ速いな」

「あ～もう！　すばしっこいわね！」

ゼストとクイントは前線としてドライの高速機動に翻弄されつつも、痛手を負う事無く戦い続けていた。メガーヌはガリューを召喚

し護衛としつつ、自身はゼスト達の援護をしていた。
前もって聞いていた怪人のデータ。それを基に対抗策を練ってはいたのだが、実際戦ってみると当然だが中々思ったようにはいかない。それでも、少しずつその動きの要となっている羽へダメージを与えてはいた。その方法は……

「くっ……またか！」

ドライの口から忌々しげな声が漏れる。その理由こそドライの羽を攻撃している方法だ。それは設置型のバインド。少しでも動きを鈍らせたり止めたりするためのそれ。そう、メガーヌがしている援護とはそれの設置。
ゼストとクイントの動きを熟知しているメガーヌだからこそ、二人の死角に設置出来るのだ。ドライもそれを理解しているのだが死角以外からの攻撃をしても二人には通用しないため、そうせざるを得なかった。

バインドに絡まり、動きを僅かにだが止めてしまうドライ。それを見て、駆け抜けていくようにクイントが羽へリボルバーシュートを叩き込む。だが、それが直撃する前にドライがバインドを無理矢理破壊し、脱出していく。
しかし、打ち出された魔法が風に刃のような威力を持たせ、ドライの羽を傷付ける。そう、逃げられる事を見越してのリボルバーシュートなのだ。これを繰り返し、少しずつではあるがドライの機動を鈍らせていたのだから。

「そこだ！」

「行って、ガリュー！」

そして、遂にその動きがゼスト達にも完全に捉えられる程度にまで鈍った。それを見てゼストが動き、メガーヌがそれに続くようにガリューへ指示を出す。それに呼応し、ガリューがゼストの援護へ動き出す。

クイントもそんな動きに合わせ、両手のリボルバーナックルを構えて再びウイングロードを疾走する。メガーヌは転送魔法を準備する。その相手はゼストでもガリューでもクイントでもない。

「調子に乗るなっ！」

ゼストを迎え撃とうとするドライ。だがその瞬間、その視界に映る景色が変わる。先程はゼストが見えていたにも関らず、一瞬後には自分へ向かってくるクイントが見えたのだ。

突然の事に戸惑うドライ。メガーヌが転送魔法を使い、ドライの体勢を前後入れ替えたのだ。それをドライが理解すると同時にゼストの攻撃が炸裂した。ゼストが片方の羽を綺麗に斬り落とし、駄目押しとばかりにガリューがもう片方を引き千切る。

それに苦悶の表情を浮かべるドライ。更にゼストはそこからフルドライブを発動し、ドライをクイントのいる方向へ弾き飛ばす。それを待っていたのかのように、クイントはカートリッジを二本ずつ排出させ、二つのリボルバーナックルをドライ目掛けて突き出した。

「リボルバーインパクトっ！！」

声と共にドライの腹部を激しく強打するクイント。更に素早くドライの体を蹴り落とす。地面へ激突するドライ。そこへクイントがウイングロードから飛び降り、蹴りの姿勢のままドライへ着地する。

声にならない声を出すドライへ、メガーヌは再び転送魔法を使用する。それは上空で待ち構えるゼストの真上へと、その体を移す。

反撃を試みようとするドライの体を、ガリューが羽交い絞めにする。もがくドライだったが、蓄積されたダメージ故かその力は弱い。

メガーヌはそれを見て、バインドの準備を始める。それと同時にゼストは二度目のフルドライブを仕掛けるべく構え、クイントはその逆方向へと回り込む。ガリューがメガーヌの意図を読み、絶妙なタイミングでドライから離れる。そこを見計らい、メガーヌのバインドがドライを捉えた。

クイントが迫るのを見て、ゼストもフルドライブを使用した。背後からリボルバーナックルを突き出すクイントと、前方から凄まじい勢いで迫るゼスト。その挟み撃ちを喰らい、ドライは絶叫を上げた。ゼストの槍とクイントの拳がその体を貫いたのだ。

「な、何故だ……？　何故こうもいいように」

「貴様らは自分の力を過信し過ぎている」

「少しでも私達に勝とうと努力した？　私達はした。それが勝負を分けたのよ」

二人はそう告げると、同時にドライの体から離れた。そして、空中から地上へ落下するドライへは目もくれず、ゼスト達はトーレ達の援護へと向かうのだった……

「こっちは片付いた！　ギンガ、お前はもう戻れ！」

「駄目です！　まだマリアージュが残ってます！」

ギンガは一人陸士１０８隊と協力し、地上本部を襲うトイやマリアージュと戦っていた。ゲンヤが心配だったのもあるし、同僚で先輩のラッド・カルタスが気になったのもある。何よりも自分の本来いるべき部隊なのだ。

そのため、ギンガは光太郎達に許可をもらいここへ来ていた。そして、来てみて良かったとギンガは心から思った。トイ相手に善戦していた１０８だったが、マリアージュがそこへ加わると途端に苦戦し始めたのだ。

だが、ギンガがいた事でそれもすぐに立て直す事が出来た。ＡＭＦ影響下では戦闘機人モードを使い、ギンガはマリアージュを率先して撃破。トイの相手を周囲へ任せ、彼女は戦い続けたのだ。

正直、ＡＭＦ下でも魔法が使える事を誰に指摘されると思っていた。それが原因で自分の体の事を話す事になるかもしれないとも。だが、ギンガはそれでもいいと判断した。それで誰かを守れるのなら、この体が誰かの笑顔を守れるのなら。

（私も気高く生きる！　人の心は、魂は……決して無くさないから！）

危機から助け出してくれた仮面ライダー。そんな彼から教えられた事実。それがギンガの心を強くしていた。例え機械と同じだと言われても、心は人だと言えるようにしよう。胸を張って自分は人間だと思えるように。

「はぁぁぁぁ！！」

眼前のマリアージュを拳で殴り飛ばし、ギンガは残るマリアージュ達へ吼える。

――かかって来なさい！　心を持たない貴方達には、絶対負けないんだからっ！

どこかで”普通”に憧れていたギンガ・ナカジマは、もういない。そこにいるのは、”普通”でないからこそ出来る事があると知った、一人の人間がいるだけだった……

「そこよ！」

「おっと！　そうはいかんで！」

”ですっ！”

ツバイの尾の攻撃を回避し、即座にその場を離れるはやて。同時に尾から落ちた毒が地面を溶かすのを見て、氷結魔法でそこを凍らせる。それにツバイが悔しげに表情を歪めるも、はやてを追撃しようとはしない。

なのはの砲撃がツバイのいた場所をなぎ払ったからだ。その砲撃を腕を組んで耐えるツバイ。先程から遠距離主体の二人を相手にツバイは防戦一方だった。ドゥーエの事を知っている二人にとって、ツバイの爪の基がピアッシングネイルだとすぐに気付いた事もあり、ユーノが陥ったような事にはならなかったのだ。

「少し派手に行くよ！　エクセリオンバスタァァァァ！！」

「くっ！」

「そこや！」

”フリジットダガー”

なのはの砲撃を嫌がり、その場を離れるツバイ。それを見越し、はやてがツヴァイと共に放つ魔法がツバイを直撃する。それは、相手を凍りつかせる短剣。その数、約三十。それが当たった場所を少しではあるが凍りつかせていく。

それで倒せるとは思っていない。だが、多少なりでも動きを鈍く出来れば良かった。はやては既に次の魔法の詠唱を開始していた。なのはは、はやての援護をするべく砲撃魔法のチャージを始める。

「レイジングハート！」

”チャージ開始”

そんな時、凍結で動きを鈍くしていたツバイが突然叫び、その凍りを吹き飛ばした。それに驚く二人。ツバイは即座に爪を伸ばし、チャージしているなのはを攻撃する。

「あの男と同じように、これで死になさい！」

ツバイの言葉を聞いても、なのはは動けなかった。これで死んでしまう。そんな思いが一瞬よぎる。だが、その爪を思わぬ攻撃が弾いた。

”ブレイズキャノン”

響き渡る女性のようなデバイス音声。それと同時に青い魔力光が毒の爪を弾き飛ばす。それに大きく驚くなのはとはやて。ツバイはその攻撃に多少距離を取り、視線をそちらへ向けていた。

「そうか……貴様がユーノを襲った怪人か」

「何者だっ！？」

ツバイの爪を弾いたのは、ブレイズキャノン。それに気付いたなのはとはやては声のする方を見た。そこには、Ｓ２Ｕを手にした色褪せた龍騎がいた。そう、それは旧バトルジャケット。そして、その声は二人がよく知るものだった。

その相手は、Ｓ２Ｕを待機状態に戻すと自分の胸へと隠すようにしまった。

「「クロノ君っ！？」」

「加勢するぞ、二人共。後、こいつだけは絶対ここで倒すからな」

そう言ってクロノは一枚のベントカードをバイザーへ入れる。

”ガードベント”

出現した盾を手にし、クロノは走る。そして、更にもう一枚ベントカードを使い、空いている手に剣を持つ。なのはとはやてはそれを見つめながら、再びツバイを倒すべく魔法の準備へ戻った。ツバイの爪や尾を盾で防ぐクロノ。だが、その毒に盾が少しずつ腐食していく。それでも、クロノは恐れない。

あの時、自分が少しでも早くユーノの元に行っていれば、あの光景は阻止出来たのだ。その思いがクロノを突き動かしていた。怒りと悲しみ、そして親友への想いが少しずつツバイを追い詰めていく。

「ちっ！　あの男といい、貴様といい、どうしてこうも雑魚の分際

で！」

「黙れ！　僕はともかく、あいつの事を雑魚とは言わせない！　あいつは、自分の力だけで貴様を撃退した勇者だ！」

魔法と剣を使い、クロノはツバイをある位置まで誘導していた。それに気付かず、ツバイはクロノへ反撃しながら動いていく。だが、はやてとなのはがその体がある位置まで到着した瞬間、頷いた。

それを見る事もなく、クロノは剣を投げ放ち即座にバインドを施した。それは、チェーンバインド。ユーノの得意魔法だったそれをクロノは敢えて選んだ。自分が好んで使う魔法ではないそれだが、クロノは迷う事無くそれを選択した。その魔力の鎖で身動きが取れなくなるツバイ。クロノはそこから距離を取り、再びＳ２Ｕを取り出して展開した。

「響け！　終焉の笛っ！」

高々と掲げられたシュベルトクロイツ。そして、なのはがそれに合わせレイジングハートを構えた。ツバイの後方には、広い水平線が見えるだけ。そう、クロノは二人が大威力魔法を心置きなく使える場所まで、ツバイを誘導しつつ戦っていたのだ。

「ディバイン……バスターっ！！」

「ラグナロクっ！！」

「スティンガーブレイド！　エクスキューションシフトっ！！」

三色の攻撃が絡み合うようにツバイを直撃する。それに抗う事も出来ず消えるツバイ。断末魔さえも掻き消し、その余波は水平線へ

と消えた。それを見届け、なのははクロノへ駆け寄った。ユーノの事を知っていると理解したからだ。

クロノはバトルジャケットを脱ぎ、ズボンのポケットから小箱を取り出し、なのはへ手渡した。それはユーノからの頼まれ物だと告げて。それになのはが何かを察して小箱を開ける。そこに予想通り指輪があった。

「ユーノ君……っ！」

「それは婚約指輪だそうだ。だから……本番用はあいつ自身が渡すらしい」

その言葉になのはは顔を上げた。その意味に思い当たったからだ。クロノはそれに頷き、教えた。最後にはサムズアップさえ見せたから、間違いないと。それになのはは流れ出す涙を止める事が出来なかった。

小箱ごと指輪を抱きしめるなのは。クロノははやてへ、ここは自分がいるから行けと念話で告げた。それにはやては感謝し、即座に飛び立った。それに見送りもせず、クロノはなのはへ声を掛ける。

ユーノがいる病室へ案内すると告げ、なのははそれに頷いて愛する男の元へ向かう。

一方、はやては愛する家族達を助けるために動く。なのはの気持ちを理解して痛む胸を押さえながら、はやては仲間達の元へ向かうために急ぐ。

（なのはちゃん、わたしは信じとるよ。必ずラボでの邪眼との決戦までに戻ってくるって。やから、今は行ってええから。ユーノ君によろしくな）

きっと他の者達も事情を聞けば分かってくれるだろう。例え、自分の判断が指揮官失格だったとしても構わない。はやてはそう思い、視界の隅に映った物に表情を変える。六課隊舎のある方から煙が上がっていたからだ。

それでも、はやてがしたのは現状把握に努めながらヴィータ達と合流する事だった。カリムから聞かされる現状に考えを巡らせながら、はやては視線をある場所へと向けた。そして、そこへ向かって動き出す。そう、クウガが邪眼相手にどこか苦戦しているのが見えたからだ。

――クウガが邪眼を一体相手に……？　なら、残りは隊舎か？　それとも……

――はやてちゃん、今はクウガの援護です！

はやての疑問へツヴァイはそう返した。それにはやても今はそれが優先と思い、クウガへと援護射撃を開始するのだった……

地上本部での戦いが激しさを増し始めた頃、隊舎前の戦いも激しさを増していた。トイとマリアージュを片付け、ディエチがディードの援護へ行き、シャマルがザフィーラの援護へ向かう。ドゥーエはウーノの傍で護衛と並行し、周囲へ目を光らせていた。

フィーアは未だにザフィーラの作った戦場から抜け出していないし、ツヴェルフはディードとオットーの連携の前に、中々攻め切る事が出来ないでいた。しかし、ウーノとドゥーエは細々とした部分でどうしても納得いかないと思っていた。

「絶対ゼクスは来ると思ってたのよ」

「ええ。あれ程強襲や奇襲に長けたＩＳはないもの。でも……」

「そう、何故かいない。フィーアは予想通りだったし、まぁ知らない怪人を送り込んでくる事も予想内だった」

「けれど、邪眼の数が予想より少ない。少し嫌な感じね」

二人はそう言い合い、揃って同じ予測を出したと感じて、視線を一瞬だけ隊舎へ向けた。そして、すぐにウーノがロングアーチへある事を伝え、備えを頼む。ドゥーエは視界に見えない者達を心配していた。

二人のアギトと龍騎だ。サバイブとのユニゾンは使わないと決めたものの、いざと言う時のために龍騎へついていった融合騎のアギト。邪眼を一人で倒すために出し惜しみはしないと言っていた仮面ライダーのアギト。そして、サバイブだけでも邪眼をもう一度倒してみせると決意した龍騎。

彼らは今、隊舎から多少離れた場所で激戦を繰り広げていた。それを映したモニターをウーノは横目で見ながらも、メインである怪人戦への注意を怠らない。

「そこです！」

レイストームで動きが微かに止まった瞬間を突いて、ディードはツヴェルフの体を斬りつけた。それに小さな傷が出来るが、それはすぐに治ってしまう。それでも、ツヴェルフは意外そうな表情を見せて頷いた。

「そうですか。そんなに死にたいのですね。私の本当の姿を見たい

なんて」

「……ディード、ディエチ、来るよ」

「ええ……」

「了解。ここからが本番だね」

相手の威圧するかのような言葉にも三人は少しも恐れる事無く、表情を引き締めていた。未知の怪人を相手にする事自体は、もう何度か経験した。ならば、今恐れるのは相手の正体ではなく、不安や恐れなどで本来の力を出せなくなる事だ。

そう思って三人は構える。三人での連携は出来ない訳ではない。怪人を倒す事は出来ないかもしれないが、撃退する事は出来るだろう。もしくは、弱らせる事さえ出来ればいい。三人は相手を倒す事ではなく、隊舎と自分達を守る事に重きを置いているのだから。

そんな三人の前でツヴェルフはその姿を変えていく。それは蜂。しかも、スズメバチだ。耳障りな羽音が響く。先程まで持っていた双剣が両手に融合され、その剣先からは何かの液体が滴っている。

「毒、だね」

「気をつけましょう。腐食するかもしれませんし」

「あたしは援護に徹するから、二人は思う存分戦って！」

「「了解！」」

オットーとディードの返事に応えるように、ディエチはツヴェル

フ向かって砲撃する。それをかわすツヴェルフへレイストームが放たれる。それを両手の剣で防ぎ、ツヴェルフはオットーへ臀部を向けて針を打ち出した。

それをディードが叩き落し、そのままツヴェルフへと迫る。しかし、ツヴェルフは双剣でレイストームを切り裂くように弾くと、ディードへと襲い掛かる。その加速力に驚くディード。背後を取り、その双剣でツヴェルフはディードを狙う。

「ディード！」

「くっ！」

ディエチが放った砲撃が間一髪ツヴェルフを捉え、その体勢を乱す。その間にディードは一旦距離を置き、小さく息を吐いた。

【ディード、迂闊に接近しちゃ駄目だ。あいつ、ドライと同じで羽を使って瞬間加速を制御している】

【みたいね。じゃあ、出来るだけ羽を狙ってみる】

オットーからの念話にそう答え、ディードは再び動き出す。オットーはディエチの砲撃の隙を補うようにレイストームを使い、ディードはそれを援護にツヴェルフへ立ち向かう。

一方、フィーアを相手にしているザフィーラとシャマルは、そのＩＳと特殊能力に手を焼いていた。シャマルはザフィーラが作った戦場の外から支援をする形で、戦いを支えていた。

「テオラァァァ！！」

「残念。それは幻影よ」

ザフィーラの渾身の一撃を受け、幻影が消える。そこを狙って動く分身達。だが、その動きを緑の魔力光が止める。

【ザフィーラ、気をつけて！】

【すまん、助かる】

シャマルのバインドが作った時間を使い、ザフィーラは即座にその場から離れる。先程から二人はフィーア相手に一度として攻撃を加える事が出来ないでいた。幻影に分身、更に景色との同化というフィーアの能力に、ザフィーラとシャマルには有効な手段がない。

それでも、隊舎へ侵入させないために二人は奮戦していた。防衛に徹する事で時間を稼ぐ。アギトか龍騎のどちらかでも戻ってくれば、一気に形勢逆転出来るからだ。なので、二人に焦りはない。今は、守る事が勝利なのだから。

ザフィーラは幻影と分身に気を配りながら、姿を消したフィーアにも警戒を怠らない。そう、ザフィーラは守護獣。その嗅覚を使い、フィーアの場所まで特定は出来ないでも、接近を悟る事が出来ていたのだ。

そのため、むしろ焦りがあるのはフィーアの方ともいえる。ザフィーラの作った戦場から出る事も出来ず、接近は悟られて攻撃も防がれる。分身達も有効打を与える事が出来ないままなのだ。

（仕方ないわねぇ、アレは私としてはあまり使いたくないのだけど……）

このままでは自分が邪眼に見捨てられるかもしれない。そう思っ

たフィーアはある攻撃を使う事にした。それは、フィーアの美意識でもあまり好ましくない攻撃法。

「……っ！？」

ザフィーラは何か嫌な予感を感じ、その場から離れた。だが、その腕を何かが掠り傷を作る。それを見ていたシャマルが驚きを見せた。何が起きたのかが理解出来なかったのだ。しかし、ザフィーラはそれだけで何かを理解したのか、悔しそうに表情を歪めた。

【厄介だな。奴め、舌を使いだしたらしい】

【舌……？　あっ！】

【そうだ。カメレオン特有の獲物の捕らえ方だ】

ザフィーラの言葉にシャマルが警戒心を強めた。今までそれを使ってこなかった事を思い出し、フィーアの心境を悟ったからだ。つまり、それを使わざるを得ないまでに焦ってきている。それは、裏を返せばなりふり構わず攻撃してくるだろうという事だ。

シャマルはそう考えると同時に、周囲の状況を見た。フィーアと戦う自分達にツヴェルフと戦うオットー達三人。そして、データ取りをしているウーノとその護衛のドゥーエ。健闘はしているものの、怪人相手に決定打が与えられないのはどちらも同じだ。

（こうなったら……頼ってみるしかないかも）

ある事を考え、シャマルはある場所へモニターを出現させ呼びかけた。

「手を貸して！　アクロバッター！」

その声に反応し、アクロバッターは動き出す。ＲＸからの許可も即座にもらった。更にアクロバッターはゴウラムとライドロンへも呼びかける。こうして、格納庫から頼もしい援軍が姿を見せた。

アクロバッターはゴウラムと共にオットー達へ加勢し、ライドロンはザフィーラ達へ加勢するべく向かっていく。それを見て慌てたのは二体の怪人だ。ライダーがいないにも関らず、自分達へ向かってくるライダーマシンに驚きを見せたのだ。

「なっ！？」

「無人で動いている？！」

ディードと切り結んでいたツヴェルフへ突進するアクロバッター。それを回避しようとするも、そこを狙って放たれたディエチの砲撃に直撃し、ツヴェルフは地面に落下する。そこへ駄目押しとばかりにオットーがレイストームを叩き込む。

ディードはその隙を逃さず、羽をツインブレイズで切り裂いていく。その間にゴウラムがアクロバッターへと融合していた。そして、アクロゴウラムはディードへ声を掛けた。

「ノレ、ディード」

「？　……！　分かりました！」

何を意図してかを理解し、ディードはアクロゴウラムに乗る。だが、それは跨るのではなく、シート部分に文字通り乗ったのだ。そして走り出すアクロゴウラム。ディエチとオットーはそれを見つめ、同時にその狙いを理解し構える。

フラフラと立ち上がるツヴェルフ。そこへアクロゴウラムが本来よりも速度をかなり抑えて突撃する。その瞬間、ディードが跳んだ。突撃を受け、宙へ舞うツヴェルフ。そこにディードが待ち構えていた。

「ＩＳ！　ツインブレイズっ！！」

双剣が煌き、ツヴェルフを斬る。そこへ二色の閃光が華を添えた。レイストームとヘヴィバレルの光だ。それらと突撃で受けた封印エネルギーが作用し爆発するツヴェルフ。それを見届け、一度だけ頷くと三人は即座に動き出す。ディエチはウーノの護衛へ、オットーとディードは邪眼相手に苦戦しているだろうライダーの元へと……

まずシャマルがライドロンへ頼んだのは、そのライトを最大にしてザフィーラ達を照らす事。効果がないかもしれないが、それでもやらないよりはマシだと思ったのだ。

案の定効果はなかったものの、その光量に一瞬だけ分身達が怯んだ。それを好機と見たザフィーラは分身達を魔法で一掃した。この戦場を作った鋼の軛と呼ばれる魔法だ。地面から突き出した棘が分身達を貫いていく。それで苦しむ分身達へは目もくれず、ザフィーラはシャマルへ礼を告げた。

「すまんシャマル、助かった」

「いいのよ。これで残るは……」

姿の見えないフィーアへ告げるようにシャマルは言葉を発した。それにザフィーラも頷き、周囲への警戒を強めた。すると、ライド

ロンがシャマルを守るようにその車体を動かした。直後、ライドロンの車体に火花が散る。
それを見てシャマルとザフィーラに動揺が走るが、それを二人は何とか抑えた。そしてシャマルは悪いと思いつつもライドロンの影に隠れ、ザフィーラは自分の作った戦場からフィーアがいつの間にか出た事を知り、自分もそこから出る。

「奴め……いつの間に出たのだ？」

「きっと、ライトを使った時よ。どこかを砕き、そこをＩＳで誤魔化したんだわ。私も貴方も、ライトを使った瞬間は視線を分身達に向けてたもの」

「そういう事。中々鋭いじゃない」

ザフィーラの呟きに答えたシャマルの言葉。それを聞いてフィーアは感心したように、だがどこか上からの言い方をした。それに二人は頷き合い、シャマルがライドロンの中へ乗り込んだ。
ザフィーラはそれを守るように立ち、嗅覚を頼りにフィーアの居場所を突き止めようとした。フィーアを閉じ込めたいが、それはもう叶わない。だが、フィーアが隊舎に侵入する事も出来ないだろうとザフィーラは思っていた。

（奴はやたらとプライドが高い。いいようにやられたままでは終われんはず。つまり、俺達を倒すまでは隊舎へは行かないだろう）

それでは、フィーアが自分達から逃げ出すと捉えられても仕方ないからだ。そう考え、ザフィーラは念のために挑発する。

「俺達に何とか一矢報いたようだが、それだけだ。お前では、俺達

を足止めする事しか出来ん。姿を消す事しか能の無いお前には、な」

その声に返事はない。だが、ザフィーラは直感で感じ取っていた。フィーアが今の言葉で怒りを覚えたと。殺気が強くなったのだ。これで最低限の目的は達成出来るかと思い、ザフィーラは不敵に笑みを浮かべた。それさえも相手に対する挑発とするために。

――――さて、では守るか……

自分らしからぬ振る舞いもここまで。後は守護獣の名に相応しくあろう。彼はそう思って悠然と構える。姿の見えない敵相手に……

「くそっ！　これで……どうだ！」

龍騎が手にしたドラグクローを強く前へ突き出す。ドラゴンストライクだ。それを受けても、邪眼は多少後ずさるだけ。それに龍騎は舌打ちをしたくなる気持ちを抑え、諦めずに一枚のベントカードを取り出す。それは、龍騎のマークが入ったカード。

”ファイナルベント”

龍騎はサバイブを安易に使うのではなく、通常の姿のままで邪眼を相手にしていた。それは、何も考えなしの行動ではない。サバイブになるとカードが増えたり、あった物が無くなったりする。それから龍騎はある推測を立てた。サバイブになると、それまで使ったカードとは別物になるのではないかと。

故に、彼はこの姿のままでファイナルベントを使い、邪眼を弱らせる事にしたのだ。あのラボからの脱出戦では、サバイブでのファ

イナル二連発で撃破出来た相手。それを考えれば、龍騎としては少しでもベントカードを有効に活用するしかないと思ったのだ。

「はあぁぁぁぁ……」

龍騎の周囲を巻きつくように動くドラグレッダー。そして、腰を深く落とし龍騎は跳ぶ。空中で一回転し、捻りを加えながら落下していく龍騎。

「ライダァァァキィィィックッ！！」

願わくばこれで終われ。そんな思いを込めた蹴りが邪眼へ炸裂する。それに邪眼は地面を滑るように飛ばされた。着地し、それを見つめる龍騎。しかし、その手には既にサバイブのカードが握られている。

膝を地面につけるも、邪眼は悠然と立ち上がる。それは、ドラゴンライダーキックが必殺ではなくなった瞬間だった。それでも龍騎はうろたえる事無くサバイブのカードをかざし、ドラグバイザーを変化させる。

”サバイブ”

「こっからだ……」

サバイブし、龍騎は出し惜しみはしないとばかりにシュートベントを使う。ドラグランザーが邪眼向かって火球を放つ。それを物ともせず、邪眼は龍騎向かって走る。それを見て、龍騎はソードベントを使って迎え撃つ。

アギトはその様子を離れた場所から見つめる事しか出来ない。龍騎から危なくなるまで隠れていろと言われたためだ。アギトは万が

一の切り札。それが邪眼にやられては意味がないとの理由に、アギトは渋々ながら納得したのだから。

「真司ぃ……アタシ、信じてるからな」

邪眼と戦う龍騎を見つめ、アギトはそう呟く。光太郎から聞いて知った仮面ライダーの本質。故に、アギトは龍騎の勝利を信じている。闇に抗い、それに打ち勝つ存在。更に、龍騎は炎の化身なのだから。

「貴様のデータはもう十分だ。ここで死ね、龍騎！」

「言ってろ！　データデータって、そんなもんで全て分かれば苦労しないんだよっ！」

邪眼の電撃を喰らいながらも、龍騎はそう啖呵を切る。そこへ更に電撃が放たれるも、それを素早く回避して龍騎は立ち上がる。そして、ある思いつきを試すべく龍騎はベントカードを取り出す。

それは言うまでも無くファイナルベント。ここで勝負を決める。そんな思いがそこに込められている。それを見て邪眼は構える。一度は防いだ事実があるドラゴンファイヤーストーム。だからだろう。邪眼には焦りはない。

”ファイナルベント”

それでも龍騎は迷う事無くそれを使う。バイクへ変形したドラグランザーに跨り、龍騎は邪眼目指して走り出す。それと同時に一枚のカードを手にして。

ウィリー状態で火球を放つドラグランザー。それに耐えながらも、邪眼はその突進を受け止めようと待ち構えていた。やがてその距離

が縮まっていき、五メートルも無くなった瞬間だった。周囲に電子音声が響いたのは。

”ストレンジベント”

「うおぉぉぉぉ！」

「何だとっ？！」

音声と同時に龍騎が跳び上がった。ドラグランザーと共に。それは邪眼の知らない攻撃。それは、龍騎の賭け。ストレンジベントは状況に応じて変化する特殊なカード。それがサバイブのファイナルベント中に使えば、ある物へ変化してくれるのではないか。そんな博打から生まれた一度限りの夢の連携技。

龍騎の背後へドラグランザーが回り込む。そして、龍騎が回転しながら蹴りの姿勢を取った瞬間、そこへ火球を放った。その勢いを受けて突撃する龍騎。そう、ドラゴンライダーキックだ。いや、厳密に言えばそれは本来のものとは違うだろう。

だが、その光景はその名前に相応しいものだった。龍の火炎を背に受け、騎士は果敢に邪眼へと向かっていく。

「ライダーキックッ！！」

必殺の言霊を込められた蹴りが邪眼を大きく吹き飛ばす。地面に強く叩き付けられる邪眼。龍騎は着地したまま、黙ってそれを見つめ続ける。暫し流れる沈黙。すると、邪眼が静かに起き上がった。それでも龍騎は慌てる事無く見つめ続けた。

「これで……これで勝ったと思うな、仮面ライダー」

「……思う訳ないだろ。まだ、俺はラボを……ジェイルさん家を取り返してないんだから」

「そうだ。そこを貴様らの墓場にしてやる！　ゆりかごこそ、貴様らの墓場だぁぁぁぁ！！」

そう言い残し、邪眼は倒れて爆発した。それに龍騎とアギトは揃って疑問を抱く。ゆりかご自体は確かにラボにある。だが、そこが墓場になる事はないはずなのだ。ジェイルの研究施設のほとんどはゆりかごとは別の場所なのだから。

龍騎は一度変身を解除して動き出す。アギトは隊舎へ向かい、真司はもう一体の邪眼のいる場所を探すために。そこで戦う仮面ライダーを援護しようと考えて……

龍騎が邪眼を倒す少し前、別の場所ではアギトが邪眼を追い詰めていた。トリニティフォームを使い、更にそこからバーニングフォームへと変わって邪眼に少しずつだが、確実にダメージを与えながら。

「ま、まさかこれほどとは……」

「ここまでだ、邪眼！」

アギトは邪眼へとどめを刺そうと拳を握り、構えた。それに邪眼は両手から電撃を放つ事で対抗しようとした。それを受け、アギトは軽く後退するもすぐに体勢を立て直し、邪眼向かって走り出す。

燃え盛る炎を拳に集め、アギトは邪眼へ向かって地を蹴った。空

中のアギトを電撃で撃ち落とそうとする邪眼。しかし、それは思わぬ方法で防がれる。アギトは左手をベルトにかざし、シャイニングカリバーを出現させる。その展開する前の状態を盾に電撃を弾かせたのだ。

「何だと!?」

「ライダーパンチッ!!」

動揺する邪眼に叩き込まれるバーニングライダーパンチ。その威力に邪眼が大きく飛ばされる。そして地面に叩きつけられ、そのまま三回程邪眼は転がった。アギトはそれを見て、電撃で落ちたシャイニングカリバーを拾いに行き、それを構えて走り出す。

勢いを殺し、何とか立ち上がった邪眼が見たもの。それは、自分へシャイニングカリバーを振り下ろすアギトの姿だった。それは、バーニングボンバーという必殺技。弱った邪眼を完全に倒す決め技となった。

「はあっ!」

「ぐっ……あ、アギト……その力、やはり光の力……グオォォォォ!」

意味深な言葉を残し爆発する邪眼。アギトはその光の力という言葉に、ふと自分のベルトへ目をやった。自分が変身する際の光。あれをかつて発電所で出会った仮面ライダー達は持っていた。それを思い出し、アギトは一つの推測を立てた。

(もしかして、俺の世界の仮面ライダーはみんなアギトの力を持ってたんじゃ? だから怪人達が強化されても、戦い続ける事が出来

たのかもしれない）

自分がいくつもの姿に変化出来た事を思い出し、アギトはそう考えた。一号を始めとした歴代ライダー。性能では劣るはずの彼らが何故最新鋭の怪人達を相手に勝利出来たのか。その影には、アギトの力がどこかで作用していたのでは。

進化を促すアギトの力。それが改造人間となった仮面ライダー達にも少なからず影響した。それをアギトはどこかで感じたのかもしれない。もしくは、あまり関りのない自分と歴代ライダー達との繋がりを、そこに欲したのかもしれない。

アギトは自分の拳を静かに握り締めると、小さく頷き走り出す。目指すは隊舎前の仲間達。自分の勝利と健在を示すために……

「トゥア！」

大地を蹴って跳び上がるＲＸ。邪眼の放つ電撃を飛び越え、着地した瞬間にその姿を変える。不思議な光が体を包み、消えた時には機械の体を持つロボライダーとなっていた。その変化に興味深そうな反応を見せる邪眼。

「ほう、貴様もクウガのような事が出来るのか」

「ボルティックシューター！」

その言葉に答える気は無いとばかりに、ロボライダーは手にしたボルティックシューターで攻撃を開始する。それを電撃で対抗する邪眼。しかし、連射能力で勝るロボライダーがそれに打ち勝つ。ボ

ルティックシューターを喰らい後退する邪眼へ、ロボライダーは容赦なく追撃を加える。

それでも邪眼も連射の合間を狙って電撃を放ち、ロボライダーへダメージを与えた。それでも、ロボライダーは反撃する。しかし、このままでは耐久力的に邪眼が若干有利だろう。そう考えたロボライダーは、地面にボルティックシューターを発射して煙幕を張った。

「よしっ！」

RXへと戻り、力強く地を蹴る。その視覚に神経を集中し、邪眼の位置を特定してその蹴りを放つ。

「トゥア！」

両足を邪眼へ炸裂させ、その反動でRXはもう一度空へと舞い上がる。そしてそこから、もう一度蹴りの体勢に入った。それは、彼が先輩ライダーから聞いた技。敵を蹴りつけた反動を利用し、再度必殺の蹴りを放つもの。その名は……

「RX！　反転キックッ！！」

その威力は単純に通常のRXキックの二倍。しかも、RXは同じ場所へ叩き込んだ。それは、連続ライダーキックと呼ばれる技の複合。よって、その威力はそれを超えていた。邪眼も堪らず大きく後ずさる。

それを見てRXはとどめを刺すべくベルトへ手を回す。それに呼応するように現れる光の杖。リボルケインを手にし、RXは三度宙へと舞い上がる。そして先程のキックのダメージが抜け切らない邪眼へ、手にしたリボルケインを突き刺す。

「こ、この力……やはり貴様もか、世紀王！」

「何の事だ！？」

「光の力……それを貴様は取り込んだのだ」

「光の力……？　そうかっ！　アギトの光の事か！」

ＲＸは邪眼の告げた言葉からある結論に辿り着き、納得した。そして、それが自分の体の変化に大きく影響したのだろうと思い、ＲＸはリボルケインを強く押し込んだ。

この戦いを切り抜けた後、待っているだろう最終決戦。それを前に五代と翔一に話す事が出来た。そう考えながら、ＲＸは邪眼からリボルケインを引き抜いた。リボルケインでその場にＲＸと署名するように手を動かすＲＸ。邪眼はその場にゆっくりと倒れながら火花を散らし、地面につくと同時に爆発した。

（ＲＸへの変化……ＢＬＡＣＫの原型……もしかしたら、俺はクウガとアギトに大きく関係しているのかもしれない……）

そんな事を思いつつ、ＲＸはその場から走り去る。まだ怪人と戦っている者達がいるからだ。それを助け守る。それが仮面ライダーなのだから……

「はやてちゃん、もうこっちはいいから他のみんなを！」

「そうしたいんやけど、わたし、結界魔法得意やないんです！」

”なので、離れると維持が難しいですよ～！”

地上本部周辺で邪眼と戦うクウガとはやて。何とか外へ追い出す事に成功したクウガだったが、撃破するための場所を中々見つける事が出来なかった。そんな中、はやてが合流した事により、クウガは念のために結界魔法を使ってもらう事を提案。

それにはやても呼応し、かつてユーノから蒐集した結界魔法を展開した。だが、それはあくまで使えるだけ。ユーノ程の精度はないため、はやてはその場を離れる訳にはいかなかったのだ。

「そこだ！」

「させないっ！」

はやてを狙って放たれた電撃。それを庇い、紫の鎧で受けるクウガ。金の力で底上げされた防御力は、少しも怯ませる事無くクウガを守る。その頼もしさにはやてとツヴァイは勇気をもらい、結界維持へ意識を向ける。

クウガは、はやての言葉から邪眼を早く片付けようと動き出した。結界維持を続けるはやての負担を考え、更に他の場所で戦う仲間達の援護に向かうために。手にした剣を下げ、悠然と動き出すクウガ。

それを見た邪眼は、かつての記憶を呼び覚ました。アギトと二人で電撃を物ともせず進んできたあの光景を。

「ぬぅぅぅ！　仮面ライダーめぇぇぇぇ！」

あの時と同じにはならない。そんな気持ちで電撃を放つ邪眼。それを受けてもクウガは歩みを一瞬も止めない。それが邪眼の焦りと恐れを増加させていく。そして、その距離がクウガの間合いになっ

た瞬間！

「おりゃあぁぁぁ！」

繰り出されるライジングカラミティタイタン。紫の金のクウガの必殺技が邪眼に炸裂する。だが、クウガはそれだけでは終わらない。すぐに剣を引き抜き、姿を変える。それは青。即座に金の力を発動し、ライジングドラゴンとなったクウガはその跳躍力ではやての傍まで戻る。

視線をはやてに向けるクウガ。それだけではやては何かを察し、手にしていたシュベルトクロイツを手渡した。それに礼を告げ、クウガはそれを振り回す。それがライジングドラゴンロッドに変化し、クウガはそれと同時に再び空へと跳び上がる。

「うおりゃあっ！！」

叩き込まれるライジングスプラッシュドラゴン。青の金のクウガの必殺技だ。その一撃が、先程の攻撃による封印エネルギーに苦しむ邪眼へ追い撃ちをかけた。邪眼はそれを受けて尚、捕らえたとばかりにロッドを掴む。だが、クウガはロッドを掴む手をしっかり握り締めると脇に抱えるように持ち直し、邪眼を持ち上げるように動かした。

そのまま回転しながら、クウガはそこから見える海原目掛けて邪眼を放り投げた。その勢いに邪眼の手も離れ、海原へと飛んでいく。その体には金の力で強化された二つの封印エネルギーがしっかりと刻まれている。そこからひびを生じさせながら、邪眼は叫んだ。

――――次は負けんぞぉぉぉぉ！！

その声がキッカケのように爆発する邪眼。その爆発はクウガが思

ったよりも小さかったものの、動力炉で起きていれば被害は大きかったただろうと思わせるぐらいではあった。クウガは金の力を消し、手にしたドラゴンロッドをはやてへ返すべく動き出す。

結界が解かれ色を戻していく景色の中、クウガは思う。邪眼の告げた次。それが本当に自分達が考えている状況だろうかと。それでも、クウガは走る。はやてと共に仲間達の元へと……

モニターに映る隊舎前の戦況が六課に有利になり始めたのを見て、課員達から不安が消えた。更にそこへ二人の仮面ライダーも現れた瞬間、歓声が沸き起こる。ヴィヴィオもイクスヴェリアさえも両手を握り、その光景に喜びを爆発させていた。

誰もが勝利を確信した。いや、ある二人の人物はそうではなかった。その二名だけは浮かれる周囲とは違い、何かを警戒するようにしながらその光景を見つめていた。

「イクス、これでもう大丈夫だね！」

「はい！」

最初こそ初めて見る邪眼や怪人の姿に恐怖した二人だったが、それを相手にしても勝利して戻って来た仮面ライダーの姿に、揃って強い希望と勇気を貰っていた。視線の先では、アギトがフレイムフォームへ変わり、フィーアの気配を探っていた。

もう勝利は目前だ。そんな風に思い、ヴィヴィオとイクスヴェリアは互いに手を繋いでモニターを注視していた。そんな二人を見て微笑むリイン。だが、次の瞬間……

「「えっ……？」」

ヴィヴィオとイクスヴェリアを抱きしめていた感触が消える。それに二人は何かあったのかと思い、後ろを振り返った。だが、そこには優しいリインではなく、不気味なもぐらの怪人がいた。

リインは弾き飛ばされたのか、少し離れた場所で倒れている。それに二人は駆け寄ろうとして、その動きを止めた。ゼクスがその腕を二人の前へ向けたからだ。

「おっと、行かせないよ」

「あ……あ……」

「っ……どいてください」

怯えるヴィヴィオを庇うように、イクスヴェリアは前に立って毅然と告げた。しかし、その足はどこか震えている。古代ベルカに生まれたイクスヴェリアではあるが、当然今までその眼前に敵が攻めてきた事はない。

今回のように恐ろしい状況になった経験はないのだ。それでも、イクスヴェリアはヴィヴィオのために勇気を振り絞った。仮にも王と呼ばれただけではない。自分を友人と思ってくれている少女を、ヴィヴィオを守りたかったのだ。

「どいてくださいねぇ……嫌だと言ったら？」

「ならば……無理矢理通ります！」

凛と告げるイクスヴェリア。その声にヴィヴィオは不思議と心が熱くなっていく。自分とそこまで歳が変わらないだろうイクスヴェリア。それが毅然と怪人へ言い放つ言葉の力強さに。

「イクス……」

（そうだ。ママも五代さんも言ってた。どんな時でも笑顔でいられるようにって頑張るのが、本当の強さなんだって！）

自分に影響を与えてくれた二人の人物の言葉と笑顔。それを思い出し、ヴィヴィオは意を決して頷いた。そこへ、突然念話が聞こえる。それに驚くヴィヴィオだったが、その相手の優しい声に落ち着いて小さく頷く。

同じようにイクスヴェリアにもヴィヴィオと同じ内容が念話で告げられていた。相手の力強い言葉にイクスヴェリアは勇気付けられながら、信じていると言葉を返す。

「……まぁ、創世王様は最悪死んでいても構わないって仰ってたし……」

ゼクスの脅すような言葉にも二人は怯えを見せない。それがかつてのスバルとティアナを彷彿とさせ、ゼクスは苛立ちのままにその腕を振り上げた。

「「今だっ！」」

「何っ？！」

それを待っていたかのように動き出す二人。それに驚きを隠せないゼクス。同時に爪を襲う衝撃。それは一定間隔でゼクスの爪を一本一本砕いていく。それでもゼクスは二人目掛け腕を振り下ろす。それは僅かにヴィヴィオの髪を掠り、毛が宙に散る。

それでも止まらず二人は走り抜け、リインの傍へと駆け寄った。

ゼクスはそれに舌打ちをし、ＩＳを展開して逃走する。その際、床に散った髪の毛を数本掴んで。リインは、念のため二人を抱えると飛行魔法を使い、天井近くへと上がる。

そのまま待つ事数分後、外で戦っていたフィーアも倒され、完全に隊舎前は平和を取り戻した。それを受け、ロングアーチも六課内の非常警戒態勢を解除。リインは二人を床に下ろし、その頭を優しく撫でた。

「よく頑張ったな、二人共」

「えへへ、リインさんが声を掛けてくれたからだよ」

「私もそうです。ヴァイスさんが絶対守ると言ってくれましたから」

照れ笑いを浮かべるヴィヴィオ。イクスヴェリアも笑みを浮かべ、視線をゼクスの爪を狙撃していたヴァイスへと向けた。それに気付いたヴァイスがやや苦笑しつつもサムズアップを返す。

それにイクスヴェリアもサムズアップを返す。それを見てヴァイスは過去の悪夢を吹っ切れたと感じていた。ウーノ達を通してロングアーチから頼まれたゼクス対応。リインはヴィヴィオ達を確保し、離れないようにする事。ヴァイスに託されたのは、万が一に備え狙撃でゼクスの攻撃手段を破壊する事だった。

正直、ヴァイスは自信が半分半分だった。故に、実際イクスヴェリアに爪を向けたゼクスを見た瞬間、かつての事件を思い出して息を呑んだ。だが、その瞬間頭をよぎったのだ。過去を乗り越えられない自分が光太郎へ言った言葉が。

妹が捕まったのなら、余計自分が助けてやろうと思わないといけない。それを思い出し、ヴァイスはそれまで封印していたデバイス

――ストームレイダーを起動させた。そうだ。今度こそやってやろうと。あの頃の妹を彷彿とさせるイクスヴェリアを見て、ヴァイスは過去を打ち抜く事を決めたのだのだった。

――絶対に守るから、相手が腕を振り上げたら走れ。信じてくれ。必ず……守るから。

その念話にヴァイスは思いの丈を乗せた。そして、それを決意表明としてヴァイスは引き金を引く事が出来たのだ。

「……待たせちまったな、ストームレイダー」

”お帰りなさい、ヴァイス・グランセニック”

小さく呟かれた言葉に返された言葉。それにヴァイスは軽い驚きを見せるも、すぐに嬉しそうに笑みを浮かべ告げた。

――ああ……ただいま。

この後、地上本部組と隊舎組の報告で、襲撃に参加した邪眼の数が四体だった事が確認された。

残っていた怪人達も、ゼクスが失敗したのを契機に倒された者と撤退した者がいた。

バトルジャケットが怪人へ有効だった事も分かり、レジアスはそれを以ってその配備を世間へ訴えた。その結果は、きっと良い方向に向かうだろう。

そんな明るい報告ばかりだったのもそこまで。はやてから告げら

れたユーノの事実。それは五代達へ怒りと悲しみを与える。
　このままラボへ攻め込みたいが、六課も疲弊しているのは事実。故に明日ラボへ突入する事を決め、それぞれが決意を新たにする。
　残る邪眼は六体。その残された理由がゆりかご起動とライダー抹殺のためだと、この時誰も知る由も無かった……

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

後編。ライダー達の戦闘はほぼ無双状態なのは、今後の伏線です……一応。
これから最終決戦へと向かっていきます。さ、そろそろ絶望感がやってくる時間です

終幕への序曲

地上本部襲撃から数時間が経過した。既に六課の者達は隊舎へ戻っていて、それぞれに休息を取っていた。明日に控えたラボ奪回戦を兼ねた最終決戦。それに備えて体を休めている者達がほとんどだ。ロングアーチも防衛戦を終えたため、今はコーヒーや紅茶を手に談笑していた。

「お疲れさまです、グリフィス部隊長補佐」

「ルキノもね。まさか、ビートチェイサーの通信機能を利用して陸士達のデバイスへ連絡なんて考えつかなかったよ」

グリフィスの言葉にルキノは照れくさそうに笑みを返した。地上本部への通信手段を失った時、ルキノはビートチェイサーを中継してのデバイス間通信を思いついたのだ。それをシャーリィが即座に試み、実行に移した。多少作業に手間取ったものの、遠隔操作で出来る類だった事もありそれは実現した。

そして通信手段を失っていた陸士達を繋ぎ、その動揺を沈静化する事に成功。更にトイやマリアージュに苦しめられていた者達へ、１０８やゼスト隊の健闘を聞かせる事で励ました。最後に仮面ライダーも戦っていると教えれば、もう不安は無かったのだから。

「あれがある意味で被害を抑えたもんなぁ」

「それをやってのけたシャーリィも凄いよ。でも、一番はやっぱりグリフィス部隊長補佐でしょ。立派だったと思うな、あの演説は」

「いや、演説じゃないし立派って訳でもないよ」

シャーリィがグリフィスの言葉に頷き、アルトはそんな彼女の手腕も褒める。そしてグリフィスを褒めるのも忘れない。それにグリフィスは困惑した表情を返す。そう、グリフィスは六課を代表して全ての陸士達へ語りかけたのだ。

落ち着いて対応して欲しい。相手は手強いが勝てない相手ではない。もし戦う事が厳しいのなら、素早く撤退を。逃げる事は恥ではなく、反撃のための準備だと思って欲しい。戦える者は手を取り合って、戦えない者は出来る範囲で生きるために足掻いて欲しい。相手が一番痛手に思うのは、誰も犠牲にならずに生き残る事なのだから。

そうグリフィスは告げた。その真摯で静かな声は六課に対し思う事があっただろう者達にさえ届き、大きな被害を出す事無く地上本部を守っていた者達は耐え切る事が出来た。グリフィスはその一因にはなったと思っているが、それが全てではないと知っているからこそ困惑していたのだ。

陸士達それぞれが生き残ろうと懸命に足掻いた。そして、そんな彼らを勇気付けたのはやはり仮面ライダーの存在。恐ろしい怪人を相手に一歩も引かずに勝利する仮面ライダー。そして、ミッド中で人命救助をしていた彼らが参戦していると聞いた瞬間、陸士達の目に希望の光が戻ったのだろうとグリフィスは思っているのだから。

「気持ちは分かるけど、もっと胸を張っていいよグリフィス。貴方が立派だったのは、ここのみんなが知ってるんだから」

シャーリィの言葉にルキノもアルトも頷いた。それにグリフィスはやや面食らってから、嬉しそうに笑みを見せた。そんな彼へ三人が同時にサムズアップ。するとグリフィスも即座にそれを返して、

三人が笑う。
指揮所に響く四つの笑い声。最後の戦いの一時の安らぎ。それを噛み締めるように四人は過ごすのだった……

「そうか。お前がイクス達をな」

「ええ。昔取った何とかって奴っすよ」

小さく笑うヴァイスを見て、シグナムは少し意外そうな表情をした。そして、その理由に気付き笑みを見せた。今二人はヘリポートでコーヒー片手に談笑していた。ヴァイスがゼクスを撃退した事を聞き、その状況を詳しく聞いていたのだ。
そして、それからシグナムはヴァイスが過去の失敗を乗り越えたと知った。正確な狙撃を以ってヴィヴィオとイクスヴェリアを守ったのだから。

「何すか？」

「いや、過去を乗り越えたのだなと思ってな。いい顔をするようになった」

「そうすか。ちったぁいい男になりましたかね？」

「ああ、今口説かれれば困るぐらいにはな」

シグナムの言葉にヴァイスは言葉を返そうとして、その声が予想に反して真剣なものだと気付いて声を失った。そんなヴァイスへシグナムは少しだけ楽しそうな笑みを見せて歩き出す。そして、背中

を向けたまま一言告げる。

――と、アルト辺りは思うだろう。

それにヴァイスが呆気に取られた。それを雰囲気から悟りながらも、シグナムは振り返る事もせず隊舎の中へ戻っていく。それを見送り、ヴァイスは苦笑して空を見上げる。からかわれたと思ったのだ。それでも、ヴァイスは嬉しかった。

あのシグナムが自分をいい男だとは認めてくれたのだから。口説かれれば困るとまではいかないだろうが、少しは考えてくれるぐらいにはなっただろう。そんな風に考え、ヴァイスは楽しそうに呟く。

――姐さん、その言葉忘れませんよ。いつか、姐さんを困らせるだけの男になってみせます……

食堂でリインは、ヴィヴィオの後ろ髪を少し整えるように切っていた。ゼクスによって髪を軽く散らされたためだ。イクスヴェリアはそれを見つめ、ザフィーラはツヴァイとアギトへ明日の事を話していた。

「そうか。では、明日こそお前と龍騎のユニゾンの出番か」

「ああ。アタシと真司の奥の手だ。邪眼の奴も知らないからな」

ザフィーラの言葉に笑顔で応じるアギト。力強いその声に周囲も知らず笑みを見せる。今回、龍騎は一人で邪眼を相手に立ち向かい勝利した。それを見てアギトは知った。龍騎が自分を何故最後の切り札にしたのかを。

邪眼は、アギトが知る限り無敵の龍騎がファイナルベントを正味三枚使ってようやく倒せる相手だった。しかも、まだ別の姿を隠しているとなれば余計に恐ろしい。最悪龍騎だけでは邪眼の本当の姿には勝てないかもしれないのだ。もしかすると自分がユニゾンしても勝つのは難しいかもしれない。

そんな事を考えアギトがやや真剣な表情に変わると、それに気付いたツヴァイが安心させるように笑顔を見せた。

「大丈夫です！　仮面ライダーは負けません！」

「リインの言う通りだ。五代も翔一も南も城戸も負けん。それにもし危機に陥ったとしても、そのために我々がいるのだ」

そのザフィーラの断言にアギトは嬉しそうに頷き、視線をヴィヴィオ達の方へ向けた。それに倣うようにザフィーラとツヴァイも視線を動かす。

「……よし、これでいい」

「ありがとアインさん。えっと……イクスどう？　変じゃない？」

リインの言葉にヴィヴィオは礼を述べるとイクスヴェリアへ背を向け、そう尋ねた。リインはそんなヴィヴィオに苦笑した。そこまで大きく切ってはいないから見せても仕方ないと思っていたからだ。

イクスヴェリアはそんなリインと同じ考えを持っていたのだろうが、表情には出さずにヴィヴィオの後頭部を見て笑顔で頷いた。

「ええ、とても可愛いです」

「ホント？」

「はい。ヴィヴィオが心配するような事はないです」

そこまで言われてヴィヴィオも納得出来たのか、嬉しそうに頷いた。そして改めてリインへ礼を告げて、イクスヴェリアの手を掴んで走り出した。行き先はおそらく五代達がいる会議室。今、そこで五代と翔一に光太郎は大事な話をしているのだ。

ヴィヴィオとしては、話の邪魔をしに行くのではなく、ただ少し変わった自分の髪型を見て欲しいだけだろう。イクスヴェリアはそう判断し、苦笑しながらヴィヴィオの手をしっかりと掴んでいた。

「五代さん達でしたら、まだお話をしているかもしれませんよ？」

「なら、廊下で待てばいいよ」

即答。イクスヴェリアはそれに自分の予想が当たった事を理解し、小さく微笑んで告げた。それなら何か飲み物を差し入れればどうだろうと。それにヴィヴィオが急停止。イクスヴェリアはそれに転びそうになるものの、何とか耐え切り安堵の息を吐いた。

ヴィヴィオはもっと早く言ってと文句を言うが、イクスヴェリアはそれに言い出す前に行き先を教えてくれなかったからだと反論。それにヴィヴィオが言葉に詰まって降参した。だが、互いに浮かぶは笑み。

――じゃ、何か持ってこー。

――そうですね。アインさんなら五代さん達の好みを知っているはずです。

そう言い合い、二人はまた来た道を戻っていく。その頃食堂ではそんな二人の会話が聞こえたため、リイン達が微笑みを浮かべながら五人分の飲み物と軽いお茶請けを用意しているのだった……

六課隊舎内医務室。そこでヴィータはノインとの戦いで受けた傷をシャマルに診てもらっていた。チンクとの連携で五分の戦いをしていたのだが、撃破にこだわってしまったために反撃を受けたのだ。

それでも咄嗟に自慢の防御魔法を展開し重傷にはならなかったものの、それがキッカケで苦戦する事になったのは事実。クウガとはやてが現れた事で相手が撤退しなければ、危なかったかもしれないとヴィータは思っていた。

「無茶し過ぎよ。もう私達の体は簡単には治らないんだから」

「分かってる。人間に近くなってるってんだろ？」

「そうじゃないの。今の私達はもう完全に生命体よ。死ねば、そのまま消えるだけ」

シャマルの言葉にヴィータは悲しそうに俯いた。以前であればどこかで喜んだ事実。しかし、今の状況ではむしろそうではない方が嬉しかった。その理由は、ただ一つ。

「そっか……いざとなりゃ翔一の盾になれるかと思ってたのによ」

「ヴィータちゃん……」

消滅してもはやての魔力があれば復活出来るのであれば、ライダ

ー達の盾に最悪なれると考えていたのだ。その考えが分かったのだろう。シャマルも複雑な表情を返す事しか出来ない。どこかでヴィータも自身の体の事を分かっていたはずなのだ。それでもそんな事を思うぐらい、ヴィータは翔一の事を慕っている。

はやてと共に八神家で過ごした時間の中、ヴィータが一番影響を受けたのは翔一だった。口汚い自分を怒る事もせず、注意するとしても女の子だからとだけ。決して怒ったりせず、笑顔で接してくれた翔一。公園に行き老人会の者達と仲良くなった時、翔一は差し入れとしてヨモギ団子を作ってくれた。それを食べながら、老人達はヴィータへこう言ったのだ。いいお兄さんだねと。

（あたしは翔一のために何かしてやりたかった。でも、いつもあたしはしてもらうばっかりだ。だから今回こそはって……そう思ったのによ）

そんな事を思い、ヴィータは天井を見上げた。明日の戦いに勝利すれば、この世界は仮面ライダーを必要としなくなる。それが意味するのは、翔一達との別れ。故にヴィータは最後に役に立ちたかったのだ。翔一が嫌がろうとも、その命を守れるのならと。

だが、それは出来ない。復活出来ないのならそれは翔一だけでなく、はやてを始めとする多くの者達を悲しませるだけにしかならないからだ。人と同じような限りある命となった今、ヴィータは別の意味でも悲しかった。

「なぁシャマル……」

「……何？」

「はやてが死んだら、あたし達も消えるんだよな」

そのヴィータの言葉にシャマルは頷いた。それを見てヴィータは小さく何かを呟いてから、寂しそうに俯いて告げる。

――じゃ、翔一と再会出来るのを待ち続けるのも無理だな。

――……そうね。もうはやてちゃんが生きてる間で仮面ライダーが必要とされる事はない事を願うわ。

ヴィータの言葉の意味を悟り、シャマルは噛み締めるように答えた。本当を言えばそんな事を考えているヴィータを叱らねばならない。だが、そんな事がシャマルには出来なかった。ヴィータは静かに泣いていたのだ。

やっと得た限りある命。だが皮肉にもそれは、愛しい家族との再会と万一の手助けの方法を奪った。どこかで望んでいた物が手に入った時、違う何かが失われた。これを皮肉と言わずして何と言うだろう。シャマルはそう考え、ゆっくりとヴィータへ近付いた。

「大丈夫」

「……え？」

「ヴィータちゃんの気持ちは分かる。でも、考えてみて？　翔一さんがまたここへ呼ばれるのは、本当にヴィータちゃんが願う事？」

「それは……」

「違うでしょ？　だから大丈夫。待ち続けるんじゃなくて会いに行けばいいのよ」

シャマルの発言にヴィータは涙を止めて勢いよく顔を上げた。そこには真剣な表情のシャマルがいた。こちらへ来れたのだから、行けない事はない。ユーノが探していた平行世界への連絡手段から派生し、行くための方法も見つけ出せばいいのだと。

そうシャマルが告げると、ヴィータは呆気に取られた表情からゆっくりと嬉しそうな表情へ変わっていく。その目には先程までとは違う涙が溜まっていた。

それにシャマルは笑顔を返し頷いた。ヴィータもそれに頷き返し、目元を拭ってこう言った。

――明日、絶対勝ってやる。それで、ジェイルの奴にも手伝わせて翔一へ会いに行けるようにしてみせるかんな！

そんなヴィータをシャマルは姉のような眼差しで見つめるのだった……

「今回で怪人達のデータが揃ったね」

「でも、それだけや。邪眼はこっちの予想に反して六体も残っとる」

「その狙いは不明……だからね」

部隊長室で会話するのはフェイトとはやて。二人の手には紅茶が注がれたカップが握られている。厳しい戦いを切り抜け久しぶりの安らぎを得たような気分だったのだが、それも最初だけ。互いの無事を喜び合って、少し雑談するともう会話の内容は重くなっていたのだから。

「光太郎さんは何て？」

「うん、もしかしたらって言ってたけど……」

フェイトは光太郎が考えた邪眼の目的を話す。六体の内、一体は本体にするのは変わらない。残る五体の内四体は仮面ライダーへ差し向けてくるだろうと。そこまで言って、フェイトは何か怒りを滲ませる。それにはやては気付き不思議そうに見つめた。

フェイトは一度呼吸を整えると、こう続けた。そして、最後の一体はゆりかごを起動させるために使われるだろうと。それにはやてが何かを言おうとして、フェイトの怒りの原因に気付き言葉を失った。

（そうか。そういう事やな……）

結局邪眼の目的を阻止し切る事が出来なかった事を理解し、はやては悔しげに表情を歪ませる。今回の襲撃であった戦いははやても全て聞いている。その中にフェイトが怒り、尚且つゆりかごを起動させる事が出来る可能性を邪眼が得る機会があった事を思い出したのだ。

はやては悔しさを流し込むように紅茶を飲み干す。フェイトもそれに倣うようにカップを傾けた。共に大きく息を吐き、どちらともなく互いの顔を見つめて笑みを浮かべた。

「これで悔しさはないね」

「やね。このお返しを邪眼に叩き込んだる！」

「ふふっ、なら私も。次で……全て終わらせるために」

「……そうやな。次で全て終わるんや。全て……」

そう言って二人は悲しげな表情を浮かべる。邪眼を倒した後の事を考えたからだ。想いを寄せる相手がいなくなる。それを覚悟はしているが、それでも辛いものは辛い。特に翔一へ想いを告げていないはやてにとって、この時間は最後の機会とも言えるのだ。

フェイトはそれを理解しているからこそ、はやてへ告げる。後悔しないためにも伝える事はした方がいいと。それにはやては答えに窮したが、それでも考えておくとだけは返した。

少しの沈黙の後、二人が揃って意識を向けたのは親友とその恋人。今頃どんな気持ちでいるのだろう。そう思い、二人は願う。決してなのはとユーノが不幸にならないようにと。心から願うのだった……

「ユーノ君……」

ベッドに横たわるユーノ。その周囲にはいくつもの機械がある。なのははユーノの手を握り締め、悲痛な表情を浮かべていた。クロノはそんななのはを見て言葉がない。ここまでなのはが弱く見えたのは初めてだったのだ。

ジュエルシードの時も闇の書の時も強くあったなのは。それが一人の男の状況でここまで弱々しくなるとは思えなかった。だが、それも無理はないとも思う。相手は結婚さえ誓った存在。更になのはが魔法と出会うキッカケになった運命の相手と言ってもいい。

（いつの間にか、お前の存在はなのはの中で大きくなってたんだな。いや、当然か）

あの後、クロノは移動しながらなのはへ事実を伝えた。ユーノが強力な毒に犯された事。そのせいで少しずつ体が弱っている事。内臓等を腐敗させようとしているが、それをゆっくりに何とか食い止めている事。

それらを聞く度になのはの表情が暗くなるのを見ながら、クロノは全てを伝えたのだ。隠すよりも事実を教えておく方がいいと思ったからだ。なのはは芯は強い。それ故、自分で立ち直る事を期待したのだが……

「ね、見て。ユーノ君のくれた指輪、サイズ違うから緩いんだ。結婚指輪も同じ大きさで頼んだりしてないよね？　だったら、ちょっと嫌だな。指のサイズ教えるから、早く起きてよ。ねぇ……ユーノ……君……っ」

最初こそ儚げな笑みを浮かべていたなのは。だが、言っている内にそれも崩れていき最後には完全な泣き顔へと変わった。それを察し、クロノは静かに病室を出る。なのはの泣き声を聞かないようにと思っただけではない。ここからは二人きりにしようと思ったのだ。

明日、六課は邪眼との決戦を迎える。場所はベルカ自治区はジェイルラボ。クロノはそこへ参加しようかと思っていたが止める事にした。ユーノの仇は取った。確かにまた現れるかもしれないが、それはもうユーノをこうした怪人ではない。それにクラウディアクルーにいつまでも負担を掛け続ける訳にもいかないのだ。

（僕の次の戦いは局員としてのものだ。個人の感情はもう片付けた。なのは、君を支えるのは僕の役目じゃない。それは、あいつに任せる）

そう考え、クロノは念話を送る。その相手はそれに分かったと一言だけ返した。クロノはそれに小さく笑うとクラウディアに戻るために歩き出す。そこへモニターが出現し、一人の局員が現れた。それはクロノがあの時床の穴の解析を頼んだ者。

彼はクロノへある事を告げる。それを聞いてクロノは目を見開いて問い返した。本当かと。それに相手は力強く頷いて、何とか間に合わせてみせると返した。その内容を噛み締め、クロノは一度だけ病室へ振り返った。

「お前の葬式なんかしたくないからな、ユーノ。もう少し頑張れよ」

そう笑みと共に呟いてクロノは去った。その頃、病室では……

【なのは、泣かないで】

【ユーノ君っ?!】

突然の念話に驚くなのは。ユーノは未だに目を閉じたままだ。だが、意識はしっかりしていると理解して、なのはは先程とは違う涙が流れるのを感じた。

【念話ならまだ出来るんだよ。それもいつまでか怪しいけどね】

【驚かせないでよ。心臓止まっちゃうかと思った……】

【ごめん。それと指輪はどう?】

ユーノの言葉になのはは泣き笑いを見せて答えた。デザインは好みだけどもサイズが違って緩い。それを聞いた瞬間、ユーノはやや呆気に取られ、勘で頼んだのがいけなかったのかと反省。なのはへ

聞くと驚かす事が出来ないと思い、秘密裏に事を進めたらしい。
それを聞いたなのははは、苦笑しつつ注意した。驚かすなら別の方法にして欲しいと。それにユーノも了解と返事を返し、最後にこう告げた。

――体が治ったら、一緒に式場探しにでも行こう。

それになのははは驚く事もなく、ただ嬉しそうに返事を返した。そして、なのはもユーノへ最後に一言。

――絶対幸せにしてね？

それにユーノは返事をしなかった。だが、なのははそれに不満を感じない。何故なら、自分が握り締めていた手をユーノは弱くだが握り返してきたからだ。それが何よりの返事だと思い、なのはは笑顔を浮かべた。
そして、病室を後にする。向かうは自分の居るべき場所。そこで帰りを待っている仲間や親友達、それとヴィヴィオに会うために。

（ヴィヴィオへ話さないといけない事もあるし……今は少しでもみんなの顔が見たい）

迫る最後の戦い。それに備えるためにもと思い、なのはは一人転送ポート目指して廊下を走るのだった……

「いい演説だった」

「よせ。とてもではないがそう思えん」

地上本部のレジアスの執務室。そこにグレアムの姿があった。怪人が撤退したのを見て、レジアスはバトルジャケットのままで全管理世界に訴えた。今回地上本部を強襲した存在の正体を。そして、それと戦い続けていた者達を。そう、六課と仮面ライダーの事を。

その内容を疑う者はいなかった。実際目の当たりにした者達は元より、他の管理世界の者達には以前六課が提出した戦闘映像を見せる事で理解と納得を与えたのだから。そして、レジアスはそれを周囲が理解したのを見計らい告げた。

怪人のような主義主張に関係なく人々の暮らしを脅かす者が今後も現れる可能性がある。それに対抗するには魔法だけではいけない。全ての者達が戦う力を持てるようにするべきだ。そのためのバトルジャケットなのだと。訓練次第で誰でも装着出来、武器は基本己の体。魔力の有無に左右されない性能とどんな環境でも適応させる事が可能な汎用性。

これらは全ての者の笑顔を守るためにある。今すぐにとは言わないが、これを配備する事を許して欲しい。そう、誰かを倒す力ではなく誰かを守る力として。誰もが正義を、未来を、平和を守る事が出来る時代にするために。そう締め括ったレジアスの言葉に大きな拍手が起きたのは言うまでもない。

「さて、これで君は言った事に責任を取らねばならんな」

「……そうか。まだ全てを明かすには早いか」

「いや、もう明かす事は出来んよ」

「何？」

レジアスの自嘲気味な言葉にグレアムはそう同じような声で答えた。それに疑問を浮かべるレジアスへグレアムは語る。闇の書事件の際、自分が何を考えどうしようとしたかを。それを聞き、レジアスは言葉がない。

次元世界のために一人の少女を犠牲にするを是とした。それが持つ意味は重い。管理局員としては当然だ。だが、人として見た場合それが果たして正しいのか。多くを救うためなら少数は見捨てられてもいい。それを肯定する事になってしまうからだ。

命に貴賤はない。全て平等に守られ、扱われなければならない。それが理想なのだ。レジアスはそこでやっと以前グレアムが言った言葉の意味を理解した。仮面ライダーがグレアムにその選択をさせずに済ませたのだと。

犠牲にされるはずのはやてが生きている事や、グレアムが今も管理局員として戦っている事からもそれを察する事が出来た。そして、どうしてグレアムがもう明かす事が出来ないと言ったのかも。

「この汚れた手で贖い続けろと言うのか……？」

「そうだ。汚れたからこそもうそれを誰かにさせないために戦う。それが私達に出来る唯一の贖罪だ」

「……仮面ライダー達がそう言ったのか？」

「いや、これは私が勝手に思っている事だ。しかし、彼らに報いるにはそれしかないと思っている」

全てを秘めたまま、生きる。それは辛く厳しい道だ。いっそ明かしてしまえば楽になる。だが、それをしたところで自分が犯した罪の犠牲者は報われるのか。答えは否だ。自分の過ちをもう繰り返さ

せないために敢えて卑怯者のそしりを受ける。明かすのは死した後でいい。

例えそれで死後自分がどれだけ批判されようと、それで誰かの未来を、笑顔を守れるのなら。そこまで考えてレジアスは呟いた。

――戦い続ける事でしか、償えんのだな……

――何、始めてみれば辛くも何ともない。仮面ライダーがいなければそれさえ出来なかったと思えば、な。

――……違いない。

そう言って二人は笑い出した。共に人には言えぬ罪を犯そうとした。未然に防がれたとは言え、それは許される事はない。それを忘れず、自分と同じ事をせざるを得ない事態を無くすために戦う。ここにきて、それを共にする同志が出来た。そう思ったからだ。

そこへオーリスがカリムとシャッハを伴って現れる。これからレジアスが自分の知る全てを話す事にしていたからだ。三人は二人して笑い合うレジアスとグレアムに不思議そうな表情を見せた。

だが、その雰囲気から何かを悟ったのだろう。三人も柔らかな笑みを浮かべてソファへと近付いた。

「お話は終わったのですか？」

「ああ。さて、まずは予言について詫びなければならんか？」

「必要ありません。貴方は既に行動でそれを示してくれました」

レジアスの言葉をカリムはそう言って終わらせた。それには、周

囲も苦笑するしかない。

「中将、まずは何を？」

「オーリス、今は非公式な場だ。階級での呼び方は止めてくれ」

「くすっ……分かりました、父さん」

変わった。そうオーリスは感じた。だが、それが少しも嫌じゃない事に気付きつい笑みがこぼれたのだ。遠い記憶の彼方にあった父親の顔。それが今戻ってきたとオーリスは思った。

カリムとシャッハもレジアスの雰囲気の変化に気付き、軽い驚きと共に小さく笑顔を見せた。グレアムもそれを見て笑みを浮かべる。そこからは、どこか和やかな雰囲気のまま話が進んだ。レジアスが教えたのは最高評議会の事。それを平和的に何とかしなければならないと。

レジアス自身も今なら分かる。彼らも彼らなりに平和を守ろうとしているのだろうと。故に何とか手を取り合いたいと思ってはいた。しかし、それが厳しいだろうとも思っている。どこかで彼らは自分達が主導にならなければならないと考えているからだ。

そう言うとカリムとグレアムが同じ結論を告げた。彼らの存在を明らかにし、管理局の大掃除をすればいいと。そのためにはレジアスに矢面に立ってもらう必要がある。そう言われ、レジアスは迷いもなく頷いた。

「だが騎士カリム、これ幸いと教会の影響力を増そうとはしないでくれ」

「あら、それは考えませんでした。今は管理局員としてここにいま

すので」

「カリムもそこまで恥知らずではありませんよ、レジアス中将」

シャッハがやや苦笑しながらそう言うと、レジアスが若干憮然とした表情を返す。聖王教会で大きな発言力を持っているカリム相手だから、これぐらい確約させないといけないのだと、そう告げると周囲が苦笑した。

やはり変わっていないですねとカリムが言えば、こうでなくてはとグレアムが言う。気持ちは分かりますがと苦い表情でシャッハが言えば、少しは信用してみてはと苦笑しながらオーリスが続く。それにレジアスが余計憮然とするのを見て四人が笑った。それにレジアス自身も小さく笑う。

――――こんな風に笑えるのだな、この者達とも……

かつては毛嫌いするだけだった相手。それと今はぎこちなくではあるが友好的に話す事が出来る。ゆっくりとだが、変わっている事を実感しながらレジアスは思う。いつかは管理局内部だけではなく、教会とも心から手を取り合う日が来るようにと……

「無事で良かったわ」

「そりゃこっちの台詞だ。もうあまり無茶すんじゃねぇ」

クイントの笑顔にゲンヤは苦笑で応じる。それを見てゼストとメガーヌは笑みを見せる。今、ゼスト達は地上本部近くで話をしていた。怪人の脅威は去ったとはいえ、未だに警戒自体は解かれた訳で

はなかったからだ。
六課は翌日の戦いのために撤収したが、他の陸士隊はもう少しここで待機となっている。それについては誰も文句はなかった。レジアスによって語られた真実。それが六課への揶揄さえも吹き飛ばしたのだ。

「何よ、私だってまだまだ現役なんですからね」

「相手が化物だ。心配するのは当然だろ」

「まぁ、そうでしょうけど……」

「お前に先立たれるのは嫌なんだよ」

ゲンヤがそう言うとクイントが一瞬止まり、それから嬉しそうにゲンヤへ抱きついた。その様子を見てゼストとメガーヌは苦笑するしかない。他の者はいないとはいえ、やはり夫婦仲を見せ付けられるのは辛いものがある。
ゼストは未だ独り身でメガーヌは離婚している。共に理由は仕事の忙しさなのだが、決して独身を貫きたい訳ではない。故にそんな光景を見せられれば仲睦まじいと思う反面いつかは自分もと思う訳で……

（相変わらずだな、この夫婦は。妻、か。この事件が片付いたら、俺も少しは考えてみるか……）

（もう、クイントもゲンヤさんも仲が良いのはいいけど、こっちの身にもなって欲しいわ。やっぱり局員同士の方が上手くいくのかしら……？）

ふと視線を隣にいる者へ向けるメガーヌ。ゼストはナカジマ夫妻を見つめ柔らかい笑みを見せている。それにメガーヌは少し意外な印象を受ける。ゼストがそんな表情をするのは珍しい訳ではない。それでも、あまり見れるものでもなかった。

メガーヌがそう思って見つめ続けている事に気付き、ゼストが視線をそちらへ向ける。絡み合う視線。それに何故か気恥ずかしいものを感じてメガーヌは目を逸らした。

「どうした、メガーヌ？」

「い、いえ、何でもありません」

そんな二人を見つめる一対の視線がある。いつの間にかゲンヤから離れ、同僚と上司の事を眺めていたクイントのものだ。

「もしかしてメガーヌって……」

「おい、あまりいい趣味じゃねえぞ」

「いいじゃない。親友と上司の幸せを願っても」

「……だから、それがいい趣味じゃねえってんだよ」

お節介を焼きたいとの気持ちを全身から滲み出しているクイントを見て、ゲンヤは呆れたようにそう告げる。そして、同時に思うのだ。あれ程の事があったにも関らず、こうして他愛もない話が出来る幸せを。スバルを、ギンガを、そして自分達を守ってくれた立役者である仮面ライダーの事を思い、ゲンヤは小さく呟く。

――ありがとよ。お前さん達が俺の大切なもんを守ってくれた。

この礼は、いつか必ず返すぜ。

六課課員用宿舎。そこにある女性用大浴場。今、そこにはギンガを除くヴァルキリーズが勢揃いしていた。いよいよ明日に迫ったラボ奪回。それに向けて一度姉妹だけで話をしようと思ったのだ。

「遂にこの日が来たわね」

「ええ。明日、私達の家を取り戻す」

ウーノの声にドゥーエが頷いて返す。取り戻すとの言葉に万感の想いを込めて。それに全員が力強く頷いた。

「撃破した怪人達は、上手くすれば明日はいないかもしれんが油断は禁物だ」

「残った邪眼は六体。ライダー達が最低一体ずつは引き受けてくれる」

「で、もう一体は本体だから、あたし達が相手にするのは残りの一体」

トーレの希望的予測に誰もが逆に気を引き締める。そう、最初はいなくても長引けば途中から現れる可能性もあるのだから。チンクはそれを踏まえ、一番の難関である相手の話を切り出す。

それを受ける形でセインが噛み締めるように告げる。そう、邪眼を一体自分達で引き受ける事。それを既に彼らははやて達に告げていたのだ。自分達を家から追い出した邪眼。それを自分達の手で倒

す。その希望を聞いたはやては躊躇いもなく許可を出してくれたのだから。

「邪眼の強さはもう嫌という程理解した。だが、私達姉妹が力を合わせれば……」

「勝てない相手じゃない。絶対に」

「ああ。明日、あの目玉野郎に見せてやろうぜ。アタシ達の強さを！」

セッテの静かな意気込みを感じ取り、オットーがそれに続く。無敵ではない。それを知っているからこそ、二人に不安はない。自分達姉妹が全員で手を取り合えばなのは達隊長陣でさえ打ち負かせたのだ。邪眼の一体など、それに比べれば恐れるに足らない。

ノーヴェはそんな周囲の気持ちを代弁するかのように握り拳を見せて言い切った。その言葉に全員が力強く頷いた。

「でも、用心はしておくべきだね。相手は、ライダーみたいな姿にもなれるらしいし」

「そうッスね。聞いた話じゃ動きもかなり速くなるらしいッスから」

ディエチの言葉に呼応してウェンディが告げた言葉。それは今回の提案を許可した時、はやてが教えてくれた事。闇の書事件の際、邪眼が取った姿。それがライダーに近い姿だった事を聞いて、その特徴などから邪眼も変身するかもしれないと考えたのだ。

二人の言葉に誰もが改めて明日の戦いの厳しさを思い出す。しかし、それを聞いても不安よりも希望が強い。そう、何故ならば……

「大丈夫です。姿を真似ただけでライダーになれる訳ではありません。仮面ライダーとは、お兄様達のような心を持つからこその仮面ライダーなのですから」

ディードの言葉に込められた想いを誰もが抱いているからだ。仮面ライダーを名乗れるのは、彼らのような気高い魂を持つ者達だけだと。姿をどれだけ似せようと、闇では仮面ライダーにはなり得ないのだから。

そして、相手が仮面ライダーでないのなら負ける要素はない。そして、何よりもそんな事さえ関係なく不安を吹き飛ばす魔法があるのだ。そう、それは今ディードが見せている仕草。そして周囲も返しているそれ。

サムズアップ。それが勝利への合図。何があっても負けないと心強くする魔法の仕草。この後、彼女達は戦いを終えた後の事を話し合う。ジェイルの事だけが不安だが、それでもはやて達が罪の軽減に尽力してくれると聞いている今、強く心配する事ではない。

それよりもはっきりさせておきたい事があると、そうセインが言い出した時、誰もが何の事だろうと首を傾げた。そんな周囲へセインは真剣な表情で問いかけた。

――みんなは真司兄の事どう思ってるの？　あたしは大好き。

それがどういう意味でと尋ねる者はいなかった。チンクはそれに迷う事無く答えた。

――愛する男だ。以外に何がある。

それに続いたのは予想だにしなかった者だった。

――そうねぇ、シンちゃんには責任取ってもらわないといけないし。

――同感だ。私をこんな風にしたのだからな。

クアットロとトーレの言葉には、さすがに全員が驚きを見せた。だが、トーレがそれに照れているのに対し、クアットロが平然としていたのはらしいとしか言い様がなかった。それならばと口を開いたのは後発組だ。

――私は兄上以外に嫁ぎ先がありませんので。

――僕は兄様にもっと色々教えて欲しい。だから一生教わり続けます。

――オットーと共に居る事を許容出来るのはお兄様ぐらいですし、私はお兄様のお嫁さんになりたいですから。

真司に教育されていた三人の言葉。それに周囲は様々な反応を見せた。セッテの言い方に苦笑すれば、オットーの言葉には笑みを返す。ディードのオットーありきの発言には、らしいと苦笑いして納得した。

そして、そんな言葉を聞いた以上、自分も言わねばならないとばかりに残った者達も口を開いていく。

――アタシもにぃにぃがいいッスね。からかい甲斐があるし、楽しいッスから。

――あ、アタシは……兄貴ぐらいしか貰い手がねぇ……

――し、真司兄さんが迷惑じゃないのなら……あたしは……

あっけらかんと告げるウェンディとは対照的に、戸惑いや照れを表情に出すノーヴェとディエチ。だが、共通するのは三人も真司が好きだという事。正直に言えば、彼女達へ思いを寄せる男性は六課内にいない訳ではない。

ただ、戦闘機人である事を明かせば分からない。そんな不安がある。だが、それだけではない理由があるのも事実。そう、それはこの後の長女と次女の言葉にある。

――結局、姉妹揃って真司君の支えになりたいって事でしょ？

――私達へしてくれた事に恩返ししたいし、きっとこれから先の龍騎の戦いは辛いでしょうからね。

想いを告げずでも周囲には分かった。二人もまた同じ気持ちなのだと。ウーノの言った龍騎の戦い。それが邪眼との戦いではない事も全員が察している。真司が元の世界へ戻る日が来るとすれば、そこで待つのはライダーバトルだ。

それを真司は止めるために戦う。自分達はそれを支えたいのだ。仮面ライダーでなくても出来る事がある。そう知った以上、もう迷いはない。戦いを止めるために戦う龍騎を支える。それが今の彼女達共通の願いなのだから。

邪眼を倒した後は龍騎を支える戦いが待つ。そう思うもそれはまだしばらく先の事だ。そう考えて彼女達は笑う。彼女達はあの予言を知らない。そして、五代達が一度消えた事を知らない。故に思いもしない。龍騎も同じように邪眼を倒すために呼ばれたなどとは。

この時誰も、思いはしなかったのだ……

ヴァルキリーズがそんな話をしている頃、ギンガを加えたスバル達は休憩室で談笑していた。もう暗い話題になりそうな物は片付け、今は明るい話題をしていた。そう、邪眼を倒した後の事だ。スバルはギンガに海鳴へ行き、ファリンとイレインに会おうと提案していたし、ティアナは上手くすれば六課の主要メンバー全員で出かける事も可能かもしれないと言い出していた。

エリオとキャロはティアナの話が実現出来るといいと思って、その際の行き先はスプールスでキャンプなどはどうかと提案。ギンガはそれもいいと笑顔で頷いていた。

「あー……夢は広がるねぇ」

「そうね。邪眼がいなくなれば仮面ライダーは戦う必要がなくなるし、少しは翔一さん達も休めるでしょ」

「ジェイルさんは難しいかもしれませんけど、僕らと一緒なら管理世界へは行けるかもしれませんし」

「そうしたら、みんなでお出かけできるね」

「かなりの大人数だけど、祝勝会みたいでいいかも」

笑顔で話し合う五人。明日はその夢を可能に出来るかもしれない日々を掴むための大事な決戦。そう思うも変な気負いはない。邪眼の圧迫感にも少しではあるが触れたエリオとキャロ。映像ではあるが隊舎前に現れた姿を見て、いざという時の心構えだけはしたスバルとティアナにギンガ。

明日自分達が相手にするのは、生き残った怪人達やトイにマリア

ージュ。しかも、怪人達はなのは達隊長陣も参加して相手をする事になっている。それ故に不安はない。シャマルにザフィーラまでも投入しての最終決戦。隊舎の守りはゼスト隊が念のために引き受けてくれるのだ。

「明日はビートチェイサー達も総動員だし、まさしく最後って感じだね」

「ライドロンは地下から突入出来るから奇襲も出来る」

「アギトのバイクは滑空出来るから、それで突入するつもりだって翔一さんは言ってました」

「アクロバッターは龍騎が乗って行くみたいです」

「ゴウラムはいざって言う時の空戦用だし……うん、穴はないわね」

話せば話す程不安がなくなっていく。そう思い五人は笑みを深めた。

「明日は全力を出し切ろう！」

「「「「勿論(はい)っ！」」」」

スバルの声に四人が答える。その手は五人共サムズアップを形作っていた。こうして彼らも明日への気持ちと戦いの後への期待を抱く。訪れるだろう別れを知らぬままに……

「これを持って行くといい」

ジェイルはそう言って一枚のベントカードを真司へ手渡した。それは間違いなく龍騎のマークのベントカード。そう、ファイナルベントだ。

「じぇ、ジェイルさん、これっ！」

「奥の手だ。何とかコピーする事に成功したんだよ。ただ、現状それ一回限りだろうがね」

そう言うとジェイルは苦笑してモニターを見せた。そこには、何も映さなくなった画面がある。真司はその意味が最初こそ理解出来なかったが、段々とその状態に至った理由を把握したのか、同じように苦笑した。

ジェイルはファイナルベントのコピーを成功させた代償に、デバイスルームの機器を駄目にしてしまったのだろうと。幸いにして、犠牲になったのはジェイルが個人で使わせてもらっていた分だけなので、現在行っているデバイスメンテナンスには影響はない。だが、これははやて達に怒られるだろうと思い、真司は苦笑いのままでジェイルへ告げた。

「ありがとうジェイルさん。でも、さすがにこれは……」

「いいさ。私がはやて君やシャーリィに怒られておくよ。それよりも……」

「ああ。これ、大切に使わせてもらう」

「邪眼は一番君のデータを有している。そこが逆に君の強みだ」

「分かってる。アギトのユニゾンにこの有り得ないもう一枚のファイナル。俺の切り札として取っておくよ」

そう言って真司とジェイルはどちらともなく手を差し出し、握手を交わす。互いの表情は凛々しい。視線だけで言葉を交わす二人。しばらくそうしていたが、真司はそのまま何も言わずにデバイスルームを後にした。

その背中を見送り、ジェイルは呟く。まだ最後の仕事が残っていると。そう、彼に残された最後の仕事。それは平行世界への行き来の確立。真司が邪眼を倒した際いなくなるとしても、その後を追えるために。そして、自分達を受け入れ温かく接してくれた六課のために。

それに、ジェイルにはある目的がある。それは光太郎の世界へ行き歴代ライダー達に会ってみたいという夢だ。戦闘機人の技術を広めるつもりはないが、改造人間の技術は詳しく知りたいと考えているのだ。

そう、人体を機械に合わせる事が難しい戦闘機人の技術と違い、改造人間はどんな人間にでも機械を適応させる事が出来る。それを医療関係に活かせないかと思っているからだ。命を弄ぶためにではなく、命を助けるためにと。

「私の贖罪は、まだこれからだ……」

無限の欲望と呼ばれた自分。その欲望を向ける先を全ての笑顔のためにしよう。それが今の自分の欲望だと。そう心から思いながら……

「えっ……アギトの力がＲＸの基？」

「凄まじき戦士がＢＬＡＣＫの原型……」

「ああ、そうだと思う。リボルケインはベルトから出現する。アギトの武器と同じ原理だ。それに、太陽の光を受けて変化を起こしたしね。ＢＬＡＣＫは体の色やその存在が世紀王と呼ばれていた事からも、凄まじき戦士に近い物がある」

光太郎の話を聞き、五代と翔一は少し考えて頷いた。そして、同時に思うのだ。何故ＲＸが恐ろしい力を持っているのか。その理由がクウガとアギトの力をあわせ持ったからと言われれば、不思議と納得出来たからだ。

二人の仮面ライダーの能力を合わせ、更にそこへゴルゴムの技術が融合した結果だとなれば、それは当然と言える。光と闇を象徴する二人のライダー。その力を両方融合した存在がＲＸならば、仮面ライダーとして最強と言えるかもしれない。

「……光の力って、邪眼はアギトの力をそう言ったんですよね？」

「そうです。俺もそう言われました」

「それがどうかしたのか、五代さん」

「以前、無人世界で邪眼と戦った時、クウガのベルトを見て光の力がどうのって言ってたんです」

五代はそう言って自分の仮説を告げた。どうしてクウガが仮面ライダーの姿になったのか。それはアギトの力をベルトに込めてある

からではないかと。アギトの力がアマダムに作用し、クウガの姿を決定したのではないか。そう五代は思った。

それを聞いて光太郎も翔一も言葉が無かった。確かにクウガの姿が仮面ライダー然としていた理由に納得が出来てしまったのだ。アギトは神がおそらく与えた力。その姿が仮面ライダーらしくあった。いや、もしかすると仮面ライダーは、ショッカーを初めとする悪の組織の首領が神の力で変化するアギトを目指した物だったのでは。そう光太郎は考えた。

創世王も、もしかするとアギトの力を有していたかもしれない。光太郎はそう考え、一つの結論を告げた。

――五代さんの地球にも俺達の地球にもアギトの力は存在していた。ただ、五代さんの世界ではそれを何らかの方法でベルトに集中したんじゃないかな。

それに五代は驚きを見せて考え込んだ。元の世界に帰った時、色々と桜子に聞く事が出来たと思いながら。翔一はそれに頷きながらアギトの力がクウガにも影響していたのかと思い、少し嬉しそうにしていた。

歴代ライダーだけではなくクウガとも繋がりがあったのだろうかと思い、自分が思っていたよりも仮面ライダーと繋がっていたと考えたからだ。アギトこそ仮面ライダーの原型かもしれない。そんな事さえ考えながら、翔一はふと思った事があった。

――どうして邪眼はアギトの力を知っていたんですかね？

その言葉に二人もはっとなった。邪眼が光の力と呼んでいたアギトの力。それを邪眼はどこで知ったのか。もしかしたら、過去の世

紀王だった邪眼を倒したのは、アギトの力を持った相手だったのでは。そう五代が告げると光太郎が勢い良く立ち上がった。

――俺が倒した創世王は過去の世紀王だ！　だとすれば、邪眼を倒したのは創世王のはず……

――なら、その創世王はアギトみたいな力を持ってたのかもしれないですね。

光太郎の言葉に翔一が告げた言葉。それに五代も頷いた。ＲＸへの変化が偶然ではなく元から期待されていたのではと、そう言って光太郎に問いかけたのだ。

「……いや、偶然のはずだ。俺が宇宙空間に放り出されたからこそ、ＲＸは生まれたんだ」

「それが早めただけだったってのはないですか？　本当は時間をかけてＲＸに変化したとか」

「それに、光太郎さんももう一人の世紀王を倒したんですよね。じゃ、創世王っていうのがＲＸの状態を意味したとしたら？」

翔一と五代の言葉に光太郎は返す言葉がなかった。確かに、そう言われればそうかもしれないと思ってしまったのもある。ＲＸが突然変異ではなく、本来キングストーンがもたらすはずの変化だった。

だとすれば、何故世紀王が五万年に一度の皆既月食に生まれる者から選ばれるのか。それはアギトの力を狙ってのものだとすれば、ＲＸの変化は創世王を意味する事になる。ここにきて自分の変化の謎に理屈がついた気がして、光太郎は複雑な気持ちになった。

自分が出会った未来の仮面ライダーと異世界の仮面ライダー。それと出会った事がここまで自分に大きく関るとは思わなかったのだ。それは五代と翔一も同じ。まさか自分達の力が合わさった存在がいるなどと思わなかったのだから。

その話はそこで終わった。三人は明日の戦いで全てを終わらせる事を改めて確認し、残された能力を全て出し切ると決めた。光太郎はバイオライダー、翔一はシャイニングフォーム、五代はアメイジングマイティだ。

邪眼との決戦のために残した力。それを明日の奪回戦で使う。そんな風に思って三人は会話も終わりとばかりに立ち上がった。しかし、その瞬間空間モニターが出現した。そこに映るのは、何とジェイルの姿をした邪眼だった……

管理世界全てに出現した空間モニター。それを六課が、ゼスト達が、レジアス達が、全ての者達が見ていた。そこから邪眼が語るのは、仮面ライダーへの宣戦布告。そして、世界征服のための前準備だった。

「この放送を聞いている人間共に告ぐ。我が名は創世王。この世界を統べる者だ」

その発言に動揺が走る。何を馬鹿なと言う者達は呆れているし、ジェイルの顔を知っているだろう者達は怒りに震えている。それらの反応を見ているのか、邪眼は楽しそうに顔を歪めて続けた。

「今、我の手元には聖王と呼ばれた者のコピーがいる。そして、我にはゆりかごという物もある。どんな物か分からぬ者のために簡単

に教えてやろう。古代ベルカの戦乱を止めるキッカケとなった物だそうだ。これでどれ程の物か分かるだろう」

その発言に誰もが言葉を失った。更に邪眼は続けた。明日、そのゆりかごの力を以ってミッドチルダを攻撃する。そして、その後は管理世界毎に付けられた順番で侵略を開始すると。だが、もし自分へ忠誠を誓い平伏すのなら助けない訳ではない。

それどころか管理局亡き後の邪眼の世界支配において、重要な地位にするとまで言った。邪眼はそれだけではなく、これまでの怪人達の姿を見せて恐怖心を煽った。トイのＡＭＦやマリアージュの特徴なども教える事で、仮面ライダーの力を良く知らぬ者達へ絶望を与えていく。

「さて、ここからは仮面ライダーとその仲間達、貴様らへの忠告だ」

その言葉に六課とその関係者全員が表情を引き締める。そして、ジェイルは気付いた。ここからは他の管理世界には映らず、ミッドだけの放送になっていたのだ。その理由は、仮面ライダーを良く知る者達に聞かせるためだろうと結論付け、ジェイルは密かに怒る。

どこまでも人を見下す邪眼へ。そして、それをただ黙って見ている事しか出来ない自分にも。

「遊戯はもう終わった。次は今までのようにいくとは思わん事だ。最早あの役立たず共は使わん。代わりに聖王とやらのコピーを差し向けてやる。仮面ライダーや貴様らはそれを相手に戦えるかな？もし、大人しくキングストーンを引き渡して軍門に下るのならば、忠誠と引き換えに命だけは助けてやる」

そう言った瞬間、邪眼は邪悪な笑い声と共に姿を変えた。しかし、それはおぞましい完全体でもなければ究極体でもない。それは、一

つ目の銀色をした仮面ライダーだった。そう、仮面ライダーだったのだ。それに誰もが息を呑む中、それを見た光太郎は思わず叫んだ。

――あれはシャドームーンと同じだっ！

邪眼の体は銀色の甲冑のように変化していた。だが、腹部には緑の石ではなく紅い石が見える。そこまで確認し、光太郎はあの青年の言葉を思い出した。影の月が踏み躙られる。それはこれを意味していたのだと。

恐怖の対象として、何より邪眼の姿として使われる事になったかつての親友の姿。それを光太郎は怒りに震えながら睨みつけた。最後には人の心を取り戻して眠ったシャドームーン。その姿をこうして利用する事に激しい怒りを覚えたのだ。

映像はそこで切れた。隊舎内に沈黙が訪れる。直後、再び主だった者達の前に空間モニターが出現しはやてが告げた。会議室に集合するようにと……

かくして終幕の鐘は鳴らされた。管理世界へ恐怖と絶望を以って圧力を掛けた邪眼。

仮面ライダーを知らぬ者達に、その闇は強烈に作用する。

ゆりかごの起動迫る中、六課は最後の戦いへの結束を固めるべく集う。

全ては、みんなの笑顔のために……

――

――

穏やかに迫る最終決戦。最後にお目見えはやっとのシャドームーン体。

紅い石は何なのか。それは今後で明らかに。オリジナル設定だらけで申し訳ありませんが、もう少しお付き合いください

会議室に集まったはやて達。その表情は当然ながら暗い。最後に見た邪眼の姿。それに関して誰もが聞きたい事があったのだ。そう、光太郎が叫んだシャドームーンとの名。それを五代と翔一から聞いたために。

しかし、光太郎はどこかそれを話す事を躊躇っているようにも見えたので、誰もがその気持ちが整理されるのを待っていた。すると、そこへ慌てたようにある人物が現れた。

「ごめん！　今戻ったよ！」

それはなのは。当然全員の視線が彼女へ注がれ、それになのはは少し恥ずかしそうに頬を掻いた後、感謝を告げて頭を下げた。自分の感情を優先してくれた周囲へだ。それに誰も文句を言う事は無かった。確かに組織に属する者としては軽率な判断かもしれないが、六課はどこかそういった雰囲気ではない。それに誰もがなのはの気持ちを汲み取っていたのだ。

愛する者が死んでしまうかもしれない。そうなれば会いに行かせてやりたいのが人というものだ。それになのはは必ず戻ってくると信じていたのもある。そしてなのはが現れた事による周囲の騒ぎも落ち着いたのを見計らって、光太郎が口を開いた。

「……全員揃ったし、あの銀色のライダーのような存在について話そうか」

その言葉に誰もが頷いて光太郎を見つめた。それを受け、光太郎は頷き返して語り始めた。それは、自分の過去を話す事にも繋がる

話。五代やフェイトさえ知らない光太郎の隠していたい過去の一頁。
故に光太郎は前置きにこう告げた。この話を聞いて自分に何を思ってくれても構わない。それだけの内容だから、と。その言葉に全員は何も言わずに視線だけで了承を返す。それに光太郎は話を始める。かつてのゴルゴムとの戦いの一部。激しさを増した頃の記憶を。

「あれは、シャドームーンと言う俺と戦った世紀王を模しているんだ。邪眼は一度俺と戦った時、その姿を見ている。おそらくそれをイメージして体を変化させたんだろう」

それが皮切り。光太郎はシャドームーンの事を簡単に話した。そう、自分の幼馴染であり親友であった秋月信彦。それがゴルゴムによって改造された姿とも。脳改造までされたため、その記憶こそ持っているが完全に世紀王となってしまい、戻す事が出来なかった事。
そこまで話した時点で誰もが言葉を失っていた。光太郎の過酷な宿命の一端。それに触れただけではない。まさか光太郎がそこまで話すとは思わなかったからだ。別に話さなくても構わない部分であるはずの情報。そう誰もが思った。だが、それを光太郎は無視してこう続けた。

「だが、シャドームーンは俺がＲＸになってクライシスと戦っている最中、突然復活して姿を見せた。その記憶のほとんどを失いながらも、世紀王としての執念だけで打倒ＲＸを唱えて」

それに誰もが違う意味で言葉を失う。一度倒されたはずのシャドームーンが蘇った事もそうだが、記憶を失いながらも宿命の相手だけは忘れなていなかった事に。それだけＲＸとシャドームーンが因縁の関係なのだと誰もが理解した。
光太郎はＲＸとして戦ったシャドームーンとの最後の戦いの結末を語った。それこそが彼が一番言いたい事だったのだ。勝負に負け

たシャドームーンは、自分にクライシスの企みを阻止する事を託して、自身は傷ついた体を押して人質になった子供達を助け出して眠りについたと。

「俺はあの時、シャドームーンは信彦に戻ったと思ってる。だからこそ、邪眼のあの姿は許す訳にはいかない！」

「光太郎さん……」

フェイトは光太郎がどうしてここまで詳しくシャドームーンの事を話したのかを理解した。親友であった存在。それが最後の最後で人らしい心を取り戻してくれた。そう信じていたい。そのままで終わらせておきたかった相手であるシャドームーン。それを邪眼がよりにもよって模倣した。

綺麗な思い出を傷を付けられたように感じたのだろう。いや、安らかに眠った親友を踏み躙られたと考えたに違いない。そう考え、フェイトは光太郎へ視線を向ける。

今は光太郎はシャドームーンの能力を思い出せる限り語っている。その表情はもう戦士のものだ。周囲は光太郎の話に思う事があるだろうが、それを言う事はしない。同情も批難も出来るはずがないからだ。

仮面ライダーの敗北が意味する事。それを思えば光太郎の決断は当然だった。しかし、それを聞いて想像する者と実際行った者との間にある壁は厚い。誰もが自分ならば出来るだろうかと自問する。愛する家族や親友を敵として、その命を絶つしか平和を守る術がないと言われたらと。

「……これが俺が知るシャドームーンの能力だ」

光太郎がそう締め括ると、会議室に沈黙が訪れた。その重さに光太郎は内心で謝った。感傷に流され、聞かせてはいかない事さえ話してしまった。自分が親友を手にかけた事はいい。だが、それを他者が聞けばどう思うかなど分かっていたはずだった。

それでも、光太郎は言わずにはいられなかったのだ。自分の中で大きな傷であり大切な思い出である存在。それをあんな形で汚した邪眼への怒りが光太郎を動かしてしまったのだから。

気まずい沈黙の中、一番に口を開いたのは真司だった。

「俺も……最悪それをしなきゃいけないかもしれなかった。だから、邪眼のした事がどれだけ光太郎さんを傷付けたか分かる」

「真司君……」

「自分が悩み苦しんで、やっとの思いで倒して眠らせた相手を、よりにもよって利用されるなんて絶対許せる事じゃない。俺だって、もし同じ事されたら黙ってられないから」

ライダーバトルをやっていた真司。だからこそ、シャドームーンがナイトである蓮に重なって見えたのだ。自分と蓮だけが残ったとして、もうどちらかが倒れるしか戦いを止められないとなった時、自分がどうするかを考えて仮定すれば、この話は他人事ではなかった。

今の自分ならばそれでも諦めないだろう。しかし、五代達に出会う前の自分だったらそれを選んでしまったかもしれないと。故に真司は光太郎の心情を思いやって拳を握り締めた。その真司の言葉に今度は五代が続いた。

「俺は、単純に人の触れられたくない部分を平気で踏み躙るやり方

が許せない。しかも、不気味だった前と違って、今度は静かに眠った仮面ライダーの姿を真似するなんて余計に」

「五代さん……」

光太郎は五代の言葉に心が熱くなった。シャドームーンはゴルゴムの指揮を執った存在。それは悪だ。それでも、五代は仮面ライダーと呼んだのだ。それは脳改造された事を考慮した上で最後の行動から判断してだろうと察して、光太郎はその優しさに密かに視線で感謝の意を告げた。

翔一は五代の仮面ライダーとの言葉に頷き、光太郎へ視線を向けてこう言った。

「邪眼に教えてやりましょう！　シャドームーンの姿をしたって、お前じゃ本物には及ばないって」

「翔一君……ああ！」

翔一の言葉に光太郎は握り拳を見せる事で応じる。静かに会議室の空気が変わる。悲しみや戸惑いに満ちていたそれは、今は闘志に満ちていた。それを感じてか、なのは達の表情にも明るさが戻る。

そして、はやての口から明日の決戦についての最終通告がされた。邪眼はライダーが一体ずつ相手にし、もう一体がギンガを除いたヴァルキリーズが相手にする。怪人を邪眼はもう使わないと言ったが、撤退した怪人達は健在している事もあり信じる訳にはいかない。そちらはスターズ&ライトニングで相手をする事になった。トイやマリアージュはガジェットと共にはやて達が相手をし、本体は総力戦を以って打ち倒す。

「ええかみんな。明日の戦いは単なる奪回戦やない。真司さん達の

家を、わたし達の世界の平和を、みんなの笑顔を取り戻す戦いや」

「そうだね。だからこそ、絶対負ける訳にはいかない！」

「みんなで力を合わせよう！　そして、必ず誰も欠ける事無く邪眼に勝とう！」

はやての言葉にフェイトが続く。その言葉は全員の気持ちを代弁した。なのははそんな言葉を受けて周囲へ告げる。それは願い。それは誓い。そしてその手にはいつもの仕草がある。そのサムズアップに誰もが力強く応じる。込めた想いはただ一つ。この戦いを最後にしてみせるとの決意だ。

こうして最後の打ち合わせを兼ねた話し合いは終わりを迎えた。そして、最後の夜が訪れる……

「ママ、お帰りなさい」

「ただいま、ヴィヴィオ」

廊下で一度再会したものの、会議室内の話し合いに参加するために挨拶が出来なかったため、改めて挨拶を交わすなのはとヴィヴィオ。表情は共に笑顔だ。なのははヴィヴィオの体を優しく抱き締め、無事を心から喜んだ。

フェイトやはやてから怪人にさらわれそうだったと聞いた時は、ユーノの元に行った事を少し悔やんだぐらいだった。だが、リインやヴァイスの支えとイクスヴェリアの存在がヴィヴィオを守ったと知り、先程三人へ礼を述べてきたのだから。

今、二人はなのはの部屋に戻り、話をするべく向き合っていた。
なのはの言っていた大事な話をするために。

「あのね、ヴィヴィオ。お出かけする前にママが言ってた事覚えてる？」

「うん、覚えてるよ。帰ってきたら大事なお話があるって」

それになのはは嬉しそうに笑みを浮かべて頷いた。ヴィヴィオの頭を静かに撫で、その目を見つめて告げる。本当に自分の子供にならないかと。ヴィヴィオはその言葉に驚くもすぐに嬉しそうに頷いた。それを見てなのはは、どこかでヴィヴィオは本当の両親とは会えないと察しているのかもしれないと思った。

だからこそ、なのはは意を決して告げた。ヴィヴィオの生まれについてを。隠している事は出来る。それでもいつそれを知るか分からないのなら、自分の口から教えてやりたいと思ったのだ。

「いい？　よく聞いてねヴィヴィオ。ヴィヴィオは聖王って言う人の……コピーなの」

「え？　コピー？」

「そう。だからこれから先、生まれの事で苦しむ事があるかもしれない。でもそれに負けないで欲しいんだ」

なのはは思いの丈を込めて告げる。かつて親友であるフェイトが直面した事実。自身が誰かのコピーである事。それを告げるのはかなり苦しい。だが、だからこそ自分が言わねばならない。親になると決めた以上、これはその資格を得るための最低条件だと言い聞か

せて。
　ヴィヴィオが不安にならないよう、細心の注意を払ってなのはは告げていく。そして、最後にはこう言うのを忘れない。それは、フェイトを立ち上がらせる力となった言葉。嘘偽りないなのはの気持ち。
――でもね、何があってもママはこう言うよ。ヴィヴィオはヴィヴィオだからって。誰かのコピーなんかじゃないって。
　その言葉に自分の生まれ方などに困惑していたヴィヴィオがなのはを見た。その視線は縋るようにも見えた。だからだろう、なのはは優しく微笑むとヴィヴィオの体を静かに抱き寄せた。その温もりを感じ、ヴィヴィオは嬉しくなったのか顔を擦り付けるようになのはへ抱きついた。
　なのははそれに笑みを返す。そしてそのままヴィヴィオへこう告げる。それは、自分の事。そうユーノとの婚約の事だ。期せずして父親まで出来るかもしれないと思い、ヴィヴィオは笑顔になる。
「じゃ、ヴィヴィオにパパが出来るの？」
「そうだよ。今度お休みになったら、一緒に会いに行こうね」
「うんっ！」
　ユーノが危ない事は伝えない。それは信じているからだ。ユーノが死なずにいると。女の勘もある。だが、サムズアップをしたユーノがその約束を破るはずがないとクロノも信じるように、なのはもそう思っていたのだ。
　それ故にヴィヴィオへは言わない。今は少しでも笑顔を曇らせたくないから。万が一など考えない。最悪の結果などない。そう自分

に言い聞かせるようになのははは笑う。邪眼を倒して、次の大きな戦いは結婚に向けてのものだと。そう心から信じて……

ベッドに腰掛けたまま無言で見つめ合う光太郎とエリオ。明日に迫った決戦。エリオはどうしても言っておかねばならない事があった。

「光太郎さん、お願いがあります」

「何だい？」

「この戦いが終わったら、光太郎さんはまた旅に出るんですよね？平和を守るための旅に」

エリオの言葉に光太郎は無言で頷く。それにエリオは表情を微かに悲しみに変えるも、それでもすぐにそれを消して真剣な眼差しで告げた。

――だから、約束して欲しいんです。また僕やキャロに、フェイトさんに会いに来てくれるって。

それに光太郎は即答が出来なかった。ここへ来れた理由を考えれば、もうこの世界へ来る事は出来ないだろうと思ったのだ。しかし、エリオの眼差しが光太郎へ問いかける。どうして返事をしてくれないのかと。エリオもそれを絶対に叶えて欲しいとまで言わない。それでも、光太郎の気持ちが聞きたかったのだ。

自分達との別れを良しとせず、いつか再会を果たしたいと考えてくれるように。そんなエリオの考えを感じ取ったのか、光太郎は一

度息を吐くと笑顔で答えた。

――約束するよ。必ずまた君達に会いに来る。いつになるか分からないけど、絶対に……

その言葉にエリオが一瞬驚きを浮かべて、瞳を潤ませて頷いた。自分が言って欲しかった言葉。それを光太郎が言ってくれた事に感極まったのだ。そんなエリオの頭に光太郎は優しく手を置いて笑う。

男の子がこんな事で泣いちゃ駄目だ。そんな風に言って。それにエリオが泣いてませんと笑顔で返し、その手の温もりを忘れまいと思う。そんな風に二人が兄弟のように過ごしている頃、フェイトはキャロと寄り添うように話していた。

「明日で全てが終わるんですね」

「そうだね。邪眼を倒してもう怪人も生まれなくなるから」

笑顔のキャロにフェイトも笑みを返す。だが、その雰囲気がどこか暗い事にキャロは気付いた。何か悲しい事を堪えている。そう、それは以前海鳴への出張任務で見せた顔にそっくりだったのだ。

光太郎と別行動になった事を悲しんだフェイト。それと同じ表情を今のフェイトもしていた。キャロはそれからある事に思い当たる。それは、この戦いが終われば仮面ライダー達は必要なくなる事。つまり、光太郎はすぐにでも旅立ってしまうかもしれないという事に。

（そっか。だからフェイトさんは悲しそうなんだ……）

本当の理由を知らないキャロだったが、悲しみの大本は察する事が出来た。故にフェイトの手を掴み、ある仕草を伴って力強く告げる。

「大丈夫です！」

「え……？」

「光太郎さん達は勝手にいなくなったりしないですから。絶対、私達に一言ぐらい言ってくれるはずです」

「キャロ……」

自分の悲しみを感じ取ったのだろうと思い、フェイトは嬉しくなって微笑みを浮かべる。その言葉がどこか自分の考えている別れに一筋の希望を与えてくれたように思え、キャロの髪を優しく手櫛で梳いた。

それをくすぐったく思いながらも、キャロは嬉しそうに笑う。親子のように見えるのだろうか、それとも姉妹のように見えるのだろうか。そんな事を考えフェイトは小さく笑みを見せる。どちらでも間違っていないと答えが浮かんだからだ。時に親子で時に姉妹。そんな関係が自分達を言い表しているのだと。

「実は、今日スバルさん達とお話してたんです。この戦いが終わった後、みんなでキャンプとかに行きたいねって」

「それはいいね。みんなで、か……」

「はい。光太郎さん達だけじゃなくて、ジェイルさん達も一緒に」

キャロの言葉にフェイトは一瞬だけ驚きを見せるが、すぐに微笑みを浮かべて頷いた。ジェイルの事をもうフェイトはそこまで思う事はなくなっていた。少なくても以前のように恨んでいたりはしな

い。特にシャーリィから聞いている事が大きい。
ジェイルの仕事振りや性格などを一番身近で見聞きしているシャーリィ。その報告はフェイトの信頼出来る情報だ。ただ、ある時を境にそこに個人的な感想が混じる割合が増えたように感じてはいたが。

そんな事を思い出しながら、フェイトはふと考える。ジェイルがいなければ、もしかすると自分は生まれていなかったかもしれないと。皮肉な話だが、ジェイルの基礎研究があったからこそ自分は生まれ、そして怪人や邪眼が生まれてしまった。
やはり悪いのはジェイルだけではなく、その技術を使う者にもあるのだ。命を気軽に扱ってはいけない。そう結論付け、フェイトは内心で呟く。

――私も戦い続けよう。忌まわしき技術で生まれたからこそ、もう二度とそんな技術を使わせないために……

月明かりの下、翔一は隊舎前に呼び出されていた。相手は言うまでもなくはやてだ。大事な話があると言われ、翔一は何だろうと思いながらやってきた。だが、その手には夜は冷えるからと用意してきたホットココアがある。
翔一ははやてへそれを渡した。その温かさに少しだけはやてが微笑むと翔一も嬉しそうに笑みを返し、その隣へ自然に立った。そこが翔一の自然な立ち位置となったのはいつだろう。そんな事を思いはやては時間の流れを感じていた。

「な、翔にぃ」

「何？」

「もう、出会ってから十年以上経つんやね」

「そうだね。でも、俺は途中抜けてるから実質は半分ぐらいだけど」

気にするでもなく明るく翔一はそう言ってホットココアを口にした。その熱さに少し顔をしかめるが、即座にはやてに熱いから飲む時は気をつけてと言うのを忘れない。そんな翔一にはやては相変わらずだと思い笑みを零す。

だが、その表情が少しだけ緊張する。それを出来るだけ気取られないように、はやては翔一から若干顔を背けた。そしてそのままこう切り出した。本題を話すと。それに翔一が不思議そうな表情をはやてへ向けた。

「それはいいんだけど、一体どんな話？　邪眼関係じゃないんだよね？」

「そや。これはわたしの個人的な話やから」

はやてのその言葉に翔一が益々分からないという顔をする。それに顔を背けているはやてが気付くはずもない。だが、意を決して振り向き翔一へはやては告げた。

――わたしな、翔一さんが好きや。

その言葉に翔一は息を呑んだ。はやての自分への呼び方に気付いたからだ。それは、家族と言われる前の呼び方。つまり他人としての捉え方。しかし、翔一はその意味を理解した。はやてが自分を家族としてではなく他人として好きと言った。

その好きがどういうものかはさすがの翔一でも分かった。だから、翔一は戸惑いながらも真剣に考える。自分はおそらく邪眼を倒せば元の世界に戻る事になる可能性が高い。なら、安易に答えてはいけないと思ったのだ。

（はやてちゃんの気持ちは真剣だ。俺はそれにきちんと向き合わないと……）

いなくなるだろう自分へ想いを伝えてきた。その気持ちを理解しようとし、翔一は考える。自分ははやての事を妹みたいな存在と捉えていた。ずっと女性として意識もせずに。はやてと再会した後もそれは変わらなかった。歳の差とかではなく、呼び方が兄としての物だったからだろう。

翔一ははやてを一度として異性として見る事は無かったのだ。故に戸惑う。それを正直に伝えるべきかを。はやての心に少なからず傷を作るのではないかとの思いが翔一の中に起きる。それでも、嘘を言う事も出来ない。そこまで考え、翔一は実に単純な結論に達した。

「はやてちゃん、ありがとう。俺、凄く嬉しいよ。こうやって女の人に面と向かって好きなんて言われたの、初めてだからさ」

「翔一さん……」

「でも、俺は今まではやてちゃんの事を妹みたいにしか見てなかった。だからさ、急にそういう風に見る事が出来ないんだよ」

「そう……やろな」

はやてはどこかで予想していた。翔一は素直だ。きっと自分が兄

扱いした時から、本当に兄として考え動いていてくれたのだと。だからそこまで衝撃はない。だが、俯いて落胆した。好きな相手に恋愛対象として見れないと言われたのだ。当然と言えるだろう。

しかし、そんなはやてに翔一はゆっくりと近付いてその肩に手を置いた。それにはやてが顔を上げる。翔一はいつもの優しい笑みを浮かべていた。

「でも、今からはやてちゃんの事を女の子としてちゃんと意識するよ。それで……答えはもう少し先でもいいかな？」

「えっ……それって……」

「うん。俺、絶対答え出して伝えるからさ。必ず、はやてちゃんに言いにくるから」

それが再会の約束だと理解した瞬間、はやては溢れる涙もそのままに笑顔で翔一に頷いてみせた。翔一はそれに笑顔を返し、その流れる涙を拭き取ろうとポケットを探る。しかし、中々出てこないのか不思議そうにポケットを探り続けた。

それを見てはやてがいつもの翔一だと内心笑うも表情はやや拗ねたように、こういう時ぐらいしっかり男らしくカッコつけて欲しいと文句を言った。それに翔一が申し訳なさそうな顔でやっと取り出したハンカチを差し出した。

――――もう！　相変わらずやな、翔一さんは。

――――ごめん。次から気をつけるから。

差し出されたハンカチを受け取りながら、はやてがそう言うと翔一は申し訳なさそうに手を合わせて謝る。それにはやては呆れたよ

うでどこか楽しそうな笑みを浮かべた。その様子を離れた場所で隠れるように見ていた者がいた。

「……翔一さんとはやてさん、お似合いだな」

ティアナは眼前の光景を見て、誰にでもなくそう呟いて寂しそうに笑った。宿舎を出て軽く気分転換に散歩しようと思った矢先、前の方を歩く翔一を見かけたので声を掛けようとしたのだが、その先にはやてが見えたため、悪いと思いつつも物陰に隠れたのだ。そして、一部始終を見てしまった。ただ、距離が開いているために会話までは聞こえなかったのだが。

しかし、様子だけを見れば二人が仲を深めたようにしか見えないため、ティアナは二人が想いを通じ合わせたように捉えた。それに悔しいが彼女から見ても二人は似合いだと思ったのだ。

（失恋……したのかなぁ、アタシ。悲しくない訳じゃないけど、何故か涙も出てこないわ……どうして？）

自分の状況を不思議そうに分析するティアナ。その理由になりそうな事を考えていくが、どれも該当しそうにない。だが、この場から離れてその足を宿舎へ戻ろうと動かした瞬間、ふっと理由に気付いた。

「そっか……アタシ、まだ振られてないからだ」

告白していない。つまり、自分の気持ちを伝えてそれを拒否されていないからダメージが少ないのだと、そうティアナは考えた。そう考えると、このままでいいのかと自分の心が訴える。こんな中途半端な気持ちで最後の戦いに向かえば、どうなるか分からないぞ。

そう強く叫ぶ自分がいる。
だが、同時に言いに行って拒絶されても同じ事だと叫ぶ自分もいる。その声を聞いて、ティアナは視線をもう一度翔一達へ向けた。そこには楽しそうにホットココアを片手に話す翔一とはやての姿がある。それを見てチクリと胸が痛んだ気がした。

（そうよ。後で後悔してもいい。今のアタシが出した答えが今のアタシの正解なんだ！）

それは翔一が自分へ教えてくれた言葉。故にティアナは決意を固めて二人のいる場所へ歩き出す。

「ん？」

「あれ？　ティアナちゃん……」

自分達へ近付いてくる足音に気付いて視線を動かす二人。それにティアナは立ち止まる。早鐘のように響く心音を振り切るように一度首を振り、翔一へ視線を合わせてこう言った。

――あの、翔一さん！　アタシ、翔一さんの事好きですっ！

顔を真っ赤にして叫ぶように告げるティアナ。それに翔一は驚き、はやてはどこかで納得したかのように苦笑していた。ティアナはそんなはやての反応を見てやや苛立ったような表情を見せた。
はやてに子供扱いされたと感じたのだろう。しかし、ティアナがその気持ちをはやてへぶつける前に翔一が立ち直った。そしてティアナへ戸惑うように話し出す。それは先程のはやてと似たような言葉。ティアナの事もティーダの世話を受ける時から妹分と思っていたとのものだ。それにティアナは分かってましたと返し、そこで深

呼吸。

「だったら、今から女として見て下さい。アタシ、頑張って良い女になりますから」

「ティアナちゃん……」

「それに、アタシもって言った事から考えて、はやてさんも同じような扱いだったって事ですよね？　なら、アタシ負けませんから」

「お、ええ度胸やな。よっしゃ、受けて立つわ」

「はやてちゃん？」

互いに視線を交差させ笑みを見せる二人。それを見て翔一は困惑するしかない。だが、その雰囲気がギスギスしたものというよりは、好敵手とでも表現する方がしっくりくるものに感じられたため、翔一も強く止める事はしなかった。

ただ、喧嘩はしないでとは告げた。それが少しもこの状況が自分絡みと思っていないような声だったので、二人は揃って翔一らしいと感じながらも表情だけは怒り気味にこう返した。それはどう聞いても理不尽なものだったのだが……

「誰のせいでこうなった思っとる！」

「翔一さんがいけないんですよ！」

「えっと……ごめん」

しかし、翔一が本当に申し訳なさそうに返した声に二人は完全に

脱力。だが、それもまた翔一らしいと思ったのかどちらともなく笑い出した。それを聞いて翔一は疑問符を浮かべるのだが、二人は楽しそうに笑ってるので良しとしたのだろう。いつもの優しい笑顔で二人を見つめた。

この後、翔一がティアナへ寒いだろうからと、自分の飲みかけのホットココアを渡そうとして二人に注意を受ける事となる。女の子として見るのなら、そういう事に気を配って欲しいと。それに翔一が難しいなぁと呟くのを聞いて、二人は密かに笑みを浮かべあうのだった……

「明日はここには襲撃はないと思うが、一応気をつけてくれ」

「はい。アインさんがいるので大丈夫ですし、ゼスト隊の方々も来て下さるので安心です」

宿舎内にあるはやて達八神家の部屋。そこでイクスヴェリアはシグナムの言葉に笑顔でそう返した。今、ここにははやてを除く八神家が全員勢揃いしている。まぁ、ザフィーラは狼状態ではあるが。

「そうだ。それに万が一怪人の生き残りなどが来ても、イクスとヴィヴィオは私が守り切るから心配するな」

「お姉ちゃん、頼もしいです」

「でも、無理は程々にね」

ツヴァイの言葉に頷きながらもシャマルが軽い注意をする。ゆりかごを起動出来る手段を得た邪眼。それがもうヴィヴィオやイクス

ヴェリアへ執着する事はないと思ってはいる。だが、念には念をとの言葉がある。そのため、シャマル以外にも同じ気持ちでリインへ声を掛ける者がいた。

「シャマルの言う通りだ。今日の事を忘れるな」

「それはそうだが……」

「これぐらいにしよーぜ。あたしらは邪眼共を倒して、アインはゼスト隊と一緒にイクス達と六課を守る。それだけでいいじゃねぇか」

ヴィータの、これ以上は変な雰囲気になりそうだと思って告げた言葉に誰もが理解を示し苦笑した。単純明快だからこそ、それが一番言い得ている。そこからはある事について話し合う。それは、今ここにいないはやての事だ。

翔一を呼び出している事は全員が知っている。上手くいって欲しいと思ってはいるが、それが色々な意味で厳しい事はヴォルケンリッターの五人は良く知っていたからだ。ツヴァイとイクスヴェリアは翔一の事をまだ五人程知らない。

一番の敵は翔一の天然さだとシグナムが言えば、それにシャマルとリインが同意する。ヴィータははやてが本当に妹としか見られていないのではないかと不安を口にし、ザフィーラがその可能性を肯定した。

しかし、ツヴァイがそんな五人へ不思議そうにこう呟いた。翔一には元居た世界に恋人はいないのだろうかと。それにイクスヴェリアを除く全員が固まった。考えた事も無かったのだ。いや、どこかで考えないようにしていたのだろう。

イクスヴェリアは急に押し黙った五人を見て、クスクスと笑い出

した。それに周囲が疑問符を浮かべると、イクスヴェリアはこう告げた。それならば翔一自身が言うだろうから心配いらないだろうと。それに、こんな事を当事者でない自分達が言っていても仕方ないとも。

その正論に誰もが恥ずかしそうな表情を見せる。ツヴァイはイクスヴェリアと共に微笑み合っている。それを見てリインが二人へ告げた。明日に備えて早く寝た方がいいと。それに二人は頷き返し、洗面所へと向かう。

「……すっかりお姉さんが板についたわね」

「ああ。見事なものだ」

「これぐらい誰にでも出来るようになる。まぁ、確かに多少の慣れはあるだろうがな」

シャマルとシグナムの言葉にリインはそう笑みと共に返す。ヴィータはザフィーラと一緒になってそんな光景に平和を見て、小さく笑うのだった……

静かな室内。明かりを落として真っ暗な中、ただ呼吸音だけが聞こえる。しかし、それは寝息ではない。

「……ギン姉、まだ起きてる？」

「……どうしたの？」

そこはスバルとティアナの部屋。珍しくスバルがギンガへ甘えた

のだ。今夜は一緒に寝て欲しいと。それにギンガは快く了承し、現状へと至る。二人はスバルが寝ている二段ベッドの上で揃って横になっていた。

その手は繋がれている。スバルがそうして欲しいと言い出したからなのだが、ギンガはそこからスバルが不安になっていると感じていた。理由は自分の事ではなく明日六課を守る母親の事だと踏んでいた。

「明日、母さんはここを守ってくれるんだよね」

「そうよ。通信でも凄い意気込んでたじゃない。六課の心配はせずに、邪眼を思いきり叩きのめして来なさいって」

最終決戦のため、寝る前にクイントはゲンヤと共に通信を入れてきたのだ。それは想像も出来ない厳しい戦場へ行く娘達を励ますために。そして少しでもその緊張を和らげるためにだと、スバルもギンガも悟った。だから二人も笑顔で、絶対に無事に勝って帰ると言い切ったのだから。

「でも、残った怪人が全部ここへ来たら……」

スバルはずっとそれだけが頭に渦巻いていた。今日の戦いで残った怪人は少ない。だが、その能力はどれも厄介だったのだ。自分達へ向かってくるのならまだマシだ。何せ何度も怪人戦は経験しているし、なのは達隊長陣も共に戦える状態なら負けはないと思えるのだ。

しかし、隊舎を守るゼスト隊はそうはいかない。リインが残っているとはいえ、それだけだ。怪人が三体もいれば制圧されかねない程度の戦力でしかない。スバルはそれ故に不安だった。光太郎が言うには、怪人達も邪眼に忠誠を誓っているようだから隊舎を襲撃す

るよりもその護衛に回るはずと判断された。それでも、スバルは不安が消えないのだ。

それを感じ取ったギンガは小さくため息を吐くと、その体を軽く抱きしめて告げた。

「スバルは嫌なのね。自分が母さん達を危険に晒すかもしれない事が」

「……そう、なんだと思う」

「私だって同じ気持ちよ。でも、だからって母さん達に加勢する訳にはいかない。邪眼を倒さない限り、この戦いは終わらないんだから」

「ギン姉……」

「母さん達を助けるには、私達が少しでも早く邪眼を倒す事……違う？」

ギンガの問いかけにスバルは肯定するために静かに首を振る。その目がもう不安を振り払ったと告げていた。それにギンガは嬉しそうに頷き返す。スバルが感謝を告げるので、それに苦笑するギンガ。そして互いに小さくおやすみと告げ合い、目を閉じる。

だが、その手が離れる事はない。まるでそれが姉妹の絆を意味しているように……

「え？　それ、どういう事だよ」

「だから、この戦いが終わったら、お前はシグナムさんの手助けをして欲しいんだよ」

真司の言葉にアギトは言葉がない。ロードと決めた真司からの最後の頼みと言う切り出し方で始まった内容は、要約すればそういう事だった。邪眼を倒した後は、自分ではなくシグナムをロードとして生きてくれ。それを理解し、アギトは複雑な気持ちを真司へぶつけた。

何故なのかと。真司の世界の事を少しでも聞いたアギトとしては、当然この戦いが終わった後はそれの手助けをするつもりだったのだから。しかし、真司はそのアギトの気持ちは嬉しいと言った上でこう告げた。

――俺の世界の戦いは、俺の世界の人の手で終わらせなきゃ駄目なんだ。

それに込められた覚悟が分からぬアギトではない。それは仮面ライダーとしての言葉。その名が人を影ながら守り続けてきた存在だったと知ったからこその宣言だと。だからアギトは何も言えなくなる。真司は優しくお調子者だ。だが、その心が一度決まったらもう動かない事も知っている。

故に気付いたのだ。もう自分では真司の心を動かす事が出来ないと。ロードとして認めた真司。だからこそ、その気持ちを尊重したい。アギトはそう決意し、流れる涙を拭い告げる。

「……分かった。でも、まだアタシのロードは真司だかんな！」

「ああ、分かってるって。明日は頼りにさせてもらうからな！」

「おう、任せろ！」

笑顔を向け合う二人。烈火の炎が結んだ絆。それを明日は遺憾なく発揮する。そう誓い合い、アギトは真司へ尋ねる。ユニゾンはいつ使うのかと。それに真司は邪眼次第だが、下手をすると最初からそこまでしないといけない可能性もあると答えた。

それにアギトは神妙な表情で頷いた。シャドームーンと同じ姿になったのが本体だとすると、残りも同じような姿をとる可能性があるからだ。となれば今までとは違った動きや力を発揮する。それは完全に出たとこ勝負になる要素が大きい。

しかも、邪眼が一番データを得ているのは龍騎。だからこそ、一番邪眼が倒し易いと考えるのは龍騎だと予想出来るのだから。アギトはそう結論付け、真司へ尋ねる今まで以上に手強くなるだろう相手への手立てはあるのかと。

それに真司はしっかり頷き、自分を信じて欲しいと笑顔で告げた。その頼もしさにアギトも笑みを返す。そしてアギトは明日に備えてもう寝ると真司へ告げ、トーレ達の部屋に戻って行った。それを見送り、真司は思う。

（もしかしたら、邪眼の奴は……）

頭に浮かぶある予想。それが何故かずっと頭を離れないのだ。自分のデータが一番邪眼に収集されている事から想像した推測。もしそれが合っているとしたら、邪眼が何故ライダーのデータを得ようとしていたのかが納得出来るのだから。

だが、どこかでその予想が外れて欲しいとは思っている。それが当たれば、自分が一番恐れている状況になるからだ。だが、それでも戦う事を止めたりはしない。そう真司は自分へ言い聞かせるように呟く。

――明日で全部終わらせてやる……

「榎田さん、ねぇ」

「はい。きっとジェイルさんと話が合うと思いますよ」

消灯時間も迫り出した頃の休憩室。そこで五代とジェイルが話していた。ジェイルは色々と思う事があって寝れなかったため、少し気分展開に飲み物でもとここへ来たのだが、そこに五代がいたのだ。聞けば五代も同じようなものだったらしく、ジェイルの話を聞いて、そうなりますよねと嬉しそうに笑ったのだから。

「私としてはむしろクウガやゴウラムを生み出した古代の方に興味があるね。えっと、さく……？」

「桜子さんです。沢渡桜子。俺の大っ……切な、仲間の一人です！」

ジェイルはそんな五代の言葉に苦笑。今、ジェイルは平行世界への手がかりにでもなればと思い、五代の世界の話を聞いていた。未確認の事ではなくクウガやゴウラムなどの事を中心に。そこで五代が嬉しそうに話したのがクウガの戦いを支えた者達との話だ。

ジェイルはその話を聞いて、五代が以前も六課のような存在と共に戦っていた事を知り納得していた。何故五代がここまで六課の中心にいるのか。知らず誰もが五代を支えようとしていたのかもしれない。そう結論付けたのだ。

「そうか。で、その桜子さんならある程度はクウガの事を知っているんだね？」

「はい。もしかすると今は碑文の解読も終わってるかもしれないし、もっと色々分かってるかもしれないです」

「ふむ……例えば？」

「そうですねぇ……実はゴウラムが、みんなに聞こえるように話す事が出来るとか」

「アクロバッターじゃないんだよ？　まぁ、確かにそうなっても不思議はないから笑えないんだが」

五代の言葉にジェイルは苦笑気味に言葉を返す。バトルジャケットやＡＭＦＣにかかりきりで調べる事は叶わなかったが、ライダー達のマシンもジェイルからすれば調べてみたかったのだ。

だが、その時間が確保出来るはずもなく、精々がシャーリィがビートチェイサーを改造する際に得たデータぐらいだった。まぁ、それでもかなり興味深い物ではあったのだが、それをジェイルが五代に話したために余計榎田と話が合うと思われたのだから。

そんな和やかな話をしていたのだが、ふと話が切れるタイミングというのは必ずやってくる。そこでジェイルは五代に聞いてみたい事があった事を思い出し、尋ねる事にした。

――君は、元居た世界とこの世界とが行き来出来る手段があるとしたらどうする？

それに五代は軽い驚きを見せる。だが、すぐに真剣な表情で考え

込み始めた。ジェイルはその間、何も言わずにそれを見つめた。五代はジェイルの告げた言葉の意味を噛み締めるように考えていた。もしそれが本当にあるのなら純粋に嬉しい。だがとも思う。

それが制御出来るものではなく、自分のように突発的にしか出来ないものだとすれば問題だ。それに仮に制御出来るとしても、それがいつ問題を起こすか分からない。五代は様々な可能性を考えて自分の答えを出して頷いた。

「答えは出たみたいだね」

「はい。俺は……簡単にそれを使って欲しくないですね」

「簡単に？　どういう意味か、もし良ければ理由を聞かせて欲しい」

「……俺、こう考えたんです。確かになのはちゃん達をおやっさん達に会わせてあげたいし、榎田さんとジェイルさんがみんなの笑顔に繋がるような物を作ってくれるとかありそうだと思ったんですよ。きっとすごい楽しくて嬉しい事が一杯ある。でも、それってホントにいい事だけなのかなって」

五代は自分がどうしてここへ来たのかを思い出して語った。神のような存在が導いた。だとすれば、それは本当ならあってはいけない出来事ではないのかと。交わるはずのない者達が出会う事は、本来ならば有り得ない事。つまり奇跡。それを人為的に成し遂げようとすれば、どんな恐ろしい事が起きるか分からない。そう告げて、五代はこう締め括る。

――でも、安全に出来ないとかなんて思わないし、ジェイルさん達ならそれをやってくれる気がします。だから、俺、信じて待ってます！

――真司も大概だが、君もかなりだね。分かった。君が心配する事が起きないレベルになるまで使わないと約束するよ。

五代の笑顔でのサムズアップを見て、ジェイルは少し呆れながらも嬉しそうにそう返した。その手はサムズアップを形作っている。五代はそれに頷くようにサムズアップを少しだけ前に押し出した。ジェイルもそれに苦笑して頷く。

そして互いに立ち上がり部屋へ戻るために動き出す。歩きながら軽く明日の事を話す二人。ジェイルが勝利を願っておくと告げると、五代は嬉しそうにありがとうございますと返す。

そんな風に夜は過ぎる。その翌朝、彼らを待っていたのはミッド上空を浮遊する巨大な存在を映し出すモニターだった……

広い空間。そこにただ一つ玉座のような物がある。そこに一人の女性が座っていた。ヴィヴィオと同じ髪の色。同じ瞳。だが、背丈が違う。成人女性と呼んでもおかしくない身長だったのだ。女性は自身の前に立つ存在へ楽しそうに告げる。

「パパ、いつでも攻撃開始出来るよ」

「そうか。ならば、いいと言うまで待機しろ。もうすぐここへ来るだろう客人に備えねばならんからな」

「うん」

笑みさえ浮かべて女性は頷く。それを聞きながら邪眼は通信を行

うためにモニターを出現させる。それはウーノのＩＳと同じ能力。モニターに映るは五つの存在。形だけならば仮面ライダーに見えるそれらは、全て邪眼の分身だ。しかも、内四体は一つ目ではなく両眼になっていた。

　当然究極体もそこには映っている。邪眼はそれを見て小さく頷くと告げる。仮面ライダーと全ての人間に絶望を与える時が来たと。それに五体が揃って頷き、こう返した。

――全ては創世王になるために……

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

次回から最終決戦。原作と同じく空と陸に分かれての戦いです。

もう数話でこの拙作も終わりますので、出来ればそれまでお付き合いください

邪眼の大反撃！　ライダーＶＳライダー！？

ベルカ自治区にあるジェイルラボ。そこを目指して走るのはライドロンとアクロバッターだ。ライドロンにはＲＸがディエチと共に、アクロバッターには龍騎がセインと共に乗っている。そしてそれを追走するように残るヴァルキリーズが走っていた。

ゆりかごへはクウガとアギトを伴ったなのは達が向かっている。スライダーモードのマシントルネイダーにアギトが乗り、ゴウラムを伴ってスバルとギンガが展開したウイングロードをクウガの乗るビートチェイサーが駆け上がっていた。

ラボの奪還とゆりかごの停止。陸と空に別れる形にはなったものの、最後にはゆりかごに合流する事になっている。邪眼の本体は必ずそこにいると考えられていたからだ。隊長陣のリミッターもクロノが解除する事で消えていて、文字通り全力での戦いとなろうとしていた。

だが、なのは達が接近した途端、ゆりかごとラボからトイ達が出現した。それを迎撃しながら進む六課だったが、そこへ思わぬ助けが現れた。それは、空戦魔導士達と修道騎士達だ。六課を援護するように、管理局は総力を挙げてゆりかごの周囲に展開するトイを迎撃し、聖王教会は騎士団を使ってジェイルラボへの道を切り開いていた。邪眼の告げた次元世界征服を阻止するためにだ。その裏には、ゆりかご起動を受けたレジアスとカリムの二人による共同宣言があった。

「「この次元世界に生きる全ての者の自由と平和のために、人として総力を挙げて戦おう」」

邪眼の恐怖に飲まれていた者達へ二人は告げた。人として気高く生きるか、邪眼の僕として屍のように生きるか。それを選んで欲しいと。無理強いはしない。ただ、戦うのは何も武器を手に取るだけではない。自分達の勝利を願い、祈るだけでも立派な戦いなのだからと。

更にそこへ、グレアムが本局を代表して地上本部との共同戦線を張ると告げると大きな驚きが局員達に走った。邪眼に対抗するには管轄などを超越し、全ての局員が力を合わせて立ち向かわねばならないと。そしてこう締め括ったのだ。

――自分達が何故局員になろうと思ったのか。何を守りたいと願い、誰を助けたいと考えたかを思い出して欲しい。

それによって動いた多くの者が道を切り開く中、六課の者達はそれぞれの戦場へと向かったのだ。自分達を支えてくれる者達の思い。それを背中に受けながら……

「ここが……」

「うん、あたし達の家だよ」

ライドロンを入口前に止め、RXはその中を見つめた。ディエチは色々と思う事があるのか、やや強張った表情を浮かべている。あの日、邪眼に乗っ取られた思い出の詰まった家。そこを遂に取り戻す日が来たのだと、そう強く思ったからだ。

その隣ではアクロバッターを止め、龍騎がセインと共に同じ気持ちを抱いていた。やはり思い出すのはあの脱出戦。逃げ出す事しか出来なかったあの日。それから半年近くが経過しようとしていた。

だが、もう今の自分達はあの時とは違う。そう思い、二人は静かに拳を握る。

「いよいよだね」

「ああ。今日、俺達はここを取り戻す」

ラボ付近に展開しているトイやマリアージュは、シャッハを始めとする修道騎士達が相手をしてくれている。それでも苦戦を強いられているのは間違いない。そのため、ＲＸはライドロンとアクロバッターをそちらの援護へ回す事にしていた。

既にシャッハへは念話にて教えてある。後は自分達の足で歩くだけだ。そんな事をＲＸが考えていると、そこに残るヴァリキリーズが集合した。更にアギトも龍騎の肩へ乗り、ラボ奪回の戦力は揃った。

「みんな、これを最後の戦いにしよう。決して気を抜かないでくれ」

「絶対にみんな揃って邪眼を倒して、それで終わりにするんだからな」

二人のライダーがそう言うと全員が無言で力強く頷く。それにＲＸと龍騎も頷き返し、ラボの中へと足を踏み入れる。それと同時にライドロンとアクロバッターがそこから離れ、シャッハ達が戦っている場所へ向かって走り出す。

その音を聞きながら、ＲＸ達は急ぐ。邪眼がここに何体いるかは分からない。しかし、最低でも一体はいると考えられていた。もし一体だった場合はヴァルキリーズにその相手を任せ、ＲＸと龍騎はゆりかごへ向かう事にしていた。

ＲＸと龍騎を先頭に走るヴァルキリーズ。アギトは龍騎の横を飛んでいる。やがてその足が広い空間に出たところで止まった。そこは、かつて食堂だった場所。一家団欒の象徴であり、幾多の思い出渦巻く懐かしい空間。だが、そこにはテーブルも椅子も無かった。

完全な大広間。そんな印象しか与えない場所へと変貌していたのだ。ＲＸとアギトはその変化を知らない。だが、龍騎達は皆揃ってその変化に気付き、悲しみと怒りを抱いていた。その思いを込めた視線をそこにいる存在へ向けて。

「邪眼……」

「ふむ、龍騎がこちらに来るのは予想通りだったが世紀王もこちらとはな。まぁいい。ここで二人揃って死ぬがいいわ」

究極体となった邪眼がそこにはいた。その言葉に構えるＲＸと龍騎。だが、そんな二人の前に出るようにヴァルキリーズが歩み出た。

「ＲＸ、ここは私達に任せてくれるかしら」

「他にも邪眼がいるかもしれないし、ラボを自爆させられたら大変でしょ」

「ここは私達が引き受けた。まずはラボの安全を取り返してくれ」

ウーノの言葉を引き継ぐようにドゥーエとトーレがそう告げる。それにＲＸは頷き、即座に走り出した。制御を取り返すには自身の力が一番だと理解したからだ。だが、龍騎はそこに残ったままだった。頭では分かっている。自分もＲＸと共に行くべきだと。しかし、邪眼の姿が今までと違う事などを考えると不安なのだ。

「シンちゃん、心配しないの。私達は大丈夫よ」

「姉妹全員揃っていれば何も恐れる物は無い」

「そういう事。だから行って。真司兄」

クアットロとチンクの言葉が龍騎を優しく促す。そしてとどめのセインからの言葉に龍騎は頷いて走り出す。その後を追うようにアギトも動くが、それを狙って邪眼が電撃を放った。しかし、それは無駄に終わる。ブーメランブレードがそれを受け止めたからだ。

「アギトにも、兄上にも手出しはさせん」

「お前が不意打ちをするなんて予想済みだ」

「そういうこった。それに、お前の相手はアタシらだ！」

セッテは静かに怒りを込めた声を邪眼へ放ち、オットーも珍しく声に怒りを乗せている。ノーヴェが拳を合わせるように構え、そう啖呵を切ると隣にいたディエチがイノーメスカノンを構えてそれに続いた。

「ここであたし達を倒さない限り、真司兄さん達を止める事は出来ないから！」

「ま、そんな事は絶対ないッスけどね！」

「私達の家を、思い出を……返してもらいます！」

ウェンディとディードがそう告げると、ヴァルキリーズは揃って

身構える。視線は鋭く邪眼を睨み、決して恐れているような風には見えない。それを見て邪眼は小馬鹿にするように笑うと、その手から電撃を薙ぎ払うように放った。

それをオットーが即座にレイストームで相殺したのを合図に、トーレ達前線組が動き出す。ウーノは念のために周囲を索敵し、怪人などの奇襲への警戒を強める。クアットロはＩＳを使って前線を援護しながら動き回り、ドゥーエはウーノへ放たれる電撃を警戒して護衛をしつつ、邪眼の隙を窺っていた。

チンクは中衛として援護や支援、或いは前線へと切り替える事で如何なく姉としての実力を発揮し、ディエチは的確な射撃を与える事で後衛としての役目を果たす。オットーは司令塔の役目を行いつつも、中衛として援護もこなす動きを見せ、ウェンディはＩＳを使っての撹乱と援護を集中的にこなしていた。

トーレはセッテと見事な連携を見せて邪眼と戦い、ノーヴェはディードと共にその間隙を縫うように動いている。セインは何とか邪眼の動きを止めようとＩＳでの妨害を試みるが、中々思ったように行かずに苦戦していた。

それぞれが自分の出来る事を精一杯する事で、かつてなのは達が苦戦した究極体を相手に善戦していた。勝てる。そんな気持ちが全員に強くなっていくのも当然と言える程に……

一方、ＲＸと龍騎はアギトを連れてジェイルの研究室へと向かっていた。そこでラボの制御を完全に邪眼から奪い返し、自爆などを出来ないようにするために。だが、研究室の前に思いもよらない存在が立っていた。

「あれはっ！？」

「黒い……龍騎？」

「嘘だろ……」

ＲＸがその姿に驚き、アギトはどこか信じられないとばかりに呟き。龍騎は呆然とその相手を見つめた。そこには、黒い龍騎が扉を塞ぐように立ちはだかっていた。それは、真司が夢で見たままの姿。真司がどこかで予想していたものだった。

リュウガと呼ばれる存在に酷似した相手。それは戸惑うＲＸ達へゆっくりと足を踏み出した。だがその気配に覚えがあったＲＸは視覚へ意識を集中させ、その正体を見抜いた。

「これは……邪眼っ！」

「ふん、そうだ。我だ」

黒い龍騎はＲＸへそう答えた。邪眼は手に入れた龍騎のデータを基に自分の体を改造した。そう、邪眼が考えた仮面ライダーへの絶望。それは、自分と同じ姿の相手と戦い敗北させる事だったのだ。

真司は自分がどこかで考えていた結果に嫌な汗を流すも、邪眼を見据えて拳を握る。その横で、アギトが眼前の相手に対して心から怒りを込めて叫ぶ。

「何だよ！　龍騎同士で戦うみたいじゃんかっ！」

「龍騎よ、今日ここで貴様を倒し、我が本物の龍騎となってくれるわ！」

そう言うと邪眼は一枚のベントカードを取り出した。それはソードベント。それを左腕のバイザーへ挿入すると同時に走り出す。龍騎も負けじとソードベントを手に取り、ドラグバイザーへ挿入する。
互いに剣を手に切り結ぶ龍騎と邪眼。その力関係はやや邪眼が押している。それを見て、ＲＸは加勢しようとするがその動きを龍騎が制した。

「ここは俺に任せて、先輩はラボの方をお願いします！」

「龍騎……分かった！」

龍騎から初めて呼ばれた先輩との言葉。それに感じ入るものを覚えながらもＲＸはジェイルの研究室へと向かっていく。龍騎は仮面ライダーとして自分の役目を自覚した。自分が邪眼を食い止め、ＲＸへラボの安全を確保してもらうと。
龍騎は去っていくＲＸを横目にしながら、邪眼との力比べを続けていた。しかし、それも次第に追い込まれていく。やがて龍騎が膝をつけて押し込まれる形にまでなってしまった。アギトはそれを見て魔法で援護しようとするのだが、何故か龍騎の雰囲気がそれをするなと告げているような気がして動けずいた。

（真司には何か考えがあるんだ。なら、アタシはそれを信じて待つだけだ！）

信頼するロード。その気持ちを汲み取り、アギトはただ待ち続ける。自分の力を必要とされる瞬間を。その時、龍騎は体勢を崩す覚悟で邪眼の手を目掛けて蹴りを放った。互いに体勢を崩す両者。だが、崩す気でいた龍騎は即座に立ち上がり一枚のベントカードを手にした。

”ストライクベント”

「はぁぁぁぁ……はっ！」

ドラゴンストライクを邪眼目掛けて放つ龍騎。それを邪眼は冷静に対処した。手にしたベントカードを使い、その攻撃を無力化出来る手段を講じたのだ。

”ガードベント”

邪眼の前に出現した二枚の盾がドラゴンストライクを防ぎ切る。それに龍騎は一瞬だけ悔しさを感じるも、すぐに立ち直って動き出す。手にしたドラグクローで邪眼へ殴りかかる龍騎。それを手にしたドラグシールドで受け、即座にドラグセイバーで反撃する邪眼。

それを見つめ、アギトはただ待った。龍騎がユニゾンを使うと決意する瞬間を。それまで自分は魔力を温存し、その時に備えるのだ。アギトはそう心に誓い、龍騎の戦いを見つめていた。

自分が使えるカードは邪眼も使える。だが、龍騎はそれならばとあるカードを手にした。それは、ファイナルベント。これならどうだとばかりに龍騎はそれを使い、構えを取った。邪眼はそれにうろたえる事も無く、一枚のベントカードを手にした。

そのカードを見て、龍騎とアギトの声が重なった。

「「なっ！？」」

それはまごう事無きファイナルベント。龍騎は邪眼が使っているのはジェイルが研究していたデータを使った物だと思っていた。故に最近やってのけたファイナルのコピーは出来ないだろうと踏んでいたのだ。

だが、そんな龍騎の考えを読んだのか、邪眼はどこか自慢そうにファイナルベントをかざして告げた。確かに自分の使っているベントカードの大本はジェイルのデータ。しかし、そのままではモンスターの力を持った状態にはならない。そのため、邪眼は密かに独自に研究を進めていたのだ。怪人作成のついでにドラグレッダーを模した生物を作り出し、それを自分の中へ取り込んだのだ。

「……結果、こうして貴様と同じような力を得た。何もない無のベントカードが今のこれに変わったところからして、吸収する事が契約のカードと同じ効果を発揮したのだろう」

「そんな都合のいい話があってたまるかっ！」

龍騎はそう叫ぶと大地を蹴った。それを見て邪眼も跳び上がる。同じ高さになり、両者は蹴りの体勢を取る。その背後には、赤い龍と黒い龍が控えていた。

「ライダァァァキック！！」

「ふんっ！！」

背に火球を受け、相手向かって突撃する龍騎と邪眼。その蹴りが激しくぶつかり合う。そして共に弾き飛ばされ、轟音を響かせるように地面へと叩きつけられる。アギトは急いで龍騎の元へ向かう。そこには、何とか立ち上がろうとする龍騎がいた。

その視線を前方へ向け、龍騎は一枚のカードを手にした。それはサバイブ。先程の激突で分かったのだ。攻撃力は完全に邪眼が上だと。それを証明するように邪眼は平然と立っているのだから。

「ふむ、まだ動けるか」

「当たり前だ！　そう簡単にやられてたまるかっ！」

龍騎はそう吼えるとカードをかざす。周囲を炎が包み、龍騎はドラグバイザーツバイへサバイブのカードを差し込んだ。

”サバイブ”

ややくぐもったような電子音声と共にその体が真紅へ変わる。それを見届け、邪眼も一枚のカードを取り出した。それは、烈火のカードではない。ましてや疾風でも無限でもない。だが、ある種のサバイブだった。書かれた文字は闇黒。邪眼が自分のために作り出した擬似サバイブとでもいうべきカードだ。

”ミューテーション”

「見るがいい。これが貴様を超える龍騎の姿だ」

邪眼の体を漆黒の闇が包み、その姿を変えていく。サバイブ龍騎を思わせる鎧だが、その先端は鋭く鋭角化していて禍々しい印象を与える。それだけではない。背中には不気味な翼のような物まで生えている。

その醜悪な姿に龍騎もアギトも言葉がない。そんな二人を見下すように邪眼は告げる。ここからが本番だと……

ジェイルの研究室でハイパーリンクを使って制御を取り戻したＲＸだったが、そこへモニターが表示される。そこに映っていたのはシャドームーンの姿をした邪眼だった。

『世紀王よ、今すぐゆりかごへ来い。来なければ、貴様の仲間の命がないぞ』

「何っ？！」

『我はもう使わんと言ったのだが、あの駒共の生き残りが勝手に動いている。他のライダー共は我の分身達と戦っているから手が出せんぞ』

邪眼はそう言うとモニターを切り替えた。分割表示されたそこには、どこかの通路で怪人達と戦うライトニングと八神家。更に別の場所で怪人と戦うスバルとティアナにギンガが映っていた。そして大広間のような場所で一人の女性と戦うなのはの姿もある。

「みんなっ！」

『貴様が早く来なければ残る分身も投入する事になる』

「くっ！」

邪眼の告げた残りの分身が意味する事を理解し、ＲＸは急いで研究室を出る。やや場所を移したのか、邪眼相手に苦戦する龍騎へ内心すまないと思いながらＲＸはラボを脱出するべく走る。

食堂で戦っていたはずのヴァルキリーズがいなくなっている事に疑問を抱きながらも、ＲＸはその無事を信じて走る。向かう先はゆりかご。そこへ向かう手段がＲＸには一つだけある。

外へ出たＲＸは空を見上げ叫んだ。

「ゴウラムっ！」

その声を受け、ゆりかごの外で局員達と共にトイと戦い続けていたゴウラムが動き出す。ＲＸの呼びかけに応じるように、その速度を活かして素早く大地へ向かって降下していくゴウラム。途中でトイを何機か蹴散らし、ＲＸが見える位置までその高度を下げた。

ＲＸはそれを確認し、大地を蹴った。その六十メートルもの跳躍力を発揮し、ゴウラムの背に見事着地してみせるＲＸ。そして、すぐにゴウラムはゆりかごへ向かって動き出す。

「頼むぞ、ゴウラム。俺をゆりかごへ連れて行ってくれ」

ＲＸはそう言ってゴウラムから視線をゆりかごへ向けた。そこで待ち受ける自分の相手。それが先程ラボで見た龍騎と同じ結果だとすれば、かなり厄介な相手だろうと思いながら……

ビートゴウラムとマシントルネイダーによる突撃でゆりかごに穴を開け、進入したクウガ達を待っていたのはマリアージュ数体と十数体のトイだった。それをクウガとアギトが愛機を使い蹴散らした。特にクウガはゴウラムを分離させてビートチェイサーの機動性を如何なく発揮。ジャックナイフなどに代表されるテクニックの数々でマリアージュとトイへダメージを与え、弱ったところをなのは達が撃破していった。

「じゃ、わたし達はアギトやライトニングと一緒に動力炉を目指すから。ギンガはなのは隊長達と一緒に」

「なら、ヴィータ副隊長ははやて部隊長達の援護に向かって。私達

はクウガと一緒に玉座へ向かうから」

はやて達へヴィータを同行させようとなのはが告げた言葉。それにヴィータは何か言おうとするも、その気持ちに感謝してはやて達と共に動力炉へ向かう。ゆりかごの構造自体はユーノが既に調べ上げていた事もあり、停止させるための方法は理解していた。

だが、当然それを阻止するために邪眼も対策を練っているはず。そのため、動力炉へ戦力を大目にする事にしたのだ。なのは達はヴィータの代わりにギンガがライトニングから参加し、四人で玉座を目指す事になった。

――――じゃ、後で。

隊長三人の言葉を合図に動き出す。クウガはゴウラムに、外で戦う局員達を助けてやって欲しいと告げてから動き出した。ユーノが調べておいてくれた見取り図を参考に、目的の場所まで行く両者。だが、その動きが偶然にも同時に止まった。

「黒い……クウガ？」

「待っていたぞ、キングストーンを持つ者よ」

クウガ達の前に立ちはだかったのは、漆黒のクウガ。その腹部には紅い石が輝いている。

「えっ？　黒いアギト？」

「光の力よ。今度こそその力を我の物に」

アギト達の前に現れたのは、漆黒のアギト。こちらにも腹部には

紅い石がある。

その姿に言葉を失うなのは達だったが、すぐに二人の仮面ライダーは同じ判断を下した。

――ここは俺に任せて、みんなは先へ！

それは眼前の相手は自分しか倒せないと思ったからだろう。そして、偽者とはいえ仮面ライダーと戦わせる事は出来ないと考えたからだろう。なのは達もその気持ちを察したのか、何も言わずに素早く先へ進んで行く。

それを見送りながら、クウガもアギトも邪眼がそちらへ手を出さないように牽制していた。そして完全に自分達だけになったのを見計らって、二人のライダーは同じ行動に出た。

「くっ！」

ビートチェイサーのエンジンを吹かし、邪眼へ突撃するクウガ。それを相手が受け止めようとするのを見て、即座に前輪を上げて攻撃する。それで邪眼がややふらついたのを見て、今度は後輪を跳ね上げるようにしながら攻撃を加える。

未確認との戦いでもよくやった攻撃方法だ。バイクを手足のように使い、敵と戦う。それも歴代ライダー達がやっていた事。クウガもまた知らずライダーらしく戦っていたのだ。しかし、邪眼もやられてばかりではない。何とか体勢を整え、ビートチェイサーの前輪を掴むと力任せに振り回した。

堪らずクウガはビートチェイサーから落とされ、地面に叩きつけられる。そこへ駄目押しとばかりに邪眼が電撃を放つ。それを際どくかわし、クウガは戦闘態勢を取った。そしてそのまま変身時と同

じ動きをして叫ぶ。

「超変身っ！」

紫の姿。タイタンフォームとなり、クウガはビートチェイサーからトライアクセラーを引き抜いた。それが瞬時にタイタンソードへ変化する。そしてそのまま邪眼へゆっくりと歩き出す。それを邪眼は慌てる事無く構え、迎え撃つ姿勢を取った。

それに嫌な予感を感じながらも、クウガは歩みを止めない。距離を徐々に詰めて行き、その間合いが自分のものになった瞬間、勢いよく手にした剣を突き出した。

「おりゃあっ！」

邪眼へ突き刺さるタイタンソード。だが、それを邪眼は静かに見つめ両手でしっかりと握り締めた。それを見て、クウガはある光景を思い出す。ゴ・ガドル・バとの初戦闘。相手は自分の攻撃を受けてその武器へと適した力を発揮したのだ。

クウガはそれと今の光景が似ていると感じ、タイタンソードを抜こうとした。しかし、邪眼はそれを抜かせまいとするようにしっかりと固定している。更に焦るクウガへ片手を瞬時に離してパンチを叩き込む。

「ぐぅ！」

思わずたたらを踏むクウガ。すると、邪眼は自分からタイタンソードを引き抜いて手にした。それが漆黒のタイタンソードへ変わり、同時に邪眼も黒い鎧姿へ変わる。

「っ！？　超変身した？！」

「貴様の力は既に調べた。不完全な物ではあるがキングストーンの原石を取り込んだ我には、これぐらい造作もない」

「キングストーンの原石？　取り込んだ？」

邪眼の告げた言葉にクウガは戸惑う。それに邪眼は答える事はなく、手にした剣をクウガへ振り下ろした。それを咄嗟に避けるも、クウガの鎧が綺麗に斬られる。その切れ味はクウガの物以上だ。それを悟り、クウガは急いで姿を変える。

青の体へ変わり、紫の欠点である動きの鈍さを突いて戦おうとするクウガ。しかし、それを見た邪眼は再びその姿を変える。鎧は消え、クウガと同じような体へ変わる。それは漆黒のドラゴンフォーム。それと共に手にしていたタイタンソードもドラゴンロッドへ変化した。

「そんな……」

「貴様の出来る事は我にも出来る。もう、貴様に勝ち目はない！」

言葉と同時に跳び上がる邪眼。それに負けじとクウガも跳び上がる。その跳躍力は邪眼の方が僅かに上。それにクウガが驚くのと邪眼がロッドを突き出すのは同時だった。

炸裂する邪眼の一撃。クウガはそれによって地面へと激しく叩きつけられる。それでも何とか立ち直り、構えるクウガ。この状況に否応無くガドルとの戦いが蘇ってくる。超変身を駆使してもその上を行かれた苦戦の記憶が。

「それでも……やるしかっ！」

あの時と同じように邪眼から距離を取り、クウガは構えた。その体が赤へ変わり、同時に電流が走る。赤の金の力。それを使って邪眼と戦おうと。邪眼はそれを見ても何も言わない。あの時のガドルと同じように悠然と立っていた。

それにクウガが嫌なものを感じるも、それでもと走り出す。右足に熱を感じながら、クウガは走る。走る。走る。その勢いを乗せたまま地を蹴り、一回転して蹴りの姿勢を取った。

「ライダー！　キックッ！」

その一撃が邪眼を直撃する。だが、邪眼は飛ばされる事は無かった。何歩か後ろへ下がっただけ。それで止まり、立ち直った。その胸には封印を意味する文字がしっかりと刻まれている。

「……やはり、その力は電気が原因か」

「っ！？」

自身を眺め、邪眼が告げた言葉にクウガは動揺した。邪眼が何故自分の一撃を受けたのか。その理由を理解したからだ。邪眼は金の力を正確に理解してはいなかった。だからこそ、自分にその力を使わせ把握しようとしたのだろうと。

動揺するクウガを見つめ、邪眼は自身へ電撃を浴びせた。それがしばらく全身を駆け巡った後、綺麗に消えた。すると、その体が変化する。金の力を使った時のように。それを見てクウガは息を呑んだ。金の力を使ったガドルはそれを格闘戦にしか使ってこなかった。しかし、邪眼は自分と同じ能力を有している。それは、これまで自分が使ってきたそれぞれの金の力を相手に使われる事を意味するからだ。

「さあ、我の一撃を受けてみるがいい」

邪眼が構えるのを見て、クウガも構える。目には目を、歯には歯をと。互いに走り出す両者。同時に跳び上がり、蹴りの体勢を取るクウガと邪眼。その繰り出す蹴りがぶつかり合う。そして……

「ふぬっ！」

それに競り勝ったのは邪眼だった。クウガは勢いを殺しきれずに床へ叩き付けられる。それでもクウガは何とか立ち上がろうとしていた。そんなクウガを邪眼は不敵に見つめるのだった……

クウガが邪眼と戦闘を開始した頃、アギトもマシントルネイダーを使い邪眼へ攻撃を始めていた。

「このっ！」

「ちっ！」

相手にはなく、自分にある力。それを使う事で邪眼へダメージをと思うアギト。だが、マシントルネイダーはビートチェイサーと違いあまりバイクアクションには向かない。そのため、出来るのは精々ぶつかるかすれ違い様に攻撃するぐらいしかないのだ。

「チョロチョロと目障りだ！」

邪眼が放った電撃をかわすアギトだが、このままではあまり相手

へ有効打を与えられないと思いマシントルネイダーから降りた。

「邪眼！　お前がアギトの姿を真似ても、アギトの光はお前に味方しないぞ！」

「ふん！　ほざいておれ。光の力などなくとも貴様の真似事ぐらいならば出来るわ！」

走り出す邪眼を前にアギトも動く。邪眼の蹴りを避け、反撃に拳を繰り出すアギト。それを邪眼は受け止め、お返しとばかりに拳を放つ。それをアギトも受け止めるのだが、その力比べは長くはもたなかった。

邪眼は元来怪力の持ち主だった。それが母体となっている偽アギトの力は本物よりも上。そう、改造人間だった邪眼。それを基にしている偽ライダー達はその性能において本物達よりも勝っていたのだ。

「むんっ！」

邪眼がアギトの拳を握り潰そうと力を込める。それに気付き、アギトは素早くその足で腕を蹴り上げた。その衝撃で邪眼から解放されると同時に、アギトは距離を取る。今のままでは純粋な力で負けると理解したからだ。

故にベルトの両側を叩く。それに応じてその体が変化した。赤い右腕と青い左腕の金の胸。三つの力を使いこなすトリニティーフォームだ。それを見ても邪眼はうろたえる事も無く走り出した。

アギトは自身のベルトから出現した二つの武器を手に邪眼へ向かっていく。フレイムセイバーとストームハルバートを振りかざし、邪眼へ攻撃するアギトだったが、その攻撃を受けても邪眼は止まら

ない。
　些細なダメージだとばかりに攻撃を受けながらアギトへ攻撃をし続けた。アギトもそんな邪眼に驚きを感じるも、諦めずにその二つの武器を同時に動かした。

「はっ！」

「ぬぅ！」

　ファイヤーストームアタックと呼ばれる攻撃。それが邪眼へ炸裂する。しかし、その一撃を受けて邪眼は微かに苦痛に動きを鈍くするも止まらない。それどころか強烈な威力を持った拳をアギトへ叩き込んだのだ。それにアギトは堪らず吹き飛ばされる。
　床を二転三転するアギト。それでも何とか立ち上がり、あの構えを取る。それはライダーキックの構え。それに呼応し、その角が展開した。足元に出現するアギトの紋章。それがその両足へと宿っていく。

「はっ！」

　その場から跳び上がり、アギトはその両足を邪眼目掛けて突き出すようにした。それはライダーシュートと呼ばれる攻撃。従来のライダーキックよりも強力な一撃だ。

「ライダーっ！　キィィィクッ！！」

　その蹴りを受け、邪眼は後ずさった。アギトは着地すると同時にある構えを取った。それはバーニングフォームへの変身ポーズ。悟ったのだ。邪眼が自分の一撃を耐え切ると。

「ふ、ふふふ……やはりそうだ。今の我ならば光の力にも負けはせぬ」

邪眼の言葉を聞きながら、アギトはその姿を変えた。燃え盛る炎の闘士、バーニングフォームだ。それを見ても邪眼は反応を示す事もなく構えた。それが蹴りの前段階のものと理解し、アギトは走り出した。その拳に込めた炎の力。それを叩きつけるために。

邪眼がその場から跳び上がり、迫るアギトへ蹴りを放つ。それを迎撃しようとアギトは拳を突き出した。だがその拳が当たる前に邪眼の蹴りがアギトを捉えて蹴り飛ばした。床を滑るように飛ばされるアギトだったが、何とか威力を殺す事が出来た。

バーニングフォームは全フォーム中一番防御力が高い。そのため、邪眼の攻撃にも耐え切る事が出来た。しかし、そのダメージを完全に殺す事は出来なかった。アギトは膝をついたまま、肩で息をしていたのだ。

「この力……どこから……」

「冥土の土産に教えてやろう。レリックと呼ばれるあの石。あれこそキングストーンの原石だ」

邪眼の口から語られた内容にアギトは愕然となった。邪眼はレリックを独自に調べ、それが人体に大きな影響を与える事を知った。それが暴走すると恐ろしい爆発を起こす事や、それを使う事で驚異的な成長を促す事が可能な事も。

邪眼はそこからレリックこそがキングストーンの原石だと認識した。そして、自分の体へ取り込み完全に融合する事で現在の力を手に入れたのだと、そう締め括った。

「あの器に一つ。我に五つ。それだけしかレリックは無かったのでな。仕方ないので、残った一体は以前貴様らと戦った姿にしたのよ」

「器……？　まさかっ！？」

「聖王と呼ばれた者のコピーだ。今頃は貴様の仲間と戦っているだろう」

邪眼の告げた内容に、アギトは玉座へ向かったなのは達の事を思い出した。ヴィヴィオと同じ存在。それを敵にして、果たして戦えるのだろうか。そんな事を思ったのだ。

「さて、お喋りはここまでだ。じっくりと貴様に絶望を与えてやるぞ、仮面ライダー！」

邪眼はその言葉と同時に、弱るアギトへ向けて両手から電撃を放つのだった……

「嘘やろっ！？」

”ライダーが危ないですっ！”

はやてとツヴァイは突然出現したモニターに映る映像に思わず叫んだ。自分が知る限り無敵のライダー達。それが軒並み苦戦しているのだ。クウガもアギトも龍騎も自身に似た姿の相手と戦い、揃って苦しめられているのだから。

二人だけではない。フェイト達ライトニングもシャマル達も信じられないとばかりの顔をした。今、はやて達は動力炉へ向かう通路

でノインとズィーベンにエルフを相手に戦っていた。三体だけとはいえ、やはりその特殊能力は厄介なものがあるために苦戦をしていた。

「金のクウガが……追い詰められてる」

「龍騎だってサバイブを使ってるのに……」

エリオとキャロは、邪眼相手に苦戦している二人のライダーの姿を見て困惑していた。二人にとってライダーは最強の存在。いかなる敵にも屈する事無く戦い、勝利を掴むヒーローなのだ。それがそれぞれの秘めた力を解放してるにも関らず、邪眼に苦戦している事が信じられないのだ。

「くそっ！　伊達にライダーの姿してねぇって事か！」

「そのようだ。奴め、このためにライダーのデータを欲しがったのだな」

ヴィータは吐き捨てるように告げ、迫ってきたノインの体当たりをかわす。シグナムは声こそ冷静だが、そこには悔しさのようなものが混じっていた。自分達が邪眼へデータを与えないようにすると誓ったはずだった。それでも、あの公開意見陳述会での戦いで四人のライダーは邪眼を相手にその手の内をかなり明かす事になってしまったのだ。

その遠因に、自分達が怪人との戦いを長引かせてしまった事が関係しているとシグナムは考えていた。それはヴィータも同じ。更に彼女は、クウガとはやてが来なければ危ないところまでなってしまったのだから、余計にその思いが強い。

「どこを見ている！」

「はやてっ！」

そんな中、アギトの苦戦に意識をやや取られたはやてへズィーベンが斬りかかる。しかし、それをフェイトがザンバーを以って防ぎに入った。はやてはそれに気付き、ズィーベンへ射撃魔法を放つ。ツヴァイがそれを制御し、ズィーベンはそれをブレードで迎撃しながら後退した。

フェイトは更にプラズマランサーを放ち、ズィーベンを牽制する。手にしたブレードでそれらを叩き落すズィーベンの姿を見ながら、フェイトははやてへ視線を向けずに告げた。

「はやて、今は怪人を倒す事に集中しよう」

「フェイトちゃん……」

「大丈夫。ライダーは……絶対負けない！」

そう力強く言い切ってフェイトはその姿を変えた。真ソニックフォームとなったフェイトは、その手にしたザンバーをフェイトは握り締めてズィーベンへ攻撃を開始する。

フェイトもライダー達の苦戦に心乱していた。だが、それでもあの無人世界での戦いを思い出して、何とか冷静になろうとしていたのだ。仮面ライダーは決して負けない。その思いを強くする事で彼女は戦い続ける事が出来ていた。

「はやてちゃん！　私達で怪人を倒したら、動力炉にはヴィータちゃんとザフィーラに行ってもらえばいいわ！」

「残りは来た道を戻り、アギトの援護とクウガの援護へ向かえばいいのです！」

エルフの針を防ぎつつ、シャマルとザフィーラがそう叫ぶ。彼らにとっては、アギトは家族。だからこそ、今自分がすべき事を思い出していた。はやてへ告げた言葉は、落ち着いて現状を考えて欲しいが故のもの。それを理解し、はやても頷きを返す。そして、周囲を素早く見渡して告げた。

「八神家全員でハリネズミとアルマジロを引き受ける！　フェイトちゃん達は三人でコンドルを頼むわ！」

「「「「「「了解っ！」」」」」」

その指示に応え、フェイト達三人はズィーベンを集中的に狙い始める。シグナムはヴィータとザフィーラの三人でノインとエルフへと向かっていく。シャマルはそんな三人を援護するように魔法を使い、はやては射撃魔法を使いつつ、広範囲魔法を使おうと隙を窺う。ライダー達への一番の援護。それは今の相手を倒す事だと。そう、誰もが自分に言い聞かせて……

「ギン姉、そっち！」

「くっ……このっ！」

地面へ拳を叩きつけるギンガ。しかし、それは無駄に終わる。

「残念でした」

ゼクスはそんなギンガをあざ笑うように離れた場所から顔を出し、こう告げた。それにスバルとギンガは忌々しげな表情を返す事しか出来ない。ティアナはそんなゼクスへの対処法を考えていた。

なのはに玉座へ向かってもらい、三人はここでゼクスの相手をしていた。正直ゼクスはそこまで苦戦する相手ではないと、そんな気が三人にはしていた。これまで何度となく戦い撃破してきた事があるからだ。

だが、改めてライダー無しで戦うと厄介な相手だと認識せざるを得なかった。ＩＳで自由に床を移動し、その鋭い爪だけを出現させて攻撃する事も出来るのだから。今はティアナだけウイングロードに残り、スバルとギンガは通路でゼクスと戦っていた。

そうしているのには訳がある。三人してウイングロードから戦うと、ゼクスがＩＳで玉座の方まで行く可能性があったからだ。そう、スバルとギンガは自身を囮にゼクスをここに引き付けていたのだ。

（このままじゃ駄目だわ。何か、何か考えないと……）

ティアナはゼクスのＩＳを無力化する方法や封じる方法をひたすら考えていた。だが、そんな事が早々思いつくはずもなく、その思考は袋小路に入り込もうとしていた。それに、先程から見せられているライダー達の戦いもそれを悪化させる要因となっていた。

クウガが、アギトが、龍騎が、三人の仮面ライダーが邪眼相手に善戦する事さえ出来ずにいいようにやられているのだ。それでも三人は諦めずに挑み続けている。それだけがティアナを支えていた。

（あの人達だって、自分より強い相手を前にしても諦めないで挑み続けてる。アタシ達だって何か出来る事はあるはずっ！）

【スバル！　危険だけどあいつのカウンターを狙って！　ギンガさんはスバルの後方に回って挟み込むようにしてください！】

【【了解っ！】】

ティアナは博打を打つ事にした。相手が確実に姿を見せるようにし、攻撃時を狙って反撃を叩き込む。そんな危険しかない方法を。それを少しも嫌がらずにスバルは頷き、ギンガも文句も言わない。二人もライダー達の姿を見て諦めないでいようと思ったのだ。

強大な相手を前にして諦めずに戦うライダー達。絶望に飲まれる事無く抗うその姿。それが二人の危険と向き合う勇気を支えていた。一度はその苦戦の様子から希望を無くしかけたスバルとギンガだったが、だからこそと思い直した。

（クウガは、五代さんは私を助けてくれた。なら、今度は私が助ける番だ！　こいつを早く倒して、クウガの応援に行くんだ！）

（あの日、私は出会った。人ならざる体を持ちながらも、気高く生きる人に。その人と同じような力や姿を使って他者を苦しめる邪眼。決して許す訳にはいかないっ！）

ライダーに対して思う事が六課の中で一番強いナカジマ姉妹。故に邪眼が取った姿は決して認められるものではない。仮面ライダー自体を汚すようなその行為。それを許す事など出来はしない。

だから、二人はティアナの提案に頷いた。少しでも早くゼクスを倒すために。自分が危険だとしても構わない。危険は覚悟の上だ。ここで傷つく事を恐れていたら、ライダーの助けになどなれないのだから。

ティアナはそんな二人に内心感謝しつつ、別の方法はないかと考

える。ゼクスが使うＩＳ――ディープダイバーの事はセインから詳しく聞いている。そのため、それを察知する事が難しい事も知っていた。だが、もしそれを何かで気付く事が出来る。もしくは察知出来るように出来れば。

そんな考えが浮かんでくる。だが、肝心の方法が浮かばない。それでもティアナは考える。自分にはスバルやギンガのような力はない。怪人を倒すために必要な物が自分には不足している。だからこそ、怪人戦で自分がすべき事は有効な作戦や手段を考案する事だと、そうティアナは考えているのだから。

「いつまで隠れてる気？　私達相手でもそうするしか戦えない臆病な性格だってのは知ってるけど、それでよく改造機人とか威張ってられるね」

「やめなさいスバル。言っても無駄よ。どうせそれを認める事が出来ないぐらい情けないんだから」

ティアナが考え続ける中、スバルとギンガは挑発をしていた。ゼクスが姿を見せない限りは攻撃出来ないのだ。見え透いた方法だが、今はこれしか手がないのも事実。本来こんな事を言うのは性に合わないが、スバルもギンガもどこかで本心からそう思っていた。

性能に頼る事でしか戦えない怪人達。仮面ライダーはその能力を駆使するだけでなく、自分の技術を磨く事を怠らない。そこには、明確な差がある。与えられた物に満足し、それに胡坐を掻く事しか出来ない怪物と、与えられた物を更に昇華しようとする人間の差が。

「絶対……絶対諦めるもんか。アタシは翔一さんの助けになるんだ」

そんなティアナの呟きと同時にスバルとギンガの前にゼクスが怒りに燃えて姿を見せるのだった……

なのはは迷っていた。それだけではない。追い詰められ始めていた。

「くっ……止めて！　私は貴方と戦う気はないの！」

「煩いっ！　パパの敵は私が倒す！」

ヴィヴィオと同じ目、同じ髪、同じ声をした女性がなのはを襲う。玉座に着いたなのはを待っていたのは、玉座に座った一人の女性だった。それがヴィヴィオのコピーだとすぐに理解したなのはだったが、それを攻撃する事は出来なかった。

ＰｒｏｊｅｃｔＦＡＴＥで生まれ、誰かのために利用される存在。そう考えた瞬間、それが親友や愛する娘と同じに見えたのだ。いくら邪眼によって生み出されたとしても、なのはにはそう思った瞬間戦える相手ではなくなってしまったのだから。

女性の拳を防御魔法で防ぐなのは。だが、それが拮抗したのは一瞬だった。すぐにそれを女性の拳が突破し、なのはを殴り飛ばす。床に激しく叩き付けられるなのは。女性はそんななのはへ憎々しげな視線を送る。

「私は知ってる。お前は私のママを殺した奴らの仲間だって。そうパパが教えてくれた」

「違う……貴方の本当のパパも、ママも、ここにはいないんだよ？」

「黙れっ！　パパはいる！　ママを返せっ！」

女性の言葉になのははゆっくり立ち上がりながら答える。そして同時に邪眼の吹き込んだ内容に激しい怒りを燃やす。何も知らないに近い状態だった女性へ自身を父と認識させ、母を殺されたと言い聞かせる。それがどれだけ卑劣な事か。

その感情を抑え、なのはは女性へ諭すように優しい声で語りかける。思いやろう。相手の気持ちを、心を。拳を振る前に言葉を尽くせば分かってもらえると信じて。なのははそう思ってレイジングハートを待機状態へ戻した。女性の放った攻撃をかわす事もしないで。

「なっ！？」

突然のなのはの行動に女性も思わず動きを止める。それに構わず、なのはは無手のまま女性へ声を掛けた。

「ごめんね。貴方が苦しいのも悲しいのも代わってあげる事が出来ない。でも、それを思いやるぐらいなら……私にも出来るよ」

「嘘だっ！　ママを殺したお前に……そんな事出来るもんか！」

「私が貴方のママを殺したって、そう思うならそれでもいい。それでも、これだけは信じて。私と貴方は同じ人間。だから、ちゃんとお互いを理解し合おうってすれば、絶対思いやる事は出来るって」

なのははそう言いながら女性へ静かに歩み寄る。それに女性は少しずつ後ずさる。なのはの優しい笑顔と声。それが秘めた暖かな力に気圧されるようにじりじりと下がる女性。なのははそんな女性を安心させるように腕を伸ばす。

距離を縮め、なのはが女性を優しく抱きしめる。それに女性が一瞬震えた。その瞬間、なのはへ拳を打ち出す女性。それがなのはの

体を捉える。だが、それがなのはを吹き飛ばす事は無かった。その一撃は力無くなのはの腹部を叩いただけ。

「どうして……？　どうして私はお前へ憎しみを抱けない？　ママを殺した敵なのに……」

「敵なんかじゃないよ。敵って言うのは、自分のためだけにみんなの笑顔を踏み躙る相手だから。それに、私は貴方を敵なんて思ってないよ。だって、貴方はパパのために戦ってた。誰かのために戦ってたなら、貴方は私と同じだよ」

五代ならきっとこう言う。そう思って、なのはは心からの笑顔で女性へそう告げた。それに女性は言葉を失い、顔を伏せた。しかし……

「っ！？　避けてっ！」

「えっ？」

突然女性が叫ぶ。それに疑問符を浮かべるなのはだったが、その理由はすぐに理解させられた。その体を強く殴り飛ばされたからだ。壁に叩き付けられるなのは。それをやったのが女性しかいないと分かってはいる。だが、何故となのはは思った。

「ど、どうして……？」

「分からない！　体が勝手に……駄目っ！　止められないっ！」

疑問符を浮かべるなのはへ女性はそう困惑するように叫び、再びなのはへ襲い掛かる。それになのはは、悲しさに表情を変えながら

も仕方ないとばかりにレイジングハートを起動させ、女性を止めるべく動く。そんな二人を密かに見つめる存在がいると知らずに……

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

ゆりかご戦。苦戦するライダー。邪眼が取った手段はお約束の偽ライダー。ただし、改造された邪眼を基にしているため元来普通の人だったクウガ達よりも性能的には上です。

次回はＲＸの戦いと怪人と戦う六課をメイン

ゆりかごについたＲＸはすぐに邪眼がいるだろう方向――玉座の間へ向かって走り出した。邪眼の本体がいるとすれば、それは玉座しかないと思ったからだ。だが、その行動はすぐに終わりを迎えた。

「待っていたぞ、世紀王」

「邪眼……っ！」

突如として空間が歪み、邪眼が現れたのだ。その姿は予想通り自分と同じ姿。黒い目をした漆黒のＲＸ。まさしくＢＬＡＣＫだ。そんな全身を闇のような色で包んだ邪眼を見つめ、ＲＸは構えた。

「ここで貴様を倒し、真のキングストーンを手に入れる」

「そうはいかん！　俺は、俺達は必ずお前の野望を打ち破ってみせるっ！」

ＲＸは力強く宣言すると邪眼へ向かって走り出す。ＲＸは邪眼の姿を見て嫌な予感を覚えていた。本来はキングストーンが太陽エネルギーを受けて変化したＢＬＡＣＫ。それがＲＸなのだ。だが、邪眼が姿だけを真似ているはずはない。そこまで考え、ＲＸは一つの推測を立てる。それが外れていて欲しいと思いながら、ＲＸは邪眼へ拳を繰り出した。

それを邪眼は受け止める。その力はＲＸとほぼ互角。それだけでも、ＲＸはやはりと思わずにはいられない。クウガとアギトの力を

融合させたかもしれない自分。それと同じような力を有しているだけで、ＲＸには一つの確信が出来た。

「邪眼、答えろ！　貴様はキングストーンをどこで手に入れた！」

「ほう、気付きおったか。ならば教えてやる。レリックと呼ばれる石。あれこそがキングストーンの原石だったのだ」

「何っ！？」

「地球外よりもたらされたのは間違いではなかったのだ。しかし、まさかこの世界がキングストーンを産出していたとはな」

「では、キングストーンもアマダムも基はレリック……いや、レリックこそがアマダムと言うのか！」

ＲＸは合点がいったとばかりにそう告げた。次元漂流者ならぬ次元漂流物。それが自分とクウガの力の源だった。そう考えると、この世界に自分が呼ばれた理由がまた少し変わってくる。邪眼と戦うためだけではなく、災いを呼ぶだろう石を砕くために遣わされたのではないか。

恐ろしい力を持つ石。それを正しい事に使える自分が間違った事に使う者を止めるために。そして、二度とその力を使えぬようにと。

「そうだ。故に今の我は貴様と大差ない力を有しているのだ。古に取り込もうとし、吸収出来なかった光の力。その欠片を何とかかき集める事でな！」

「やはり貴様はアギトの力に敗れたのか！」

邪眼の言葉にＲＸは自分の予想が当たっていたと知り、この姿へ至れた原因に納得した。アマダムを取り込み、アギトの光を僅かにだが加えた事で近い存在へとなったのだろうと。そこで邪眼がＲＸへ蹴りを放つ。それを残った片腕で迎撃し、お返しとばかりにＲＸは即座に蹴りを放った。

そして、邪眼がそれを叩き落し、もう一度攻撃を加えようとする。だが、ＲＸはそれを嫌い一旦距離を取った。ＲＸは、どこまで自分と近い能力を有したのかを確かめるために、ここはダメージ覚悟で動こうと決意する。

「トゥア！」

跳び上がり、そこから後方宙返りをしながら蹴りの体勢へと移行する。それを見て邪眼も負けじと跳び上がり、前方宙返りから同じ姿勢へ移行した。

「ＲＸ！　キックッ！」

「しゃらくさいっ！」

ぶつかり合う両者。しかしその拮抗は長くは続かなかった。邪眼は両手から電撃を放ち、ＲＸの体勢を崩したのだ。蹴りの威力が弱まったため、邪眼がＲＸを蹴り飛ばす。床に激しく叩き付けられるＲＸ。邪眼は余裕さえ感じさせるように着地し、悠然と構えた。

ＲＸも立ち上がったものの、その胸からは白い煙が出ていた。電撃によるダメージと蹴りのダメージ。それが集中したためだ。ＲＸは邪眼の力を把握し悟った。純粋な力は互角程度。だが、そこに邪眼特有の特殊能力が加わる事で自分の上をいくと。

（このままでは不味いかもしれない。せめて太陽の光さえ差し込ん

でいれば……）

体を襲う痛みを感じ、ＲＸは視線を上へと向けた。そこには、当然ながら天井がある。万物を照らす光はない。何とかして太陽の光を差し込ませれば。そう考えるＲＸだったが、それを思いつく前に邪眼が電撃を放つ。

それをかわし、ＲＸは戦いながらその方法を考えるしかないと動く。自分の隠しているもう一つの姿。それを使うのは、それを思いついた後かそのための手段にしようと考えながら、ＲＸはロボライダーへ姿を変える。

「ボルティックシューター！」

「喰らえっ！」

ロボライダーが放つ攻撃を邪眼は電撃で迎え撃つ。地上本部での戦いでは連射速度で勝ったボルティックシューター。しかし、邪眼が鈍重な姿から素早い動きを可能とした姿へ変わったために、その連射が通用しなくなっていた。

ロボライダーの動きは遅い。そのため、邪眼は動きながら電撃を放つ事で連射速度の低さを補っていた。前回とは違い、邪眼へダメージを与える事が出来ないロボライダー。その体に電撃を受け火花を散らす。

「ぐっ！　これでは……やられるっ！」

「その姿の貴様の欠点は把握している。長所はその防御力と攻撃力のようだが、反面俊敏性は著しく落ちる事をな！」

邪眼はそう告げると、その場から跳び上がり拳を繰り出した。そ

れを迎撃しようとするロボライダーだったがその動きは間に合わず、邪眼のパンチがその体へ直撃する。その衝撃に軽く飛ばされ、床を転がるロボライダー。そこへ邪眼が電撃を放ち追い詰めようとした。

しかしその瞬間、ロボライダーがＲＸへと戻り、素早くその場から離れた。それに舌打ちをする邪眼。ＲＸは一旦距離を取るが、その体には浅からぬダメージが蓄積されていた。

（ロボライダーでも駄目だ！　奴の動きに対抗するにはやはりバイオライダーしか……待てよ？　そうかっ！）

ロボライダーとバイオライダーの二つを使い分ける事。それが今の自分の持ち味だ。そう思い出したＲＸは、そこから派生して逆転のための策を思いつく。そのためには、もう一度ダメージ覚悟で邪眼と格闘戦をしなければならない。

だが、それでもＲＸは躊躇わない。誰がピンチを救うのかと自問すれば、答えは自分しかいないのだから。最後に自分を助けるのは、諦めない心。いつかエリオへ教えた言葉を思い出し、ＲＸは小さく頷く。それを見た邪眼がやや苛立った。

「何かを思いついたようだが、無駄な事だ。我に勝てる要素はないぞ、世紀王っ！」

「違う、俺は世紀王じゃない！　仮面ライダーだっ！」

ゴルゴムの世紀王ではなく、自分は正義の戦士たる仮面ライダーだ。その確固たる信念を告げるＲＸ。それこそは人類を影ながら守り抜いていたヒーローの姿だった……

「くそっ！」

「死ね！」

ドラグブレードを手にし、龍騎は邪眼へ斬りかかろうとする。それを邪眼は片手から電撃を放つ事で迎え撃つ。その電撃を龍騎は間一髪かわすと、そのまま邪眼へ刃を当てる。軽く散る火花。それを物ともせず、邪眼は龍騎へ拳を叩き込む。更に追い撃ちとして電撃も加え、龍騎を大きく吹き飛ばす。

床を転がる龍騎。アギトはそれを見て悔しそうにするしかない。変化した邪眼は空を自由に飛び回り、龍騎を徐々に追い詰めていった。更に邪眼の耐久力は高く、今のように龍騎の攻撃を敢えて受けて反撃する事もざらだったのだ。

龍騎は未だにユニゾンを使おうとはしなかった。あの時、龍騎は近付いてきたアギトへこう告げた。

――邪眼がファイナルを使ったらユニゾンだ。

それがアギトには理解出来なかった。狙いは分かる。サバイブでのファイナル自体はもう見ているから、同じ事を邪眼もするだろう事は。だが、それを使用したらユニゾンとはどういう事なのだろうと。

しかし、それを詳しく聞く事が出来るはずもなく、アギトは現在龍騎と邪眼の戦いを見守りながら必死にその時を待ち続けていた。時折危ないと思う時もあるが、いざという時に遅れないために距離を一定に保ちながら。

「真司！　負けるなっ！」

「おうっ！」

せめて声援だけでも。そう思い、アギトは声の限りに叫ぶ。それを受けて、龍騎は邪眼の攻撃を避けながらある仕草を返す。それはサムズアップ。それを見ただけでアギトは分かった。龍騎が諦めていない事を。

五代を知る者達にとって、サムズアップが持つ意味は大きく多い。故にアギトもそれを返す。そして、視線を先程から表示されているモニターへと向けた。そこには同じように邪眼相手に苦戦するライダー達の姿がある。

「ちくしょう……翔一にもアタシが力を貸せたら……」

赤い体のアギトが邪眼相手に苦戦している。それを見て彼女は悔やむ。炎の闘士といった風貌のバーニングフォーム。それとも自分ならばユニゾン出来るだろう。そうすれば邪眼に苦戦する事無く戦えるだろうに。そう思い、アギトは拳を握る。

それだけではない。クウガの基本形もロボライダーもアギトはその気になればユニゾン出来る。マイティフォームは炎を意味しているし、ロボライダーは炎の王子との異名を持つ。それはアギトとの適正がある事を意味していたのだ。

アギトが自分の体が一つしかない事を悔やむ中、龍騎は邪眼相手に悪戦苦闘していた。シュートベントでの射撃は回避されるか、手にした盾で防がれ、基本となる地上戦自体でも差をつけられ、更にはその地上戦さえ中々出来ないのだから。

それでも、龍騎は機会を窺っていた。必ず邪眼がとどめを刺しにくる時がやってくる。それは、きっと地上戦となる。そう、自分のファイナルと同じだとすればバイクでの突撃になるだろうからだ。

（耐えるんだ。俺は諦めないってあの日誓ったじゃないか！　ライダーバトルを終わらせるって決めたんなら、これぐらいで音を上げる事なんか出来ないだろっ！）

自分の中に抱いた叶えたい願い。それを果たすためにも、こんな事で諦める訳にはいかない。追い詰められながらも、龍騎はそう思って体に力を込める。倒れそうになる自分を励まし、手にしたドラグブレードを構えた。

「ふん、まだ抗うか」

「当然だ！　俺だって、仮面ライダーなんだ！」

邪眼の言葉に龍騎は敢然と告げる。それは、彼が本当の意味での仮面ライダーの名を悪へ名乗った瞬間だった……

「ぐっ！」

アギトの体を邪眼の攻撃が襲う。それを何とか両腕で防ぎ、アギトは距離を取る。それを詰めるように邪眼が電撃を放ちながら迫って行く。アギトはその電撃をかわしながら、反撃の隙を窺っていた。

今、アギトと対峙している邪眼の姿は最初とは変わっていた。それは、漆黒のタイタンフォーム。だが、顔だけはアギトのままだった。超変身を使い、邪眼はアギトを追い詰めていたのだ。

それにアギトは驚きを隠せなかったが、それでもクウガと救助をしていた日々や五代から聞いていた話などから能力を思い出し、何とか対処する事が出来た。それでも、少しずつダメージを負っては

いたが。

（さっきからアギトの超変身は使ってこないな……？　そうか！　あれはアギトの光がないと出来ないんだ！　なら、まだ何とかなるかもしれない！）

アギトが危惧していたのは、邪眼がアギトとクウガの超変身を同時に使ってくる事だった。つまり、紫の鎧を装備して防御力を高め、フレイムの腕に変化させ攻撃力を加えるというような事だ。

だが、邪眼は一向にクウガの超変身しか使用してこないと気付いて、アギトは少し希望を見出した。そう、自分は同時に三つの姿の力を使える事が出来た。しかし、邪眼は一つの姿の能力しか使えないのだから。

そんなアギトの雰囲気から邪眼は何かを感じ取ったのか、鼻で笑いような声を出して告げた。

「何を考えているかは知らんが、今の我に貴様は勝てん。もう貴様の力の全ては見せてもらったのだからな」

「それがなんだ！　まだ俺は戦える。それに、俺が勝つ事を信じてくれてる人達がいるんだ。その思いが俺を勝たせてくれる！」

「馬鹿め！　思いなどで勝てるものかっ！」

はやてとティアナの事を思い出し、アギトが告げた言葉。それに邪眼は吐き捨てるように声を返し電撃を放つ。それを両腕で受け止め、アギトは一瞬だけ視線を上へ向けた。自分の最後の切り札。それを使うために太陽が見えるようにしないといけないと思って。

そして、そのための手段はすぐに思いついた。だが、それを行う

には少し時間がかかる。それに今は邪眼へ少しでも反撃しないといけない。そう思ってアギトはマシントルネイダーへ向かって走り出す。

　すると、それに呼応するようにマシントルネイダーがスライダーモードへと変化した。それに飛び乗り、アギトは邪眼へと立ち向かう。バーニングフォームは動きが遅い。それを補うためにアギトは愛機を使う事にしたのだ。

　だが、それだけではない。アギトがスライダーモードにしたのはもう一つ理由があった。それこそが空が見えるようにするための手段。

「おのれ……ちょこざいな！」

「はっ！」

　邪眼の攻撃をその速度を以って避けるアギト。更に距離を取り、加速をつけてその車体を傾けて邪眼へ攻撃する。ドラゴンプレスと呼ばれる攻撃法だ。それを邪眼は何とか受け止めるものの、さすがにそれには力負けしたのかそのまま壁に激突した。

　アギトはすぐにそこから離れ、もう一度距離を取ろうとする。だが、そこへ見えない何かが襲いかかる。それがアギトの肩を直撃するも、何とか落ちる事なく耐え切った。

「緑の力……」

「これならばその速さに惑わされる事もない。観念しろ、アギト！」

　邪眼の手には漆黒のペガサスボウガンが握られていた。邪眼はクウガと違い、その武器の要素が無くても自分が変化させた武器から

なら別の変化をさせる事が出来る。あの地上本部でクウガがやったように、床の破片からタイタンソードを作り出した後、それをペガサスボウガンへ変えたのだ。

邪眼の余裕綽々の言葉。それを聞いて、アギトはそんな邪眼の言葉に真っ向から吼えた。絶望を促そうとする邪眼。それに決して屈しないとばかりに、その気持ちを示すように構えて毅然と言い放ったのだ。

「それはお前の方だ、邪眼！　仮面ライダーがいる限り、絶対に人は闇に負けないっ！」

仮面ライダーとの名を聞き、それに憧れて名乗ったアギト。それは今や憧れからではなく、本物の言葉として告げられていた。闇を打ち砕く正義の光として……

「ぐぅぅぅぅ！」

「どうだ？　今まで自分がやっていた事をされる気分は」

漆黒のライジングタイタンがライジングタイタンを押さえ込む。両者の手にはライジングタイタンソードが握られている。あの後、何とか邪眼からトライアクセラーを取り返したクウガだったが、予想した通りにそこから金の力を使った各フォームとの戦いを余儀なくされていた。

ペガサスフォームを使わないのは、クウガが使わないのとあまり意味がないからだろう。邪眼はクウガが基本的に変わった色に対応するように自身を変化させていたからだ。

クウガは何とか邪眼に対抗していた。自分の長所である超変身を駆使される事にはなったが、邪眼はそれを同じ色同士しかぶつけてきていない。それ故、クウガはやや分が悪い程度で戦況を抑える事が出来ていたのだ。

そう、邪眼はどこかで遊んでいるとクウガは感じていた。本気で倒すつもりならば、自分を全力で叩き潰せるはず。それをしないでじわじわと弄り殺すような真似をしていると。そこに何とか付け込む隙があるかもしれないとクウガは考えていた。

（何か……何か考えないと。緑は使ってこないから、距離を取って一旦……）

そこでクウガはある事を思い出した。そして、一つの逆転出来る可能性に辿りつく。だが、それは賭けの部分が強い。しかし、クウガに迷いは無かった。だが、それにはまず前準備がいると思い、クウガは意を決して動く。

「くっ……超変身！」

「無駄な事を……」

クウガはライジングドラゴンへ変化し、素早く地面を転がると邪眼の腕を手にしたロッドで叩き上げる。それで邪眼が手にしたソードを落としそうになる。しかし次の瞬間、邪眼は姿を変えて漆黒のライジングドラゴンへとなる。

落としかけたソードを手にし、漆黒のロッドが現れる。クウガはそれでも構わず跳び上がった。それを追うように邪眼も跳ぶ。だが、クウガは垂直に跳び上がっていた。それに邪眼が違和感を覚えるも、そのままクウガへロッドを突き出す。

「ここだっ！」

「何っ！？」

クウガはそれを天井を蹴る事でかわした。そしてすれ違うように床に着地して再度跳び上がる。落下を始めていた邪眼へライジングスプラッシュドラゴンを放つクウガ。それに邪眼が軽く舌打ちするも、ロッドを薙ぎ払うように動かしてクウガを弾き飛ばしてダメージを与える。

床に叩き付けられるクウガだったが、それでも立ち上がり邪眼から距離を取った。それを見て追いかける事もせず、邪眼はその姿を変えた。それは漆黒のライジングペガサス。同時にその手にしたロッドがボウガンへと変化し、邪眼はそれでクウガを狙う。

「くぅ！」

クウガの体を電撃を纏った空気弾が襲う。それでも、クウガは何とか青の金の跳躍力で回避した。しかし掠めた痛みに着地を余儀なくされ、クウガは邪眼の方を向いてその姿を変える。

緑の金のクウガ。ライジングペガサスとなり、邪眼を見つめるクウガ。そこへ邪眼が再びライジングブラストペガサスを放つ。それを超感覚で見切り、クウガは危なげなくかわす。それに邪眼が残った片手で電撃を放つも、それも辛うじて回避するクウガ。

「避けるだけでは勝てんぞ、クウガ！」

「どうかな。やってみなくちゃ分からないよ。だって、俺は……仮面ライダーだから！」

それは自分が本物のクウガだからとの意味を込めた言葉。それだけではない。仮面ライダーの在り方を変えると誓ったクウガ。これは、その彼が元来の意味での仮面ライダーを名乗った事を意味していた……

ライダー達がそれぞれの偽者との戦いを続ける中、はやて達は善戦していた。その要因の一つに、邪眼が見せているライダーの戦闘が関係していた。ＲＸが現れたものの、それが苦戦するのを見た時はやはり違った意味での動揺が走ったが、四人の仮面ライダーが少しも諦めていないのを理解し、それを見ていたはやて達も同じ気持ちを持とうとしたのが大きい。

「これで死ねっ！」

「頼むぜ、シグナムっ！」

「ああっ！」

ヴィータとシグナムを襲うエルフの針とライディングボードから放たれる射撃。それをヴィータが自慢の防御魔法で受け止める。その威力に少しずつひびが入っていくも、ヴィータは微塵も恐怖を感じていない。自分達の勝利を信じているからだ。

それを盾代わりにしながら、シグナムはボーゲンフォルムにレヴァンテインを変え、必殺の一撃を放つべく構えた。そして、ヴィータから飛び出した。その体をいくつもの針が襲う。それがシグナムの体を掠め、傷を作っていく。だが、それでもシグナムは怯む事無くエルフへと向かってその矢を放つ。

「穿て！　隼っ！」

”シュツルムファルケン”

「なっ！？　こんなものでぇぇぇぇ！」

その一撃がエルフの攻撃を突き抜けながら進み、その体を捉えた。シグナムが告げたようにその体を穿つように突き刺さるシュツルムファルケン。その痛みにエルフの攻撃が止まる。瞬時にヴィータは魔法を解除して、素早くエルフへと向かう。今だ残って飛び交う針に構わず、その体を傷だらけにしながら。

そして、手にしたグラーフアイゼンを振りかざし、その突き刺さる矢を力一杯叩こうとする。そう、それはチンクとノーヴェが生み出したコンビネーションの応用。ベルカの騎士二人による即興にして見事な連携。

「しまった！？」

「行け！　ヴィータっ！」

「一撃！　粉砕っ！」

”テートリヒシュラーク”

狙いに気付いたエルフだったが、もう遅かった。ヴィータによって放たれた痛烈な一撃との名に相応しい攻撃。それがエルフの腹部に突き刺さっていた魔力の矢を完全に体内へと叩き込んだのだから。そして同時にその体も叩き飛ばし、ヴィータがグラーフアイゼンを振り抜いたと時を同じくしてエルフが爆発した。

一方、はやてはシャマルとザフィーラと共にノインの相手をしていた。相手が展開した複数のウイングロードに、ザフィーラが鋼の軛を使ってその体当たり攻撃の速度を落とさせる。

シャマルがそこを狙ってバインドを展開。それを破壊されてもはやてがフリジットダガーで追い撃ちをかける事を基本にする事で、ノインの攻撃を防ぐ或いは弱体化させていた。

「この……」

体中のあちこちが凍結したような状態のノイン。それでも動けるところに怪人たる所以がある。

”はやてちゃん、詠唱完了です！”

「準備完了や。行くで、シャマル！　ザフィーラ！」

「ええ！」

「心得ました！」

はやての声で二人が飛び上がる。それにノインが何事かと視線を動かすが、はやてはそれに構わず告げる。

「遠き地にて、闇に沈め……デアボリックエミッション！」

それは本来であれば、はやてを中心とした広範囲型殲滅魔法だ。だが、今はそれをツヴァイが範囲を制御する事で辛うじてノインだけを収める程度に調整していた。ノインは急いでそこから逃れようとするが、魔法の範囲外には無数の棘が出現していた。

「逃がさんっ！」

「ちっ！」

ザフィーラの魔法に逃げ道を塞がれたノインだったが、それでも諦めずに棘を砕こうとしたのだろう。そのまま棘に向かって拳を叩きつけようとして、その動きが拘束された。幾重にも施されたバインドとクラールヴィントのワイヤーによって。

「これで終わりよっ！」

「こんなものぉぉぉぉ！」

それでもノインは自慢の力でそれらを破壊しようとする。だが、それが叶う事は無かった。シャマルの拘束が砕かれようとした瞬間、二色の魔力光が新しくバインドを施したからだ。それは、ヴィータとシグナムのもの。

それが再びノインの動きを封じる。ザフィーラとシャマルがそれに気付き、二人へ視線を向けて力強く頷くと再度バインドを施す。それにヴィータとシグナムも同じように頷き返す。そして……

「こいつで決まりやっ！」

”無に返るですっ！”

ノインの体を襲う強力な魔力攻撃。それに苦しむノイン。はやてがこの魔法をとどめにしたのには理由がある。今はここにいないリイン。それが得意とした魔法がこれだったのだ。共に戦う事が出来ないリインの分として、はやてはツヴァイと共にこれを選択したのだから。

こうして文字通り八神家の総力が結集した結果、ノインはその威力に耐え切れなくなったのか体中から火花を噴出させて散った。それを見届け、何も言わずにヴィータとザフィーラは動力炉へ向かって走り出す。それと同時にはやて達はフェイト達の援護に向かう事無く来た道を戻り出す。フェイト達はそれに気付くも、何も言う事無く戦い続ける。

今、自分達がするべきは何か。それを誰もが理解していたのだ。そして信じているのだ。互いの成功と勝利を。故に迷いはない。フェイトは遠ざかるはやて達を見て、小さく一度だけ頷くとエリオとキャロへ向かって告げた。

「私達もこいつを倒してＲＸの助けに行くよ！」

「「はいっ！」」

二人が返事をするのと同時にフリードが吼えた。それにフェイトは一瞬だけ笑みを浮かべるも、すぐに凛々しい表情へ戻して眼前のズィーベンを睨む。羽をフリードが火炎で燃やし、それで迎撃出来なかった分をエリオが魔法で燃やして、キャロがフェイトをブースト魔法で支援する事で確実にズィーベンへダメージを与えていたのだ。

だが、それはあまり大きなダメージではない。もたもたしていると回復されてしまう程度なのだ。故に、フェイトはここで自分の最後の切り札を切るつもりだった。

「バルディッシュ！」

”ライオットフォーム”

手にしたザンバーが双剣へと変化していく。それがリミットブレイクと言う名のフェイトの最後の切り札だ。しかし、これはまだその一つの姿でしかない。フェイトは体を襲う負荷に微かに表情を歪めるも、ズィーベンへとその速度を活かして立ち向かう。その姿、まさに閃光。

放たれる羽を物ともせず切り払いながら、ズィーベンへと果敢に斬りかかるフェイト。それと同じくしてエリオもストラーダを手に突撃を敢行した。羽を腕や肩に受けながらも、脱力感を捻じ伏せるように進むエリオ。

”スピーアアングリフ”

「はぁぁぁぁ！」

（諦めない！　絶対に僕は諦めない！　フェイトさんを、光太郎さんを助けるためにっ！　そして、キャロを守るために！！）

胸に抱くはあの日の決意とあの日の言葉。手助けしたいと願った女性への想い。それに対して憧れる男性が与えてくれた信念。そして、今や共に支え合う仲となった大事な相手への密かな気持ちさえ込めて、エリオは雷光のように加速していく。

そんなエリオをキャロが後押しをする。自慢のブースト魔法に、大切な相手である小さな槍騎士へのありったけの思いを込めて。一度として目を逸らす事無く、力強い視線をエリオへ向けたままに。

（私だけの強さ、見つけましたフェイトさん。私には、フェイトさんが、光太郎さんが、そしてエリオ君がいてくれる！　だから……もう何も怖くないっ！）

「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士に駆け抜ける力を！」

”ブーストアップ　アクセラレイション”

エリオの速度がそれによって更に加速し、閃光となってフェイトと並ぶ。二対の閃光はズィーベンの両翼を見事に貫いた。

「ギャアァァァ！！」

「くっ……」

「エリオ！？」

エリオは着地すると同時に羽による出血と脱力感からしゃがみ込んだ。だが、それでも目には力がある。心配するフェイトへエリオは視線を向けて叫んだ。

「フェイトさんっ！　今はとどめを！」

「エリオ……任せてっ！」

その雰囲気がどこか光太郎にも感じられ、フェイトは息を呑むもすぐに頷いて、手にしたバルディッシュを再びザンバーの姿へ戻す。しかし、それは従来のザンバーとは違う。それこそフェイトの切り札の最後の姿、ライオットザンバーだ。

それを振りかざし、フェイトは翼を失い苦しむズィーベンへ猛然と斬りかかる。フェイトが振り上げた両腕を見て、キャロが再びブースト魔法を使う。母のようにも姉のようにも接してくれた女性を支えるために。

「猛きその身に、力を与える祈りの光をっ！」

”ブーストアップ　ストライクパワー”

その魔法を受け、フェイトはズィーベン目掛けて大上段からの一撃を放つ。その一撃を放たせるために動いてくれた二人の子供達への想いを乗せて。

（エリオ、キャロ、ありがとう。二人の想い、受け取ったよ。だから、この一撃で終わらせる！）

「一刀！　両断っ！」

「創世王様ぁぁぁぁ！」

フェイトの全力による魔力刃での斬撃はズィーベンを見事に捉えた。その大量の魔力エネルギーがその体内へ送り込まれ、それに耐え切れずズィーベンは爆発四散した。それを見届け、フェイトはふらりと体を揺らして座り込む。

リミットブレイクと呼ばれるライオットは多大な負荷を体に与える。それを短時間とはいえ行使したためだ。キャロはフリードへエリオの事を託すと、フェイトへと駆け寄った。そして、すぐに回復魔法を使ってその体を癒す。

フリードはエリオに刺さった羽を燃やすために口から炎を吐き出した。それはエリオへ向けられる事はなく、その近くへと向けられている。エリオはその意図を察して羽のある場所を動かし、羽だけをその炎で焼いた。

「ありがとうフリード」

エリオはフリードへ礼を述べつつ、羽を何とか焼く事が出来た。体を襲っていた脱力感が軽減出来た事を確認し、エリオはフェイトとキャロの傍へと近寄る。フェイトもキャロもエリオの姿を見て安堵したような表情を返した。

だが、エリオはある事を念話でキャロに提案しながら、それを口頭でフェイトへも告げた。その内容にフェイトは不思議そうな表情を返す事となる。

「フェイトさん、僕らは動力炉に行こうと思います」

「え？」

「ヴィータ副隊長とザフィーラさんだけでも大丈夫とは思うんです。でも、もしかしたらって」

エリオはキャロの言葉を簡単に説明した。動力炉が強固な物だとすれば、その破壊に時間を取られる可能性がある。でも、自分とキャロが行けば加速を加えたりブーストによって破壊力を増させる事が出来ると。

フェイトはその目的がヴィータとザフィーラの早期戦線復帰だと理解し、許可を出すように頷いた。そしてエリオとキャロはフリードを元に戻し、動力炉へ向かって走り出した。それを見送り、フェイトは自分へ喝を入れるように息を吐いて、来た道を戻るのだった……

「これでも喰らいな！」

「このっ！」

スバルはゼクスの鋭い爪を何とか受け止める。だが、拮抗出来るのはほんの僅か。すぐにその怪人の力に押し込まれる。それを助けるべくギンガがゼクスの背後から攻撃するのだが、それでもゼクスは動じない。そこでギンガがゼクスへ零距離のリボルバーシュートを炸裂させた。

それにはさすがにゼクスも体勢を崩し、スバルはならばと同じ事を行う。互いにゼクスを盾にしながらリボルバーシュートを放つナカジマ姉妹。それにゼクスの力が弱まったのを感じて、スバルは素早く体勢を整える。

あの後、スバルとギンガはティアナの提案通り、ゼクスとの接近戦を挑み続けていた。ＩＳを使われないようにするため、いつも以上に距離を詰めながら。そのため、二人は普段以上の緊張と危険を強いられていた。それでも二人は文句も言わず、懸命に戦っていた。

ティアナは今もウイングロードの上から二人の戦闘を見つめていた。しかし、ゼクスはそちらへの注意をもう払っていない。ティアナはゼクスが姿を見せた瞬間から少しも動く事無く様子を窺っていたのだ。

「どうやら、あいつはお前達を見捨てたみたいだね」

「ティアがそんな事する訳ない！　勝手な事言うな！」

「そうよ！　ティアナには何か考えがあるんだから！」

ゼクスの言葉に二人はそう返して構える。確かに先程からティア

ナがまったく援護も何もしない事は気付いていた。それでも、二人はティアナを信じていた。きっと何かゼクスを倒す手段を考えているのだろうと。

故にその信頼は揺るがない。だがその二人の無条件の信頼がゼクスには腹立たしい。少しとして不安も疑心も抱かない事に怒りさえ覚えるのだ。

「はっ！　言ってなよ。ＩＳを使われたら、あたしに手も足も……」

そうゼクスが馬鹿にするように告げようとした瞬間だった。その体を一筋の射撃魔法に襲われたのは。その襲撃でよろめくゼクスは、何が起きたのか理解出来なかった。一方でスバルとギンガはそれを見るなり瞬時に動き出した。

その魔力光はオレンジ。ティアナの魔法のクロスファイヤーシュートだった。本来は複数の魔力弾で攻撃する魔法だが、ティアナはそれのバリエーションとして魔力弾を収束させる事で簡易的な砲撃魔法へと昇華させたのだ。しかし、少しとしてウイングロードのティアナは動きを見せていなかった。ゼクスが一体何故と思った時、その体がバインドで拘束される。そして、それと同時にティアナがゼクスの側面に現れた。

「なっ！？」

「今よっ！」

「「はぁぁぁぁっ！！」」

その光景に驚くゼクスを無視するように、ティアナは叫ぶ。ティアナはゼクスに気付かれないようにフェイクシルエットと併用し、

オプティックハイドという姿を消す事が出来る魔法を使った。そして、密かにウイングロードから降りてゼクスの隙を窺っていたのだ。
スバルとギンガのリボルバーナックルが唸りを上げると同時にカートリッジが排出される。そのまま二人は動けないゼクスへその拳を叩き付けた。その衝撃にゼクスが軽く呻く。更に同時にそこからリボルバーシュートを放ち、ゼクスへダメージを与えた。

「「ティア（ティアナ）っ！」」

「ファントムブレイザァァァ！！」

二人の声に呼応し、残る魔力の全てを出し切るようにティアナは叫んだ。側面からゼクスを襲うティアナ最大の攻撃。それがゼクスを床に転がすぐらいの衝撃を与える。だが、ギンガが即座に逆側面に回り込み床に倒れる事を阻止する。
ＩＳを使われないためだ。ゼクスがそれに気付いて悔しがるも、スバルがとどめとばかりにその左拳を腹部に叩きつける。その目の色を金色に変えて。それは、スバルがどこかで忌避していた力。しかし、目の前の相手には相応しいと思えた力。

「ＩＳ、振動破砕っ！！」

「あ、あぁぁぁぁぁ！？」

スバルの戦闘機人としての技。その最初で最後であろう発動。それはＩＳに頼り切り、相手にその事への対策をさせたゼクスへの、戦闘機人としてのスバルなりの餞別だった。

「こ、この力は……使えないはずじゃ……」

「使えないんじゃない……使わなかったんだよ。私の切り札だからね！」

振動破砕によって内部構造を崩壊させられていくゼクスへ、スバルはそう言い切った。きっと自分の事を知っていただろうゼクス。だが、自分のＩＳへの警戒は、まったくといっていい程していなかったのを理解していたのだ。

まるで、自分のＩＳがどれ程戦闘機人へ効果を発揮するかを忘れているように。そして目の色を普段のものへと戻したスバルは、今度こそ本当の終わりとばかりにそこから残した右腕に魔力を収束させていく。それは、魔導師としての彼女の自慢の技。

「一撃っ！　必倒！！」

その言葉にありったけの想いを込めて。それは”人間”スバル・ナカジマとしての渾身の一撃。

「ディバイィィィン……バスタァァァッ！！」

脆くなったゼクスを青の魔力光が吹き飛ばして行く。ティアナはその光景に安堵し、ギンガはゼクスの消滅を確認すると二人へ視線を向けて告げた。

「今フェイトさんへ連絡したら、向こうも怪人を倒してライダーの援護に向かってるらしいわ。だからライダーの方は任せて、私達はなのはさんを！」

その言葉を聞き、ティアナとスバルは頷き返す。モニターを見れば、ライダー達は苦戦しながらも少しずつではあるが形勢を変えつつある。それに希望を見出し、スバルはティアナやギンガと共に走

り出す。
　目指すは玉座の間。そこにいるなのはと共に邪眼の本体と戦うために。そして、ヴィヴィオのコピーを止めるために……

　ラボ内にある訓練場。そこでヴァルキリーズは邪眼と戦闘していた。食堂では跳躍力を活かしきれないと感じた邪眼が場所を移動したためだ。そこでヴァルキリーズは邪眼を相手にしているのだが、初めの頃の善戦が嘘のように苦戦を強いられていた。
　その原因は邪眼がＩＳを使い出したからだ。それは、ライドインパルス。トーレのＩＳだ。その超高速機動に撹乱されるヴァルキリーズ。トーレとセッテ、ディードなどは何とかついていっているが、ノーヴェがやや置いて行かれ出したために連携が乱れ始めたのだ。

「ちっ！　奴め、速度はドライよりも上か！」

「ちょっと不味いわね。ノーヴェちゃんが結構攻撃力的に通用してたから、トーレ姉様達が決定力不足になり出してるわ」

　チンクは援護のスティンガーを投げる事が出来ず、悔しそうに眼前の光景を見つめた。クアットロもやや焦りを表情に浮かべている。二人の目の前には懸命に邪眼の動きについて行こうとするノーヴェとそれに苦しみながら対処しているトーレ達の姿がある。
　ディエチやオットーにウェンディの三人も、その援護の手が止まりがちになっていた。速度が速すぎるため、下手に攻撃するとトーレ達に当たる可能性が大きいからだ。

「オットー、どうする？」

「今は待つしかないよ。幸い、邪眼は優先的にトーレ姉様達前線組を狙っている。僕らは、姉様達が邪眼の動きを鈍らせてくれるのを信じて備えよう」

「今は耐える事がアタシらの戦い……ッスね」

ウェンディの言葉にオットーが頷き、それを見てディエチも分かったとばかりに頷いた。姉達が命懸けで戦うのを見守る事しか出来ない自分達。それに堪らない悔しさを覚えるも、それを来たる時まで溜めて邪眼にぶつけようと。

そんな三対の視線が見つめる先では、凄まじい速度で動く邪眼へ必死に喰らいつこうとするトーレ達の姿があった。空戦三人は邪眼の速度に振り回されながらも、諦める事無く追随していた。

「くっ……追いつけん！」

「防ぐ事は出来ても攻撃が……っ！」

「速さが……違い過ぎます」

トーレはブレードを使い、邪眼の攻撃を牽制もしくは防御していたが、反撃が一向に出来ないのだ。それはセッテも同じで、スローターアームズを使う暇さえない。防戦一方。そんな言葉が見事に当てはまるのだから。

ディードは瞬間加速で邪眼の攻撃タイミングをずらす事で対応していたが、それはあくまで防御にしか有効ではない。攻撃には瞬間加速の速度は遅いのだ。常に超高速で動く邪眼相手には、それ以上の速度を以ってしか対抗出来ないと現状三人は考えていた。

「ふん、所詮は出来損ないよ。我に勝てると思うな！」

両手から電撃を放とうとする邪眼。しかし、その体を何かが壁のように受け止め狙いを逸らす。それはエアライナー。ノーヴェが展開した空駆ける道だ。

「何だとっ!?」

「へっ！　こういう使い方も出来んだよ！」

超高速戦闘になってからは完全に置いて行かれてしまったノーヴェだったが、だからこそ何か出来る事はないかと考えていた。そして思い出したのが、初めての模擬戦でセッテのブーメランブレードを弾き飛ばした時の事。

自分のＩＳならば、邪眼の障害物として展開出来るのではないか。そう思い、ノーヴェは実行に移した。一瞬でも隙を作る事が出来れば。僅かにでも動きを鈍らせれば。そう、後は姉妹達が何とかしてくれると。

そして、その考えは微塵たりとも間違ってはいなかった。それを見た瞬間、邪眼以外の全ての者が目を輝かせたのだから。瞬時にそこからの戦術を組み立てるウーノ。それを聞くまでもなく察して動いたのは、当然姉妹の中でもトップクラスの速度を持つ者だった。

「そこだっ！」

トーレがまるでノーヴェの行動を予期していたかのような動きで邪眼へダメージを与える。それが、ここから始まる大反撃の開幕の合図だった。エアライナーで体勢と速度を殺された邪眼へ、トーレがかまいたちのように傷を与えて行く。

「行けっ！」

セッテはそれと合わせるようにブーメランブレードを投げつけ、それを見事に操作していく。トーレの攻撃する場所とは逆方向を攻撃していくブレード。それに邪眼が体勢を整えようと上へ動くも、それは既に察知されていた。

「させませんっ！」

ディードは邪眼が必ず上に逃げるだろうと読んでいた。側面はトーレとセッテが押さえ、下にはノーヴェがいる。そう、意図的に上方を隙として作ってあると気付いたのだ。故に、そこへ待ち伏せた。邪眼が少しでも動きを見せた瞬間、その加速力を活かした一撃を叩き込むために。

その華奢な体からは想像も出来ないような重い一撃を受け、邪眼が再び体勢を崩す。そこへ、嵐の如き閃光が走る。

「逃がさないっ！」

ディードの動きはオットーにとって予想通りだった。だからこそ、ディードが邪眼へ攻撃を加えた直後に自身のＩＳを発動させる事が出来たのだから。おそらくノーヴェがやった方法はもう通用しない。ならば、この機会を逃せば邪眼を倒す事が出来なくなる。

オットーはそう考え、もう邪眼がＩＳを使えないようにダメージを与え続けるしかないと判断した。それを理解したように、そこへ更なる閃光が華を添える。

「これでっ！」

イノーメスカノンから放たれたディエチの全力砲撃。普段は心優

しく大人しい彼女。だが、だからこそ戦いを生み出す邪眼は許せなかった。しかも自分達の家を奪い、真司達へ自分達そっくりの姿をした分身を向かわせた事も同じく。

怒りの砲撃はレイストームの光と挟み込むように邪眼の体を襲っていた。そこから抜け出そうとする邪眼だったが、それは叶う事はなかった。

「まだまだッスっ！」

限界を超えた出力のエリアルキャノンがその動きを阻止する。ウェンディは邪眼の体を吹き飛ばす程の威力でそれを放った。ライディングボードが少々熱から解けた事からも、それがどれだけの無理をさせたのかが分かる。

壁に叩きつけられ、地面へと落ちた邪眼。すると、その足が地面へと引きずりこまれた。それに邪眼は気付くも、訓練場はそもそもどれだけの攻撃をしてもいいように作られている。故に邪眼が全力で叩く事にも耐えるだけの耐久性があった。

「これでしばらくＩＳは使えないよっ！」

セインはそんな邪眼から離れた場所に出現し、そう言い切った。彼女は、戦闘向きではない自分の力を有効に使える状況を待っていた。だからこそ、教育を担当していたウェンディと連携して今の状況を作り出したのだった。

そして、身動きが取れない邪眼へ走り出す者がいた。その者は手にした武器を構え、邪眼へと突き出そうとしている。それはドゥーエ。邪眼はそれを見て動く両腕を使って電撃を放とうとするのだが、突然ドゥーエが消えた。そして瞬時にその姿が増える。

「やらせないわよっ！」

クアットロはそう言いながら邪眼を鋭く睨む。それに邪眼が忌々しげな雰囲気を見せると、昔の狡猾な笑みを返して笑ってみせた。クアットロはウーノを経由してドゥーエの狙いを知り、それを援護するために動いた。

敬愛する姉の一人であるドゥーエ。その理由は今と昔では大きく違う。昔は味方に優しく敵に容赦なくが信条だったドゥーエに尊敬の念を抱いていたクアットロ。しかし、今は大切なものを守るために危険を顧みず動ける事に尊敬の念を抱いていた。

「もらったわっ！」

幻影に気を取られる邪眼へ、姿を消したままドゥーエは頭部へとピアッシングネイルを突き立てた。追撃が出来る状態だったが、ドゥーエは嫌な予感を感じてすぐにそこから離れる。思い出したのだ。真司と初めて会った際、言われた言葉を。

戦闘向きじゃないから、戦わずに逃げて。自分は戦闘型ではない。故に必要以上の攻撃は禁物だと。離れるドゥーエへ気配を察知したのか、邪眼が電撃を薙ぎ払うようにして放った。それがドゥーエに直撃しそうになった瞬間、それを代わりに受ける者がいた。

「そうはさせんっ！」

チンクは強化されたシェルコートでそれを受け止めると、苦痛に表情を歪めつつもお返しとばかりにスティンガーを投げ放つ。それが邪眼の腹部へと殺到し、次々と突き刺さって行く。そして、それを見て誰もが思った。勝つにはここを物にするしかないと。

「今よっ！」

ウーノは、戦術の全てを伝える事無く理解し、やってのけてくれた姉妹達に感謝すると共に、そう力の限りに叫んだ。それを背に受け、凄まじい勢いで駆け抜けていく者がいた。

「家から出てけぇぇぇぇぇっ！！」

「ば、馬鹿なぁぁぁぁぁっ！！」

ノーヴェの渾身の一撃がスティンガーへ叩き付けられる。それは刺さっていた全てのスティンガーをその体内へと深く突き入れた。だが、地面に突き刺される形となっている邪眼は、そこから動く事はない。

だからノーヴェはエアライナーを展開し、そのまま上方へと駆け抜ける。それと同時にチンクがスティンガーを爆発させた。全てのスティンガーによる爆発力は邪眼を内部から破壊させ、その体を内側から崩壊させる。訓練場に起きる激しい爆発。それを呆然と見つめるヴァルキリーズ。

やがてそれが完全に収まったのを受け、ウーノが確認作業を開始。それを誰もが固唾を呑んで見守る。そして、そのウーノの手が止まり、静かに告げられた言葉は……

――――反応……消失。私達の……勝ち、よ……っ！

勝利の報は涙と共に告げられた。それに誰もが同じように涙を流す。まだ終わってはいない。だが、今だけは、今だけは勝利に少し浸らせて欲しい。そう誰もが思いながら、涙を流していた。

取り戻したと。自分達の家を、今、この手で取り戻したのだと思う事を許して欲しいと。だが、それも本当に少しの間だった。すぐに全員が目元を拭い、視線をモニターへと移す。

そこにはジェイルの研究室近くで戦う龍騎の姿があった。苦戦をしながらも、決して諦めず、泥臭ささえ感じさせるように必死に抵抗している姿が。それに誰もが一瞬笑みを浮かべて頷いた。

――行きましょ。真司君を助けるために。

そのドゥーエの言葉に全員が凛々しい表情で頷き返し、その場から走り出す。本当の意味で家を取り返すために……

「頑張って！　絶対止められるはずだから！　貴方の体なんだよ！」

「それが……嫌っ！　どうして言う事を聞いてくれないのっ！？」

なのはの言葉に答えながら、女性はその拳を容赦無く振るう。それをかわしたり時に防いだりしながら、なのはは必死に言葉を掛け続けていた。それでも、どこかで女性の動きは邪眼によるものだと考えていた。

ここにいるはずだった邪眼。それが何故かいない。その事がずっとなのはの中で気になっていた。どこかで自分達を見ているはずなのにと。その理由は出現しているモニター。自分達だけではなく、他の場所さえ映し出しているそれを制御しているのは邪眼のはずなのだ。

（もしどこかで様子を見ているとして、それがライダー達の場所ならライダー達が気付くはず。でも、そうじゃないのなら……）

自分のいる玉座の間しかない。そう結論付け、なのはは魔力弾を

装いサーチャーを放つ。先程から見られているような感じがするのだ。

「お願いっ！　私を止めて！」

「でもっ！」

「怖いの！　私が私じゃなくなってるみたいで……だから助けてっ！」

「っ！？」

女性の言葉と表情になのはは息を呑んだ。ヴィヴィオに重なって見えたのだ。助けを求め、縋るような目。自分に起きている事が怖くて仕方ないとばかりに怯える顔。それを見て、なのはは意を決した。

その手にしたレイジングハートを握り締め、女性へ真剣な眼差しを向ける。それに女性も気付き、その言葉を待つ。なのはは拳を何とか魔法で防ぎながら、女性へ問いかける。

「かなり痛いかもしれないけど……我慢出来る？」

「……うんっ！」

なのはの言葉に女性はどこか嬉しそうに頷いた。それになのはも小さく微笑みを見せるが、すぐにそれを消して叫ぶ。

――レイジングハート！　ブラスター、行くよ！

――ええ、いつでもどうぞ。

それは、なのはの切り札。そして、同時に諸刃の刃。自身の能力をブーストさせるブラスターモード。それは、フェイトのライオットと同じくリミットブレイクと呼ばれる最後の切り札。

なのはの声に呼応し、ブラスタービットと呼ばれる物が出現する。それはなのはとレイジングハートが制御する魔法の補助的役割を果たす物。それを使い、なのはは女性の事を止めようとしていた。

思い出したのだ。ジェイルがヴィヴィオに関して言っていた事を。レリックを使ってその力を解放させると。それを思い出し、非殺傷魔法によるダメージでレリックだけを破壊しようと考えたのだ。

「まずは動きを止める……」

「あぁぁぁぁ！」

なのはの動きを阻止するかのように女性が襲い掛かる。だが、その動きはどこか切れがないとなのはは感じていた。やはり無理矢理動かさせられるのを嫌がっているのがその原因だろうと。なのははそう思いながら、その攻撃を何とか受け止める。

そして、同時にビットが女性の腕をバインドで拘束する。それはなのはが初めて習得した高位魔法。レストリクトロックと呼ばれる魔法だ。更にそれが足にも出現し、完全に女性の動きを止める。

それを見てなのははレイジングハートを構え、女性へ告げる。それは、強くも優しい声。ヴィヴィオに対してかける母親の声。

――――怖いかもしれないけど、絶対大丈夫だから。

その手はサムズアップをしていた。それを見た女性は、何故かそ

れに安心感を覚えたのか、柔らかく笑みを見せて頷いた。それになのはも頷き返して叫ぶ。

「これが私の全力全開っ！」

”スタンバイレディ”

「スターライト！　ブレイカァァァァッ！！」

ありったけのカートリッジを使い、更に予備まで使っての収束魔法。それはなのはの自慢の一撃、スターライトブレイカーだった。女性へ向かって放たれる星光の輝き。ビットからも放たれたそれを女性は受け止める。その凄まじい奔流は女性を飲み込み、その体を強烈に痛めつける。苦しみ叫ぶ女性の声を聞きながらも、なのはは決してその勢いを弱めようとはしない。

だが、その表情は悲しみに歪んでいる。こんな事をしなければ助ける事が出来ない己の未熟さに。そして、自分のために女性を利用した邪眼への怒りも込めて。

「ブレイク……シュゥゥゥトッ！！」

その声と共に砲撃がより一層激しさを増して女性を襲う。すると、女性の体から紅い結晶が出現した。レリックだ。それがなのはの砲撃により見事に砕け散る。それを合図に砲撃は消失した。なのははブラスターなどの負担からしゃがみこむものの、すぐに顔を上げて目の前を見た。

そこには、幼い少女が倒れていた。ヴィヴィオと同じ外見の少女が。それを見た瞬間、なのはは立ち上がってその傍へ駆け寄った。そして、その体を優しく抱き抱える。その温もりから少女は目をゆっくり開けてなのはへ視線を向けた。

――……ありがとう。

その瞬間、なのはは目に涙を浮かべた。だが、それを落とす事無く頷き、笑みを返して告げる。

――どういたしまして。

その瞬間、レイジングハートが点滅した。それが伝えた内容になのはは戸惑う事になる。レイジングハートが告げたのは、サーチャーによるエリアサーチの結果だった。その内容は……

――玉座の間には邪眼の反応はありません。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

苦戦するライダー達。だが、勝機はある。そんな風に誰もが思い戦う中、なのは達はそれぞれの相手と決着を着けます。

次回、ライダー達の逆転劇と最後の戦いの幕開けをメイン予定

少女を抱き抱え、なのはは周囲に自分達以外誰もいないとの報告に戸惑いを露わにしていた。視線のようなものは感じている。しかし、レイジングハートは一切反応がないと応じていた。

「……レイジングハート、一応他のエリアもお願い」

”大丈夫ですよ。既に捜索中です”

「ありがとう」

相棒の返事に感謝しつつ、なのはは腕の中で眠る少女をどうするかと考えていた。ヴィヴィオと同じとなれば、その存在は今後厄介なものになる。それでも、なのはには一つしか選ぶ道はない。少女はヴィヴィオと姉妹なのだ。ならば自分の娘も同然だ。

そう思い、なのはは優しく少女を抱きしめる。そこへ、聞き覚えのある音が聞こえてきた。その音が意味する事に気付いたなのはは、笑顔を浮かべて視線を向ける。そこには、予想通りスバル達三人がいた。

「「「なのはさんっ！」」」

「スバル、ティアナ、ギンガ……」

どこか喜びを浮かべながら走ってくる三人へ、なのはは微笑みを返した。自分が無事だった事に安堵しているのだろうと、そう考えてなのはも喜びを表情に込める。それを感じ取りながら、三人はなのはの腕の中に納まっている少女へ視線を向けた。

「この子……」

「うん、ヴィヴィオのコピーの子」

「もう大丈夫なんですか？」

「レリックを破壊したからね。もう安心だよ」

スバルとティアナの言葉になのははそう返していく。それを聞きながら、ギンガは周囲へ視線を動かしていた。邪眼がいないので不思議に思っているのだ。ギンガもなのはと同じく邪眼がここで待ち構えていると思っていたのだから。

そんなギンガの様子になのはも気付き、先程のレイジングハートからの報告を伝えた。それに三人も戸惑うが、今は更なるエリアサーチの結果待ちとの言葉に頷いて周囲の警戒を始めた。

未だに出現しているモニターには、邪眼と戦うライダー達の様子と様々な場所が映っている。と、そこでティアナがある物に気付いた。

（あれ、今通り過ぎたのって……？）

ゆりかごに進入する際作った入口から、何かが入り込んだのだ。一瞬しか見えなかったそれは、アギトがいる方向へと向かって行った。ティアナはその影に見覚えがあったが、どうしてそれがアギトのいる方向へ行ったのかは分からなかった。

しかし、それがアギトの助けになると理解していたので不安はない。見れば、フェイトは走りながらではあるがライダー達へ向かっているし、はやて達もアギトの戦っている場所へ近付きつつある。

クウガへの援護にはそのままシャマルかシグナムが行くのだろうと予想し、ティアナは呟く。

「龍騎にはヴァルキリーズがいるからいいとして、残るは邪眼の本体だけ、か」

その本体がどこにいるのか分からないが、おそらくライダー達が負けるか勝利するまで現れないだろう。そう結論付け、ティアナはスバルとギンガになのはの護衛を任せ、自分は少し体を休める事にした。先程のゼクスとの戦いで魔力をかなり消費したためだ。

それを受け、ギンガはスバルと共になのはの傍に立ち、どこから襲われてもいいようにしていた。だが、ティアナが座ったのを見てその視線を周囲から動かさずにスバルへ声を掛ける。

「スバル、貴方もちょっとだけ休みなさい。さっきＩＳ使ったでしょ？」

「ありがとギン姉。でも、大丈夫。そこまで長い時間じゃなかったし」

「それでもよ。もしかすると、今みたいな余裕はもうないのかもしれないから」

ギンガの噛み締めるような声にスバルは黙った。そう、ライダー達が勝利した後待っているだろう邪眼との決着。それは今までとは比べ物にならないぐらいの激戦だ。そんな時に疲労を残していてはどうなるか分からない。

そうギンガは考えていた。スバルもそんな考えを察したのか、小さく頷くとギンガへ明るく声を掛けた。

「なら、少しだけ」

「うん、私もティアナが休憩終わったら休ませてもらうわ」

ギンガはそう言うと優しく笑みを見せた。それにスバルも頷き、その場に座り込んだ。なのはは二人のそんなやり取りを聞きながら、姉妹だなと改めて思うのだった……

目には見えない空気弾がクウガを襲う。しかし、それを超感覚で視認し避けるクウガ。それに苛立ちを感じながらも邪眼は再度射撃を行う。そんな事をもう何度か繰り返していた二人だったが、その転機が訪れた。それこそ、クウガが待ち望んでいた瞬間。

そして、クウガの賭けが成功した瞬間でもあった。邪眼からの狙撃が止まったのだ。クウガはそれに気付き、視線を邪眼へと向けた。そこには……

「な、何故だ……？　何故力が失せていくのだ!?」

そこには漆黒のグローイングフォームがいた。それを確認しクウガは体を赤へと戻すと、邪眼へ向かって静かに告げた。

「時間が来たんだ」

「時間だと？」

「緑の力は感覚が鋭敏になるんだ。それでアマダムに凄い負担をか

けるみたいで、制限時間があるんだ。それを過ぎると二時間変身出来なくなる」

クウガはそう言い切って邪眼を見つめた。本来ならばクウガの姿でもいられないのだが、邪眼はグローイングフォームのままだ。どうやら邪眼は変身不可能ではなく、クウガの本来の力を失った状態で止まっているのだろう。

そう判断し、クウガは邪眼の反応を待った。邪眼が緑の姿を取った時、既にクウガの賭けは半分成功していた。後は邪眼が姿を戻さないように、自分も緑になって時間を稼ぐだけだと。そして、結果はご覧の通りとなった。

クウガから告げられた情報に邪眼は驚き、戸惑う。自分が知っていて邪眼が知らないクウガの弱点。それをクウガは突いた。それこそ、本物のクウガである証明。自分の長所も短所も把握し、尚且つ認める事で進むからこその五代雄介。

みんなの笑顔のためにとの信念を持つ彼が変身するからこそのクウガなのだ。邪眼のように力に溺れ、それを自分のためにしか使わないような者がクウガになれるはずはなかったのだから。

クウガが見つめる中、邪眼は必死に体を変化させようとしていたが、やはりその体は一切変化しなかった。それを確認し、クウガは頷いて告げた。

「これで二時間超変身は使えない！」

「くっ……まだだっ！」

走り出すクウガへ電撃を放つ邪眼。しかし、レリックの力に頼る姿になったためか、その速度も威力も恐ろしい程低下していた。そ

れを全速力で走るクウガはかわしていく。そして、同時にその足が熱を増していく。その勢いのまま跳び上がり、一回転しながら蹴りの体勢へ移行するクウガ。

そこへ邪眼の電撃が放たれるも、それをその蹴り足が防ぐ。その光景に邪眼がたじろいた瞬間、クウガはそのままその体へライダーキックを決める。それが邪眼を吹き飛ばし、床へ激しく叩きつける。着地したクウガは、もう一度ライダーキックを放つべく構えようとして、一度深く息を吸った。

「……これでっ！」

そして呼吸を整えて構え、その体を走り出す前の姿勢へと変えた瞬間、体の色が赤から黒へと変わる。黒の金のクウガ。アメイジングマイティだ。ふらふらと立ち上がろうとする邪眼目指してクウガは走る。それと共にその両足が床を踏みしめる度に熱を増して行く。

クウガはそれを感じながら、邪眼への距離が自分の間合いとなった瞬間、力強く床を蹴って跳び上がった。そこから一回転し、両足を繰り出す。ゴ・ガドル・バを倒した際と同じ体勢。それが今のクウガが放てる最強の攻撃。

「ライダーキックっ！！」

七十五トンもの破壊力を誇る必殺の蹴りが、立ち上がったばかりの邪眼を捉えて蹴り飛ばした。再び床に叩き付けられる事になった邪眼。その腹部には二つの封印を意味する文字が浮かんでいる。

それが邪眼の体に亀裂を生じさせていくのを見ながら、クウガは思う。まるで凄まじき戦士となった自分と戦っていたようだったと。黒い目の自分。それが否応無くそれを連想させたのだ。聖なる泉を失ったクウガは怪人と同じ。それをまざまざと見せられたようなものだった。

（……手強かった。俺が戦った未確認って、みんな同じように手強いって思ったのかな？）

どこか場違いな事を考えつつ、クウガはビートチェイサーへと駆け寄った。幸い壊れてはいないようだが、激戦が予想される玉座の間に持って行っては万が一もあるため、これはここに置いていこうとクウガは判断した。

そのため、置いてきたトライアクセラーを取りに行ってそれを差し込んでいつでも動かせるようにした。邪眼の本体を倒した後、このゆりかごから脱出するために使えるようにと。そして、クウガは動作確認を終えると頷いて玉座の間向かって走り出した。

（光太郎さん、翔一君、真司君。俺、先に行ってます！）

必ず来るだろう三人の仲間への思いを胸にクウガは走る。その先で待つだろう邪眼目指して……

クウガが邪眼へ緑の弱点を話している頃、アギトも同じ事を邪眼へ告げていた。そのアギトの目の前にはアギトと同じ姿ではあるが、どこか弱った印象を与える邪眼がいる。グローイングフォームへとなったために姿を戻したのだが、その能力低下までは誤魔化せないようだ。

「ば、馬鹿な……」

「五代さんが緑の力を使う時、必ず時間を気にしてた。その理由がそれだったんだ」

「お、おのれ……だから奴は緑の力をあまり多用しなかったのか」

「これでお前の優位性は無くなったぞ！」

アギトがそう告げた瞬間、そこへ一つの存在が近付いてきた。それに気付き、視線を向けるアギトと邪眼。

「本当に来てくれたんだ、ゴウラムさんっ！」

「なんだとっ！？」

そこにいたのはゴウラムだった。アギトはクウガが強く思えば来てくれるとの言葉を信じて、助けに来て欲しいと願ったのだ。自分の言葉も理解してくれる。その一点に賭けて。

それは自分の狙っている太陽の光をここで浴びる事を目的としていた。ゴウラムがいなくても何とかなるだろうが、出来ればいてくれた方が成功率が高いからだ。そんなアギトの考えを読んだのか、ゴウラムはそのままの勢いでマシントルネイダーへと合体していく。

スライダーモードの状態に装着されるゴウラム。ゴウラムトルネイダーとなったのを見届け、アギトはそれから降り立つと邪眼へ向かって走り出した。

「ゴウラムさん、天井を突き破ってください！」

「何をするつもりだ！」

そう、天井を破壊する際、邪眼に妨害されないように自分が動きたかったため、アギトはゴウラムを頼りたかったのだ。アギトの言葉を受け、ゴウラムトルネイダーは加速をつけ、その角を使って天井へ突撃した。

それが見事に大きな穴を開け、そこへ太陽の光が注ぎ込まれる。アギトは邪眼との格闘戦を一時切り上げ、光の下へ急いで向かうと深く息を吸った。それに呼応するように、その体が太陽の光を浴びて変化を起こす。

赤く盛り上がった体は弾けるように消え、そこから銀色の体が出現した。それこそアギトの秘めた姿。シャイニングフォームだ。それを見て邪眼は悟った。もう今の自分が勝てる相手ではないと。

アギトはシャイニングカリバーを取り出し、それを両手にして走り出す。邪眼はそれでも負けじと電撃を放つが、それの直撃をアギトは受けながらも速度を落とす事無く向かっていく。そして、邪眼へとその刃を振り落とした。

「はぁ！！」

「ぐぉぉぉ！」

シャイニングクラッシュと呼ばれる攻撃が繰り出される。高速で何度も斬撃を叩き込むものだ。それで邪眼が更に弱ったのを見て、アギトはその場から跳び上がった。そこへゴウラムトルネイダーがすかさず回り込み、アギトを乗せると一旦距離を取るように動き出す。

その間に構えたアギトの前にアギトの紋章が出現する。その位置は丁度邪眼の真上だ。準備が完了したアギトに合わせるように、邪眼へ体当たりを敢行するゴウラムトルネイダー。それを受けて宙に叩き上げられた邪眼を待っていたのは、同時に跳び上がっていたア

ギトだった。

「ライダーキィック！！」

アギトの紋章を通り抜け、空中で邪眼を蹴り飛ばしたアギト。それと同時に激しい爆発を起こす邪眼。その爆発を貫くように床へ着地するアギト。こうして、ゴウラムトルネイダーとの連携技を以って邪眼へとどめを刺したアギトだったが、ふと何かに気付いて振り返った。

そこにはアギトを見つめるはやて達がいた。アギトが邪眼へとどめを刺す瞬間を見ていたらしく、表情は喜びに満ちていた。勿論、その手はサムズアップをしている。アギトもそれを返しながら、はやて達へと駆け寄った。

「はやてちゃん……。シグナムさんもシャマルさんも無事でよかった」

「もちのろんや。ところで翔一さん、それがアギトの最後の姿なんやな？」

「そうだよ。これが俺の切り札」

”カッコイイです！”

ツヴァイがそう言ったのにはやても笑顔で頷き、アギトの全身を改めて見つめた。その力強さに思わず笑みを浮かべるはやて。それに気付かず、シグナムとシャマルはアギトの姿を見つめ、かつての邪眼を倒した推測が間違っていなかったと感じていた。

「確かに光の姿と言えなくもないな」

「ええ、光を放っているみたい」

アギトの姿を見てシグナムとシャマルはやや見とれるような声を出す。はやてもその感想には同意したが、今は一刻も早く玉座の間に行かないといけないと思い出してアギトを促した。

それに頷き返し、アギトはゴウラムトルネイダーへ声を掛ける。そのまま入口近くで待機していて欲しいと。それは終わった際の脱出のため。邪眼との戦いは激戦になる。それで疲弊した自分達が確実に脱出するために備えて欲しいと考えたのだ。

アギトの言葉を受け、ゴウラムトルネイダーはそのまま入口へと動き出す。それを追いかける形で走り出そうとするアギト達の横を何かが通り過ぎていく。それはある程度疲れが取れたために飛行魔法を使い出したフェイトだった。それに気付くも、アギト達は呼び止める事無く走り出した。

（フェイトちゃん、光太郎さんが心配なんだ。俺も早く助けに行かないと！）

既にかなり前を行くフェイトを見つめながら、アギトは思いも新たに走る。向かう先はＲＸのいる場所。今の自分ならば邪眼に遅れは取らないはず。そう確信しながら……

「最早ここまでだな、龍騎」

「くそ……」

床に倒れ込み、鎧から煙を出している龍騎を見下ろし、邪眼はそう冷酷に告げた。龍騎は何とか立ち上がろうとするも、もうそんな力もないのかただ床に伏せるのみ。アギトはそんな龍騎を見つめ、今にも泣きそうだった。

何度ユニゾンしようと思ったか。何度魔法を使って助けようかと考えたか。しかし、それをしようとする度に龍騎がアギトへ視線を向けたのだ。まだ駄目だ。そんな風に言うように。

「真司ぃ……」

それでもやられてしまっては意味がない。そう思うアギトだが、どこかで信じている事がある。それは、龍騎ならばここから何か逆転してくれるのではないかとの希望だ。だからこそ、それに一縷の望みを賭けて見守り続けているのだから。

邪眼はそんなアギトの最後の希望を消し去ろうと、その手に一枚のベントカードを取った。それはファイナルベントだった。しかしその瞬間、龍騎が何とか立ち上がり同じくファイナルベントを手にした。

「ほう……また相討ちにもっていくつもりか？」

「違う。今度は俺が、俺達が勝つ！」

「真司……？」

龍騎の告げた言葉に疑問符を浮かべるアギトだったが、そこでようやく龍騎が言っていたユニゾンのタイミングを理解した。

（そうか、そういう事かっ！　分かったよ、真司！）

邪眼はそんなアギトに気付く事もなく、馬鹿にするようにファイナルベントを使う。それに呼応して出現する漆黒龍。それがバイクへと変形していく。それと同時に龍騎もファイナルベントを使用し、ドラグランザーが変形していく。

それに乗り込む龍騎。アギトはそれに気付いてその肩へと乗った。邪眼はそれにやや怪訝そうな反応を示すが、大した事は出来ないと思ったのか同じようにバイクへと乗り込んだ。

「行くぞっ！」

「来いっ！」

同時に走り出す二台のバイク。共にウィリー状態で火炎弾を吐き出しながら進む。だが、その途中で邪眼には信じられない声が響く。

「ここだっ！」

龍騎の声にアギトも頷き、二人は同時に叫ぶ。

「「ユニゾン・インっ！」」

「なっ！？」

その声と同時に炎に包まれるドラグランザー。アギトの炎熱加速によって速度と攻撃力を増させた状態で突撃するドラグランザーに、邪眼は息を呑む。だが、それでもまだ勝ち目はあると踏んだのだろう。そのままぶつかり合う両者。

そこから拮抗したのは少しだった。ドラグランザーが口を開いて、

相手目掛けて再度火炎弾を吐いたのだ。それは、アギトが使った轟炎だった。ドラグランザーを龍騎の使うデバイスと見立て、アギトがその口から吐かせたのだ。勿論、それには従来のドラグランザーの火炎も加えて。

その強烈な一撃を受け、邪眼側の体勢が乱れた。その瞬間、龍騎達が押し返したのだ。相殺される形になりながらも、邪眼よりも先に立ち上がった龍騎は、その背に出現した翼を使って空へと飛び上がる。

それを見た邪眼が負けじと空へ飛び上がるが、空中戦でも邪眼に勝ち目は無くなっていた。全てを自分で行う邪眼に対し、龍騎は飛行そのものをアギトに任せている。そのため、攻撃へ意識を集中する事が出来たのだ。

「馬鹿なっ！　我を上回るなど……有り得ん！」

「これがデータを超えた生きる力だ！」

”一人で何でも出来るなんて思ってるお前に、アタシらが負ける訳ねーっ！”

ドラグブレードで邪眼を追い詰め、アドベントで姿を戻したドラグランザーの援護も受けつつ、龍騎はアギトと共にそう言い切った。そして、ついにその背にある不気味な翼を切り落とす。それに伴い床へと落下していく邪眼。

そして龍騎も同じように床へと下り立ち、邪眼へ告げる。もう後がないぞと。それに邪眼は怯みながらも、ある事に気付いて笑い出した。もう龍騎には自分を倒す手立てはない。ファイナルを使った以上、残る手札はストレンジのみ。それを凌げば勝つのは自分だと。

「後がないのは貴様だ、龍騎。残った一枚で何が出来る！　それがファイナルと同じ効果だとしても、それを耐え切れば我の勝ちだっ！」

「……そうかよ。なら、お望み通りにやってやる！」

”ストレンジベント”

　邪眼の言葉に応えるように龍騎はベントカードを使った。それが邪眼の告げたようにファイナルと同じ効果を発揮する。再びバイクへと変わるドラグランザーへ乗り込み、発進させる龍騎。その車体が炎に包まれ、邪眼目掛けて突撃する。

　それを見て邪眼はアドベントを使い、漆黒龍を盾として使った。吐き出される火炎弾を邪眼は漆黒龍を盾にして防ぎ、その後の突撃に備える。そんな邪眼のやり方に強い怒りを覚える龍騎とアギト。そして、自身と同じような存在を捨て駒に使う邪眼へ怒りを込めるように、ドラグランザーも吼える。

　更に邪眼は漆黒龍を前へ突き飛ばして、ドラグランザーの勢いを弱めるようにぶつけたのだ。漆黒龍を撃破し、怒りと悲しみのまま邪眼へ突撃するドラグランザー。だが、その勢いはやはり衰えていた。

　それを見てほくそ笑む邪眼。これならば持ち堪えられる。そう感じたのだ。しかし、そんな思いを打ち砕くようにそこへ有り得ない音声が響き渡った。そう、たった一度与えられたチャンス。それを龍騎がものにした瞬間だった。

”ファイナルベント”

「なんだとっ！？」

それは邪眼が知らない龍騎のもう一つの切り札。ジェイルが託した有り得ないはずのもう一つの龍の牙。二枚目のファイナルベントがドラグランザーを本来の状態へと変え、龍騎の体が空へと舞い上がる。

”行けぇぇっ！”

アギトの魔法による翼が龍騎を押し上げる。異世界にて龍騎士が得た力。アギトの炎とジェイルの爪。それが今結集し、悪夢を砕く力となって邪眼へ叩き込まれようとしていた。

龍騎の体に巻きつくように動くドラグランザー。それがその体を一瞬だけ隠すと、龍騎は一回転捻りを加えながら蹴りの体勢へと移行していく。その瞬間、龍騎の体を真紅の炎が包み込む。アギトの炎熱加速だ。更にそこへドラグランザーの火球が放たれれば……

「そんな馬鹿なぁぁぁぁ！！」

「ライダァァァキィィィック！！」

逃げようとした邪眼よりも速い速度で落下した龍騎。そして、邪眼へ放たれたファイヤードラゴンライダーキック。それが見事に邪眼を打ち砕き、爆発させた。龍騎はその爆発に包まれながらも平然と着地する。

そして、それが収まるのを見届けて頷いた。すると、そこへ大勢の足音が聞こえてきた。龍騎がそれに気付いて振り向くと、そこにはヴァルキリーズがいた。全員が龍騎の姿を見て何かを悟り、笑みを浮かべながらサムズアップを見せる。

「みんな、無事だったんだな」

「ああ、当然だ」

「言ったはずだぞ、姉妹が揃えば負けないとな」

「あたし達にかかれば邪眼の一体ぐらい楽勝だよ！」

サムズアップを返してからの龍騎の言葉に、トーレにチンクとセインが返事を返す。だが、その表情は喜びに満ちている。

「兄上もご無事で何よりです」

「苦戦していたようですが、兄様なら勝利すると信じてました」

「お怪我はありませんか？」

セッテ、オットー、ディードという真司が教育係をしていた三人が揃ってその傍へ近付き、その体を心配する。

「少し休んでいたいけど、時間が惜しいわ。ゆりかごへ急ぎましょう」

「真司君、いいわね？」

ウーノが現状を確認し周囲へそう告げると、ドゥーエが龍騎へそう問いかける。それに龍騎も頷き返した。変身をし直さねばならないが、ユニゾンは体にかける負担が大きい。そのため、今はゆりかごまでユニゾンしたまま飛び、そこで解除するべきだと考えたのだ。

「なら、善は急げッス！」

「行こうぜっ！」

ウェンディとノーヴェがそう告げて走り出すと、全員がそれに続けと動き出した。空を飛べない者達は空を飛べる者達が運ぶ事になり、チンクとセインをその腕に抱えて飛行する龍騎。その制御をアギトに任せ、龍騎はこの後待っているだろう戦いへ意識を向ける。

（絶対三人も勝ってるはずだ。なら、俺も急がないとな！）

自分の先輩とも言える三人の仮面ライダーの勝利。それを心から信じながら……

「ＲＸパンチ！」

「ふんっ！」

ＲＸパンチと邪眼のパンチが交差する。それが互いにあと少し届かず終わり、即座に両者が次の攻撃を放つ。同時に放たれた蹴りはぶつかり合い、火花を散らして下ろされた。そこからもう一度拳を繰り出そうとするＲＸへ邪眼が電撃を放った。

それがＲＸの腹部を直撃し、その体を後ろへと飛ばした。床を転がるＲＸ。それを見つめ、邪眼はゆっくりとＲＸへ近付いていく。蓄積されたダメージからか、ＲＸは立ち上がろうとしない。その体を邪眼が足蹴にする。

「無様だな、世紀王。所詮、ここまでだったという事だ」

「くっ……」

ＲＸが最初の頃の威勢を無くしたのを見て、邪眼は勝ち誇るように笑う。そして、とどめとばかりに踏みつけていた足を大きく上げて、一気に落とした。だが、その瞬間ＲＸの体が液体のように変化し、邪眼の周囲を駆け巡った。

それに戸惑いと驚きを隠せない邪眼。そして、それが背後へ回った瞬間、実体化して邪眼を蹴り飛ばした。

「トゥア！」

「ぬおっ！？」

体勢を崩す邪眼だったが、何とか踏み止まり即座に振り向いた。そこには、青い体のＲＸがいた。

「き、貴様は……」

「俺は怒りの王子！　ＲＸっ！　バイオっ！　ライダー！！」

「バイオライダーだと？！」

「バイオブレードっ！」

邪眼の驚く声を聞きながら、バイオライダーはその腕から専用武器であるバイオブレードを出現させた。それを手にして邪眼へ向かっていくバイオライダー。それに対して邪眼は立ち直って電撃を放つ。しかし、それをバイオライダーは手にしたバイオブレードで受

け止め、振り払った。
　周囲に散る電撃のエネルギー。それが火花を散らす。邪眼はそのバイオライダーの行動に微かに怯む。それを見逃さず、バイオライダーは宙へ跳び上がった。それを迎撃しようと動く邪眼だったが、バイオライダーは両手を交差させて叫ぶ。

「バイオアタック！」

「何っ！？　ぐぬっ！」

　ゲル状となったバイオライダーは高速で邪眼へと突撃し、その体勢を崩す。更に着地した瞬間、その手にした刃を構え逆袈裟に斬り上げた。バイオライダーの必殺技であるスパークカッターだ。それが邪眼へ更なるダメージを与える。
　それでふらつく邪眼を見て、バイオライダーは姿を変える。鋼鉄の体のロボライダーへと。

「ぐっ……貴様ぁ！」

「俺は炎の王子！　ＲＸ！　ロボライダーだっ！」

　一度打ち破ったロボライダーに変わった事に疑問を感じる邪眼だったが、好都合とばかりに攻撃をしようとする。だが、ロボライダーはボルティックシューターを邪眼ではなく、天井へと向けた。
　邪眼の電撃を耐えながら、ロボライダーが放った攻撃は見事に天井を破壊した。それと同時にロボライダーがＲＸへと戻っていく。
そして、その体に太陽の光が降り注いだ瞬間、不思議な事が起こった。

「な、何だとっ！？」

ＲＸの体が瞬時に癒えていったのだ。今までのダメージが嘘のように消え、そこには万全な状態に戻ったＲＸがいた。あまりの出来事に邪眼さえ言葉がない。そんな邪眼へＲＸは体中から眩しい輝きを発すると、戦闘態勢を取った。

「太陽の光ある限り、俺は何度でも甦るっ！」

「そんな馬鹿なっ！？」

ＲＸの言葉に驚愕の声を返す邪眼。それにＲＸは拳を握り締めて告げる。

「罪無き人々を襲い、異世界を混乱と恐怖で支配しようとする邪眼。俺は、絶対に貴様を許さんっ！」

「お、おのれぇ……仮面ライダーめっ！」

「行くぞっ！　トゥア！」

ＲＸと対照的に受けたダメージから動きが鈍る邪眼。その電撃もどこか最初の頃の凄まじさを失ったようにＲＸには見えていた。それをかわしながら、邪眼の背後へ下り立つＲＸ。そして、邪眼が振り向く前に瞬時にロボライダーへ変化しボルティックシューターを放つ。

それが電撃を放とうとしていた邪眼へ直撃する。そして、追い撃ちとばかりに再び姿をＲＸへ戻して跳び上がる。そして、その姿勢が蹴りの体勢へと移行していく。だが、それは後方宙返りからのＲＸキックではない。それはかつての自身の必殺技と同じ姿勢。違いは片足ではなく両足での蹴りである事だろう。

「ライダーキックっ！！」

故にＲＸキックとは呼ばない。しかし、以前と違いキングストーンのエネルギーだけではなく、太陽エネルギーを加えたそれはＢＬＡＣＫの頃の比ではない。奇しくもクウガが偽クウガに放ったものと同じ蹴りが邪眼へ炸裂し、その体を大きく蹴り飛ばした。

そしてＲＸは着地すると同時に左手をベルト部分であるサンライザーへ回した。そこから出現するは光の杖。邪悪を許さない太陽の輝きを具現化したＲＸの必殺武器。

「リボルケインっ！」

それを手にしたＲＸはリボルケインを回すようにしながら右手へ持ち変えると、体を起こそうとする邪眼へ向かって走り出す。それに気付き、電撃を放つ邪眼。それをかわしながら、ＲＸは邪眼へそれを振り下ろす。

それが邪眼の体へダメージを与えていく。反撃しようと拳を繰り出す邪眼だったが、それをＲＸは前転するようにかわして素早く腹部へリボルケインを突き刺した。その苦痛に呻く邪眼。

「こ、こんな事が……こんな事がぁぁぁぁ！！」

「邪眼！　五万年前にアギトの光に敗れた時点で、貴様は眠るべきだったんだ！」

「何故、何故だ……何故我が勝てぬ……不完全とはいえ、光の力さえ取り込んだというのにっ！」

「力に溺れ、どこまでも他者を見下す貴様にアギトの光は味方しな

い。そして、自分一人で勝つ事が出来ると思い上がった。それがお前の最大の敗因だっ！」

邪眼の腕が微かに動き、ＲＸへ反撃をしようとするが、それを気付いたＲＸは更に強くリボルケインを突き入れる。それが邪眼の体から抵抗する力を奪っていく。そして、遂に邪眼の体からリボルケインが引き抜かれた。

腹部から火花を噴出させながら、邪眼はもがくように消滅に抗おうとする。それを後ろにし、ＲＸは勝利のサインを描いていく。それが終わると同時に邪眼が後ろへ大きく倒れ込み、爆発して果てた。

その爆風に身を晒しながらも、ＲＸは視線を天井に出来た穴へ向けた。先程よりも上昇がゆっくりになったと感じたのだ。その証拠にそこから見える空は先程よりも迫る速度が遅くなっていた。

「……動力炉を破壊したんだな。これで後は玉座の――」

「ＲＸっ！」

現状から事態を把握するＲＸ。そこへ女性の声が聞こえてきた。それに振り向くＲＸ。そこには喜色満面のフェイトがいた。先程の爆発を聞いていたのだ。そして、今自分の目の前にＲＸがいる事でその勝利を理解したのだから。

「フェイトちゃん、無事だったか」

「はい。エリオとキャロもヴィータ達と一緒に動力炉へ向かって、さっき破壊出来たと連絡が」

「そうか。なら、残るは……邪眼の本体だけだ」

フェイトの言葉を聞いてＲＸはクウガへ通信を行い、その内容を伝えながら周囲に映るモニターへ視線を向けてそう告げた。フェイトもそれに倣い、視線をモニターへ向けてそれに頷いた。

アギトははやて達と共に走り出していた。龍騎はヴァルキリーズと共にゆりかごへ向かっていたし、クウガは既になのは達と合流していたからだ。これで全ての戦力が揃う。そう思い、フェイトはそっとＲＸへ近付いた。

「あの、光太郎さん」

「……何だい？」

フェイトの呼び方に何かを感じ、ＲＸは優しい声を返す。フェイトはそれに笑みを浮かべるが、やや躊躇うような表情へ変わる。そんなフェイトに疑問符を浮かべるＲＸだったが、それでも黙ってその続きを待つ。

やがて意を決したフェイトは、ＲＸへ抱きついて告げた。絶対に共に帰ろうと。それにＲＸは驚く事無くフェイトの肩へ手を静かに置いて頷いた。その温もりを嬉しく思いつつ、フェイトは名残惜しそうに離れた。そこにはもう魔導師としてのフェイトが立っていた。

「行きましょう、ＲＸ」

「ああ！」

二人は揃って走り出す。その光景はお互いにとっては馴染みとなった雰囲気を与える。それを感じながら、ＲＸは思う。先程見た中に邪眼はどこにも映っていなかった。そう、邪眼の本体は自分達を待っているのだろうと。

（俺達が全員玉座の間に揃うのを待っている。その理由は……何だ？）

その狙いが読めず、ＲＸは困惑しながら走る。何か嫌な予感がする。そんな不安を振り払うように……

玉座の間でクウガと合流したなのは達は、その姿に軽い驚きを見せていた。黒の金のクウガは、ＲＸに近い印象を与えたのだ。それについてなのは達が尋ねると、クウガはこう答えた。

「これが俺の安心して使える最後の姿なんだ」

「「「安心して？」」」

その言葉になのは以外が疑問符を浮かべる。なのはだけはそれが何を意味するかを理解し、納得していた。そして、スバル達へ凄まじき戦士の事を説明した。クウガでさえ制御出来るかどうか不安になる力。それがクウガの本当の最後の姿なのだと。

その言葉から三人はその恐ろしさを感覚的に感じ取った。仮面ライダーでさえそれを使う事に不安を抱く力。それは、本当に恐ろしいものだと思えたのだ。そんな三人にクウガは優しい声で告げる。そんな力を使わなくても自分は邪眼に勝てるから大丈夫だと。

「だって、俺だけじゃなくて三人も仮面ライダーがいる。それにスバルちゃん達だっているしね」

「五代さん……はいっ！」

憧れの人物から頼りにされている。そう感じてスバルは嬉しそうに握り拳を見せた。ティアナもギンガもそんなスバルに笑みを向け、なのはもそんな雰囲気に笑みを零す。そこへレイジングハートからの報告が入った。

”マスター、反応がありました”

「っ！？　どこ！？」

なのはのその声にクウガ達が雰囲気を変える。戦士のそれへと。そんな空気を感じながら、なのははレイジングハートが告げた邪眼の現在位置に驚きを隠せない。それは事もあろうに玉座の間だったのだ。一度は反応がないと言われたにも関らず、そこにいるとの報告になのはは思わず視線を玉座へ向けた。

すると、それに呼応するようにそこへ空間の歪みが出現した。次の瞬間にはそこに邪眼が座っていた。クウガはそれに驚きながらも、なのは達を庇うように前に立って毅然と構えた。

「まぁ、待て。今は我にも戦う気はない」

「どういう事よ！」

邪眼の第一声に困惑するなのは達。ティアナだけはそれが何かの作戦ではないかと思い、警戒するように叫んだ。それに邪眼は小さく笑うと、こう言い切った。

――絶望を与えるのは、ライダー共が全て揃ったところで始めんとな。

それにクウガ達は納得してしまった。納得してしまったのだ。あまりにも邪眼らしい理由のために。だが、警戒を解く事はしない。いつ攻撃されてもいいように身構え、その視線は邪眼へと注がれていた。

そして、なのはは腕の中で眠る少女をどうするかと考える。下手な事をしてまた邪眼に利用されると不味い。そう思うなのはへ邪眼がつまらなさそうに告げた。もう利用価値の無い物に用はないと。それに怒りが湧き上がるなのはだったが、それを押し殺して少女を優しく後ろの方へ下ろした。

しかし、クウガはそんななのはへ少女を連れて一度ゆりかごから出る事を薦めた。それならば何の気兼ねもなく戦えるだろうからと。だが、それを聞いた邪眼はもうこの部屋から出る事は許さないと告げた。

もしそれを破るのなら、いますぐにでもこのゆりかごを墜落させるとも続けて。それにクウガ達が疑問符を浮かべた。邪眼はそんなクウガ達の気持ちを理解し、教えたのだ。

「既に聖王は力を失った。にも関らず、どうしてこのゆりかごは浮いていると思う？　我がそのコピーの遺伝子を取り込んでいるからだ。しかし、我がここから消えるだけでこの船は墜落する。動力炉も……先程破壊されたのでな」

邪眼がそう告げるのと同時にそこへＲＸとフェイトが現れ、玉座に座る邪眼に気付いて警戒しながらクウガ達の方へと近付いていく。しかし、邪眼が少しも攻撃をしてこない事に疑問を抱き、ＲＸはクウガの隣に立つと視線を邪眼へ向けたまま尋ねた。

「どういう事だ、クウガ」

「邪眼は俺達が全員揃うまで待つつもりです」

「……そういう事か」

クウガの返事にＲＸは理解したとばかりに頷いて邪眼を睨む。フェイトも同じ事をなのはから聞かされ、同じように邪眼へ睨みつけるような視線を向けた。この期に及んでまだ自分達を侮っていると感じたからだ。

しかし、邪眼の余裕を自分達が壊す事はしない。全員揃ってからの方が戦力的にも確実だからだ。邪眼がどんな策を弄してきたとしても、それならば勝てる。そう誰もが思っていたのだから。

やがて、そこへアギトとはやて達が現れた。そして同じように邪眼に気付くも、誰も攻撃していない事と攻撃されていない事を悟り、不思議に思いながらも警戒しつつクウガ達へと合流する。

それぞれが事情を説明される中、フェイトはエリオ達へ念話を使い玉座の間の状況を伝えていく。それから少ししてヴィータ達が現れる。玉座に座る邪眼に目つきを鋭くするも、事前に聞いていたためそのままクウガ達へ合流した。

「ご苦労さん、ヴィータ。ザフィーラもお疲れ様や」

「エリオ達が来てくれて助かったぜ。あたし達だけじゃもう少し手こずったからな」

「どういう事？」

はやての言葉に小さく笑みを浮かべるヴィータ。その答えにシャマルが少し不思議そうな声を返す。それに答えたのはザフィーラだった。

「ヴィータの突破力をブーストで底上げし、エリオがそのヴィータを背負う形で突撃して破壊力を増させて、やっと動力炉を破壊出来たのだ。最初二人でやった時は傷一つつかなくてな」

「そうか。よくやったな、エリオ、キャロ」

「いえ、お役に立ててよかったです」

「でも、おかげで少し疲れました」

シグナムの言葉に少しだけ嬉しげに答えるエリオとキャロ。そんな二人に笑顔を浮かべる周囲。アギトはクウガとＲＸに入口にゴウラムが待機している事を伝えていた。それに二人は頷き、いざとなった時の脱出手段を考えていく。

そんな三人へ大勢の足音が微かに聞こえてきた。それが何を意味するかを考え、三人は小さく頷き合うとなのは達へ告げる。龍騎達がもうすぐここへ来ると。それになのは達も頷き返し、気持ちをもう一度引き締め直す。

すると、邪眼が通路の方を見つめて小さく呟いた。

「来たか……」

それと同時に龍騎がヴァルキリーズとアギトを伴って現れた。その互いの無事を確認し合って喜びを見せる一同だったが、すぐにそれを消して合流すると同時に邪眼に対して構えた。それを見つめ、

邪眼はゆっくりと玉座から立ち上がった。

「さて、ようやく揃ったか。別れの言葉は交わしたか？」

「そんな必要はない！」

「覚悟しろよ！」

「俺達が揃ったのならっ！」

「もう絶対負けないっ！」

ＲＸが、龍騎が、アギトが、クウガが告げていく言葉に全員が頷き、凛々しいままに邪眼を睨む。それを受け、邪眼は高笑いを上げると一言だけ返した。

――では、絶望の幕を上げるとしよう……

遂に邪眼との最終決戦の時が来た。

揃いし四人の仮面ライダーとなのは達を前に、邪眼は少しも動じる事無く立ちはだかる。

果たして、邪眼の余裕は一体どこからくるのか？　予言はどのような形で現実となるのか？

そう、誰もそれを知らないのだから……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

次回、邪眼との決戦開始。そして、同時に予言の最後の部分が近付いてきました。

正直、次回を書くのは精神的に辛いですが、頑張ってみます

憎悪

ライダー達と邪眼の戦いは激しいものだった。なのは達は援護をしたかったのだが、ヴァルキリーズ以外軒並み無力化されていたため、それが出来ずにいた。そう、邪眼が何かの操作を行っただけでゆりかご内に強力なＡＭＦが発生したのだ。ユニゾンさえ解除される程のその中では、さしものなのは達であっても魔法の行使は出来なかったのだから。

しかし、ヴァルキリーズもライダー達の戦いに参加する事は厳しいというしかなかった。邪眼は両手から電撃だけではなく緑色の破壊光線を放つ事も出来るようになっていて、更にその気になれば空間転移までやってのけるのだ。

シャドームーンの能力と同等のそれは、ヴァルキリーズだけではなく魔導師の中で唯一戦える力を有していたナカジマ姉妹をも苦しめていた。結局、ライダー達四人に邪眼との戦いを託し、戦闘機人として戦う力を持っていた者達は魔法を使えず悔しむなのは達を護衛するしかなかったのだ。

「くっ……本当にシャドームーンと同じ力とは」

ＲＸは邪眼と直接対峙し、嫌悪感と焦燥感を合わせた声で呟く。ＢＬＡＣＫだった頃もＲＸとなった時も苦しめられた相手。その強さをまざまざと思い知らされていたのだ。

しかも、今はその時と違い仲間のライダーが三人もいるにも関らず、苦戦しているのだ。その要因は、ＲＸにも分かっている。なのは達の存在だ。魔法を使えない状態では、自分の身を守る事さえ出来ないため、邪眼の攻撃に晒される度に誰かが守りに入る。時には、全員でそれをしなければならない時もあり、徐々にだがダメージを

負わされていたのだ。

しかも、ＲＸが回復が出来るようにと天井を崩そうとすると、必ずといっていい程邪眼の妨害が入る。先程の戦いでのデータが邪眼へ送られているという何よりの証拠だった。

（ちくしょう！　みんなが集まるのを待ってたのはこのためかっ！）

（最初からはやてちゃん達を無力化して、俺達の枷にするつもりだったんだ！）

邪眼の破壊光線を手にしたドラグブレードで防ぐ龍騎とシャイニングカリバーで弾くアギト。その心境は怒りと悔しさに満ちている。その後方には、悔しさを表情に押し出しながら身動きの取れないなのは達がいる。出来る事ならここから脱出して欲しい。だが、そうすると邪眼が空間転移を使ってなのは達へ何をするか分からないし、最悪ゆりかごを墜落させて地上へ大きな被害を与える事にもなりかねないのだ。

しかし、護衛のナカジマ姉妹とヴァルキリーズも疲れが出始めているし、自分達も少なからず疲弊している。このままでは邪眼に押し切られると思いながらも、ライダー達は諦めてはいなかった。それは、今も主体となって戦うクウガの言葉がそのまま理由だった。

「ライダーよ、我に勝てる方法を教えてやる。それは、後ろの足手まとい共を見捨てる事だ」

「そんな事はない！　なのはちゃん達がいるから俺達は今日まで戦えた！　今だって魔法が使えなくても、俺達と一緒に戦ってくれてるんだ！」

「馬鹿な事を……魔法の使えない者達が戦える訳はないのだ。利用価値のない存在に生きる意味はない」

「違うっ！　それは誰かが決める事じゃないし、決めていいものじゃない！」

邪眼のエルボーを受け止め、クウガはお返しとばかりに拳を放つ。それを残った片手で叩き落し、邪眼は即座に蹴りを放った。それにクウガが軽く下がるが、それと入れ替わるようにＲＸが邪眼へと挑む。

そして、その蹴りを捌く邪眼だったが、クウガへの追撃は出来ずに終わる。ＲＸが攻撃する間に体勢を整えたからだ。それでも、邪眼は焦りもなくつまらなそうに鼻を鳴らすとＲＸへ攻撃を再開する。

それを見つめ、なのは達は揃って言葉がない。クウガが告げた内容。それが嬉しく、だがそれに応える力がない事が悔しくもあったのだ。

「五代さん……っ！」

「何とかＡＭＦを無効化出来れば……」

なのはが流れそうになる涙を堪え、小さく五代の名を呼ぶ。それを聞きながら、フェイトは現状を打破出来る一番の方法を考える。それを聞いて、ウーノがすぐにある事を思い出す。それは、現在も外の空戦魔導師達を援護しているガジェットの存在。

それを集中させればこのＡＭＦも無効化。もしくは弱体化出来るはず。そう思いついたのだ。それをクアットロとオットーも思いついていたらしく、三人はすぐにガジェットを制御し、ゆりかご内部

へ来るように操作する。

「今、ガジェットを誘導しているわ。でも、おそらくＡＭＦへ干渉出来るのは長くないはずよ」

「干渉出来るのなら十分や。少しでも時間を作ってくれるだけでな」

ウーノの言葉にはやてはそう真剣な眼差しで返し、周囲へ視線を動かす。それだけで全員がはやての言わんとしている事に気付き、無言で頷く。クウガが言った魔法が使えないでも戦う。それは気持ちを決して折らない事だ。

最後の最後まで諦めず、希望を持ち続ける事。誰もがこのままで終わりたくはないと思っていたのだ。今も目の前で邪眼の攻撃から身を挺して守ってくれているライダー達。その背中を守るためにも。

「ギン姉、ティア、エリオ、キャロ……私達でクウガを援護しよう」

「そうね。クウガの武器を使わせるなら、ティアナのデバイスが一番だわ」

「クロスミラージュは片方渡せばいいし、残った魔力で幻影を出せる……」

「邪眼の電撃は僕が相殺してみせます」

「私はブーストでクウガをサポートします」

そう言い合って頷き合うスバル達。そんな風に五人がクウガ援護の打ち合わせをする中、その隣ではシグナム達がアギト援護の打ち合わせをしていた。

「我々はアギトを支えるぞ」

「ええ、私は何とか隙を見つけてライダー達に回復魔法を施すから」

「あたしとシグナムはアギトの援護に回る」

「その間のシャマルの守りは任せろ。邪眼の攻撃を全て防ぎ切ってみせる」

「リインもお手伝いするですよ」

守護騎士として、そして家族としてアギトを助けよう。そう締め括るシグナム。その言葉にヴィータ達も頷いた。そんな話を聞けば、当然のようにヴァルキリーズも龍騎を助けるための段取りを話し出す。

「じゃ、私達は龍騎ね」

「全員では些か数が多いからな。ガジェットの制御をする三人の護衛にも人数を割り振るぞ」

ドゥーエの言葉にトーレが姉妹達へ方針を告げる。

「ドゥーエお姉様とディードちゃんは護衛確定としてぇ……」

「私とウェンディもだ。いざとなれば盾代わりになれるしな」

チンクの言葉にウェンディも苦笑しながらも拳を上げる事で応える。

「あたしは邪眼の隙を突いて地面に沈めてみるよ」

「私はトーレ姉上と共に攻撃ですね」

セインとセッテは軽く拳を握り、そう凛々しく告げた。

「僕らはガジェットへ意識を集中するから」

「おう、アタシらが息を合わせりゃ負けはないからな」

オットーを安心させるようにノーヴェが力強い口調で言い切った。

それに全員が頷きを返す。

「あたしは護衛と援護両方に回るよ」

「そうッスね。そういう役割も必要ッス」

「ライダーの頑張りに何としても応えましょう」

ディードの締め括りにもう一度全員が頷いた。だが、それを聞いていたアギトが悔しそうにしていた。彼女はもう戦う力のほとんどを残していないのだ。ユニゾンした際に魔力を使いすぎたため、もう出来る事は残されていない。

それでも、自分は何か出来るはずだ。そう思うアギトは、その悔しさを口に出す事はない。その代わりに告げたのは……

「絶対に諦めないかんな！」

ヴァルキリーズはそんなアギトの言葉に笑みを浮かべながら決意

を新たにする。そんな周囲を見て、なのは達三人は自分達が援護すべき相手を見つめていた。

「RXは太陽さえ差し込んでいれば無敵……」

「でも邪眼もそれを知っているから、絶対に天井を破壊させないようにしてる」

「やから、わたし達はライダー達の代わりに動いて、太陽が見れるようにしよか」

三人はそう言い合って決意を固める。魔法が使えない今、自分達が出来る戦いは使えるようになった時の事を考える事。数少ない時間。それを絶対に逃さないようにするために。なのは達がそうして反撃の機会を窺う中、ライダー達と邪眼の戦いは苛烈を極めていた。

「ぐっ！」

「そこだ」

「五代さんっ！」

邪眼の拳とクウガの拳が衝突する。その重さに思わず呻くクウガ。その僅かな隙を突いて邪眼が回し蹴りを放った。それがクウガを大きく蹴り飛ばした。それを見て龍騎がクウガへの更なる追撃を阻止せんとドラグブレードで斬りかかるのだが、それを邪眼はあっさり受け止めるとお返しとばかりに膝蹴りを放つ。

「邪魔をするな」

「がはっ！」

「真司さんっ！」

その一撃が龍騎の腹部を襲い、龍騎が思わずしゃがみこむ。邪眼はそんな龍騎を蹴り飛ばし、とどめとばかりに電撃を撃とうとした。それを見たアギトがシャイニングカリバーで電撃を切り払い、そのまま邪眼へ斬りかかる。それを受け止め、邪眼がその拳をアギトの顔へ叩き込んだ。

「どけ」

「ぐあっ！」

龍騎の横に重なるように倒れるアギト。邪眼はそれへ追撃を加える事無く、瞬時に後ろを振り向いて破壊光線を放つ。それが後方から迫っていたＲＸを足止めした。

「くっ！」

「そうはいかんぞ、世紀王」

邪眼の言葉を聞きながら、ＲＸはすぐに体勢を整えて構えた。しかし、他の三人はそうもいかない。そう、あの偽者達との戦いで受けたダメージ。それを太陽の光で回復出来たＲＸと違い、三人は自然回復した分しか疲れを癒していないのだ。

つまり、その体調は万全とは程遠い。そんな体でシャドームーンと同等以上の邪眼と戦っているため、その疲労は既に限界近くまで迫っていた。それでも三人は何とか立ち向かうべく構える。そんな姿を見て、邪眼は嘲笑うかのように告げた。

「無様だな、仮面ライダー。世紀王を除けば瀕死の状態か」

その言葉にクウガは、アギトは、龍騎は構えを崩す事無く告げる。

「それでも……俺達は戦う！」

「そうだ……お前みたいな奴がいる限り、何度だって立ち上がる！」

「俺達は仮面ライダー！　みんなの希望なんだっ！」

肩で息をしながら、三人はそう言い切った。その姿にＲＸも感銘を受けていた。改造手術ではない方法でライダーとなった三人。それがもう既に自分達と同じ気持ちで仮面ライダーを名乗っている。そう強く感じる事が出来たからだ。

それは、人は誰でも仮面ライダーになれるとＲＸへ告げていた。例え変身出来なくても、その心が自然を愛し、平和を愛するのならその者は仮面ライダーなのだと、そうＲＸへ信じさせるだけの輝きがあったのだから。

「邪眼っ！　貴様がどれだけ追い詰めても無駄だ！　人は絶対に絶望には……闇には屈しないぞっ！」

邪眼の背後からＲＸが告げた言葉。それにクウガ達だけでなくなのは達も力強く頷いた。その光景が邪眼へあの無人世界での光景を思い出させる。転生したにも関らず、なのは達が一切絶望しなかった光景を。

「ふんっ！　精々ほざくがいい！　そこまで言うのならば絶望を見せてやる！」

そう言い放った邪眼は、空間転移でその場から消えた。それに誰もが警戒する中、クウガは即座に超変身しライジングペガサスへと変わる。その超感覚を使い、邪眼がどこに現れるのかを察知したクウガは慌ててそこへと走り出す。

その体が緑から青へと変わり、クウガは床に横たわる少女へと飛びついた。それと同時にそこへ邪眼が出現した。その手から放たれた破壊光線が少女を庇うようにしていたクウガへ直撃する。

「やはり貴様が気付いたか、クウガ！」

邪眼は少女を餌にクウガを倒す事を狙っていた。それは、クウガがなのは達の精神的支柱になっていると踏んだから。絶望になのは達を包むには、まずクウガを始末する必要があると判断したのだ。

――――クウガっ！！

全員の叫びが響く中、その攻撃がクウガを五代へと戻した。それになのは達が息を呑む中、ライダー達が動いた。更なる攻撃をさせないために。アギトが邪眼の注意を引くためにへ飛び掛る。それに応じて龍騎はドラグブレードを手に、なのは達へ下がるように言いながら邪眼目指して駆ける。RXは五代と少女を守るべくバイオライダーへ変化して即座に近寄った。

「五代さんっ！」

五代の体を軽く抱き抱えるバイオライダー。瞬時にその視覚機能を使い、状態を把握する。そして、命に別状はない事を確かめ小さく安堵するバイオライダーだったが、すぐに意識を邪眼へと向ける。

邪眼はアギトと龍騎の二人を相手に余裕さえ感じさせていた。疲

れから動きの鈍る二人へ、拳を、蹴りを叩き込み、とどめとばかりに電撃と破壊光線を薙ぎ払うように放ったのだ。それが二人を吹き飛ばし、床へと転がした。

「「アギトっ！？」」

はやてとティアナの叫びが響く。二人の視線の先には変身が解け、額から血を流して倒れる翔一の姿がある。気を失っているのか微かにさえ身動きしない。そして、そんな二人の叫びと同時にヴァルキリーズの叫びも響き渡った。

「「「「「「「「「「龍騎っ！？」」」」」」」」」」

真司も翔一と同じく額から血を流していた。更には口からも出血しているのか、血が流れているのだ。そんな光景になのは達が絶句する。初めて見るライダー達の敗北。五代が、翔一が、真司が力及ばず倒れている。それでも、まだなのは達は絶望しない。

何故ならば、まだ邪眼と戦うライダーがいるのだ。たった一人となっても、三人が立ち上がる事を信じて戦う戦士が。ＲＸは邪眼と戦いながら、強く願っていた。そう、三人が再び立ち上がる事をだ。

「残るは貴様だけだ、世紀王！」

「まだだ！　まだクウガ達は負けていない！　そうだ！　仮面ライダーは負けないっ！」

「世迷い事を……奴らはもう死んだも同然よ！」

「死ぬものか！　戦いが終わるまで、いや、戦いが終わろうとも仮面ライダーは死なないっ！」

邪眼の言葉を力強く否定していくＲＸ。だが、やはり邪眼の力は強大。一人で善戦するＲＸだったが、空間転移を多様してのヒット＆アウェイに劣勢を余儀なくされる。バイオライダーへ変化してそれに対処するも、やはり反撃に繋げられない状態が続く。

それを黙って見ている事しか出来ないなのは達は、その光景に誰もが悔しさに拳を握り締めていた。そんな中でも、なのは達は五代達三人を護衛するようにしていた。気を失っていたため、セインがＩＳを使ってその体を少しでも安全な場所へ運んでいたのだ。しかし残る少女を運ぼうとした時、その動きに邪眼が気付いた。

「させるか！」

「しまったっ？！」

「やばっ！？」

邪眼の動きを阻止しようとするバイオライダーだったが、僅かに届かず。ゲル化しようにも、邪眼の更なる追撃を防ぐためにその場を動けなかったのだ。こうして邪眼の攻撃は阻止される事なく、セインへと向かっていく。それを前にセインは迷った。このままでは間に合わないと感じたのだ。少女を守ろうとすれば自分が死ぬかもしれない。だが、逃げれば少女が確実に死ぬ。

ちらりと視線を動かすセイン。少女は意識を取り戻して不安そうな表情を浮かべていた。それを見て結局セインが選んだのは、攻撃から少女を守る事だった。戦闘機人である自分の耐久力にボディースーツの防御力を考えて、まだ生き残れる可能性があると踏んだからだ。

少女を背にし、ＩＳで体を半分床に潜らせ両腕を交差させて防御

の姿勢を取るセイン。光線の威力に体を飛ばされないようにだ。そんな彼女へ放たれた破壊光線が迫る。その瞬間、誰もがセインの死を覚悟した。だが、そんなセインを庇うように動く者がいた。

――――パパ、止めてっ！

その小さな体がセインの代わりに破壊光線の直撃を浴びる。その口からは耳を覆いたくなるような絶叫が漏れていた。その声に気を失っていた五代達が目を覚ます。すると、その視線が当然のようにその声の主へと動いた。

「「「っ？！」」」

そして、言葉を出せなかった。セインも眼前の光景に何も言えないまま目を見開いている。周囲さえ目の前の光景に、驚愕の表情のまま声を失ったように沈黙していた。やがて光線は途絶え、その直撃を受けていた者がセインへ倒れこんだ。

「う、嘘でしょ……嘘だって言ってよっ！？」

「パパ……どうして……？　この人達、私の事を……助けて、くれ……たんだ……よ？」

少女は涙ながらのセインの言葉にそう笑みを浮かべて答える。その返事に誰もが言葉にならない。涙を流し、少女の体を抱きしめるセイン。その生命活動が弱くなっていくのを戦闘機人としての能力が教えてくる。

それに余計に涙が止まらないセイン。いや、セインだけではない。ヴァルキリーズは全員それを悟っていたし、ナカジマ姉妹も同じように少女の鼓動が弱くなっていくのを感じて、涙を流していた。

なのは達でさえ、直感として理解していた。もう少女が助からない事を。それでも涙を流しながら、なのはは少女の元へ駆け寄った。セインはそれに気付いて少女をそっとなのはへ手渡す。それを受け取り、なのはは強くその手を握る。

「駄目だよっ！　諦めちゃ駄目だからっ！　絶対助けるからっ！！」

「……お姉、さん。私……お姉、さんに……あやま、らない……と……」

「いいよ！　もういいからっ！　だから喋っちゃ駄目っ！！」

「悪い、人なんて……言っ、て、ごめ、んさな、い……それと……あり、が……とう」

なのはの言葉に少女は最後には笑顔で礼を述べて静かに目を閉じた。同時にその握っていた手から力が抜けたのを感じた瞬間、玉座の間になのはの絶叫が響き渡った。同時に誰もが涙を流す。一部はその拳を床へ叩きつけながら悲しみの涙を、悔しさの涙を流した。

そんな中、バイオライダーは邪眼を牽制しながらその会話を聞き、きつく拳を握り締める。脳裏に甦るは佐原夫妻の事。最後の最後で守れず死なせてしまった存在の事だ。

（守れなかった……俺はまた守れなかったっ！）

後悔が激しい悲しみと怒りの気持ちをバイオライダーに抱かせる。その仮面で流れる涙を隠しつつ、それでも邪眼に対して睨みを利かせるのを忘れない。

「ちくしょぉぉぉぉぉっ！！」

「どうして……どうしてこんな事にっ！！」

真司の叫びと翔一の叫びがなのは達の心に響く。これだけの者がいながら、幼い少女一人守れなかった。その気持ちが全員の心に怒りと悲しみと悔しさを抱かせる。

するとその声に邪眼が動きを止めた。そして、少女の亡骸を抱きしめ涙するなのはを眺め、吐き捨てるように言い放った。

――ふんっ！　役立たずが。失敗するだけでは飽き足らず、最後には邪魔までしよって！

その言葉に全員が睨むように邪眼へ視線を向ける。しかし、その時玉座の間の空気が重くなった。それに誰もが息苦しさを感じる中、その原因に気付いたバイオライダーだけはまさかと思い、邪眼に隙を見せる事になる危険を冒して後ろを振り向いた。

「不味いっ！？　五代さん、駄目だっ！」

その声に全員の視線が五代へと注がれる。五代の体は普段の変身ではない現象を起こし出していた。黒いオーラが全身を覆うその光景に、誰もが嫌なものを感じる。そう、まるで闇を纏うようだったのだ。

五代は激しい憎悪を邪眼へ抱いていた。幼い少女を自分のために利用した事。それが負けるとあっさり利用価値がないと告げた事。更にそれを殺した事にまったく後悔も反省もしていない事。それらが否応無く邪眼への怒りを起こさせる。

そして、少女を失って涙を流す親しい人達。それが五代にあの緑川学園以上の悔しさと無力感を叩き付けた。何故ならば、五代にとって少女はヴィヴィオと同じにしか見えなかった。故にその死に様がどうしてもヴィヴィオに重なってしまうのだ。明るく未来と希望に満ちた世界を生きる事が出来たはずの命。夢さえ見る事が出来ずに死んだ少女に対して、五代は強い無念と悲しみを抱きながらも邪眼へそれ以上の憎しみを抱いてしまったのだ。

殺す事を楽しむ未確認と殺す事を何とも思わない邪眼。その共通点はただ一つ。自分のために他者を平気で踏み躙る事。そんな奴らを許してはいけない。しかし、今のままの自分では倒す事が出来ない。

その瞬間思い浮かぶのは黒い体の四本角のクウガ。もうあの力を使うしかないのではないか。普段であればそこに疑問や戸惑いに躊躇いがある答え。しかし、今の五代にはそれはない。邪眼を許せないとの強い思いを胸に五代は口を開いた。

――あの子を殺してしまったのに、掛けてあげる言葉がそれ……？　あの子はお前の事をパパって慕っていたのに……最後にかけてあげるのがそんな言葉なのかっ！　あの子はっ！　まだ青空だって見た事が無かったのにっ！！

五代がそう叫んだ瞬間、その体が変わる。全身を漆黒で染め上げた姿へと。禍々しい印象しかないそれに、誰もが言葉を失う。中でも五代から詳しい話を聞いていたバイオライダーだけは、その顔を見て最悪の展開になったと悟った。

（目が黒い……やはり制御出来ていないのか！）

眼前の存在は漆黒の目をしていた。それに邪眼が少しだけたじろくも、すぐに立ち直って走り出す。

「また姿を変えたところでっ！」

邪眼が床を蹴り、凄まじき戦士へ攻撃しようとする。シャドーキックと同じ姿勢のそれを見た凄まじき戦士は、立ち尽くしたままでそれを受けた。しかも、その一撃に少しとして動く事なく耐え切ったのだ。それに誰もが驚きを見せる中、凄まじき戦士はお返しとばかりに無言で邪眼へ手をかざした。

その瞬間、邪眼の体が炎に包まれる。それに苦しむ邪眼。更に凄まじき戦士はそんな邪眼へ無言で近付くと、その胸部へ拳を叩き込んだ。その一撃に邪眼の体が大きく飛ばされる。床ではなく、壁に激突させられる邪眼。そこから落下するもすぐに立ち上がる邪眼だったが、凄まじき戦士が既にその体目掛け飛び蹴りを放っていた。

「ぬおっ！」

再び壁へ激しく叩き付けられる邪眼。そこへ追い撃ちをかけるように連撃を叩き込む凄まじき戦士。すると邪眼はこのままでは不味いと悟ったのだろう。両手から破壊光線を放って、一旦凄まじき戦士を下がらせた。そして、瞬時に空間転移を使って玉座の間から消えたのだ。

それになのは達が僅かな安堵の息を吐く。しかし、バイオライダーはＲＸへ戻ると素早くなのは達の前に立つ。そして、凄まじき戦士へ戦闘態勢を取った。それに誰もが違和感を感じるものの、そんな周囲へＲＸが切羽詰まった声で告げる。

――――今のクウガは我を失っている！　止めないと全員やられるぞっ！

それになのは達三人は瞬時に理解した。凄まじき戦士。それに五代がなってしまったのだろうと。真司もいつかの話を思い出し、よろよろと立ち上がろうとする。翔一もそれに続いて立ち上がろうとするが、二人は未だにダメージが抜けていないため、その体がふらついた。

それに気付いた周囲が二人を支える。止めようとしないのは、その性格を知っているからだ。止めても止まらないと。そんな周囲の見ている目の前でＲＸが炎に包まれた。それにＲＸはロボライダーへ変身し、その炎をエネルギーとして吸収した。

それを見た凄まじき戦士はロボライダーへはその力が通用しないと理解したのだろう。その場からロボライダーへ向かって走り出した。それを迎え撃つロボライダーだったが、炎のエネルギーを加えたロボパンチを凄まじき戦士は受け止めた。

「くっ！　これでも駄目か！？」

予想以上の強さを持つ凄まじき戦士に驚愕しつつ、ロボライダーは何とかその力を使って凄まじき戦士を止めようとする。しかし、それを容易に振り払う凄まじき戦士に、ロボライダーは力では太刀打ち出来ないと理解した。

追い詰められたロボライダーはそこからバイオライダーへ変化し、速度を以って凄まじき戦士へ対抗しようとする。しかし、その高速機動を見た凄まじき戦士は無言で手を動かした。それがバイオライダーを炎で包む。

「ぐあっ！」

「「バイオライダーっ？！」」

エリオとキャロが思わず叫んだ。バイオライダーの弱点は高熱。それでも五千度までは耐え切れるだけの耐久力があるのだが、凄まじき戦士の使う炎の温度はそれを超えていたのだ。凄まじき戦士にはバイオライダーでも対抗出来ないと分かり、なのは達に焦りと恐怖が生まれる。

四人のライダーの中で一番強いと思われていたＲＸ。それが全ての能力を駆使しても凄まじき戦士に勝てないと思わされたからだ。特にバイオライダーはその特殊能力から無敵だと思われていたのだから。

炎に苦しむバイオライダーが光太郎へと戻ったのを見て、誰もが息を呑んだ。翔一も真司も未だ戦える状態ではなく、光太郎さえ変身を解かれてしまった。残された手段はもう何もない。そう思った時、そこへガジェットがやってきた。

それに気付いた光太郎が一瞬天井へ視線を向ける。そして、なのは達へ告げた。太陽の光をここへ差し込ませてくれと。それを受けて、ウーノ達が行動開始。ガジェットのＡＭＦＣを最大にし、何とか魔法を使えるようにＡＭＦを弱体化させていく。

それを感じ取ったのか、凄まじき戦士はガジェットを破壊しようとする。だが、それを止めようと動く者がいた。

「五代さん、止めてくださいっ！」

スバルは凄まじき戦士へ抱きつくように止めに入った。自分の憧れのヒーロー。それが周囲へ破壊と混乱をもたらす事をしようとしている。それがスバルには耐え切れなかった。あの空港火災の日、自分を危機から助けてくれたクウガ。今度はそれを自分が助けるんだ。

そんな思いがスバルを動かしていた。自分が灼熱の炎に焼かれる事になったとしても構わないと、そう覚悟を決めて。

そんなスバルの行動に、微かにだが凄まじき戦士の動きが鈍る。その事に気付いた真司はふと思い出した事があった。それを試そうと思い、彼は小さく頷くと翔一へある事を告げた。それに翔一も理解を示し、光太郎の元へと向かう。

スバルが命懸けで凄まじき戦士を止めるのを見て、なのはも行動を起こす。腕に抱きしめていた少女の亡骸を静かに床に下ろし、その表情は凛々しいままに凄まじき戦士へと駆け寄ったのだ。

「もういい！　五代さん、もういいんですっ！　いつもの優しい五代さんに戻ってください！」

スバルと同じように凄まじき戦士の体を全力で止めようとするなのは。少女の死を悼み、それを何とも思わなかった邪眼。それに対して五代が怒り、そして憎しみさえ抱いてしまったのはなのはにも分かった。優しい彼女も同じ気持ちになったからだ。

だが、それだからこそ五代に戻って欲しかった。誰かを憎む五代など見たくないとばかりに、なのはは心から叫ぶ。戻って欲しいと。それにも凄まじき戦士は小さな反応を見せるものの、その手をゆっくりと動かそうとする。

だが、その手を大勢の者達が止める。五代を好きだからこそ、その暴走を止めたいと願う者達が命を賭けて阻止する。

強力な力で相手を捻じ伏せる。それはクウガの在り方ではない。そう誰もが感じたからこそ、心から五代へ呼びかける。我を忘れて仲間を苦しめるような行動を取る現状。それを何とか止めたい。その思いはその場にいる者達全員の総意だった。

誰もが五代へ元に戻ってくれるように呼びかけていく中、ウーノ達三人によって制御されたガジェットがＡＭＦに干渉し、魔法の使用と可能にしようとしていた……

その頃、邪眼はゆりかご最深部にてその様子を見つめていた。そしてある事に気付く。それは、凄まじき戦士と自分の共通点。それに思い当たり、邪眼は嗤う。自分にもまだ勝機はあると、そう思いながら。

「このまま奴らが自滅し合ってくれればよし。もしそうでなくても……」

邪眼はそこで高笑いを浮かべる。もう自分に負けはない。そう確信したのだ。故に余裕を持って玉座の間の様子を見つめる。そこでは、凄まじき戦士が自分の動きを止める者達を振り払おうとしていた……

同時刻、ゆりかごの入口付近で待機していたゴウラムトルネイダーに、異変が起き始めていた。まるで何かに怯えるように震え、その全体が少しではあるが色褪せようとしていくように……

ヴィヴィオとそっくりな少女の死。それが引き金となり、遂に五代は凄まじき戦士へとなってしまう。
その力を以って邪眼を撤退させるも、相手を失った事で攻撃の矛先はなのは達へと向いた。

そんな絶望に真司が見出した微かな希望。
それが凄まじき戦士を止めるキッカケとなるのだろうか……？

そして古の王甦り、影と闇を争わす。しかし闇深く、甦る王を包まんとす。戦士、それに立ち向かいそを救わん。だが、それこそ闇の始まりなり。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

遂に黒目のアルティメット出現。予想されていたとは思いましたが、少女がその鍵です。

何の関りも無かった緑川学園の生徒達の死でさえ怒り狂った五代。なら、親しくしている少女そっくりならば余計に憎悪の感情に襲われるのでは、とそう思いました

目覚めろ！　その魂！

「やめてください五代さん！　こんな事をしても、あの子は喜ばないし、生き返る訳じゃないんですっ！」

「そうです！　あの子が悲しむだけですっ！」

エリオとキャロが涙ながらに凄まじき戦士の両足を押さえる。二人にとっては、優しく楽しいお兄さん。それが五代だった。だからこそ、今の姿は見ていられない。そう、今の状態は怪人と同じだったのだ。力を感情のままに振るい、周囲へ危害を加える。

それは二人にとって許せる事ではない。局員としても、人としても、そして五代を好きな者としても。だから止める。命を賭けて。幼いからこそ、二人にも少女の死は辛く苦しく悲しいものだった。それを優しい五代がどう感じたかなど、言うまでもなく理解していたからだ。

「五代、止めろよ！　お前、こんな事をしたい訳じゃねぇだろ！」

「五代さん、駄目っ！　貴方は誰よりも人を傷つける事が嫌いなはずでしょ！」

ヴィータとシャマルは凄まじき戦士の右腕を必死に止めていた。初めて五代と会った日、共にその在り方に触れた二人。ヴィータは、したくもない蒐集行為をする自分の苦しみを悟られた。その目がしたくない事をせざるを得ない悲しみを宿していたとして。

シャマルは、なのはから蒐集した後にその悲しみを和らげてもらった。何にも気付いて始めるのに遅い事はないと、そんな優しい言葉と共に五代の気持ちに触れて。そう、二人は五代に救われた面が

あった。本人は決してそんなつもりはなかっただろうが、結果的に二人はそう感じた。だからこそ、その時のお返しとばかりに動いていたのだ。

「もう止めてよ！　いつもの五代さんに戻ってよぉ！」

「五代っ！　もういいんだ！　あの子もお前のそんな姿は望んでいない！」

セインとチンクも凄まじき戦士の左腕を懸命に押さえていた。食堂で共に働いた仲間であり、真っ先に自分達と六課の溝を無くそうとしてくれた人物である五代。その人柄をヴァルキリーズで誰よりも知っているのがこの二人だった。

いつも笑顔でひょうきんなところがある五代の事は、二人も好ましく思っていた。誰かが悲しんでいれば、それを笑顔にしたくて頑張る性格。それが想いを寄せる真司にも似て、二人にとっては心安らぐ相手だったのだから。

スバルとなのはが体を、残りの部分を彼らが押さえる。しかし、それも限界があった。凄まじき戦士自体の力はこの場の誰よりも強力。いくらその動きが鈍り、弱まっているとはいえ、人の身で押さえ続けるには限度がある。

それでも、振り払われる度に誰かが凄まじき戦士へと駆け寄り、その体を押さえ付ける。五代を元に戻すために。そして、元に戻った時に悲しむ事が少ないようにと。懸命に、必死に、誰もが五代を五代であり続けさせるために足掻いていた……

ゆりかごの入口付近で滞空していたゴウラムトルネイダー。その合体しているゴウラムが色褪せ崩れそうになった瞬間、その全身を光が包む。マシントルネイダー部分に秘められたアギトの光だ。それがゴウラムの崩壊を阻止していた。

そう、アギトの光は進化の光にして、光の神が人類に与えた力。それが凄まじき戦士が出現した事によるゴウラム消滅の危機を辛うじて防いでいたのだ。闇に抗う力を失わせまいとするように。

それともう一つ。ゴウラムの即時消滅を阻む要素があった。それこそが真司の見つけた微かな希望。そして、聖なる泉を呼び戻すという予言の意味に繋がるのだ……

その頃、遂にＡＭＦがガジェットのＡＭＦＣに干渉されて弱体化したとウーノが告げた。それと凄まじき戦士が一気になのは達を振り払うのは同時だった。だが、誰もが気付いていた。そう動いた後、床に倒れるなのは達が苦しんだのを見て、凄まじき戦士が僅かではあるが苦しむような素振りを見せた事に。

それに真司の抱いた希望が間違っていなかったと感じる光太郎。だからなのは達が振り払われると同時に動いた。凄まじき戦士を後ろから取り押さえ、周囲へ叫んだ。自分達の頭上を狙ってくれと。それが何を意味するかなど、最早説明されるまでもなかった。

「なのはちゃんっ！　フェイトちゃんっ！」

「うんっ！」

「やるよ！」

はやてがシュベルトクロイツを構える。なのはとフェイトがそれに倣うようにレイジングハートとバルディッシュを構える。三人はありったけの想いを込めて魔法を放つ。三色の光が確かに絡み合い、天井を貫いた。玉座の間に大きな穴が出来る。そこには当然太陽と雲が存在し、目の覚めるような青空が広がっていた。

それを光太郎は見上げて頷くと、凄まじき戦士の顔を空へ向けさせた。それに微かに、だが確かに凄まじき戦士は反応した。その視線を逸らす事なく頭上へと向け続けたのだ。

その漆黒の目が青空を見つめる。光太郎はその瞬間、凄まじき戦士から離れて構えた。それはＲＸの構え。右腕を握り締め、左腕を腰に当てたそれ。それと同時に翔一が立ち上がり、構えた。アギトの構えだ。右腕を前にし、左腕を腰に添えるそれ。

そして、それと同時に二人の体から光が出現する。それはかつて邪眼と戦う際、彼らがした事に近い事。自分達のエネルギー――この場合はアギトの光と思われるそれを合わせて、凄まじき戦士へと送ったのだ。

「五代さんっ！」

「俺達の光、受け取ってくださいっ！」

二人は真司が考えた思いつきに従い、これを計画した。全てはあのカリムから聞いた予言。それを意識した行動だ。闇に汚れし仮面で悲しみを隠す戦士。それが凄まじき戦士の事を意味するとして、三人が考えた五代救出作戦。

それは、きっとその後の部分がそれに当たるとしての仮定の下に考えられた。太陽と進化の輝き合わさりし時、龍騎士の咆哮が聖なる泉を呼び戻す。なので、まず光太郎と翔一がかつての事を思い出して、自分達のエネルギーを合わせることにしたのだから。

その目論見通り、凄まじき戦士へと二人のエネルギーが合わさったものが吸い込まれる。そして、それが起こった瞬間、凄まじき戦士のアークルが光り出した。それが翔一の変身する時とそっくりだと気付いた二人は確信する。

クウガのベルトは、やはりアギトの光を内包していると。そう、故にクウガは超変身を制御出来るのだ。不安定のはずのアマダム。それをアギトの光が支え、導いていたのだから。それを知る事はない二人だったが、そこへ真司の声が聞こえた。

「五代さんっ！　あんたは俺達にこう言ってたよな！　青空を見てると、心が洗われる気がするって！」

真司は叫んだ。予言の最後の部分は、自分が叫ぶ事で五代が聖なる泉――即ち優しい心を取り戻すとあったからだ。だとすれば、それはこの事だろうと踏んで、真司は心から叫んだ。青空が好きな五代。その心に届けとばかりに。

その言葉を聞いて凄まじき戦士は何か苦しみ出す。それで誰もが淡い期待を抱いた。五代に戻ってくれるのではないかと、そう思って誰もが息を呑んで見守っていた。しかし次の瞬間、凄まじき戦士がした行動は苦しみながらもその手を空へ伸ばす事だった。

まるで助けを求めるかのようなそれを見て、誰もが悟った。誰よりも凄まじき戦士を止めようとしているのは、五代自身なのだと。だからこそ、なのは達へ攻撃する事に躊躇いがあったのではないか。そう誰もが考える。

しかし、まだ何かが足りない。凄まじき戦士をクウガへと戻す要素が。それが何かと周囲が考える中、真司だけはその凄まじき戦士の手を見つめ、ふと閃いた。

「……もしかしてっ！」

その視線の先にある凄まじき戦士の手は、まるで空を掴もうとしているようにも、拳を握り締めようとしているようにも見えた。しかし、真司にはそれが何をしようとしているかを察した。そして、そこからある言葉を思い出したのだ。

五代を元に戻せるとすれば、その言葉が一番ではないかと。故に真司は力の限り叫ぶ。この声よ届けとばかりに、凄まじき戦士ではなく五代雄介へと向けて。

――五代さんっ！　これを思い出してくれっ！

真司が叫びと共に見せたのはサムズアップ。真司の声に視線を動かした凄まじき戦士は、それに反応する。そして、周囲も真司へと視線を向けた。そして、その手が作る形を見て小さく声を漏らした。

それは形こそ違え、その場にいる者達全員にとって思い出深い光景と酷似していたのだ。なのは達が自分達の予想を確かめている前で、真司は思いの丈を込めて叫ぶ。

「古代ローマで、満足出来る、納得出来る行動をした者にだけ与えられる仕草だ！　あんたは、これに相応しい男だったよな！」

あの日、六課と合流した自分達を隔てる壁のようなものを少しでも払拭させようとした五代。それが自分達へ教えてくれた言葉を、真司は懸命に思い出しながら叫んでいた。それを聞いて、周囲も真

司の言わんとしている事を理解した。
五代が”五代雄介”たる根底である教え。その言葉で抱いた気持ち。それを思い出させようとしているのだろうと。だから、誰もが静かに見つめる。真司の言葉が五代へ届くようにと願いながら。

「あの子が死んで、確かに悲しいと思う！　でもそんな時こそ、誰かの……みんなの涙を止めて、笑顔にするために頑張れるのが五代雄介だろっ！」

その言葉に凄まじき戦士の動きが止まった。そして、その視線が真司へと向けられる。それと同時にその手も真司へと向けられた。それに誰もが一瞬息を呑むものの、真司だけはそれにも怯まず最後とばかりに吼えた。

――それに、いつでもみんなの笑顔のために頑張る！　それが、仮面ライダーじゃないかっ！！

その声が玉座の間に響き渡る。水を打ったように静まり返る空間。真司は凄まじき戦士を見つめ続けた。そしてその手が動く。瞬間、誰もが目を閉じた。炎に包まれる真司の姿を想像して。しかし、一向に真司の叫ぶ声も炎が燃え盛る音も聞こえてこない。
ゆっくりと一同が目を開けていく。そこには、凄まじき戦士はいなかった。いや、確かに凄まじき戦士はいた。たが、その存在から感じる気配が違う。何よりも、その手がある形を作っていたのだ。誰もがそれにまさかと思う中、その目を見てすぐにその原因に気付いた。

――目が……赤くなっている。

その誰かの呟きと同時に、クウガから声が返ってきた。その手は

サムズアップをしている。

――――……そうだね、真司君。今の言葉、すごく心に響いた。それと、光太郎さんと翔一君の光、とても効きました。あれで少し怒りが和らいだんで。

その声に真っ先に反応し、クウガへ走る者がいた。その相手であるクウガは、疲れからか五代へと戻っていく。それを見ながら、その者の体が床を蹴って宙へ舞う。そのままの勢いでその者――――スバルは五代へと抱きついた。

「五代さんっ！」

「おっとっ！」

慌てて受け止める五代。だが疲れた体では当然受け止めきる事は出来ず、二人は床へ倒れこんだ。その五代の表情はすっかり普段のそれに戻っている。それを確認し、五代の胸に顔を埋めて涙を流すスバル。それを感じながら、五代は優しい笑みを浮かべてその頭を撫でた。

「ありがとう、スバルちゃん。なのはちゃん達も本当にありがとう。みんなの声が俺を最後の最後で止めてくれてた」

その言葉にスバルが笑顔でサムズアップをする。そして、それに続くようになのは達も一斉にサムズアップをした。五代はそれに嬉しく思いながらサムズアップを返した。しかし、その表情が何かを見てすぐに曇る。

その五代の視線の先には、静かに横たわる少女がいた。五代は、スバルを体から優しく離すと、ゆっくりとそこへ近寄る。そして、

その顔を優しく撫でる。慈しむように、別れを告げるように。

「助けてあげられなくて……ごめんね。でも、約束するよ。絶対、君の事は忘れないから」

五代の言葉に誰もが頷き、表情を凛々しくする。その時、光太郎が何かを悟って表情を険しくした。

「っ?!　邪眼が来るぞっ!」

「五代さん達は私の傍にっ!」

その言葉に誰もが表情を険しくすると同時に、シャマルがそう叫ぶとその手を高々と掲げた。五代達三人が何とかシャマルの近くへ辿り着くと、彼女は澄んだ声で詠唱した。それは、静かなる癒しの名を持つ回復魔法。

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで」

それが傷付き、疲れていた三人の体を瞬時に癒していく。その効果に驚く三人だったが、その表情がすぐに険しいものへと変わる。再び玉座に座る形で邪眼が出現したのだ。

それを太陽の日差し降り注ぐ下で見つめる光太郎。そこへ体を本調子に戻した五代達も並び立ち、眼差しも鋭く邪眼を睨む。それを受けても邪眼は平然としていた。そして、五代達へつまらなさそうな声でこう切り出した。

「自滅はしなかったか。面白味のない奴らだ」

それに誰も言葉を返す事はしない。簡単に憎しみには飲まれない

とばかりにその表情を凛々しくするのみだ。だが、いつもならばそんな反応を返す事に苛立ちを見せる邪眼だったが、今回はそうではなかった。

そんな五代達の反応にもさして苛立つでもなく、ゆっくりと玉座から立ち上がる。そして五代達を一度だけ見回すと、徐々に嗤い出した。それが高笑いになるまではそこまで時間はかからない。その癇に障る嗤いを聞きながら、誰も邪眼へ口を開く事はしない。

「くっくっく……先程の力、中々凄かったぞクウガよ。だが、それが自分達の最後を彩る事になるとは思わなかったようだな」

「どういう意味だ！」

さすがにその言葉には無反応とはいかなかったのか、翔一が代表するように声を出した。すると、邪眼は自分の腹部を指差して告げる。これはアマダムなのだと。それだけで五代と光太郎は理解した。邪眼が何を考え、何をしようとしているのかを。

「不味いっ！？」

「邪眼っ！　それはお前をも滅ぼす力だぞ！　分かっているのかっ！！」

「どの道貴様らを殺さねば気がすまん。それに、我は創世王となるのだ。あの力如き、御してみせるわっ！！」

そう吠えるように告げると、邪眼は低い声で唸り始める。そして、その体が黒い闇のような影のようなものに包まれていき、その姿を変えていく。銀色の身体は白い身体へ変わり、所々に金色のラインが入る。それを見ていた五代だけが、その光景に息を呑んでいた。

それは、忘れられない姿。五代にとっては、悪夢のような相手。あの吹雪の中、殺し合った存在。それと酷似していたのだから。ダグバのような体に変わった邪眼は、体に溢れる力を感じて内心歓喜に震えつつも、努めて冷静に告げた。

「見たか。貴様らが声高に叫ぶ変身など、我にかかれば造作もない。それに、この力ならば……貴様らに勝てるっ！」

自分の手を握り締め、そう言い切った邪眼。それに対し、五代達四人が取った手段は一つだった。それぞれが変身ポーズを取る。それだけでなのは達に期待と希望が強くなった。そう、そうなのだ。その目の前に広がるのは、初めて見る光景なのだから。

四人の仮面ライダー。それが同時に変身する最初で最後の瞬間。そう考え、誰もが邪眼の変貌で抱いた恐怖と不安を抑え付ける。今から見つめる光景こそ、奇跡の瞬間なのだと言い聞かせるように。

「「「「変身っ！！」」」」

太陽の光をその身に受け、青空の下で四人は姿を変える。光太郎は黒の鎧を、真司は銀の鎧を、翔一は金の鎧を、五代は赤の鎧を纏う。更に周囲を烈火が覆ったのをキッカケに、光太郎以外の鎧が変化した。

そうして炎が消えたそこには、四人のヒーローがいた。クウガアルティメットフォーム、アギトシャイニングフォーム、龍騎サバイブ、ＢＬＡＣＫ　ＲＸという、四人の仮面ライダーが雄々しく並び立っていたのだから。

「俺は、太陽の子！　仮面ライダー、ＢＬＡＣＫっ！　Ｒ……Ｘっ！！」

「仮面ライダー！　龍騎っ！！」

「仮面ライダーアギトっ！！」

「仮面ライダー……クウガっ！！」

名乗りと共に構える四人。その力強さと頼もしさがなのは達に笑顔を、邪眼に苛立たしさを与える。闇より生まれし光の力。それこそが”仮面ライダー”。故に彼らは闇と戦う。いつの世も人の影となって、その魔の手に敢然と立ち向かうのだ。

今、なのは達の前に並び立つ者達はまさしく勇者。人には言えぬ痛みと悲しみを抱き、一人でも戦おうと決めた優しくも強い者。その背を見つめ、なのは達も思いを新たにした。この背を守る。それが自分達の出来る事だと。

「ふん、貴様らがどれだけ足掻こうとも無駄だ。既に我は究極の力を手に入れたのだ。最早勝ち目はないぞ」

そんな勝ち誇るような邪眼の言葉を聞いて、まずはなのはが口を開いた。

「そんな事ない。貴方が手に入れたのは滅びの力だよ」

「そう、過ぎた力は身を滅ぼす。それはいつの時代も同じ」

「それに気付かず、ただ力を求めるだけのあんたにわたし達は負けへん」

なのはに続けとフェイトとはやてが告げる。五代はそれを知っていた。だからこそ、凄まじき戦士となってもどこかで自分を止めよ

うとしていたのだ。そう三人は考えていた。故に邪眼には決して負ける訳にはいかないとも。

あの幼い日に仮面ライダーと出会った三人。人ならざる力を使う事に理由を必要とし、常に他者のために振るい続けた存在。それを知っているからこそ、誰よりもその思いは強い。

そんな三人の言葉を受けて邪眼が忌々しく思う中、スバルが問いかけた。

「お前は、何で仮面ライダーが怪人に勝てるかって考えた事がある？」

「どうして性能で勝る怪人がライダーに勝てないのか。どうして卑怯な真似まで使う怪人が正攻法のライダーに負けるのか……ってね」

「僕達はその答えを知った。お前達が必要ないと切り捨てた人間の心。それこそがその答えだったんだ」

「守りたい人が、守りたい場所がある。それがデータなんかじゃ計れない強さをくれるんだって」

「気高い人としての魂。それがない怪人にライダーを倒せる訳がなかったのよ」

スバルの問いかけの意図するもの。それを理解し、ティアナが、エリオが、キャロが、ギンガが告げていく。六課での日々。それだけではない。彼ら五人はそれぞれに深くライダーと関った。戦いで、日常で、その優しさと強さに触れた。

そして知ったのだ。本当の強さとは何かを。決して力などではないと。誰かを倒すのではなく、誰かを守れる事。みんなを泣かせる

真似をするのではなく、みんなを笑顔にする事。それが強さなのだと、五人は教えてもらったのだ。

その五人にも邪眼は苛立つ。圧倒的に不利な状況にも関らず、毅然としている事。それが邪眼の神経を逆撫でしていた。そこへシグナム達が告げた。

「貴様は我々に絶望を与えると、そう言った。だが、それは無理な話だったのだ」

「お前があたしらに絶望を与えられるとすれば、それはライダーが死ぬ時だかんな」

「でも、残念ね。仮面ライダーは死なない。そう、死なないのよ」

「例え貴様が四人を消し去ったとしても、我らは絶望しない。何故ならば……」

「リイン達の心の中に、ライダーはいつでもいるのですっ！」

シグナムの言葉に、ヴィータも、シャマルも、ザフィーラも、ツヴァイなどはユニゾンを解除して応じていく。守護騎士として幾多の戦場を経験したシグナム達。だからこそ、翔一や光太郎が告げた仮面ライダーの戦いは胸に響いた。

たった一人で巨悪に挑み、誰かに賞賛される事無く戦い抜いたその在り方。誰かに誇るでも、伝えるのでもなく、ただ人々が平和に暮らせるだけでいい。そんな生き方を選んだ者達。シグナム達にとっても、ツヴァイにとってもどんな物語の英雄よりも英雄らしいと思ったのだから。

はっきりと何があろうと絶望しないと告げた八神家の者達。そこへ更に言葉をぶつける者がいた。ウーノだった。

「それに、貴方はこの期に及んで気付かないのね」

「一人で私達を倒せるって、そう思ってるのでしょうけど」

「貴様には無理だ。仮面ライダーでもない貴様ではな」

「力が正義……そぉんな馬鹿な事を信じる限り、勝ち目は絶対にないの」

「本当の正義の意味を知らぬお前が、我々を、ライダーを倒せるはずがない」

「戦いを止める。そのために戦うのがライダーなんだから！」

「貴様のような力を誇示するだけの愚か者に明日はない」

「誰かと支え合う事でしか生きられない。それは弱さかもしれない。でも、それを強さに変える事も出来るのが僕達人間だ」

「恐れも痛みもない。守りたいって思う気持ちがあれば……アタシ達はそれだけで戦えるっ！」

「優しさも甘さも弱さって切り捨てる事しか出来ないお前に、あたし達は屈しない！」

「ホントの強さは、そんな事まで全てひっくるめて生きる事が出来る事ッス！」

「どんな危険に傷付く事があっても、未来を信じて歩く事が出来る。それが……」

「諦めないって事なんだ！」

ウーノの言葉。それがドゥーエの、トーレの、クアットロの、チンクの、セインの言葉を引き出して、セッテの、オットーの、ノーヴェの、ディエチの、ウェンディの、ディードの、アギトの言葉を紡がせる。

真司と触れ合い、仮面ライダーの別の姿を知った彼女達。それだからこそ、五代達との出会いが大きな意味を持った。仮面ライダーの本当の姿。それが真司の在り方と同じだったのだから。故に邪眼へ告げる。いくら変身しようとも無駄だ、と。仮面ライダーの強さの秘密。それを理解しようともしない限り、勝ち目など絶対に有り得ないのだと。

邪眼がなのは達の言葉に激しい怒りを感じて、その拳を握る。それでも、自分の優位は揺るがないとばかりに悠然と佇み、はっきりと告げた。

「よかろう。そこまで言うのならば向かってくるがいい。創世王たるこの我に勝てると言うのならな！」

その邪眼の言葉を受けて戦いが開始された。走り出すライダー達。それを見た邪眼の手が真っ先にクウガへ向けられる。同時にその全身を炎が包む。しかし、それをクウガは受けても僅かによろめく程度で走り続けた。

そのまま炎を体に纏わせながら、クウガは邪眼へ拳を叩き込んだ。それがしっかりとその場所へ封印を意味する文字を刻む。それはす

ぐに消え去るも、それに構わずクウガは邪眼の体を蹴り飛ばした。

「おりゃ！」

「ぐぬっ！」

少し下がりながら、呻く邪眼。それでもあまり効いていないように立ち直った。一度は手も足も出せずにやられた相手。それと戦ってもほとんどダメージがない。その事実が邪眼へ余裕を与える。

しかし、そこへすかさず追撃を加えようとする者達がいた。アギトと龍騎だ。二人は同時に跳び上がると、その体勢を蹴りへと移行させた。ダブルライダーキックと呼ばれる状態へと。

「「はあっ！」」

「舐めるなっ！」

だが、それは邪眼の手から発射された破壊光線で迎撃された。更に追い撃ちでその手を向けようとする邪眼。それを見たＲＸは両手を腰に当て、力強く叫ぶ。

「キングストーンフラッシュっ！」

「ぬっ！　……無駄な事をっ！」

それに怒りを抱き、邪眼はその手をＲＸへと向けた。眩しい光の中、邪眼の力がＲＸへ炎を発生させるはずだった。しかし、ＲＸのそれが狙ったのは邪眼の注意を自分へ引き付ける事だったのだ。

邪眼がＲＸへ手を向けた瞬間、その腹部に何かが直撃するように飛来した。それは電撃を纏った空気弾。それに気付いた邪眼は咄嗟

に手をそこへ動かした。そしてすぐに視線を動かすと、そこには漆黒のライジングペガサスボウガンを手にしたクウガの姿があった。ただ、そのボウガンに刻まれた文字部分は黒ではなく元来の緑であったが。

そう、五代は凄まじき戦士の力を完全に制御していた。あの時と同じ結果になるように、強く願ったのだ。みんなの笑顔を仮面ライダーとして守れるようにと。それがその部分に現れていたのだ。

クウガの手にしたボウガンがそこから瞬時にロッドへ変わる。ティアナから渡されたクロスミラージュ。それは、今のクウガにとって頼もしい存在だった。一番の利点は射撃と斬撃が可能な事だ。今のクウガは一度武器に出来れば、そこから全てに変化させる事が出来るのだから。

「貴様ぁ！」

「みんな、あいつのアマダムを狙って！　あれが傷付けば邪眼の変身も出来なくなるから！」

その声と共にクウガが駆け出す。それに続くように三人のライダーも動き出した。邪眼の力で一番厄介なのは自然発火。だがそれは、発動させるために手を向ける必要がある事に誰もが気付いていた。事実は違う。本当はその視線だけでも出来るのだが、任意で標的を決めるために無意識で手を使っているだけなのだ。

しかし、それをクウガも邪眼も知らない。特に邪眼は凄まじき戦士がやった行動を模しているのだから余計に。そうとは知らず、邪眼に対してライダー達は連携を以って対抗した。

邪眼と同等の力を持つクウガと太陽光で治癒出来るＲＸが前線を担当し、アギトと龍騎は二人の援護として立ち回る。そんな四人が

戦う中、なのは達はただ見ているだけではなかった。邪眼の動きを封じるためにとはやてが密かにユニゾンを完了させ、氷結魔法の詠唱を開始。
　ティアナはクアットロとキャロの三人である事を実行に移すべく相談していて、残った者達も自分達の出来る範囲でライダー達を援護しようと動き出していたのだ。

「ウーノ、ＡＭＦＣはどれだけ持続出来そうだ？」

「現状……おそらく五分よ。それ以上はガジェットが耐え切れないと思うわ」

　シグナムがレヴァンテインを構えながら尋ねた言葉に、ウーノはそう返した。それを聞いて誰もが頷いた。魔導師達は揃ってその時間を有効活用するために動き出す。

「それだけあれば十分だっ！　その五分、必ず守り切るっ！」

　ザフィーラはそう言うと、邪眼の周囲へ無数の棘を出現させた。それで邪眼の動きが一瞬止まる。そこを見逃さず、棘を砕きながら放たれる砲撃があった。それはなのはとディエチのもの。ディバインバスターとイノーメスカノンの攻撃だった。
　腹部を狙って放たれたものだったのだが、それに気付いていた邪眼が当然防御した。だが、それでも二人は構わなかった。何故なら、それは単なる攻撃だけではなく……

「はやてちゃん、今だよっ！」

「ライダー、離れてっ！」

「アーテムデスエイセスっ！」

なのはの声とディエチの声が響き、それを合図に邪眼の周囲を吹雪が襲う。はやての発動させた氷結魔法だ。玉座の間の一部を凍て付かせるそれが邪眼の体を包む。かなりの効果範囲を持つこの魔法。それをツヴァイが制御し、玉座の間の半分程で範囲を止めていた。

だが、誰もそれで邪眼の動きを止められるなどとは思っていない。これは所謂準備段階なのだ。邪眼を倒すためのなのは達なりの戦い。それの開幕を告げる合図だったのだから。

今の邪眼へは生半可な攻撃では通用しないと誰もが感じていた。だからこそ加減は出来ない。文字通り全力の攻撃を叩き込む。そのために全員が残った魔力と体力を総動員する覚悟を決めていた。

「ライダー！　レリックの事は私達に任せてっ！」

「絶対に変身を解除させてみせるから！」

全員を代表して、スバルとティアナがそう告げる。それに四人のライダーは頷きながらも邪眼への警戒を怠らない。今は魔法の効果で動きを止めている邪眼だったが、それが本当に凍結しているからではないと感じ取っていたからだ。

何かを狙っていると。故に四人は密かに話し合う。邪眼撃破までの方法を。そして、万が一に備えての対処法を。なのは達を信じていない訳ではない。だが、今の邪眼は凄まじき戦士と同じなのだ。その力を警戒するに越した事はないのだから。

「行くよっ！」

「おうっ！」

「ええっ！」

スバルの声にノーヴェとギンガが応じる。邪眼の腹部にあるアマダム。それに傷もしくはひびを入れる事が出来れば状況は好転する。そのため、なのは達は賭けに出る事にした。邪眼を倒すために選ばれたのはこの三人。

加速力と突破力を買われた三人だ。トーレやエリオも候補に挙がったが、結局スバル達に決まったのだ。理由は、武器を使っては邪眼へ奪われた際に利用されかねないとの判断から。

そして、凍結している床を踏む事無く接近出来、自由に動き回る事が出来るのも選ばれた理由の一つ。ウイングロードとエアライナーを展開し、走り出す三人。すると、三人が邪眼へ接近した瞬間、氷を吹き飛ばして邪眼が手を三人へ向けた。

「掛かったなっ！」

「「「っ！」」」

邪眼の能力である自然発火が三人を包もうとした。だが、その炎で三人が焼かれる前になのはが有り得ない行動に出た。

「ディバイン！　バスタァァァッ！」

「何だとっ？！」

なのはの放った閃光はスバル達ごと邪眼を襲う。咄嗟に防御する邪眼。そして、それこそがスバル達三人が選ばれた最後の理由。魔法の輝きが消えた先には、邪眼の両腕を取り押さえるギンガとノー

ヴェに腹部へ拳を突き立てているスバルの姿があった。
その体を襲っていたはずの炎は綺麗に消えていた。そう、なのは達は炎を防ぐ手立ては少ないが消す方法ならあると思いついたのだ。それは魔法の威力を以ってその炎を消し払う事。もしくは全身をその輝きで包む事で、炎を生み出しているだろう要因を吹き飛ばせるのではないかと考えたのだ。

だからこそ、スバル達三人が選ばれたのだ。耐久力などが前線組の中でトップクラスである三人が。

「ば、馬鹿なっ！　味方ごと攻撃するなどとっ！」

「「スバルっ！」」

「振！　動！　拳っ！」

邪眼の驚きも聞き流し、二人は全力で腕を押さえながら叫ぶ。それに呼応し、スバルはＩＳではなく自身の技として振動破砕を応用した。指向性を与える事で反動と負担を軽減したそれは、邪眼のアマダムへ少なからずダメージを与える事に成功する。
だが、すぐさま邪眼が三人を振り払う。それをトーレとセッテが受け止め、即座に撤退。追撃として邪眼が強力になった破壊光線を放つも、それをフェイトとオットーが迎撃した。

「プラズマザンバーっ！」

「レイストーム！」

雷光と閃光が合わさり、破壊光線を食い止めようとする。だが、その威力は大きく二人の攻撃が押され始めた。それを見てウェンデ

ィがランディングボードを構えて再び限界以上に集束させたエネルギーを発射した。

「これでっ！」

「チッ！」

ウェンディの放った攻撃を加え、その輝きは見事に邪眼の光線を相殺する事が出来た。だが、ウェンディの持っていたランディングボードは二度に及ぶ限界以上のエネルギーに耐え切れず、発射口が完全に歪んでしまった。

もう攻撃には使えないとウェンディは判断し、後方へと下がった。まだ防御用には使えるからだ。そこから始まる邪眼の猛撃。まるでアマダムからの力を失うと気付いているかのように、形振り構わず攻撃を開始したのだ。

しかし、それを迎撃或いは相殺する者がいた。クウガだ。彼は自分も良くは知らない凄まじき戦士の力を使う邪眼を見て、心からそれを防ぎたいと思いながら力を振るったのだ。それにアマダムが応えた。

そう、眠っていた自我。それがクウガへ教えたのだ。邪眼の振るう力への対処や正体を。故にクウガは自分の能力を総動員し、アマダムの言葉を聞きながら邪眼へと立ち向かったのだから。

”空間転移は位置を特定する事で対処する。我が共鳴を感じる場所を指示するから、そこへ攻撃せよ”

（分かった！）

瞬時に消えた邪眼だったが、出現すると同時にクウガはそこへ全

力の拳を叩き込む。不意を突こうとして逆に突かれる形となった邪眼。しかも、クウガはダグバとの戦いと同じく、その拳を腹部へと命中させたのだ。

「おおりゃ！」

「ぐおっ！」

「「今だっ！」」

その破壊力に怯む邪眼を見て、アギトと龍騎が再度跳び上がる。そのまま蹴りの姿勢へ移行する二人。それは、あの”ダブルライダー”必殺の攻撃。強敵を悉く粉砕してきた最強技の一つ。

「「ライダーダブルキック！！」」

以前光太郎から聞いた先輩ライダーの合体技。それを思い出しての攻撃は、邪眼の背中を蹴り飛ばした。床へ倒れこむ邪眼へ、更なる攻撃が放たれた。それははやての魔法。動きを止める牽制を兼ねた射撃魔法だ。

「制御は任せたで、リイン！　フリジットダガー！」

”そこですっ！”

「させんわっ！」

「それはこちらの台詞だ、邪眼！」

その攻撃を電撃で撃ち落す邪眼だったが、そこへブーメランブレ

ードが飛来する。それと同時に複数のスティンガーと魔力でコーティングされた鉄球が押し寄せた。邪眼はブーメランブレードを迎撃しようとするが、先にスティンガーと鉄球を落とすべきかと考えた。
なので、そちらへ破壊光線を放ったのだが、それを読んでいたようにブーメランブレードがそれを受け止めにくる。その破壊力にうち負けて砕け散るブーメランブレード。しかし、その爆発を抜けてスティンガーと鉄球が邪眼へ殺到する。

「「爆ぜろっ！」」

「チィ！」

チンクとヴィータの声と共に爆発するスティンガーと鉄球。それに邪眼が微かに視界を塞がれ、その視覚へ意識を向ける。そしてその視覚が二人を捉えるものの、攻撃を放つ前にそこへ何かが突撃した。
それはバイオライダーとトーレにディードだった。高速機動をする事が出来るバイオライダーを先頭に、トーレとディードがＩＳを使って続いたのだ。邪眼の攻撃を受けても回復が可能なＲＸ。そのため、思いきった行動に出られたのだ。

「スパークカッター！」

「ぬおぉぉぉぉ！」

「ツイン！」

「インパルスっ！」

バイオライダーの必殺技が邪眼へ炸裂し、体勢を崩した瞬間を狙

ってディードとトーレの体が交差した。二人の連携技が邪眼へ追い撃ちをかける。だが、まだ邪眼は立ち直るとその目から怪光線を発射した。それを回避する面々だったが、その着弾地点を見て誰もが息を呑んだ。

それは、あの少女の亡骸が横たわる場所だったのだ。最悪の光景に周囲が悔しさを感じ、邪眼だけがほくそ笑んだ。だが、煙が晴れた先に見えたのは両腕を交差させて立ち尽くすセインとドゥーエの姿だった。

「こ、今度は守れた……ね」

「これで……少しは償えたかしら……？」

セインはあの時庇われた事を指し、ドゥーエはヴィヴィオ達の基となった聖王遺物を持ち出した事を指していた。共に罪悪感から動いたのだが、一度だけ視線を後ろへやって微かに笑う。そこには安らかに眠る少女が無事なまま存在していたのだから。

そんな二人は、その体に受けたダメージのためにそのまま床に倒れる。それを守るために動くチンクとウェンディ。そんな光景を見て舌打ちする邪眼。それで先程の攻撃が狙ったものだと気付いたクウガ達。しかし、怒りを感じるも憎しみには変えない。

「死者へ平気で攻撃を加えるとは……アギト、行くぞっ！」

「おうっ！」

”シュランゲフォルム”

「お前だけは……絶対に許さないっ！」

”スピーアアングリフ”

シグナムとアギトがユニゾンする。魔力を失った状態でも、シグナムとならば龍騎と違い体力面なども問題ないと思ったアギト。なので、残った微かな魔力を炎熱加速に注ぐ事にしたのだ。

エリオも怒りを力に変え、邪眼へ向かって攻撃を開始する。連結刃が唸りを上げ、エリオはジェット噴射で接近する。それを迎撃しようとする邪眼だったが、その体を緑色のバインドが雁字搦めにする。

「小癪なっ！」

「今よっ！」

シャマルの作り出した僅かな隙。それを二人は待っていたかのように攻撃を放つ。それは、変換資質を持つベルカの騎士ならば基本とも言える攻撃。変換した魔力を高密度に武器に付与し、打撃として撃ち込むというもの。

”ぶちかませ！”

「飛竜！」

「紫電！」

炎と雷が手にしたデバイスへ宿る。示し合わせた訳ではないが、奇しくもそれはシグナムの技の複合となった。

「「一閃っ！！」」

「がはっ！」

烈火の将の合わせ技を喰らい、膝をつく邪眼。そこで気付いたのだ。最初感じていた溢れんばかりの力が消え失せ始めている事を。慌てて視線を腹部へ向ける邪眼。そこには大きなひびを生じさせたレリックがあった。

スバルの振動拳とクウガのパンチ。それが直接的に破壊を演出し、他の者達の攻撃も少しずつではあるがその亀裂を大きくさせていたのだ。故に邪眼の体を駆け巡っていた凄まじい力も徐々に弱まっていたのだから。

「おのれぇぇぇぇ！」

「それじゃ打ち合わせ通り頼みます、なのはさん！」

「任せて。行くよ、クアットロ！」

「ええっ！　お願いね、キャロちゃん」

「はいっ！」

怒り狂う邪眼。それを見て遂にティアナ達が動いた。フェイクシルエットとシルバーカーテンを重ね合わせ、それをキャロのブーストを受けて動かす。三人の合体技とでもいうべきものがそこに出現した。

それは、銀色の仮面ライダー。そう、シャドームーンだ。光太郎から聞いた特徴を基に再現したその姿は、まさしく本物と同じ。ティアナ達は考えたのだ。眠りについたシャドームーンを踏み躙った邪眼へ光太郎が抱いた怒り。それを少しでも晴らしたいと。

予想だにしない光景に動揺する邪眼。すると、シャドームーンは邪眼向かって動き出した。邪眼も幻影と分かっているのだろうが、それはただの幻影ではなかった。その全身はなのはが制御する魔力弾を隠している。つまり、動く爆弾なのだ。

「くっ……猪口才な！」

攻撃してもされても小さなダメージを受ける。それに苛立つ邪眼。一方、それを見たＲＸはティアナ達の考えに深い感謝と感動を覚えていた。幻影であろうとシャドームーンと共闘している状況を感じさせた事にだ。

（シャドームーン……いや、信彦。お前がここにいればこうしてくれただろうな）

そう思い、拳を握り締めるＲＸ。この時こそ自分が待ち望んでいた時だと、そう言わんばかりに邪眼へと向かって走り出す。そして、邪眼と戦うシャドームーンの隣へ立つと同時に横へ視線を向けて告げる。

「行くぞ、シャドームーン！」

幻影へ語りかけると同時に構えるＲＸ。だがその瞬間、何故だかＲＸは声が聞こえた気がした。

――いいだろう。今回だけは手を貸してやる。

それに内心驚きを感じるものの、ＲＸはその場から跳び上がる。それに続くようにシャドームーンも跳び上がる。二人は同じ姿勢を取る。それはＲＸキックとシャドーキックの体勢だ。

「ダブルキックっ！！」

見た目だけは二人の世紀王が力を合わせたように見える光景。それに誰もが何とも言えない感慨を受ける。邪眼はその攻撃を受けて大きく後ずさった。それと同時に邪眼のレリックが光を失う。それを見つめながら立ち上がるＲＸとシャドームーン。

少しだけお互いを見つめる二人。そこでティアナ達の限界が来たため、シャドームーンが消えていく。それを一時も目を逸らさずに見送るＲＸ達。その瞬間、ウーノが叫んだ。

「ごめんなさい！　ＡＭＦＣも限界よっ！」

一人でガジェットの制御を任されたウーノは、五分のところを何とか六分まで継続させていたのだ。その声を受け、なのは達が視線をクウガ達へ向けた。それに頷きを返し四人は構える。視線の先にいる邪眼はその姿を究極体へと退化させていた。

「俺から行くぞっ！」

”ファイナルベント”

龍騎の前に出現するドラグランザー。バイクへ変形し、それへ乗り込む龍騎。すると、その上にＲＸが飛び乗った。

「頼むぞ、龍騎！」

「任せてくれ、先輩っ！」

その声で走り出すドラグランザー。ウィリー状態から火球を邪眼

目掛けて放つドラグランザーだったが、普段ならばそこから踏み潰すような動きを見せる。しかし、この時は違った。そのままの状態で邪眼へ突撃したのだ。

邪眼はそれを受け止めようとするが、それは出来ずに終わる。ドラグランザーから跳び立ち、ＲＸがその体へ蹴りを叩き込んだのだ。そしてその反動でドラグランザーを飛び越えて距離を取ると、体勢を崩した邪眼へ龍騎はその勢いのまま体当たりをぶちかました。

大きく飛ばされる邪眼。それを待っていたかのように走り出すのはクウガだ。そして、同時に走るクウガの隣には二つのアギトの紋章が出現していく。アギトはそれを前に構え、長く息を吐いていた。その先でふらふらと邪眼が立ち上がった。その瞬間、クウガが、アギトが床を蹴った。回転するクウガと紋章を抜けながら加速するアギト。それが完全なタイミングで邪眼へ蹴りを極める。

「「ダブルライダーキックっ！！」」

九十トンと百トンを超える破壊力が見事なまでに一致して炸裂した。その威力に邪眼が大きく吹き飛ばされていく。激しく床に叩き付けられながらも再びゆっくりと立ち上がる邪眼に、誰もが息を呑んだ。すると、その体から紫色のオーラが漂い始め、空間が歪み出したのだ。

それを見たＲＸはその意味に気付いた。そう、発電所の戦いでも同じ事が起きたのだ。その際、一号はこう言った。邪眼は精神エネルギーとなって逃げるつもりだと。なので、そうはさせないとばかりにＲＸは両手を腰に当てて叫ぶ。

――キングストーンフラッシュ！！

その時、不思議な事が起こった。邪眼の体から漂っていたオーラ

が消え失せ、それから一切出現しなくなったのだ。歪み出していた空間も元に戻った事を受け、四人は邪眼を囲むように散る。

「な、何故だ！？　何故肉体を捨てる事が出来んっ！？」

「これで貴様はもう逃げられないぞ！」

「観念しろ、邪眼！」

「今度こそ……今度こそ終わりにしてやる！」

「ここで決着を着けましょう！」

ＲＸが、龍騎が、アギトが、そしてクウガがそう告げていく。そして、なのは達の見守る中、四人のライダーが床を蹴った。その体を回転させながら、四人は同じ言葉を紡いでいく。

「「「「ライダーキックっ！！」」」」

四方向から炸裂するライダーキック。それが邪眼の体へとどめの一撃としての役割を果たす。体中に生じた亀裂からエネルギーを放出するようにたじろく邪眼。それを見つめながらも、構えを解かない四人。

「これで勝ったと思うなよ……光あるところに闇は必ず生まれる。我を倒そうと、いつか再び同じような存在が現れるだろう」

邪眼の言葉に悔しげに表情を歪めるなのは達。それがある意味での事実だと知っているからだ。悪は無くならない。それは人がいる限り何時までも続く戦いなのだろうと、そう思うなのは達。しかし、

そんな言葉に真っ向から反論する者がいた。

「闇あるところに……光もまた生まれる！」

「人が希望を……優しさを失わない限り！」

「俺達は……仮面ライダーは必ず現れる！」

「例え、それが終わらない戦いだったとしても……今を救えば明日が変わると信じて！」

「「「「俺達は、戦うっ！」」」」

その言葉に誰もが力強く頷いた。邪眼はそれを聞きながら喘いながら散った。その瞬間、ゆりかごが大きく震動を始めた。邪眼を失った事で敢然に制御を失ったのだ。すぐにゴウラムトルネイダーを呼び寄せるＲＸ。クウガは一人急いでビートチェイサーを取りに走る。

体力が底をついていたなのは達を逃がすため、ライダー達は総力を挙げて動き出した。ウェンディはランディングボードをＩＳで浮かし、何とか自分を含め三人は連れて行けると告げると、キャロが通路さえ広げてくれればフリードが使えると提案する。

しかし、強力なＡＭＦが戻ってしまった以上、フリードを戻す事さえ難しい。こうして、クウガが少女の亡骸を抱き抱えたなのはをビートチェイサーで入口まで運ぶ事になり、アギトはゴウラムを分離させマシントルネイダーではやてとティアナにヴィータにシャマルを運ぶ。

ＲＸはゴウラムへ指示を出し、その背にディエチとギンガを乗せてくれるように頼むと、自身はフェイトを抱き抱えて走り出す。ウ

エンディは傷付いたセインとドゥーエを乗せて動き出し、龍騎は残りの者達を励ましながら走る。

そして入口に辿り着いたクウガ達を待っていたのは、ヴァイスの操縦するヘリと独断で行動していたティーダだった。落下を始めた事でギリギリヘリが接近出来る高度になったらしく、なのはは少女を抱いたままハッチ目掛けて飛び降りた。

途中ＡＭＦの効果範囲外となったため、飛行魔法を使い無事にヘリへ到着したのを見届け、クウガは再びビートチェイサーを走らせゆりかごの中へ戻る。アギト達はそのままヘリへと到着し、はやて達を降ろした。

「じゃ、俺は残ったみんなを運ぶから」

アギトはマシントルネイダーの特性を活かし、そのままゆりかごからの脱出に活躍する。ティーダもゆりかごへ接近し、飛行魔法の使えない者達を受け止めての救助活動へ参加する。

「すみません、ティーダさん」

「助かる」

「いえ、気にしないでください。俺には……これぐらいしか出来ないんで」

チンクをヘリへ運び終えたティーダへシャマルが礼を述べる。それにティーダは軽い笑みを浮かべ、最後には悔しそうに呟いて再び空へと舞い上がった。そんな彼にティアナが思わず声を上げて叫ぶ。

「お兄ちゃんっ！」

それにティーダが視線を動かす。それを受け止め、ティアナは笑顔で告げた。

「ありがとうっ！」

「……おう」

返って来たのは、柔らかい笑みとサムズアップ。それにティアナもサムズアップを返す。何とか全員脱出出来たクウガ達だったが、ヘリの許容量にも限界があるため、キャロがフリードを元に戻してその代わりをする事になり、フリードの背にはフォワードメンバー四人にギンガが乗った。

RXはクウガと共にゴウラムへ乗り、アギトはスライダーモードのマシントルネイダーで降下する。龍騎はドラグランザーに乗り、それにウーノとノーヴェも伴った。そうして、六課が離れた事を確認した管理局は衛星軌道上に展開した艦隊を以ってゆりかごを破壊した。

こうして、レリック事件――後に関係者達から第二次邪眼大戦と呼ばれる戦いは幕を下ろす。次元世界を恐怖と混乱に陥れようとした邪眼の野望は潰え、再び管理世界に平和が戻ったのだった……

「こ、これは一体……」

カリムは自分の目の前で勝手に発動した自身のレアスキルに困惑

していた。今、彼女の見ているモニターには無事な姿を見せた仮面ライダー達と六課の姿があった。これでもう怪人による恐怖は終わったと、そう確信した矢先の出来事だったのだ。
そして、そこに表示されたのは今回の予言に一文加えられたものだった。その内容は……

かくして闇は滅び去り、戦士、帰還の途に着かん。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

次回最終回。長かった拙作もいよいよ終わります。
最終回は、ある曲をイメージして頂けると思います。これを読んでくれた誰もが知っているだろう”あの歌”を……

ＳｔＳ最終回　青空になる～Ｓｔａｙ　ｔｈｅ　Ｒｉｄｅ　Ａｌｉｖｅ～

ゆりかごが消滅するのを見届け、五代達は心から安堵していた。全てが終わった。そう誰もが感じていた。そして邪眼が倒れたのと同じくトイも動きを停止し、完全に戦いは終了した。

満身創痍となったなのは達。五代達ライダー達も肉体面はともかく精神面は疲れ果てていたので変身を解いて、全てが終わった達成感と安心感でその場に座り込んだ。しかしはやては何とか立ったまま、周囲へ作戦終了を告げる。

――これを以ってラボ奪回と邪眼撃破戦終了やな。みんな……お疲れ様や。

その瞬間全員がサムズアップをした。はやてもそれに頷いてサムズアップを返した。ティーダはそれを見届け、自分は色々と面倒事があるのでそれを処理しないといけないと告げて去って行った。ヴァイスはそこから離れたヘリの傍でそれを見つめていた。

自分はその輪の中へ入る事は出来ないと思い、離れた場所にいたのだ。最終決戦を潜り抜けた者達だけが共有出来る雰囲気だと、そう理解していたからだろう。

そんな彼は視線を空へと移した。そこには澄み渡る青空が広がっている。トイと戦っていた空戦魔導師達も既に撤収を終えていて、もう残っている者達はいない。自分が操縦するヘリを護衛したり、救出作業を影ながら支えていた事を思い出し、ヴァイスは改めて感謝の意を伝えなければいけないと考えていた。

「今日の事は絶対これからの管理局や次元世界を変える。そんな気がするぜ」

一人呟くヴァイス。その呟きが風に消えるのと同時に、五代達の方でも誰かが空を見上げて口を開いた。

――本当に……終わったんだな。

真司がぽつりと呟いた言葉に誰もが言葉にならない気持ちを抱いた。全てが始まったのが翔一の海鳴出現とすれば、もう十年以上前になる。いや、邪眼が復活した時からとすればもっと昔だ。

そんな長きに渡る戦いが今終わった。そう考える光太郎は一番感慨深いものがあった。世紀王として生まれた邪眼。それが異世界にまで転移し、破壊の限りを尽くそうとしていた。本当ならばそれを阻止する仮面ライダーはいないはずの世界で。

「仮面ライダーが四人がいた。そしてなのはちゃん達がいた。だから……勝てたんだろうな」

故に、そう呟くのも仕方ないと言えた。そう、きっとＲＸだけでも、龍騎だけでも、アギトだけでも、クウガだけでも邪眼には勝てなかった。四人揃っていても、なのは達がいなければ勝てなかった。全てが揃っていたからこそ、あの最後の戦いも地上本部の戦いも勝てたのだから。

そう思っての言葉に五代達も頷いた。自分達が経験した中でも類を見ない程の激戦だったのだ。シャドームーンを模した姿も凄まじき戦士の力を有した姿も、一人では勝つ事はおろか善戦する事も厳しかっただろう。そう思う三人は笑顔を浮かべて告げていく。

「先輩達が三人もいたし、ジェイルさん達やなのはちゃん達もいたから俺は戦い抜けた。仮面ライダーの意味と在り方、そして本質。それをみんなが教えてくれたからさ」

「俺だってそうです。だから、仮面ライダーの名前をちゃんと名乗れるようになって嬉しかったし、クウガやＲＸにも会えた。あ、龍騎もですよ。先輩ライダーの話も聞けたし、家族だって出来た。もう言う事ないです」

「うん、俺も。光太郎さん達と会えた事はすっ……っごく嬉しかった。なのはちゃん達も色々教えてくれる事があったしね。特に真司君には、先生とは違う意味で忘れられない言葉をもらったし」

そんな三人の言葉になのは達も笑う。先程まで命懸けで全次元世界の命運を賭けた戦いをしていたとは思えない雰囲気に。それを感じてふと誰かが告げた。早く六課に帰ってヴィヴィオ達を安心させてやろうと。

それに全員が頷きを見せて立ち上がった時だった。先程まで誰もいなかったはずの場所に一人の男性が立っていたのだ。しかも、その格好は黒一色。誰もがそんな相手に息を呑むが、翔一が誰よりも早く叫んだ。

――今度は一体何の用だ！

その言葉に誰もが気付いた。目の前の神と思わしき相手なのだろうと。そんな彼は全員を見つめて告げる。時がきましたと。それに表情を驚愕に変えるのは、なのは達ライダー達が帰る事を知っている者達だ。スバル達はその言葉に困惑している。

そして五代達四人はやはりと思って神妙な表情をしていた。邪眼を倒すために呼ばれた事は予言から明白だった。であれば、その原因がなくなればもうこの世界に留まる理由はないからだ。

「アクロバッター達も連れて行ってくれるのか？」

「ええ。貴方達三人をちゃんと元居た世界へ戻します」

光太郎の問いに答える青年。しかし、その中にある三人との表現に五代が疑問を抱いた。

「ちょ、ちょっと待って。三人って……」

「黒き闇、黒い太陽、それにアギト。その三人です」

「え？　じゃあ……俺は？」

青年の告げた表現に真司は自分を指差した。それに対して青年が告げた言葉はあまりにも衝撃的だった。

――今の貴方は正確には人ではありません。消えかけた命を繋ぎ止め、それらしく見せているだけです。

その言葉に誰もが耳を疑った。だが、真司だけはその言葉で全てを理解――いや、思い出した。自分が最後に見た光景を。そう、それこそあの夢。蓮に揺さぶられ、何事かを叫ばれている光景だ。

「……そうか。俺、女の子を助けて……その時の傷が原因で」

「はい。死に瀕していました。なので、私がその命を取りとめたのです。あのライダーの在り方が歪んだ世界で、唯一ライダーらしくあった貴方を邪眼への対抗者とするために」

「待て。では真司は死んでいるというのか？」

「正確にはまだ死んではいないという事です。ですが、私が彼を元の世界へ戻せばいずれそうなる事になります」

トーレの問いかけに青年はあっさりと答えた。それに驚きを見せる周囲へこう告げた。だからこの十年あまり一切変化もしなかっただろうと。その瞬間、ウーノ達が息を呑んだ。確かにそうだったのだ。初めて出会った時から何も変わったところが無かった事に今気付いた。

なのは達が言葉を失っている中、真司は平然と笑った。全てに納得が出来たという風に。しかし、一つだけ気になっている事があった。それについて予想している事はあるのだが、それだけをちゃんと確認しようと思い尋ねた。

「俺が見てた夢って、もしかしてパラレルワールド？」

「おそらくそうです。生と死の狭間にいるから見てしまったのでしょう」

「……そっか。じゃあ”俺”は絶対に死ねないな」

真司のその声は真剣なものだった。どの世界でも自分は本当に願いを叶えられる結末は無かった。故に自分が全ての城戸真司の想いを受け継いで叶えてみせるのだと、そう強く思ったのだ。青年はそれに何も言葉を返す事無く、微かに笑みを浮かべるのみ。まるで真司がそう言うだろうと分かっていたように。

真司に関しての衝撃発言から周囲が脱したのを見て、青年はなのは達へ告げた。別れを告げなさいと。それに覚悟をしていたなのは達は頷けたのだが、スバル達知らなかった者達は一斉に動揺を見せた。

そこでなのはがかつての無人世界での出来事を話した。そして五代は光太郎と共にミッドチルダへ戻った際の出来事を語る。その内容にスバル達は言葉を失った。そしてなのは達は、どうしてそれをスバル達へ伝えなかったのかの理由を告げる。

「ごめんね、私達も迷ったんだ」

「もしかしたらって……そんな気持ちがあったから」

「でも、出来るなら知らんままで終わって欲しかったんよ」

隊長三人の言葉にスバル達が口を開こうとする。だが、それを遮るようにシグナムが口を開いた。

「お前達の気持ちは分かる。それでも教えて欲しかったと、そう思ったのだろう」

「でもな、はやて達の気持ちも分かってくれ。もし知られないで終わるならそれがいいって、そう考えたんだ」

「それに、三人を責めるなら私達も同罪よ」

「我らも知りながらお前達には隠していたのだからな」

守護騎士達の言葉にスバル達は何も言えなくなった。確かに何事もなく四人が残るのならそれで済ませたいと思う気持ちは理解出来ないでもなかったのだ。そう、それはライダー達の戦いと同じ。知らないままで終わる方がいい。下手に悲しませるのならいっそ……と。

それでも、納得は出来ない。特にスバル達の中で一番その怒りを

強くしていた者は。彼女は拳を握り締めて叫んだ。その行動に誰もが意外そうな表情を見せる。

――それでもっ！　それでもアタシは教えて欲しかったです！　はやてさん、貴女ならアタシの気持ち、分かってくれますよね！

――……せや、な。堪忍な、ティアナ。わたしはちょう卑怯やったかもしれん。

もしあの時隊舎の外を歩いていなければ、翔一とはやての間に割って入らなかったら。自分は想いを告げる事も出来ずに会えない状況になっていたのかもしれない。そんな思いがティアナを動かしていた。

それにはやても理解と納得をした。自分が逆ならばどう思うかなど言うまでもなかったからだ。今とは少し違うが、あの無人世界での出来事がそれだったのだから。

はやての言葉にティアナも我に返ったのか自分を抑える。そうして、それを見つめていた青年は無言で視線を真司へ向けた。それに気付き、真司も視線を青年へ向ける。

「……城戸真司、貴方には秘められた可能性があります」

「可能性……？」

「それを私が目覚めさせれば、きっと貴方は更なる力を得るでしょう」

「そんなのがあるのかよ……」

青年の言葉に意外そうな表情の真司。自分にそんなものがあるとは思えなかったのだ。しかし、そこから青年が何かを言う前に真司は小さく笑うとこう言い切った。

――――でもいらない。俺は今のままで足掻く。その力ってのは、必要ならいつか自分で目覚めさせてみせるし、必要ないならそれに越した事はないからさ。

それに青年は小さく驚きを見せるも、すぐに小さく笑みを浮かべた。その答えに満足するように。彼が知る”仮面ライダー”らしさをそこに感じたのだ。故にもう何も言わない。人間は全て彼の子供だ。その子供が望まぬものを与える程、彼は親馬鹿ではないのだから。

「では、そろそろ別れを。私が干渉出来るのも限界があります」

「そうなんだ。じゃ……」

青年の言葉を聞いて五代が少し寂しそうな顔をするも、なのは達へ視線を向けて微笑みかける。それだけで誰もが悲しみよりも喜びを感じるのだから、五代雄介という男がどれ程凄いかが分かるというものだ。

五代は悲しみの別れにするつもりはなかった。あの無人世界では何も言う事が出来なかったが、今回は言葉を告げる事が出来る。なら、単なる別れではなく次に続くものにしたい。そう思ったのだ。

「まずは俺から。えっと、短いような長いような不思議な時間だったけど……そうだね。めちゃくちゃ楽しかった。これで本当は会えなくなるんだろうけど、心配しないで。晴れない空がないように、行けない場所はないから。だから、きっとまた会えるよ」

笑顔とサムズアップ。五代を象徴する光景に誰もが笑みとそして微かな寂しさを見せる。それでも涙は見せない。五代がそれを嫌うだろうと思うから。涙の別れではなく笑顔の別れ。それは再会を信じるための約束。

そんな風に誰もが思う中、五代の後を受けたのは翔一。五代の笑顔に負けないぐらいの笑顔を見せ、全員へこう切り出した。

「俺、帰ったらまた料理の勉強を続けます。絶対店を開くんで、いつかみんなで来てください。あ、名前はここと同じでレストランアギトにするつもりですから。美味しい時間を約束します」

その言葉にも全員が頷く。口々に楽しみにしていると返すなのは達。不思議と翔一が言うと本当になりそうな気がしてくると思いながら、心から笑顔を浮かべていく。そして、それを見て嬉しそうな笑顔を見せながら真司が一歩前に出た。

「俺は……戻ったらいきなりピンチだけど、まあ何とかするよ。どんな時でも諦めないのがライダーだもんな。で、誰でもいいから俺の書いてた本を保管しといてくれないか？　あれ、公にするには色々と問題が出来たからさ、修正したいんだよ。だから頼むな」

真司の告げる内容に誰もがおかしそうに笑った。死ぬかもしれないのに、根拠もなく何とかすると言いのけた事と、別れの間際に言うにはあまりにも普通すぎた事に。しかもそれでいてちゃんと再会の約束も兼ねている。それに気付いて誰もが笑った。

本についてはヴァルキリーズが責任持って引き受けると返すと、真司は安堵するように息を吐いた。それを横目で見ながら、光太郎が笑顔のままで口を開く。自分が最後になる事を理解しながらも、変に気負う事はないと思いながら。

「最後は俺だね。正直、俺はこの世界で人に絶望しかけた。でも、フェイトちゃんが、それにみんながそれを吹き飛ばすぐらいの希望をくれた。人間は決して弱くない。決して愚かじゃないって、そう信じさせてくれるような、ね。だから、今度は俺がみんなへ希望を与える番だ。もし、自分達だけじゃどうにも出来ない時は呼んでくれ。仮面ライダーは、誰かが心から望む時に必ず現れるから」

光太郎の締め括りに五代達も頷いた。光太郎の言葉はまさしく仮面ライダーの言葉だった。人間が自分達の力だけではどうにも出来ない時、風と共に現れ、嵐のように戦い、朝日の中へ去って行く。それが彼ら仮面ライダーなのだ。

なのは達もそんな光太郎の言葉に希望をもらい、絶対に忘れないと返す。そして、安易に頼る事もしないとも。それに光太郎は嬉しそうに頷いた。それと同時にそこへアクロバッターとライドロンが姿を見せた。

それを見て五代が慌ててヘリへと走る。そして、少ししてビートチェイサーに乗って戻ってきた。もう少しで忘れていくところだったと呟く五代に笑いが起きる。そんな和やかな空気の中、四人へなのは達もそれぞれ言葉をかけていく。

「五代さん、すずかちゃん達へは何かないですか？」

「あ、じゃあ……元気でねって。それとまた会おうねって言っておいて」

なのはの言葉に五代はそう返す。それになのはは、内心で五代へ想いを寄せている親友へ同情しながら頷いた。きっと彼女の恋は報われる事はないだろうと感じてしまったのだ。

「光太郎さん、いつか夢……叶うといいですね」

「うん、ありがとうフェイトちゃん。君も体に気をつけて。リンディさん達にもお世話になりましたって伝えておいてくれるかな」

光太郎の言葉に笑顔で頷くフェイト。その目に光るものはない。再会を信じているのがそこから分かる。

「翔一さん、今度はれっきとしたデートとしてバイクに乗せてな」

「分かった。お弁当は俺が作ろうか？　それともはやてちゃん作る？」

「普通そこは女の子がやるもんや。翔一さん、お願いやからそないな事言わんでも分かって」

そんな恋人のようで何か違う会話をするはやてと翔一。とても別れの言葉には程遠い雰囲気がそこにある。

「……何か、こう考えると俺だけなのはちゃん達と関りが薄いんだなぁ」

そんな三組を眺めて苦笑する真司。決して羨ましいとかではなく、なのは達三人と五代達との繋がりの深さを改めて感じていたのだ。しかし、それを聞いて楽しげな笑みを浮かべながら真司へ近寄る者達がいた。

「真司さん、ドクターへの伝言はありませんか？」

「え？　あ、なら食事はきちんと栄養を考えて取るように。それと、研究は絶対人に迷惑かけないやつだけにしろって」

「真司君、それじゃあドクターの母親よ」

「まったく……お前らしいと言えばお前らしいな」

「シンちゃんは最後までぶれないわねぇ」

呆れながらも楽しげに笑う上の姉四人。ウーノの言葉に対する真司の答え。それが実にらしくて、ドゥーエはからかうように、トーレはため息混じりに、クアットロは感心するように。そんな笑いに真司が少し苦笑する。

「真司、待っていろ。絶対に助けに行くからな」

「ドクターの力、甘く見ないでね、真司兄」

「兄上、それまでご武運を」

「ああ、待ってる。三人も元気でな」

チンクの言葉に真司は嬉しそうに頷いた。そして、心配そうなセインとセッテの頭を軽く撫で、安心させると同時に言葉をかける。それに微かに羨ましそうな視線をチンクが注いでいると知らずに。

「兄様、これを持って行ってください」

「これは？」

「ドクター作の強力な発信機。もしかすれば、これで兄貴の世界へ行ける道を見つけられるかもしれないからさ」

「でも、今はそれ一つしかないんだ。だから迷ってたんだけど、死ぬかもしれない真司兄さんに渡しておこうと思ってね」

オットーから手渡された物を大事にしまう真司。そしてオットーを始めとして、ノーヴェとディエチの頭を嬉しそうに撫でる。異世界で出来た妹達へ精一杯の思いを込めるように。

「にぃにぃ、次に会う時は下町ってのを案内して欲しいッス」

「アサクサ、でしたか？　楽しみにしていますので」

「分かった。旨い物とか面白い物とか沢山教えてやるからな」

「真司、アタシは忘れないから。アタシの最高のロードは仮面ライダー龍騎だって」

ウェンディとディードの頼みに任せろとばかりに応じる真司。そして二人の頭も撫でていく。アギトの言葉には無言で力強く頷く事で返事とした。それにアギトも嬉しそうに頷き返す。

「五代さん、今度はゆっくり冒険の話を聞かせてください」

「いいよ。あ、冒険のお土産でインドネシアの魔除けの仮面とかもあるから、桜子さんに渡してもいいかって聞いておくね」

「あの、それって逆に呪われたりしないですよね？」

ナカジマ姉妹と話す五代。スバルの申し出に嬉しそうな表情で応じる五代。しかし、その後半部分でギンガがやや不安そうな言葉を返す。

「翔一さん、これからアタシの事をティアって呼んでください」

「いいけど、どうして急に……」

「いいから呼んでください！」

「えっと……ティアちゃん」

翔一の呼び方に嬉しそうでどこか恥ずかしそうにティアナは笑う。それを見てはやてがむむむと唸っている。なのはとフェイトはそんなはやてに苦笑していた。

「光太郎さん……約束、忘れませんから」

「絶対、絶対また会いに来てください！」

「ああ。エリオ君もキャロちゃんも仲良くね。自然保護隊へ戻るのなら、ミラさんやタントさんの言う事を守って無理をしないようにするんだよ」

二人の体を軽く抱きしめ、光太郎はそう言いながら体を離す。そして、二人の頭を優しく撫でると微笑みかけた。それに二人は目に光るものを浮かべながら微笑み返す。

「翔一、達者でな」

「今度は菜園残しておくかんな。今度こそいちごやメロン、育てろよ」

「世話はアインやみんなでするからね」

「お前の食事の味は忘れん。後、駄洒落もな」

「お姉ちゃんへの伝言をどうぞです」

「じゃあ……アインさん、食堂を頼みます。それと、最後まで手伝えなくてすみませんでしたって伝えておいて」

異世界で得た家族達からの言葉に翔一は笑顔で頷いていく。ヴィータとツヴァイは涙を目に浮かべながら笑っていた。シグナムとザフィーラは柔らかく微笑み、シャマルは優しげに笑う。それに翔一はもう一度力強く頷いた。

口々に言葉を掛け合う五代達。そこに涙はない。あるのは笑顔ばかりだ。決してこれが最後ではない。そう誰もが強く信じているような雰囲気がそこにはある。

そうして全ての者達が別れを終えたのを見計らって、青年は静かに五代達へ歩み寄った。そして、その手をゆっくりと四人へ向ける。すると、四人の体が光り始めた。それは段々輝きを増し、あの無人世界での光景を彷彿とさせた。

誰もが眩しさに目を閉じる中、青年の声が全員の脳裏に響く。それは感情を感じさせない声だったが、微かな優しさを感じる事が出来るような声でもあった。

――――これで私の役割は終わりました。ここからは貴方達の想い次

第です……

声が消えると同時に光も消える。なのは達が目を開くと、そこには誰もいなくなっていた。ゴウラムやアクロバッターなどもなく、四人がいた証は何も残っていなかったのだ。それでも、なのは達は泣かない。

誰が言い出したでもなく、視線を空へ向けてその手を動かす。その手をある形へ変化させ、全員が笑顔を見せた。笑顔とサムズアップ。自分達の誓いであり、思い出の魔法。いつか必ず再会するとの誓いを送り、なのは達は空を見つめ続けた。

青く澄み渡る青空を……

どれぐらいそうしていただろう。やがて誰ともなく六課へ帰ろうと言い出した。そして動き出すなのは達。そこへヴァイスが慌てて走ってくる。不思議がるなのは達へ彼は息を切らしながら告げた。

――く、クロノ提督からなのはさんに急ぎの話があるって通信が……

それになのはが疑問符を浮かべながら、ストームレイダーを経由してレイジングハートを使った通信に切り替える。すると、そこに映ったのは微かに微笑むクロノと……

「ゆ、ユーノ君……？」

「お疲れ様、なのは。フェイトやはやて達もお疲れ」

「どうして?!　体は大丈夫なの!?」

なのはの言葉にユーノは苦笑しながらゆっくり説明を始めた。あのツバイとの戦闘で床に落ちた毒が作った穴。そこに付着していた毒を、クロノの指示で分析した局員が何とか解毒剤を作り出す事に成功したのだ。それを投与され、一命を取り留めたとユーノは語った。

「クロノがその可能性に賭けて指示してくれなかったら危なかったよ」

「ユーノ君……本当に……良かった……っ！」

涙を流すなのは。それにユーノが優しく笑みを浮かべて慰める。そんなやり取りを聞きながら、誰もが笑みを浮かべていた。何も言わず、ただ静かに微笑み続けていた。なのはの涙が、五代との別れから来るものを混ぜていると気付かぬままに……

光太郎は気がつくと五代と共に魔法世界へ突入した場所へ立っていた。傍にはアクロバッターとライドロンがいる。

「……戻って来たんだな」

「ライダー、イコウ。マダタビハオワッテイナイ」

「……ああ！」

アクロバッターの言葉に光太郎は力強く頷くと、そのシートへ跨った。そしてアクセルを唸らせると同時に姿を変える。ＲＸはライドロンを伴って走り出す。そして、ライドロンは元居た倉庫へと戻るために途中で別れて去って行く。それを見送り、ＲＸは頷いた。

まずは先輩達へ会いに行こう。そう思いながら走るＲＸ。一刻も早く伝えたい事があると。その思いがアクロバッターを加速させていく。未来と異世界の仮面ライダー達。そして、魔法世界で出会ったかけがえのない仲間達との思い出を。心強くしてくれる多くの思い出達を共有するために。

『先輩達、聞こえますか？』

『ＲＸか！？　急に通信が出来なくなったから心配したぞ！』

ＲＸの通信へ応じたのは一号だった。おそらく全員が聞いているのだろうと思い、ＲＸは嬉しく思いながら簡単に邪眼との事を語った。それに一号と二号、Ｖ３にライダーマンが感慨深そうに声を漏らした。

彼ら四人はあの発電所の戦いに関っている。邪眼の事も知らない訳ではなかったからだ。だが、それに対して情報を持たないライダー達は別の事に疑問を抱いた。

『ＲＸ、君は異世界だけではなく未来のライダーにも会ったと言ったな？　では、また新たな悪が現れるのか？』

『いえ、彼は改造されたんじゃないんです。突然変身能力を得たと、そう聞きました』

Ｘの質問にＲＸが答える。それに全員が息を呑んだのを感じて、ＲＸは告げる。

『心配しないでください。アギトは俺達と同じ仮面ライダーです。それは本郷先輩達が知ってます』

『……そうだな。彼は確かに仮面ライダーだった。例え改造人間ではないとしても……いや、改造人間ではないからこそ、俺達よりも辛いはずだ』

『そうか。改造された訳ではないのに、人とは違う姿と力を突然得てしまった。それは俺達よりも辛いだろう』

『じゃあ、遠い未来で彼に……アギトに出会う事があれば、俺達はどう接すればいいんでしょう……』

一号と二号の言葉を受けて、スカイライダーが呟いた言葉。それに誰もが悩む。改造人間の孤独や辛さならば分かる。だが、人でありながら変身する力を得たとなれば事情が違う。

故に言葉が浮かばない。確かにＲＸも五代や翔一と出会う前ならば悩んだだろう。だが、彼らを知った以上、ＲＸは通信であるにも関らず、あの仕草をしながら答えを告げた。それはサムズアップ。

『大丈夫です。その時は、笑顔で話しかけてください。彼は自分の体の事を誇りにしていますから』

『……そうか。彼もその体が自分のプライドか』

Ｖ３の言葉にＲＸは頷き、こう告げた。是非全員へ渡したい物と

話したい事があるのだと。それに一番最初に興味を示したのはアマゾンだった。

『コウタロウ、何くれる？　ウマイ物か？』

『異世界のライダーからの預かり物です』

『異世界のライダーから、ねぇ。一体何だってんだ？』

『手紙？　……じゃないのか。なら……何だ？』

ストロンガーが告げた言葉を受け、ＺＸが言った単語にＲＸが反応を返さなかったので、二人はそこから考え始めた。そんな事を感じ取ってスーパー１が笑う。かつては死闘を演じた関係にも関らず、今では同じ話題で会話している事の不思議さに。

『ははっ、それも楽しみだけど、俺はその思い出話に凄い興味があるな』

『では、通信では何だし一度合流しよう。それでいいだろうか？』

ライダーマンの問いかけに全員が応じ、集合場所を話し合う。それを聞きながらＲＸは思う。ここにはいない者達の事を。

（俺は忘れない。クウガ、アギト、龍騎、そしてなのはちゃん達。君達との日々は、時間は決して忘れやしない！）

唸りを上げるエンジン音。誰もいない道を一人走るＲＸ。脳裏にあのミッドチルダでの日々を思い出しながら、その手に握るアクセルを開け放っていく。まるで過ぎ去りし日々を追い駆けるように。

未だ見えない明日を迎えに行くように。
そこへ告げられる集合場所。それに了解と返し、RXは急ぐ。そして、誰にでもなく呟いた。それは、彼の中に残る一つの約束への思い。何があっても必ず果たすと決めた誓い。

「キャロちゃん、エリオ君、フェイトちゃん……いつか会いに行くよ。絶対に……いつの日か……」

その呟きが風に流れていく。太陽を浴びて遠く彼方へ去って行くRX。その彼の右手はあの仕草を作り、青空へ向けられている。彼の戦いは終わらない。人が自然と共存し、本当の平和を掴むその日まで……

「っ……ここ、は……？」

体中に感じる痛みと脱力感に耐えながら、真司はゆっくり目を開けた。そこには去って行く蓮の背中があった。引き止めようと声を掛けようとするも、痛みが邪魔してそれも出来ない。そうこうしている間にその背中が見えなくなる。
そして再びその瞼が重くなる。それに抗おうとするも、徐々に目が閉じていく真司。だが、突然痛みが和らいでいく。それを感じた真司は不思議に思い、目を開けて視線を動かす。すると両隣にいるはずのない者達がいた。

「ど、どうして……？」

「間に合ったね、真司」

「今、薬で応急処置をしましたから。でも、無理は駄目ですよ」

ジェイルとシャーリィは笑みを浮かべながら真司に肩を貸して立ち上がらせる。疑問符を浮かべる真司へジェイルが見せたのは、何かの機械だった。それは受信機。真司の持っている発信機の反応を辿り、ジェイルが転送ポートの技術を応用して作り上げた装置を使いここへ来たのだ。

だが、現状では来る事しか出来ないとジェイルは苦笑気味に告げた。それに真司が唖然となる。それを見たジェイルは、楽しげな笑みを浮かべたままでこう告げた。

「心配ないさ。こちらで同じ物を作ればいいだけだからね。だが、やはり時間の誤差が予想以上に大きいな。こちらでは君がいなくなって三ヶ月も経過しているのに……まぁ、おかげで助ける事が出来たからよしとしよう」

そう言って、ジェイルは話を締め括った。それに納得しながらも、真司は何故シャーリィがいるのかと尋ねた。

シャーリィはジェイルに協力し、その装置を作り上げた。そして多忙なフェイトに代わり、名目上はジェイルの監視役としてついてきたのだ。その必要はないんだけどねと苦笑するジェイルと、やや照れたように誤魔化すシャーリィ。それに真司が微笑みを浮かべる。

更に詳しい話をしようとする二人だったが、そこへレイドラグーン達が再び出現する。それを見て戦おうとする真司。しかし、それをシャーリィが止めた。今の体では無理だから。第一、真司が無理をする必要はないからと告げて。それに疑問符を浮かべる真司へ、シャーリィは小さく笑いながら指を差した。

「ほら」

「えっ……？」

シャーリィの指差す方向には、十二人の女性がいた。その姿を見て真司は言葉を失う。それは紛れも無くナンバーズ――いやヴァルキリーズだったのだ。

「数は多いけど、怪人程ではなさそうね。でもみんな、気をつけて」

「前線指揮は頼むわね、オットー。ウーノは私が護衛するから」

「了解です、ドゥーエ姉様。クアットロ姉様は護衛と援護をよろしくお願いします」

「はいはーい。お任せよ」

「行くぞセッテ。遅れるな」

「はい、トーレ姉上」

「あたしはここで援護射撃に徹するからね、セイン」

「ＯＫ！　なら、あたしは真司兄達を護衛するよ」

「ならアタシもいく。接近戦出来る奴がいた方がいいだろ」

「では私も参ります。三人いれば万全でしょう」

「アタシはお姉達の援護に回るッス！」

「ヴァルキリーズの力を見せてやるぞ、ミラーモンスター！」

聞こえてくる声に思わず笑みが零れてくる真司。目の前で繰り広げられる光景を眺め、真司はジェイルとシャーリィへこう告げながら離れた。

――ごめん、やっぱり俺も戦うよ。女の子達だけに戦わせるのは嫌だから。

その言葉に二人は苦笑しながら頷いた。ただ、無理はしないでと念を押して。それに真司は頷くと、手にデッキを掴んで歩き出す。途中で車のミラーへそれをかざし、Ｖバックルを出現させる真司。そしてゆっくりとその中央へデッキを装着し、呟く。

――変身……

その姿を見てジェイル達に笑みが浮かぶ。龍騎はそれに小さく頷き、構えて叫ぶ。

「絶対諦めないからな！　俺は、俺達はこの戦いを止めてみせる！」

龍騎の言葉に誰もが心強さを感じて頷く。シャーリィは一人そんな姿を見て呟いた。やはり仮面ライダーの存在は大きいのだな、と。龍騎は戦う。彼と志を同じくする者達と共に。

共に戦う仲間であるジェイルとシャーリィという二人の頭脳がライダーシステムを解明し、戦いを止める術を見つけ出してくれると信じて。一度だけその手が青空へ向かってあの仕草をする。ここにいない者達へ自分の健在を告げるように。

こうして彼の戦いは終わり、ここからは彼らの戦いが始まった。
彼と十二人の戦乙女達を合わせた十三人の”仮面ライダーＳＰＩＲＩＴＳ”を持つ者達の戦いが……

「ここは……あの時の道だ」

翔一は眼前に広がる光景にそう呟くと、バイクへ跨り走り出す。
目指すは街。そこで色々な事を確かめなければと、そう思ったのだ。
だが、途中で公衆電話を見つけたため、そこへ駆け込み急いで電話をかける。
繋がってくれと思いながらコール音を聞く翔一。すると数コール後に願いが通じて繋がった。かけた場所は彼が長きに渡り世話になった家。そして、電話に出た相手は翔一のよく知る相手だった。

「はい、美杉ですけど」

「真魚ちゃん！　俺だけど、今何年？」

「俺って……翔一君？　しかも今何年って……いきなり何？」

「いいから教えてくれない？」

翔一の声が普段と違う事に疑問符を感じながらも、真魚はやや不思議そうに告げた。２００４年と。それに翔一は驚くも、礼を言って電話を切ろうとした。だが、それを真魚が止めた。

「待ってっ！　翔一君、ちゃんと理由を聞かせてね」

「……うん。きっとかなり驚くだろうけど、いい？」

「もう慣れっこよ。翔一君絡みはそれが普通だし」

真魚の苦笑混じりの声に翔一も苦笑した。今から向かうと告げ、電話を切る翔一。そして、電話ボックスから出ると伸びをした。自分の体に大きな変化が起きなかった理由を何となく察したのだ。消えた頃とあまり大差がないようにと、おそらくあの青年が配慮してくれたのだろうと。

内心で意外といい人かもしれないと思いながら、翔一は一人笑う。もし機会があれば、自分の料理を食べてもらいたいなと考えて。そんな時、ふと視線を感じて翔一は顔を動かす。そこにはその青年が立っていた。

「……アギト、貴方には驚かされるばかりです。あの賭けはどうやら彼の勝ちになりそうですね」

「賭け？　彼？」

「おそらく、もうこの世界はアギトを必要としないでしょう。ですが、仮面ライダーは別のはずです」

「それって……つまり……」

翔一の言葉に青年は無言で頷き、静かに美杉邸のある方向を指差した。

「今はお行きなさい。貴方を待ちわびる者の元へ。貴方の道に幸多からん事を……」

「ありがとうございますっ！　貴方も、いつか俺の開く店に来てくださいっ！」

翔一の笑顔の申し出に青年は若干驚きを浮かべる。だが、すぐに微笑むと頷いて消えた。それを見送り、翔一はバイクへ跨った。そして走り出すバイクと共にその体がアギトへ変わる。それに伴いバイクもマシントルネイダーへと変化していく。

人気のない道を駆け抜けながらアギトは思う。青年の言った”アギトは必要ないが、ライダーは別”との言葉の意味を。それは進化の光としてのアギトではなく、仮面ライダーとしてのアギトは求められ続けるという意味だろうと。

（俺の役目はきっとそういう事だ。これからアギトとなる人達へ仮面ライダーとしての生き方を教え、怪人にさせない事。それが仮面ライダーアギトの仕事だ！）

自分の与えられた役割を自覚し走るアギト。その脳裏に浮かぶは二人の少女の顔。その二人との約束を思い出し、アギトは小さく呟いた。

「そうだ。真魚ちゃんに意見をもらおう。はやてちゃんとティアナちゃんに会った時、何か美味しいお菓子でも渡してあげたいし……」

きっと年も近いから良い意見をくれるはず。そんな事を考えながらアギトは道を走り抜ける。その右手にあの仕草を作り、空へと向けたまま。同じ青空の下にいるだろう先輩ライダー達とあの異なる世界の大切な者達へ思いを込めて……

白い砂浜。どこまでも続く青空と海。それが意識を取り戻した五代が最初に見たものだった。それが自分が海鳴へ飛ばされる前に見ていた景色だと理解し、五代は周囲を見渡した。すると、傍にはビートチェイサーとゴウラムがいた。

「夢じゃ……ないんだ」

そう呟いて五代は視線を上へ向ける。眩しい日差しに手で影を作りながら、どこまでも広がる青空を見つめた。そして小さく頷くと、五代はビートチェイサーへ跨った。しばらく帰らないと決めた日本。だが、自分は五年以上帰っていない。

そう考え、なら一度帰ろうと思ったのだ。何よりもビートチェイサーとゴウラムを科警研へ返さねばならないし、自分の体も診てもらいたい。そう決断した五代は素早かった。ゴウラムが合体し、ビートゴウラムへと変化するのを見てからアクセルを解放したのだ。

唸りを上げて走り出すビートゴウラム。五代はそれに乗ったまま構える。それは変身の構え。ビートゴウラムで安全に走るためにはクウガになる必要があると考えたからだ。

変身を終え、クウガは走る。どこかで連絡手段を見つけ、一条か榎田辺りにでもビートゴウラムの輸送手段を手配してもらおうと考えながら。砂浜を抜け、道へ出ようとしたその時、クウガの耳に懐かしい音が聞こえると同時に懐かしい声が聞こえた。

『五代！　聞こえるか、五代！』

「一条さん?!」

『五代か！　やっと繋がったな……今どこにいる?』

「キューバです。丁度良かった。今から日本に帰ろうと思うんですけど、ゴウラムとかいるんでどうしようかと思ったんですよ」

通信範囲を超えているにも関らず繋がった事に疑問を抱くも、クウガはそう返した。どうもそれは一条も同じらしく、キューバと聞いて驚いていた。だが、今はその原因を探るよりもビートゴウラムの輸送を考える方が先と判断したのだろう。

すぐにそこで少し待機するように告げ、何かを誰かと話す声が聞こえてくる。クウガはそれにもしやと思い、大声で尋ねた。

――もしかして、対策本部の人達が揃ってるんですか?!

――そうだよ、五代雄介君。全員ではないが、主だった者は揃っている。

そのクウガの問いかけに答えたのは一条ではなく本部長の松倉だった。それに続くように桜井や杉田の声も聞こえてきた。最後には笹山も声を出し、クウガは嬉しさを噛み締めながらふと疑問に思った。

それは一条達が集まっている事だ。自分がなのは達の世界に行ってから十年以上が経過している。にも関らず、何故未だに彼らが揃う事が出来るのだろうと。

「あの、すみませんが今って２００１年ですよね?」

「は？　ええ、そうですよ？」

クウガの質問に笹山はどうしたんだろうと思いながら声を返した。それを聞いてクウガは一瞬言葉に詰まった。自分が過ごした時間と元の世界の時間がすれていると気付いたのだ。だが、そこで何故自分があの五年間で外見が変化しなかったのかを理解した。

（そっか。俺、あの時から体内時間ゆっくりになってたんじゃないかな。だから全然変化しなかったんだ）

そんな事を考えるクウガへ杉田の声が聞こえてきた。

『五代君、とりあえず今からそっちへ一条が行く。すまないがそこを動かないでくれるか？』

「分かりました。ここで野宿して待ってます」

『頼む。しかし、よくもまぁキューバと繋がったもんだ』

「ですねぇ。さすがは科警研製ってとこですか」

クウガの軽い口調に杉田達の笑いが起こる。それにクウガも笑い声を上げようとして、はたと思い出した。ビートチェイサーがシャーリィによって改造されている事を。それが原因で遠距離通信が可能になってしまったのではないだろうか。

そんな事を考え、クウガは榎田達へくれぐれもこの事を内密にしてもらおうと頼む事にした。簡易的デバイスと同じ機能を積んだビートチェイサーを分析し、何かの拍子で悪用されたりする事を防ぐために。

『五代さん。戻ってきたら冒険の話、聞かせてくださいよ』

「いいですよ。桜井さんが喜びそうなとびっ……きりの奴がありますから。期待しててください」

クウガの言葉に嬉しそうに楽しみにしてますと返す桜井。そして通信が切れる。それにクウガは懐かしさを感じながら空を見上げた。そこに広がる空に、ふとなのは達の笑顔が見えた気がしてクウガは軽く驚く。

だが、小さく頷くと空へ向かって手を動かす。それをあの形へ変えて、クウガは誰にでもなく告げる。

――ありがとう、みんな。俺も忘れないから……

ここと魔法世界が争いのない世界になってくれる事を願いながら、クウガはそう告げた。きっとまた笑顔で会える日が来る。その時は一条達となのは達を会わせる事が出来るはず。そう信じてクウガは自分の手を見つめた。

（いつか、これをみんなで見せ合える時がくるといいな）

そう思いながら、クウガは黙って青空とそれを見つめ続けた。

――自分達の共通の仕草となった”サムズアップ”を……

青空の下、小さな庭先を元気よく走る子供達がいる。ヴィヴィオとイクスヴェリアだ。六課解散と同時に同じ学校へ入学した二人は幸運にも同じクラスとなり、リインが迎えに来るまで高町家で遊ぶのが常となっていた。

既にゆりかごが落ちてから半年以上が経過し、ミッドチルダは日常を取り戻していた。仮面ライダーの名は管理世界中に広まり、彼らの乗っていたバイクを模した物が街中に見られるようになった程だ。

レジアスとグレアム達との協力の下で行われている管理局改革は少しずつではあるが効果を見せていて、バトルジャケットは既に少数が生産配備された。現在治安維持隊としてその力を発揮していて、ジェイルのデータをフェイトから託された技術仕官のマリエル・アテンザによって、近々増産が行われる予定となっている。

あの後、ゆりかごが落ちたのを受けて最高評議会の存在は白日の下に晒され、民衆からは批判と理解の両方を受ける事となった。しかし、本来ならば死んでいる者が裏で全てを動かそうとの行いは許されず、彼らは世界をその時代に生きる者達へ託して退く事を決意せざるを得なくなった。レジアスはそんな彼らへ決して後悔させる結果にはしないと誓い、その最後を見送ったのだ。

「あ、ヴィヴィオ見て。あの雲、ライドロンみたいです！」

「どれ？　……あ、ホントだ。ライドロンみた～い！」

二人は揃って空を見上げる。そこにはやや歪な楕円形の雲がある。ライドロンに見えるかと言えば……正直微妙なところだろう。だが、それでも二人にはいいのだ。そうと思える要素があるだけで。

あれからヴィヴィオと親密になったイクスヴェリアは、固い喋り方を何とか克服する事が出来た。それでも所々丁寧になってしまうのはご愛嬌というものだ。本人曰く、中々砕けた喋り方にするのは苦労するとの事。それを聞いたシグナムが「誰かとは真逆だな」とヴィータへ言ったのは言うまでもない。

「五代さん達……今頃どうしてるんだろうね？」

「きっと元気なはずです。それよりも、ジェイルさん達は真司さんと合流出来たでしょうか？」

ラボからヴァルキリーズと共に真司の反応を追って消えたジェイル。彼は書類上はもう罪を償う必要が無くなっていた。それははやてとレジアス達の機転によるもの。邪眼が全管理世界へ行った通信。その際、ジェイルの姿をしていた事を利用し、邪眼が犯罪者のジェイルだったとしたのだ。

つまり、邪眼が倒れたために犯罪者ジェイル・スカリエッティは死んだ事になった。邪眼がミッド限定とはいえ、その姿を大勢の見ている前で変えたのも大きい。今のジェイルは、邪眼によって捕まっていた何の罪もない本人とされている。

それでも本人は罪を償う気ではいる。それとこれは別だと、そう言い切っているのだから。だが、その心遣いには感謝し、戻ってきた時にはこれまで以上にみんなの笑顔のために尽くす事を誓って行ったのだ。

「そっちこそ心配ないよ。その内、こっちに戻ってくるんじゃない？」

「そうだといいですね。早く会いたいな」

ヴィヴィオの言葉にイクスヴェリアはそう返して笑う。残暑の日差しは鋭く、吹き抜ける風はやや熱い。その時、ふと思い出す事があったため、ヴィヴィオが表情を曇らせた。

「どうしました？」

「うん。もうすぐゆりかごが落ちた日でしょ？　それでビビの事を思い出したんだ」

ヴィヴィオの言葉にイクスヴェリアも少し悲しげな顔をした。ヴィヴィオの告げたビビとは、あの少女の事。なのははヴィヴィオと死んだ少女を自分の娘としたのだ。ユーノもそれに賛成した。少女のような悲劇を忘れないためにも、そして親の愛を知らずに眠った少女へせめてもの愛情を注ぐためにも。

名前はヴィヴィオから取った。ヴィヴィオの姉妹なら名前も近いものをと、そう考えてなのはとユーノが付けた。ちなみに、なのはとユーノは籍は入れたもののまだ式を挙げていない。五代達だけではなく、ジェイル達さえいない状態では絶対式を挙げたくないと二人の意見が一致しているからだ。

「……みんなで行けるといいですね、お墓参り」

「うん、そうだね……会いたいな、みんなに」

イクスヴェリアの告げた”みんな”に五代達も含まれている事に気付き、ヴィヴィオは小さく頷いてそう返すと黙った。イクスヴェリアもそれに応じて黙り込む。

六課が解散した日以来、なのは達でさえ全員で集まる事は出来なかった。ジェイル達がいないのもあるが、それぞれが多忙なのもある。なのはは航空戦技教導隊へヴィータを連れて戻り、フェイトは次元航行艦付きの執務官としてティアナを補佐に復帰。はやてはレジアスの頼みを受け、地上の治安維持と災害救助を主とするバトルジャケット部隊”特務六課”部隊長として、ツヴァイや残る守護騎士達と共に忙しい日々を送っている。

スバルはミッドチルダ湾岸救助隊へスカウトされ、レスキューとして活躍し、エリオとキャロは自然保護隊に復帰して、以前よりも目覚しい働きを見せていた。ギンガは１０８へ復帰し、捜査官として奮闘中。リインは家事をしながら八神家の留守を守っている。

グリフィス達もそれぞれに自分達の目指す進路先に進む者、そのための経験を積むための部署へ異動する者、原隊へ復帰した者とみなバラバラとなっていたのだ。今や”機動六課”はライダーと共に次元世界を守った伝説の部隊となり、そこの出身者は必ずといっていい程、仮面ライダーの話をせがまれるのだ。

ヴィヴィオとイクスヴェリアが揃って無言のまま空を見上げる。しかし、その瞳には光るものがあった。どこかで、もう会えないのではないかと考えたのだろうか。

すると、その涙を止めるように突然二人の前に灰色のオーロラが出現した。それに驚く二人。その眼前のオーロラから一人の男性が現れた。首には小さなカメラらしき物を提げ、やや無愛想な表情の青年だ。驚きから言葉を無くした二人を他所に彼は周囲を見渡し呟く。

――ここは……何の世界だ？

時代が望む時、仮面ライダーは必ず蘇る。

それは本来、仮面ライダーがいなければならない事態になっている。

もしくはなるという事を意味する。

だが、今回はどうなのだろうか？

何せ、二人が出会った男は世界の破壊者にして守護者。

全てを壊し、全てを繋ぐ男なのだから……

新しい道が開かれる。それがどんな道かは分からない。

しかし、その先にはきっと彼らが望む未来があるはずだ。

光と闇の果てしないバトルを止めようとす

る者達が……
　　　　　　　　生きている激しさを体中で確かめながら進
む者達が……
　　　　　　　　誰かが平気な顔で夢だと笑う事を信じる
者達が……
　　　　そして、伝説は塗り変えるものだと示した者達が、心
から願う明日が……
　　　　　　　　　　誰かの声無き声が響く時、ヒーロー
は現れる。
　　　　　　　　　　　その涙を笑顔に変えるために
……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

最終回。長きに渡る拙作にお付き合い頂きありがとうございました。
これにて完結とさせて頂きます。
この後の物語は皆さんの中に。サウンドステージはもう起きません
し、ルネッサの闇はトレディア自身がご存命なので解決してくれる
気がします。

それと……自分はＶＩＶＩＤをまったく知らないのでご容赦を。

Ｓｉｄｅ　Ｓｔｏｒｙ　虚数空間の先にある光

「ここは……？」

プレシア・テスタロッサは眩しい光を感じ、ゆっくりと目を開けた。そこには見た事もない景色が広がっている。自分が知らない場所にいる事を理解した彼女は、そこでふと思い出した。自分があの時の庭園で最後どうなり、どこへ落ちたのかを。

「そうよ……私はアリシアと一緒に虚数空間を通ってアルハザードへ」

「気が付かれましたか？」

そうやって自分の最後を思い返していると、プレシアへ呼びかける声が聞こえた。それに視線を動かし、プレシアは言葉を失った。そこにいたのは銀色の人間。いや、人型の生物だったのだ。女性らしい外見をしているので、おそらく性別はあるのだろうと考え、プレシアは少し注意深く相手を観察した。

しかし、それにも関らず敵意などは感じられない。それどころか安らぎさえ感じる相手の雰囲気に、プレシアは内心の動揺を抑え努めて冷静に問いかける事にした。もしかすれば、ここが望んで止まなかったアルハザードかもしれないと思いながら。

「あ、あの……ここはどこでしょうか？」

「ここはＭ７８星雲。通称光の国です」

「光の国……？」

「私はマリー。みなからは親しみを込めて母と呼ばれています」

母はそう告げてプレシアへ近付いた。そして、彼女はプレシアの体を軽く見つめて頷いたのだ。それがどういう意味か分かりかねるプレシアだったが、その瞬間気付いた事があった。

体を覆っていたはずの倦怠感が綺麗に消えていたのだ。それに表情を変えるプレシアを見て、母は小さく笑ってこう告げた。プレシアの体に巣食っていた病気は完全に治療する事が出来たからと。それに呆然となるプレシアへ、更に母は何かを教えようとした。すると、そこへ誰かがドアを開けるなり走り込んできたのだ。

「ママ～！」

「あ、アリシアっ？！」

「やっと起きたんだね。わたし、待ちくたびれたよ」

死んだはずのアリシアが元気に動いている事に驚愕するプレシア。そんな彼女へ母は苦笑するようにアリシアの頭へ手を置いた。

「気持ちは分かるけど、もう少し静かにね。貴方のお母さんはまだ寝ていた方がいいのよ」

「はーい。母がそう言うならそうするね」

母の言葉に笑顔で手を挙げ、アリシアはそう答えた。そこへ遅れるように部屋へ現れる者がいた。立派な角を頭に生やし、顔には歴戦の勇士然とした髭のようなものがある。

「アリシアは足が速いな。だがここは病院だ。あまり騒がしくしてはいけない」

「ごめんなさい、父。これからは気をつけるから許して」

「あなた、アリシアの母親が目を」

母の言葉にウルトラの父は少し驚きを見せ、頷くとその傍へ近寄った。プレシアはその存在感に何とも言えない力強さと頼もしさを感じるも、アリシアの事を聞かねばと思い、二人へ問いかけた。何故アリシアが起きているのかと。

それに二人は互いの顔を一度見合わせ頷く。すると、母はアリシアを連れて部屋を出て行った。その意味を理解し、プレシアは内心感謝していた。そう、父達はアリシアが死んでいた事を知られないようにしてくれたのだと。

「まずは自己紹介を。私はケン。みなからは親しみを込め父と呼ばれています」

「プレシア、プレシア・テスタロッサです。寝たままでの無作法をお許しください。この度は色々とありがとうございます」

プレシアの言葉に父は静かに首を横に振った。どうかそのままでと優しく告げたのだから。その心遣いに感謝し、プレシアは礼を述べて父の言葉を待った。

「……あの子は命を失っていましたね」

「はい……」

「それがどんな原因かは知りません。ですが、貴方達はこの光の国へ現れた。貴方は重病を抱え、ポッドに入ったあの少女は体組織が崩壊し始めていた。それに気付いた我々には、貴方達が悪人とはどうしても思えなかった。故に私達は出会ったのも何かの縁と思い、出来る限りの事をしたのです」

「で、では……アリシアは……」

父の言葉にプレシアは震える声でその意味を教えてもらおうとした。それに気付き、父は小さく頷き告げたのだ。

――我々は、命を落とした存在を蘇生させる可能性がある手段を有しています。それをあの子に施しました。本来は我々の種族しか試した事は無かったものでしたので不安でしたが、体がまだ完全に死んでいなかったためか、もしくはあの子の生きたいとの意志が強かったのか……とにかく蘇生は成功したのです。

――どうしてそこまで……

――私も一人息子がいます。その息子も激しい戦いで一度命を落としました。それを私達は蘇生させた事があります。故に子を思う親の気持ちは、星や生まれに関係無く同じはずと信じて決断しました。

――……

――そして目覚めたあの子にある程度の話は聞きました。貴方が優しい母親である事や研究者である事などを。

父の告げた言葉に受けた衝撃から抜け出せないプレシアだったが、そのまま話されたアリシアの語った内容に涙を流した。父は全てを話し終わり、黙ってプレシアを見つめた。それにプレシアは自分の話を聞きたいのだろうと察しをつけ、ゆっくりと話し出した。

アリシアを失った事故から虚数空間に落ちるまでの出来事を。それを聞いて父は一言も言わず、最後までプレシアの話を聞き続けた。それがプレシアには何よりも辛かった。罵ってくれれば、怒ってくれればどれだけ楽か。アリシアを助けるために自分がやった事の大きさを改めて感じていたのだ。

子を思う親の気持ちは星などに関係ない。その父の言葉にプレシアも賛成だった。だからこそ自分がやっていたのは、自分のような思いをする親や子を生み出す可能性に満ちていると理解してしまったのだ。

他者などどうなってもいい。子供さえ無事でいれば。その言葉がそのまま今の自分に返ってきたとしたら、どうするのか。自分はそれを受け入れる事が出来るのか。そう考えながら、プレシアは話を続けた。

フェイトへの虐待などを話した時でさえ父は無反応だった。プレシアは全てを話し終えると、涙を流している事に気付いた。

「……涙？　一体」

「フェイトという少女の事を話し出したところからです。貴方はやはり優しい母親だった。だからこそ、その少女を突き放すしかなかったのですね」

いつからというプレシアの疑問。それに父ははっきりとそう言い切った。そんな父の言葉にプレシアは疑問符を浮かべた。だが、そ

れに父は自分の胸へ手を置いてこう告げた。プレシアの心に答えはあると。

（私の心？　私はあの子の事を……フェイトを別に……っ！？）

そこでプレシアは気付いた。自分は父へフェイトと名前で呼んでいたと。それまで人形やあの子としか呼ばず、名前で呼ぶ事に抵抗があったはずの存在を。つまり、自分は知らずフェイトを娘として扱っていたのだと気付いたのだ。その表情から父はプレシアが自分のフェイトへの認識を理解したと悟り、静かに頷いて告げた。

アリシアを娘として愛するが故に、その代わりとしてフェイトを愛する事は出来なかった。それは、決してフェイトを嫌っていたのではない。フェイトはフェイトとして愛さなければいけないと感じていたからだ。

決してアリシアの代わりではないと、そう無意識の内に考えていた。だからこそ、最後まで突き放した。フェイトをフェイトとして愛してしまったら、プレシアがアリシアの事を忘れてしまいそうだったからと、そうどこかで悟っていたのではないか。

その言葉に押し黙るプレシアへ、父は締め括りとして最後は噛み締めるように告げた。お辛かったでしょう、と。それにプレシアは一瞬言葉を失い、涙を流し出した。そのまま父は静かに部屋を出る。また後で来ますとだけ言い残して。そして部屋に一人残されたプレシアはただ泣き続けた。

彼女は父の言葉が自分の真実と思っている訳ではない。だが、そうだったのかもしれないと思えたのだ。自分は何をしていたのかと。フェイトを生み出した事は、結果的にアリシアにもフェイトにも裏切りだったのではないか。どれだけコピーしようと、それは既にア

リシアではない。であれば、自分がしていた事は娘に対する裏切りだと。

（私は……私は！　許されない事をしてしまったっ！）

両手で顔を隠しながら、今更に自分のした事を後悔するプレシア。そしてそこでプレシアが思い出した事があった。それはアリシアから頼まれていたある願い。

――――わたしね、妹が欲しい！

その妹に当たる存在を自分は虐待した。そうプレシアは考え始めたのだ。あの笑顔を失わぬためには、このまま生き返ったアリシアへ自分は事実を隠して生きるしかない。だが、それで本当に親としてアリシアへ接していいのか。そんな気持ちで自分はアリシアと笑い合っていけるのか。

その自責の念がプレシアを襲う。最愛の娘が生き返った事が、皮肉にも彼女が目を逸らしていた現実を突きつけた。人として壊れたはずのプレシア。そんな彼女に唯一残った人としての愛情。それが彼女を再び母親へと戻したのだ。

「ごめんなさい……許してもらえないだろうけど……ごめんなさいっ！」

その謝罪は、アリシアへのものだろうか。それともここにいないもう一人の娘へのものだろうか。プレシアの懺悔の言葉は、そのまま部屋の中で彼女自身を責めるかのように響くのみだった……

あの後、プレシアはアリシアと光の国で暮らす事を決意し、その提案を彼女と彼らは受け入れた。プレシアの事実を父から聞いた母は、ただ静かにプレシアへ「一人で抱え込まないでください。私も子を持つ母ですからね」と告げた。その優しさにプレシアは心から感謝した。

プレシア達が光の国に定住する事になった時、問題が一つあった。それはプラズマスパークの光が二人で影響を与える可能性がある事だ。だが、虚数空間を抜けて来た際、一度浴びたにも関らず何も起きなかった事にゾフィーが気付き、詳しく二人を調べたところ、その体に強烈な光を寄せ付けない膜のようなものが出来ている事が発覚した。

その理由を尋ねられたプレシアは、おそらくと前おいてこう答えた。ジュエルシードという古代文明の遺産が放った光が原因ではないかと。それに周囲は理解を示し、万が一に備え一応の防護服のような物を製作する事にしたのだ。

プレシアはそれにバリアジャケットの技術を応用する事を提案。それがキッカケで、彼女はそのまま光の国の技術者となっていく。一方、アリシアは父や母を通じてタロウと知り合い、彼を通じてウルトラ兄弟とも関るようになった。

――じゃあアリシア、これは分かるかな？

――えっと……ちょっと待ってね。

地球で中学の教師をしていた８０がアリシアの勉強を見たり……

――はっ！　えいっ！

――その調子だ。頑張れ、アリシア。

当時から教官として働いていたタロウがアリシアへ護身術を教えたりしながら……

そんな風にすくすくと成長していくアリシア。それを見守り、プレシアはいつフェイトの事を話そうかを考えていた。プレシアの悩みや迷いの答えを導いてくれる父と母は、それについては何も言ってくれなかった。

それはかりは自分で決めなければ駄目だと、そうプレシアへ言っていたのだ。それは黙って生きるのも、話して生きるのもプレシア次第だと暗に告げていた。

こうして時が流れ、アリシアはフェイトと違い活発で社交的な性格のまま、美しく成長していった。そしてあの日から十年後、プレシアとアリシアへ転機が訪れる。

【一体何が起きたんですか？】

【プラズマスパークを狙って侵入者が現れた。プレシアさん、貴方はアリシアと共に念のためシェルターへ】

突如として鳴り響いた警報。それにプレシアは念話を使って父へ事態の説明を求めた。彼らウルトラ族は基本的にテレパシーを使用出来る。それを聞いたプレシアがならばと念話を試してみたところ、通じる事が分かったのだ。

そして父の告げた内容にプレシアは息を呑んだ。ウルトラマンの力の源であるプラズマスパーク。それを狙う存在がいるとしたら凶

悪な宇宙人しかいない。しかも、光の国にはそれに対処するべく防衛網が敷かれているのだ。

しかし、どうやら相手はそれを見事に潜り抜けたらしい。それを思えば、父の警戒する言葉はもっともだ。そう思い、プレシアはすぐに通信機を使いアリシアを呼び出そうとする。

「……どうして？　アリシアへ繋がらない？」

「プレシア、大変だ！　アリシアがプラズマスパークタワーへ向かっているとメビウスから連絡があった！」

「なんですって？！」

同じ技術者としても働くヒカリの言葉に、プレシアは表情を驚きに染める。つい最近、地球での任務を果たし帰還したメビウス。その彼と共に戦ったウルトラ戦士であるヒカリ。彼は以前からのプレシアの同僚だったのだ。

「今メビウスが追いかけている。貴方はシェルターへ！」

「駄目よ！　あの子も一緒じゃないと！　もう離れ離れは嫌なのよっ！」

ヒカリの言葉にかつての光景を思い出し、プレシアは心からそう叫んだ。その気迫にヒカリは息を呑み、頷いてプレシアへ手を伸ばした。それがどういう意味かを理解し、プレシアは嬉しそうにヒカリへ笑みを向けた。

「ありがとう、ヒカリ」

「いや、このまま一人で行かせるよりはマシと思ったのだ」

そうどこか優しく告げると、ヒカリはプレシアを抱き抱えて技術局を飛び立った。目指すはプラズマスパークが輝くタワー。その輝きを見つめ、プレシアは願う。アリシアが無事でありますようにと……

その頃、プラズマスパークを守るようにメビウスとアリシアは立っていた。その視線は眼前の相手へ注がれている。

「悪いけど……そのお宝を渡してくれないかな？」

青い体の銃を手にした存在。それがプラズマスパークを狙う侵入者の正体。その名はディエンド。様々な世界を渡り、その世界の宝を奪う存在だった。その軽い口調に怒り心頭とばかりにアリシアが叫んだ。

「ふざけないで！　これはウルトラマンの力の源なんだよ！　邪悪な侵略者や宇宙人から命を守るための輝きを……貴方なんかに渡せないっ！」

「そうだっ！　これは誰かのものにしてはいけない！　命ある者達を照らす光なんだっ！」

共にタロウの教え子である二人。最初こそアリシアを止めたメビ

ウスだったが、タロウの兄妹弟子関係でもある彼女の懇願に折れる形となり、現状となっていた。ディエンドはそんな二人の言葉に大きなため息を吐いた。

手にしたディエンドライバーで肩を小刻みに叩きながら、ディエンドはアリシアとメビウスを見つめる。二人は決して渡さないとの気持ちを全身から滲み出していた。それにもう一度ため息を吐き、ディエンドは二枚のカードを手にした。

「仕方ないな。なら……ちょっと強引にもらっていくよ」

”カメンライド……イクサ！　ガイ！”

ディエンドライバーから放たれた音声と共に、虚空から出現する白い体の仮面ライダーイクサと銀色の体の仮面ライダーガイ。それに驚く二人へ、イクサとガイが告げた。

「その命……神に返しなさい！」

「ゲームスタートだ」

「じゃ、後はよろしく」

ディエンドの声を合図に走り出す二人の仮面ライダー。それを見て構えるアリシアとメビウス。ディエンドは両者が戦う隙を突いて一人プラズマスパークへと向かって走り出す。そこへ遅れて現れた者達がいた。一人はイクサの攻撃を必死にかわすアリシアの前へ降り立つと、その攻撃を代わりに受け止める。

「アリシア、ここは私が代わろう」

「ジャック！」

帰ってきたウルトラマンことジャックは、アリシアへそう告げると視線をディエンドへ向けた。それだけでアリシアはジャックの言いたい事を理解し、素早く走り出す。それを見送りながらジャックはイクサへ告げた。

――――何者か知らないが、この宇宙の希望の光は渡さん！

イクサの拳を受け止め、代わりに蹴りを放つジャック。それを受け、若干距離を取るイクサへジャックは更なる追撃をかける事はしない。ゆっくりとその足を前に進めるだけだ。それがイクサを威圧する。幾多の苦戦を乗り越えたウルトラ戦士であるジャック。それを相手にするには、本物ではないイクサでは力不足だと、そう感じさせるように。

一方、メビウスの方はガイの召喚したメタルゲラスとの連携に苦戦を強いられていた。そう、アリシアと違い、彼はウルトラマンとしての力があるにも関らずだ。だが、それは光線技の類を安易に使う事が出来ないためだった。

それを使い、相手に避けられてはタワーを壊しかねない。故に彼はレオとの一件で磨いた格闘術とメビュームブレードを駆使して戦っていた。もしこれがタワー内でなければメビウスは苦戦をする事無く戦えただろう。光線技に炎の回転蹴りである”メビウスピンキック”を使えたからだ。

「しまったっ！？」

メタルゲラスがメビウスの背後から迫り、羽交い絞めにする。それを見てガイは、好機とばかりにデッキからベントカードを手にし

ようとする。だが次の瞬間、その引き抜いたカードが綺麗に切断された。

「何者だ?!」

「メビウス、ここは俺に任せろ」

「エース兄さんっ！」

エースはメビウスの前へ降り立つと、即座に両手を額へ当てた。パンチレーザーと呼ばれる光線技だ。それがメタルゲラスに直撃し、拘束を解かせた。それを受け、メビウスは即座にメタルゲラスへ蹴りを放つと、エースへ小さく頷いて走り出す。

エースはそれを見送り、ガイとメタルゲラスを相手に勇ましく構える。それに若干怯む二人へ、エースは力強く告げた。

――二対一でなければ戦えないような奴らに……ウルトラマンは負けない！

怒りから襲い掛かってくるメタルゲラスを背負い投げると、エースは即座にガイへバーチカルギロチンを放つ。それがガイの肩を掠め、その角の部分を切り落とした。それでガイが軽く怯む。エースはそんなガイとメタルゲラスを見つめると拳を握った。

平和を守る力である自分達ウルトラマンの能力。それを生み出すプラズマスパークを奪おうとする存在。それはこの宇宙に生きる全ての命を絶望という闇に包む行為だからだ。

二人の奮戦を背にしながら、アリシアとメビウスはディエンド目指して走る。だが、もうプラズマスパークへ手を伸ばそうとしているディエンドを見て、間に合わないと悔しがった。そんなディエン

ドだったが、突如その手が停止する。
それを見て疑問符を浮かべながら走る二人。一方、ディエンドは突然の出来事に驚きを口にしていた。そう、彼が見つめる先には先程までいなかったウルトラ戦士がいたからだ。

「へぇ……こんな事も出来るんだ」

その視線の先には特徴的な頭部のウルトラマンがいた。そう、念力を得意とするウルトラセブンだ。彼はウルトラ念力を使ってディエンドの動きを封じていた。その間にディエンドの前へウルトラマンが降り立ち、後ろからはアリシアとメビウスが到着する。
ディエンドを挟み込むような状況となり、さすがにディエンドも旗色が悪いと踏んだ。だが、動きたくともセブンの念力の前では指一本動かせない。怪獣や宇宙人を足止め出来るウルトラ念力。その前ではディエンドの力は微々たる物だったのだから。

「答えてもらおう。どうして君はこれを狙ったのか」

「……お宝は全て僕の物にしたい。それだけさ」

ディエンドの不遜な回答に若干驚きを浮かべながら、ウルトラマンは黙った。それが嘘に聞こえなかったからだ。セブンはその体が自分達の良く知る星の者だと理解し、様々な疑問を感じながらも心からの思いを込めて尋ねた。

「お前は地球人のはずだ。どうしてこんな事をする！」

「確かに僕は地球人だよ。でも、君達には恩もなければ感謝もしない世界から来てるんだ」

「もしかして……アリシアと同じように異世界人！？」

ディエンドの告げた内容にメビウスは驚愕した。プレシア達がミッドチルダという異世界出身なのは、この光の国では有名だ。地球がありながらもそれを管理外世界と呼ぶ体系で、次元世界と言う考え方をしている事。

更に時空管理局という宇宙警備隊と近い組織を有し、多くの世界の平和を守ろうとしている異世界。それがウルトラマン達なりのプレシア達がいた世界の解釈だった。

ディエンドは、メビウスの告げた異世界人との言葉に納得したように頷いて、アリシアへ視線を向ける。アリシアはディエンドの事を睨むようにしていた。幼い頃から彼女は、ウルトラマン達に地球の事を話してもらっていたのだ。彼らの戦いの記憶と共に語られる、優しく温かな心の持ち主達が住まう星。それが彼女の中での地球だった。

（こんな人が地球にはいるの？　ウルトラマン達が命懸けで戦ってくれてる事も知らずに……ううん！　知っても関係ないって言って、自分勝手にその力を奪おうなんて考える人がっ！）

そのイメージを覆す存在に、アリシアは強い怒りを抱いていた。無理もない。彼女はあまりに世間の汚れを知らなさ過ぎるのだ。何せ、今まで彼女はこの光の国にいた。ミットチルダにいた頃は幼く、周囲の悪意や本音などとは無縁だったのだから。

だからこそ、強く正義や愛という物を体で学び身につけたとも言える。ウルトラマン達は宇宙の守護者。命ある者達の叫びを、星の声を聞いて戦う勇気ある光の化身なのだ。故に彼らとの日々は、アリシアへ決して言葉だけでは分からない多くの事を教えていたのだから。

「成程ね。道理で彼女は人間らしい外見してる訳だ。ご同輩だね」

「違うっ！　わたしは貴方とは違う！　わたしはミッド人、アリシア・テスタロッサ！」

「ミッド？　聞いた事ない世界だね……ふぅん……お宝はあるかな？」

そう呟いた瞬間、そこへヒカリとプレシアが現れた。それに驚きを見せるアリシア達。

「ママ！？」

「アリシアっ！」

ヒカリが降ろすと同時にプレシアはアリシアへ向かって走る。そしてプレシアはアリシアの体を抱きしめた。アリシアはそれに笑みを見せるも、何故ここにと尋ね出す。メビウスはヒカリからアリシアを止めなかった事を注意され、やや申し訳なさそうにしている。

そこへイクサとガイを倒したジャックとエースが合流し、更にタロウとゾフィーも現れた。それに続いて、ウルトラの父と母がプラズマスパークの前へと降り立つと、ウルトラ兄弟の主だった者達がほぼ集まったような状態となった。それを見て、アリシアは視線をディエンドへ向けた。

「もう諦めたら？　こうなったらどんな怪獣や侵略者でも勝てないんだから」

「そうだね……諦めるとするよ」

アリシアの言葉にあっさりとディエンドは応じた。その手にしていたディエンドライバーを離したのだ。それがゆっくりと床へ落ちる。その瞬間、ディエンドが降参したと感じ、僅かにだがセブンの念力が弱まった。それを待っていたようにディエンドは素早く動くとアリシアへと接近し、その体を拘束した。

しかも、抜け目なくその手にはディエンドライバーが握られている。その早業に誰もが言葉を出せない。唯一プレシアだけはディエンドを睨みつけるようにしていた。

「ここからお宝を奪うのは諦めるよ。別の世界のお宝を頂きに行く事にする」

「その前にアリシアを離しなさい！」

「悪いけど、それは無理だね。今からこの子がいた世界へ行くんだからさ」

プレシアの言葉に対するディエンドの返事。それに今度こそ誰も言葉を発する事が出来なかった。それだけの衝撃があったのだ。何せミッドチルダへの通信や渡航方法はウルトラマン達の技術でも不可能だったのだから。

それを地球人でしかないディエンドは出来ると簡単に言ってのけた。それがはったりと思えないのは、彼が突然光の国へ現れた事が証明しているからだ。厳しい防衛網を敷いている光の国。そこへあっさりと侵入し、プラズマスパークを手に入れようとした事が何よりの証拠なのだから。

「じゃ、道先案内よろしく」

「嫌っ！　ママっ！　みんなっ！」

「「「「「「「「「「アリシアっ！」」」」」」」」」」

突如として出現した灰色のオーロラ。その中へ躊躇いなく入っていくディエンド。アリシアは必死に抗うも、そのまま共にオーロラへと消える。それを見たプレシアは無意識の内にそれを追った。周囲の止める声と手を振り払い、彼女も灰色のオーロラへと消えたのだ。

残されたウルトラマン達も追いかけようとするも、瞬時に消えたオーロラを見つめて沈黙した。それと同時にアリシアとプレシアの反応を感じなくなったからだ。そして、しばらくそこで何かを考えた後、全員が頷いて動き出す。プレシア達の反応を探し続ける事を決めたのだ。

「まずはあのオーロラを解析しましょう。同じ物を作り出せるようになれば、可能性はあります」

「ゾフィー兄さんの言う通りです。まずは異世界を渡る方法を手にしなければ」

ゾフィーとタロウの言葉に誰もが頷く。そして、父は周囲を見渡すと、ゆっくりとだが安心させるような声で告げる。

「いいか？　来れたのなら行けないはずはない。これを忘れてはならん」

「絶対にみんなで二人を迎えに行きましょう。私達の同胞を」

「みんな、諦めずに頑張ろう。優しい親子を助けるために！」

「「「「「「「おうっ！」」」」」」」

父と母の言葉を受け、ゾフィーが力強く締め括る。それにウルトラマン達が力強く返事を返すのだった……

仮面ライダー達が邪眼と戦うために呼ばれていた裏で、ウルトラマン達と出会っていた親子がいた。

死んだはずの存在は、光の国でひっそりと生き延びていたのだ。

そして、ついにその二人が本来いた世界へ戻る時が来る。その橋渡しをするのは世界の盗人。

今、ミッドチルダに仮面ライダーとは違うヒーローを知る者達が現れようとしていた……

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

蛇足的サイドストーリー。プレシア達を五代達なら何とかしたんじゃないか？　そんな感想を遥か昔に頂いたので、こんなのを考えてみました。

……改めて考えると、ウルトラマンってチートですよね。「命のス

ペアを二つ持ってきた」は良くも悪くも名言だと思います

Ａｆｔｅｒ　Ｓｔｏｒｙ　Ａ&ａｍｐ;Ｗ／青空と往く天の道

煌く星空の下、五代は焚き火にあたりながら焼いた魚を食べていた。味付けも何もなく、ただの素焼。それでも今の五代には御馳走だった。何せ、一条が来るまで現在位置を長時間離れる事は出来ない。それに所持金もそこまで多くない。

だが、空腹には勝てず、彼は先程まで海で魚を取っていたのだ。しかし、釣竿も無く網などもない彼がどうやって魚を捕まえたのか。それは、彼にしか出来ない技によるもの。

クウガとなったのだ。その能力を駆使し、彼は魚を捕まえたという訳だった。おそらく彼ぐらいだろう。仮面ライダーの力をそんな事へ応用したのは。ともあれ、彼は最後の魚を食べ終わり、満足とばかりに腕を伸ばした。

「いやぁ、食べた食べた。塩があればもっと良かったけどなぁ……。海水から作ろう！　とは思ったんだけど……」

断念したのだ。容器などがないので、海水を熱する事が困難だったためだ。現在の五代の周囲には民家もなく、人影もない。日が出ている内はまだ多少なりとも走っていた車も、今はもう一台として通らない。

静寂。そんな表現がぴったりくる状況。五代は一人旅をしている時によく感じるそれに、懐かしさを感じて小さく笑う。あの海鳴へ飛ばされた日以降、彼は賑やかな日々を過ごしていた。傍らには誰かがいて、会話する事に困らなかったのだから。

（懐かしいな、この感じ。何か……旅、してます！　って感じだよね）

そんな事を思い一人無言で拳を握る五代。その表情は笑顔だ。何せ寂しさはない。目を閉じればあの笑顔達が思い出せるし、その気になれば通信で日本とも話す事が出来るからだ。

一条が来た時になのは達の事を話したらどう思うだろうか。そんな事を考え、五代は焚き火を見つめ微笑んでいた。そして、自分はここで”仮面ライダー”として人命救助をしていきたいと告げたら、驚くだろうかとも考える。

（まずは仮面ライダーの事を教えないとな。あ、それと桜子さんに魔除けの仮面を渡していいかの許可も取らないと。ついでに碑文の事も聞いて、なのはちゃん達への話題に出来たらいいなぁ……って、あれ？）

だが、五代はそこで何か嫌な予感を覚えた。静か過ぎるのだ。ふと耳を澄ませば、先程まで聞こえていたはずの虫の声がしない。ただ遠くから波の音が聞こえるだけだ。

「……気のせいかな」

自分へ確かめるように呟く。何か起きた訳ではなく、単に虫の声が一時的に止んだだけだろう。そう納得し、五代が息を吐いた瞬間だった。突然彼の目の前に灰色のオーロラが出現したのだ。しかも、そこから見も知らない怪物が複数現れた。

緑色の怪物。言うなれば昆虫のさなぎに近い印象を受けるそれに、五代は直感でこう判断した。そう、それは仮面ライダーの宿敵にして、人類の敵。全ての生命を襲う生きる災厄。その名は……

「怪人っ！？」

怪人達は五代を見つけると、彼へ一斉に襲い掛かった。五代はそれを見て、素早くあの構えを取る。

「変身っ！」

クウガとなって怪人達へ挑んでいく五代。五体もいた相手も、クウガとなった彼の前には敵ではなかった。一体はライダーキックで撃破され、一体はトライアクセラーを変化させたタイタンソードで貫かれ、一体はそこから変化したドラゴンロッドで海へ吹き飛ばされ、もう一体も同じくロッドで散った。

残るは最後の一体。そう思い、クウガはロッドを構えた。だがその瞬間、怪人に変化が起きた。まるで羽化するように姿が変わったのだ。紫色の怪人となった相手は、変化に驚くクウガへ向かって動き出した。

「えっ！？」

それを迎撃しようとしたクウガだったが、その怪人の姿が急に消えた事に動揺した。フィーアのように周囲と同化したのだろうか。そう思って緑へ変わろうとするクウガ。しかし、それは突然の衝撃で阻止される。

クウガの体を何かが襲ったのだ。その正体をクウガは微かにだが見た。先程の怪人が攻撃したのだと。そこから連続で叩き上げられるクウガ。反撃も出来ず、体勢を整える事も出来ないまま、いいように攻撃されていく。

（不味いっ！　このままじゃ……やられる！）

「超変身っ！」

相手の攻勢が僅かに止まった瞬間を狙ってクウガは緑へと変わる。その超感覚で怪人の動きを見切り、回避をしていくクウガ。だが、決め手がない。彼の武器であるペガサスボウガン。それに変化する要素を持った物が周囲にないのだ。

かと言って、緑以外では動きを見る事が出来ない。しかし、このままではいずれ緑の制限時間を迎えてしまう。クウガは怪人の攻撃をかわしながら、現状を打破する術を考えていた。そんな中、背後に白みがかった灰色のオーロラが出現した。だが、クウガが気付く前にそこから何かが現れる。

「クロックアップ」

〝Ｃｌｏｃｋ Ｕｐ〟

その存在は、クウガが戦う様子を見るなり腰の部分にあるスイッチを押した。それと共に電子音声が聞こえ、クウガはその存在に気付いた。それに戸惑うクウガだったが、その目は見た。赤い体の仮面ライダーが、本来目で追えないはずの紫の怪人と同じ速度で走っていくのを。

それと同時にクウガは気付いた。ライダーが通った後で跳ね上げられるはずの砂が、停止したような状態で微かに動いているのを。そこでクウガは理解した。怪人は高速移動していたのではなく、時間の流れを操作しているのだろうと。

しかし、そんな能力を持つライダーの事を光太郎から聞いた事はない。それを思い出し、クウガは一つの推測を立てた。

「じゃ、あれは別世界のライダー……？」

疑問符を浮かべているクウガの見ている前で、赤いライダーは怪

人を圧倒していく。相手の攻撃を見事に避け、的確に反撃を叩き込んでいくライダー。それは無駄の無い動き。言わば動ではなく静。自分から仕掛けず、相手の動きを見切り、確実に反撃でダメージを与えていく戦い方だった。

そして、ライダーは怪人へ攻撃しながらベルトのボタンを押していく。クウガはそれを見つめ、何となくだがそれがとどめへの準備に感じた。そう、電子音声で聞こえてくる内容がそれを印象付けた。数字を順番に三つカウントしていたのだ。

そして、最後に怪人を大きく殴り飛ばすと、そのベルト部分にあるカブトムシのような機械の角部分を動かし、ライダーは告げる。

「ライダー……キック」

”Ｒｉｄｅｒ　Ｋｉｃｋ”

電子音声が告げる必殺の言霊。それと同時にベルトからライダーの角部分へ電流のようなものが走り、角の頂点で一度光った後、それが今度は右足へと集束する。クウガはそれを見つめ、小さく息を呑んだ。

（ライダーキックって……じゃあ、やっぱりあの人も仮面ライダーなんだ）

クウガが自分の感じていた予想が当たっていたと確信する中、ライダーは何故か怪人へ背を向けた。それを見て好機とばかりに突撃する怪人へ、ライダーはそれを見越していたかのような綺麗な回し蹴りを炸裂させる。その瞬間、電子音声が終了の合図のようにこう告げた。

”Ｃｌｏｃｋ　Ｏｖｅｒ”

怪人が倒れこむと同時に起こる爆発音を聞きながら、クウガは変身を解除した。見れば、ライダーは勝利を告げるように高々と片手の人差し指を天へと突き上げていた。

五代はそれを見つめ、黙って時を待った。相手がこちらへ意識を向けてくれるのをだ。何故か今は邪魔をしてはいけない気がしたためだ。それに気付いたのか、相手も五代へ視線を向けた。

そして、そのベルト部分のカブトムシを外した瞬間、その体が変わり一人の青年が姿を見せる。五代はやや無表情のようにも見える彼へ、いつものような笑顔を見せて頭を下げた。

「ありがとうございます。おかげで助かりました」

「礼はいらない。ワームの相手は俺に与えられた天命だ」

「ワーム？」

「知らないのも無理はないか。さっきの奴らの事だ。確かにもう全滅したはずなんだが……ゼクターが戻ってきたのはそれを予期してたのか」

一人何かを理解するように考える青年。五代もその詳しい意味までは分からぬでも、大まかな事情を理解したように頷いていた。おそらく目の前の青年はワームの相手をしていた仮面ライダーで、その復活を何らかの方法で悟ったのだろうと。

すると、今度はそんな五代へ青年の視線が向く。青年はここが自分のいた世界だと思っている。故に先程のクウガの姿に様々な疑問を抱いたのだ。一つは見た事もない姿だった事。もう一つはクロッ

クアップ出来ないにも関らず、それに何とか対処していた事。

「で、お前は一体何者だ？　ライダーのようだが見た事もない姿だった。雰囲気からワームの擬態という訳でもなさそうだが……答えろ」

青年の告げた擬態との言葉にやや不思議そうな表情を返す五代。そんな彼へ青年は最後には命令するように告げる。五代はそれにクウガの事を教えようとしたのだが、ある事を思い出して懐を探った。それに警戒心を抱く青年。やがて五代はそこから一枚の紙を取り出すと、それを笑顔で青年へ手渡した。それを青年は手に取り、書かれている文字を読み上げた。

「夢を追う男……二千の技を持つ男……五代雄介」

「はい！　よろしくお願いします！　えっと……」

「俺の名を知りたいか。いいだろう。この世で覚えておく名はただ一つ。それは、天の道を往き総てを司る男。天道総司だ」

「おおっ！　……凄い自己紹介だなぁ。俺も何か考えようかな？　えっと、五代だから……」

天道の言葉に五代はそう反応すると、自分の名前も同じように出来ないだろうかと考え始める。そんな彼を見つめ、天道は直感で五代が人間だと悟る。いや、もしかしたら何者でもいいと思ったのかもしれない。

何せ、五代は天道の知るある者とどこか近い雰囲気があったのだ。先程見たクウガの姿もその要因となっている。クワガタムシのような外見だったからだ。すると、天道はふと自分の周囲を見渡した。

そこが先程までいた場所と違う事を把握し、彼は五代へ問いかける。

「で、ここはどこだ？」

「五つの時代をって、えっ？」

天道の問いかけに意識を戻される五代。そんな彼へ天道ははっきりと同じ事を尋ねた。それに五代はやはりと思うも、ここがキュービバである事と天道がいた世界とは違う世界である事を伝えた。天道はその言葉にやや考え込むも、やがて状況を理解したのか頷いた。

そこから天道は五代へ質問をする。クウガの事を見たために、それについて尋ね始めたのだ。五代からクウガの事を簡単に聞き、その外見から「クワガタモチーフだからクウガだな」と断言したり、尊大な態度を取る自分へ嫌な顔一つしない彼を何となく気に入ったようで「あいつと同じで面白い男だな」と呟いたりもした。

一方の五代も、天道からワームやゼクターなどの事を簡単に教えてもらい、驚きと感心を返す。ワームの擬態能力には複雑な表情を見せたが、時間の流れを制御するクロックアップなどの能力を聞いた時は、心から驚き子供のように目を輝かせたのだ。

そして、二人は理解する。この出会いが何か大きな事件の前触れである事を。五代が話した邪眼の最後の言葉を聞いた天道は、それが本当になろうとしているのではないかと告げた。

それを受け、五代も納得するように頷いた。何故なら、彼自身それに対処するために異世界へ召喚された事があるのだから。故に天道の予想はかなり信憑性があると思えたのだ。

「お祖母ちゃんが言っていた。出会いは運命。なら、そこには必ず

意味があるはずだ」

「そうか。総司君は平行世界から来たんだもんね。なら、その可能性は高いかも」

「ああ。滅んだはずのワームが復活した事も気になる。どうやらまた大事になりそうだ」

そう言って二人はふと視線を動かした。その先には、やや白みがかった灰色のオーロラが出現していたのだ。それに天道は静かに立ち上がると、視線を動かさずに五代へ声を掛ける。

「……行くぞ、五代」

「ちょっと待ってもらえる？　一応知り合いの人達へ連絡を入れたいんだ」

平然と自身を呼び捨てにする天道へ五代は気にも留めずにそう返し、ビートゴウラムの通信機能を入れた。そして笹山へ五代はこう告げた。野暮用が出来たので、少し留守にする。もしかしたら一条が来るまでに終わらないかもしれないと。

その留守との表現に疑問符を浮かべる笹山だったが、五代の雰囲気からただ事ではないと理解したのか、分かりましたと返すだけだった。

『でも五代さん』

「何ですか？」

『絶対帰ってきてくださいね』

「……はいっ！」

そのやり取りを聞いていた天道は、どこか笑みを浮かべていた。しかし、それもすぐに消す。五代がビートゴウラムを動かしながら隣に来たのだ。二人は少しだけ互いを見やり、頷くとオーロラ向かって走り出す。

そこへ再び飛来するカブトゼクター。そして、二人の体が変身する。それと同時にキャストオフしクウガを驚かすカブト。二人はそのままオーロラの中へと消える。それをキッカケとしてオーロラも消滅し、後には二人がいた足跡だけが残された。

それを静かに見つめる白い姿がある。それは一度小さく頷くとそこから音も無く消えるのだった……

こうしてクウガとカブトは出会い、また戦場へと向かう。クワガタムシとカブトムシ。昆虫の王者とも言えるものをモチーフとしたライダー同士。彼らが向かうは魔法世界でもなければ、他のライダーがいる世界でもない。大いなる力を求める者達が戦う世界なのだ。

その世界で知るのは、かつてない程強大な敵の存在。超古代の力と異文明の力。それらを身に宿した二人の仮面ライダー。彼らの戦いは、今、始まったばかりだった……

美杉家目指して走るマシントルネイダー。未だ無人の道路を走るアギトだったが、その視線の先にとんでもないものが出現した。

「何だあれは！？」

灰色のオーロラを見て驚きを見せるアギト。するとそこから紳士然とした格好の男性が現れた。彼は近付いてくるアギトを見つめ、興味深そうに頷くと同時に何かを取り出した。そこへアギトが到着し、マシントルネイダーを停止させる。

アギトはシートから降り立つと、男性へ少しだけ近付き足を止めた。何か嫌な予感がしたのだ。言うなれば、あのヴァルキリーズを模した怪人達を相手にした時と同じような感覚。それを感じたために。

「貴方は……一体」

「私が何者でも構わないでしょう。さて、貴方が仮面ライダーアギトとやらですね？」

「どうしてその名前を……」

「確認したかったのはそれだけです。私を甦らせてくれたあの方に恩返しするために、ここで死んでもらいます」

男性はそう告げると、手にしたＵＳＢメモリのようなものを押した。

”ウェザー”

聞こえてきた電子音声。それと同時に男性はそれを自分の体へ押し当てる。すると、その体が白い怪人へと変化した。アギトはそれに身構える。友好的な雰囲気はない。それに相手の告げた言葉は、どう聞いても自分への敵対者のものだったからだ。

「しかし、最初の仕事が一度私を倒した存在と同じ名を名乗る相手の始末……ですか。中々あの方も楽しませてくれる！」

「くっ！」

怪人の手がアギトに向けられた途端、彼へ向かって竜巻が巻き起こる。しかし、それにアギトはフォームチェンジで対抗した。ストームフォームとなったアギトは、その能力を使い竜巻を制御。

そのまま怪人向かって押し返したのだ。それに驚いたのは怪人の方だ。仕方なく竜巻を消滅させようとしたのだが、既にその主導権をアギトに握られたため、それも出来ない。だが、それを怪人は力づくで打ち消した。

「……意外と面白い力を持っているのですね。メモリがないのが残念です」

「メモリ？　一体何の事だ！？」

「ガイアメモリですよ。まぁ、貴方が関る事はない物だと言っておきましょう」

それだけ言うと、今度は吹雪がアギトを襲う。それにストームハルバートで立ち向かうアギトだったが、吹雪に竜巻はあまり効果がない。そのため、彼はフレイムフォームへ変化して対応した。

その手にしたフレイムセイバーが鍔を展開する。それと同時にアギトはフレイムセイバーを力強く振り上げた。それが吹雪を斬り裂き、怪人への道を作り出す。そこを素早く走り抜けるアギト。

怪人の方もそんなアギトに対処するべく、雷を発生させる。だが、

それをアギトは手にしたフレイムセイバーで受け止めた。

「何だと?!」

「はっ!」

受け止めた雷のエネルギーを怪人へ薙ぎ払うようにぶつけるアギト。それを雷で相殺する怪人だったが、その隙にアギトの接近を許してしまった。振り下ろされるフレイムセイバー。それを何とかかわし、怪人はアギトと距離を取る。

再び対峙するアギトと怪人。しかし、どう見ても状況はアギトが有利。それでも怪人は動揺さえしない。それにアギトは疑問を抱いた。何故相手はどこか余裕があるのだろうと。それを感じ取ったのか、相手はアギトへこう告げた。

「私は貴方が思っているような存在ではありませんよ」

「? どういう意味だ」

「この姿はメモリの力で変身しているだけ。改造などでなった訳ではありません。つまりメモリを抜けば、私はれっきとした人間のままなのです」

「っ!? 何だって!?」

「貴方の力は素晴らしい。ですが、それでは私を殺すしかありません。貴方に人殺しが出来ますか?」

怪人の余裕の理由。それは仮面ライダー達共通の弱点である”人を殺す事は出来ない”だ。本当の怪人ならば割り切れるのだろうが、

彼のように人間が何かの力で変身してるだけでは、それを怪人とは思えないのだ。

それを彼はある存在から聞いている。だからこそ、アギト相手に余裕を持っていられるのだ。現にアギトは、相手のその言葉で見るからに戸惑っていた。怪人であれば、彼は躊躇いなく戦える。しかし、それが真司のように何かの力で変身しているだけの人間となれば話は別。

（どうする？　メモリって言うのを取り出せばいいんだろうけど、俺にはそのための力もないし方法も分からない。だからって、人に迷惑をかけるだろう相手を見逃す訳にもいかないし……）

先程までの動きが嘘のようにアギトは精彩を欠いた動きとなり、怪人からいいように攻撃されていく。反撃したくても、下手な攻撃で人間を殺すかもしれないと知った以上、迂闊な事は出来ない。次第に劣勢になっていくアギト。このままでは負けるしかない。そう彼が思ったその時だ。

怪人の背後にやや白みがかった灰色のオーロラが出現し、そこから一台のバイクとホバークラフトのような物が姿を見せた。その爆音に怪人は視線を動かして驚愕する。

「まさかっ！？　だがどうしてここに！？」

「仮面……ライダー……？」

前後を黒と緑に色分けされた車体が特徴的なバイク――ハードボイルダーに跨り、颯爽と怪人へ向かっていく存在。それを見てアギトは小さく呟く。そこには、バイクと同じ色に左右を色分けした仮面ライダーがいた。

「何だあいつは？　しかもあのドーパントは？！」

「ウェザーだね。どうやらあのオーロラは、僕らを必要としている場所へ導いたようだ」

「みたいだな。なら、戦ってるあいつは味方って考えてよさそうだ！」

アギトの耳に聞こえてきたのは、独り言で会話しているような言葉。だが、そのままライダーは怪人へ果敢に向かっていく。アギトもそれに呼応し、小さく頷くと体をグランドフォームへ戻して走り出す。

「すまないが、そいつは”僕達”しか戻す事が出来ない。援護してくれると助かる」

「分かりました！　俺はアギト！　仮面ライダーアギトです！」

その最中、相手からの申し出にアギトは大声で返事しながら自己紹介をする。きっと相手も仮面ライダーだ。そう思って、元来の動きを取り戻すアギト。怪人の攻撃を相手へ向けさせないようにしながら、アギトは格闘戦を仕掛けていた。

一方、アギトの自己紹介を聞いた彼は驚きを隠せない。何故なら、アギトが名乗った”仮面ライダー”との名は”彼ら”が風都と呼ばれる街の者達から付けられた称号と同じだったのだから。

「あいつも仮面ライダーだってっ？！　おいおい、これは何の冗談だ？」

「翔太郎、それよりも今はメモリブレイクを優先しよう。同じ仮面ライダーが協力してくれているんだ」

「仕方ねぇ……おい！　俺は仮面ライダーWだ！　頼りにするぜ！」

ハードボイルダーを停止させ、Wは降り立つと同時に勢い良く走り出した。視線の先で怪人と戦うアギトを見て、Wは速攻で決める事にする。Wの出現に戸惑う怪人相手にアギトは再び勢いを取り戻し、格闘戦だけでダメージを与え始めていたからだ。

あれならばこれで決められる。そう思ったWは、そのベルトに刺さっている黒いメモリを取り出し、それを軽く押した。眼前の相手にはWも何度か苦しめられた。しかし、最終的に怪人を倒したのは彼の仲間であるアクセル。だからこそ、これはその晴らせなかった悔しさを果たす最初で最後の機会と思ったのだ。

”ジョーカー！　マキシマムドライブ！”

「「こいつで決まりだ！」」

それを腰の部分へ差し込み、Wはその場から跳び上がる。それに気付き、アギトは怪人の体へ最後とばかりに強烈な蹴りを叩き込んだ。それが怪人の体勢を崩す。それを待っていたかのように、Wはその体に風を纏いながら落下していく。

「「ジョーカーエクストリーム！」」

「体が離れた！？」

体を左右に分かれさせながら怪人へ蹴りを叩き込むW。それを見てアギトが驚きの声を上げると同時に爆発が起きた。怪人は男性へ

と戻っており、その近くには砕けたメモリがある。Wはそれを見つめ、複雑な心境だった。

未だ風都で続くガイアメモリを使った事件。それを追いかけている内に知った謎の存在”財団X”。更にその組織を背後から操っている存在がいると最近知ったのだ。それを調べていた最中、彼らはあのオーロラに飲み込まれたのだから。

（こんな時、シュラウドがいてくれりゃ何か教えてくれたかもな）

あのミュージアムとの戦いを影で支えた存在。それを思い出し、彼は小さく首を振る。仮にいたとしても、今相手にしている存在の事は知らないだろうと結論付けたのだ。

アギトはそんな彼の気持ちに気付かず、一人男性へと近付いた。すると男性は、突然目を見開いてアギトの足を掴んだ。それに驚くアギト。しかし、それだけだった。男性はそこで力尽きたのか再び目を閉じる。それと同時にその体が泡となって消えたのだ。

「……これは一体？」

「わからねえ。俺も初めて見るぜ」

「おそらく、彼も知らない内に”人ではない体”へ変えられていたんじゃないかな？」

アギトの問いかけにWはそう告げる。それにアギトは頷いて、変身を解除した。それに応じてWもその腹部のWドライバーを外した。そこには、黒い帽子に黒い上着を羽織った青年が立っていた。翔一はそれを確認し、笑顔で頭を下げた。

「さっきはありがとうございます。俺だけじゃやられてました」

「いいって事さ。あんたも仮面ライダーなら気にすんな。何せ、ライダーは助け合いらしいからな」

「？」

青年のどこか思い出すような言葉に翔一は不思議そうに小首を傾げる。と、そこへホバークラフトのような物――リボルギャリーが近付いた。そしてそこから一人の人物が現れる。

「翔太郎、どうやら僕らは平行世界へ来たらしい。検索が出来ないんだ」

「なっ！？　……そうか。それは弱ったな」

青年は一瞬驚愕の表情を浮かべたものの、何かを思い出したのか途端に凛々しい顔をし、帽子を軽く動かす。彼の信条はハードボイルド。それからすれば、何が起きても動揺してはいけないと思ったのだ。

しかし、翔一はそんな彼の変化に意識も向けず、平行世界との言葉に反応を見せる。そう、自分の予想が当たっていたと理解出来たからだ。故にどこか喜びが滲んでいた。

「平行世界って……じゃ、やっぱり違う世界から来たんですね！」

「どうもそういう事らしい。しかしあんた……理解が早いな」

翔一の反応に意外そうな声を返す青年。その言葉の中で自分が名前で呼ばれなかった事に気付き、翔一は軽く頭を下げた。

「あ、すみません。俺、津上翔一って言います。そちらは？」

「あー、変身前の自己紹介はお互いまだか。いや、こっちこそ悪いな。俺は左翔太郎。好きに呼んでくれ。こっちは相棒のフィリップって言うんだ」

「分かりました。ならよろしくお願いします、左さん、フィリップさん」

「こっちこそよろしく頼むぜ、津上」

「よろしく、津上翔一。しかし翔一とは……興味深いね」

翔太郎の言葉に続いて声を出すフィリップだったが、翔一の名を呼んだ瞬間からやや思案顔になった。それがどうしてか分からない翔一と翔太郎。そんな二人へフィリップは真剣な表情のまま告げた。

「いや、二人の名前だよ。翔一と翔太郎とはね。一は太郎との名と近い意味に取れる。翔は同じだから言うまでもない。まるで運命だ。そして仮面ライダーアギトか。これもまた興味深いね……」

そのまま再び思考の中へと落ちていくフィリップ。翔太郎は彼の告げた内容にため息を吐いた。こじ付けでしかないと思ったからだ。そんな彼へ目も向けず、翔一は言われた事を自分なりに考えていた。

「……ホントだ。言われてみれば確かに似てますね！」

「納得すんのかよ！？　……まあいいか。で、フィリップ――は無理か。仕方ねえな。な、どうして津上は平行世界なんてもんをす

ぐ理解出来たんだ？」

翔一のまさかの発言に思わず突っ込む翔太郎。だが、何となくだが彼がフィリップと同じような天然系と理解し、納得する。そして、フィリップが再度思考の中へ落ちているのを確認した。

ああなると中々戻ってこないと知っている翔太郎は、気を取り直して翔一へ先程の疑問を問いかけた。それに彼は、あの邪眼との戦いで経験した出来事を簡単に告げる。その内容に翔太郎は驚くも、それならばと納得した。

そして今度は翔太郎がここへ来た経緯を話そうとした時、そこへ翔太郎達が通ってきたオーロラが出現する。それにフィリップも気付き、彼らは無言で頷き合って動き出す。

そのオーロラの先に自分達を待っている者がいる気がしたのだ。故に、まるで何かに導かれるように彼らは走り出す。みんなの笑顔を守るために。そして、誰も泣かせないために……

彼らがオーロラへ向かっていくのを見守る白い姿がある。アギト達がオーロラへ消えると同時に、その姿もまた消えるのだった……

こうしてアギトとWは出会った。彼らを待つのも五代達が戦うのと同じ強大な敵。人類に与えられた進化の力と地球に宿る記憶の力。それらを使う二人の仮面ライダー。だが、彼らの向かう先は五代達とは違う場所。

しかし、魔法世界でも他のライダーの世界でもない。彼らを待つのは、地球を犯罪組織から守った男達の住まう世界。そこで彼らが得るのは一体何か？　そう、彼らの戦いはまだこれからなのだから……

平和となったはずのクウガとアギトの世界。だが、そこへ灰色のオーロラを使って現れるワームとドーパント。
それに苦戦する二人を助けたのは、カブトとＷという異世界の仮面ライダー。そんな彼らが出会った背後には、謎の存在の影がある。
今再び、世界の平和を取り戻すため、仮面ライダー達の戦いが始まる。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

ライダー達の後日談その一。これも実はあのディエンドやディケイド出現と絡む……予定です。次回は龍騎とＲＸを予定。
なのは要素皆無なのは勘弁してください。次回はジェイル達が出るので、そうではないはずです。

After Story 11ライダー大進撃！ 烈火の龍と二対の疾風がワールドを駆ける

ここはとある病院。あの後、レイドラグーンを撃破した龍騎はヴァルキリーズやジェイル達を伴い、急いで蓮を追いかけたのだ。きっとあの金色のライダーとあの場所――神崎邸で戦っているに違いないと予想して。

そこで見たのは予想通り、金色のライダー――オーディンと戦い苦戦しているナイトサバイブの姿だった。それを見た龍騎は即座に援軍として戦闘に参加。驚く両者を他所に、龍騎はナイトへ連携を持ちかけオーディンをミラーワールドから引きずり出したのだ。

そこからはヴァルキリーズと協力し、ＩＳによる援護を受けた龍騎とナイトはオーディンを圧倒。攻撃を受ける際に瞬間移動するオーディンだったが、そのパターンを即座にウーノに理解されたため、セインのＩＳで地面に埋められた時点で勝ち目を無くし、最後にはダブルライダーによる同時ファイナルベントが勝利を飾ったのだ。

そして真司の治療などを終えて一夜明けた現在、蓮が戦う理由である恋人の小川恵理の意識を取り戻せるかを調べるため、ジェイル達はその病室を訪ねていたのだ。

「本当かっ？！」

「まだ絶対じゃないが、死んでいないのなら可能性はない訳じゃない。私を信じてくれるかい？」

蓮はジェイルのその言葉に迷いを見せるも、何かを思い出したのか頷いた。それに周囲も安堵の息を吐いて笑みを見せる。

「あの状態の城戸を助けたんだ。なら、確かに賭けてみる価値はありそうだからな。それに……魔法とやらもこの目で見た。信じる事にするさ」

「あれは魔法じゃなくてＩＳなんだけどねぇ」

「でも、確かに似たようなもんって言われたらそこまでッスね」

セインとウェンディが苦笑するようにそう告げると、真司達にも笑みが浮かぶ。蓮はそんな周囲を見渡し、改めて真司が異世界へ行っていたとの話を思い出す。そして、そこで出会ったという他の仮面ライダーの話も。

（まさか意識だけ別の世界へ送られるとはな。神のような存在と城戸は言っていたが、確かにそうなんだろう。本当なら信じられない事ばかりだが、これだけ証拠を見せられては信じるしかないか）

視線の先には笑顔を浮かべる真司がいる。蓮はそんな彼に小さく苦笑し、息を吐いた。

「城戸。お前は俺に、この戦いを止める事が願いだと言ったな？」

「ああ」

「なら、それが叶った今、お前はライダーじゃなくなる事を承知しているんだろうな？」

「蓮、それは違うんだ。変身出来なくなっても、仮面ライダーにはなれる。そう俺に教えてくれた人がいるんだよ」

真司は蓮の言葉をそう言って否定した。それに疑問符を浮かべる蓮へ、真司は語る。それは、あの六課で光太郎が話してくれた”仮面ライダーよりも仮面ライダーだった男”の事。それを聞いて、蓮は呆気に取られる。しかし、最後にはどこか楽しそうに、でも呆れた笑みを浮かべてこう言い切った。

――――どこにでもお前みたいな奴はいるんだな。

――――良く言うよ。お前だって、本当はそういう奴のくせに。

そんな二人の会話にジェイル達が笑う。態度こそ素っ気無いが、蓮も真司と根本は同じ人間だと理解したのだ。故に思う。この二人ならばきっと自分達がいなくても、このライダーバトルを本来とは違う形で終わらせただろうと。

そんな風に穏やかな雰囲気が漂う病室。シャーリィはそんな中、ふと気になった事があった。それはミラーワールドを生み出したと思っている技術者、神崎士郎の事。現在残っているライダーは、蓮が聞いた神崎からの言葉では龍騎とナイトだけ。であれば、二人が戦う事をしない時点でこのライダーバトルは終わりを迎えたようなものだからだ。

「あの、神崎士郎って人の事はどうするんです？」

「それか。それなら心配いらない。おそらく今頃は……」

「そうか……そうだろうな」

蓮の何かを悟ったような言葉に真司はある事を思い出し、そう呟いた。それに疑問しかないジェイル達へ、蓮は簡単にこのライダー

バトルの真相を告げていく。それを聞いている内に、彼らは何とも言えない表情となっていく。

仲の良い兄妹。だが、そこに一つの不幸が起きた事で悲劇を生んだ。多くの者達を巻き込みながら、最後には、自責の念から自らの手で終わりを迎えさせただろう妹。それを受け入れ消滅しただろう兄。そんな救いのない話がそこにはあった。

あまりの内容に言葉を失うジェイル達。しかし、そこで真司がある事に気付いた。そう、それは服のポケットに存在する龍騎のデッキ。優衣の誕生日を過ぎたにも関らず、彼のカードデッキが消滅していない事だ。

「蓮、お前のは？」

「……ある。どういう事だ？」

今の推論が正しければミラーワールドはもう閉じたはず。ならばこのデッキが存在している事自体がおかしい。そもそも龍騎とナイトの力はミラーワールドあってのものだからだ。故に、この状況自体が有り得ない。それに誰よりも早く気付いたのはジェイルだった。

――今の話を総合すれば、未だにライダーの力が残っているのはおかしい事になる。でも、ミラーワールドは消えたはず。となると、これはミラーワールドが消滅していない事を意味してるんじゃないかい？

その言葉に誰もが息を呑むが、真司はある推測を告げた。それは、希望的なもの。

「もしかして、誰かがライダーを必要としてるんじゃないかな？」

「どういう事だ？」

トーレの問いかけに真司はあの青年を例えに出して告げた。龍騎とナイトを必要としている存在がいる。それが仮面ライダーとしての力を残してくれたのではないか。都合がいいようにミラーワールドの影響力を排除して。

そんな馬鹿話に誰も言葉がない。実際それに近い事が真司達の思い出の中にはあるからだ。神と思われる存在との出会い。それが彼らにそんな想像を信じさせるだけの説得力を与えていたのだから。

「だとすれば……兄様達を必要としているのはあの人でしょうか？」

「もしくは世界そのものかも。ガイア理論って言うものが地球にはあるんですよね、真司さん」

「え？　あ、俺はそういうのは……」

ウーノの言葉に真司は申し訳なさそうに答える事しか出来ない。そんな彼を見て苦笑する蓮。

「まぁいいわ。で、ウーノ。それは一体どういうもの？」

「たしか……この地球そのものが一つの生命体と考えるものよ。だから、自分を守るために様々な力を生み出すんじゃないかって思ったの」

「その一つが仮面ライダーですか？」

ディードの言葉にウーノは黙って頷いた。

「とにかく今は、恵理さんだったか？　彼女の意識を取り戻すためにドクター達に頑張ってもらうとしよう」

「そうだね。チンク姉の言う通りだよ。それに、蓮さんも真司兄さんと協力してくれるなら、何が起きても負ける気しないし」

チンクとディエチの言葉に頷き、真司達はジェイルとその手伝いをするシャーリィを残して病室を出た。だが、そこで彼らは揃って違和感を感じた。病院はあのミラーモンスターの襲撃で発生した混乱により騒がしかったのだが、それが今は嘘のように静まっていたのだ。

更に景色はどこか色が抜け落ちている。その雰囲気が結界魔法を使ったようにも思え、すぐにヴァルキリーズは周囲の索敵などを行う。真司と蓮も何か嫌な予感を感じて、すぐに近くの鏡を見つけてデッキをかざす。出現するVバックルを確認し、二人は馴染みの構えを取って叫ぶ。

「「変身っ！」」

龍騎とナイトは互いに頷き合うと、別れて動き出す。ナイトは病室の恵理とジェイル達を護衛するためにそこへ向かい、龍騎は視線をヴァルキリーズへ向けてその傍へと戻る。

「シンちゃん、これは不味いわよ」

「どうしたんだ？」

「この病院だけではなく、この辺り一帯から生命反応が消えているのです」

セッテの言葉に龍騎は言葉を失う。残った反応はここにいる自分達と病室のジェイル達だけ。そんな報告を聞きながら、龍騎は冷静に事態を把握しようとしていた。すると、そこへ何者かの足音が聞こえてきた。

しかし、ヴァルキリーズはその足音の主が突然現れたと告げ、困惑していた。やがてその相手は龍騎達の前へ姿を見せた。その外見は不気味としか表現出来ないものだった。言うなれば、どこか仮面ライダーに近い印象を受ける怪人だろう。

「実験は成功だね。素体から得た技術は一つ実現出来たって、そうパパには報告しないと」

彼はそうどこか楽しげに言いながら龍騎達の前へ現れた。その独り言に色々と気になる事はあったものの、それよりも龍騎は一番の疑問を投げ掛けた。

「お前は一体何だ！」

「僕はドラス。今はグランショッカーの一員さ」

ドラスの発する外見に似合わない少年のような声に戸惑う龍騎達。そして、同時に告げられた”グランショッカー”との名前。それにノーヴェとウェンディ、ディエチが驚きを見せた。何故なら、彼女達は光太郎から歴代ライダーの話を簡単に聞いている。

そう、一号の話をした時光太郎はこう言った。”ショッカー”という悪魔の軍団を倒したと。それと同じ響きを持つ組織名。それに嫌な予感を強く感じたのだ。

それを聞いて龍騎達は驚きと警戒を強める。そんな龍騎達へ構わ

ず、ドラスは視線を動かして彼らを眺めた。その品定めするかのような視線に、龍騎達は一様に嫌悪感を示す。ドラスはそんな彼らの視線に少しも意識を向ける事無く、そのまま少しの間龍騎達を見つめ続けた。

「……何だ。こっちのお兄ちゃんはあのお兄ちゃんとは違うんだね」

「あのお兄ちゃんとは誰かしら？　教えてくれるとお姉さん嬉しいんだけど」

ドゥーエはそうやや険しい表情で問いかける。それにドラスは高い笑い声を上げた。どこか癪に障る笑い声を聞きながら、誰も口を開かない。それを受け、ドラスはどこかつまらなそうに小首を傾げた。

「怒らないの？」

「……私達はお前が思う程短気ではない」

トーレがどこか苛立ちを滲ませてそう返すと、ドラスはそれに「そっか……」と残念そうな声を漏らす。そんな龍騎達の抱く怪人のイメージとはどこか違うドラスの反応に、彼らは違和感を覚える。

そんな彼らへ、ドラスは仕方ないとばかりに先程の質問の答えを告げる。その告げられた名前に龍騎達は揃って驚く事となるとは知らずに。

――お兄ちゃんはね、僕の前に作られたネオ生命体なんだ。確か……仮面ライダーＺＯって言うんだって。

――仮面ライダーＺＯ！？

ドラスの告げた名は、龍騎達へ大きな動揺を与えるには十分だった。光太郎から聞いた事のない名前。それはドラスが光太郎達の世界の未来かもしくは異世界からの侵略者だと否応無く告げていたのだ。

そんな動揺する龍騎達を見て、突然ドラスが動いた。その体から閃光を放ったかと思うと、それが周囲を破壊したのだ。それをオットーがレイストームを使って防ごうとするも、威力が高いために軽減する事しか出来なかった。

それを見たドラスは球体のように体を変化させると、凄まじい速度でウーノへ接近したのだ。それを迎撃しようとする龍騎達だったが、先程の攻撃で受けたダメージと眩しさが動きを邪魔してそれが出来ない。

「くっ……」

「なぁんだ。お姉ちゃん達はその姿しかないの？　それじゃ、僕には勝てないよ」

ウーノの首を持ち上げ、ドラスはそう無邪気に告げる。それが酷く恐ろしく聞こえ、龍騎達は確信する。ドラスもやはり怪人だと。ウーノを助けようとする龍騎達だったが、そんな彼らへドラスはウーノを掴んでいる手に力を込める事で牽制する。

「下手に動かない方がいいよ。じゃないと、このお姉ちゃん死んじゃうかも」

「くっ！　卑怯者っ！」

「ウー姉を放せっ！」

セッテとノーヴェが悔しさを滲ませながら叫ぶ。それでもドラスへ誰も動こうとはしない。分かっているのだ。下手に動けばウーノが殺されると。高速移動を得意とするトーレが動いていないのがその何よりの証拠。

そんな彼らをドラスは一瞥すると、こう告げた。大人しく自分へ従うのならウーノは殺さない。だが、もし少しでも反抗するのならウーノの命はないと。その目的は言わなかったが、おそらく碌でもない事だろうとは誰もが予想した。

「どうする？　僕はどっちでもいいんだ。今度のパパは好きに遊んで来なさいって言ってくれたし」

「今度のパパ……？」

「ね、どうするの？　早く答えを聞かせて欲しいなぁ」

その瞬間ウーノの呻く声が響く。ドラスが手の力を強めたのだ。それに全員が制止の声を出す。それにドラスは反応を見せず、ウーノへの力を弱める事はしない。それが返事を出さないと止めないという宣告と理解し、龍騎が全員を代表して要求を呑む事を告げた。

その瞬間、ドラスはウーノへの力を弱めた。脱力したようなウーノを見て、即座にその状態を把握しようとするヴァルキリーズ。龍騎はそれが分かるまでは動かないとドラスへ告げる。それにはドラスも理解し、ヴァルキリーズの言葉を待った。

「……真司、ウーノの生命反応は消えていない。呼吸もしている」

「良かった……」

チンクの言葉に龍騎は心から安堵するように呟く。それにドラスは満足しただろうと言って、龍騎達へ背を向けて歩き出す。それについていくしかないと思い、悔しそうに動き出す龍騎達だったが、その視線があるものに気付いて動いた。

ドラスの真横にやや白みがかった灰色のオーロラが出現していたのだ。それに驚く龍騎達。ドラスもそれに気付き、視線を動かした。すると、そこからバイクのエンジン音が聞こえてきたのだ。

オーロラから現れたのは、緑色の疾風。それがウーノを掴んでいたドラスの腕を切り落とすと同時に、その体を受け止め走り抜ける。痛みからよろめくドラスと、それを見て素早く動き出す龍騎達。緑色の疾風はウーノを抱えたまま、ドラスと対峙するようにバイクを止めて距離を取った。

緑色の疾風の正体――それはバイクに跨った仮面ライダーだった。仮面ライダーＺＯ。大自然の力と落雷のエネルギーを吸収し、強靭な肉体と強力な力を有したネオ生命体のプロトタイプ。故にドラスは彼の宿敵のような存在とも言える。

「大丈夫ですか？」

「え、ええ。おかげで助かったわ。ありがとう」

ＺＯはＺブリンガーへ跨ったまま、腕に抱えたウーノへそう問いかけた。その姿にウーノはやや驚くも、仮面ライダー然としている事に安堵し笑みを返した。ＺＯも異形である自分へ笑みを返すウーノに軽い驚きを感じつつ、頷いてその体を優しく降ろした。

「お、お兄ちゃん！？　どうして……」

「俺だけじゃない。もう一人いる」

ドラスの驚きにＺＯはそう返して指を動かす。それはあのオーロラへ向けられている。全員の視線がそれにつられるようにオーロラへ向けられると、再びバイクの轟音が響き渡る。

そして、そこからもう一つの緑色の疾風が現れる。それは驚くドラスを跳ね飛ばし、龍騎達の前へ停止した。ジェイクロッサーに跨る彼もまた、ＺＯと同じく仮面ライダー然としている。彼こそＺＯの出会った仲間であり、その姿をモチーフにしたもう一人の仮面ライダー。

「麻生さん、あれは？」

「奴の名はドラス。俺が倒したはずのネオ生命体です、瀬川さん」

彼の名は仮面ライダーＪ。彼は地空人という存在により、その姿への変身能力を得た。それは自然を愛し、正義のために命を散らした彼を蘇生させるための結果。

彼は地球の自然を守るためにフォッグという侵略集団を撃破したヒーローである。実はその姿はＺＯを基にされており、二人には奇妙な縁があるのだが、それはここでは語らない。

そう、二人はつい先程まで巨大な悪と戦っていたのだ。それに勝利したのも束の間、突如として出現したやや白みがかった灰色のオーロラを見たベリーというミュータントバッタが告げたのだ。

――これは……きっと君達を呼んでいるんだ。

――俺達を……呼んでいる？

――仮面ライダーを必要としている人がいるという事でしょう。
そうだな、ベリー。

Ｊの問いかけにベリーは頷きを返したのを受け、ＺＯがまずそこへ突入したのだ。そう、確かに何か呼ばれている感覚を強く感じ取ったためだ。それがドラスとの共鳴にも似た反応とは知らないままに。

「か、仮面ライダーが二人も来たぜ、兄貴！」

「これなら絶対負けないよ、真司兄っ！」

あまりの光景に興奮するノーヴェとセイン。それに龍騎も強く頷き返し、ドラス相手に構えた。それを見てＺＯとＪも共にバイクから降り立ち、その隣へと駆け寄る。並び立つ三人の仮面ライダー。それにヴァルキリーズはあの邪眼との最終決戦を思い出し、笑みを浮かべた。

ドラスはそれとは逆に恐怖を隠せない。自分が知らない存在を連れたＺＯ。突然現れたＪ。そして、優位にいたにも関らず、一瞬でそれが逆転している現状に。

「嫌だ……僕はもう死にたくないっ！」

「ふざけるなっ！　なら、どうしてお前はウーノさんを平気で殺そうとしたんだよ！」

「そうだ。自分の命が大事なら、他者の命も同じように考える事だ。それが出来ないお前に……」

「そんな事を言う資格はないっ！」

三人の仮面ライダーが告げる言葉。それに頷くヴァルキリーズ。ドラスはそれに再び閃光を放とうとするが、同じ手を何度も喰らう程ヴァルキリーズは弱くなかった。

「そうはさせないっ！」

「同じ攻撃にっ！」

「やられないッス！」

オットーがレイストームでそれを軽減すると同時に、援護としてディエチとウェンディが放ったエネルギー弾がそれを完全に相殺する。それが激しい衝撃波を生むも、それをドラスは耐え切る。

「今だっ！」

「行けっ！」

そこへセッテがブーメランブレードを投擲しドラスを撹乱すれば、それに遅れるなとチンクのスティンガーが後に続く。それを叩き落し、或いはかわしながらドラスはそこから離脱しようとする。

「逃がさんぞっ！」

「そこですっ！」

それを追いかけるようにトーレとディードがドラスへ切りかかった。そして、それを避けようとするドラスの体をセインが掴んで床

へ沈ませる。そこは丁度壁の近く。ライダー最大の決め技での攻撃を考慮した配置だった。

「準備出来たよ、ウー姉っ！」

「分かったわ！　ライダー、背後へ跳んでっ！」

そう、全てはそのためのお膳立て。ドラスが何も出来ないように、そしてライダー達が確実にとどめを刺せるようにと。ウーノが告げた言葉の意味からその考えを理解し、龍騎達は頷いて構えた。そして、龍騎はファイナルベントを取り出す。

”ファイナルベント”

「同時で行きましょう！」

「「ああっ！」」

龍騎はいつもと違い、その場から大きく跳び上がる事はしない。ＺＯもＪもそれは同じ。彼らは揃ってドラスへではなく、ウーノの指示通り後ろへ向かって跳んだのだ。そこには、クアットロとドゥーエにノーヴェがいる。

三人は両腕を交差させ、そこで立ち尽くしていた。それは、狭い室内でライダーの脚力を活かすためのもの。ウーノによる発想からの行動だった。ライダー達が三人へ向かって体勢を変えて足を向ける。それが彼女達の腕に当たると同時に、やや強めの力で蹴り出された。

「「「頼んだわ（ぜ）っ！」」」

三人の声を受け、ドラスへ向かっていく三人の仮面ライダー。するとその背後にドラグレッダーが現れ、三人目掛け火球を放つ。その加速を乗せて、三人のライダーはドラスへ殺到する。

「「「ライダーキックっ！！」」」

それはライダー反転キックという技の応用。高く跳び上がる事が出来ずに威力を出せないならば、水平に跳ばせて威力を出せばいい。ウーノはそう考え、龍騎達へ指示を出したのだ。しかもそれを理解した龍騎は、ドゥーエ達を全力で蹴られずともいいようにと、ファイナルベントでの加速を利用したのだから。

身動き出来ないドラスへ炸裂するトリプルライダーキック。それが見事に壁ごとドラスの体を吹き飛ばす。壁と共に落下していくドラス。そのままもがきながらパパと叫んだ瞬間、ドラスの体が爆散した。しかし、核のような部分だけはそこから気付かれないように脱出すると、そのまま出現した灰色のオーロラへと消えた。

一方、その音を聞いて病室からナイト達が姿を見せた。今まで龍騎達の戦闘による音は聞こえていたが、万が一を考え動けずいたらしい。だが、先程の爆発がかなり大きかった事を受け、一度様子を見ようとしたのだ。

そこで初めて見るＺＯとＪの姿に驚きを見せる三人。一先ず現状の把握をしようとなり、簡単な自己紹介の後、ウーノがドラスの言っていた話を告げる。それを聞きながら誰もが言い知れぬ不安を感じた。グランショッカーとの名前。死んだはずのドラスが新しいパパと呼んだ存在。そして、まるで無人となったような現在の状況。それらを考え、ジェイルはゆっくりと告げた。

――邪眼の予言した新しい闇。それが動き出したのかもしれない……

その言葉に真司は悔しそうに拳を握る。あの戦いから、まだ自分の感覚では二日と経っていない。それにも関らず、再び世界を闇が包もうとしている。本当に終わらない戦いかもしれない。そう思ったのだ。

だが、そんな真司へ蓮が静かに手を置いた。見れば、麻生も瀬川も真司へ視線を向けている。若干戸惑う真司へ、蓮はあっさりとこう告げた。

「どうした？　怖気づいたのか？」

「……違う。でも」

「お前の願いは戦いを止める事。そうだな？」

真司の言葉を遮り、蓮はそう問いかけた。それに真司は、蓮が何を意図してそんな事を言い出したのかを理解しハッとなった。その反応でジェイル達も嬉しそうに頷く。

「なら、細かい事は考えるな。お前はお前の願いを叶えろ。それだけでいい」

「……蓮」

「それにだ。仮面ライダーが四人もいる。これはもう勝ったも同然だろう」

違うか。蓮は小さく笑いながらそう言って締め括った。その言葉

に麻生と瀬川も笑顔で頷く。ジェイル達はそんな光景に笑みを浮かべ、あの仕草をした。それに真司も心から笑顔を浮かべて、手をその形へ変える。それはサムズアップ。彼らの合言葉だ。

「っしゃあ！　そうと決まれば、後はどうやって奴らの居場所を突き止めるかだな」

「俺達はさっきのオーロラを通ってここへ来た。なら、あれを利用するのが一番だと思う」

その瀬川の言葉に麻生も頷いた。実は、彼には科学者の助手をしていた頃がある。故に、感覚的にオーロラの役割を理解していた。

「きっと、あれが世界の壁を越える装置のような役割を果たしているんだろう。そして、今のように必要としている場所へ導いている。ならそれを追っていけば……」

「最後には、それが奴らの居場所へ案内してくれるかもしれない、か。確かに今はそれぐらいしか方法がなさそうだ」

麻生の言葉を引き継ぐような蓮の言葉に誰もが頷く。だがジェイルはそんな周囲へ待ったをかけた。それは、彼がこの世界へ来た装置の事があるからだ。灰色のオーロラを安易に使うのではなく、まずはここで恵理の治療をしながら魔法世界への帰還を考えようと提案したのだ。

その理由には、今の魔法世界にライダーがいない事を挙げた。確かにバトルジャケットはあるが、ドラスのような相手にはかなり厳しい戦いを強いられる。それを考慮し、自分達だけでもそこへ戻るべきだと。

そのジェイルの提案にしばし考え込む真司達。だが、蓮は恵理の事を考えて提案してくれた事に賛同し、自分だけでもここに残ると宣言した。それを聞いた真司は、ならばと自分も残る事を決めた。

「あいつら、きっと五代さんや光太郎さん達の世界にも現れてるはずだ。なら、ミッドチルダへ行ける方法がある俺達はそっちへ行った方がいいと思う。光太郎さん達は絶対オーロラを追いかけてくれるはずだし」

歴代ライダー達がいる世界の光太郎。それを思えば、真司の発言は理解出来るものがある。そのため、ジェイル達は納得するように頷いた。だが、そこまで歴代ライダーの事を知らない麻生と瀬川は少し迷いがあった。

（異世界を渡り、暴れる怪人。本当にその光太郎という人達にだけ任せていいのだろうか？）

（魔法を使える人達が住まう世界か。そこがジェイルさん達の故郷なら確かに守ってあげたい。だが……）

もしかすると自分達がいた世界も危険に晒されているかもしれない。そう思うと、ここで待っているだけでいいのかとも思うのだ。何せ、彼ら二人には慕ってくれている少年少女がいる。

その笑顔が脳裏をよぎる。すると、真司はそんな二人に気付いて意を決したように告げた。自分の好きなように動いて欲しいと。それに二人が軽い驚きを見せる。そんな二人へ真司はこう続けた。どう動けば正解かなんて誰にも分からない。なら、自分がしたい事をすればいいと。

「それで痛い目見るならその時です。少なくても、自分がしたい事

で苦しむなら我慢出来るだろうし」

「……真司君。君って奴は……」

「……分かった。なら、俺はさっきのオーロラが現れ次第それを追う」

真司の言葉に瀬川は少し呆気に取られるも、そこに込められた気持ちに気付いて笑みを見せる。麻生はそんな真司に頷き、自分の決断を告げた。それに真司も頷きを見せ、視線を瀬川へ向けた。

「瀬川さんはどうします？」

「俺は……俺も麻生さんと一緒に行くよ。仮面ライダーが二人いれば、早々負けないはずだからね」

その言葉に全員が笑顔で頷いた。そして真司達は揃ってサムズアップを見せる。蓮は、それに不思議そうな表情を見せる麻生と瀬川へどこか呆れながら意味を教えた。それに感心する二人へ、セインやウェンディが一緒にやろうと持ちかける。

そして、再び向けられるサムズアップ。それに小さく笑みを見せながら二人も応じる。蓮は真司から「お前もやれよ」と言われるもそれを拒否しようとするのだが、そんな彼を全員がじっと見つめるので仕方なしとばかりにサムズアップを返した。

そんな彼に誰もが笑い出す。蓮はそんな周囲から顔を背けるも、小さく微笑む。そんな彼らをそっと見守るように、近くの鏡に二人の人物が映り込んだ。

”真司君、蓮、ごめんね。また辛い戦いへ駆り出すような真似をし

て。でもこうしないと、この世界を守る事が出来ないって思ったから”

”今の俺達がお前達に出来たのは、その力を残す事だけだった。こんな頼みは許されないだろうが……願わくばこの世界を、俺と優衣が笑い合えた世界を守ってくれ”

”でも、どうして出来たんだろう？　確かに、二人なら仮面ライダーの力を誰かを守るために使ってくれるとは思ったけど……”

”分からない。まるで何かが俺達の願いを後押ししてくれたような感じがするな”

彼らはそう言い合うと鏡の中を歩いていく。その手をしっかりと繋ぎ合ったままで。一度だけ真司達へ振り返り、そこに見える笑顔に二人も笑みを浮かべて、再び視線を戻して歩みを再開する。

すると、そんな二人の傍に一組の男女が駆け寄った。兄妹なのだろう。それに気付いた二人は、兄妹へ笑顔を浮かべながら残った手を差し出す。兄妹はそれに笑みを返してその手をしっかりと握り、四人は揃って鏡の中から消えていった。そして、彼らがいなくなった後、鏡にはそれを見送る白い姿が映りこむのだった……

こうして龍騎とナイトは、あの兄妹の願いを受けた形でその力を残したままとなる。そして、ＺＯとＪという二人の仮面ライダーは、導かれたように彼らと出会った。彼らが戦うはグランショッカーという謎の組織。何故か無人となった世界で彼らの戦いは始まる。それは帰還と願いを賭けた静かな戦いとなる……

無人の倉庫街。そこの一角に十一台ものバイクが止まっている場所がある。見る者が見れば、かなりの驚きと興奮を覚えただろう光景がそこにあった。何故ならそれらは全てライダーマシンなのだから。

その止まっている先にある倉庫。その中では、人知れず世界を、今日を、笑顔を守り続ける男達が一堂に会してした。そう、本郷猛を始めとする11ライダー達だ。

「名刺を作ってるとはな。中々面白い人のようだ」

「そうですね。五代さんは人を笑顔にする事が好きでしたから」

光太郎から手渡された名刺を眺め、本郷はそう笑みを浮かべて告げる。それに光太郎も頷きを返し、笑顔を見せた。

「夢を追う男、か……いい言葉じゃないか」

「しっかし二千の技を持つ男とはねぇ。おい、本郷。お前の異名をくれてやったらどうだ?」

「技の一号というアレか? なら、五代さんに技のクウガと名乗ってもらい、俺は元祖技の一号とでも名乗るか」

噛み締めるような一也の言葉に光太郎が笑みを浮かべる横で、一文字はそうからかうように告げた。その言葉に対して本郷が返した答えに笑いが起こる。全員が手にしているのは、五代から光太郎へ託された名刺だ。

あの焚き火を囲んでの話し合いの後、五代が光太郎に歴代ライダ

ーへと人数分手渡したのだ。それを光太郎は大事にしまい、こうして無事届ける事が出来たという訳だった。

「それにしても、一度会ってみたかったな。その五代雄介という男に」

「そうだな。改造ではなく、超古代の力で変身能力を身に着けた。相手は同じような力を有した殺戮を好む古代人。それにも関らず、みんなの笑顔のためにと戦い抜けた。中々出来る事じゃない」

風見の言葉に結城も同意するように告げる。その言葉にはその場の誰もが頷いた。五代の戦っていた相手は人間と変わりないとも言えた。確かに人を殺す事をゲームとして考えている時点で人間とは言えない。だがそれを知った時、光太郎はこう思ったのだ。

人殺しに近いそれをしながらも笑顔を絶やす事無く戦えた五代は、心の強さならライダー一ではないか。優しさを胸に、争う悲しみを拳に宿して振るった姿こそ、まさしく仮面ライダーそのものだと。それを彼らも思い、噛み締めていたのだ。

仮面ライダーを知らぬ者が仮面ライダーとなっていた。しかも、自分達よりも異質な相手を敵としながら。それを思い誰もが視線を上へ向けた。遠い異世界の五代へ想いを馳せ、全員を代表して本郷が告げる。

――クウガ。君に仮面ライダー十二号の名を送るぞ。

それに誰もが無言で頷く。と、そこで光太郎は思い出した事があった。それは、彼が密かに願っていた事。あの魔法世界で共に戦ったアギトと龍騎への彼なりの気持ち。

「あの、アギトと龍騎にも仮面ライダーの称号を認めてもらえないですか？」

「オレ、それ賛成。その二人、仮面ライダーらしい。アマゾン達と一緒」

「なら、アギトは十三号か。いよいよ増えてきたな、おい」

アマゾンの嬉しそうな言葉に続くように苦笑しながら茂が告げる。それに周囲も似たような雰囲気を返す中、一人神妙な声を出す者がいた。

「龍騎が十四号か。クウガ達と同じで本来のライダーの在り方を知らず、しかもそれが歪んだ世界で仮面ライダーを貫いたライダーだからな。俺は……そいつに敬意さえ表したいぐらいだ」

良はそう言い切って本郷達を見つめた。そう、彼はかなりの間仮面ライダーらしくない日々を送っていた。その身に宿した力を悪のために使い、自我を取り戻した後でさえ、少しの時間だったが己の記憶を取り戻すためと、復讐のためにしか振るっていなかったのだから。

それ故に真司の生き方は彼には一際眩しく映った。自分の願いを叶えるために戦うライダーばかりの中、一人怪人に襲われる人達を守るためにライダーとなった。しかも、そのライダー達の殺し合いさえ止めたいと行動したのだから尚更だ。

そんな良の気持ちを理解し、敬介は小さく笑みを浮かべてその肩へ手を置いた。

「お前も胸を張っていい。犠牲となった人達を忘れず、それを二度

と繰り返さないようにと決意したお前も、立派な仮面ライダーだ」

「それに、彼がいたらきっとこう言うさ。悪夢のような記憶を持ちながらも、それを忘れず誰かのために戦えるのは凄いって」

敬介と洋の言葉に良は一瞬声を失い、顔を伏せる。そんな光景を見て、光太郎は小さく頷き洋の言葉を肯定した。真司なら、きっとそう言って尊敬するだろうと。良はそんな光太郎の言葉に顔を上げると、それは言い過ぎだと言って苦笑する。それに誰もが苦笑した。

そんな風に場が少し和んだところで、光太郎は本郷達へ魔法世界での出来事を話し出す。そして、自分がクウガとアギトに深く関係していた可能性なども語った。

なのは達との思い出に笑顔を絶やさなかった本郷達だったが、戦闘機人とＰｒｏｊｅｃｔＦａｔｅ関係の話には表情を曇らせた。どこにでも命を弄ぶような所業を考える者はいる。そう感じ取ったからだ。

しかし、光太郎が告げたフェイト達の言葉がそれを晴らしていく。人の醜く弱い部分。それと同じように存在する人の美しく強い部分。それを感じさせてくれる優しさに満ちた言葉達。それを光太郎から聞き、本郷達も思うのだ。この星は、人類は決して捨てたものではないと。

「……以上が俺の経験した向こうでの出来事です」

「そうか……誰でも仮面ライダーになれる、か。そうなのかもしれないな」

光太郎の話を聞き終え、噛み締めるように風見は呟いた。自然を愛し、平和を愛する心。それを持っている者は誰もが仮面ライダー

と同じ。光太郎はそう強く感じる事が出来た。それを聞いた風見は、その言葉にある男の事を思い出して同意したのだから。

「しかし、邪眼の残した最後の言葉が気になるな。単なる負け惜しみとは思えない」

「まさか……またクライシスのような存在が攻めてくるのか？　なら、精々用心しないとな」

結城の言葉に一文字が周囲へ問いかけるように呟いた後、手を振って締め括る。だが、それは真剣なものではなくどこか笑い飛ばすような声。つまり、何が来ても仮面ライダーは負けないとの意味だ。誰もが一文字の言葉からその考えを理解し、苦笑しながら同意の言葉を出そうとした時だ。全員の表情が険しくなったのは。そしてその視線が一斉に同じ場所へ向けられる。

それと同時にそこへ灰色のオーロラが出現する。そこから現れたのは一匹の山猫だった。山猫は光太郎達を見て少し驚いたようだったが、すぐに何かを思い出したのか背後を見やり、意を決して叫んだのだ。

「逃げてくださいっ！　彼らが来ます！」

「動物が喋った？　まさかこの感じは……アルフのような使い魔か！？」

「どうしてその名を？！　貴方はアルフを……フェイトを知っているのですか！？」

光太郎が告げた名前に反応する山猫は、驚きを露わにして叫ぶ。

すると今度は光太郎達が驚く番だった。山猫が告げた名は光太郎が話した思い出話に出て来た名前だったからだ。その問いかけに答えようとする光太郎だったが、その瞬間大介が唸り声を上げた。

「ガウゥゥゥ……」

「……来るぞっ！」

良の言葉で全員が即座に構える。そんな光景に戸惑う山猫だったが、光太郎達の雰囲気から何かを感じ取り、その背後へと移動した。それを合図にしたようにオーロラから一人の怪人が姿を見せた。

どこか邪悪さを感じさせる鎧を纏った彼を見て、光太郎だけが驚愕する。蛇のような紋章が刻まれた盾を手にし、もう一方には剣を所持する相手。その姿に光太郎は見覚えがあったのだ。

「ほう、素体を追ってきて貴様に出会うとはな、南光太郎。いや、仮面ライダーＢＬＡＣＫ！」

そこにいたのは、三万年前に生まれたばかりに世紀王となれなかった存在。光太郎がゴルゴムと戦っていた時、彼を苦しめた強敵。そんな相手は、自分を見て複雑な表情をしている光太郎を見て、何かを思い出したのか小さく鼻で笑った。

「そういえば、今はＲＸと名乗っているらしいな。どちらにせよ、ゴルゴムを壊滅させ、俺の創世王への道を阻んでくれた事に変わりはないが」

「剣聖ビルゲニア……お前はシャドームーンに倒されたはずだ！」

ビルゲニアは光太郎の言葉に鼻を鳴らすと、冥土の土産とばかり

に告げた。一度は滅んだ彼を甦らせてくれた存在がいた。その存在は、彼に新しい命と目的を与えてくれたのだと。
それを聞いて光太郎達は、すぐにその存在が邪眼の予言した闇だと理解した。だからこそ確認したい事がある。そうとばかりに茂が口を開いた。

「で、お前の仕事はこいつを追いかける事か？」

「ふん！　本来であれば手下の怪人共にさせるのだが、貴重な素体なのでな。俺自らが行く事になったのだ」

「素体と言ったが、一体何のための素体だ！」

「さてな。そこまで教える義理はない。とにかく、返してもらうぞ！」

一也の言葉にそう告げ、ビルゲニアは剣を構えた。それを見た光太郎は記憶の中からそれが意味する事を思い出し、周囲へ叫んだ。今からでは変身が間に合わないと悟ったからだ。故に身構えてもらねばと考えた上の発言。

「ダークストームだっ！　激しい突風がきます！」

だが、その直後ビルゲニアへ激しい電流が走る。それがその体勢を崩し、光太郎が危惧した事は防がれた。邪魔をされたビルゲニアは忌々しそうにその視線を一人の男へ向けていた。
そこには不敵に笑う茂がいた。彼は地面へ手を触れさせ、エレクトロファイヤーと呼ばれる技を使ったのだ。それは、彼が電気人間だからこそ出来る事。変身前の状態で出来る技だ。

「貴様……何者だっ！」

「へっ、俺が何者かだと？　いいぜ。教えてやる」

そう告げると、茂は手袋を口でくわえながら吐き捨てるように外していく。そして金属のような手を見せた茂は、そのまま両腕を動かして構えた。それを見たビルゲニアは既視感を覚える。どこかＢＬＡＣＫに変身する光太郎を思わせたのだ。

「変身……ストロンガーっ！」

茂の言葉と共に両手がスパークする。そこから生じた電流が彼の体を変える。それに驚くビルゲニアと山猫。そこには、カブトムシを思わせる姿になった茂がいた。いや、今の彼の名は違う。

「天が呼ぶ！　地が呼ぶ！　人が呼ぶ！　悪を倒せと俺を呼ぶっ！　聞け、悪党！　俺は正義の戦士っ！」

そこで彼は一旦言葉を切る。そしてその視線をビルゲニアへ向け、右手を高々と上げて敢然と叫んだ。

「仮面ライダーストロンガーっ！」

それと同時にその全身から激しい電流が生じる。その迫力にビルゲニアはたじろいた。そう、茂のもう一つの名。それこそ、仮面ライダーストロンガー。ブラックサタンとデルザー軍団を相手に戦い抜いた勇者だ。

山猫はそんな彼の姿を見て、ふとフェイトの事を思い出していた。魔力変換資質が電気だったからだろう。どこか遠い目をする山猫を他所に、ストロンガーはビルゲニア相手に戦いを挑む。

その力にやや押されるビルゲニア。無理も無いだろう。彼は見も知らぬ仮面ライダーと戦っているのだ。しかも、ストロンガーは彼が相手にしていたＢＬＡＣＫよりも経験を積んだ存在なのだから。

ストロンガーは戦いながらビルゲニアを倉庫の外へと追いやっていく。そんな光景を見て光太郎達も後を追った。山猫はどうしようかと迷ったが、彼らと共にいる方がいいと判断したのか、急いでその場から駆け出した。

「おのれ！　仮面ライダーが他にもいるとは！」

「どうした？　威勢が良いのは口だけか？」

無人の倉庫街を舞台に戦うストロンガーとビルゲニア。しかし、そこで形勢不利と見たビルゲニアは手を上げた。それを合図に出現する灰色のオーロラ。そこから続々と現れるのは様々な怪人達。

ストロンガーも見た事のない怪人ばかりだが、そこには見た事のある相手が混ざっている。それに気付いたストロンガーは、拳を握り締めてビルゲニアへ視線を向けた。

「まさか……お前のボスは大首領かっ！」

「答える必要はない！　やれ、怪人共っ！」

押し寄せる大勢の怪人軍団。それにストロンガーは怯む事無く構えた。と、そこへ光太郎達が追いつき、現状を把握するとストロンガーの援護へ向かう。混戦の様相を呈する倉庫街。それを見てビルゲニアは本来の仕事を思い出し、視線を動かした。

丁度そこへ山猫が光太郎達を追って現れる。それに気付いたビルゲニアは、一人邪悪な笑みを浮かべて走り出す。だが、それに気付

いた大介がそうはさせないとばかりにビルゲニアへ飛び掛かった。

「ガアァァァ！」

「ちっ！　邪魔をするな！」

ビルセイバーの一撃を際どくかわし、大介は山猫を守るように着地する。睨み合う両者と少し怯える山猫。それに気付いた大介はちらりと後ろへ目をやり、笑みを浮かべてはっきり告げる。

「大丈夫。オレ達、お前守る」

「……分かりました。どうか怪我をしないでください」

どこか安心感を与える声に山猫は恐怖が失せていくのを感じ、そう優しく言葉を返す。それに大介は力強く頷き、両腕を動かした。

「アァァァマァァァァゾォォォォォンっ！」

その瞬間、彼の体が変わる。大声で己の名を叫びながら、自分はここに在りとばかりに。山猫の見ている目の前で、彼は一人のヒーローへと変わった。彼の名は、仮面ライダーアマゾン。古代インカの力を持つ大自然の申し子だ。

「なっ……やはり貴様も仮面ライダーか！？」

「ケケェェェッ！」

戸惑うビルゲニアへ素早く飛び掛かるアマゾン。その速度でビルゲニアを撹乱していく。その横では、怪人達と対峙している光太郎

達もそれぞれの変身ポーズを取っていた。

「ライダー……変身っ！」

「変身っ！」

「「トオッ！」」

本郷と一文字が揃って大地を蹴り宙へ舞う。それを合図に腹部のベルトが輝きを放ち、その体を変えた。仮面ライダー一号と二号。伝説の始まりを作った男達だ。彼らは頷き合うと背を預けるように構えて、ゴルゴム怪人であるクモ怪人達と戦い出す。

迫ってくるクモ怪人達を相手に、一号と二号は鏡のように見事な一致で拳を、蹴りを決めていく。そこから少し離れた場所では、奇械人ブブンガーを相手に戦う者達がいた。

「変身……Ｖ３っ！」

「やあっ！」

風見と結城の声が響き、それに伴い二人の体が変わる。仮面ライダーＶ３とライダーマン。敵として出会い、その因縁を超えて友情で結ばれた二人だ。彼らは、何も言わずとも互いの事を理解しているとばかりに動き出す。

ライダーマンのロープアームがブブンガーを縛り、それを待っていたかのようにＶ３が拳を叩き込んでいく。その戦いを横目にしながら、ショッカー怪人ドクガンダーとデストロン怪人ナイフアルマジロを相手に善戦している者の姿がある。

「スカァイ……変身！」

「変身っ！」

洋と一也の体が瞬時に変わったのを見て、二体の怪人が若干後ずさる。スカイライダーと仮面ライダースーパー1。共に、憧れていた場所を自由に行けるよう改造されたという共通点を持つ二人は、その自分達しかない能力を駆使するべく構える。

スカイライダーはドクガンダーが飛び上がったのを受け、その後を追うようにセイリングジャンプで空へ舞い上がり、スーパー1はナイフアルマジロの回転突進攻撃を見て、三百トンもの超重量パンチを放てるパワーハンドで迎え撃つ。

「大変身っ！」

ストロンガーの傍で一人怪魔妖族スカル魔スター率いるスカル魔達と戦う敬介だったが、やはりそのままでは不利と悟り両腕を動かして叫ぶ。それを契機に彼の体が変わり、顔にレッドアイザーとパーフェクターが装着される。

仮面ライダーX。深海を得意とするカイゾーグという異色の彼は、そのベルトからライドルを引き抜くとそれを振ってXと描く。それに若干恐怖したのか、一歩下がるスカル魔達へXは勇敢に立ち向かっていく。

「変――――身っ！」

「変身っ！」

良と光太郎もドグマ怪人ファイヤーコングとゲルショッカー怪人ハエトリバチを相手に変身する。仮面ライダーZXと仮面ライダーBLACK　RX。王の器として生まれたという類似性と特異性が

際立つ二人は、その眼前にいる怪人へ果敢に挑む。

ファイヤーコングの火炎がＺＸを襲う。しかし、それは虚像。本物はその背後へ素早く回り込んでいる。そして手にした電磁ナイフがファイヤーコングの体へダメージを与える。一方、ハエトリバチとの格闘戦の最中、不意打ちの毒液を浴びたＲＸだが、その体が太陽光により瞬時に治癒される事で逆に相手へ驚きを与えていた。

「どうやら、そろそろ終わりが近いな」

ストロンガーは周囲の状況を冷静に把握し、そう呟くと掴んでいたＧＯＤ怪人ネプチューンを無造作に投げ飛ばす。そして、ならばとばかりに地を蹴って宙へ跳び上がった。そこから回転した瞬間、その体に電気エネルギーが走る。

「電キィィィック！」

その一撃が周囲への合図。電キックの威力に耐え切れず、爆発四散するネプチューン。それを聞いて、他のライダー達も勝負を決めるべく動き出す。

「行くぞ、一文字！」

「おう！」

残り一体となったクモ怪人へ交互に拳を決めながら、ダブルライダーは声を掛け合う。そして、ふらふらとなったクモ怪人へとどめの一撃を放つべく、その体が宙へ舞う。同時に回転しながら同じ体勢を取る二人。

「「ライダーダブルキックっ！！」」

いかなる敵も破る事の叶わなかった合体技が炸裂する。それはクモ怪人とて例外ではなく、激しい爆発を起こして消えた。

「よし、今だＶ３！」

「トイヤ！」

ライダーマンがネットアームで動きを止めたのを見て、Ｖ３は空へと跳び上がる。そこから繰り出すのは、数多くのデストロン怪人を打ち倒してきた必殺技。

「Ｖ３キックっ！」

仮面ライダーの代名詞とも言える蹴り技を受け、ブブンガーは堪らず吹き飛ばされる。地面へ叩きつけられ、何とか立ち上がろうとするブブンガーだったが、それも叶わず力尽きると静かに果てたのだった。

「これでもう飛べないはずだ！」

「チェェェンジ！　冷熱ハンド！　超低温冷凍ガス発射っ！」

ドクガンダーの羽を引き千切って、スカイライダーがそう言いながら地面へと着地する。それと同じくスーパー１も、冷熱ハンドによる超低温ガスでナイフアルマジロの体を凍らせ動きを鈍らせた。

共に特殊能力を発揮出来なくなった二体は、よろめきつつ何とか二人から距離を取ろうとする。それを見て二人は同時に地を蹴った。そして、そのライダーの中でも群を抜く跳躍力を発揮し蹴りの体勢

を取る。

「スカァァァイキック！」

「スーパー！　ライダー！　月面キック！」

セイリングジャンプからの急降下キックと、重力を制御する事で重圧を発生させるキックが逃げようとしていた怪人へ極まる。それを受けた瞬間、二体は爆発して消滅するのだった。

「ライドル脳天割りっ！」

Ｘの攻撃がまた一体のスカル魔を倒す。残りはリーダー格のスカル魔スターだけとなった。自分へ迫ってくるＸへ角から怪光線を発射し、牽制するスカル魔スター。だが、それをかわしてＸは空中へと逃げる。

いや、それは逃げたのではない。彼の決め技を放つためだ。空中でライドルを支点に体を回転させるＸ。その勢いを乗せたまま手を離すと、その体をＸの形にして空高く舞い上がる。

Ｘは太陽を背に回転しながら蹴りの姿勢へ移行する。それは多くのＧＯＤ怪人を倒してきた必殺技だ。それを放つべく、Ｘはスカル魔スターへ向かっていく。

「Ｘキィィィク！」

彼自身の名を冠した蹴りがスカル魔スターを直撃する。その一撃で大きく吹き飛ばされるスカル魔スター。そして、その勢いのまま地面へ激突して散るのだった。

「マイクロチェーン！」

「キングストーンフラッシュ！」

ＺＸとＲＸもまたそれぞれに相手をする怪人の動きを止めるべく、その能力を使っていた。ファイヤーコングは、体に流された五万ボルトもの電流に痺れたのか地面へ膝をつき、ハエトリバチは視覚を襲う眩しい光に前後不覚になっていた。

それを好機とばかりに二人は跳び上がる。必殺の蹴りを放つべく構えるＺＸ。ＲＸは後方宙返りから体を捻る。その体に溢れる強大なエネルギー。それを足へ集中し、放たれるのはとどめの攻撃。

「ＺＸキックっ！」

「ＲＸキックっ！」

その強力な一撃は怪人達を蹴り飛ばすと同時に爆発させた。それを見届け、二人は頷き合って走る。残るはビルゲニアのみ。そう感じ取ったからだ。

「くっ！　ちょこまかとすばしっこい奴だ！」

「ガルル……！」

ビルゲニアを撹乱しつつ、その牙で、その爪で確実にダメージを与えていくアマゾン。だが、そんな彼へビルゲニアはある手段を講じた。それはデモントリックという名の幻惑攻撃。それにより瞬時に三体となったビルゲニアにアマゾンは戸惑った。

それはＢＬＡＣＫのマルチアイでさえ本体を見分ける事の出来ないものだからだ。しかし、ビルゲニアは一つ見落としていた事があ

った。アマゾンは野生児ライダー。故に視覚で見分ける事が出来ずとも、ライダーとしては異色の優れた嗅覚があるのだ。

「……っ！　お前が本物！」

「馬鹿な！？　見破っただと！？」

襲い来る三体のビルゲニアの中から匂いでそれを見破り、アマゾンは本物目掛け走りながらその腕を振り上げた。そして力強く跳び上がると腕を振り下ろす。それは彼の必殺技。腕にある鋭いヒレカッターを使って、あらゆる獣人を切り裂いてきたものだ。

「大切断っ！」

「ぬおぉぉぉ！」

繰り出された大切断を咄嗟に盾で受け止めるビルゲニア。その威力を受けて盾に鋭い傷が走る。何とか直接のダメージは避けたものの、その衝撃は盾を通して確かにビルゲニアへ伝わった。その影響でふらつきながら、ビルゲニアは周囲の状況を悟り慌てた。

怪人達は全滅していて、残るは自分のみ。このままではやられる。そう思った彼はその場から撤退しようとした。だが、その体が突然光の輪のようなもので拘束される。それに驚くビルゲニアと戸惑うアマゾン。

「今ですっ！」

そんなアマゾンへ声を掛ける者がいた。あの山猫だ。ビルゲニアを拘束したのは、山猫が使った魔法によるもの。そう、バインドだったのだ。

「分かった！」

その声に込められた気持ちを察し、頼もしい返事を返してアマゾンは大地を蹴る。そして、そのまま身動きの出来なくなったビルゲニアへ蹴りを放つ。

「アマゾンキック！」

力強く蹴り出された右足がビルセイバーごとビルゲニアを襲う。その衝撃で吹き飛ばされるビルゲニアと砕け散るビルセイバー。そこへ丁度他のライダー達が合流する。よろめきながらも立ち上がるビルゲニアを見て、雄々しく構える仮面ライダー達。

そんな光景にビルゲニアは笑い出した。その笑いにもライダー達は無言で構え続ける。山猫はそんな彼らの姿に魅入るような視線を送っていた。やがてビルゲニアは笑いを止めると、ライダー達へ捨て台詞のように叫んだ。

「俺を倒した程度でいい気になるな、仮面ライダー共！　偉大なグランショッカーは不滅だ！　ハハハッ！　ハァーハッハッハ！！」

そう言い残して仰向けに倒れるビルゲニア。地面にその体が着いた途端、大きな爆発を起こして消えた。それを見届け、噛み締めるように一号が呟いた。

「グランショッカー……やはりな」

「新たな悪の組織が生まれたと、そういう事かっ！」

「どうやら、俺達の休息は終わったみたいだ」

悔しげに拳と手を合わせるX。それに頷きながら、スカイライダーは少し悲しむような声を出す。彼らの休息が終わる事は即ち世界の危機を意味する。それを理解しているからこそ、誰もが拳を握る。
そんな彼らへあの山猫がゆっくりと近付いた。それに気付いたRX達が視線を向けると、それを受けて山猫は小さく頭を下げた。

「助けて頂きありがとうございます」

「いや、気にしなくていいよ。俺達は当然の事をしただけだから。ところで、どうして君はフェイトちゃんの名前を知っているんだい？」

「それは私も聞きたいのです。貴方達は何者なのですか？　フェイト達はどうなったのですか？」

RXの問いかけに山猫は戸惑いを示してそう問い返した。それに、まずは場所を変えようとV3が提案し、元々の倉庫へと戻る。そこで光太郎は自分が知る限りの情報を伝えた。それを最初こそ驚いて聞いていた山猫だったが、最後に向かうにつれどこか安堵していた。
やがて全てを話し終えた光太郎に山猫は礼を述べ、次は自分の番と話をしようとするのだが、それは出来ずに終わる。バイクを止めている先にやや白みがかった灰色のオーロラが出現したのだ。それへ視線を向け、本郷が告げた。

「君の話は後で聞く事にしよう。今はこのオーロラを通り、グランショッカーの野望を叩くぞ！」

「「「「「「「「おおっ！」」」」」」」」

その言葉に全員が拳を握り締めて応じる。その頼もしさに山猫は知らず安心感を抱いて頷いた。すると、そんな山猫へ結城が優しく声を掛ける。

「君も一緒に来た方がいい。また奴らに狙われる可能性がある」

「……そうですね。分かりました。では、ご迷惑をおかけしますがよろしくお願いします」

頭を下げる山猫を見て彼らは小さく笑みを浮かべる。そして、それぞれは変身すると相棒と言えるマシンのシートへ跨った。山猫はそれを見てそのままでは不都合だと理解したのだろう。その体が軽い光に包まれたかと思うと、一人の女性へと変わったのだ。

それに驚く一号達。唯一ＲＸだけはそれにやはりと頷いた。女性はそんな彼らへ、この姿は大目に魔力を使うので出来るだけ長時間は使いたくないと返す。それに誰もが意味を理解し、一号が早く誰かの後ろへ乗るように促した。

それに頷き、女性は助けてくれた際安心感を与えてくれたアマゾンを見てジャングラーの後ろへ乗る。こうしてＲＸ達はオーロラへ向かって走り出す。そこへ彼らが入るのを見届ける白い姿に気付かぬままに。

こうして彼らが向かうは、女性がある意味で会いたがっている者達がいた場所。そこで一号は思いもよらない再会を果たす事となる……

それぞれがそれぞれの戦いを始める中、判明する新たな敵”グランショッカー”
その目的は？　女性の正体は？　素体とは一体？
そして彼らを見守るような白い姿は誰か？
幾多の謎を秘めつつ、龍騎とＲＸは仲間達と共に闇へ立ち向かう。
あの青年がライダー達と六課へ残した言葉の意味。それこそが勝利の鍵となると知らずに……

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ライダー達の後日談その２。まさかの映画用仮面ライダー出現と彼女の登場。

もしかしたらウルトラマンｖｓ仮面ライダーを地で行く事になるかもしれませんが、おそらく自分には荷が重いので無理かと思います。
……でも、いつか書きたいとは思います。いつか……ですけどね。

Ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｙ　夢を見つけた狼が出会うミライ

Ｍ７８星雲　光の国。そこにあるプラズマスパークタワーの最上階にメビウスはいた。その近くにはヒカリが何かの装置を操作している。あのディエンドの出現から一月が経過し、あのオーロラの分析から発生させる装置自体は完成した。

ただ、問題があった。巨大ヤプールと戦った際、エースが使った異次元を超える能力を応用して製作したため、自分の望む世界へ行けるかどうかは定かではなかったのだ。

それについてヒカリは改良を続けたのだが、結局座標などが分からない以上、任意に世界を選択する事は出来ないままだった。

それをどうにかするべく、メビウスはキング星へ赴き伝説の人物”ウルトラマンキング”に会いに行ったのだ。キングの神秘的な力ならばそれをどうにか出来るのではないかと思ったためだ。

だが、メビウスを待っていたのは想像だにしない状況だった。キング星に到着した彼を待っていたのは、辛く厳しい試練だったのだ。キングのいる場所へ向かうまでに何体もの怪獣達が出現し、彼へ襲いかかる。それも彼が地球で苦戦したバードンを始めとした強敵ばかりが。

それに動揺しながらも、メビウスは負ける訳にはいかないと戦い少しずつだが進んでいく。そして、最後に彼はその状況の原因に気付いた。そう、最後に現れたのはもう存在しないはずのエンペラー星人だったのだ。

――これは……まさかっ！？　今までの相手は僕の記憶から再現された幻！？

――その通り。しかし、よくぞかつての強敵達を相手に一歩も退かず進んできたな。

真実に気付いたメビウスを肯定したのはそこへ現れたキングだった。それを合図に消えるエンペラー星人。それに安堵の息を吐くメビウスへキングは訪れた理由を尋ねる。それにメビウスはディエンドの出現からの流れを話し、オーロラ発生装置の改良を頼んだのだ。

しかし、それに対しキングが返したのは期待を裏切る言葉だった。

――それは儂にも出来ん。

キングの力でさえ出来ない事がある。それがメビウスには衝撃だった。これまでも多くの奇跡を起こしてきたキング。そんな存在が出来ないと言った事が信じられなかったのだ。

しかし、愕然とする彼へキングはある言葉を告げた。それは、以前彼が地球でウルトラマンから言われた言葉と同じ意味のもの。

――メビウスよ、儂は神ではない。どれだけ超人的な力を持とうとも出来ぬ事もある。

それにメビウスが受けた衝撃から脱したのを見て、キングは一度だけ頷いてこう続けた。それは、可能性はあるとの言葉。その方法はプラズマスパークの光を使う事。

その傍でオーロラを発生させ、あの神秘の光を当てる事でウルトラマンを必要としている場所へ導いてくれるかもしれない。キングはそう締め括り、メビウスを見つめた。

それを受け、メビウスは希望をもらったと思い力強く頷いた。彼

はキングへ心からの礼を述べ、キング星を後にしたのだ。こうして彼はヒカリへその言葉を伝え、その可能性に賭ける事にした。

勿論ヒカリはメビウスを止めた。いくら何でも危険性が高すぎると。しかし、それでも彼は決断を変えなかった。このまま待っていても改良の目処が立たないと察していたのもある。そして、プラズマスパークの光が持つ力とある事を信じたかったのだ。

――アリシアやプレシアさんを助けたい。その絆は途切れやしない。この僕の思いがきっと二人へ繋がる道を導くはずだ。それに、ここで僕が行かないと何も始まらない。諦めない気持ちが勇気に変わる。それが絶対奇跡を起こすんだ。

あのウルトラ兄弟と共にヤプールと戦った思い出。あの神戸の街でウルトラ四兄弟と話した際、彼がセブンから言われた言葉。それが彼の中で今も強く残っているのだ。ヒカリはそんな彼の姿に説得を諦め、現状のように協力しているのだから。

メビウスだけしかここにいないのは、万が一に備えてだ。ウルトラ兄弟が出払ってしまった時に恐ろしい侵略者が動き出すとも限らない。更に装置自体も不安定のため、彼一人が先行して装置を使う事にしたのだ。データ取りも兼ねた発信機をメビウムブレスへ組み込んで。

ヒカリが装置を起動させる。その瞬間メビウスの前方へ出現する灰色のオーロラ。それへメビウスが手にしたプラズマスパークの光を当てると、その色に若干白が混ざる。

その変化に小さく頷き、メビウスが静かにオーロラへ近付いていく。その背中へ装置の制御を続けながらヒカリが声を掛けた。その声に強い願いを込めて。

「メビウス、一つだけ約束してくれ。……必ず帰ってくると」

「分かった。必ず僕はここへ戻ってくる」

ヒカリの声にはっきりした言葉を返し、メビウスはオーロラへ向かって歩き出す。その体が完全にオーロラへ消えると同時にそれも消える。それを見送り、ヒカリは小さく頷く。

（メビウス、私も必ずお前を助けに行く。それまで頑張ってくれ）

そう思うヒカリだったが、ふとプラズマスパークへ目を向けた。何故だかこう思えたのだ。この光が導く先にいるのは、ウルトラマンを必要とする者達であり、アリシア達ではないのではないかと。

だがそうだとしても、ヒカリにはある気持ちがある。そう、それでもメビウスならば絶対にアリシア達の元へ辿り着くだろうとの、強い確信が……

（くそっ！　どういう事だ、これは！？）

彼は気だるさが強い体を無理矢理動かしながら必死に戦っていた。拳を振る度、足を蹴り出す度、凄まじい脱力感が自身を襲う。その原因を知らない彼だったが、それが何を意味しているかは何となく気付いている。

自分の体の限界が近いのだろうと。もしこれが五分前だったのなら、彼は大人しくそれを受け入れ安らかな眠りについただろう。しかし、今はそうもいかない。強靭な精神力でその倦怠感を抑え付け、彼は懸命に戦っていた。

実は、彼はつい先程まで横たわっていたのだ。それも眠気や疲れからではない。その命の灯が尽きようとしていたために。

あのオルフェノクの王との戦いを終えた彼は、かけがえのない仲間の二人と共に日常を謳歌していた。全ては終わり、もう平和になったと実感しつつ、土手で横になりながら他愛のない談笑をしていたのだ。

だが、彼がやっと見つけた夢を二人へ語り、静かに目を閉じようとした時だ。突然土手下に灰色のオーロラが出現し、そこから見た事もないオルフェノク達――怪人達が現れたのだ。それに驚く二人の声に彼は目を開け、それを見るなりファイズギアを使って変身し、一人立ち向かっったのだから。

無論、それは仲間の二人を守るため。そして、やっと見つけた夢を守るためだ。しかしそれだけではない理由がある。そう、その相手の中に忘れられない存在がいたのだ。

「どうして……どうしてお前がいるんだよっ！」

「何故、か。教えてやろうファイズよ。それは、この体が生まれ変わったからだ」

ファイズの視線の先にいる者。それは白い体のバッタに近い印象を与えるオルフェノクだ。アークオルフェノク。オルフェノクの王と呼ばれた存在。ファイズが相棒とも呼べる存在と忘れられない人物の死と引き換えに打ち破った強敵だったのだ。

アークオルフェノクは自身の言葉に戸惑うファイズへこう続ける。この体は元々残っていた事。それを保管していた存在がいた事。そ

れを殺し、この体を手に入れた事。そして、この体を滅ぼせる可能性が現段階で一番高いファイズギアを破壊するために、ここへ現れた事を告げた。

それを聞いたファイズは、幾多の浮かぶ疑問を問いかけるよりも先に思わずこう呟いた。

――あいつらのした事は……無駄だったって言うのかよ。

バイクでありながら最後には身を挺して彼を守り、ファイズブラスターを届けて散ったオートバジン。カイザギアを破壊され滅びゆく体にも関らず、決死の覚悟でアークオルフェノクを取り押さえたホースオルフェノクこと木場勇治。それらの犠牲がこのままでは無駄にされる。そう思ってファイズは倒れそうな体に力を込めた。

「させねぇ……そんな事、絶対させるかっ！」

残った時間は少ない。しかも、あの時と違い自分はファイズブラスターを装備していない。それでもやるしかない。そう思い、ファイズは拳を握り締めると同時に再び動き出す。そんな彼を見て、アークオルフェノクは嘲笑うように言い放った。

「ファイズ、貴様がどれだけ足掻こうと無駄だ。体を手に入れた今、余はじきに完全復活を遂げる。そうなれば貴様ら仮面ライダーなど敵ではない。第一、貴様一人で何が出来る」

馬鹿にするようなアークオルフェノクの言葉に、ファイズは目の前の怪人達を見つめながら平然と答えた。

「知ってるか？　夢を持つとな、時々すっごく切なくなるが、時々

すっごく熱くなるみたいだぜ。今、俺はそれを実感してるからなっ！」

「世迷言を……やれっ！」

そのアークオルフェノクの言葉で動き出すショッカー怪人達を相手に、ファイズは一人勝ち目のない戦いを挑む。その手から限界が迫っている証である砂が流れても、それがどうしたとばかりに力強く拳を振りぬき、蜘蛛男を殴り飛ばす。

後ろから羽交い絞めしようとするサラセニアンには素早く後ろ蹴りを放って迎撃し、それで相手が動きを止めた瞬間追撃の回し蹴りを叩き込む。更にその体を蹴り飛ばす。そんなラフファイトが彼の持ち味なのだ。

そんなファイズを少し離れた場所で見つめる者達がいる。彼の仲間である園田真理と菊池啓太郎だ。

「三原君はまだ？」

「あれも一緒に持ってきてくれるから、少し遅くなるかもしれないって。それにしても……たっくん、何かおかしいよね？」

「……うん。まるで何かに焦ってるみたい」

いつもとは違うファイズの雰囲気に、違和感と共に言いようの無い不安感を覚える二人。あのアークオルフェノクとの戦いでは、三人のライダーが揃ってやっとの勝利だった。しかし、今ここにいるのはファイズのみ。しかも、彼は強化体であるブラスターフォームでさえないのだ。

最初はそれによる焦りかと思った彼らだったが、それにしてもお

かしいと感じ始めていたのだ。それが何故かを考える二人を、ファイズに蹴り飛ばされた蜂女が見つけ迫った。

「不味いっ！？」

「逃げなきゃっ！」

慌ててその場を離れようとする二人だったが、そんな彼らを飛び越して蜂女が進路方向へ着地する。それに思わず足を止める二人。じりじりと迫る蜂女。ファイズはそれに気付くも、アクセルフォームへ変わる暇さえ与えない怪人達の攻撃に苛立ちを募らせる。

そして、その場に立ち尽くす二人へ怪人の魔の手が迫ろうとした瞬間だった。突如二人を守るように白みがかった灰色のオーロラが出現したのだ。それに驚く周囲を他所に、そこから現れた者が蜂女を蹴り飛ばした。

「「えっ？！」」

その眼前に現れた相手に驚く二人。そこには銀色の存在がいた。新手のオルフェノクかと思う二人へ、彼は少し視線を動かし声を掛けた。

――大丈夫ですか？　怪我はありませんか？

メビウスは驚きから固まる二人へそう優しく声を掛け、それに彼らが頷くのを見て小さく頷き返す。そして視線を再び眼前の蜂女へ向けた。

（怪獣や侵略者じゃない。でも……この雰囲気はどこかで感じた覚えがある）

蜂女の放つ邪悪な気配に微かな既視感を覚え、メビウスは二人を守るように構えた。その安心感に二人は知らず笑みを浮かべた。ファイズ達の背に守られている時と同じ感覚を覚えたのだ。もう大丈夫。そんな風に思える気持ちになったのだから。

メビウスはメビュームブレードを出現させると、立ち上がる蜂女へ向かって走り出す。相手の剣攻撃をそれで受け、左足で蹴りを放って相手の体勢を崩すメビウス。更にメビュームブレードでその体を切り、追い撃ちとばかりにダメージを与えていく。

その戦いを見守りながら、真理も啓太郎も知らず拳を握っていた。突然現れた名も知らぬ未知の存在。それが自分達を守るために戦ってくれている。そんな異常な状況にも関らず、彼らにあるのは安堵だった。

「頑張れっ！」

「負けるな！」

蜂女を追い詰めていくメビウスへ二人は声援を送る。ファイズは一度見た際にもう怪人達を蹴散らしていたのを確認した。ならば、そう簡単に遅れは取らないだろう。自分達が今応援すべきはこちらだ。二人はそう思いながら声を出していた。

それを受けて、メビウスは嬉しく思っていた。ここが自分達ウルトラマンが守った世界ではないと彼は知っている。それでも、こうして人間は自分を応援してくれている。彼らからすれば謎の存在でしかない自分を。

（アリシア達と同じだ。人はみんな優しい心を持っている。相手の姿ではなく、その行動や在り方を見て判断してくれる人達。そうだ

！　僕らは人間とはそういう存在だと知っている！）

蓄積されたダメージから肩を揺らす蜂女。それを見てメビウスはメビュームブレードを構えて走り出す。それを何とか迎え撃とうとする蜂女だったが、既にその体ではメビウスを止める事は出来なかった。

「ハッ！」

蜂女の体に刻まれる∞のようなメビウスのマーク。それをキッカケに蜂女は爆散した。メビウスはそれを見届ける事なく視線を後ろへ向けた。そこにはアークオルフェノクと戦うファイズがいた。そこへ援護へ向かうべくメビウスは駆け出していく。

（彼は……一体何者なんだ？）

そう、メビウスの目には見えていたのだ。ファイズの体が普通の人間とは違う事や、まるで崩れ落ちようとしているように砂を流しているのを。しかし、それでもメビウスはファイズを助けようとしていた。彼が味方なのはもう理解している。助けた二人がファイズへ向かってその名を大声で呼びながら応援していたのだ。

その声に込められているのが心配だと理解したメビウスは、ファイズを助けるために急ぐ。その苦戦が目に見えて明らかだったからだ。間に合えと思いながら走るメビウス。普段ならばそんなにないはずの距離を、この時ばかりは遥か彼方に感じながら……

メビウスが二人を守るように戦い出した頃、ファイズはその行動で彼が味方だと悟り、一人その背に向かって小さく声を掛けていた。

「どうも味方みたいだな。なら、銀色……二人を頼むぜ！」

”Ｃｏｍｐｌｅｔｅ”

メビウスの出現に未だ戸惑う怪人達。ファイズはそれを好機とばかりにアクセルフォームへと変わった。その胸部のフルメタルランプが展開し、その目が黄色から赤へ変化する。全身を循環するフォトンストリームは赤から銀へ変わり、通常時以上の高出力を示す。

アクセルフォーム。高速戦闘を可能とする姿で、あらゆる動作を通常の千倍の速度で行う事が出来るのだ。反面、その胸部を展開するために防御力が低下する事や時間制限があるなどの欠点はあるものの、その利便性の高さで何度もファイズの窮地を救った姿だ。

その音声でファイズの変化に周囲が気付いた時にはもう手遅れだった。ファイズが手首にあるファイズアクセルのスタータースイッチを押した瞬間、勝敗は決したのだから。

”Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ”

電子音声が告げる開幕の合図。次の瞬間、ファイズの周囲にいた怪人達が一斉に吹き飛ばされる。更に、その無防備な体勢の怪人達へ次々と赤いポインターのようなものが出現し向けられていく。それは、アクセルフォームとなったファイズの必殺技。

強化クリムゾンスマッシュ。ファイズポインターから円錐状の赤い光を放って目標をポイント――つまりロックオンし、跳び蹴りを放つ必殺技クリムゾンスマッシュ。それを複数へ放つものだ。

次々とそれを受けΦの文字を浮かべるショッカー怪人達。それをキッカケにして花火のように散っていく。その爆発を背に着地するファイズ。そして終幕を再び電子音声が告げた。

”Ｔｉｍｅ　Ｏｕｔ”

そのあまりの光景に言葉がないアークオルフェノク。そこへ仕切り直しを意味するように響く言葉がある。

”Ｒｅｆｏｒｍａｔｉｏｎ”

展開していた胸部が元に戻り、目の色も黄色へ戻ったファイズは残ったアークオルフェノクへ視線を向ける。その瞬間、彼の体全体から砂が流れた。それでもファイズは意にも介さない。何事も無かったように手首を振り構えたのだ。

「……行くぜ」

「来いっ！　仮面ライダーファイズ！」

圧倒的に不利。勝機はないに等しい。それでもファイズは迷わなかった。今の彼の背には守りたい命がある。今の彼の胸には守りたい夢がある。それが彼を立たせていた。それが彼を動かしていた。本当ならばもう死んでいてもおかしくない状態。それを彼は奇跡とも言える精神力で辛うじて食い止めていた。まだだ、まだ燃え尽きるな。そんな強い気持ちを心に抱き、彼は必死に二つの敵と戦っていた。

一つは眼前のアークオルフェノク。もう一つは自分の運命。それらを相手にファイズは残り少ない命の灯を燃やして立ち向かう。繰

り出されるアークオルフェノクの攻撃を何とか受け止め、或いはかわすファイズだったがそこで妙な事に気付いた。

（何だ？　こいつ、前と違って動きが鈍いぞ……）

それはアークオルフェノクを乗っ取った存在がその体にまだ慣れていないため。故にその力を完全に御していないのだ。更にあの戦いで受けたダメージ。それが完治していないのもある。万全ではない。それがその動きの鈍さに繋がっていた。

一方、ファイズはそこから希望を見い出そうとしていた。あの決戦で思い知ったアークオルフェノクの恐ろしさ。それを眼前の相手から何故かあまり感じない事にまだどこか疑問を抱くファイズだったが、今なら勝てるかもしれないと思いその体にもう一度喝を入れる。

「こいつでどうだ！」

”Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ”

手にしたファイズショットへ赤い光が集束する。それを見たアークオルフェノクが微かに怯んだ瞬間、ファイズは力強く走る。そしてその腹部へそれを勢い良く叩き付けた。グランインパクトと呼ばれる攻撃だ。

それを受けて軽く体を揺らすアークオルフェノク。しかし、その手がファイズを掴む。何とかファイズは振り払おうとするが、その力は強く振り解けない。そしてファイズの胸部へ残った方の手が襲い掛かる。

「その程度で余は倒せんぞ。死ね、ファイズ！」

その言葉と共に振るわれた一撃で吹き飛ばされるファイズ。そのまま地面を何回か転がったファイズは、止まった場所から立ち上がる事が出来なかった。いや、立ち上がろうとしていた。だが、もう力が入らないのだ。見れば、彼の全身から砂が出始めている。

（くそ……ここで終わってたまるかよ）

何とか体に力を入れて立ち上がろうとするファイズ。すると、突然その体が掴まれた。何者かが起き上げてくれたのだ。その相手を確かめるべく視線を動かすファイズ。そこには光の化身がいた。

「お、お前は……」

「僕はメビウス。ウルトラマンメビウス。君の名はファイズでもいいかな？」

「たしかにそれでもいいけどな……」

アークオルフェノクの告げた名を聞き、メビウスはそれがこの状態の名前なのだろうと思った。そのため、真理達が呼んでいた名ではない方で確認を取ったのだ。それに曖昧な言葉を返すファイズだったが、それを聞いてメビウスの告げた言葉が彼に驚きを与える。

「ならファイズ、一緒に戦おう！」

そのメビウスの言葉で、ファイズは微かに体へ力が戻ってくる感覚を覚えた。共に戦ってくれる相手がいる。自分は今も一人ではない。そう思った瞬間、燃え尽きそうだった命の灯が弱くだが再び輝き出したのだ。

「邪魔をするかっ！」

そこへ襲い来るアークオルフェノクの攻撃。それをメビウスがファイズを庇うようにバリアで防ぐ。しかし、その事への感謝を素直に出せず、ファイズはついぶっきらぼうな声を出して、メビウスの呼びかけに水を差した。

――……余計な事しやがって。ああ、それと出来れば巧って呼んでくれ。ファイズってのはどうも慣れないもんがある。

――分かった。よろしく、巧！

――おう。

今はそれだけで良かった。例え姿形が違おうとも、ファイズにはそれが人間を襲う相手でないのなら仲間も同じ。メビウスも同じ考えだ。異種族との共存を考えながら生きてきた二人のヒーローに、もう言葉はいらなかった。

見も知らぬ能力を使うメビウスに戸惑うアークオルフェノク。そんな相手を前に雄々しく構える仮面ライダーとウルトラマン。その二大ヒーローの姿に後ろで見守る真理と啓太郎の応援が届く。それを受けて力強く拳を握る二人の姿はアークオルフェノクを怯ませた。

しかしその瞬間、ファイズからまた少し砂が流れた。それを見て、アークオルフェノクが何かを思いついたように声を掛けた。

「ファイズ、貴様は死ぬ事が怖くないのか？　もし余に従うのなら命を助けてやらん事もないぞ」

オルフェノクの王であるアークオルフェノク。彼の能力の一つに

オルフェノクの延命がある。それをちらつかせ、限界を迎えつつあるファイズの心を乱そうとしたのだ。しかし、それに対するファイズの、いや乾巧の答えは決まっていた。

――言ってろ。確かに死ぬのは怖いさ。だから最後まで一生懸命生きんだよ！　夢を、人間を護るためになっ！

その答えにアークオルフェノクが唸り、メビウスが驚く。それは、言い方こそ違えウルトラマン達と同じ気持ちだったのだ。死が怖くない命などない。だからこそ誰もが懸命に生きようとする。彼らウルトラマンもそれを胸に凶悪な敵に立ち向かっていけるのだから。

そう思ったメビウスは、ファイズのその言葉に”人らしさ”を感じた。例え体が普通の人間と違うとしても、彼は紛れもない人間だ。そう心から思い、メビウスは小さく頷くとファイズへ叫んだ。

「一撃で決めよう！　時間をかけると不味いっ！」

「もしかしてお前……分かったっ！」

メビウスが何を意図して言ったのかを悟り、ファイズはどこか驚くような声を出す。しかし、最後にはそれを嬉しく思って言葉を返す。ファイズポインターをセットするファイズ。その間、メビウスは再度アークオルフェノクの攻撃をバリアで防ぎ続けた。

”Ｒｅａｄｙ”

電子音声が準備が出来た事を告げ、それを聞いたメビウスがファイズへ小さく頷く。それを受け、ファイズも微かに頷くと中腰に構えて走り出す。メビウスはそれをキッカケにその場から跳び上がる。

そしてファイズも同時に地を蹴って跳び上がると、その脚部のポインターから赤い光が放たれた。

それに動きを鈍らせるアークオルフェノクだったが、何とか弾き飛ばそうとした。先程のグランインパクトのダメージと体調の不完全さ。そのため、ポインターを瞬時に弾く事が出来なかったが、それでも何とか除去しようと腕を動かす。だが、その動きを横からの攻撃が阻んだ。

側面に出現したのは黄色のポインター。それがアークオルフェノクの動きを辛うじて止める。それに驚くアークオルフェノク。その視線を動かした先には、ファイズを助けに来たデルタがいた。

「何とか間に合ったか……」

彼は、このままではファイズの攻撃が阻止されると思い、咄嗟の判断で遠距離からポインターを放った。それは、アークオルフェノクがファイズのポインターで動きを鈍らせている事に気付いたから。そのため、ならばと自身のポインターを使って彼らを援護したのだ。

「おのれぇぇぇ！　どいつもこいつも邪魔をしよって！」

アークオルフェノクの恨み言を聞きつつ、デルタは少し上へ視線を動かした。そう、何故なら後はファイズ達が決めてくれると信じているから。

「うおぉぉぉぉぉ！！」

「シュアァァッ！！」

デルタの機転による援護が作った好機。それをものにせんと同時

に蹴りの姿勢を取るファイズとメビウス。その途中、メビウスは体を回転させ炎を纏う。メビウスピンキックという技だ。クリムゾンスマッシュとメビウスピンキック。その二つのキックがアークオルフェノクを直撃する。

そして、その体を通り抜けるように着地するファイズと片腕を貫いて着地するメビウス。その背後では体から青い炎を微かに発生させ、アークオルフェノクがふらついていた。

「こ、これで終わらん。余は……余はまだ負けぬ！」

その言葉を合図に、アークオルフェノクはオーロラを出現させてそこへ逃げて込んでいく。だが、誰もそれに意識を向ける事が出来ない。着地した瞬間、ファイズがゆっくりと倒れようとしたからだ。それに気付いたメビウスがその体を受け止め、静かに地面へ横たわらせた。

体の限界のためかファイズドライバーが外れ、巧の姿へ戻るファイズ。だが、メビウスはそれを見て言葉を失った。巧の体は燃え尽きそうな炭のようになっていて、今にも崩れそうだったのだ。

「これは……一体……」

「巧っ！？」

「たっくんっ？！」

そんな姿を見て驚いたのはメビウスだけではない。真理と啓太郎もそうだった。しかも、二人はそれが何を意味するかを嫌と言う程理解していた。故に表情が驚きから悲しみへ変わる。

「そんな顔すんなって……いつかは、こうなるんだからな」

「巧……でも、でもっ！」

「いくら何でも早いよ！　早すぎるよ！」

何とか笑みを作ろうとする巧。しかし、既にその顔も崩壊が始まっているためか、笑うだけで少し崩れる。それに余計悲しみを感じ、二人はそれぞれ顔を伏せた。そこへ三原も現れた。その手には渡すはずだったファイズブラスターがある。

「これは……そんな」

彼もそこで言葉を無くす。どう見ても助からない。そう確信出来る状態だったのだ。仮に何か手があるとしても、既に手遅れ。元々オルフェノク自体が長命ではないのだ。

涙を流す真理と啓太郎。力を無くし膝を付く三原。そんな彼らへ最後の言葉とばかりに巧が普段通りの声を掛けていく。メビウスはそれを聞きながら、ある事を考えていた。

（巧は自分の命を削りながら、最後まで邪悪な相手から人間を守り続けた。しかも、死を前にしても怯えるでもなく、それを受け入れようとしている。でも、彼はまだ死ぬべきじゃない。彼の、ファイズの力はまだ必要とされるはず。さっきの存在。それはきっと彼じゃなければ……そうか！　きっと僕がここへ来たのはそのためだっ！）

自分がこの世界へ呼ばれた理由を悟り、メビウスは決意を固めた。そう、彼の尊敬するウルトラ兄弟達がかつて下した行動。それを彼もする事にしたのだ。

「巧、君を助ける方法がある」

その言葉に巧達が驚愕した。それに構わず、メビウスは言葉を続けた。その内容に誰もが違う意味で言葉を失う。

――僕の命を君に預ける。それなら、君は死なずに済む。

――預けるって……お前はどうなるんだよ？

――君と一体化する。それだけだ。

メビウスはそれだけ言うと何も言わなくなった。死を受け入れようとした巧。その気持ちを尊重し、決めるのは巧に委ねたかったのだ。押し付けではなく選んで欲しい。その気持ちを受け、巧は死が目前に迫った状況にも関らず即答しなかった。

確かに普通に考えれば有り得ないと思うのだろう。しかも、メビウスの現れ方が既に異常だった。更に彼はあのアークオルフェノク達と似たオーロラを通ってきた。もしかするとこれは何か裏があるのかもしれない。と、普通ならば考えてもおかしくないのだろう。だが巧は違った。

（何でこいつは、初めて会った俺に自分の命を差し出そうと出来る？　それに迷いも悩みもないってのか？　その理由は何だって言うんだ？）

彼はただメビウスの気持ちに戸惑っていたのだ。巧を死なせたくないという混じり気のない純粋な気持ち。そして、その彼から今まで出会った者達で一番強い安心感を感じたために。だから巧はメビウスの目を見つめ続け、小さく、だがしっかりとした声で答えた。

――預けてもらう必要はない。

それにメビウスだけでなく真理達も驚きを見せる。そんな周囲に対し、巧はそのまま続けた。

――大体、元々は自分の命だろ。それを人に預けるなんて言うな。せめて、死にたくなきゃ俺と共に生きてみないかぐらい言えよ。

――巧……ああっ！　僕と共に生きてくれ！

――……ありがとよ、メビウス。

乱暴な巧の言葉に込められた気持ち。それに気付き、メビウスは嬉しく思って頷いた。それに巧が小さく笑みを浮かべて頷き返す。次の瞬間、メビウスの体が巧へと重なっていく。そしてメビウスの体が完全に巧の中へ消えると同時に、彼の体が元に戻ったのだ。

「嘘……本当に……」

「たっくんが、たっくんが戻った！」

「信じられない……」

あまりの光景に三者三様の反応を見せる真理達。巧は一人自分の体を確かめるように動かしながら、ふと目を閉じる。すると、頭の中に別空間が出現する。そこには巧とメビウスが向かい合うようにいた。

＞……これが一体化するって事か＜

＞ああ。僕はこうして君と共にいる＜

＞成程な……＜

意識の中に他者を感じる事。いや、意識の中でこうして会話出来るその奇妙さに、巧は少しだけ苦笑した。そんな彼へメビウスがどこか微笑むように告げた。

＞巧、実は僕にも名前が二つあるんだ。メビウスの他にもう一つ＜

＞別に俺は好きで二つ名前を持った訳じゃねえよ＜

その言葉にメビウスが軽く謝る。巧が怒ったように聞こえたからだろう。それに今度は逆に巧が気まずそうな声を返す。彼としては、そこまで怒りなどは込めてなかった。

しかし、メビウスは彼の予想以上に優しく真面目だった。下手をするとこのまま変な雰囲気になるかもしれない。そう思った巧は、話題を戻す事にした。そう、そのためにメビウスへこう問いかけたのだ。

＞で？　もう一つの名前は何て言うんだ？＜

＞うん。ミライ……ヒビノ、ミライ＜

その瞬間、巧の前にいたメビウスが一人の青年へ変化した。その優しそうな好青年然とした姿が実に雰囲気に合っていると思い、巧は小さく笑う。

＞ヒビノ・ミライ、か。急に地球人……いや日本人ぽくなったな。

でも、いい名前だと思うぜ＜

＞ありがとう！　君のファイズって名前もカッコイイよ＜

巧の感想に嬉しそうな声を返すミライ。その返事に巧が手を振って「言ってろ」と返す。それが軽い照れ隠しと理解したのか、ミライはどこか笑っていた。それを最後に巧は目を開けた。

視線の先には、彼の回復を喜ぶ真理と啓太郎の姿に安堵する三原の顔がある。だが次の瞬間、彼らの前方にメビウスが通ってきたのと同じオーロラが出現した。

「……どうやらあれは”俺達”を呼んでるみたいだな」

「巧？」

「たっくん？」

普段の”俺”ではなく”俺達”との表現をする巧に戸惑う真理達を置いて、彼はファイズブラスターとファイズドライバーを手にし、一人オーロラへ向かって動き出す。彼の中でミライが告げたのだ。あれを通って行けば必ずアークオルフェノクへ辿り着くだろうと。巧はそれを信じる事にしたのだ。

正直に言えば、ここへ再び怪人達が攻めてくる可能性も捨てきれない。それでも、ここにはデルタがいる。そう思えば、自分がするべきは一つだった。

「三原、二人を頼む。俺が出かけたのなら、もう奴らはここへは来ないかもしれないけどな。……絶対って訳じゃない」

「……分かった。やってみるよ。僕にどこまで出来るか分からない

けど」

巧の言葉に真剣な声を返し、三原は確かに頷いた。それにどこか嬉しく思いながら、巧は「信じるぜ」と告げてオーロラへ足を入れようとする。しかし、何かを思い出して一度後ろを振り返った。そこにはやや悲しそうな顔で巧を見送っている真理と啓太郎がいる。巧が帰ってこないのではと思っているのだろう。

それを察し、巧は安心させるように笑みを浮かべる。そんな彼に二人は互いに笑顔を見せ合ってから、それを巧へも向けて手を振って応えた。それを受け、巧は顔を前へ戻す。その表情は凛々しい。これからの自分の行く道へ不安などないとばかりに。

――待ってろ……。次は絶対に倒す。

小さくそう呟き、巧はファイズドライバーを装着し、右手にしたファイズフォンのボタンを押す。５５５と押す事から始まる、一連のもう慣れた手順を踏み、彼は聞こえてくる電子音声と共にそれを高々と掲げて叫ぶ。

”Ｓｔａｎｄｉｎｇ Ｂｙ”

「変身っ！」

”Ｃｏｍｐｌｅｔｅ”

ファイズは、手にファイズブラスターを持ったままオーロラの中へ走り出す。それを見守る白い存在に気付かずに。信じてた未来が崩れ去ろうとしている。もう秒読みは始まった。

ならば、彼はそれを阻止するだろう。護ることと戦うことのジレ

ンマは終わらないとしても、彼は走り続けるのだ。何故ならば、彼もまた夢を抱いている”仮面ライダー”だから。故に戦う。そう――
――

”世界中の洗濯物が真っ白になるみたいに、みんなが幸せになりますように”との夢を叶えるために……

アークオルフェノクに勝利したファイズとメビウス。だが、撃破には至らず逃走を許してしまう。

そして、その勝利を喜ぶ暇もなく巧の命が尽きようとした時、その命をミライが繋ぎ、二人は一体となって走り出す。

彼らが戦ったアークオルフェノクを乗っ取った存在は誰か？　完全復活するとは一体？

また一人、闇と戦うべく仮面ライダーが動き出す。その身に強い光を宿して……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

ファイズ登場。ウルトラマンと一体化する仮面ライダーという掟破りな存在となりますが、自分ではこれぐらいしか巧の延命が思いつきませんでした。

またもやなのは要素皆無で申し訳ないです。余談ですが、アークオルフェノクを初めて見た時「えっ！？　偽ＲＸ？！」と思ってしま

いました。

Ｓｉｄｅ　Ｓｔｏｒｙ　魔法とパンツと起きる腕

闇の書事件。八神はやてが主となり、守護騎士達と魔導師達、それに二人の仮面ライダーを加えたチームが邪眼と戦い解決した事件だ。夜天の魔導書に巣食った邪眼を倒し、管制人格だったリインフォースを失う事無く終わった戦い。

だが、これ以前に起きた闇の書絡みの悲劇を覚えているだろうか。ハラオウン親子にリーゼ姉妹、そしてギル・グレアムに大きく影を落とす事になった出来事を……

（これでいい。これで……）

彼――――クライド・ハラオウンは、自身が乗る次元航行艦目掛けて放たれたアルカンシェルの光を眺め、心から微笑んでいた。自分の死が迫っているという状況にも関らず、彼は笑みを浮かべる事が出来ていた。

本心を言えば、まだ幼い息子と愛する妻を残して一人先立ってしまう事を避けたい。そして、この事をきっと悔やみ続けるだろう優しい上司。その心に小さくない傷跡を残してしまう事もだ。

それでも、彼は自分の下した決断が間違っているとは思わない。ここで謎の暴走を起こした闇の書ごとこの艦を撃墜しなければ、確実に恐ろしい程の犠牲が出るからだ。

（グレアム提督、この行為を悔やまないでください。貴方は局員として正しい判断を下してくれました。私の気持ちを汲んでくださり、感謝しています）

そうクライドが思った瞬間、視界に眩しい閃光が迫った。その最

中、彼は薄れいく意識の中で小さく呟く。

――リンディ、クロノ、私はお前達の幸せを願っているぞ……

だが、そんな彼の体はアルカンシェルの光から逃げるように穴のようなものへ吸い込まれた。それは闇の書――正確には中に潜んでいた邪眼がアルカンシェルに動揺し、転生機能を自身の力で影響を与え早めに発動させたために生じた時空の歪みだった。

これは誰にも知られぬ出来事。吸い込まれた本人さえ知らぬ事態。全ては、本来ならば有り得なかった邪眼の存在がもたらした結果。そう、リインフォース生存と同じく、邪眼がもたらした数少ない良き変化だった……

砂漠を歩く一つの人影。肩に担ぐように棒を持ち、その先には男性用下着――パンツがぶら下がっている。その人物の格好はどこかゆったりとしていて、彼の雰囲気を表しているようだった。

「それにしても、みんな相変わらず元気そうだなぁ」

彼はそう独り言を呟くと、足を止めて空を見上げた。そこには澄み渡る青空が広がっている。それに満足そうに頷き、彼はふと手をポケットへ入れた。そしてそこから何かを取り出し、しばらく眺める。

それは二つに割れたメダル。コアメダルと呼ばれる物だ。彼はそれを使って変身する仮面ライダーだった。その力を以って彼は一年間に渡って戦い続け、ついに世界の終末を防いだのだから。

彼の名は火野映司。またの名を仮面ライダーオーズ。欲望に飲まれる事無く戦い抜いた優しく強い人物だ。彼は手にしたメダルを見つめ、小さく噛み締めるように呟く。

――アンク、お前を元に戻す方法はまだ分からないけど……絶対いつか戻してみせるから。

そして、そのメダルは鷹の絵が刻まれた物。タカメダルと呼ばれる物だ。それは意識を持ち、一年間にも渡るオーズの戦いを支えた相棒とも言える相手の核なのだ。アンク――グリードと言う欲望から生まれた怪物だった存在だ。

映司とアンクは敵対関係だった。グリードが生み出すヤミーを倒すためにオーズとなった映司は、自分の力を利用するアンクと最後には戦う事になっていたからだ。

だが、それ故に信頼関係もあった。ヤミーを倒す。この一点においては、二人は互いを心から信じる事が出来たのだから。

そんな関係だった二人は、最後の最後まで不思議な関係を続けた。意見の食い違いから衝突する事は当たり前。時には殴り合いの喧嘩までした。それでも、それでも二人は誰よりも互いの事を理解し、また支え合った。

だからこそ最後には、アンクは自身であるタカメダルさえも映司へ託した。それを受けて、映司もアンクの気持ちを汲み取って最後の変身を敢行。見事二人の絆が世界の終末を阻止したのだ。

「……アンクが戻ったとしても、もうオーズになる事は出来ない。鴻上さんの二枚も、あの新さんにもらった三枚も無くなっちゃったし」

あの最終決戦後、映司は鴻上から教えられたのだ。あの最後の戦いで渡したタトバコンボのメダルと同じく、鴻上の手元に残っていた青と白の十枚目のコアメダル。それが何故か突然消えてしまったと。

それを聞いた映司は、大事にしまってあったコブラ・カメ・ワニのメダルも無くなっている事に気付いた。まるでもうこの力は必要とされないとばかりに忽然と消滅したのだ。

それは、映司にあのショッカーとの戦いを彷彿とさせた。ショッカーメダルとイマジンメダル。あの二つも首領を倒した後、役目を終えたように消滅したのだから。

故に映司は喜んだ。そう、オーズが必要とされる事自体がおかしい状況だと知っているから。だからメダルが全て消えた事はかえって彼を安堵させた。もうオーズはいなくてもいい。そう世界が言ってくれた気がしたのだ。

「でも、それでいいんだよね。グリードはいなくなったし、ヤミーも生まれる事はない。それに……今の俺にはオーズの力は必要ないもんな」

自分へ言い聞かせるように映司はそう告げて歩みを再開する。彼の欲しかったもの。どこまでも届く自分の腕。それはもう手に入ったのだ。オーズという”力”ではない。それは自分を助けてくれる他者の手。そう、誰かと手を繋ぐ事。即ち”絆”だったのだ。

勿論それだけではない。彼がオーズを必要としなくなったのは、あの相棒とも呼べる相手の最後の言葉も影響している。

――お前が掴む腕は、もう俺じゃないって事だ。

その言葉を改めて噛み締め、映司は手にしたメダルを大事そうにポケットへと戻し、視線を前へ向ける。すると、そこには気を失って倒れている男性がいた。まるで制服のような格好を見て、映司は慌てて男性へ駆け寄る。そして、すぐに額へ手を当て日射病かの確認をした。

（熱はない……でも、このまま放って置いたら大変な事になる。とにかく日陰を探さないと……でも、どうしてこんな格好で砂漠なんかに？）

映司は男性を背負うようにして、砂漠を歩き出す。どこか影になっている場所はないかと視線を動かしながら、内心では男性の格好へ疑問を抱いて……

「ん……」

クライドは、微かに聞こえる何かが爆ぜる音と肌寒さで目を覚ました。そして、まだどこか鈍い思考で自分の現状を確かめる。まず目に入ったのは綺麗な星空。次に把握したのは地面の感触。砂の上にいるらしいと感じたのだ。

どうやら所謂あの世というものではない。感覚がはっきりしている上に景色も現実味溢れている。そう判断したところで、彼へ声を掛ける者がいた。

「あっ、気がつきました？」

その声にクライドが視線を動かすと、そこには焚き火の番をする映司がいた。その姿にクライドは驚きを浮かべるも、自分を助けてくれたのは映司だと瞬時に理解し、ゆっくりと起き上がると礼を述べた。

「君が助けてくれたのか。ありがとう」

「どういたしまして。でも、気にしないでください。困った時はお互い様って俺の国じゃ言うんです」

「それでもだよ。見知らずの、しかも行き倒れた相手を助けるのは、誰にでも簡単に出来る事じゃない」

「そう言われると嬉しいですけど……やっぱり照れるな」

そこで会話が途切れる。互いに聞きたい事があるが、どう切り出せばいいのかを探っているのだ。しかし、そういう事があまり好きではない映司が先に口を開いた。

「そうだ。自己紹介してなかったですよね。俺、火野映司って言います」

「火野君だな。私はクライド・ハラオウンだ」

「じゃあ……ハラオウンさんはどうして砂漠をそんな格好で？」

その問いかけにクライドはどう答えるかを考えた。映司の名前と今の質問を聞いて、彼にはある推理が生まれていたからだ。そう、ここは管理外世界の地球ではないかと。

ミッドチルダにも映司のような独特の響きの名前をした局員がいる。更に管理局の制服を知らない。そこから導き出された推測だ。故にクライドは悩んだ。管理外では管理局の存在や魔法の事を教える事は、緊急事態以外では問題のある行為だったのだ。

（どうする？　彼は信頼出来そうな相手ではある。だからといって簡単に管理局の事を教える訳にも行かない。しかし、このままでは怪しまれてしまうな）

まずは一度確認をしておこう。そう結論付け、クライドは映司へ答える前に質問をした。

「すまないが火野君、その前に聞きたい事があるんだが……」

「はい、いいですよ」

「君は……日本人かな？」

その質問に映司ははっきりと頷いた。それを見た瞬間、クライドはやや安堵と戸惑いを混ぜた表情を見せる。自身の推測が立証されたからだ。つまり、ここは管理外世界の地球であると。

「そうか……やはり日本人だったか」

「あの……何か問題でも？」

クライドの声に落胆にも似たものを感じ、映司はそう不思議そうに問いかけた。日本人である事が問題になる要因がすぐに思いつかなかったためだ。しかし、そんな彼の質問へクライドが答える前に信じられない事が起きた。

二人の横に灰色のオーロラが出現し、そこから黒い姿をした男達が現れたのだ。それを見て戸惑うクライドだったが、映司は違った。そう、映司はその者達に見覚えがあった。

かつてオーズとして戦っていた時、出会った異世界の者達。彼らと共にあの歴史が歪んだ現代で戦った存在だったからだ。その名は……

「ショッカー?!　でも、どうして!?」

「火野君、彼らは一体何者なんだ?」

「ショッカーって言って、世界征服を目的としてる奴らです。だけど、もうあの時に倒したはずなのに……」

「つまり他者に害を為す存在なんだな?」

そのクライドの確認に頷く映司。すると二人に気付いたのか、ショッカー戦闘員達が一斉に映司達へ向かっていく。それを見て映司はクライドを守るように動いた。

「ハラオウンさんは逃げてください。まだ本調子じゃないですよね?」

「そうかもしれないが……君はどうする?」

「大丈夫ですよ。俺、こう見えても少しは戦えますから。さ、早くっ!」

そうクライドへ告げ、映司は戦闘員達へ立ち向かう。ヤミーほど

ではないが、数を頼みに襲ってくる戦闘員達に苦戦する映司。それでもクライドを守るため懸命に戦う。
その背を見つめ、クライドはある決意を固めた。それは自分も戦う事。魔法の事を教え、自分の正体を話す事だ。そこには局員としてではなく、一人の人として映司の厚意に応えたいとのクライドの気持ちがある。

クライドは懐に手を伸ばすとそこから何かを取り出す。それは待機状態のデバイス。彼の使っているストレージデバイスだ。それは、彼が愛用している物。更にその外観はＳ２Ｕに酷似していた。
クロノが愛用するＳ２Ｕ。その原型となった物がそれだった。つまり、Ｓ２Ｕはクライドの事を意識した遺品のような意味合いもあったのだ。手にしたデバイスを展開し、クライドは叫んだ。

「火野君、伏せろ！」

その瞬間、複数の魔力弾が映司を取り囲む戦闘員達へ襲い掛かった。それは螺旋を描くように彼らを貫き、その意識を奪っていく。それを地面に伏せながら眺め、映司は言葉を失っていた。十人以上いた戦闘員達をクライドは一人で倒してみせたのだ。
クライドは魔力弾の制御を終えると、倒れる戦闘員達を見つめて息を吐く。そんな彼を映司は不思議に思いながらも、立ち上がって笑顔で礼を述べた。

「ありがとうございます。おかげで助かりました」

「いや、君は私を守ろうとしてくれたじゃないか。なら、礼を言う必要はない」

「それでもですよって……これじゃさっきの逆ですね」

映司が最初のやり取りを思い出して笑った。それにクライドもつられるように笑う。そして、とりあえずその場を離れる事にし、二人は急いで動き出した。その道中、映司はクライドから驚くべき話を聞かされる。

魔法世界の存在とここへ来る事になっただろう直前の出来事だ。だが、それを聞いて映司はクライドの異常さを納得していた。既にグリードと出会い、時を駆ける電車を知った彼からすれば、魔法も驚きこそすれ疑う事は無かったのだ。

そんな映司からクライドへ話されたのは、あの四十年前へ行った事から始まる思い出だ。そのあまりの内容にクライドは言葉を失った。ロストロギアも真っ青の存在である時間を越える電車。

更に仮面ライダーとショッカーの戦い。本来ならばいないはずの存在が過去に関る事がもたらす可能性とその結末。それを聞いてクライドは映司の凄さを知った。一人でも世界を守ろうと戦った仮面ライダー。それが自分の目の前にいる青年の歩いた道だったからだ。

ある程度離れたところで二人は足を止め、休憩するべく座り込んだ。体力的な疲労もあるが、何よりも精神的な疲労が強い。映司はショッカー出現によるもの。クライドはそれもさる事ながら、映司から聞いた話の大きさによるものだ。

「火野君、君に聞きたい事があるんだ」

「何ですか？」

クライドの言葉に映司は普通の声で応じる。だが、クライドの尋ねたい事は彼にも何となく理解出来ていた。きっとオーズの事を聞かれるはず。そう思っていたのだから。

――どうしてあの時変身と言うものをしなかったんだい？　そうすれば、彼らに苦戦する事も無かったんじゃないか？

――実は、俺はもう変身出来ないんです。オーズの力はコアメダルって言うのがないと使えなくって……

軽く笑って映司は変身能力を失うに至った顛末を簡単に話す。それをクライドは聞きながら、そこにある真理を見る事になる。欲望にまつわる物語。それは結果的には終わりを望む者と終わりを望まない者との戦いだった。

世界に美しい終末をと考え、全てを破滅させようとした男がいた。世界を終わらせたくないと考え、全てを守り続けた男がいた。その主義主張がぶつかり合い、結果守りたいと思った欲望が勝った。

欲望とは決して醜いものではない。愛も夢も全てが欲望から生まれている。ならば、欲望を汚すのも綺麗にするのもその者自身。クライドはそんな事を映司の語る話から感じていた。

「……で、無事なコアメダルは無くなって、俺にはこれだけが残されたんです」

そう締め括って映司はクライドへ割れたタカメダルを見せた。それを見つめる映司の目が遠いものに見え、クライドはタカメダルへ視線を向けた。かつて映司を支えた敵だったはずの存在。それがそのメダルの正体。

そう聞いてもクライドには信じられなかった。映司の話が、ではない。その敵だったとの部分だ。映司の語り口は、どこから聞いても友人かそれに近い者を話すものだったからだ。

（アンク、か。きっと火野君にとって大切な存在となったんだろう。敵対するはずの者とも手を取り合えるか……彼は本当に優しい心の持ち主という事か）

（ハラオウンさん、凄いよなぁ。俺だったら、目が覚めたら知らない場所なんて戸惑うだけだろうし……あの話を聞いてここまで冷静でいられるか自信ないよ。しかも、みんなを守るために自分を犠牲にしようとしたなんて……）

クライドが映司に感心するのとは別に、彼もそんなクライドの態度へ凄さを感じていた。確かに映司も自身を犠牲にするような行動を取り続けた。それでも、それは死ぬかもしれない状況であって、死ぬ事が確定している状況ではない。

それをクライドは迷う事無く自分を犠牲に出来た。それが映司に強い尊敬の念を抱かせた。そこにクライド自身の事も考えてあったからだ。クライドは、愛する家族などへ被害が出る事を防ぐためにその命を差し出せた。それは彼自身の欲望が為し得た行動だったからだ。

あのグリードとの戦いの終盤まで自分の欲望を思い出せなかった映司。そのため、彼は自身の事を何とも思っていないのかと思う程に、他者を助けるためと無茶を行った。ある男はその頃の彼を見てこう言った。

映司は自分の事を大事にしていない。自身の命をまるで無価値だとばかりに行動していると。一言で言えば、人として枯れている。そう評したのだ。だからこそ、クライドの行動は映司には眩しいものだったのだ。

「……ハラオウンさんは、そのミッドチルダってところへ帰る事は出来るんですか？」

「転送魔法を使えばおそらく」

「じゃ、すぐに帰った方がいいです。地球ってハラオウンさん達が戦う事は難しい場所なんですよね？」

映司のその言葉にクライドは黙り込んだ。管理外である地球に管理局は介入する事が難しい。だが、映司がそれを建前に自分を逃がそうとしている事を理解したからだ。

それでも、実際ショッカーの姿を見たクライドからすれば黙って帰る事は出来なかった。映司の話から考えれば、相手は滅んだはずの組織。しかも、彼らと戦うはずの仮面ライダーはその力を失っているのだから。

「火野君、確かに地球は管理局が干渉する事は難しい場所だ。だが……」

「ハラオウンさんの気持ちは嬉しいです。でも、お子さんや奥さんがいるじゃないですか。折角助かったんです。早く帰って喜ばせてあげた方がいいですよ」

「火野君……」

映司の挙げた存在にクライドは気持ちがぐらつく。そして、映司の気遣いに言葉が続かない。自分の住む世界の事を考えれば、魔法を使えるクライドの力はあった方がいい。それでも、映司は奇跡的に生き残ったクライドを巻き込む事はしたくなかった。

それをクライドも分かるからこそ言葉がない。もし自分が逆の立場ならばどうするか。それを考えれば、映司の気持ちは彼にも痛い程分かるのだから。

実は映司にはショッカーと戦ってくれるだろう仮面ライダーに心当たりがあった。それは、グリードとの戦いを共にしたバースとガラという錬金術師と戦った際に出会ったフォーゼだ。

しかし、フォーゼはともかくバースは少し問題があった。それはセルメダルを使って戦う事。既にグリードは消え、セルメダルを増やす事は出来ない以上、その力を使い続けるのは厳しいものがあるのだ。

（でも、それをハラオウンさんへ言うのはな……それを聞いたら余計地球に残るって言いそうだし）

そう、地球を守る仮面ライダーがいる。それを教えられて、ならばと安心して帰るようなクライドではない。むしろ逆だ。ならその仮面ライダーと共に戦おうとするはず。映司はそう読んでいた。

しばらく、無言で見つめ合う二人。冷たい砂漠の風だけが音を立てる。クライドを危険から遠ざけたい映司。そんな映司へ協力したいクライド。互いが互いの気持ちを理解するからこそ、それ以上何も言えない。

やがて、クライドが何か諦めたように息を吐いた。そして映司へ向かってミッドへ帰る事を告げる。それに笑顔を見せる映司へ、クライドは真剣な眼差しを向けた。

――だが火野君、私は必ず戻ってくる。管理局としても、ショッカーの存在は脅威だ。見過ごす事は出来ない。

――ハラオウンさん……

――約束する。絶対に管理局は……いや私は地球人を見捨てたり

しない。管理外も何も関係ない。同じ次元世界を生きる仲間だからだ。

そう言い切ってクライドはデバイスを起動させ、転送魔法の準備に入る。映司はそのクライドの言葉に嬉しくなると同時に、自分の予想以上の思考を聞いて言葉が無かった。やはりどちらにしても戦うのだなと、そう思って。

映司の視線の先では、クライドが転送魔法の準備を終えていた。やや真剣な表情でそれを見送ろうとする映司だったが、そこで予想外の出来事が起こる。

「……何故だ？　座標なども合っている。なのに何故転送出来ない……？」

「どうしたんですか？」

「いや、ミッドへの移動が出来ないんだ。何度やってもエラーが出る」

そのクライドの言葉に映司が何かを言おうとした時だ。二人の背後から謎の声がしたのは。

――――当然だ。ここにはミッドチルダとやらは存在しないからな。

その声に振り向く二人。そこには虎の怪人がいた。背中に砲身をつけた存在が。その異形に息を呑むクライド。映司はそれがグリード達と同じぐらいの存在と感じ、身構えるようにそれを見つめた。

「報告にあった魔導師とは貴様か。まさかこんな世界に飛ばされている奴がいるとはな」

「こんな世界……？」

「ああ。ここはそいつが知る地球じゃない。まったく違う平行世界だ」

怪人――――タイガーロイドの言葉にクライドが驚きを浮かべる。平行世界との言葉から転送魔法が出来ない理由を理解したからだ。動揺するクライドを横目にし、映司は代わりとばかりに一歩前に出る。そして、目の前のタイガーロイドへ問いかけた。

「それで、お前はショッカーの手下って事でいいのかな。ここへ来た目的は何？」

「ふん、調子に乗るなオーズ。質問する前に変身したらどうだ。俺に殺されるつもりなら止めはしないが」

「悪いけど俺、もう変身出来ないんだ。だから、殺される前に目的ぐらい聞いておこうかなって」

「……本当か嘘か分からんが変わった奴だ。いいだろう、教えてやる。それと俺達の名はグランショッカーだ。ショッカーなどという滅んだ組織じゃない。そしてここへ来た目的は一つ。こう言えばお前は分かるだろう」

それに映司はやはりと思い、小さく頷く。名前が似ている事だけでも推測が出来た。だとすれば、相手の狙いは自分しかない。そう、仮面ライダーオーズの抹殺。映司の表情からタイガーロイドもそれを理解したと悟り、背中の砲身をゆっくり動かした。

「もう一度だけチャンスをやる。本当に変身しないのか」

「だからホントに出来ないんだって」

「……そうか」

「ああ。俺だって、出来るならすぐに変身してお前と戦ってる」

少しだけ見つめ合う両者。すると、タイガーロイドも映司の言葉を信じる事にしたのか、つまらないとばかりに舌打ちした。それに意識を向ける事無く、映司は相手の砲身を見つめてある事を思い付き、こんな提案を持ちかけた。

――あ、出来れば苦しまずに死ねるような一番凄い攻撃にしてくれる？

――……本当に変わった奴だ。ならば望み通りにしてやる。これで最後だ……仮面ライダーオーズ。

そう告げると、タイガーロイドは砲身を完全に映司へ向けた。そこへエネルギーが充填されていく。それを見つめ、映司はクライドへ小声で告げた。魔法を使って相手の砲身を攻撃して欲しいと。

それにクライドは映司の狙いを理解し、無言で頷いた。飛行魔法を使って相手の背後へ回り、映司へ攻撃させる前にその手段を破壊しよう。そう考えたクライドは、映司が生き残る事を諦めてない事を悟り、小さく息を吐いた。

（大したものだ。相手から情報を何とか引き出すために不利な事を敢えて明かすだけじゃない。会話で相手を自分へ有利になるように誘導するとはな）

クライドは映司の考えの裏まで読み、それを確実なものにするべく飛行魔法を展開した。そして、タイガーロイドの背後へ素早く移動すると同時に、その無防備な砲身へ魔法を叩き込もうとして――

「「っ？！」」

「その程度で裏をかけると思うな」

タイガーロイドが向きを変えて背後のクライドを捉えたのだ。そこには恐ろしい程のエネルギーが充填されている。それを受ければ、サゴーゾとなったオーズでも痛手を負う事は間違い無い。それを見てクライドが取った行動は――笑みを見せる事だった。

それに微かな違和感を覚えるタイガーロイド。達観の笑みかとも思ったのだが、そうではない事を彼自身が感じている。クライドのそれは諦めた者の笑みではなかったのだ。

そして、彼がその意味を理解する前にその体が軽く揺れた。映司が体当たりを食らわせたのだ。

（これで体勢が崩せる事を期待したか。つまらん事を考えるものだ）

「無駄な事を……見てろ。先にこいつから消してやる」

内心で馬鹿にしつつ、映司に構わず砲身からエネルギーを放つタイガーロイド。しかし、それを待っていたかのようにクライドの姿が消える。

「何っ？！」

短距離転送魔法。それを使い砲撃を回避するクライド。その結果、最大出力砲撃の反動のためにタイガーロイドはそこから動けなくなる。それを見て、映司はその場から離れつつ大声で叫んだ。

「今ですっ！」

「分かっている！」

”ブレイズキャノン”

それに答えたのはタイガーロイドの頭上で浮かぶクライドだった。タイガーロイドの真上を陣取り、ブレイズキャノンをその砲身へ叩き込んだのだ。クライドは、映司がタイガーロイドへ頼んだ内容からこの展開を組み立てていた。

最大出力で攻撃させる事で身動きを取れなくし、そこを狙って攻撃の要となる砲身を破壊する。そのために映司は転送魔法が使えるクライドを頼りにしたのだ。万一相手に何か策があるとしても、魔法を使える彼ならばそれを確実にやってのけてくれると。

クライドの放った魔法がタイガーロイドの砲身へ直撃し、放っていたエネルギーと干渉し合って爆発を起こす。その衝撃から飛ばされる映司を見て、クライドは急いで助けに向かう。そして、映司を空中で受け止めると静かに下ろして、クライドは立ち上る煙を見つめた。

「やったか？」

「そうあって欲しいですけど……」

爆発の中心点を注視する二人。徐々に煙が晴れていき、タイガー

ロイドの姿が現れる。しかし、その姿は最初とは違っていた。砲身は完全に砕け、体中の毛が焦げていたのだ。それだけではなく、傷もあちこちに出来ている。

「虫けらが……やってくれたな。だが、もう同じ事は出来んぞっ！」

叫びと共に腕が微かに光る。それが合図となりタイガーロイドの爪が伸びた。それを見ても映司もクライドも怯む事無く構えた。

「火野君、私は空から攻撃する」

「分かりました。俺は何とかあいつの隙を作ってみます」

それを合図に二人も動き出す。勝てる可能性は少ない。それでもどちらも諦めてはいなかった。襲い掛かる虎の爪。その恐怖に立ち向かうように二人は戦う。生き残るために……

地面に流れる鮮血。それはすぐに砂へ吸収されていく。タイガーロイドは眼前に倒れる映司とクライドを眺め、ようやく溜飲が下がるのを感じていた。いくら魔法が使えると言ってもクライドは人間だ。映司はグリードやヤミーと戦った事があるとはいえ、オーズになれない時点で無力。

砲身を失ったタイガーロイドであろうと、そんな二人を相手にする事は造作もない事と言えたのだ。それでもすぐに殺す事はしなかった。じわりじわりといたぶり、絶望と恐怖を与えたかったのだ。自分へ少なくない痛手を負わせた事に対するお返しも兼ねて。

「さて、そろそろ終わりにするか」

もう僅かにも動かなくなった二人を見つめ、タイガーロイドはゆっくりと近付いていく。そして映司を見下ろすと、その顔に爪を突き当てる。その時、クライドが小さく声を出した。

「ま、待て……」

「安心しろ。お前もすぐに後を負わせてやる」

「もう、彼は変身出来ない。なら、殺す事はないだろう」

「甘いな。さっきの事を忘れたか。こいつら仮面ライダーは変身出来なくても厄介なんだ。そして、こいつもいつか必ず変身能力を取り戻す。くだらない人類の自由と平和とやらを守るためにな」

クライドの言葉にタイガーロイドはそう返すと映司の顔から爪を一旦離す。だが、それは一度距離を取ったにすぎない。映司へ迫る爪。次の瞬間、爪が体を突き刺した。

流れる鮮血。それは尋常な量ではない。致命傷。そう呼んでもいいぐらいの傷。タイガーロイドは自身の爪に刺さる人物を見つめ、不機嫌そうに声を出す。

「何のつもりだ」

その相手――クライドは映司を庇うように爪をその身に受けていた。

「火野君は殺させない。彼がいつか変身出来るようになると言うの

なら……仮面ライダーはこの世界の希望だ」

「その代わりに貴様が死ぬというのか？　そんな事をしても無意味だ。貴様の後で奴も死ぬ。偽善もここまでくると笑えるな」

「笑いたいのなら笑えばいい。どうせ元々失っていたはずの命だ。それを誰かが少しでも生き延びるように使う。この使い方は間違っていない。お前にはそれが分からないだろうがな」

口から血を流しながら笑ってみせるクライド。それが妙に気に障り、タイガーロイドは爪を引き抜いた。その瞬間、クライドの体が崩れ落ちるように倒れる。その音で映司は意識を取り戻した。

視界に映るのは大量の血を流して倒れるクライドの姿と、それを見下ろしているタイガーロイド。そして、その爪が血で濡れている事を見るや、映司は状況を理解して痛む体を動かしてクライドへ近寄った。

「ハラオウンさん！　ハラオウンさんっ！」

「……火野、君」

「どうして、どうしてハラオウンさんが……」

「いいんだ。私は……本来死んでいるはずだったのだから」

映司へ小さく笑ってみせるクライド。それが映司へ彼がもう長くない事を告げていた。滲む視界のまま、映司はその手を握り締めて叫ぶ。

――駄目ですよ！　死んじゃ駄目ですっ！　奥さんと子供に会いたくないんですかっ！！

――そう、だった……ね。リンディや……クロノに……会いたい……

そこで目を閉じるクライド。映司はその光景に一瞬息を呑む。また掴めなくなる。自分はどこまでも届く腕を手に入れたはずだったのに。そんな気持ちが映司の中に生まれる。

だが、すぐにある事を思い出して映司はポケットを探った。そこにあるのはアンクの割れたコアメダル。かつて、アンクは瀕死の人間へ憑依してその命を繋いでいた事がある。それを思い出し、映司は万が一の可能性に賭けた。

（アンク、頼むっ！　ハラオウンさんの事、助けてくれ！）

映司はそう願ってそのメダルをクライドの傷口へ押し当てた。それは、静かにクライドの体へ入り込む。しかし、それを映司が気付く事は無かった。何故なら、彼はメダルをクライドの傷口へ押し当てた瞬間、タイガーロイドにその体を掴み上げられたからだ。

「別れは済ませたか？　次は貴様の番だ」

「生憎だけど、俺、諦め悪いんだ」

「そうだろうな。仮面ライダーはそういう奴らだ。だが、貴様はここで終わりだ！」

掴まれて身動き出来ないという絶対的に不利な状況にも関らず、

映司はその表情から凛々しさを無くす事は無かった。それにタイガーロイドは不機嫌な雰囲気を返すものの、それも終わりと思って爪を突き出した。

しかし、それが映司へ届く事は無かった。その爪を横から掴む者がいたからだ。その乱入者に驚くタイガーロイド。そんな相手へ乱入者はその拳を顔面目掛け繰り出した。

それで映司への力が弱まり、タイガーロイドの体を彼は両足で思いっきり蹴り飛ばした。それで拘束を振り払った映司は驚く事もなく、ただ黙ってその相手へ視線を向けた。

――目覚めた早々揉め事とはなぁ。相変わらずだな、お前は。

――お前に言われたくないよ。割れても誰かの体を使えばホントに復活するなんてね。

そこにいたのはクライドだった。だが、その雰囲気が違う。どこか人を寄せ付けない空気感。鋭い目つきと茶髪。何より、その声が違った。クライドの落ち着きがある声ではなく、やや棘があるような声だったのだ。

「な、何故だ。どうして貴様が動ける……」

瀕死だったはずのクライドが平然と動いている事。それに疑問が消えないタイガーロイドだったが、そんな相手を見て、アンクは一瞬だけ顔をしかめた。

（何だ、この感じは……？　ヤミーじゃないがどこかで確かに……）

自分のグリードとしての感覚が告げるものに内心戸惑うアンク。

しかし、それを表情には欠片として見せずに力強く告げた。

「はっ！　どうしてそれをわざわざお前に教える必要がある。とりあえず、さっさと失せろ！」

「アンク、あまり無茶するなよ。ハラオウンさん、本当に危ないところだったんだ」

「そんな事俺が知るか。まぁ、精々大切に扱ってやる。まだ死なれちゃ困るんでな」

（こいつの欲望は大事な相手に会いたいって事だった。それが俺の欲望と作用して復活出来たようなもんだろからな……）

そう思いながらアンクは右腕を触る。それが彼の癖だと知る映司は、懐かしさを感じて小さく笑った。しかし、それをすぐに消して眼前のタイガーロイドを睨む。

「アンク、その棒みたいなの使って戦えるか？　それで魔法ってものが使えるんだ」

「あ？　魔法だと？　寝ぼけてんのか？」

「本当なんだって！」

「チッ！　とにかく行くぞ！」

映司の言葉に従う訳ではないが、アンクはとりあえずとデバイスを拾ってタイガーロイドへ向かっていく。映司もそれに応じて走り出した。それに対してタイガーロイドも応戦する。だが、先程まで

のクライドと違うアンクの動きに惑わされ、戸惑いを隠せない。
それでもやはり決め手に欠ける映司とアンク。デバイスの使い方が分からず苛立ちを感じていたアンクだったが、咄嗟に攻撃を防ごうと使った際防御魔法を展開出来た。その感覚を覚え、アンクは直感的に魔法という物を理解しようとしていた。

（こいつは使う奴の思考を読むのか。それをキッカケに力を発現させるらしいな。なら、難しい事を考える必要はなさそうだ。だが……）

そう考え、アンクは視線を少しだけ映司へ動かす。映司はタイガーロイドを相手に決死の覚悟で立ち向かっていた。最初は何故オーズにならないのかと疑問を抱いたアンクだったが、その理由を何となく理解したのだ。
コアメダルが無くなったのだろうと。あの最後の戦い。そこで彼も見たのだ。あの真木が変化したグリードから生まれた穴。そこへオーズの体から抜け出た紫のコアメダルや自分のコアメダルまでも吸い込まれていったのを。

このままでは映司が邪魔でしかない。しかし、自分も戦力としては貧弱。これでは勝つ事は難しい。そう思った時だ。二人の前に白みがかったオーロラが出現したのは。
それに戸惑う映司達。すると、そこから二人へ背を向けて何かが現れた。黒い姿の怪物。だが、不思議と映司には敵とは思えなかった。その相手は、困惑するタイガーロイドを見て何かを腰へ着けた。

それが瞬時にベルトへと変わり、その謎の存在は構えた。それが映司には、自分がオーズとなる際に取った構えに近い印象を与える。そして、その存在は声と共にベルトのバックル部分へ手を動かす。

「変身っ！」

”Ｔｕｒｎ　Ｕｐ”

それと共に出現する青い壁のようなもの。それは、オリハルコンエレメントと呼ばれるゲート。それがタイガーロイドを弾き飛ばす。そして、そのゲートへ黒い姿が走る。それを抜けた相手は、青い体と赤い目の存在へと変わった。

それを見て映司は声を失った。彼はその相手を知っていたのだ。あのショッカーとの戦い。その決戦へ現れ、彼を援護してくれた仮面ライダー。その一人だったのだから。

「アンク、あれって！？」

「黙ってろ！　見れば分かる」

驚きと疑問を覚えている映司と状況を把握しようとしているアンク。そんな二人の前で突然現れた存在――ブレイドはタイガーロイドを相手に醒剣ブレイラウザーを振るって戦っていた。

「ブレイドだと！？　何故ここに……」

「答えろ！　何故お前達グランショッカーは、俺と始を狙うんだ！」

「ふんっ！　その理由は貴様が一番よく分かってるはずじゃないのか？」

彼は、まずあるアンデッドと戦っていた。それは彼の仲間であった橘朔也のミスが発端。カメレオンアンデッドの復活を察知した彼は、苦戦する仲間達と合流してブレイドとなりアンデッドを封印し

たのだ。
　しかし、その戦いを終えた彼はそこを立ち去る事が出来なかった。突如として出現した灰色のオーロラ。そこから現れた怪人達が襲い掛かったからだ。

　四人の仮面ライダーは、それらグランショッカーを名乗る怪人達を何とか撃破した。しかし、アンデッドではない相手の襲撃に困惑していたところへあのモノリスが出現し、彼と仲間の一人である相川始へ告げたのだ。
　それは、怪人達が彼と始を狙っている事。その目的まで教えてくれなかったが、それを聞いて彼は決意したのだ。自分がグランショッカーと戦う事を。それを後押しするように出現したオーロラへ彼は飛び込み、ここへやってきたのだ。仲間達へ後を託して。

――橘さん、後はお願いします。また奴らが現れるかもしれません。睦月、お前は出来るならその時に橘さんを助けてやってくれ。

――剣崎……ああ、任せろ。

――分かりました。剣崎さんも気をつけて。

――始……俺は。

――剣崎、必ず戻ってこい。俺も運命と戦う。お前と同じだ。絶対に負けないと誓う。だから……絶対に戻ってこいっ！

　最後に自分の言葉を遮って送り出してくれた始の言葉。それを噛み締め、ブレイドはタイガーロイド相手に奮戦する。そう、ブレイドはどこかで理解している。自身と始が狙われる理由を。
　バトルファイトの勝者が得られる権利。それを何者かが狙ってい

るのだろうと。万能の力を得る事が出来るそれ。かつて人でありながら、それを狙いアンデッドと化した者がいたのだ。

（グランショッカーの目的がもし天王寺理事長と同じだとすれば、奴らは人造アンデッドの技術を持っているのかもしれない！）

「お前達のような奴らの好きにはさせない！　俺と始は、お前達にも運命にも決して屈しないっ！」

既に映司達によって砲身を使用不可にされたタイガーロイドでは、ブレイドの相手は厳しいとしか言いようがない。徐々に追い詰められていくタイガーロイド。爪で反撃するも、ブレイドのオリハルコンプラチナの装甲には痛手を負わせる事は厳しいのだ。

逆にブレイラウザーによる反撃でたじろき、ブレイドからタイガーロイドは離れた。それを見て、ブレイドは一気に決めるべくブレイラウザーを展開する。

そして、そこから二枚のカードを取り出す。スペードの5と6。キックとサンダーの効果を持つ物だ。それらを組み合わせる事で、彼は強力な一撃を放つ事が出来るようになる。手にしたカードをブレイラウザーにラウズ――読み込ませるブレイド。その瞬間、ブレイラウザーから機械音声が響く。

”サンダー、キック”

「これでっ！」

”ライトニングブラスト”

機械音声と共にブレイドの体へカードの力が宿っていく。それを

見つめ、映司とアンクは悟る。今から放つのは決め技だと。力強く跳び上がるブレイド。その体勢は蹴りの姿勢。ふらつくタイガーロイドへ放たれる雷の蹴撃。それは、ブレイドのライダーキック。

「あぁぁぁぁぁっ！！」

ライトニングブラストがタイガーロイドへ直撃する。その威力に大きく吹き飛ばされるタイガーロイド。だが、それでもまだ死んでいない。辛うじて立ち上がったのだ。それを見て驚くブレイドと映司。

しかし、そんなタイガーロイドへ素早く近付く者がいた。アンクだ。彼は満身創痍のタイガーロイドへ手を突き入れると、そこから何かを取り出した。それと同時に伸びていた爪が元に戻る。

「っ？！」

映司は眼前の光景に息を呑んだ。アンクの手に握られていたのは、虎の絵が刻まれたコアメダルだったのだ。そして気付く。タイガーロイドの爪が伸びた瞬間の光景を。それが自身がオーズとしてトラメダルの力を使う際と酷似していた事に。

「やはりな。ま、これで少しはマシになるか」

「き、貴様……どうしてそれを」

「お前から微かに感じたんだよ。グリードに近いものをな」

アンクはタイガーロイドから嫌悪感と親近感の両方を感じたのだ。その感覚を何から感じているのかを理解し、彼はその要素に当たりをつけた。だが、それを確かめるには相手へ近付くしかない。

それが今の自分では難しい。だからこそアンクは待っていたのだ。その体が弱り、身動きを取れない状態となるのを。自身の推測を確かめられるその機会を。

「これをどこで手に入れたか知らないが感謝してやる。有難く思え」

アンクの言葉にタイガーロイドがメダルを取り返そうと動くも、それを阻止するように彼は素早く距離を取る。悔しそうに唸るタイガーロイドを見て、アンクはほくそ笑んだ。

「馬鹿が。今の状態じゃ俺にも勝てない事ぐらい分かるだろ。それだけ派手にやられちゃな」

そう告げて手にしたコアメダルを自身の中へ入れるアンク。そして、更に弱ったタイガーロイドへ手にしたデバイスを向けた。

「喰らえっ！」

”ブレイズキャノン”

放たれる炎を纏った赤の魔力光。それがタイガーロイドを転がす。だが、相手は出現させただろうオーロラへとそのまま逃げるように消えた。それを慌てて追いかけようとするブレイドだったが、オーロラはそれを阻止するように消える。

その場で立ち尽くし、沈黙するブレイド。その拳は悔しさからか強く握られている。映司はそんな彼を見つめ、静かに近付いた。それに気付いたのか、ブレイドも身に着けたブレイバックルを外した。そこには異形の存在がいた。ジョーカーと呼ばれるアンデッドだ。

どこかグリードのウヴァを連想させるなと思いながら、映司はそ

れでも恐怖も怯えもなく笑顔で頭を下げた。それに相手の方が戸惑った。まさか今の姿を見て笑顔を他人が返してくれると思わなかったからだろう。

「ありがとうございます。また助けてもらいましたね」

「また？　……悪い。俺は会った覚えがないんだけど」

「あ、その……とにかく、助けてくれてありがとうございました」

ジョーカーへ頭を下げる映司と、そんな彼の反応に益々困惑する相手。そんな二人へアンクが歩み寄る。その顔はどこか嫌そうだ。映司と同じでジョーカーにウヴァの姿を見ているからかもしれない。

「おい、お前は一体何だ。そんな姿をしてるとこ見ると、化物なんだろうがな」

「アンクっ！　助けてくれた人に何て事言うんだ！　……すみません。気にしないでください」

アンクの言葉に怒りをぶつける映司。それと同時にジョーカーへ頭を下げて謝罪する事も忘れない。

「おい映司。お前、本気でそれ言ってんのか？　どう見たって」

「俺だって似たような事になってた時がある。それでも、この人みたいに誰かを守って戦えてた。それでも人じゃないって言うのか」

そこで剣呑な雰囲気になる映司とアンク。それを感じ取ってジョーカーは少し気まずさを覚え、姿を変えた。そこには優しそうな一

人の青年がいた。その変化に軽い驚きを見せる二人へ、彼は戸惑いを浮かべて会話を切り出した。

「その……喧嘩は止めてくれ。それと、ありがとう。さっきの言葉、かなり嬉しかった」

そう二人の間へ割って入るように告げると、彼は映司へ嬉しそうに笑みを見せた。それに二人の剣呑な空気も消えたのを感じ、彼は小さく息を吐いた。

「それで……事情はよく分からないけど、そっちもグランショッカーと戦ってるって事でいいのか？」

「ええ。俺、火野映司って言います。で、こっちがアンク」

「そうか。俺は剣崎、剣崎一真だ。よろしく、火……名前で呼んだ方がいいのか？」

アンクの言っていた呼び方を思い出し、そう問いかける剣崎。それに好ましいものを感じて、映司は笑顔を返した。

「どっちでもいいですよ。好きに呼んでください」

「なら……改めてよろしく、映司」

「こちらこそよろしくお願いします、剣崎さん」

そこで簡単なお互いの話をしようとする映司と剣崎だったが、それは出来ずに終わる。彼らの目の前に白みがかったオーロラが出現したのだ。

「……あれ、剣崎さんが通ってきたオーロラですね」

「ああ。きっとあれを通ればさっきの奴がいる場所へ行けるはずだ」

凛々しい表情でオーロラを見つめて話す二人。だが、そんな彼らと違いアンクは一人それについて気付いた事があった。

「おい、あの虎が逃げ込んだのと色が違うぞ。ホントに大丈夫なんだろうな？」

「そう言われれば……どうして色が違うんです？」

「俺にも分からない。でもあのオーロラは、何となく仮面ライダーを必要としてる人の元へ通じてる気がする。それが結果的にグランショッカーが暴れてる場所に繋がってるんだ」

剣崎の言葉に映司も頷き、オーロラへ足を踏み入れようとした瞬間、それをアンクが止めた。生身の人間では危険かもしれないと感じたからだ。それに剣崎も一理あると思い、ある事を思いついて手にしたブレイバックルを映司へ差し出した。

これを使って変身すればいいと告げたのだ。剣崎は再びジョーカーの姿へ変わり、自分はこれで大丈夫だと言って。アンクは、グランショッカーがコアメダルを所持している可能性を指摘した。

もしその中に自分のメダルがあれば、割れたメダル代わりが出来る。それに、アンクはクライドの記憶を辿った事でロストロギアの事を知った。故に魔法世界へ行く事が出来れば、もしかするとこの体無しでも動けるように出来るかもしれないと考え、オーロラを通

る事を決めたのだ。
　現在もアンクのコアは割れたまま。それをクライドが死に際に抱いた強い欲望で繋ぎ止めて一枚にしている状態なのだ。だから、ロストロギアの中からそれを修復出来る物を見つけ出し、本当の復活を目指す気でいた。

　更にアンクは、どこかでこの体に治療を受けさせればクライドの容態はよりマシになるとの考えも映司へ告げたのだ。今はアンクの力で死んではいないものの、やはり深手を負った事は響いている。
　故にどこか動きが鈍いとアンクは告げた。オーロラ通過については、手にしたデバイスで防御魔法を周囲に展開しながら歩く事で確保するとし、映司の方を見た。

「まぁお前は別に来なくてもいい。今のお前は正直使えないからなぁ。あれを置いて早く帰れ。俺がメダルを手に入れたら、他の使えるバカを見つけてオーズにして利用するためにな。お前は伊達達にでも守ってもらえ」

　行動を決めかねている映司へアンクはそう言った。それが自分へのせめてもの思いやりだろうと察し、映司は差し出されたブレイバックルを見つめ真剣に悩んだ。
　そこへ剣崎はブレイバックルを使う事の危険性を告げた。それらを話し終え、彼は映司へ告げる。後は自分達に任せて、この世界で待っていてくれて構わないと。そう言われた瞬間、映司は意を決してブレイバックルを手に取った。

　分かったのだ。剣崎も自分を心配していると。だから不安を煽る事を告げ、戦い――危険から身を引かせようとしているのだと。

「心配してくれてありがとうございます。でも、すみません。これ、

少し貸してもらいます。通った後でちゃんと返しますから」

（ハラオウンさんは俺達を見捨てないって言ってくれた。なら、俺もハラオウンさんを見捨てる訳にはいかない。それに……）

グランショッカーという存在。それがグリード以上の凶悪さを持っている事は理解出来た。ならば、自分は知らぬ存ぜぬが出来ない。オーズになれずとも戦う。何故ならば、かつて自分は仮面ライダーだったのだから。

その決意を胸にブレイバックルを装着する映司。ベルトへと瞬時に変わったのを受け、オーズになるための構えに近いものをする。そして、もう言う事はないだろうと思っていた言葉と共にそのバックルへ手を動かす。

「変身っ！」

”Ｔｕｒｎ　Ｕｐ”

ブレイドとなる映司。一時的とはいえ、グリード化さえ制御した経験を持つ彼。その体は、アンデッドとの融合係数も決して低くなかったのだろう。いや、そもそも暴走を抑え込めた事がそれを暗示していたのかもしれない。

こうしてブレイドとなった映司は、ジョーカーである剣崎とアンクに憑依されたクライドと共にオーロラへ足を踏み入れる。その彼らを夜風が送り出すように流れた。そんな中、映司はこう小さく呟く。

またあの腕を掴まないといけないと、どこか嬉しくも悲しく思いながら……

風が教えている。強さは自分の中にあると。そう、見ない振りも後ずさりも通り過ぎもしない。人として、自分として、彼らはそれをしたくないからだ。だがその先に待つのは、希望か絶望か。

ブレイドとオーズ。アンデッドの力を使うライダーとコアメダルの力を使うライダー。人ならざる道を他者のために選んだ者と、人ならざる道を他者のために選ばなかった者。そんな彼らがオーロラへ消えるのを見守るように佇む白い姿。それが小さく頷いて消えると、オーロラもまた消えるのだった……

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーー

クライド生存に始まる様々がご都合と思われるでしょうがご容赦を。
映司のブレイド変身は一応今回だけの予定です。ウェーイだけは迷ったので今回は見送りました。それで書いてもギャグに思われないなら、今後そうします。

オーズへの変身は当分お預けです。簡単に変身可能にはしたくないんです。敵からあっさりメダルを入手して、はい終わりとはさせません。理想はウルトラマンガイア最終回みたいな状況です。
これでサイドストーリーはおしまい。オールライダーはあの番外編と繋がっていきます。残る電王と真はサイド無しで登場です。

オールライダー編序章　始まりの君達へ

青年は周囲が住宅街なのを確認すると、その手元に一枚のカードを取り出した。それはシルエットだけしかないカード。ファイナルアタックライドと呼ばれる物だ。そこには、何かのエンブレムのようなシルエットがある。

「ここはこれだけしかないのか。ライダーはいないって事だな」

青年が何となしに呟いた言葉。それを聞いて驚きから脱したのはヴィヴィオだ。彼女はなのは達を通じて、五代達が突然自分達の世界へ現れた存在だと聞いていたのだ。そして、青年が呟いたライダーとの言葉を直感的に仮面ライダーの事を言っていると感じた。

「もしかしてお兄さんも仮面ライダーなのっ?!」

「何?」

「光太郎さんの世界の先輩ライダーですか!?　それとも別の世界のライダーですか!?」

「ちょっと待て。今、光太郎と言ったが、それは南光太郎の事か?」

興奮しながらヴィヴィオの告げた名前に青年は疑問符を浮かべた。今まで彼は一度行った世界へ戻った事は少ない。そのため、ヴィヴィオの告げた名前は意外なものだったのだ。青年の確認にヴィヴィオだけではなくイクスヴェリアも驚いて頷いた。

すると今度は二人の反応に青年が驚きを示した。ここが彼の一度来た世界なのかと思ったからだ。だが、だとしてもカードが一枚増

えるのは理解出来ないとばかりに考え込み、更なる確認をした。

「さっき別の世界のとも言ったが、ここには俺以外のライダーが来た事があるのか？」

「うん、龍騎とアギトとクウガ！」

その言葉を聞いた瞬間、青年が一番の驚きを見せた。彼の中ではてっきり青い体のライダーを告げられると思っていたのだ。彼にとっては例えるのが複雑な関係である存在の事を。

だが、告げられたのは予想外の名前。しかも三人の内、一人は彼にとっては関係の深いライダーだったのだ。故に青年は思わずヴィヴィオへ詰め寄るように近付いて問いかけた。

「クウガとは小野寺ユウスケの事か！？」

「えっ？　違うよー。五代さんだよ」

「五代？」

「はい、五代雄介さんです。失礼ですが、お名前を間違えて覚えていませんか？」

イクスヴェリアの問いかけに青年は否定の言葉を言おうとして、顎に手を当てて考え込み始めた。そして、一つの結論に辿り着く。そう、彼はもう同じ仮面ライダーに変身する者が複数いる事を経験していたのだ。

だから、この世界に来たクウガが自分の知るクウガとは違う事を理解した。なので、この事に関してはもう把握出来たので興味はない。だが、故に違う事へ興味が出る。

「成程な。大体分かった。じゃあ、お前達の知ってる南光太郎はＢＬＡＣＫか？　それともＲＸか？」

「昔はＢＬＡＣＫだったと聞きました」

「今はＲＸだよ～」

その二人の言葉で青年は自分の結論が間違っていない事を理解した。彼の知る光太郎には昔も今もないのだ。一人はＢＬＡＣＫでしかなく、もう一人はＲＸでしかないのだ。つまり、ここは自分が一度も来た事のない世界だとも把握出来た。

（俺の知らない世界の仮面ライダーが来た場所、か。しかも、どうやら崩壊していないところを見ると、世界がぶつかり合っての結果ではないようだ）

そんな風に一人納得する青年へ、ヴィヴィオとイクスヴェリアは何かを思い出して笑顔を浮かべて視線を彼へ向けた。

「あの、私、高町ヴィヴィオです」

「私は八神イクスヴェリアと申します」

「……士だ。門矢士。仮面ライダーディケイドとも言うな」

士がそう名乗ると、ヴィヴィオとイクスヴェリアが嬉しそうに笑った。そんな二人に士も小さく笑みを浮かべる。すると、そんな士の笑みに二人が更に笑顔を深めてあの仕草を向ける。それはサムズアップ。やっと士が笑った事に対するものだ。

だが、当然ながら士はその意味を知らない。故にその仕草へ不思議そうな表情を見せて、二人へ問いかけた。それは何だと。その言葉に二人が待ってましたとばかりに笑顔のままで告げた。

古代ローマで納得出来る、満足出来る行動をした者に与えられる仕草だと。それに士が感心したように頷くと、二人は息を合わせてこう締め括った。

――――これはその五代さんが教えてくれたんだ（です）

それに士は小さく「同じユウスケでもあいつとは違うな」と呟く。そこでイクスヴェリアはふと思い出したようにヴィヴィオへ告げた。士の話を聞くために家の中へ上げたらどうかと。それにヴィヴィオが名案とばかりに頷き、士へ視線を向けた。

士としても詳しい話を聞いておこうと思い、二人の申し出に応じる事にした。こうして三人は高町家へと入っていく。これが士とヴィヴィオとイクスヴェリアの出会いだった……

「「えっと……」」

ヴィヴィオ達が士と出会っていた頃、地球は海鳴の月村家にも一人の青年が現れていた。突然の事に少しだけ見詰め合っていたすずかと青年だったが、このままでは駄目だと思ったのだろう。

まずは状況を把握しようとした青年と相手の事を知ろうとしたすずかの声が綺麗に重なったのだ。その瞬間、二人の口が閉じる。そしてまるで鏡のように互いが相手へ先を促すように手を差し出した。

「「あ、そちらからどうぞ」」

再び沈黙。だが、今度はその表情が笑っていた。なので、すずかが自分からと思い自己紹介。

「私は月村すずかって言います。貴方のお名前を聞かせてくれませんか？」

「あ、えっと……僕は紅渡っていいます」

「渡さん、ですか。えっと、突然現れたのはどうしてですか？」

「話してもいいんですけど……凄いですね」

「何がですか？」

すずかは渡の問いかけに微笑みと共に答えた。その笑みに渡は今は無き想い人の面影を重ね、一瞬目を見開いた。しかし、すぐに立ち直るとこう告げる。こんな非日常の出来事へ平然と対応出来ている事に驚いていると。

すると、すずかはやっぱりと笑ってこう返した。実は、以前この家に居候していた人物も突然この街へ現れた人だったのだと。それに渡が小さく驚き、その相手の事を尋ねようとした瞬間、彼の服から何かが飛び出した。

「プハ～……渡、酷いぜ。俺達の事を忘れるなよ」

「そうですよ。酷いです～」

突然飛び出した二人に渡は慌てた。だが、すずかは少し驚いただけですぐに笑みを浮かべた。それに渡が意外そうな表情を返すと、すずかは視線で彼へ二人の相手するよう促した。それを受け、渡は視線を動かして告げる。

「その、ごめん。キバット、タツロット」

「ふふっ、可愛いね。渡さんの……家族かな？」

渡の服から飛び出してきたのはキバットバット三世とタツロットだ。そんな不思議な存在にもゴウラムを見た事のあるすずかはすぐに順応した。その声に二人はすずかへ視線を移し、揃って感嘆の声を上げた。

何せ、すずかは深窓の令嬢との表現がぴったりくる姿だったのだ。白いワンピースに白い帽子。それが庭のテーブルに座っているのだから、まるで絵画のようだった。

「渡、すげぇ美人じゃね～か！？」

「お名前は何て言うんですか！？」

「えっと……」

「クスッ……初めまして、キバット君、タツロット君。私は月村すずか。この家の主人です」

すずかの自己紹介に益々盛り上がる二人。そんな二人を窘める渡。そして、その光景を眺めて小さく微笑むすずか。五代がいなくなって以来の賑やかさが戻ってきたかもしれない。そんな風に感じながら、彼女は視線を上げた。

そこには、彼女の初恋相手が好きな青空が広がっている。その空を見つめてすずかはふと思った。それは、渡に関しての推測。

――もしかして、渡さんも仮面ライダーかな？

脳裏に甦る五代達の顔。それにどこか近い雰囲気を感じた事。突然現れたという共通点。更に不思議な存在であるキバットとタツロット。それらからすずかは密かに笑みを浮かべると、渡達へこう申し出た。

しばらくこの家で滞在しないかというものだ。それに遠慮する渡だったが、すずかが知り合いもいない場所でどうやって暮らすのかと悪戯っぽく尋ねると沈黙。キバットとタツロットはそんな彼へ有難く受けようと返す。

何しろすずかは自分達を平気で受け入れてくれるような相手。それを加味すれば、これ以上ない条件の滞在先だ。その言葉に渡はでもと迷いを見せる。そしてこう言った。見も知らない相手。それも男性を簡単に家に入れてはいけない。そうすずかへ告げたのだ。

それにすずかが一瞬呆気に取られ、苦笑しながら頷いた。しかし、すぐにこう言い切ったのだ。その手はサムズアップを形作っている。

「大丈夫。そんな事を言う渡さんなら、私も安心出来るから。それに、ここには私以外の住人もいるんです。家族同然のメイドが二人」

「おい、聞いたか？　メイドだってよ、メイド」

「聞きましたよ、先輩。渡さん、これはきっと神の思し召しです。ネオファンガイアとの戦いの傷を癒せって事ですよ」

「そうかなぁ……」

「渡、いいじゃねーか。少し休養しようぜ。あの結婚式の日から戦いっぱなしだしな」

キバットの言葉に渡も渋々ながら頷き、すずかへ頭を下げた。これからよろしくお願いしますと。それにすずかは笑顔で頷き、こう頼んだ。出来れば渡の話を聞かせて欲しいと。

かつて居た居候と似た感じがするから、是非包み隠さず話してくれると嬉しいとも告げて。それに渡はさすがにそれはと戸惑いを見せる。すると、すずがが小さく笑ってついてきて欲しいと歩き出した。

その後を追う渡達。すずかが渡達へ見せたのは五代やゴウラムと共に撮った写真。それに渡達は驚き、すずかはそんな彼らにこう告げた。だから、大抵の事には驚かないのだと。

その後、渡達は五代のように月村家に居候となる。彼らが話したファンガイアとの戦いの記憶に、すずかが仮面ライダーの在り方を見るのは言うまでもないだろう。こうして、渡はすずかと出会った。まだこの時は、共に人には言えぬ生まれを背負い、バイオリンを愛するとは知らずに……

スバルは言葉を失っていた。休暇中に街で起きたビル火災。そこに取り残された子供達がいるとの報告を聞き、近くに居たため全速力で現場へ駆けつけてみれば、そこには先客がいたのだ。

炎の中を子供二人を脇に抱えて走る真紅の鎧を着た鬼のような存在が。その手には一振りの剣らしきものまで所持している。それに

一瞬意識を奪われたのだ。まるで、昔のクウガと自分を思い出させるような光景に。すると、その存在もスバルに気付いたのだろう。子供達を抱えながらスバルへ向かって声を掛けたのだ。

「おい、ここは危ないぞ！　早く外に出ろ！」

「え……？　あっ！　私は救助の者です！」

「は？　救助？」

スバルの言葉に意外そうな声を出す鬼はその前で一度停止する。スバルはその声の雰囲気が五代と似ているような気がして、ふと笑みを浮かべる。それを見て鬼は不思議そうに首を傾げるも、ならばとスバルへ子供を一人手渡した。

出来るだけしっかりと抱えたいのだろう。そう考え、スバルがその子を受け取ると、その子の頭を優しく撫でたのだ。そしてこう柔らかくも力強い声で告げる。

「よく泣かずにここまで頑張ったな。後少しで安全な場所へ行けるから、もうちょっとだけ頑張れ」

「うんっ！」

「いい返事だ。じゃ、その子は頼むな、少女」

子供の声に嬉しそうに頷き、鬼はスバルへそう告げて再び走り出す。それにスバルも意識を切り替え、急いで走り出す。マッハキャリバーの速度に鬼は驚くも、負けるものかと速度を上げる。

それにスバルは益々五代達の姿を重ね、笑顔のまま鬼と並走する。やがて二人はビルから脱出し、子供達は無事親の元へ届けられた。

それを見つめ微笑むスバル。すると、鬼は顔だけを人に変化させた。

「やるな、少女」

「え？　あっ、顔だけ人になってる……」

スバルの言葉に鬼――――いや彼は苦笑した。そして、小さく咳払いをするとこう告げた。

「俺はヒビキ。よろしく」

シュッと崩した敬礼のような仕草をするヒビキ。それに五代のサムズアップを思い出し、懐かしく思いながらスバルは笑った。

「ヒビキさんですか。私はスバル、スバル・ナカジマって言います」

「成程ね。少女の名前から察すると、ここは日本でいいんだな？」

「いや、ミッドチルダですよ。で、あの……名前を」

「ミッドチルダ？　外国か……まいったなぁ。どうやっておやっさん達に連絡しようか。な、少女。ここって円は使える？」

「えっと……両替すれば多分。というか、名前で」

「あ、両替ね。その手があったか。いや、しかし少女が日本語出来て助かったよ。俺、英語出来ないからな」

スバルが何度も名前を呼んでもらおうとするのだが、それをわざととしか思えないぐらいの雰囲気でヒビキは言葉を返していく。周

囲はそんな二人を見てヒビキの格好に違和感を感じるものの、新種のバトルジャケットかと思って特に何か言う事無く過ぎていく。

やがて現場検証などをやってきた陸士隊へスバルは引継ぎを終え、ヒビキと共に歩き出した。スバルを日系人だと思っているヒビキは、両替などを通訳してもらおうと考えたのだ。

スバルとしても、どこかライダーに近い雰囲気を持つヒビキを放っておく事が出来なかったので、行動を共にする事にしたのだ。なお、ヒビキが手にしていたアームドセイバーはスバルが預かった。質量兵器に思われたからだ。

だが、そんな二人がまず向かったのは服屋だった。ヒビキの格好があまりにも目立つため、スバルが変身を解除して欲しいと頼むとヒビキは困った顔でこう返したのだ。

――実は、これを解除すると全裸なんだよ。

それにスバルが呆然となり、仕方ないのでとりあえず自腹で当座の服を買う事にしたのだ。Tシャツとジーンズを選び、ヒビキに試着してもらうスバル。それが丁度良かったらしく、ヒビキは申し訳なさそうな表情を浮かべてこれで頼むと告げた。

スバルはそれに頷き、店員へここから着ていくのでと告げて会計を済ませた。ヒビキはスバルへ感謝を告げ、必ず後で返すと言ったのだが、それにスバルは別にいいと返した。代わりに話を聞かせて欲しいと続けて。

「いいけど、一体何を聞きたいんだ?」

「まず、どうやってここへ? それとヒビキさんって何者ですか? さっきの真っ赤な姿とか、顔だけ戻せる事とか、私の知る仮面ラ

イダーとは違い過ぎる事が多いし」

「仮面ライダー？　俺は確かにバイクに乗るけど、仮面ライダーなんて名前じゃなくて”鬼”だぞ？」

「鬼？」

スバルの疑問にヒビキは少し考えるも、既に見られたためかやや苦笑しながらこう言った。誰にも言うなと。それにスバルは内心でライダーらしいなと思いながら小さく頷いた。

二人はまず落ち着いて話せる場所を探し、近くの公園のベンチへ座った。そこで一息吐いて、ヒビキはまずここへ現れる前の事を話し出した。いつも通りに弟子と共に魔化魍という怪物を退治し、全てを終えて撤収作業をしていた時の事だ。弟子が用を足しに去ったのと入れ替わるように新たな魔化魍らしき相手が灰色のオーロラと共に出現したので、変身して撃退しようとしたのだが、そこへ魔化魍が逃げたので追いかけたのだと。

「灰色のオーロラ？」

「ああ。で、気が付けば燃え盛る炎の中だ。しかも、魔化魍はいなくなってて、代わりに逃げ遅れたさっきの子供達が近くにいた」

その後に続くヒビキの言葉にスバルは思わず息を呑んだ。ヒビキが子供達に視線を向けると、天井の一部が崩れ落ちる瞬間だったのだ。それから子供達を庇うようにしながら、手にしたアームドセイバーで瓦礫を砕き、そこから助け出して脱出するために走り出したとヒビキは締め括った。

「で、少女と出会ったって訳だ」

「……同じだ……クウガと」

「クウガ？　……まぁ、いいか。その”鬼”についてだけどな」

スバルの呟きに疑問符を浮かべるも、その表情が嬉しそうに見えたのでヒビキは”鬼”について説明を始めた。それを聞いてスバルが思い出したのは、光太郎から聞いた歴代ライダーの事だった。

人知れず昔から悪と戦い続けていた彼ら。それが古より人を影ながら魔化魍から守り続けていた”鬼”と重なって見えたのだ。故にスバルは直感的に悟った。彼ら”鬼”も仮面ライダー達と同じなのだと。異世界での仮面ライダーの姿の一つ。それが”鬼”なのだろう。そう結論付けたのだ。

「あの……ヒビキさん。鬼って、どうやってなるんです？」

「そうだなぁ……常に自分を鍛えて、鍛えて、鍛え抜けばなれる」

「じゃ、ヒビキさんは今も？」

「そう、鍛えてますから」

再びシュッと独特の仕草をするヒビキ。それを見たスバルは益々ヒビキに五代の姿を重ねる。だから尋ねた。その仕草はどんな意味があるのかと。しかし、それに対する答えはスバルの予想外だった。

「え～っ、単なる癖ですかぁ？」

「おいおい、そこまで落胆する事ないだろ」

「だって～……てっきりサムズアップみたいに古代ローマ辺りの伝統あるものかと思ったのに……」

「そんな事言われてもな……」

五代との親近感を感じていただけに、スバルの落ち込み方はかなりのものだった。ヒビキはそんなスバルの反応に困惑するも、何か思いついたように立ち上がった。

そして、スバルへ笑みを浮かべてこう告げた。落ち込ませたお詫びとして自分が奢るから食事にしようと。そう言ってヒビキは自分のズボンのポケットを探ろうとして、はたと止まった。スバルは何となくその理由を察し、苦笑して告げた。

「考えてみれば、ヒビキさんって最初からお財布とかって持ってないですよね？」

「……服と一緒に燃えたんだった。少女、悪いんだが」

「いいですよ、服も食事も私が奢りますから。その代わり……」

ヒビキの言葉を遮り、スバルは苦笑しながらこう締め括った。名前で呼んでくださいと。それにヒビキが拍子抜けしたような顔を返した。そんな事でいいのかと言わんばかりのそれを見て、スバルがやや怒りを浮かべて告げる。

結構気になるんですと。それにヒビキが小さく苦笑し、分かったと了承。こうして二人は近くのファミリーレストランへ入る。そこでスバルの食べっぷりを見たヒビキは最初こそ驚いたものの、最後には大したもんだと笑って褒めた。

こうして、スバルは響く鬼と出会った。彼女は知らない。ヒビキがスバルとのやり取りを通じて、どこかで彼の一番弟子の少年を思い出していたとは……

　異世界に現れた三人の異邦人。仮面ライダーであるディケイド。仮面ライダーとなったキバ。仮面ライダーをしている響鬼。今再び、異世界を舞台に仮面ライダー伝説が始まろうとしていた……

　だが、今回彼らが戦うのは単なる怪人でも悪の組織でもない。ある意味で”世界”そのものと戦う事になるのだから……

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

蛇足的続き。これでの本格的連載は考えておらず、部分部分しか浮かんでなかったんですが……知っての通り劇場版のような展開で続く事になりました。

　これは本来最終回の後で投稿したものです。なので、サイドを書く前に書いた物としてご理解ください。次回は……この続きから。

「それで今も平行世界を渡り歩いているんだ……」

「ああ。しかし、まさかここは本当ならライダーと関係ない世界だったとはな」

ユーノの信じられないとの声に、士はそうあっさり答えてなのはお手製のスープを口へ運ぶ。時刻は夕方。あれからヴィヴィオとイクスヴェリアへある程度の話をした士だったが、今度は帰ってきたなのはとユーノ相手に同じような話をする事になっていた。

だが、食事を食べさせてもらっている上にしばらく厄介になる手前、ある程度は要望に応えてやらねばと思った士は、本人としては比較的友好的な態度でユーノの質問へ答えていた。なのはも士の話に興味津々という雰囲気で耳を傾けている。

「そうでもないんだ。クウガとＲＸの腹部にある石。アマダムとキングストーンに近い物がここに存在していたんだよ」

「そうか。だとすればそれもあって呼ばれたんだな、その二人は。では、残りの二人はどうしてだ？」

士の言葉にユーノはそう関係性を教えた。事実、ユーノはなのは達から聞いたレリックに関する話からそう考えている。邪眼がレリックを使いその姿を変えていた事もあり、レリックがアマダムやキングストーンと同じか似た性質を持っていたのではないかと。

それに士は納得を返し、残るライダーの関係性を尋ねた。アギトと龍騎には輝石は埋まっていないと記憶していたからだ。すると、それにヴィヴィオが笑みを浮かべながら告げた。

「アギトの力は光なんだって。で、昔邪眼を倒したのもその力だったから、翔一さんは呼ばれたんです」

「龍騎は……おそらく五代さん達へ、別世界のライダーの異常さを見せる意味もあったんじゃないかな？」

最後のなのはの締め括りに士は少しだけ考え、すぐに理解するように頷いてみせた。彼も龍騎の世界で感じた異様なライダーシステム。それを思い出したのだ。だが、そこには士となのは達の隔たりがある。

士は仮面ライダーのなり方として変わっていると感じているだけで、なのは達は仮面ライダーとなる事に必要な心構えが無くてもなれる事に異常性を感じているのだ。クウガ達四人と先輩ライダーしか知らぬなのは達。一方、ほとんどのライダーを知っている士では、仮面ライダーについての判断基準が違い過ぎるのだ。

「で、ここでクウガ達が戦った邪眼とか言う奴なんだが」

「どうかした？」

「こいつの話で大体分かった――と言いたかったが、詳しい部分は又聞きのせいかはっきりしなかったからな。当事者だったお前達から聞きたい」

そんな士の言葉を受けてなのはとユーノが話し出すあの無人世界での戦い。そして再会してからの日々。士は日常ではなく戦いの内容を知りたかったのだが、それでも黙って聞く事にした。ヴィヴィオが嬉しそうに聞いていたからだ。

士は食事を進めながらなのはの話を聞く。それにユーノやヴィヴ

ィオが反応を返すのを見ながら。やがて最初こそ聞きたい箇所しかしっかり聞かないつもりの士も、その内容があまりにも明確に情景を浮かべさせたため、途中からは食事そっちのけで質問や相槌を打ち始めた。

その後からは話題が士の旅路と変わった。ヴィヴィオがもっと詳しい話をとせがんだのだ。それに士は長くなるぞと前置いて話し出す。あの女性と共に歩み出した始まりの記憶。ディケイドライバーとライドブッカーを取り戻した時からの戦いの思い出。それを聞いて、ヴィヴィオとイクスヴェリアが抱いた気持ちと同じものを二人も抱いた。

それは、士もまた世界を守るために戦っていたのだと言う事。仮面ライダーらしさを感じたのだ。そんな中で士が大ショッカーなどの戦いも含めて話した事は大きな驚きだった。彼はかつては大ショッカー首領――――つまり悪だったのだから。

しかし、それでも彼は仮面ライダーとして光を求めて戦う事を選んだ。一度は世界の破壊者として過ちを犯したが、そこから彼は仲間達の助けを受ける事で自分を取り戻し、仮面ライダーディケイドとして闇を討つ者へ本当の意味で生まれ変わったのだ。

語られたディケイドの戦いの記憶。それを聞き終え、なのは達は言葉がない。光太郎が話した歴代ライダー達に負けず劣らずの物語があったからだ。そんな静寂の中、時計の音だけがリビングに響く。

「士君は……ううん。士君も仮面ライダーなんだね」

やがて、なのはが搾り出すようにそう告げた。そこには、微かな嬉しさと喜びが滲んでいる。士が最後には仮面ライダーとして生きる事を選んでくれた事に対し、なのははそれらの感情を抱いたのだ。

しかし、それに対する士の反応は違った。彼は明らかに表情を曇らせていたのだ。その理由。それは、なのは達から聞いた二度に渡る邪眼大戦の記憶が原因。

「……どう、だろうな。お前達の話を聞いた後だとそうは思えない。ここで戦ったクウガ達はまさしく仮面ライダーだ。だが、俺はそこまで立派じゃない。力に飲まれ、道を踏み外した事もあるんだからな」

なのはから聞いた五代達の武勇伝。それが士にはとても尊く聞こえたのだ。みんなの笑顔のために。それを胸に邪眼と戦い抜いた四人の仮面ライダー。それは世界の破壊者と言われた自分とは、まったく違う生き方だ。

故に士はなのはの言葉に自嘲的な声を返した。自分に”仮面ライダー”を名乗る資格が本当にあるのか。そう思い始めていたのだ。それは、彼が本当の意味での”仮面ライダー”の重さを理解したから。人々の希望であり、生命の守護者。それを噛み締めたからこその答えだったのだ。

そんな士の声に、なのはとユーノ、ヴィヴィオは互いの顔を一瞬見合わせ、頷いて声を合わせた。

――――大丈夫！

それに士の視線が動く。そこには、笑顔を浮かべて士へサムズアップを向ける三人がいた。

「士君の気持ちは分かるよ。間違った自分にそんな資格はないって思うよね。でも、誰だって間違う事はあるから」

「それを悔い、二度と繰り返さないようにと前へ進む君は、間違いなく仮面ライダー……いや人間だ。だから僕らが保障する」

「それに士さんが旅に出たのは、世界が滅びる未来を変えるためだったんでしょ？　なら、立派な仮面ライダーですっ！」

その三人の言葉に士は言葉がない。どうして今日出会ったばかりの自分へ、それも悪事を犯した自分へそんな事を言ってくれるのかが理解出来なかったのだ。だが、それと同時に体の底から湧き上がる気持ちがある。

それは喜び。誰かがこんな自分を受け入れてくれた。それは何にも勝る喜び。しかも、士は本当ならば糾弾されてもおかしくない事をしたにも関らずだ。それは、なのは達が五代達と関ったから故の結果。

確かに士のした事は罪なのだろう。だが、それを悔いて償おうとしている姿を見て、彼を否定出来るようななのは達ではない。許すなどとは言わない。だが、受け入れようとは思うのだ。誰しも迷い、悩み、時に道を間違う事もある。

そんな弱さも含めての人間。そう思うからこその人間らしさ。大事なのは罪を犯した事ではなく、それに対してどう思いどう動くかである。そう三人は考えている。だからこそ、士の在り方は仮面ライダーらしいと言えたのだ。

（俺は……また名乗っていいのか？　仮面ライダーの名を……その称号を……）

三人の言葉が少しずつだが士の心へ染み入っていく。あの光写真館での日々。多くの世界で出会ったライダー達との思い出。それらを思い出し、士は目を閉じた。先程の問いかけに、記憶の中で彼ら

が微笑みながら頷いてくれたようにも思え、士はゆっくりと目を開けた。

「……もしかしたら、また俺は道を間違えるかもしれないぞ」

「「「大丈夫っ！　そんな事はもうないから！」」」

「……そうか」

即答された言葉に士は静かに噛み締めるように声を返す。その表情は今までの中で一番の穏やかな笑みだった。それを見て嬉しそうに笑みを見せ合うなのは達。

そんな光景を軽く眺め、士は優しい笑みを浮かべて残ったスープを口へ運ぶ。それはもう冷めていたが、それでも何故か士には温かく感じるのだった……

あれから数日が経過した月村家。残暑の日差しが庭などへ降り注ぐ。そんな照りつける太陽光線を遮るためにカーテンを動かし、部屋へ差し込む日の光を若干弱めるすずか。渡はバイオリンを手にし、少し緊張気味だ。

ここは月村家の一室。今は簡易的なコンサート会場だ。渡がバイオリンを弾けると知ったすずかが、是非腕前を見たいと希望したためである。渡は正直断りたかったが、彼女の姿が喪った想い人である深央に重なってしまい、断り切る事が出来なかったのだ。

「じゃ、どうぞ渡さん」

「……はい」

すずかに促され、渡は少し戸惑いを見せながら頷いた。それを見て囃し立てる者達がいた。

「よっ、待ってました」

「頑張ってくださいね、渡さん」

キバットとタツロットの声に渡は曖昧に頷き、すずかは苦笑してそれを嗜める。演奏の邪魔になってしまうからと、そう口に指を当てて。それに二人も従い、静かになったのを見て渡はすずかへ感謝を込めて目礼をした。

それにすずかは口だけ動かし「どういたしまして」と返す。そんな彼女に渡は感じていた緊張が和らぐのを覚え、知らず笑みを浮かべた。その彼にすずかも笑みを見せて、演奏会はスタートした。

ちなみにファリンとイレインは買い物へ行っていて、ここにはいない。すずかが渡の根底に微かに残る人見知りを理解し、また次回としてもらったのだ。平然と話す事は出来るのだが、どこかまだ僅かな距離がある。そうすずか達は感じているのだ。

何故かすずかだけは渡も気負う事がないのか自然に接する事が出来るのだが、イレインとファリンへは若干緊張が見える。キバットとタツロットはもうファリンとイレインに気に入られ、よく共に行動する仲になっていたりするのにだ。

（あ……凄く綺麗な音……でも、何だろう？　どこか悲しい気持ちになる……）

渡の弾くバイオリンの音。それはすずかの心へ響いてきた。しかし、その綺麗な旋律の中に微かな物悲しさを感じるのだ。何か辛い事を思い出している。でも、それを何とか押し殺しているような、そんな切ない心の叫び。

すずかはそう思って視線を渡へ向けた。弾いている渡自身はいつもの彼だ。何の異変もない。真剣な表情でバイオリンを弾いているのだ。だが、そんな時渡が一瞬だけすずかへ視線を向けた。

（すずかさん……？）

ずっと自分を見ている視線を感じた渡は、ふと気になったのでそちらへ視線を動かしたのだ。そこには、どこか悲しそうな眼差しを向けるすずかがいた。その表情に渡の心が騒ぐ。思い出の中へ眠らせた女性の面影が、愛しい気持ちが甦ってきそうになったからだ。

「っ？！　す、すみません」

その動揺は手元に出た。見事なまでに奏でられていた音楽は、不意に途切れたのだ。やや慌てるように頭を下げ、再開しようとする渡。だが、そんな彼へすずかはそっと近付き、微笑みかけた。

「今度は私が弾きます。渡さんの演奏聞いてたら、私も弾きたくなっちゃった」

そのすずかの申し出に渡は浮かされるように手にしていたバイオリンを手渡す。それを受け取り、すずかは渡と入れ替わるようにバイオリンを構えた。すずかの座っていた場所へ軽く躊躇いながらも渡は座り、静かにその演奏を待った。

そして始まるすずかの演奏。それは流麗ではないが、聞く者を穏

やかにするような優しい響き。渡はそれを聞いて知らず目を閉じる。まるで子守唄のように思え、渡はある事を悟っていた。

（ああ、これがすずかさんの音なんだ。優しくて温かな音。聞く人を笑顔にしてくれるような……そんな音楽を奏でる人生を送っているんだ）

渡は知らない。これがなのは達へ秘密を打ち明ける前は、彼と同じく悲しさをどこかに秘めた音楽だった事を。そう、彼らは似ているのだ。生まれから好きな楽器までも。まるで出会う事が定められていたかのように。

やがてすずかの演奏は終わり、室内にしばらく静けさが訪れた。それを破ったのは、すずかの一礼。それを合図に渡がスタンディングオベーション。その後を受けてキバットとタツロットも心から称賛の声を出す。

こうして小さな演奏会は終わったのだが、すずかは渡へ話があると告げてキバットとタツロットに退出してくれるよう頼んだ。それに邪推をして冷やかすような言葉を渡へかける二人。そんな光景にすずかは楽しそうに笑う。

二人きりとなった部屋で、すずかと渡は向かい合うように椅子へ座った。渡はすずかの話す内容に心当たりがなく、やや疑問符を浮かべていた。だがそれもすずかが口を開いた瞬間解けた。

「渡さん……もしかしたらキバである事以外に、何か人に言えない苦しみを背負ってませんか？」

鋭い。渡はそう思うも、それを声には出さずにすずかへ問いかけた。

「……どうして急にそんな事を？」

「さっきの演奏。とても綺麗だったけど……どこか悲しかったから」

その言葉に渡は声を失った。自分の心に秘めた気持ちをすずかは音から悟った。そう、渡がすずかの演奏から彼女の事を少し理解したように、彼女も彼の演奏からその心情を少し感じ取っていたのだ。

だが、自分がすずかに亡き女性を重ねていると言える勇気は渡にはない。それは、その事自体がすずかにも、そして深央にも失礼だと思っているからだ。そんな彼の迷いに気付いたのだろう。すずかは少し息を吸うと、渡へ告げたのだ。

それは彼女の秘密。渡が自分はキバとして戦っていた事を教えてくれたからこそ、告げる事の出来る事。

――渡さん。私、こう見えても吸血鬼みたいなものなんです。

その瞬間、渡は目を見開いた。すずかの告げた事が恐ろしくてではない。自分と同じだと、そう思ったからだ。

「私は夜の一族と呼ばれる吸血一族なんです。でも、人は襲ってないですよ。月に一度だけどうしても血を吸いたくなるけど、輸血用の血液で済ませてますから」

渡が疑問に思ったり、尋ねそうな事をあらかじめ教えていくすずか。その顔には、恐怖や不安はない。渡を仮面ライダーと思っているすずかにとは、きっと彼は自分の事を化物とは言わないという確信めいた感覚があるからだ。

渡は確かにすずかの予想通り、それに対して警戒心などは抱いていなかった。だが、ある一点だけ気になっている事があった。それ

は彼にとっては今や命題と言っても過言ではない事。

「……人間と共存してるんですか？」

「ええ。私の姉も普通の男性と結婚してます。私の両親だって片方は一般人なんですよ」

渡の問いかけにあっさりと告げるすずか。それに渡は衝撃を受けた。自分の世界では未だに理解を得る事が難しい異種族間の共生。それをすずか達は既にやってのけているのだ。しかし、すずかはそう思って驚く渡へしっかりと釘を刺した。

共存はしているが、安易に話せる事ではない事に変わりはなく、もし受け入れられない場合は記憶を消してしまうか、最悪だと殺すしかない可能性もある。故にこの告白は慎重な見極めをしなければならないと告げたのだ。

それに渡は理解と納得をした。何せ彼の母方の種族”ファンガイア”は受け入れられるも何もなく、人間を餌としか思っていない者ばかりなのだから。それに比べれば、夜の一族はかなり平和的な者達だと思えた。

（まずは記憶を消して済ませようなんて、やっぱりすずかさん達の種族は平和的だ。きっとファンガイアじゃそうはいかない。でも、希望をもらった。僕の世界へ戻ったらこれを兄さんへ教えよう。ライフエナジーの代わりを生み出すだけじゃなく、人間に対する考え方も変えていかないといけないし）

渡はすずかが詳しく話す夜の一族の歴史を聞いて、その思いを強くしていく。長い時間をかけて社会に溶け込んだ吸血一族。それは自分の世界でいうファンガイアに重なって見えたのだ。

故に可能性を得た。いや、希望を得ただろう。渡はすずかの話が終わるのを待って、感謝とお詫びをした。感謝は言うまでもなく夜の一族の事を詳しく語ってくれた事。お詫びは、すずかに秘密を話させた事だ。

「僕が先に言うべきでしたね。キバである事やキバット達を受け入れてくれたすずかさんを……もっと信じるべきでした」

「いいんです。渡さんの気持ちは、私もよく分かりますから。自分の秘密を話す時は、凄い勇気と踏ん切りが必要ですよね」

すずかの気にしないで欲しいという気持ちを込めた返事に、渡は嬉しく思いながらもう一度感謝を述べる。そして、彼もまた話し出すのだ。自分が人間とファンガイアとの混血である事と共に、あの悲しき運命に翻弄されて散ってしまった女性の事を……

「じゃ、始めるぞ」

「「「「「はいっ！」」」」」

訓練場に響き渡る大きな声。それを出しているのは、特務六課所属の前線メンバー五人だ。魔力をもたぬ若者達で構成されるバトルジャケット隊。その訓練を本来受け持っていたのは格闘戦主体で戦うザフィーラだったのだが、今はある者が代わりを務めていた。

それはスバルを通して紹介されたヒビキ。魔化魍がいない世界である魔法世界では、彼の食い扶持を得る手段はその肉体を活かすし

かなかった。だから、彼を仮面ライダーだと判断したスバルがはやてへ紹介したのだ。

――こちらはヒビキさんって言って、異世界の仮面ライダーなんです。

――どうも。

――ホンマかっ?!

ヒビキはスバルの説明へもう何も言わなかった。何せ、人助けになる仕事を紹介すると言われていたのだ。それにスバルから聞いた仮面ライダーの話も彼には大きな意味を持っていた。そう、仮面ライダーに対してヒビキが抱いた印象は、彼ら”猛士”がしていた事を個人でやっていた異世界の者達だったからだ。

人々の暮らしを影で守る厳しい戦い。それを自身を鍛えたのではなく、望まず得た異形の姿と力を使ってやり抜いた勇者達。ヒビキは鬼に突然なってしまった人々と仮定して、彼らのその生き方へ敬意を表したのだ。

何故なら彼はスバルへこう感想を述べたのだから。

――自分で選んだ道じゃないのに、それから逃げなかった。しかも、その力を誰かのために使おうとした。俺だって突然そんな風になったら、きっと戸惑って怖くなったりするだろうな。だからさ、スバルが憧れる気持ち、分かるよ。俺もそういう人になりたくて鬼を目指したからな。

だから、ヒビキも仮面ライダーと呼ばれる事に感慨深いものを抱

いた。確かに鬼と仮面ライダーは似ている。だが、現代の鬼は望む者がなっている。それに比べ、仮面ライダー達はそうなる事を望まぬ者達だ。その差は大きい。

故にスバルから仮面ライダーと評された彼は、一層自身を鍛える事を決めた。体だけではなく、心を。どんな困難に直面しようとも、そこに助けを求める者がいるのならば守れるようにと。

（いつになるか分からないけど、帰ったらおやっさん達へいい土産話が出来たな。仮面ライダー、か。俺達が住んでる地球とは違う地球を守る優しく強い鬼。うん、俺もまだまだ鍛えないとな！）

そう思いながらヒビキは五人へ訓練を施していく。それは鬼になるための訓練だ。彼にはやてが頼んだのは、バトルジャケット無しでも生き残る可能性を上げる事。仮面ライダーに憧れ、バトルジャケット装着者を目指す若者達は多い。

そんな彼らが基本立ち向かうのは、常人どころか魔導師達でも危険と思われる状況だ。そこから少しでも生き残れるように。誰も死なずに済むようにと、はやてはヒビキへ頼んだのだ。

仮面ライダーとして立派に戦ってきたヒビキ。彼のやっている事を彼らに施し、少しでも鬼のような強い人にして欲しい。そのはやての切実な願いを受け、ヒビキはここで指導員のような事をするようになったのだから。

「いいか？　絶対無理はするな。無理して体を痛めても意味がないからな。今の体が出来る限界と出来ない限界をちゃんと見極めろ。出来ない事があっても焦る必要はないぞ。鍛えれば出来るようになるからな。俺だって最初からお……ライダーになれた訳じゃない。自分を鍛えて鍛えて、鍛え抜いてやっとなったんだ」

「「「「「はいっ！」」」」」

「よしっ！　それが終わったら……」

腕立てをしながら返事を返す若者達へヒビキは嬉しそうな声を出す。そしてその後の指示を出そうとした時だ。訓練場にモニターが出現したのだ。そこにはやや険しい表情のツヴァイが映っている。

『ヒビキさん、大変ですっ！　ミッド南部で強盗事件発生！　犯人は質量兵器を所持し、人質を取って立てこもってます！　現場の陸士隊から出動要請が入りました！　ランドチェイサーよりもヘリの方が早い距離ですので、ヘリポートへ集合してください！』

「分かった」

ツヴァイの告げた内容に頷くヒビキ。ランドチェイサーとは、バトルジャケット隊のために作られた専用バイク。モデルにビートチェイサーを採用していて、色合いが通常時と同じになっている。後はトライアクセラーが無く、マトリクス変化などの各種機能がないだけでビートチェイサーそのものだ。

そこには、機動六課がビートチェイサーのデータを簡易的だが得ていた事が大きく影響していた。そして、ライダーの中で一番バイクアクションが多かったのがクウガだった事もあり、その使い勝手の良さを意識しているのもある。

ヒビキは後ろで既に控えている隊員達へ視線を向け、普段と変わらない表情で告げた。

「聞こえたな？　いくぞ」

「「「「「はいっ！」」」」」

凛々しい声で返事をする隊員達にヒビキは笑みを浮かべ頷き返す。
そんな彼へツヴァイが何かを思い出したかのように問いかけた。

『あ、そうです。アームドセイバーはいらないですか？』

「うん、あれは必要無い。もし必要ならまた連絡するから。シャマルにでも転送って奴をしてもらうよ」

ツヴァイの問いかけにヒビキはそう気楽に答えた。ちなみにはやて達と顔合わせをした際、ヒビキは白衣姿のシャマルに同級生の滝澤みどりを重ねた。雰囲気が近いと感じたからなのだが、そのためヒビキはシャマルを呼び捨てにしている。

本人もヒビキならと苦笑混じりに受け入れた。そう、スバルと同じ扱いを受けたのだ。何度先生をつけてと頼んだにも関らず、直してくれなかったためである。シグナム達は別に呼び捨てでもいいと思っているが、部隊長であるはやては公の場所ではちゃんと呼び分けをしてくれるように執拗に念を押していた。

『分かったです。なら、お願いするですよ』

「じゃ、行って来ます」

シュッといつもの仕草を返し、ヒビキは隊員達と共に走り出す。
まず向かう先はバトルジャケット保管庫だ。

そう、彼は指導員だけではない。現場へも赴き、先頭に立っている。だからこそ、隊員達は彼を仮面ライダーと認識しているのだ。

実は、一部の者達を除き、ヒビキは特務六課関係者以外へは新型バトルジャケットのテストケースと説明されている。
理由は、仮面ライダーが現れたとなればまた怪人が現れるかもしれないと不安に思う者もいるとの配慮だ。なので、はやて達は不用意にヒビキの事を教えるなとスバルへ厳命した。それは、かつて彼女がライダーの正体を関係者以外へは教えるなとの意味を拡大解釈し、姉のギンガへＲＸの事を教えたため。

そう、なのは達機動六課関係者にさえ響鬼の事が秘密となった裏には、彼があまり騒いで欲しくないと考えている事も関係している。それに基本鬼の事は秘密としなければならないため、ヒビキとしては教える必要がない者達へは知らせないで欲しいと頼んでいたのだ。

保管庫に到着した隊員達と同様に、ヒビキもまた量産型バトルジャケットを体に装着する。それはレジアスが使った改良型をモデルとし、フェイス部分は髑髏から変更されて十字を中央にはめ込んだような物だ。仮面ライダー然としたフェイスも提案されたのだが、それをレジアスとグレアムが却下したのだ。

――彼らの顔は英雄の顔だ。安易に使っていいものではない。

よって、ならばと現在のデザインとなった。それは、バトルジャケットの一番脆い部分である目に当たる場所を別にはめ込む事で強化するため。そして、十字は祈りを捧げる物を連想させる事から、人々の祈りと願いが生んだ物であるバトルジャケットには相応しいとなったのだ。

ヒビキがそれは着るのはあくまでも変身のため。故にフェイスは着けない。彼は服を脱いでいるのだ。バトルジャケットならば変身時の炎で燃えず、解除した後も残るのではと思いついたシャマルの

提案を試したところ、見事に成功。以来、彼は必ず変身する際はボディースーツだけを身に着けるようになったためである。

着替えを終えてヘリポートへ向かい、そこで素早くヘリに乗り込むヒビキ達。全員が乗り込んだのを確認し、操縦席から愛らしい声が聞こえた。

「じゃ、発進します。しっかり掴まっててくださいね」

「よろしく頼むな、アルト」

そう、ヘリの操縦士はアルトなのだ。機動六課解散後、すぐに起ち上がった特務六課。そこへ彼女はスカウトされたのだ。念願の正規ヘリパイロットとしての配属に喜び、アルトはここにいるのだから。

ヒビキはアルトへ愛想良く返事を返すと、手にした変身音叉”音角”を軽く振動させる。そしてそれを額へと動かした。すると、そこへ何かの顔のようなものが出現する。

それを合図にヒビキの体が炎に包まれていく。それを見つめ、どこか息を呑む隊員達。見るのは初めてではないのだが、何度見てもやはり凄いと思うものは凄いのだろう。やがて、その炎を振り払うようにヒビキが気合と共に右腕を動かした。

「はあっ！」

そこには、一人の鬼がいた。隊員達が知るライダー達とは違う外見だが、彼らからすれば彼もまたライダーなのだ。彼の名は響鬼。人が己を鍛え上げて到る邪悪に対する姿。清めの音を使い、恐ろしい魔化魍を浄化していた音撃戦士だ。

「相手は結構な重火器も持ってるらしいから気をつけろよ。人質は建物の中で人数は三人。犯人達は二人。内部への突入はお前達な」

「「「「「はいっ！」」」」」

「で、俺が囮だ。ここは前と同じだな。絶対無事に助け出して、誰も傷つけずに終わらせるぞ」

響鬼の言葉に頷きを返す隊員達。勿論彼の言葉にある”誰も”とは犯人も含めてのものだと知っているのだ。既に彼がミットチルダへ来て二週間が過ぎた。その間に出動したのは僅か二回。余程の事がない限り響鬼達が出動しない事もあるが、着実に治安は向上しているのも要因の一つだ。

仮面ライダーと邪眼の戦い以降、犯罪組織は大きな動きを取れなくなった。それは怪人とは取引も共闘も出来ないと理解させられたから。邪眼は確かに取引をもちかけたが、あれは対等の関係ではなく従属を求めるものだった。

つまり下手に管理局を疲弊させると、また怪人が現れた際に自分達の身も危うくなるのではと思ったのだ。もう怪人が現れないと言う者もいた。だが、逆に言えば怪人は突然現れた。そこから考えれば、いつ現れるか分からないとも言えたのだ。

「ヒビキさん、現場が見えてきましたよ」

アルトがやや凛々しい声で響鬼へ呼びかける。彼は雑談をして隊員達の緊張を解していたのだ。響鬼はアルトの呼びかけに頷きを返し、目の前にいる五人へ視線を戻した。

「よし、なら気を引き締めて行くぞ」

「「「「「はいっ！」」」」」

やがてヘリは現場近くへ着陸し、隊員達がそれぞれに散って動き出す。そして、それを見送った響鬼は腰にあるディスクを手に取るとそれへ音角を当てた。するとそれが瞬時に赤い鳥のような物へ変化する。

ディスクアニマルと呼ばれるサポートメカだ。古の鬼が使ったと言われる式神。それを模して再現された物なのだ。響鬼の狙いは、アカネタカを使って犯人達の注意を引く事だ。と、そこで響鬼はふと思い出す事があった。それは自分がここへ来るキッカケとなった相手の事だ。

（そういえばあの鳥の魔化魍、俺が装甲するのを見て確かこんな事言ってたな……）

――ここのライダーはこんな事も出来るのか。

それは、追い詰められたためにアームドセイバーを使った時の出来事。その後、鬼神覚声を使ってダメージを与えたのだが逃げられた事を思い返し、響鬼はあの相手について疑問を抱く。

もしかすると、魔化魍ではなく怪人だったのではないか。そして、現れた場所が違うだけでこのミッドには来ているのではないか。最後に、あの時言っていたライダーとは仮面ライダーを意味していたのではないかと……

ベルカ自治区　ジェイルラボ。そこにシャッハはいた。そしてその中の一室にある転送ポットらしきものを眺め、ため息を吐く。それがジェイル達が使った真司の世界へ行ける装置なのだ。彼女は毎朝ここへ訪れては、ジェイル達が帰ってきていないかを確認している。

（懐かしい……と感じるにはまだ些か早いですが……）

そう思ってシャッハは思いを馳せる。それはあの冬の日の事。年が明けてすぐに近い時の事だ。

――では、お気をつけて。

――見送りありがとう、シスターシャッハ。必ず真司を連れて戻ってくるよ。

あの日、旅立つジェイル達を見送れたのはシャッハだけだった。六課の者達はジェイル達がそれを断ったのだ。仕事を優先して欲しいと。故にシグナムから頼まれたシャッハが代わりを務めた。

それだけではない。彼女自身も三ヶ月近くもの間、毎日のように顔を合わせていたヴァルキリーズと親しくなっていたのも理由の一つ。だからこそ、彼女も喜んで見送り役を買って出たのだから。

それを思い出し、シャッハの視線がある物を見つめる。それはこの部屋に置かれた一つの発信機。それを辿ってジェイル達は帰還する手はずになっているからだ。故にシャッハはここへ日課のように来ている。もちろん出迎えるためだが、未だにそれが報われた事はない。

「……今日も不発、ですか」

あのゆりかご戦の後、ジェイル達は六課隊舎からここへ戻った。そしてここで暮らしながら、真司の反応を頼りにそこへ行ける手段を完成させ、六課解散を待たずして彼らはミッドチルダから消えたのだ。見送るシャッハへ、とびきりの笑顔とサムズアップを残して。

その眩しさを思い出して、シャッハは小さく笑みを浮かべた。だが、それもすぐに曇る。

（彼らが旅立ってもう半年以上。一年も掛からないと思っていたのですが……それ以上になるかもしれませんね）

そんな事を考えながらシャッハはその場を立ち去ろうとする。シスターとして朝の仕事をするためだ。するとそこへ灰色のオーロラが出現した。それに気付いて驚くシャッハだったが、即座にデバイスを起動させ構える。そこから何者かの気配を感じたのだ。

味方にしろ敵にしろ警戒するに越した事はないと思い、シャッハは鋭い視線を向ける。そこから現れたのは、ディエンドに捕まえられているアリシアだった。それを見た瞬間、シャッハは無条件である決断を下した。

（あの青い方は悪人ですね！）

アリシアは悲痛な声で離してくれと言っているにも関らず、ディエンドはそれに耳を貸さない。それだけでシャッハには十分だった。自分へ注意をディエンドが向ける前に自慢の移動魔法を使って強襲。アリシアをディエンドから解放すると、即座に彼女を抱えて距離を取った。

「あ、貴方は？」

「ご安心を。私は聖王教会の修道騎士です。貴方の敵ではありません」

突然の事に戸惑うアリシアへ、シャッハは笑みを浮かべてそう告げた。それだけでアリシアはシャッハが悪人ではないと理解出来た。その目が澄んでいたからだ。アリシアはそれに安堵し、感謝を込めて笑顔を返す。

だがそんな二人とは違い、ディエンドはやや意外そうにディエンドライバーを肩に乗せてシャッハを見つめていた。彼にしてみれば、シャッハに気付いた途端いきなりその姿が目の前から消え、驚きを見せた瞬間現れるという手品を見せられたようなものだったのだ。

「いきなりやってくれるね。でも……まぁいいや。もう彼女には案内としての役割を果たしてもらったしね。それで、ここはミッドって所で合ってるのかな？」

「確かにここはミッドですが、貴方は何者です。嫌がる女性を無理矢理拘束しているとは」

「おいおい、僕は彼女を故郷に連れて来たんだよ。文句を言われる筋合いはないな」

そんなディエンドの言葉にふざけるなとばかりにアリシアが表情を変えた。彼女は一度としてそんな事を頼んだ覚えは無い。つまり、勝手にディエンドがした事だった。しかも、それで母や親しくしていた光の国の者達と離されてしまったのだから。

故に彼女の中にあるのは、ディエンドに対しての感謝でも久方ぶりの故郷に対する感動でもない。強い怒りと深い悲しみだ。その感

情を込め、アリシアは鋭い眼差しをディエンドへ向けて叫んだ。

「私は別にミッドに来たかった訳じゃないっ！　あのままママ達と暮らしていければそれで良かったのにっ！」

「……どうやら複雑な事情がありそうですね。とりあえず、ここを出ましょう」

その瞬間響く何発かの銃声。それがシャッハの周囲に火花を生み出すと同時にその行動を止める。微かに怯えるアリシアと怒りを滲ませながら視線を動かすシャッハ。その視線はディエンドへと向けられていた。

「悪いけど、行く前にこの世界のお宝を教えてもらいたいな」

再び移動魔法を使おうとしたシャッハの動きを察知し、ディエンドが射撃で阻止したのだ。相手の反応速度に若干悔しがるシャッハへ、ディエンドはそのままディエンドライバーを向けてそう告げたのだ。

そのお宝との言葉に内心疑問符を浮かべるシャッハだったが、ならばとこう答える事にした。それはロストロギア。この世界で宝と呼べる物があるとすれば、それらの類だろうと思ったのだ。

無論具体的な物は挙げなかったが、失われし文明技術で作られたそれらは宝と言えない事もないと教えた。それを聞いて納得するディエンドを見て、シャッハは一つの事実に気付いていた。それはディエンドが魔法世界の事に明るくない事。

（ロストロギアの事を教えた際もどこか感心するような反応を示し、ここがミッドかどうかを聞いてきた割に魔法を見て驚いていた。な

らば、彼は次元漂流者に近い存在でしょう）

そう結論付け、シャッハはもうこれでいいだろうと移動魔法を展開しようと準備を始めた。ディエンドはそれに気付いているも、止める事はしない。彼の聞きたい情報はもう得たからだ。

「では、私達はこれで」

自分の与えた情報に一人思案するディエンドを横目に、シャッハはアリシアを抱えたままジェイルラボを後にしようとした。だが、そんな彼女へディエンドが呼び止めるでもなくさらりとある事を告げる。それはあまりにも軽い言い方。しかし、内容はそれとはそぐわないもの。

――あ、教えてくれたお礼に一つだけ忠告。僕のと同じオーロラが現れたら注意したまえ。出てくるのが僕ならいいけど、違うと大変だからね。

”アタックライド……インビジブル”

それに思わず動きを止めるシャッハ。だが、彼女がその内容を詳しく問い質す前にディエンドはあるカードを使ってそこから消える。それを見送る形となったシャッハとアリシアだったが、最後の言葉が気になるのは同じだった。

「オーロラに注意とは……彼以外も使える移動法という事でしょうか。しかし、それで大変になるとは一体……？　貴方は何か知っていますか？」

「……ごめんなさい。わたしもあいつの事はほとんど知らないの。

でも、あいつは異世界の地球人だよ。本人がそう言ってた」

「異世界の地球人？！」

アリシアの告げた内容にシャッハは驚きを見せる。彼女にとって異世界の地球人とは、あの仮面ライダー達を思い起こさせる言葉だった。とすれば、ディエンドもそうだろうかと考えるシャッハ。だが、その考えを思い浮かべた途端顔を左右へ振った。

（まさか彼も……いえ！　そんなはずはありませんっ！　仮面ライダーは人々の暮らしを守る存在です！）

決して嫌がる少女を無理矢理拘束したりはしない。そうシャッハは結論付け、とりあえずとアリシアへ自己紹介をした。それにアリシアも自己紹介を返すのだが、その名を聞いてシャッハは不思議そうな反応を示した。

フェイトと苗字が同じだと思ったのだ。顔や声も似ている上に苗字までが同じ。そこに妙な偶然を感じて、彼女は念のために姉妹はいないかと問いかけた。しかし、フェイトの事を聞いてもいないアリシアはそれにいないと即答した。

それにまだ納得がいかないシャッハだったが、今はアリシアを保護する方が先と考えたのだろう。念のため、彼女を抱えたまま聖王教会へと向かう事にし、シャッハは移動魔法を展開するのだった。

こうしてアリシアはシャッハに連れられ、聖王教会へと向かう事になる。そこで詳しい話を彼女から聞いたカリムは、即座に事の重大さに気付きクロノへ連絡。それがキッカケでアリシアは想像だにしない事実を聞く事になる……

自然が多いスプールス。そこの自然保護隊で働く二人の少年少女は、今やこの世界をキャンプなどの観光で訪れる者達のお目当てになっていた。

「キュク～」

「お疲れ様、フリード。それとキャロも」

「エリオ君もお疲れ様。でも、今日は小さい子がいて楽しかったね」

一日一回限定のフリードによる遊覧飛行。それがこのスプールスの名物となって早三ヶ月以上。そこでキャロやエリオが頼まれるライダー達の話。それを聞きたがる者が多いのだ。

そのため、今の二人はここを訪れる者達の案内役もしている。勿論見回りもしているが、他の隊員達に比べるとやや少なめにされている。そこにはそういう事を考慮してくれているミラとタントの優しさがある。

この日もお昼前に行うフリードの遊覧飛行を終え、軽い休憩を取ろうとしていた。木陰に座り、やや強い日差しを避けるエリオ達。今日は小さい子供のいる三人家族を乗せて飛行した。その子供は男の子で、大きくなったら仮面ライダーになりたいと言っていたのを、エリオとキャロは微笑み混じりに聞いたのだ。

その際の会話を思い出して、キャロは小さく微笑んだ。何故なら、その時の事は忘れられないものになったからだ。そして、彼女はそ

のまま視線をエリオへ向けると、嬉しそうにこう言った。

「それにしても、エリオ君があんな事言うなんて思わなかったな」

「え？」

「ほら、あの子がライダーになりたいって言った時」

キャロの口から出た言葉にエリオは思い出したように苦笑した。

そう、彼はこう言ったのだ。

――仮面ライダーになりたいって思っちゃ駄目だよ。仮面ライダーみたいな人になりたいって思うんだ。僕らはライダーになるんじゃない。ああいう風に、いつでも、どんな時でも、みんなの笑顔を守ろうとする気持ちを持ち続けられる人を目指すんだ。

その言葉を聞いた少年は、その噛み締めるような言葉と凛々しい表情に少し声を失っていたが、エリオが笑顔で「いいね？」と尋ねると力一杯頷いたのだ。それをキャロが見た時、エリオに光太郎の姿が重なった。

きっとエリオの中に光太郎達の在り方が強く残っているからだと、そう思ったのだ。故に、あのエリオの言葉は自分へのものでもあるのだろうとも思った。みんなの笑顔のためにと戦い抜いた四人の仮面ライダー。それを誰よりも追いかけているのはエリオなのだから。

「だってさ……五代さんも翔一さんも光太郎さんも真司さんも、他の先輩ライダーだってそうだよ。みんな、なりたくてライダーになった訳じゃない。でも、そうならないと守れない人が、笑顔があったからあの人達はライダーとして戦った。だから、僕らはその気持ちを目指すべきじゃないかって、そう思うんだ」

「そうだね。それに私達は誰よりもよく知ってる。力に善悪はない。それを決めるのは使う人の心次第だって」

キャロの噛み締めるような締め括りにエリオも無言で頷いた。あのゆりかごでの戦い。邪眼は恐ろしい凄まじき戦士の力を手にした。だが、それと同じ力をクウガはみんなの笑顔のためにと使った。滅びの力。それを優しい心で使ったのだ。

本来ならば誰かを傷つける事しか出来ない力も、使い方次第では誰かの笑顔を守る事が出来る。それを彼らは見せてもらったのだ。四人の仮面ライダー達の為した事で。その戦いで。

そう思って、二人は視線を空へ向ける。そこにはあの日見上げた時と同じ青空が見える。そこから二人に会話は無かった。ただ静かに風が流れるだけ。しかしそんな中、眠るように大地に伏せていたフリードが突然勢い良く顔を上げた。

「キュクッ！」

「フリード？」

「……エリオ君、あれっ！」

フリードの様子にやや戸惑うようなエリオだったが、キャロだけはそれが何を言いたいかを把握し視線を動かしていた。そしてそこに見えたある物をエリオへも教えるべく叫ぶ。

灰色のオーロラが出現していたそこは、スプールスの転送ポート。更にそのオーロラの前には黒髪の女性が倒れていたのだ。二人がそれを確認するのと同時でオーロラが消える。それを確認する前にエリオとキャロは既に走り出していた。女性を助けるために。

やがて倒れている女性の傍に来た二人は、優しく抱き抱えるようにエリオが体を支え、キャロはその体へ簡単な回復魔法を施し始めた。それで女性も意識を取り戻し、ゆっくりと瞼を開けて視線を動かした。

「……ここは？」

「第六十一管理世界スプールスです。僕はここの自然保護隊所属のエリオ・モンディアルと言います」

「私はキャロ・ル・ルシエです。貴方のお名前と出身世界を教えて頂けますか？」

エリオとキャロの言葉に女性は目を見開いた。ミッドチルダではないが、自分が生まれ暮らしていた魔法世界へ戻ってきたと理解したのだ。それと同時に思い出した事があった女性は、やや慌てるように彼らへ問いかけた。

「それよりも金髪の十五か六ぐらいの女の子を見なかった!?　私の娘なの！」

「……いえ、残念ながらここには貴方しかいません」

【キャロ、この人どこかで見た事ないかな？】

落ち着けるような声でエリオは静かに女性へ告げる。それと同時に気になった事を念話でキャロへ尋ねた。記憶のどこかで女性に似た顔を見た事があるような気がしていたのだ。

「もっと詳しい事を教えて頂けないでしょうか？　例えばお名前とか」

【エリオ君も？　私もどこかで見た気がするんだ。でも、どこだったかな？】

それに女性がやや落胆したのを見たキャロがそう優しい声で尋ねる。無論エリオからの念話に同意するような言葉を返しながらだ。そんな二人の気持ちを知るはずもなく、女性は衝撃の言葉を告げる。それが二人にとって大きな意味を持つと知らぬままに。

冷静に考えれば、既にこちらで犯罪を犯し、死亡者扱いだろう自身の名を明かすのは問題と気付けただろう。だが、今の彼女にそんな冷静さは無かったのだ。

やっと目覚めた最愛の娘。そんな彼女と平和に暮らしていた。その日常を引き裂かれたのだ。そのため、藁にも縋りたい思いだったのだろう。だからこそ教えたのだ。自分達の名を。

――私はプレシア・テスタロッサ。娘の名はアリシア・テスタロッサよ。

絡み合い出した新たな縁。それが知らぬ場所で動き出す。ディエンドが告げた忠告は、あの五代達が戦う事になった”グランショッカー”の襲撃を意味するのだろうか？

それとも、彼はディケイドの事を言っていたのだろうか？　今はまだ、静かに時が流れるのみ……

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

初の五場面描写。時間軸がバラバラなのはいつもの事と思ってご容赦を……

次回は……いよいよオールライダー集結に向けての話です。ないと言っていた本編の続編となってしまい、色々と不安だらけで戦々恐々ですが、どうか広い心でお許しくださると幸いです。

Ｄｅｓｔｉｎｙ ｓ ｐｌａｙ～出会いは突然に～

静かなある日の午後。すずかは渡とキバットの三人でバニングス家が所有する湖畔のコテージに来ていた。理由はアリサへ渡達の事を話すため。そう、渡達を秘密にするつもりではなかったすずかだったが、それでもすぐにアリサへ教える事はしなかったためだ。

理由は一つ。渡がそれをあまり望んでいないとすずかが思ったから。しかし、渡の事情もある程度理解し、話しても大丈夫と分かったためにアリサへやっと紹介出来る運びとなった。

「でもいいんですか？　キバの事も教えても」

「ええ。すずかさんが話してくれた……五代さん、でしたよね？その人も僕と同じ事が出来るって知っても受け入れる事が出来たんです。なら、僕は構いません」

すずかの確認に渡はそう躊躇う事なく言い切った。すずかから聞いた五代の話。それは渡には衝撃だった。自分と同じように変身という力を手にしてしまった存在。そんな彼は本当に純粋な人間だったのだ。

ファンガイアとの混血である自分と違い、ある時期まで普通の人として過ごしていた五代。それが突然クウガという力を手にしてしまった。それでもそれを受け入れ、みんなのためにと戦った事を聞いた渡は素直に尊敬したのだ。

自分でさえキバという事実から目を背けたくなった時もある。それでも、自分はファンガイアとの混血だからと知ってからはそれを受け止め、向き合ってきた。

そう思う事でどこかキバとなれる事が納得出来たのもある。だが、

五代は違う。それでも自分と同じように異形となる事を受け入れ、それを他者のために使い続ける事を選んだのだ。

だから、渡はアリサへ自身の秘密を教える事を決めたのだ。五代の事を受け入れたアリサならば、と。そこで渡はすずかへ逆に問いかけた。

「それよりも良かったんですか？　僕らが違う世界から来たって事を昨日の時点で教えなくて」

「はい。だって、アリサちゃんはいつも驚かせる側だから偶には驚かせてみたいんです」

渡の問いかけにすずかはそう返して笑う。その言葉に渡は納得するも、すずかの普段は見えない茶目っ気を感じて小さく笑みを浮かべた。キバットは先程から二人とは少し離れた場所を退屈そうに飛んでいた。

人気の無い湖畔。その静けさと景観はちょっとした癒しとなるのだが、どちらかと言えば賑やかな方が好きな彼としてはやや物足りなさを感じているためだ。

「しかし、そのアリサって相手もお嬢様とはなぁ。やっぱ、すずかみたいな立場だと友達も似たような相手になるのかねぇ」

「そうでもないよ。言ったかもしれないけど、アリサちゃんと友達になるキッカケを作ってくれたなのはちゃんは普通のお家だから」

「確か……あの美味しいケーキを買ったお店をやってるんですよね。翠屋、でしたっけ」

渡は一度食べたケーキの味を思い出しながらそう告げた。すずかが友人の両親のやっている喫茶店の物だと言っていた事を。その味は渡も感心する程の物だった。キバットとタツロットなどは争うように食べていたのだから。

実はタツロットは今ここにいない。月村家に残ってファリン達と共に留守番という名の罰を受けているのだ。彼は勝手に外出してはいけないとの言いつけを破り、先日無断外出をしたために。

そしてその時の様子をアリサが偶然見てしまったのだ。それがアリサへ渡達の事を話す事になった理由。アリサがすずかへタツロットの事を話したのだ。奇妙な存在がいたと。故に電話口ですずかが申し訳なく思いながら軽い説明だけはしたのだが、実際会ってみたいとなり現状へ至る。

「翠屋で合ってますよ。なのはちゃんのお家は私の親戚にも当たりますから」

「あ、そういえばお義兄さんの実家だって……」

「おいおい渡、忘れてたのか？　俺はしっかり覚えてたぜ」

すずかの言葉に以前聞いた事を思い出した渡だったが、その言葉を聞いてキバットが少し呆れ気味に言いながら羽で顔を抑えた。それにややバツが悪そうな表情を見せる渡。そんな彼らを見てすずかが小さく微笑んだ。

そこへ車の排気音が聞こえてくる。それに三人の視線が動いた。その視線に気付いたのか、運転席から一人の女性が顔を見せた。長い金髪を風になびかせ、アリサはすずかへ手を軽く振ってみせる。

そして車がコテージの前に止まり、アリサは運転席から降りると

まっすぐすずかへ近付いていく。

「待たせたわね」

「ううん、そうでもないよ」

互いに笑顔を見せ合うすずかとアリサ。それを眺め、キバットがキザに口笛を吹いた。アリサが予想以上に美人だったからだろう。渡はそんな彼の反応に苦笑していた。

すずかとアリサは揃ってその彼へ視線を向けた。アリサは渡の事を一しきり眺め、納得するように頷いた。すずかからの説明が的確だと思ったのだ。

「確かに少し頼りないかも。でも、優しい感じはする」

「でしょ？　あと、どこか翔一さんを思い出さない？」

「あー……言われれば近い部分はあるかも。天然そうな感じとかね」

すずかの挙げた例えに懐かしい顔を思い出し、アリサは少しだけ視線を上に向けて答えた。あのゆりかごの戦いが終わった後、なのは達から二人にも連絡が来たのだ。五代達四人の仮面ライダーが元の世界へ帰ってしまったと。

その際、二人はこう言われた。彼らは再会を信じていたと。それを聞いたすずかとアリサは、ならばと悲しむ事はしなかった。いつか会える。それを自分達も強く信じていようと決めたのだ。

その事を思い出しながら、アリサは渡とキバットへ近寄っていく。それに渡達も気付き、視線をアリサへと向けた。

「はじめまして。アタシがアリサ・バニングスよ。アリサでいいわ」

「あ、こちらこそはじめまして。紅渡って言います」

「俺はキバットバット?世。よろしくな」

笑顔で自己紹介するアリサに渡もキバットも明るい声を返した。

そして、それが終わると同時にすずかがアリサを驚かせるべく、渡達との出会いを教えた。いきなり庭へ現れた事を。その際、渡達が遭遇した不思議な出来事も含めて。

渡達はネオファンガイアとの戦いを何とか終わらせたのだ。本来ならば揃うはずのない二人のキバを始めとした四人のライダーが中心となって。だが、やっと平和になって未来から来た正夫を送り返した後、大河達と別れ自宅へ戻った渡達の前に謎のオーロラが現れたのだ。

――何だ、こりゃ?

――オーロラみたいですねぇ。

――ブラッディローズが……鳴ってる?

父と母の思い出のバイオリン。その音色が渡へ告げていたのだ。オーロラを抜けろ、と。そして、意を決して飛び込んだ瞬間意識を失い、気がつけば月村家の庭先にいたという訳だったのだから。

(五代さんって人も僕と同じような力を持ってたらしいからもしかして……)

アリサとすずかがキバットと話す様子を見つめながら、渡はある推測をしていた。自分と似た部分の多い五代。それがこの世界で変身して恐ろしい相手と戦っていたと聞いた時から、渡にはある考えが浮かんでいた。

それは、自分も同じようにここでキバとして戦うために呼ばれたのではというものだ。ブラッディローズが鳴る時はファンガイアの出現を知らせていた。それがオーロラが現れた事で鳴った。そこから導き出した結論だった。

そんな事を考えながら、渡は眼前の光景に思わず笑ってしまった。すずかが渡達の現れ方を教えたのだが、それを聞いてアリサが信じられないとばかりに否定する声を上げたため、キバットが驚いて乗っていたすずかの肩から落ちたのだ。

それを慌てて助けようとするすずかと驚かせた事を謝るアリサ。そんな光景に渡は知らず笑顔を浮かべていた。異世界に来てまだ日は浅い。それでも出会う人々はみな温かく、優しい者達ばかり。自分の体の事を話したとしても、受け入れてくれる相手さえいたのだ。

――もし僕の予想が当たっているとしたら、絶対に守り抜かないと。すずかさんやアリサさんみたいな人達の事を……

渡がそう密かに決意を固めたそんな時だ。渡達の目の前に灰色のオーロラが出現したのは。しかも、そこから現れたのは怪しげな仮面を着けた老人だった。その老人は渡を見ると納得するように小さく頷いた。

「見つけたぞ、キバ」

老人――ツバサ大僧正はそうしわがれた声で告げた。そのキバとの呼び方に渡の表情が険しくなる。どこかあのビショップを思い

出させる雰囲気があったからだ。一方、すずかとアリサは二つの事から戸惑っていた。突如現れた謎の存在と、それが渡を指して告げた名称であるキバだ。

キバの意味を知るからこそ戸惑うすずかと、キバの意味を知らぬからこそ戸惑うアリサ。故に質こそ違え、ツバサ大僧正へ抱く気持ちは同じだった。それは恐怖。あのマリアージュと遭遇した際よりも強いものを感じていたのだ。

（渡さんの事を知ってるなんて……もしかして悪いファンガイア？）

（キバって何よ？　それにこの感じ……体が竦むみたいだわ）

表情を曇らせる二人を守るように立つ渡。キバットもそんな彼の傍へ近付き、ツバサ大僧正を睨みつけていた。彼は直感で悟ったのだ。相手が人間ではない事を。そして、ファンガイアでもない事も。

「渡、気をつけろ！　あいつ、何かヤバイぞっ！」

その声に呼応するようにツバサ大僧正が姿を変えた。それはコウモリだった。死人コウモリ。ツバサ大僧正の真の姿である。その変化に怯えた声を漏らすすずかとアリサ。渡はそんな二人を守るため、意を決して叫ぶ。

――キバットっ！

――よっしゃ！　キバって行くぜっ！

渡の声に応じ、キバットがその手へ素早く近寄る。そして、キバットを掴んだ渡は彼をそのまま運び――。

「ガブッ！」

自分の腕へ牙を突き立てさせた。その瞬間、渡の顔にステンドグラスのような模様が走る。魔皇力と呼ばれる力を注ぎ込まれているのだ。その感覚を感じながら、渡はキバットを手にして告げる。それはすずかとアリサにとって懐かしい単語。そして、同時に心強くなれる魔法の言葉。

「変身！」

その声と共にベルトへキバットを装着する渡。それを受けて渡の体が変わった。そこには銀色の鎧を身に纏った仮面ライダーがいた。その名は、仮面ライダーキバ。人の心が奏でる音を守る戦士だ。

キバは死人コウモリを前に独特のポーズを取った。キバはその腕を対極に開く構えで走り出し死人コウモリへ向かっていく。その背中を見つめ、アリサはすずかへ尋ねた。

「ね、渡って仮面ライダーなの？」

「うん。渡さんはその名前を知らなかったけど、私はそうだって思ってる。だから教えたんだ。渡さんも、キバも仮面ライダーだって」

互いの手を握り合いながら、二人はキバの戦いを見つめていた。キバの放った様子見のパンチを受け止める事もなく、死人コウモリは後ろに跳んで避ける。そしてその両腕を羽ばたかせて風を起こした。

巻き上がる砂煙。視界を封じられ、戸惑うキバ。そのまま砂煙は酷くなり、辺り一帯を覆った。すずかとアリサも堪らず目を閉じ、キバさえ身動きが取れなくなる。

そんなキバへ密かに飛行しつつ接近する死人コウモリ。キバの背後へ回り込み、その鋭い牙を肩へ突き立てようとした瞬間、その腹部へエルボーが叩き込まれた。

「ぐっ……ど、どうして分かった!?」

「お前の羽音だ。耳障りなそれが聞こえてきたのさ」

「僕は音には敏感なんだ。上手く背後を取ったつもりなんだろうけど、そうはいかない！」

キバットの言葉を補足するようにキバは告げると、動揺する死人コウモリの頭部へハイキックを決める。それで体勢を崩したところへ、追い撃ちのミドルキックを放ち軽く蹴り飛ばした。

そこから更に追撃をしようとしたキバだったが、突然死人コウモリを守るように灰色のオーロラが再度出現したためそれを断念する。そこから現れたのは骸骨を頭に被った男だった。

「キバ男爵、何故ここに……」

「行った先にキバがいないと気付いたのだ。そして見れば貴様がいない。もしやと思って他のライダーをドクトルGとヨロイ元帥に任せ、貴様の反応を追ってきたのよ」

キバ男爵はそう言うとキバへ視線を向けた。その雰囲気にキバは身構える。すると、それにキバ男爵は不敵な笑みを浮かべた。

「仮面ライダーキバ。同じ名を持つこのキバ男爵が葬ってやろう」

「仮面ライダー……その名前を使うって事は、お前達は異世界の侵

略者！？」

キバの言葉を無視し、キバ男爵も姿を変えた。そこにいたのは絶滅したはずのマンモスをモチーフにした怪人、吸血マンモスだ。その姿にキバは改めてここへ自分が来た理由を確信した。

クウガがいなくなったこの世界を怪人から守るためにキバが呼ばれたのだと。そう思うと同時に少しだけ視線を後ろへと動かすキバ。すずかとアリサは既に距離を取っていた。しかし、その視線は自分へと注がれているのを見て、キバは拳を握ってみせた。

決して負けられない。今もあの時も自分が負ける事は許されない。そう強く感じたのだ。相手が何であろうと、それが誰かを悲しませるのなら、誰かを苦しめるのなら、そして誰かの音を止めようとするのならそれを阻止するのが自分の役目なのだと。

「行くよ、キバット」

「おうっ！」

もう一度大切な存在であるキバットへ声を掛け、キバは二大幹部怪人へ向かっていく。しかし、死人コウモリと違って怪力が自慢の吸血マンモスにはキバの攻撃がそこまで通じないのか、蹴りも拳もあまり効果が無かった。

それに相手が二体になった事で、キバは空からは死人コウモリに攻撃され、地上では吸血マンモスに攻撃される事となった。結果として、キバは完全に劣勢となり徐々に追い詰められていった。

このままでは不味い。そう判断し、タツロットを呼ぼうとした瞬間だ。死人コウモリがそれを察知したのか、何かを唱えた。そして、その直後周囲から色が抜け落ちたのだ。その光景に戸惑うキバ。

しかし、すずかとアリサにはその光景に覚えがあった。そう、あのマリアージュと遭遇した際にシャマルが展開していた結界魔法。それを使った状況に似ていたのだ。

「アリサちゃん、これってまさか……」

「なのは達の魔法と同じ……？」

見覚えのある光景に驚きと疑問を抱く二人。それを気付くはずもないキバットは、フエッスルを使っても一向にタツロットが来ない事に驚愕していた。

「まったく反応がないだと？！　どういう事だ、こりゃ！」

「もしかして、この場所を一時的に隔離したんじゃ……」

キバの予想は当たっていた。死人コウモリが使ったのは、ドラスも使ったもの。つまり結界魔法だ。素体――つまりリニスから実現した技術とは魔法の事。グランショッカーはミッド式の魔法技術を科学と呪術の分野から分析し、一部分ではあるが会得したのだ。

最強形態であるエンペラーフォームを封じられ、キバは内心で焦りを感じながらも必死に二体を相手に奮戦する。吸血マンモスと死人コウモリの息があまり合っていない事に気付いたのだ。

確かに地上と空からの同時攻撃は厄介だが、そのタイミングがずれていれば何とかなる。キバはその微かなずれを懸命に掴みながら二体へ反撃をしていた。

「はっ！」

「がはっ！」

空から急降下しながら襲い来る死人コウモリへ、キバは引き付けてから迎撃するために跳び上がる。そして際どく上を押さえた瞬間、その背にかかと落としを叩き込む。それで失速し地面へ落ちる死人コウモリと入れ替わりに吸血マンモスがキバへ迫る。

「邪魔だっ！」

「くっ！　このっ！」

仲間である死人コウモリを払い除けながら、その巨体を活かしたのしかかりをキバへ仕掛ける吸血マンモス。それを辛うじてかわし、キバは全力でその横腹を蹴り飛ばした。

それで体勢を崩し、地面を転がる吸血マンモス。そこへ追撃を試みるキバへ背後から死人コウモリが迫り、その体を羽交い絞めにした。それを振り解こうともがくキバだったが、その前に吸血マンモスが起き上がってしまう。

「やれっ！」

「言われるまでもない！」

死人コウモリの声に応じるように、吸血マンモスの重い攻撃が身動きの取れないキバへ打ち込まれる。その痛みに呻くキバへ吸血マンモスは容赦なくその拳を叩きつけ続ける。それを見ていたすずかとアリサは、何も出来ない自分に悔しさを感じていた。

出来る事なら助けに行きたい。しかし、それが余計キバを苦しめる結果になる事は二人にも分かっている。故にその勝利を祈るしかない。仮面ライダーの勝利を願う事しか出来ないのだ。

（渡さん……私、信じてます）

（このままじゃ不味いわ……でも、大丈夫よ。だって渡は仮面ライダーなんだからっ！）

二人の見ている前でキバがとどめとばかりに思い切り殴り飛ばされる。それに思わず声を上げる二人。激しく地面に叩きつけられ、痛みに呻くもキバは動かない。だが、その手は握り締められている。

まだ彼は諦めていないのだ。しかし、このままでは負けてしまう。そんな弱気な考えがキバの頭をよぎる。それでもキバは痛む体で何とか立ち上がると構えた。

――僕は負けられない！　僕が……僕が仮面ライダーだと言うのならっ！

すずかから聞いた仮面ライダーの話。その名を自分へ当てはめて告げた怪人達。ならば、決して倒れる事は出来ない。どんな時でも人々のためにと強大な闇へ立ち向かった正義のヒーロー。その名を最初に自分へ与えてくれた女性の気持ちを無駄にしないために。

キバはそう思い、力強く言い切った。その言葉にすずかとアリサが思わず胸を熱くする。劣勢にも関らず、それを吹き飛ばすような頼もしさを今のキバから感じたからだ。

「渡さん……ううん。キバ、頑張ってっ！」

「安心しなさい！　あんたは仮面ライダーよ！　アタシ達が保障するわ！」

大声で叫ぶ二人。その声援を受けてキバははっきり頷くと、雄々

しく走り出す。体に感じる痛みを振り払うように。それに対して二体の怪人は動じる事もなくキバを迎え撃つ。

再び再開される二体の攻撃に耐えながら、キバは諦める事無く立ち向かう。その体に疲れや痛みが増していく中、キバは決して怯む事なく拳を、蹴りを放つ。

倒れそうになる度、或いは不意を突かれそうになる度に聞こえてくる声援を受けながら、キバは懸命に戦い続けた。だが、それも限界を迎えつつある。エンペラーフォームはおろか他のフォームさえ使えない状態では、異なる能力を持つ二体を相手に善戦するのがやっとだったのだ。

「ぐっ！」

キバが倒れた瞬間、吸血マンモスの足がその体を踏みつけた。それを払い除けようとするキバだったが、既に力では吸血マンモスに勝てない事は知っている。それでも、彼は諦めないとばかりにその足をどかそうとする。

その様子を嘲笑うかのように見下ろす吸血マンモスと死人コウモリ。二体は必死に抵抗するキバから視線を外し、声援を送り続けるすずかとアリサを見つめた。

「先にあの者達から始末するか」

「そうだな。ライダー抹殺の宴の贄には格好の存在だ」

「なっ！？　止めろ！　二人は関係ないはずだっ！」

「そうだっ！　お前らの相手は俺様達だ！」

二体の告げた言葉にキバとキバットが制止の声を上げる。それが余計怪人達を駆り立てると知らずに。二体は頷き合うと、死人コウモリがゆっくりと二人へ近付いていく。それを見て一層力を入れるキバだったが、吸血マンモスの重量と力の前には無力としか言いようがなかった。

「すずかさんっ！　アリサさんっ！　逃げてっ！！」

結局キバに出来たのは二人へ逃走を促す事だけだった。しかし、二人は逃げる事はしなかった。もう無駄だと理解していたのもある。だが、何より逃げたくなかったのだ。自分達を守るために必死になって戦うキバを見捨てるような事はしたくなかったからだ。

その場から動かない二人を見て、死人コウモリが意外そうな反応を見せる。そんな相手へ二人は勇気を振り絞って対峙する。その表情は凛々しく、眼差しには力が込められていた。

「逃げぬのか」

「そうよっ！　だって、逃げる必要なんてないじゃない！」

「何……？」

「貴方達はキバが、仮面ライダーが倒してくれるからっ！」

それは信頼。それは願い。仮面ライダーの強さを知っている二人。故に逃げる事はしなかった。彼らに守られるだけだったすずかとアリサ。だが、邪眼が消えた後になのは達と会った際、二人はそう思っていた事を告げるとこう言われたのだ。

守られるだけじゃなかったはずと。それは、五代達も二人が居たからこそ戦えた部分もあるはずだとの言葉。ライダーは一人で戦う

訳ではない。その理解者に心を支えられている部分もある。だから決して守られているだけではないと教えたのだ。

その言葉を胸に二人はその場に残っていた。キバは逃げろと言ったが、決して逃げはしないと決意して。圧倒的に劣勢のキバの心を支えるために。最後まで共にあるために。

「いいだろう。まずはその口を聞けなくしてくれる」

死人コウモリは二人の言葉を笑い飛ばすようにあっさりと告げ、その手を振り上げた。それにも二人は目を閉じる事はしない。毅然と睨みつけたのだ。そして、死人コウモリの手が二人へ振り下ろされ――――なかった。

――――ったく。いきなり何しやがる。

その手は、突如として出現した白みがかったオーロラから現れた存在によって受け止められたのだ。

「き、貴様は……」

「「仮面ライダーっ!?」」

二人の目の前に立っていたのは、黄色の目をした銀色の体の仮面ライダー。ファイズはその二人の声に軽く視線を動かしてから、自分が手を掴んでいる相手へそれを戻す。

「成程な。とりあえずお前は俺が相手してやるぜ」

「ほざけっ！」

ファイズの軽い言葉に怒りを示し、もう一方の手で攻撃する死人コウモリ。それをファイズは素早く右足で蹴り上げ、掴んでいた手を離すと同時にその体へ思い切り左足を叩き込んだ。

「ちょ、ちょっと」

「これ持ってろ」

何か言おうとするアリサを遮り、ファイズは手にしていたファイズブラスターを返事代わりとばかりに押し付けた。それを反射的に受け取るアリサ。すずかもそんなファイズの行動で呆気に取られたようにファイズブラスターへ視線を向けた。

そんな二人の前では、先程の攻撃による衝撃で後方へ転がっていた死人コウモリへ追撃をしようとするファイズがいた。だが、ファイズはその途中で吸血マンモスに押さえられているキバに気付いた。その互いの視線が一瞬だけ交差する。それだけで何かを感じたように頷く両者。

「はっ！」

「ぐっ！」

ファイズの登場に意識を奪われた吸血マンモス。そのため押さえつける力が若干だが弱くなった事に気付いて、キバは右拳を全力で炸裂させた。その痛みで相手が微かに呻くと共に僅かに足を上げる。その瞬間、キバは素早く転がると吸血マンモスから離れて体勢を整えた。

そこへファイズが合流した。死人コウモリが空へ逃げたため、ならばとキバの援護をしようと考えたのだ。お互いの事をしばし見つ

めるキバとファイズ。その雰囲気から相手も自分と同じような存在かもしれないと感じる二人。

「お前も仮面ライダーってやつか？」

「え？　は、はい。キバって言います」

「キバ……そうか。こっちはファイズだ。行くぞ」

（あいつと同じ響き、か。何だかな。妙な感じだぜ）

キバの名乗りにあの忘れる事の出来ない相手を思い出し、懐かしさを覚えながらも話は終わりとばかりにファイズは走り出す。それに続くようにキバも走る。吸血マンモスを相手に格闘戦を挑むファイズへ空からの襲撃を行う死人コウモリだが、その行動は出来ずに終わる。キバがそうはさせじと飛び掛かったのだ。

こうして一対一の状況を作り出す二人の仮面ライダー。そんな中、キバとファイズは互いから親近感のようなものを感じ取っていた。それが何を意味するのか分からないが、それでも何故か悪い気はしない感覚を。

（何故だろう……あの人から親しみを感じるような気が……）

（何だ？　この感じ……どこかで会った事でもあったか？）

共に異種族の間を生きるために様々な問題とぶつかってきた両者。それでも、最終的には同じ答えを出した二人だからこそ、その心の在り様をどこかで感じたのかもしれない。

そんな不思議な感覚を抱く中、キバとファイズは目の前の相手を倒すために奮戦する。その彼らへすずかとアリサの応援が響く。そ

れを受けて、更に動きを鋭くしていくキバとファイズ。

キバはあの死人コウモリへ告げた二人の言葉と気持ちを噛み締めながら。ファイズは突然現れた自分へ心からの声援を送ってくる二人の事を好ましく思いながら。

だが、中々両者共に状況を好転出来ない。キバは死人コウモリの飛行能力に苦しめられ、ファイズは吸血マンモスの頑丈さに苦しめられていたのだ。

「両方とも決め手に欠けるって感じね」

「うん。でも、渡さんの方は飛べなくさえ出来れば何とかなりそう」

「あっ！　そうよ。これを使えばもしかして……」

すずかの指摘にアリサはある事を思い出し、ファイズブラスターを足元へ置いて何かを取り出した。それは、あのマリアージュに襲撃された時から携帯するようにした強力なスタンガンだ。それは邪眼が倒れた後も護身用として持ち続けていた物だった。

すずかはアリサが何を考えてそれを取り出したのかを理解し、そのスタンガンを手に取った。今、死人コウモリはキバにしかその注意を払っていない。そこを突いて自分がこれでキバの援護をしようと考えたのだ。

「やっぱりこうなるか。でもすずか、気をつけなさいよ」

「大丈夫。知ってるでしょ？　私は普通の人よりも運動能力高いんだから」

アリサの言葉にすずかはそう微笑みながら明るい声を返して走り

出す。そして、キバを襲う死人コウモリの翼へスタンガンを押し当てた。その瞬間、その体へ凄まじい電撃が走る。

怪人と言えど不意を突かれ、尚且つ強度が強くない部分を狙われれば動きを鈍らせる。キバは死人コウモリの後ろにいるすずかに気付いて驚きを浮かべた。その視線にすずかも気付いて笑みを見せると、キバは小さく頷き返して動いた。

「「これでっ！」」

キバとすずかの声が重なる。電撃によって受けたダメージからよろめく死人コウモリへキバは接近すると、その翼を掴み力の限りに引き千切った。激痛に呻く死人コウモリへキバは更に回し蹴りを放ち、すずかの安全を確保する。

「すずかさん、どうして……」

「渡さんを助けたかったんです」

「おのれぇぇぇ！　人間風情が！」

キバの問いかけにはっきりと答えるすずか。それに何か言おうとするキバだったが、それを遮るように死人コウモリが叫んだ。その声に視線を動かすキバとすずか。

「後はお願いします、渡さん！」

「はいっ！」

「ウェイクっ！　アップっ！」

すずかの勇気ある行動によって掴んだ好機。それを逃すまいとキバはキバットヘフエッスルを吹かせる。その直後、周囲を黒い雲が覆って夜が訪れる。その変化に驚く周囲を他所に、キバの右足が鎖による戒めから解き放たれて覚醒する。

満月を背に、キバは右足を高々と上げ左足を深く曲げる。そしてそこから跳躍すると同時に蹴りの姿勢のまま死人コウモリへと急降下した。それはキバのライダーキック。ダークネス・ムーンブレイクだ。

「はあっ！！」

「ぐ、グランショッカーに栄光あれぇぇぇぇ！！」

幾多の邪悪なファンガイアを打ち倒し、人々を守ってきた技が死人コウモリを直撃した。断末魔を上げながら爆発して散る死人コウモリ。それを見届けるとすずかは安堵の笑みを浮かべてキバへ駆け寄るのだった……

一方、ファイズは吸血マンモスの猛攻を受けて劣勢になり始めていた。一度グランインパクトを炸裂させたのだが、そのダメージから相手は立ち直ると怒りのままに現状のような猛攻を始めたのだ。

このままでは押し切られる。そう考えるも、ファイズには中々有効な手がない。思いついているのは遠距離から攻撃するか、或いは何かリーチのある武器を使う事。

だが、フォンブラスターでは威力に難があるし、何よりそれを準

備する暇がない。かと言ってファイズブラスターを取りに行く事も出来ない。アリサを巻き込む可能性があるからだ。

（せめてあいつの牙さえどうにか出来れば……あの武器が欲しいところだな）

思い浮かべるのはオートバジンのハンドルにもなっているファイズエッジ。しかしオートバジン亡き今、それを手にする事は出来ない。そんな事を考えた時だ。ファイズの脳裏に響く声があった。

＞巧、しゃがむんだ！＜

「いきなり何だよ?!」

ミライの声に反応し、吸血マンモスの攻撃を避けながらファイズはその場にしゃがむ。その瞬間、ファイズの頭上を何かが通り過ぎた。それはキバ。死人コウモリを倒し、彼はファイズの元へと駆けつけたのだ。

「はっ！」

「おのれっ！　役立たずめ！」

キバの飛び蹴りを受け後ろへ下がる吸血マンモス。相手から視線を外さず、キバは構えたままで後方のファイズへ声を掛けた。

「大丈夫ですか?」

「まあな」

「後はこいつだけです。一気に行きましょう！」

言葉と共に走り出すキバ。それに返事を返す事はないファイズだったが、行動だけは呼応するように走り出した。相手が二人になった事を受け、吸血マンモスは狙いを定める事が出来なくなり動きに無駄が増えていく。

それを好機とばかりにキバとファイズは攻め立てていく。キバの拳を吸血マンモスが受け止めるが、その止めた腕をファイズが力強く蹴り飛ばす。だが吸血マンモスも反撃を忘れない。二人を薙ぎ払うようにその太い脚を繰り出した。それを何とか受け止めようとする二人。しかし、そのパワーはやはり強く、その体は地面を滑るように数歩下がる。

「くそっ！　何て馬鹿力だ！」

「二人でも力比べは無理ですね……何とか動きを止めないと……」

何度も格闘戦をやったキバは理解した。自分とファイズでも吸血マンモスの力を受け止めきれないと。故に打ち勝つには現在出来る自身の最大攻撃を放つしかない。だが、それは若干の隙を生じるのだ。

「動きを止める、か」

「え……？」

「少しだけ一人であいつを相手しろ。俺が動きを止めてやる」

戸惑うキバへファイズはそう告げると視線を向けた。それはまるでキバへ出来るかと問いかけるようだった。ファイズが現れるまで

一人で二大怪人を相手していたキバ。そのダメージをファイズは動きから察していたのだ。
　故に出来るかどうか心配していた。その気持ちをキバも理解したのだろう。ファイズへ何か言葉を返す事無く、キバは雄々しく吸血マンモスへ再度向かって行く。

「……ホントに行きやがった」

＞彼は信じているんだ。君の事を＜

　ファイズポインターへミッションメモリーを挿入するファイズ。吸血マンモスと戦うキバを眺めながらのその呟きに、ミライが返した言葉は静かな力強さがあった。それにどこか嬉しそうに笑みを浮かべ、彼は手にしたファイズフォンのＥＮＴＥＲを押してベルトへ戻す。
　その瞬間、音声と共にフォトンストリームを経由してフォトンブラッドが右足へと流れていく。これで準備は整った。そう思ってファイズは手首を軽く振るとキバへ声を掛けた。

「行くぞっ！」

「はいっ！」

「何だ？　何をするつもりだ」

　突然声を掛け合う二人に戸惑う吸血マンモス。それを無視してファイズは地を蹴って跳び上がった。そしてその両足が吸血マンモスへ向けられた瞬間、真紅のポインターが吸血マンモスを捉えた。

「こ、これは……動けんっ？！」

その言葉を聞くまでもなく、キバは手にしたフエッスルをキバットへ吹かせていた。直感的に悟ったのだ。この拘束は長くはもたないと。キバが必殺の体勢へ移行する横でファイズも蹴りの姿勢のまま吸血マンモスへ向かって行く。

「これでっ！」

「どうだっ！」

吸血マンモスの二本の牙をへし折りながら炸裂する二つのライダーキック。ダークネス・ムーンブレイクとクリムゾンスマッシュが頑強な怪人を崩壊へと導いていく。その凄まじい威力に遂に吸血マンモスも耐え切れなくなり……

「じ、地獄で待っているぞ！　仮面ライダァァァァ！！」

ダブルライダーの必殺技を受けながら吸血マンモスはそのまま地面に倒れる事なく爆散したのだ。それを合図に周囲の色がゆっくりと元に戻っていく。二人のライダーはその爆風を抜けるように着地しゆっくりと立ち上がる。

しばらく黙っていた二人は、やがて同じタイミングで変身を解除した。そしてそのまま隣へ視線を動かして無言で互いを見る渡と巧。すると渡が巧へ頭を下げた。そんな行動に軽い驚きを浮かべる巧。どうして頭を下げられたか分からなかったのだ。そんな彼へ渡は告げた。

――――さっきは二人を助けてくれてありがとうございます。それに僕の事も。

――あれか。勘違いすんな。あれは、先にあいつが俺に手を出してきたのを受け止めただけだ。別にあの二人のためじゃない。あと、お前を助けた訳でもないからな。だから頭上げろ。迷惑なんだよ、勝手な誤解されんのは。

その巧の言葉に渡はやや戸惑いながら頭を上げた。そこへ渡の名を呼ぶ声が聞こえてくる。それに視線を動かすとすずかとアリサが自分を見て微笑んでいたのだ。それが安堵から来るものと思って渡は嬉しくなった。

巧はそんな渡を見てから、その周囲を飛ぶキバットへと目をやった。どう見ても普通じゃない存在。それを認識し、巧は周囲へ視線を動かしてから気付かぬよう小さく笑みを浮かべた。

（こいつら、この変なコウモリもどきを何とも思ってないんだな）

明らかに人外のキバットを受け入れ、平然としているすずかとアリサ。それを実感し巧は思った。どこにでも異種族を受け入れる者はいるのだと。それが彼にとっては嬉しく思えたのだ。と、そこで巧へミライがある提案をする。

それはここへ来た理由を話して渡達の話を聞く事だ。別世界に来たのは間違いないと踏んだミライとしては、出来るだけ多くの情報と仲間を得ておく事を勧めたのだ。

＞彼も仮面ライダーと呼ばれる存在ならきっと君の力になってくれる。それに、あの白い相手は君一人じゃ倒す事は厳しいはずだ＜

＞あいつの力は必要ない。俺があいつを倒さないと意味がないんだ＜

＞巧、彼を巻き込みたくないのは分かる。でも彼は君と同じだ。そう、誰かを平気で犠牲にする存在と戦っている。だから今回のよう

にあの白い相手を放ってはおかないはずだ＜

＞なら余計にだ。あいつが出会う前に俺が倒す＜

＞君に出会う前に彼が出会ったらどうする？　それにさっきの戦いを思い出して欲しい。彼はあの二人を守って戦っていた。僕と出会った時、君も同じように二つの命を守っていたじゃないか＜

＞あー、分かった分かった。もう黙ってろ＜

ミライの指摘に渋々納得し、巧は意識を現実へ戻して渡達を見つめた。その視線に気付き、渡達も巧へ視線を向ける。

「俺は乾巧だ。お前は？」

「あ、僕は紅渡です」

「私は月村すずかです」

「アリサ・バニングスよ。アリサでいいわ」

「で、俺様がキバットバット？世だ」

巧の自己紹介に応じる形で渡達も名前を告げていく。そこで巧が自分の事を話し始め、渡達からの情報を得ようとした。そうして巧の事情を聞き終えた渡達は揃ってある事を考えた。それは渡と同じく、巧も怪人達と戦うためにこの世界へ呼ばれたのではないかというもの。

そう考えて今度は渡が巧へ自身の事を話し出す。そんな彼らを見つめ、すずかとアリサは二人になのは達のいる魔法世界の話をする

事を決意していた。あの怪人が使ったものが結界魔法と酷似していたためだ。

やがて、そこへタツロットを伴ったファリンとイレインが姿を見せた。渡が戦っている事に気付いたタツロットだったが、あの結界魔法のせいでその反応が感知出来なくなり、しかもそれがこのコテージの周囲だけではなく、森全体を覆っていたために近寄れなかったのだ。

「渡さ～ん！　せんぱ～い！　すずかさ～ん！　ご無事ですかぁ～」

「「「タツロット（君）？」」」

「ああ、あいつはそんな名前だったのね」

「……何だよ。コウモリみたいなのがまだいるのか」

＞機械？　違う……あれも生命体だ＜

疑問符を浮かべる渡達三人。それとは違い、姿だけは知っているアリサはようやく名前を知る事が出来て納得していた。巧は異種族がキバットだけではなかった事に呆れ、ミライはその存在に軽い驚きを感じていた。

「タッちゃん、待って。もう、慌てん坊なんだから」

「何だ、渡達は無事じゃないか。タツの奴が危ないって言うから急いで来たんだけど……そうでもなかったみたいだな」

ファリンとイレインは渡達が無事なのを見てタツロットの勘違い

と判断した。しかし、そんな彼女達へすずかが先程の事を話し、更に巧の事を紹介したのだ。二人が抱くだろう怪人の出現による驚きと恐怖を、ファイズという仮面ライダーの存在が打ち消すと信じて。

その予想通り、ファリンとイレインは安堵の息を吐いた。仮面ライダーがいるだけでも心強いのに、それが二人ともなればその安心感は絶大だったのだ。

「成程な。グランショッカー、か。ま、ライダーが二人いれば大丈夫だろ」

「ですね。でも、見てみたかったなぁ。キバと……ファイズでしたっけ？」

「俺は見世物じゃない」

ファリンの問いかけに巧は素っ気無く返す。それがどこか怒っているようにも聞こえて、ファリンは慌てて頭を下げた。五代もクウガへの変身能力を好ましく思っていなかった事を思い出したのだ。

故にその心情も考えずに軽い気持ちで言っていい事ではなかったと悟り、誠心誠意で謝るファリンに巧もどこか困ったような反応を示す。巧へミライが色々と言っているからだろう。

そんな巧を眺め、イレインは何となく彼が自分と近い人間だと感じ取っていた。素直に物を言う事が出来ないのだろうなとそんな風に考え、イレインはファリンへ頭を上げさせた。

「ファリン、もう止めとけ。こいつもそこまで怒ってないみたいだ。むしろ、お前がそんなに謝る事に困ってるように見えるしな」

「えっ？　あの……許してくれるんですか？」

「だろうさ。な？」

そのイレインの問いかけに巧は無言で手を振る事で返事とした。もうその話は終わりだと、そう言うような動きで。それが照れたイレインと似た印象を与え、ファリンは巧の事を感覚的に理解して小さく笑みを浮かべた。

そのファリンの表情で周囲も笑顔を見せる。ただ、巧はそんな周囲をやや戸惑いながら見つめていた。自分の愛想が悪い事を気にしている者が一人もいなかったからだ。それにどこか拍子抜けしたように感じる巧の脳裏へミライの嗜めるような声が響く。

＞巧、さっきもそうだけど、もう少し言い方を考えた方がいいと思うよ＜

＞ほっとけ。こういう言い方しか出来ないんだ＜

＞じゃ、僕がどう答えた方がいいかを教えようか？＜

＞余計なお世話だ＜

ミライの言葉にそう返事を返す巧。その顔は不機嫌さを前面に押し出している。その彼の前では、ついでだからと夕食はここでバーベキューをしていこうとアリサとファリンが言い出していた。

それにキバットとタツロットが嬉しそうに賛成し、イレインがそんな二人に呆れ、すずかと渡が苦笑している。そんな光景に気付き、巧はふとあの戦いの日々での賑やかで楽しかった頃を思い出して少し遠い目をするのだった……

すずかとアリサを守るため、一人戦うキバの窮地に現れたファイ

ズ。二人は協力しデストロン幹部怪人を撃破する。
しかし、怪人が使った術がすずかとアリサへ魔法を連想させた事は、二人へ想像だにしない事を教える事になる。
そしてミライにもそれは大きな意味を持つ。あの親子が暮らしていた場所。そのもう近くまで来ているのだから……

――

まずはキバ編。ここにファイズが合流です。ご指摘を受け、後半の展開を修正しました。
次回は響鬼を予定。

極める音撃

「えっと次は……」

手元のメモを見つめ、シャマルは現在位置から一番近い品物を考える。そんな彼女の後ろには両手でカートを押す男性がいた。

「な、シャマル。まだ買うのか？」

「仕方ないでしょ？　頼まれた物が多いんだもん」

ヒビキのやや疲れた声にシャマルは少し拗ねた声を返す。場所はクラナガンにある大型スーパーマーケット。今日は月に一度のイベント。特大安売りの日なのだ。

本来ならばリインが買い物へ出かけるのだが、生憎イクスヴェリアの学校での保護者参加行事が重なった。そのため、非番のシャマルへ白羽の矢が立ったという訳だ。ヒビキは運悪く非番だった事を知られていたため、彼女に荷物持ちとして駆り出されて現状に至る。

「いや、そうじゃなくてだな。何でまだ日用品のコーナーを見てるんだ？　もう十分買っただろ？」

「あのねヒビキさん。今までのはみんなで共用する物で、これからは個人用の買い物なの。例えば……歯ブラシとかね。分かった？」

最後をややお姉さん風に締め括り、シャマルはすたすたと歩き出す。その背中を見つめ、ヒビキはどこでも女という生き物は変わらないのだなと痛感した。そんな彼へシャマルが早くと催促し、その声にヒビキは苦笑しながらカートを押すように歩き出す。

ヒビキが特務六課へ関るようになって一月。彼はすっかり八神家の者達に馴染み切っていた。スバルとも関りがない訳ではないが、彼女は激務である救助隊所属。故に中々会う事は無かったのだ。

現在ヒビキは基本的に六課の宿舎で寮生活をしている。しかし、奔放な性格の彼は窮屈さもある寮生活を苦手としているため、それをはやてへ告げたところ、たまの休みに八神家へ泊まる事を提案されたのだ。

それもあって彼はリインやイクスヴェリアとも顔見知りとなっている。ヴィータとは泊まりに行った際に一度だけ会う事があり、子供扱いをして少々揉めた思い出を作った。その際の事を思い出し、小さく笑うヒビキ。すると、シャマルが当然何かを思い出したように振り返った。

「そういえば、ヒビキさんって音で戦うって言ったけど」

「ああ」

「もし怪人が現れたとしたらそれで倒せる？」

シャマルの問いかけにヒビキは少し考え、分からないと返した。そう、彼は怪人を音撃で倒せるかは知らないのだ。やった事が無いからなのだが、それでも出来ないと返さなかったのは理由がある。

それはあの謎の相手。ヒビキがこのミッドチルダへ来る原因となった鳥の怪物である。もうヒビキは、それを魔化魍ではなく怪人と捉えている。故にそれと戦った際、音撃である鬼神覚声が痛手を負わせた事を理由に可能性はあると考えていたのだから。

「倒せるかもしれないし、倒せないかもしれない。でも、多分通用

すると思うな」

「……つまり決め手になるかはやや不安があるって事か。やっぱりヒビキさんは私達の知る仮面ライダーとは違う部分が多いなぁ」

ヒビキの答えを聞いて、シャマルはそう不思議そうな声を返した。スバルが紹介した際の異世界の仮面ライダーとの言葉。それをはやて達は最初真司のような変身方法が違う程度にしか思っていなかった。

しかし実際に話を聞いて、その姿や力を知るにつれてそんなものではないと思い知ったのだ。中でも特に驚いたのが音を使って戦っていた事。清めの波動を送り込む事で邪悪な存在を撃ち払っていた鬼。それが一番の驚きだったのだ。

「そうだな。そもそも俺達は鍛えてなるものだから。不思議な石とか光とかで変身する訳じゃないし」

「そこが凄いんだけどね。でも本当に成り立ちから能力まで違うのに、やっていた事だけは見事に一致してるんだから感心しちゃうわ」

「みんなの笑顔のため、か。確かにそこは鬼も仮面ライダーも同じものを守ってる。平行世界の鬼っていうのが納得出来るのはそこだもんな」

「ふふっ、みんなの笑顔を守る優しい異形の存在。それは私達からすれば、みんな仮面ライダーなのよ」

「みたいだな」

互いに笑みを浮かべるヒビキとシャマル。こうして二人は買い物

を続け、ヒビキは両手一杯に荷物を下げて八神家へ向かう事となる。その量を見てもシャマルは心配しない。何故なら、そう聞けば必ずヒビキはこう答えるからだ。

――自分、鍛えてますから。

シュッといつもの仕草と共に。それを知るからこそシャマルは何も言わない。スバル曰く「五代さんが少し年齢を重ねた感じ」のヒビキ。どこか空気感も近いものがあるため、その感想ははやて達も納得しているのだ。

（五代さん達が元の世界へ帰ってもうすぐ一年になろうとしてる。せめて真司さんだけでもって、そう思ってたんだけどなぁ……）

未だにジェイル達が帰ってきたとの連絡はない。新たに八神家の一員となったアギトは、毎朝必ずシャッハへ連絡を入れてその事を尋ねているのだ。やはり親しかった彼らの事が気になるのだろう。

真司が帰った後、シグナム付きの融合騎となった彼女。だが、最初二人はどこかぎこちなさがあった。だからだろうか、シグナムは自分は龍騎程アギトに相応しいロードとは思っていなかった事もある。しかし、それを聞いたアギトが笑ってこう言ったのだ。

――シグナムって結構自信家だったんだな。

――何？

――相手は仮面ライダーだぜ？　それにベルカの騎士として勝負を挑んでどうすんだよ。それにアタシからすれば、シグナムはベルカの騎士として、真司は仮面ライダーとして、どっちも理想のロー

ドなんだからさ。

その言葉にシグナムはしばらく呆気に取られたのだが、やがておかしくて仕方ないとばかりに笑い出してそれに同意したのだ。仮面ライダーと張り合うのは間違っていた。自分は人として彼らと共に歩むのが正しい姿だったと言いながら。

その日以来、二人は見事なコンビとなった。微かに存在していたぎこちなさは消え、完成されたベルカの騎士と融合騎となったのだ。その出来事を思い出し、シャマルは若干遠い目をした。

「どうかしたのか？」

「え？　あ、うん。ちょっと思い出す事があってね」

それに気付いたヒビキが不思議に思って問いかけるも、シャマルはそれに微笑みを返すのみ。そんな彼女の反応に疑問符を浮かべるヒビキだったが、あまり気にしない事にしたのだろう。ならばと無言で歩き続けた。

シャマルはそんなヒビキの対応に苦笑しつつ、小さく感謝する。ヒビキは基本的に個人的な事へあまり首を突っ込まない。それでも相手が悩み困っているのを見るとそれとなく声を掛けたり、相談に乗ったりするのだ。

それがシャマルには五代や光太郎に近い印象を与え、ヒビキの事を仮面ライダーと思う一つの要因となっている。きっと仮面ライダーになる者は、誰もが他者の事を見ていないようで見ているのだろう。

そんな風に周囲へ意識を向け、その者なりの方法で手助けをしたり或いは支えたりするのではないか。そうシャマルは考えている。みんなの笑顔のためにと戦える心とは、そういう部分からも表れて

いるはずだと。

バスを利用し、クラナガンから郊外へ向けて少し南を目指すヒビキとシャマル。賑やかな街中を抜けた先に見える海を望める静かな高台。そこにあるのが八神家だ。ちなみにヒビキがここを訪れる際はバイクを利用している。しかも、そのバイクとはランドチェイサーなので目立つ事請け合いだ。

「ただいま～」

玄関のドアを開け、シャマルは明るい声を出す。しかし当然ながらそれに答える者は誰もいない。時刻はお昼時。リインはまだ学校でイクスヴェリアと一緒にいる頃だ。

（今頃はお昼を一緒に食べている事をイクスが喜んでいるわね。ヴィヴィオは士君が来てるらしいからご機嫌でしょうし）

八神家の者達はイクスヴェリアやリインを通じて士の事を知っている。しかし、彼が仮面ライダーとは知らないのだ。士が口止めした訳ではない。イクスヴェリアは士の話を聞いて、世界の破壊者との名を彼に名乗らせたくないためにそこを教える事を避けたのだ。

なのは達は士の旅路を詳しく聞いたためにそれを周囲へ教える事を避けた。騙された形になったとはいえ、仮面ライダー達を倒した事もある士。そんな彼の過去へあまり触れさせたくないと考えたためだ。

故にシャマル達にとっては、士は最近高町家に現れた次元漂流者でしかない。性格などを簡単に聞いているので少し不安はあるが、ヴィヴィオもイクスヴェリアも懐いているためにそこまで心配はしていなかった。

「な、これはどこへ置けばいいんだ？」

「あ、その二つは玄関でいいわ。そっちは……とりあえずリビングまでお願いしていい？」

「分かった」

ヒビキの声に振り向き、シャマルはその手にある荷物を簡単に選別して指示を出す。それを受けてヒビキがキビキビと動き出すのを見て、シャマルは荷物運びのお礼代わりに昼食を作ろうと思い立つ。

荷物を運ぶヒビキを他所に上機嫌でエプロンを着け始めるシャマル。そんな彼女を見て何故かヒビキは不安を抱く。しかし、その理由がまったく思い当たらず首を傾げるのみだった……

【分かりました。ありがとうございます】

【気にするな。まぁ、今度は前もって連絡を入れておけ】

八神家へヒビキ達が到着する頃、特務六課隊舎にある食堂ではやては家族である守護騎士達と共に食事をしていた。そんな中、シグナムはかつての部下からの念話を受けながら、はやての話に嫌な予感を感じて声を出した。

「ジュエルシード……ですか？」

「そうなんよ。フェイトちゃんから聞いたんやけど、突然出現した灰色のオーロラから現れた青い奴が盗んでったらしいわ」

シグナムが声を潜めて告げた言葉にはやてはそう返してため息を吐いた。スバルからヒビキ来訪のキッカケを聞いているためだ。何せ灰色のオーロラとはヒビキがここへ来る事になった要因。それを使う存在ともなれば、下手をすると異世界を自由に行き来出来る事になる。

そんな相手が手に入れたのがロストロギアであるジュエルシードなのだ。その恐ろしさをはやてはフェイトから聞いた。願いを叶える宝石だが、それが暴走すれば次元世界を滅ぼす規模の次元震を引き起こすと。

（もし異世界……それも翔一さんや五代さんの世界でそれを暴走させられたら……）

いかにアギトやクウガといえどそれを防ぐ事は無理だろう。彼らに封印魔法は使えないのだ。つまり……と考えたところではやては頭を振った。あくまで想像でしかないと思ったのだ。

それでも、それが絶対にないとは言い切れないために不安は消えない。しかも相手は謎の召喚能力を使う存在。それはフェイトから聞いた情報で得た知識。しかも、ヒビキの話を考えると怪人を操っている可能性さえあるのだ。はやてはもしかすると邪眼以上の強大な敵となるかもしれないと警戒心を抱いた。

「主、青い奴とはどういう相手なのですか？」

「どうもおかしな銃を持っとってな。それで召喚魔法みたいな事が出来るらしいんよ。おかげで警備しとった魔導師達は困惑して苦戦。でな、これはまだ確証はないんやけど……」

ザフィーラの問いかけにはやては真剣な表情で答え、一度言葉を切る。それに思わずシグナム達も息を呑んだ。

――召喚する時、こう聞こえたそうや。カメンライドって……

その発言にシグナム達の表情が一変する。それは驚愕。カメンライド。それを聞いて彼らが思い出すのは当然仮面ライダーとの響きだ。更にはやてが告げた内容がそれを肯定していく。

その声と共に出現した存在は仮面ライダーに似ていたのだ。彼らは知らないが、その際召喚されたのはライオトルーパーという名の存在だった。それ故に、余計見る者へ召喚魔法らしさを感じさせてしまったのだから。

「はやてちゃん、それって……」

「仮面ライダーの力を悪事に利用してるってのかよ、そいつ」

「かもしれん。今、フェイトちゃんは一旦クラウディアを離れてティアナと二人でその事件を担当しとるそうや」

ツヴァイとアギトの信じられないという声にはやては無表情で応じた。しかし、その手は強く握り締められている。彼女は怒っていたのだ。仮面ライダーの名を、その存在を汚すような事をしている存在に。

そう、青い体の存在――ディエンドは、あのシャッハから聞いた情報を基にあるロストロギアを見つけ出したのだ。それがジュエルシード。何せ持つ者の願いを叶えるという情報が先行している。それを彼が狙ったのには訳があるのだが、それはまた別の話。

よって、こうして管理局からジュエルシードというロストロギアが奪われる事となった。なのはとフェイトを出会わせたキッカケ。それを再び追う事になるフェイトはどんな気持ちなのだろう。そうはやてが考えた時だ。

「主、一つよいでしょうか？」

ザフィーラが何かに気付いたように声を出した。それにはやて達の視線が動く。

「何や？」

「もしその相手がライダーの力を悪用しているのなら、それを止めるためにヒビキは呼ばれたとも考えられませんか？」

「……一理ある。ライダーを止める事が出来るとすれば、それは基本ライダーしかいないからな」

シグナムはそう呟いて視線をはやてへ向けた。ザフィーラの意見を支持するというものだ。それを受けてはやてもやや真剣な表情で考え込み始めた。ヒビキの事をフェイト達に話すべきかと思ったのだろう。

「じゃ、ヒビキは偶然じゃなくて来るべくして来たって事かよ？」

「だとしたら、もしかするとライダーが他にも呼ばれているかもです」

アギトの言葉にツヴァイがどこか嬉しそうな声を出した。それにシグナムとザフィーラが視線を向ける。その根拠を聞かせて欲しい

と思ったのだ。そんな二人の気持ちを理解し、ツヴァイは小さく咳払いをしてから告げた。

この世界へ出現したライダーの力を悪用する謎の青い存在。とすれば、それは邪眼と同じく魔導師達だけでは戦う事が難しい相手。そこへ響鬼という仮面ライダーが現れた。ならばあの邪眼の時と同じで一人だけではない可能性が高いと。

「だっていくらヒビキさんでも、たった一人で複数のライダーを相手にするのは無理なのですよ」

「確かに邪眼へ対抗するためのライダーは最終的に四人。そう考えると、今回もヒビキ一人とは考え難いという事か」

シグナムの確認へツヴァイは力強く頷いた。それを見てザフィーラも小さく頷き、はやてへ視線を向ける。

「主、有り得ない話ではなくなってきたようです。五代や城戸の例もあります。一度親しい方々へ聞いてみてはどうでしょう？」

「せやな。五代さんみたいにすずかちゃんかアリサちゃんのところへ現れてるかもしれんし、予言を出すカリムもないとは言い切れん。ついでに予言がまた勝手に出とらんか聞いてみるわ」

それで話は終わったとばかりにはやては笑顔で締め括る。そこから彼女達の話題は、今頃楽しい時間を過ごしているだろう家族達へと移っていくのだった……

「……意外だわ」

「何が？」

「ヒビキさんがお料理出来るなんて」

シャマルは自分の隣でエプロンを着けているヒビキを見つめ、呆然と声を出していた。シャマルが昼食を作り出した事を受け、ヒビキは手伝いを買って出たのだが、彼女はその手際に感心するしか無かったのだ。

それもそのはず。ヒビキは鬼としては珍しく、特定の師を持たずに自力で鬼となった男。故にその日々を送る時間が彼の料理の腕前を鍛えたのだ。ヒビキは自分の事を見直しているシャマルへ少し自慢そうな顔を見せた。

「まあな。こう見えても結構出来るんだ」

「う～ん……いい旦那さんになれるわよ、ヒビキさん」

「そりゃどうも。ま、俺には縁のない話だろうけどな」

シャマルの評価に笑みを返し、ヒビキはそうあっさり告げると切り終えた野菜をフライパンへ入れる。野菜炒めを作るのだ。シャマルはその間に味噌汁を担当する。日本の味に慣れ親しんでいるヒビキは、八神家に来ると決まって和食を頼むのだ。

ミッドも日本の食材がない訳ではないし、六課食堂も日本食を出してはいる。それでも、やはりヒビキが一番和の味と思うのは味噌汁。それを知っているシャマルは、はやてとの日々で覚えた知識と記憶を頼りに作り始めるのだが……

「先に味噌を溶かしてどうすんだ。味噌は後だよ、後」

「わ、分かってます！」

鍋の中へ真っ先に味噌を溶かそうとして注意され……

「……これ、味噌の味しかしないんだけど……出汁はどうした？」

「あれ？　出汁入りの味噌だと思ったんだけど……」

「間違えたんじゃないか？」

味見を頼めば指摘を受ける……と、このような有様だった。それでもヒビキはどこか楽しそうに笑っていた。それが妹か娘でも見るような眼差しだったため、シャマルは若干の気恥ずかしさを覚えながらの時間となる。

そんなこんなで白米にわかめと豆腐の味噌汁、野菜炒めと焼き魚という変則和定食が出来上がったのだった。それを見て頷くヒビキの隣には、やや落ち込み気味なシャマルがいた。

「はぁ～……私って進歩ないのかなぁ？」

「俺は昔のシャマルを知らないけど、そんな事は絶対無いと思うぞ。そうやって失敗を悔やむ気持ちがある奴なら、今日より明日は少し成長するもんだ」

だから気にするなと言いながら、ヒビキは軽く肩を落とすシャマルを励ますように笑うと、早速とばかりにテーブルへ着く。それにシャマルもそれもそうかと頷き、気を取り直してテーブルへ。そし

て揃って手を合わせてお決まりの言葉と共に箸を持つ。
時刻はもうすぐ午後一時を迎えようとしていた。それを確認し、ふとヒビキは目の前で白米を口へ運ぶシャマルを見つめて不思議に思う。彼は知っているのだ。シャマル達守護騎士達が人間でない事を。

それは初めて八神家を訪れた際の事。リインへ自己紹介した際、その外見がツヴァイとよく似ているので気になって聞いたのだ。どういう関係なのかと。
そこで姉妹だと言われた時は驚いたのだ。何せツヴァイは物語に出てくる妖精のような大きさなのだから。それが本当に妹だと言われた時、ヒビキはリインから説明されたのだ。

――私やシグナム達は厳密には人間ではないのだ。

――えっと……使い魔っていう種族？

――違う。私達は……プログラム生命体とでも言えばいいのだろうか。つまり人為的に作られた存在なのだ。最初からこの姿として生み出されてな。

――……そっか。それで昔の写真を見ても今と大して変わってないのか。

その事を思い出し、ヒビキは改めて感じる事がある。それは彼ら守護騎士達は紛れも無く人間だという事。例え人工的に生み出された命だとしても、家族を愛し、守り、支え合おうとする彼らを見て、ヒビキはそう思わずにはいられなかったのだ。

（今日だって料理を失敗して落ち込んだりした。あんな姿を見たら

人間じゃないとか思えないよな）

そこでシャマルとヒビキの視線が合った。何か見られていると感じたのでシャマルが顔を向けたのだ。少し互いを見つめ合う二人。

「……えっと、どうかした？」

「ん。やっぱりシャマルはシャマルだってな」

「え？」

「気にしなくていいぞ。さ、食べるか」

「もう、何なのよ……」

ヒビキの言葉の意味が分からず、やや不満そうに口を尖らせるシャマル。それでも、ヒビキの性格上問いかけても教えてくれないと思ったのだろう。そのまま食事を再開する。

二人だけの食事とはいえ、静かなままで終わるヒビキとシャマルではない。食べながら他愛ない事で話し始めるのはある意味で当然と言えた。話題はもっぱらヒビキに関する事。中でもディスクアニマルなどの技術面だ。

実ははやての頼みで、ヒビキはアカネタカを彼女の知り合いであるマリエルへ預けているのだ。それは魔法の使えない者でも音角があれば偵察支援用の力を得る事が出来るからだ。

それにいざという時は共に戦ってくれる味方にもなってくれる。そんなディスクアニマルの仕組みを解明し、出来る事なら量産したいとはやては考えている。まだ問題もあるが、バトルジャケット隊をもっと部隊として安定させる意味も兼ねての強化案の一つなのだ。

「そうか。アカネタカは量産出来そうにないんだな」

「ええ。やっぱり私達の技術とは違い過ぎる部分が多いの。呪術、だっけ。その力を使ってるからだと思う」

「成程。そこが解明出来ないって訳か」

「そう。後は……本当に解明してもいいのかってとこかしら」

ヒビキの言葉に頷くもシャマルはそこから表情を曇らせた。そして続く言葉はどこか重い響きを持って放たれた。その声にヒビキは疑問符を浮かべて問いかける。

「どういう事だ？」

「アカネタカは魔力の無い人でも使える力。それはバトルジャケットもなんだけど、あっちは最初から誰でもとはいかない。かなりの重量があるからね。でも、アカネタカは違う。音角さえ持っていれば子供でも使える」

その言葉だけでヒビキは理解した。シャマルの告げた言葉に込められた意味。それは万が一の可能性を考慮しているのだと。つまり悪用される事だ。人を影ながら守る鬼を支える力、ディスクアニマル。それを悪人に使われるなど絶対にあってはならない。

そうシャマルもマリエルも考えているのだ。バトルジャケットは管理が厳しい上に持ち運びも容易ではない。しかし、アカネタカはそうではない。子供でも持ち運べ使用する事が出来る。それが新たな犯罪のキッカケになる可能性もあるのだ。

「勿論バトルジャケットも危険な力よ。でも、アカネタカは紛れもない仮面ライダー響鬼の力なの。正義を守り、平和を守り、笑顔を守る優しく強い力。私はそれが悪用される可能性を生み出して欲しくない」

「シャマル……」

「はやてちゃんにはまだ言ってないらしいけど、マリエルさんは私と同意見よ。いずれ向こうからそう報告が上げられるわ」

そこまで語り、シャマルは息を吐いた。クウガを始めとする機動六課が関ったライダー達。その力の中で再現出来たのは龍騎のブランク体のみ。しかも、それは本当の龍騎からすれば取るに足らないものだった。

つまり、偽者か或いは劣化品と考える事が出来る。しかし、アカネタカは下手をするとそのものを作り出す事が出来る。そうなれば、それはオリジナルと同じだ。響鬼の力――ライダーの力をそうでない者達が手にする事になるのだから。

シャマルが嫌がったのはそこ。仮面ライダーの力は仮面ライダーだからこそ正しく使える。優しく強い心を持つ彼らだからこそ、それをみんなの笑顔のために使えるのだと、そうシャマルは強く思っているのだ。

（五代さんも翔一さんも……ううん、光太郎さんも真司さんもそうよ。みんなどこかでライダーの力を怖がっていた。それを持つ事に恐れと不安を抱いていた。だからあの人達は正しい事にそれを使えたんだから）

シャマルはあの四人の仮面ライダーの姿を思い出し、一人小さく

頷く。力を持つ事に何も感じない者はライダーではない。そう、力を得る事に貪欲な者は怪人と同じなのだから。

そんなシャマルへヒビキが何か言おうとした時だ。クラールヴィントにメールが入る。それを不思議そうな表情で展開するシャマルだったが、その文面に絶句した。

「どうした？」

「大変よ！　ヒビキさんっ！」

シャマルの口から告げられる内容にヒビキは即座に立ち上がって走り出す。向かう先は八神家から見える浜辺だ。そこで彼を待つ者がいる。そう、助けを待つ者が。

――――待ってろ。すぐ行くからな、スバルっ！

（どうして怪人がっ？！）

スバルは目の前の存在と戦いながらずっと同じ疑問を反芻していた。場所は八神家からも見える浜辺。人気の無い場所へ怪人を誘導した結果だった。

午前の仕事を終えた彼女は、午後から非番だった事を利用し六課を訪ねた。ヒビキに会うためだったのだが、そこで親しいアルトから教えられたのはシャマルと共に非番のためいないとの事。

なので食事中だとは思ったのだが、シグナムへその行き先を知ら

ないか尋ね八神家へ向かっていたスバル。だが、その途中で彼女は遭遇してしまったのだ。そう、怪人と。

「ちょこまかと動くな、小娘！」

「くっ！　相棒っ！」

”クラールヴィントへ連絡済みです。きっとすぐ来るでしょう”

怪人――――オニビビンバの砲撃を際どく回避しながら、スバルはマッハキャリバーへ声を掛ける。その意図を瞬時に理解し、彼女の知りたい事を答えるマッハキャリバーにスバルは内心感謝する。

八神家がある場所の近くに海があった事が幸いし、被害は最小限で済んでいる事がスバルを安堵させていた。これがクラナガンの中心地などであれば、人的にも物的にも恐ろしい被害が出ていたはずだ。

足を砂に取られないようにウイングロードを展開し、オニビビンバの周囲を走り続けているスバル。接近して格闘戦も挑んだのだが、その体の強度に戸惑った。以前戦った怪人達よりも機械に近い印象を受けたからだ。

故に隙を見て振動拳を叩き込みたいのだが、あれは発動に若干の間が生じるために中々決める事が出来ない。手にしていた大鎌はそれで粉砕したため、通用しない訳ではないとスバルは踏んでいる。

「貴様の魔法とやらはそれか。しかもその体も中々面白い。素体としては十分合格だ」

「素体……？　っ！　私を怪人にするつもり！？」

「ほぅ……怪人との名称を知っているのか。益々面白いぞ小娘。捕まえて色々聞き出すとするか」

「お生憎様！　そうはさせないよっ！」

”私達を甘く見ないでください”

オニビビンバの言葉へスバルとマッハキャリバーが力強く返す言葉。それはあの邪眼との戦いを経験したからこそのもの。更にあの時は得ていなかった力が今の彼女達にはある。それはマッハキャリバーの新たな機能。

それを得た事により、スバルは更なる強さを身に着けた。憧れた女性であるなのは。その彼女がレイジングハートと共に使い、磨き上げた輝く力。それをスバルとマッハキャリバーが受け継いだのだから。

「行くよ相棒！」

”いつでもどうぞ”

スバルの言葉に応じるマッハキャリバー。それを聞いてオニビビンバがやや興味を抱いたのか、その動向を窺うように動きを止めた。

「何をする気だ？」

「マッハキャリバー！　ＡＣＳ、発動っ！」

”レディ”

スバルの声に応じ、マッハキャリバーから翼のような光が出現し

た。それが彼女達へ託された力。かつてなのはが邪眼へ炸裂させたＡＣＳ。その発展進化系がマッハキャリバーへ搭載されたのだ。
その体へＡＣＳによる負荷を感じながら、スバルは呼吸を整えて拳を構える。今の自分と相棒ならば怪人を相手にしても倒す事は出来るはず。そう信じるスバルは、その想いを込めて叫んだ。

「ギアっ！　エクセリオンっ！！」

”ドライブイグニッション”

凄まじい加速を乗せてウイングロードを駆け抜けていくスバル。その速度にさすがのオニビビンバも驚きを隠せない。しかし、それでもその背部にある砲身を伸ばし、照準を合わせようとするところにジンドグマ幹部の片鱗が見える。
スバルもそれを見てウイングロードを縦横無尽に展開し、狙いを定めさせないようにと翻弄する。しかも、翻弄しながら接近していくのだから大したものだ。

だが、オニビビンバを攻撃するには接近するしかない。故に一番注意するのはその攻撃する瞬間だと互いに理解している。だからだろう。オニビビンバは敢えて無防備を装いスバルを誘う。
一方のスバルも、それが誘いと分かっていながらも乗るしかないため正面から向かっていく。両者の狙いは同じ。スバルは相手の砲撃を何とか凌いで一撃を叩き込む。オニビビンバはその一撃をさせぬために確実な砲撃を叩き込む。

「うおぉぉぉぉぉ！！」

「来いっ！」

右腕を構えながら迫っていくスバル。それを引き付けながら砲身を向けるオニビビンバ。その時、マッハキャリバーから声が発せられる。それは勝利するための布石。

”ロードカートリッジ”

リボルバーナックルから排出されるカートリッジ。その数、二つ。その魔力を宿し、回転を始めるリボルバーナックル。スバルはそれを高々と掲げ、オニビビンバへ向かって疾走する。

それにオニビビンバが疑問を抱く。スバルが真正直に正面突破をしようとしている事だ。何か策を弄してくるはずと思っていたのだ。しかし、スバルの動きに妙な点はない。

「追い詰められて捨て身になったか！　喰らえ、オニビビンババズーカ砲っ！！」

スバル目掛けて放たれる砲撃。それははっきりその体を捉えた。だが、一つだけオニビビンバが知らぬ事がある。それはスバルの魔法。彼女にはあるのだ。砲撃を何とかするだけの方法が。それを知らない事がこの勝負を分けた。

”ディバイン”

「バスターっ！」

「な、何ィ！？」

砲弾を貫く青の閃光。それはなのはからスバルに受け継がれたもう一つの力にして、彼女の十八番となったディバインバスターだった。それが砲弾を破裂させて引き起こした爆風を抜けて、スバルが

疾風となってオニビビンバへ迫る。
それに思わず声を上げるオニビビンバ。何とか次弾を放とうとするも時既に遅し。懐へ入り込んだスバルはその腹部へリボルバーナックルを突き出すと同時に告げる。

――――振動拳っ！！

その一撃がオニビビンバの内部へダメージを与えた。しかし、撃破までには至らなかった。それはスバルの攻撃が一瞬でジンドグマ怪人を倒す程の破壊力を有していなかったため。

「舐めるなっ！」

「そんなっ！？」

振動拳を受けながらも、オニビビンバはスバルの首を掴んだのだ。それに驚きを隠せないスバルだったが本当に驚くのはここからだった。そのままオニビビンバは首を握り潰そうとするかの如く力を込め始めたのだ。

ゼクスを崩壊へ導いた振動破砕。それが何故かオニビビンバへはそこまで作用しなかったのには理由がある。ゼクスの基となったのは当然セイン。つまり人を母体とした戦闘機人だ。
しかし、オニビビンバは人を母体にしてなどいない。彼はＢ２６暗黒星雲からやってきた怪人なのだ。その身体構造は戦闘機人などよりも強靭。故にゼクス戦程の効果を瞬時に与える事は出来なかったのだ。

「生かして改造時の苦しみを見物するつもりだったが気が変わった。ここで息の根を止め、怪人としてからその記憶を取り出してくれる

！」

「かはっ！」

”バディィ！”

スバルの生命反応が少しずつ弱っていくのを受け、マッハキャリバーが焦るような声を出す。ギリギリと音を立て始めるオニビビンバの手。このままでは死ぬしかない。だからこそもがき足掻くようにスバルは両足でその拘束を振り解こうとする。

しかし、オニビビンバはびくともしない。そのままスバルの首をへし折らんとばかりに力を込めた。次第に力が抜けていくスバル。その抵抗も弱くなり、やがて完全止まろうとしたその時――

「ぐっ！」

何かがオニビビンバの後頭部を攻撃した。それはアカネタカ。その体全体を使い、体当たりを敢行したのだ。その一撃で僅かにだが注意がスバルから逸れる。再度体当たりをしようとするアカネタカを見て、オニビビンバが苛立ちをぶつけるように体を動かした。

その砲撃で撃ち落そうと考えたのだろう。しかし、それこそがアカネタカの本当の狙い。そう、アカネタカはやがて来る者が気付かれないようにする事が目的だったのだ。

「消え」

「はあっ！」

アカネタカを狙って砲撃を放とうとしたオニビビンバだったが、その声を遮るように体へ強烈な蹴りが叩き込まれる。その衝撃でス

バルから手を離し、軽くよろめくオニビビンバ。地面に落とされる形となったスバルへ、その蹴った相手が駆け寄った。

「大丈夫か、スバル」

「ケホッケホッ……来てくれたんですね、ヒビキさん」

スバルは自分を抱き抱えるように起こしているヒビキを見て嬉しそうに笑みを浮かべた。それにヒビキも笑顔を返して頷くと、すぐに表情を引き締めて視線をオニビビンバへ戻す。

「よくも邪魔を！　ん？　貴様は……」

「スバル、少し休んでろ。後は俺が引き受けた」

「すみません、お願いします」

オニビビンバの言葉を無視し、スバルへ声を掛けながらヒビキは音角を手にした。初めて見る怪人の姿に魔化魍とは違う機械的な印象を受け、ヒビキは内心で不安を抱いた。

自分の使う音撃。それが本当に通用するのかだ。だがそうだとしてもやらねばならない。何故ならば自分は鬼であり、仮面ライダーなのだ。そう決意し、ヒビキは音角を本来の形へ戻すとそれを手に当てて振動させる。

そのまま音角を額へ当てると、そこへ何かの顔らしきものが浮かび上がる。そしてヒビキは告げる。力ある言葉を。

「変身っ！」

それはヒビキがシャマル達からある時聞いた仮面ライダー達共通の言葉。姿を変える際に告げる戦う意思表示。ヒビキはそれを教えてもらい、自分もある時に限り使う事にしたのだ。

それは仮面ライダーとして戦う必要がある時。魔化魍などの人外の存在を打ち倒す際の覚悟として使おうと。単なる鬼ではなく、仮面ライダー響鬼として戦うとの決意。それをその言葉に込めようと。

その想いを宿した声を合図にヒビキの全身を紫の炎が包んだ。その光景にスバルとオニビビンバが息を呑む。その二対の視線を受けながら、響鬼は炎を振り払うように右腕を動かした。

「はあっ！」

「なっ？！　やはり貴様は！」

「俺は響鬼。仮面ライダー響鬼っ！」

その宣言にスバルが思わず拳を握り締めた。感じたのだ。あのゼクスとの初戦で助けに来てくれたクウガが与えてくれた安心感を。故に確信する。響鬼も仮面ライダーだと。

「そうか。あの世界にいないと妖怪王女が言っておったから独断先行したあやつと共にオーロラを渡ったと思っていたが……まさかここにいたとはな。我らは計画を変更し素体探しに来て正解だったか」

「素体探し……？」

オニビビンバが自分へ告げた言葉に内心疑問符を浮かべる響鬼。その言葉にオニビビンバは答えるでもなく、砲身を向けた。響鬼が自身の標的だったのだろう。

その動きを見た響鬼はその場から素早く駆け出した。直後その背後で爆発音がする。その音に響鬼が視線を向けると、砂浜に大きな穴が出来ていた。直撃したら不味いと響鬼は理解し、オニビビンバの狙いを定めさせないように走り回る。

そんな響鬼をオニビビンバは執拗に狙った。時には敢えて響鬼ではなく、その進路を狙い動きを止める事もしながら。それでも響鬼は止まらない。そして隙を見てオニビビンバへ接近する。

襲い来る響鬼の手を掴み、力比べを仕掛けるオニビビンバ。至近距離でダメージ覚悟の砲撃を行うつもりだったが、その目論見はすぐに崩された。そう、響鬼もその狙いを読んでいたからだ。

「そうはいくか！」

「ぬわっ！」

何と響鬼の口から炎が放たれたのだ。その鬼火がオニビビンバを襲う。堪らず後ずさるオニビビンバを見て、響鬼はここだとばかりに腹部にある装備帯と呼ばれるベルトへ手を伸ばし、そこから小さな太鼓を取るとオニビビンバへ押し当てた。

その瞬間、太鼓が大きくなる。それは音撃鼓”火炎鼓”と呼ばれる装備だ。そして同時に装備帯から二本の撥を取り出し、構えた。それは音撃棒”烈火”という響鬼の武器。通常は打撃武器として使い、音撃時はそれで清めの音を叩き込むのだ。

その光景に唖然となるスバルの目の前で、響鬼は烈火を振り上げて叫んだ。

「火炎連打の型っ！！」

凄まじい勢いで左右交互に叩き付けられる烈火。その度にオニビビンバが若干苦しみを見せる。だが、響鬼はある事を考えていた。魔化魍と何かが違うと。あの時は思わなかったが、こうして直に音撃を放つからこそ思う事があるのだ。

（こいつ、音撃で苦しんでないかもしれないな。俺の打撃で苦しんでるんじゃないか……？）

手応えが違い過ぎるのもあって、響鬼は内心不安を抱く。これで本当に相手を倒せるのだろうかと。その心情が表れたのか、響鬼の音撃の力が微かに弱まった。それに気付いてオニビビンバが動こうとする。

その動きに気付いて即座に気を引き締め直そうとする響鬼だったが、その前にオニビビンバが行動した。それは先程響鬼が警戒していた攻撃。至近距離での砲撃だった。

「喰らえっ！」

「しまったっ？！」

オニビビンバから放たれたバズーカ砲の一撃。それが響鬼を直撃した。大きく宙へ飛ばされる響鬼。その途中、烈火から手を離してしまい砂浜へ落としてしまう。オニビビンバはその間に自身へ展開していた火炎鼓を外し、無造作に砂浜へ投げ捨てた。

「よくもやってくれたな。だが、今ので貴様もかなりのダメージを負っただろう」

オニビビンバの目の前には何とか立ち上がろうとする響鬼の姿がある。その体へ与えられたダメージは決して軽くないのがそこから

分かる。もう一撃命中させれば勝てる。そう確信し、オニビビンバは響鬼へ砲身を向けた。

それを見て響鬼は痛む体を動かし、再び走り出す。烈火を辛うじて拾いそれを武器に戦おうとするのだが、受けたダメージのためかその動きが鈍い。しかもオニビビンバの砲撃を避ける事を優先し、中々接近出来ずにいた。

徐々に劣勢へと追い込まれていく響鬼。スバルはそんな響鬼を援護するべく、オニビビンバの近くにある火炎鼓を取りに行く事を決意した。あれが響鬼にとっての大事な装備だと思ったのだ。

だからそれを渡す。今響鬼は攻撃を避けるだけで精一杯となっている。故に動ける自分がその役目を担うのだ。そう考え、スバルはウイングロードを展開し走り出した。

それに響鬼とオニビビンバも気付くが互いに相手を警戒する方が優先と考えた。響鬼はスバルを信じているから。オニビビンバはスバルを取るに足らない存在と思っているからだ。

そのスバルの動きを見て、彼女が何を狙っているかを理解した響鬼はオニビビンバをその場から引き離すために鬼棒術と呼ばれる技を使って烈火へ炎を灯す。そして、それをオニビビンバへ向かって放ったのだ。

「これでも喰らえ！」

「ぬっ！　小癪な真似を！」

烈火弾と呼ばれる技で攻撃する響鬼。それを回避しその場を離れるオニビビンバと入れ替わるようにスバルがそこへ近付く。そして落ちていた火炎鼓を拾い上げると、そのままの勢いでオニビビンバへ向かって行く。

（響鬼さんが怪人を惹きつけてくれてる。ならっ！）

それに呼応するように響鬼は走り出した。スバルはオニビビンバへ火炎鼓を押し付けようとしているのだ。それはもう一度響鬼へ音撃を叩き込んでもらうため。

しかし、このままではオニビビンバへ響鬼の方が間に合わない。ダメージのせいで走力がスバルに劣ってしまっているからだ。そんな時、響鬼の体から痛みが消える。突然の事に驚く響鬼へ横から声がした。

――お待たせ。これで大丈夫でしょ？

――シャマルっ！？

そこには飛行魔法で響鬼と並走するシャマルがいた。笑顔で響鬼へそう告げると、シャマルは更にバインドをオニビビンバへ施した。それはその両手両足を完全に固定し、反撃の手段を限らせる。

「シャマル先生！　ありがとうございますっ！」

「どういたしまして」

スバルは突然出現したバインドを見てその魔力光からそれをやった者を理解。その援軍に心からの感謝を返してオニビビンバへ火炎鼓を押し付けた。

「チッ！　他の虫けらがいたのか！」

「響鬼さんっ！　今です！」

「私達に出来るのはここまでよ。後はお願い！」

「分かったっ！」

思わぬ伏兵に忌々しいとばかりに声を出すオニビビンバ。それを無視し、火炎鼓が展開するのを見てスバルは力の限りに叫ぶ。その声に続くようにシャマルは後を響鬼へ託した。その気持ちに頷き返し、響鬼はオニビビンバへ駆け寄るともう一度烈火を高く振り上げて叫んだ。

――――猛火怒濤の型っ！！

先程の迷いはもう響鬼には無かった。スバルとシャマルが自分を信じてくれている。仮面ライダーとして必ず怪人を打ち倒してくれると。その気持ちを感じ取り、響鬼は改めて自分を信じる事にした。音撃が通用するかしないかは関係ないと。それが自分に出来る唯一の方法ならばそれに全身全霊を賭けるだけだ。その強い想いを込めた打撃が火炎鼓を通してオニビビンバへ叩き込まれていく。

その力強い見事な演奏はスバルとシャマルの心を捉えていた。聞いているだけで心躍るようなその響きがオニビビンバから抵抗する力を奪っていく。左右交互に刻まれる拍子。先程の火炎連打よりも打数自体は少ないが、テンポが整っているために聞く者へ更なる安定感を与える。

清めの音がオニビビンバへ流れていく。その波動は聖なる波動。邪なる者を浄化し撃ち払う音の響き。既に振動拳を受け、内部構造を弱くしていたオニビビンバ。そこへ更に送り込まれた音撃がそれを崩壊させていく。

「はあっ！！」

「そ、そんな馬鹿なぁぁぁぁ！！」

とどめとばかりに打ち付けられた烈火が送り込んだ締めの清めの音。それが完全にオニビビンバの内部を破壊した。その爆風を受けながらも、響鬼は平然と手にした烈火を一度回転させてからその背後へ戻す。それと同時に爆発で飛ばされ落ちてきた火炎鼓を受け止めるのだった……

「何かあったのかしら？」

「どうだろう。だとしたら、雰囲気的にあまりいい事とは思えないな」

「ですね。まさか、他の所でも怪人が出たとか？」

揃って六課隊舎内を歩くヒビキ達。あの後はやてへ怪人出現の報告をしたのだが、何か向こうもあったらしく一度隊舎へ来て欲しいと言われたためだ。スバルも一緒なのはそういう事。

転送魔法を使い隊舎前まで来た三人は、変身によって服を燃やしてしまったヒビキの着替えを待ってから一路部隊長室を目指していたのだ。そんな中、スバルがやや困り顔で告げた内容に二人が苦笑する。そんな事は早々無いと思ったのだ。

やがてヒビキ達は部隊長室の前へ辿り着き、代表してシャマルが

ノックをして声を掛けた。

「八神部隊長、シャマルです」

「開いとるから入ってきてくれるか」

「失礼します」

ドアがスライドし、室内へ足を踏み入れるシャマル。それに続くようにヒビキとスバルも挨拶をしながら入っていく。そこにははやてだけでなくシグナム達守護騎士とリインにイクスヴェリアもいた。

こうしてヴィータを除く八神家が勢揃いする事になったのだが、そこには更にもう二人ある人物がいた。内一人はヒビキとスバルも知る相手。と言っても、ヒビキは聞いた事があるだけ。もう一人は二人とも初めて会う相手だった。

そんな室内の顔ぶれを眺め、不思議そうな三人へはやてがやや真剣な顔で言葉を放つ。

「本当はついさっきまでもう三人おったんやけど、ちょう事情があってここにはおらんのや。アルトに案内頼んで本局へ行ってもらっとる」

「三人？　本局へって……一体どうして？」

はやての言葉に不思議そうな表情を見せるシャマル。彼女としては、八神家以外の二人も見知った顔なので特に気にもならなかったのだ。しかし、ヒビキとスバルはそうもいかない。

「久しぶりだね、ヴィヴィオ」

「お久しぶりです、スバルさん。そっちがヒビキさんですよね？初めまして。私、高町ヴィヴィオです。お話はイクスから聞いてます」

「そっか。お嬢ちゃんがヴィヴィオね。初めまして。俺はヒビキ。よろしく」

シュッといつもの仕草を返すヒビキ。それにヴィヴィオが嬉しそうな笑顔を返す。スバルと同じく五代に似たものを感じ取ったのだろう。それを聞いたシャマルは、何故ここにヴィヴィオと共に彼がいるのかが分からなかったため、それを教えてもらおうと問いかけた。

――それと、どうしてここにヴィヴィオと士君がいるの？

その問いかけに声を出したのは、視線を向けられたはやて達ではなく名前を出された士だった。彼はヒビキの自己紹介に軽い驚きを見せていたが、それでも今はそんな素振りを欠片として見せていなかった。

その驚きの理由。それは似ていたからだ。目の前のヒビキと彼の知るヒビキとの雰囲気が。かつて二人のブレイドに出会った時は違ったため、ヒビキは雰囲気までも似ているのかと驚いたという訳だった。

（どうも俺の認識を改める必要がありそうだ。本当は同じライダーとなる奴らはどこか似てるのかもしれないとな。あの女の笑顔を守るために戦い出したユウスケとみんなの笑顔を守るために戦い出した五代雄介のように）

「成程な。大体分かった。どうやらお前達の言う通りのようだ」

士は満を持して口を開いたが、それはシャマルの問いかけの答えとは言い難かった。それを気にもせず、士は更に言葉を続ける。凄まじい衝撃をヒビキ達へ与える事となると知らずに。

――この世界はグランショッカーとやらに狙われているらしい。俺はそれを阻止するためクウガ達のようにここへ呼ばれた仮面ライダーだ。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

響鬼編。ここには合流するライダーはおらず。しかし、遂にディケイドと出会うという締めとなりました。

次回はディケイド編。今回の裏の時間を描く予定。

「課外奉仕活動？」

「そうなの。ユーノ君は一昨日に急な仕事が入って無理になったでしょ？　だから士君しか頼れなくて」

なのはが両手を合わせて告げた言葉に士はやや嫌そうな顔を見せた。時刻は夜。場所は高町家のリビングだ。現在ヴィヴィオは部屋で眠っている。そして明日は、彼女の通う魔法学院で保護者参加の行事があるのだ。

しかし、ユーノは一昨日から仕事で無限書庫に缶詰となっているし、なのはは明日から短期の教導が入っている。そのため士へ頼んだのだ。なのはも一度は家政婦をしてくれているアイナを頼ろうかとも思ったのだが、やはりここは兄のような立場の士が適任と思い現状となっていた。

「お前が仕事を休んで……とはいかないのか」

「うん。本当ならそうしたいんだけど、元々はユーノ君が行く事になってたから私の予定が動かせないんだ」

「そうか。だから一昨日のユーノが死んだような顔でヴィヴィオと話してたのか」

「あー……そうなんだ。ヴィヴィオは別に一人でも平気だって言っただろうけど、寂しく思ってるって分かったんだね」

なのはの力ない言葉に士はため息を吐いた。ここで引き受けなけ

ればヴィヴィオが悲しむと思ったのだろう。まだこの家で世話になり始めて一月も経っていないが、それでも彼にとっては居心地のいい場所となった高町家。その幸せの象徴とも言えるヴィヴィオの笑顔を壊したくはないと考えた士はなのはへ告げる。引き受けてやると。

その言葉になのはが安堵の息を吐くとすぐさまサムズアップ。士の気持ちを察したのだ。それを感じ取ったのか士は無視するように顔を背けてキッチンへ向かう。そんな行動になのはは小さく笑う。

「で、俺はあいつと一緒に朝から学校へ行けばいいんだな？」

そのなのはの行動に気付かない振りをしつつ、冷蔵庫から平然と飲み物を取り出して士は我が物顔でコップへ注ぐ。そんな彼になのはは特に文句を言うでもなく頷いた。もう彼女は士がかなり自分勝手なのは理解している。故にそこまで行動へ何か文句を言う事はない。

ただ、苦言を呈する事はあるし、注意や指摘をする事もある。それは、出来るだけ士の心へ届くようにと考えてのものにしていた。頭ごなしに否定したり、或いは反論するのではなく、どう言えば相手が納得してくれるだろうと考えての言葉だ。

「あ、それと明日のお昼はヴィヴィオと一緒に食べてね」

「ちょっと待て。どういう事だ？」

「あのね士君。奉仕活動って要するにボランティアだよ？　一時間ぐらいで終わる訳ないから」

「面倒だな……」

「そんな事言わないで……って、そうだ！　学院外の景色は結構悪くないんだ。だから写真撮ってくると思って、ね？」

士の趣味が写真撮影だと思い出したなのはの言葉に士も少し考え、それで手を打つかと納得する。高町家周辺は住宅地のため景色に珍しさはなかった。だから彼はあまり撮影をする事無く過ごしていたのだ。

魔法学院の校舎やそこまでの道に何か興味を引くものがあるかもしれない。そう思い、士はふと気になる事があった。それはヴィヴィオの親友と呼んでもいいイクスヴェリアの事。

（あいつも同じクラスだと言っていたな。向こうは家族が多いと言っていたが……）

「イクスの方は誰が来る事になってるんだ？」

「多分アインさんだと思うよ」

「ああ、あのいつも迎えに来る奴か。なら適任だ」

なのはの答えに納得し士は手にしたコップへ口をつけた。もう彼の中にこの話題への興味は無くなった。それを悟りなのはは苦笑する。そして思う。士は五代達と違い、悪い意味でマイペースな時が多いと。

（もう少し周囲へ優しくしてくれるといいんだけどなぁ。でもちゃんと気配りもする時はあるし、ヴィヴィオの事も何だかんだで見てくれる。ただ、少し俺様すぎるのがね……）

仮面ライダーだからという点を除いても、ヴィヴィオは士に懐い

ていた。ここに来て士が撮った写真の被写体によくなっている事からもそれが窺える。次はイクスなのだが、それも士が懐かれている証拠だ。

本人はそんな自覚がないのだろうが、やはり言動の奥底に彼の優しさが潜んでいる。それを身近にいる二人は感じ取っているのだ。子供相手は疲れると士自身はあまり気乗りしていないようだが、それがなのはやユーノにさえ照れ隠しとしか思えない事からも明白だ。

「それにしても……心配してるだろうね、夏海さん達」

「どうだろうな？　意外と平気な顔してるかもしれないぞ」

「でも、後ろ歩いてた士君がいなくなってたら心配するよ。士君だけがここでしないといけない事が分かれば、それを解決して会えるようになるんだろうけど……」

なのはのその言葉に士もふむと考え込む。彼がここへ来た理由は未だ不明。ライダー大戦を終えて訪れた次の世界。そこを彼はいつものように仲間達と歩いていたのだが、突然彼の前に灰色のオーロラが出現したので通り抜けてしまったのだ。

それもあって、最初彼はヴィヴィオの告げたクウガとの名前に驚いた。ユウスケがこの世界へ来ているとすれば、それは光写真館と一緒に訪れている可能性が高かったからだ。故に、再会出来るのかもしれないと思った彼の予想に反して告げられたのは、五代雄介という名前の別人との答えだったのだから。

そんな事を思い出し、士はぼんやりと自分だけが呼ばれた理由をなのはへ告げた。

「……俺の力でお前達を五代雄介達へ会わせるつもりだったのか？」

「それは……嬉しいけど何か違う気がする。だって、それは士君だけが呼ばれた理由にならないよ。写真館ごとミッドへ来させるんじゃないかな？」

「それもそうか……ま、いいさ。その内分かる。きっとな」

そこで会話は終わりとばかりに士は手にした飲み物を飲み干した。その後少しだけ士となのはは明日の事を話す。朝食と昼食の弁当はなのはが作る事と夕食はアイナへ頼んである事などを。こうしてこの夜は終わる。それがある意味で士の平穏の終わりでもあった……

ご機嫌で歩くヴィヴィオ。その顔は輝くような笑顔だ。その反面、士はやや不機嫌そうに歩いている。その片手がヴィヴィオの手と繋がれているからだろう。家を出る時からヴィヴィオが当然のようにした行為なのだが、それを拒絶する間を士へ与える事を彼女はしなかった。

問答無用で士の手を掴み、嬉しそうな表情と声で「行きましょうっ！」と歩き出してしまったからだ。その時士も振り解く事も出来たはずなのだが、なのはに見送られていた事もあって受け入れる事にしたのだった。

（……まったく、こいつは本当に母親似だな。髪の色は父親似なのに中身は全然だ。娘は基本父親に似るんじゃなかったか？）

（えへへ、士さんが来てくれるなんて嬉しいな！　イクスもきっと

驚くよね。あ、アインさんもかな？）

学院までの道を歩く二人。やがて同じ格好の生徒達が視界に入るようになる。それを眺めながら、士は平和というものを目や耳で感じていた。聞こえてくる楽しげな声や笑い声。見えてくる笑顔と笑顔。全てが平和の象徴だ。

それを邪眼から守ったのはクウガ達四人の仮面ライダーだと思い、士は視線を少しだけ空へ向けた。なのは達から聞いた四人の事を思い出したのだ。

青空が好きな五代。白い雲のように穏やかな翔一。知らずジェイル達の運命を変える風となった真司。太陽以上に輝く希望の言葉を残した光太郎。目に映る景色と肌で感じる感覚に士は密かに誓う。

――見てるか？　お前達の守ったものがここにある。俺はこれが壊される事がないよう、ここを去る時が来るまで守るつもりだ。仮面ライダーディケイドとして、な。

そんな事を思い、遠い目をする士へヴィヴィオが気付いたのか視線を向けて小首を傾げた。何かあったのだろうかと思ったのだ。軽く声をかけるヴィヴィオだったが、それに反応しない事に益々不思議そうに小首を傾げると、繋いでいる手を軽く引いて士の意識を向けさせた。

「どうしたんですか士さん。もう学校に着きましたよ？」

「……そうか。ちょっと考え事だ。気にするな」

「む～、そう言われると気になります」

「ならずっと気にしてろ。行くぞ」

そこから始まるヴィヴィオの抗議の声を無視するように士は足を進めて行く。その行動にヴィヴィオも諦めるしかないと思ったのか、不満そうな表情のままそれでも手を離さず歩き出した。

やがて教室へ着くと一斉にヴィヴィオへ向かって挨拶がかけられた。それはごきげんようという言葉。ヴィヴィオの通うザンクトヒルデ魔法学院は教会系列のため、礼儀作法が教会流になるのだ。

士はそんなヴィヴィオ達の風景にやや違和感を覚えたが、そこに見慣れた少女を見つける。イクスヴェリアがいたのだ。それを確認し、ならばとばかりに周囲を見渡そうとした彼へ声を掛ける者がいた。

「まさかお前が来るとはな、門矢」

士の後ろから現れたのはリインだった。それに士はさして驚く事もなく振り向く。そう、彼はリインを捜そうとしていたのだ。

「なのはの奴に頼まれて仕方なくだ。で、何で挨拶がごきげんようなんだ？」

「まず聞くのがそこか。まぁ違和感があるかもしれないが、これがこの学校では普通のやり取りだ」

「そうなのか。随分と品の良い学校だな」

「聖王教会は知っているか？　その系列学校故にだろう」

「成程、ミッションスクールというやつか。ところで……」

リインの説明で大まかな事を把握し、士はそこで会話を切って周囲を見渡した。教室内に他の保護者達が見えないからだ。どうしてだと問いかける彼へ、リインはその疑問へ答えるために小さくついてこいと声を掛けると廊下へ出た。

それに続くように士も廊下へ出ると先を歩くリインの後を追う。リインが向かった先は校庭だった。そこには他の保護者達の姿がある。それを見ても状況を今一つ理解出来ない士へリインが教えた。

保護者も学年毎に別れ、一年生の保護者はここで向かう場所を説明されるのだと。そして後から合流する子供達と一緒になって割り当てへ向かう事になっている。それだけをリインが告げると、丁度そこへ教師だろう男性が現れて簡単な挨拶の後説明を始めた。

それを聞き流し士は視線を周囲へ動かす。自然が多い印象を受ける以外はそこまで自分の知る学校と大差ない。そんな感想を抱きながら写真に撮りたい場所を探す士。その彼を横目で見て、リインは小さくため息を吐いた。

（やれやれ……あれではヴィヴィオへ場所を教える事は出来ないだろうに……）

後で自分が教える事になるのかと思って内心苦笑しつつ、リインは教師の話を聞く。その後、士はヴィヴィオから文句を言われる。何せリインの予想通り彼女へ行き先を説明出来なかったのだ。

そのやり取りをある程度眺め、リインは苦笑混じりに二人へ行き先を教えた。そんな彼女の対応にヴィヴィオは感謝し、士は早くそうしろと不満を述べ、イクスヴェリアは彼らの反応がらしいと思って笑うのだった……

学院から少し離れた場所にある施設。そこは老人達が支え合いながら暮らす場所だ。当然介助する者達もいるが、基本出来る事は自分達でやるのがそこの決まり。故にそこで暮らす老人達はしっかりした者達が多かった。

一年生がそこでの奉仕活動の担当となったのにはそういう背景がある。ヴィヴィオ達子供達の割り当ては話し相手などだ。保護者達の内容は掃除や洗濯などの手伝い。別にそういう風に誰かが言った訳ではないが、保護者達が負担の大きい事をやり生徒達が会話相手や遊び相手を務める事が基本となるのは当然と言えただろう。

しかし、そんな事お構いなしとばかりに独自の行動を取る者がいた。そしてその後ろには、その人物を監視するように見つめる三つの人影があった。

「ごめんなさいアインさん」

「いや、いいんだ。門矢が来た時点で覚悟はしていた」

「本当に自由な方ですよね、士さんは」

老人達と一緒になって話したり遊んだりする生徒達や忙しく動く保護者達がいる中、ヴィヴィオ達三人は揃って士を見つめていた。彼はトイカメラを手にあちこちを撮影していたのだ。

本来の目的である奉仕活動など一つとしてせず、ただ自分の思うままに写真を撮り続けていたのだ。まぁそれでも文句を言われないのは、彼がたまに老人達と遊ぶ生徒達や楽しげに語らう保護者達などを撮影しているからだろう。

「士さん、おじいちゃん達の相手はしたくないって」

「それでもここから出て行かないだけいいかもしれない。それに話しかけられると適度に相手をしているようだ」

「そうですね。ただ、言い方を少し気をつけてくれればいいのですが……」

イクスヴェリアの視線の先では、老人に話しかけられいつもの調子で言葉を返す士がいた。どうやら何を撮影しているのか尋ねられたようで、優しさの欠片もないような口調で応じている。

「特に決まった物はない。俺の気が向いたものを撮っているだけだ」

「そうかそうか。好きなものを撮ってるんじゃな」

「そういう事だ。で、じいさん。少し聞きたいんだが……」

「何じゃ？」

「絵になりそうな場所はどこだ？」

士の言い方を気にするでもなく、老人は笑みを浮かべたままその問いかけに答えていく。そんな光景を眺め、リインはやや安堵した表情を浮かべた。

「……まだマシな話し方だろう。門矢にしては、な」

「ホントですね。あ、一応ヴィヴィオが危ない時はフォローします

から」

「士さんもお年寄りには優しいのでしょうか？」

苦笑混じりに話していた三人だったが、誰一人として彼を止めようとはしなかった。問題と言える程の事は士がやっていないからだろう。この後、ヴィヴィオがお目付け役として士の傍について回り、また写真の被写体と勝手になるのだがそれは別の話。

最後はヴィヴィオの提案で全員で集合し、士が撮影をするはめになった事で奉仕活動は終わりを迎える。そして学院へと戻る時間となり、士はヴィヴィオに手を繋がれて歩き出した。

正直、士は内心で今回撮った写真も普通に撮れているとは思っていなかった。いつも訪れる世界で撮る写真は異常と言えるぐらいの状態で現像されるのだ。それは彼曰く「世界が俺に撮られたがっていない」から。

今日撮影した集合写真を現像して生徒達や老人達へ配る事にしようとヴィヴィオに言われ、士がどこか嫌な顔をしているのはそういう事。きっと誰もが気落ちするだろうと予想しているからだ。

（俺の撮る物は多分今もこいつらの望むような状態じゃない。そんな物を渡す事になるとこいつは知らないからな）

笑顔でイクスヴェリアと話すヴィヴィオをちらりと見やり、士は知らずため息を吐く。自分だけが見る写真ならば平気だ。慣れているし、文句もない。だが、それが人の手に渡す事になると話は違う。

特に今日のは思い出となる写真だ。それが見るに堪えない物となっていれば誰もが悲しくなるはず。そう考えるからこそ、士としては今回の写真をどうするかを悩んでいた。

以前の彼ならばそれでも渡しただろう。しかし、今の彼はそれが出来ない。本当に仮面ライダーらしくあろうと決めた以上、誰かの笑顔を壊す事はしたくないのだ。かと言って渡さない事も出来ない。どうするかと士が考え始めた時だ。

「士さん、どうかしたんですか？　顔が曇ってますけど」

「何でもない。気のせいだ」

ヴィヴィオに不思議そうな声を掛けられ、士は冷たく言葉を返す。内心で意外と鋭いと思いつつ、士は現像してみるだけしてみる事を決め、無表情のままで歩き続ける。その雰囲気から何かあったのだろうと察するヴィヴィオだったが、具体的に何かまでは理解出来ず小首を傾げるだけ。

こうして帰り道も特に問題無く、士達は学院へ戻ると昼食の時間となった。折角なのでと、ヴィヴィオは士を伴って校庭へ出た。そこの一角でなのは手製の弁当を嬉しそうに広げるヴィヴィオと中を見てなのはらしいと頷く士。実に単純な物だったからだ。

鳥の唐揚げに卵焼き。それにポテトサラダにミニトマトが添えてある。ヴィヴィオは待ちきれないとばかりに手を合わせると、いただきますの言葉と共に箸を掴んだ。

満面の笑みを浮かべたまま卵焼きを頬張るヴィヴィオを眺め、士はこういう時は子供らしいと思った。時折ヴィヴィオやイクスヴェリアが歳相応に見えない時があるからだ。

「旨いか？」

「うんっ！」

士のふとした問いかけに力一杯頷くヴィヴィオ。そんなヴィヴィオの反応に一瞬士も笑みを浮かべるが、すぐにそれを消して視線を動かす。天気がいい事もあり、周囲にも楽しそうに食事をする生徒達の姿がある。

そこにはイクスヴェリアとリインの姿もあった。二人も笑みを浮かべて話をしている。おそらくこの後の事を話しているのだろう。リインが告げた言葉にどこかイクスヴェリアが考え込むような仕草をしていた。

平和な時間。そう誰もが心から感じる風景がそこにある。士もそれを噛み締めたのか、小さく頷くと弁当へ視線を戻した。

「さて、なら俺も食べるとするか」

「あ、いただきますって言わないと駄目ですよ」

「……細かい奴だな」

「大事な事です」

行儀の悪い事をしようとする士へ飛ぶヴィヴィオの声。それにやや呆れ顔で応じる士。その返事に当然だとばかりに返すヴィヴィオ。だが、こんな事を言い合うのは無意味だと思っている士は、そのままヴィヴィオの言葉を無視して弁当を食べ始める。

それに注意をするヴィヴィオへ、士はならばと自分の分の卵焼きを一つ掴むとその口へ入れた。条件反射で咀嚼するヴィヴィオへ士は告げる。

「そのまま黙って食べてろ」

その言葉を聞くまでもなくヴィヴィオは黙々と咀嚼していた。卵焼きの美味しさのためだろうか。先程までは不満そうだった表情も今は笑顔となっていた。それに小さく微笑み士も空腹を満たすべく弁当を食べる。

そうして数分が経過した時だ。士の耳に誰かの驚く声が聞こえてきたのは。しかも、それは士にとって聞きたくない内容のもの。

――――えっ！？　オーロラ！？

その瞬間、士だけでなくヴィヴィオとイクスヴェリアも視線を動かした。声の主が見ている先には校門があり、そこに灰色のオーロラが出現している。それは士が現れた時と同じ状況。

しかし疑問符を浮かべるヴィヴィオとイクスヴェリアとは違い、士にとってそれはある者達を思い出させた。そう、既に壊滅したはずの存在。彼が大首領をしていた事もある大ショッカーとその後継組織スーパーショッカーだ。その可能性はないと思いながらも士は一人ヴィヴィオへやや鋭い声で告げた。

「いいか。早く安全な所へ逃げろ」

「士さん？」

「他の連中にも同じ事を伝えろ。あれはおそらく厄介事になる」

それだけ言うと士はオーロラへ向かって走り出す。丁度それを待っていたかのようにオーロラから現れる者達がいた。それは戦闘員。それだけで士は確信した。まだあの組織の生き残りがいたのだと。

戦闘員達は迫る士を無視するように動き出すと、校庭にいた生徒達を狙い出した。それがどういう目的か士には理解出来なかったが、

どうせろくな事ではないと判断してその妨害をするべく動く。

そんな士を援護したのはリインや教員と一部の保護者達だった。まだ不審者程度の外見でしかない戦闘員相手ならば出来る。そう判断したリインに追随するように他の者達も魔法を使って援護したのだ。

バインドなどの簡単な魔法で戦闘員達を攻撃していくリイン達。思わぬ出来事に動揺する戦闘員達だったがその体は最終的には見事バインドによって拘束され、その場から身動き出来なくなった。

だが、それによる安堵はすぐに壊された。オーロラから更に現れた者がいたのだ。その相手は白いスーツ姿の男性。しかし、それが士にはどこか既視感を与えた。

(何だ？　こいつ、どこかで似たような奴を見た事があるような……)

疑問を感じる士に対し、男性は視線を動かして小さく呟いた。

「貴様がディケイドだな」

「ああそうだ。そういうお前は何者だ」

「私は、元ＧＯＤ秘密警察第一室長にしてグランショッカーの一員となったアポロガイスト」

「何？　アポロガイストだと？」

それは士が既に倒した相手の名だった。しかし、確かにその相手の人間体と似ていると思い、士は先程感じた感覚に納得した。それ

でもどこか疑うような士を無視するように男性はそのまま告げる。
それはかつて士が聞いた事のある言葉。

――――アポロ・チェンジ！

その瞬間、男性は赤い姿へ変わる。手には右手には三つの銃と細身の剣からなるアポロマグナムを装備し、左手には太陽をイメージさせるガイストカッターと言う盾を所持した姿へと。それこそかつてXライダーを苦しめた幹部怪人。しかもその強化体である再生アポロガイストだ。

突然現れた異形の存在に周囲は驚きと警戒心から動けない。そんな光景を眺め、アポロガイストはアポロマグナムを拘束された戦闘員達へ向けた。そして次の瞬間！

――――イィィィィィィッ！！

放たれた銃撃が戦闘員達を撃ち抜いていく。断末魔と共に爆発し散っていく戦闘員達を誰もが驚きの表情で見つめていた。

「グランショッカーに奴立たずはいらん」

そう告げるとアポロガイストは静かにアポロマグナムを士へと向ける。それを士は変身しろとの無言の催促だと受け取った。

「いいだろう。そっちがそのつもりならやってやる」

その余裕さえ感じさせる態度に苛立ちを感じながら、士はディケイドライバーを取り出すと装着する。そして一枚のカードを手にした。そのカードを裏返し、ディケイドライバーへ挿入する士。そして同時にディケイドライバーの両側を押し込む。それが契機となっ

て彼の体が変化した。
マゼンダが基調となった姿。目は緑色だが、その姿はライダーを知る者には確かにライダーと思えるものだ。彼の名は仮面ライダーディケイド。世界の破壊者と呼ばれる存在でありながら世界を繋ぐ者。一度闇に身を落としながらも光を手にし、今も己が物語を紡ぎ続ける旅人だ。

変身を終えたディケイドは両手を軽くはたくように動かし、アポロガイストを見る。アポロガイストはディケイドの姿を見つめ小さく頷いていた。仮面ライダーを宿敵と認める彼は喜んでいたのだ。再び彼らと戦える事を。

「……仮面ライダーディケイド。我がグランショッカー最大の障害となるだろう貴様をここで倒す」

「やれるものならやってみろ。俺に勝てると思うな！」

その言葉にアポロガイストが返したのは言葉ではなく銃撃だった。アポロマグナムが火を噴きディケイドを襲う。その攻撃を横に転がる事で回避し、ディケイドがライドブッカーを手にするとそれが銃のような形となった。

「お返しだ！」

「ぬっ！」

ぶつかり合う銃撃。その激突が火花を散らす。だが、その内の一発がディケイドから逸れて後方へ着弾すると悲鳴が上がる。それにディケイドは思い出した。ここは学院。しかも普段と違い生徒達だけでなく保護者達もいるのだ。

そこからある事を予想したディケイドが視線を動かすと、その予想通りヴィヴィオ達は離れてはいたが未だに校庭に残っていた。校舎内にいる者達も窓から顔を出し、ディケイドの戦闘を見つめている。

「何やってる！　早く逃げろっ！」

「余所見をしている場合か！」

校舎内の者達はともかく、校庭にいるヴィヴィオ達は危険だと思って避難を呼びかけるディケイド。そんな彼の態度が気に入らず、アポロガイストがアポロマグナムを放った。その銃弾が確かにディケイドを直撃し煙を上げる。それに反撃しながら、ディケイドはここで戦い続ける訳にはいけないと思い始めていた。

（あいつらは仮面ライダーが勝つ事を信じている。だから逃げないのかもしれない。あいつがアポロガイストだと言うのなら、また人質を取る可能性がある以上ここでの戦いは避けるべきか）

かつてＢＬＡＣＫの世界であった出来事を思い出し、ディケイドは一枚のカードをディケイドライバーへ挿入する。

”アタックライド……ブラスト”

「このっ！」

「ぐぬっ！」

ライドブッカー・ガンモードの連射を受け、初めてアポロマグナムが撃ち負けた。それにアポロガイストが怯んだのを見てディケイ

ドは学院から戦場を変えるべく走り出した。それを追うようにアポロガイストも動き出す。

（士さんはヴィヴィオ達を守るために学院から出て行ったのかな？……でも、ヴィヴィオは最後まで応援したい！）

そんな離れていく二人を追い駆けるようにヴィヴィオも走り出すのは、ある意味で当然と言えたかもしれない。あの機動六課時代、ヴィヴィオはただ待つ事しか出来なかった。ライダー達の応援を最後まで出来なかったのだ。

しかし、今はあの頃とは違う。少しだが魔法も覚えた。上手くすればディケイドの援護も出来るかもしれない。そんな甘い考えを抱いてヴィヴィオは駆ける。

他の生徒達や保護者達は突然のライダーと怪人の戦いの衝撃から抜け出せず、彼女を止める事は出来なかった。だが、ヴィヴィオが動けるのならば彼女達も動けないはずはない。ヴィヴィオを止めるためにその後を急いで追い駆ける者達がいた。

「ヴィヴィオ、待ってください！」

「危険だ！　戻れっ！」

イクスヴェリアとリインも走り去るヴィヴィオを捕まえるために走る。そんな彼女達を他の者達は呆然と見送る者が多かった。だが、中には冷静になって行動する者もいた。彼らは揃って管理局へ通報した。怪人が出た、と……

学院の近くにある森。出来るだけ人を巻き込まないで済む場所をとディケイドが選んだ場所がそこだった。そこで響く金属音。それはディケイドとアポロガイストが激しく行っている剣戟によるもの。

「はっ！」

「何の！」

ディケイドの袈裟切りをガイストカッターで受け止め、お返しとばかりにアポロマグナムでその腹部を狙うアポロガイスト。しかしその一撃をディケイドは受けぬようにアポロガイストの体を蹴る事で防ぐ。

一旦距離を取る二人。ディケイドはもう確信していた。目の前の相手は自分が良く知るアポロガイストではないと。平行世界の存在。それはライダーだけではなく怪人にもいるのだと理解したのだ。

「グランショッカーと言ったか。一体誰が親玉だ？」

「それを貴様に教える必要はない」

「ケチくさい奴だ。なら倒して聞き出すか」

「ふん、貴様に出来るかな？」

「出来るに決まってる。俺は仮面ライダーなんだからな！」

アポロガイストにそう啖呵を切ると、ディケイドはディケイドライバーの両側を引いた。そして一枚のカードを取り出した。敵は銃

剣と盾を使う存在。しかも、自身の仲間とも言うべき戦闘員達を容赦なく切り捨てた相手だ。ならば、自分はそれを許さない姿で相手をしようと考えたのだ。

（カズマ……お前の在り方、貸してもらうぞ！）

己に課せられていたアンデッド封印よりも仲間の事を思ってその命を優先して守り抜こうとした男。本当の仮面ライダーとしてＺＥＲＯから始める今の自分には相応しい。そう考えて士はその力と想いを借りる事にした。ディケイドはブレイドが表示されたカードをディケイドライバーへ挿入して両側を押し込んだ。

それは、彼が仮面ライダーの称号の重さを知ったからこその気持ち。自分とは違い、今まで出会ったライダー達は皆その名に相応しい生き方を貫いていた。迷い悩む事もあったがそれでも基本は同じ。そう、それはみんなの笑顔のために。その言葉を胸に彼らもまたライダーの力を使っていたと気付かされたからだ。

”カメンライド……ブレイド”

一瞬にしてディケイドの姿が変わる。それはブレイド。ディケイドブレイドは、手にしたライドブッカー・ソードモードの刀身を軽く手で撫で上げるとアポロガイストへと向かって行く。それを振るう度、彼は思う。今カズマ達はどうしているのだろうと。

既に世界が崩壊する可能性はなくなった。しかし、自分の目の前にいるアポロガイストが語ったグランショッカーと言う組織。それがもし他のライダー達の世界にも現れているとしたら。そこまで考え、彼は内心首を横に振る。

（いや、それでも心配いらないはずだ。あいつらも仮面ライダーな

んだからな！）

アポロマグナムの攻撃をライドブッカーで弾きながら、ディケイドブレイドはアポロガイストと接近戦を繰り広げる。そこへ音を聞きつけたヴィヴィオが姿を見せた。ヴィヴィオは目の前にいるのがディケイドではない事に驚きを浮かべたが、その腹部を見て頷いた。

「あれはディケイドのベルトだよね。じゃ、あれが異世界のライダーの姿になるって事なんだ」

士から以前聞いた話を思い出し、ヴィヴィオは初めて見るブレイドの姿に思わず拳を握る。真っ赤な目をしたライダー。それはヴィヴィオにはあの四人を思い出させたのだ。

クウガ達四人のライダーと同じ目の色。ならば、きっとあのライダーも優しく強いライダーに違いない。そしてその姿を借りて戦うディケイドも立派なライダー。故にヴィヴィオは心の中で声援を送る。

（頑張って！　仮面ライダーっ！）

「これでどうだ！」

”アタックライド……スラッシュ”

「ぬっ！？」

その声援が届いたかのようにディケイドブレイドの一撃がアポロガイストの細身の剣を切り落とした。思わず歓声を上げたくなるヴィヴィオだったが、咄嗟に口を押さえた。ここで気付かれたらディケイドの気遣いを無駄にすると思ったのだ。

アポロガイストは切り落とされた剣を一度だけ見やると、満足そうに頷いてアポロマグナムを構えた。その闘志が少しも衰えていない事にディケイドブレイドは意外な印象を受けた。多少なりとも気落ちすると思っていたのだ。

「やるなディケイド。Xライダーもそうだったが、貴様のような強敵と戦えるのは嬉しいぞっ！」

「ぐっ！」

アポロマグナムがディケイドブレイドの体を襲う。その銃撃は回避したディケイドブレイドだったが、そこを狙ったガイストカッターが直撃して姿が戻る。それを見ていたヴィヴィオが小さく驚きの声を漏らした。そんな声に気付かず、両者は睨み合うようにしていた。

「やってくれたな。それにお前は嬉しくても俺は少しも嬉しくない。で、お前らの目的は何だ！」

「我々が目指すものはいつの時代もただ一つ、世界征服だ」

「……そうか。しかも、今回は地球だけじゃなく異世界も含めてとはな」

そのディケイドの言葉にアポロガイストは興味無さそうな声を返した。それを知ったのは偶然だったがな、と。その事を詳しく問い質そうしたディケイドの目の前に灰色のオーロラが出現した。

そこから現れたのは、ディケイドにとって見覚えのある二つの姿だった。片方は蛇の姿の怪人。ショッカー幹部のガラガランダだ。そして残る一人は白いイカの怪人。同じくショッカー幹部のイカデ

ビルである。

「お前達はっ？！」

「何を手間取っているのだ、アポロガイスト！」

「世界を渡る力を持つライダー、ディケイド。我らグランショッカーの全平行世界征服。その障害となる貴様はここで始末する！」

「ガラガランダとイカデビルか。狼男の姿がないが……まあいい。これはどういう事だ？　確かお前達ショッカー幹部の担当はディケイドではなくカブトだったはず」

突如として現れた二体にアポロガイストはやや不機嫌そうな声を出す。すると、その言葉にディケイドが息を呑む。先程抱いた自分の予想が現実の物となっていたと理解したのだ。

「分かっておるわ！　だが、行った先の世界でカブトは現れなかったのだ！」

「何？」

「本当だ。おびき出そうと暴れたのだが、そこへ現れたのはカブトではなかった。まぁそやつもクロックアップを使ってきたがな。しかし、既にワームの細胞を取り込んで対策をしていた我々は逆に相手を追い詰める事に成功した。したのだが……」

「何があった？」

イカデビルの濁す言葉にアポロガイストは疑問を抱いた。それな

らば数で勝る彼らが勝利するはずだからだ。そんな彼へイカデビルが理解出来ないとばかりに告げた。

――――窮地の奴を救うように謎のメカが現れた瞬間、その姿が変わったのだ。そして、我ら以上の速度で動き出して攻撃され狼男は散った。

――――我らは隙を突いて何とか撤退出来たがな。そういえば奴があれを使った瞬間、ハイパースタッグビートルと聞こえたな。

それを聞いたディケイドはある事に気付いた。それは、怪人達が侵略したのは自分が訪れたカブトの世界ではない事。そうでなくてはカブトが現れないはずはない。

三幹部の会話を聞いて、ディケイドは知らずライドブッカーを握る手に力を込めた。自分の知らない平行世界でライダーが勝利した。それが自分へのメッセージに思えたのだ。

（どうやらグランショッカーと戦ってるのは俺だけじゃないらしい。他のライダー達は自分達の世界から動けないだろうが、守る事は出来ているみたいだしな。なら、俺の役目はライダーがいないここを守る事だ！）

数が増えた事に対する不安を消し、気持ちも新たに構えるディケイド。そんな彼に気付いて幹部怪人達も構えた。しかし、アポロガイストはガラガランダとイカデビルの前に出ると両手で二体を下がらせるように動かす。

「アポロガイスト、これはどういう事だ」

「知れた事。ディケイドは私の標的だ。お前達は手を出さないでも

らおうか」

「何っ！？　貴様、勝手な事を！」

「元々ディケイドを任されたのはこの私。おそらく作戦失敗の埋め合わせをしようとここへ来たのだろうが、私の獲物を取られる訳にはいかん。だが折角この世界へ来たのだ。お前達は精々魔怪人計画に使えそうな素体を見繕っておけ」

そう言い放つとアポロガイストはディケイド向かって走り出す。それを迎え撃つディケイドだったが、その意識は目の前のアポロガイストだけではなく後ろの二体へも割かれていた。

アポロガイストの言葉に文句を言おうとしたガラガランダヘイカデビルが何かを囁き、二体は仕方ないとばかりに学院のある方向へ動き出そうとしていたのだ。

（計画……魔怪人とか言ってたな。素体と言うのは……まさかっ？！）

アポロガイストの言葉と二体の進路。そこからディケイドはある結論を導き出す。それはとてもではないが見過ごせない内容。

「待てっ！　お前ら、この世界の魔法を使える連中を怪人にするつもりか！」

ディケイドの言葉にヴィヴィオが思わず息を呑んだ。かつて邪眼は戦闘機人を怪人へと改造した。それとはまた違う恐ろしさをその言葉は持っていたのだ。そう、魔力を持つ者を全て怪人へと作り変える。それはまさしく悪魔の所業と言えた。

どこかで違っていて欲しいと願うヴィヴィオの耳に入ってきたの

は、そんな気持ちを粉々にするイカデビルの声だった。

「そうだ。魔法を使える人間を改造し、新たな能力を得た怪人”魔法怪人”へとする。それが魔怪人計画。そのために我々はこの世界へ目をつけたのだ」

「あの方が最初の依り代として使った素体。それから手に入れた情報を基にな！」

「あの方……依り代……？」

「ディケイド、話はそこまでだ。私との戦いに集中してもらおう！」

手に入った情報を考えるディケイドへアポロマグナムが襲い掛かる。その攻撃を際どく回避し、ディケイドも今は目の前の相手へ意識を向けるしかないと思って反撃を開始する。

一方、ヴィヴィオは目の前の光景から視線を動かし、二体の怪人を見つめていた。イカデビルの言った内容。それはとてもではないがさせる訳にはいかない。急いで念話で学院の者達へ連絡しようとするヴィヴィオだったが、そこでふと思う事があった。

（でもどうしよう……こんな事教えたら、みんな怖くなっちゃうよお）

今から怪人が行くから逃げろ。それだけでも先程の光景を思い出せば簡単に言う事は出来ない。突然の怪人出現に怯えている者ばかりだったのだ。ここにいるヴィヴィオとて、六課時代の経験が無ければ今のような行動は出来ないのだから。

少し迷ったヴィヴィオが出した結論は、それでも伝えずに捕まえられる方が不味いとのもの。最終的にみんなの笑顔を守れるとすれ

ばそれが一番だと思ったのだ。

二体がいなくなったのを見て、意を決して念話を送るヴィヴィオ。そこへイクスヴェリアとリインから念話が返ってきた。今どこにいるのかと言うものだ。それに現在地を教えようとした時、ヴィヴィオは何かの影が出来た事に気付いた。それを確かめようとヴィヴィオが振り向くと、そこには……

「あ……ああっ……」

「ここで何をしている、小娘！」

「ふむ……どうやら念話とやらを使っていたようだ。僅かだが私の隕石誘導装置が反応した事から間違いないだろう。早速素体を見つけたな」

そこにいたのは学院の方へ消えたはずの二体だった。イカデビルの触手状の鞭がヴィヴィオへ迫る。それに抗おうとするヴィヴィオだが、当然出来るはずもなく呆気なく捕まった。

逃げ出せないようにやや力を込めるイカデビル。その視線がヴィヴィオを見定めるように動いた。それに何とか気丈に振舞おうとするヴィヴィオへガラガランダが顔を近づけた。

「ひっ！」

「しかしこんな所にいたとなると……この小娘、ディケイドの関係者か」

「その可能性は高いだろう……ディケイド！　これを見ろっ！」

ガラガランダの指摘にイカデビルは頷き捕まえたヴィヴィオを見せる事にした。その大声にディケイドとアポロガイストの視線が動く。そこには触手で身動きを封じられたヴィヴィオがいた。その表情は泣き出す手前のようにも見える。

「ヴィヴィオっ！？　お前、どうしてここにいる！？」

「ごめんなさいっ！　どうしても士さんの応援をしたくて……それで……っ！」

そのままヴィヴィオはしゃくり上げながら泣き出した。それは己の未熟さと迂闊さを呪うもの。ただごめんなさいと繰り返し、ディケイドの足手まといとなった事を悔やむ涙を流す。

ディケイドはそれを見て何も言わずに手にしていたライドブッカーを投げた。その行動にアポロガイストが小さく舌打ちをする。しかし、二体はむしろ納得していた。

「……これでいいだろ。ヴィヴィオを放せ」

「それはお前を殺した後だ、ディケイド。この娘を助けて欲しければそのまま動くな」

「アポロガイスト、早く攻撃しろ。今が好機だぞ」

仮面ライダーの事を良く知っている二体はこれでディケイドを始末出来たと確信した。かつて一号達を相手にした時は、思わぬ援軍や油断から逆転を許した事もあるからこその確信だ。ここにディケイドを助けるライダーも人間もいないのだから。

ガラガランダの余裕さえ感じさせる声の後、何も起きない事に気付いたヴィヴィオは泣くのを止めて目の前の光景へ意識を戻した。

完全に無抵抗となったディケイドの隣でアポロガイストは立ち尽くしていたのだ。

そして少しの間が開く。やがてアポロガイストはゆっくりとディケイドに背を向けると歩き出した。それに驚くディケイド達。そんな彼らへアポロガイストは歩みを止める事無く告げた。

――こんな勝ち方は私の主義ではない。確かに仮面ライダーを倒すのにこれ以上の手はないだろう。だが、私はこんな汚れた勝利はいらん。後は勝手にするがいい……

そう言い終わると同時にアポロガイストは出現したオーロラへと消えていく。それを見送り、ディケイドとヴィヴィオは揃ってある印象を受けた。悪の怪人にも正々堂々ライダーを打ち破ろうと考える者がいるのだと。特に別のアポロガイストを知るディケイドは思う事があった。

（同じ名前でも本当に別物だな。どうやら怪人の方は、ライダーとは違って似てはいるのは姿だけらしい）

そんな風にどこか感心しながらそれを見送ったディケイドとは違い、二体の怪人はそのアポロガイストの行動にそれぞれ異なった反応を見せていた。ガラガランダは憤慨し、イカデビルはらしいと納得していたのだ。

「ええい！　何だ、あの態度は！」

「紳士を気取る奴らしい言葉だ。仕方ない。お前がやれ、ガラガランダ」

「分かっておる！　命令するな！」

苛立ちを隠さずディケイドへ近付くガラガランダ。その手の鞭を振るいディケイドへダメージを与えていく。それは嬲り殺し。一思いに殺すのではなく、じわじわと苦しめるやり方だ。それを選ぶ理由はかつて一号に苦渋を舐めさせられたからだろう。

あっさり殺しては面白くないとばかりにディケイドを痛めつけるガラガランダ。鞭打たれた場所から火花を散らし、ディケイドは地面に這いつくばる事しか出来ない。

それを見てヴィヴィオは必死になって考えていた。どうすればこの状況を変える事が出来るか。どうすればディケイドが反撃出来るようになるかを。

（泣いてちゃ駄目だ！　どんな時でもみんなが笑顔になれるようにって動く事。それが強さだもんっ！）

ディケイドがガラガランダに鞭打たれても耐えている事に勇気付けられるように、ヴィヴィオは懸命に考え始めた。その時、イクスヴェリアとリインからある念話が入る。それを聞いたヴィヴィオは二人を信じて時期を待った。

「手も足も出せないとは惨めだな、ディケイド！　貴様らライダーはどいつも同じだ。人間を一人盾とされるだけで何も出来ん。その甘さが貴様ら最大の弱点だ！」

その言葉と共にディケイドの体へガラガランダの鞭が一際唸りを上げて襲いかかった。その強烈な一撃を受けてディケイドも遂に変身が解けてしまう。士は地面を若干転がりながらその手を握り締めると、顔を上げてガラガランダを睨んだ。

「お前らから見れば弱点か……だが、ライダー達にとっては違うっ！」

「何ぃ？」

「悲しみのない未来を願い、みんなの笑顔のためにと戦い抜けた気持ち。争いの無い未来を願い、たった一人でも悪に挑めた心。その原動力も、お前達を倒した強さも……全てその甘さが生み出したんだ！」

そう言いながら士は痛む体で立ち上がる。その漂う気迫にガラガランダは微かにだが確かに後ずさった。

「ぬぅぅぅぅ！」

「人はそれをこう呼ぶらしい。優しさ、となっ！」

「ほざけ！　世界の破壊者め！」

そのガラガランダの言葉に士はディケイドライバーを装着すると同時に一枚のカードを見せ付ける。それはディケイドの姿が表示されているカード。士はそれを手に、今までにない程の決意を込めた宣言を凛々しく告げる。

――違う！　俺は、俺は通りすがりの仮面ライダーだ！　覚えておけっ！

その声にガラガランダ達が息を呑み、ヴィヴィオの表情が輝いた。その三対の視線を受けながら士は力強い言葉を放つ。

「変身っ！」

”カメンライド……ディケイド”

士は再びディケイドへと変身した瞬間、落ちているライドブッカーを手にするべく走り出した。その行動に対し僅かに驚くヴィヴィオ達。ディケイドがそんな行動を取れたのには訳がある。そう、イカデビルの後方に潜むイクスヴェリアと飛行しながら接近するリインを見たからだ。それが何を意味するかを直感で悟ったディケイドの動きに合わせるように、二体の体が光の輪で拘束された。

「「な、何だとっ！？」」

それと同時にディケイドは手にしたライドブッカーを振り上げた。ヴィヴィオの体を拘束する触手を切り落として助けるために。リインはディケイドの動きに小さく頷きながらイカデビルへ近寄った。

二人はヴィヴィオとの念話を頼りに位置を特定し、彼女が囚われているのを目撃。ディケイドがヴィヴィオを助けるために反撃出来ない事を察し救出行動を起こしたのだ。その死角へと回り込みながらもディケイドへは気付いてもらえるような位置取りを心掛けて。

イカデビルに接近したディケイドがヴィヴィオを傷つけないように触手を切り落とすと、その体をリインが受け止めた。それを見届ける事無くディケイドはイカデビルの体を大きく蹴り飛ばして安全を確保する。

「士さん！　アインさん！　ありがとう！　それとごめんなさい！」

「お前が無事ならそれでいい。門矢、後を任せるぞ」

「ああ。任せておけ」

リインはディケイドの言葉に安心感を感じると、ヴィヴィオを抱え急いでイクスヴェリアの傍へと動き出す。ディケイドはそれを護衛する形で後を追いながら一枚のカードを取り出した。それは彼女達三人が良く知るライダーの一人。そして、彼がもっとも関ったライダーが表示されていた。

（ユウスケ……お前の強さを貸してくれ！）

”カメンライド……クウガ”

一人の笑顔を守るために戦い始め、最後にはみんなの笑顔を守ると決意したもう一人のクウガ。ヴィヴィオ達から聞いた話で士が一番驚いたのはそこ。二人のクウガは揃って同じ結論へ辿り着いていたのだ。

二体の怪人から距離を取りながら、三人はディケイドクウガの姿に懐かしさと強い希望を覚えた。その視線に気付いたのかディケイドクウガは三人へ一度だけサムズアップを送る。それに三人が笑顔でサムズアップ。

「負けるなっ！　仮面ライダー！！」

ヴィヴィオの声援を受け、ディケイドクウガはバインドを破壊した二体を相手に戦いを開始する。それをある程度離れた場所に降りて観戦する三人。だが、その光景はやはり彼女達には感慨深いものがある。

「……五代を思い出すな、あれは」

「はい。でも……少し戦い方が違うように思えます」

「だって士さんはディケイドだもん。それでもクウガと同じぐらい強いから大丈夫だよ」

二体を相手に奮戦するディケイドクウガを見つめ、三人はその勝利を願う。ガラガランダの鞭攻撃をかわし、イカデビルの触手を掴み、ディケイドクウガは必死に戦う。その背に守る三つの命を守るために。

無人世界で邪眼を相手に挫けず、ゆりかごでは自分の偽者相手に屈せず立ち向かい続けたクウガ。その勇姿を彷彿とさせるような光景がそこにはあった。しかし、相手はショッカーの幹部怪人。いかなディケイドクウガでも一人で相手をするには分が悪いと言わざるを得ない。

それでも諦める事無くディケイドクウガは戦う。フォームライドを使い、タイタンへ変わってタイタンソードを手に高い防御力を生かした戦法で手傷を負わせ、更にドラゴンとなってロッドを振るう。それでディケイドクウガが二体を相手に苦戦しながらも確実にダメージを与えていくのを見て、このままいけば勝てるとヴィヴィオ達が思った時だった。

「何っ?!」

突然二体の姿が消えた。それに戸惑うディケイドクウガだったが、その瞬間ある事を思い出して即座に一枚のカードをディケイドライバーへ挿入した。

”フォームライド……クウガペガサス”

イカデビルが告げたクロックアップに対応したとの言葉だ。あのカブトの世界で経験したワームとの戦い。その時と同じくペガサスの超感覚でディケイドクウガは二体のクロックアップに対抗した。そう、カブト対策として施したワーム細胞がもたらした力だ。しかし、それはワームと違い時間制限がある擬似能力。

異種族であり、外宇宙の生命であるワーム。その細胞を移植しただけではクロックアップを可能するだけで精一杯だったのだ。つまり、怪人と言えどその負荷には長時間耐えられない欠点があった。しかも、一度使うと再使用には一定時間間隔を開けなければならないため、気軽に使う事さえ出来ないのだ。

そこには、ライダーシステムという無機物で再現させた事とワーム細胞という有機物で再現させた事の差がある。機械は徹底的に管理され調整や実験を行えたが、生物は個体差がある。そのため、安定した効果を得る事が出来なかったのだ。

”アタックライド……ペガサスボウガン”

「これで……どうだ！」

二体の動きを見つめディケイドクウガはブラストペガサスをガラガランダへ放つ。目には見えない空気弾が見事にガラガランダを直撃し、大きくその体を吹き飛ばした。だが、それでも何とかガラガランダは立ち上がった。

クロックアップ中のため受けたダメージは大きかったものの蛇特有の強い生命力のおかげで助かったのだ。ディケイドクウガはそれを一瞬だけ見やり舌打ちしながら今度はイカデビルを狙う。イカデビルはディケイドクウガがクロックアップに対応している事に驚き、

警戒するように距離を取っていた。

「次はお前だ」

「同じ手は食わん！」

「なっ！？」

イカデビルは自分から接近する事を避けて触手による中距離攻撃へと切り替えた。しかも、体を決してペガサスボウガンの射線上にいれない徹底振りだ。ガラガランダが受けた攻撃を視認出来ない類のものと判断したのだ。

しかし、ディケイドクウガはそこである事に気付く。イカデビルのクロックアップはカブトのそれとどこか違うと。ディケイドクウガはそれを信じて好機を待つ。彼は何度も本物のクロックアップを見ていた。故にイカデビル達のそれが何とか形を取り繕った紛い物だと気付いたのだ。

（あいつ、どこか動きが鈍いな。クロックアップに体が完全に対応出来てないのか……）

これなら勝機はある。そう思い、ディケイドクウガはペガサスボウガンを構えた。だが、その耳に迫り来る足音が聞こえてきた。

「先程はよくもやってくれたな！」

「くそっ！」

振り向いた先にいたガラガランダにより、ディケイドクウガの手からペガサスボウガンが弾かれる。こうして一転不利な状況へと追

い込まれたディケイドクウガ。それはイカデビルのクロックアップが終了し、反撃のチャンスを得たと思った矢先の事。
後ろからガラガランダに羽交い絞めにされるディケイドクウガ。そこへ追撃としてイカデビルの触手が鞭のように唸り、その体へダメージを与え始めた。

「喰らえっ！」

更にその触手から電撃が走り、ディケイドクウガを痛めつける。その強い威力に本来の姿へと戻るディケイド。それを見て余計に攻勢を強めるイカデビル。ガラガランダもディケイドから手を離し、挟み撃ちの状況を作り出して攻撃に参加する。
思わず助けに入ろうとするリインだが、下手に動けば自分はともかくヴィヴィオとイクスヴェリアを危険に晒しかねないと考え、懸命に自分を抑えていた。そんなリインに気付き、そっとイクスヴェリアが手を重ねる。

「アインさん、お気持ちは分かります。私も同じですから」

「イクス……」

「魔法が使えても精々が足止め程度。しかも、不意を突かなければ成功させる事が難しい上にあまり効果が続かない」

「でも、ヴィヴィオ達にも出来る事がある。だよね？」

イクスヴェリアの言葉を受けてのヴィヴィオの言葉。それにイクスヴェリアが笑みを浮かべて頷いた。リインはそんな二人に一瞬呆気に取られるが、すぐに小さく苦笑した。

（あの頃よりも強くなったのだな、二人共。そうか。ヴィヴィオも泣いてはいたようだが、きっと恐怖からではなかったのだろう。おそらくは悔し涙か）

「では、もう一度怪人を足止めするぞ。ただし、私は飛行魔法で囮になって士を助ける。それで引き付けられない方へヴィヴィオとイクスでバインドをしてくれ」

「「はいっ！」」

「頼んだぞ」

凛々しく返事を返す二人に優しい笑みを返し、リインはその場から飛び上がるとディケイドを助けるために離れていく。それを見送りながら、ヴィヴィオとイクスヴェリアは互いの手を握り合う。

共にまだ魔法は未熟と言わざるを得ない。それでも必死に構成を組み立てる。デバイスがあればと思う二人だったが、無い物強請りをしても意味がない。そう思って二人は互いを支え合うようにバインドの構築を進めていく。

（ママやパパに教えてもらった事。六課のみんなが教えてくれた事。そして五代さん達が教えてくれた事。それはどんな時も諦めない事！）

（人は決して弱くはない。光を、希望を信じる気持ちある限り、人は決して絶望には……闇には負けないとあの方達は教えてくれた！）

（（それに……今は助け合える友達がいるっ！））

握り合った手に力が込められたのが同じ瞬間だと気付いて、二人

は互いへ視線を向けて嬉しそうに微笑む。念話などしなくても分かる。相手も同じ事を考えてくれたと。ならばもう何も怖くない。

そう思って小さく頷き合い、二人は眼前の光景を見つめた。そこには、ガラガランダと戦うディケイドとイカデビルの攻撃を逃げるようにかわすリインの姿がある。

蓄積したダメージはディケイドも怪人達も少なくない。特にガラガランダはブラストペガサスを受けたためその動きはどこか鈍い。それでも撤退しないのはディケイドも同じような状態に近い事とショッカー幹部としての意地だ。

本来の目的であるカブト抹殺とそこの世界征服を失敗し、この上ディケイド抹殺さえ失敗すれば組織内での彼の立場はない。それを痛感しているからこそ、ガラガランダは後には引けないのだ。

そんな時、ガラガランダに好機が訪れた。ディケイドが草に足を取られて体勢を崩したのだ。

「しまったっ?!」

「死ねぇ！　仮面ライダーっ！」

振り下ろされる鞭。それを咄嗟にライドブッカーで受け止めようとするディケイド。だが、その攻撃が届く事は無かった。

「おのれぇぇぇぇ！　またこの魔法か！」

二色の魔力光が補い合うようにバインドを構成してガラガランダを拘束していたのだ。それに反応し、一枚のカードを取り出すディケイド。そんな彼へ聞こえる声がある。

「「ライダー、後はお願い（します）！」」

「よし！　そのまましっかり押さえてろ！」

ヴィヴィオとイクスヴェリアの願うような声に返事をしながら、ディケイドライバーへカードを挿入するディケイド。そして、発動されるのは彼の必殺技。

”ファイナルアタックライド……ディディディケイド”

ガラガランダの前方へ出現する十枚の巨大なカード状の光。それがディケイドの動きに連動して道を作るような状態へ変化する。それはディメンションキックと言うディケイドのライダーキック。本来ならば倒せないはずのアンデッドなどの敵も倒せる力を秘めた技だ。

「はぁぁぁぁっ！！」

「ガァァァラァァァ！」

炸裂するディメンションキック。それがガラガランダを蹴り飛ばす。その体が地面へ叩き付けられると同時に土煙が上がった。それが晴れた先にいたのは地獄大使と呼ばれるショッカーの大幹部だ。

「ぐ、グランショッカー……バンザァァァァイっ！！」

両手を高々と上げ、地獄大使はそのまま後ろへと倒れ込む。その次の瞬間、大きな爆発が起こった。その爆風に目を閉じるヴィヴィオとイクスヴェリア。ディケイドはそれに構う事なくイカデビルへと向かっていた。リインの体に少なからず傷が出来ていたからだ。

それを助けようとするディケイドへイカデビルが襲い掛かる。その意識がディケイドへ向けられたおかげでリインはイカデビルから距離を取る事が出来た。しかし、今度はディケイドが苦しむ事になったのだから彼女の心境は複雑だ。

「クックック……どうしたディケイド？　大分辛いようだな」

ディケイドの精彩を欠く動きを見て、イカデビルは余裕を感じさせるような言葉を掛ける。その声に苛立ちを感じながらもディケイドは吼えた。

「黙れ！　まだまだこれからだ！」

「強がるな。アポロガイストとの戦いに我々との連戦と貴様の受けたダメージは相当のはず。そろそろ諦めて降伏しろ。我々に世界の破壊者として協力するなら命だけは助けるぞ」

「ふざけるなっ！　誰がお前らなんかの言いなりになるか！　そうだ……俺は最後まで悪と、闇と戦う！　仮面ライダーとしてな！」

「そうか。ならば仮面ライダーとしてここで死ぬがいい！」

ディケイドへ襲いかかるイカデビル。それに何とか立ち向かおうとするディケイドだが、やはりイカデビルの指摘通り動きが鈍い。リイン達も援護しようとするのだが、それを嫌ったイカデビルが遂に特殊能力を使った。頭部にある隕石誘導装置を使って周囲全体へ隕石を落下させたのだ。

それに阻まれ、リイン達はディケイドへ接近する事もままならない。一方のディケイドもイカデビルへ接近する事が出来なくなった。しかし、ディケイドには逆転のためのある手段があった。隕石によ

る妨害を無視出来るそれを実行に移すべく、その手に一枚のカードを取り出した。

（ソウジ……お前の速さ、使わせてもらうぞ！）

一人超加速し続ける状態となりながらも、妹を守るために戦っていたカブト。兄としての在り方と、傍にいる事が出来ずとも心は繋げる事が出来ると教えてくれたライダー。その神速を借りる。相手のような紛い物ではなく、本物のクロックアップを。そう思ってディケイドはカードをディケイドライバーへ挿入した。

”カメンライド……カブト”

真紅の体に青い目の仮面ライダー。ディケイドカブトとなったその姿にヴィヴィオ達は驚きを見せる。しかし、カブトを知っているイカデビルは忌々しげに叫ぶ。

「貴様、温存していたとでも言うのか！　舐めおって！」

「行くぞ、イカ野郎！」

”アタックライド……クロックアップ”

電子音声が聞こえた瞬間、ヴィヴィオ達の前からディケイドカブト達が消えた。自分が不利になる可能性を承知でイカデビルもクロックアップを使用したのだ。

ヴィヴィオ達の目や耳には感知出来ない状態で戦うディケイドカブト。この状態ではクロックアップの影響を受けて隕石が停止したも同然となる。そのため、その能力を有効活用出来ないイカデビルの敗色が一気に濃厚となっていく。

落下していた隕石が周囲に停滞しているような状況の中、格闘戦を行うディケイドカブトとイカデビル。しかし、イカデビルはクロックアップの負荷のためにその動きがややディケイドカブトよりも鈍い。それを突いてディケイドカブトは的確に攻撃を決めていく。

拳が、脚がイカデビルへダメージを与える。何とか反撃するイカデビルだったが、それを見切ってディケイドカブトは鋭い反撃を繰り出した。そのカウンターによろめき、イカデビルは肩で息をしながら告げた。

「お、おのれ……さすがにまだ疲労が抜けきらんか……」

「だろうな。お前らのは紛い物のクロックアップだ」

「だが！　まだ負けてはいないっ！」

言葉と共に蹴りを放つイカデビルだったが、その蹴りはディケイドカブトの手刀で叩き落された。

「いや、お前の負けだ。本物のクロックアップを、カブトの速さを使われた時点でそれはもう決まっていたんだ！」

「何だと！？」

「お前は子供を平然と人質にした！　クロックアップを他者を苦しめるために使った！　それをカブトなら、仮面ライダーなら許しはしないっ！」

その言葉を言いながらイカデビルの攻撃をしゃがんでかわしてディケイドカブトは拳を放つ。そのダメージに軽くよろめき、イカデ

ビルは腹部を押さえてディケイドカブトへ視線を向けた。

「あ、あれだけのダメージを受けた体のどこにこれ程の力が……」

「ダメージなんか関係ない。俺は他のライダー達の力を託された。それを使って戦う以上、俺はあいつらと同じ気持ちでないといけないからな。どのライダーもみんなの笑顔を守る存在。その想いこそがその力。故にどんな時でも諦めないのが仮面ライダーだ！」

そう力強く告げると、ディケイドカブトはイカデビルの腹部へ再度渾身の拳を叩き込んだ。その衝撃でイカデビルの体が一つの隕石へ激突する。その瞬間両者のクロックアップが終わり、落下する隕石とイカデビル。

その音に驚きながらも状況を把握して喜びを見せるヴィヴィオ達の声を背に受け、ディケイドカブトは一枚のカードを手にした。それはカブトのファイナルアタックライドだ。

「これでとどめだ！」

”ファイナルアタックライド……カカカブト”

ディケイドカブトの右足へエネルギーが集束する。クロックアップによる負荷と受けたダメージのため、身動きが取れないイカデビルの頭部へそれが極められた。それがイカデビルにとっては一番の痛手。

「これで終わった訳ではないぞぉぉぉぉ！！」

かつて一号に敗北したのも、隕石誘導装置のある頭部へ集中攻撃を受けたためだったのだ。つまり、イカデビルの弱点へのライダー

キック。イカデビルは死神博士に戻る事も無くそのまま散った。その断末魔を聞きながら、ディケイドカブトはディケイドライバーを外した。

「やっと終わったな……」

疲労困憊。満身創痍。激戦を示すような傷が顔にもある。それでも士はどこか笑みを浮かべた。戦いが完全に終わった訳ではない。それでも一先ず凌いだ。そう思った瞬間、気が抜けたためその体が倒れた。

そこへ慌てて駆け寄るヴィヴィオ達。リインが傷を癒そうと簡単な回復魔法を使う中、ヴィヴィオとイクスヴェリアは士の姿に仮面ライダーらしさを強く感じて笑みを見せた。

「お疲れ様です、士さん」

「助けてくれてありがとう。それと……本当にごめんなさいっ！」

「済んだ事だ。それにお前がいた事で俺が助かったのも事実だしな。だが、もう二度とするな」

士の言葉に俯いたままで小さく頷くヴィヴィオ。そんな反応を見せるヴィヴィオに士は小さくため息を吐くとその頭へ軽く手を置いて告げた。

――お前が怪我でもしたら、俺がなのはやユーノにどれだけ文句を言われると思ってるんだ。怪人を相手にするより疲れるんだぞ、それは。

その言葉が士なりの気遣いだと思ってヴィヴィオはすぐに顔を上

げた。そして嬉しそうに笑みを見せる。そんなヴィヴィオにリインとイクスヴェリアは苦笑した。現金だと思ったのだ。士もヴィヴィオの反応に微かに微笑むも、すぐに不機嫌そうな表情へと戻してやれやれと肩を竦めた。

こうして穏やかな雰囲気が戻ってきたと思った時だった。それを台無しにするように灰色のオーロラが再度出現したのだ。即座に立ち上がり変身しようとする士だったが、そこから現れた存在が投げたナイフにディケイドライバーを弾き飛ばされた。

「くそっ！」

取りに行こうとするも、士は疲労のためかその足取りがおぼつかない。それを見て士を支えようとするリイン達。そんな彼らの視線は同じ場所へ向けられていた。

「ちっ！　このタイミングでとはな。成程、さっきのはこういう意味か。中々味な真似をするじゃないか」

「あれは……先程校庭に現れた方達ですね」

「でも、あの時よりも数が多いよ」

「いかん。今の私達ではとても相手を出来る数じゃない」

現れたのは戦闘員達だった。だが、その数が十人以上ともなれば今の士達には強敵と言えた。総勢二十人はいるだろうか。それでも士は何とか再度立ち上がると、ヴィヴィオ達を庇うように腕を動かして告げた。

――――奴らの一番の狙いは俺だ。だからお前らは逃げろ。

――士さんっ！？

――駄目だ、門矢っ！　行くな！

士の言葉に込められたものを感じ取り、ヴィヴィオ達は揃って手を伸ばした。士はそれを振り払うように戦闘員達へ一人向かっていこうとする。このままでは全員やられてしまう。ならばせめてヴィヴィオ達だけでも逃がす。

そう士が決死の覚悟を決めたその時、戦闘員達の背後にオーロラが出現した。それはやや白さを増した灰色のオーロラ。そこから現れたのは、ヴィヴィオがこの場所で最初に見たライダーと怪人に茶髪の男性だった。故にそのライダーを知る士とヴィヴィオが同時に声を上げた。

「えっ！？　あれって！？」

「ブレイドだと！？」

その声に戦闘員達も後ろへ振り返る。ブレイド達は周囲の光景に軽く戸惑うも、すぐに目の前の戦闘員達と士達に気付いて走り出した。手にしたブレイラウザーを構え、ブレイドは戦闘員達へ向かっていく。怪人――ジョーカーもそれに続けと走り、まるで士を助けるように戦闘員を蹴散らした。

唯一、男性――アンクは手にしたデバイスを待機状態へ戻して目の前の光景を静観していた。それがヴィヴィオ達の目には、目の前の戦いは自分には他人事だと言わんばかりに見え、内心疑問を感じた。

「はっ！」

ブレイドの一撃で戦闘員が一人泡となって消える。それを見る事もなく、ブレイドはヴィヴィオ達を守るために走り出した。

「おおっ！」

ジョーカーの拳が士を取り押さようとしていた戦闘員を殴り飛ばした。そして、士を守るようにその場でジョーカーは戦い始める。そんな行動に士は自然と抱いた疑問をぶつけた。士が知る限り、目の前の相手はブレイドの敵だったからだ。

「どうしてお前はブレイドと共にいる？　そして何故俺達を助ける？」

「簡単だ。困ってる人がいたら助けたい。それは俺もあいつも同じ。だから共にいるし、お前を助ける！　それだけだ！」

士の問いかけにジョーカーはそう返し、戦闘員達を寄せ付けないように戦う。一方のブレイドもヴィヴィオ達を守るように戦っていた。

「大丈夫だからね。絶対守るから」

「はい。頑張ってください！」

「ライダー、気をつけてね！」

ブレイドの優しい声に嬉しそうな声を返すイクスヴェリアとヴィヴィオ。だが、そのヴィヴィオの告げた単語に彼は小さく驚いた。

「えっ？　何でライダーって言葉を知ってるの？」

その問いかけにヴィヴィオが答えようとする。だが、その前にリインがやや鋭い声を上げた。戦闘員が一人迫っていたのだ。

「気を抜くな。来るぞ！」

それに呼応し、ブレイドはブレイラウザーを振り向き様に動かした。その剣閃でまた一人戦闘員が倒れる。

（今はとりあえず安全を確保する方が先か。でも、時間をかけると厄介だし……何か良い方法があるかな？）

話を聞くとしても現状を打破しなければ無理だと判断し、ブレイドはならばとジョーカーへ助言を求めた。

「剣崎さんっ！　こいつら素早く倒せる良い方法ありますか！」

その名前に士達が小さく驚きを見せる。どう聞いても人の名前だったからだ。名前を呼ばれたジョーカーは戦闘員を蹴り飛ばしながらブレイドへその方法を告げた。

「2と6のカードを使ってくれ！　それで剣に雷が宿るからその力で切りつけろ！」

「分かりました！」

言われた通りブレイラウザーを展開し、2と6のカードを取り出すブレイド。先程の会話を聞いて士は理解した事がある。それは目の前のブレイドが自分の知らないブレイドで、尚且つ本来はブレイ

ドとなるべき人物ではない事だ。

（自分の力を知らないはずはないし、さっき答えた奴の名前……確かそれは……）

”サンダー、スラッシュ”

士がやや難しい顔で考え込む中、ブレイドは二枚のカードをラウズしてブレイラウザーを構えた。ブレイラウザーに宿るは斬撃と雷光の力。それを放つ相手はブレイド目掛けて襲ってくる戦闘員達。

”ライトニングスラッシュ”

「せいやぁぁぁぁっ！！」

空間を斬り裂かんばかりの電撃を纏った剣閃が煌き、多くの戦闘員達を纏めて薙ぎ払う。それを逃れた者達をジョーカーが打ち倒し戦闘は終わりを告げた。周囲の安全を確認し、ブレイドはブレイバックルを外して変身を解く。それに呼応してジョーカーも姿を戻したのだが、それを見て当然のように士達が驚いた。

「これ、ありがとうございました」

そう言って映司はブレイバックルを剣崎へ差し出した。それへ視線を向ける事なく、剣崎は少しだけ不思議そうな表情を浮かべた。

「いや、別にこのまま映司が使ってくれてもいいんだぞ？」

「いえ、今ので分かりました。これはやっぱり剣崎さんが使って初めて本当の力を出せるんだって」

その映司の言葉に剣崎はどこか嬉しそうな笑みを浮かべてブレイバックルを受け取った。それを見守っていた士は剣崎を見てやや警戒していた。彼は一度剣崎が変身したキングフォームと戦っているからだ。だからこそ何故助けられたのかが不可解だった。それもあって士は確かめるように問いかけた。

「お前、剣崎一真だな？」

「そうだけど……どうして俺の名前を？」

「やはり俺を覚えてないのか……いや待てよ？　……そうか。あいつも平行世界の存在かもしれないな」

「何を言ってるんだ？　と言うか、一人で納得してないでちゃんと教えてくれ」

一人事情を把握し納得する士に剣崎は戸惑いを浮かべた。一方、ヴィヴィオ達は映司が先程聞きたかった事を尋ねたため、それに意識を向けていた。

「ね、お嬢ちゃん。さっきライダーって言ったけど、どうしてその名前を知ってるの？」

「だって、士さんも仮面ライダーだから。それにここには他のライダーが来た事もあるし」

「えっ！？　あの人も仮面ライダーなの？」

「うんっ！」

ヴィヴィオの断言を後押しするようにイクスヴェリアとリインも頷いた。映司はそれに驚きを隠せないまま視線を士へと動かした。士は剣崎へ簡単な説明らしき事をしているようだが、どうも言い方が雑なせいもあり上手く伝わっていない。

それを見て、色々と聞きたい事が出来た映司だけではなくヴィヴィオ達もそこへ割って入り、士へちゃんとした説明を求め始める。そんな要求にやや嫌そうな反応を返す士だったが、それでも説明をし直すところに彼なりの変化が見える。

そんな中、アンクはある事に気付いて表情を変えた。デバイスに設定された転送魔法用の座標。それと現在地があまり差が無かったのだ。その事がアンクへここがミッドチルダだと教えていた。

（これは好都合だ。何とかして管理局って所へ行ってロストロギアとやらの情報を得るか）

「おい、映司！　ここがミッドチルダらしいぞ！」

そのアンクの声は士へ質問する声に掻き消され、誰の耳にも入っていない。それに苛立ちを覚えるも、もう一度アンクは叫んだ。

「おいっ！　聞いてんのか！　ここはミッドチルダってとこなんだぞっ！」

「「「「「うるさいから静かにして（ろ）（くれ）！」」」」」

見事な一致で声を返す士達。それにはさすがのアンクも言葉に詰まる。そこへイクスヴェリアが近付き、アンクへ一言。

――お気を悪くしないでください。みんな悪気はないんです。

その優しい声にアンクはある女性を思い出して若干微妙な表情を浮かべた。あのクスクシエでの日々。そこで彼が唯一苦手とした相手と似た雰囲気を感じたのだろう。

その後、アンクはイクスヴェリア相手に会話をするはめになる。彼女はアンクが一人で寂しい思いをしないようにと考えたのだ。アンクとしてもミッドの事を知るためにと割り切って応じていたのだが、イクスヴェリアは彼の知りたい事はあまり知らなかった。そのため、ほとんどが身の上話に近いものとなってしまい、アンクはイクスヴェリア相手に何とも言えない時間を過ごす事となる。

結局この後、怪人出現の通報を受けて学院付近を警戒していたシグナム率いるバトルジャケット隊と共に、彼らは六課隊舎へと移動する事となった。そこで映司達は簡単にここへ来る事となった経緯を話し、その事情を聞いたはやては信じられないとばかりに顔色を変えた。

そして、映司達はアルトの案内で本局へと向かう。それはアンクの希望と映司の申し出を叶えるため。クライドの体の治療とその生存をある女性へ報告するために……

「……そう。それで士君達がここにいるのね」

ここに来るまでの経緯を簡単に士達が話し、シャマルが納得したように頷いた。先程スバルが言った言葉が現実のものになっていた

とは思わなかったのだ。

「ああ。まさかここに俺の知らないヒビキがいるとは思わなかったがな」

「もう一人の俺みたいな存在、ね。名前や雰囲気まで同じとくるとちょっと複雑な感じだな」

士の言葉にヒビキは微妙な顔を返す。本当は彼の本名はヒビキではない。ヒビキはあくまでコードネームのようなものなのだ。それでも、長くその名で通してきているために思う事はある。

しかし、それ以外の者達は揃ってディケイドの方に意識を向けていた。特にディケイドが別のライダーへ変わった事に関する話が与えた衝撃は大きかったのだから。

「まさか五代達と同じライダーへ変身する別人がいるとは」

「名前を聞いてると必ずどこかに同じ響きがある。平行世界の存在という事が一気に信憑性が増した」

リインの言葉にザフィーラが続く。士が告げた小野寺ユウスケや芦河ショウイチの名。それが士の行った世界が五代達の平行世界という推測を納得させる要因となった。

そして同時に思うのは邪眼の時と同じくライダーが集まっている事。グランショッカーの狙いである魔法を使える者達を改造し、全平行世界を征服する事を阻止するために。

「……これは上に報告せなあかんな。あの時以上の厄介事になるんは間違いない。光太郎さんが言っとった非道なやり方。それをしとった奴らが相手になるんやから」

はやての告げた言葉にシグナム達が頷いた。ライダーを倒すためなら手段を選ばない存在。それが今このミッドチルダを狙っている。しかも、学院関係者だけとはいえその姿を見られた。騒動にならないようにと口止めはしたが、それがどれ程の効果があるかは不安が残る。

最悪、特務六課だけでは手が足りないだろう。その対処なども含めて管理局全体で事に当たらなければならないはず。そうはやて達は感じたのだ。

この後、士達を加えて話し合われた結果彼もヒビキと共に特務六課へ協力する事となる。ディエンドの事を聞いた士はそれを自分に任せて欲しいと述べた。その理由を彼は一言で告げた。仲間だから、と。

それを聞いたはやてはならばと士へディエンドの事を一任する事にし、ブレイドである剣崎と映司の協力も仰ぐ事にした。そしてこの日は一先ず解散となった。士とヴィヴィオは揃って高町家に戻り、なのはとユーノへ連絡を入れて事の顛末を告げる事となる。

自身の仮面ライダーとしての決意と在り方を示したディケイドは、その能力を駆使しショッカー幹部怪人二体を撃破した。

だが受けたダメージは大きく、疲労の色濃い士を狙う形で現れた大勢の戦闘員達に絶体絶命の危機を迎えた士達。

その危機を救うように映司達が合流。士は自分が出会った剣崎とは違う剣崎を見て、自分が知らない平行世界の存在を認識する。

魔法世界を狙うグランショッカー。彼らに魔法を教える事になった素体とはリニスの事なのだろうか？　そして素体を依り代としたあの方とは？

ディケイドが紡ぐ新たな物語。それが始まろうとしていた……

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

ディケイド編。久々の長話となりました。次回は久々となるフェイト達の出番を予定。

再会、母よ！

廊下に佇むエリオ。その視線は一枚の木製のドアへ注がれている。そこは医務室として使われている場所へ通じているのだ。今、その部屋の中にはキャロとプレシアがいる。名前を名乗った後、プレシアはエリオ達に支えられる形でしか動けなかったため、二人はプレシアの体を念のために検査する事にし、ここへ運んできたのだ。

（タントさん達へは次元漂流者って誤魔化したけど、きっとどこかで違うって気付いてるだろうな。でも、まさかあの人がフェイトさんのお母さんなんて……）

ここへ運び込む際、プレシアの事をエリオ達はタント達へそう説明したのだが、それを聞いた彼らはその雰囲気から何かを察したのか小さく苦笑したのだ。それでも何も言わずにいてくれたのは、エリオ達を信じているからだろう。その信頼を嬉しく思い、エリオはどこか笑みを浮かべた。

すると医務室のドアがゆっくりと開いた。そこからキャロは静かに廊下へと出ると、音を立てないようにドアを閉める。それを見届けてエリオはキャロへ静かに近寄った。

「……キャロ、プレシアさんはどう？」

「うん、特に異常は無かったよ。絶対にアリシアさんの事を見つけ出しますって言ったら、安心したのか眠っちゃった。あのオーロラを通ったからかもしれないけど、凄く疲れてたみたい」

「そう……」

「……ね、エリオ君。あの人が本当にプレシアさんならフェイトさんに教えないと」

キャロの言葉へエリオは即座に返事をする事が出来なかった。そう、彼女の名前を聞いたエリオ達はすぐに一枚の写真を思い出した。フェイトが大事にしていた写真だ。そこに映っていたのがプレシアとアリシア。だからこそ、二人は見覚えがあったのだ。フェイトが大切な家族と言っていた相手だったのだから。

エリオがすぐに返事を返さなかったのには理由がある。彼も確かにフェイトへ教えた方がいいとは思っている。だが、何か引っ掛かるものがあったのだ。それは当然スプールスへの現れ方。灰色のオーロラを通って出現するという異常なものだったのだから。

「……キャロ。あの人がプレシアさん本人だとしたら、大変な事が起き始めてるのかもしれない」

「どうして？」

「あのオーロラだよ。今までプレシアさんは行方不明だったんだ。それが突然僕らの前に現れた原因。それって自然発生するものだと思う？」

「まさかエリオ君、あれがあの神様のした事だって思うの？」

「……それは分からない。でも、とにかくフェイトさんへ教えよう。プレシアさんの事もあるし、僕らだけじゃ分からない事が多すぎる」

どこか不安を滲ませたエリオの声にキャロは同じような気持ちを抱いて頷いた。フェイトが自分達へプレシア達の詳しい話をしてく

れなかった事を思い出したのだ。そこに本人達以外立ち入る事の出来ない何かがある気がして、キャロはエリオの意見を支持する事にした。

知らず二人は同じタイミングで視線を動かす。向ける先は医務室のドア。その中で眠る女性の事と自分達の姉でもあり母でもある女性の事を思い出し、二人はただ何とも言えない表情を浮かべた。願わくば何事も無いようにと、心から思いながら……

それから一週間後。スプールスの自然に囲まれながらプレシアは療養していた。既に年齢も五十を過ぎ、激しい運動から遠ざかっていた体でオーロラを超えたためか未だに体調が万全とはならなかったのだ。

「……アリシア」

沈んだ声で娘の名を呟くプレシア。出来る事ならすぐに捜しに行きたい。だが、それが出来ないのは誰よりもプレシア自身が理解している。だからこそ無理はしなかった。それはあの父との会話がキッカケで気付いた事が理由。

子を思うのはいいが、そのために自分をないがしろにして動いてはいけない。子を思うのなら最後の最後までその行く末を見守る事。プレシアはそう思って体を休めていた。だが、それだけではない理由がある。それは彼女の事を献身的に世話している少年少女の存在だ。

「プレシアさん、これを飲んでください。いつものよりも苦いですけど良く効く薬湯です」

物鬱げな表情のプレシアへ明るい声でキャロが手にしたカップを差し出した。薬湯が入ったそれは少しきつめの匂いを放っている。その匂いが風に乗ってプレシアの鼻にも入る。それを感じてプレシアはやや表情をしかめてキャロへ視線を向けた。

「確かに効きそうだけどそんなに効くの？」

「はい。この薬湯に使ったんですけど、こっちの薬草はとても苦いけど関節痛に良く効いて、こっちの薬草はちょっと匂うんですけど煎じて使うと神経を休めてくれるんです。それに煮詰めるとカビ掃除とかにも使える物なんですよ」

「そう。でも、どうしてそんな事を知っているの？」

「実は宿舎のお風呂とかフリードの体を綺麗にするのに使ってるんです。頑固なカビも綺麗に出来るし汚れが付きにくくなるんですよ。フリードの体はただの水浴びだけじゃすぐに汚れちゃうので、今日も後で掃除してあげようと思って用意してます」

その説明を聞いてプレシアは感心したのか、小さく頷いて差し出されたカップの中身へ視線を向けた。そこにはやや濃い緑色の液体が入っている。そこから漂う匂いは先程風に乗った時よりも幾分か強烈だ。

「成程ね。じゃ早速……うっ」

「えっと、匂いが結構しますから無理なら別に」

「いえ、もらうわ。折角キャロちゃんが作ってくれたんですもの」

キャロから手渡されたカップを受け取り、プレシアは柔らかい笑みを見せる。もしあの忌まわしい事故が無ければ、今頃はアリシアも結婚して同じぐらいの孫と笑っていられただろうか。そんな事を思いながら、プレシアはキャロとの会話を楽しんでいた。その彼女から感じる優しい雰囲気が自分の焦る心を和らげていると知らずに。

プレシアが薬湯に口をつけるとその味に表情を渋いものへ変える。それを見て、キャロは少しだけ申し訳なさそうな顔を浮かべた。早く体を治してアリシアの捜索をしたいと願うプレシアのためにと、効能を重視してかなり匂いと苦味がきつい薬草を使ったからだろう。

それをプレシアは何とか飲み干し息を吐いた。そこへ定期巡回を終えたエリオがフリードと共に戻ってきた。その姿を確認し、微笑みを浮かべるキャロ。プレシアは、フリードの首を優しく撫でるエリオから竜騎士と呼べるような雰囲気を感じ取り、小さく息を吐いていた。

「……初めて見るけど凄いわね。フリードはエリオ君の竜じゃないのでしょ？」

「はい。でも、フリードは僕の言う事も聞いてくれるようになってくれましたから」

「今じゃ私よりも懐かれてるんですよ。ちょっと妬けちゃうな」

エリオに頬をすり寄せるフリードを見てキャロが少し口を尖らせる。すると、そんな彼女にエリオがやや慌て、プレシアが苦笑した。自由奔放で天真爛漫に育ったアリシアと違い、局員として働いてい

る二人は歳相応ではない顔が多い。
しかし、今のように子供らしい表情を見せる時もある。それを見たからプレシアは苦笑したのだ。二人が天涯孤独の身の上となるところだったと聞かされたから余計だろう。

「本当に仲がいいのね、二人は」

「ええ。フェイトさんのおかげです」

「フェイトさんが私達を引き取ってくれた。だからこうしてエリオ君と会えたんです」

既にプレシアはフェイトが二人を引き取っていた事を知っていた。それはプレシアの事情を聞いていた時、ふとした事からキャロが自身の事を話してしまったために。
自分とエリオを引き取ってくれた優しい執務官。それがフェイトだと。だが、キャロはプレシアへそれを話した瞬間、娘のフェイトだと気付かれないようにした。その理由はフェイトへ連絡した際に受けた指示。

――その人には……私の事をあまり話さないでおいて。

その意味が分からない二人だったが、フェイトが疑問を抱いていると理解して納得したのだ。人違いかもしれないと思っているのだろうと。それでもキャロはプレシアへ名前だけは教えてしまった。どこかで気が緩んでしまったのだ。
だが、苗字を言わなければプレシアもフェイトだと断定出来ないと考えて名前だけに止めた。実際、プレシアはその予想通りフェイトが自分の娘だとは気付けなかった。

それもそのはず。キャロが告げたフェイトの年齢。それがプレシアの記憶とずれているからだ。プレシアがフェイトと別れた時、彼女は九歳。それからプレシアの感覚で十年しか経過していない。だが、フェイトはもう二十歳を過ぎているのだから。

「そうなの。じゃ、二人にとって本当にフェイトさんは恩人なのね」

「「はい！」」

だからプレシアもかつて突き放した相手と知らず、世の中にはそういう相手もいるのだなと感心しているぐらいだったのだから。

「それで、今はそのフェイトさんがアリシアを捜してくれているのだったかしら？」

「はい。今追いかけている事件と平行する形になってしまいましたけど、絶対見つけ出してみせるって言ってましたから」

「安心してください。僕らも出来る範囲で情報を集めてます。アリシアさんは必ず見つかりますよ」

笑顔で断言するキャロとエリオ。それにプレシアも小さく笑みを返した。その内心では、自分とアリシアの事を少しも聞いてこない二人に対して疑問を抱いていたが。

調べれば分かるはずなのだ。アリシアは死亡扱いになっていて、自分はジュエルシードを使って次元震を引き起こそうとした犯罪者。しかも虚数空間へ落ちた存在だと。

（どうしてこの子達は私へ詳しい事情聴取をしないのかしら……調べてない事はないでしょうに）

「あのね……二人に聞きたい事があるんだけど」

昨日まではあまり動けずに寝てばかりだった自分へ配慮しての扱いかと思っていた。しかし、こうして多少動けるようになった後も自分への対応が変化する兆しはない。プレシアがそれを思い、二人へ探りを入れようとした時だ。その心情を察したのかキャロがはっきりした声で告げた。

「プレシアさんの事は私達も調べました。でも、そこで知ったプレシア・テスタロッサは虚数空間へ落下し死亡扱いとなっています」

「それに、今僕らが話しているプレシアさんがその人と同じはずないですから。仮にもし死亡扱いになった本人だとしても同じです。僕らはジェイル・スカリエッティという広域次元犯罪者を知っています。その人も罪を犯した。でも、それを悔いて懸命に償おうとしていたんです。自分のした事を忘れず、前を向いて生きていこうって」

「まさか……貴方達は……」

「そのジェイルさんと今のプレシアさんは同じなんです。とても目が澄んでるし、優しい綺麗な笑顔をしてる。でも、どこかで過去を悔やんでる。だから私達には犯罪者なんて思えないんです」

エリオの出した名前に軽い驚きを見せるプレシア。そこへ更に続けられたキャロの言葉にプレシアは言葉がなかった。二人は自分が既に死亡者扱いとなった犯罪者だという事を確信している。にも関らず、表向きはそれを逆手に取った考えで局員として割り切っているのだ。

それだけではない。人として自分の姿を見て感じた事を信じて接している。エリオもキャロもプレシアが過去を忘れ去ったとは思えなかった。そして気にしていないとも思わなかったのだ。

どこかでそれを胸に秘めて生きていると。ジェイルが真司によって変わったように、きっとプレシアにもその心を変える存在がいたのだろうと思っていたのだ。だが、そんな二人へプレシアは恐る恐る口を開いた。

「でも、私は次元震を起こしかけて多くの世界を危機に陥れたのよ」

「でも防がれました」

「自分勝手に他者を巻き込んだのよ？」

「でも犠牲者は出なかった」

淡々と告げるキャロとエリオ。その言葉にプレシアは逆に気持ちが昂っていく。まるであの時の父のようにプレシアのやった事を否定も肯定もせず事実だけ受け止める二人。

それがプレシアには辛かった。父と違い彼らは管理世界の人間で局員だ。ならば余計プレシアのした事について思う事は多いはず。それにも関らず、二人はプレシアの言葉に結果だけを返していく。大事なのはそこではないとばかりに。

「自分が感じた悲しみや苦しみを誰かに与えるところだったのよ！」

「でも、与える事は無かった。そして貴方は虚数空間へ消えたのに、こうして罪を追及される危険を顧みずに戻ってきた。大切なアリシアさんを探して」

「だから許すって言うの？　何も無かったから、罪から逃げなかったから……誰も死なずに済んだからいいと？　だとしたら」

「プレシアさんのした事は確かに罪です。それを欠片として悔いても覚えてもいないのだったら、私達はすぐにでもしかるべき場所へ連れ出していました。でも、今の貴方は少なくても事件当時とは違う考えになっていませんか？　それを私達は確かめたかったんです」

吐き捨てるように話し出すプレシアだったが、それを遮るようにキャロがそうはっきり告げた。そのキャロの言葉にプレシアは返す言葉がない。何故なら、そう告げるキャロはとても穏やかな笑顔を浮かべていたからだ。

「さっきの言葉はとてもじゃないですけど犯罪者のものとは思えません。現に今もまるで自分を裁いて欲しいと言っている目です。そんな目を見たら、僕らには自分勝手に犯罪を起こした人とは思えません」

エリオの指摘でプレシアは完全に沈黙した。そう、彼女は裁かれたかったのだ。光の国では望めるはずもなかった事。贖罪のために罰を受けたかったのだ。罪を犯した報いを受ける事無く生きる。それをプレシアはどこかで良しと出来なかったのだ。

力なく項垂れるプレシアへエリオがそっと近付き静かに告げる。それは彼が慕っていた光太郎から聞いた言葉。正確には、彼がたった一人の戦いを終えて、疲れ果てて沈んでいた時に告げられた言葉だ。

「プレシアさん、自分だけの生まれた意味を持っていますか？　生まれる命には必ず意味があると僕に教えてくれた人がいるんです」

「生まれた……意味……」

「僕はエリオ・モンディアルという少年のコピーとして生まれました。それを家にやってきた局員が告げた途端、親だと思っていた人達が認めたんです。それまでは僕を取り返そうとしていた両親が糸の切れた人形みたいになって。その瞬間、僕は全てがどうでも良くなったんです。でも、フェイトさんがそんな僕に光をくれました。コピーなんかじゃない。僕は僕だからって。がむしゃらに暴れて酷く荒れていた僕をしっかりと優しく抱きしめながら」

「……そう。じゃ、さっきの言葉を教えてくれたのはフェイトさん？」

「いえ、別の人です。きっと、その人も僕が誰かのコピーだと知っていたんだと思います。でも、その人はこう言ってました。例え普通じゃない生まれ方をしても、最初からそう生まれてきたのならそれは一つの人種なんだって。僕の生まれた意味は、その言葉と込められた気持ちを多くの人へ伝える事なんじゃないかって思ってます」

エリオの告白はプレシアに大きな意味を持っていた。彼を生み出した技術。それは他ならぬ彼女が確立させたものだったからだ。そんな彼が抱いた気持ち。それは昔、プレシアが人形と呼んでいた存在へ与えたものと同じはず。それを察し、プレシアは何とも言えない気持ちになった。

思い出していたのだ。そんな気持ちをフェイトは乗り越え、自分の前へ現れた。しかも、最後まで自分へ手を伸ばしてさえきたのだから。そう思ってプレシアがゆっくりと顔を上げた。そこで見たのはエリオの清々しい笑みだった。少しとしてプレシアへ恨みも憎しみも抱いていないとばかりのそれに、彼女は何も声を発する事が出

来ずにいた。そこへキャロもゆっくりと近寄りプレシアへ告げた。
もし過去を償いたいと思うのなら、今まで自分のした全てから目を逸らさずに生きて欲しいと。

その言葉にプレシアは思わず目を閉じた。思い出したのだ。今まで自分がアリシアへフェイトの事を教えずにきた事を。本当に償いをしたいのならば、まずそれを愛する娘へ告げる事。そう言われた気がしたのだから。

（私の生まれた意味は何？　今はちゃんと母親をする事でしょ？なら、子供に後ろめたいと思っている今は向かい合ってると言えないわね。……そうか、だからあの二人はフェイトの事に関して何も言わなかったのね）

アリシアへフェイトの事を打ち明けるか否か。それに自分で答えを出す事が過去を償って生きるための必須条件。故にあの二人は何も言わなかったのだと気付き、プレシアは小さく苦笑した。
不覚にもこう思ったのだ。自分の事を思ってそこだけは突き放していただろうあの夫婦。彼らが周囲から呼ばれている父と母との愛称は伊達ではなかったと。

自分でさえも子供の一人のように見守られていた。そう思って顔を苦笑から微笑みへ変えるプレシア。その表情を見てエリオとキャロは不思議そうにするものの、どこか清々したような笑みのプレシアに微笑みを見せ合うのだった……

その頃、スプールスの転送ポートに二つの人影が現れていた。それは女性で、揃って黒い制服を着ていた。執務官の制服だ。彼らは担当する事件に関係する報告を受けた事とエリオ達の連絡もあってここへやってきたのだ。

「ここで目撃された灰色のオーロラとそこから現れた人物。あの犯罪者の手掛かりを得られるといいけど……」

「でも、あの青い存在はライダーの関係者かもしれないんです。何か事情がある可能性も」

「……もしそうだとしても、どうしてジュエルシードを奪ったのか。その理由は突き止めないとね」

「です、ね」

フェイトの冷静な声に返事をし、ティアナは軽く襟元を正す。相手に先入観を抱いていると気付いたからだ。故に襟元を正した。それを戒めるための行動として。

元々は兄のティーダを支えるために目指した執務官補。しかし、今のティアナの目指す姿は少し違う。ティーダに言われたのだ。自分の後を歩くのではなく自身だけの道を歩いてくれと。その願いを叶えるため、現在ティアナは執務官を目指している。

その日々の出だしは順調とは言えなかった。何故なら先輩として支えてくれるはずのシャーリィがいなくなった事で、補佐をするティアナの仕事の量は凄まじいものがあったからだ。しかし……

――いつかはやらないといけないんだし、最初から執務官補としてやらないといけない事を全てやれる。これって逆にチャンスだわ。

それ故に慣れる時間が短縮出来たので良しと考えたのだ。その根底には翔一の影響があるのだろう。目の前の事を自然体で受け止めよう。その在り方は彼女が目指す姿なのだから。

ティアナが執務官補としての研修先にティーダを選ばなかったのは、当然兄妹故の甘えや妙な気遣いを排するため。ティーダはそんな事をしないだろうと思ったのだが、念には念を入れてそうしたのだ。故にティアナはフェイトへ師事した。丁度シャーリィが去ったために補佐をどうしようかと考えていたフェイトは、これ幸いとばかりにティアナを喜んで受け入れた。

だが、そんな日々は突然変化を迎えた。ジュエルシード強奪事件。それをフェイトが担当する事になったのは当然と言えた。何せ犯人と思わしき相手が犯行に使用したのは仮面ライダーと思わしき存在だったのだから。

その報告を受けた上層部は事件内容が民間人や局員達に与える影響が大きいと判断し、その捜査担当者を信頼出来且つライダーについて詳しい人物へ白羽の矢を立てたのだ。それがフェイト。彼女はジュエルシードとも関わりが深い事もあり、余計に適任とされた。

「それにしてもどういう物なんでしょうか？　あのオーロラは」

「空間を繋ぐ道って言いたいところだけど、実際はもっと違う物だと思う。根拠は特にないけどね。それを通って現れた人がいるから、その人から話を聞けば何か分かるかもしれない」

ティアナの問いかけにフェイトはやや苦い顔を浮かべる。まだティアナは知らない。今から事情を聞くために会おうとしている相手がフェイトの母であるとは。そう、フェイトはエリオ達からの連絡を受けた時、すぐにでもスプールスへ向かいたかった。

しかし、その時点ではクラウディア付きのフェイトは動く事が出来なかった。そして次の日強奪事件が発生し、その担当となって今まで様々な準備などに追われていたのだ。そしてその関係でオーロラ関連の話を聞くと言う理由を得たフェイトは、こうしてスプールスへとやってきたのだから。

自然保護隊の隊舎目指して歩く二人。だが、もう会話はない。二人は揃って思い出しているのだ。それはあのジュエルシード強奪の光景。保管庫へ突如出現した灰色のオーロラ。そこから現れたディエンドは警備の魔導師達へライオトルーパーを召喚して向かわせ、自身は悠々とジュエルシードだけを手にして立ち去った。

――――これは僕が有効活用させてもらうよ。

その去り際、そんな言葉を残して。その裏に強奪した理由が隠されているとフェイトもティアナも読んでいる。だが、それが何なのかまでは分からないのだ。それでも一つだけ共通している考えがある。それは……

（（どんな理由があってもジュエルシードを使わせてはいけない））

ジュエルシードの本質を知っている二人としては、それを暴走させられる事が一番困るのだ。いくらライダーでも暴走したジュエルシードを止める事は出来ないと考えている。破壊ならば出来るだろうが、その際ジュエルシードからどれだけのエネルギーが解放されるか分からない以上、どちらにせよさせる訳にはいかないのだから。

そんな事を考える二人の視界に隊舎が見えてきた時だ。その目の前に灰色のオーロラが出現したのは。そこから現れたのは一人の青年だった。それを確認し驚きを見せるフェイトとティアナ。だがす

ぐに意識を切り替えた。
出てきた青年からオーロラについて何か聞けるかもしれないと考えたのだ。確かに怪しい相手だったが、それでも今は少しでも情報が欲しかったのもある。フェイト達が近付く足音でその接近に気付いた青年は、どこか軽い雰囲気を漂わせて問いかけた。

「おや？　僕に何か用かな？」

「貴方、今オーロラから現れましたよね？　私達はあれを調べているんです」

「へぇ。という事は……どこかで同じのを見た事がある？」

「ええ。なので、あれについて何か知っている事があったら教えてくれませんか？」

フェイトの言葉に青年――――大樹は少し考える素振りを見せた。オーロラの事を知っている時点で、彼には二人がジュエルシードを盗んだ事を知る立場の者達だと理解したからだ。
一方でフェイトとティアナも表面上はともかく、内心では大樹を警戒していた。エリオからの報告では、オーロラから現れたプレシアは歩けない程に疲弊していたと聞いていたのだから無理もない。何せ目の前の相手は疲弊どころか平然としているのだ。しかも確認を行った際、微かに大樹の声が変わった事も関係している。それも含めて二人はどこかである推測を立てていた。

【フェイトさん……もしかしたらこの人が？】

【可能性はない訳じゃないよ。あの青いのがもしライダーと同じような存在なら、誰かが変身してる事も考えられる】

それは大樹がジュエルシードを奪った相手ではないかというもの。だがいきなりバリアジャケットを展開すれば、相手に敵意があると思われ会話が出来ない。だからこそ二人はそのままの状態で大樹と対峙していた。

一方、大樹としては局員であるフェイト達へある事を教えるか否かを考えていた。それは、ジュエルシードを奪った理由とあの光の国を訪れた理由に共通するもの。

（奴らはきっとここにも現れるだろうから手を打たせておく方がいいかな？　どうやら以前はクウガ達がいたらしいし、怪人について多少の理解はあるみたいだからね）

大樹の脳裏に甦るのはある者達。あのライダー大戦を終えた彼は光写真館の者達と新たな世界を訪れたのだが、そこでいつものように士達と別れお宝を探していた。しかし、そこで彼は出会ってしまったのだ。グランショッカーを名乗る者達に。

変身して難を逃れた彼は逃げるグランショッカー戦闘員を追った。その後をつけた大樹は恐ろしい事を知った。グランショッカーは大ショッカーやスーパーショッカーの残したデータを基にライダー全滅計画を企て、平行世界を征服するべくオーロラを使って動こうとしていたのだ。

それを知った彼は単身動き出した。一人、グランショッカーに奪われる前にと様々な平行世界のお宝を手に入れるために行動開始したのだ。そこで始めに訪れた世界が光の国だった。彼は知らない。それはどこかでグランショッカーを放っておく事は出来ないと考えた彼の心が影響した行き先だった事を。

「……それなら、君達にはオーロラの事よりも教えておく事がある」

「どういう事ですか？」

「その内ここへ怪人が現れる。それもグランショッカーを名乗る組織として」

その言葉にフェイトとティアナの表情が変わる。大樹の告げた内容があまりにも明確だったからだ。

「彼らは僕のと同じオーロラを使ってここへ現れるだろうね。目的はこの世界を征服する事だ」

「世界征服……それって光太郎さんが言ってた組織と同じ目的ですよ、フェイトさん」

「まさかそんな事が……」

「信じる信じないはそっちの勝手さ。とりあえず警戒はしておきたまえ。まぁ、君達にどこまで戦えるか分からないけど」

そう告げると大樹は二人に背を向けて歩き出す。目指すのは自然保護隊の隊舎だ。彼は一先ず士達と合流するためにオーロラを通ったつもりだった。グランショッカーの事を教えると同時に共に戦うために。だが、その気持ちとは裏腹に何故かここへ出てしまったのだ。

大樹はその原因を現在地に士達がいるのではないかと踏んだ。何せ光写真館は幾多の世界へ現れる際、その世界に馴染むように出現する。今回は隊舎近くに出現したのではないかと思ったのだ。自分がアリシアを道案内に来た事に影響され、士達も導かれるようにこ

こへやってきたのではと。

そんな事を考えて動く大樹にフェイト達も動いた。詳しい話を聞かねばならないと考えたのだ。

「待ってくださいっ！　貴方は一体どうしてそんな事を私達へ教えてくれるんです？」

「それに、もしその話が本当なら貴方は何者なんですか？」

「何者、か。なら答えよう。僕は……」

大樹が背を向けたまま答えようとした瞬間だ。隊舎の方に灰色のオーロラが出現したのは。それを見てすぐさま走り出す大樹。フェイトとティアナはその後を追いかけながら嫌な予感を感じてデバイスを展開する。

やがて三人の視界に隊舎前の光景が見えてくる。そこには怪しい相手と対峙するエリオ達とプレシアの姿があった。それを確認するや否やフェイトはソニックフォームへ変わりそこへ向かう。大切な子供達ともう会えないと思っていた母親を守るために……

「タントさん達は避難してください！　後は私達が引き受けますから！」

「キャロっ！　いくら何でも二人じゃ！」

「大丈夫です。二人じゃありません。フリードもいます。だから信じてください。それに、私達は機動六課だったんです。絶対怪人に負けませんから」

ミラの声に安心させるような声とサムズアップを返し、キャロは視線を空へ戻した。そこではフリードの背に乗って戦うエリオの姿がある。相手の怪人は空戦型だったため、エリオは単独ではなくフリードと協力しての戦闘を選んだのだ。

「くっ！　向こうの方が小回りが利く分こっちが不利か。フリード、上昇して！」

「無駄だっ！　私から逃げられると思うな！」

エリオの指示に応じて大空を翔るフリード。その後を追うのはジンドグマ幹部の魔女参謀だ。彼女はオーロラを通って出現するとプレシアを見て不敵な笑みを見せてこう告げた。

――貴様がプレシア・テスタロッサだな。捜したぞ。

妖艶な雰囲気のヴェールを着けた彼女。その扇情的な格好はやはり異質さを際立たせた。何よりもその雰囲気からエリオとキャロは察したのだ。相手は人間ではないと。

即座にエリオはフリードと共に戦闘態勢を取った。キャロもプレシアを守るように動き、二人は鋭い視線を魔女参謀へ向けたのだから。そんな二人の反応に面白そうな笑みを魔女参謀は浮かべた。

――ほぉ……私と対峙しても怯えも無くすぐに警戒出来るか。お前達、ただの人間ではないな。何者だ。

――自然保護隊所属、エリオ・モンディアルっ！

――同じくキャロ・ル・ルシエとフリードリヒっ！

凛々しい表情で答えた二人に魔女参謀は益々笑みを深めさらりと告げた。活きがいいから素体として申し分ないと。それにエリオは会話での解決はやはり不可能だと判断。念話でキャロへプレシアの事を託して戦闘を開始したのだ。

「よし、ここだフリードっ！」

ある程度まで上昇したところでエリオはフリードの巨体を横へ逸らす。その後ろを追っていた魔女参謀はそんな動きの意図が読めずにいた。すると、その視界を遮っていたフリードがいなくなった瞬間……

「グッ！　た、太陽が……」

眩しいばかりの日差しがその視界を包んだのだ。思わず動きを止める魔女参謀。そこへ迫る轟音があった。それは噴射音。エリオのストラーダが発しているものだ。

「もらったっ！」

「チィ！　させないよっ！」

フォルムツヴァイのストラーダが魔女参謀の体へ傷をつける。音を頼りに体を動かし致命傷を避けたのだ。その反応に内心驚くと同時にある確信を強めるエリオ。そう、今の姿が本当の姿ではないと踏んだのだ。

その時、エリオの後ろから迫る影があった。それに気付きエリオは振り返る。そこへ魔女参謀が吹き矢を放ち、エリオの腕を掠めた。更に追い撃ちをかけようとする魔女参謀からエリオは距離を取るべくストラーダへ魔力を注いで加速した。

「逃がすかっ！」

「くっ！」

その声と共に魔女参謀の姿が変わる。そこにいたのは一見すると花にも見える存在。魔女参謀の正体であるマジョリンガだ。その特殊能力である念動力で石を動かし、エリオ目掛け石飛礫を飛ばしたのだ。

それを何とかかわして反撃をと考えるエリオだったが、そこへフリードが救援に現れた。その背に乗り、エリオはストラーダで小石を払いながらマジョリンガと対峙する。

しかし、念動力で操られた石飛礫は軌道を変えて襲い来る。エリオはそれを懸命に払い除ける事しか出来ない。魔法を使おうにもフリードの上ではその体にまでダメージを与えてしまうからだ。

「死ねぇ！」

「っ！？」

そこへ更に殺到する石飛礫。それはエリオとフリードへ迫る。その瞬間――――ある声が響いた。

”プラズマランサー”

一筋の雷光が槍となり石飛礫を砕いた。更にそこへ何発も同様の雷光が殺到する。それを嫌がりマジョリンガはエリオから距離を取った。そして入れ替わるように一人の女性が現れる。その姿にエリオは喜びと驚きを込めた声を上げた。

「フェイトさんっ？！」

「エリオ、大丈夫？」

「は、はい。助かりました」

黒いバリアジャケットに鎌のようなデバイスを構えたフェイトの登場にエリオは落ち着くように自分へ言い聞かせ頷いた。その声に小さく頷いてフェイトは眼前の相手へ睨みを利かせる。マジョリンガは思わぬ援軍の登場で少し動揺したが、すぐに落ち着きを取り戻した。

そう、自力で飛行しているのがフェイトだけだと気付いたからだ。フリードは確かに飛べるが大型のために小回りが利かない。そこから自分へ害を与えられるとすれば現状フェイトしかいないと考えたのだ。

その考えをどこかで理解しているのだろう。フェイトは単身マジョリンガへ向かって行く。それを見て、エリオは一旦地上へとフリードを降ろさせた。キャロを迎えにいくためだ。フルバックとして優れる彼女と共にフェイトを援護する。あのゆりかご戦でも同じ形で怪人と戦ったのだからと。

一方、フェイトは真ソニックフォームとなりその速度を上昇させてマジョリンガを翻弄していた。石飛礫が通用せずにマジョリンガは内心舌打ちしつつも攻撃を続ける。

「くそっ！　ちょこまかとしよって！」

「……いけるっ！」

自分の速度ならマジョリンガにも通用する。そう実感したフェイトはマジョリンガを相手しながら頃合を見計らって距離を取った。そのフェイトの行動に疑問を浮かべるマジョリンガだったが、その理由はすぐに理解させられた。

「なっ！？　下からの攻撃だと！？」

地上からオレンジの魔力光がマジョリンガへ襲い掛かる。それはティアナの援護射撃。フェイトの高速機動中では下手な援護は逆効果。なので念話で示し合わせたのだ。

それだけではない。その間に戦場となった上空にはフリードに乗ったエリオとキャロが姿を見せていた。二人の姿に頷き、フェイトは少し笑みを見せると視線を前方へと戻す。

「エリオ、キャロ。援護お願い」

「はい、キャロは僕が護衛しますから安心してください！」

「フェイトさんは怪人に集中してください。あの石飛礫はこっちで引き受けます！」

「頼んだよ！」

二人の声に頼もしさを感じてフェイトは表情も凛々しくマジョリンガへ再度向かって行く。その背を見つめ、エリオとキャロも援護

すべく動き始めた。ティアナはそんな上空の動きを見ながら、それぞれに念話を使って戦術を組み立てるべく頭を回転させる。

（相手の特殊能力はどうも手を使わずに物を動かす事みたいね。なら、きっとその能力を使っている間は意識を集中するだろうからあまり派手に動けないはず！）

ウーノ達もＩＳを最大活用する時は意識を集中するとの話を思い出し、ティアナは視線を空へ向けた。フェイトは一人マジョリンガと空中戦を繰り広げていた。しかし、やはり未知の怪人相手はどこか守勢とならざるを得ないようでその状況は優勢とは言えない。

【フェイトさん、相手はきっと特殊能力を使う際に多少なりとも動きが鈍るはずです。だからその隙を狙ってください】

【了解。やってみる】

【エリオとキャロは相手がその能力を使い続けるように動いて。危険かもしれないけど出来るだけ長く】

【【はいっ！】】

ティアナの言葉に返事を返し、それぞれがマジョリンガへ行動開始。それを見つめながらティアナは手にしたクロスミラージュを握り締める。自分は自分でマジョリンガの注意を惹こうと思ったのだ。

そのためマジョリンガへ再度射撃を開始する。フェイトに当たらないように念話で攻撃するタイミングを教えながら精度を重視した射撃を心掛けるティアナ。その彼女へ自分達の戦闘を見て楽しんでいるような声が聞こえてきたのはその時だ。

――中々やるね。魔導師っていうのも。

それは大樹だった。彼は平然と目の前の光景を見ていた。そこには怪人の存在による恐怖も不安も無ければフェイト達への期待も心配もない。まるでこの出来事は自分にとっては他人事と思っているようだ。そんな印象を受け、ティアナは一瞬怒りが沸き起こる。だがそれを冷静に抑えて局員として告げた。

――ここは危険です。貴方も逃げてください。

既にエリオとキャロを信じて他の保護隊員は避難を始めている。プレシアは、フェイトを見てから心を奪われたようにその姿を見つめていた。そんなプレシアに気付いてティアナが避難を呼びかけるが、それに反応はないために安全を考えてその傍へと護衛をするために移動した。

大樹はそんなティアナの行動を横目に平然と信じられない事を言い出した。

「逃げる必要はないよ。むしろ、君達こそ逃げたらどうだい？」

「……アタシ達は管理局員です。他者に害を為す存在を見過ごす事は出来ません。それに、この世界の平和を壊す存在を今度はアタシ達自身の手で倒さないといけないんです。それが……邪眼を倒してくれたライダー達に応える事なんだから！」

ティアナは凛々しくそう言い切ると、手にしたクロスミラージュを構えて空中戦を続けるマジョリンガへその照準を合わせてフェイトの援護を再開する。そんなティアナを見て、大樹は理解出来ないと言うように首を竦めて視線を動かした。

そこにはフェイトの姿を目で追い続けるプレシアがいる。その姿

に大樹は小さく呟いた。追い駆けてきたのかと。その呟きは誰にも聞こえる事無く消える。

その時、何か大きな爆発音が響く。それに大樹が振り向くと、全身に多少ダメージを負ったマジョリンガが左肩を押さえて前方のフェイトと背後のエリオ達を睨みつけるように見渡していた。

フリードのブラストレイを基点にクロスファイヤーシュートとプラズマランサー・ファランクスシフトがマジョリンガへ襲い掛かったのだ。それを石飛礫で迎撃したマジョリンガへエリオが突撃を敢行した。それを回避出来ずにマジョリンガはダメージを負う事になったのだから。

「おのれ……中々小癪な真似を」

「お前の能力は確かに厄介だ。でも、一人ならともかく私には多くの仲間がいる」

「仲間だと？　……群れる事でしか戦えないのはここの人間も同じか」

「何とでも言えばいい。私達は一人で生きているんじゃない。誰もが支え合って生きているんだ！」

そう断言しフェイトは手にしたバルディッシュを構える。それに呼応してフリードに乗ったエリオ達も動き出した。ティアナはとどめを刺すための流れを考えながら引き続き射撃による援護を続ける。

そんな光景を眺め、大樹はやや意外そうな表情を見せた。今まで彼が知る限りで怪人とここまで戦った人間はいなかったからだ。ライダーへの変身能力を持たない者は基本逃げ惑うだけだったのだから。

（魔法、か。これがあるから戦えるだろうとは思うけどね……）

そうだとしても勝利するのは難しいだろう。そんな風に考え、大樹は何か援護するでもなく周囲を見回した。士や光写真館を探そうとしたのだ。しかし、それらしき存在も建物もない。何故自分がここへ来てしまったのだろうと大樹は考えていた。

一方、マジョリンガと戦うフェイト達は手傷を負わせた事で思わぬ反撃を受け始めていた。マジョリンガが念動力で石飛礫ではなくエリオとフェイトの手にしているデバイスを操り出したからだ。

それをさせじと抗うために二人は攻撃が出来なくなり、必然的に攻撃出来るのはキャロとティアナとなったのだ。しかし、マジョリンガはフェイトとエリオを盾にするようにデバイスを動かすため中々攻撃する事が出来ない。つまり膠着状態となった。

「またフェイトさんを盾に！」

「フリード、ブラストフレ……っ！？　駄目！　エリオ君に当たっちゃう！」

何とかマジョリンガだけを狙おうとするティアナとキャロだったが、それを読んでいるかのようにその射線上や魔力弾の前にフェイトやエリオが動かされるのだ。その度に攻撃を中止しては、また相手だけを攻撃するために魔力弾を誘導するティアナと位置取りを変えるキャロとフリード。

そんな様子を見てフェイトとエリオは何とか現状を打破する方法を考える。どうにかしてマジョリンガへダメージを与える方法を。今のままでは自分達が完全に相手の盾として使われているだけだからだ。

「くそ……このままじゃっ！」

「何とかして……反撃の糸口をっ！」

その時、二人は同時にある事を思い出し即座にティアナとキャロへ念話を送った。それは自分達を射線に入れるようにマジョリンガを攻撃する事。それに驚きと疑問を抱く二人だったが、信頼する上司と相棒の言葉を信じる事にして位置取りをする。

そんなティアナとキャロの動きを見てマジョリンガは違和感を覚えた。今まではその位置取りになる事を嫌がっていたはずの相手が、むしろ揃って味方を射線上に入れるように動いたからだ。

「奴らめ、何をする気だ？」

その瞬間、ティアナとキャロの声が響いた。

「フリード！　ブラストレイっ！」

「ファントムブレイザーっ！」

放たれた攻撃は寸分違わずフェイトとエリオへ殺到する。その奥にいるマジョリンガ目指して。そんな光景に愉快だとばかりに笑い出すマジョリンガ。

「成程。私を倒すために仲間を犠牲にする事を決めたか。所詮、人間の絆などその程度よ！」

だが、その眼前でフェイトとエリオはそんなマジョリンガの言葉が勘違いだと分からせるようにある行動を起こした。

――モードリリース！

その言葉に従いバルディッシュとストラーダが待機状態へと変化を起こして消える。それはつまり二人の動きを制限する物が消える事を意味する。マジョリンガの念動力はその瞬間消えた。マジョリンガが待機状態となったデバイスを目視出来なくなったためだ。

念動力はその対象をしっかりと意識して捉える必要がある。なので、目視出来なくなったために影響力を発揮出来なくなったのだ。体を支える力を無くし自然落下を始めるフェイトとエリオ。その頭上すれすれに通過する二つの閃光。それは計算していたかのように眼前の光景に驚いていたマジョリンガへ襲い掛かった。

「何だとっ？！」

完全に油断していたマジョリンガへ直撃するブラストレイとファントムブレイザー。それを見て再びデバイスを起動させるフェイトとエリオ。飛行魔法でエリオを抱えに行き、フェイトは地上へ一旦降りる。

そして再びフェイトは力強く空へ飛び上がると切り札を切った。リミットブレイク。ライオットフォームだ。更に一撃で決めるべく、その形をザンバーへと変える。

「フェイトさんっ！　お願いします！」

ティアナが叫ぶと同時にマジョリンガの周囲にライオットザンバーを構えたフェイトが四人出現する。フェイクシルエット。ティアナ得意の幻術魔法だ。

「おや、意外と終わりが近いようだね」

その声に気付いたのか、大樹はふと戦闘へ意識を向けた。そこにはライオットザンバーを構えたフェイトの姿があった。マジョリンガはティアナの魔法で困惑していた。戦闘機人のシステムを欺く幻影は、マジョリンガさえもどれが本物かを瞬時に判断する事は出来なかった。

「これでっ！」

「くっ！　どれが本物だ！？」

その動揺を見てフェイトは一撃で決めるべくソニックムーブを発動させた。ライオットザンバーを突き出す形で。そうして光の矢となったフェイトは見事マジョリンガを貫く。更に追い撃ちとしてエリオがストラーダで上昇して突撃し、締め括りにキャロがフリードヘブラストフレアを発射させた。

炎に包まれながら落下するマジョリンガ。それを見てフェイト達は勝利を確信したのか安堵の息を吐く。ゆっくりと落ちていくマジョリンガ。その目が微かに炎の中で光る。その視線は地上にいるティアナを捉えていた。しかし、マジョリンガが何か行動する前に銃撃が加えられた。それは魔力弾ではない。エネルギー弾だ。

「えっ？」

「油断大敵だよ、魔導師ちゃん。あれはまだ死んでないのさ」

「グランショッカーは不滅よぉぉぉぉ！！」

そう告げた大樹はディエンドライバーを構えたまま、とどめとば

かりに更なる銃撃を放つ。それは外れる事無くマジョリンガを撃ち抜いていく。それが最後に眉間を撃ち抜いたのを合図にマジョリンガは爆発四散した。

誰もがそんな光景に言葉を失う中、プレシアが一人気付いた。大樹の持つ物があのアリシアを連れて行った相手の物だと。そこから彼女は直感で大樹こそがディエンドだと察した。

「その銃……貴方がアリシアを連れ去ったのね！」

「ビンゴ。さすがにこれを見せると気付かれるか」

「どこ！？　アリシアをどこへやったの！？」

無意識に飛びかかろうとするプレシアだったが、その体は当然のように力なく倒れた。それを慌てて支えるべくティアナが動いた。そんな様子を見つめ大樹は軽く呆れていた。自分の状態も分からず動こうとした事に対してだろう。

ティアナは優しくプレシアを抱き起こし、少し遅れて大樹へ視線を向けた。そしてその手に持つ物があのジュエルシード強奪を行った相手の物だと気付いた。

「貴方……じゃあやっぱり！」

「そういう事。でも、これで分かっただろう。僕が警告した事は本当だって。彼らがグランショッカー。全てのライダーを抹殺しようと考える連中さ。どうやら本当にこの世界にも目をつけたらしいけど」

「全てのライダーを……。でも、何故貴方はジュエルシードを奪っ

たんですか！」

「僕なりに奴らと戦うためさ。このままじゃ、正直この世界でも他の世界でも一番価値のあるお宝を探す時間がないからね。ゆっくりと探すためには奴らは邪魔だ。あれはそれを排除するための力にする」

ティアナの言葉に大樹はあっさり答えてそこから立ち去ろうとする。その時、大樹の目の前に灰色のオーロラが出現した。それをティアナ達は大樹が逃走するためのものだと思ったのだが、事実は違った。

大樹はそれに気付くと即座に距離を取ってディエンドライバーを構えたのだ。更に問答無用でオーロラから現れた存在へ銃撃を放つ。それをオーロラから出現した相手はその場から消える事でかわした。

それに戸惑う周囲。と、大樹の背後から聞こえる声があった。

「まさか魔女参謀が散るとはな。貴様全員素体にする事でその弔いとしてくれるっ！」

そこにいたのは同じくジンドグマ幹部の幽霊博士だ。不気味な雰囲気に息を呑むフェイト達だが、それを見た大樹は一人ディエンドライバーへ一枚のカードを挿入した。

「どうやら僕をただでは行かせてくれないようだね。仕方ないか」

「ぬ？　貴様は……ディエンドか！」

幽霊博士の言葉にフェイト達が視線を大樹へ向けた。それを受け、大樹はディエンドライバーを空へ向けて告げた。

「そうさ。僕こそ通りすがりの仮面ライダーだ」

その言葉に幽霊博士以外の者達が驚愕した。フェイト達は仮面ライダーらしからぬ大樹が名乗った事にそれぞれ思う事があったのだ。それに気付いたのか、大樹は周囲へこう言い放った。

――君達が仮面ライダーにどんな印象を抱いてるかは知らない。でも、これだけは覚えておきたまえ。自分達が知るライダーだけが仮面ライダーの在り方じゃないとね。

その言葉に反射的に何かを言い返そうとしたエリオだったが、聞こえてきた次の大樹の言葉にそれを忘れた。そう、それは彼がよく知るライダーが使う言葉だったのだから。

「変身っ！」

”カメンライド……ディエンド”

幽霊博士を見据えたまま、大樹はディエンドライバーの引き金を引いた。それに伴い彼の体へモノクロのシルエットが重なっていく。それが全て重なり合った瞬間、その体に色が入った。

（あれがあの人の変身方法……か。きっと真司さんのと同じようなシステムだ。誰でもライダーになれる。それはその力を悪用する人でもなれるって事なんだ）

（バトルジャケットも目指す形はこういう物なんだろうけど……やっぱり装着者が無条件で決められるのは問題だわ）

フェイトとティアナはディエンドがジュエルシードを奪った事を知っているため、彼がライダーである事に負の念を抱いた。

（あの人、本当にライダーだったんだ。でも、それならどうしてあんな事を言ったんだ？）

（青い体のライダー。銃を持ってるって事は空中戦にも対応出来るね。それにしても……さっきの言葉の意味はなんだったんだろう？）

エリオとキャロはディエンドがした事を知らぬため、先程の言葉にその疑問が集中した。

（アリシアを連れ去った相手がこの次元世界を守った存在と同じ名を名乗る？　どういう事なの……）

プレシアは仮面ライダーがこの世界を守ったとエリオ達から聞いていたため、愛娘を連れ去った相手がどうしてその名を名乗るのかが理解出来なかった。

その周囲の気持ちを知らず、ディエンドは幽霊博士相手に戦闘を開始する。ディエンドの銃撃を幽霊博士はその場を動く事無く見つめた。それに誰もが不審がるが、その感覚が正しかったとこの後知る事になる。

幽霊博士へ銃撃が届く瞬間、その体が消えたのだ。再び忽然と消えた幽霊博士に驚くフェイト達だったが、すぐに周囲を探るのはさすがと言うところだろう。ディエンドもディエンドライバーを構えながら周囲を窺った。

しかし、どこにもその姿は見当たらない。だが、一人だけ幽霊博士のいる場所に気付いた者が叫んだ。

――――上よ！

プレシアの声に全員が視線を空へ向けた。そこにはディエンド達を見下ろし、下卑た笑みを浮かべる幽霊博士がいた。

「ヒヒヒ……ディエンドか。情報によれば、貴様は所詮ディケイドの力を応用しただけの二番煎じ。そんな貴様が我らに勝てると思うな！」

「言ってくれるね。なら、少し相手をしてあげよう」

”カメンライド……ギャレン、ゼロノス”

ディエンドが召喚したのは共に銃火器を使うライダーであり、一号ライダーを支えたパートナーである二号ライダーだった。ギャレンとゼロノスゼロフォームは手にした武器を幽霊博士へ向けた。

ディエンドもそれに続くようにディエンドライバーを動かし、幽霊博士へ狙いを定める。そして彼は銃撃を放つ瞬間、周囲へ警戒を促した。

「また瞬間移動するかもしれない。不意打ちに注意したまえ」

それにフェイト達が反応するのと幽霊博士へ銃撃が放たれたのは同時だった。それを幽霊博士は消えるのではなくその正体を現す事で防ぐ。そこにいたのは黒いマントを羽織った赤い片目の怪人――ゴールドゴーストだ。

飛んできた銃弾をその手の爪で受けながら、ゴールドゴーストはディエンド達へ迫る。それを迎撃する三人へゴールドゴーストはその手から金色の物体を放った。それを間一髪回避するディエンドだ

ったが、ギャレンとゼロノスは間に合わず直撃してしまう。

そして、その体に付着した金色のそれが二人の体へダメージを与える。そう、その金色の物質の正体は宇宙カビ。かつてスーパー1を変身不可能へ追いやった恐るべきものだ。カビによって怯んだ二人へゴールドゴーストは当然のように追い打ちのカビを放つ。二人はそのまま大量のカビによる侵食を受けて倒れて消えた。

それを見ていたフェイト達は宇宙カビの恐ろしさを把握し、互いに念話で警戒を呼びかけ合う。ディエンドもその光景から大体の効果を把握したのか、ゴールドゴーストへ先程までの軽い雰囲気を見せなくなった。

「どうした？　この宇宙カビに恐れをなしたか」

「確かに中々厄介だね。じゃ、これならどうかな？」

”アタックライド……イリュージョン”

その音声と共にディエンドの姿が五人に増えた。さすがにそれは予想外だったのか、ゴールドゴーストも微かに戸惑いを見せた。しかし、それでも自分の有利は揺るがないとばかりに宇宙カビをばら撒き始めた。

それを見てディエンドはカビを受けない場所取りを心がけた動きをしようとして、ちらりとエリオへ視線を合わせた。その姿が一瞬彼を師匠と慕う少年とかぶり、ディエンドはすぐに視線をゴールドゴーストへ戻すと周囲へ告げた。

「君達は逃げてくれないかな？　邪魔だよ」

それを聞いたフェイトとティアナは若干悔しさを抱く。役立たず

と言われたように聞こえたのだ。だが、エリオとキャロは違う印象を受けた。それは邪魔と言うよりは安全を考えての発言に思えたのだ。何故なら、先程からディエンドはゴールドゴーストの攻撃が自分以外へ向かないような位置取りでしか動いていなかった。

それでもカビは風に乗って迫ってくるために、それを避けるべく魔法で除去を試みるフェイト達。しかし相手はカビ。中々全て防ぐ事は出来ない上に少しの風で動きを変えてしまう。

しかも宇宙から持ち込まれた未知のもの故に付着した際の対処法も症状も不明。何せあのライダーでさえ大量に付着すれば大ダメージを負うものならば、生身でそれを浴びれば死んでしまってもおかしくない。

その不安もあってフェイト達は一時撤退を考え始めていた。エリオとキャロはプレシアとティアナをフリードに乗せ、フェイトはその護衛をする形で戦場を離れようと動き出す。

その時、フェイトはプレシアと初めて目が合った。あの時の庭園以来の再会。最後まで手を伸ばしたフェイトと最後までそれを拒んだプレシア。互いに思う事が多いためかその空気感が張り詰める。

「あの、母さ」

「今は話している暇はないわ。後にしなさい」

（まだ私を母と呼ぶのね、この子は。あんな言葉を言った私を……）

自分を見て目を潤ませるフェイトの言葉を遮り、プレシアは冷静に告げた。しかし、その内心を現してかその肩が微かに震えていた。そんなプレシアの言葉にフェイトは状況を思い出し意識を切り替えようと視線を動かす。だが、ふとその事に気付いて思わずプレシア

へ視線を戻した。

（母さんの肩……少し震えてる……？）

それがどう考えても怒りなどから来るものではないと思え、フェイトはもしかしたらプレシアも自分と同じ気持ちなのではと考えた。その瞬間溢れ出そうな何かを必死に抑え込むようにして、フェイトは毅然とティアナ達へ指示を出し始めた。

「みんな、急いでフリードへ乗って。私は飛行魔法で護衛役をするから」

「「「はいっ！」」」

「ぬ？　奴らめ、逃げるつもりか。まあよい」

それに気付いたゴールドゴーストだったが逃亡を邪魔する事はしなかった。今の最優先目的はディエンドの抹殺と考えたのだろう。それにフェイト達などいつでも消せる。そう結論を出し、ゴールドゴーストは宇宙カビを周囲に散布してディエンドを変身不可能へ誘おうとする。

そのディエンドといえば出来るだけカビを受けないようにと、イリュージョンだけではなくカメンライドで援軍を呼び出して応戦していた。自身はゴールドゴーストから距離を取りつつ、射撃でダメージを与えようと動き回って。

「そこだ！」

”アタックライド……ブラスト”

「ぬぅ……」

ディエンドライバーによる分裂弾がゴールドゴーストを襲う。その内の一発が頭部を掠り、ゴールドゴーストの動きが僅かに鈍る。それを見て更なる追撃を放つディエンドだったがそれは回避された。

ヒット&アウェイを繰り返すディエンドとその攻撃をある程度耐えながらカビによる攻撃で追い詰めようとするゴールドゴースト。援軍として召喚されるライダー達の攻撃もあって、その体には少しではあるがダメージを負っている。

だが、両者はこう思っていた。今の状況も長くは続かないと。ディエンドの分身達はカビを受けて消えてしまい、援軍として召喚したライダー達もカビの前では短時間で無力化されてしまう。結果としてディエンドのどの行動もその場凌ぎにしかならなかったのだ。

このままではやられるかもしれない。そう考えたディエンドは微かに後方を見やり、フェイト達が離れた事を確認した上である行動に出た。既にフェイト達は避難を終えている。ならば、ここで無理に怪人を相手する必要はないからだ。

（さっきの少年魔導師が少年君に重なって見えるなんて、ね。僕らしくないけど……ま、いいさ。たまにはこういう事も悪くはない）

そう考えて彼は一枚のカードを手にするとそれをディエンドライバーへ挿入して引き金を引いた。

「仕方ない。ここは君に勝ちを譲って退いてあげるよ」

”アタックライド……インビジブル”

「させぬわっ！」

瞬時に姿を消したディエンド。しかし、それは意外な形で阻止された。ゴールドゴーストは慌てる事無く宇宙カビをディエンドがいた辺りへ即座に散布したのだ。それが透明になったディエンドの体へ少し付着した。それに伴いディエンドはダメージを負うのと同時に透明化が無効化されたのだ。

「くっ……こんな事が……」

「ヒヒッ！　無駄よ無駄。お前の能力も既に知っている。姿を消すだけで宇宙カビから逃げられると思わぬ事だ」

今まで破られた事のないインビジブルが通用しなかった事がディエンドに与える心理的ダメージは大きかった。彼はそれを使って今までどんな状況からも脱出してきたのだから。それでも諦めずにディエンドはゴールドゴーストへ組み付いた。

このままではやられかねない。そう思ったディエンドはある事に気付いたのだ。ゴールドゴースト自身はカビを浴びないようにしていると。故にその体へ密着していればカビを使う事は出来ないのでは。そう判断し、ディエンドは本来しないようなインファイトを始めた。付着したカビのせいか感じる脱力感に抗いながら。

「無駄な事を！」

「無駄かどうかはその内分かるさ。それよりいいのかい？　今あのカビを使えば僕へ大ダメージを与えられるよ？」

「今の貴様如きカビを使うまでもないわ！」

「そう……どうやら僕の予想はビンゴみたいだ」

一人密かに呟きながら戦うディエンド。相手に組み付き続けなければならないために中々ダメージを与える事が難しい状況だが、それでも生き残るために足掻くところがらしいといえる。

一方、それを遠くから見ながらフェイト達は思案していた。ディエンドが自分達を逃がすように戦っていたからだ。エリオとキャロが何とか手助け出来ないかと言い合いながら考え始める中、ディエンドがライダーらしくないと思っているフェイトとティアナも見捨てる事は出来ないと思い何かないかと考えていたのだ。

そう、ここでゴールドゴーストを倒せないとカビの被害がどれだけ出るか分からない。故に彼女達もここで何とかして倒せるものなら倒したいと思っていたのだから。

「あのカビさえどうにか出来れば……」

「そうだね。せめて除去出来れば対抗出来る」

「でも、魔法じゃダメージを受けてしまいますし、綺麗に除去出来るかどうかも分かりません」

「使う暇を与えないようにしようにも、それが一番難しいですよね」

キャロの締め括りに誰も言葉を出せない。先程魔法で除去を試みた際、とてもではないが防ぎきれないと悟ったのだ。更に一度出されてしまうとゴールドゴーストの周囲をカビが舞う為に接近する事も出来ない。

やはり手は無いのかと誰もが苦い顔をした時だ。そんな彼らへ静かに声を掛ける者がいた。

「手は……あるかもしれないわ」

プレシアは自分へ視線を向ける周囲へ告げた。それはキャロが用意してくれた薬湯を思い出しての言葉。それに使われた薬草の一つには煮詰めればカビ掃除に使える物があり、それをキャロは用意していたはず。それならばもしかすれば宇宙カビにも効果があるかもしれないと。

「キャロ、それはどこ!?」

「宿舎の中ですっ!」

「なら、僕が取りに!」

逆転のキッカケになるかもしれない。そう思って急いで取りに行こうとするエリオだったが、そんな彼の腕をティアナが掴んだ。

「待ちなさい! あのカビの中へ突っ込む気?」

「ならどうすれば……」

「大丈夫だよ。キャロ、ここにそれを転送出来る?」

「はいっ!」

フェイトの言葉に思わずガッツポーズを見せるキャロ。優れた召喚魔導師は転送魔法のエキスパートでもある。しかも、隊舎や宿舎などは勝手知ったる場所。その座標などはすぐに割り出せる。

ケリュケイオンが座標を表示し、キャロの足元に魔法陣が展開す

る。そして次の瞬間その手には一つの鍋があった。中身はヘドロのような色の液体。凄まじい匂いを出しているがこの際それをどうこう言っている暇はない。

「それを体に塗りなさい。予想が正しければ、それでカビが付着し難くなるはずだから」

プレシアはそうフェイトへ告げる。その目はかつてフェイトが見た事のない優しく力強いもの。そんな瞳に息を呑みながらも、フェイトは辛うじて口を開いた。

「……分かりました。エリオ、あいつの腕を狙うよ。チャンスはおそらく一度だけ。出来る？」

「絶対決めてみせます！」

「後でシャワー貸してもらうわよ、キャロ」

「はい、私もこのままは嫌ですから」

切り込み役として言葉を交わすフェイトとエリオと女性らしい事を思って話すティアナとキャロ。その顔は匂いのためか若干嫌そうなものだったが、それでもすぐに体全体――特に露出している部分へ重点的に先程の液体を塗っていく。

その間にもフリードは出来るだけディエンド達がいる場所へ接近するべく動いていた。カビが舞う場所へ近付いたのを見て、キャロがフリードを制止し高度を下げさせる。

一方、フェイトとエリオはカビ舞う中を翔けながらゴールドゴースト目掛けて進んでいく。その体にカビが付着するも中々定着出来

ないのか、そのまま風に流れていく物が多いのを見て、二人はプレシアの推測は正しかったと実感する。
しかし、体に付着した物も確かにある。弱くない脱力感を感じながらもエリオはそれを吹き飛ばすように力強く告げた。

「ストラーダ！　フォルムドライっ！」

”了解”

エリオは一度きりのチャンスをものにするためにストラーダを第三段階と呼ばれる形態へと変えさせた。それはあのゆりかご戦で彼が得ていなかった力。あの戦いで成長した彼に解放されたストラーダの最後の力だ。
それを受けて、フェイトは少しだけ表情を緩めた。かつては守られるしかなかった存在。それが光太郎と出会った事をキッカケにここまで頼もしくなった。それが嬉しく思えたのだろう。

【ティアナ、あの人へ離れるように呼びかけて。それを合図に私達は突撃する！】

【了解です！】

頼もしい副官となったティアナの声にもフェイトは一瞬笑みを浮かべる。だが、すぐにそれを凛々しいものへ変えてバルディッシュを握り締めた。

”勝利の栄光を掴みましょう”

「違うよバルディッシュ。掴むのは勝利の栄光じゃない。笑顔の明日だから」

相棒の言葉に力強い笑みを返しフェイトは視線を前に向ける。そこにはゴールドゴーストと組み合うディエンドがいた。その近くへティアナとキャロが走りながら叫んだ。

「何も言わず今すぐ怪人から離れなさいっ！」

「お願いしますっ！」

その二人の鬼気迫る雰囲気から何かに気付いてディエンドが離れる。それを見た瞬間フェイトとエリオの体が同時に加速した。

「「はあぁぁぁぁっ！！」」

ソニックムーブによる加速を乗せた二人はそのままゴールドドゴーストの腕を貫いた。激痛に呻くゴールドゴースト。その声を聞きながらティアナがキャロのブーストによる支援を受けてクロスミラージュを構えた。

今から放つのは彼女の上司であったなのは直伝の魔法。ゆりかご戦で使ったクロスファイヤーシュートの発展系。それを聞いたなのはが集束系の才能をティアナに見い出したからこその魔法。

”ロードカートリッジ”

クロスミラージュがカートリッジを排出し始める。それに伴いその銃口へ魔力が集束していく。

「ティアさん今ですっ！」

”後を頼みました”

「スターライトォ！　ブレイカァァァァッ！！」

ティアナの叫びと共に放たれたのは、なのはの切り札でもあるスターライトブレイカーだった。ティアナの魔力光に輝く星光はゴールドゴーストを確かに捉えて包み込んだ。その威力はまだなのはには及ばないものの、それでも十分な迫力を伴っていた。

それを眺めていたディエンドでさえ感心していたのだからその程が分かるだろう。光が消えた先にいたのはあちこちから火花を出し始めていたゴールドゴーストの姿。更にその体を駄目押しとばかりにバインドが拘束した。だが、それをただ見ていただけのディエンドの頭上から怒声が響いた。

「何をしてるの！　貴方もライダーとやらなら攻撃しなさいっ！」

「はぁ……やれやれ仕方ないか。やられたままは嫌だからね」

万全とは言えない体でバインドを行ったプレシア。その気だるさと相手への腹立たしさから荒れる口調にため息を吐きつつ、怠い体でディエンドは一枚のカードを手に取った。それは彼のマークが入ったもの。ファイナルアタックライドだ。それをディエンドライバーへ挿入し、その銃口をゴールドゴーストがいる位置へ向ける。

「ヒ、ヒヒヒ……この程度の事で勝ったつもりか！　まだこちらには……」

ゴールドゴーストはディエンドが自分へ銃口を向けている事に気付き瞬間移動をしようとする。だが……

「さ、先程の攻撃で瞬間移動機能が故障だと?!」

そう、スターライトブレイカーによりその機能の一部を損傷したために逃走する事が出来なかった。それを聞いてディエンドははっきりと終わりを告げた。

「これで消えたまえっ！」

”ファイナルアタックライド……ディディディエンド”

ディエンドの声と共に放たれた必殺のディメンションシュートが瀕死のゴールドゴーストを撃ち抜いていく。その奔流をその身に受けながら、ゴールドゴーストは最後の力を振り絞って叫んだ。

「負けておらん！　これは何かの間違いじゃぁぁぁぁ！！」

自身の負けを認めず散るゴールドゴースト。その爆発を眺めてもフェイト達はもう安堵出来なかった。これがまた戦いの始まりを告げるのだと、どこかで感じ取ったからだ。邪眼達とは違う雰囲気の怪人達。光太郎が教えてくれた世界征服を目的に掲げる組織。全てがあの六課で経験した怪人戦とは違うだろう事を物語っていた。

ゴールドゴーストが消えた事でカビも元から無かったように消滅し、フェイト達はそこで初めて安堵の息を吐く。そんな風に安心する周囲を他所に、ディエンドは背後に灰色のオーロラを出現させるとそこへ向かって歩き出した。

「一応感謝しておくよ。じゃあね」

「待ってくださいっ！」

それに気付いてエリオが大声で呼び止めた。彼が抱いている仮面ライダーに対しての印象。それとは違いながらもどこかそれらしい部分も見えたディエンド。そんな彼が無性に気になったのだ。その声が真摯なものだった事もあり、ディエンドもその場で足を止めた。それを見たエリオは真剣な表情のままその背中へ告げた。

――助けてくれてありがとうございました。僕はエリオ・モンディアルと言います。貴方の名前を教えてくれませんか？

――それを君に教える義務はない。それと助けた訳じゃないよ。借りを作るのは嫌いだからね。それを返しただけさ。

そう答えるとディエンドは再び足を動かそうとして、何故かまたその場で動きを止めた。

「そうそう、僕をここへ案内してくれたお嬢さんの行方を知りたければ修道騎士とやらを当たりたまえ」

ディエンドはそれだけ言うと素早くオーロラへと消えた。それと同時にオーロラも消失し誰も後を追う事が出来ない。それを複雑な心境でフェイト達が見つめる中、プレシアはゆっくりとフリードの上に崩れるように倒れた。それを見てフェイトが素早く駆け寄るとその体を抱き抱えた。

――母さん！　しっかりしてっ！　母さんっ！

再会を果たしたフェイトとプレシア。ディエンドと出会い魔法世界が恐ろしい相手に狙われている事を実感するティアナ達。

かつて機動六課だったからこそ揃って思う。あの時とは違う厄介

な戦いが始まろうとしていると。
グランショッカーは何故プレシアを知っていたのか？　光写真館の者達はどうしているのか？
全ての答えはまだ闇の中……

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

ディエンド編＆フェイト編。フェイトとティアナが久々の登場となり、また長くなってしまいました。
共闘というよりは独自に対抗したディエンドにフェイト達が協力した感じです。お互いゴールドゴースト相手に単独では勝てなかったでしょう。正直、スーパー1もチェックマシンが無ければ敗北していたでしょうから。

言葉交わして

有り得ない。それがクロノの正直な気持ちだった。何せその話を聞いた瞬間から彼は思考を停止していた。カリムに声をかけられるまで彼らしからぬ様相を呈してしまったぐらいなのだから、それがどれ程クロノにとって衝撃だったかは分かると言うものだ。今もクロノは内心で様々な事を考えながらカリムの話を聞いていた。

「……そうですか。では、彼女は本当にアリシア・テスタロッサと名乗ったんですね？」

『ええ。しかも、彼女は光の国と呼ばれる星から来たらしいのです』

「光の国？」

クロノが疑問符を浮かべたのは、何も言われた単語が聞き慣れない名称だったからではない。彼が記憶している限りアリシアは死んでいた。それを蘇生させたとすれば、それはプレシアが行こうとしていたアルハザードだとばかり思っていたのだ。

その事を知っているのだろう。カリムは真剣な表情で語った。アリシアが話した光の国の住人――ウルトラマンの事を。彼らがどういう存在でどのような事をしている者達かを。それはクロノが言葉を失う程の衝撃だった。彼が所属する時空管理局。それと規模が違うものの、やっていた事はそれに負けない程の内容だったのだから。

（ウルトラマン……。偶然手にしてしまった力を自分のためではなく力を持たない他者のために使う存在、か……まるで仮面ライダーだ。そんな存在が彼ら以外にもいるとは思わなかった。全宇宙の平

和を守る光の存在。平行世界には実に様々な笑顔の守護者達がいるんだな）

そんな事を考えクロノは微かに笑みをこぼした。もしこれが五代達と出会う前ならばどこかで疑っただろう。しかし、彼らと出会い、自分達局員のようにみんなの笑顔のためにと闘い続けている存在がいると知ったクロノはこの話を信じた。

恐ろしい闇が生まれる場所にはそれを打ち倒せる光が必ず生まれる。義妹のフェイトから聞いたライダー達が邪眼相手に放った言葉。それを聞いたからこそ余計にそう思えたのだ。闇ある所に光もまた生まれるとのヒーロー達の残した予言は本当だったのだと。

「それで、アリシア・テスタロッサは今どうしていますか？」

『こちらの事をシャッハが簡単に説明しています。やはり現在のこちらの事をほとんど知らないようですので』

「分かりました。疑問を抱きそうな事はそれらしい理由を僕が用意しておきましょう。それと、くれぐれもフェイトや彼女に関わる事は教えないでください。プレシア・テスタロッサが存命だとすれば、それをアリシアへ教える事は彼女がやらねばならない事ですから」

クロノはそう告げると自身のスケジュールを別モニターへ表示させた。少々無理をすれば近い内に何とか外出出来ない事もない。それを把握し、クロノはカリムへ後日聖王教会へ向かう旨を告げた。その理由を理解しカリムも無言で頷いた。詳しい話はその時にという意味だ。

通信を終えたクロノは軽く息を吐いて気を引き締めた。いつも以上の速度で仕事を片付けなければならないからだ。それを見ればフ

ェイトがまた心配するだろう事を予想し、クロノはやや険しい表情を浮かべた。今の事を知られては不味い人物。それがフェイトだったからだ。

死んだはずの姉と呼べる存在と実の母が生きている。それを知れば混乱してしまうと。だがこの時、既にフェイトはエリオ達からの連絡を受けてプレシア達の事を聞いていたのは皮肉としかいいようがない。

――それにしても……灰色のオーロラを通ってこの世界へとは、な。ユーノの奴に教えてやるか。もしかしたら平行世界との連絡手段などの手がかりになるかもしれない。

そのためにユーノの苦労が増えるだろうと考えるクロノだったが、それでも教える事に迷いはなかった。それはユーノ自身が五代達との絆を途切れさせたくないと足掻いているのを知っているから。そして、今の彼には疲れを癒してくれる最愛の女性がいるのだ。

そして、結婚式は関係者全員が揃った中でしか挙げたくないと二人揃って断言した事を思い出し、クロノはどこかで願う。その日が少しでも早く来てくれるようにと……

二人のライダーがそれぞれグランショッカーと対峙していた頃、とある陸士隊の隊舎内を歩きながら会話する二人の女性がいた。共に白の制服を着ていて、一人は栗色髪の成人女性。もう一人は赤髪の少女然としている。そう、なのはとヴィータである。二人は今日からこの陸士隊のバトルジャケット装着者相手に短期間の教導をす

る事になっているのだ。
　増産されたバトルジャケットは一部の陸士隊へ配備されたのだが、それは言ってしまえばバトルジャケットがないと戦力的に不安がある隊。つまりあまり経験を積んでない新人が多いか、魔力を持たない者が前線に立つ事もあるような隊なのだ。

　故にどこかで空戦主体の自分達相手では苦戦するだろうという意識があった二人だったが、バトルジャケット隊の者達が空戦に対抗するべく意外な方法を取った事でその認識を改める事になった。空戦主体で動くなのは達相手に彼らは互いの体を足場にしての限定的空中戦を行う事で意地を見せたのだ。大地を蹴って宙に跳び、それでも届かないために時間差で跳んだ者が落下する者を足場にしたのだ。
　なのはとヴィータもそんな行動に初回だけは驚きを見せたが、以降はそれを考慮しながら動いて反撃した。それでもめげずに二人へ抵抗し続けたのだから大したものだろう。そんな事を話し、二人は笑みを見せた。

「思ったよりも動けてたね」

「ああ。ま、配備されて半月程度であれなら今後に期待出来るしな」

「うん。あの発想力と実行力なら万が一怪人が現れても抵抗出来る」

「出来るならない事を願うけどな。問題は怪人戦の雰囲気に耐えきれるかどうかか……」

「そこは心配ないんじゃないかな？　映像である程度は心構えしてるだろうから」

なのはの言葉にヴィータは口を閉じて考え始めたようだった。映像とは言うまでもなく機動六課時代のものである。中でも地上本部防衛戦が一番参考にされていた。それはライダー達ではなく、六課の面々やゼスト隊がそれぞれの持ち味を十分に発揮して怪人を撃破或いは撃退したからだ。

特に怪人戦の経験が浅いゼスト隊がドライを倒したのはいい教材となっている。己の能力を生かし、それぞれが全力を尽くして挑んだ結果の勝利。それはバトルジャケット隊が目指す姿だったのだから。

「でも、予想してたけど疲れたね～」

「だな。あたしら機動六課出身者に付き物の展開だもんなぁ」

苦笑するなのはにヴィータも同じ表情を返す。今まで彼女達は昼食を取りながら機動六課時代の話をしていたのだ。特に若者達を中心にライダーの話を。彼女達はこうして定期的に話す事でライダー達の事を思い出すため懐かしさを感じる事は少ない。これがはやて達であれば違うのだろうが、教導官として色々な場所へ行く二人はまだまだ機動六課時代の事を話す機会は多いのだ。

ライダーの活躍。怪人の恐怖。これら二つが次元世界に与えた影響は少なくない。しかもライダーは人智を超えた力で平行世界からやってきた事が分かっているが、怪人――邪眼は自力で魔法世界へやってきたようなものだからだ。そこから管理局上層部は怪人の再来を警戒している。

特務六課はそのための部隊ともいえる面があるのは否めない。故に六課には優先的に新装備が配備される事になっている。とはいえ、質量兵器にならないようにジェイルの残したデータを基に開発しているベントカードやランドチェイサーなどの周辺機器止まりだ。

はやてには翔一から聞いた事があるG3－Xという理想形もあるのだが、生憎それは現状では質量兵器の塊になってしまうので実現する事は困難といえた。マリエルも頑張っているのだが、やはり新しいベントカードの製作は困難を極めていて中々従来ある物以外の武器を作れないのだ。

「そういえばそろそろだね。六課での定期教導。今回はやっと私達が担当だからちょっと楽しみだったり」

「あー、そうだったな。今は教えてる奴が変わったから手強くなってんぞ、きっと」

「確か新型バトルジャケットのテストをしてる人なんだよね？　ヒビキさんだっけ。私もイクスとヴィヴィオが話してたぐらいしか知らないんだけど」

「昔から体を鍛えてるらしくてな。ザフィーラが言うには、その鍛錬内容がかなりヘビーなんだとよ」

そう話すヴィータはやや機嫌が悪いようになのはには見えた。それもそのはず。彼女は思い出していたのだ。初めて会った際に子供扱いされた事を。ヒビキ自身が悪い人間ではないと分かった後もやはりその事がどこかで尾を引いて、ヴィータとしてはやや複雑な心境を抱く相手だった。

「そうなんだ。ちょっと会うのが楽しみだな。それで、教導内容は従来通り空中戦への対応でいいよね？　どこもやっぱりそこが弱いから」

「だな。で、きっちり見せてやるか。航空戦技教導隊の名前は伊達

じゃねーって」

二人がこう言っているのには訳がある。特務六課はその役割や性質上、常に陸士隊の中でもトップクラスの実力を求められるため、定期的に教導隊による演習が実施されているのだ。それでも頻度は二か月に一度程度。しかし、その都度教導に行った者は揃って告げるのだ。

――魔法無しであそこまでやってくれると頼もしい。

なのはとヴィータはまだ担当になった事はないが、同僚達からそう言われる度に我が事のように嬉しく感じていた。六課ははやてが夢見た部隊の実現した姿。機動六課のようなドリームチームではないが、それでも災害などが起きた際に即座に動く事が出来る。

それこそがはやてが目指したもの。いざとなれば部署も管轄も越えて動ける部隊。しがらみも何もなく、ただ命を、未来を守るために動ける事。それがはやての願った理想の部隊なのだから。欲を言えばなのはも前線をやりながら教導を続けたい。しかし、それは今の自分では無理だと分かっているのだ。

（あのゆりかごでのブラスター。その反動がまだ残ってる。それがどう影響して撃墜されるか分からない以上、今の私に前線は難しいからね……）

あの戦いの後、シャマルとジェイル二人から言われたのは出来る限り無理をしない事。ブラスター使用による負荷はなのはが思っていた以上に深く大きく彼女の体を傷つけていた。前線で戦う事は不可能ではないが出来る事なら避けるようにと忠告されたのだ。

なのはがその事を思い出していると察したのだろう。ヴィータは少しだけ呆れたようなため息を吐くと、片目を閉じてなのはを見や

る。その視線に気付いたなのはが疑問符を浮かべてヴィータを見つめる。するとヴィータははっきりと告げた。

「今は無理をする時じゃねぇ。お前が無理をするのは、それが本当に必要な時だ」

「ヴィータちゃん……」

「五代の奴がいたならこう言うんだろうな。みんなの笑顔のために頑張るのはいい。でも、それで無理をしていい時としちゃいけない時があるってな」

「……うん」

「今はお前が無理しても、ヴィヴィオもユーノも笑顔になれねーからな」

そう言って照れくさそうにヴィータは顔を逸らす。柄にもない事を言ったという自覚があるのだ。それを感じ取りなのはは小さく苦笑した。しかし、同時にこう言うのを忘れない。

――ありがとうヴィータちゃん。本当に五代さんが言ってくれたみたいだった。

――そうかよ。ま、あいつならもっと上手く言うだろうけどな。

互いに浮かべるは笑み。しかし、なのはは微笑みでヴィータは照れ笑いだ。そんな穏やかな時間もそこで終わる。午後の教導開始時刻が近かったのだ。訓練場へ向かいながら二人はある仕草を見せ合った。それはサムズアップ。午後も頑張ろうとの無言の励ましだ。

それに小さく笑みを見せながら二人は行く。これから自分達の家族がライダーと共に怪人と戦うと知らずに……

士とヴィヴィオが六課隊舎を後にした直後の事。地上本部にある執務室でレジアスは聞きたくない報告を受けていた。はやてからの緊急を要するとの言葉からある程度覚悟はしていたが、いざ聞くとやはり思う事が多々あるのも無理はなかった。だからだろう。その表情は険しいものだった。

「そうか。怪人が組織立ってこの管理世界を」

『はい。幸い一体は響鬼と現場にいた局員が撃破し、もう一方はディケイドというライダーが撃破してくれました。それと、彼ら以外のライダーがもう一人こちらと接触してます。ディケイドは協力を約束してくれましたし、残るもう一人も話した感じではおそらく協力してくれるはずです』

「確認するが……彼らの内の一人ではないのだな？」

レジアスの言葉にモニターに映るはやても少しだけ表情を曇らせる。その問いかけの彼らをすぐさま察したからだ。

『……はい。クウガ達ではありません。それと、もう一つ情報があります』

「何だ？」

『あのジュエルシードを奪った相手をディケイドが知っていました。名をディエンド。彼が言うには仲間だそうです。なので、そちらは任せて欲しいと』

「……信頼出来るのか？」

『彼は……ディケイドは学院の人々の安全のために人気のない場所へ移動し、そこで一人怪人と戦っていました。そこへ増援として出現した二体もの怪人を相手しつつ、更に人質にされた子供を助け出し撃破してくれたんです』

はやての告げた内容にレジアスは無言で頷いた。それは信頼しようという返事。それに内心で安堵し、はやては表情は凛々しいままに言葉を続けた。ディケイドが異世界を渡る力を持っている事や五代達とは違う人間がクウガなどへ変身出来る世界などがある事を。

それらの事実にレジアスは息を呑みながらも冷静に事態を把握した。グランショッカーが同時に多くの平行世界を襲っているが、それをその世界にいるライダー達が食い止めている事。そして、グランショッカーの目的は世界征服であるのと同時に魔法を使える者を怪人へ改造するための素体とする事だと。

つまり、邪眼の戦いではそこまで考慮せずに済んでいた民間人への被害なども考えなければならない事になる。それだけではない。スバルがオニビビンバから言われた言葉によれば改造手術は死者であっても可能。となれば、魔導師達は最悪殺されて捕えられる事になる。そうなれば救出する事さえままならないのだ。

「しかし、魔力持ち全員とはな。奴らは魔力量に個人差がある事を知らんのか？」

『それもあるかもしれません。ですが、バインドさえ使えればいいと考えてる可能性があります』

「どういう事だ？」

『我々が怪人達と戦った際、ライダー達の援護として多用したのは結果的にバインドでした。バインドならば魔力があれば誰でも使えるように出来ます』

「……つまり、奴らはライダーの隙を作れる能力として魔法を怪人に組み込むつもりか」

レジアスの言葉にはやては無言で頷いた。かつてアギトもアリアのバインドで拘束された際、短時間だったが身動きが封じられた。クウガの援護がなくても自力で脱出出来ただろうが、それにはある程度時間が必要だ。戦場で僅かとはいえ動きを封じられるのは命取りとなりかねない。

そう考えてはやては語った。グランショッカーがやろうとしているのは怪人固有の特殊能力に魔法を掛け合わせる事で、才能があるなしに関係なく使えるという一点だけを重視しているのはそのためではないかと。その意見を聞いてレジアスは少し黙った。

「……だが、奴らが魔力を持った者しか襲わないという保証もないな。これについてはどう思う？」

『私も同意見です。ＲＸのしてくれた話では、彼らは常にライダーを倒すために周囲を巻き込んだり利用したりしていたそうです』

「真の目的は世界征服、だからな。では八神一佐、率直に聞きたい。

この事をどこまで公表すべきだと思う？」

機動六課の司令官であったはやての階級は、地上本部及びゆりかご戦の功績から昇進していた。本来は更にもう一階級上となるはずだったのをはやてがそれを固辞したために。

そう、あれだけの結果を機動六課は出した。故にその指揮を執っていたはやてがそれに見合った昇進をしなくては周囲が不思議に思う。それだけでない。はやて以外の者を今後昇進させ難くなるのだ。

しかし、ライダーがいたからこその結果と知っているはやてとすればそれをそのまま受け入れる訳にはいかない。その間を取って一階級昇進となったのだ。

だがはやては知っている。それをレジアスとグレアムが最初から見越しての特進提案だったとは。話を受けた際、内心で二人の上官達の配慮に苦笑したのは彼女だけの秘密である。本当にお互い関係が変わったとそんな事を思い、はやては緩みそうになる表情を引き締めて口を開いた。

『クウガ達とは別のライダーがいる事は公表すべきかと』

「……その理由は？」

『今回、学院関係者だけとはいえディケイドの姿と怪人の姿を見られています。彼らの口から情報が漏れないようになるべく話さない事を頼みましたが、それがどこまで信頼出来るかは不明です』

はやてはそう告げ、レジアスへ言い切った。故に新しいライダーが現れた事を知らせ、怪人が出現した際に恐怖するだけにならないようにしたいと。今後グランショッカーの怪人が出現してもそれに抵抗出来るバトルジャケット隊がいて、尚且つ仮面ライダーが三人

もいると知らせれば恐怖に呑まれる事は減るはず。
依然として一部関係者を除く者達にはクウガ達はミッドにいると思われている。そのため新しいライダー達がいる事を公表し、その姿を周知させておく必要がある。そうはやては語るとレジアスの言葉を待った。レジアスはそうした場合の様々な事を考えているのだろう。やや表情を険しくしていた。

「では、協力してくれるライダー達の姿を公表する方向で動く。映像などはあるのか？」

『響鬼は用意するのが簡単ですが、残るディケイドとブレイドはすぐとは……』

「分かった。では、用意出来次第オーリスへ連絡を頼む。公表はそれを受けてからとする」

『了解しました。では……』

するべき事が出来たと思い、はやてはこれからの動きなどを考えながら通信を切ろうとした。だが、そんな彼女へ予想だにしない言葉がかけられた。

「待て八神」

レジアスに呼び止められたのだ。しかも階級付きではなく苗字だけで。それが私人としての会話を求めていると察し、はやては少しだけ意外に思いながらもレジアスへ視線を戻した。

『なんです？』

「いや、お前はこう言ったな。グランショッカーとやらを止めるために異世界のライダー達が集まっていると」

その問いかけにはやては頷いた。士の話や映司と剣崎の話を聞いていると何者かの意思のようなものを感じるのだ。はやては内心であの黒服の青年ではないかと考えているが、未だにそれらしい確証はないために黙っている。

「そして火野映司という者の話では仮面ライダーは総勢で二十名を軽く超える。その中に彼らも含まれているそうだな？」

『どうもそうらしいです。ただ、ディケイド達の話を聞くと変身している人間は別人の可能性もあるとか。正直わたし達の方でも理解できへん部分があって……』

「そうか。となれば、ここに彼らと同じ姿の別人が来る可能性もあるのか」

『あー……それはあるかもしれません。それに、本当に全員集まるかは疑問ですし』

「む、そうだな。分かった。呼び止めてすまんな。儂はこれから地上の意見を纏め、グレアム達と協議に入る。おそらくこの話と変更はないと思うが、あればすぐに連絡しよう。ではな」

『了解です。では……』

苦笑したはやての言葉にレジアスはやや残念そうな表情を浮かべたが、ならばとその意見を聞き入れる事にした。そんなレジアスの反応に軽く笑みを浮かべつつはやては通信を切る。こうして二人の

話は終わり、それぞれはそれぞれのやるべき事をするために動き出す。

ライダーによって変化した関係。それが襲い来る闇に対する力の一つとなる。本来ならば険悪なままだった二人。それが信頼関係を築き上げ、共に同じ理想へ向かって歩く。だがレジアスは知らない。このすぐ後、オーリスがスプールスにいるティアナからの報告を持ってやってくるなどと……

同時刻、時空管理局本局でリンディは執務室を訪れた人物を見て言葉を失っていた。はやてから連絡があり、会って欲しい者達がいると言われたので執務室で待っていたのだが、そこへ現れたのはアルトと剣崎に映司。そして……

「く、クライド……？」

アンクことクライド・ハラオウンだった。外見は変化しているのだが、リンディは直感でそれを言い当てた。それに事情説明をと思っていた映司とアンクが驚いていた。事情を知らないアルトと剣崎はリンディの告げた名前に軽く疑問符を浮かべる事しか出来ない。ここへは映司の希望で来ただけだからだ。

故に黙って様子を見守る二人の前で、リンディはアンクのリアクションから自身の直感を確信出来たのか、瞳を潤ませると口元を両手で覆って目を閉じた。映司はそれに安堵する反面伝えなければならない事があると思い、やや申し訳なさそうにリンディへ声をかけた。

「あ、あの……俺、火野映司って言います。ちょっとハラオ――じゃなくてクライドさんの事でお話があるんです」

「……ええ。大体は分かっています。あれはクライドだけどクライドじゃないと言いたいのでしょ？」

リンディが涙を拭って告げた言葉に映司とアンクは再度言葉を失った。リンディはそんな二人へ小さく笑みを浮かべるとアンクへ視線を向けて言い切った。

――あの人は決して人を寄り付けない雰囲気なんか出さないし、あんなに鋭い目付きをする事も稀だもの。でも、分かるわ。あの人はクライドだって。

――えっと……どうしてです？

――そうね……言うなれば惚れた女の勘よ。結婚を決意した相手を……最愛の男性の事を見間違うはずないじゃない。

そう微笑み混じりで告げてリンディはアンクへ嬉しそうな視線を送った後、映司へ視線を戻す。それが事情説明を求めていると理解し、映司はここまでの出来事を話した。自分がクライドと出会った事からアンクが憑依する事になった事などを全て。

それをリンディはただ聞き入った。途中地球を見捨てないとクライドが断言した所では小さく苦笑し「あの人らしい」と呟いたりもした。そして映司を守るために自分の身を挺して助けた事を聞いたリンディは軽く笑ったのだ。

――本当に自分勝手ね。でも、許してあげるわ。こうして戻って

きてくれたんだし。

そう言って最後には微笑みを浮かべてアンクを見た。それが妙に気持ちをざわつかせたのか、アンクは慌てて顔を背けた。それに不思議そうな反応を見せる剣崎とアルト。何せここまでアンクには一切人間味を感じなかったのだ。二人はそんなアンクと慣れた感じで話す映司を揃って感心したぐらいなのだから。

そんなアンクがリンディの視線から顔を背けたのは二人には驚き以外の何物でもない。仕方ないのだ。アンクはクライドの体だけでなく欲望も使っている。そのため、会いたいと願っていた一人であるリンディと再会した事でその欲望が刺激されていた。

「それで、アンクが言うには治療を受ければもう少し容体も安定するらしくて」

「今は不安定なの？」

「見た目はそう見えないだろうが動きが鈍いんだよ。俺が少しでも気を抜いたら死んじまうぐらいにな」

リンディの問いかけに答えたのはアンクだった。その顔はまだリンディから背けられている。余程クライドの気持ちが騒いでいるのだろう。声にはいつも以上に苛立ちが混ざっている。それを聞いて軽く笑う映司達。どこか好きな相手に照れている印象を受けたのだ。

そんな周囲の反応に増々苛立つアンク。しかし、彼が怒りをぶつけようとした瞬間、リンディがアンクを制すように治療のための手続きをすると言った事でそれは防がれる事になる。当然アンクは怒りのやり場を失って不機嫌極まりない雰囲気を漂わせた。それを見て映司はリンディにもう一つある事を頼む。それは……

「「アイス？」」

「はい。アンクの奴、アイスが大好物なんです。なのでそれを食べさせてやれば機嫌もある程度良くなるんで」

映司の説明に納得して頷く三人。そして揃って視線をアンクへ向ける。見た目や言動とは違って随分子供っぽい物が好きなんだなと思って微笑むリンディ達。映司はそんな三人に笑みを浮かべ、アンクは背中でそれを感じ取っているのか表情を更に険しくしていた。

「にしてもアイスとはね。スバルみたいだ」

「「スバル？」」

「あ、あたしの元同僚でアイス大好きな子なんです」

映司と剣崎の疑問に明るい声で答えていくアルト。リンディはそんな三人から離れてアンクへ近寄っていた。

「ね、一つ聞きたいのだけど？」

「……何だ」

「クライドを元に戻せたら……貴方はどうなるの？」

「そんな事聞いてどうする。お前が心配するような事じゃないだろ」

「仮にも夫の命を繋いでくれている相手よ？　心配するのが当然じゃない」

アンクの突き放す言い方に笑みを返してリンディは言い切った。
それが意外だったのか、思わずアンクがリンディへ振り返った。その反応にリンディは真剣な眼差しを返し再度尋ねた。クライドを元に戻したらどうなるのかを。それにアンクは感情も何もない声で断言した。今のままなら消えるしかないと。

「今のままでは？」

「ああ。俺は本当なら”死んでいた”。それを映司の奴が無理矢理生き返らせたようなもんだ。ま、こいつの欲望が強くなければこうならなかっただろうがな」

死んでいたとの言葉を言う際、アンクは無意識に笑みを浮かべていた。生憎それを言っていた時はまたリンディから顔を背けていたので見られる事は無かった。しかし、声色が少し変化した事をリンディは察して少し不思議そうな表情を浮かべていたが。
と、そこでアンクはある事を思いつく。リンディの厚意を利用してロストロギアの情報を得ようと。その考えを抱くやアンクはリンディへ顔を背けたまま、ちょっとした話題のように切り出した。

「そういえば、この世界にはロストロギアとかいう物があるらしいな」

「ええ。それをどこで？」

「こいつの記憶からだ。で、本題なんだが……その中に俺を戻せるような物はないか？」

「貴方を戻せる……つまり割れたメダルを修復出来る力を持つロストロギアって事？」

リンディの問いかけにアンクは無言で頷いた。それにリンディがやや困った表情を浮かべた。理由はどうであれロストロギアの個人使用は難しいからだ。物によっては許可を取る事は出来る。しかし、早々アンクの目当ての力を持つロストロギアがあるとも思えないし、また許可が取れるかどうかも分からない。

そう考えてリンディが残念ながらないと返そうとした時だ。一つのロストロギアがその脳裏をよぎった。それは彼女と義理の娘が出会うキッカケとなった物。願いを叶える力を持つジュエルシードだった。欲望から生まれた存在であるアンクならそれを制御して修復出来るかもしれないと思うリンディ。そんな彼女の表情から何かを察して、アンクは声を抑えて問いかけた。

「あるんだな？　心当たりが」

アンクの問いかけにリンディは小さく頷いた。映司達はアルトから聞く昔話で盛り上がっているようで二人の会話に気付かない。だが、気になったのかちらりと映司達が視線を向けた。それに気付いたリンディが微笑みを浮かべてアンクへこんな事を言い出した。

「でもそれは色々と面倒なの。だから今は諦めてくれるかしら？」

「……チッ！　仕方ないな」

リンディの言葉から何かを悟りアンクは渋々引き下がった。そんな二人を眺めてひそひそと話す映司達。あのアンクがリンディにはあまりらしさを出せていないように感じたのだ。その理由を三人は理解する事は出来なかったが一つの結論は出た。

「あいつ、リンディさんが苦手なんだな」

「ですね。アンクってどこまで自分のペースを崩さない相手には弱いんです」

「そうなんだ。じゃ、あたしもどんな事言われても同じように反応を返せばアンクに勝てます？」

「勝てるとかは分からないけど……どうだろう？　でも、アンク相手にマイペースを貫くのは結構難しいと思うよ。俺もアンクを相手にしてそう出来た人を二人しか知らないから」

そう言って映司が思い出すのは知世子と鴻上だ。どちらも常にマイペースを貫いた者達でアンクが苦手としていた相手である。リンディはその二人を足して二で割った印象だなと映司は思って一人納得。鴻上のように交渉も出来るだろうし、知世子のように優しさで翻弄出来そうだと思ったのだ。

一方、映司の言葉に剣崎はとある相手を思い出していた。それはアンデッドである相川始を人間らしくした存在である少女――栗原天音の事だ。アンク相手でもきっと彼女なら変化させる事が出来るだろう。そんな事を考え、剣崎は小さく笑った。

（でも、きっと始が遠ざけるな。アンクなら天音ちゃんに手を上げそうだし……最悪戦うかもしれない）

カリスとアンクがにらみ合うように対峙する光景を想像し、剣崎はあながちないとも言い切れないと思って苦笑する。そう考える剣崎自身はアンクの事を悪く思っていない。何故なら映司がそういう風に扱っているから。そう、剣崎には二人の関係がどこか自分と始に近いものに思えたのだ。

人間とグリード。人間とアンデッド。本来ならば共存する事が難しい種族同士にも関らず、共に手を取り合って戦い抜いた二人。違う事は、最後はアンクに助けられた映司と最後は始を助けようとした剣崎という差。そう、助けるか助けられたかの違いだけ。

しかし、それは当然とも言える。アンクは人になりたかった訳ではない。彼は生命になりたかったのだ。だが始は違う。彼は人になりたかった。いや、人らしくありたかった。だからこそ、剣崎はそれを阻む運命から彼を助けるために自分からアンデッドとなったのだから。

「剣崎さん、どうかしたんですか？」

「いや、ちょっとな。俺にも映司にとってのアンクみたいな相手がいたんだ。今は大事な仲間だけどさ」

「へぇ、そうなんですか。その話、聞かせてもらっても？」

「ああ。と、それはいいけどその前にここを出ないか？　さすがにリンディさんの迷惑になる」

剣崎はふと思い出したように映司へ提案した。その提案に映司も頷きリンディへ視線を向けた。まだリンディはアンクと話していて、どうもその内容は小難しい事のように映司は感じた。

（申請？　万が一の保険？　一体何の話だろう？）

「あの、俺達そろそろお暇します。お仕事の邪魔してすみませんでした」

「……えっ？　あ、いいのよ。じゃ、治療の件は私の方で手配して

おくわ。それで、しばらくアンクさんには残ってもらう事になるんだけど」

「それで俺は構わない。映司、お前達は先に帰ってろ」

「でも……」

映司はアンクの言葉に表情を曇らせる。アンクが何か問題を起こさないか心配なのだ。それを理解しているアンクがやや呆れたように手で頭を押さえながら告げた。

「ったく、心配すんな。俺だって死にたくない。治療が終わるまでしばらく大人しくしておいてやる」

「……分かった。じゃ、リンディさん。何かあったらすぐに言ってください。それと後はお願いします」

「ええ、任せて頂戴。精々ご機嫌を損なわないようにアイスを与えておくわ」

そのリンディの言葉に笑う映司達と不機嫌そうに表情を歪めるアンク。そして映司達はそれぞれその場で一礼して退室していく。それを笑顔で見送り、リンディはドアが閉まったのを確認してアンクへ視線を向けた。それにアンクも視線を向け返した。

「……で、さっきの話の続きを聞かせてもらえるんだろうな？」

それはロストロギアに関する話。アンクはあのリンディが言った言葉の裏をこう読んだのだ。色々と面倒とは映司達には聞かせたくないという事。今は諦めて欲しいとは後で機会を作るという意味だ

ろうと。故にリンディの申し出に応じたのだ。そして映司が大人しく退室するように約束までしたのもそのため。

リンディが映司達を退出させたのには理由がある。それはこの話が少し危うい面を持つため、局員であるアルトに聞かせると彼女の迷惑になる可能性があるからだ。だが彼女だけを退室させればそれがキッカケでいらぬ誤解を与える事もある。そのため映司達三人を退室させる事にしたのだ。

「その前に聞きたいの。何故ロストロギアを使ってまでメダルの修復をしなければならない理由をね」

「正直、この体を治しても俺がこいつから離れる事が出来るかは分からないからだ。確かに俺は欲望が弱くなる事でメダルへ戻り、こいつは本来の状態になるだろうさ。だが、俺のメダルを体の中に残す事がどんな影響を与えるかは未知数だ。一番安全なのは、俺が本来の力を取り戻して出ていけるようにする事だろうからなぁ」

「……そう。で、その最後こそが貴方の本当の目的なんでしょ？」

「お前……」

「こう見えても長年局員として働いているのよ。クライドの事件からもう二十年以上経っているって言えば分かる？　その間、私はずっと色々なものと戦ってきたんだから。誤魔化せるなんて思わないで」

やや低めの声で話すリンディにアンクは内心舌打ちした。映司と同じでただのお人好しではないと理解したのだ。リンディはアンクがクライドの体を理由に復活を手伝わせようとしている事を悟っていた。だがそれでもいいとリンディは考えていた。そう、彼女自身

が言ったようにクライドがこうして戻ってこれたのはアンクがいればこそなのだから。

暴走の危険がない訳ではないが、そのために打てる手はある。問題は多いがジュエルシードを一つ使うだけでアンクの目的は果たせるだろう。許可を取るのは難しいが可能性がない訳ではない。それら諸々の懸念を片付けるためには、自分へアンクも協力しなければならない事を理解させてやればいい。ややこちらを出し抜こうとする部分もあるが、そこさえ気をつければ問題ない。そう判断し、リンディはアンクへ告げた。

「アンクさん、貴方の願いは分かったわ。でも今すぐは無理。クライドの治療と平行して私なりに動いて準備をするから時間を頂戴、あ、その間はちゃんとクライドの体を労わってもらうけど」

「おい、そんな安請け合いして本当にいいのか？　君のやろうとしてる事は危ない橋を」

「あら、それは貴方が心配する事じゃないでしょ？」

リンディの決断を聞いてアンクが無意識に心配そうな声を出した。それはクライドの言葉だ。そんなアンクの告げた言葉に微かに驚くも、リンディは何かに気付いて悪戯っぽく笑みを返す。それにアンクが我に返ったのか、何も言い返す事が出来ずに苛立ちから顔を逸らしたのを見ながら、リンディはクライドの心の声を聞いたと感じていた。故に思う。クライドは本当に生きているのだと。

（今の言葉はアンクさんが出させた言葉ではないのでしょうね。でなければ本人がこんな反応をするはずないもの。クライドの深層心理が強く影響したのかしら……）

その後、少しだけリンディはアンクと情報交換をする。グランショッカーがコアメダルを所持している可能性を聞き、ロストロギアが使えない場合はそちらを頼りにするしかない事をアンクが告げた。それにリンディはならばとそちらの方法にも出来る事があれば手を貸す事を約束した。

「しかし、お前といい映司といい……人間にも厄介な奴は多いな」

「褒め言葉として受け取っておくわ。それで食事はどうするの？本当にアイスだけでいい？」

「ああ。と言うか、さっきから何をしてる」

「お茶を淹れてるのよ。きっと貴方も気に入るはずだから」

そう楽しそうな声で応じながらリンディは彼女特製のお茶を用意していく。それにアンクは怪訝な目を向けた。彼が知る緑茶とは色々と違っている部分が多いからだろう。そして出来上がった物を飲んでアンクは動きを止めた。しばし室内に沈黙が流れる。それを破ったのはアンクが手にしていた湯飲みを置いた音。

そのままアンクはリンディを睨むように見つめ続けた。それを受けて平然と微笑むリンディ。すると、アンクがその顔をリンディへ近付けた。

――おい。

――何かしら？

――……もう一杯よこせ。

その言葉にリンディが満足そうに頷いて、嬉々として先程の緑茶を用意し出したのは言うまでもない。こうして通称リンディ茶はアンクという熱烈なファンを獲得するのだった……

翌日の昼時。訪れる人々で聖王教会内が賑わう中、アリシアは外の広場で子供達の語る話に思わず拳を握っていた。彼らが話しているのは機動六課と邪眼の戦いだ。とはいえ、一般に公開されている映像情報は主に隊舎前の戦いや地上本部でのものだけ。ゆりかごや他の記録されていない部分は関係者のインタビュー程度しかなく、詳しい部分は知らない者達ばかり。

よって、最後の決戦となったゆりかご戦は想像で補われる部分も多分にあり、そこで活躍する存在は語る者によって様々だ。特に少年達はひいきのライダーを活躍させる傾向が強く、三人少年を捕まえれば三通りのゆりかご戦が聞ける事請け合いである。しかし、それでも結末は決まっているもので……

「……で、ライダーと機動六課が怪人をやっつけて管理局がゆりかごを壊して平和になったんだよ！」

「それだけじゃないぜ。俺もテレビで見ただけだけど、ライダーが残してくれた物がいくつかあるんだよ。特務六課が使ってるランドチェイサーはクウガのバイクのデータで作った奴で、バトルジャケットって元々は龍騎がモデルなんだ」

「あ、それはあたしも見た。で、今のはスカルのおじさんが使った

物が基になってるんだって」

レジアスはあの公開意見陳述会での演説でのイメージが強く、周囲からは現場叩き上げらしい正義感の強い肉体派との人物像が定着した。その一方で子供達からはスカルのおじさんとの愛称で親しまれるようになっていた。そこには、管理局がバトルジャケット装着者を募るために流したレジアスの戦闘記録が影響している。

あのアハトとの戦い。それをある局員がデバイスで記録していたのだ。故に格好のアピールとなった。髑髏の仮面を着け怪人へ毅然と人間の味方で怪人の敵だと断言し、シャッハと協力して闘う姿はライダーに負けず劣らずの勇姿だったのだから。それもあって、今や管理局は人命を守る組織とのイメージが以前にも増して強固なものとなった。

そのまま子供達――――特に少年達はアリシアそっちのけでライダーに関する知識をひけらかす。熱を持って話す少年達とそれをやや離れた位置取りで眺める少女達。どのライダーが一番好きかから始まり、将来はバトルジャケット隊へ入って困っている人を助けるんだと言い出す子までいた。

「は～、みんな凄いね」

そんな言葉を聞いてアリシアは感心するばかり。だが、その顔は嬉しそうに笑っている。彼女は子供達と同じような雰囲気でウルトラ兄弟の事を光の国の少年達と話した事があるからだ。懐かしさをそこに感じてアリシアは改めて思うのだ。きっと星や生まれ、世界や姿が違っても同じように笑い合ったり話す事は出来るのだろうと。

そして同時に思うのだ。仮面ライダーもウルトラマンと同じでその力を弱い者達を守るためにしか使わない。恐ろしい相手から人々を助けるために現れ、その未来を、命を守り抜く。だからこそここ

まで誰もが憧れるのだろうと。

「ね、アリシアお姉ちゃん。またあの話聞かせて」

アリシアが微笑ましく思って子供達を眺めていると、そこから一人の少女が彼女へ近付いてそう言った。ライダーは少年達には人気が高いのだが、少女達にはそこまで熱狂的になる者は少なかった。だからこの少女も熱を増していく少年達についていけず、アリシアへそんな提案をしたのだ。

「あー、俺も俺も！　俺も聞くっ！」

「私も聞きたい。ね、お話して」

ライダー談義で盛り上がっていた中から一人少年が声を上げるとそれに続けと別の少女がアリシアの腕を引きながらそう頼んだ。気が付けば子供達全員がアリシアへ視線を向けている。その目は彼女の話を聞きたいと言わんばかりに輝いている。それを受けてアリシアは少しだけ嬉しそうに笑みを浮かべて問いかけた。

「そんなに聞きたい？」

「「「「「「聞きたい！　ウルトラマン！」」」」」」

それに全員が揃って告げた名前にアリシアは咳払いを一つしてから語り出す。かつて聞いたウルトラマン達の戦いの記憶の一部を。それに目を輝かせる子供達。ライダーと違い神秘性が高いからだろうか、ウルトラマン達の能力に子供達はため息を吐く。

天高くそびえる巨体で空を飛び、その体からは強力な光線を始めとする技を放ち、例え怪獣や侵略者であっても平和を望み愛するの

なら共に生きようとする。そしてアリシアは子供達へ決して忘れる事の出来ないある言葉を締め括りとして告げた。

――――優しさを失わないでくれ。弱いものをいたわり、互いに助け合い、どこの国の人達とも友達になろうとする気持ちを失わないでくれ。例えその気持ちが何百回裏切られようとも。

その言葉を幼い頃にエースから言われた時、アリシアは胸に刻んだのだ。それは、かつてエースが地球を離れる際に子供達に残した言葉と同じもの。そう、それは光の巨人としての言葉ではない。それは同じ宇宙に生きる友人としての願いだったのだ。地球人を愛する異星人だからこそ、その心の光を愛していたからこそエースはそう願ったのだろう。

そして、それはほかのウルトラマン達も同じはず。そう考えたアリシアはそれをミッドの子供達にも伝えたかった。本当の優しさとは相手や状況によって出したり引っ込めたりするものではない。いつでもどんな時でも平等に見せるものだ。その事を教えてくれたあの日々を噛み締めながらアリシアは子供達へ告げた。

「……これはウルトラマン達からわたし達へのお願いなんだ。わたしがウルトラマン達に出来る恩返し。それはこれを一人でも多くの人に教える事だって思ってる。だから、みんなにも聞いて欲しかったんだ。この世界を守ったライダーを大好きなみんななら、この言葉を忘れないでくれるだろうから」

それを聞いた子供達は揃って沈黙していた。何か思う事があるのだろう。やがて一人の少年がぽつりと呟いた。

「俺……クラスにいつも一人な奴がいるんだ。そいつ、自分から話もしないし話しかけてもほとんど無視するから誰も遊ぼうとしない

んだ。でも俺、明日そいつに遊ぼうって言ってみる。友達になろうって声かけてみる」

「なら俺もみんなに優しくする。もっと仲良くなれるように！」

「じゃ、とりあえずライダーの話ばっかりするのやめてよ」

「そうよ。いつもライダーの話をするとそっちだけで盛り上がるじゃない！」

「バーカ！　話に入ってこないお前達が悪いんだろ」

そこから軽い口喧嘩を始める少年と少女。それを苦笑しながらアリシアは眺めた。止めようとしないのは周囲がそれをやっているからだ。そんな微笑ましい光景から視線を外して、アリシアは一人空を見上げた。

（それにしてもわたしとママが死んだ事になってたなんて……でも仕方ないか。長い間行方不明になってたんだもん）

この日、聖王教会をクロノは訪れていた。そしてアリシアと対面し、彼女達母子が死亡者扱いされているという事実を告げた。だがその理由をクロノは長年行方不明になっていたからとだけ告げた。詳しい事は自分達にも分かっていないので答えられないとして。

それにアリシアは驚いたものの光の国にいた事からその処置に納得したのだ。そしてクロノはアリシアへ光の国にいた理由をこう推測したように告げた。おそらくプレシアが最後にしていた実験が原因で光の国へ転移してしまったのではないかと。そして現在の暦とアリシアの記憶との不一致も理由をつけた。きっとその転移が原因で経過時間が狂ったのだと。

そんな事を思い出し、アリシアは空を見上げたままふと問いかけた。

――――みんな見てる？　ここにもみんなの事を大好きな子供達がいるんだ。とりあえずママの事をよろしくね。今は遠いミッドから応援してるけど、いつか必ず戻るから。

返事などないと知りながらアリシアはそう告げた。証拠も何もない自分の話を心から信じてくれるミッドの子供達の声を聞きながら。その顔にとても美しい笑みを浮かべて……

――

アリシアに関わる部分と出番の無かったヴィータ登場。そして遂にリンディと出会う映司達でした。

この話の一つの鍵はジュエルシード。それがキッカケで始まったリリカルなのはの物語ですので、これを締めに使えたらいいなと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8081o/

Masked Rider in Nanoha

2012年1月4日06時47分発行